芳賀団地遺跡群 第2巻

芳賀東部団地遺跡II

――古墳～平安時代編 その2――

1988. 3

前橋市教育委員会

芳賀団地遺跡群 第２巻

芳賀東部団地遺跡II

――古墳～平安時代編 その２――

序

上毛三山の一峰である名山〝赤城山〟を背後にし、坂東太郎で名高い利根川の清流が市西部を貫流している前橋は、四季折々の変化、水と緑に豊んだ風光名媚な県都である。

赤城山は、〝裾野は長し赤城山〟と上毛カルタに唱われており、この裾野は多くの湧水地を生み、多くの開析谷を発達させるとともに舌状台地を形成している。この台地上には古代から多くの人々が住み文化が栄えた地である。

赤城山南麓の緩傾斜地である「芳賀」の地に前橋工業団地造成組合によって住宅、工業団地造成が計画され、埋蔵文化財の発掘調査を、前橋市教育委員会、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が、40haに及ぶ面的調査で実施したものである。埋蔵文化財の調査は点と線の発掘調査が主流であったが、芳賀団地遺跡は面的調査を実施した画期的な事例の一つである。

発掘調査の結果、縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中近世の遺構、遺物が多数発見され多大なる成果をあげることができた。

遺物、遺構の整理を実施し第１巻を刊行し、引きつづき整理、検討した結果第２巻を刊行することができた。第２巻においては、出土遺物を住居跡、土層、土質、土器の形式から細分類とすることができた。さらに、土器編年から住居跡の時代区別を行ない台地上における住居の位置を判定し分類することができた。

これにより、各時代の住居の選地状況、変遷を把握することができた。

本報告書が斯学発展のため少しで寄与でももすれば幸いと存じます。なお、本報告書刊行するにあたり、多くの研究者、研究機関、多くの関係者、前橋市関係各課、前橋工業団地造成組合の関係者の協力、御指導があったことを感謝いたします。

昭和63年３月31日

前橋市教育委員会

教育長　岡　本　信　正

例　　言

1．本書は、前橋工業団地造成組合による、工業及び住宅団地の造成に伴い事前調査された、前橋市嶺町・勝沢町・小坂子町・鳥取町・小神明町・五代町の計40haに及ぶ芳賀団地遺跡群の発掘調査報告書第２巻である。
2．芳賀団地遺跡群は、北部団地遺跡、西部団地遺跡、東部団地遺跡の３遺跡から成り立つ。
3．調査の実施は、前橋工業団地造成組合の委託を受けて、芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団が行なった。
4．芳賀団地遺跡群の報告書は全５巻を予定しており、東部団地遺跡３巻、西部団地遺跡１巻、北部団地遺跡１巻である。
5．芳賀東部団地遺跡は、東西を谷地に挟まれた２つの台地と、両台地間の谷地の北寄りに南端をのぞかせる台地の、計３つの台地から成り立つ。本書は、西台地と中央台地の土師器を伴う遺構を中心に収録したものである。なお１巻（既刊）は、同時期で東台地に所在する遺構を、第３巻は、東部団地遺跡全体の縄文時代と中・近世の遺構・遺物を収録する予定である。
6．調査組織及び調査担当者、調査員については、第１巻の「Ⅰ、発掘調査に至る経過と調査の組織」を参照願いたい。
7．本書に係わる遺物の整理は、林喜久夫（担当者）、前原照子（〃）、矢島なつ美（調査員）、綿貫綾子（〃）が行なった。
8．本書の作成に係わる整理作業は、昭和56年度から実施されたが、昭和58年度からは発掘調査に直接携わった者を中心に編集執筆委員を委嘱し、報告書の整理・刊行のための組織化を計った。

編　集　委　員

松　島　栄　治（群馬県立前橋第二高等学校教諭）
相　澤　貞　順（前橋市立女子高等学校教諭）
中　村　富　夫（利根郡月夜野町立月夜野中学校教諭）
唐　澤　保　之（前橋市立元総社小学校教諭）
福　田　紀　雄（前橋市教育委員会文化財保護室長）
井　野　誠　一（同上　主任）
松　本　浩　一（勢多郡東村立杲小学校長）
中　澤　充　裕（前橋市立芳賀中学校教諭）
前　原　照　子（勢多郡東村立杲小学校教諭）
富　澤　敏　弘（勢多郡北橘村教育委員会文化財保護係長）
浜　田　博　一（同左　埋蔵文化財係長）

執　筆　委　員

川　合　　功（利根教育事務所指導主事）
石　川　克　博（前橋市立箱田中学校教諭）
鵜　木　晋　一（前橋市立東中学校教諭）
川　崎　　始（伊勢崎市立第二中学校教諭）
田　口　正　美（群馬県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）
唐　澤　裕　美（高崎市立塚沢小学校教諭）
松　村　親　樹（前橋市企画調整課主任）
木　部　日出雄（前橋市立天神小学校教諭）
白　石　凌　海（東福寺）
飯　塚　　誠（群馬県埋蔵文化財調査センター指導主事）
杉　浦　つや子（北群馬郡子持村立中郷小学校教諭）
江　原　　清（前橋市永明公民館主任）
近　藤　昭　一（前橋市立図書館主事）

9．本書の編集は、上記編集委員によるが、基本的な編集方針については、上記組織化以前に事務局で決定したものである。事務局側の編集は、１巻の編集方針を踏襲することとし、昭和59年度を林喜久夫が、昭和60・61年度を前原照子が、昭和62年度を井野誠一が担当した。執筆は編集委員と執筆委員で行った。文末には文責を明記した。
10．本書を作成するのにあたり、遺物・図面整理・図面作成等に対し、下記の方々の手を煩わした。記して感謝の意を表するものである。

綿貫綾子（調査員）、矢島（黒沢）なつみ（調査員）、栗岡エミ子、石堂千秋、大塚美智子、川合智久、加部二生、川端久子、小林敦子、小林典幸、阿部（白井）栄恵、神保千代子、渋川則子、柴崎操代、桑原（柴崎）富子、須藤　宏、新保一美、関哲哉、城田　和、佐藤里恵、神保雅美、竹内敏江、高島　康、田村恵子、塚越則子、渡木秋子、田野井和江、千明香根子、千明徳至、塚越佳代子、竹本順子、角田弘子、福島裕子、松田富美子、松本加代子、諸田陽子、槇塚昌子、湯浅たま江、湯浅道子、戸丸澄江、鬼塚成子、渡辺良子

11．遺物写真の撮影は、新保一美、矢島なつ美、高島康が行なった。
13．発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関に御協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。

井　上　唯　雄（群馬県埋蔵文化財センター所長）
平　川　　南（国立歴史民俗博物館）
田　口　昭　二（岐阜県立陶磁器陳列館）
高　塚　秀　治（東京工業大学）
国立群馬工業高等専門学校
永　嶋　正　春（国立歴史民俗博物館）
飯　島　静　雄（群馬地質研究会員）

14．関係図面及び出土遺物の整理・保管は、前橋市教育委員会文化財保護室が行なっている。

凡　　例

1．本書における遺構記号は次のように表わす。( )の表記を略称とする。

H……土師器を伴う遺構

例　H１号住居跡（略称H－１）、H１号土坑（略称HP－１）大H１号土坑（略称H大P－１）

K……掘立柱建物跡

例　K１号掘立柱建物跡（略称K－１）

T……鍛冶址

例　T１号鍛冶址（略称T－１）

I……井戸跡

例　I１号井戸（略称I－１）

W……溝跡

例　W１号溝（略称W－１）

なお、T１～３については当初製鉄址として扱ったが、考察の結果鍛冶址として扱うことにした。

2．芳賀東部団地遺跡では、西台地から調査をはじめている。遺構番号は西台地よりはじまる。また昭和55年度調査分については、各遺構の通算番号の後に、55年度遺構番号を( )で表わした。

3．遺構挿図中のセクション・エレベーションの基準線標高は、「L.」または基準線上の数値である。掘立柱建物跡の基準線標高は、挿図の左隅に記載してある。同じ図中でその標高以外のものは、その部分の基準線上に数値を入れた。

4．本書における遺構の実測図は、竪穴住居跡1/80、掘立柱建物跡1/100、土坑・井戸等が1/60、その他1/80を原則とする。遺物の実測図は1/4を原則とする。遺構・遺物によってはその限りではないものもある。付図は1/600である。

5．本書で使用している竪穴住居跡の部位名称及びスクリーントーンは、第１巻に準ずるが異なるものもある。(別掲図参照)

6．遺物実測図の表現方法は、残存径が推測可能なものに関して、中心線部分を空白とした。

7．遺構の記述は、原則として下記の竪穴住居跡の記述方法に準じたが、その他は原則の限りではない。また、条件次第で適宜省略した。用語・表記は本書として統一をはかったが、事務局の責任で行なった。

位置　グリッド上、及び調査区域全体の中の位置。位置する場所の地形、周囲の遺構との関係。

形状　形・規模・壁・隅角・周溝・方位・張り出し等の施設。面積は1/20図上で、プラニメーターにより３回計測し、その平均値。方位は長軸方向で測定。

床面　踏み固め部分、床面の起伏具合、貼床、焼土の散布状況等。

ピット　位置・形状・傾き・柱痕の有無及び柱痕径・規模・その他。

炉　位置・形態・規模・構造・焼土の厚さ等。

カマド　位置・構築材・形・規模・火床面と住居床面との比高差等。

貯蔵穴　位置・形状・規模。

遺物　種類・出土位置・出土状況・床面とのレベル差等。

テラフ　純層またはそれに近い状態で認められた場合は、その種類及び床面からの距離。その他。

重複関係　重複している遺構名・重複箇所・新旧関係等。

その他　遺構の性格に係わること、または特記事項。

8．遺構挿図中の方位は、磁北を表わす。

9．掘立柱建物跡（K）のピット番号は原則として北東隅をP_1として、反時計回りに番号をつけている。

10．遺物の記述は、観察表にまとめてあるが、原則として土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、石製品、その他の順で行っている。記述内容は、器種名、器形形状の特徴、成形及び調整法、付着物等である。記述は事務局の責任で行なった。

11．遺物挿図で、遺物番号のとなりに（覆）とあるものは遺構内覆土中出土（カ）とあるものはカマド内出土を表わし、それ以外のものは、原則として発掘調査時に床面ないし床面付近で出土したものを意味する。

12．遺物写真の縮尺は不統一である。

13．遺物写真中の遺物番号と遺物挿図の番号は対応させている。

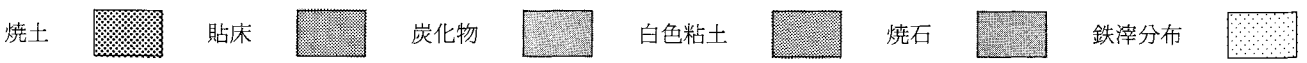
14．土器の各器種ごとの名称は、便宜的に使用したもので、その機能を検討した上で使用しているものではない。従って「一型土器」の略称と考えられたい。色調については、『新版標準土色帖』1976年度版に準じている。

15．溝及び溝状遺構地層断面の「N・S、E・W」は方向を示す。

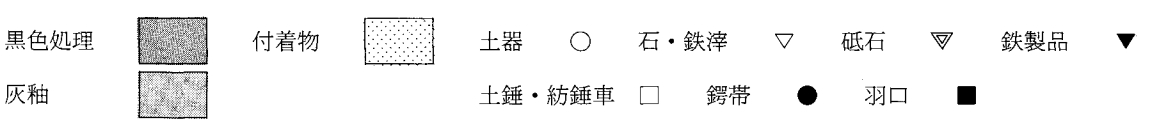
16．竪穴住居跡と掘立柱建物跡は、図版等の都合で遺構順になっていないものも若干ある。その場合、前後の頁または挿図目次を参照願いたい。重復している場合は原則として若い遺構番号の所で扱っている。

17．遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーン及び記号は、以下の内容を示している。

遺構



遺物



目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
　本文目次
　挿図目次
　表 目 次
Ⅰ　調査及び整理の経過 …… 1
Ⅱ　基 本 層 序 …… 3
Ⅲ　遺 構 と 遺 物 …… 3
　1　概　　要 …… 3
　2　竪穴式住居跡 …… 4
　3　竪 穴 遺 構 ……202
　4　鍛冶址・鍛冶関連遺物出土遺構 ……205
　5　掘立柱建物跡 ……217
　6　土　　坑 ……277
　7　井　　戸 ……287
　8　溝 ……288
Ⅳ　芳賀東部団地遺跡の鉄滓分析結果について ……290
Ⅴ　芳賀東部団地遺跡出土の線刻紡錘車について ……292
Ⅵ　土器の分類……294
Ⅶ　古代集落の検討 ……318
Ⅷ　結　　語……420
図版目次

表　目　次

表－1　溝一覧表 ……288
表－2　芳賀東部団地遺跡出土鉄滓の化学組成および鉱物組成 ……290
表－3　土器の形態・技法等一覧表 ……313
表－4　土器群の実年代 ……315
表－5　住居時期別一覧表 ……317
表－6　古代集落の検討（まとめ1～7） ……336
表－7　掘立柱建物跡ピット計測値一覧表 ……334
表－8　H１号住居跡出土遺物観察表 ……351
表－9　H２号住居跡出土遺物観察表 ……351
表－10　H３号住居跡出土遺物観察表 ……351
表－11　H４号住居跡出土遺物観察表 ……352
表－12　H５号住居跡出土遺物観察表 ……352
表－13　H６号住居跡出土遺物観察表 ……352
表－14　H７号住居跡出土遺物観察表 ……352
表－15　H８号住居跡出土遺物観察表 ……352
表－16　H９号住居跡出土遺物観察表 ……353
表－17　H10号住居跡出土遺物観察表 ……353
表－18　H11号住居跡出土遺物観察表 ……353
表－19　H13号住居跡出土遺物観察表 ……353
表－20　H14号住居跡出土遺物観察表 ……354
表－21　H15号住居跡出土遺物観察表 ……354
表－22　H16号住居跡出土遺物観察表 ……355
表－23　H17号住居跡出土遺物観察表 ……355
表－24　H18号住居跡出土遺物観察表 ……355
表－25　H19号住居跡出土遺物観察表 ……355
表－26　H20号住居跡出土遺物観察表 ……355
表－27　H21号住居跡出土遺物観察表 ……356
表－28　H22号住居跡出土遺物観察表 ……356
表－29　H23号住居跡出土遺物観察表 ……356
表－30　H24号住居跡出土遺物観察表 ……357
表－31　H25号住居跡出土遺物観察表 ……357
表－32　H27号住居跡出土遺物観察表 ……357
表－33　H28号住居跡出土遺物観察表 ……357
表－34　H29号住居跡出土遺物観察表 ……357
表－35　H30号住居跡出土遺物観察表 ……358
表－36　H31号住居跡出土遺物観察表 ……358
表－37　H32号住居跡出土遺物観察表 ……358
表－38　H33号住居跡出土遺物観察表 ……358
表－39　H34号住居跡出土遺物観察表 ……359
表－40　H35号住居跡出土遺物観察表 ……359
表－41　H36号住居跡出土遺物観察表 ……359
表－42　H37号住居跡出土遺物観察表 ……359
表－43　H38号住居跡出土遺物観察表 ……359
表－44　H39号住居跡出土遺物観察表 ……359
表－45　H40号住居跡出土遺物観察表 ……360
表－46　H41号住居跡出土遺物観察表 ……360
表－47　H42号住居跡出土遺物観察表 ……360
表－48　H43号住居跡出土遺物観察表 ……360
表－49　H44号住居跡出土遺物観察表 ……361
表－50　H45号住居跡出土遺物観察表 ……361
表－51　H46号住居跡出土遺物観察表 ……361
表－52　H47号住居跡出土遺物観察表 ……361
表－53　H48号住居跡出土遺物観察表 ……361
表－54　H49号住居跡出土遺物観察表 ……362
表－55　H50号住居跡出土遺物観察表 ……362
表－56　H51号住居跡出土遺物観察表 ……363
表－57　H52号住居跡出土遺物観察表 ……363
表－58　H53号住居跡出土遺物観察表 ……363
表－59　H54号住居跡出土遺物観察表 ……363
表－60　H55号住居跡出土遺物観察表 ……363
表－61　H56号住居跡出土遺物観察表 ……364
表－62　H59号住居跡出土遺物観察表 ……364
表－63　H60号住居跡出土遺物観察表 ……364
表－64　H61号住居跡出土遺物観察表 ……364
表－65　H81号住居跡出土遺物観察表 ……364
表－66　H62号住居跡出土遺物観察表 ……365
表－67　H63・80号住居跡出土遺物観察表 ……365
表－68　H64号住居跡出土遺物観察表 ……365
表－69　H65号住居跡出土遺物観察表 ……365
表－70　H67号住居跡出土遺物観察表 ……366
表－71　H68号住居跡出土遺物観察表 ……366
表－72　H69号住居跡出土遺物観察表 ……366
表－73　H70号住居跡出土遺物観察表 ……366
表－74　H71号住居跡出土遺物観察表 ……366
表－75　H72号住居跡出土遺物観察表 ……366
表－76　H73号住居跡出土遺物観察表 ……367
表－77　H74・75・76・79号住居跡出土遺物観察表 ……367
表－78　H77号住居跡出土遺物観察表 ……367
表－79　H78号住居跡出土遺物観察表 ……367
表－80　H82号住居跡出土遺物観察表 ……367
表－81　H83号住居跡出土遺物観察表 ……368
表－82　H84号住居跡出土遺物観察表 ……368
表－83　H85号住居跡出土遺物観察表 ……368
表－84　H86号住居跡出土遺物観察表 ……368
表－85　H88号住居跡出土遺物観察表 ……368
表－86　H89号住居跡出土遺物観察表 ……369
表－87　H90号住居跡出土遺物観察表 ……369
表－88　H91号住居跡出土遺物観察表 ……369
表－89　H92号住居跡出土遺物観察表 ……369
表－90　H93号住居跡出土遺物観察表 ……370
表－91　H94号住居跡出土遺物観察表 ……370
表－92　H95号住居跡出土遺物観察表 ……370
表－93　H96号住居跡出土遺物観察表 ……371
表－94　H97号住居跡出土遺物観察表 ……371
表－95　H98号住居跡出土遺物観察表 ……371
表－96　H99号住居跡出土遺物観察表 ……371
表－97　H100号住居跡出土遺物観察表 ……372
表－98　H101号住居跡出土遺物観察表 ……372
表－99　H102号住居跡出土遺物観察表 ……372
表－100　H103号住居跡出土遺物観察表 ……372
表－101　H104号住居跡出土遺物観察表 ……373
表－102　H105号住居跡出土遺物観察表 ……373
表－103　H106号住居跡出土遺物観察表 ……373
表－104　H107号住居跡出土遺物観察表 ……373
表－105　H108号住居跡出土遺物観察表 ……374
表－106　H109号住居跡出土遺物観察表 ……374
表－107　H111号住居跡出土遺物観察表 ……374
表－108　H112・116号住居跡出土遺物観察表 ……374
表－109　H113号住居跡出土遺物観察表 ……375
表－110　H114号住居跡出土遺物観察表 ……375
表－111　H115号住居跡出土遺物観察表 ……376
表－112　H117号住居跡出土遺物観察表 ……376
表－113　H118号住居跡出土遺物観察表 ……376
表－114　H119号住居跡出土遺物観察表 ……376
表－115　H120号住居跡出土遺物観察表 ……376
表－116　H121号住居跡出土遺物観察表 ……377
表－117　H122号住居跡出土遺物観察表 ……377
表－118　H123号住居跡出土遺物観察表 ……377
表－119　H124号住居跡出土遺物観察表 ……377
表－120　H125・129号住居跡出土遺物観察表 ……377
表－121　H126号住居跡出土遺物観察表 ……377
表－122　H127号住居跡出土遺物観察表 ……378
表－123　H128号住居跡出土遺物観察表 ……378
表－124　H130号住居跡出土遺物観察表 ……378
表－125　H132号住居跡出土遺物観察表 ……378
表－126　H133号住居跡出土遺物観察表 ……378
表－127　H135号住居跡出土遺物観察表 ……379
表－128　H136号住居跡出土遺物観察表 ……379
表－129　H137号住居跡出土遺物観察表 ……379
表－130　H138号住居跡出土遺物観察表 ……379
表－131　H139号住居跡出土遺物観察表 ……379
表－132　H140・141号住居跡出土遺物観察表 ……379
表－133　H142号住居跡出土遺物観察表 ……380
表－134　H143号住居跡出土遺物観察表 ……380
表－135　H144号住居跡出土遺物観察表 ……380
表－136　H145号住居跡出土遺物観察表 ……380
表－137　H147号住居跡出土遺物観察表 ……380
表－138　H148号住居跡出土遺物観察表 ……381
表－139　H149号住居跡出土遺物観察表 ……381
表－140　H150号住居跡出土遺物観察表 ……381
表－141　H152号住居跡出土遺物観察表 ……381
表－142　H153号住居跡出土遺物観察表 ……382
表－143　H154号住居跡出土遺物観察表 ……382
表－144　H155号住居跡出土遺物観察表 ……382
表－145　H156号住居跡出土遺物観察表 ……382
表－146　H157号住居跡出土遺物観察表 ……382
表－147　H158号住居跡出土遺物観察表 ……383
表－148　H159号住居跡出土遺物観察表 ……384
表－149　H160号住居跡出土遺物観察表 ……384
表－150　H161号住居跡出土遺物観察表 ……384
表－151　H162号住居跡出土遺物観察表 ……384
表－152　H163号住居跡出土遺物観察表 ……385
表－153　H164号住居跡出土遺物観察表 ……385
表－154　H165号住居跡出土遺物観察表 ……385
表－155　H166号住居跡出土遺物観察表 ……385
表－156　H167号住居跡出土遺物観察表 ……385
表－157　H168号住居跡出土遺物観察表 ……385
表－158　H169号住居跡出土遺物観察表 ……386
表－159　H170号住居跡出土遺物観察表 ……386
表－160　H171号住居跡出土遺物観察表 ……386
表－161　H172号住居跡出土遺物観察表 ……386
表－162　H173号住居跡出土遺物観察表 ……387
表－163　H174号住居跡出土遺物観察表 ……387
表－164　H175号住居跡出土遺物観察表 ……387
表－165　H176号住居跡出土遺物観察表 ……387
表－166　H177号住居跡出土遺物観察表 ……387
表－167　H178号住居跡出土遺物観察表 ……387
表－168　H179号住居跡出土遺物観察表 ……387
表－169　H180号住居跡出土遺物観察表 ……388
表－170　H181号住居跡出土遺物観察表 ……388

表 — 171 H182号住居跡出土遺物観察表……389
表 — 172 H183号住居跡出土遺物観察表……389
表 — 173 H184号住居跡出土遺物観察表……389
表 — 174 H185号住居跡出土遺物観察表……389
表 — 175 H186号住居跡出土遺物観察表……389
表 — 176 H187号住居跡出土遺物観察表……389
表 — 177 H188号住居跡出土遺物観察表……390
表 — 178 H189号住居跡出土遺物観察表……390
表 — 179 H190号住居跡出土遺物観察表……390
表 — 180 H191号住居跡出土遺物観察表……390
表 — 181 H192号住居跡出土遺物観察表……390
表 — 182 H194号住居跡出土遺物観察表……390
表 — 183 H196号住居跡出土遺物観察表……391
表 — 184 H197号住居跡出土遺物観察表……391
表 — 185 H199号住居跡出土遺物観察表……391
表 — 186 H200号住居跡出土遺物観察表……391
表 — 187 H201号住居跡出土遺物観察表……392
表 — 188 H202号住居跡出土遺物観察表……392
表 — 189 H203号住居跡出土遺物観察表……392
表 — 190 H204号住居跡出土遺物観察表……392
表 — 191 H205号住居跡出土遺物観察表……393
表 — 192 H206号住居跡出土遺物観察表……393
表 — 193 H207号住居跡出土遺物観察表……393
表 — 194 H208号住居跡出土遺物観察表……393
表 — 195 H209号住居跡出土遺物観察表……393
表 — 196 H210号住居跡出土遺物観察表……394
表 — 197 H211・215号住居跡出土遺物観察表 ……394
表 — 198 H212号住居跡出土遺物観察表……394
表 — 199 H213号住居跡出土遺物観察表……394
表 — 200 H214号住居跡出土遺物観察表……395
表 — 201 H217号住居跡出土遺物観察表……395
表 — 202 H218号住居跡出土遺物観察表……395
表 — 203 H219号住居跡出土遺物観察表……395
表 — 204 H220号住居跡出土遺物観察表……395
表 — 205 H221号住居跡出土遺物観察表……395
表 — 206 H222号住居跡出土遺物観察表……395
表 — 207 H223号住居跡出土遺物観察表……396
表 — 208 H224号住居跡出土遺物観察表……396
表 — 209 H225号住居跡出土遺物観察表……396
表 — 210 H226号住居跡出土遺物観察表……396
表 — 211 H228号住居跡出土遺物観察表……396
表 — 212 H229号住居跡出土遺物観察表……397
表 — 213 H231号住居跡出土遺物観察表……397
表 — 214 H232号住居跡出土遺物観察表……397
表 — 215 H233号住居跡出土遺物観察表……398
表 — 216 H234号住居跡出土遺物観察表……398
表 — 217 H235号住居跡出土遺物観察表……398
表 — 218 H236号住居跡出土遺物観察表……398
表 — 219 H237号住居跡出土遺物観察表……398
表 — 220 H238号住居跡出土遺物観察表……398
表 — 221 H239号住居跡出土遺物観察表……399
表 — 222 H240号住居跡出土遺物観察表……399
表 — 223 H241号住居跡出土遺物観察表……399
表 — 224 H242号住居跡出土遺物観察表……399
表 — 225 H244号住居跡出土遺物観察表……399
表 — 226 H245号住居跡出土遺物観察表……400
表 — 227 H246号住居跡出土遺物観察表……400
表 — 228 H247号住居跡出土遺物観察表……400
表 — 229 H249号住居跡出土遺物観察表……400
表 — 230 H250号住居跡出土遺物観察表……400
表 — 231 H251号住居跡出土遺物観察表……401
表 — 232 H252号住居跡出土遺物観察表……401
表 — 233 H253号住居跡出土遺物観察表……401
表 — 234 H254号住居跡出土遺物観察表……402
表 — 235 H255号住居跡出土遺物観察表……402
表 — 236 H256号住居跡出土遺物観察表……402
表 — 237 H257・258号住居跡出土遺物観察表 ……402
表 — 238 H260号住居跡出土遺物観察表……403
表 — 239 H261号住居跡出土遺物観察表……403
表 — 240 H262号住居跡出土遺物観察表……403
表 — 241 H264号住居跡出土遺物観察表……403
表 — 242 H265号住居跡出土遺物観察表……403
表 — 243 H266号住居跡出土遺物観察表……403
表 — 244 H321号住居跡出土遺物観察表……404
表 — 245 H323・324号住居跡出土遺物観察表 ……404
表 — 246 H325号住居跡出土遺物観察表……404
表 — 247 H327号住居跡出土遺物観察表……404
表 — 248 H328号住居跡出土遺物観察表……405
表 — 249 H329号住居跡出土遺物観察表……405
表 — 250 H330号住居跡出土遺物観察表……405
表 — 251 H331号住居跡出土遺物観察表……405
表 — 252 H332号住居跡出土遺物観察表……405
表 — 253 H333号住居跡出土遺物観察表……405
表 — 254 H334号住居跡出土遺物観察表……405
表 — 255 H335号住居跡出土遺物観察表……405
表 — 256 H336・346号住居跡出土遺物観察表 ……406
表 — 257 H337号住居跡出土遺物観察表……406
表 — 258 H338号住居跡出土遺物観察表……406
表 — 259 H339号住居跡出土遺物観察表……406
表 — 260 H340号住居跡出土遺物観察表……406
表 — 261 H341号住居跡出土遺物観察表……407
表 — 262 H342号住居跡出土遺物観察表……407
表 — 263 H343号住居跡出土遺物観察表……407
表 — 264 H344号住居跡出土遺物観察表……407
表 — 265 H345号住居跡出土遺物観察表……407
表 — 266 H347・348号住居跡出土遺物観察表 ……407
表 — 267 H349号住居跡出土遺物観察表……408
表 — 268 H350号住居跡出土遺物観察表……408
表 — 269 H351号住居跡出土遺物観察表……408
表 — 270 H352号住居跡出土遺物観察表……408
表 — 271 H480号住居跡出土遺物観察表……408
表 — 272 H481号住居跡出土遺物観察表……409
表 — 273 H482号住居跡出土遺物観察表……409
表 — 274 H483号住居跡出土遺物観察表……409
表 — 275 H485号住居跡出土遺物観察表……409
表 — 276 H486号住居跡出土遺物観察表……410
表 — 277 H487号住居跡出土遺物観察表……410
表 — 278 H488号住居跡出土遺物観察表……410
表 — 279 H489号住居跡出土遺物観察表……410
表 — 280 H490号住居跡出土遺物観察表……411
表 — 281 H491号住居跡出土遺物観察表……411
表 — 282 H492号住居跡出土遺物観察表……411
表 — 283 H493号住居跡出土遺物観察表……411
表 — 284 H494号住居跡出土遺物観察表……411
表 — 285 H 8 号竪穴遺構出土遺物観察表 …411
表 — 286 H58号住居跡出土遺物観察表 ……411
表 — 287 H87号住居跡出土遺物観察表 ……412
表 — 288 H198号住居跡出土遺物観察表……412
表 — 289 H216号住居跡出土遺物観察表……412
表 — 290 T 1 号鍛冶址出土遺物観察表 ……414
表 — 291 T 2 号鍛冶址出土遺物観察表 ……414
表 — 292 T 3 号鍛冶址出土遺物観察表 ……415
表 — 293 掘立柱建物跡出土遺物観察表 ……416
表 — 294 H土坑出土遺物観察表 ……417
表 — 295 芳賀団地遺跡出土墨書土器観察表 ……419

挿 図 目 次

図 — 1 基本地層柱状図…… 3
図 — 2 H 1 号住居跡…… 4
図 — 3 H 1 号住居跡出土遺物…… 4
図 — 4 H 2 号住居跡…… 5
図 — 5 H 2 号住居跡出土遺物…… 5
図 — 6 H 3 号住居跡…… 6
図 — 7 H 3 号住居跡出土遺物…… 6
図 — 8 H 4 号住居跡…… 6
図 — 9 H 4 号住居跡出土遺物…… 6
図 — 10 H 5 号住居跡…… 7
図 — 11 H 5 号住居跡出土遺物…… 7
図 — 12 H 6 号住居跡…… 8
図 — 13 H 6 号住居跡出土遺物…… 8
図 — 14 H 7 号住居跡…… 8
図 — 15 H 7 号住居跡出土遺物…… 9
図 — 16 H 8 号住居跡…… 9
図 — 17 H 8 号住居跡出土遺物…… 9
図 — 18 H 9 号住居跡……10
図 — 19 H 9 号住居跡出土遺物……10
図 — 20 H10号住居跡……10
図 — 21 H10号住居跡出土遺物……10
図 — 22 H11号住居跡……11
図 — 23 H11号住居跡出土遺物……11
図 — 24 H12号住居跡……12
図 — 25 H13号住居跡……12
図 — 26 H13号住居跡出土遺物……12
図 — 27 H14号住居跡……13
図 — 28 H14号住居跡出土遺物……13
図 — 29 H15号住居跡……14
図 — 30 H15号住居跡出土遺物 (1)……14
図 — 31 H15号住居跡出土遺物 (2)……15
図 — 32 H16号住居跡……15
図 — 33 H16号住居跡出土遺物……15
図 — 34 H17号住居跡……16
図 — 35 H17号住居跡出土遺物……16
図 — 36 H18号住居跡……16
図 — 37 H18号住居跡出土遺物……16
図 — 38 H19号住居跡……17
図 — 39 H19号住居跡出土遺物……17
図 — 40 H20号住居跡……18
図 — 41 H20号住居跡出土遺物……18
図 — 42 H21号住居跡……18
図 — 43 H21号住居跡出土遺物……19
図 — 44 H22号住居跡……19
図 — 45 H22号住居跡出土遺物……19
図 — 46 H23号住居跡……20
図 — 47 H23号住居跡出土遺物……20
図 — 48 H24号住居跡……21
図 — 49 H24号住居跡出土遺物……21
図 — 50 H25号住居跡……21
図 — 51 H25号住居跡出土遺物……21
図 — 52 H27号住居跡……22
図 — 53 H27号住居跡出土遺物……22
図 — 54 H28号住居跡……23
図 — 55 H28号住居跡出土遺物……23
図 — 56 H29号住居跡……23
図 — 57 H29号住居跡出土遺物……23
図 — 58 H30号住居跡……24
図 — 59 H30号住居跡出土遺物……24
図 — 60 H31号住居跡……24
図 — 61 H31号住居跡出土遺物……25
図 — 62 H32号住居跡……25
図 — 63 H32号住居跡出土遺物 (1)……25
図 — 64 H32号住居跡出土遺物 (2)……26
図 — 65 H33号住居跡……26
図 — 66 H33号住居跡出土遺物……26
図 — 67 H34号住居跡……27
図 — 68 H34号住居跡出土遺物……27
図 — 69 H35号住居跡……27
図 — 70 H35号住居跡出土遺物……28
図 — 71 H36号住居跡……28
図 — 72 H36号住居跡出土遺物……28
図 — 73 H37号住居跡……28
図 — 74 H37号住居跡出土遺物……28
図 — 75 H38号住居跡……29
図 — 76 H38号住居跡出土遺物……29
図 — 77 H39号住居跡……29
図 — 78 H39号住居跡出土遺物……30
図 — 79 H40号住居跡……30
図 — 80 H40号住居跡出土遺物……31
図 — 81 H41号住居跡……31
図 — 82 H41号住居跡出土遺物……31
図 — 83 H42号住居跡……32
図 — 84 H42号住居跡出土遺物……32
図 — 85 H43号住居跡……32
図 — 86 H43号住居跡出土遺物……33
図 — 87 H44号住居跡……33
図 — 88 H44号住居跡出土遺物……33
図 — 89 H45号住居跡……34
図 — 90 H45号住居跡出土遺物……34
図 — 91 H46号住居跡……34
図 — 92 H46号住居跡出土遺物……34
図 — 93 H47号住居跡……35
図 — 94 H47号住居跡出土遺物……35
図 — 95 H48号住居跡……36
図 — 96 H48号住居跡出土遺物 (1)……36
図 — 97 H48号住居跡出土遺物 (2)……37
図 — 98 H49号住居跡……37
図 — 99 H49号住居跡出土遺物……37
図 — 100 H50号住居跡……38
図 — 101 H50号住居跡出土遺物 (1)……38
図 — 102 H50号住居跡出土遺物 (2)……39
図 — 103 H51号住居跡……39
図 — 104 H51号住居跡出土遺物……39
図 — 105 H52号住居跡……40
図 — 106 H52号住居跡出土遺物……40
図 — 107 H53号住居跡……40
図 — 108 H53号住居跡出土遺物……41
図 — 109 H54号住居跡……41
図 — 110 H54号住居跡出土遺物……41
図 — 111 H55号住居跡……42
図 — 112 H55号住居跡出土遺物……42
図 — 113 H56号住居跡……42
図 — 114 H56号住居跡出土遺物……42
図 — 115 H57号住居跡……43
図 — 116 H59号住居跡……43
図 — 117 H59号住居跡出土遺物 (1)……43
図 — 118 H59号住居跡出土遺物 (2)……44
図 — 119 H60号住居跡……44
図 — 120 H60号住居跡出土遺物……44
図 — 121 H61・81号住居跡関係図・H61号住居跡……45
図 — 122 H61号住居跡出土遺物……45
図 — 123 H81号住居跡……45
図 — 124 H81号住居跡出土遺物……46
図 — 125 H62号住居跡……46
図 — 126 H62号住居跡出土遺物……47
図 — 127 H63・66・80号住居跡……47
図 — 128 H63・80号住居跡出土遺物……48
図 — 129 H64号住居跡……48
図 — 130 H64号住居跡出土遺物 (1)……48
図 — 131 H64号住居跡出土遺物 (2)……49
図 — 132 H65号住居跡……49
図 — 133 H65号住居跡出土遺物……49
図 — 134 H67号住居跡……50
図 — 135 H67号住居跡出土遺物……50
図 — 136 H68号住居跡……51
図 — 137 H68号住居跡出土遺物……51
図 — 138 H69号住居跡……51
図 — 139 H69号住居跡出土遺物……52
図 — 140 H70号住居跡……52
図 — 141 H70号住居跡出土遺物……52
図 — 142 H71号住居跡……52
図 — 143 H71号住居跡出土遺物……52
図 — 144 H72号住居跡……53
図 — 145 H72号住居跡出土遺物……53
図 — 146 H73号住居跡……53
図 — 147 H73号住居跡出土遺物……54
図 — 148 H74・75・76・79号住居跡……54
図 — 149 H74・75・76・79号住居跡出土遺物……55
図 — 150 H77号住居跡……56
図 — 151 H77号住居跡出土遺物……56
図 — 152 H78号住居跡……56
図 — 153 H78号住居跡出土遺物……56
図 — 154 H82号住居跡……57
図 — 155 H82号住居跡出土遺物……57
図 — 156 H83号住居跡……58
図 — 157 H83号住居跡出土遺物……58
図 — 158 H84号住居跡……58
図 — 159 H84号住居跡出土遺物……58
図 — 160 H85号住居跡……59
図 — 161 H85号住居跡出土遺物……59
図 — 162 H86号住居跡……60
図 — 163 H86号住居跡出土遺物……60
図 — 164 H88号住居跡……60
図 — 165 H88号住居跡出土遺物……61
図 — 166 H89号住居跡……61
図 — 167 H89号住居跡出土遺物……61
図 — 168 H90号住居跡……62
図 — 169 H90号住居跡出土遺物……62
図 — 170 H91号住居跡……62
図 — 171 H91号住居跡出土遺物……63
図 — 172 H92号住居跡……63
図 — 173 H92号住居跡出土遺物……64
図 — 174 H93号住居跡……65
図 — 175 H93号住居跡出土遺物……65

図 — 176 H94号住居跡……65
図 — 177 H94号住居跡出土遺物 (1)……65
図 — 178 H94号住居跡出土遺物 (2)……66
図 — 179 H95号住居跡……66
図 — 180 H95号住居跡出土遺物……66
図 — 181 H96号住居跡……67
図 — 182 H96号住居跡出土遺物……67
図 — 183 H97号住居跡……68
図 — 184 H97号住居跡出土遺物……68
図 — 185 H98号住居跡……68
図 — 186 H98号住居跡出土遺物……68
図 — 187 H99号住居跡……69
図 — 188 H99号住居跡出土遺物……69
図 — 189 H100号住居跡……70
図 — 190 H100号住居跡出土遺物……70
図 — 191 H101号住居跡……70
図 — 192 H101号住居跡出土遺物……71
図 — 193 H102号住居跡……71
図 — 194 H102号住居跡出土遺物……72
図 — 195 H103号住居跡……72
図 — 196 H103号住居跡出土遺物……72
図 — 197 H104号住居跡……73
図 — 198 H104号住居跡出土遺物 (1)……73
図 — 199 H104号住居跡出土遺物 (2)……74
図 — 200 H105号住居跡……74
図 — 201 H105号住居跡出土遺物……74
図 — 202 H106号住居跡……75
図 — 203 H106号住居跡出土遺物……75
図 — 204 H107号住居跡……76
図 — 205 H107号住居跡出土遺物……76
図 — 206 H108号住居跡……76
図 — 207 H108号住居跡出土遺物……77
図 — 208 H109・110号住居跡……77
図 — 209 H109号住居跡出土遺物……77
図 — 210 H111・112・116号住居跡……78
図 — 211 H111・116号住居跡出土遺物……78
図 — 212 H111・112・116号住居跡出土遺物 79
図 — 213 H113号住居跡……80
図 — 214 H113号住居跡出土遺物……80
図 — 215 H114号住居跡……81
図 — 216 H114号住居跡出土遺物……81
図 — 217 H115号住居跡……81
図 — 218 H115号住居跡出土遺物……82
図 — 219 H117号住居跡……82
図 — 220 H117号住居跡出土遺物……83
図 — 221 H118号住居跡……83
図 — 222 H118号住居跡出土遺物……83
図 — 223 H119号住居跡……83
図 — 224 H119号住居跡出土遺物……84
図 — 225 H120号住居跡……84
図 — 226 H120号住居跡出土遺物……84
図 — 227 H121号住居跡……85
図 — 228 H121号住居跡出土遺物……85
図 — 229 H122号住居跡……85
図 — 230 H122号住居跡出土遺物……85
図 — 231 H123号住居跡……86
図 — 232 H123号住居跡出土遺物……86
図 — 233 H124号住居跡……86
図 — 234 H124号住居跡出土遺物……86
図 — 235 H125・129号住居跡……87
図 — 236 H125・129号住居跡出土遺物……87
図 — 237 H126号住居跡……88
図 — 238 H126号住居跡出土遺物……88
図 — 239 H127号住居跡……88
図 — 240 H127号住居跡出土遺物……89
図 — 241 H128号住居跡……89
図 — 242 H128号住居跡出土遺物……89
図 — 243 H130号住居跡……90
図 — 244 H130号住居跡出土遺物……90
図 — 245 H132号住居跡……90
図 — 246 H132号住居跡出土遺物……91
図 — 247 H133号住居跡……91
図 — 248 H133号住居跡出土遺物……91
図 — 249 H135号住居跡……92
図 — 250 H135号住居跡出土遺物……92
図 — 251 H136号住居跡……92
図 — 252 H136号住居跡出土遺物……93
図 — 253 H137号住居跡……93
図 — 254 H137号住居跡出土遺物……93
図 — 255 H138号住居跡……93
図 — 256 H138号住居跡出土遺物……94
図 — 257 H139号住居跡……95
図 — 258 H139号住居跡出土遺物……95
図 — 259 H140・141号住居跡……95
図 — 260 H140・141号住居跡出土遺物……96
図 — 261 H142号住居跡……96
図 — 262 H142号住居跡出土遺物……96
図 — 263 H143号住居跡……97
図 — 264 H143号住居跡出土遺物……97
図 — 265 H144号住居跡……97
図 — 266 H144号住居跡出土遺物 (1)……97
図 — 267 H144号住居跡出土遺物 (2)……98
図 — 268 H145号住居跡……98
図 — 269 H145号住居跡出土遺物……98
図 — 270 H147号住居跡……99
図 — 271 H147号住居跡出土遺物……99
図 — 272 H148号住居跡……100
図 — 273 H148号住居跡出土遺物……100
図 — 274 H149号住居跡……101
図 — 275 H149号住居跡出土遺物……101
図 — 276 H150号住居跡……101
図 — 277 H150号住居跡出土遺物……101
図 — 278 H151号住居跡……102
図 — 279 H152号住居跡……102
図 — 280 H152号住居跡出土遺物……102
図 — 281 H153号住居跡……103
図 — 282 H153号住居跡出土遺物……103
図 — 283 H154号住居跡……103
図 — 284 H154号住居跡出土遺物……104
図 — 285 H155号住居跡……104
図 — 286 H155号住居跡出土遺物……104
図 — 287 H156号住居跡……105
図 — 288 H156号住居跡出土遺物……105
図 — 289 H157号住居跡……105
図 — 290 H157号住居跡出土遺物……106
図 — 291 H158号住居跡……107
図 — 292 H158号住居跡出土遺物……107
図 — 293 H159号住居跡……108
図 — 294 H159号住居跡出土遺物……108
図 — 295 H160号住居跡……109
図 — 296 H160号住居跡出土遺物……109
図 — 297 H161号住居跡……109
図 — 298 H161号住居跡出土遺物……110
図 — 299 H162号住居跡……110
図 — 300 H162号住居跡出土遺物……110
図 — 301 H163号住居跡……111
図 — 302 H163号住居跡出土遺物……111
図 — 303 H164号住居跡……111
図 — 304 H164号住居跡出土遺物……112
図 — 305 H165号住居跡……112
図 — 306 H165号住居跡出土遺物……112
図 — 307 H166号住居跡……113
図 — 308 H166号住居跡出土遺物……113
図 — 309 H167号住居跡……113
図 — 310 H167号住居跡出土遺物……113
図 — 311 H168号住居跡……114
図 — 312 H168号住居跡出土遺物……114
図 — 313 H169号住居跡……115
図 — 314 H169号住居跡出土遺物……115
図 — 315 H170号住居跡……115
図 — 316 H170号住居跡出土遺物……115
図 — 317 H171号住居跡……116
図 — 318 H171号住居跡出土遺物……116
図 — 319 H172号住居跡……117
図 — 320 H172号住居跡出土遺物……117
図 — 321 H173号住居跡……117
図 — 322 H173号住居跡出土遺物……117
図 — 323 H174号住居跡……117
図 — 324 H174号住居跡出土遺物……117
図 — 325 H175号住居跡……118
図 — 326 H175号住居跡出土遺物……118
図 — 327 H176号住居跡……118
図 — 328 H176号住居跡出土遺物……118
図 — 329 H177号住居跡……119
図 — 330 H177号住居跡出土遺物……119
図 — 331 H178号住居跡……119
図 — 332 H178号住居跡出土遺物……119
図 — 333 H179号住居跡……120
図 — 334 H179号住居跡出土遺物……120
図 — 335 H180号住居跡出土遺物 (1)……120
図 — 336 H180号住居跡……121
図 — 337 H180号住居跡出土遺物 (2)……121
図 — 338 H180号住居跡出土遺物 (3)……122
図 — 339 H181号住居跡……122
図 — 340 H181号住居跡出土遺物……122
図 — 341 H182号住居跡……122
図 — 342 H182号住居跡出土遺物……123
図 — 343 H183号住居跡……123
図 — 344 H183号住居跡出土遺物……123
図 — 345 H184号住居跡……124
図 — 346 H184号住居跡出土遺物……124
図 — 347 H185号住居跡……124
図 — 348 H185号住居跡出土遺物……124
図 — 349 H186号住居跡……125
図 — 350 H186号住居跡出土遺物……125
図 — 351 H187号住居跡……125
図 — 352 H187号住居跡出土遺物……125
図 — 353 H188号住居跡……126
図 — 354 H188号住居跡出土遺物……126
図 — 355 H189号住居跡……126
図 — 356 H189号住居跡出土遺物……126
図 — 357 H190号住居跡……127
図 — 358 H190号住居跡出土遺物……127
図 — 359 H191号住居跡……191
図 — 360 H191号住居跡出土遺物……128
図 — 361 H192号住居跡……128

図 — 362 H192号住居跡出土遺物……129
図 — 363 H194号住居跡……129
図 — 364 H194号住居跡出土遺物……129
図 — 365 H195号住居跡……130
図 — 366 H196号住居跡……130
図 — 367 H196号住居跡出土遺物……130
図 — 368 H197号住居跡……131
図 — 369 H197号住居跡出土遺物……131
図 — 370 H199号住居跡……132
図 — 371 H199号住居跡出土遺物……132
図 — 372 H200号住居跡……132
図 — 373 H200号住居跡出土遺物……133
図 — 374 H201号住居跡……133
図 — 375 H201号住居跡出土遺物……133
図 — 376 H202号住居跡……134
図 — 377 H202号住居跡出土遺物……134
図 — 378 H203号住居跡……134
図 — 379 H203号住居跡出土遺物……135
図 — 380 H204号住居跡……135
図 — 381 H204号住居跡出土遺物……136
図 — 382 H205号住居跡……136
図 — 383 H205号住居跡出土遺物……136
図 — 384 H206号住居跡……137
図 — 385 H206号住居跡出土遺物……137
図 — 386 H207号住居跡……138
図 — 387 H207号住居跡出土遺物……138
図 — 388 H208号住居跡……138
図 — 389 H208号住居跡出土遺物……138
図 — 390 H209号住居跡……139
図 — 391 H209号住居跡出土遺物……139
図 — 392 H210号住居跡……139
図 — 393 H210号住居跡出土遺物……139
図 — 394 H211・215号住居跡 ……140
図 — 395 H211・215号住居跡出土遺物 ……140
図 — 396 H212号住居跡……141
図 — 397 H212号住居跡出土遺物……141
図 — 398 H213号住居跡……142
図 — 399 H213号住居跡出土遺物……142
図 — 400 H214号住居跡……142
図 — 401 H214号住居跡出土遺物……142
図 — 402 H217号住居跡……143
図 — 403 H217号住居跡出土遺物……143
図 — 404 H218号住居跡……143
図 — 405 H218号住居跡出土遺物……144
図 — 406 H219号住居跡……144
図 — 407 H219号住居跡出土遺物……144
図 — 408 H220号住居跡……145
図 — 409 H220号住居跡出土遺物……145
図 — 410 H221号住居跡……145
図 — 411 H221号住居跡出土遺物……145
図 — 412 H222号住居跡……145
図 — 413 H222号住居跡出土遺物……146
図 — 414 H223号住居跡……146
図 — 415 H223号住居跡出土遺物……146
図 — 416 H224号住居跡……147
図 — 417 H224号住居跡出土遺物……147
図 — 418 H225号住居跡……147
図 — 419 H225号住居跡出土遺物……148
図 — 420 H226号住居跡……148
図 — 421 H226号住居跡出土遺物 (1)……148
図 — 422 H226号住居跡出土遺物 (2)……149
図 — 423 H227号住居跡……149
図 — 424 H228号住居跡……150
図 — 425 H228号住居跡出土遺物……150
図 — 426 H229号住居跡……150
図 — 427 H229号住居跡出土遺物……151
図 — 428 H231号住居跡……152
図 — 429 H231号住居跡出土遺物……152
図 — 430 H232号住居跡……153
図 — 431 H232号住居跡出土遺物……153
図 — 432 H233号住居跡……153
図 — 433 H233号住居跡出土遺物……153
図 — 434 H234号住居跡……154
図 — 435 H234号住居跡出土遺物……154
図 — 436 H235号住居跡……154
図 — 437 H235号住居跡出土遺物……155
図 — 438 H236号住居跡……155
図 — 439 H236号住居跡出土遺物……155
図 — 440 H237号住居跡……156
図 — 441 H237号住居跡出土遺物……156
図 — 442 H238号住居跡……157
図 — 443 H238号住居跡出土遺物……157
図 — 444 H239号住居跡……157
図 — 445 H239号住居跡出土遺物……157
図 — 446 H240号住居跡……158
図 — 447 H240号住居跡出土遺物……158
図 — 448 H241号住居跡……159
図 — 449 H241号住居跡出土遺物……159
図 — 450 H242号住居跡……159
図 — 451 H242号住居跡出土遺物……159
図 — 452 H243号住居跡……159
図 — 453 H244号住居跡……160
図 — 454 H244号住居跡出土遺物……160
図 — 455 H245号住居跡……161
図 — 456 H245号住居跡出土遺物 (1)……161
図 — 457 H245号住居跡出土遺物 (2)……162
図 — 458 H246号住居跡……162
図 — 459 H246号住居跡出土遺物……162
図 — 460 H247号住居跡……163
図 — 461 H247号住居跡出土遺物……163
図 — 462 H248号住居跡……163
図 — 463 H249号住居跡……164
図 — 464 H249号住居跡出土遺物……164
図 — 465 H250号住居跡……164
図 — 466 H250号住居跡出土遺物……165
図 — 467 H251号住居跡……165
図 — 468 H251号住居跡出土遺物……165
図 — 469 H252号住居跡……166
図 — 470 H252号住居跡出土遺物……166
図 — 471 H253号住居跡……167
図 — 472 H253号住居跡出土遺物……167
図 — 473 H254号住居跡……168
図 — 474 H254号住居跡出土遺物……168
図 — 475 H255号住居跡……168
図 — 476 H255号住居跡出土遺物……169
図 — 477 H256号住居跡……169
図 — 478 H256号住居跡出土遺物……169
図 — 479 H257・258号住居跡 ……170
図 — 480 H257・258号住居跡
出土遺物 (1) ……170
図 — 481 H257・258号住居跡
出土遺物 (2) ……171
図 — 482 H259号住居跡……171
図 — 483 H260号住居跡……172
図 — 484 H260号住居跡出土遺物……172
図 — 485 H261号住居跡……172
図 — 486 H261号住居跡出土遺物……172
図 — 487 H262号住居跡……173
図 — 488 H262号住居跡出土遺物……173
図 — 489 H263号住居跡……173
図 — 490 H264号住居跡……174
図 — 491 H264号住居跡出土遺物……174
図 — 492 H265号住居跡……174
図 — 493 H265号住居跡出土遺物……174
図 — 494 H266号住居跡……175
図 — 495 H266号住居跡出土遺物……175
図 — 496 H321号住居跡……175
図 — 497 H321号住居跡出土遺物……176
図 — 498 H323・324号住居跡 ……176
図 — 499 H323・324号住居跡出土遺物 ……176
図 — 500 H325号住居跡……177
図 — 501 H325号住居跡出土遺物 (1)……177
図 — 502 H325号住居跡出土遺物 (2)……178
図 — 503 H326号住居跡……178
図 — 504 H327号住居跡出土遺物……178
図 — 505 H327号住居跡……179
図 — 506 H328号住居跡……179
図 — 507 H328号住居跡出土遺物……179
図 — 508 H329号住居跡……180
図 — 509 H329号住居跡出土遺物……180
図 — 510 H330号住居跡……180
図 — 511 H330号住居跡出土遺物……180
図 — 512 H331号住居跡出土遺物……180
図 — 513 H331号住居跡……181
図 — 514 H332号住居跡……181
図 — 515 H332号住居跡出土遺物……181
図 — 516 H333号住居跡……516
図 — 517 H333号住居跡出土遺物……182
図 — 518 H334号住居跡……182
図 — 519 H334号住居跡出土遺物……182
図 — 520 H335号住居跡……183
図 — 521 H335号住居跡出土遺物……183
図 — 522 H336・346号住居跡 ……183
図 — 523 H336・346号住居跡出土遺物 ……183
図 — 524 H337号住居跡……184
図 — 525 H337号住居跡出土遺物……184
図 — 526 H338号住居跡……184
図 — 527 H338号住居跡出土遺物……184
図 — 528 H339号住居跡……185
図 — 529 H339号住居跡出土遺物……185
図 — 530 H340号住居跡……186
図 — 531 H340号住居跡出土遺物……186
図 — 532 H341号住居跡……186
図 — 533 H341号住居跡出土遺物……186
図 — 534 H342号住居跡……187
図 — 535 H342号住居跡出土遺物……187
図 — 536 H343号住居跡……187
図 — 537 H343号住居跡出土遺物……187
図 — 538 H344号住居跡……188
図 — 539 H344号住居跡出土遺物……188
図 — 540 H345号住居跡……189
図 — 541 H345号住居跡出土遺物……189
図 — 542 H347・348号住居跡 ……189
図 — 543 H347・348号住居跡出土遺物 ……190
図 — 544 H349号住居跡……190
図 — 545 H349号住居跡出土遺物……191

図 — 546 H350号住居跡……191
図 — 547 H350号住居跡出土遺物……191
図 — 548 H351号住居跡……192
図 — 549 H351号住居跡出土遺物……192
図 — 550 H352号住居跡……192
図 — 551 H352号住居跡出土遺物……192
図 — 552 H353号住居跡……193
図 — 553 H480号住居跡……193
図 — 554 H480号住居跡出土遺物……193
図 — 555 H481号住居跡……194
図 — 556 H481号住居跡出土遺物……194
図 — 557 H482号住居跡……194
図 — 558 H482号住居跡出土遺物 (1)……194
図 — 559 H482号住居跡出土遺物 (2)……195
図 — 560 H483号住居跡……195
図 — 561 H483号住居跡出土遺物……195
図 — 562 H484号住居跡……196
図 — 563 H485号住居跡……196
図 — 564 H485号住居跡出土遺物……196
図 — 565 H486号住居跡……197
図 — 566 H486号住居跡出土遺物……197
図 — 567 H487号住居跡……198
図 — 568 H487号住居跡出土遺物……198
図 — 569 H488号住居跡……198
図 — 570 H488号住居跡出土遺物……198
図 — 571 H489号住居跡……199
図 — 572 H489号住居跡出土遺物……199
図 — 573 H490号住居跡……200
図 — 574 H490号住居跡出土遺物……200
図 — 575 H491号住居跡……200
図 — 576 H491号住居跡出土遺物……200
図 — 577 H492号住居跡……201
図 — 578 H492号住居跡出土遺物……201
図 — 579 H493号住居跡……201
図 — 580 H493号住居跡出土遺物……201
図 — 581 H494号住居跡……202
図 — 582 H494号住居跡出土遺物……202
図 — 583 H 1 号竪穴遺構 ……202
図 — 584 H 2 号竪穴遺構 ……202
図 — 585 H 6 号竪穴遺構 ……203
図 — 586 H 7 号竪穴遺構 ……203
図 — 587 H 8 号竪穴遺構 ……204
図 — 588 H 8 号竪穴遺構出土遺物 ……204
図 — 589 H 9 号竪穴遺構 ……204
図 — 590 H58号住居跡 ……205
図 — 591 H58号住居跡出土遺物 (1) ……205
図 — 592 H58号住居跡出土遺物 (2) ……206
図 — 593 H87号住居跡 ……206
図 — 594 H87号住居跡出土遺物 ……207
図 — 595 H198号住居跡……208
図 — 596 H198号住居跡出土遺物……208
図 — 597 H216号住居跡……209
図 — 598 H216号住居跡出土遺物 (1)……209
図 — 599 H216号住居跡出土遺物 (2)……210
図 — 600 T 1 号鍛冶址 ……211
図 — 601 T 1 号鍛冶址出土遺物 ……211
図 — 602 T 2 号鍛冶址 ……211
図 — 603 T 2 号鍛冶址遺物分布図 ……212
図 — 604 T 2 号鍛冶址出土遺物 (1) ……212
図 — 605 T 2 号鍛冶址出土遺物 (2) ……213
図 — 606 T 2 号鍛冶址出土遺物 (3) ……214
図 — 607 T 2 号鍛冶址出土遺物 (4) ……215
図 — 608 T 3 号鍛冶址 ……215
図 — 609 T 3 号鍛冶址出土遺物 ……216
図 — 610 K 1 号掘立柱建物跡 ……217
図 — 611 K 2 号掘立柱建物跡 ……217
図 — 612 K 3 号掘立柱建物跡 ……217
図 — 613 K 5 —A号掘立柱建物跡 ……218
図 — 614 K 5 —B号掘立柱建物跡 ……218
図 — 615 K 5 —C号掘立柱建物跡 ……219
図 — 616 K 5 —D号掘立柱建物跡 ……219
図 — 617 K 6 号掘立柱建物跡 ……219
図 — 618 K 7 号掘立柱建物跡 ……220
図 — 619 K 7 ・ 8 ・12号掘立柱建物跡
関係図 ……220
図 — 620 K 8 号掘立柱建物跡 ……220
図 — 621 K 9 号掘立柱建物跡 ……221
図 — 622 K 9 ・17号掘立柱建物跡関係図 …221
図 — 623 K10号掘立柱建物跡 ……221
図 — 624 K10・11号号掘立柱建物跡
関係図 ……221
図 — 625 K11号掘立柱建物跡 ……222
図 — 626 K12号掘立柱建物跡 ……222
図 — 627 K12・13・15・16号掘立柱建物跡
関係図 ……223
図 — 628 K13号掘立柱建物跡 ……223
図 — 629 K14—A号掘立柱建物跡 ……224
図 — 630 K14—B・18号掘立柱建物跡
関係図 ……224
図 — 631 K14—B号掘立柱建物跡 ……224
図 — 632 K15号掘立柱建物跡 ……225
図 — 633 K16号掘立柱建物跡 ……225
図 — 634 K17号掘立柱建物跡 ……225
図 — 635 K18号掘立柱建物跡 ……226
図 — 636 K19号掘立柱建物跡 ……226
図 — 637 K20号掘立柱建物跡 ……227
図 — 638 K21号掘立柱建物跡 ……227
図 — 639 K22号掘立柱建物跡 ……228
図 — 640 K23号掘立柱建物跡 ……228
図 — 641 K23・24号掘立柱建物跡関係図 …228
図 — 642 K24号掘立柱建物跡 ……229
図 — 643 K25号掘立柱建物跡 ……229
図 — 644 K25・26号掘立柱建物跡関係図 …229
図 — 645 K26号掘立柱建物跡 ……230
図 — 646 K27・28号掘立柱建物跡関係図 …230
図 — 647 K27号掘立柱建物跡 ……230
図 — 648 K28号掘立柱建物跡 ……230
図 — 649 K31号掘立柱建物跡 ……231
図 — 650 K31・49号掘立柱建物跡関係図 …231
図 — 651 K32号掘立柱建物跡 ……232
図 — 652 K33号掘立柱建物跡 ……232
図 — 653 K33・103号掘立柱建物跡
関係図 ……232
図 — 654 K34・36号掘立柱建物跡関係図 …232
図 — 655 K34号掘立柱建物跡 ……233
図 — 656 K35・42号掘立柱建物跡関係図 …233
図 — 657 K35号掘立柱建物跡 ……233
図 — 658 K36号掘立柱建物跡 ……234
図 — 659 K37・39号掘立柱建物跡関係図 …234
図 — 660 K37号掘立柱建物跡 ……234
図 — 661 K38号掘立柱建物跡 ……235
図 — 662 K39号掘立柱建物跡 ……235
図 — 663 K40号掘立柱建物跡 ……236
図 — 664 K40・41号掘立柱建物跡関係図 …236
図 — 665 K41号掘立柱建物跡 ……236
図 — 666 K42号掘立柱建物跡 ……237
図 — 667 K43号掘立柱建物跡 ……237
図 — 668 K44号掘立柱建物跡 ……238
図 — 669 K44・45号掘立柱建物跡関係図 …238
図 — 670 K45号掘立柱建物跡 ……238
図 — 671 K46号掘立柱建物跡 ……239
図 — 672 K47号掘立柱建物跡 ……239
図 — 673 K48号掘立柱建物跡 ……240
図 — 674 K49号掘立柱建物跡 ……240
図 — 675 K50号掘立柱建物跡 ……241
図 — 676 K51・52号掘立柱建物跡関係図 …241
図 — 677 K51号掘立柱建物跡 ……241
図 — 678 K52号掘立柱建物跡 ……241
図 — 679 K53号掘立柱建物跡 ……242
図 — 680 K54・55・61号掘立柱建物跡
関係図 ……242
図 — 681 K54号掘立柱建物跡 ……242
図 — 682 K55号掘立柱建物跡 ……243
図 — 683 K56・58・59・60号掘立柱建物跡
関係図 ……243
図 — 684 K56号掘立柱建物跡 ……243
図 — 685 K57号掘立柱建物跡 ……244
図 — 686 K58号掘立柱建物跡 ……244
図 — 687 K59号掘立柱建物跡 ……244
図 — 688 K60号掘立柱建物跡 ……244
図 — 689 K61号掘立柱建物跡 ……245
図 — 690 K62号掘立柱建物跡 ……246
図 — 691 K63号掘立柱建物跡 ……246
図 — 692 K64号掘立柱建物跡 ……247
図 — 693 K64・72号掘立柱建物跡関係図 …247
図 — 694 K65号掘立柱建物跡 ……247
図 — 695 K65・70号掘立柱建物跡関係図 …247
図 — 696 K66号掘立柱建物跡 ……248
図 — 697 K67・68号掘立柱建物跡関係図 …248
図 — 698 K67号掘立柱建物跡 ……248
図 — 699 K68号掘立柱建物跡 ……249
図 — 700 K69号掘立柱建物跡 ……249
図 — 701 K70号掘立柱建物跡 ……250
図 — 702 K71—A（Ⅰ・Ⅱ）・B号掘立柱
建物跡関係図 ……250
図 — 703 K71—A（Ⅰ・Ⅱ）号掘立柱
建物跡 ……250
図 — 704 K71—B号掘立柱建物跡 ……250
図 — 705 K72号掘立柱建物跡 ……251
図 — 706 K73号掘立柱建物跡 ……251
図 — 707 K74号掘立柱建物跡 ……252
図 — 708 K74・75号掘立柱建物跡関係図 …252
図 — 709 K75号掘立柱建物跡 ……252
図 — 710 K76号掘立柱建物跡 ……252
図 — 711 K77号掘立柱建物跡 ……253
図 — 712 K78号掘立柱建物跡 ……253
図 — 713 K79号掘立柱建物跡 ……253
図 — 714 K80号掘立柱建物跡 ……254
図 — 715 K81号掘立柱建物跡 ……254
図 — 716 K82号掘立柱建物跡 ……255
図 — 717 K83号掘立柱建物跡 ……255
図 — 718 K84号掘立柱建物跡 ……255
図 — 719 K85号掘立柱建物跡 ……255
図 — 720 K86・89号掘立柱建物跡関係図 …256
図 — 721 K86号掘立柱建物跡 ……256
図 — 722 K87・98号掘立柱建物跡関係図 …256

図 — 723　K87号掘立柱建物跡 ……256
図 — 724　K88号掘立柱建物跡 ……257
図 — 725　K89号掘立柱建物跡 ……257
図 — 726　K90号掘立柱建物跡 ……258
図 — 727　K91号掘立柱建物跡 ……258
図 — 728　K92号掘立柱建物跡 ……258
図 — 729　K93号掘立柱建物跡 ……258
図 — 730　K94号掘立柱建物跡 ……259
図 — 731　K95号掘立柱建物跡 ……259
図 — 732　K96号掘立柱建物跡 ……260
図 — 733　K97・106号掘立柱建物跡
関係図 ……260
図 — 734　K97号掘立柱建物跡 ……260
図 — 735　K98・104号掘立柱建物跡……261
図 — 736　K99号掘立柱建物跡 ……262
図 — 737　K100号掘立柱建物跡……262
図 — 738　K101号掘立柱建物跡……262
図 — 739　K102号掘立柱建物跡……262
図 — 740　K103号掘立柱建物跡……263
図 — 741　K105—A・B号掘立柱建物跡
関係図 ……263
図 — 742　K105—A号掘立柱建物跡……263
図 — 743　K105—B号掘立柱建物跡……263
図 — 744　K106号掘立柱建物跡……264
図 — 745　K107号掘立柱建物跡……264
図 — 746　K108号掘立柱建物跡……265
図 — 747　K109号掘立柱建物跡……265
図 — 748　K110号掘立柱建物跡……265
図 — 749　K111号掘立柱建物跡……266
図 — 750　K112号掘立柱建物跡……266
図 — 751　K112・113号掘立柱建物跡
関係図 ……266
図 — 752　K113号掘立柱建物跡……266
図 — 753　K114号掘立柱建物跡……267
図 — 754　K114・115号掘立柱建物跡
関係図 ……267
図 — 755　K115号掘立柱建物跡……267
図 — 756　K126号掘立柱建物跡……268
図 — 757　K127号掘立柱建物跡……268
図 — 758　K128号掘立柱建物跡……269
図 — 759　K129号掘立柱建物跡……269
図 — 760　K130号掘立柱建物跡……269
図 — 761　K131号掘立柱建物跡……270
図 — 762　K132号掘立柱建物跡……270
図 — 763　K133号掘立柱建物跡……270
図 — 764　K134号掘立柱建物跡……270
図 — 765　K157号掘立柱建物跡……271
図 — 766　K173号掘立柱建物跡……271
図 — 767　K179号掘立柱建物跡……271
図 — 768　K180号掘立柱建物跡……272
図 — 769　K181号掘立柱建物跡……272
図 — 770　K185号掘立柱建物跡……273
図 — 771　K186号掘立柱建物跡……273
図 — 772　K187号掘立柱建物跡……273
K187・194号掘立柱建物跡関係図 273
図 — 773　K188号掘立柱建物跡……274
図 — 774　K189号掘立柱建物跡……274
図 — 775　K190号掘立柱建物跡……274
図 — 776　K191号掘立柱建物跡……274
図 — 777　K192号掘立柱建物跡……275
図 — 778　K193号掘立柱建物跡……276
図 — 779　K194号掘立柱建物跡……276
図 — 780　掘立柱建物跡出土遺物 (1) ……276
図 — 781　掘立柱建物跡出土遺物 (2) ……277
図 — 782　大H 1～4号土坑 ……281
図 — 783　大H 5・6・8・9号土坑 ……282
図 — 784　H 1～10号土坑 ……283
図 — 785　H11～19号土坑 ……284
図 — 786　H20～30号土坑 ……285
図 — 787　H土坑出土遺物 (1) ……286
図 — 788　H土坑出土遺物 (2) ……287
図 — 789　I 1～3号井戸 ……287
図 — 790　W 2・3・7・17・18・22、
31～35、42号溝土層断面図 ……289
図 — 791　(刻書) 紡鐘車実測図 ……293
図 — 792　I類土器群 ……294
図 — 793　II類土器群 ……295
図 — 794　III類土器群 ……296
図 — 795　IV類土器群 ……297
図 — 796　V類土器群 ……299
図 — 797　VI類土器群 ……300
図 — 798　VII類土器群 ……301
図 — 799　VIII類土器群 ……303
図 — 800　IX類土器群 ……304
図 — 801　X類土器群 ……306
図 — 802　XI類土器群 ……308
図 — 803　XII類土器群 ……309
図 — 804　XIII類土器群 ……310
図 — 805　XV類土器群 ……311
図 — 806　XIV類土器群 ……312
図 — 807　芳賀団地遺跡地形図 ……318
図 — 808　I期以前 ……319
図 — 809　I期 ……320
図 — 810　II期 ……321
図 — 811　III期 ……322
図 — 812　IV期 ……323
図 — 813　V期 ……324
図 — 814　VI期 ……325
図 — 815　VII期 ……326
図 — 816　VIII期 ……327
図 — 817　IX期 ……328
図 — 818　X期 ……329
図 — 819　XI期 ……330
図 — 820　XII期 ……331
図 — 821　XIII期 ……332
図 — 822　XIV期 ……333
図 — 823　XV期 ……334
付図— 1　芳賀東部団地遺跡全体図
付図— 2　芳賀東部団地遺跡住居跡分布位置図

図 版 目 次

図版一 1 H 1 号住居跡 H 5 号住居跡
H 2 号住居跡 H 6 号住居跡
H 3 号住居跡 H 7 号住居跡
H 4 号住居跡 H 8 号住居跡
図版一 2 H 9 号住居跡 H14号住居跡
H10号住居跡 H15号住居跡
H11号住居跡 H16号住居跡
H13号住居跡 H17号住居跡
図版一 3 H18号住居跡 H22号住居跡
H19号住居跡 H23号住居跡
H20号住居跡 H24号住居跡
H21号住居跡 H25号住居跡
図版一 4 H27号住居跡 H31号住居跡
H28号住居跡 H32号住居跡
H29号住居跡 H33号住居跡
H30号住居跡 H34号住居跡
図版一 5 H35号住居跡 H40号住居跡
H36号住居跡 H41号住居跡
H37号住居跡 H42号住居跡
H38・39号住居跡 H43号住居跡
図版一 6 H44号住居跡 H48号住居跡
H45号住居跡 H49号住居跡
H46号住居跡 H50号住居跡
H47号住居跡 H51号住居跡
図版一 7 H52号住居跡 H56号住居跡
H53号住居跡 H57号住居跡
H54号住居跡 H59号住居跡
H55号住居跡
図版一 8 H60号住居跡 H64号住居跡
H61・81号住居跡 H65号住居跡
H62号住居跡 H67号住居跡
H63号住居跡
H63・66・80号住居跡
図版一 9 H68号住居跡 H73号住居跡
H69号住居跡 H74・75・76・79号
H70号住居跡 住居跡
H71号住居跡 H77号住居跡
H72号住居跡
図版一10 H78号住居跡 H85号住居跡
H82号住居跡 H86号住居跡
H83号住居跡 H88号住居跡
H84号住居跡 H89号住居跡
図版一11 H90号住居跡 H94号住居跡
H91号住居跡 H95号住居跡
H92号住居跡 H96号住居跡
H93号住居跡 H97号住居跡
図版一12 H98号住居跡 H102号住居跡
H99号住居跡 H103号住居跡
H100号住居跡 H104号住居跡
H101号住居跡 H105号住居跡
図版一13 H106号住居跡 H113号住居跡
H107号住居跡 H114号住居跡
H108号住居跡 H115号住居跡
H110号住居跡 H117号住居跡
図版一14 H118号住居跡 H122号住居跡
H119号住居跡 H123号住居跡
H120号住居跡 H124号住居跡
H121号住居跡 H126号住居跡
図版一15 H126号住居跡 H132号住居跡
H127号住居跡 H133号住居跡
H128号住居跡 H135号住居跡
H130号住居跡
図版一16 H136号住居跡 H142号住居跡
H137号住居跡 H143号住居跡
H138号住居跡 H144号住居跡
H139・140・141号 H145号住居跡
住居跡
図版一17 H147号住居跡 H151号住居跡
H148号住居跡 H152号住居跡
H149号住居跡 H153号住居跡
H150号住居跡 H154号住居跡
図版一18 H155号住居跡 H159号住居跡
H156号住居跡 H160号住居跡
H157号住居跡 H161号住居跡
H158号住居跡 H162号住居跡
図版一19 H163号住居跡 H167号住居跡
H164号住居跡 H168号住居跡
H165号住居跡 H169号住居跡
H166号住居跡 H170号住居跡
図版一20 H171号住居跡 H175号住居跡
H172号住居跡 H176号住居跡
H173号住居跡 H177号住居跡
H174号住居跡 H178号住居跡
図版一21 H179号住居跡 H183号住居跡
H180号住居跡 H184号住居跡
H181号住居跡 H185号住居跡
H182号住居跡 H186号住居跡
図版一22 H187号住居跡 H191号住居跡
H188号住居跡 H192号住居跡
H189号住居跡 H194号住居跡
H190号住居跡 H195号住居跡
図版一23 H196号住居跡 H201号住居跡
H197号住居跡 H203号住居跡
H199号住居跡 H204号住居跡
H200号住居跡 H205号住居跡
図版一24 H206号住居跡 H211・215号
H207号住居跡 住居跡
H208号住居跡 H212号住居跡
H209号住居跡 H213号住居跡
H210号住居跡
図版一25 H214号住居跡 H220号住居跡
H217号住居跡 H221号住居跡
H218号住居跡 H222号住居跡
H219号住居跡 H223号住居跡
図版一26 H224号住居跡 H229・230号
H225号住居跡 住居跡
H226号住居跡 H231号住居跡
H227号住居跡 H232号住居跡
H228号住居跡
図版一27 H233号住居跡 H237号住居跡
H234号住居跡 H238号住居跡
H235号住居跡 H239号住居跡
H236号住居跡 H240号住居跡
図版一28 H241号住居跡 H245号住居跡
H242号住居跡 H246号住居跡
H243号住居跡 H247号住居跡
H244号住居跡 H248号住居跡
図版一29 H249号住居跡 H253号住居跡
H250号住居跡 H254号住居跡
H251・252号 H255号住居跡
住居跡 H256号住居跡
図版一30 H257・258・259 H263・264号
号住居跡 住居跡
H260号住居跡 H265号住居跡
H261号住居跡 H266号住居跡
H262号住居跡 H321号住居跡
図版一31 H323・324号 H328号住居跡
住居跡 H329号住居跡
H325号住居跡 H330号住居跡
H326号住居跡 H331号住居跡
H327号住居跡
図版一32 H332号住居跡 H338号住居跡
H333号住居跡 H339号住居跡
H334号住居跡 H340号住居跡
H335号住居跡
H336・337・346住居跡
図版一33 H341号住居跡 H345号住居跡
H342号住居跡 H347号住居跡
H343号住居跡 H348号住居跡
H344号住居跡 H349号住居跡
図版一34 H350号住居跡 H481号住居跡
H352号住居跡 H482号住居跡
H353号住居跡 H483号住居跡
H480号住居跡 H484号住居跡
図版一35 H485号住居跡 H489号住居跡
H486号住居跡 H490号住居跡
H487号住居跡 H491号住居跡
H488号住居跡 H492号住居跡
図版一36 H493号住居跡 H 6 号竪穴遺構
H494号住居跡 H 7 号竪穴遺構
H 1 号竪穴遺構 H 8 号竪穴遺構
H 2 号竪穴遺構 H 9 号竪穴遺構
図版一37 H58号住居跡 T 1 号鍛冶址
H87号住居跡 T 2 号鍛冶址
H198号住居跡 T 2 号鍛冶址前堤部
H216号住居跡 T 2 号鍛冶址炉部分
図版一38 T 2 号鍛冶址鉄滓廃棄状態 T 3 号鍛冶址
T 3 号鍛冶址 T 3 号鍛冶址
K 1 号掘立柱建物跡 K 5 －B号掘立柱建物跡
K 2 ・ 3 号掘立柱建物 K 7 号掘立柱建物跡
跡
図版一39 K 8 号掘立柱建物跡 K13号掘立柱建物跡
K 9 号掘立柱建物跡 K14－A－B号掘立柱建
K10号掘立柱建物跡 物跡
K11号掘立柱建物跡 K15号掘立柱建物跡
K12号掘立柱建物跡
図版一40 K16号掘立柱建物跡 K20号掘立柱建物跡
K17号掘立柱建物跡 K21号掘立柱建物跡
K18号掘立柱建物跡 K22号掘立柱建物跡
K19号掘立柱建物跡 K23号掘立柱建物跡
図版一41 K24号掘立柱建物跡 K31号掘立柱建物跡
K25号掘立柱建物跡 K32号掘立柱建物跡
K26号掘立柱建物跡 K33号掘立柱建物跡
K28号掘立柱建物跡 K34号掘立柱建物跡
図版一42 K35号掘立柱建物跡 K39号掘立柱建物跡
K36号掘立柱建物跡 K40号掘立柱建物跡
K37号掘立柱建物跡 K41号掘立柱建物跡
K38号掘立柱建物跡 K42号掘立柱建物跡
図版一43 K43号掘立柱建物跡 K47号掘立柱建物跡
K44号掘立柱建物跡 K48号掘立柱建物跡

K45号掘立柱建物跡　K49号掘立柱建物跡
K46号掘立柱建物跡　K50号掘立柱建物跡
図版—44　K53号掘立柱建物跡　K58号掘立柱建物跡
K54号掘立柱建物跡　K59号掘立柱建物跡
K55号掘立柱建物跡　K61号掘立柱建物跡
K56号掘立柱建物跡　K62号掘立柱建物跡
図版—45　K63号掘立柱建物跡　K67号掘立柱建物跡
K64号掘立柱建物跡　K68号掘立柱建物跡
K65号掘立柱建物跡　K69号掘立柱建物跡
K66号掘立柱建物跡　K71—A号掘立柱建物跡
図版—46　K71—B号掘立柱建物跡　K76号掘立柱建物跡
K77号掘立柱建物跡
K73号掘立柱建物跡　K78号掘立柱建物跡
K74・75号掘立柱建物跡　K79号掘立柱建物跡
K80号掘立柱建物跡
図版—47　K81号掘立柱建物跡　K85号掘立柱建物跡
K82号掘立柱建物跡　K86・89号掘立柱建物跡
K83号掘立柱建物跡　K87号掘立柱建物跡
K84号掘立柱建物跡　K88号掘立柱建物跡
図版—48　K90号掘立柱建物跡　K95号掘立柱建物跡
K91号掘立柱建物跡　K96号掘立柱建物跡
K92号掘立柱建物跡　K98・104号掘立柱建物跡
K93号掘立柱建物跡
K94号掘立柱建物跡
図版—49　K101号掘立柱建物跡　K108号掘立柱建物跡
K102号掘立柱建物跡　K109号掘立柱建物跡
K105—A号掘立柱建物跡
K106号掘立柱建物跡　K110号掘立柱建物跡
K107号掘立柱建物跡
図版—50　K111号掘立柱建物跡　K115号掘立柱建物跡
K112号掘立柱建物跡　K126号掘立柱建物跡
K113号掘立柱建物跡　K127号掘立柱建物跡
K114号掘立柱建物跡　K128号掘立柱建物跡
図版—51　K129・179・180号掘立柱建物跡　K133号掘立柱建物跡
K134号掘立柱建物跡
K130号掘立柱建物跡　K157号掘立柱建物跡
K131号掘立柱建物跡　K173号掘立柱建物跡
K132号掘立柱建物跡
図版—52　K181号掘立柱建物跡　K188号掘立柱建物跡
K185号掘立柱建物跡　K189号掘立柱建物跡
K186号掘立柱建物跡　K190号掘立柱建物跡
K187号掘立柱建物跡　K191号掘立柱建物跡
図版—53　K192号掘立柱建物跡　大H 2 号土坑
K193号掘立柱建物跡　大H 3 号土坑
K194号掘立柱建物跡　大H 4 号土坑
大H 1 号土坑　大H 5 号土坑
図版—54　大H 6 号土坑　H 3 号土坑
大H 8 号土坑　H 4 号土坑
大H 9 号土坑　H 5 号土坑
H 1 号土坑　H 6 号土坑
図版—55　H 7 号土坑　H15号土坑
H 9 号土坑　H16号土坑
H10号土坑　H18号土坑
H11号土坑　H21号土坑
図版—56　H22号土坑　H26号土坑
H23号土坑　H27号土坑
H24号土坑　H28号土坑
H25号土坑　H29号土坑
図版—57　H30号土坑　W 3 号溝跡
I 1 号井戸　W 4 ・ 5 号溝
I 2 号井戸　W 5 号溝
I 3 号井戸　W 6 号溝
図版—58　W 6 号溝　W19号溝
W16号溝　W20号溝
W17・18号溝　W29号溝
W17・18号溝　W39号溝
図版—59　H 1 号住居跡出土遺物
H 2 号住居跡出土遺物
H 3 号住居跡出土遺物
図版—60　H 4 号住居跡出土遺物
H 5 号住居跡出土遺物
H 6 号住居跡出土遺物
H 7 号住居跡出土遺物
H 8 号住居跡出土遺物
図版—61　H 9 号住居跡出土遺物
H10号住居跡出土遺物
H11号住居跡出土遺物
H13号住居跡出土遺物
図版—62　H14号住居跡出土遺物
H15号住居跡出土遺物
H16号住居跡出土遺物
図版—63　H17号住居跡出土遺物
H18号住居跡出土遺物
H19号住居跡出土遺物
H20号住居跡出土遺物
図版—64　H21号住居跡出土遺物
H22号住居跡出土遺物
H23号住居跡出土遺物
H24号住居跡出土遺物
H25号住居跡出土遺物
図版—65　H27号住居跡出土遺物
H28号住居跡出土遺物
H29号住居跡出土遺物
H30号住居跡出土遺物
H31号住居跡出土遺物
H32号住居跡出土遺物(1)
図版—66　H32号住居跡出土遺物(2)
H33号住居跡出土遺物
H34号住居跡出土遺物
H35号住居跡出土遺物
H36号住居跡出土遺物
H37・38号住居跡出土遺物
図版—67　H39号住居跡出土遺物
H40号住居跡出土遺物
H41号住居跡出土遺物
図版—68　H42号住居跡出土遺物
H43号住居跡出土遺物
H44号住居跡出土遺物
H45号住居跡出土遺物
H46号住居跡出土遺物
H47号住居跡出土遺物
図版—69　H48号住居跡出土遺物
H49号住居跡出土遺物
H50号住居跡出土遺物(1)
図版—70　H50号住居跡出土遺物(2)
H51号住居跡出土遺物
H52号住居跡出土遺物
H53号住居跡出土遺物
図版—71　H54号住居跡出土遺物
H56号住居跡出土遺物
H59号住居跡出土遺物
H60号住居跡出土遺物
図版—72　H61号住居跡出土遺物
H62号住居跡出土遺物
H63・80号住居跡出土遺物
H81号住居跡出土遺物
図版—73　H64号住居跡出土遺物
H65号住居跡出土遺物
H67号住居跡出土遺物
H68号住居跡出土遺物
図版—74　H69号住居跡出土遺物
H70号住居跡出土遺物
H71号住居跡出土遺物
H73号住居跡出土遺物
H74・75・76・79号住居跡出土遺物
H77号住居跡出土遺物
H78号住居跡出土遺物
図版—75　H82号住居跡出土遺物
H83号住居跡出土遺物
H84号住居跡出土遺物
H85号住居跡出土遺物
図版—76　H86号住居跡出土遺物
H88号住居跡出土遺物
H90号住居跡出土遺物
H91号住居跡出土遺物
図版—77　H92号住居跡出土遺物(1)
図版—78　H92号住居跡出土遺物(2)
H93号住居跡出土遺物
H94号住居跡出土遺物
H95号住居跡出土遺物
図版—79　H96号住居跡出土遺物
H97号住居跡出土遺物
H98号住居跡出土遺物
H99号住居跡出土遺物
図版—80　H100号住居跡出土遺物
H101号住居跡出土遺物
H102号住居跡出土遺物
図版—81　H103号住居跡出土遺物
H104号住居跡出土遺物
H105号住居跡出土遺物
H106号住居跡出土遺物
図版—82　H107号住居跡出土遺物
H108号住居跡出土遺物
H109号住居跡出土遺物
H111・116号住居跡出土遺物
図版—83　H111・112・116号住居跡出土遺物
H113号住居跡出土遺物
H114号住居跡出土遺物
図版—84　H115号住居跡出土遺物
H117号住居跡出土遺物
H118号住居跡出土遺物
H119号住居跡出土遺物
H120号住居跡出土遺物
H121号住居跡出土遺物
図版—85　H122号住居跡出土遺物
H123号住居跡出土遺物
H124号住居跡出土遺物
H125・129号住居跡出土遺物
図版—86　H126号住居跡出土遺物
H127号住居跡出土遺物
H128号住居跡出土遺物
H130号住居跡出土遺物
H132号住居跡出土遺物
H133号住居跡出土遺物
図版—87　H135号住居跡出土遺物
H136・137号住居跡出土遺物
H138号住居跡出土遺物
図版—88　H140・141号住居跡出土遺物

H142号住居跡出土遺物
H143号住居跡出土遺物
H144号住居跡出土遺物
図版—89 H145号住居跡出土遺物
H147号住居跡出土遺物
H148号住居跡出土遺物
H149号住居跡出土遺物
図版—90 H150号住居跡出土遺物
H152号住居跡出土遺物
H153号住居跡出土遺物
H154号住居跡出土遺物
H155号住居跡出土遺物
H156号住居跡出土遺物
図版—91 H157号住居跡出土遺物
図版—92 H158号住居跡出土遺物
H159号住居跡出土遺物(1)
図版—93 H159号住居跡出土遺物(2)
H160号住居跡出土遺物
H162号住居跡出土遺物(1)
図版—94 H162号住居跡出土遺物(2)
H163号住居跡出土遺物
H164号住居跡出土遺物
H165号住居跡出土遺物
H166号住居跡出土遺物
図版—95 H167号住居跡出土遺物
H168号住居跡出土遺物
H169号住居跡出土遺物
図版—96 H170号住居跡出土遺物
H171号住居跡出土遺物
H173号住居跡出土遺物
H174号住居跡出土遺物
H175号住居跡出土遺物
H176号住居跡出土遺物
図版—97 H177号住居跡出土遺物
H178号住居跡出土遺物
H179号住居跡出土遺物
H180号住居跡出土遺物(1)
図版—98 H180号住居跡出土遺物(2)
H181号住居跡出土遺物
H182号住居跡出土遺物
H183号住居跡出土遺物
H184号住居跡出土遺物
H185号住居跡出土遺物
図版—99 H186号住居跡出土遺物
H187号住居跡出土遺物
H188号住居跡出土遺物
H189号住居跡出土遺物
H190号住居跡出土遺物
H191号住居跡出土遺物
H192号住居跡出土遺物
図版-100 H194号住居跡出土遺物
H196号住居跡出土遺物
H197号住居跡出土遺物
H199号住居跡出土遺物
H200号住居跡出土遺物
H201号住居跡出土遺物
図版-101 H202号住居跡出土遺物
H203号住居跡出土遺物
H204号住居跡出土遺物
図版-102 H205号住居跡出土遺物
H206号住居跡出土遺物
H207号住居跡出土遺物
H209号住居跡出土遺物
H210号住居跡出土遺物
H211・215号住居跡出土遺物
図版-103 H212号住居跡出土遺物
H213号住居跡出土遺物
H214号住居跡出土遺物
H217号住居跡出土遺物
H218号住居跡出土遺物
図版-104 H219号住居跡出土遺物
H221号住居跡出土遺物
H222号住居跡出土遺物
H224号住居跡出土遺物
H225号住居跡出土遺物
H226号住居跡出土遺物
図版-105 H228号住居跡出土遺物
H229号住居跡出土遺物
H231号住居跡出土遺物
H232号住居跡出土遺物
H233号住居跡出土遺物
H234号住居跡出土遺物
図版-106 H235号住居跡出土遺物
H236号住居跡出土遺物
H237号住居跡出土遺物
H238号住居跡出土遺物
H239号住居跡出土遺物
H240号住居跡出土遺物
H241号住居跡出土遺物
図版-107 H242号住居跡出土遺物
H244号住居跡出土遺物
H245号住居跡出土遺物
図版-108 H246号住居跡出土遺物
H247号住居跡出土遺物
H249号住居跡出土遺物
H250号住居跡出土遺物
H251号住居跡出土遺物
H253号住居跡出土遺物
図版-109 H255号住居跡出土遺物
H256号住居跡出土遺物
H257・258号住居跡出土遺物
図版-110 H260号住居跡出土遺物
H261号住居跡出土遺物
H264号住居跡出土遺物
H265号住居跡出土遺物
H266号住居跡出土遺物
H321号住居跡出土遺物
H323・324号住居跡出土遺物
図版-111 H325号住居跡出土遺物
H327号住居跡出土遺物
H328号住居跡出土遺物
H329号住居跡出土遺物
図版-112 H330号住居跡出土遺物
H331号住居跡出土遺物
H332号住居跡出土遺物
H333号住居跡出土遺物
H334号住居跡出土遺物
H335号住居跡出土遺物
H336号住居跡出土遺物
H337号住居跡出土遺物
H338号住居跡出土遺物
図版-113 H339号住居跡出土遺物
H340号住居跡出土遺物
H341号住居跡出土遺物
H342号住居跡出土遺物
H343号住居跡出土遺物
H344号住居跡出土遺物
H345号住居跡出土遺物
図版-114 H347・348号住居跡出土遺物
H349号住居跡出土遺物
H350号住居跡出土遺物
H351号住居跡出土遺物
H352号住居跡出土遺物
図版-115 H480号住居跡出土遺物
H481号住居跡出土遺物
H482号住居跡出土遺物
H483号住居跡出土遺物
H485号住居跡出土遺物
図版-116 H486号住居跡出土遺物
H487号住居跡出土遺物
H488号住居跡出土遺物
H489号住居跡出土遺物
H490号住居跡出土遺物
H491号住居跡出土遺物
H492号住居跡出土遺物
H493号住居跡出土遺物
図版-117 H58号住居跡出土遺物
H87号住居跡出土遺物
H198号住居跡出土遺物
図版-118 H216号住居跡出土遺物
T 1 号鍛冶址出土遺物
T 2 号鍛冶址出土遺物(1)
図版-119 T 2 号鍛冶址出土遺物(2)
図版-120 T 2 号鍛冶址出土遺物(3)
T 3 号鍛冶址出土遺物(1)
図版-121 T 3 号鍛冶址出土遺物(2)
掘立柱建物跡出土遺物
土坑出土遺物
図版-122 芳賀東部団地遺跡出土鉄滓顕微鏡組織（試料 2 、 6 ）
図版-123 〃 （試料 8 、 9 ）

Ⅰ　調査及び整理の経過

芳賀東部団地遺跡は、昭和51年から56年までの長期間の調査を行なってきた。調査の経過のうち、昭和54年11月からの期間については第１巻に述べてあるので、第２巻では、芳賀東部団地遺跡の発掘調査のはじまった昭和51年６月から、昭和54年10月までについて、月別に調査の概要を追ってみることにする。

昭和51年６月　７日。発掘調査事務所の整備を行ない、その後調査区にグリッドの設定をはじめる。設定のおわったところから試掘をはじめる。A・B－１・２とＣ３グリッド。　中旬。朝日、読売、上毛新聞、群馬テレビがあいついで来訪、取材を行う。雨が多く調査に苦慮する。トレンチの試掘が進み断面精査と実測を行なう。土師器使用住居跡（H－１号）の排土をはじめる。下旬も雨が多く作業中止の日が多い。H－１号の精査を進める。縄文時代のピットを検出する。（ＪＰ－１号）

７月　H－２・３、Ｊ－１号住居跡の検出。掘立柱建物跡（K－１号）も検出される。桂萱中郷土部の生徒が見学に来訪する。　中旬。掘立柱建物跡の検出が続く。溝も検出されはじめる。雨が多く、作業の中断されることがある。下旬。顧問の尾崎喜左雄氏視察に来訪。K－１、Ｊ－１号の精査を続ける。

８月　７月24日～８月18日までは山王廃寺調査のために中断する。19日より再開。トレンチの設定を行う。雨が多く室内で写真や図版の整理にあたる。

９月　トレンチの拡張区の排土を進める。H－４～９号の排土を行なう。井戸、鍛冶址（Ｔ－１号）の検出。商政課より観光映画作成のため係員が来訪する。　中旬。大ピット（H大Ｐ－１号）を検出する。Ｅ・Ｆ５グリッドの試掘を進める。台風の雨により作業が中断、土器や図面の整理にあてる。　下旬。H－４～７号の精査を続ける。Ｊ－３号検出、排土をはじめる。Ｅ～Ｈ６グリッドの試掘をはじめる。

10月　H－８～12号の精査とH－13・14号の排土をはじめる。同時にＩ４～７、Ｅ・Ｆ６・７、Ｇ・Ｈ７・８グリッドの試掘を続ける。竪穴住居跡が続々と検出される。　中旬。H－15～19号の排土をはじめる。Ｅ・Ｆ・Ｇ９、Ｃ・Ｄ・Ｅ10グリッドの試掘を進める。　下旬。竪穴住居跡の検出が続く。H－15～19号の精査、H－24～28号の排土をはじめる。Ｊ－４・５号検出する。Ｄ～H13グリッドの試掘をはじめる。

11月　先月に続き竪穴住居跡の検出が続く。H－23～28号の精査、H－29～42号の排土を行う。Ｅ・Ｅ14・15グリッドの試掘をはじめる。　中旬。H－43～53号の検出、排土をはじめる。H－29～43号の精査を行う。Ｇ・Ｈ・Ｊ14・15グリッドの試掘を行う。　下旬。H－44～58号の排土とH－44～53号の精査を続ける。Ｊ16、Ｇ・Ｈ・Ｊ・Ｋ17グリッドの試掘を行なう。

12月　H－54～62号の検出、排土、精査を行う。K－２・３号の排土を進める。　中旬。H－63～79号の検出と排土をはじめる。H－59～79号の精査を行う。27日、資材の移動、遺物の運搬を行い、51年度の調査を終了する。

昭和52年５月　９日より52年度の発掘調査を開始する。K－４号の精査を行う。毎日新聞来訪取材を行う。Ｊ２～４、Ｋ２～４グリッドの試掘をはじめる。　中旬。H－82号の精査。M・Ｎ３・４、Ｄ４グリッドの試掘を進める。　下旬。H－83・84号の排土を行う。Ｊ－６号、奈良・平安時代のピット（ＨＰ）を検出、排土をはじめるＴ－２号検出。Ｑ４～６、Ｐ５・６グリッドの試掘を行う。

６月　H－84号の精査とH－85号の排土を行う。Ｔ－２号、Ｊ－６号も精査に入る。D・Ｎ６、Ｌ６～８、Ｍ６～８グリッドの試掘に入る。　中旬。H－86～88号を検出し排土をはじめる。附属中の生徒、県教委の係員が来訪する。Ｎ７・８グリッドを試掘する。　下旬。Ｊ－７号検出。赤堀村教委来訪。Ｒ１～５、Ｓ１～５グリッドの試掘を進める。

７月　群馬大生来訪。Ｊ－７号は精査に、Ｊ－８号は排土に入る。Ｔ４グリッドの試掘を行う。中旬。ＪＰ－７～９号の検出、排土を行う。R・Ｓ５グリッドの試掘を行う。７月16日から８月25日までは、山王廃寺調査で休みとなる。

８月　26日より発掘調査を再開する。ＮＨＫが発掘調査の作業員さんの取材に来訪。拡張区の排土をはじめる。１つは炭化物を含み、１つは円形で礫のある住居。

９月　Ｊ－９号の精査、Ｊ－10～12号の排土・精査を行う。　中旬。H－89号の排土。Ｔ６、Ｖ５・６グリッドの試掘がはじまる。　下旬。H－89号の精査、H－90・91号の排土を行う。M・Ｎ６、Ｎ・Ｓ・Ｑ・Ｒ・Ｔ７グリッドの試掘を行う。

10月　H－91号の精査、Ｊ－13号の排土と精査を行う。Ｔ・Ｕ・Ｖ７・８、Ｓ・Ｒ・Ｑ８・９グリッドに試掘を進める。中旬。ＪＰ－12・13号の排土と精査。Ｊ－14・15号を検出、排土に。Ｔ・Ｕ９、Ｕ・Ｒ10、Ｓ・Ｔ－10・11グリッドの試掘を行う。　下旬。Ｊ－14・15号の精査、Ｊ－16号の排土と精査、ＪＰ－14号の精査を行う。縄文時代の遺構の検出が続く。Ｑ11・12、Ｒ・Ｖ12グリッドの試掘を行う。

11月　Ｊ－17・18号の排土、ＪＰ－15号の精査、H－92～95号の排土が進む。Ｖ・Ｕ・Ｒ・Ｑ13～16グリッドの試掘進む。中旬。Ｊ－17・18号精査とH－92～97号精査が続く。Ｔ15～18、Ｓ17・18、Ｒ15～18グリッド試掘おわる。　下旬。H－98号排土と精査を行う。Ｌ・Ｍ・Ｎ９、Ｐ18～20、Ｑ・Ｒ・Ｔ19・20グリッドの試掘を続ける。

12月　ＪＰ－20・21号、ＨＰ－１号精査を行う。Ｌ・Ｍ・Ｎ－10～16、Ｐ10～14の試掘を行う。教育長、調査団長視察。　中旬。K－15～17号、H－99～102号の排土を行う。Ｊ１・２、Ｖ８、Ｕ５・８・９、Ｔ５グリッド試掘。　下旬。H

—99～102号の精査、M・L・K16～18、K19、N16・17の試掘を行う。芳賀小5年生90名が見学に来訪。23日に52年度の発掘調査を終了する。

昭和53年4月　24日より調査を開始する。新しく加わった調査員を含めて、調査方法等の研修を実施する。本年度より調査区に地区名をつける。(以下〇—〇区と述べる、また個々の遺構については検出数が多いので省く)

3—1、3—2区にトレンチを設定する。

5月　8日より本格的な発掘調査開始となる。　中旬。住居跡、縄文時代のピットの検出が続く。調査区北の牧場より牛乳の差し入れがある。　下旬。引き続き住居跡の検出が多い。相沢忠洋氏来訪。

6月　今月より相沢忠洋氏を調査員に依嘱する。7—1、7—2区の試掘に入る。住居跡の検出が多い。中旬。住居跡の検出が多く、精査・実測・写真撮影等の処理に追われる。　下旬。7—2区での調査が続く。雨の日が多く、作業中止の日がでる。

7月　暑さで具合の悪くなる人がでる。7—2区の住居跡の精査を続ける。表土除去への機械力導入の準備を行う。　中旬。縄文時代の住居跡、ピットの検出が続く。　中旬。住居跡の精査を続行する。作業員研修会実施。

8月　7—2区の東部分よりの住居跡の検出が多い。掘立柱建物跡についても確認をすすめる。　中旬。9区より機械力を導入し表土除去をはじめる。3—2区の試掘をはじめる。　下旬。8区にトレンチを設定する。グランド区の地質調査を行う。3—2、8区からは遺構・遺物の検出は少ない。9区の試掘をはじめる。溝・墓壙の検出が続く。8区内の住居跡精査を続ける。教育長視察。

9月　グランド区の調査に入る。　中旬。雨が多い。荒子小の先生・生徒見学に来訪。グランド区で溝・住居跡の検出続く。鍛冶址検出。　下旬。5区の試掘に入る。住居跡・溝を検出する。6区の試掘に入る。住居跡と掘立柱建物跡を検出する。

10月　6区の精査をつづける。縄文時代の住居跡を検出する。9、5—2区ともに精査が続く。　中旬。2—2区で試掘をはじめる。6区で掘立柱建物跡の検出が続く。9区の東西の大溝の精査を行う。　下旬。11月上旬までの間に3回にわたり、野村哲群大教授による住居カマド内焼土の熱残留磁気測定の標本採集がある。7—1区の調査に入る。

11月　5—2区は終了し、2—2、6、9区での調査が続く。7—3区の試掘に入る。　中旬。9区に近世の墓壙多数が検出される。精査と実測を行う。荒子小ＰＴＡ来訪。　下旬。7—3区で遺構検出が続く。市内公民館主事見学。若宮小社会科クラブ見学。測量会社による実測が進み、図面の確認、注記を行う。

12月　山田武麿調査団顧問来訪。6区がほぼ終了する。7—2・3区の遺構の精査が続く。遺構が密集して検出され、精査等が多数並行してすすむ。教育長視察。　中旬。7—3区に主力をそそぎ調査を行う。　下旬。実測・写真等の仕事を中心に調査を進める。28日に遺構の調査を終了する。

1月から2月中旬まで、遺物の洗浄と図面の整理を行う。2月中旬より下旬までは遺物、図面の整理、写真の整理を行う。2月28日に本年度の調査を終了する。

昭和54年4月　23日より調査を開始する。7—3区で、新しく加わった調査員を交え、研修調査を実施する。

5月　7—3区を中心に調査をはじめる。桃木小の先生・生徒来訪。　中旬。7—3区の掘立柱建物跡を重点に精査を進める。雨の日が多い。　下旬。溝の測量をはじめる。

6月　13区の試掘をはじめる。住居跡の検出が多い。土器の盗難が発生する。7—3区の掘立柱建物跡の精査進む。　中旬。13区の住居跡の精査進む。溝の平板測量を実施する。　下旬。雨の日が多く図面の整理を中心に行う。

7月　7—3区の掘立柱建物跡の調査はほぼおわる。13区の住居跡に調査の中心が移る。掘立柱建物跡検出のため全面表土排土を行う。　中旬。7—3区の南端で住居跡の検出が続く。13区で掘立柱建物跡が多く検出される。　下旬。12区の試掘に入る。トレンチを設定する。

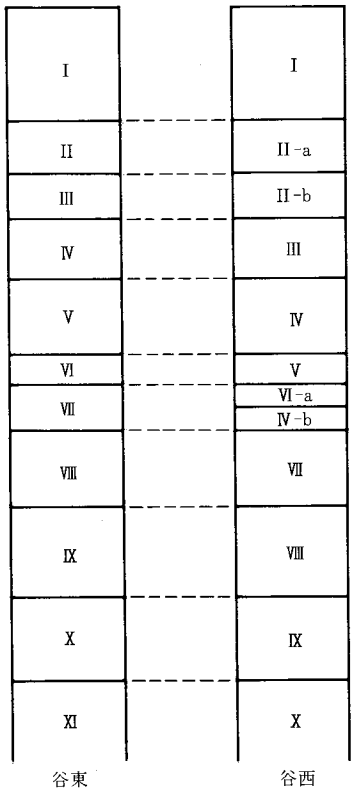
8月　7—3区、13区の2地区を中心に調査を進める。中学生が2名発掘の体験学習で来訪。山田武麿調査団顧問来訪。桂萱中1年生遺跡見学に来訪。　中旬。12区が終了する。雨の日が多い。11区の試掘に入る。13区の北部分の表土を除去し、掘立柱建物跡の確認を進める。文化庁の稲田調査官来訪。

9月　作業員研修を実施する。7—3、13区から掘立柱建物跡を多く検出する。　下旬。14—1区にトレンチを設定する。雨が多い。

10月　勢多農林高等学校実習地内の三角点より標高の計測を行い、新しい標高の基準点を調査区の南におく。14—1区より住居跡の検出が多い。13区で住居内の炭化物のとりあげを行う。　中旬。7—3区の未調査部分の表土を排土する。遺構の検出が多い。11区が終了する。　下旬。7—3区と14区を中心に調査を進める。14区より縄文時代の住居跡の検出が多い。

(以下は第1巻に収録)

II 基本層序



図－1　地層対照図

基本層序は第1巻と基本的には同じである。しかし、調査年度で若干土層の表記が異なるので、51～53年度調査分を総合して土層の基本層序とした。これは第1巻と違いがあるので左図に対照の図として掲げた。第2巻ではこの土層表記で統一してある。土層断面図中に表記されている土層の記号は、基本層序の記号と対応する。

第Ⅰ層　耕作土・表土。粒子が荒く、さらさらしている。厚さ30cm前後。
第Ⅱ－a層　B軽石を多量に含む砂質土。厚さ10cm前後。
第Ⅱ－b層　B軽石純層。厚さ10cm前後。
第Ⅲ層　黒褐色土。黒色土と褐色土がブロック状にまじりさらさらしている。ＦＰ・Ｃ軽石を含む。厚さ20cm前後。
第Ⅳ層　黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石を含む。厚さ10～20cm前後。
第Ⅴ層　ＦＡの純層かＦＡブロック層。厚さ5cm前後。
第Ⅵ－a層　Ｃ軽石を多量に含む黒色土。厚さ2～4cm前後。
第Ⅵ－b層　Ｃ軽石純層。厚さ2～4cm前後。
第Ⅶ層　黒色土。浮石をふくまない。粘性がある。厚さ10cm前後。
第Ⅷ層　漸移層Ⅰ。黒褐色土。粘性がある。厚さ20cm前後。
第Ⅸ層　漸移層Ⅱ。褐色土。厚さ10～15cm前後。
第Ⅹ層　ローム層。

基本層序は上記した通りであるが、埋土の様子はさまざまであり、いくつかの土層の混土であったり、1つの層がさらに細かく分かれたりしている。その場合には上記の記号ではなく個々に説明を付している。

遺構確認面については第1巻を参照のこと。　（井野）

III 遺構と遺物

1 概　　要

芳賀東部団地遺跡は、昭和51年から昭和55年にかけて前橋市鳥取、小坂子、五代町にわたる32.78haの調査を行なってきている。芳賀北部団地、西部団地遺跡を含めると40haに近い。特に芳賀東部団地遺跡は、東西の大きな台地とその中間の小さな台地の大部分の調査を実施した。東側台地については報告書の第1巻に収録してある（既刊）。本書では中央台地と西側台地の遺構と遺物について収録をした。内容的には土師器を使用していた時代の遺構に限定している。その他の時代の遺構、遺物については東部団地遺跡全体について第3巻に収録の予定である。

芳賀東部団地遺跡の全体の概要については第1巻に述べてあるが、そのうちで第2巻で収録された遺構は次のとおりである。

竪穴住居跡　305　　竪穴遺構　6　　掘立柱建物跡　138　　鍛冶址　3　　溝　55　　土坑　52

遺構の概要を以下述べてゆく。

竪穴住居跡は、台地の全域に分布をしているが、分布の状態には疎密がある。西側台地では南端と東端に密集して検出されている。住居跡の時期と分布については「まとめ」の項をみられたい。15期に分類され、時期により立地の様子も異なることがわかる。出土遺物の編年ともあわせ、台地での集落の変遷を明らかにできたものと考えている。分布図については東側台地も含めて図示し、芳賀東部団地遺跡での土師器を使用していた時代の竪穴住居跡の全てについて分類を行なった。

掘立柱建物跡は、竪穴住居跡と同様に分布の疎密がある。特に密集しているところは、西側台地の南端と東側の北端と中央部である。いずれも溝が多く走っているところであり、関連が考えられる。また、竪穴住居跡の時代別の変遷をたどると、掘立柱建物跡群と対応する位置に分布する竪穴住居跡群があり、密接な関係が考えられる。

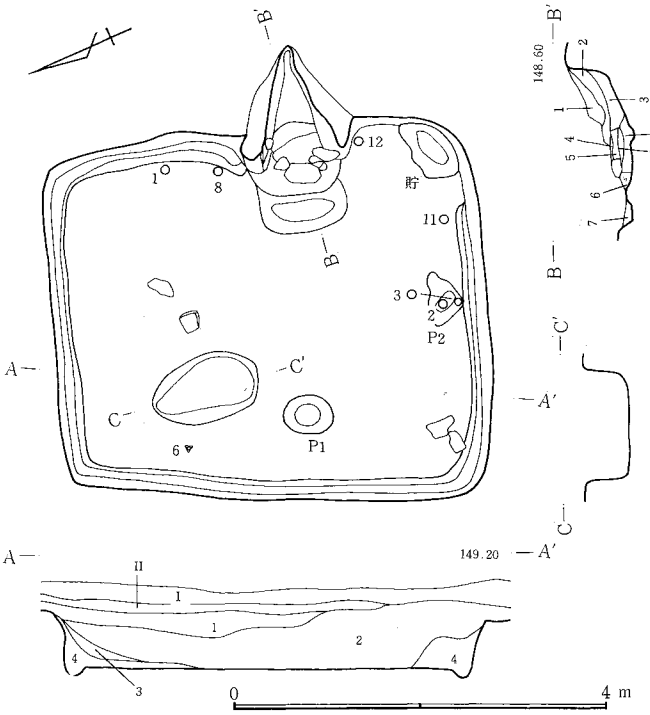
鍛冶址は3基検出されている。1基は小さな長円形の掘り方に炉を1基もつ。1基は多数の炉が存在したと考えられるもので作業所的張り出しをもつ。1基は2つの主要な部分から成り、製練址とも考えられる。

溝は区画設定を目的としたものが多くみられる。直線的に走り、直角に折れていたりするものが多い。集落とも係わりをもつものと考えられる。第1巻の溝とも同様の傾向がみられる。

土坑は、形態・性格ともにさまざまであるが、炭化物・焼土を多く含む長方形で浅く平坦な底をもつものが約20基あった。底部に焼けのみられるものもあり、墓壙の可能性がある。中・近世の土坑については次期刊行の第3巻を参照されたい。（井野）

1　竪穴式住居跡

H１号住居跡（図－２、３、４　図版－１、59　表－８）（Ⅶ期）

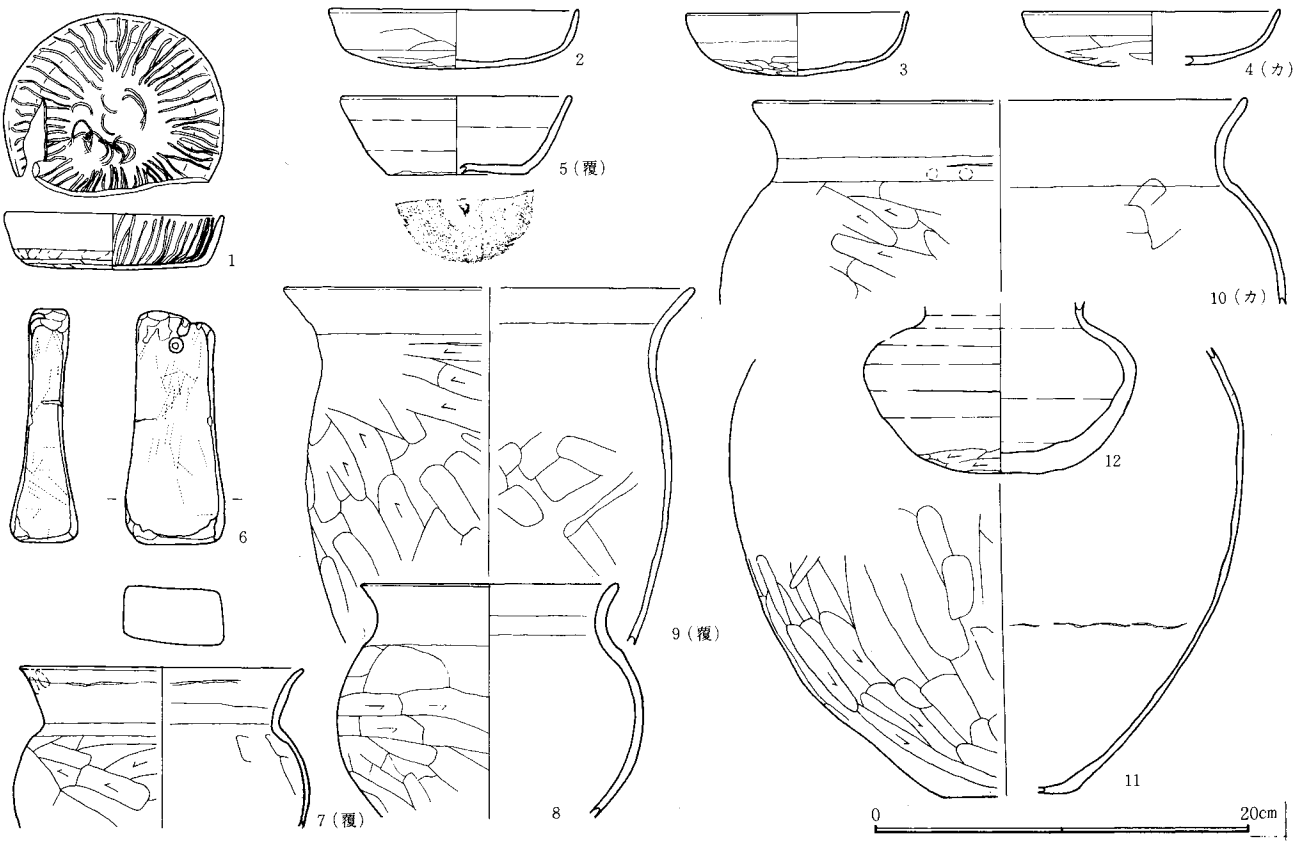


1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石を少量含む。2．黒味がかった褐色土。3．暗褐色土。4．暗褐色土。ロームブロックを含む。　**カマド**　1．ローム層(二次堆積)。焼土を少量含む。2．うす赤色焼土。3．黒色土。(灰)4．褐色土。焼土を含む。5．焼土。6．灰。焼土を含む。7．灰。焼土、ロームブロックを含む。

図－２　Ｈ－１号住居跡

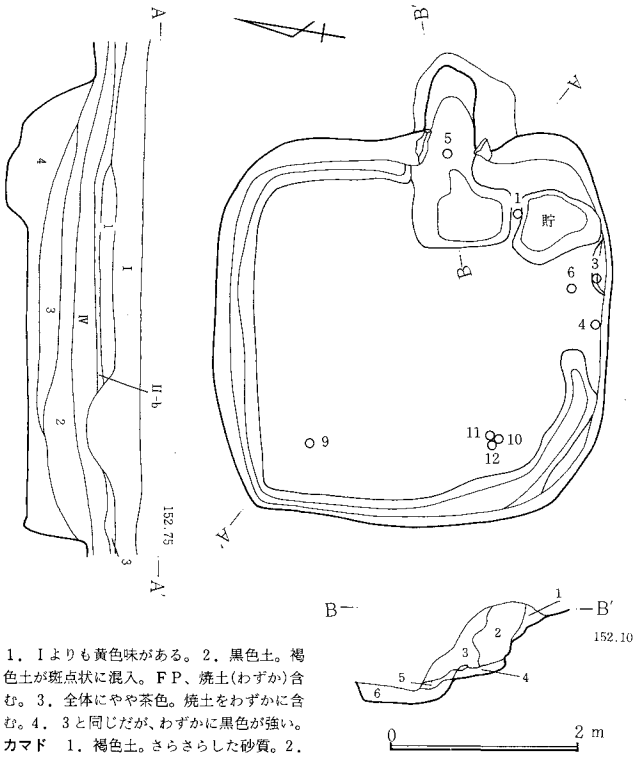
位置　西台地南の浅い谷地に近い、Ｅ２に所在し、北に掘立柱建物跡がある。　**形状**　南北4.4m、東西3.7mの長方形であるが、西側より東側が35cm、北側より南側の方が65cm長く、その分北西隅が鈍角になり南西隅が鋭角になっている。長軸方向はＮ－17.5°－Ｅ、面積16.2㎡、壁は北西が高く、南東が低く、最高92cm、最低65cmである。周溝は東壁カマド南の貯蔵穴のある部分を除いて全周しており、幅22cm前後、深さ８cmである。床面は水平面をなし、堅緻であるが、床面の下には径110×70cm、深さ60cmの楕円形の穴をはじめとして、多くの凹みがある。

ピット　２つある。P_1はカマドに対峙する西壁近くにあり、径52×32cm、深さ19cmである。P_2は南壁下中央にあり、径50×32cmで、いずれも性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄りにあり、東壁に対して、カマド中軸線が直交している。全長143cm、燃焼部長60cm、袖部内幅84cmである。焚き口部は両袖の部分に各１石があり、上端横材の石が３石前方へずり落ちている。両袖の奥は壁がよく焼けており、このあたりでの傾斜は24°で、その先で85°の角度で立ちあがり、さらに細い煙道へと続いている。壁外掘り込みは98cm、住居床面とカマド燃焼部とのレベル差は燃焼部が３cm低く、また、カマド前の灰だめ穴は床面より18cmの深さである。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、楕円形に近い不定形で、79×41cm、深さ14cmである　**遺物**　ピット内から土師器坏（２）が出土している。他に須恵器では短頸壺（12）、土師器では坏（１・３・４）、甕（７・９・10・11）、小形甕（８）、と砥石（６）が出土している。　（相澤）



図－３　Ｈ－１号住居跡出土遺物

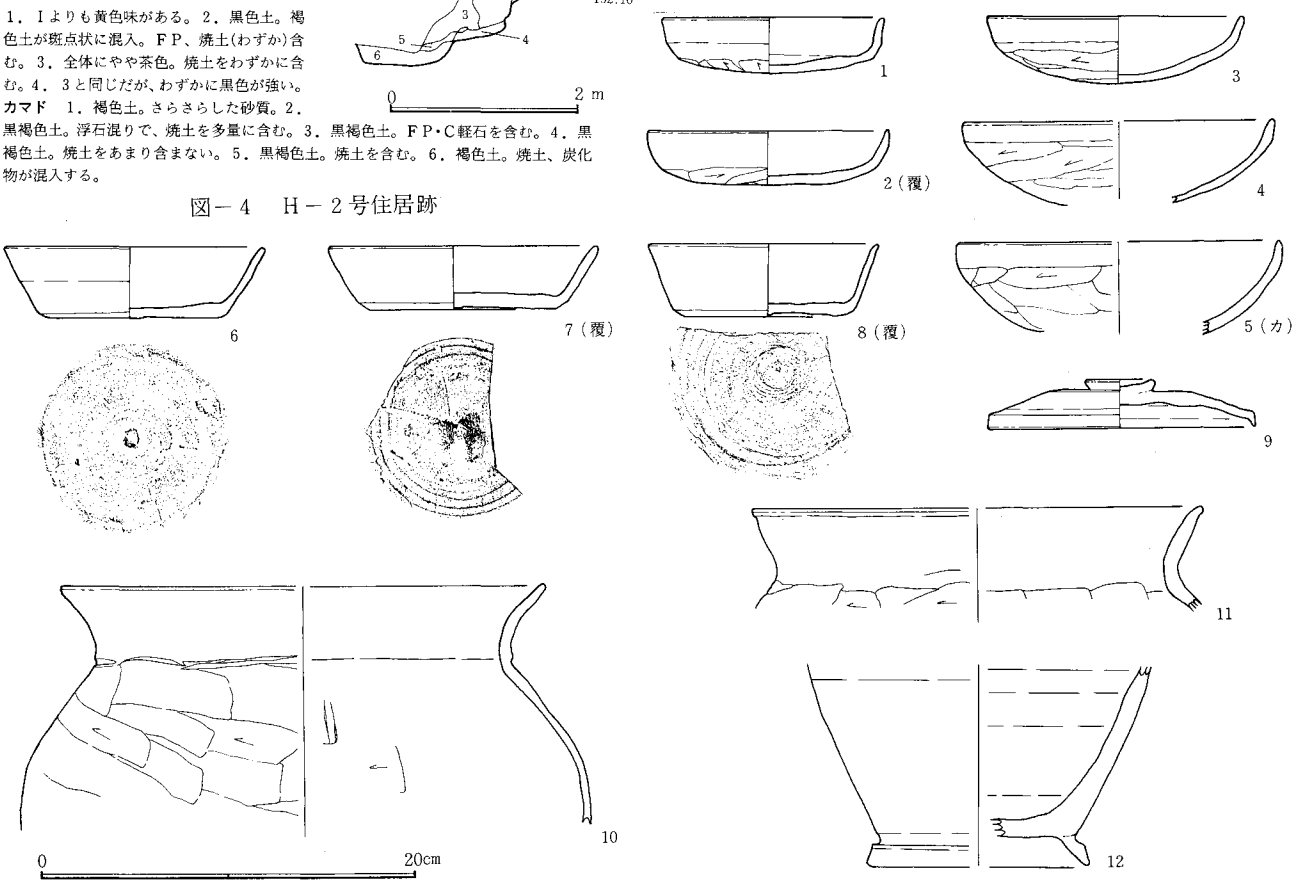
Ｈ２号住居跡（図－４、５　図版－１、59　表－９）(VI期)



1．Ⅰよりも黄色味がある。2．黒色土。褐色土が斑点状に混入。ＦＰ、焼土(わずか)含む。3．全体にやや茶色。焼土をわずかに含む。4．3と同じだが、わずかに黒色が強い。
カマド　1．褐色土。さらさらした砂質。2．黒褐色土。浮石混りで、焼土を多量に含む。3．黒褐色土。ＦＰ･Ｃ軽石を含む。4．黒褐色土。焼土をあまり含まない。5．黒褐色土。焼土を含む。6．褐色土。焼土、炭化物が混入する。

図－４　Ｈ－２号住居跡

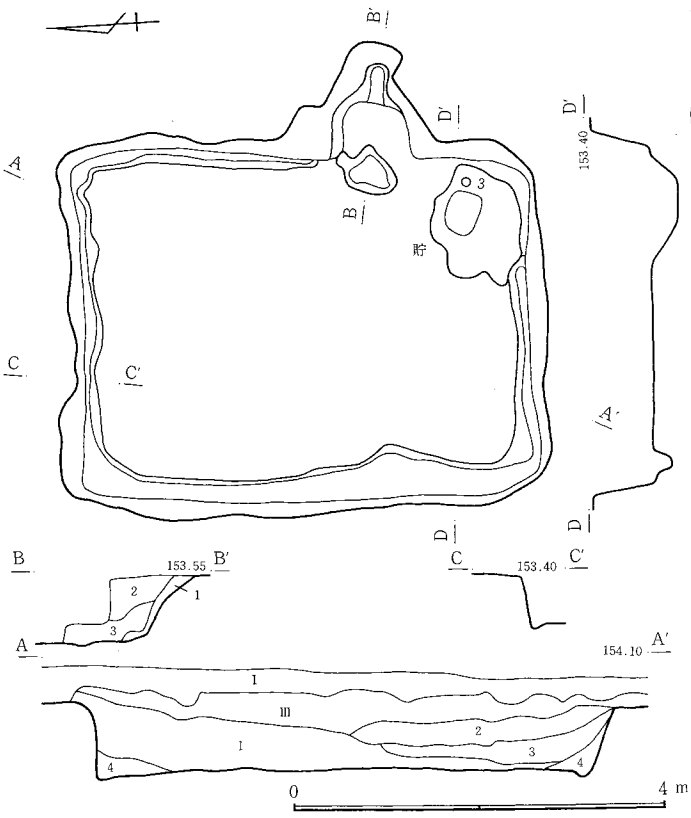
位置　調査区の西台地上、Ｂ４に位置する。西には南北に走る溝があり、単独住居である。　**形状**　平面は正方形で3.9×3.7mの大きさで、壁現高は43～72cmと深い。周溝は西、北壁全部と東壁北半分、南壁半分に認められ、幅は４～15cm、深さ３～４cmである。長軸方向はＮ－10°－Ｗで、面積は11.0㎡である。　**床面**　踏み固め部分、貼床は不明である。　**ピット**　認められない。　**カマド**　東壁の南寄りに位置し、壁外に118cm掘り込みを入れつくられている。全長は118cm、袖部内幅70cm、燃焼部長70cmである。構築材として左袖に１個、右袖に１個石材が認められる。燃焼部のレベルは床面から－23cmで、壁への掘り込み角度は51°である。　**貯蔵穴**　南壁の南東寄りに位置し平面は三角形に近い不定形で、95×81cm、深さ26cmの大きさである。　**遺物**　須恵器蓋（９）が北西隅近くの床面から、須恵器の長頸壺胴部下半（12）が南西隅近くの床面から＋27cmの位置より出土し、貯蔵穴の西から土師器坏（４・３）・須恵器坏（６）が、同じく貯蔵穴の北から土師器坏（１）が出土している。　**テフラ**　覆土のⅡ－ａ層にＢ軽石が認められたが、純か否かは不明である。　（中村）



図－５　Ｈ－２号住居跡出土遺物

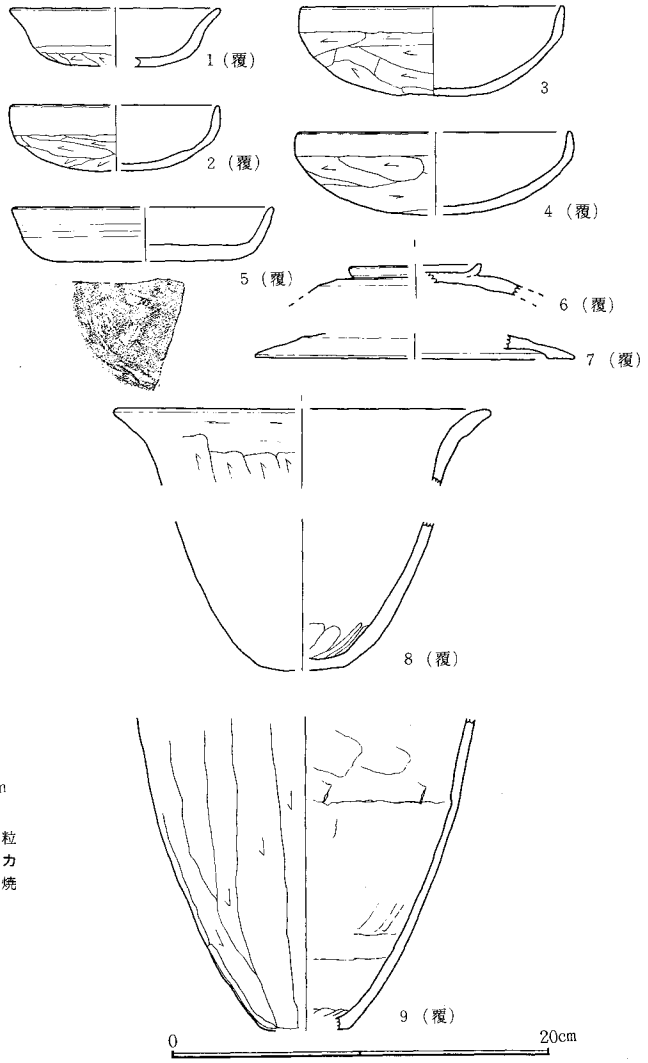
Ｈ３号住居跡（図－６、７　図版－１、59　表－10）(Ⅴ期)

位置　ＢＣ６に所在する。西台地の中央からやや東に寄った地点に位置し、この付近より東の縁にかけて住居が密集する。**形状**　南北に長軸をとる長方形で南北4.7mで東西3.8m、長軸方向をＮ－3.5°－Ｅにとる。面積17.8㎡。壁は直に掘られ、現状で壁高55～65cmを測る。壁に沿って上幅10～60cm前後の周溝が巡る。　**ピット**　柱穴とみられるピットは存在しない。　**カマド**　東壁南寄りにある。壁外に造り出しており、全長126cm、袖部内幅74cmを測る。煙道部は比較的急傾斜を持っている。石等は使用していない。　**貯蔵穴**　床面南東隅に不定長方形の貯蔵穴が掘られている。規模は137×89cm、深さ30cmを測る。　**遺物**　貯蔵穴内より丸底を呈する土師器坏（３）が、また、埋土中より同種の土師器坏（１・２・４）、平底を呈する須恵器坏（５）が出土している。この他土師器甕（８・９）、須恵器蓋（６・７）が出土している。　（富澤）



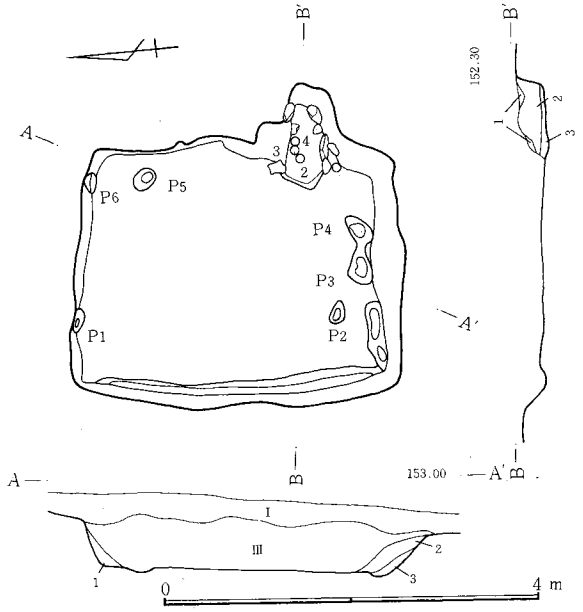
1．黒褐色土。Ⅲよりやや褐。ＦＰ・Ｃ、ロームブロック混入。2．黒褐色土。Ⅲよりやや褐色。ローム粒を含む。3．黒褐色土。Ⅲよりも黒味が強い。4．黒褐色土。しまりなし。黒色土とロームの混合土。　**カマド**　1．暗褐色土。しまりなし。ローム・黒褐色土が混入。2．黒褐色土。浮石、ロームブロック、焼土塊を含む。3．黒褐色土。粘性あり。焼土、灰がブロック状に混入。

図－6　Ｈ－3号住居跡



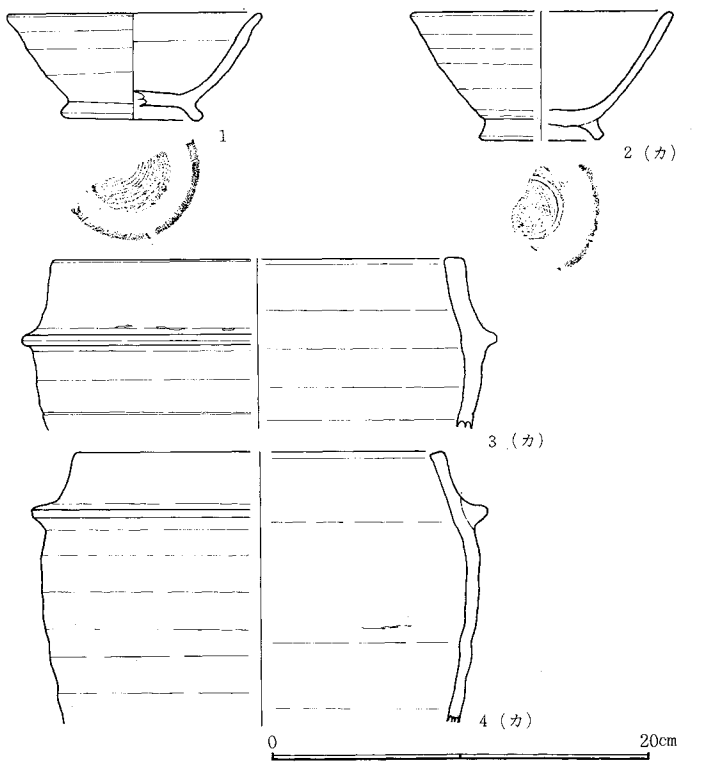
図－7　Ｈ－3号住居跡出土遺物

Ｈ4号住居跡（図―8、9　図版―1、60　表―11）（ⅩⅢ期）



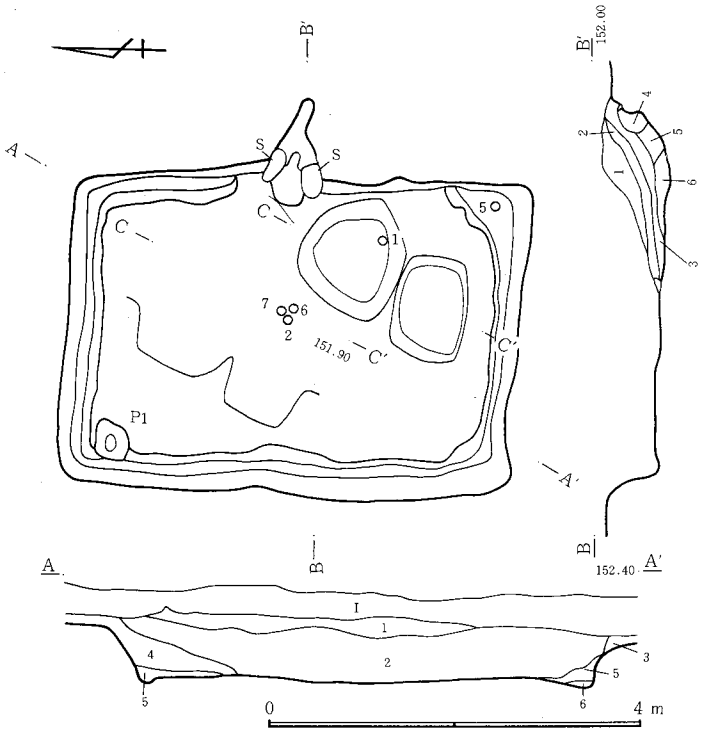
1．黒褐色土。さらさらしてしまりなし。2．黒褐色土。黒味が強い。C軽石を主とした浮石を含む。3．黒褐色土。粘性なし。　**カマド**　1．暗褐色土。さらさらしている。焼土やや混入。2．暗褐色土。さらさらして均質な土。焼土わずか混入。3．暗褐色土。焼土が混入。

図－8　Ｈ－4号住居跡



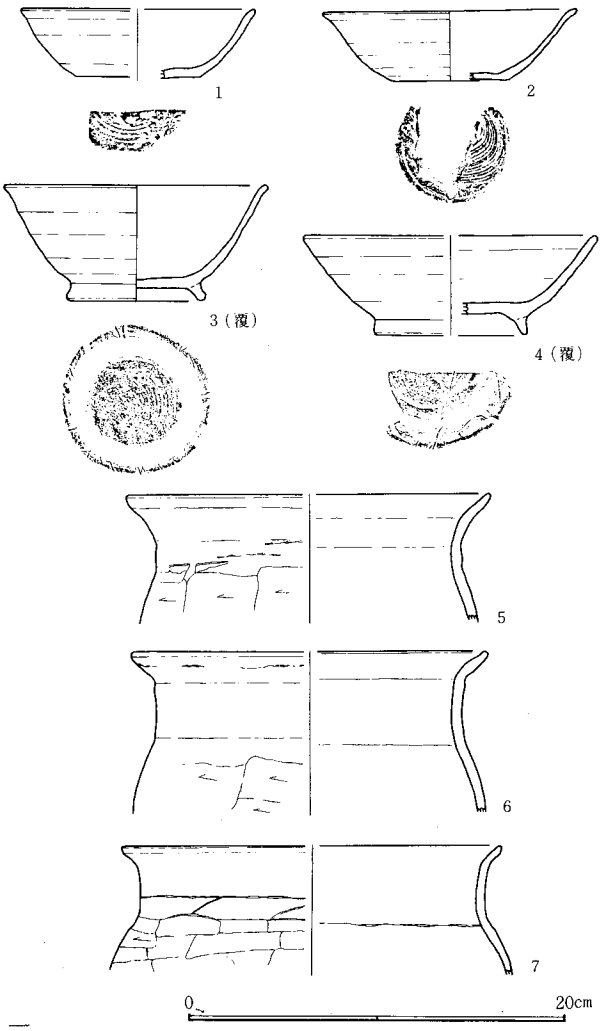
図－9　Ｈ－4号住居跡出土遺物

位置　G３・４に所在し、南には掘立柱建物跡を中心とする一群があり、これより北には竪穴住居跡が点在する。　**形状**　南北3.7m、東西2.7mの長方形であるが、西壁は外側へ彎曲し、東壁は西壁より35cm短い。長軸方向はＮ－４°－Ｅ、面積は7.9㎡と小形である。壁は全体に緩傾斜で、地形に合せて北西が高く、南東が低くなっており、最高39cm、最低20cmである。西壁全体から南壁にかけて、幅５～10cm、深さ４cmの周溝がある。　**ピット**　ピットは６つある。P_1・P_6は北壁直下にあり、26×10cmと22×12cmの大きさで柱穴のようにも見える。しかし、これに対するピットは見られず、P_2～P_5はいずれも深さ５cm程度である。　**カマド**　全長115cm、燃焼部長66cm、袖部内幅48cmで、焚き口の部分には左右各１石が残り、右壁では燃焼部の２石から煙道部１石まで、ほとんど石が連なっている。煙道部の近くでは左壁にも１石がある。壁外への掘り込みは65cmあり、壁への掘り込み角度は76°である。火床の部分径30cmはよく焼けている。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　床面より土師質須恵器の椀（１）が出土し、カマド内より須恵器の羽釜（３・４）と土師質須恵器の椀（２）が出土している。　**テフラ**　住居跡を直接埋めている土層にＦＰの混入が見られる。　（相澤）



1．黒色土。主にＣ軽石混入。２．黒褐色土。ＦＰ・Ｃわずか混入。３．黒褐色土。４．黒褐色土。軽石をごくわずか含む。５．黒褐色土。ローム混入。６．ローム、黒色土が混入。　**カマド**　１．黒色土。ＦＰを含む。２．黄褐色土。黒色土にローム、焼土が点在。３．黒色土。粘性あり。ローム、焼土が少量点在。浮石わずかに含む。４．赤褐色土。黄褐色土に焼土ブロック混入。５．黒色土。粘性あり。灰を少量含む。６．黒色土。粘性あり。焼土、灰を含む。

図－10　Ｈ－５号



図－11　Ｈ－５号住居跡出土遺物

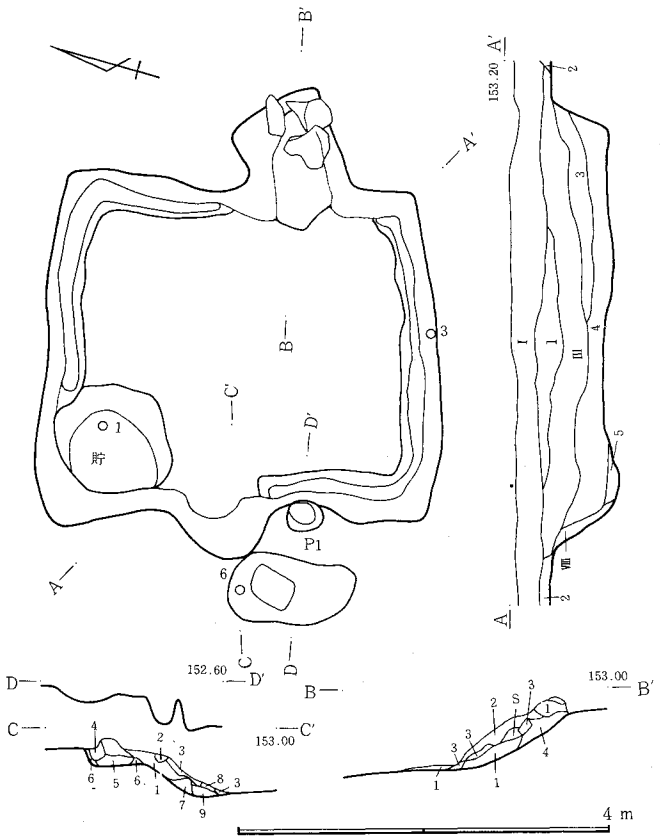
Ｈ５号住居跡（図－10、11　図版－１、60　表－12）（Ｘ期）

位置　西台地上のＨ３に所在している。北にＨ４号住居跡を臨み、南30mの位置には東西に走る溝がある。　**形状**　平面長方形で4.5×3.2mの大きさで南北に長く、壁現高は46～56cmである。周溝は北壁・西壁・南壁の全部に、東壁は北半分に認められる。幅は10cmで深さは８cm前後である。長軸方向はＮ－３°－Ｗで、面積は13.9㎡である。　**床面**　踏み固め部分は不明である。貼床については調査時には不明であったが、住居内南東４分の１の範囲に床下土坑が２基認められることから、あったものと推定される。　**ピット**　北西隅に１個認められ、大きさは40×34cm、深さ９cmと浅いものである。　**カマド**　東壁の中央で、壁の外側へ90cm掘り込みつくられている。全長98cm、袖部内幅38cm、燃焼部幅41cmである。構築材として左袖に１個、右袖に１個の石材が認められた。燃焼部のレベルは床面から－８cmで、壁への掘り込み角度は38°であった。　**貯蔵穴**　認められない。　**遺物**　カマド右手の土坑内より須恵器坏（１）、床面中央からは土師器甕（６・７）、須恵器坏（２）が出土している。また、床面南東隅からは土師器甕（５）が出土、埋土中より須恵器椀（３・４）が出土している。　**テフラ**　床面から53cm高位の１層中にＣ軽石が多く混入している。　（中村）

Ｈ６号住居跡（図－12、13　図版－１、60　表－13）（Ⅸ期）

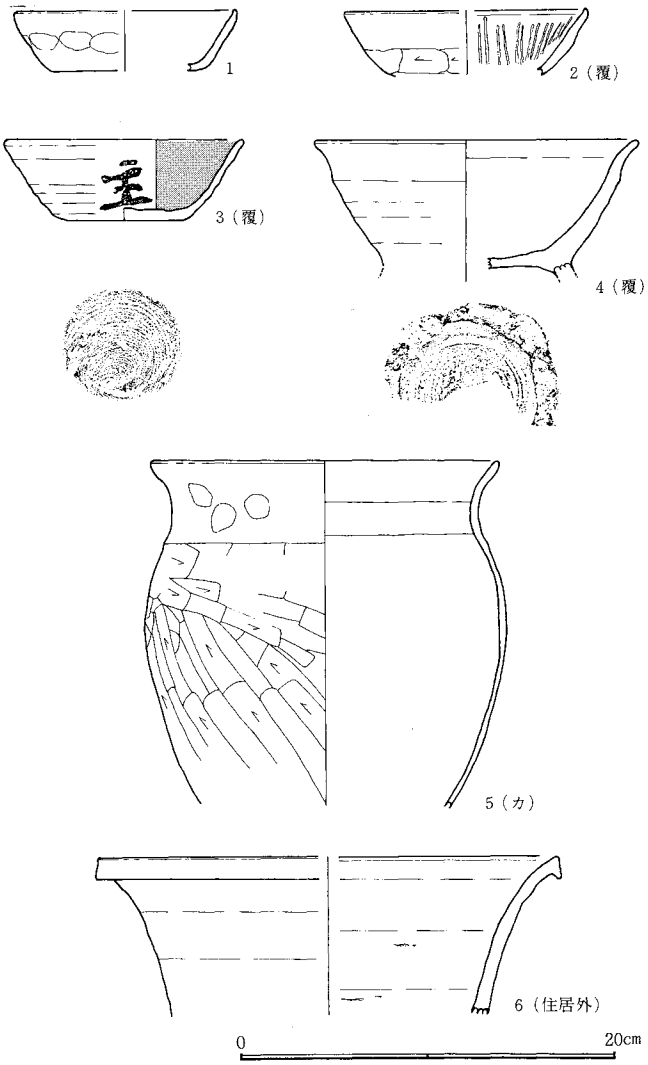
位置　西台地上のＨ３・４に所在している。北にＨ７号住居跡を、東にＨ４号住居跡を、南東にＨ５号住居跡を臨む。　**形状**　平面長方形で3.8×3.4mの大きさで南北に長く、壁現高は47～57cmである。周溝はカマドと貯蔵穴のある部分を除き、幅12cm、深さ９cm前後のものが認められる。長軸方向はＮ－16°－Ｗで、面積は12.2㎡である。　**床面**　踏み固め部分および貼床については不明である。　**ピット**　西壁の住居外で、カマドの南にある。壁に接して38×34cm、深さ43cmのピットである。底は住居跡床面のレベルとほぼ同じである。　**カマド**　２か所で確認されている。東壁中央からやや南寄りのものは、壁の外側へ全長140cm、

袖部内幅62cm、燃焼部長90cmの規模である。構築材として燃焼部右壁に1個、煙道部に2個の石が使用されている。燃焼部は床面と同レベル、壁への掘り込み角度は31°である。西壁の中央にあるものは、壁の外側へ84cm、袖部内幅64cm、燃焼部40cmの規模である。燃焼部は床面より4cm低く、壁への掘り込み角度は34°である。 **貯蔵穴** 北西隅にあり、平面は不定な円形をしている。規模は116×116×20cmで、位置的には他の住居跡と異なる。底部から坏が出土している。 **遺物** 貯蔵穴の底部から土師器の坏（1）が出土している。住居跡西ピット内から須恵器甕の口縁部（6）が出土。南壁際から墨書がある須恵器坏（3）、須恵器高台付椀（4）、土師器甕（5）などが出土している。 （中村）



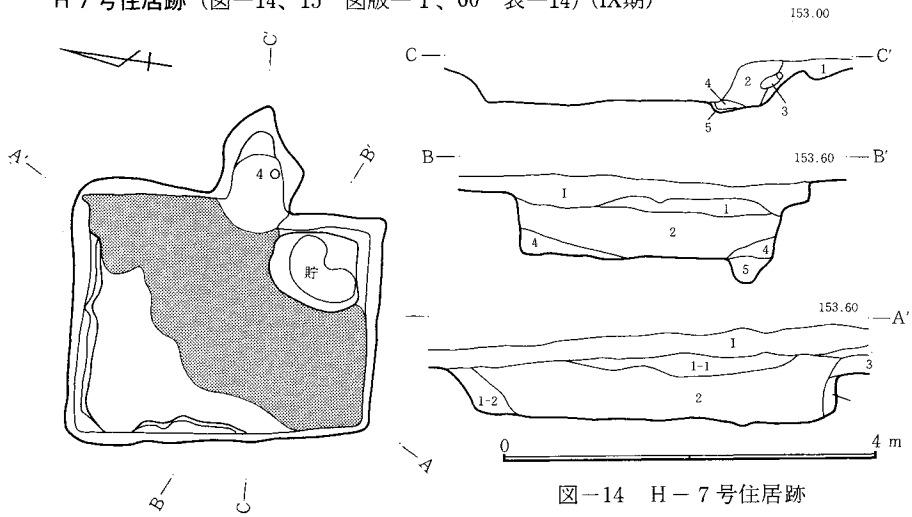
1．黒褐色土。FP・C軽石を多く含む。2．黒褐色土。上部に浮石を含む。3．黒褐色土。ロームブロック混入。4．黒褐色土。浮石を含まない。5．黒色土とロームの混合土。粘性なし。 **東カマド** 1．焼土中に褐色土が混入。2．黒褐色土。粘土がブロック状に混入。3．黒褐色土。焼土が混入。4．黒褐色土。しまりなし。 **西カマド** 1．焼土。暗褐色土が少量混入。2．焼土と暗褐色土の混合土。ロームブロックが混入。3．少量の焼土・黒色土・暗褐色土の混合土。浮石も含む。4．黒色土と暗褐色土の混合土。5．黒色土。FP・Cを含む。6．ロームと黒色土の混合土。7．上面に白色粘土。8．焼土・灰の混合土。9．暗褐色土。均質。しまりなし。

図－12 H－6号住居跡



図－13 H－6号住居跡出土遺物

H7号住居跡（図—14、15 図版—1、60 表—14）（IX期）



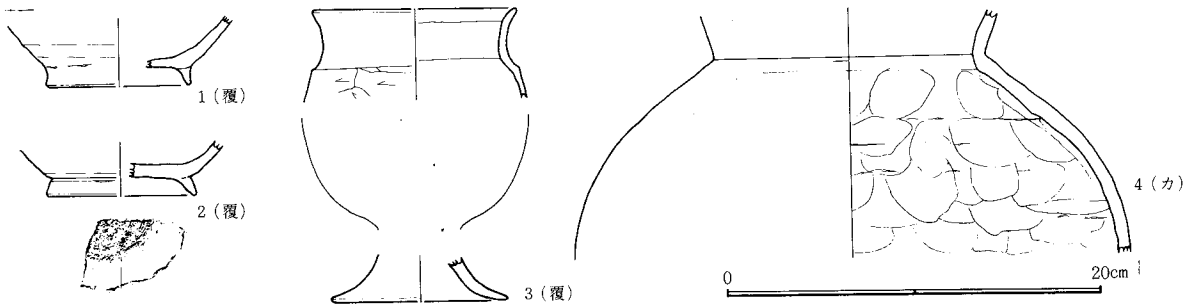
1．黒色土。1-1．黒褐色土。C軽石混入。1-2．黒褐色土。2より黒味が強い。2．黒褐色土。浮石混入。3．黒褐色土。4．黒色土。5．黒褐色土、ローム混入。 **カマド** 1．ロームブロックと褐色土の混合土。2．黒褐色土。浮石を含む。3．焼土。褐色土が混入する。4．褐色土と焼土の混合土。5．ロームブロック。褐色土が混入する。

図－14 H－7号住居跡

位置 西台地の中央やや南のH4に所在する。周囲にH4～11号住居跡が存在する。 **形状** 長軸方向を南北にとる長方形で、南北3.0m、東西2.5m。面積7.6m²を測る。長軸方向N—55°—W。壁はほぼ直に立ち、現状で壁高48～62cmである。周溝を北壁と西壁北半分に巡らす。幅10～18cmで、深さ1～8cm。 **床面** 北西隅を除く範囲に貼り床がみられる。

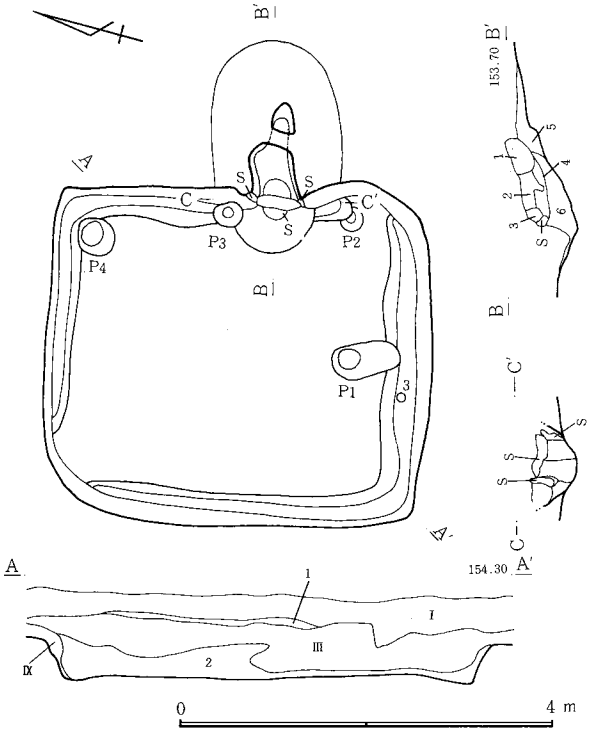
ピット 床面下は凹凸が激しいが、柱穴とみられるピットは存在しない。 **カマド** 東壁中央やや南寄りの位置で、壁外に造り出されている。全長106cm、袖部内幅62cm、燃焼部長56cmで、煙道部は40°の傾斜を持

つ。石等は存在しない。燃焼部は床面にくらべて9cm低い。　**貯蔵穴**　南東隅に不定円形の貯蔵穴がある。床面上で92×82cm、深さ30cmを測る。底面に向けてすり鉢状の壁を作る。　**遺物**　カマド中より須恵器甕（4）が出土し、埋土中より須恵器高台付埦（1・2）、脚付甕（3）が出土している。　（富澤）



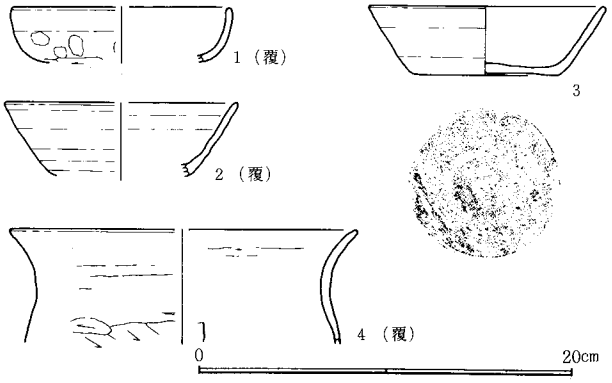
図－15　H－7号住居跡出土遺物

H8号住居跡（図—16、17　図版—1、60　表—15）（IX期）



1．黒褐色土。耕作土・FP・C軽石を含む。2．黒褐色土。ローム混りで、C軽石等を多少含む。　**カマド**　1．黒褐色土。焼土を含む。2．黒褐色土。焼土、ロームを含む。3．黒褐色土。ロームを多量に含む。4．黒褐色土。粘性あり。ローム、焼土を含む。5．黄褐色土。ロームを含む。6．黒褐色土。粒子が粗い。焼土を含む。

図－16　H－8号住居跡

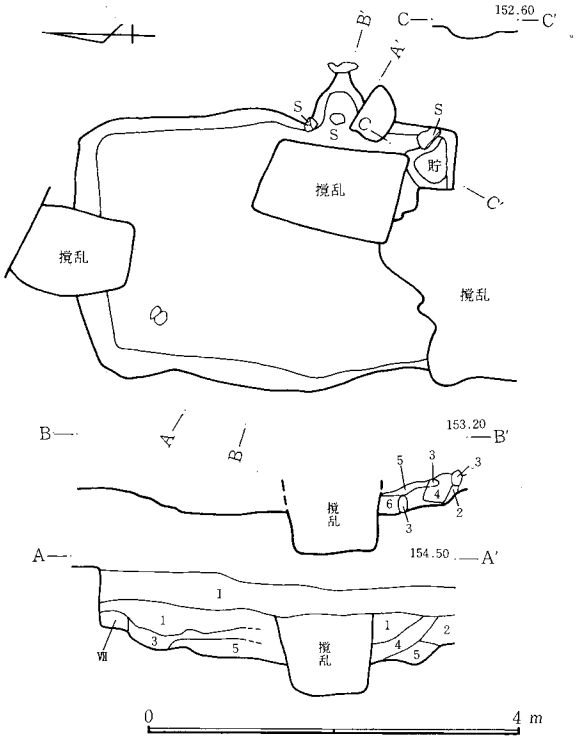


図－17　H－8号住居跡出土遺物

位置　西台地の中央やや南、G5に所在し、周囲には同じような竪穴住居跡が点在している。　**形状**　南北3.8m、東西3.1mの長方形であるが、北西隅と南西隅が少し鋭角になり、西壁と南壁が外側へわずか彎曲し、全体としてやや歪んだ形である。長軸方向はN—12°—W、面積は12.4m²で、壁はしっかりしており、壁高は35～40cmである。周溝は北西隅を除き、ほぼ全周していて幅は7～22cm、深さは6～13cmである。　**ピット**　P_1は南壁中央に近くあり、中心径は32cm、深さは21cmである。P_2、P_3はほぼ同じ大きさでカマドの両脇にあり、P_4は北東隅に位置し、深さは7cmである。　**カマド**　東壁南寄りにあり、全長194cm、燃焼部長88cm、袖部内幅69cm、壁外掘り込みは139cm、壁への掘り込み角度は29°であり、燃焼部は住居床面より10cm低くなっている。住居跡の大きさに比較してカマドは大きく、残存状態もよい。焚き口部は左右両袖と冠材の石があり、門構えが残っている。燃焼部上の土器設置場所はきちんと区画され、煙道部と区切られた状態であった。　**遺物**　須恵器の坏（3）が周溝内より出土している。　**テフラ**　C軽石とFPを含む黒褐色土が住居跡を埋めている。　（相澤）

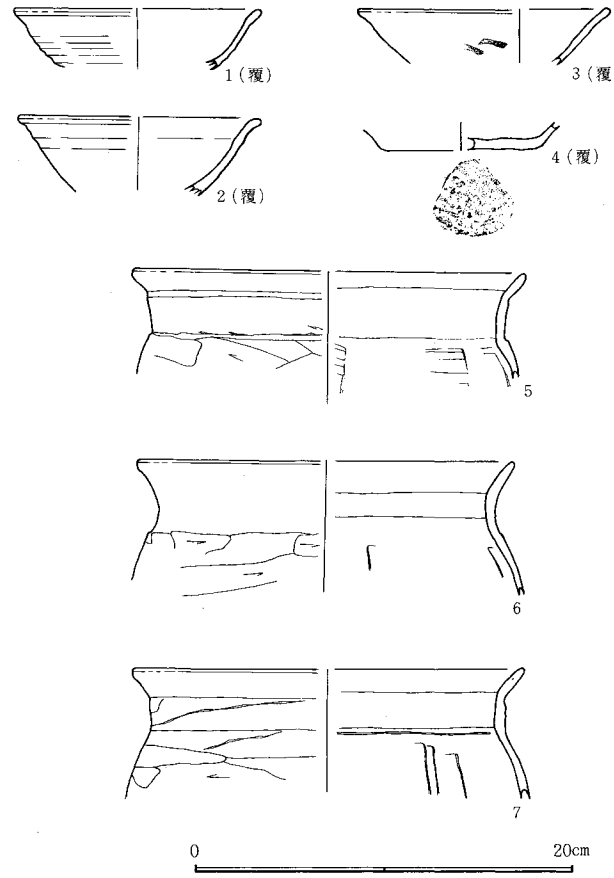
H9号住居跡（図—18、19　図版—2、61　表—16）（X期）

位置　西台地中央部のやや南のF—5に位置する。周辺には竪穴住居跡が散在している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、規模は南北3.6m、東西2.6mである。攪乱により破壊されているところがあり、北壁の一部、カマド前、南壁の大部分は失なわれている。長軸方向は、N—1.5°—Eで面積は9.2m²(推定)、壁高は5～22cmである。周溝はない。　**ピット**　なし。　**カマド**　住居東壁南寄りにある。構築材が左袖に1石と煙道部に1石、支石が1石ある。全長74cmで、燃焼部長44cm、袖部内幅32cm、壁への掘り込み角度55°、壁外掘り込み74cmである。燃焼部は住居床面にくらべて2cm低い。　**貯蔵穴**　南東壁下。三角形に近い形で、規模は58×46cmで深さは6cmである。　**遺物**　埋土中より、須恵器坏（1・2・3・4）が出土。その他土師器甕（5・6・7）が出土している。　**テフラ**　II—b層はB軽石純層である。床面からは46cmを計る。　（井野）



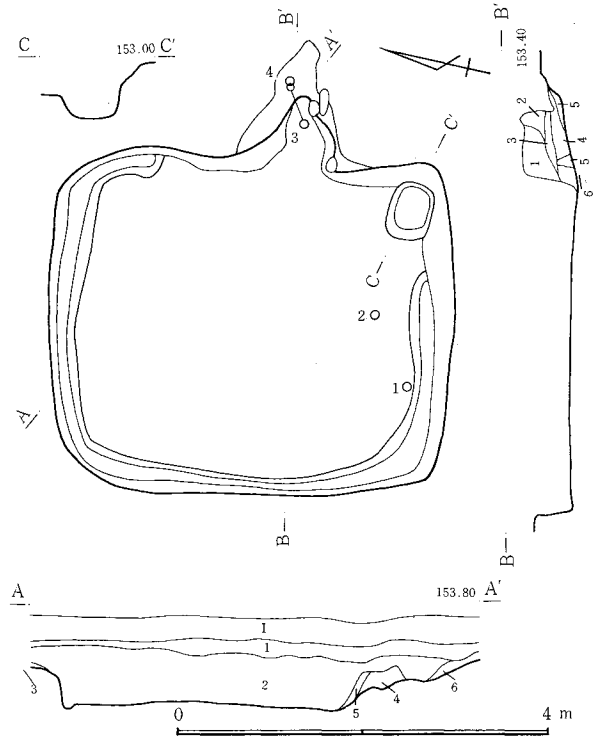
1．黒色土。浮石を含む。2．黒色土。3．黒色土とロームの混合土。4．黒褐色土。焼土、ロームを多量に含む。5．黒褐色土とロームの混合土。　**カマド**　1．黒色土。軽石を含む。2．黒色土。軽石を含む。ロームブロック、焼土、炭化物をわずかに含む。3．焼土塊。4．焼土。栗色土を含む。5．軽石を含む黒色土と栗色土の混合土。6．5に炭化物、焼土を含む。

図－18　H－9号住居跡



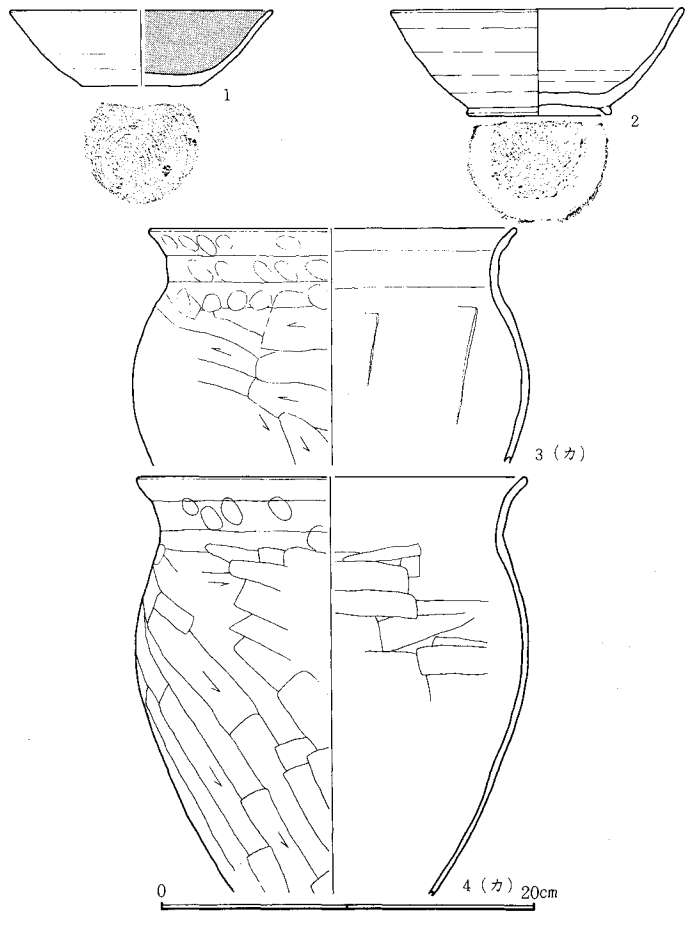
図－19　H－9号住居跡出土遺物

H10号住居跡（図－20、21　図版－2、61　表－17）（X期）



1．黒色土。浮石を含む。2．黒色土と褐色土の混合土。浮石を含む。3．黒褐色土。4．黒褐色土。ロームを多く含む。5．黒褐色土。ロームを少量含む。6．黒褐色土。焼土混入。　**カマド**　1．黒褐色土。浮石、焼土を少量含む。2．ロームと暗褐色土の混合土。しまっている。3．暗褐色土と黒色土の混合土。しまりなし。4．ローム・焼土・暗褐色土の混合土。5．暗褐色土。しまりなし。6．焼土と暗褐色土の混合土。

図－20　H－10号住居跡

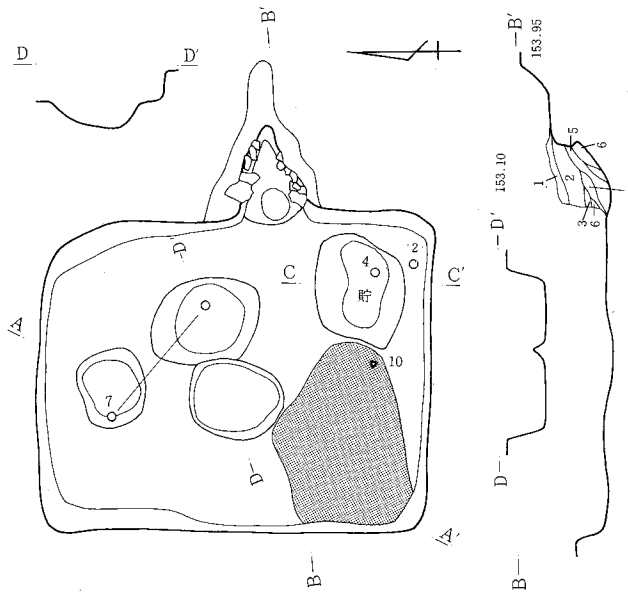


図－21　H－10号住居跡出土遺物

位置　G４に所在し、点在する小形竪穴住居跡の南端に近い位置である。　**形状**　南北4.0m、東西3.8mの長方形で、北東隅、南西隅がそれぞれ鋭角をなし、西壁と南壁が外側へ彎曲している。長軸方向はN－10.5°－W、面積は12.9㎡で、壁は北西方面が高く43cm、南東方面が低く23cmである。周溝は東壁のカマド付近を除いて全周し、幅６～18cm、深さ３～11cmである。　**ピット**　なし。　**カマド**　全体に残存状態が悪い。全長90cm、燃焼部長78cm、袖部内幅58cm、壁外掘り込み72cm、壁への掘り込み角度は18°である。燃焼部中央に支石があり、角材で、下端径18cm、上部径５cm、高さ17cmが立っていた。この他、右袖部と煙道近くの右側にそれぞれ石材が据えられている。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、長方形で、径62×46cm、深さ25cmである。　**遺物**　土師器の甕（３・４）がカマド内から出土し、須恵器の埦（２）と土師器の坏（１）が床面上５cmと７cmからそれぞれ出土している。　**テフラ**　火山灰を含む黒褐色土が住居を埋めている。　（相澤）

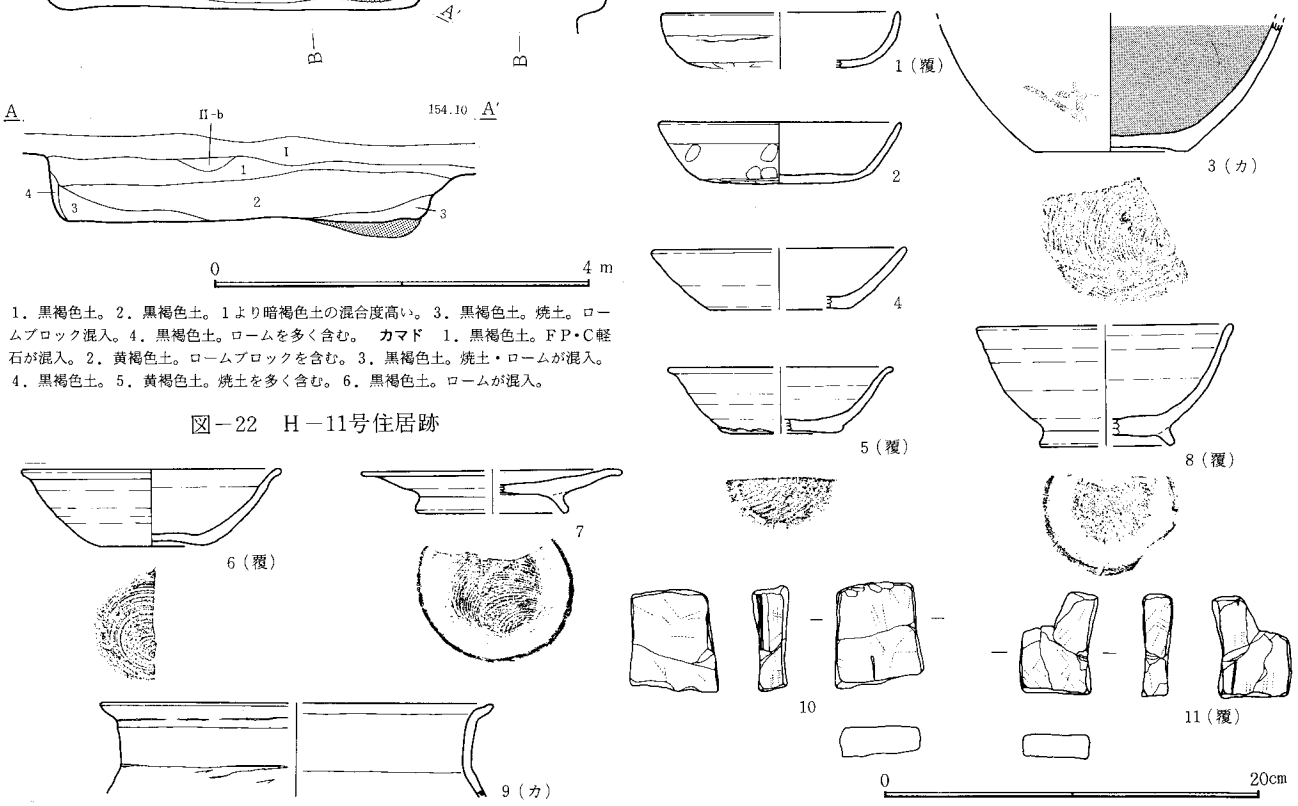
H11号住居跡（図－22、23　図版－２、61　表－18）（X期）

位置　調査地域の西台地上のほぼ中央の南寄り、H・G５に所在する。　**形状**　平面長方形で、4.0m×3.2mの大きさで南北に長く、壁現高は33～52cmである。長軸方向はN－２°－Eで、面積は12.4㎡である。　**床面**　踏み固め部分は不明である。床下土坑が中央部から北壁にかけて３基みられ、また、南西隅にかけて若干の凹みには貼り床が認められる。　**ピット**　柱穴と推定されるものは認められない。　**カマド**　東壁中央からわずか南寄りで、火床は壁外に位置している。全長178cm、袖部内幅68cm、燃焼部長70cm、壁への掘り込み角度40°、床面とのレベルは－６cmである。構築材として石材が燃焼部に計７個、煙道部に計６個使用されていた。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面は楕円形に近い不定長方形で、104×102×23cmの大きさである。　**遺物**　カマド内埋土から土師器甕（９）と墨書のある坏（３）が、床面から砥石（10）などが出土している。　**テフラ**　覆土３層に浮石の混入が認められる。　（中村）



1．黒褐色土。２．黒褐色土。１より暗褐色土の混合度高い。３．黒褐色土。焼土。ロームブロック混入。４．黒褐色土。ロームを多く含む。　**カマド**　１．黒褐色土。FP・C軽石が混入。２．黄褐色土。ロームブロックを含む。３．黒褐色土。焼土・ロームが混入。４．黒褐色土。５．黄褐色土。焼土を多く含む。６．黒褐色土。ロームが混入。

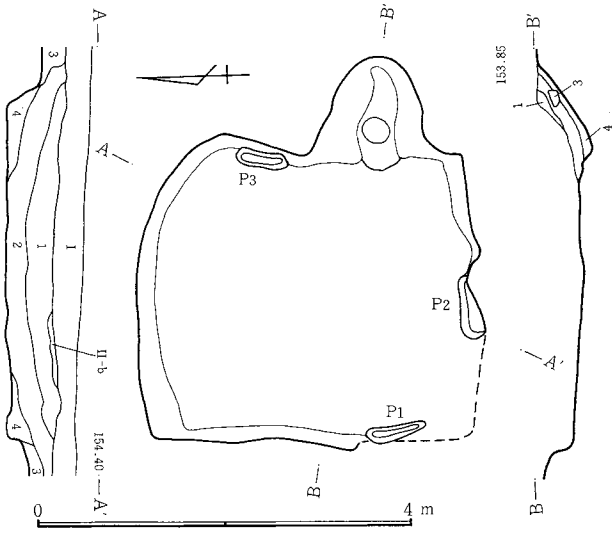
図－22　H－11号住居跡



図－23　H－11号住居跡出土遺物

H12号住居跡（図－24）（IX期）

位置　西台地中央部のF６に所在し、点在する小竪穴住居跡の北端に近く位置している。南にはJ３号竪穴住居跡が隣接している。　**形状**　南北3.4m、東西2.9mで、数値をみると長方形であるが、実際は南北の各壁が外側へ大きく彎曲しているのに対して、東西の各壁が内側へやや彎曲ぎみであるためで、むしろ正方形を基本としている。また、南東隅と北西隅が直角に近いのに対し、北東隅は隅丸であり、南西隅は明確な壁を確認できなかった。長軸方向はN－３°－W、面積は9.8㎡である。壁は北側を中心としてはきちんとしているが、南側では明らかでなく、壁高は最高45cmである。　**ピット**　P_1～P_3はいずれも長方形で壁下に



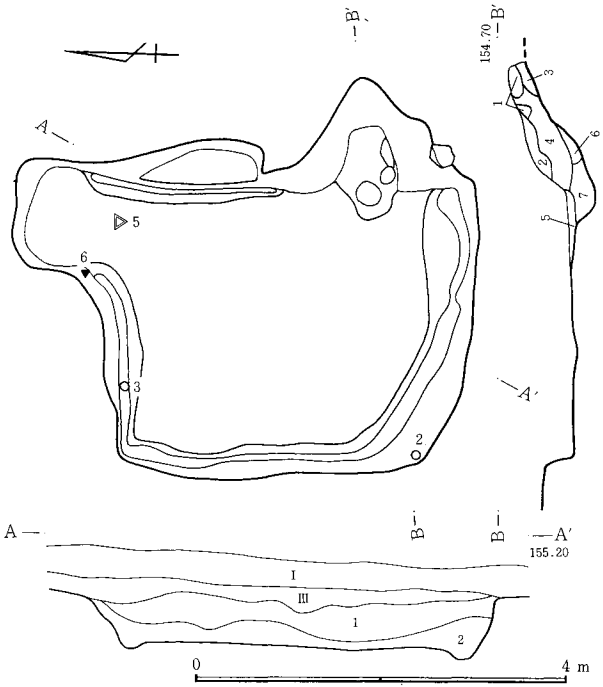
図－24　H－12号住居跡

あり、深さ5cm前後で、周溝状のものである。　**カマド**　東壁南寄りにあり、全長112cm、燃焼部長60cm、袖部内幅46cm、壁への掘り込み角度は36°である。燃焼部は床面より11cm低い。　**テフラ**　II－b層にB軽石の純層がみられ、住居跡はC軽石・FPを含む褐色土で埋められている。　（相澤）

1．黒褐色土。FP・C軽石含む。2．暗褐色土。FP・C軽石含む。3．黒褐色土。4．黒褐色土。浮石を少量含む。　**カマド**　1．黒褐色土。さらさらしている。2．黒褐色土。焼土を含む。3．焼土。4．黒褐色土。ロームを含む。

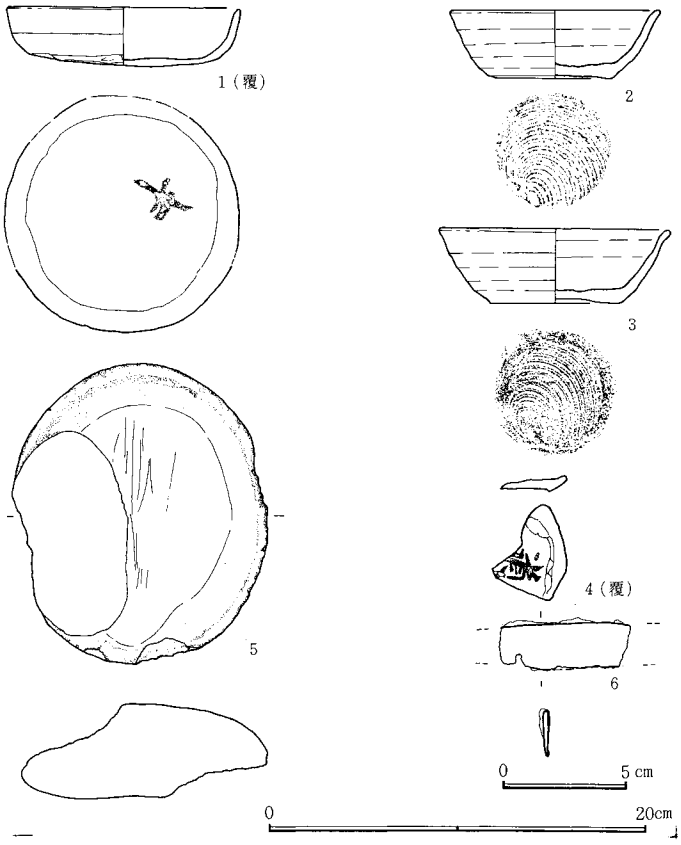
H13号住居跡（図—25、26　図版—2、61　表—19）（IX期）

位置　西台地中央のG6に所在し、点在する小形竪穴住居跡の北部に位置する。　**形状**　南北3.7m、東西2.8mの長方形を基本としているが、北西隅、南東隅が直角に近いのに対し、南西隅は丸く、北東隅は東壁の延長、北側へ張り出しを有し、これに続く形で東壁に棚状の造り出しがある。長軸方向はN—2.5°—W、面積は10.6m²、壁高は18～54cmである。周溝はカマドと張り出し部を除き全面にあり、幅は5～19cm、深さは4～10cmである。張り出しは方形で、東西100cm、南北100cmで、凹み4つからなり、床面より12cm低い。棚状の造り出しは北側が細くなる長方形で、南北126cm、東西38cm、床面より20cm高く、壁上端確認面より15cm低い。　**カマド**　東壁の南隅近くにあり、全長136cm、燃焼部長82cm、袖部内幅64cm、壁外掘り込みは128cmあり、掘り込み角度は34°である。燃焼部右壁には2石据えられている。　**遺物**　張り出し部より鉄製刀子（6）が、その近くから砥石（5）が出土している。他に須恵器の坏（2・3）土師器の坏（1）が出土している。　**テフラ**　C軽石、FPを含む黒褐色土が埋土を形成。　（相澤）



1．黒褐色土。IIIよりやや黒味が薄い。FP・C軽石を含む。2．黒褐色土。軽石を少量含む。　**カマド**　1．焼土。2．黒色土。浮石を含む。3．黒色土。わずかに浮石を含む。4．黒色土と焼土ブロックとの混合土。下部では粘性があり、灰を含む。5．黒色土。粘性が強い。粒子が細かい。6．灰。粘性あり。わずかに焼土を含む。7．ローム塊・焼土・灰の混合土。

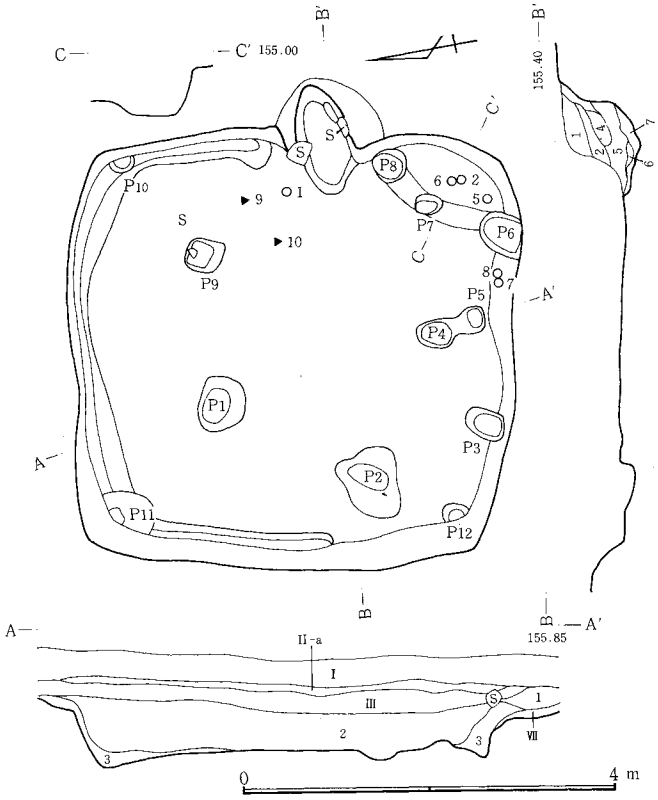
図－25　H－13号住居跡



図－26　H－13号住居跡出土遺物

H14号住居跡（図—27、28　図版—2、62　表—20）（VIII期）

位置　G7に所在、南側に近接して小竪穴住居群がある。　**形状**　外側へ彎曲する隅丸方形で、南北4.4m、東西4.4mをなす。長軸方向はN—9°—E、面積は17.8m²、壁高は35～64cm。壁は比較的しっかりしている。周溝は東西壁の北半から北壁全面下においては明瞭に把握されるが、その他は不明である。周溝の幅は5～20cm、深さは9～16cmである。床面は部分的に薄く、ローム混りの褐色土をなすが、明確な貼床状態とは見られない。　**ピット**　P_1、P_3、P_4、P_7、P_9は径30～58cm、深さ20～40cmで、位置から主柱穴と入口関係のピットと考えられる。しかし、南東隅を除く三隅では壁直下に小ピットが整然としており、上屋構造を考える上で注目される。　**カマド**　東壁中央やや南寄りにあり、全長105cm、燃焼部長74cm、袖部内幅54cmで、壁外掘り込みは98cm、壁への掘り込み角度は69°である。焚き口左袖、燃焼部右、煙道部近くにそれぞれ石材を使用。燃焼部底部は深さ23cmで、強く燃焼している。　**貯蔵穴**　南東隅で紡錘形をなし、長径150cm、短径75cm、深さ18cmである。　**遺物**　鉄製の鎌(10)刀子(9)、

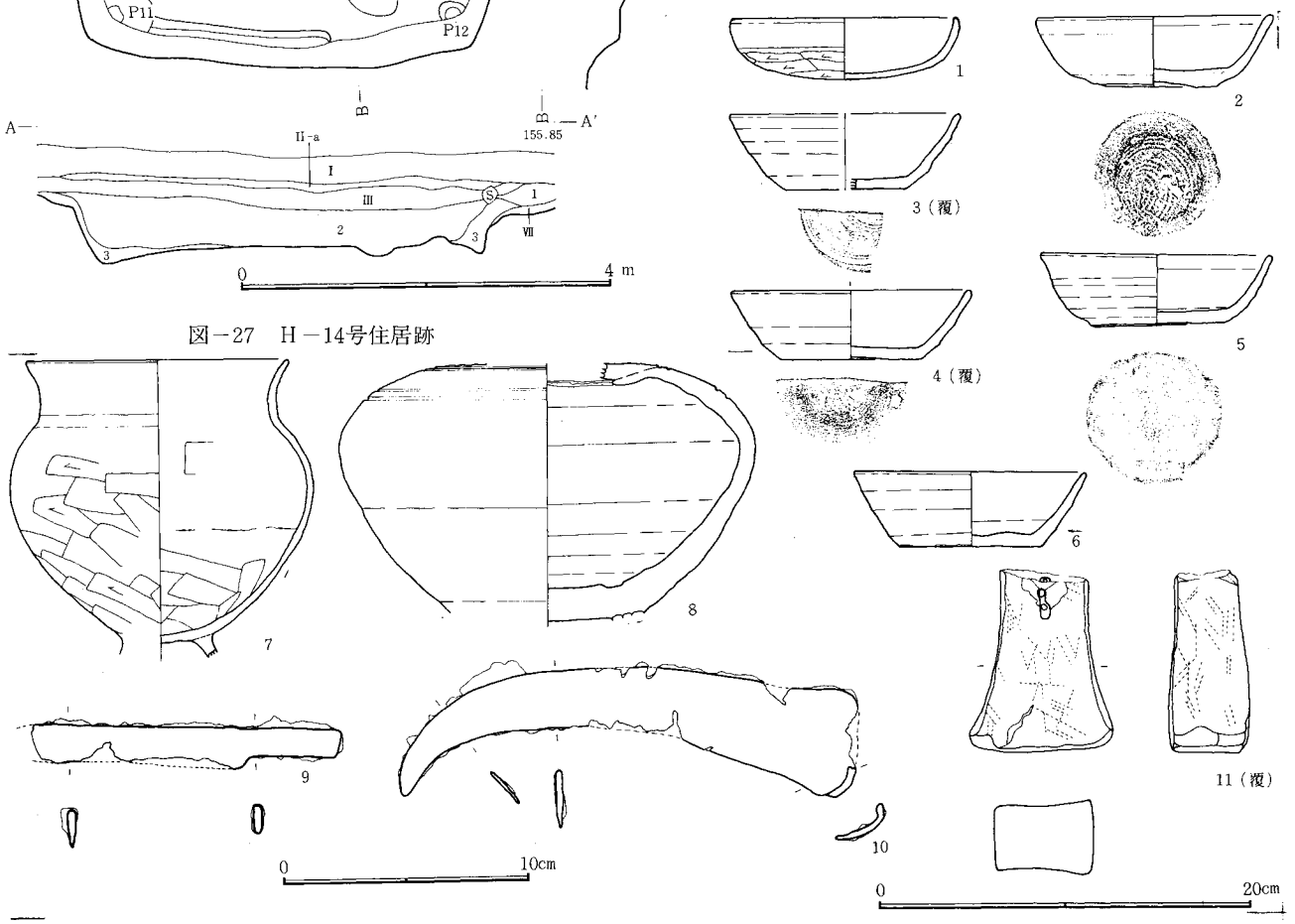


図－27　H－14号住居跡

がカマドの近くから出土している。貯蔵穴からは須恵器の坏（2・5・6）、近接して土師器の台付甕（7）が出土している。しかし、これは平面上で、レベルは床面より2～38cm高い地点である。貯蔵穴の北、カマドの左手前からは土師器の坏（1）が出土している。この他、須恵器の平瓶（8）、砥石（11）等が出土している。　**テフラ**　住居跡を埋めている土に、上層では、B軽石を含む黒色土があり、直接埋めている黒褐色土には、FP、C軽石が含まれている。

（相澤）

1．黒褐色土。FP・C軽石を含む。2．黒褐色土。3とほぼ同じ。3．黒褐色土。ロームを含む。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石を含む。2．黒褐色土。きめが細かい。3．黒褐色土。焼土をかなり含む。4．黒褐色土。焼土を少量含む。5．黒褐色土。焼土を多量に含む。6．黒褐色土。灰を含む。7．黒褐色土。砂質。

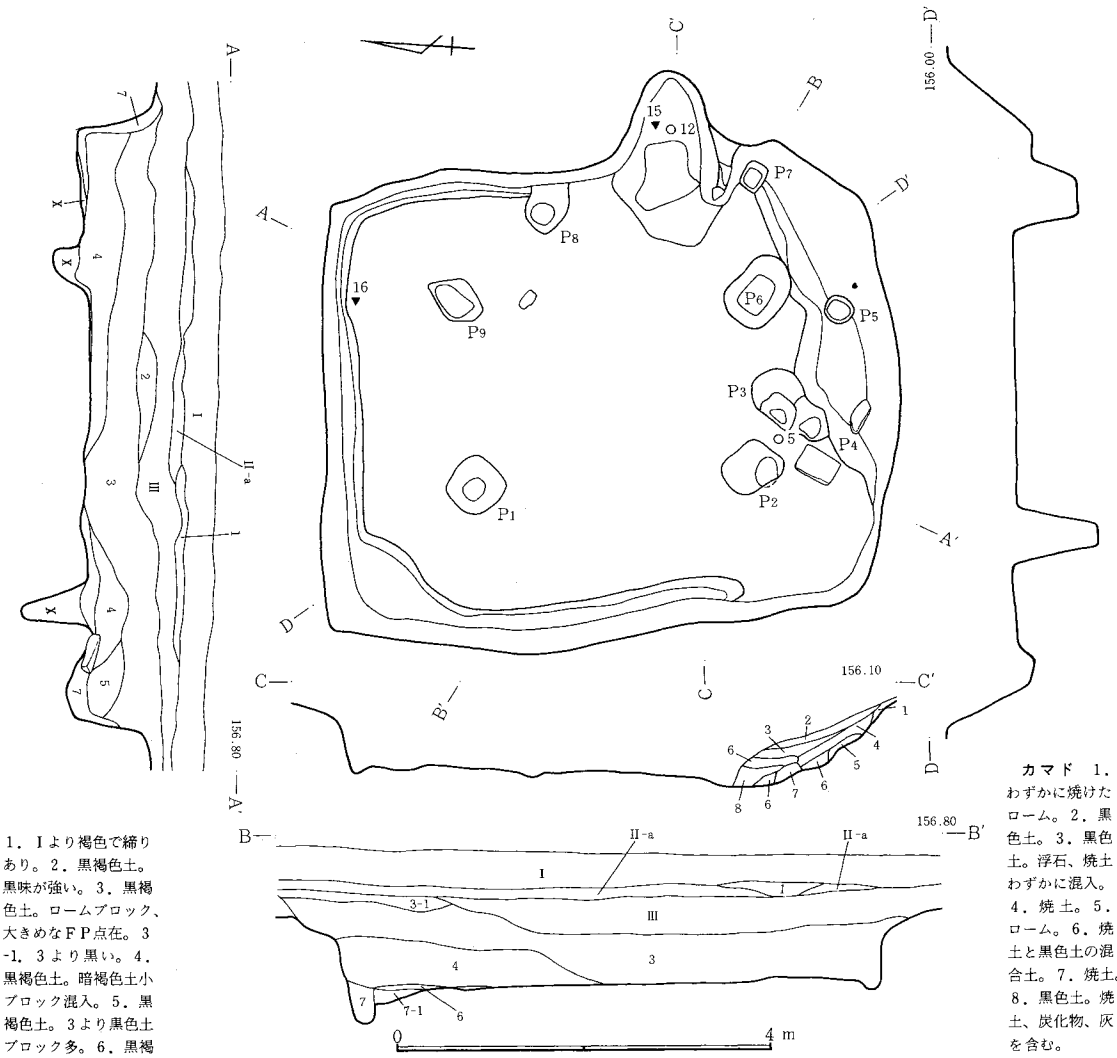


図－28　H－14号住居跡出土遺物

H15号住居跡（図－29、30　図版－2、62　表－21）（IX期）

位置　西台地中央のJ8に所在し、竪穴住居跡が十数軒集中している中の一つである。　**形状**　南北5.6m、東西4.6mの長方形である。しかし、南壁は大きく外側へ彎曲し、東西の各壁もわずか外側へ彎曲しており、各隅も丸味を持っている。長軸方向はN－6.5°－Wで、面積は24.1m²である。壁高は55～95cmあり、壁はしっかりしている。周溝は南東隅とカマドの北50cmを除いて、全周している。ただ、南壁下と北西隅・北東隅ではかなり乱れている。周溝の幅は5～18cm、深さは7～9cmである。床面に貼床はない。　**ピット**　P_1は西北にあり、径56×54cm、深さ90cm、P_2は西南にあり、径56×46cm、深さ70cm、P_6は東南にあり、径80×54cm、深さ60cm、P_9は東北にあり、径44×40cm、深さ57cmで、これらは主柱穴と推定される。P_3、P_4、P_5は南壁近くにあり、それぞれの規模は52×50cm、深さ25cm、40×36cm、深さ16cm、30×30cm、深さ40cmで、位置と合せ、入口に関係するものと考えられる。　**カマド**　全長150cm、燃焼部長100cm、袖部内幅70cmで、きちんとしており、焚き口部右袖に石材が2個据えられている。壁外掘り込みは128cm、壁への掘り込み角度は44°である。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　坏が7個（1・2・3・5・6・7・8）、埦が3個（9・10・11）、甕が3個（12・13・14）、蓋が1個（4）と鉄製の小刀（15）および釘（16）がそれぞれ1個紡錘車（17）が出土している。　**テフラ**　住居跡を埋めている土層で、上部（II－a層）にはB軽石を主とする層があり、住居跡を直接埋めている層中にはFPの礫が点在している。

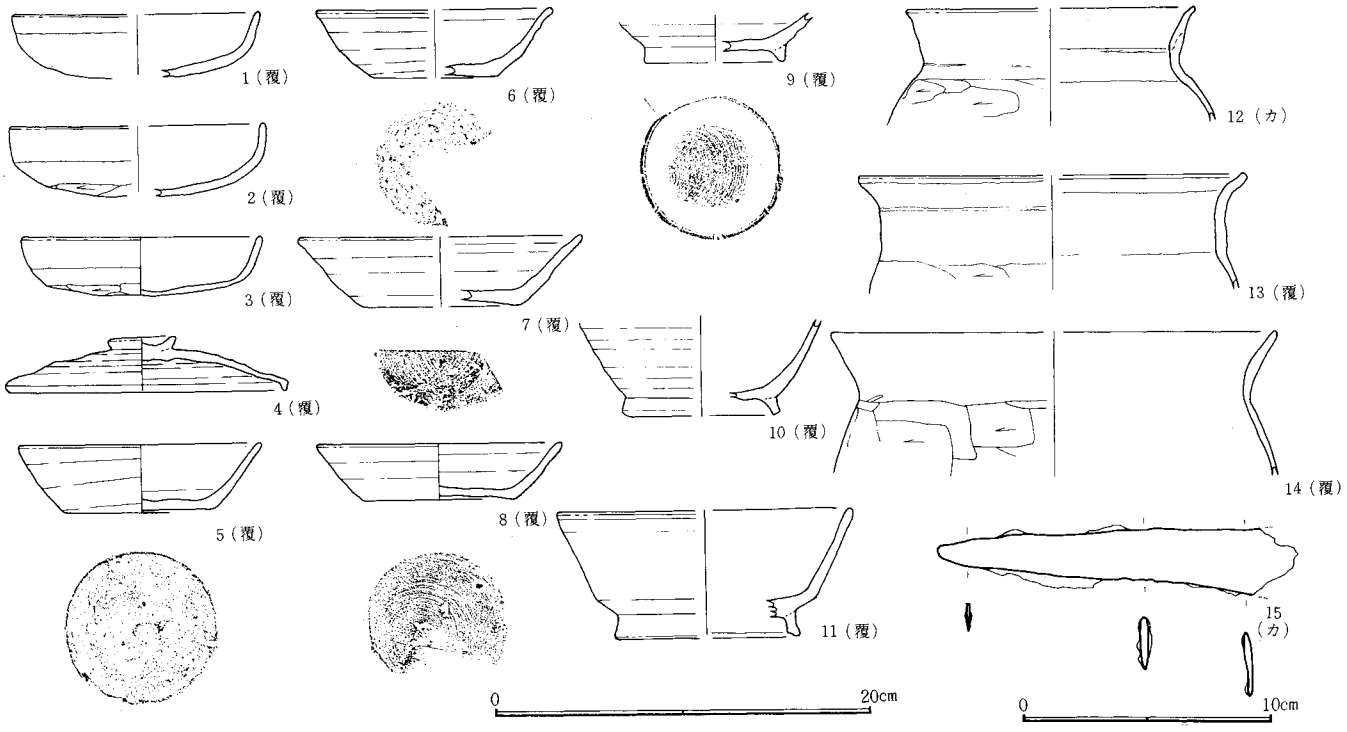
（相澤）



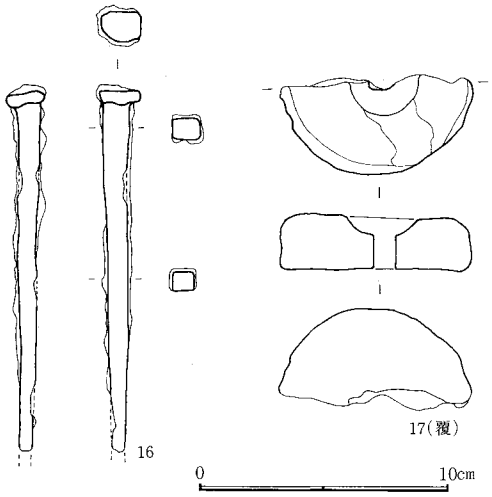
1．Ⅰより褐色で締りあり。2．黒褐色土。黒味が強い。3．黒褐色土。ロームブロック、大きめなＦＰ点在。3-1．3より黒い。4．黒褐色土。暗褐色土小ブロック混入。5．黒褐色土。3より黒色土ブロック多。6．黒褐色土。灰、木炭を含む。7．黒褐色土。ローム小ブロック混入。7-1．黒褐色土。ロームブロック混入。8．暗褐色土。ロームブロック混入。

カマド 1．わずかに焼けたローム。2．黒色土。3．黒色土。浮石、焼土わずかに混入。4．焼土。5．ローム。6．焼土と黒色土の混合土。7．焼土。8．黒色土。焼土、炭化物、灰を含む。

図－29　Ｈ－15号住居跡

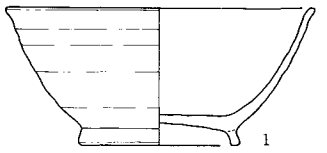


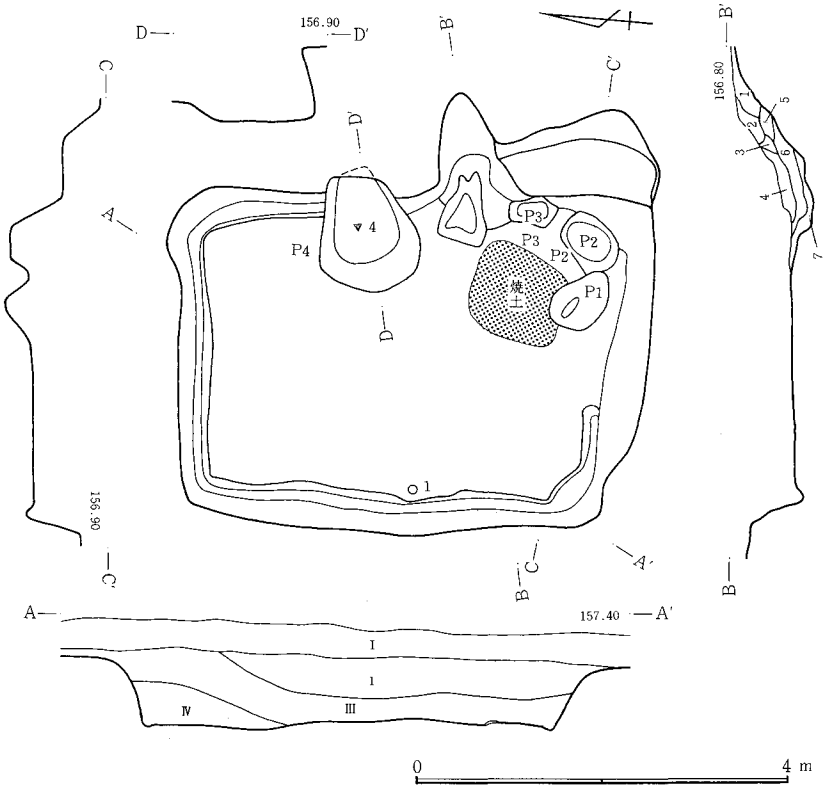
図－30　Ｈ－15号住居跡出土遺物(1)



H16号住居跡（図—31、32　図版—2、62　表—22)(IX期)

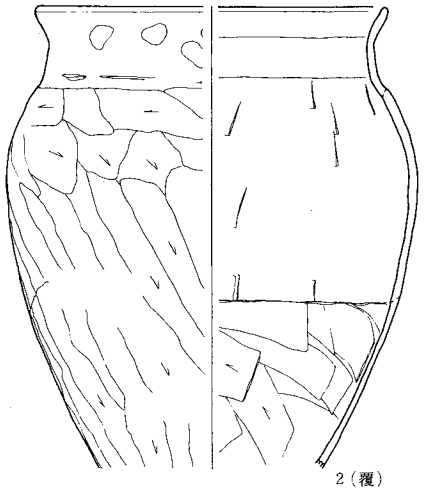
位置　西台地中央のJ9に所在し、十数棟の竪穴住居跡が集まる中の一つで東西の溝のすぐ南に位置している。　**形状**　南北4.3m、東西3.2mの長方形である。南壁の上部が緩傾斜になり、また、東壁のカマドの南に棚状の張り出しがあるため、歪んだ形に見えるが、周溝を見るときちんとした長方形である。長軸方向はN—2°—W、面積は14.2m²、壁高は40～64cmあり、カマド周囲を除いて周溝が壁下をめぐっている。周溝の幅は5～20cm、深さは3～9cmである。棚状の施設はカマドに南接し、東壁から東へ張り出し、南へ延びている。床面より36cm高く、長方形に近い形で、154×60cmの広さである。床面に焼土がある。炉の前方から南にかけての所で、100×95cmの広がりがある。　**ピット**　南東隅に近くP_1～P_3がある。径50～70cmで、深さは11～23cmである。カマドの北には床から壁にかけてP_4がある。122×100cm、深さ17cmである。　**カマド**　東壁南寄りにあり、全長165cm、燃焼部長84cm、袖部内幅80cm、壁外掘り込み148cm、掘り込み角度36°である。　**遺物**　須恵器の埦（1）と土師器の甕（2）、砥石（3・4）が出土している。　（相澤）





1．黒褐色土。FP・C軽石。礫点在。浮石多い。　**カマド**　1．ローム。2．黒色土。ローム少量混入。3．ロームブロック。4．黒色土。ローム、焼土多量に混入。5．黒色土。焼土、ローム混入。6．黒色土。灰、焼土が混入。7．ローム。焼土、灰、黒色土混入。

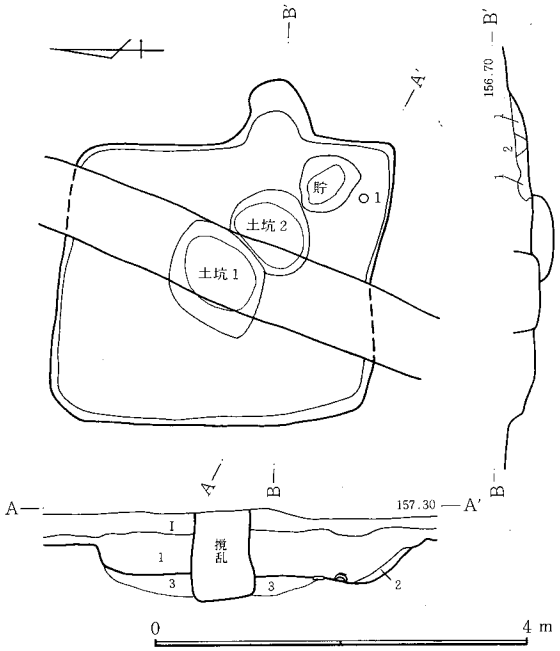
図—32　H—16号住居跡



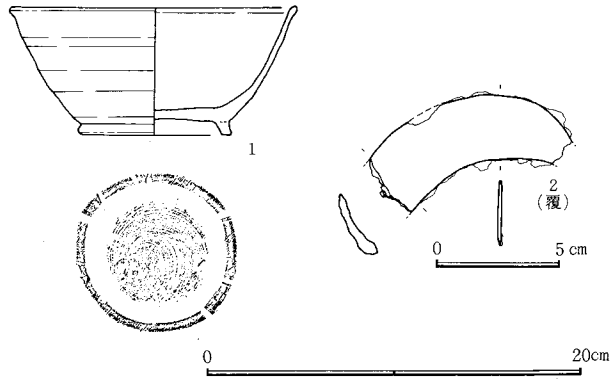
図—33　H—16号住居跡出土遺物

H17号住居跡（図—34、35　図版—2、63　表—23)(IX期)

位置　西台地中央のH9に所在し、十数棟の竪穴住居跡群の中の一つで、東西の溝の南に位置している。　**形状**　南北3.2m、東西2.8mの長方形であるが、南東隅は鋭角で、北西隅と南西隅、北東隅が鈍角となる歪んだ形である。長軸方向はN—2.5°—W、面積は9.2m²あり、壁は全体に緩傾斜をなし、壁高は25～45cmである。住居の床面まで耕作が一部達しているが、これとは別に床面はほぼ全面にわたり貼床がなされている。貼床下には土坑が2つある。大きさは土坑1で110×95cm、土坑2で93×75cmで、深さはいずれも20cm前後である。この他にも床面下には多くのピットと凹凸があり、床面下のほぼ全面に及んでいる。　**ピット**　貼床上でのピットはない。　**カマド**　東壁南寄りにあり、残存状態は悪い。全長は110cm、燃焼部長38cm、袖部内幅60cmで、壁外掘り込み70cm、壁への掘り込み角度は25°である。　**貯蔵穴**　南東隅にあるが、貼床下での図面のため、貼床上での規模は計測できない。　**遺物**　須恵器の埦（1）が貯蔵穴付近から出土している。　（相澤）



図－34　H－17号住居跡



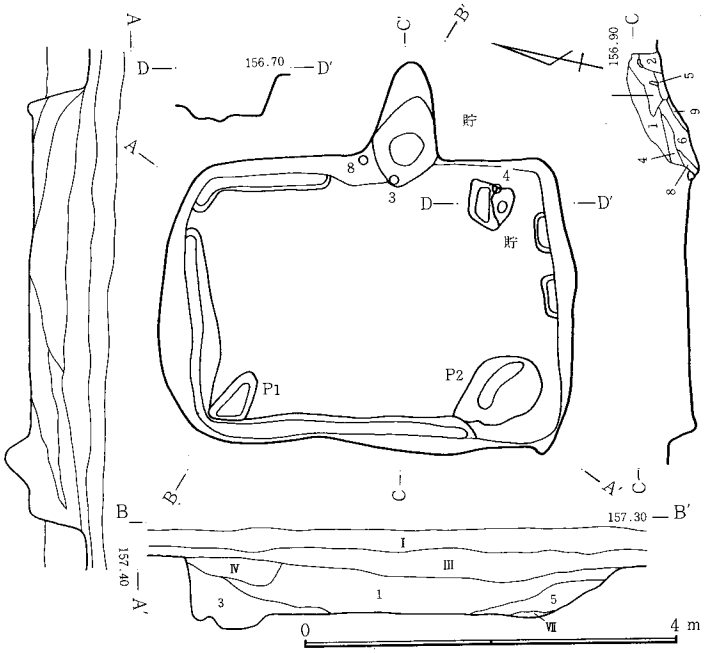
図－35　H－17号住居跡出土遺物

1．黒褐色土。ロームブロック点在。2．灰と暗褐色土の混合土。3．ローム・黒色土の混土層。　カマド　1．黒色土。焼土、ロームが混入する。2．粘土・焼土・黒色土の混合土。

H18号住居跡（図—36、37　図版—3、63　表—24)(X期)

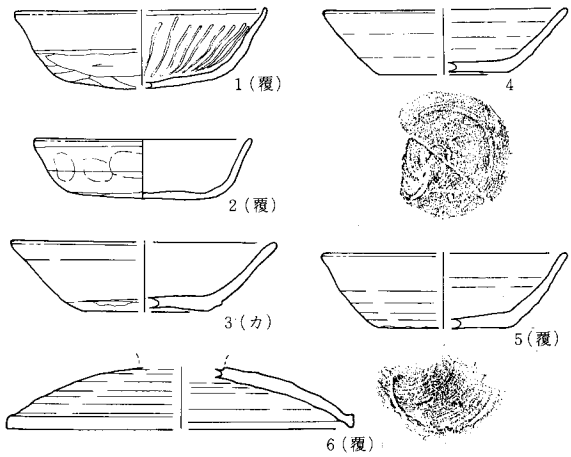
位置　西台地中央のG9に所在し、十数軒の竪穴住居跡群の中の一つで、東西の溝の南に位置している。　**形状**　南北3.9m、東西2.7mの長方形で、南壁がやや外側へ彎曲し、北東隅と南西隅が少し鋭角をなしている。長軸方向はN—12.5°—Eで、面積は11.0m²、壁高は25～40cmで、しっかりしている。壁下には周溝がある。周溝は南壁と東壁の南半分を除いて、ほぼ全周している。幅は7～17cmで、深さは2～6cmである。　**ピット**　P_1、P_2は北西隅と南西隅にあり、径46×32cmと80×70cm、深さは10cmと16cmである。P_3、P_4は南壁に接してあり、径43×11cmと41×12cm、深さは6cmと11cmで、位置から出入口に関係するものと考えられる。　**カマド**　東壁中央やや南寄りにあり、残存状態はよくない。全長124cm、燃焼部長86cm、袖部内幅52cmで、壁外掘り込み124cm、壁への掘り込み角度33°で、ゆるい。燃焼部のレベルは住居床面より13cm低く、直径35cmの範囲が火床としてよく焼けていた。煙道部の焼け込みも強く、ロームが白っぽくなっていた。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、壁下端より約20cm離れている。歪んだ方形で、径46×46cm、深さ14cmである。　**遺物**　土師器の甕（8）がカマド内より、須恵器の坏（3・4）がカマド内と貯蔵穴内より出土している。

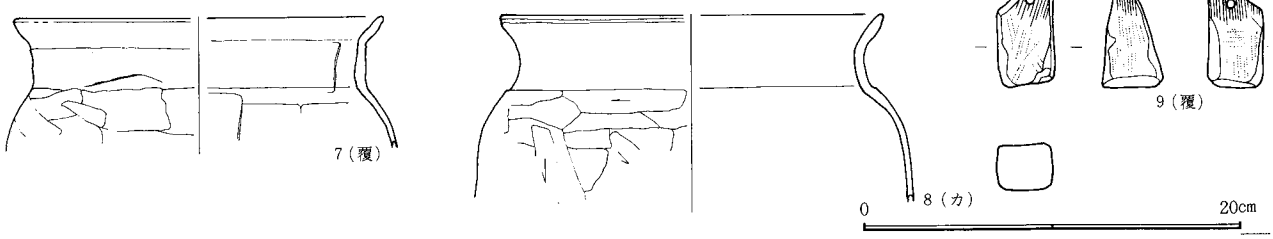
（相澤）



図－36　H－18号住居跡

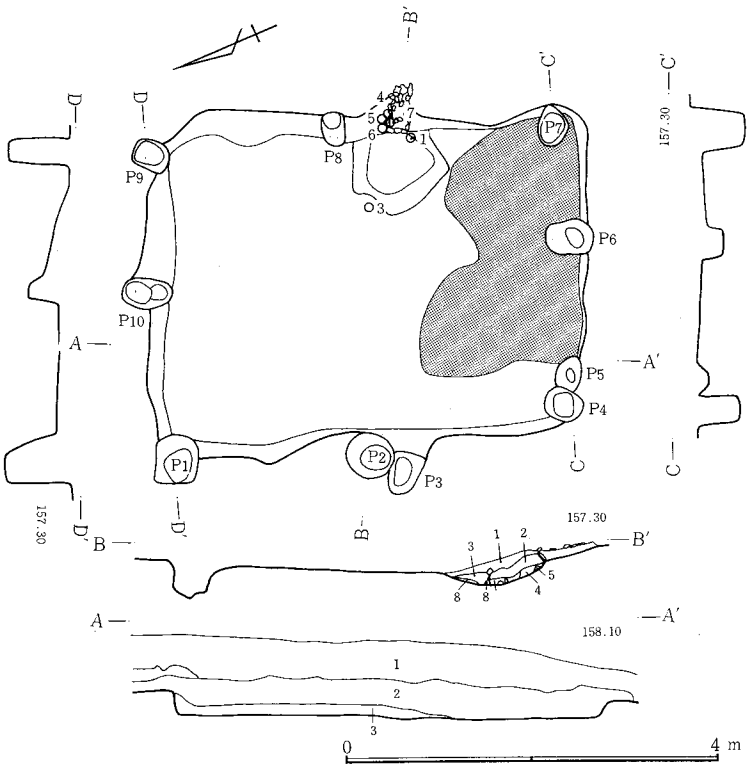
1．黒褐色土。ローム小ブロック、FP軽石(φ7～3cm)点在。2．黒褐色土。3．暗褐色土。ローム粒を含む。4．黒褐色土。ロームブロック混入。5．焼土塊・灰・ロームの混合土。　**カマド**　1．黒色土。浮石、部分的に焼土、ローム混入。2．黒色土微砂。3．焼土ブロック。4．ローム及び粘土。わずかに黒色土・焼土混入。5．漸移層、焼け込んで白っぽい。6．焼土・黒色土・ロームの混合土。7．焼土ブロック。8．黒色土微砂。灰。焼土混入。





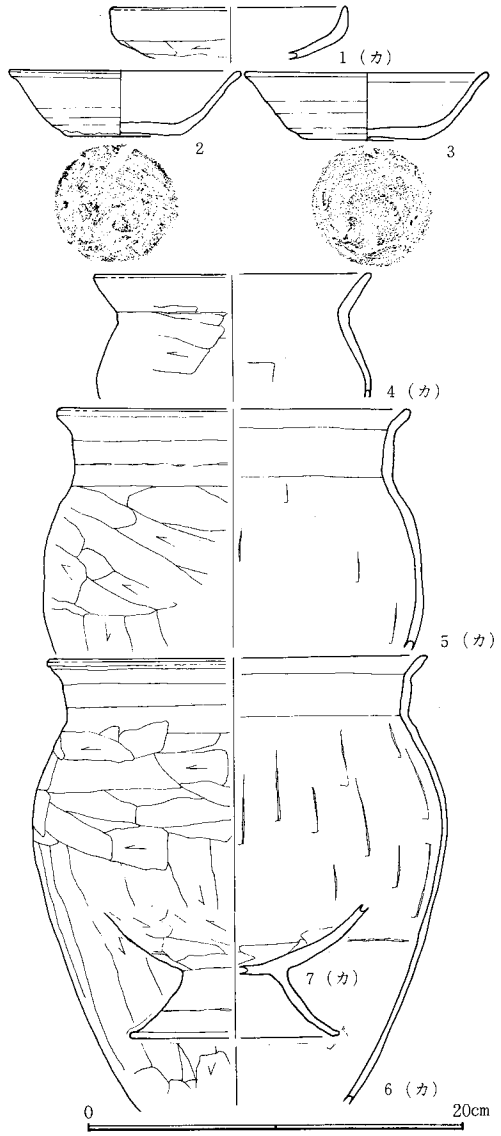
図－37　H－18号住居跡出土遺物

H19号住居跡（図—38、39　図版—3、63　表—25)(X期)



1．褐色砂質層の混合土。2．黒色土。FP含む。3．褐色土。　カマド　1．黒色浮石層。焼土粒含む。2．焼土。3．焼土。黒色土、ローム粒含む。4．暗褐色土。5．褐色土。6．黒色灰。焼土粒含む。7．焼土。ローム粒含む。8．ロームブロック。

図—38　H—19号住居跡

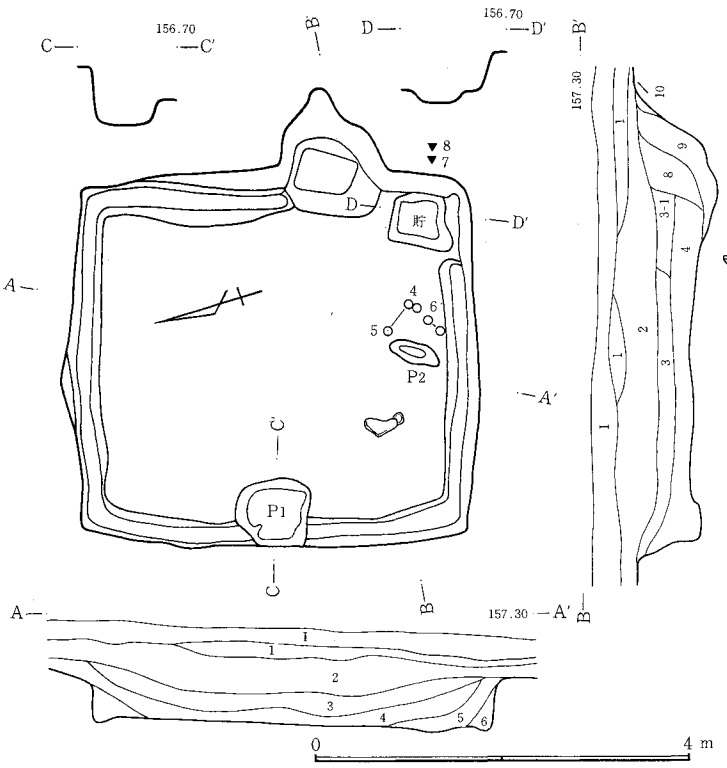


図—39　H—19号住居跡出土遺物

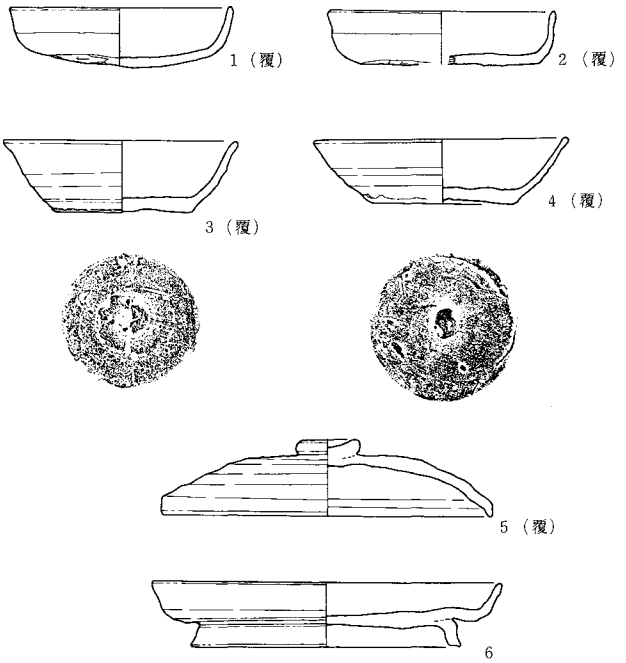
位置　西台地中央のJ9に所在し、十数棟の竪穴住居跡群の中の一つであり、東西の溝の南に位置している。　**形状**　南北4.4m、東西3.1mの長方形であるが、北西隅、南東隅が少し鋭角で、南西隅、北東隅が少し鈍角となり、変形気味である。長軸方向はN—22°—E、面積は13.8m²で、壁はほとんど全面緩傾斜をなし、壁高は8～17cmである。床面下には浅い凹みが広範囲にみられ、貼床がなされている。　**ピット**　住居の壁にかかって、東西南北とその中間にそれぞれピットがあり、西壁中央と南西隅には2つずつある。各ピットの長径、短径、深さは次の通りである。(単位cm) P_1＝50×44×51、P_2＝50×38×30、P_3＝44×32×7、P_4＝40×32×38、P_5＝34×26×6、P_6＝50×34×33、P_7＝38×32×49、P_8＝34×24×43、P_9＝40×30×47、P_{10}＝52×34×27、これらのピットの内P_3とP_5は浅いので、これを除いた8つのピットについて各隅を直角として、直線で結ぶと長軸方向は竪穴住居の長軸方向より5°西へずれている。また、P_2の断面図ではP_2の埋められた後に住居跡の壁がP_2に一部かかりながらできている。竪穴住居跡と各ピットは四隅と壁上でよく一致しているので一体をなす柱穴と推定されるが、一部には掘立柱建物跡が重複していた可能性もある。　**カマド**　東壁中央にあり、残存状態はきわめて悪い。全長150cm、燃焼部長100cm、袖部内幅74cmで、壁外掘り込みは50cm、壁への掘り込み角度は29°である。　**遺物**　甕が3個（4・5・6）出土しており、2個（4・5）は連続させて煙道に使用していた。他の1個もカマド内より出土している。この他、土師器の坏（1）、須恵器の坏（2・3）が出土している。　（相澤）

H20号住居跡（図—40、41　図版—3、63　表—26)(IX期)

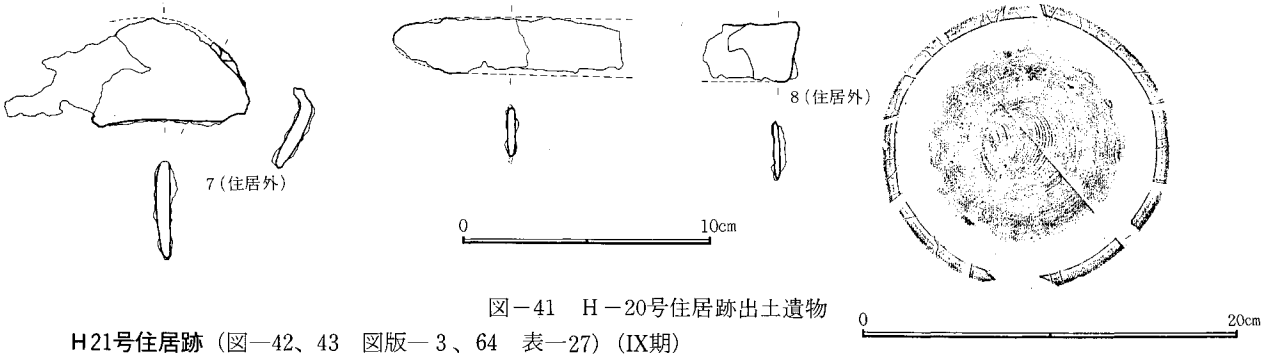
位置　南北に走る道路に近く、D9と一部D10にまたがっている。竪穴住居跡、掘立柱建物跡が密集する地域の東北端にあり、北側すぐ近くに東西方向の溝があり、西には南北方向の溝がある。　**形状**　南北4.2m、東西3.2mの長方形であるが、東壁を除き、他の三壁はいずれも外側へ彎曲している。壁の下端四隅は全て直角で、下端の各隅を基準とした規模は南北3.9m、東西3.5mである。長軸方向はN—16.5°—Eで、面積は15.3m²である。各壁はきちんとしており、壁高は30～65cmある。周溝は南壁中央部付近、南東隅の貯蔵穴と東壁のカマド周囲を除いて壁下を全周している。　**ピット**　P_1は西壁中央にあり、径76×64cm、深さ35cmである。P_2は南壁中央の周溝のない部分の脇にあり、径50×22cm、深さ6cmで、出入口に関係するピットと考えられる。　**カマド**　東壁の南寄りにあり、概して残存状態は悪い。全長120cm、燃焼部長70cm、袖部内幅94cmで、壁外掘り込みは120cmである。燃焼部は住居床面より20cm低く、その奥で84°の角度で高さ33cmまで立ちあがり、その先は煙道となり36°の角度で外へ延びている。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、東壁に壁直下になっているが、南壁よりは17cm離れている。やや歪んだ長方形で長径にあたる南北が56cm、東西が54cm、深さは13cmである。　**遺物**　須恵器の蓋（5）と須恵器盤（6）が貯蔵穴の西方から出土しているが、床面よりそれぞれ31cmと14cm上である。住居外のカマドの近くから鉄製の鎌（7）鉄製の刀子が出土している。他に須恵器の坏（3・4）が出土している。　**テフラ**　住居跡の隅を埋めている黒褐色土の中にC軽石、FPが混入している。　（相澤）



1．褐色土。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．黒褐色土。ローム小ブロック点在。3-1．黒褐色土。浮石少量混入。4．黒褐色土。ロームブロック30%混入。5．黒褐色土。4より黒い。6．黒褐色土。ローム混入。7．黒褐色土。FP・C軽石、ローム混入。8．黒褐色土。浮石、ローム小粒子、少量の焼土を含む。9．黒褐色土。焼土多量に含む。10．黒褐色土。

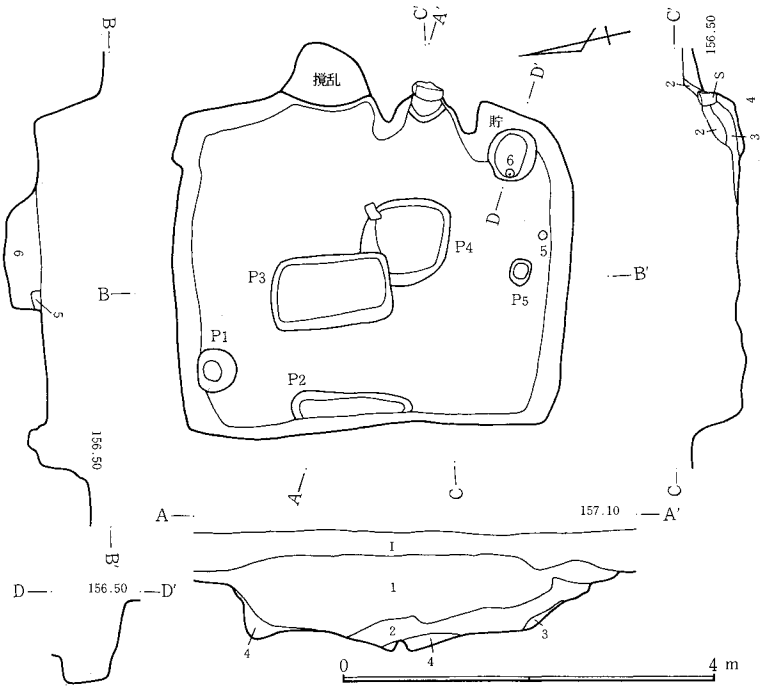


図－40　H－20号住居跡



図－41　H－20号住居跡出土遺物

H21号住居跡（図—42、43　図版—3、64　表—27）（IX期）



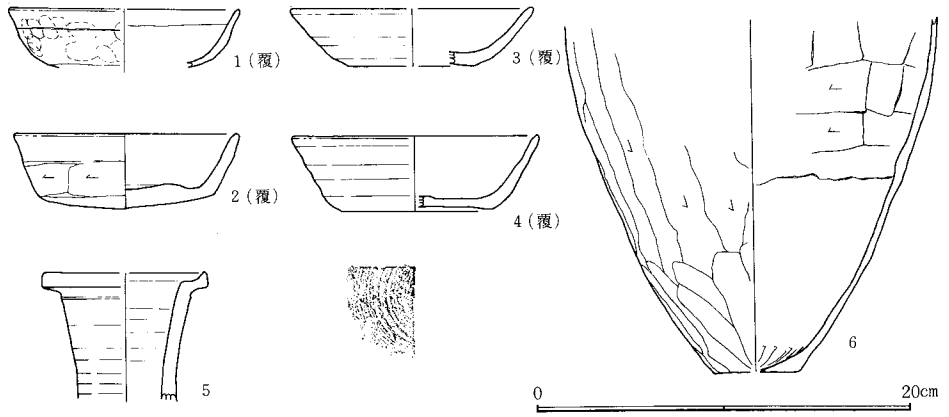
図－42　H－21号住居跡

位置　西台地上のD9に所在している。台地東側中央に住居跡の密集地が見られるが、その北西隅付近に位置している。

形状　平面長方形で3.8×3.3mで、南北に長く、壁現高42～95cmである。周溝はなく、長軸方向はN－6°－E、面積は11.4㎡である。　**床面**　踏み固め部分、床面ともに不明である。P_3は床下土坑と考えられるが、貼り床が認められないので不明である。

ピット　P_1は46×40×12cm、P_2は128×25×4cm、P_3は137×75×38cm、P_4は94×92×19cm、P_5は28×22×25cmである。　**カマド**　東壁中央から南に寄ってあり、壁外掘り込み70cm、袖部内幅90cm、燃焼部長50cmである。煙道部に1個石材を使用し、燃焼部は床面より7cm低く、壁への掘り込み角度は61°である。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面円形で57×50×17cmである。　**遺物**　床面から4cmに甕（6）、8cmに長頸壺（5）などが出土している。　（中村）

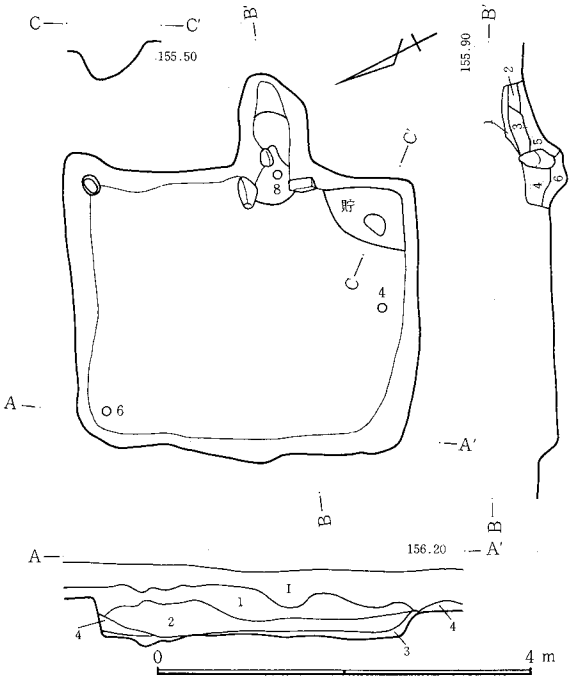
1．黒褐色土。FP・C軽石を含む。2．黒褐色土。焼土を含む。3．ロームと焼土の混合土。4．ロームと黒色土の混合土。5．焼土。6．黒褐色土。ロームブロック混入。　**カマド**　1．黒褐色土。2．黒褐色土。ローム小粒子混入。3．黒褐色土と黒色土の混合土。焼土粒多量に混入。4．漸移層。黒色土がブロック状に混入。



図－43　H－21号住居跡出土遺物

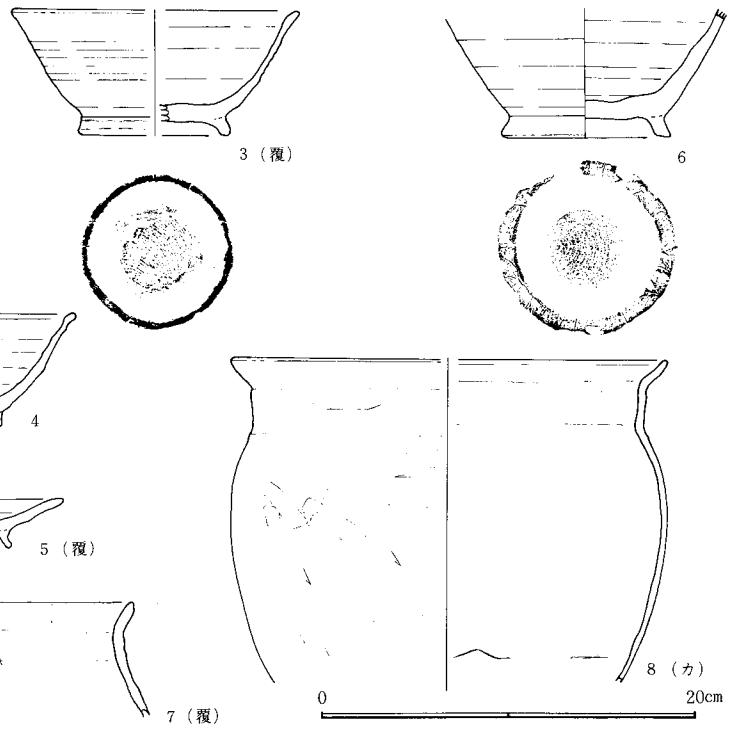
H22号住居跡（図—44、45　図版—3、64　表—28）（X期）

位置　西台地上のC9に所在する。H21号住居跡に近い位置にある。**形状**　平面長方形で3.3×2.8mで、南北に長く、壁現高は13～23cmである。長軸方向はN—28.5°—Eで、面積は9.0m²である。周溝は認められない。　**床面**　踏み固め部分、貼床は不明であるが、貼床があった可能性が地層断面図から推定される。　**ピット**　ピットは認められない。　**カマド**　東壁中央からやや南寄りにあり、壁外掘り込み110cm、袖部内幅32cm、燃焼部長48cmである。構築材として燃焼部左に1個、右袖に1個、左袖に1個石材が使用されている。燃焼部は床面から16cm低く、壁への掘り込み角度は22°である。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面は東・南壁を2辺とする三角形をしている。大きさは74×60cm、深さ29cmである。　**遺物**　須恵器の壺（6）が床面より11cm上から、同じく須恵器の高台付椀（4）が19cm上から出土している。また土師器甕（8）はカマド内から出土している。　（中村）



1．黒褐色土。FP・C軽石、焼土混入。2．黒褐色土。焼土小粒子、少量のFP・C軽石混入。3．暗褐色土。4．黒褐色微砂。締りなし。　**カマド**　1．黒褐色土。焼土少量混入。2．黒色土。焼土。ローム少量混入。3．黒褐色土。焼土多量に混入。4．黒褐色土。焼土混入。5．黒褐色土。ロームを含む。6．黒褐色土。軽石、焼土少量混入。

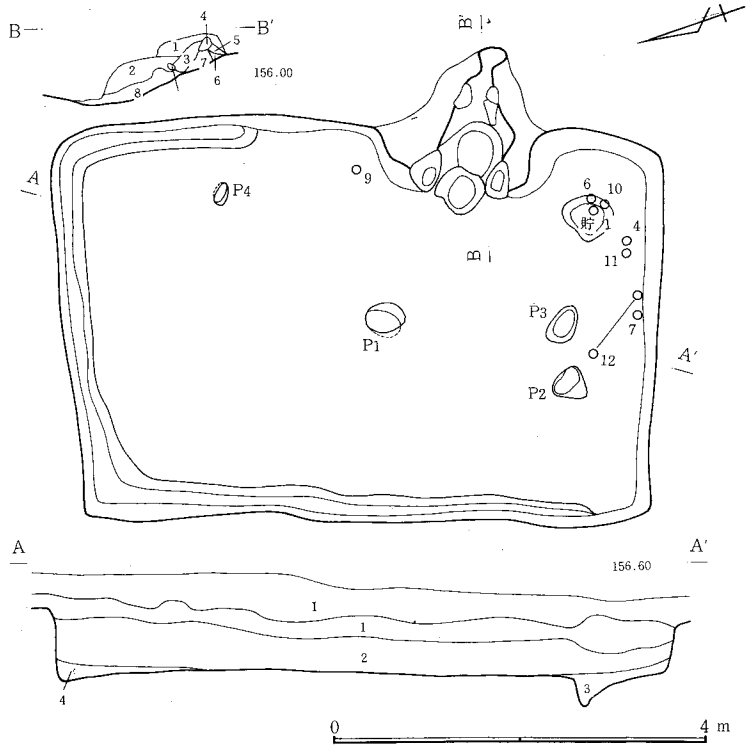
図－44　H－22号住居跡



図－45　H－22号住居跡出土遺物

H23号住居跡（図—46、47　図版—3、64　表—29）

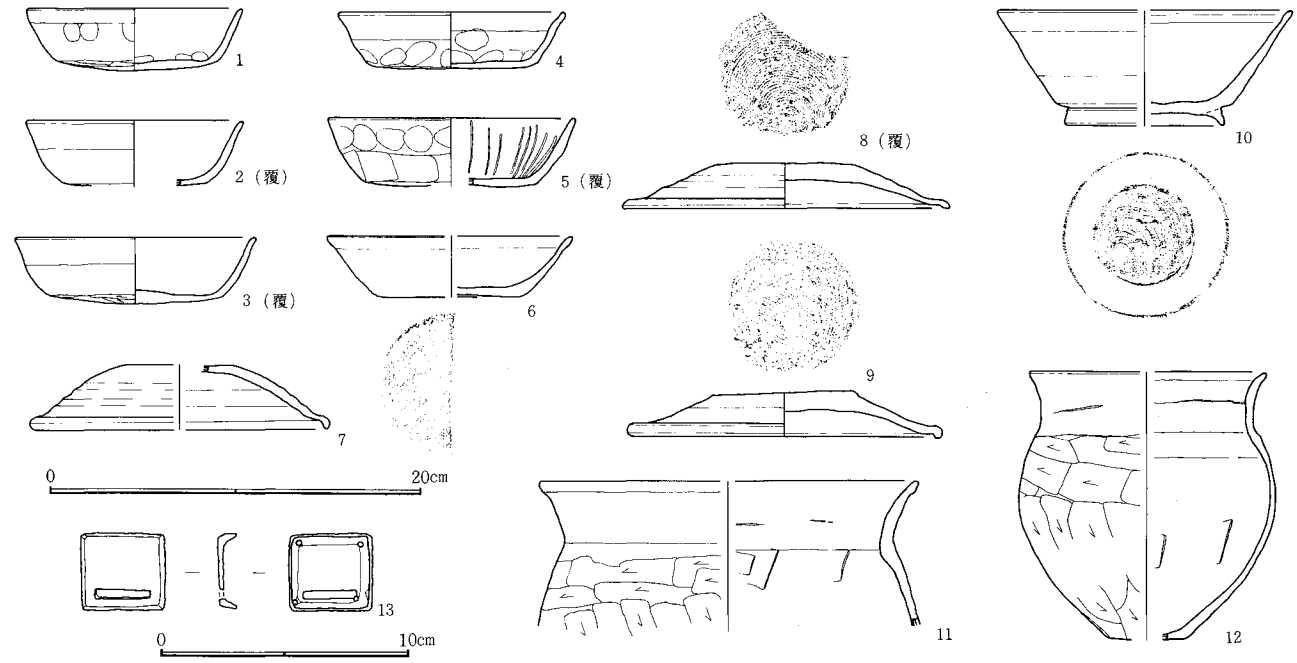
位置　西台地上のC9に所在するH22号住居跡に近い位置にあり、密集する住居跡群の西限に位置している。　**形状**　平面長方形で6.1×4.1mで、南北に長い。面積は23.5m²、壁現高は20～70cmである。周溝は北壁全部、東壁北半、西壁全部に認められる。



1．黒褐色土。FP・C軽石。焼土粒混入。2．黒褐色土。1より褐色味強い。含有物同じ。3．暗褐色土。ローム混入。4．黒褐色土。　**カマド**　1．黒褐色土。軽石を含む。2．黒褐色土。黒味が強い。3．黄褐色土。焼土、ローム混入。4．焼土。5．黄褐色土。ローム混入。6．ローム。7．黒褐色土。軽石わずか混入。8．黒褐色土。焼土、ロームを含む。

図－46　H－23号住居跡

幅は8～22cm、深さ2～7cm前後である。　**床面**　踏み固め部分、貼床は不明であるが、住居内南東部3分の1程、地山の凹凸をならす程度の貼床があったものと推定される。　**ピット**　住居南半に存在し、P_1は40×34×21cm、P_2は34×28×35cm、P_3は40×24×35cm、P_4は24×12×53cmの大きさである。　**カマド**　東壁中央から南寄りにあり、壁外掘り込み160cm、袖部内幅74cm、燃焼部長78cmである。構築材として煙道部左に1個、右に2個の石材を使用している。燃焼部は床面から6cm低く、壁への掘り込み角度は25°である。　**貯蔵穴**　南東隅近くにある。平面は不整の円形で48×44cm、深さ49cmである。　**遺物**　床面から土師器小型甕(12)、須恵器蓋（7）が出土し、床面から浮いて須恵器蓋（9）と、土師器甕（11）・坏（4）が出土している。また貯蔵穴内から土師器坏（1・6）、須恵器高台付椀（10）が出土している。その他覆土中から坏（3・5）、蓋（8）が出土している。なお、（8・9・10）は糸切り痕がみられる。（中村）

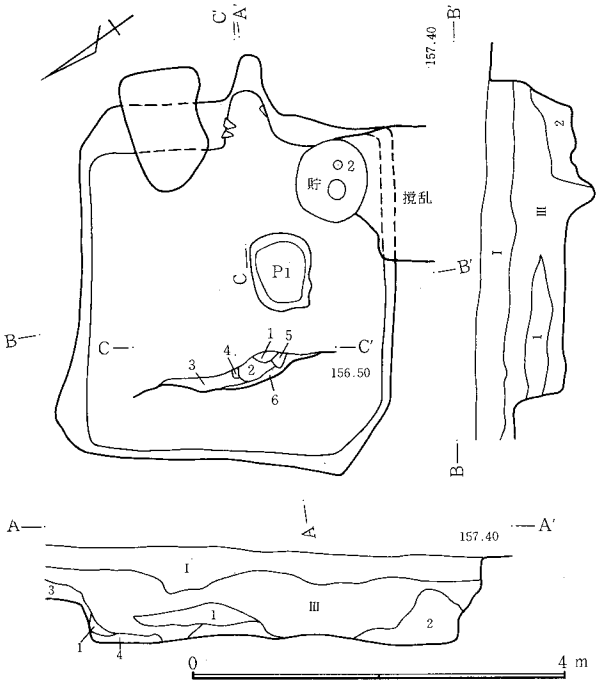


図－47　H－23号住居跡出土遺物

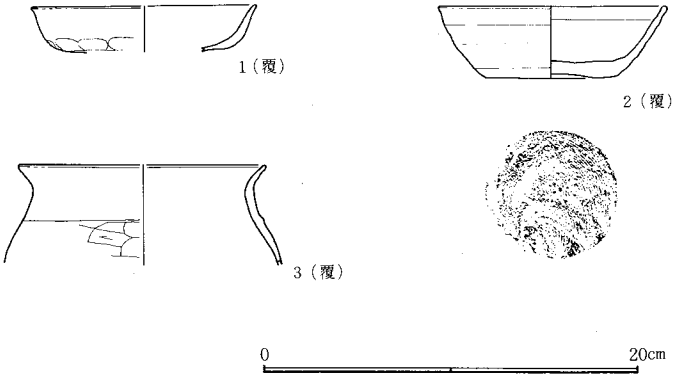
H24号住居跡（図－48、49　図版－3、64　表－30）(IX期)

位置　西台地上のD10に所在する。H21号住居跡に隣接し、密集する住居跡群の北西隅付近に位置している。　**形状**　平面正方形で3.1×3.2m、面積は10.9㎡である。壁現高は24～49cmで、周溝はない。長軸方向はN－58°－Wである。張り出しはない。

床面　踏み固め部分や貼床は不明であるが、地層断面図からは貼床はなかったものと推定される。　**ピット**　カマドの前約1mの所にあり、平面長方形である。大きさは82×60cm、深さ23cmである。　**カマド**　東壁の中央にあり、壁外掘り込み100cm、袖部内幅52cm、燃焼部長62cmの大きさである。構築材として燃焼部の左に1個、右に1個の石材を使用している。燃焼部は床面より9cm低く、カマドの壁への掘り込み角度24°である。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面楕円形で、断面はすり鉢形をしている。大きさは88×74cm、深さ18cmである。　**遺物**　貯蔵穴内から完形の須恵器坏（2）が出土している。底部は糸切り底で、やや上げ底である。他に覆土中から土師器坏片（1）と、土師器甕口縁部（3）が出土している。（中村）



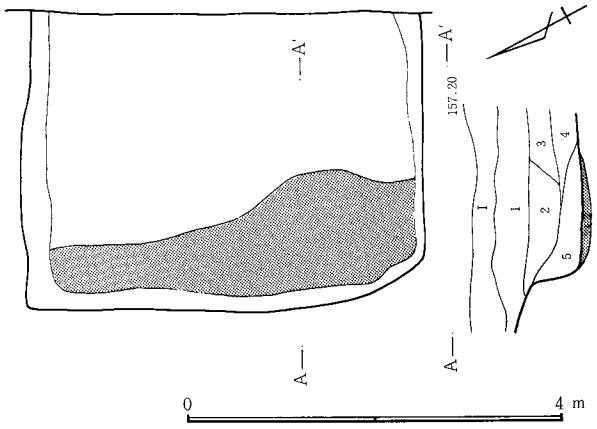
図－48　H－24号住居跡



図－49　H－24号住居跡出土遺物

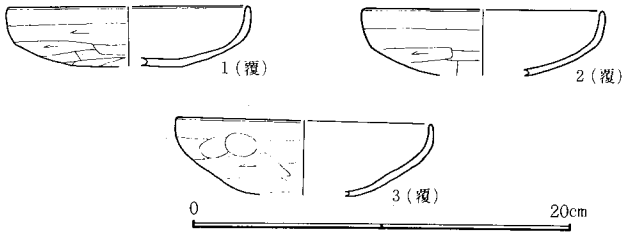
1．黒褐色土。黒味が強い。2．黒褐色土。褐色が強い。3．黒褐色土。焼土多量に混入。4．ロームと黒色土。　**カマド**　1．黒褐色土。2．黒褐色土。焼土、ローム混入。3．黒褐色土。軽石、少量のローム、焼土混入。4．黒褐色土。焼土粒(やや大)混入。5．黒褐色土。焼土多量に混入。6．ローム混りの黄褐色土。

H25号住居跡（図－50、51　図版－3、64　表－31）(VI期)



1．黒褐色土。浮石多量に混入。2．黒褐色土。1より浮石少い。3．暗褐色土。浮石少量混入。4．ローム・黒色土。暗褐色土がブロック状に混入。5．黒褐色土。1．2より黒い。

図－50　H－25号住居跡

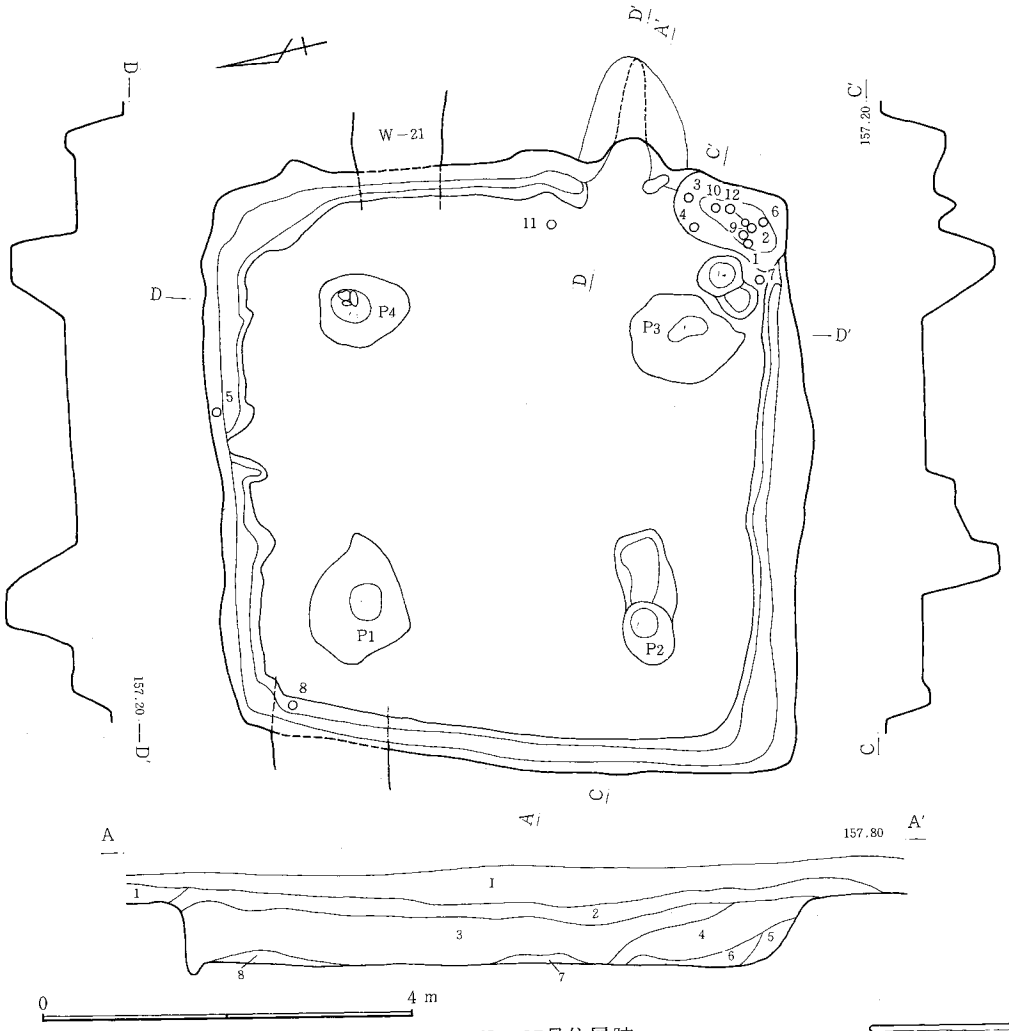


図－51　H－25号住居跡出土遺物

位置　西台地のほぼ中央C10に位置する。東側には竪穴住居跡と掘立柱建物跡の集中した地区があり、その大きな一群の西端に位置している。道路のため東部分が未調査である。　**形状**　南北3.9mで東西2.9m（現状）である。壁高は地層からは64cmを測る。長軸方向は南北が長軸とするとN－28.5°－Eで、面積は11.0m²（現状）である。床面の西壁際全体に貼床が施されている。黒色土で、厚さは8～17cmで幅は41～120cmである。壁はしっかり掘りこまれている。周溝はない。　**遺物**　埋土中より土師器坏（1・2・3）が出土している。　（井野）

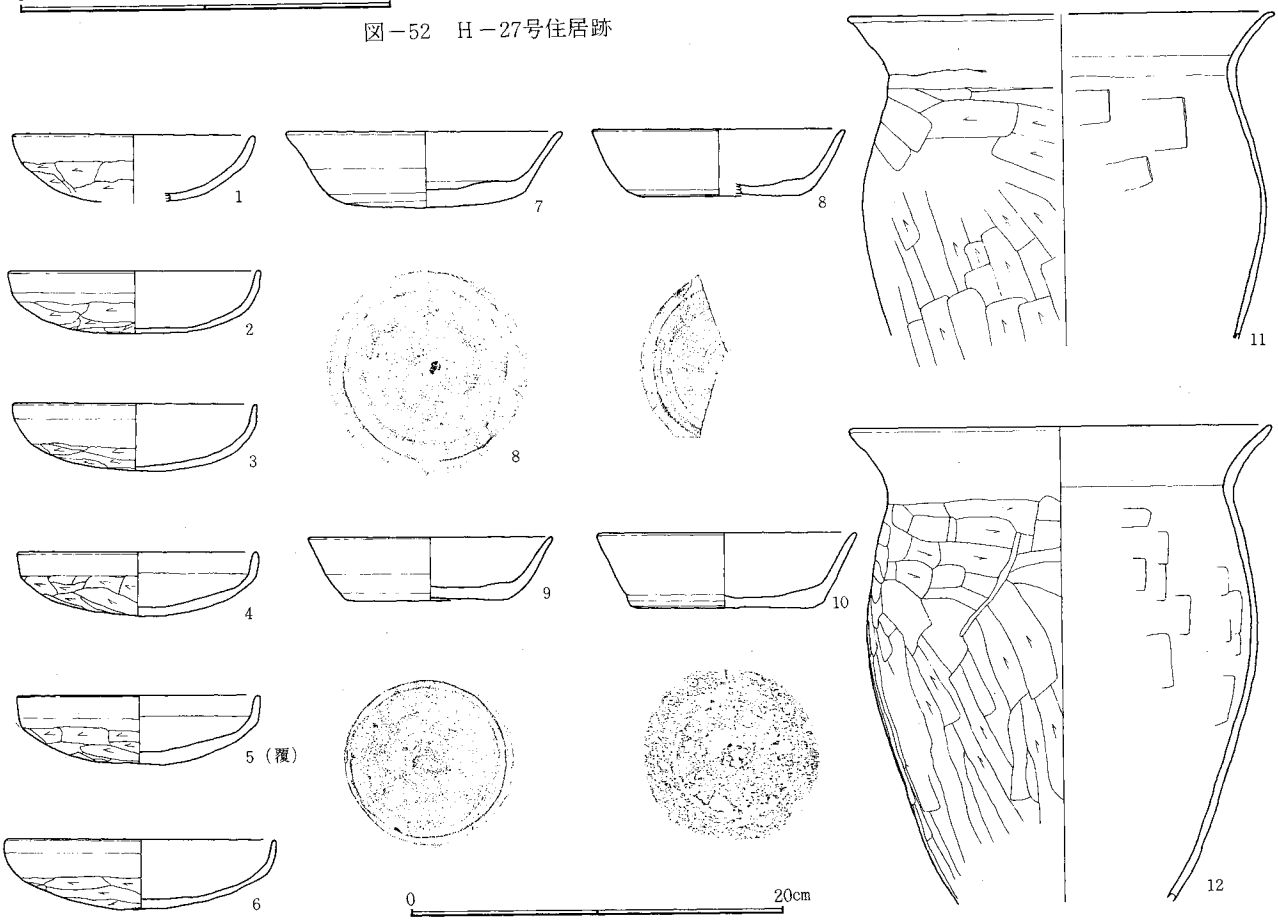
H27号住居跡（図－52、53　図版－4、65　表－32）(VI期)

位置　西台地ほぼ中央のC10・11に位置する。北西に小竪穴住居跡群、南東から東に大竪穴住居跡群を臨む。　**形状**　東西6.2m南北5.7mの不整方形である。面積は34.7m²。壁高は34～53cm、地層断面からは66cmを測る。周溝は、貯蔵穴の周辺を除く全周にめぐる。幅6～40cmで深さ2～18cmである。長軸方向は、N－72.5°－W。　**ピット**　床面に5カ所確認されている。P_1は、112×102cmで深さ65cm、P_2は140×56cmで深さ75cm、P_3は112×96cmで深さ76cm、P_4は88×80cmで深さ71cm、P_5は72×34cmで深さ30cmである。P_1、P_2、P_3、P_4は柱穴であり、しっかりした掘り形をもつ。P_5はP_3と貯蔵穴の間にあり、他にくらべ規模は小さい。　**カマド**　東壁南寄り。壁外に構築されている。燃焼部は壁を掘り込み作られていた。煙道はそのままのこっており、構築材に粘土まじりの黒褐色土が使用されていた。右袖には1石が袖石としてのこっていた。全長174cm、燃焼部長88cm、袖部内幅58cm、壁への掘り込み角度24°、燃焼部は床面にくらべて7cm低い。　**貯蔵穴**　南東壁ぎわにある。不定長円形で、規模は110×48cmで深さ25cmである。　**遺物**　貯蔵穴内より多くの遺物が検出されている。土師器坏（1・2・3・4・6）と須恵器坏（9・10）、土師器甕(12)。カマド左手よりは土師器甕（11）が、北壁中央下より土師器坏（5）が、北西隅周溝内よりは須恵器坏（8）が出土している。また、P_5の南より須恵器坏（7）が出土。　**重複関係**　溝（W－21）と重複する。南北の地層断面により新旧は旧→新とすると、H－27→W－21→W－3。(W－21、W－3参照)　（井野）



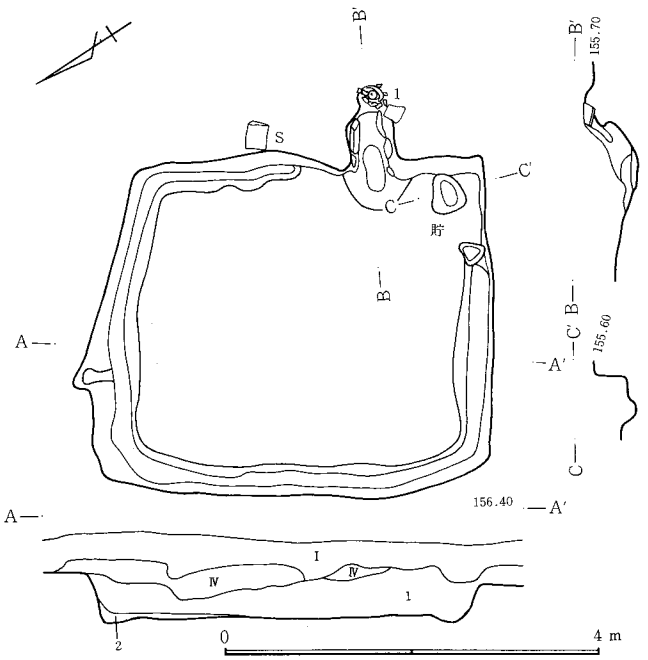
1．黒褐色土。耕作土とＦＰ・Ｃを含む。2．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石を含む。3．黒褐色土。褐色気味ＦＰ・Ｃを含む。4．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土混入。5．黒褐色土。粘性あり。焼土、ロームを含む。6．黒褐色土。黒味が強い。他は5と同。7．8．黒褐色土。8は7に焼土、ローム混入。　**カマド**　1．黒褐色土。焼土混入。2．黄褐色土。3．灰褐色土。4．黒褐色土。粘土混入。5．黒褐色土。6．黒色土。粘性強い。7．黒褐色土。焼土塊多少混入。8．黒褐色土。粘土混入。9．黄褐色土。ロームブロック混入。10．黒褐色土。やや青味があり、灰が多量に混入。

図－52　Ｈ－27号住居跡



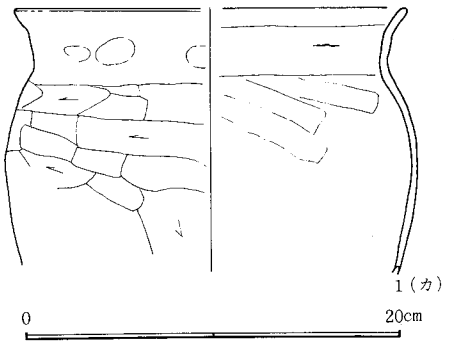
図－53　Ｈ－27号住居跡出土遺物

H28号住居跡（図－54、55　図版－４、65　表－33）(IX期)



1．黒褐色土。C軽石、ロームブロック混入。2．黒褐色土。ローム多混入。　**カマド**　1．黒褐色土。焼土混入。2．黒褐色土。粒子細く粘性なし。3．黒褐色土。ローム、灰混入。

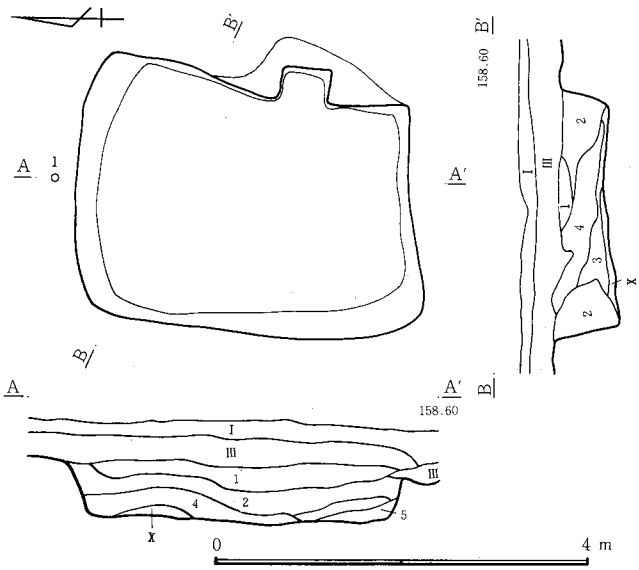
図－54　H－28号住居跡



図－55　H－28号住居跡出土遺物

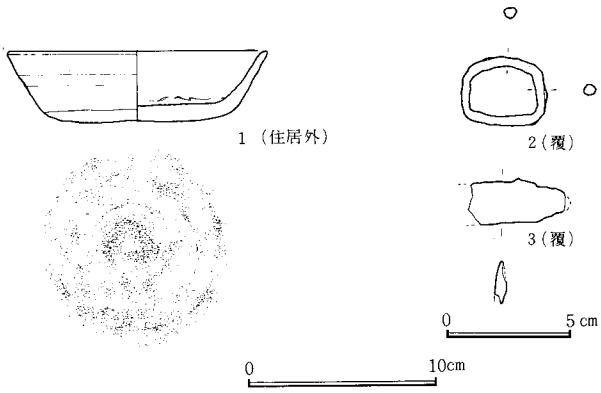
位置　西台地上のC９に所在する。H22・23号住居跡に隣接し、密集する住居跡群の西限に位置する。　**形状**　平面長方形で4.0×3.4mの大きさで、面積は12.9m²である。壁高は12～50cmで比較的低い。周溝は東壁の北半、北壁全体、西壁全体、南壁のほとんどにある。幅は15～37cm、深さ３～10cmの規模である。長軸方向はN－31°－Eである。　**床面**　踏み固め部分および貼床については不明であるが、平面図と地層断面図から貼床はなかったものと推定される。　**ピット**　住居内にピットはない。　**カマド**　東壁の中央から南に寄った位置にある。壁外の掘り込みは106cm、袖部内幅34cm、燃焼部長36cmである。構築材として右袖に１個、左袖に１個、燃焼部に３個、煙道部に１個の石材を使用している。燃焼部は床面から22cm低く、壁への掘り込み角度は32°である。　**貯蔵穴**　南東隅にあり平面不整の楕円形である。大きさは42×30cmで深さ約20cmである。　**遺物**　カマド内から土師器甕（１）が出土している。特に焼道部に集中して出土しており、甕が煙道として利用されたものと考えられる。東壁東住居外に石材を１個のこす。　（中村）

H29号住居跡（図－56、57　図版－４、65　表－34）(VIII期)



1．黒褐色土。褐色味強い。ロームブロック、ＦＰを少量含む。2．黒褐色土。3．黒褐色土。黒色土に少量のロームブロック点在。4．黒褐色土。少量のＦＰ、多量のロームブロック混入。5．暗褐色土。ロームブロック混入。

図－56　H－29号住居跡

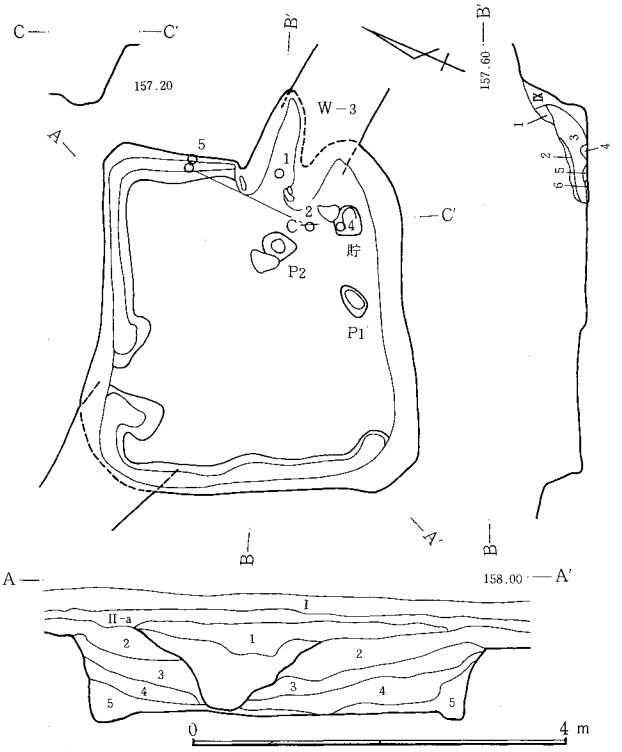


図－57　H－29号住居跡出土遺物

位置　西台地上のＪ10に所在し、H59号住居跡に隣接する。　**形状**　平面長方形で3.2×2.3mで南北に長い。面積は7.3m²で、壁高は32～45cmである。壁下周溝はない。長軸方向はN－3°－Eである。　**床面**　踏み固め部分および貼床は不明であるが地層断面図と平面図から貼床はなかったものと推定される。　**ピット**　住居跡内にはない。　**カマド**　焼土がみられず不明であるが、東壁の中央から南にみられる矩形の張出しがカマドの位置と推定される。壁外掘り込み40cm、袖部掘り形下端幅46cmである。燃焼部奥の壁は直に立っている。　**遺物**　覆土中から鉄製の刀子（２・３）と住居外より須恵器坏（１）が出土している。　（中村）

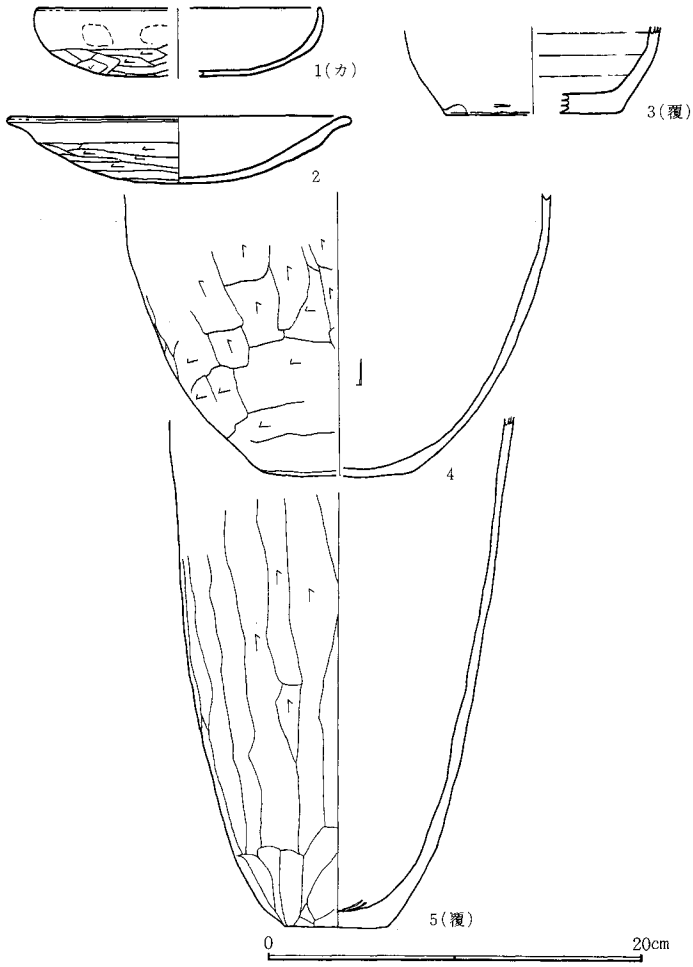
H30号住居跡（図－58、59　図版－４、65　表－35）(V期)

位置　調査区域の西台地のほぼ中央部、G10に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上に位置し、W－３と重複している。　**形状**　東西に長軸をもつ長方形で規模は東西3.4m、南北2.8m、面積9.5m²である。長軸方向は、N－67°－E、壁高は45～72cmである。カマド付近を除き全体に周溝をめぐらす。ただし南壁下は変形している。その規模は幅４～21cm、深さ２～15cmである。



1．暗褐色土。C軽石わずか混入。2．黒褐色土。ローム粒、FP小礫点在。3．黒褐色土。ロームブロック少量。FP小礫混入。4．黒褐色土。黒色味強い。5．暗褐色土。ロームブロック多く混入。　**カマド**　1．粘土の焼土。2．黒色土。浮石混入。3．黒色土。粘土・灰の混合土。4．ロームブロックが3に混入。5．焼土。6．黒色土とロームブロックの混合土。

図－58　H－30号住居跡

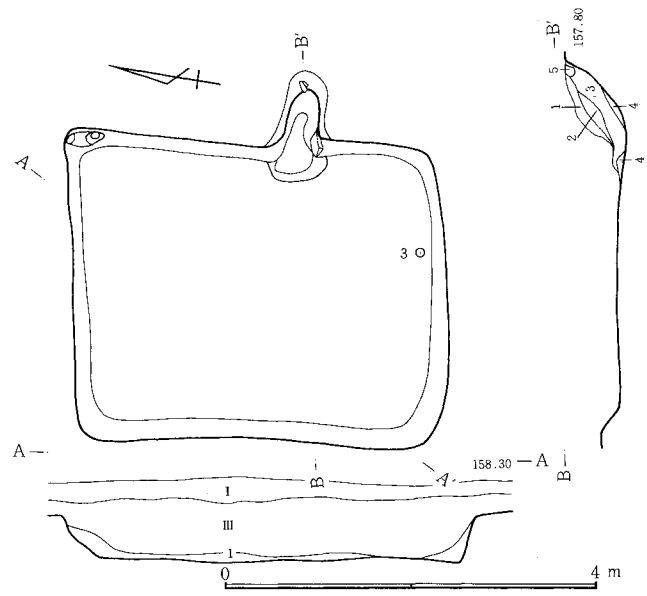


図－59　H－30号住居跡出土遺物

ピット　2つ確認される。P_1は南壁中央近くに位置し、35×22cm、深さ10cmの楕円形である。P_2は、カマド焚き口手前やや右寄りに位置し、30×30cm、深さ6cmの円形である。P_2は灰かき穴とも考えられるが埋土の性格は不明である。P_1と住居との関係も判然としない。　**カマド**　東壁やや南寄り。全長122cm、袖部内幅26cm、燃焼部分60cm、壁への掘り込み角度59°、住居床面とカマド燃焼部とのレベル差－6cmである。左袖に1個、右袖に2個の石が原位置に確認され、その他カマドの構築に使用されていたと思われるより大きな石が、P_2付近およびカマドと貯蔵穴との間にそれぞれ散在する。　**貯蔵穴**　南東隅、ほぼ円形で、29×25cm、深さ10cmである。　**遺物**　カマド内部より土師器坏（1）、貯蔵穴内およびその付近より土師器坏と甕（2・4）、カマド北側東壁面に接して床面より40cm前後高い位置に土師器甕（5）が、埋土中より須恵器壺（3）が出土した。　**重複関係**　W－3が住居の南東隅から北西隅への対角線上を通過している。覆土からみて本住居跡の方が旧い。　**テフラ**　本住居跡およびW－3の埋土上を更にB軽石を含むII－a層が覆う。

（白石）

H31号住居跡（図－60、61　図版－4、65　表－36）(IX期)



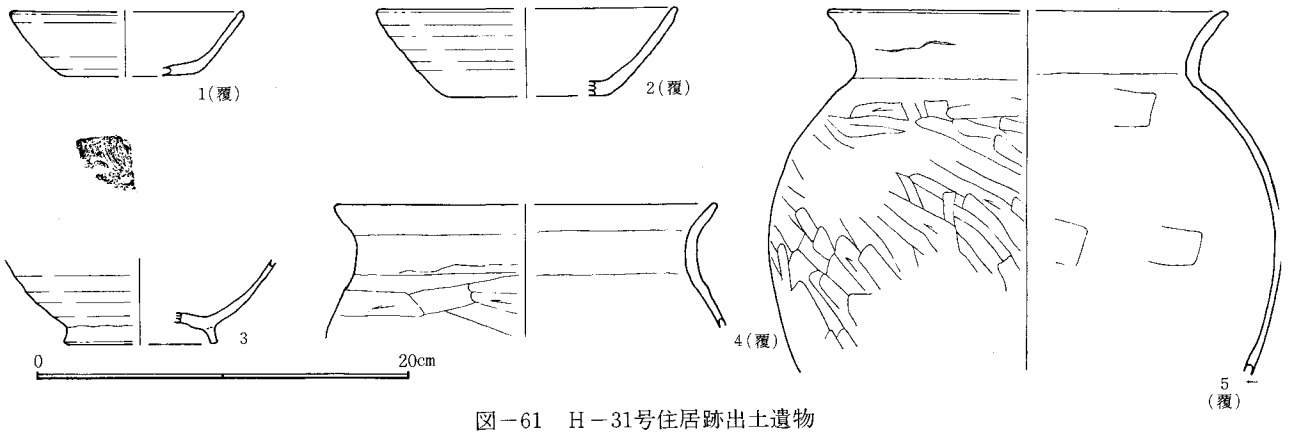
図－60　H－31号住居跡

位置　調査区域の西台地のほぼ中央部、H・G10に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上に位置する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で規模は東西2.8m、南北3.7m、面積10.5m²である。南壁は東壁及び西壁に直交しているが、北壁はやや傾いている。長軸方向はN－8°－W、壁高は42～28cmである。南壁面下に沿って周溝が認められる。その規模は幅20cm前後、深さ10cmである。

ピット　北東隅、壁に接して二つある。規模は$P_1$12×8cm、深さ28cm、$P_2$14×13cm、深さ24cmでともにほぼ円形である。住居との関係は不明。　**カマド**　東壁やや東寄り。全長96cm、袖部内幅36cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度41°、住居床面とカマド燃焼部分のレベル差－10cmである。右袖と壁との接合部分に石が使用されている。また煙道部に石および白色粘土塊が確認される。煙出し穴が明確に認められ内径が約16cmの円形である。　**遺物**　南壁下に須恵器埦（3）、埋土中より須恵器坏（1）土師器甕（4・5）カマド内より須恵器坏（2）が出土している。

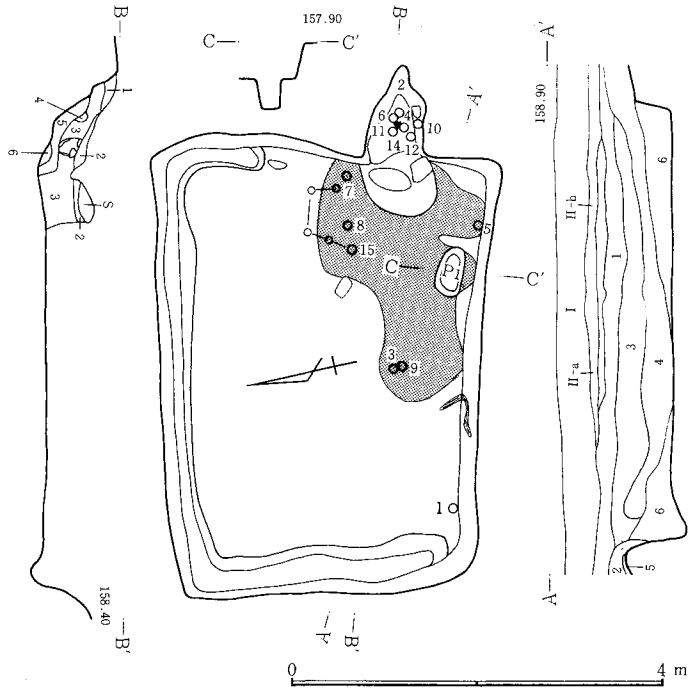
（白石）

1．暗褐色土。ロームを含む。　**カマド**　1．黒色土。浮石を含む。2．浮石を含む黒色土と粘土の混合土。3．黒色土・粘土・焼土の混合土。4．濃黒色土。5．白色粘土。



図－61　H－31号住居跡出土遺物

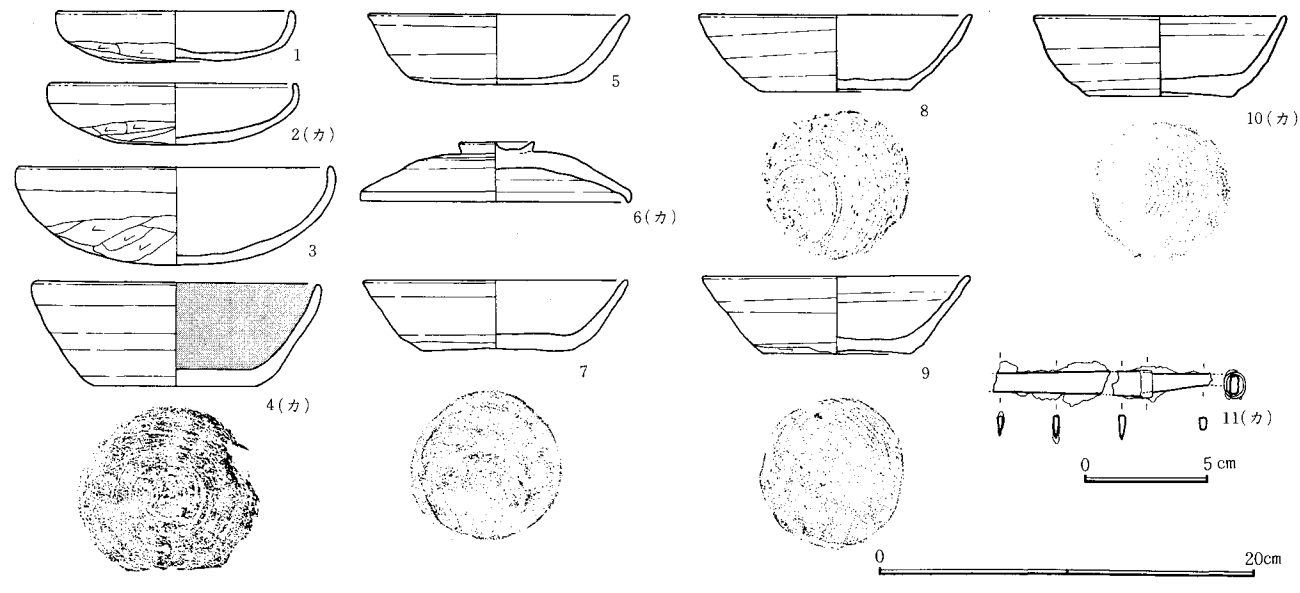
H32号住居跡（図—62、63、64　図版—4、65、66　表—37)(Ⅷ期)



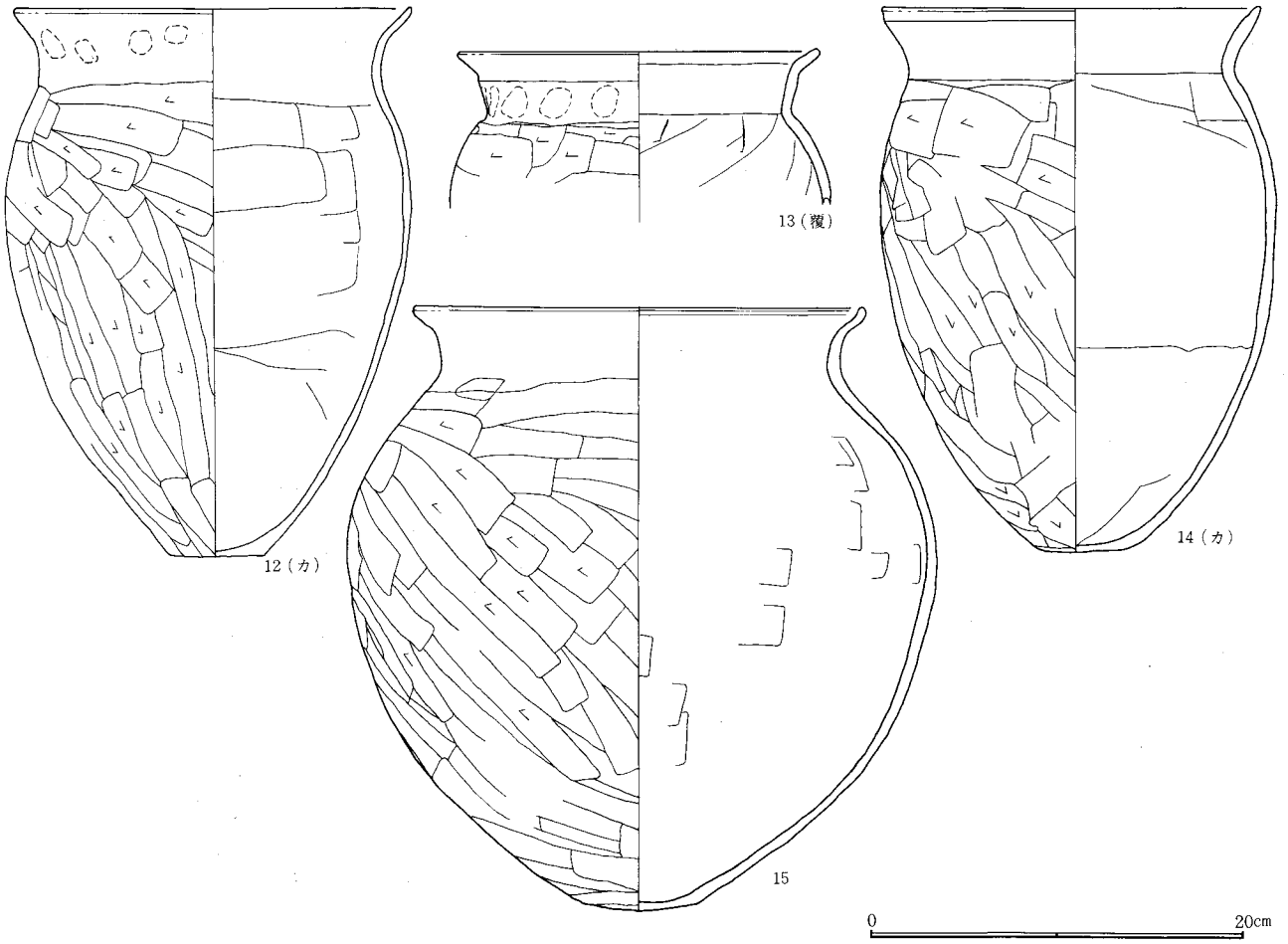
1．黒褐色土。浮石やや多く含む。2．黒褐色土。3．黒褐色土。やや褐色で軽石多く混入。4．黒褐色土。ローム小粒子混入。5．暗褐色土。ローム小粒子少量混入。6．黒褐色土。ローム小粒子混入。　**カマド**　1．黒褐色土。浮石を含む。2．黒色土。浮石を含む。3．黒色土。粒子は粗。焼土混入。4．白色粘土。焼土わずか混入。5．黒色土微砂。焼土多く混入。6．焼土。

図－62　H－32号住居跡

位置　西台地ほぼ中央付近のF12に位置する。南への緩斜面上に所在している。　**形状**　東西に長軸をもつ長方形で、南北3.1m、東西4.5mである。東壁は西壁にくらべ、約60cm長い。長軸方向は、N—78.5°—W、面積は14.3m²、壁高は45～66cmである。東壁の北4分の1と北壁、西壁下には周溝をめぐらす。幅9～27cm、深さ3～17cmである。南壁中央部にロームを主体とし、黒色土と少量の炭化物を含む土による貼り床が施されている。　**ピット**　床面1カ所(P_1)。P_1は52×26cmで深さ9cmで、穴の性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄り。付随するとみられる石が残存する。全長112cm、袖部内幅52cm、燃焼部長60cm、壁への掘り込み角度53°で、壁外掘り込み112cmである。燃焼部は、床面より8cm低い。　**遺物**　カマド内から土師器坏(2・4)と須恵器坏(10)、須恵器蓋(6)、土師器甕(12・14)が、また、(6)と(12・14)に重なるようにして鉄製品(11)が出土している。カマド前からは須恵器坏(7・8)と土師器甕(15)が、住居の中央部からは土師器坏(3)と須恵器杯(8)が出土している、南壁下からは土師器坏(1・5)が出土している。(7・8)は床面と床面近くである。カマド内からの遺物出土が多くみられた。　**テフラ**　II—b層はB軽石の純層で床面からは68cmである。　(井野)

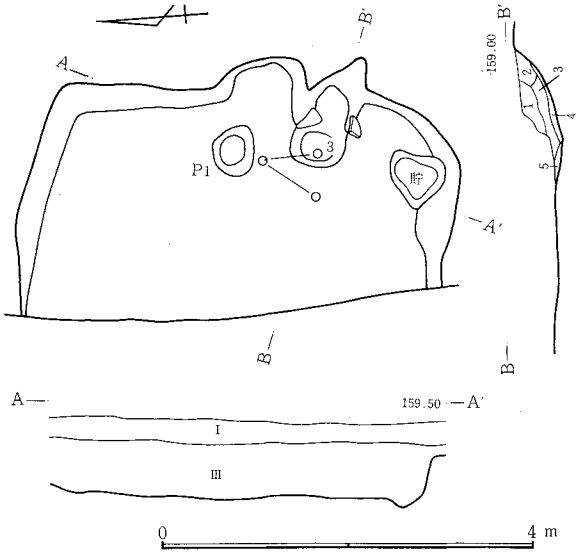


図－63　H－32号住居跡出土遺物（1）



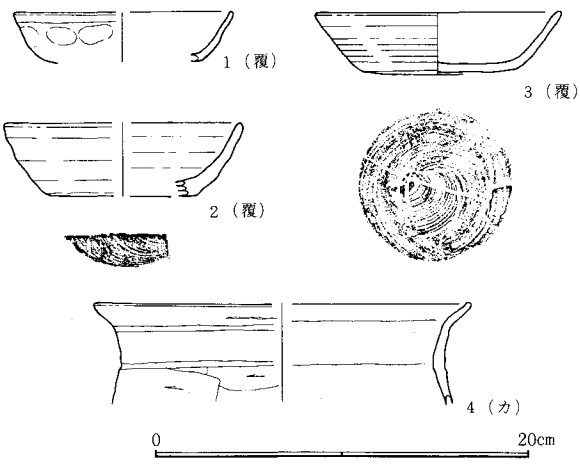
図－64　H－32号住居跡出土遺物（２）

H33号住居跡（図—65、66　図版—４、66　表—38）(IX期)



カマド　1．浮石を含む黒色土。2．白色粘土。部分的に焼けて赤い。3．粘土・焼土・黒色土の混合土。4．焼土。粘土、黒色土混入。5．濃黒色土。

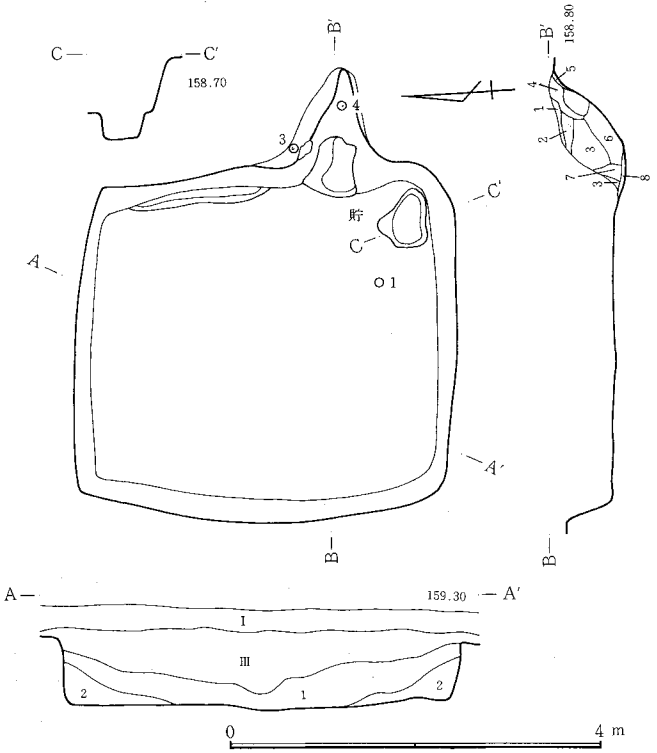
図－65　H－33号住居跡



図－66　H－33号住居跡出土遺物

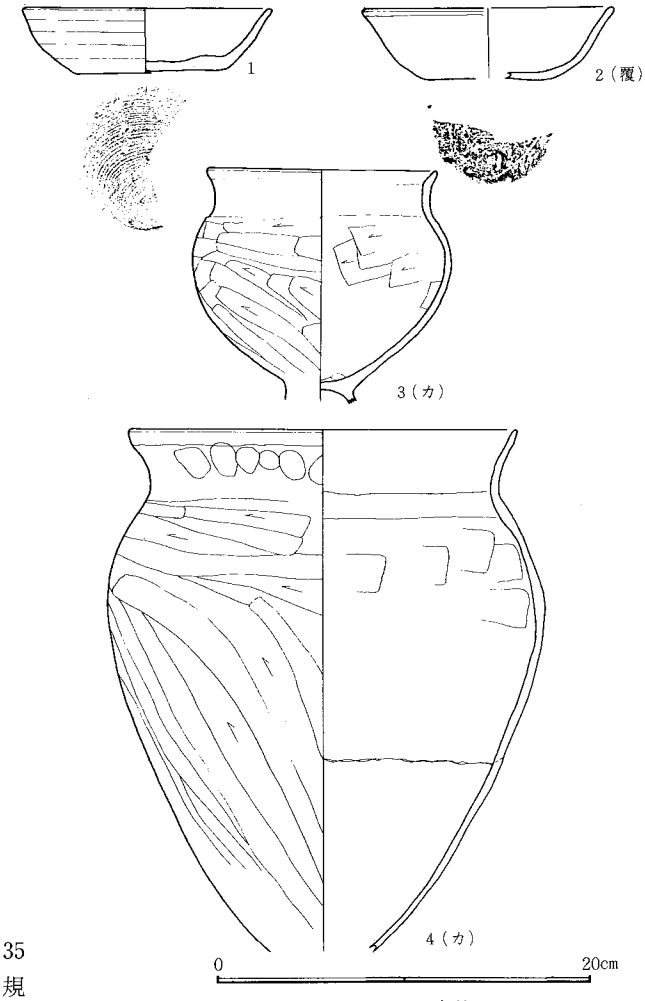
位置　西台地上のG12・H12に所在する。東にH34号住居跡に隣接し、小住居跡群の西端に位置している。　**形状**　平面は推定長方形で、南北に長い住居と考えられる。面積は8.8m²（調査範囲のみ）で、壁現高27～36cm、地層断面からは44cmである。壁下に周溝はなく、長軸方向はN－4°－Eである。　**床面**　踏み固め部分と貼床は不明であるが、地層断面図と平面図から貼床はないものと推定される。　**ピット**　カマド左前に１個あり、大きさは52×40cm深さ23cmである。　**カマド**　東壁の南寄りにあり、壁外掘り込み82cm、袖部内幅34cm、燃焼部長50cmである。構築材として両袖に各１個の石材を使用している。燃焼部は床面より６cm低く、壁への掘り込み角度は26°である。　**貯蔵穴**　南壁の東壁寄りにある。平面三角形で60×50×50cmの大きさで、深さは30cmである。　**遺物**　カマド前から須恵器坏（３）が出土している。また、埋土中より、土師器坏（１）と須恵器坏（２）、土師器甕（４）が出土している。　（中村）

H34号住居跡（図—67、68　図版—4、66　表—39)(IX期)



1．暗褐色土。ロームブロック(φ3cm)混入。2．暗褐色土。砂質。しまりなし。ローム小粒子混入。　**カマド**　1．黒色土。浮石を含む。2．白色粘土。3．粘土と黒色土の混合土。4．焼けた粘土ブロック。5．黒色土。6．焼土・灰・黒色土の混合土。7．焼けた粘土ブロックと黒色土の混合。8．濃黒色土とローム粒の混合土。

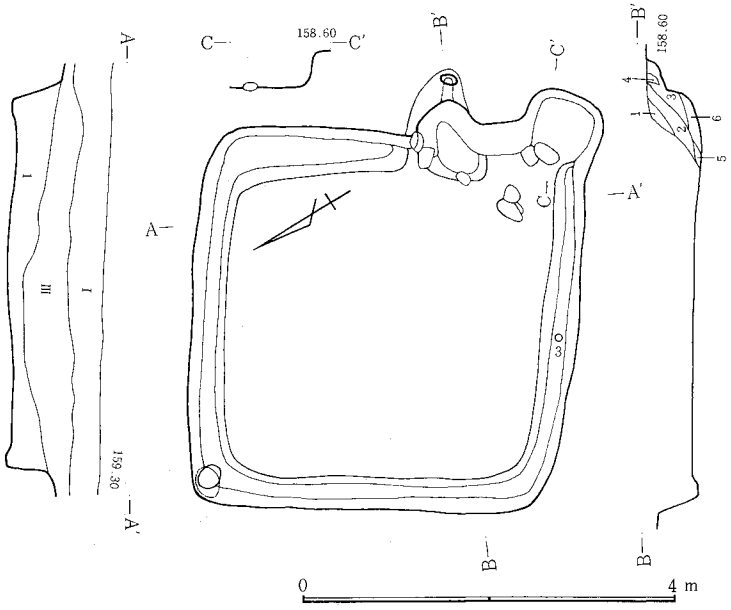
図—67　H—34号住居跡



図—68　H—34号住居跡出土遺物

位置　西台地上のG12に所在する。西にH33号住居跡が東にH35号住居跡が隣接している。　**形状**　平面は正方形で3.7×3.3mの規模で、面積は12.0㎡である。壁現高は50～59cmと比較的深く、地層断面からは70cmを測る。周溝は東壁の北半分にあり、幅6～12cm、深さ7cmである。長軸方向はN—6°—Eである。　**床面**　踏み固め部分と貼床は不明であるが、床面の凹凸が激しい。　**ピット**　住居内にない。　**カマド**　東壁の南東隅よりにある。壁外の掘り込み132cm、袖部内幅52cm、燃焼部長56cmである。構築材として燃焼部左に1個石材が使用されている。燃焼部は床面より13cm低く、壁への掘り込み角度は41°である。　**貯蔵穴**　南東隅にある。平面不整形で、62×54cmの大きさで、深さは26cmである。　**遺物**　カマドから土師器台付甕（3）と甕（4）が出土し、貯蔵穴少し西と埋土中より須恵器坏（1・2）が出土している。　（中村）

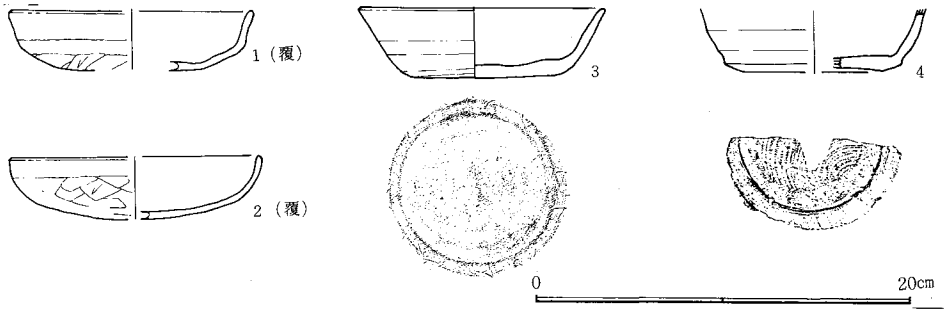
H35号住居跡（図—69、70　図版—5、66　表—40)(VIII期)



図—69　H—35号住居跡

位置　調査区の西台地上の中央近く、F12に所在する。集中する17軒の内の1軒である。　**形状**　平面は正方形で3.8×3.8mの大きさで、壁現高は22～41cmである。周溝は東壁の北半分と他の3壁全部に認められ、幅7～36cm、深さ2～11cmであった。長軸方向はN—35°—Eで、面積は14.6㎡である。また、隅丸方形の張り出しが、東壁の外で南壁の延長上にあり、大きさは64×66cmであった。　**床面**　踏み固め部分は不明であり、貼床は認められない。　**ピット**　北西隅に40×30cm、深さ33cmのピットがあり、65°の角度で住居中心に傾斜している。　**カマド**　東壁の中央から南寄りに壁外に掘り込まれつくられている。全長86cm、袖部幅44cm、燃焼部長40cmの大きさである。燃焼部のレベルは床面より—10cmで、壁への掘り込み角度は62°であった。構築材として左袖に2個、焚き口に1個の石材が

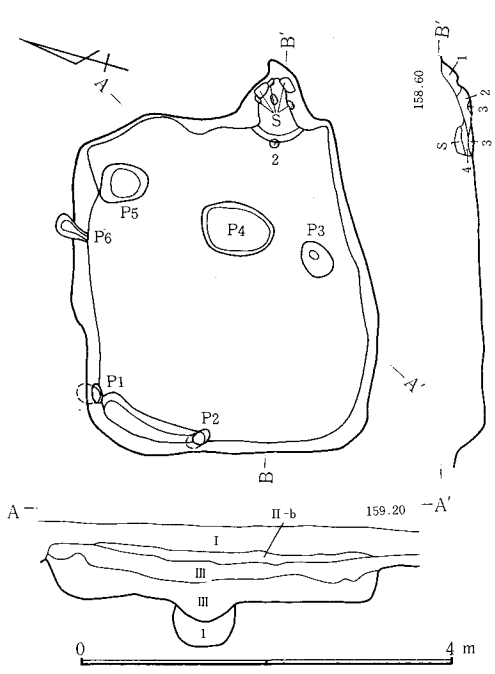
1．黒褐色土。ロームブロック点在。　**カマド**　1．黒色土。浮石を含む。2．浮石を含む黒色土、粘土、焼土の混合土。3．黒色土。焼土塊を多量に含む。4．焼土。5．灰。焼土少量含む。6．やや黒色の灰。炭化物、焼土を含む。



図－70　H－35号住居跡出土遺物

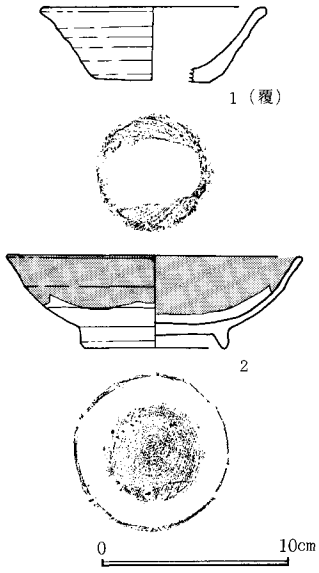
使用されていた。　**貯蔵穴**　認められない。　**遺物**　南壁中央の周溝上から須恵器坏（3）が出土している。他に土師器坏（1・2）、須恵器坏（4）が出土している。　**テフラ・重複関係**　これらについては認められない。　（中村）

H36号住居跡（図－71、72　図版－5、66　表－41）(XIII期)



1．暗褐色土。　**カマド**　1．黒色土と漸移層の混合土。浮石を含む。2．焼土とロームの混合土。3．濃黒色土とローム。灰を含む。4．焼土と黒色土。5．暗褐色土。

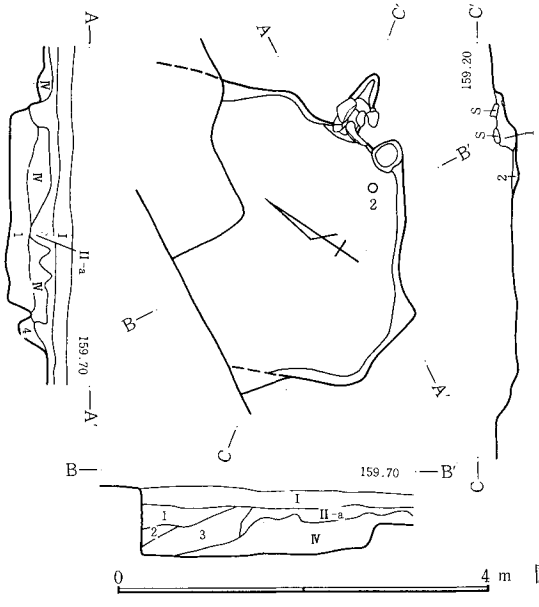
図－71　H－36号住居跡



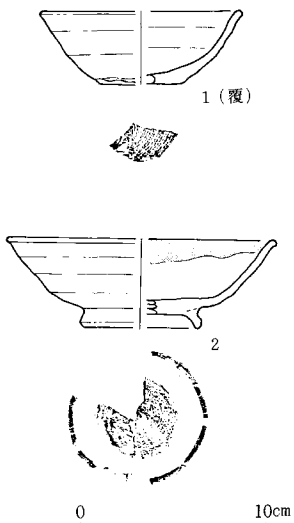
図－72　H－36号住居跡出土遺物

位置　台地のほぼ中央のF12に位置し、南への緩斜面上に所在する。付近は竪穴住居跡が散在する。　**形状**　東西に長軸をもつ長方形で、規模は南北2.8mで東西3.3mである。長方形でも隅丸に近く、壁はいずれもやや外に膨んでいる。長軸方向はN－67°－Eで、面積は9.1m²である。壁高は29～38cmである。西壁の北半分に周溝をめぐらす。幅は7～18cmで、深さ3cmである。　**ピット**　床面6カ所。P_1は18×11×3cm、P_2は19×14×16cm、P_3は40×27×13cm、P_4は75×55×48cm、P_5は50×40×22cm、P_6は38×18cmである。いずれも住居との係わりは不明である。　**カマド**　東壁南寄り。構築材が煙道部に5石、煙道の左右に配されている。支石が1石。全長74cm、燃焼部長54cm、袖部内幅44cm、壁への掘り込み角度31°、壁外掘り込み74cmである。燃焼部は床面にくらべて1cm低くなっている。　**遺物**　カマド燃焼部のすぐ西より灰釉陶器埦（2）が出土している。また、埋土中より土師質須恵器坏（1）が出土。　**テフラ**　II－b層はB軽石の純層である。床面よりは42cmを測る。　（井野）

H37号住居跡（図－73、74　図版－5、66　表－42）(XII期)



図－73　H－37号住居跡



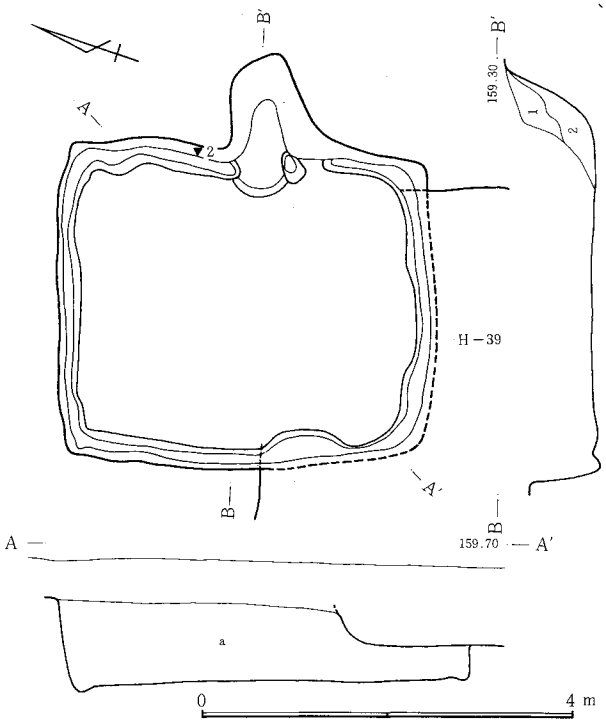
図－74　H－37号住居跡遺物

1．黒褐色土。下部にローム混入。2．黒色土。砂質。3．動いているローム。4．暗褐色土とロームの混合土。　**カマド**　1．栗色土と軽石を含む黒色土の混合土。わずかに焼土を含む。2．ローム。少量の軽石を含む黒色土混入。

位置　E13に位置する。西台地の中央部で南への緩斜面上にある。付近は竪穴住居跡が散在する。　**形状**　攪乱のために規模・形状ともに確定できなかった。規模は現状で南北2.2m東西2.7mである。面積は現状で5.2m²である。壁高は17～19cmで、地層断面図からは42cmを測る。長軸を南北とすると、長軸方向はN－27°－Wである。　**ピット**　なし。　**カマド**　東壁南寄り。構築材が、左右の袖部に各1石と燃焼部に4石ある。全長72cm、燃焼部長44cm、袖部内幅26cm、壁への掘り込み角度13°、壁外掘り込み72cmである。燃焼部は住居床面にくらべて5cm低い。袖部の石は元来袖部に立っていたものが内側に崩れたものと考えられる。壁体として使用された石も同様である。　**貯蔵穴**　南東隅。規模は28cm×24cmで深さ8cmで円形である。　**遺物**　カマド

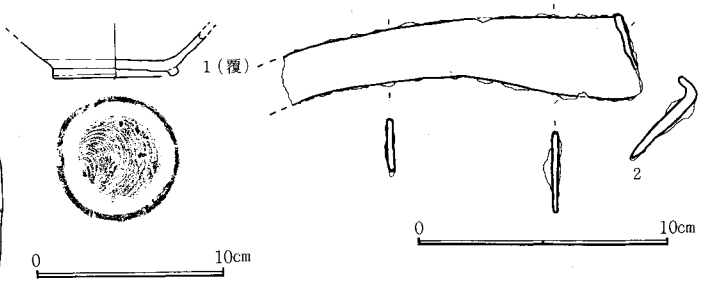
右手の貯蔵穴西より灰釉陶器埦（２）が、埋土中より土師質須恵器坏（１）が出土している。（井野）

H38号住居跡（図—75、76　図版—５、66　表—43）（X期）



a．暗褐色土。ロームブロック混入。1．黒褐色土。浮石を含む。2．黒褐色土。焼土塊、灰、粘土塊混入。

図－75　H－38号住居跡

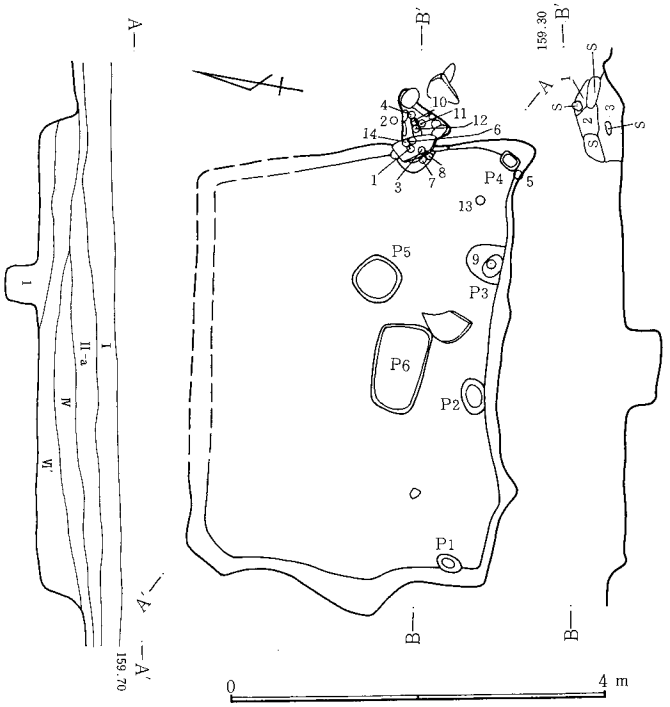


図－76　H－38号住居跡出土遺物

位置　F13に位置する。西台地の中央部で、南への緩斜面上に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形である。規模は南北3.9mで、東西3.2mである。面積は12.3㎡である。壁はロームをしっかりと掘りこんでおり、壁高は62～91cmを計る。長軸方向は、N—21°—Wである。周溝は全周にめぐらされている。幅４～24cmで、深さ５～14cmである。　**ピット**　カマド右袖部に１カ所。34cm×18cmで深さ14cmである。カマドに係わりのピットとも考えられる。　**カマド**　東壁やや南寄り。全長124cmで、燃焼部長74cm、袖部内幅44cm、壁への掘り込み角度59°、壁外掘り込み124cmである。燃焼部は床面にくらべて１cm低い。　**遺物**　カマド北側の東壁周構内より、鉄製品鎌（２）が出土している。また、埋土中より須恵器埦（１）が出土している。

重複関係　H—39と重複している。H—38の南西部が、H—39と重なり、その部分にH—39の貼り床が施こされていることよりH—38が旧い。（井野）

H39号住居跡（図—77、78　図版—５、67　表—44）（XII期）

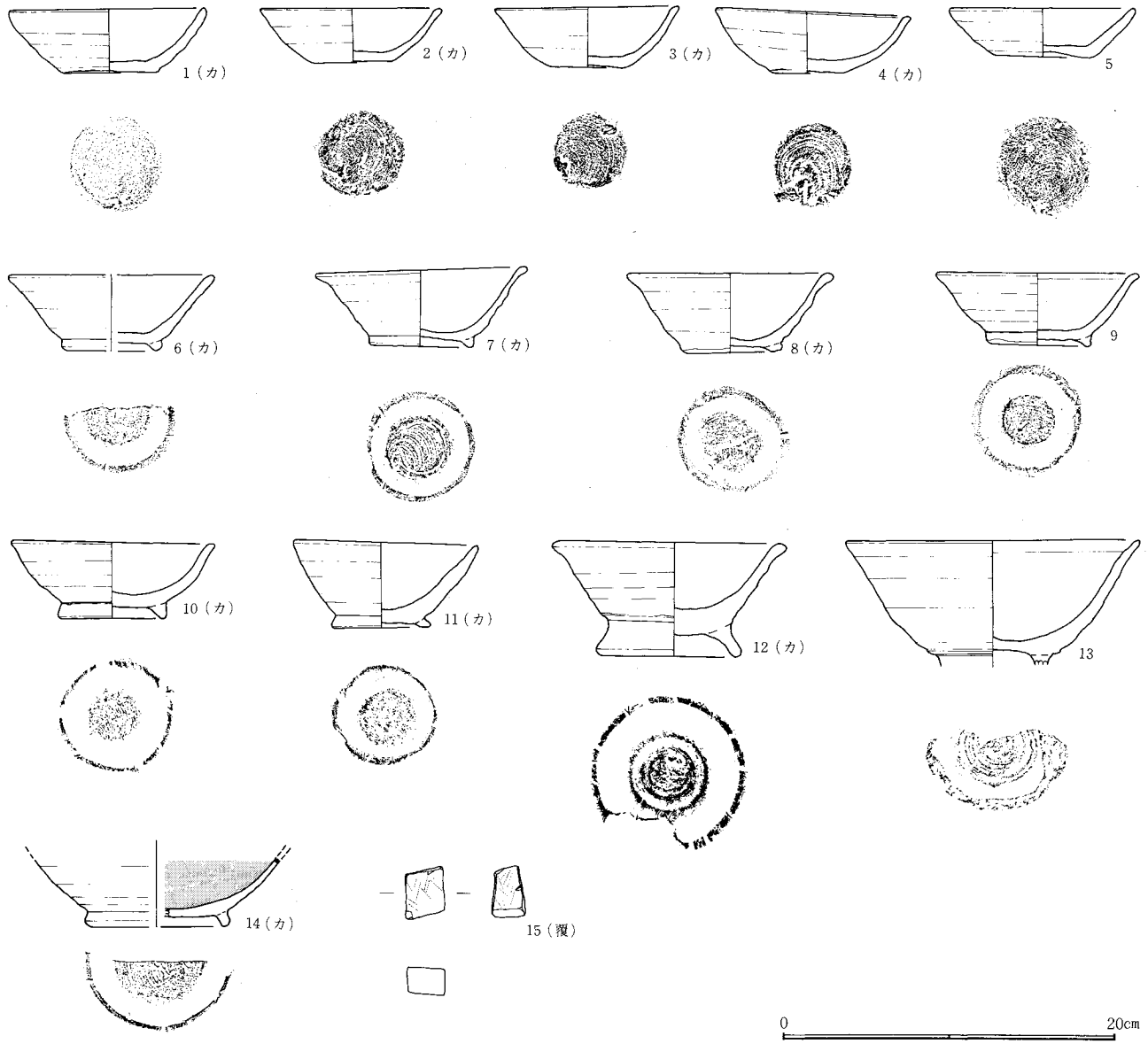


1．黒褐色土。ロームブロック少量含む。　**カマド**　1．焼土・灰・浮石を含む黒色土。2．黒褐色土。３よりも堅い。浮石混入。3．黒色土。均質な砂質。しまりがない。

図－77　H－39号住居跡

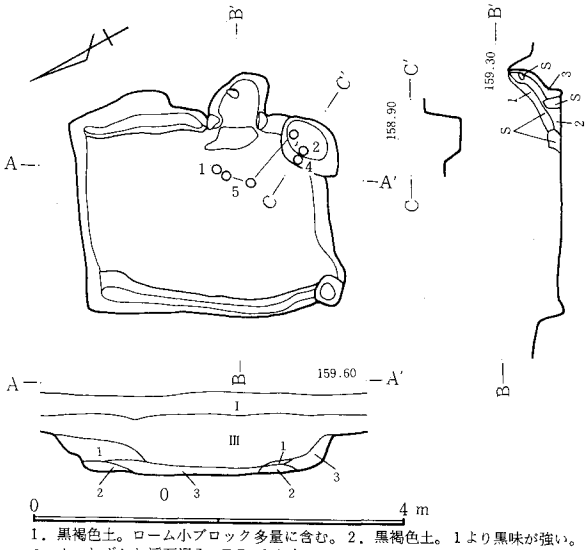
位置　F13。　**形状**　東西に長軸をもつ長方形で、規模は南北が2.9m、東西が4.4mである。南壁はやや内に膨らむが、他の壁はほぼ直線に掘り込まれている。北壁は南壁にくらべて短い。長軸方向はN—79.5°—Eで面積は13.1㎡である。壁高は、27～41cmである。H—38との重複部分はH—38の堆積土をそのまま床にしたものと考えられる。周溝はない。　**ピット**　床面に６カ所。P_1は23×16×24cm、P_2は37×25×13cm、P_3は38×40×17cm、P_4は20×14×10cm、P_5は48×46×32cm、P_6は95×52×48cmである。P_1～P_4は、P_1とP_4、P_2とP_3がそれぞれ大きさ等が対応しており、住居に係わるものと考えられる。P_5、P_6の性格は不明である。

カマド　東壁やや南寄り、構築材が組まれたままで検出された。左右に袖石をおき、その上に天井石が組んであった。さらに燃焼部壁には石が組まれてあった。煙道部にも煙道の上に石がおかれていた。カマド煙道部南の石もカマド煙道の構築材と考えられる。全長68cm、燃焼部分39cm、袖部内幅34cmで壁への掘り込み角度30°、壁外掘り込み68cmである。燃焼部は床面にくらべて３cm低い。　**遺物**　カマド付近より須恵器坏（１・２・３・４）と須恵器埦（６・７・８・10・11・12）が出土、さらに灰釉埦（14）が出土している。また、住居東南隅より須恵器坏（５）が出土、P_3内より須恵器埦（９）が出土、カマド手前の右手より須恵器埦（13）が出土、埋土中より砥石（15）が出土している。カマド内より遺物が集中して出土している。　**テフラ**　II—a層はB軽石を主とする層である。　**重複関係**　H—38と重複する。H—38の埋土を切って壁が作られていることと、H—38の埋土がH—39の床面下であることから、H—38とH—39の新旧はH—39が新しい。（井野）



図－78　H－39号住居跡出土遺物

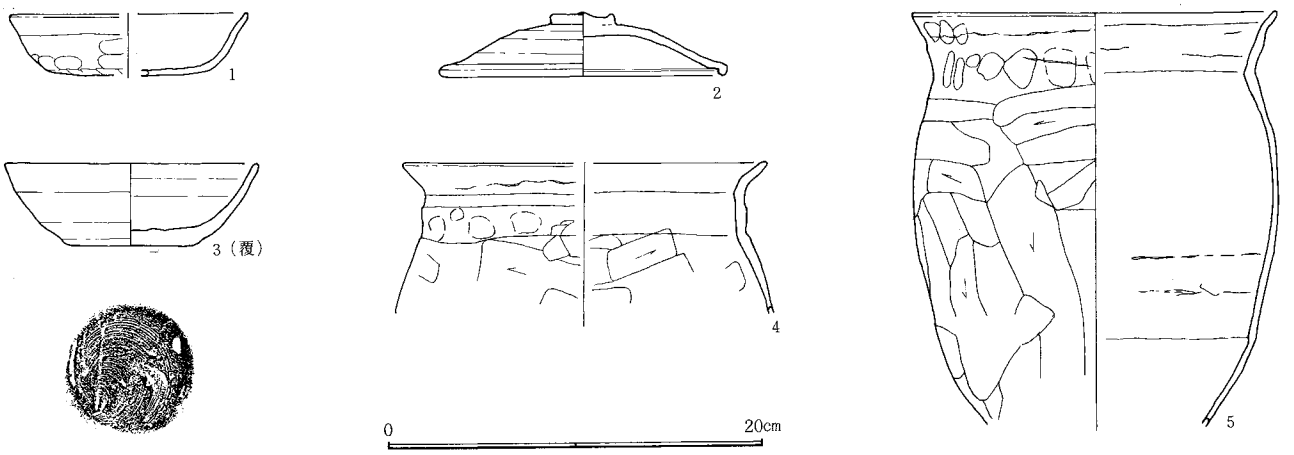
H40号住居跡（図―79、80　図版―5、67　表―45）（X期）



Ⅰ．黒褐色土。ローム小ブロック多量に含む。2．黒褐色土。1より黒味が強い。ローム、わずかな浮石混入。FP・Cを含む。3．黒褐色土。FP・Cを含む。　カマド　1．黒褐色土。軽石を含む。2．黒褐色土。軽石、焼土を含む。3．焼土塊。

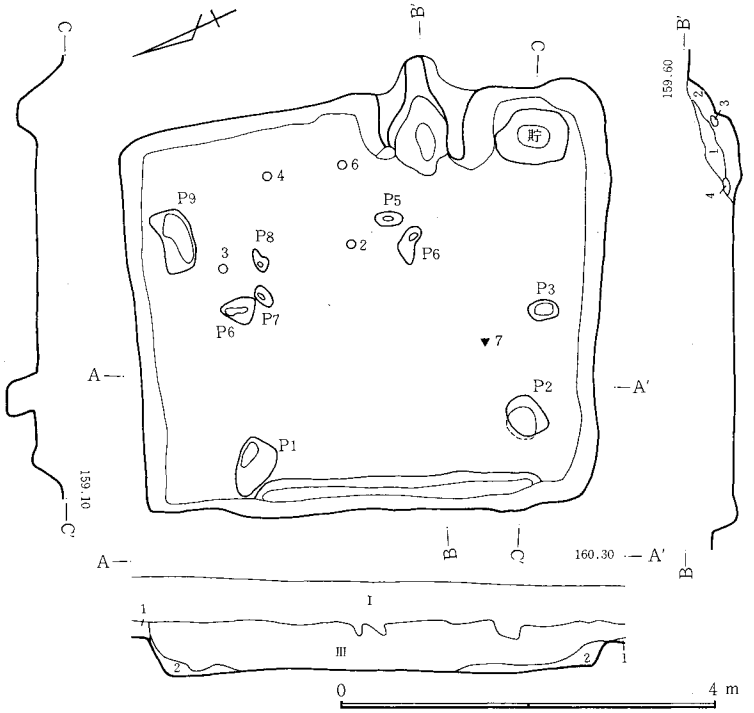
図－79　H－40号住居跡

位置　G13に位置する。西台地のほぼ中央で南への緩斜面上に所在している。付近には竪穴住居跡が散在し一群を成している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、やや平行四辺形に近い。規模は南北が2.4mで東西が2.1mである。長軸方向はN－27°－E、面積は4.9㎡である。壁高は2～37cmで、地層断面図からは42cmを測る。西壁と東壁の北半分に周溝をめぐらす。幅18～30cmで、深さ2～8cmである。　**ピット**　床面南西隅に1カ所。規模は28×26cmで深さは15cmである。性格は不明である。　**カマド**　東壁やや南寄りにある。構築材として、カマド焚き口に上から崩れおちたように1石。左右の袖部に各1石、燃焼部左壁に1石がある。燃焼部は壁を方形に掘りこんでおり、さらに煙道が続いている。全長61cm、燃焼部長36cm、袖部内幅34cm、壁への掘り込み角度40°、壁外掘り込み61cmである。燃焼部と床面とは同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東壁隅。楕円形で、60×52cmで深さ18cmである。　**遺物**　カマド前より土師器坏（1）が出土、貯蔵穴内より土師器甕（4・5）と須恵器蓋（2）が出土、埋土中より須恵器坏（3）が出土。　**テフラ**　2層中に多量のFPとC軽石を混入。　（井野）



図－80　H－40号住居跡出土遺物

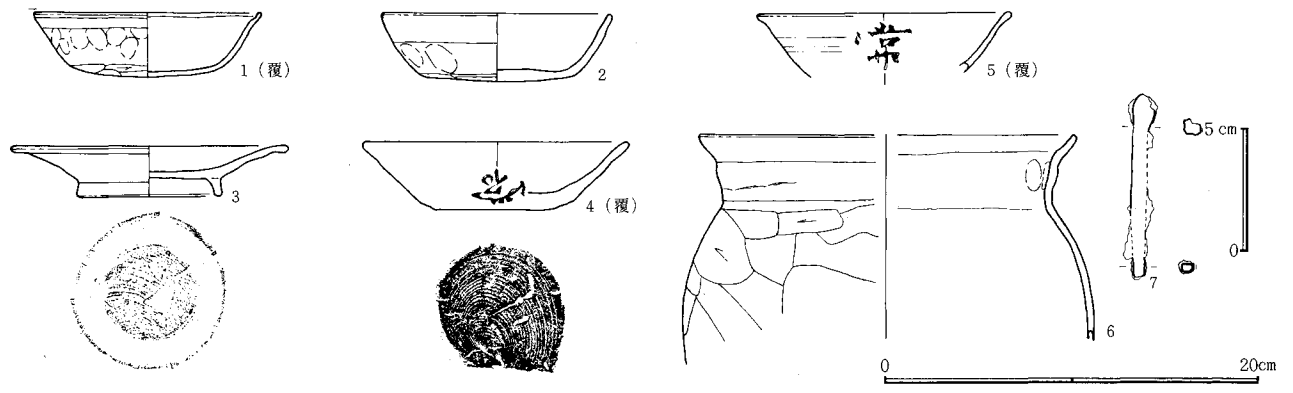
H41号住居跡（図—81、82　図版—5、67　表—46)(X期)



1．黒褐色土。2．黒褐色土。ローム・焼土を多く含む。　**カマド**　1．黒褐色土。軽石を含む。2．黒褐色土。焼土、灰が混入する。3．焼土塊。4．黒褐色土。粘性あり。

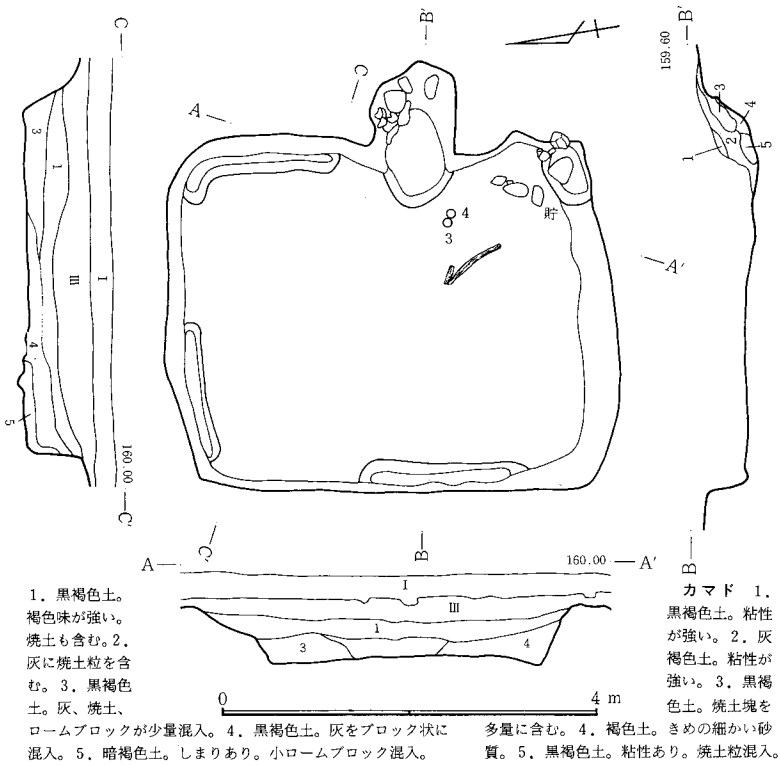
図－81　H－41号住居跡

位置　F14。　**形状**　南北がやや長いがほぼ正方形で規模は東西4.0m、南北4.6m、面積17.9m²である。長軸方向はN－19.5°－E、壁高は22～37cmである。西壁の約3分の2だけに周溝が認められる。その規模は幅10～72cm、深さ1～4cmである。　**ピット**　9つ確認される。P_1、62×36cm、深さ13cmの楕円形、P_2、43×54cm、深さ28cmのほぼ円形、P_3、29×21cm、深さ12cmの楕円形、P_4、37×14cm、深さ6cmの不定形、P_5、30×15cm、深さ2cmの楕円形、P_6、34×25cm、深さ12cmの不定形、P_7、24×14cm、深さ4cmの楕円形、P_8、24×8cm、深さ15cmの不定形、P_9、66×32cm、深さ11cmの長方形。$P_1P_2P_3P_4$は柱穴を想定させるが他のピットの性格は不明。　**カマド**　東壁中央南寄り、全長112cm、袖部内幅56cm、燃焼部分62cm、壁への掘り込み角度45°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－9cm、両袖部は住居内に深く入り込み煙出し穴だけが壁外に出ている。左袖先端に石が使用されている。　**貯蔵穴**　南東隅カマド右袖脇、長方形で76×60cm。深さ19cmである。　**遺物**　カマドの北で東壁ぎわの床面上23cmの覆土中から「常」と釈文の須恵器坏（4）、中央より南西寄りP_3近くの床面直上から、鉄製品釘（7）が出土した。埋土中より墨書の須恵器坏（5）土師器坏（1）が、カマド前の床面より土師器坏（2）が出土、同じくカマド前の床やや上より須恵器皿（3）と土師器甕（6）が出土している。　（白石）



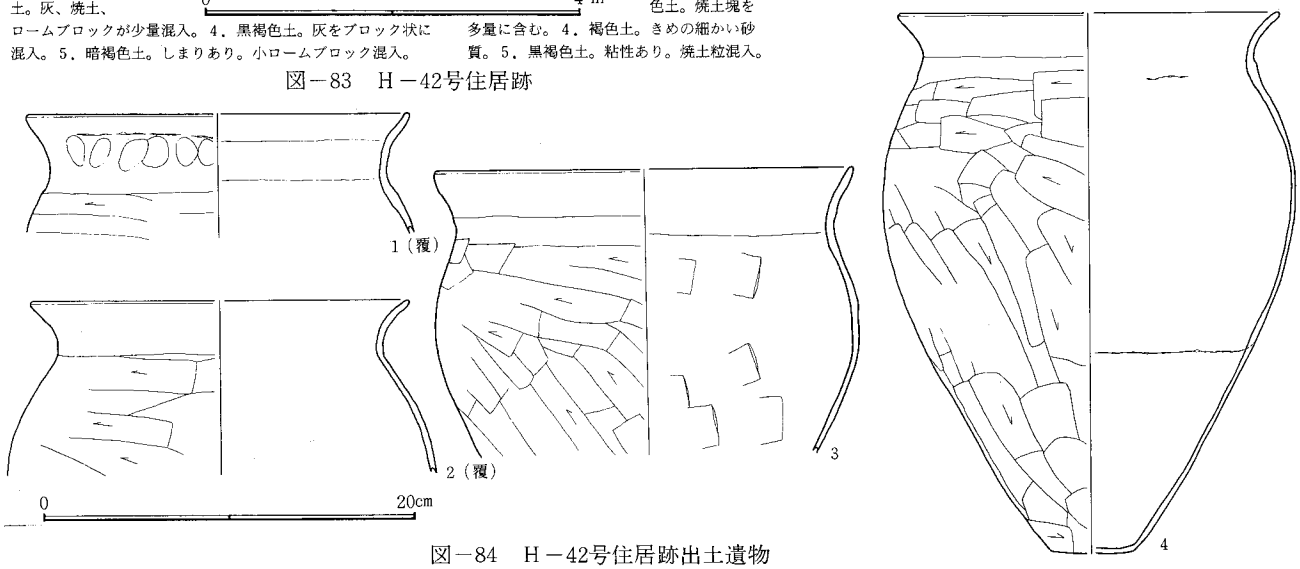
図－82　H－41号住居跡出土遺物

H42号住居跡（図—83、84　図版—5、68　表—47)(Ⅷ期)



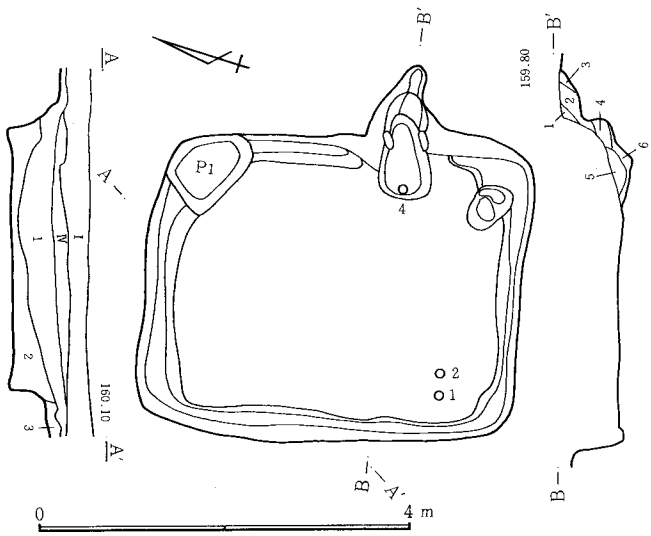
位置　西台地のほぼ中央部のF14に位置する。小竪穴住居群を形成している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、規模は南北4.2mで東西3.4mである。各壁はやや外に膨らむ。長軸方向はN—6.5°—Eで面積は13.7m²である。壁高は29～54cmである。北壁の西2分の1と西壁の南2分の1、東壁の北2分の1に周溝をめぐらす。幅5～16cmで、深さ1～3cmである。　**ピット**　南東隅に1カ所、規模は52×36cmで上部に石があった。性格は不明である。　**カマド**　東壁やや南寄りにある。構築材として、燃焼部に6石、煙道部に4石がのこる。いずれも左壁を中心に組まれてあった。その他床面南東隅に石が多く検出されており、関係があるとも考えられる。全長116cm、燃焼部長68cm、袖部内幅62cm、壁への掘り込み角度49°、壁外掘り込み116cmである。燃焼部は床面にくらべて14cm低い。　**遺物**　カマド手前より土師器甕（3・4）が出土、埋土中より土師器甕（1・2）が出土している。その他カマド右手前より炭化物(74×8cm）が検出された。　（井野）

図—83　H—42号住居跡



図—84　H—42号住居跡出土遺物

H43号住居跡（図—85、86　図版—5、68　表—48)(Ⅸ期)

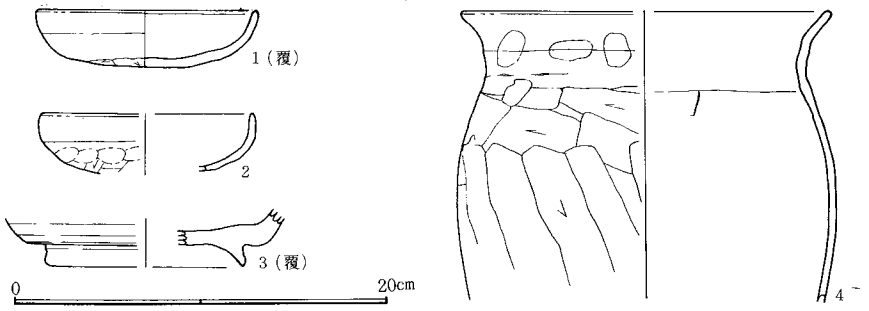


位置　西台地上のF14に所在する。H35号住居跡を含む小住居跡群の最北に位置し、南にはH42号住居跡が隣接している。

形状　平面は長方形で3.8×3.0mの規模で南北に長い。面積は11.2m²である。壁現高は23～42cmで、地層断面図からは36cmを測る。周溝はカマドを除き全周している。幅は4～22cm、深さ3～8cmで、北壁側が幅が広い。全体的に浅い溝である。長軸方向はN—15°—Wである。　**床面**　踏み固め部分や貼床は不明である。しかし、平面図や地層断面図からすると、なかったものと推定される。　**ピット**　北東隅に浅いピットがある。大きさは76×54cm、深さ12cmの平面矩形である。柱穴とは考えられない。　**カマド**　東壁の中央から南寄りにある。壁外の掘り込み長98cm、袖部内幅30cm、燃焼部長40cmである。構築材として左袖に1個、右袖に1個石材が使用されている。燃焼部は床

1．黒褐色土。ロームブロック混入。2．黒褐色土。ローム小ブロック、浮石少量混入。3．黒褐色土。　**カマド**　1．黒色土。軽石を含む。2．黒色土。焼土ブロック、灰、少量の軽石を含む。3．栗色土。4．栗色土。締りあり。焼土ブロック混入。5．栗色土。締りなし。6．栗色土とロームの混合土。焼土を少量含む。

図—85　H—43号住居跡



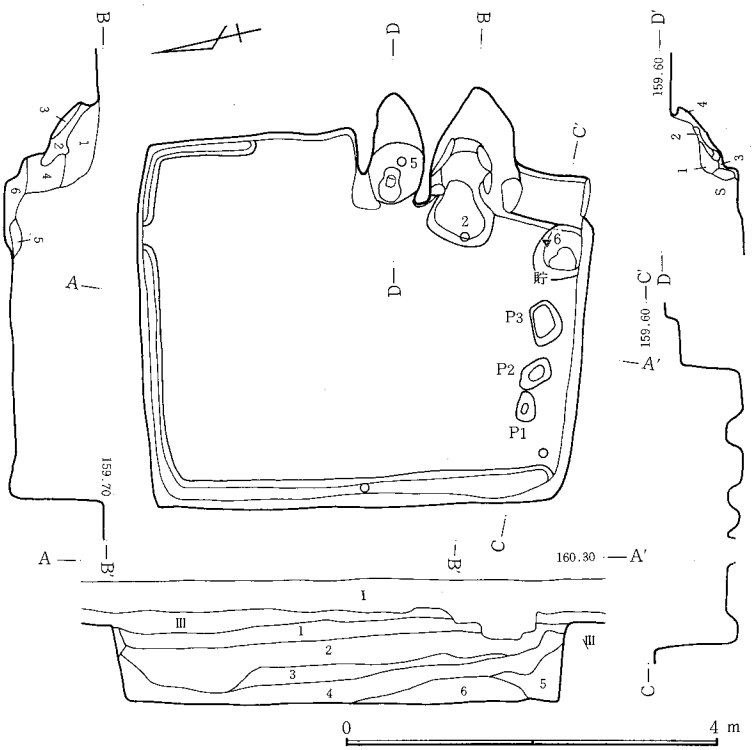
図－86　H－43号住居跡出土遺物

面より14cm低く、壁への掘り込み角度は45°である。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面不整形である。大きさは51×36cm、深さ12cmで内部に1個石がある。

遺物　土師器甕（4）がカマド前から出土している。南西隅床面から土師器坏（1・2）が出土している。

（中村）

H44号住居跡（図—87、88　図版—6、68　表—49）（X期）

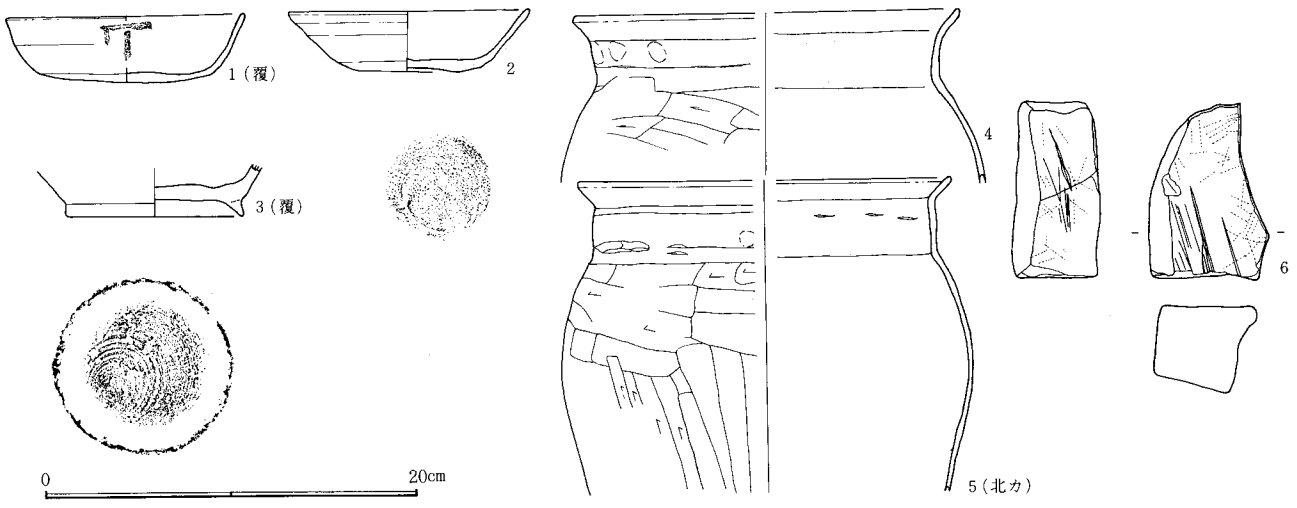


1．暗褐色土。ロームブロック多量に含む。2．黒褐色土。ロームブロック少量混入。3．黒褐色土。2より褐色味が強い。4．黒褐色土。ロームブロック混入。5．黒色土。浮石を含む。6．黒色土。焼土粒少量混入。7．黒褐色土。　**北カマド**　1．黒色土。2．ローム。3．茶褐色土。ローム混入。4．茶褐色土。　**南カマド**　1．黒褐色土。軽石を含む。2．黒褐色土。焼土ブロック混入。3．黒褐色土。微砂。4．黒褐色土粗砂。軽石混入。5．黒褐色土。6．黒褐色土微砂。灰、焼土粒を含む。

図－87　H－44号住居跡

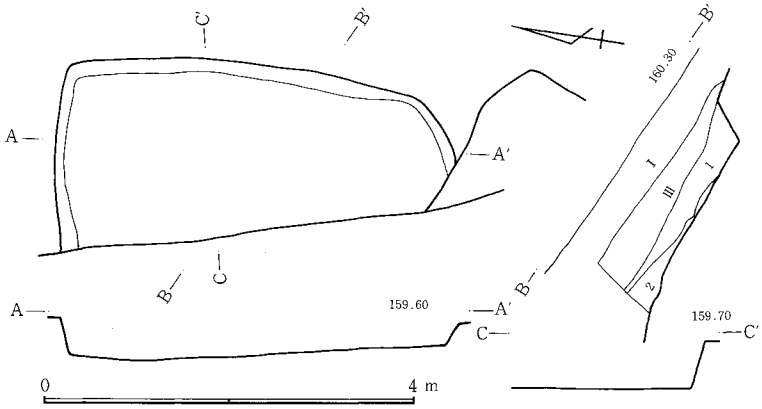
位置　F14に位置する。西台地の北部で、南への緩斜面に所在している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北4.5m、東西3.9mである。東壁の南部分が他の壁にくらべて傾いているほかは、隅もほぼ直に交わっており、壁もしっかりと掘りこまれている。長軸方向はN—19°—Eで面積は15.5m²である。壁高は55～77cmで、地層断面からは84cmを測る。周溝は西壁と、北壁の大部分、東壁の北4分の1にめぐる。幅6～26cmで深さ2～11cmである。南カマドの南の東壁沿いに棚状遺構がある。長方形で、規模は64×46cmである。床面より52cmである。　**ピット**　床面3カ所。P_1は36×20cmで深さ12cm、P_2は37×24cmで深さ12cm、P_3は41×31cmで深さ17cm。いずれも南壁下に東西に並んでおり、住居入口に係わる施設とも考えられる。　**カマド**　東壁に2カ所。北のカマドは袖部はロームを70cm近く掘りのこしている。全長124cmで燃焼部長60cm、袖部内幅40cm、壁への掘り込み角度31°、燃焼部にくらべて床面は9cm高い。支石が中央にある。南のカマドは構築材として、燃焼部に4石をもつ。棚状遺構との間にさらに1石がのこる。全長130cm、燃焼部長78cm、袖部内幅42cm、壁への掘りこみ角度43°、壁外掘り込み78cmである。燃焼部は床面にくらべ11cm低い。　**貯蔵穴**　南東壁。方形に近い円形。57×37cmで深さ13cmである。　**遺物**　カマド内より土師器甕（5）と須恵器坏（2）が、貯蔵穴内より砥石（6）が、西壁下より須恵器高台付鉢（3）と土師器甕（4）が出土している。

（井野）



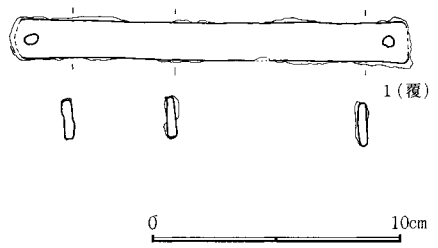
図－88　H－44号住居跡出土遺物

H45号住居跡（図—89、90　図版—6、68　表—50)(IX期)



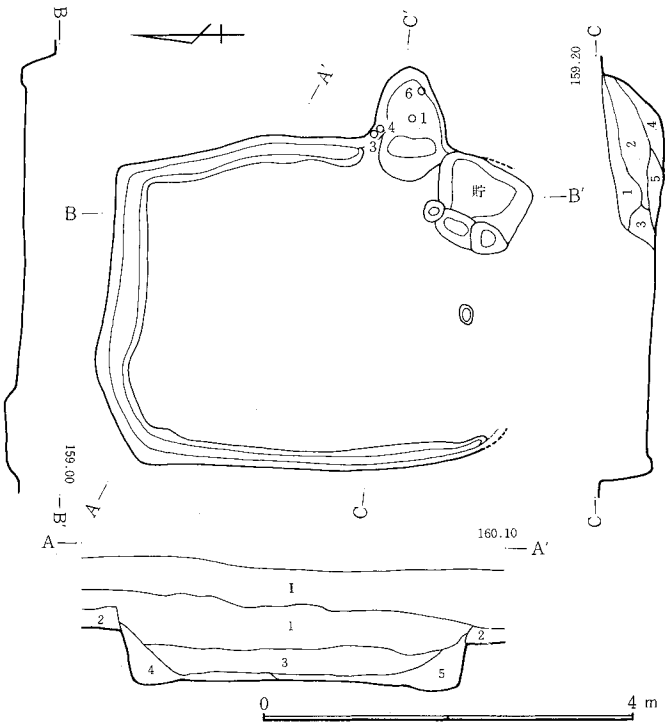
1．黒色土。軽石を多量に混入。2．黒色土。多量のロームブロック混入。

図—89　H—45号住居跡



位置　調査区域の西台地の南端部、F・G14に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上に位置し東隣には住居跡が密集している。本住居跡はかかる一群の西端に位置する。　**形状**　西半分は耕作のために破壊され定かではないが南北4.1mの方形である。調査部分の規模は東西1.6mで面積6.1m²である。長軸方向N—1.5°—W、壁高32～52cmである。検出された東壁に沿って、カマド、炉あるいは焼土面はなく、また、周溝、ピット等も確認されないことから、住居跡であるとは断定し難いが周囲の遺構との関係および、覆土から一応住居跡であろうとは想定される。床面（推定）は南より北方向にやや低く傾斜し、南壁に対して北壁は高い。　**遺物**　覆土中より鉄製品（1）が出土している。　（白石）

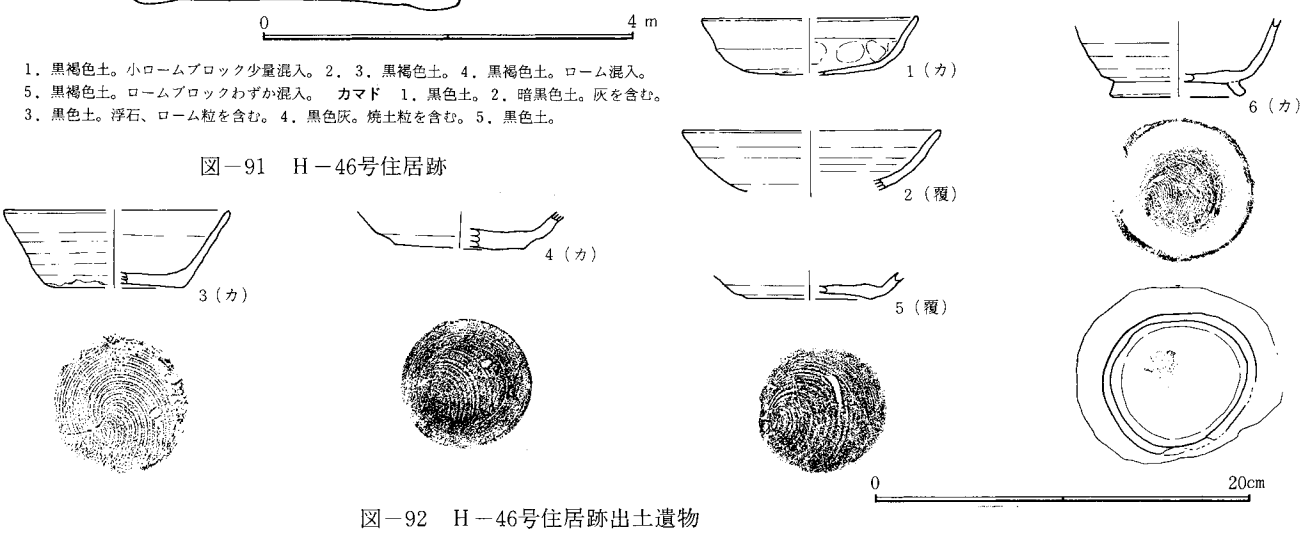
H46号住居跡（図—91、92　図版—6、68　表—51)(IX期)



1．黒褐色土。小ロームブロック少量混入。2．3．黒褐色土。4．黒褐色土。ローム混入。
5．黒褐色土。ロームブロックわずか混入。　**カマド**　1．黒色土。2．暗黒色土。灰を含む。
3．黒色土。浮石、ローム粒を含む。4．黒色灰。焼土粒を含む。5．黒色土。

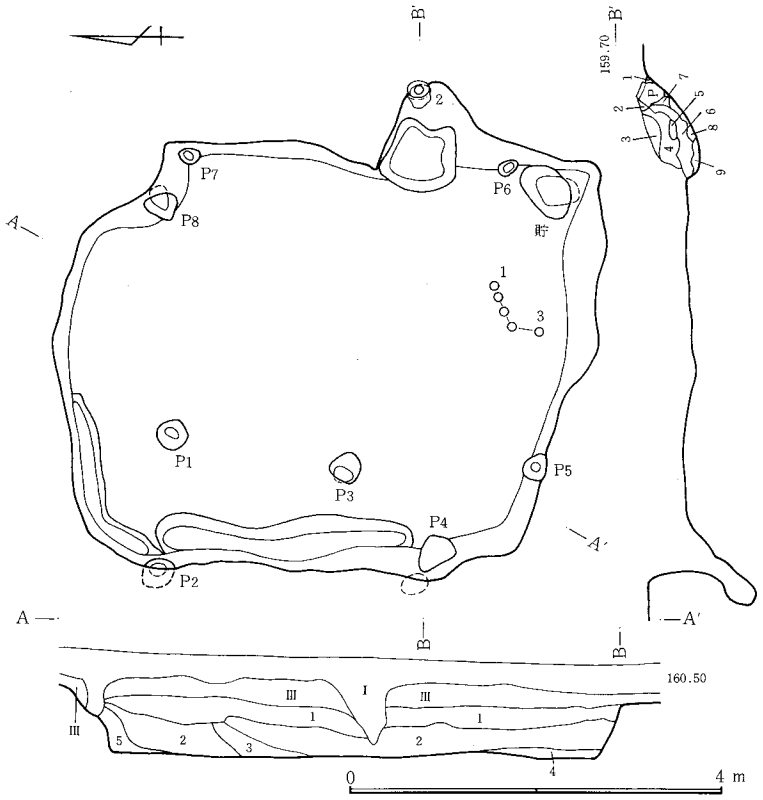
図—91　H—46号住居跡

位置　西台地中央部のやや北H14に位置する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南壁は攪乱により明らかではない。北壁はやや内に膨らみ、西壁、東壁は外に膨んでいる。規模は南北4.4m（推定）で東西3.4mである。長軸方向はN—4.5°—Eで面積は14.2m²（推定）。壁高は31～52cmである。北壁、西壁と東壁の北2分の1に周溝をめぐらす。幅8～24cm、深さ4～9cmである。　**ピット**　床面1カ所。規模は21×14cmで深さ25cm。　**カマド**　東壁南寄り。煙道の先端は調査区外のため未調査推定である。全長96cm（推定)、燃焼部長54cm、袖部内幅62cm、壁への掘り込み角度44°、壁外掘り込み90cm（推定）である。燃焼部は住居床面にくらべて9cm低い。　**貯蔵穴**　南東壁ぎわ。方形に近い平面。規模は94×92cmで深さ3cmである。西に小ピット1を伴うが性格は不明。　**遺物**　カマド内より須恵器高台付椀（6）が出土。底部に墨書「井」。同じく須恵器坏（3・4）、土師器坏（1）が出土、埋土中より須恵器坏（2・5）が出土。　（井野）



図—92　H—46号住居跡出土遺物

H47号住居跡（図—93、94　図版—6、68　表—52)(IX期)



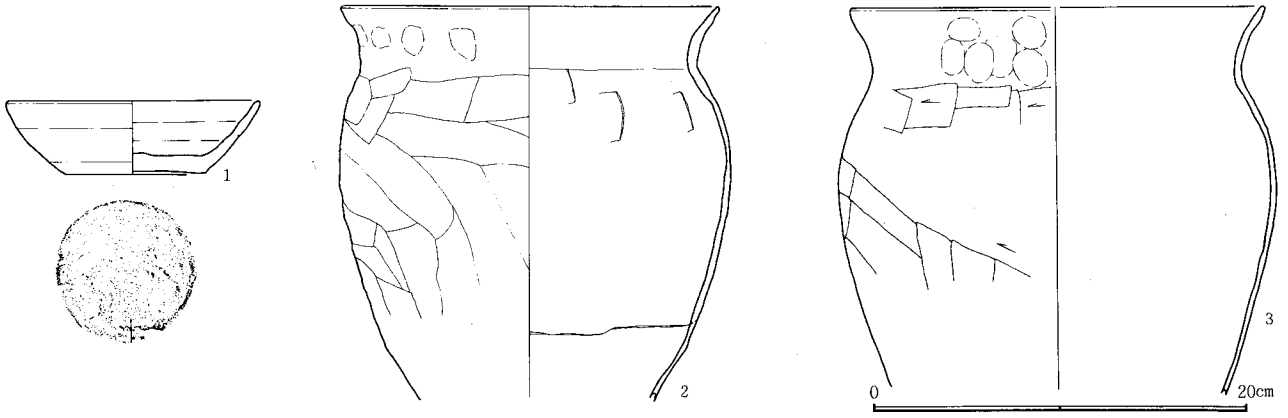
1．黒褐色土。焼土粒を含む。2．黒褐色土。1より黒味強い。ローム小粒子含む。3．黒褐色土。1より褐色味強い。ロームブロック多量に混入。4．暗褐色土。ロームに黒色土混入。堅く締る。5．黒褐色土。ローム小粒子含む。　**カマド**　1．赤色焼土。2・3．黄褐色土。4．黒色土。ローム微粒子。5．褐色ローム。6．赤色灰。焼土混入。7．赤褐色土。焼土粒少量混入。8．黒色灰。ロームブロック、焼土粒混入。9．炭化物。焼土微粒含む。

図—93　H—47号住居跡

位置　西台地の中央やや北のH15に位置する。**形状**　南北に長軸をもつ不整方形である。南北壁は外に膨らむが北東隅は方形に内に入る。規模は南北5.2mで東西4.2mである。長軸方向はN—6°—Eで面積は19.8m²である。壁高は32～63cm。西壁の北3分の2と北壁の西2分の1に周溝をめぐらす。幅5～26cmで深さ2～10cmである。　**ピット**　床面下8カ所。P_1は38×32cmで深さ30cm、P_2は32×10cmで深さ2cm、P_3は30×30cmで深さ26cm、P_4は42×30cmで深さ23cm、P_5は30×26cmで深さ7cm、P_6は24×16cmで深さ22cm、P_7は22×18cmで深さ3cm、P_8は33×27cmで深さ38cmである。P_2とP_7、P_4とP_6が対応する位置で西壁と東壁に所在し、$P_1P_3P_5$もほぼ直線上に位置し、$P_7P_8P_1P_2$もほぼ直線上にあるため主柱穴ではないものの、住居に係わるピットと推定される。

カマド　東壁南寄り。全長116cmで燃焼部長66cm、袖部内幅80cm、壁への掘り込み角度46°、壁外掘り込み116cmである。燃焼部は床面にくらべて13cm低い。

貯蔵穴　南東壁きわ。上面は楕円形だが、袋状に壁に入りこみ、底面は方形になっている。規模66×40cm（上面）で深さ27cmである。　**遺物**　カマド内より土師器甕（2）が、南壁下より須恵器坏（1）と土師器甕（3）が出土している。　（井野）

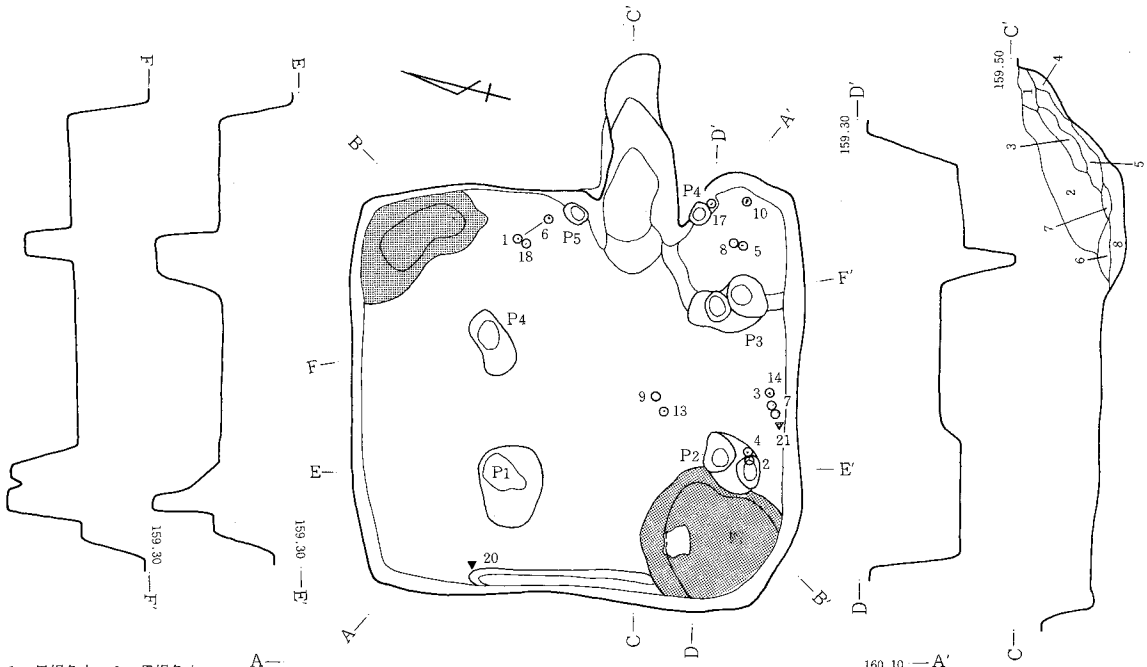


図—94　H—47号住居跡出土遺物

H48号住居跡（図—95、96、97　図版—6、69　表—53)(V期)

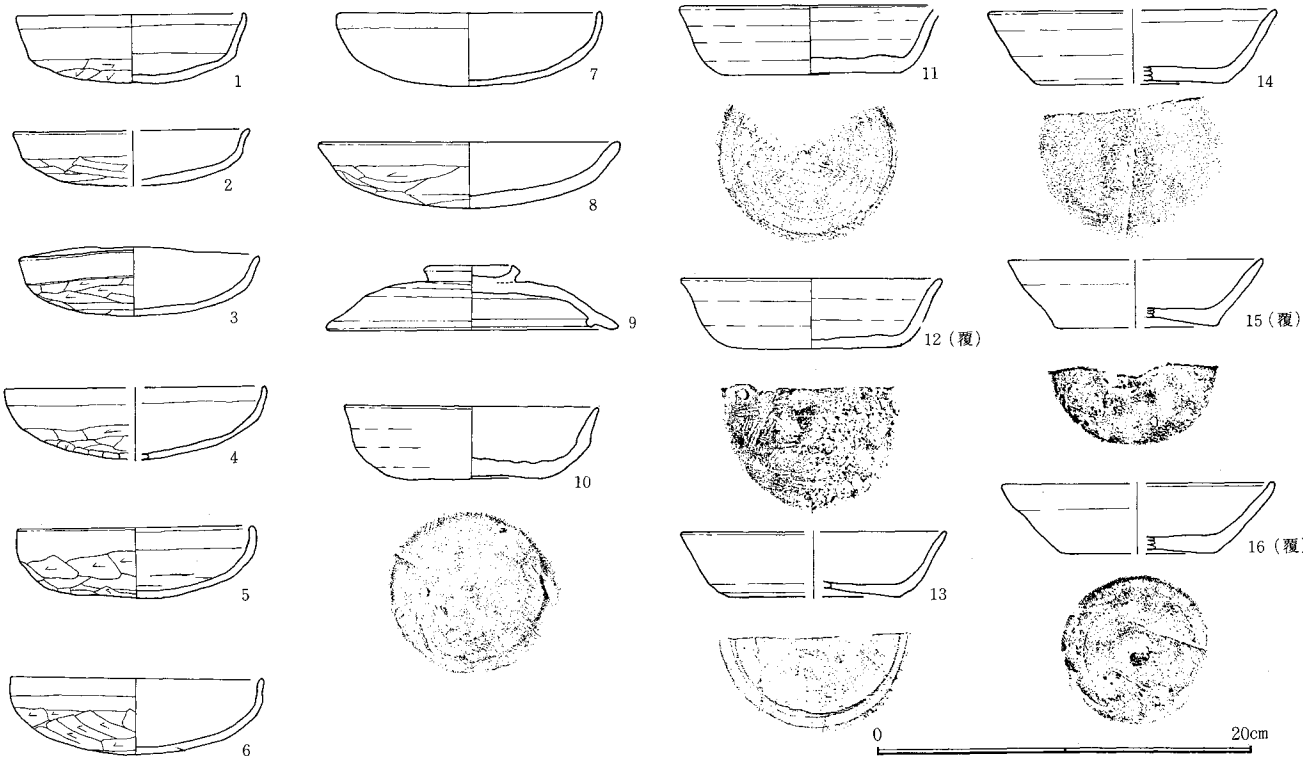
位置　H15。　**形状**　南北に長軸方向をもつほぼ正方形に近い形をしている。規模は南北4.5mで東西4.1mである。各壁ともやや内に膨らむ。長軸方向はN—12°—W、面積は18.3m²である。壁高は55～77cmである。西壁の中央部2分の1に周溝をめぐらす。幅7～10cmで深さ4cmである。　**ピット**　住居内6カ所。P_1は82×68cmで深さ69cm、P_2は60×55cmで深さは北52cm、南69cm、P_3は86×46cmで深さは北73cm、南77cm、P_4は24×20cmで深さは35cm、P_5は24×19cmで深さは30cm、P_6は66×34cmで深さは48cm。$P_1P_2P_3P_6$は位置、大きさ、深さから考えて柱穴と考えられる。P_2P_3はピットが2つ重なっており、建て替えか入口に係わる施設の柱穴と考えられる。P_4P_5はカマドの両袖にあり、位置、規模とも類似している。カマドに係わる施設の柱穴と考えられる。床下土坑が2カ所。北東隅の土坑は142×77cmで深さ13cm、南西隅の土坑は148×122cmで深さ23cmである。土坑の上には貼り床が施こされている。　**カマド**　東壁南寄り。袖部はロームが少し掘り残されている。全長188cmで、燃焼部長106cm、袖部内幅56cm、壁への掘り込み角度39°、壁外掘り込み148cm、燃焼部は床面にくらべて18cm低い。　**貯蔵穴**　南東壁下。136×100cmで深さ30cm。

遺物　カマド左手より土師器坏（1・6）と甕（18)、貯蔵穴より土師器坏（5・8）甕（17）須恵器坏（10)、南壁下中央より土師器坏（3・7）須恵器坏（14）砥石（21)、P_2中から土師器坏（2・4)、北西隅より鉄製品鎌（20)、中央部より須恵器坏（13）蓋（9）が出土している。　（井野）

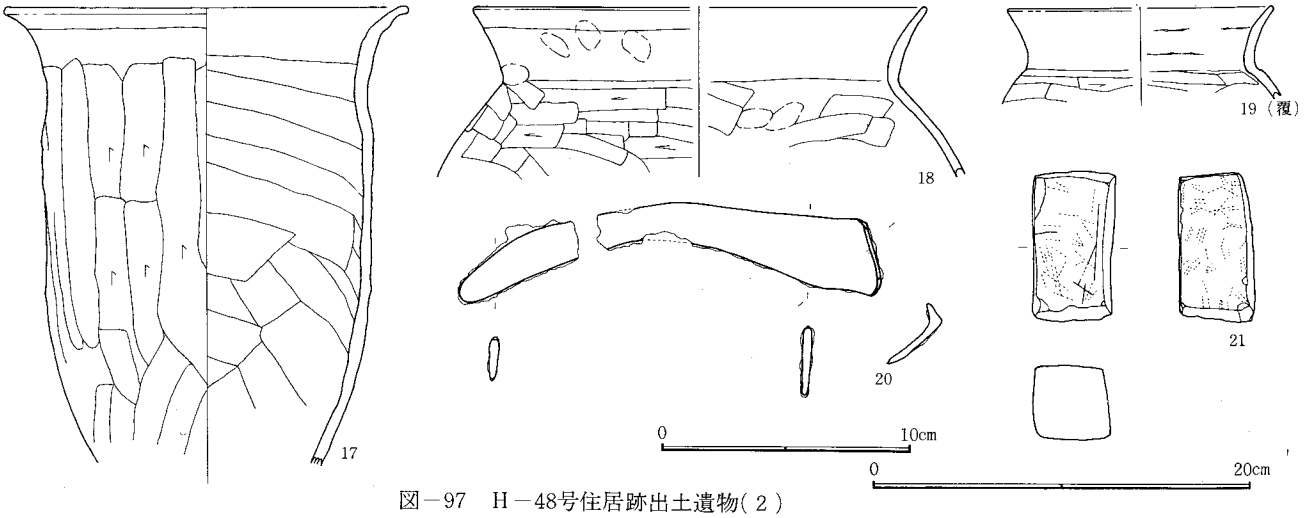


1．黒褐色土。2．黒褐色土。多量の浮石含む。3．黒褐色土。浮石、ローム小ブロック、焼土粒少量含む。4．黒褐色土。3に類似でロームブロック多量に含む。5．黒褐色土。粘性あり。焼土、灰混入。6．黒褐色砂質土。7．ローム・褐色・黒色の混合土。8．暗褐色粘質土。9．黒褐色土。木炭、多量のロームブロック含む。　**カマド**　1．焼土。堅く締る。2．黒褐色粘質土。灰、少量の焼土を含む。3．黒褐色土。焼土ブロック多量に含む。4．漸移層の二次堆積。5．暗灰色土。6．黒褐色土。7．黒褐色砂質土。灰、焼土を含む。8．黒色土。焼土混入。

図－95　H－48号住居跡

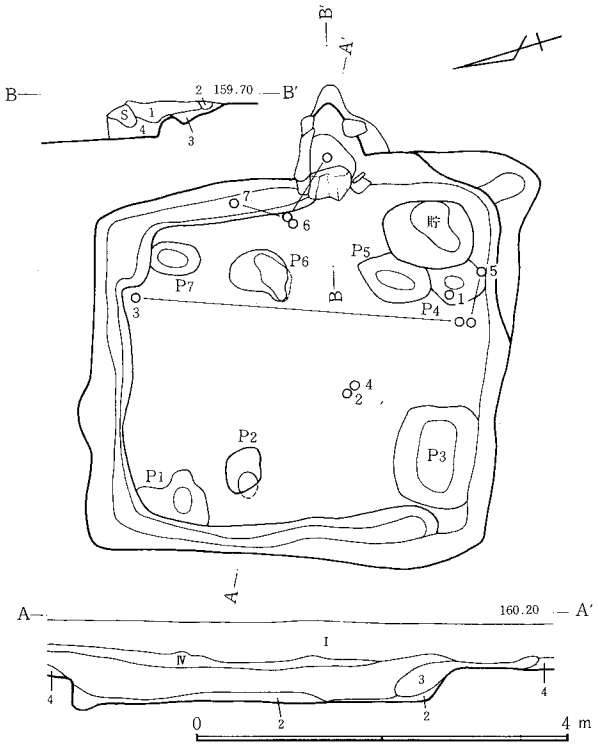


図－96　H－48号住居跡出土遺物(１)



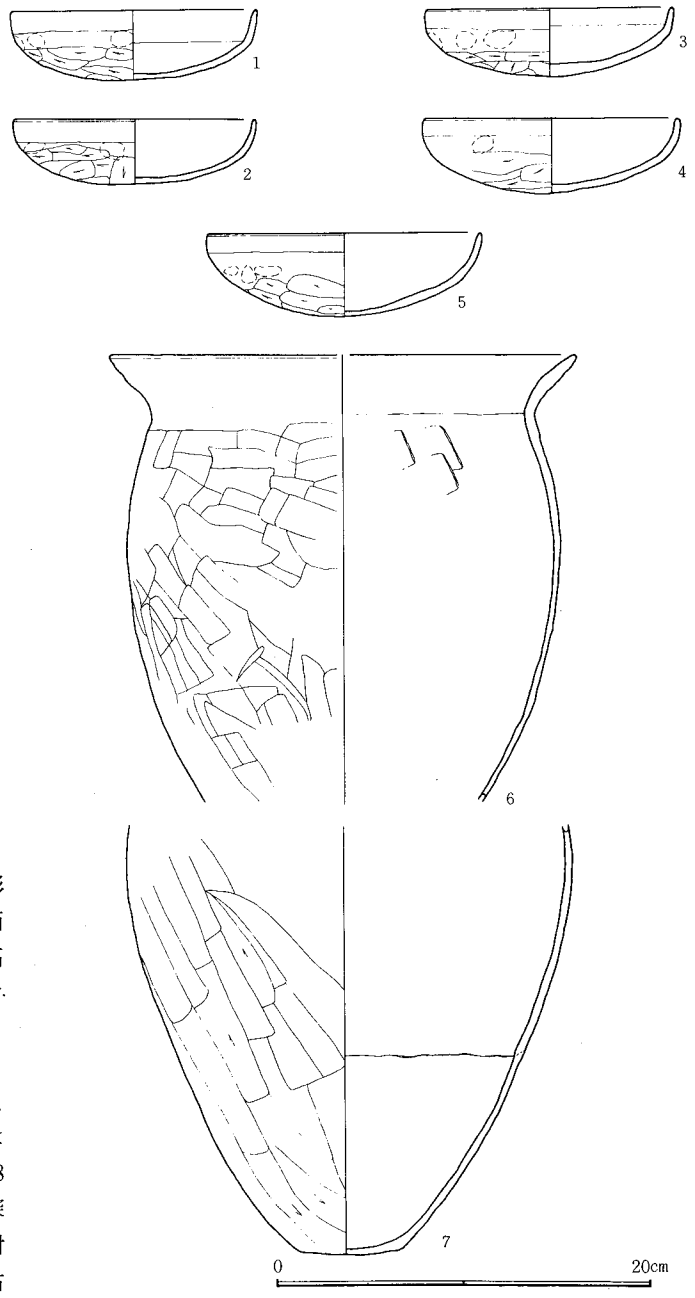
図－97　H－48号住居跡出土遺物（２）

H49号住居跡（図－98、99　図版－６、69　表－54）（VI期）



1．黒褐色土。浮石を多量に含む。２．黒褐色土。ロームを多く含む。３．４．黒褐色土。　**カマド**　１．軽石を含む黒色土と栗色土の混合。焼土ブロック混入。２．栗色土。３．栗色土。焼土、灰を含む。４．栗色土。軽石、焼土ブロックを含む。

図－98　H－49号住居跡

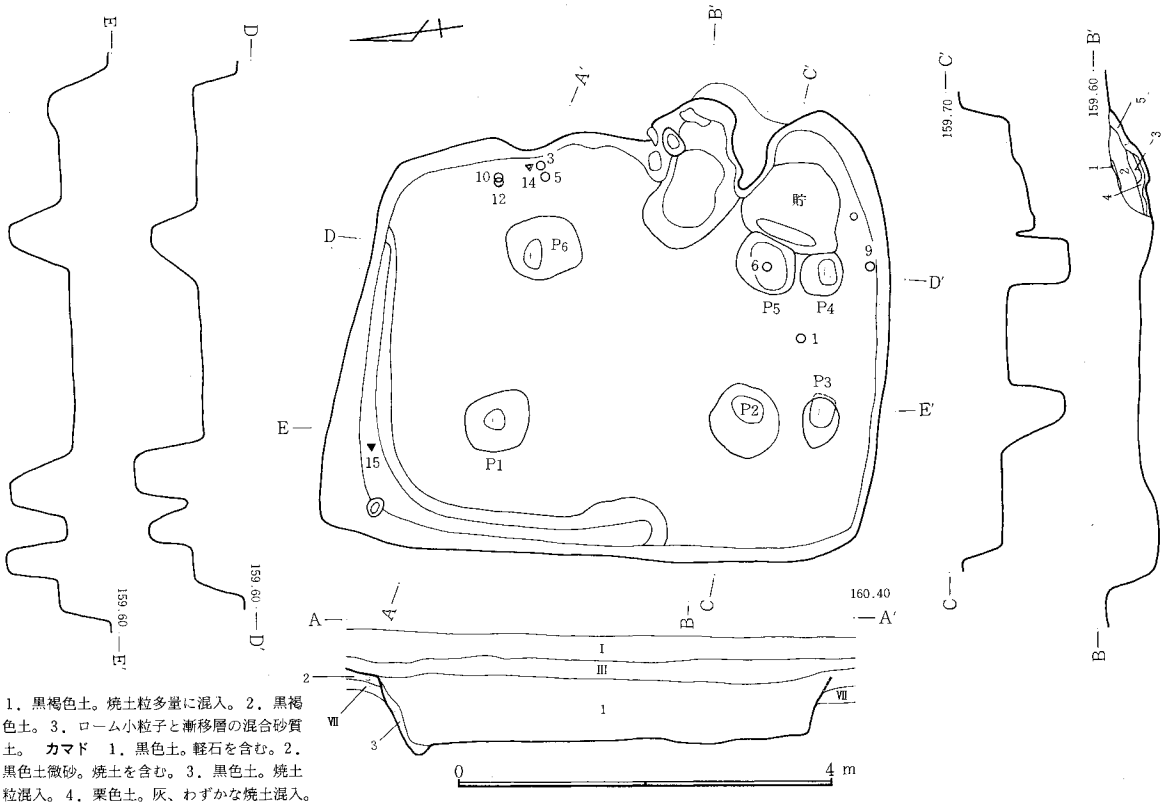


図－99　H－49号住居跡出土遺物

位置　調査区西台地の中央やや北のＪ14に所在する。　**形状**　南北に長軸を持つほぼ正方形の住居で、南北3.9m、東西3.7mである。長軸方向はＮ－18.5°－Ｅ、面積は14.0m²、壁高20～30cmである。東壁下から北壁下、西壁下には周溝がめぐる。幅６～35cm、深さ２～６cmである。床面は貼り床されて、かたくしまっており、床面下構造はデコボコな程穴をあけて、その上にかたい床面を作っている。　**ピット**　床面に７カ所、P_1は82×54cmで深さ15cm、P_2は50×38cmで深さ36cm、P_3は104×86cmで深さ22cm、P_4は60×50cmで深さ30cm、P_5は78×58cmで深さ33cm、P_6は64×50cmで深さ40cm、P_7は56×34cmで深さ26cmである。規模等からP_7とP_1、P_2とP_6が、P_3とP_4P_5が対応し、柱穴と考えられる。　**カマド**　東壁中央南寄り。左右の袖に安山岩を入れ、また鳥居状に石を置きカマドを構築し

ている。全長122cm、袖部内幅46cm、燃焼部長62cm、壁への掘り込み角度25°で、壁外掘り込みは108cmである。燃焼部は住居床面より3cm程高い。 **貯蔵穴** 南東隅、長円形で規模は98×70cm、深さ20cmである。 **遺物** カマド内、カマド手前および貯蔵穴付近より出土した。カマド付近より土師器甕（6・7）が、貯蔵穴付近より土師器坏（1・2・3・4・5）が出土した。床面とのレベル差は床面より5～17cm位の位置からの出土である。 （江原）

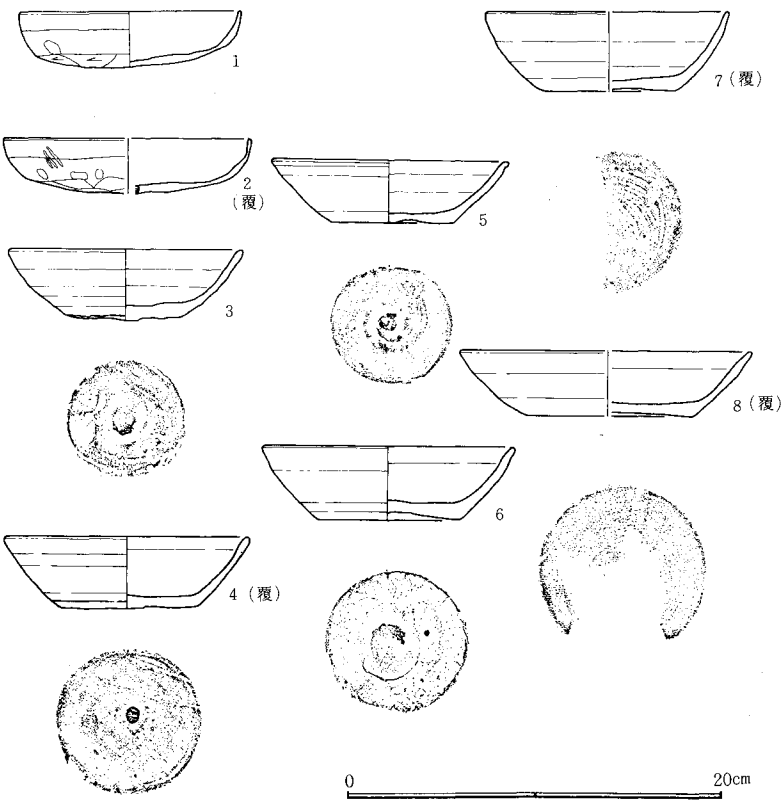
H50号住居跡（図－100、101、102　図版－6、69、70　表－55）(Ⅷ期)



1．黒褐色土。焼土粒多量に混入。2．黒褐色土。3．ローム小粒子と漸移層の混合砂質土。 **カマド** 1．黒色土。軽石を含む。2．黒色土微砂。焼土を含む。3．黒色土。焼土粒混入。4．栗色土。灰、わずかな焼土混入。5．栗色土。多量のロームブロック、わずかな焼土混入。

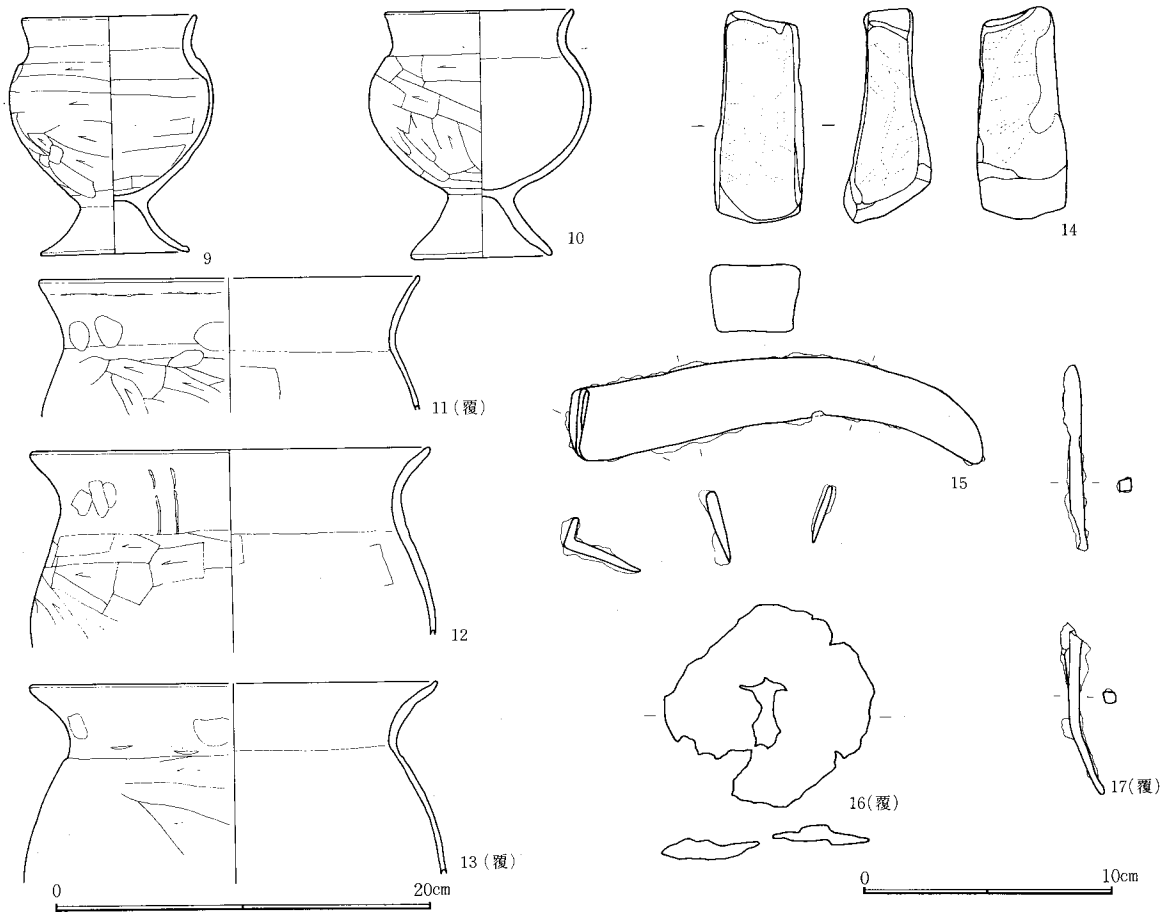
図－100　H－50号住居跡

位置 西台地上のG15に所在する。H43号住居跡を含む小住居群の北に位置する小住居跡群を構成する1軒である。この住居跡群の中では最東端に位置している。 **形状** 平面長方形で5.4×4.2mで、南北に長い住居である。面積は13.3m²で、壁現高は27～47cm、断面図での壁高は34cmを測る。周溝は西壁のほぼ北半に認められ、幅10～38cm、深さ5～13cmである。長軸方向はN－10°－Eである。 **床面** 踏み固め部分と貼床は不明である。しかし、調査時において、地層断面図や平面図から、北壁寄りに床下土坑と見られるものがあり、その部分は貼床であったことが推定される。 **ピット** 主柱穴4本とそれに平行する2本の柱穴がある。大きさはP_1は70×60cm、深さ61cm、P_2は72×70cm、深さ57cm、P_3は54×40cm、深さ62cm、P_4は46×42cm、深さ49cm、P_5は70×56cm深さ64cm、P_6は76×66cm、深さ48cmである。いずれもしっかりした柱穴である。基本的には住居の対角線上に主柱が配置され、さらに南壁との間に主柱に平行して2本の柱が配された形になっている。 **カマド** 東壁の中央から南寄りにある。壁からの掘り込み長92cm、袖部内幅66cm、燃焼部長86cmで、袖は14cm住居内に出ている。構築材として左袖に1個、燃焼部に1個、煙道部に1個の石材を使用している。燃焼部は床面より12cm低く、壁への掘り込み角度は



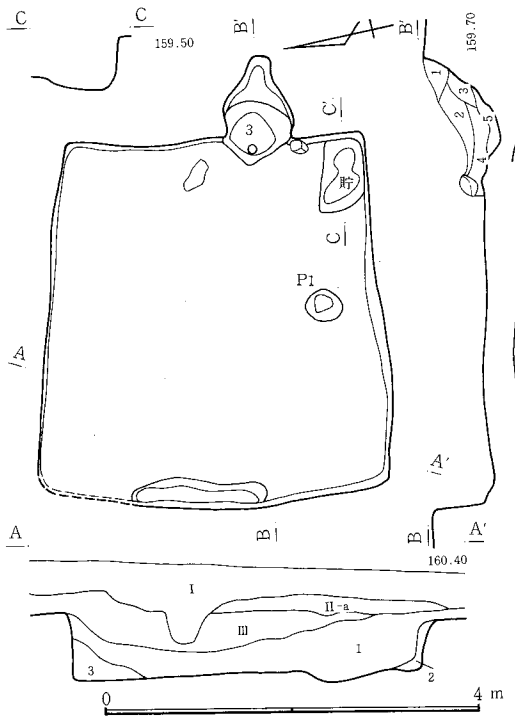
図－101　H－50号住居跡出土遺物（1）

32°である。 **貯蔵穴** 南東隅にあり、平面不整形で断面はすり鉢形をしている。102×92cm、深さ28cmである。 **遺物** 床面から砥石（14）須恵器坏（3・5・6）土師器坏（1）土師器甕（12）台付甕（9・10）が出土し、その他、鎌（15）、覆土中より釘（17）などが出土している。 （中村）

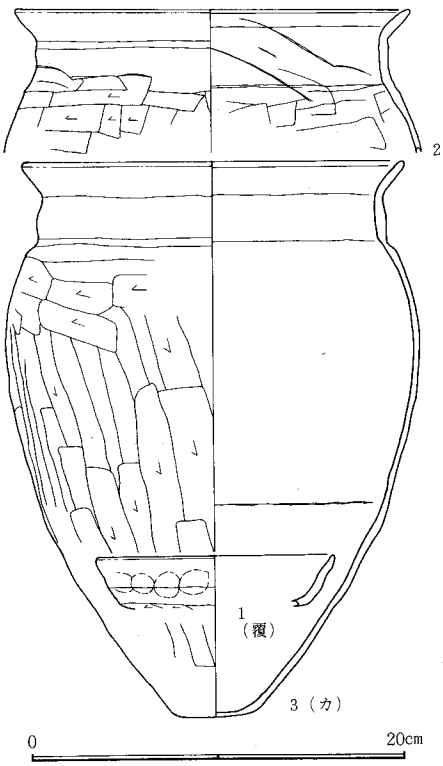


図－102 H－50号住居跡出土遺物（2）

H51号住居跡（図—103、104 図版—6、70 表—56）(XI期)



図－103 H－51号住居跡



図－104 H－51号住居跡出土遺物

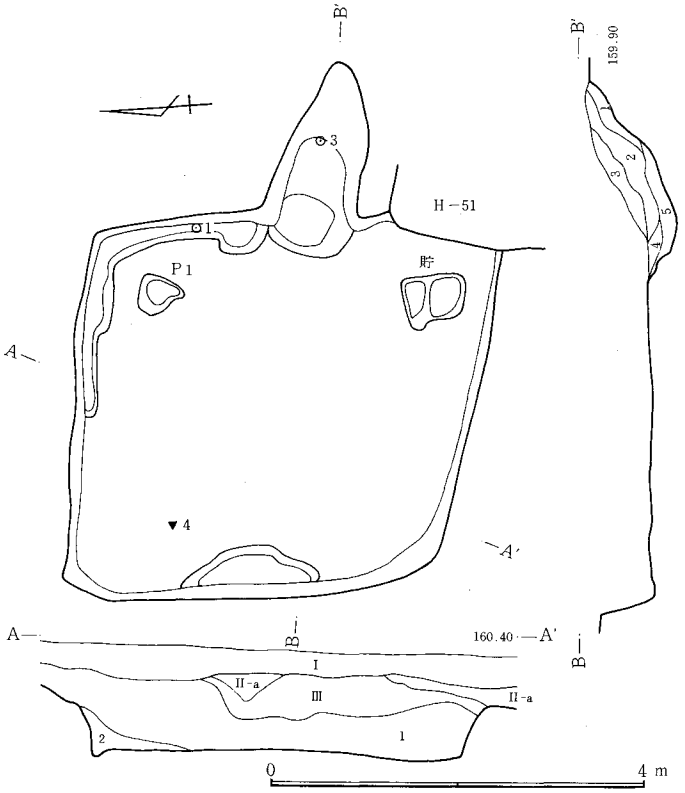
位置 西台地のほぼ中央やや北のH15に所在する。地形はほぼ平坦な地形となっているが、やや南側にゆるい傾斜がみられる。 **形状** 南北3.4×東西3.8mのほぼ正方形を呈しており、長軸方向N—10°—E、面積13.1m²、壁高42～56cmである。壁はほぼ垂直に近く直立しており、周溝は西壁中央3分の1程の所に幅9～15cm、深さ4cm位で存在していた。 **ピット** ピットは南壁前中央に39×35cm深さ28cmの1個と、カマド右前に貯蔵穴73×46cm深さ17cm程がある（形状は長方形）。 **カマド** 東壁南寄りにあり、壁外に掘り込む。全長92cm、燃

1．黒褐色土。ロームブロック（φ2cm程）多量に混入。2．ロームの崩壊土。3．黒褐色土。1に似るが黒色味が強い。 **カマド** 1．黒褐色土。焼土粒を含む。2．黒褐色土。粘性あり。灰、粘土、焼土を含む。3．焼土。4．黒褐色土。焼土粒を含む。5．暗褐色粗砂。焼土を含む。

焼部長36cm、袖部内幅66cm、カマド先端の立ち上がり角度は52°である。燃焼部は住居床面より18cm程度低くなっている。 **遺物** 遺物としては、カマド内より土師器甕（3）が、覆土中より土師器の坏（1）と甕（2）が出土している。住居の床面から18cm程上がったところである。 **重複関係** H52号住居跡と重複する。切り合いの様子からH51号住居跡が新しいと考えられる。

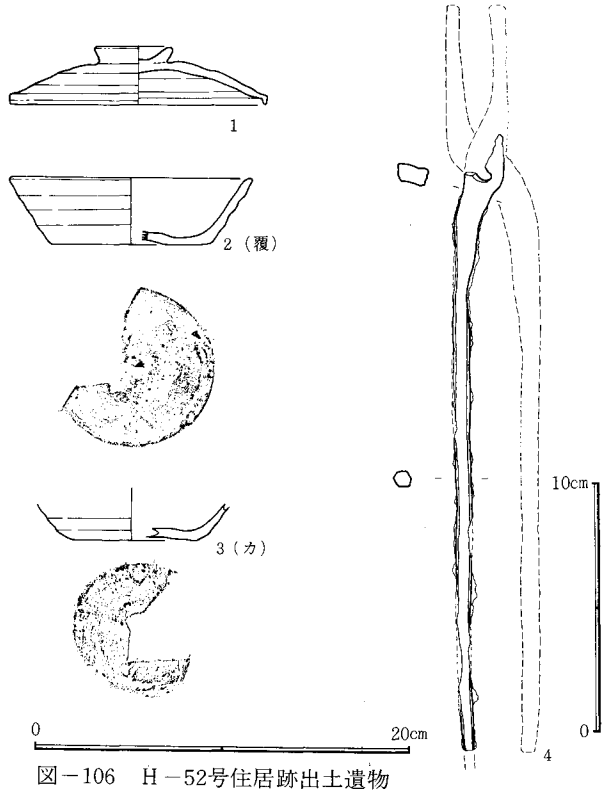
（江原）

H52号住居跡（図—105、106 図版—7、70 表—57）(Ⅷ期)



1．黒褐色土。ローム小粒子含む。2．黒褐色粗砂。 **カマド** 1．暗褐色土。焼土粒若干含む。2．焼土。黒色土、ロームを含む。3．暗灰色土。白色粘土、焼土多量に混入。4．暗褐色粘質土。焼土を含む。5．黒色土。多量の灰、ロームブロック、焼土ブロック混入。

図—105 H—52号住居跡

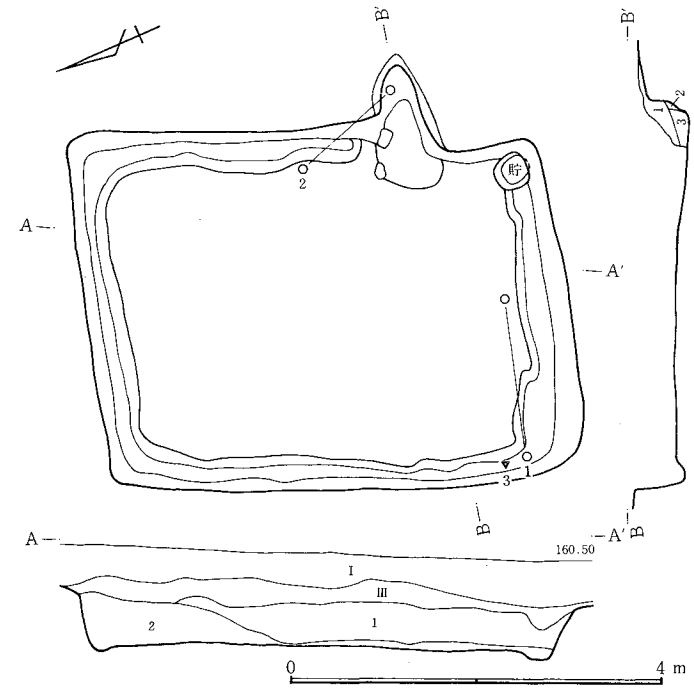


図—106 H—52号住居跡出土遺物

位置 西台地の中央部やや北、H15の北西部に所在する。地形はほぼ平坦な地形となっているが、やや南側にゆるい傾斜がみられる。H51号住居跡の北西にすぐ接した位置に所在する。 **形状** 東西3.9m×南北4.2mのややゆがんだ正方形を呈する。住居面積は約15.4m²で、長軸方向はN—16°—E、壁高は49～69cm程である。周溝はカマドの北側部分、北壁東半分、西壁中央部分に幅7～28cm、深さ2～12cmで存在する。また床面は踏み固めの部分と貼り床の部分とからなっている。 **カマド** 東壁中央にあり、壁外に構築している。全長205cm、燃焼部長96cm、袖部内幅74cm、壁への掘り込み角度52°、壁外堀り込み163cm。燃焼部のレベルは、住居床面より29cm低い。 **貯蔵穴** 南東隅に63×47cm、深さ19cm、長方形に近い形で底部は二つに分かれている。 **ピット** 北東隅にあり36×44cm、深さ36cmである（P_1）。 **遺物** カマド内および住居内より須恵器の坏（3）、蓋（1）、鉄製品の鉗（4）、また、覆土中より須恵器坏（2）が出土している。 **重複関係** H51号住居跡の項参照のこと。

（江原）

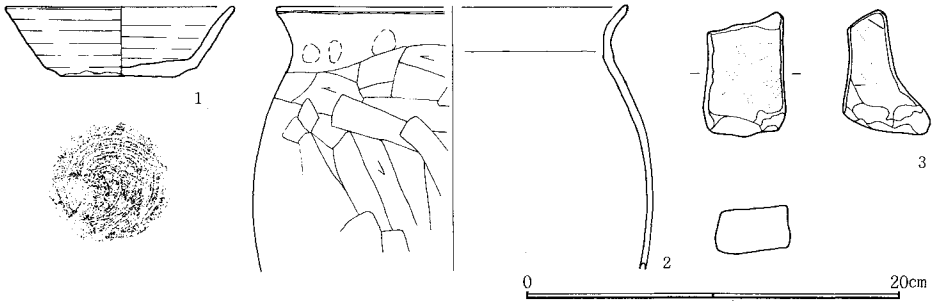
H53号住居跡（図—107、108 図版—7、70 表—58）(Ⅷ期)



1．黒褐色土。ローム小粒子を含む。2．暗褐色土。ローム小粒子を含む。 **カマド** 1．黒色土。多量のローム、少量の焼土を含む。2．黒色土微砂。焼土わずか混入。3．黒色土。ローム、焼土の混合土。

図—107 H—53号住居跡

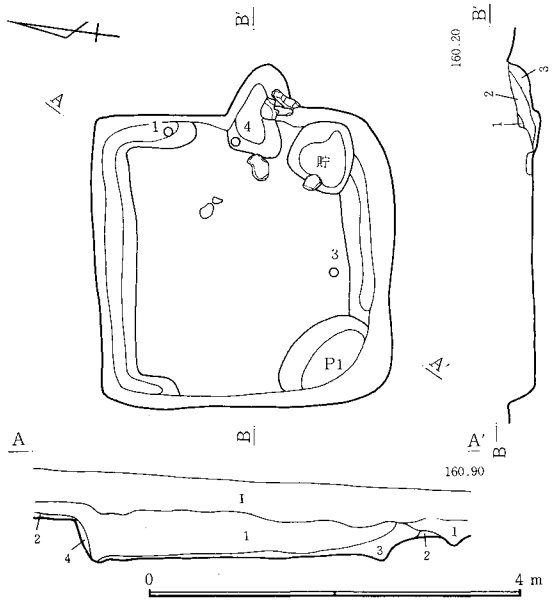
位置 西台地中央やや北部のH15の北西部に所在する。地形はほぼ平坦で少し南側に傾斜がみられる。 **形状** 南北4.8×東西3.6mの長方形のプランを様する。面積は16.6m²であり、カマド周囲を除き四周に周溝をめぐらしている、幅5～35cmで深さ4～14cm。壁の高さは42～54cm程であり、住居の長軸方向はN—23°—Eである。 **カマド** 東壁の南寄りに存在する。構築材として左袖2個の石が残存していた。カマドの規模は壁外に120cmの掘り込みを入れ、全長134



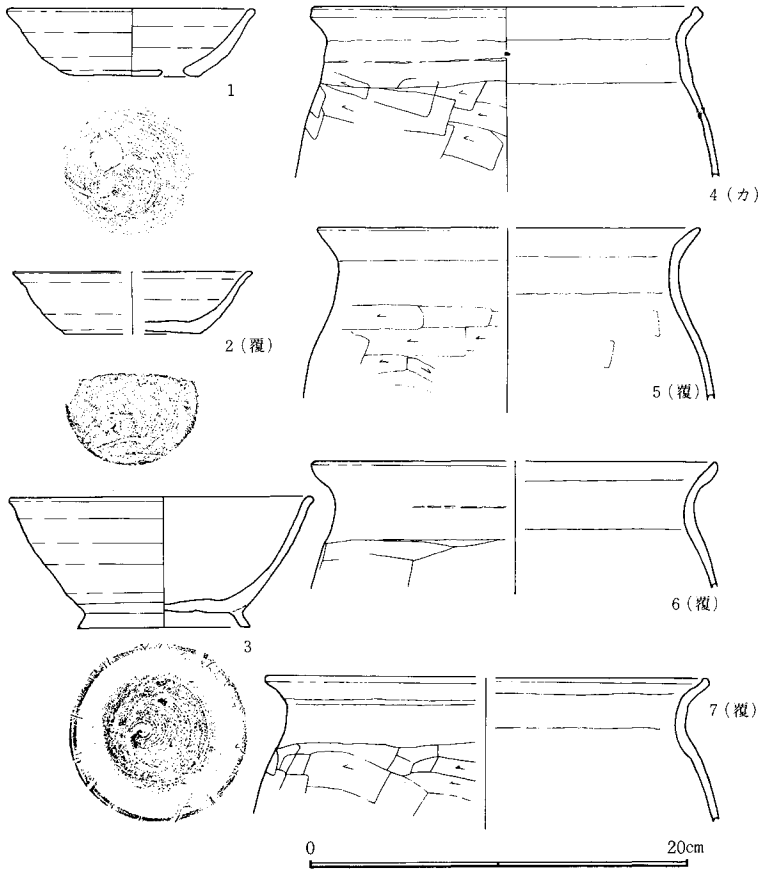
図－108　H－53号住居跡出土遺物

cm、袖部内幅60cm、燃焼部分74cmのカマドを構築している。壁への掘り込み角度は47°で、住居床面とカマドの燃焼部のレベル差は16cm程である。　**貯蔵穴**　南東隅に方形の貯蔵穴が存在する。35×43cmで深さ40cm。その他住居内にはピットは存在しなかった。　**遺物**　南西隅の床面より8cmより須恵器坏（1）が床面より17cmから砥石（3）が出土している。またカマド内および、カマド前の床面より土師器甕（2）が出土している。　（江原）

H54号住居跡（図—109、110　図版—7、71　表—59)(XI期)



図－109　H－54号住居跡



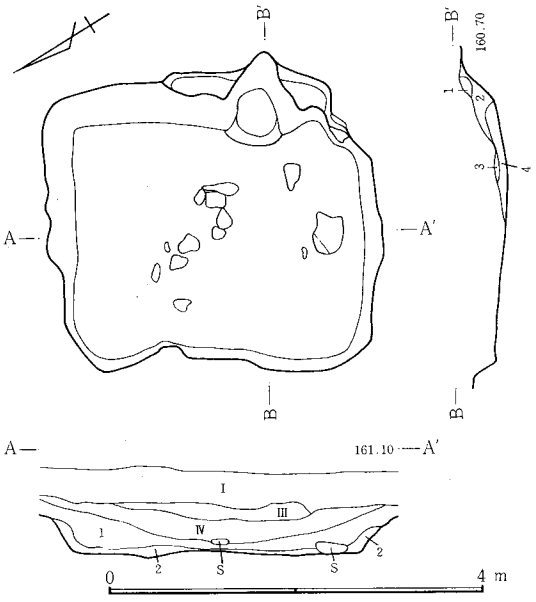
図－110　H－54号住居跡出土遺物

位置　西台地上のH15・H16に所在する。H50号住居跡と小住居跡群を構成している。群の中で北に位置する住居である。　**形状**　平面正方形で2.8×3.8m、面積7.8m²である。壁現高は地層断面図から22cmを測る。周溝は北壁全部、南壁全部、東壁は北半、西壁は北の一部に認められる。幅は5～19cm、深さは3cmと浅い。長軸方向はN－8°—Wである。　**床面**　踏み固め部分と貼床は不明であるが、地層断面から貼床はないものと推定される。　**ピット**　南西隅にあり、平面楕円形である。44×56cmで深さは不明である。　**カマド**　東壁の中央から南寄りにあり、壁外掘り込み68cm。袖部内幅54cm、燃焼部長50cmである。構築材として焚き口に1個、燃焼部に3個の石材を使用している。燃焼部は床面より6cm低く、壁への掘り込み角度は76°である。　**貯蔵穴**　南東隅にある。平面円形で、径66cmで深さは不明である。　**遺物**　周溝内から須恵器坏（1）が、床面に着いて須恵器高台付埦（3）が、カマド内から土師器甕（4）が出土している。　**重複関係**　K3号堀立柱建物跡と重複するが、新旧は不明である。　（中村）

H55号住居跡（図—111、112　図版—7　表—60)(IX期)

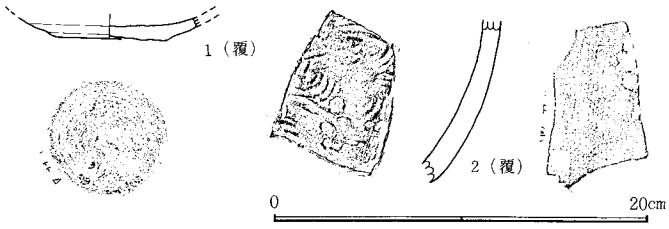
位置　西台地中央よりやや北側部分のJ15・16に所在する。地形はやや南に向ってゆるい傾斜になっている。　**形状**　南北方向に長軸を持つ長方形の住居跡で、壁は直立せず外側に傾斜をしている。南北3.1m、東西2.3mで、長軸方向はN—33°—E、面積7.3m²、壁高33～42cmである。周溝は存在しなかった。　**ピット**　住居跡内には存在しなかった。　**カマド**　東壁南寄り、全長102cm、袖部内幅60cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度44°で、壁外掘り込み87cm、住居床面とカマド燃焼部とのレベル差はカマド内が6cm程低い。　**貯蔵穴**　貯蔵穴は存在しなかった。　**遺物**　遺物としては須恵器の坏底部（1）と須恵器の甕の破片（2）が出土している。他に住居跡床面上に13個の自然石がカマド前から住居中央にかけて乱雑に配置されていた。カマド等に使用されていた石が住居の廃絶後、散乱したものかとも思われる。床面はローム層を掘り込んだままの床で貼り床は存在しなかった。

住居跡の埋土中に浮石の層がレンズ状に存在し、住居の埋没過程を見る良い資料である。（江原）



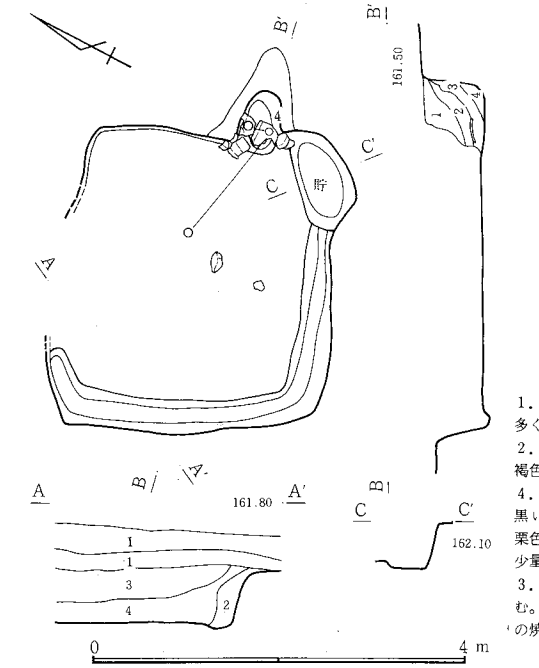
1．黒色土。浮石、少量のロームを含む。2．黒色土。浮石、多量のロームを含む。 **カマド** 1．粘土を含む焼土ブロックと黒色土の混合土。2．黒色土。焼土、ローム混入。3．黒色土。浮石を含む。4．黒褐色土。ローム粒、少し焼土混入。

図－111　H－55号住居跡



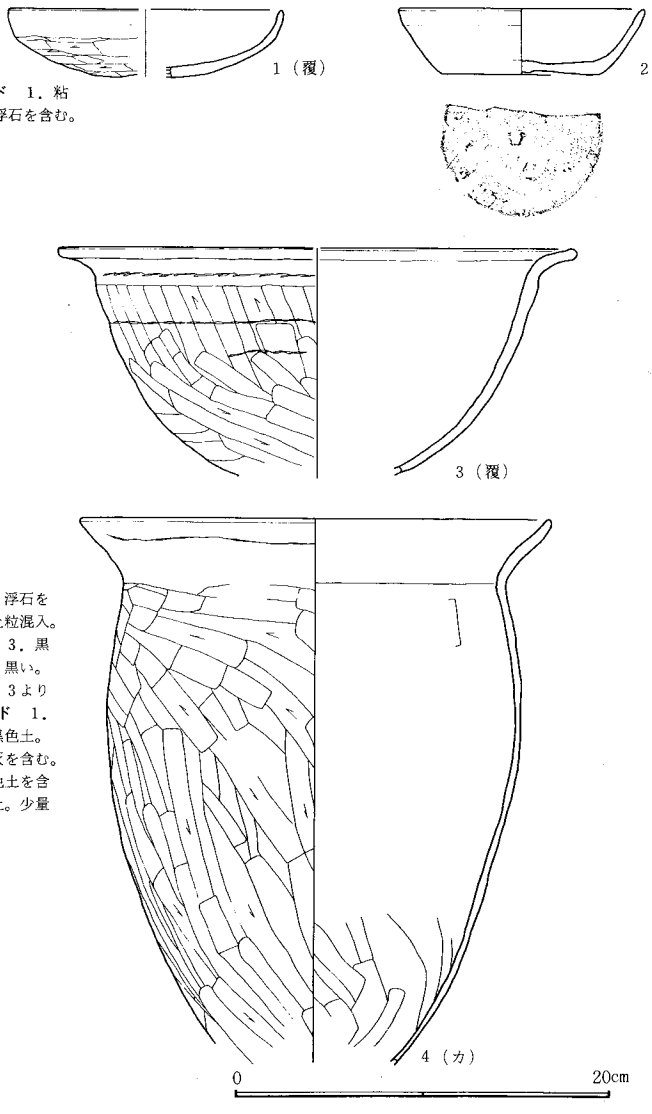
図－112　H－55号住居跡出土遺物

H56号住居跡（図－113、114　図版－7、71　表－61）(VI期)



1．黒褐色土。浮石を多く含む。焼土粒混入。2．黒褐色土。3．黒褐色土。2より黒い。4．黒褐色土。3より黒い。 **カマド** 1．栗色土。2．黒色土。少量の焼土、灰を含む。3．焼土。栗色土を含む。4．栗色土。少量の焼土混入。

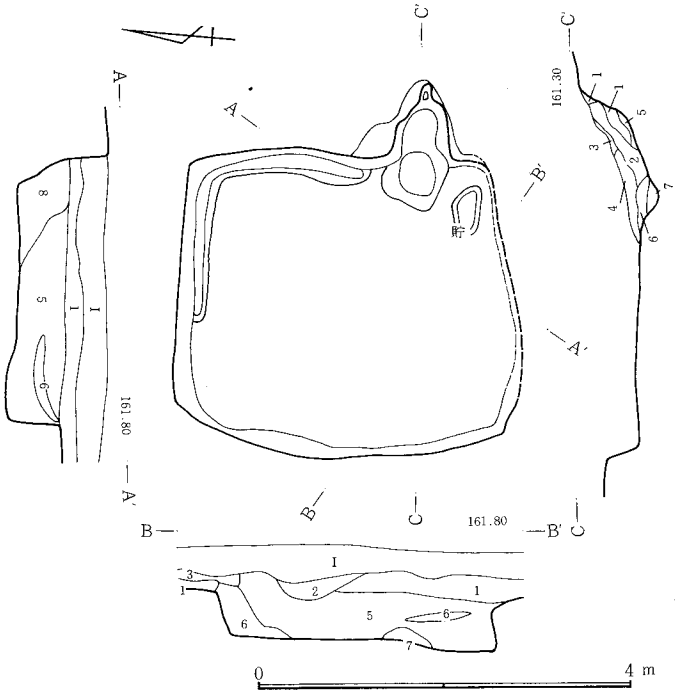
図－113　H－56号住居跡



図－114　H－56号住居跡出土遺物

位置　調査区域の西台地北部、G17に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上に位置する。本住居跡の南西方向約30mおよび南方向約60mにそれぞれ住居跡の密集地域があるが、本住居跡と重複するH－57と北方向に隣接するH－58はこれらの群と離れて所在する。 **形状**　正方形で東西3.0m、南北2.9m、面積8.2m²である。長軸方向はN－23°－W、壁高は33cm～45cmである。西壁と南壁の全体に沿って周溝がある。幅6～19cm、深さ3～4cmである。 **カマド**　東壁中央よりやや南寄り、全長108cm、袖部内幅80cm、燃焼部長60cm、壁への掘り込み角度42°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－4cmである。壁外に構築された左袖と壁との接合部に1個、および右袖と壁との接合部に2個の石が使用されている。 **貯蔵穴**　南東壁に接してありほぼ楕円形で100×56cm、深さ9cmである。 **遺物**　カマドの床面上8cmの位置より土師器甕（4）、覆土中より土師器鉢（3）、カマド内部より土師器坏（1）と須恵器坏（2）が出土した。 **テフラ**　1層に多くの浮石混入、3、4層にFP点在。 **重複**　H－57の北壁と本住居跡の南壁とが重複する。H－57の北壁が現存し、本住居跡の南壁が破壊を受けていることから、本住居跡がH－57より古い。（白石）

H57号住居跡（図－115　図版－7）(Ⅷ期)



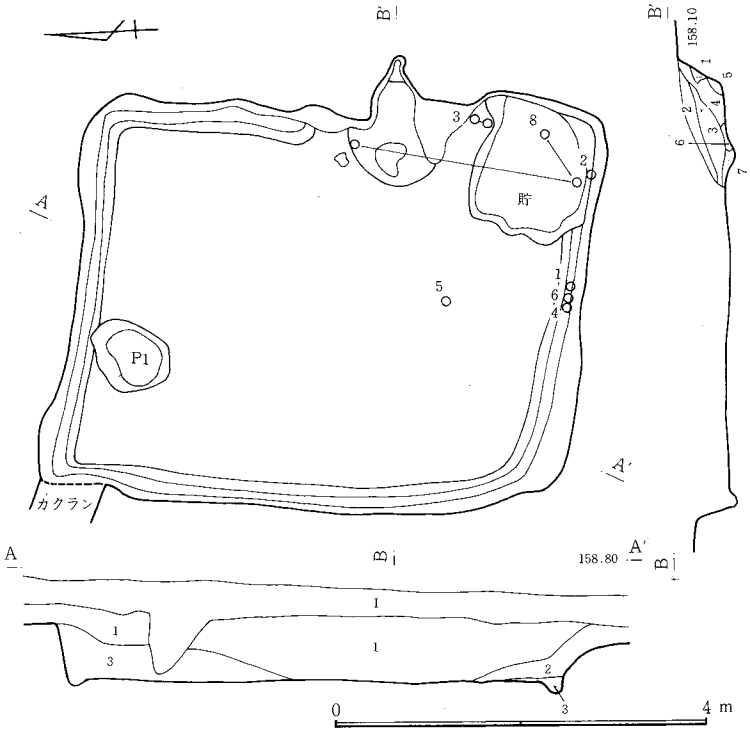
1．黒褐色土。多量の浮石焼土粒混入。2．黒色土。縞状の褐色土が入る。3．黒色土。C軽石を含む。4．黒褐色土。5．暗褐色土。多量のロームブロック(φ3cm)FP(φ1cm)点在。6．黒褐色土。5より黒い。7．黒色土。粘性あり。焼土わずか、灰混入。8．黒褐色土。　**カマド**　1．焼土。2．栗色土。焼土ブロック含。3．黒褐色土。4．栗色土。締っている。5．黒色土。栗色土少量、軽石を含む。6．栗色土。焼土ブロック少量含む。7．栗色土。

図－115　H－57号住居跡

位置　調査区域の西台地北部、G・H17に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上に位置する。本住居跡の南西方向約30mおよび南方向約60mにそれぞれ住居跡の密集地域があるが、本住居跡と重複するH－56と北方向に隣接するH－58はこれらの群とは離れて所在する。　**形状**　南壁はこれと重複するH－56の北壁によって破壊されているために南北の規模は確定できないが、約3.4mと推定される。東西は3.0mで面積推定9.8m²の長方形である。長軸方向は、N－4.5°－W、壁高は41cm～51cmである。北壁東3分の2から東壁北3分の2に沿って幅7～15cm、深さ2～6cmの周溝が認められる。　**カマド**　東壁南寄り。全長96cm、袖部内幅44cm、燃焼部長64cm、壁への掘り込み角度60°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－9cmである。　**貯蔵穴**　南東隅、重複するH－56の北壁によって一部破壊されているが不定四辺形で46×27cm、深さ22cmである。　**遺物**　埋土中より須恵器坏片が出土している。

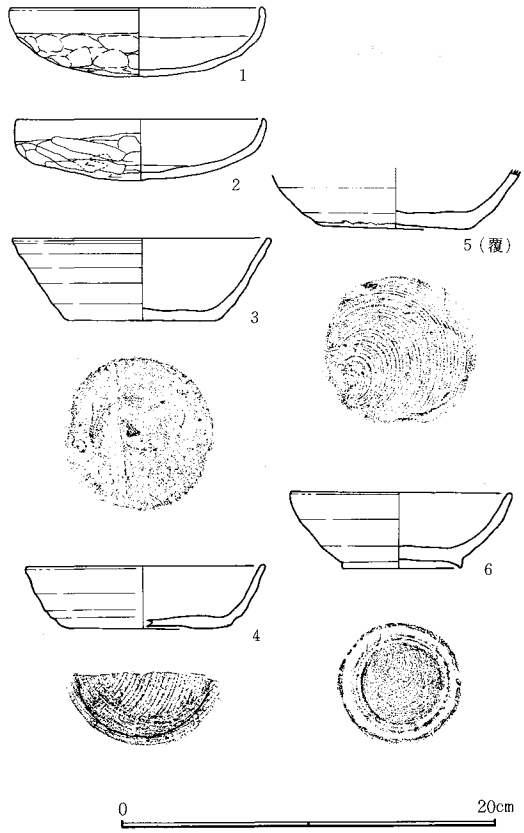
重複関係　H－56と重複する。本住居跡はH－56より新しい。詳細はH－56の記述を参照のこと。　（白石）

H59号住居跡（図－116、117、118　図版－7、71　表－62）(Ⅷ期)



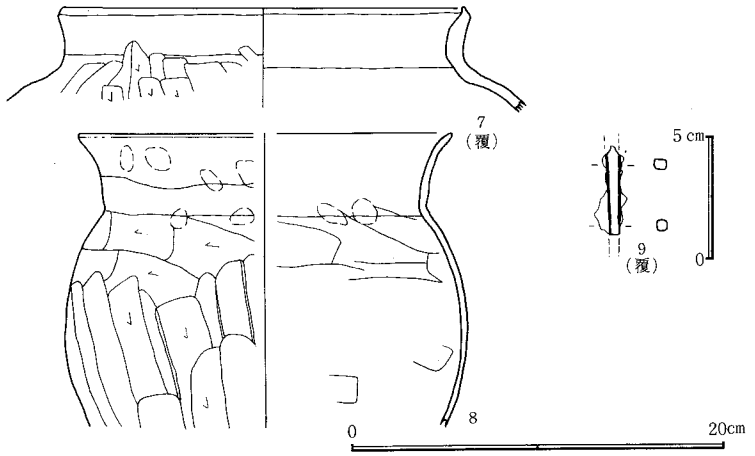
1．褐色味おびた黒色土。浮石を含む。2．黒色土。浮石を含む。3．2とローム混合土。　**カマド**　1．焼土。2．黒色土。多量の浮石、少量の焼土混入。3．黒色土。粘性あり。浮石、焼土ブロック混入。4．焼土ブロック。軟かい。5．灰。焼土ブロック少量混入。6．焼土。7．黒色土。粘土、わずか浮石を含む。

図－116　H－59号住居跡



図－117　H－59号住居跡出土遺物(1)

位置　J・K10に所在する。本住居跡は西台地の中央部の、南側にゆるい傾斜の地に位置している。　**形状**　南北に長い長方形の住居跡で、規模は南北5.1m、東西4.1mを測る。長軸方向N－13°－E、面積20.9m²、壁高28～49cmである。周溝は北壁、西壁、南壁および東壁の北半分に幅4～15cm、深さ8cm程が存在した。床面は貼床で、床面下構造は何度も床面を利用したとみえ、ローム層を掘り下げ凹凸であった。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄りにあり、壁外に掘り込む。全長110cm、燃焼部長80cm、袖

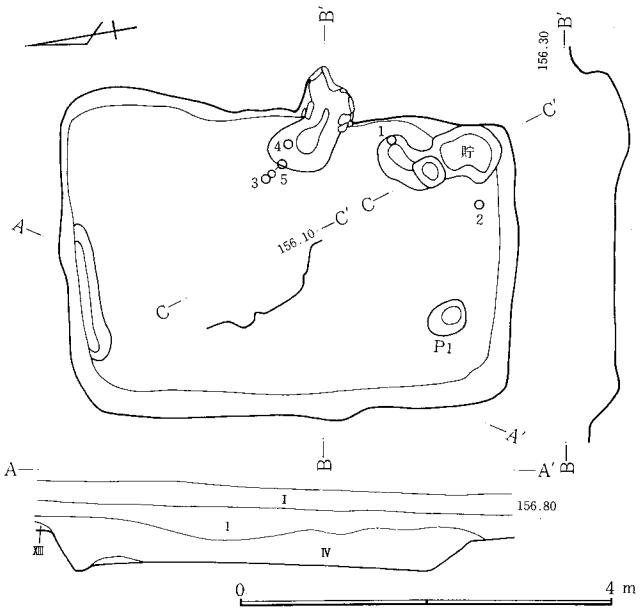


図－118　H－59号住居跡出土遺物

部内幅80cmである。火床面は住居床面より10cm程低くなっている。　**貯蔵穴**　東南隅に142×122×25cmの貯蔵穴を作っている。　**遺物**　貯蔵穴内と周辺より土師器坏（2）と甕（8）と須恵器坏（3）、南壁下周溝内より土師器坏（1）と須恵器坏（4・6）が、その北より須恵器坏(5)、埋土中より土師器甕（7）と鉄製品釘（9）が出土。

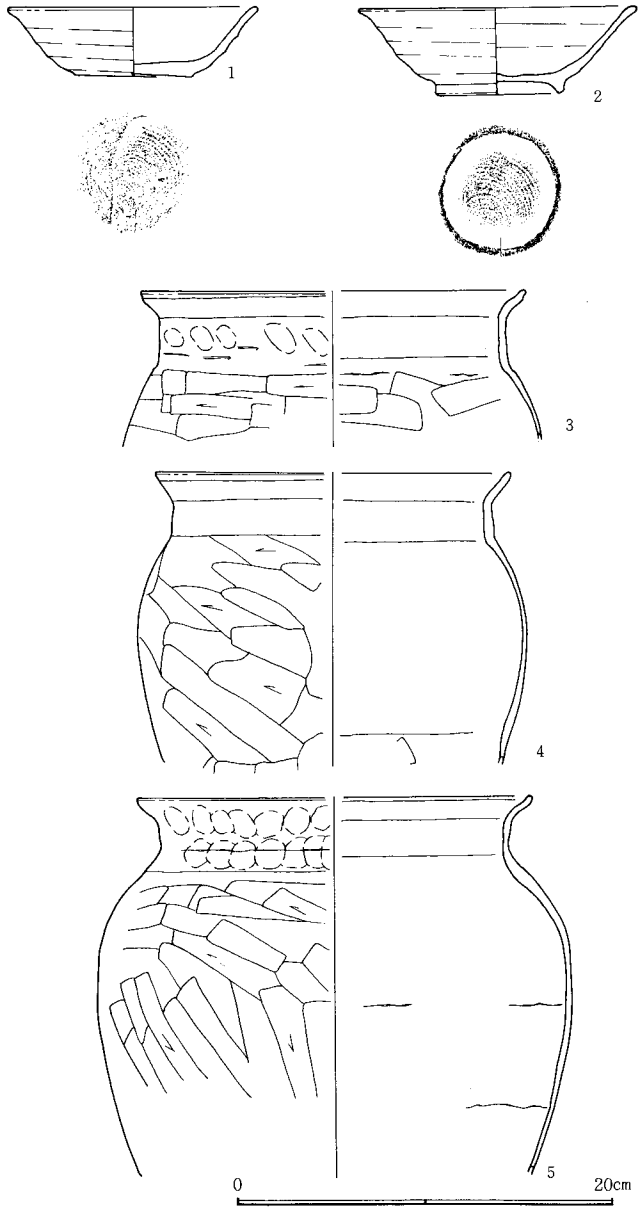
（江原）

H60号住居跡（図—119、120　図版—8、71　表—63)(XI期)



1．黒色土。浮石を多量に含む。2．黒色土。ローム混入。

図－119　H－60号住居跡



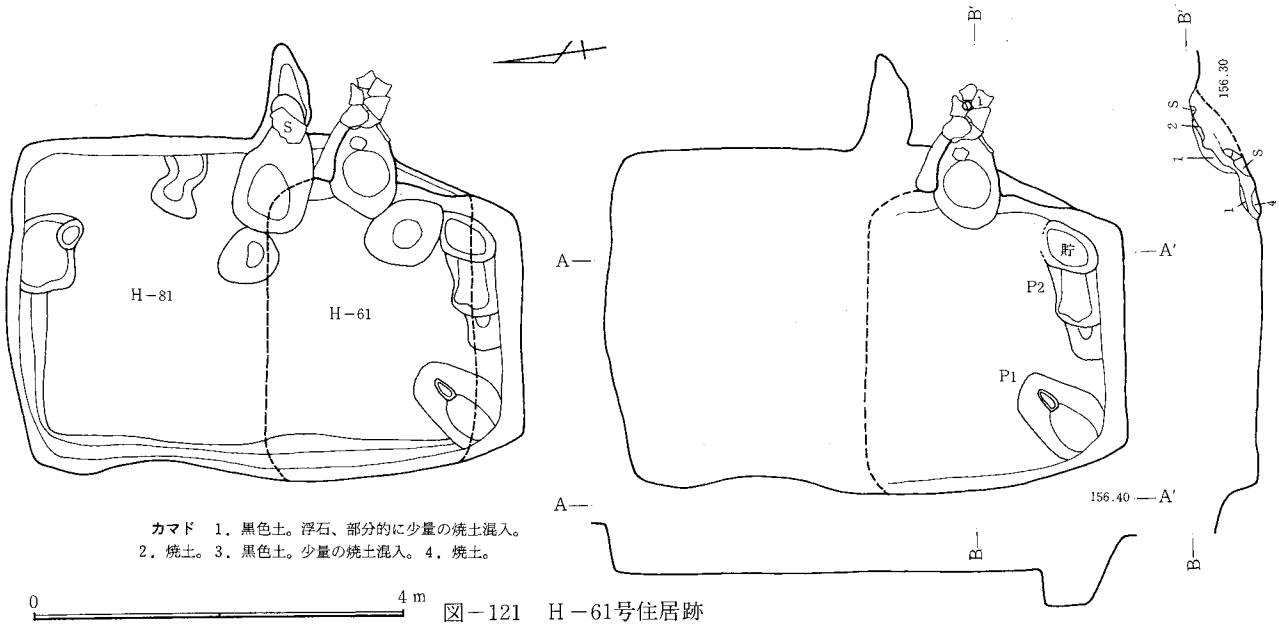
図－120　H－60号住居跡出土遺物

位置　西台地中央部のJ10に所在する。　**形状**　南北4.5m、東西3.0mを測るが、南壁より北壁の方がやや長い長方形を程している。住居の四隅は隅丸となっている。壁の形状は全て直線である。長軸方向を南北にとり、N－8.5°－Eを測る。面積は12.8m²。幅9～12cm、深さ3cmほどの周溝が北壁西側半分で確認された。床面の南側部分は貼床があったと考えられ、床面下構造において、大小のピットおよび凹凸が見られた。　**ピット**　床面上より1個確認される。42×30cm、深さ25cmである。なお床面下にはピット状の凹凸が見られた。　**カマド**　東壁中央やや南寄り。構築材に自然石を使用し、自然石の角状の板石を立てて石の面積の広い面をカマド内側に利用している。カマドの両袖および奥部分を含めて丸石を使っている。全長115cm、燃焼部分74cm、袖部内幅32cmを測る。壁外への掘り込み70cm、角度は42°である。　**貯蔵穴**　東南の隅から東壁寄りに存在。形状は不定形で南北に連なる形である。131×50cm、深さ30cmである。

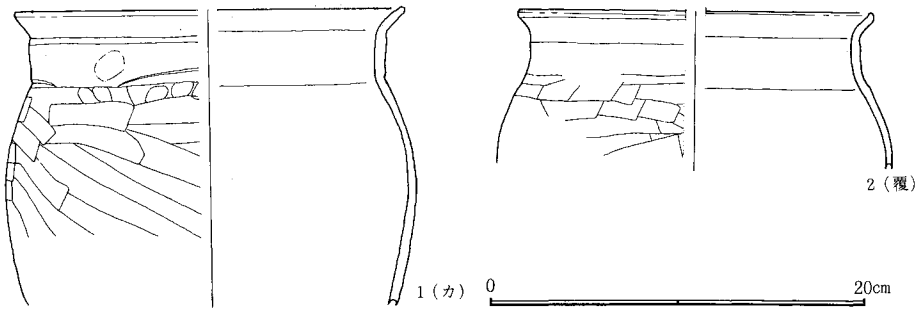
遺物　カマドの前方より集中して出土する傾向がみられ、須恵器坏（1）須恵器高台付埦（2）、土師器の甕（3・4・5）、および他に土器片が出土している。

（江原）

H61号住居跡（図－121、122　図版－8、72　表—64)(XI期)



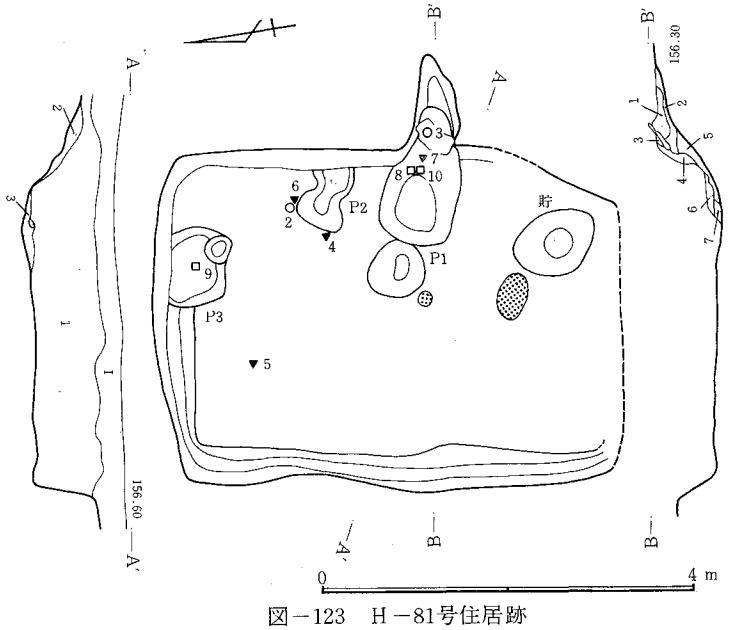
図－121　H－61号住居跡



図－122　H－61号住居跡出土遺物

位置　西台地の中央部やや南のK8に所在する。　**形状**　南北2.5m（推定)、東西2.8mを測る。他の住居に比らべて、東西に長い長方形の住居である。面積は7.2m²（推定）である。壁高は40cm～47cmで、住居の形状は隅丸方形と考えられ、長軸方向はN—83.5°—Wを測る。　**ピット**　2個確認され、P_1は100×72cm、深さ19cmで、P_2は94×42cm、深さ19cmである。　**カマド**　東壁北寄りに自然石8個を使用して構築している。全長155cm、燃焼部長70cm、袖部内幅70cm、壁外への掘り込み120cmである。壁外へは、煙出しとして甕の底をぬいて利用していた。　**貯蔵穴**　南東隅に密着し、楕円形で70×45cm、深さ29cmの貯蔵穴が存在する。　**遺物**　土師器の甕がカマド煙出し部分より出土している(1)。　**重複関係**　H81号住居跡と重複。地層および、遺物の残存状態から本住居跡の方が新しい住居であることが考えられる。　（江原）

H81号住居跡（図－123、124　図版－8、72　表—65)（X期）



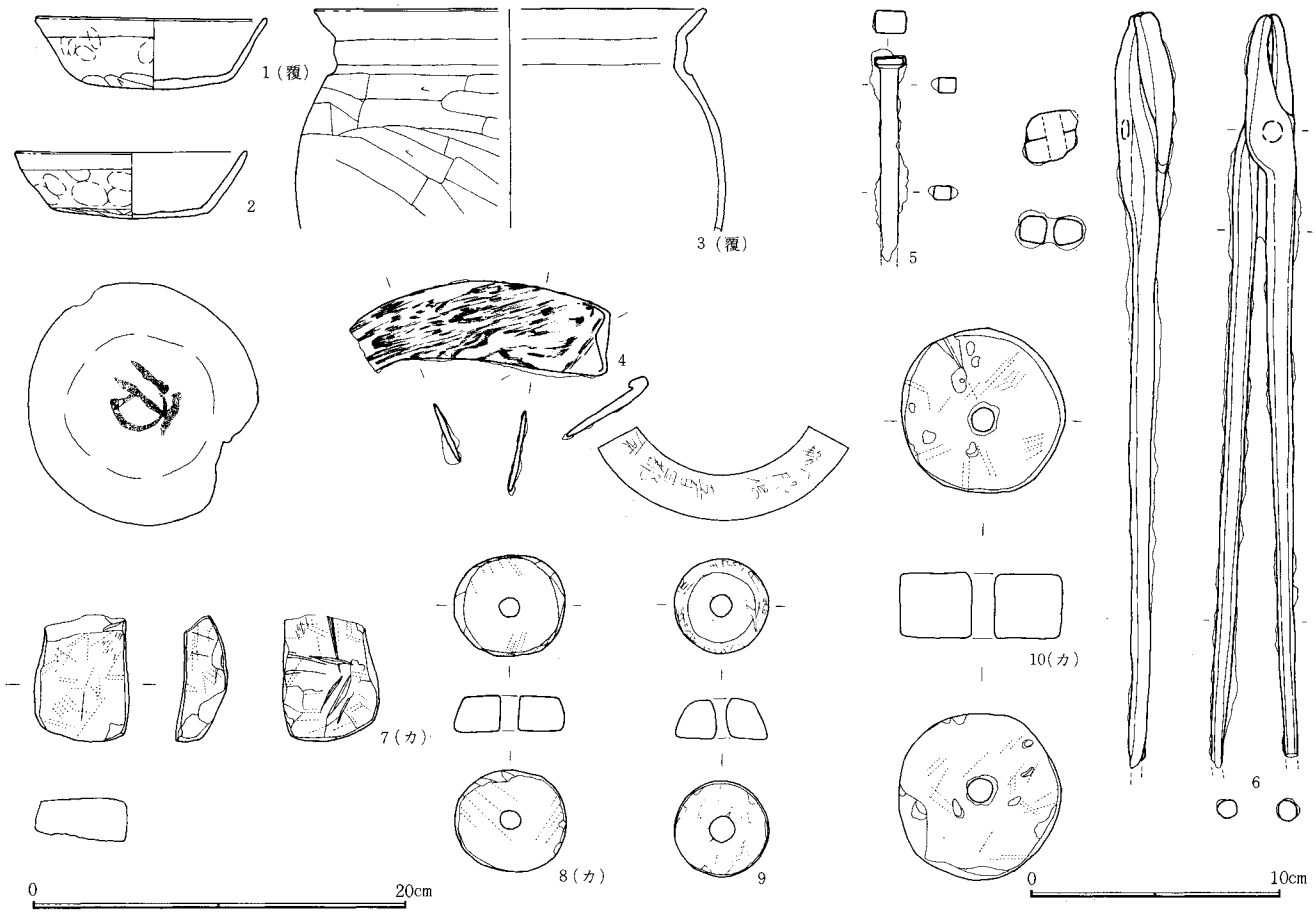
図－123　H－81号住居跡

位置　K8　**形状**　南北4.8m（推定)、東西3.3mを測る。南北については、H81号住居跡の南側部分にH61号住居跡が切り込み構築している為、住居の南側壁は推定である。面積は約15.7m²（推定）である。この住居に重なっているH61号住居跡は東西に長い長方形であるが、H81号住居跡は南北に長い長方形で、長軸方向はN—9°—Eである。壁高は39～47cmを測り、周溝は北壁中央から西壁全面に残る。南壁はH61号住居跡により失なわれている。周溝の幅は5～18cm、深さ6cmである。

ピット　ピットは3個みとめられ、P_1、60×57cm深さ15cm、P_2、66×30cm深さ16cm、P_3、82×57cm深さ13cmである。　**カマド**　東壁ほぼ中央に存在し、カマドの中央上部に自然石の石が、ふた状に残存していた。規模は全長200cm、燃焼部長114cm、袖部内幅72cm、壁への掘り

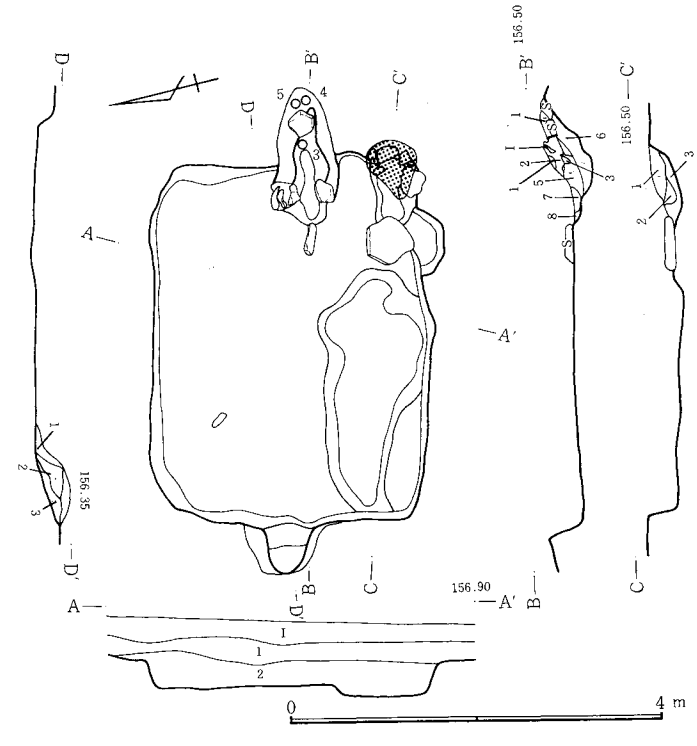
1．軽石を含む黒色土と栗色土の混合土。2．黒色土。軽石、栗色土少量混入。3．焼土。炭化物、ロームブロックを含む。　**カマド**　1．黒色土。浮石、ブロック状焼土混入。2．黒色土。石の下のみ焼土ブロック。3．焼土。4．黒色土。浮石、焼土混入。5．黒褐色土。焼土少量混入。6．黒色土。浮石、部分的にローム混入。7．焼土。黒色土、粘土混入。

込み角度32°、燃焼部は床面より8cm低い。　**貯蔵穴**　南東隅のやや内側、H61号住居跡カマドすぐ前に存在する。H61住居跡とH81号住居跡は重複するためにH61号住居跡カマド前に存在するピットはH81号住居跡の貯蔵穴と考えられる。90×69cm、深さ12cmの楕円形である。　**遺物**　土師器の坏（1・2）、（2）は墨書土器、土師器の甕（3）、鉄製鎌（4）、鉄釘（5）、鉄鉗（6）、砥石（7）、紡錘車（8・9・10）を出土している。遺物は主にカマド左前と北西隅より集中出土している。　**重複関係**　地層および床面の遺物の出土状況よりH61号住居跡より古いと考えられる。（江原）



図－124　H－81号住居跡出土遺物

H62号住居跡（図—125、126　図版—8、72　表—66）（X期）



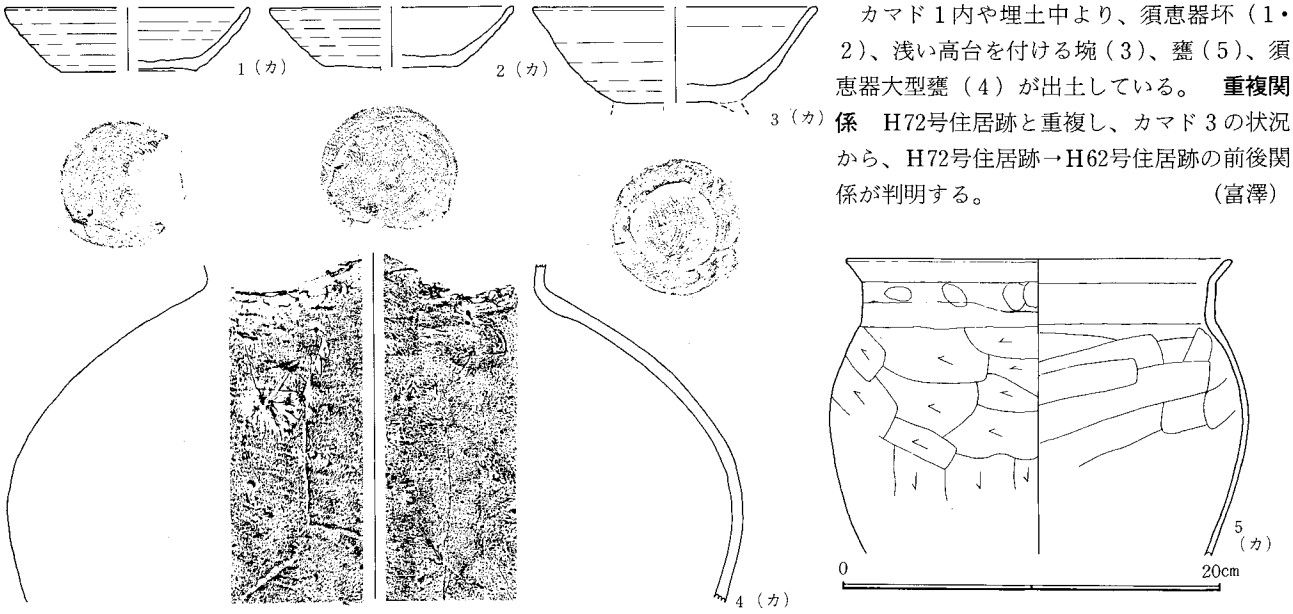
図－125　H－62号住居跡

位置　K8に所在する。西台地のほぼ中央に位置し、周囲には7軒程の竪穴住居跡が密集している。　**形状**　東西に長軸をとる長方形で長軸方向N—77°—W、南北2.9m、東西3.7m、面積7.2m²を測る。壁はほぼ直に立ち壁高は現状で20～35cm残る。周溝は存在しない。　**床面・ピット**　南壁寄りの所に浅い窪みが見られたが、柱穴等は存在しない。

カマド　東壁中央（カマド1）、南東隅（カマド2）、そして西壁中央（カマド3）の3個所にカマドがある。カマド1は3基の中でも中心的なもので、石材を用い壁より30cm入った所に袖石を立て、煙道にも扁平な石を置いている。全長126cm、燃焼部長60cm、袖部内幅24cm、煙道部の傾斜角度は緩く、18°を測る。壁外掘り込み、82cm。燃焼部は床面にくらべて12cm低い。カマド2も石材を用いるもので、カマドの手前には冠材とみられる石が落ちていた。全長76cm、燃焼部長52cm、袖部内幅22cm（現況）。煙道部の傾斜角度は25°を計る。壁外掘り込みは76cm。燃焼部分は床面にくらべ

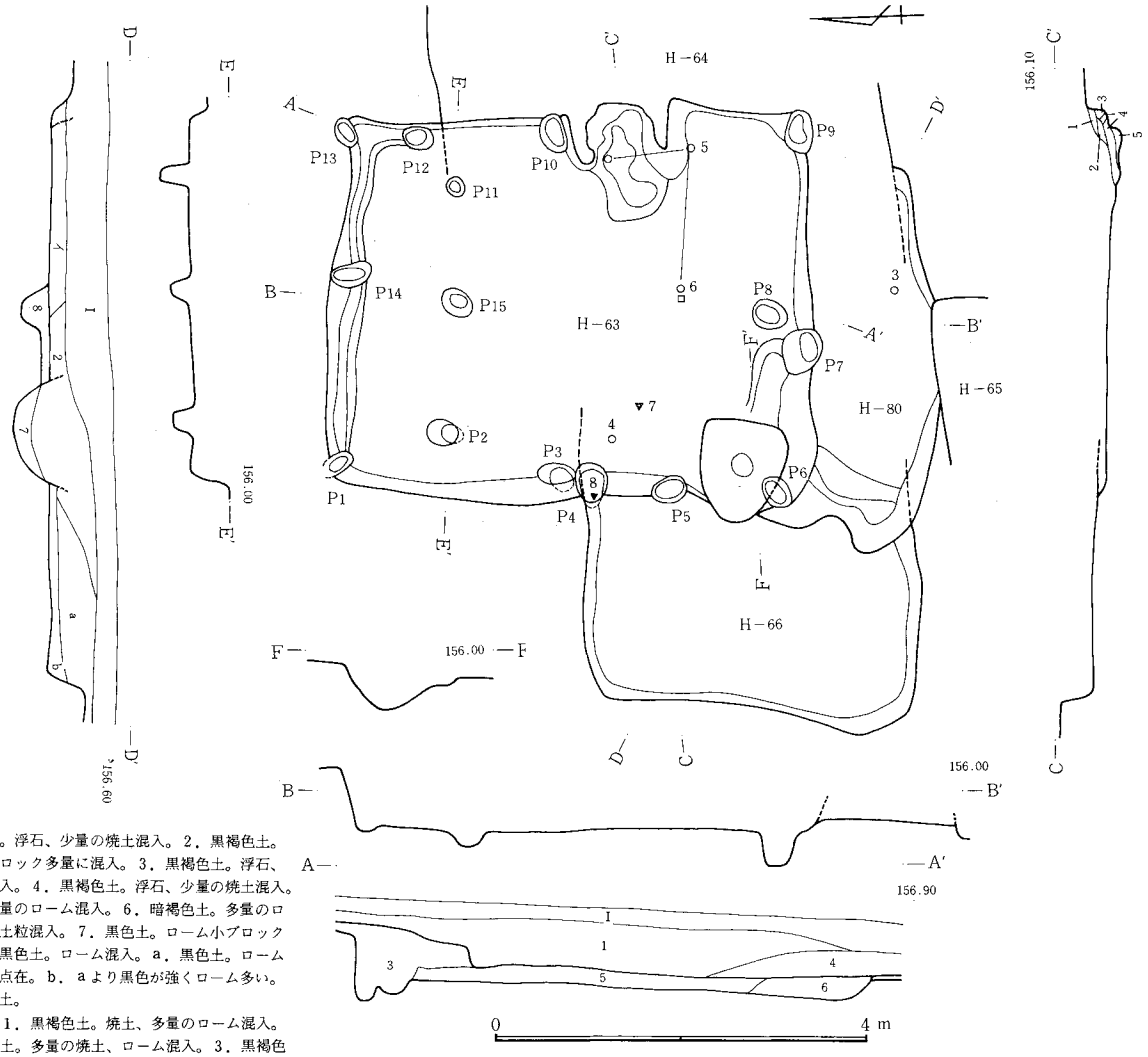
1．黒色土。浮石を含む。2．黒色土。褐色土、焼土混入。　**南カマド**　1．灰褐色土微砂。やや粘性あり。2．黒褐色土。焼土を少量含む。3．黒褐色土。粒子は粗い。　**北カマド**　1．黒褐色土。細かい浮石を含む。2．暗褐色土。焼土粒若干含む。3．焼土。4．暗褐色土。灰（灰白色土）多量に含む。5．黒褐色土。6．暗褐色土と焼土の混合土。7．暗褐色土・ローム・焼土の混合土。8．黒色土、ローム、褐色土の混合土。堅くしまる。　**西カマド**　1．黒褐色土。焼土点在。2．赤褐色土。焼土を多量に含む。3．黄褐色土。焼土を少量含。

て5cm低い。カマド3は壁外に造り出し、平面方形に掘り込んでいる。全長60cm、燃焼部長56cm、袖部内幅52cm。壁外掘り込み60cm。煙道部の傾斜は37°を測る。燃焼部分は床面にくらべて9cm低い。石材は用いていない。 **貯蔵穴** 貯蔵穴はない。 **遺物** カマド1内や埋土中より、須恵器坏（1・2）、浅い高台を付ける椀（3）、甕（5）、須恵器大型甕（4）が出土している。 **重複関係** H72号住居跡と重複し、カマド3の状況から、H72号住居跡→H62号住居跡の前後関係が判明する。 （富澤）



図－126 H－62号住居跡出土遺物

H63、66、80号住居跡（図－127、128 図版－8、72 表－67）（X、不明、IX期）

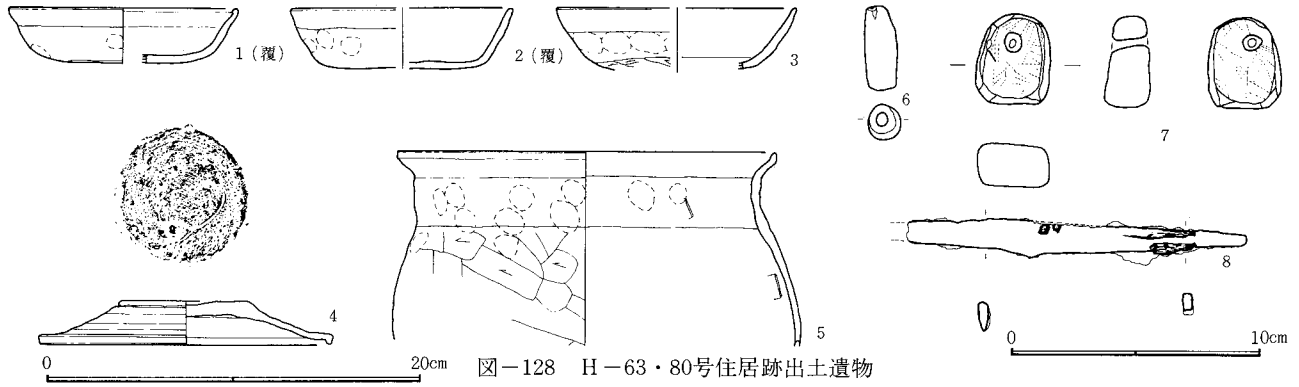


1．黒色土。浮石、少量の焼土混入。2．黒褐色土。ローム小ブロック多量に混入。3．黒褐色土。浮石、ローム塊混入。4．黒褐色土。浮石、少量の焼土混入。5．3に多量のローム混入。6．暗褐色土。多量のローム粒、焼土粒混入。7．黒色土。ローム小ブロック点在。8．黒色土。ローム混入。a．黒色土。ローム小ブロック点在。b．aより黒色が強くローム多い。
イ．黒褐色土。

カマド 1．黒褐色土。焼土、多量のローム混入。2．黒褐色土。多量の焼土、ローム混入。3．黒褐色土。粗砂。4．黒褐色土。焼土多量に混入。5．暗褐色土。ローム多量に混入。

図－127 H－63号・66号・80号住居跡

位置　調査区域の西台地の中央部、K 7・8に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上の住居跡密集地に位置し、H—66、80および64と重複している。　**形状**　H—63は南北に長軸をもつ長方形で規模は東西3.8m、南北4.7m、面積17.4m²である。長軸方向はN—0°—W、壁高は13～56cmである。北壁とそれに続く東壁の一部に幅6～30cm、深さ6cmの周溝が認められる。H—66の東半分は土坑によって破壊され東西の規模は不明であるが、南北は3.3mで、確認された部分の面積は6.5m²である。長軸方向は、N—8°—E、壁高は11～34cmである。H—80の北の大部分はH—63によって破壊され南北の規模は不明であるが、東西は3.8m、確認された部分の面積は4.0m²である。長軸方向は、N—0°—W、壁高は9～10cmである。　**ピット**　H—63内に、大小都合15個検出、$P_2P_{15}P_{11}$は住居内北側にほぼ等間隔で直線上に位置する。他の多くは壁中にあり柱穴と思われる。　**カマド**　H—63。東壁中央やや南寄り。壁外掘り込みは東に隣接するH—64に破壊され不明であるが、残された部分の全長は78cm、袖部内幅55cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度85°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差—11cmである。H—66の床面東半分は破壊されているが、H—63内に認められるP_6内から白色粘土および鉄片が検出されていることから、これがH—66のカマドの残りとも推定される。H—80については不明。　**遺物**　[H—63] 南西部の床面上8cmから砥石（7）、南部の床面上2cmから土錘（6）、その他土師器甕（5）、須恵器蓋（4）、ピット4内より鉄製品刀子（8）が出土。[H—66] なし。[H—80] 南壁付近から土師器坏（3）が出土。　**重複関係**　旧→新とすると、H—80→63→64、63→66となる。64と66の新旧は不明である。H—80とH—65との新旧は不明。H—66とH—65との新旧は、南北地層断面により、H—65が新しい。住居の重複部にさらに新しい土坑が重複する。　（白石）



図—128　H—63・80号住居跡出土遺物

H64号住居跡（図—129、130、131　図版—8、73　表—68）(XI期)

位置　K 8。　**形状**　南北に長軸をもつ方形で規模は東西3.0m、南北4.2m、面積12.8m²である。長軸方向はN—4°—W、壁高は11cm～34cmである。H—63と重複している住居の西部分に貼床が施されている。　**カマド**　北カマド。東壁南寄り。全長105cm、燃焼部長60cm、袖部内幅54cm、壁への掘り込み角度48°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差—1cmである。燃焼部および煙道部に構築材である石が5個残存。南カマド。南東隅。全長110cm、燃焼部長58cm、袖部内幅22cm、壁への掘り込み角度45°。燃焼部は床面にくらべて7cm低い。袖石・支石を残す。　**貯蔵穴**　南東隅、長方形に近い不定形で37×31cm、深さ12cmである。内壁には直方体の石が都合2個両側にそれぞれ縦に使用されている。　**遺物**　北カマド内部、燃焼部火床面直上から土師器甕（7）が、北カマド左手前より土師器甕（5）が出土、南カマド内より須恵器皿（3）須恵器埦（2）等が出土、

重複関係　本住居跡はH—63、H—80と重複している。地層断面により、旧→新とすると、H—63→64、H—80→64。H—66とH—64の新旧は不明。　（白石）

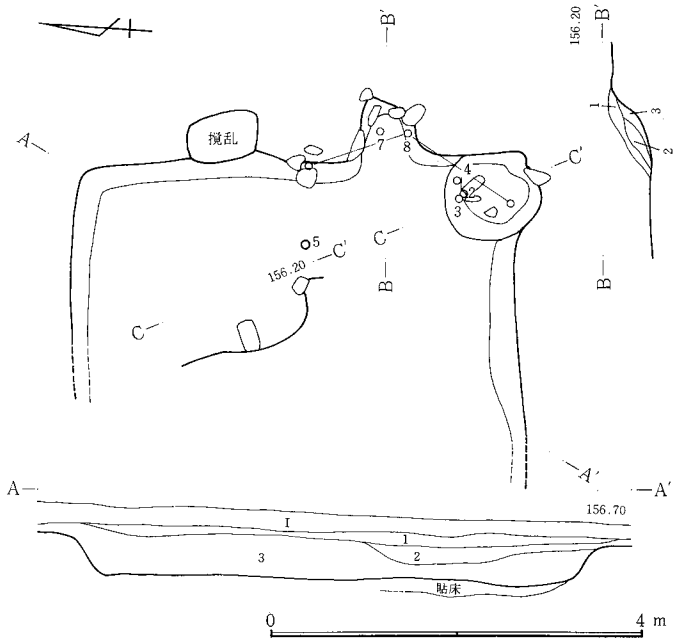
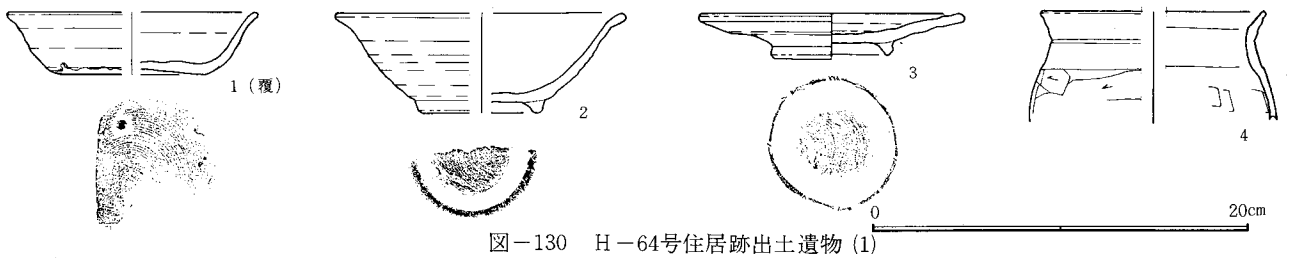
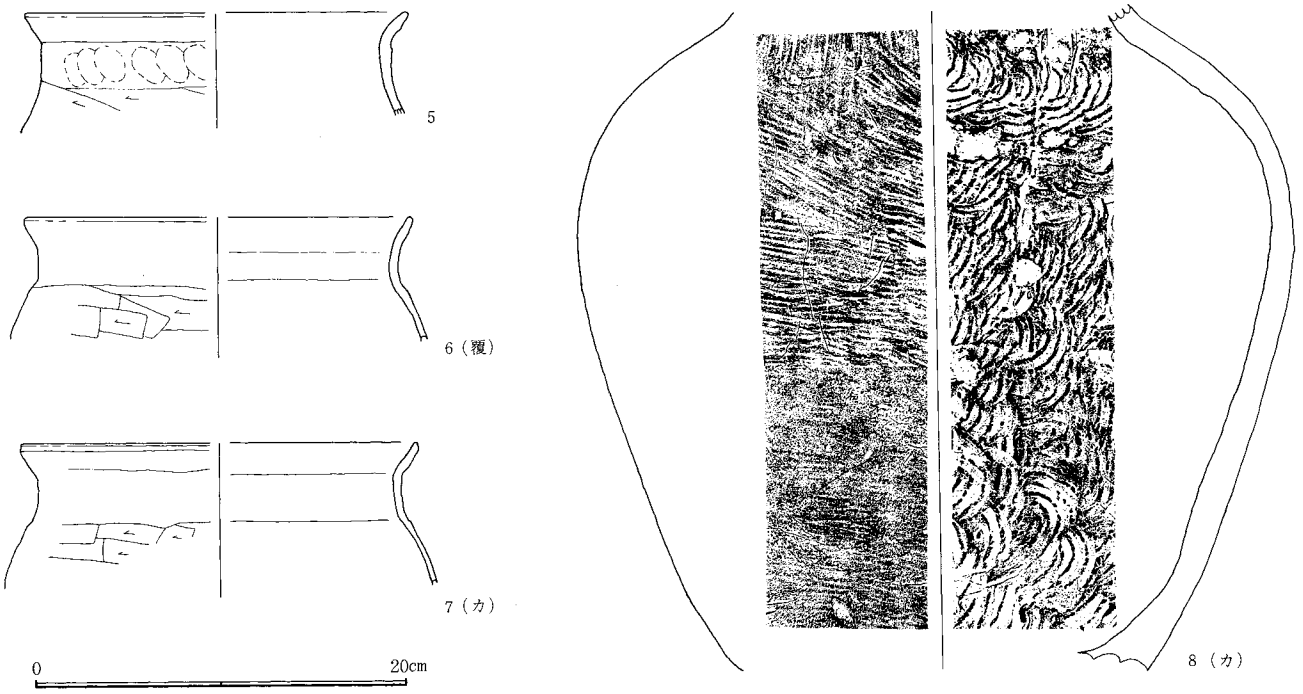


図129　H—64号住居跡

1．黒色土。浮石混入。2．2にローム質多量に混入。3．黒色土。褐色土少量混入。　**カマド**　1．黒色土。焼土が混入。2．赤褐色土。焼土主体。3．黒色土と焼土の混合。

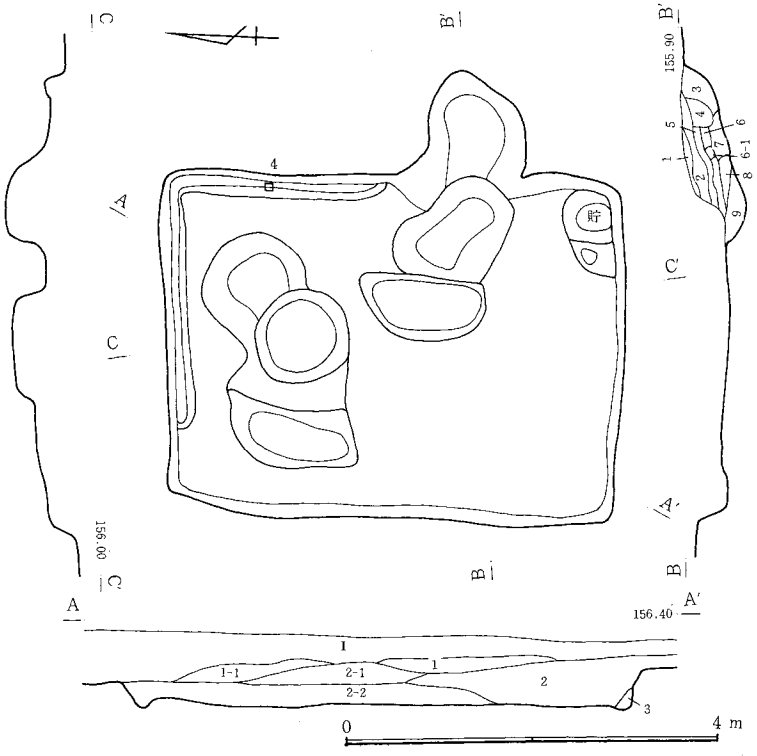


図—130　H—64号住居跡出土遺物 (1)



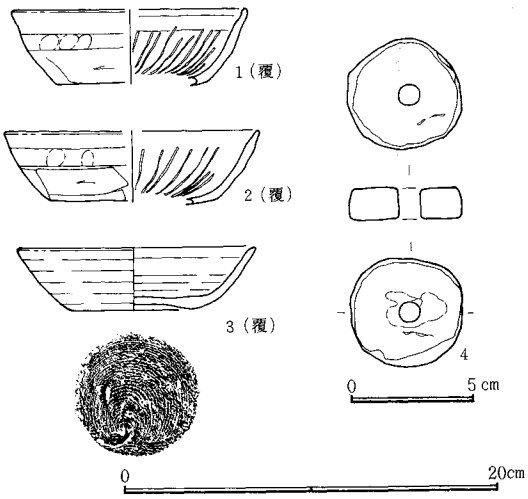
図－131　H－64号住居跡出土遺物（２）

H65号住居跡（図－132、133　図版－８、73　表－69）



1．耕作土にローム多量に混入。1-1．木の燃えかす。2．黒褐色土。浮石、ローム粒点在。2-1．黒色土。浮石、ローム粒点在。2-2．浮石。ローム粒、褐色土混入。3．2とロームの混合土。　**カマド**　1．ロームと黒色土の混合土。2．黒色土。浮石、ローム混入。3．黒褐色土。4．黒色土。浮石、ローム、焼土混入。5．黒色土。多量のローム、焼土混入。6．ローム。焼土点在。6-1．6に黒色土少量混入。7．ロームと黒色土の混合土。焼土混入。8．ロームと焼土の混合土。9．黒色土。ロームと焼土の混合土。

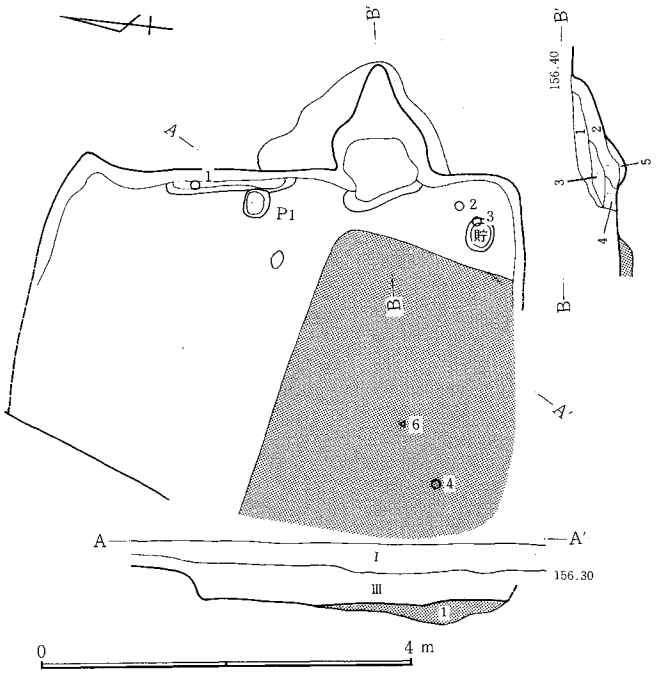
図－132　H－65号住居跡



図－133　H－65号住居跡出土遺物

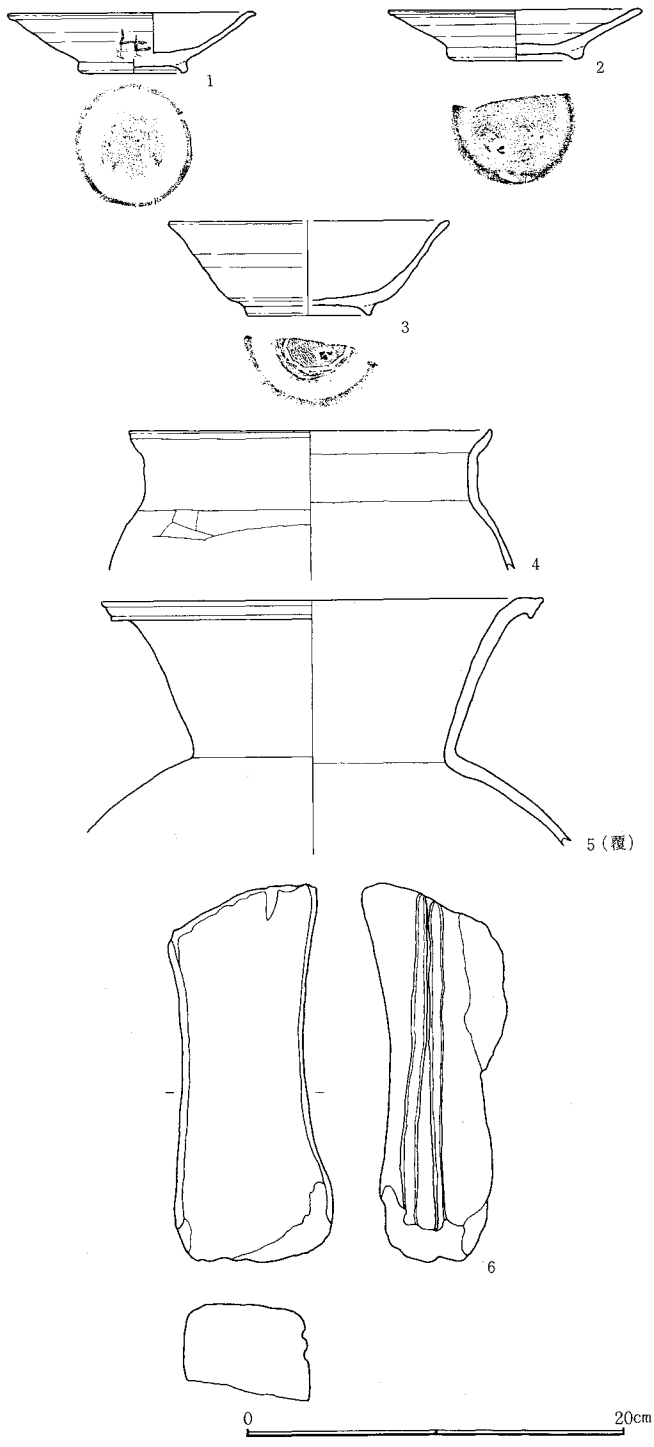
位置　調査区域の西台地のほぼ中央部、K７に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上の住居跡密集地域に位置する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で規模は東西3.4m、南北4.7m、面積16.1m²である。長軸方向は、N－0°、壁高は14～54cmである。東壁カマド北側より北壁東側の３分の２に沿って周溝をめぐらす。幅６～11cm、深さ１～４cmである。数ケ所に床下土坑が認められ住居跡北半分に連続する。ほぼ円型で径は約50cm、深さ20～50cm前後である。またカマド焚き口手前には楕円形のピット。規模60～130cm、深さ40cm。これらのことから貼床があったと推定される。　**カマド**　東壁南寄り。全長150cm、壁外掘り込み143cm、燃焼部長100cm、袖部内幅77cm、壁への掘り込み角度58°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－19cmである。　**貯蔵穴**　南壁東隅、楕円形で規模は90×50cmである。内部は２段２部に分かれ、それぞれがほぼ円形である。より深く大きい方は、東壁と南壁の隅にあり、規模55×50cm、深さ10cmである。　**遺物**　カマド北側周溝内から紡錘車（４）、埋土中より土師器坏（１・２）須恵器坏（３）が出土。　**テフラ**　２－１、２－２層に浮石混入。　**その他**　住居跡北半分に認められる床下土坑は小鍛冶の作業跡の可能性も考えられるが、覆土および地層断面、遺物からは、それとの関係を見ることができない。　**重複関係**　地層断面より、H－66（旧）→H－65（新）　（白石）

H67号住居跡（図－134、135　図版－8、73　表－70）（X期）



1．黒褐色土。焼土、粘土、灰を含む。壁ぎわは、ロームが、ブロック状にまじっている。　**カマド**　1．黒色土（浮石を含む。）と白色粘土の混合土。焼土粒わずかに混入。2．焼土。3．黒色土・粘土・ロームの混合土。焼土粒混入。4．白色粘土。5．黒色土とロームの混合土。

図－134　H－67号住居跡

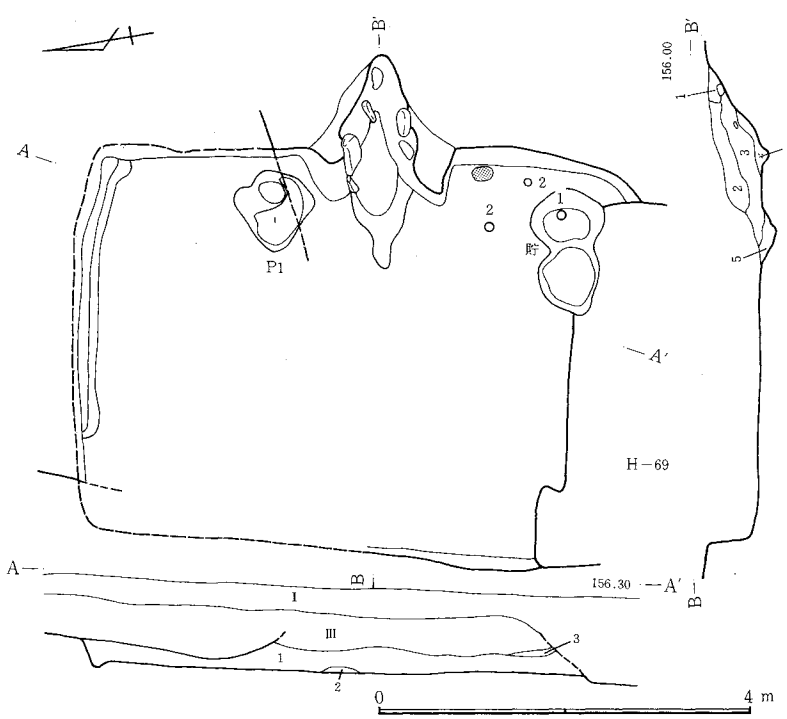


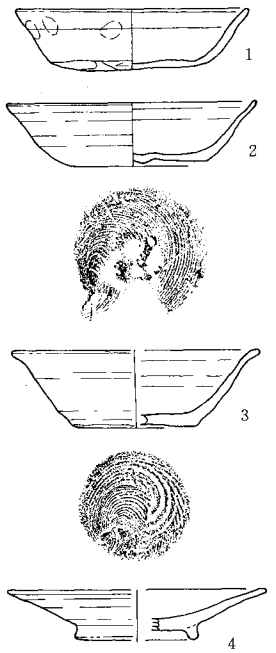
図－135　H－67号住居跡出土遺物

位置　西台地のほぼ中央部、K7に位置する。　**形状**　住居跡南半分はH－68と重複し、その部分には貼り床が施されている。北西部分は調査区外であるため全体の形状は不明である。東壁だけが完掘され、その規模は南北5.5mで面積15.3m²である。長軸方向はN－3°－W、壁高は23～40cmである。東壁カマド北の一部に周溝が認められ、幅6～13cm、深さ1cmである。　**ピット**　東壁カマドの北側周溝に接してある。長方形で30×26cm、深さ13cmである。　**カマド**　東壁南寄り全長150cm、壁外掘り込み123cm、燃焼部長60cm、袖部内幅65cm、壁への掘り込み角度21°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差＋1cmである。覆土中より白色粘土を検出、カマド構築に使用されたものと思われる。　**貯蔵穴**　南東隅、長方形で34×28cm、深さ14cmである。　**遺物**　カマドの北側、東壁に接して床面上10cmから須恵器皿（1）、貯蔵穴の北東床面上11cmから須恵器皿（2）、貯蔵穴の北東縁から須恵器椀（3）、その他、砥石（6）、土師器（4）が出土。　**テフラ**　III層中に多量の浮石混入。　**重複関係**　本住居跡の南半分がH－68と重複。遺構の現存状態および地層断面より、H－68が旧い。　（白石）

H68号住居跡（図－136、137　図版－9、73　表－71）（X期）

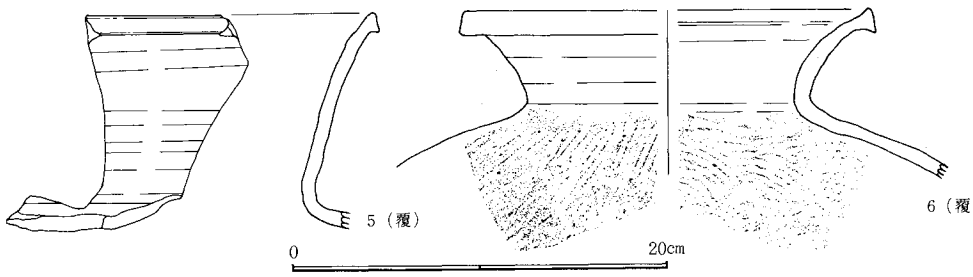
位置　K7。　**形状**　長方形で規模は東西4.1m、南北6.0mである。推定される面積は23.1m²である。長軸方向はN－13.5°－E、壁高は約26cmである。北壁に沿って幅8～11cm、深さ5～7cmの周溝が認められる。　**ピット**　カマドの北側、東壁近くに不定形で73×67cm、深さ36cmである。　**カマド**　東壁中央。都合6個の石が構築に使用されている。カマド内部の左右に石の広い面が向けられ、それぞれ2個の石が並べ立てられ、煙出し穴部分にも2個使用されている。石は白色粘土でかためられ両袖部分は住居内に突き出す。全長は170cm、壁外掘り込み112cm、燃焼部長100cm、袖部内幅63cm、壁への掘り込み角度43°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－12cmである。　**貯蔵穴**　南壁東寄り。西に位置する部分は、60×80cm、深さ20cm、東部分は深さ24cm、80×60cmである。　**遺物**　貯蔵穴内より土師器坏（1）が出土、貯蔵穴北より須恵器坏（2）、埋土中より須恵器坏（3）と皿（4）、鉄製品釘（7）、須恵器甕（5・6）が出土している。　**重複関係**　住居跡北部がH－67と、南部がH－69と重複する。南北地層断面図によると、H－67と重なる部分にはH－67の貼り床がなされており、H－68の覆土をH－69の覆土が切っていることより、新旧は（旧→新）H－68→H－67、H－68→H－69となる。　（白石）

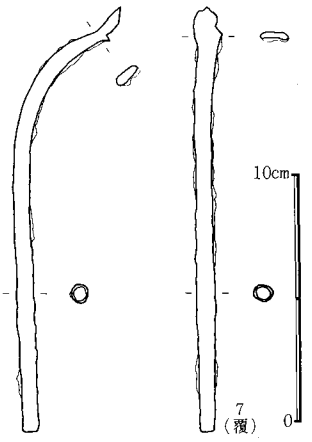




1．黒褐色土。ロームブロック、浮石点在。2．黒褐色土。焼土を含む。3．灰色粘質土。　**カマド**　1．焼土・暗褐色土・ロームがブロック状に混入。2．焼土・黒色土・暗褐色土・ロームがブロック状に混入。3．黒褐色土。多量の焼土混入。4．黒褐色土。ロームブロックが点在。焼土少し含む。5．黒色土。焼土、多量のロームがブロック状に混入し堅く締る。

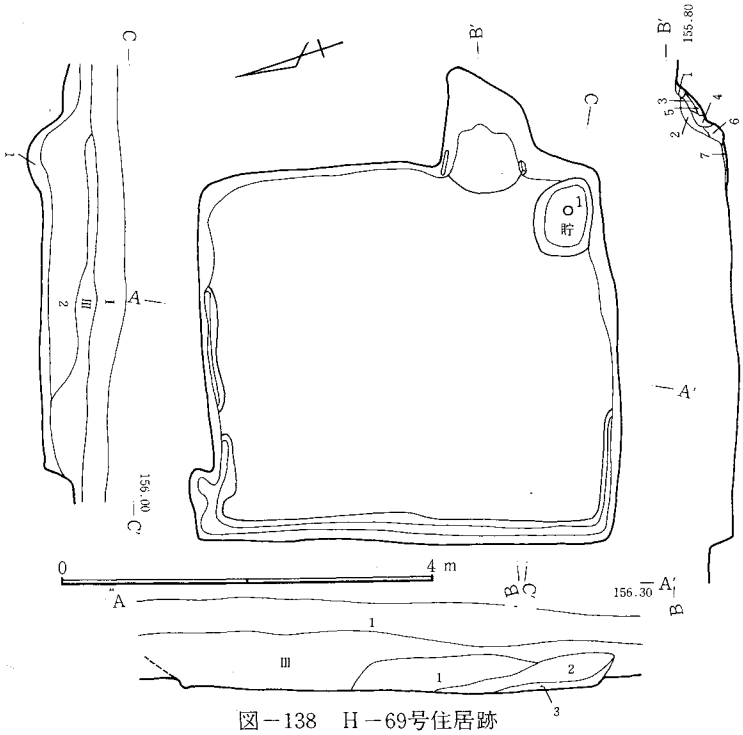
図－136　H－68号住居跡





図－137　H－68号住居跡出土遺物

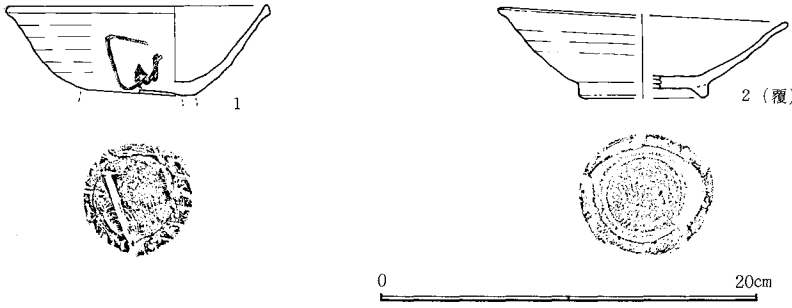
H69号住居跡（図—138、139　図版—9、74　表—72）（X期）



図－138　H－69号住居跡

位置　調査区域の西台地のほぼ中央部、南方向に傾斜する緩斜面上の住居跡密集地域K7に所在する。**形状**　南北が東西に比較してやや長いがほぼ正方形である。規模は東西3.8cm、南北4.3m、面積4.4m²である。長軸方向はN－17°－E、壁高は16～25cm。北壁から西壁および南壁西寄り2分の1に沿って幅3～15cm、深さ1cmの周溝が認められる。　**カマド**　東壁南寄りの南壁近く。全体はほぼ壁外に構築されている。両袖と壁との接合部分、カマドの内側の左右にそれぞれ2個の小石が使用されている。全長は123cm、壁外掘り込み117cm、燃焼部長73cm、袖部内幅76cm、壁への掘り込み角度38°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差＋1cmである。　**貯蔵穴**　南壁東隅、カマドの右袖部に接近してある。隅丸方形で85×68cm、深さ24cmである。

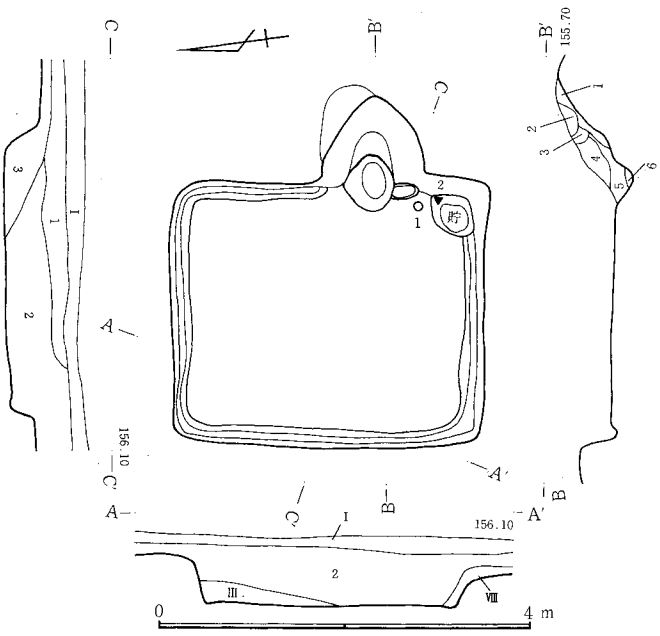
1．黒褐色土。ロームブロック点在。2．暗褐色土。FP、多量のロームブロック混入。3．黒色土・暗褐色土混土。　**カマド**　1．焼土。2．黒褐色土。浮石、若干の焼土粒混入。3．黒褐色土。焼土粒点在。4．黒褐色土と焼土の混合土。5．暗褐色土。6．2に類似。焼土やや多量。7．焼土と暗褐色土の混合土。



図－139　H－69号住居跡出土遺物

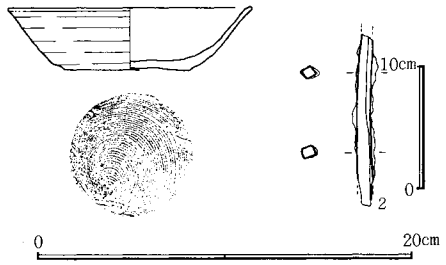
遺物　少なく、貯蔵穴内の底から墨書須恵器椀（1）と、埋土中より須恵器椀（2）が出土している。　**テフラ**　Ⅲ層中に多くの浮石が混入し、2層中にはＦＰが点在する。　**重複関係**　本住居跡の北壁とH－68の南壁とが重複する。南北地層断面図の切り合いの様子と、本住居跡の北壁がH－68の南壁を破壊し、現存していることから、本住居跡はH－68より新しい。（白石）

H70号住居跡（図－140、141　図版－9、74　表－73）（X期）



1．暗褐色土・黒褐色土混土。2．暗褐色土。3．黒褐色土。1．赤褐色土。焼土、ローム混入。2．黄褐色土。黒色土混入。3．褐色土。4．黄褐色土。ローム混入。5．黒褐色土。焼土点在。6．黒褐色土。ロームブロック混入。

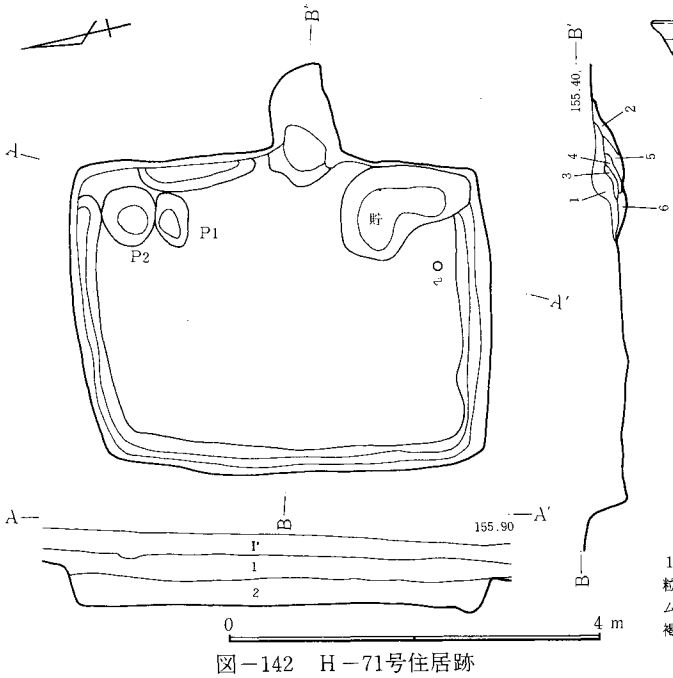
図－140　H－70号住居跡



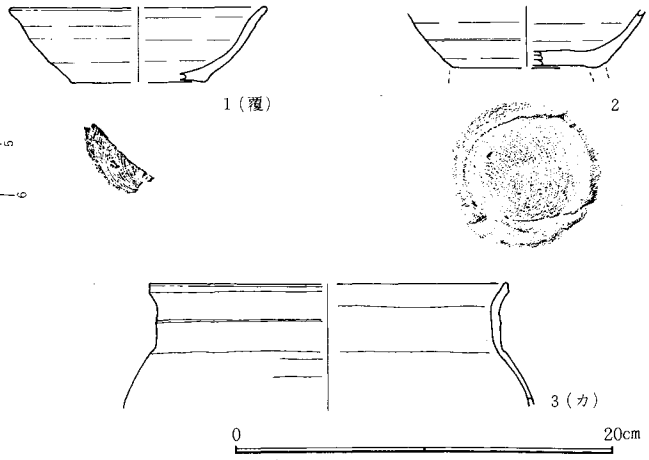
図－141　H－70号住居跡出土遺物

位置　西台地のほぼ中央部のＫ７で、南方向に傾斜する緩斜面上の住居跡密集地域に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で四隅は比較的丸みがなく直角である。規模は東西2.7m、南北3.2m、面積8.5m²である。カマドの南部分の貯蔵穴周辺を除き全周に沿って周溝をめぐらす。幅2～15cm、深さ1～8cmである。長軸方向は、N－9°－E、壁高は、30～45cmである。　**カマド**　東壁のやや南寄り全長133cm、壁外掘り込み110cm、燃焼部長70cm、袖部内幅44cm、壁への掘り込み角度40°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－22cmである。　**貯蔵穴**　南東隅に位置し2面が壁と接する不整方形。60×39cm、深さ16cmである。　**遺物**　カマド右袖先端近く床面上7cmから須恵器坏（1）、貯蔵穴内から釘（2）が出土。（白石）

H71号住居跡（図－141、142　図版－9、74　表－74）（X期）



図－142　H－71号住居跡

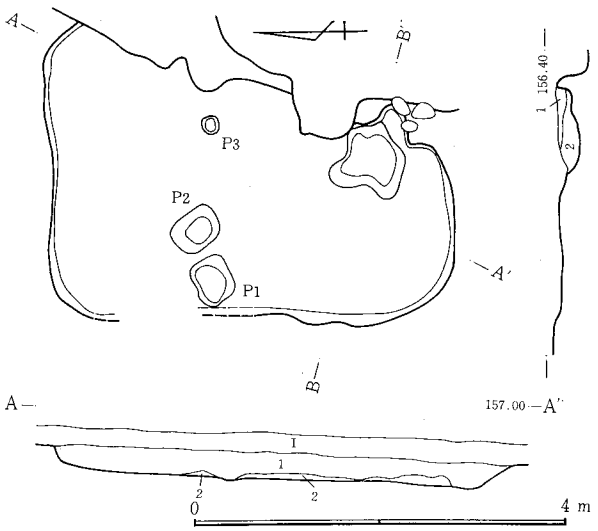


図－143　H－71号住居跡出土遺物

1．黒褐色土。C軽石多量に混入。2．黒褐色土。多量のC軽石、若干の焼土粒混入。　**カマド**　1．黒褐色土。ロームブロック混入。2．黄褐色土。ロームを含む。3．黄褐色土。ローム、粘土混入。4．赤褐色土。焼土混入。5．黒褐色土。焼土少量混入。6．黒褐色土。粘質。

位置　西側台地のほぼ中央部で、南方向に傾斜する緩斜面上の住居跡密集地域K６・７に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で規模は東西3.3m、南北4.2m、面積13.0㎡である。長軸方向はN－９°－E、壁高は22～41cmである。東壁カマド南側より貯蔵穴周辺以外は全て周溝をめぐらす。幅４～14cm、深さは２～10cmである。　**ピット**　北東隅に２個。ほぼ楕円形で、規模はP_1は、55×33cm、深さ16cm、P_2は、66×54cm、深さ16cmである。　**カマド**　東壁の中央、全長136cm、壁外掘り込み107cm、燃焼部長45cm、袖部内幅45cm、壁への掘り込み角度26°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－７cmである。　**貯蔵穴**　東壁南寄り。ひょうたん型で２部分よりなる。全体の規模は141×79cm、深さ27cm。　**遺物**　貯蔵穴西の南壁寄り、床面上10cmから須恵器埦（２）、カマドより土師器甕（３）、埋土中より土師器坏（１）が出土。　**テフラ**　床面上30～55cmでほぼ水平に認められる１層中より、C軽石の混入を確認。　（白石）

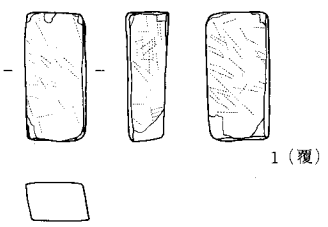
H72号住居跡（図－144、145　図版－９　表－75）（X期）

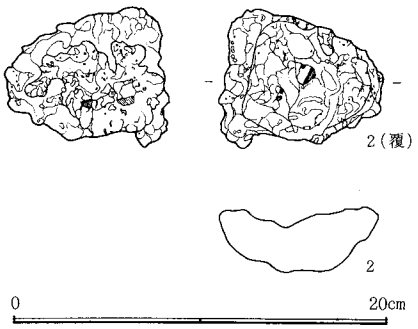


1．黒色土。浮石、焼土粒混入。２．黒褐色土。　**カマド**　１．黒褐色土。炭、焼土混入。２．黒褐色土。軽石少量混入。

図－144　H－72号住居跡

位置　K８に所在する。周辺にはH62号住居跡を始めとして７軒程の竪穴住居跡が密集している。　**形状**　ほぼ南北に長軸方向をとる長方形とみられるが、壁高が現状で９～27cmと浅い事もありはっきりしない。長軸方向はN－3.5°－Eで、南北4.2m、東西2.4mを測る。面積は9.8㎡（現状）である。　**ピット**　床面の北側半分に、平面方形を呈し、深さ10～20cm程の浅いピットが存在する。またカマドの手前には灰かき出し穴とみられるピットがあるが、柱穴は存在しない。P_1は50×39cmで深さ22cm、P_2は50×39cmで深さ11cm、P_3は18×17cmで深さ12cmである。　**カマド**　東壁の南壁に寄った地点にある。壁外に燃焼部を造り出している。燃焼部は床面にくらべて18cm低い。石材を用いていたとみられるが、H62号住居跡と重複しているため、攪乱を受けている。　**貯蔵穴**　存在しない。　**遺物**　埋土中より砥石（１）、鍛冶椀形滓（２）が出土している。　**重複関係**　東側でH62号住居跡と重複し、また北東部は一部削平されている。住居跡との関係は、H72号住居跡→H62号住居跡の順で、本跡の方が旧い。　（富澤）

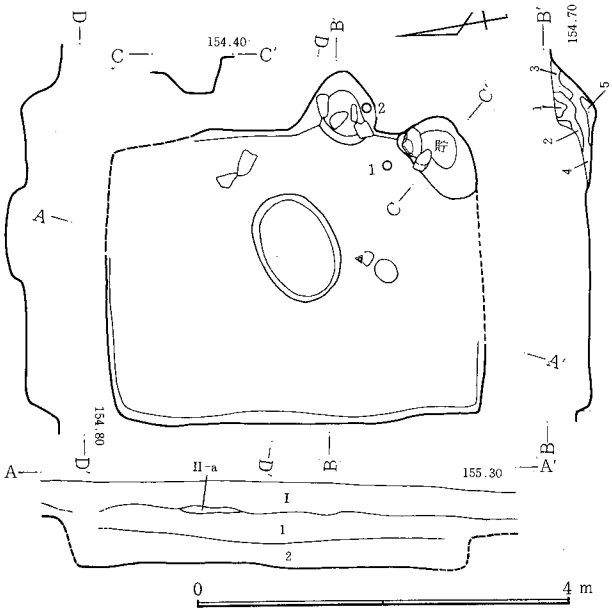




図－145　H－72号住居跡出土遺物

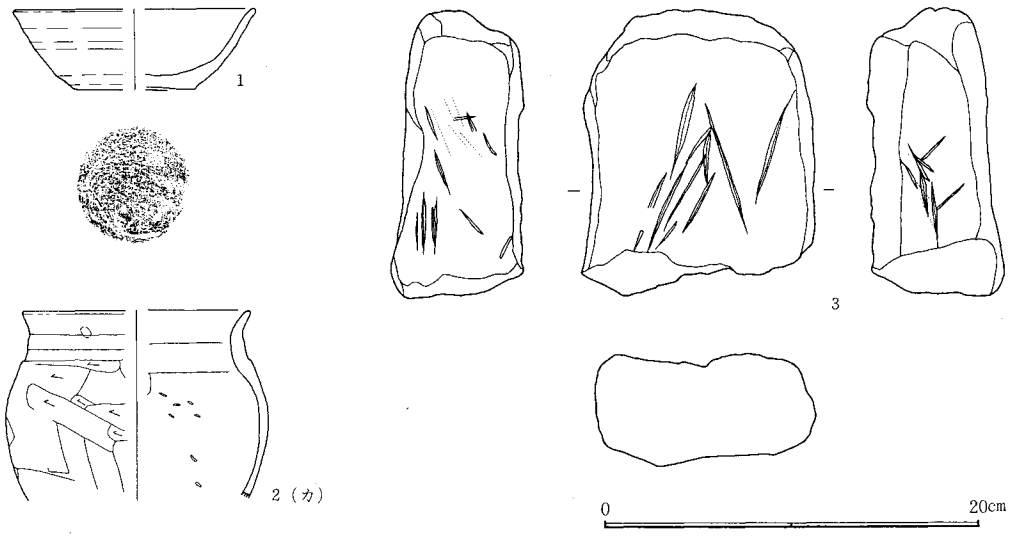
H73号住居跡（図－146、147　図版－９、74　表－76）（IX期）

位置　J６に所在する。西台地の中央部やや南にあり、西側３m程の所にはH74～79号住居跡が位置する。　**形状**　ほぼ南北に長軸をとる長方形で、長軸方向をN－10°－E。規模は南北4.0m、東西2.9m。面積8.7㎡を測る。壁は直に立ち、現状で13～34cmの壁高が残る。周溝は巡らない。　**ピット**　床面中央付近。カマドの手前に30cm程の間隔をあけて、118×83cm、深さ23cmの楕円形の平面をしたピットが存在する。小鍛冶的な作業場所であった事も考えられる。　**カマド**　東壁中央よりやや南へ寄った所で、燃焼部を壁外に造り出している。袖石を東壁上に置き、支脚が残る。石材を用いていたと考えられる。　**貯蔵穴**　南東隅に、平面三角形を呈し、21cmの深さに掘られた貯蔵穴があった。　**遺物**　カマド床面より甕（２）、床面上より須恵器坏（１）、砥石（３）等が出土している。　（富澤）



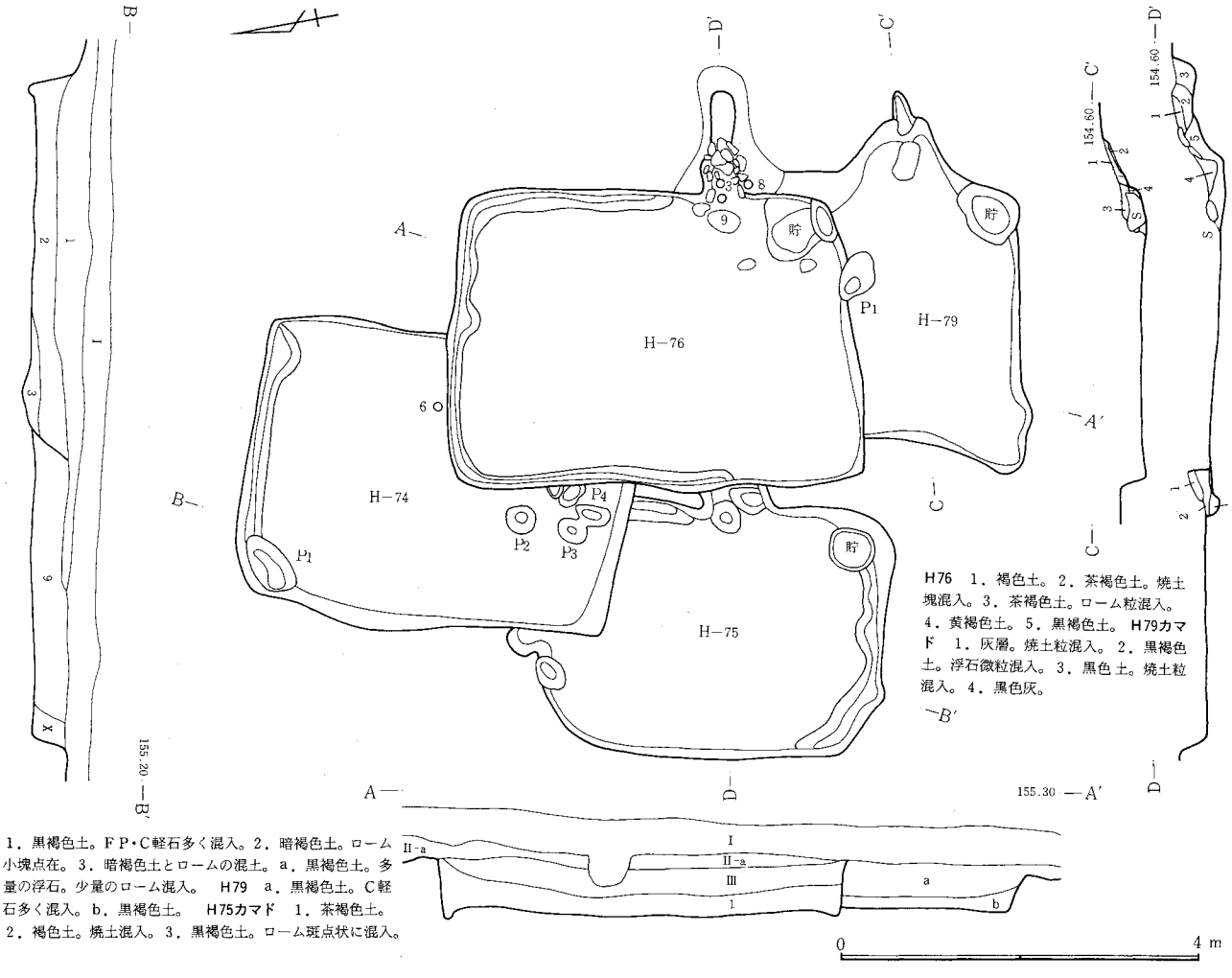
1．黒褐色土。２．暗褐色土。　**カマド**　１．黒褐色土。浮石を含む。２．暗褐色土。焼土混入。３．暗褐色土。焼土、ローム漸移層がブロック状に混入。４．黒褐色土。焼土、ロームブロック混入。５．暗褐色土。焼土混入。

図－146　H－73号住居跡



図－147　H－73号住居跡出土遺物

H74、75、76、79号住居跡（図—148、149　図版—9、74　表—77)(X、X、XI、IX期)



図－148　H－74・75・76・79号住居跡

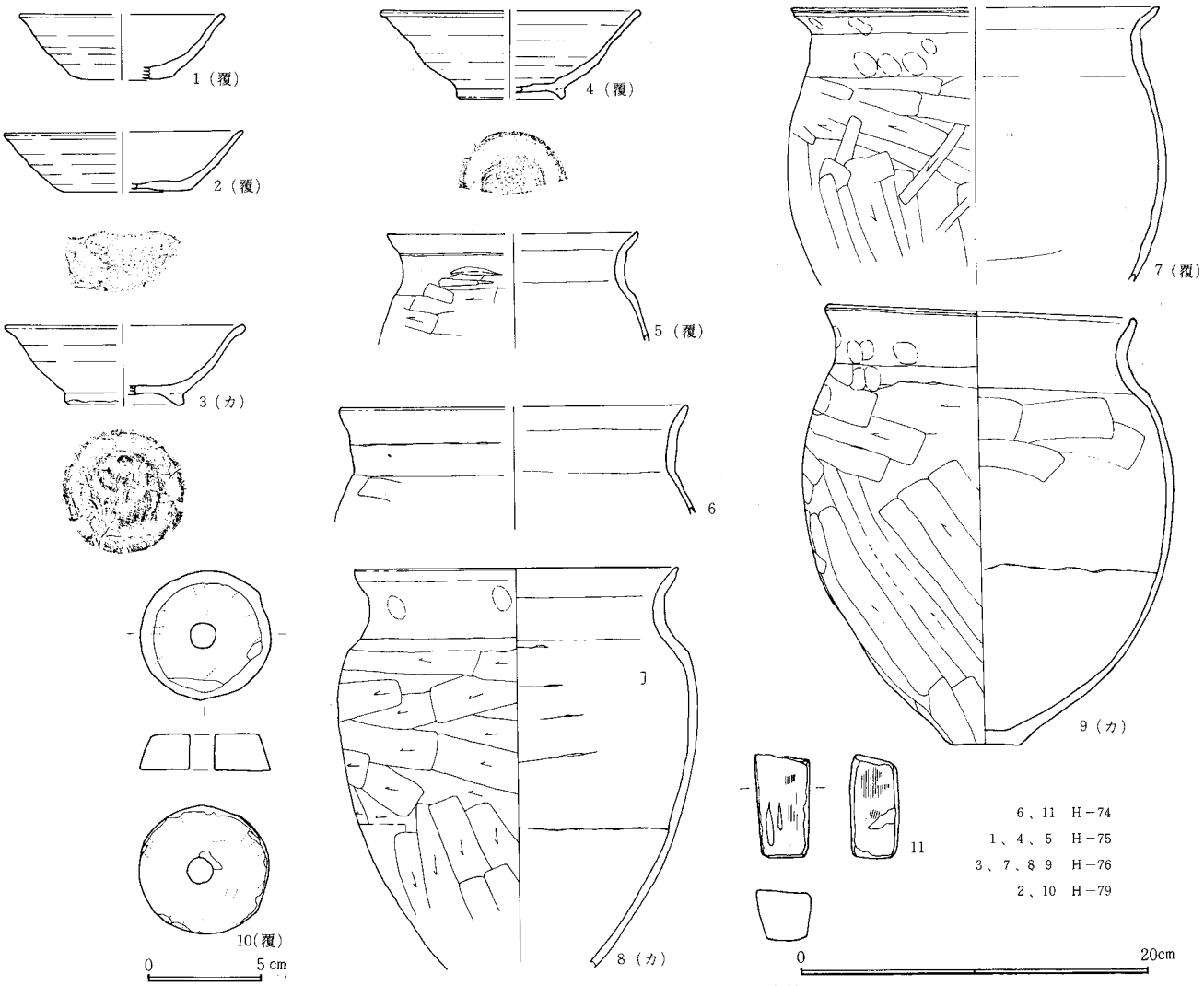
H74号住居跡　位置　K6に所在する。台地の中央部やや南にあたり、H75、76、79号住居跡と隣接あるいは重複する。　**形状**　北北東方向に長軸をとる長方形で長軸方向N—19°—E、南北4.4m、東西3.1m、面積9.6m²を測る。壁高は現状で10～44cmとばらつきが見える。南壁は重複するH75号住居跡の埋土を掘りこみ作られている。周溝は北壁下全体に存在する。　**カマド**　カマドはH76号住居跡によって削られている。　**遺物**　床面上から土師器甕（6）、砥石（11）が出土している。

H—75住居跡　位置　K5・6に所在する。H74、76、79住居跡と同一グループに属し、H74号住居跡が北側に並列するよう重複し、同じくH76号住居跡が東側に重複する。　**形状**　北北東方向に長軸をとる長方形で長軸方向N—16°—E南北3.7m、東西2.

7m、面積8㎡以上を測る。壁は直に立ち、南壁で40cm、東、西壁で30cmの壁高を測る。周溝は幅14～28cmで南壁一面、東壁カマドから北側にかけて認められる。　**カマド**　東壁中央からやや南へ寄った地点で、壁外に造り出している。石材等は、用いられていない。すでにその大半をH76号住居跡によって削取され、床面での遺物等は存在していない。　**貯蔵穴**　南東隅に円形を呈する貯蔵穴が存在する。規模は50×48cm、深さ22cmを測る。　**遺物**　埋土中より須恵器坏（1）、埦（4）と土師器甕（5）が出土している。　**重複関係**　住居の埋土、カマド等の切り合いから、H75号住居跡→74号住居跡→76号住居跡の新旧関係が判明する。

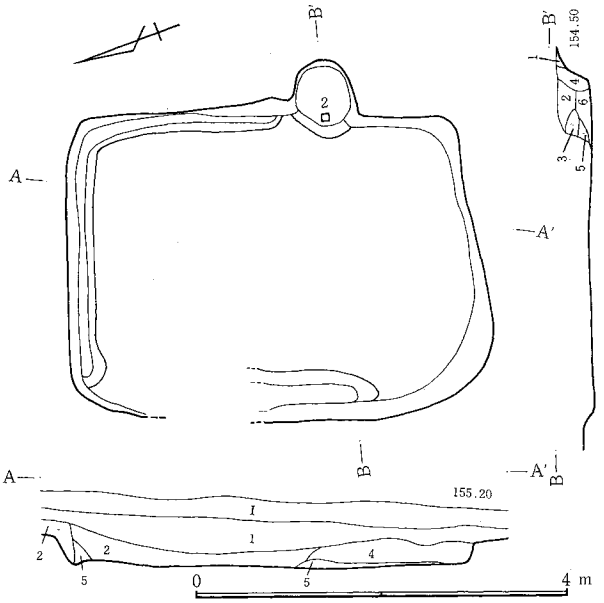
H76号住居跡　位置　J5・6、K5・6に位置する。H74、75、79の各住居跡と重複している。　**形状**　ほぼ南北方向に長軸をとる長方形で長軸方向N－12°－E、南北4.3m、東西3.1m、面積13.6㎡を測る。壁は直に立ち、現状では9～30cmの壁高を残すのみだが、地層断面の観察から、当初は70cm以上の壁高があったものとみられる。周溝は上幅20cm程で、東壁、西壁の北側半分と北壁一面に巡る。　**ピット**　床面上には、柱穴とみられるピットは存在しない。　**カマド**　東壁の中央よりやや南へ寄った地点に、袖石を壁上に置き燃焼部を壁外に造り出している。全長165cm、袖部内幅32cmを測る。石材を用いている。　**貯蔵穴**　南東隅に不整の方形をした貯蔵穴がある。規模は77×62cm、深さ15cmを測る。　**遺物**　カマド内より（3・8・9）そして、埋土中より土師器甕（7）が出土している。　**重複関係**　H74、75、76、79号住居跡と重複しており、切り合いにより、H76号住居跡が最も新しくなる事が判明する。　**テフラ**　住居の埋土中、床面より47cm上位で、B軽石の純層を多く含む層が存在する。

H79号住居跡　位置　JK5に位置する。H74～76号住居跡とともに密集している。　**形状**　北々東方向に長軸をとる長方形を呈するとみられる。東西2.7mとみられ、面積は5.4㎡以上を測る長軸方向N－14°－E。壁は直に立ち、現状で24～38cmの壁高が残る。周溝は存在しない。　**カマド**　東壁中央よりやや南へ寄った地点に壁外へ造り出している。支柱あるいは冠材とみられる石材が1個残っており、これにより石材を使っていた事が考えられる。全長115cm、袖部内幅103cmを測る。　**貯蔵穴**　南東隅に不整の方形を呈した貯蔵穴があり、71×57cm、深さ25cmを測る。　**遺物**　埋土中より須恵器坏（2）、紡錘車（10）が出土している。　**重複関係**　埋土の切り合いから、H79号住居跡→H76号住居跡の新旧関係が判明する。　（富澤）

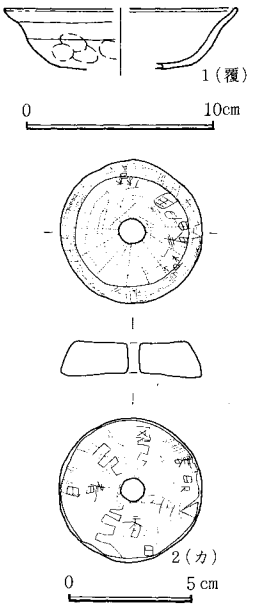


図－149　H－74・75・76・79号住居跡出土遺物

H77号住居跡（図—150、151　図版—9、74　表—78)(IX期)



図—150　H—77号住居跡

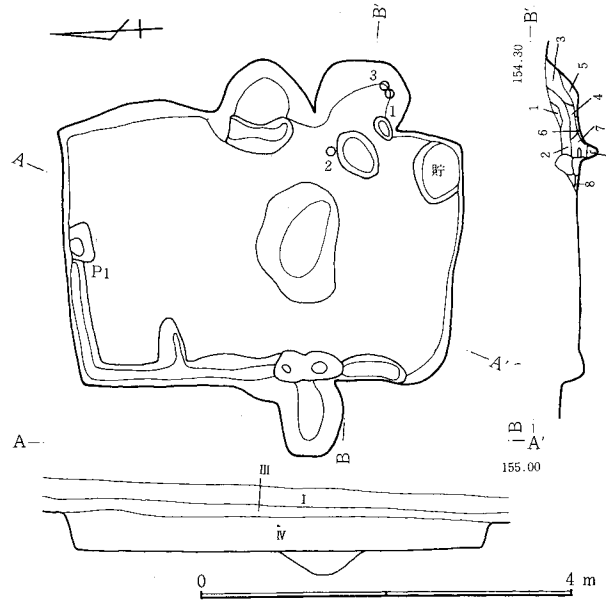


図—151
H—77号住居跡出土遺物

1．黒褐色土。多量の浮石、少量のローム小ブロック混入。2．黒色土。3．黒褐色土。多量の浮石と少量のローム小ブロック混入。4．暗褐色土。5．黒褐色土。木炭、ローム少量含む。均質な土。　**カマド**　1．褐色土。2．黒褐色土。浮石を多量に含む。3．灰褐色土。浮石を多量に含む。4．褐色土。焼土粒混入。5．黒褐色土。浮石、焼土を混入。6．桃色灰。焼土粒を含む。

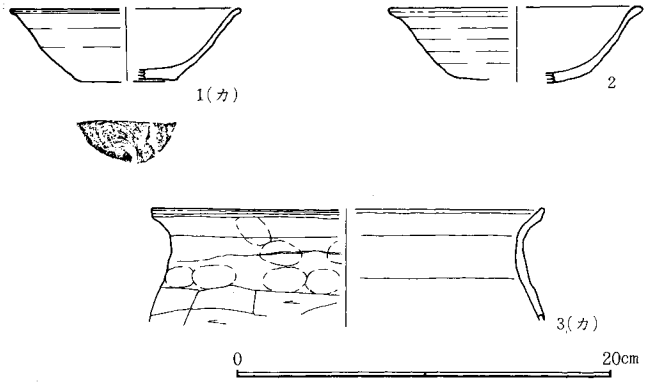
位置　K6に所在する。西台地の中央部やや南にあたり、南側にはH78号住居跡が並列する。　**形状**　北北東方向に長軸をとる長方形で長軸方向N—19.5°—E、南北4.2m、東西3.7m、面積12.3m²を測る。壁高は現状で8～40cm残るが、南壁の壁高が低い。周溝は上幅も15～35cmで東壁の北2分の1と北壁、西壁の中央部3分の1に巡る。西壁の一部は不明瞭である。　**ピット**　床面上には柱穴とみられるピット等は存在しない。　**カマド**　東壁で中央よりやや南へ寄った地点に、壁外に造り出している。平面方形で、全長70cm、燃焼部長64cm、袖部内幅50cm、掘り込み角度60°を測る。燃焼部は床面にくらべて3cm低い。石材は用いていない。　**貯蔵穴**　存在しない。　**遺物**　カマド内より紡錘車（2）が出土し、埋土中より須恵器坏（1）が出土している。　**重複関係**　H78号住居跡と重複し、切り合い関係はないが、地層断面の埋土状況から、H77号住居跡（旧）→H78号住居跡（新）が判明する。　（富澤）

H78号住居跡（図—152、153　図版—10、74　表—79)(XI期)



カマド　1．黒褐色土。浮石混入。2．暗褐色土。焼土ブロック少量混入。3．赤褐色土。多量の焼土混入。4．黒茶褐色土。焼土粒を含む。5．黒褐色土。ローム、若干の焼土粒含む。6．赤褐色土。焼土多量に混入。7．黒色土。浮石、若干の焼土粒を含む。8．黒色土。9．黒色土。粒子細かい。

図—152　H—78号住居跡



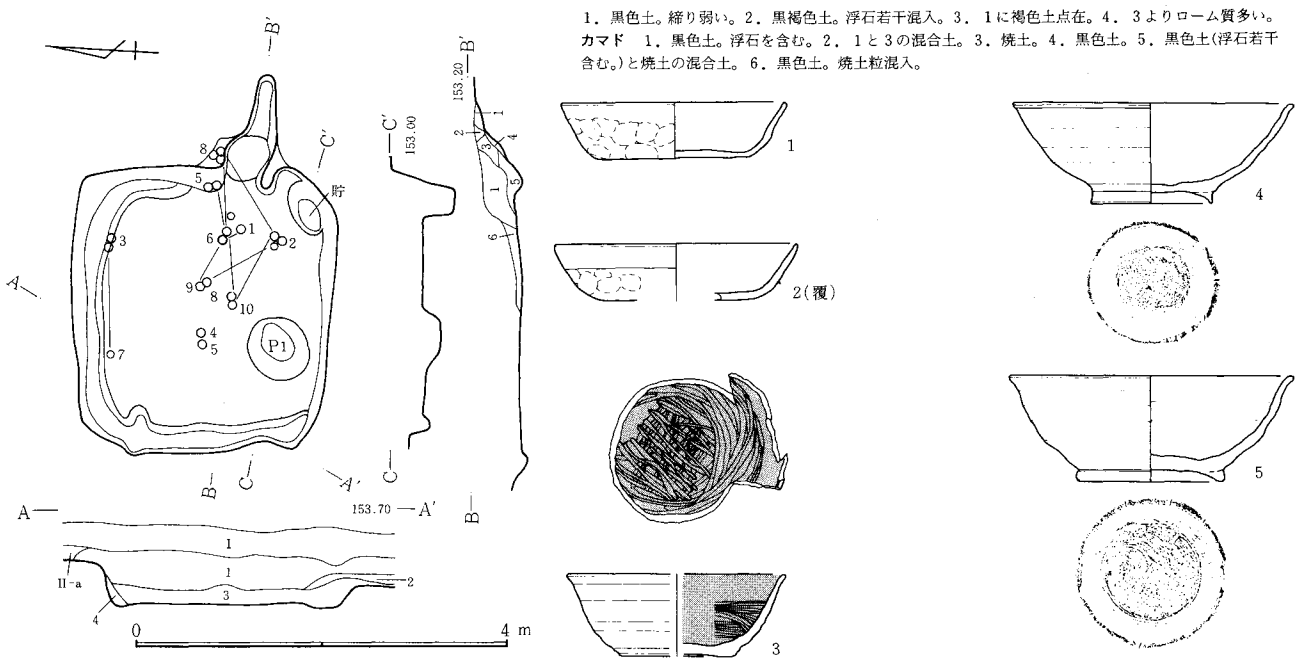
図—153　H—78号住居跡出土遺物

位置　K5に所在する。西台地の中央部やや西にあたり、東側へ5m程離れてH74～76号住居跡があり、北側にはH77号住居跡が並列する。　**形状**　南北に長軸をとる長方形で長軸方向N—6.5°—E、南北4.1m、東西2.7m、面積10.7m²を測る。壁はほぼ直に立ち、現状で壁高16～50cm残る。周溝は西壁から北壁半分にかけて巡る。　**床面**　南側半分の範囲に径1m、深さ25cm程の床下土坑が存在する。　**ピット**　カマドの手前に灰のかき出し穴とみられる小ピットが存在する。　**カマド**　東壁中央部(カマド1)とやや南壁へ寄った地点（カマド2）の2個所で、壁外に造り出している。平面不整の円形を呈し、カマド2は、全長92cm、燃焼部長60cm、袖部内幅40cmを測る。両者とも石材は用いていない。　**貯蔵穴**　南東壁隅にゆがんだ四辺形を呈する貯蔵穴がある。60×50cm、深さ10cmを測る。　**遺物**　カマド2内より須恵器坏（1）、土師器甕（3）が出土し、床面上より須恵器坏（2）が出土している。　**重複関係**　H77号住居跡と隣接するが、H77号住居跡→H78号住居跡の新旧関係が判明する。　（富澤）

H82号住居跡（図—154、155　図版—10、75　表—80)（X期）

位置　西台地の南、H・J4に所在し、点在する小形竪穴住居跡の南端に位置し、南には掘立柱建物跡を中心として住居跡の密集する地域がある。　**形状**　南北は2.5m、東西は2.7mにあり、東西がわずかに広い長方形である。四隅はそれぞれ丸味をもち、

東壁を除く各壁も外側へ彎曲しており、概して床面に丸味がみられる住居跡である。長軸方向はN－2.5°－Wで、面積は6.9m²あり、壁は比較的きちんとしている。壁高は22～57cmである。周溝は南壁と、東壁のカマド周辺の南半分を除き、東壁の北半分から北壁、西壁とめぐっている。周溝の幅は８～40cmで、深さは１～10cmである。床面はほぼ水平で、貼床はない。　**ピット**　西南隅に近くP_1があり、大きさは長径70cm、短径62cmで、深さは17cmあるが、用途は分らない。柱穴とみられるピットはない。　**カマド**　東壁の南寄りにあり、全長は126cm、燃焼部長60cm、袖部内幅32cmで、壁外掘り込みは126cmあり、壁への掘り込み角度は50°である。残存状態は悪い。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、楕円形に近く、長径52cm、短径28cm、深さ32cmである。　**遺物**　カマドと貯蔵穴の周辺に遺物は集中している。土師器の坏（１）は床面に着いて出土した。須恵器の高台付埦（４）は床面より１cm上から出土し、土師器坏（３）は周溝内から出土している。土師器の甕（６・８・９・10）はカマドの前より出土し、床面より10cm前後上位からの出土がほとんどである。この他、土師器の坏（２）がある。　**テフラ**　住居跡を埋めている黒色土あるいは黒褐色土の中に大粒のテフラが混入している。　（相澤）

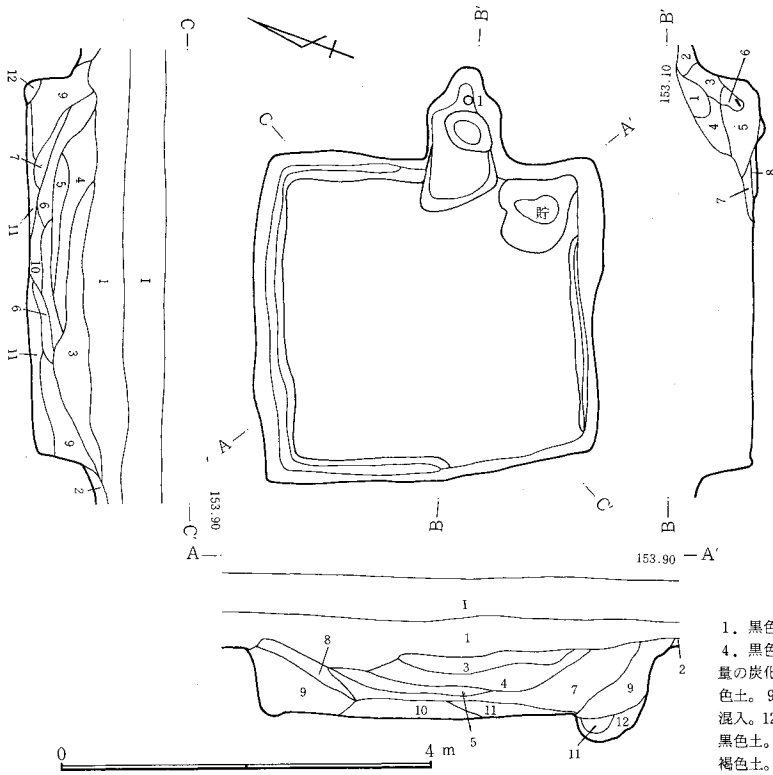


図－154　H－82号住居跡

図－155　H－82号住居跡出土遺物

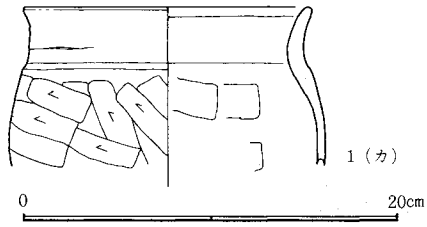
H83号住居跡（図－156、157　図版－10、75　表－81）（V期）

位置　M・L４に位置する。西台地南西で南への緩斜面になっている。付近には竪穴住居跡はあまり多くない。　**形状**　南北に長軸をもち、ほぼ正方形に近い。北壁にくらべ南壁はやや短い。南北は3.3mで東西は3.2mである。長軸方向はN－24°－Wで面積は10.7m²、壁高は55～68cmで、地層断面図からは76cmを測る。壁は直にしっかりと掘りこまれている。北壁すべてと南壁の３分の２、東・西壁の北２分の１に周溝をめぐらす。幅は３～12cmで深さは１～６cmである。　**カマド**　東壁のやや南より、壁外に作り出されている。燃焼部は長方形に掘り込まれており、さらに煙道が続いている。全長128cmで、燃焼部長80cm、袖部内幅66cm、壁への掘り込み角度64°、壁外掘り込み128cmである。燃焼部は床面とくらべると14cm低くなっている。カマドは破壊されて



図－156　H－83号

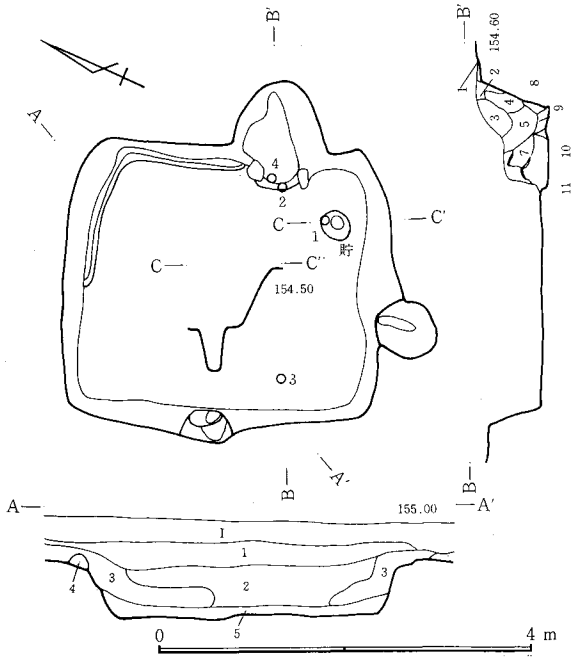
いたが掘り形は良くのこっていた。燃焼部から煙道へはほぼ直に近くなり続いている。　**貯蔵穴**　東壁南隅にある。不整形。規模は80×64cmで深さ30cmである。　**遺物**　カマド内より土師器甕（1）が出土している。カマド底面よりは16cmの地点である。その他埋土中よりは土師器坏片が出土している。　**テフラ**　全体に浮石にまじるほか、6、7層は炭化物を多く含んでいる。　（井野）



図－157　H－83号住居跡出土遺物

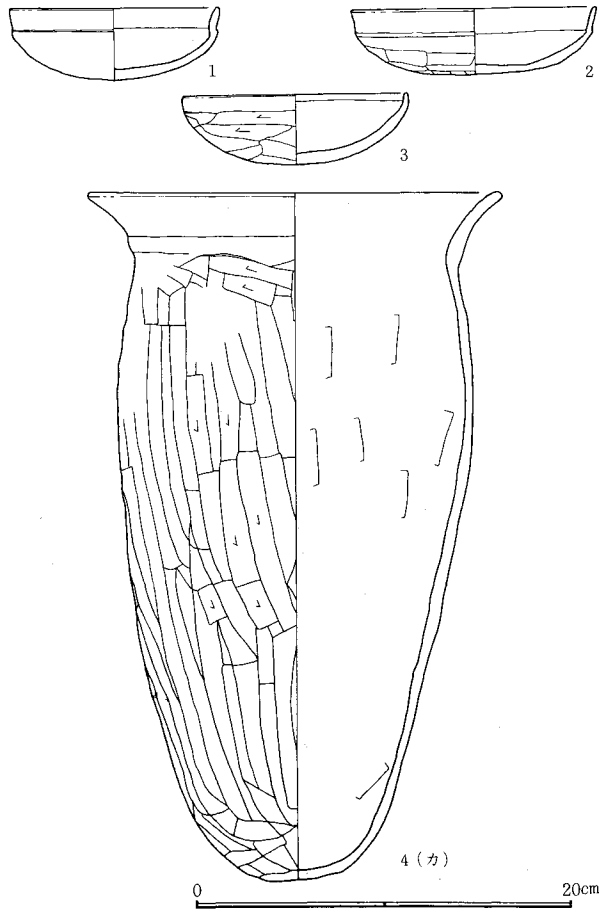
1．黒色土。浮石を含む。2．黒色土。3．黒色土。浮石、ローム粒を含む。4．黒色土。浮石、ローム粒、炭化物が若干ずつ混入。5．黒色土。浮石、多量の炭化物混入。6．黒褐色土。7．黒色土。やや褐色、浮石若干混入。8．黒色土。9．黒色土。浮石わずか混入。10．黒褐色土。11．9にわずかローム粒混入。12．9とロームの混合土。　**カマド**　1．灰褐色土。粘土、石混入。2．黒色土。粘性あり。軽石わずか混入。3．灰褐色土。焼土わずか混入。4．灰褐色土。砂質。5．黒褐色土。多量の軽石、少量のローム塊、灰、焼土混入。6．灰褐色土。粘土分が多い。7．黒褐色土。焼土、黒色の灰が多く混入。8．黒褐色土。ローム、灰がかなり多量に混入。

H84号住居跡（図—158、159　図版—10、75　表—82）（IV期）



1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。FP・C軽石を含む。3．黒色土。FP・C軽石を含む。4．栗色土。5．栗色土。FP・C、ロームブロック混入。　**カマド**　1．黒褐色土。2．桃色土。焼土。3．黄土色土。浮石混入。4．灰。焼土粒を含む。5．黄土色灰。6．灰色。灰。浮石を含む。7．黒褐色灰。焼土粒混入。8．ローム、灰を含む。9．黒灰色灰。10．黄色灰。ローム混入。11．赤褐色灰。

図－158　H－84号住居跡

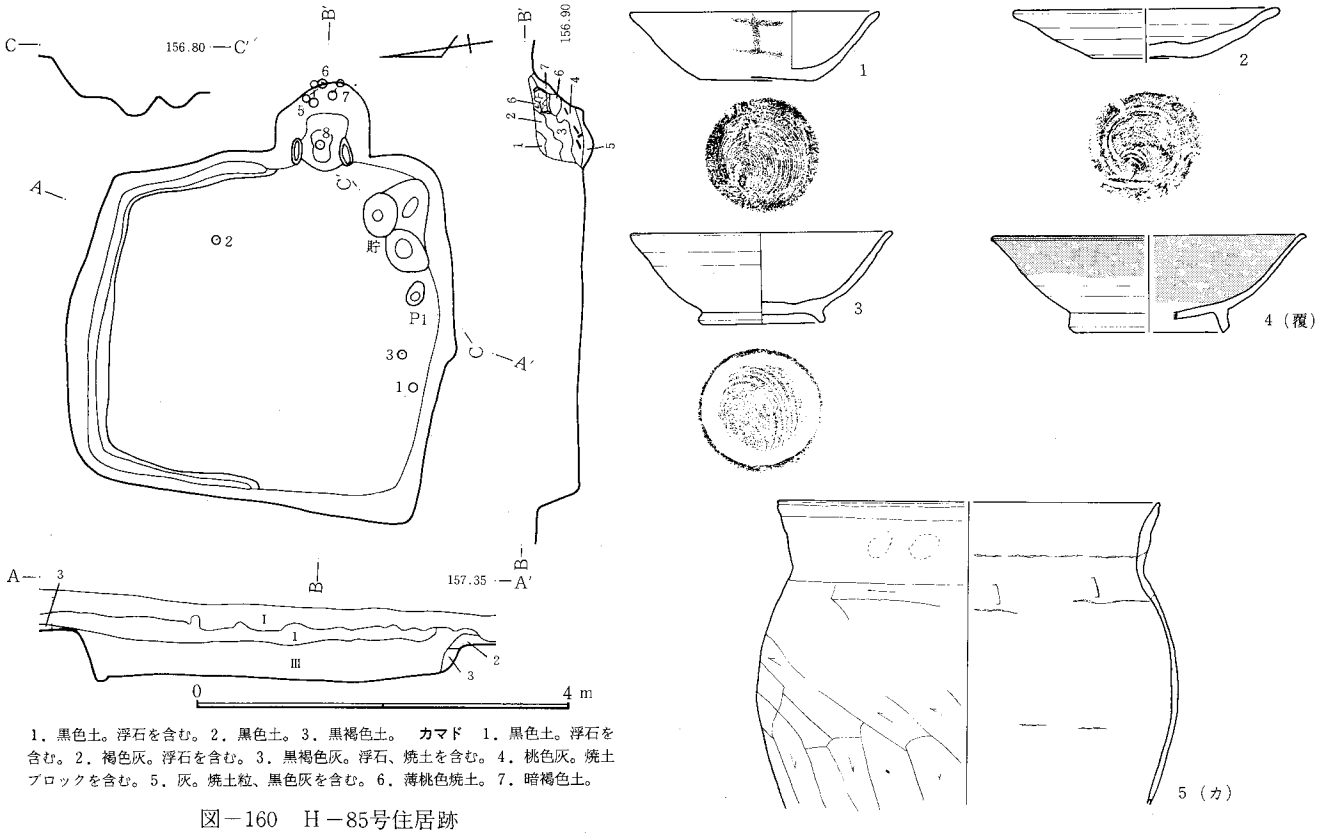


図－159　H－84号住居跡出土遺物

位置　西台地南西、N・P5にある。地形は東西はやや平坦であるが、南北は北から南への傾斜を呈する位置に立地する。周辺には遺構の分布は疎である。　**形状**　南北2.9m、東西2.7mでほぼ正方形に近く構築している。長軸方向はN—20°—W、面積は7.9m²、壁高52～65cmである。東壁の北寄りと北壁の東半分に幅2～10cmの周溝がある。　**カマド**　東壁中央南寄り。左右の袖に石を使用し、全長110cm、袖部内幅34cm、燃焼部長40cm、壁への掘り込み角度65°で、壁外掘り込みは110cmである。火床面は床面より10cm程さがっている。　**貯蔵穴**　南東隅、円形で

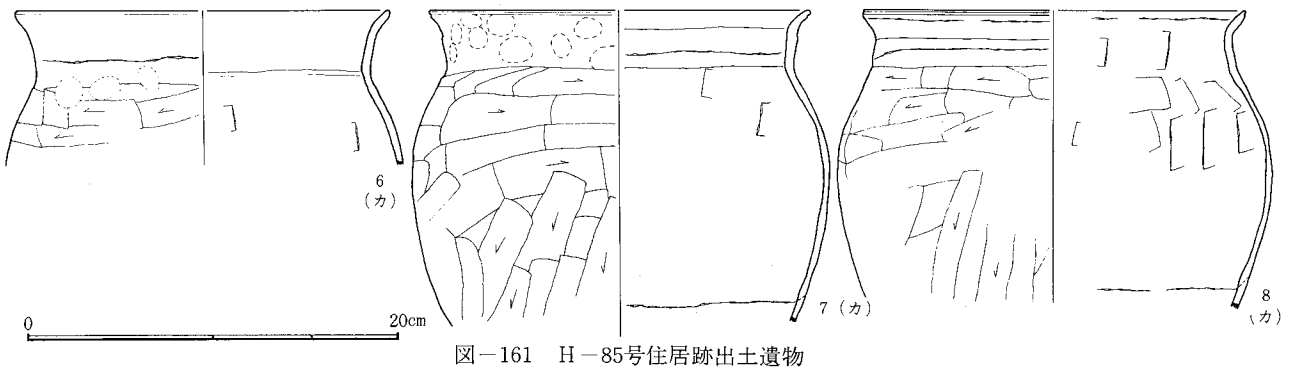
規模は32×28cm、深さ46cmである。 **遺物** カマド内より土師器長甕（4）が、カマド手前付近より土師器坏（1・2）が出土している。なお土師器坏（1・3）は床面上であり、土師器坏（2）は床面より17cmのレベル上であった。 **床面下構造** 床面は貼り床をし、埋土と床面の境は、埋土がパカパカはげる状態であった。また床面下は、最大30cmも掘り込み、貼り床をして住居としている。 （江原）

H85号住居跡（図—160、161 図版—10、85 表—83）(XI期)



1．黒色土。浮石を含む。2．黒色土。3．黒褐色土。 **カマド** 1．黒色土。浮石を含む。2．褐色灰。浮石を含む。3．黒褐色灰。浮石、焼土を含む。4．桃色灰。焼土ブロックを含む。5．灰。焼土粒、黒色灰を含む。6．薄桃色焼土。7．暗褐色土。

図—160 H—85号住居跡



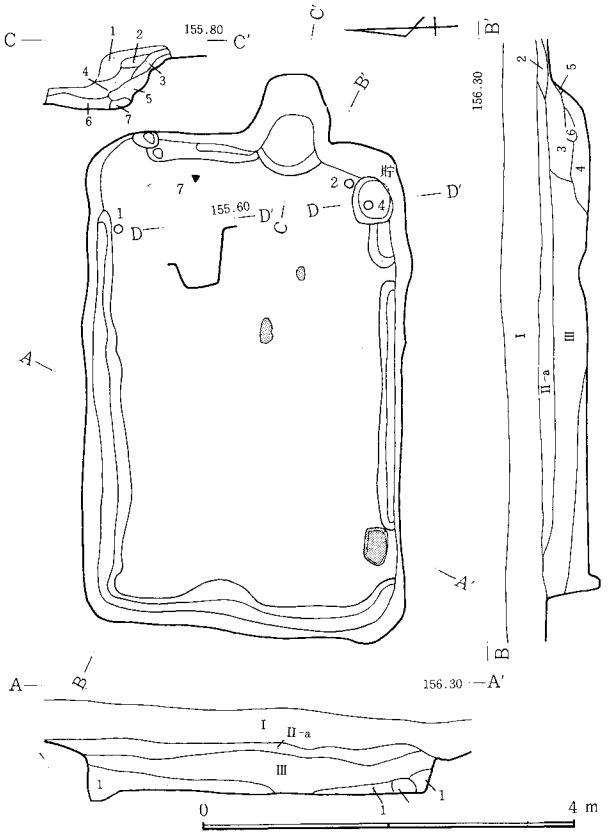
図—161 H—85号住居跡出土遺物

位置 南へゆるやかに傾斜する西台地の中央部やや西のＬ８に所在する。 **形状** 南北3.8m、東西3.9mを測る正方形に近い形の住居である。しかし北壁側は3.3mと南壁側にくらべて60cmせまく作られている。面積は13.7㎡。壁高は42～59cm。周溝は東壁下北半分、北壁下全部、西壁下北半分に幅３～８cm、深さ３～５cmが存在する。床面は貼り床となっており、南側部分でロームブロックをまぜて貼っている。床面下は凹凸がはげしい。 **ピット** ピットは１個で24×18cm深さ15cmである。 **カマド** 東壁のやや南寄り。壁外掘り込み96cm、全長96cm、燃焼部分長48cm、袖部内幅40cmのカマドを構築している。カマドの壁への掘り込み角度は50°。床面とのレベル差は９cm。 **貯蔵穴** 住居の南東隅壁ぎわにあり90×66cmの三角形状に、３つのピットが集まった形状をしている。深さは21cm程である。貯蔵穴内には焼石（60×10×20cm程）と土器片が入っていた。 **遺物** 須恵器の坏（１～４）、（１）は墨書土器。土師器の甕（５～８）が出土している。 （江原）

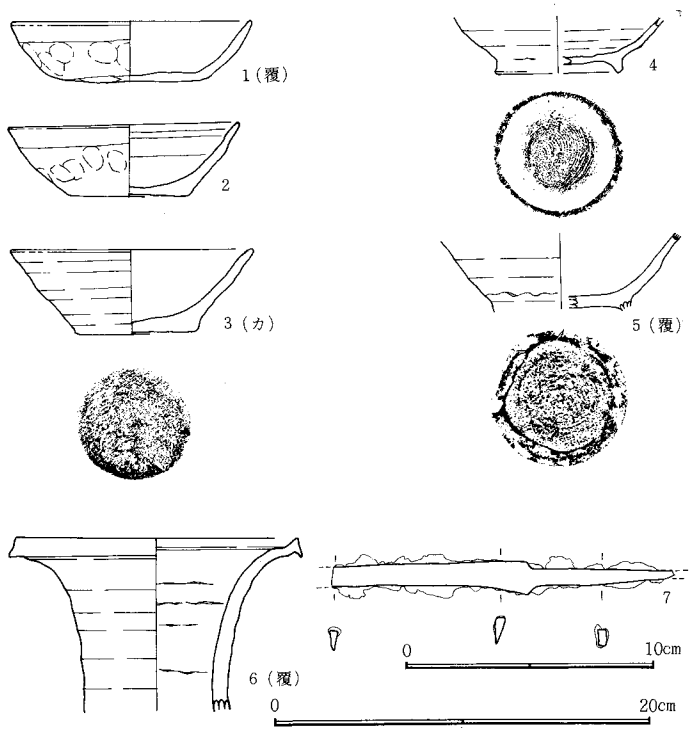
H86号住居跡（図—162、163 図版—10、76 表—84）(X期)

位置 Ｎ７に所在する。西台地の中央部でやや西へ寄った所にあり、北側にH87号住居跡、南西側にH88号住居跡が近接する。 **形状** 東西に長軸をとる長方形で長軸方向Ｎ—2.5°—Ｅ、南北3.2m・東西5.0m、面積15.7㎡を測る。壁はほぼ直に立ち、現状で40cm程の壁高が残る。周溝は北東隅、南西隅、東壁のカマド南側を除いてほぼ全周する。 **ピット** 床面には柱穴とみられるピット等は存在しない。 **カマド** 東壁中央よりやや南へ寄った地点で、壁外に造り出している。平面方形で、全長106cm、袖部

内幅56cm、煙道部の傾斜角度52°を測る。 **貯蔵穴** 南東隅に平面隅丸方形の貯蔵穴がある。52×40cm、深さ22cmを測る。 **遺物** 床面上には南壁寄りに1個、中央に2個焼石が置かれている。床面上から土師器坏（2）、刀子とみられる鉄製品（7）等が出土し、貯蔵穴内より須恵器高台付埦（4）が出土している。また埋土中より須恵器坏（3）、長頸壺口縁部（6）、須恵器高台付埦（5）等が出土している。 **テフラ** 床面上50cmの所にB軽石を上部に含むII－a層がほぼ水平に堆積している。 （富澤）



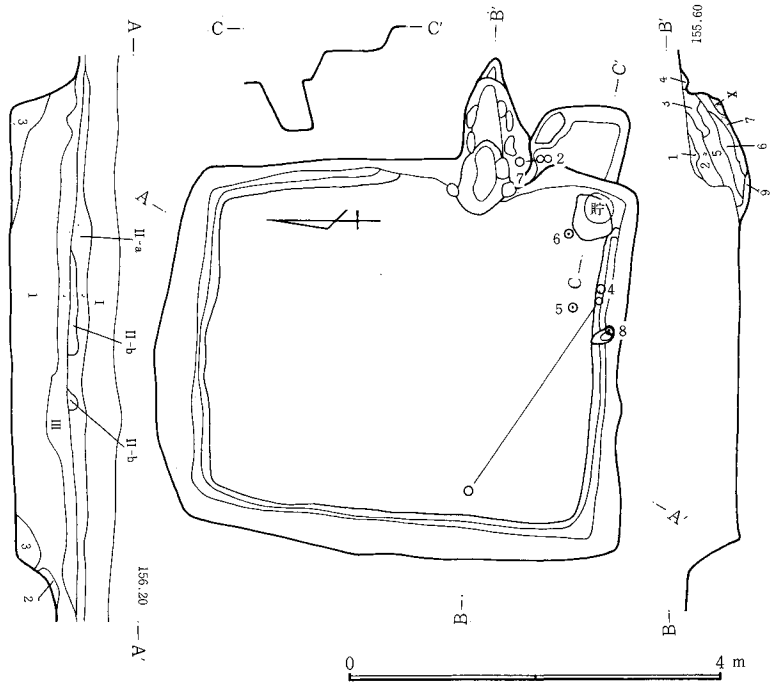
図－162 H－86号住居跡



図－163 H－86号住居跡出土遺物

1．黒色土。焼土を含む。2．黒褐色土。3．褐色土。灰を含む。4．黒色灰。焼土を含む。5．褐色灰。6．白色粘土。 **カマド** 1．黒褐色土。2．黒褐色土。粘性あり。ローム混入。3．黒褐色土。焼土少量含む。4．黒褐色土。焼土粒、ローム粒少量含む。5．赤褐色土。焼土を多量に含む。6．黒褐色土。焼土粒、ローム粒多量に含む。7．黒褐色土。ローム粒、焼土粒少量含む。

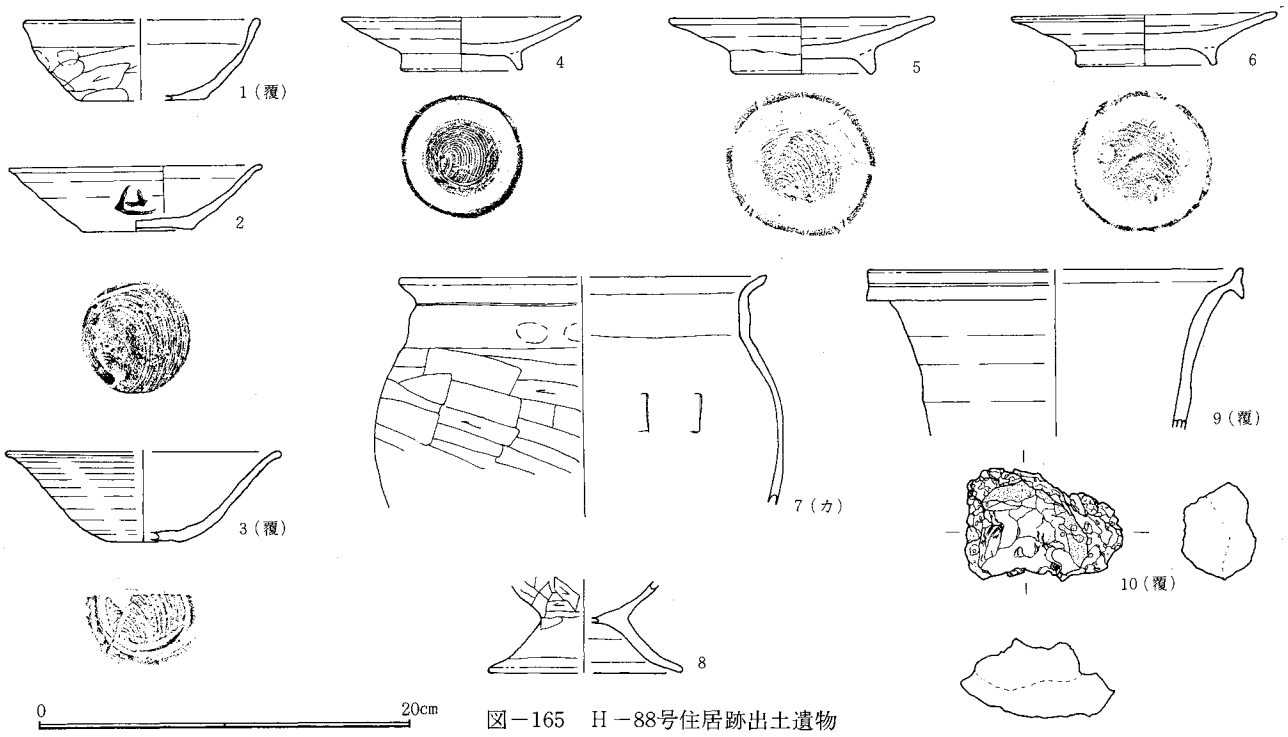
H88号住居跡（図－164、165 図版－10、76 表－85)(XI期)



1．黒褐色土。ローム小ブロック点在。2．3．黒褐色土。 **カマド** 1．黒色土。浮石を含む。2．焦げ茶色土。浮石を含む。3．灰色の粘土。4．桃色焼土。5．黄土色粘土。6．灰色灰。下部に焼土ブロック。7．焦げ茶色灰。焼土粒を含む。8．黒色灰。

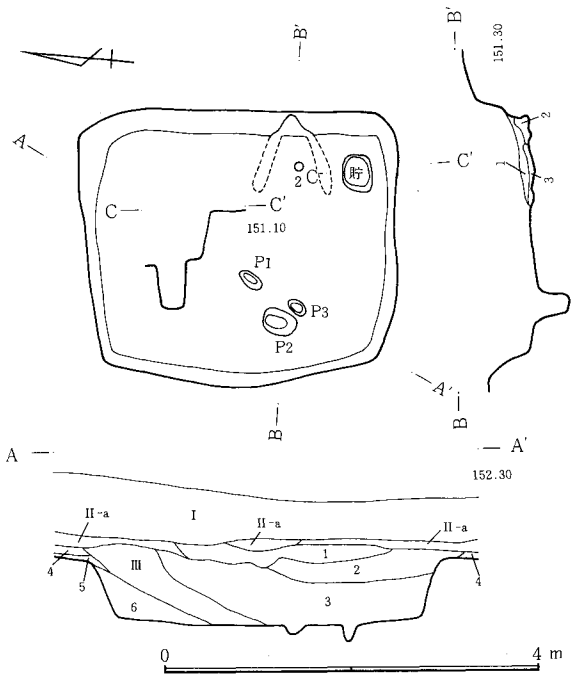
図－164 H－88号住居跡

位置 N・P7。西台地の中央部で西へ寄った地点。 **形状** 南北に長軸をとる長方形で長軸方向N－0°、南北4.4m、西3.7m、面積16.0m²を測る。壁は直立し、現状で50～70cmの壁高が残る。周溝は上巾20cm前後で、カマドの付近を除いて全周する。 **ピット** 床面上には柱穴とみられるピットはない。 **カマド** 東壁中央よりやや南へ寄った所で、壁外へ造り出されている。長150cm、袖部内幅40cm、煙道の傾斜は比較的緩く36°を測る。石を用いており、袖石を東壁上に据え、壁石が右で5石、左で3石それぞれ残っている。また、カマドの南側には、壁外に棚状の浅い掘り込み面が造られている。平面長方形で、90×74cmを測る。 **貯蔵穴** 南東隅に平面円形をし、斜めにやや深く掘られた貯蔵穴がある。床面上で46×42cm、深さ49cmを測る。 **遺物** 床面上より須恵器高台付皿（4・5）、墨書のある須恵器坏（2）、土師器台付甕（8）高台付皿（6）、カマド及び棚状施設上より土師器甕（7）が出土している。また、埋土中からも須恵器坏（1・3）、須恵器甕口縁部（9）、鍛冶埦形滓（10）等が出土している。 **テフラ** 床面上60cm程の所に、B軽石の一次堆積土層が水平に堆積している。 （富澤）



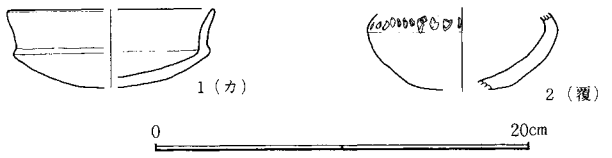
図－165　H－88号住居跡出土遺物

H89号住居跡（図－166、167　図版－10　表－86）（III期）



1．黒褐色土。浮石を含む。2．黒褐色土。浮石わずか混入。3．黒褐色土。浮石を多く含む。4．黒褐色土。5．褐色土。6．暗褐色土。　**カマド**　1．焼土。炭。木炭等の混合土。2．黒褐色土。焼土わずかに含む。3．黒褐色土。焼土、ロームブロック少量混入。

図－166　H－89号住居跡

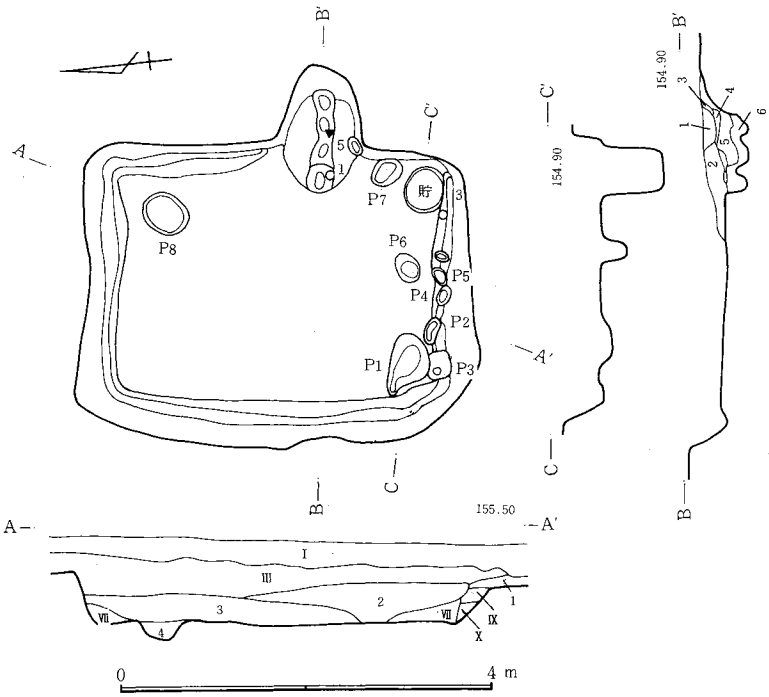


図－167　H－89号住居跡出土遺物

位置　西台地上の西傾面U６に所在する。付近にはほとんど竪穴住居跡は存在しない。　**形状**　平面長方形で南北3.1m東西2.5mで、南北に長い。面積は7.2m²で、壁現高は26～70cmで比較的深い。壁下の周溝はない。長軸方向はN－8°－Wである。　**床面**　踏み固め部分と貼床は不明であるが、地層断面図から貼床はなかったものと推定される。　**ピット**　西壁寄りにあり、P_1は28×13cm深さ10cm、P_2は34×24cm深さ32cm、P_3は20×12、深さ17cmである。柱穴としては浅いようである。　**カマド**　南東隅近くにある。燃焼部は住居内にあり、煙道は壁を22cm掘り込みつくっている。全長82cm、袖部内幅64cm（推定）、燃焼部長60cmである。構築材については不明である。燃焼部は床面より５cm低く、壁への掘り込み角度は79°と直に近い。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面は隅丸長方形である。大きさは38×32cm深さ50cmである。　**遺物**　カマド内から須恵器甕（２）が出土している。埋土より土師器坏（１）が出土している。　（中村）

H90号住居跡（図－168、169　図版－11、76　表－87）（X期）

位置　西台地西方のN・P６に所在し、土師器を伴う住居跡としては西端に近く位置し、他とやや離れており、この住居の西南には製鉄遺構がある。　**形状**　南北3.7m、東西3.0mの長方形であるが、西壁は外側へ彎曲している。長軸方向はN－7°－Eで、面積は10.4m²と比較的小形である。壁は上半分に緩傾斜の部分もあるが、しっかりしており、壁高は33～49cmである。周溝は東壁のカマドと南東隅にある貯蔵穴の間を除き、壁下を全周している。幅は５～17cm、深さは２～６cmである。　**ピット**　P_8が東北隅に近い位置にある以外はいずれも南壁周辺に位置している。P_8は径46×42cm、深さ23cmである。他のピットはP_1がP_8に近い大きさであるほか、他は全て径20cm前後、深さ10～20cmであり、P_6を除いて他は周溝内にある。　**カマド**　東壁中央南寄り

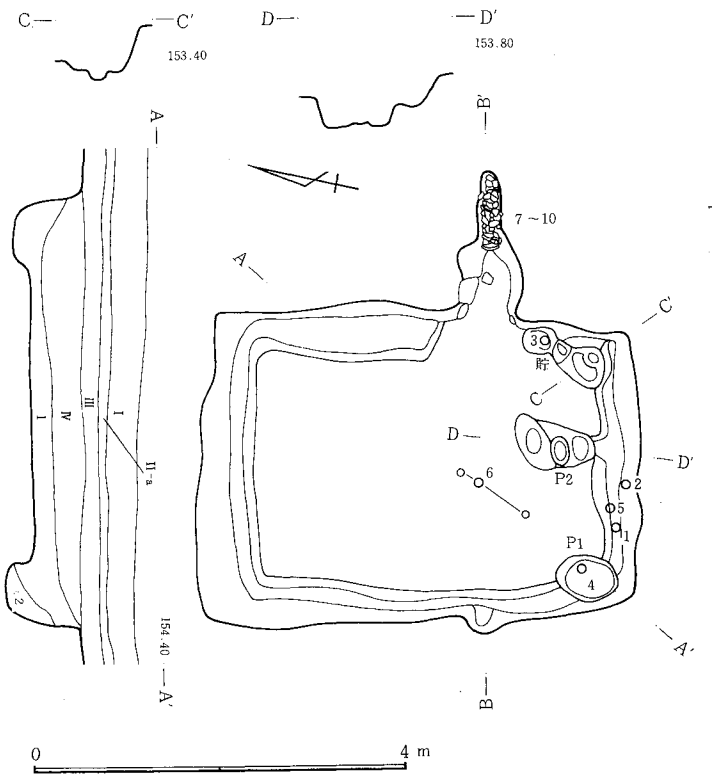


1．黒褐色土。やや粘性あり。2．黒褐色土。ローム多量に点在。3．黒褐色土。軽石(φ1～2㎜)、ロームわずかに点在。4．3とロームの混合土。　**カマド**　1．黒色土。軽石、わずかな焼土を含む。2．1に白色粘土を含む。3．やや焼けた白色粘土。4．焼土塊と白色粘土。5．焼土。6．黒色土・灰・焼土の混合土。

図－168　H－90号住居跡

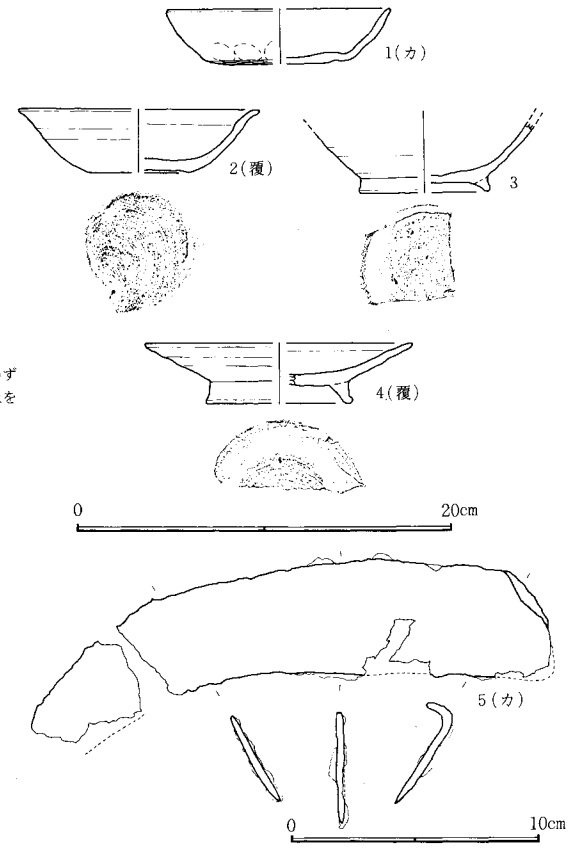
H91号住居跡（図—170、171　図版—11、76　表—88)(X期)

1．黒褐色土。FP・Cわずかに混入。2．黒褐色土。ローム小ブロック少量点在。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石多量に混入。2．灰褐色土。灰・焼土。3．灰黒色土。灰を多量に混入。4．黒灰色土。灰を含む。5．焼土灰。6．赤灰色土。灰と焼土。7．赤黒褐色土。焼土少量含む。8．赤黒褐色土。焼土を多量に含む。9．灰黒色土。ローム小ブロック含む。10．黒色土。ローム、浮石、焼土粒混入。11．赤黒褐色土。焼土多量に含む。



図－170　H－91号住居跡

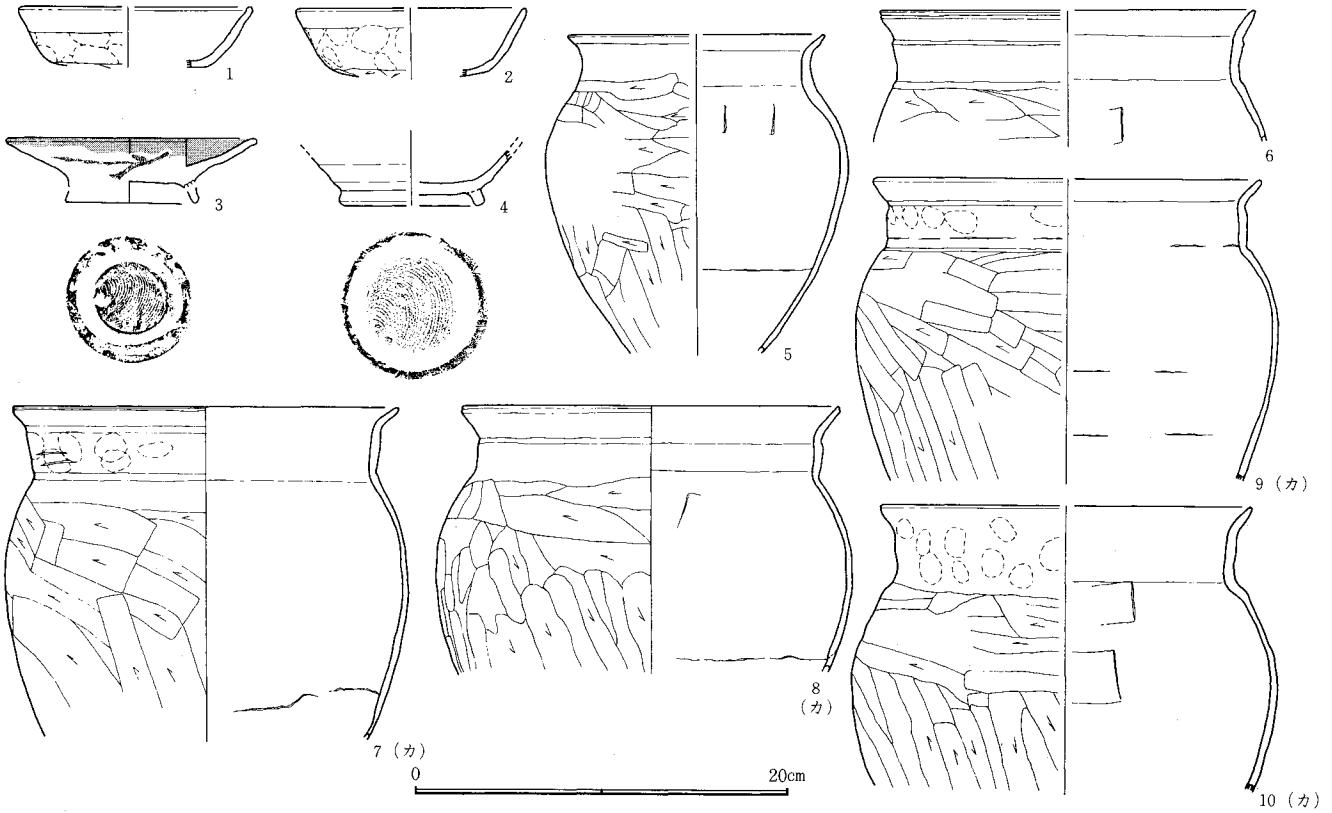
にあり、白色粘土を主体として構築している。全長113cm、燃焼部長50cm、袖部内幅60cmで、壁外掘り込みは93cm、壁への掘り込み角度は50°である。焼土は、その下はカマド前方へかけてピット状の落ち込みが3個所あり、黒色土・灰・焼土の混土が堆積していた。一方、煙道部もよく焼けていた。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、径48×43cm、深さ63cmである。　**遺物**　鉄製鎌（5）がカマド内より出土し、他に須恵器の椀（3）、土師器の坏（1）が床面近くより出土した。（相澤）



図－169　H－90号住居跡出土遺物

位置　M5に位置する。西台地の南西で南への緩斜面に位置する。N5～8、K5～8にかけての竪穴住居跡群内と考えられる。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北4.1m、東西3.1mである。各壁はほとんど直に交わっており、しっかり掘り込まれている。北壁にくらべ南壁は短くなっている。長軸方向はN—14°—Wで面積は12.5㎡である。壁高は37～47cmで、地層断面からは58cmを測る。東壁のカマド南をのぞく全周に周溝をめぐらす。幅12～48cmで、深さ6～30cmである。東壁下は幅・深さともに大きく深くなっている。　**ピット**　2カ所。P_1は、南西隅で64×50cmで深さ32cm。P_2は80×43cmで深さ35cm。南壁中央部北にある。性格は明らかではないが、住居に係わる施設のものとも考えられる。　**カマド**　東壁中央やや南寄り。左右袖部、燃焼部に構築材の石材がのこる。全長160cmで燃焼部長60

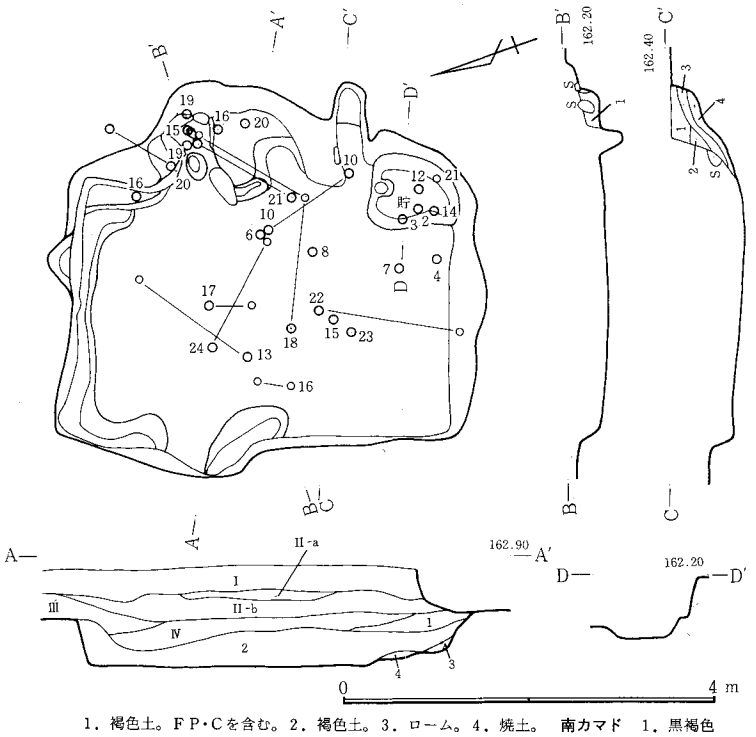
cm、袖部内幅48cm、壁への掘り込み角度35°、燃焼部は床面にくらべ4cm低い。壁外に造り出されているほか、煙道には土師器の甕が転用されおかれていた。 **貯蔵穴** 東南隅。規模は50×42cmで深さ23cmである。 **遺物** カマド煙道部より土師器甕(7・8・9・10)、南壁やや西の周溝内より土師器坏(1・2)、土師器甕(5)が、そのやや北より土師器甕(6)が、カマド右手前より墨書土器(3)、南西隅ピット内より須恵器坏(4)が出土している。 **テフラ** II－b層はB軽石の純層である。床面からのレベルは69cmである。 (井野)



図－171 H－91号出土遺物

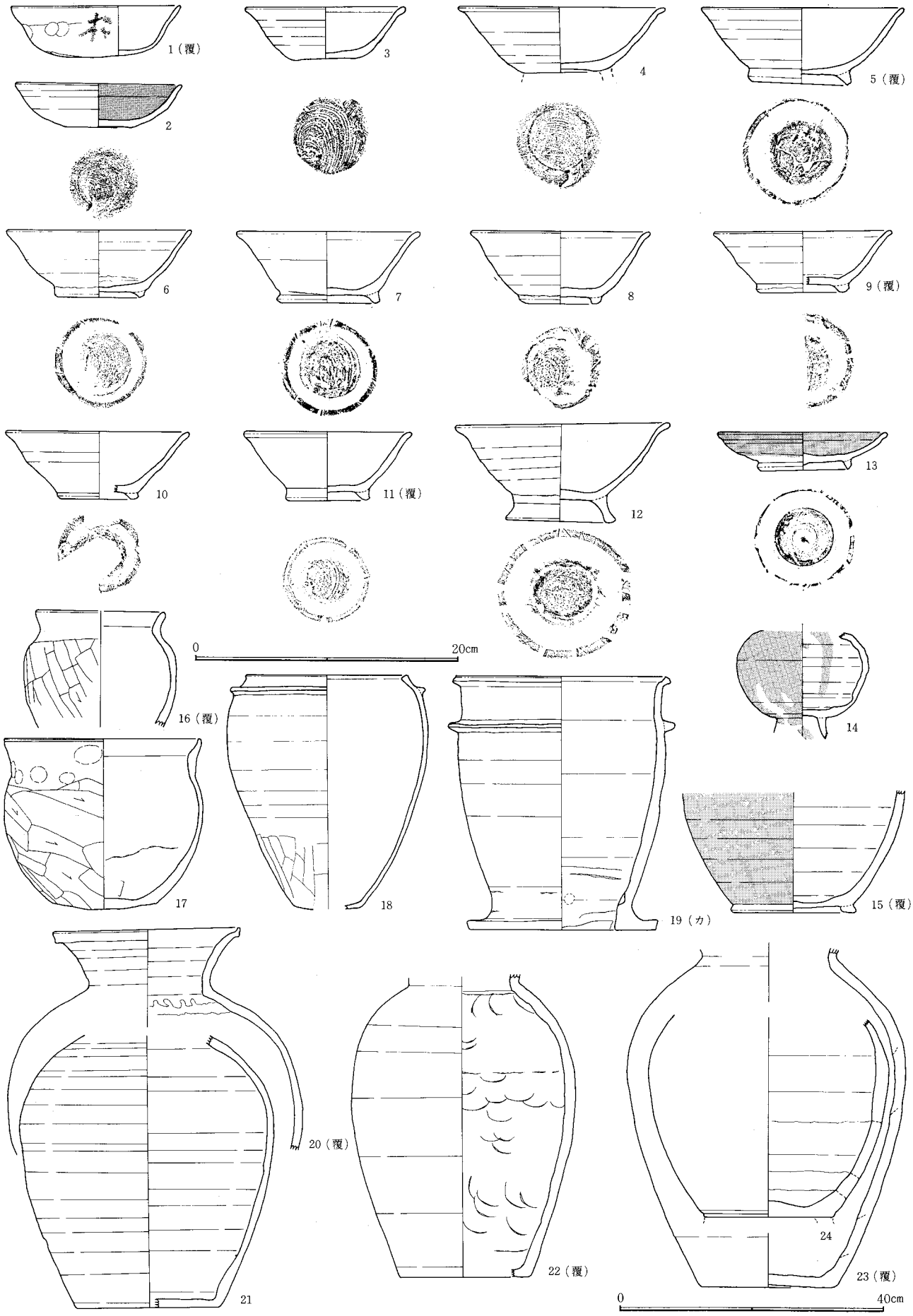
H92号住居跡 (図－172、173 図版－11、77、78 表－89) (XII期)

位置 西台地の北西隅T16に位置する。付近は竪穴住居跡はあまり多くない。 **形状** 南北に長軸をもつ長方形で、南北4.3mで東西3.4mである。形は不整形で、カマドが2つあることから2つの住居が重なっているものとも考えられるが、地層断面図その他からは明らかでない。長軸方向はN－16.5°－Eで、面積は12.5m²、壁高は42～52cmである。北壁と西壁の一部に周溝をめぐらす。幅20～35cmで、深さ1～16cmである。 **カマド** 東壁に2カ所。北側よりのカマドは、構築材として5石がのこる。手前に冠石がすべりおちた形でのこる。全長115cm、燃焼部長40cm、袖部内幅24cm、壁外掘り込み80cm、壁への掘り込み角度70°、燃焼部は床面にくらべて4cm低い。南のカマドは構築材1石をのこす。全長93cmで、燃焼部長30cm、袖部内幅24cm、壁外掘り込み70cm、壁への掘り込み角度46°を計る。燃焼部は床面にくらべて19cm低い。北のカマドは燃焼部中央に支石をのこす。二つのカマドは形態がかなり異なる。 **貯蔵穴** 南東隅、不整形。規模は100×80cmで深さ17cmである。 **遺物** 住居内より多量の遺物が検出されている。遺物には明確なレベル差、分布のちがいはなかった。北カマドからは土師器甕(16)羽釜型甑(19)が、カマドすぐ南からは須恵器甕(20)が、南カマド前からは須恵器高台埦(10)が、貯蔵穴内から土



1．褐色土。FP・Cを含む。2．褐色土。3．ローム。4．焼土。 **南カマド** 1．黒褐色土。ローム粒少量混入。2．黒褐色土。焼土混入。3．黒褐色土。4．黄褐色土。ローム混入。 **北カマド** 1．黒褐色土。焼土、ローム混入。

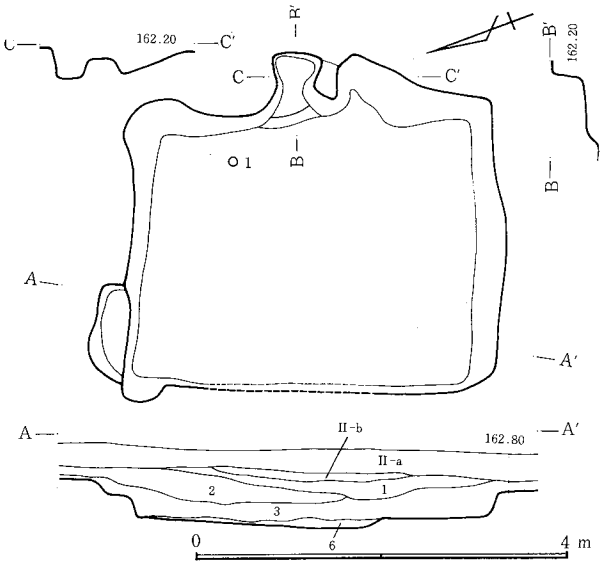
図－172 H－92号住居跡



図－173　H－92号住居跡出土遺物

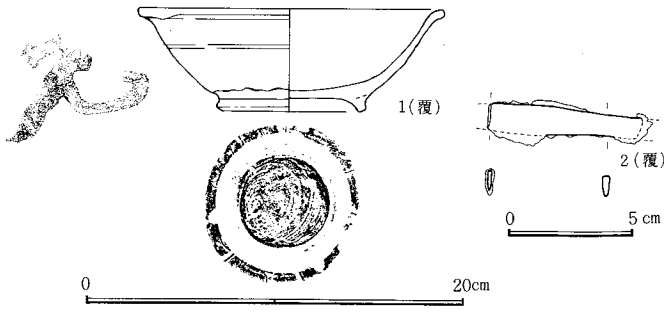
師器坏（2）須恵器坏（3）高台埦（12）灰釉壺（14）が、その西からは須恵器高台埦（4・7）が、中央部東からは須恵器高台埦（6・8）と壺（21）が、中央部南からは灰釉瓶（15）と羽釜（18）須恵器壺（22・23）が、その北より灰釉皿（13）土師器甕（17）小壺（24）が出土。埋土より土師器坏（1）、釈文は「松」と、須恵器坏（9・11）が出土している。（井野）

H93号住居跡（図—174、175　図版—11、78　表—90）（X期）



1．黒色土。浮石混入。2．黄褐色土。3．黒褐色土。指頭大のＦＰ等軽石混入。4．黒褐色土とロームの混合土。

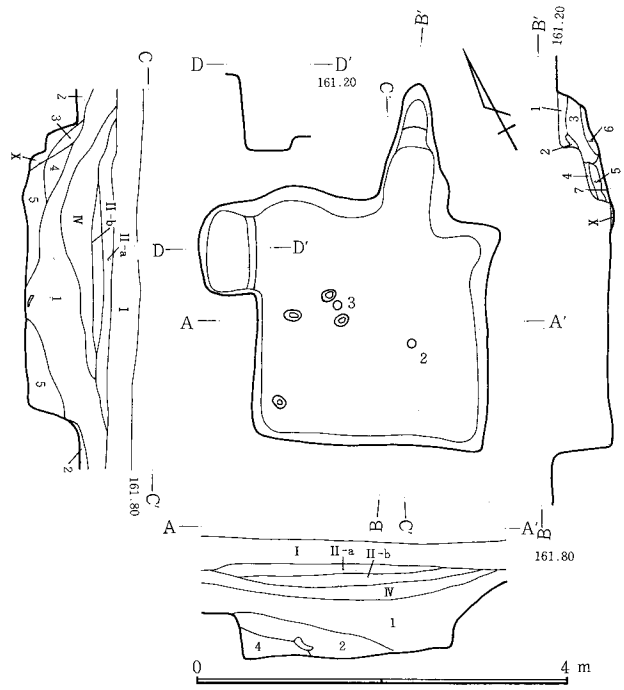
図—174　Ｈ—93号住居跡



図—175　Ｈ—93号住居跡出土遺物

位置　T16に所在する。西台地の北西端にあたり、竪穴住居跡の密集する台地中央部からかけ離れ、間に100m程の空白地帯が存在する。H92・94号等の8軒の竪穴住居跡とともに一つのグループを構成する。　**形状**　北北東に長軸をとる長方形で長軸方向N—21°—E、南北長3.5cm、東西長2.9m、面積10.1m²を測る。壁はほぼ直立し、現状で9～64cmの壁高が残る。周溝はない。　**ピット**　床面下には凹凸が多くあり、貼り床をしているが、柱穴とみられるピットはない。　**カマド**　東壁の中央部で、壁外に造り出している。平面長方形を呈し、全長98cm、袖部内幅40cmを測る。煙道部は直に立ち、石材は用いられていない。　**遺物**　埋土中より須恵器高台付埦（1）、刀子とみられる鉄製品（2）が出土している。　**テフラ**　床面上33cmの所にＢ軽石の純層が水平に堆積している。（富澤）

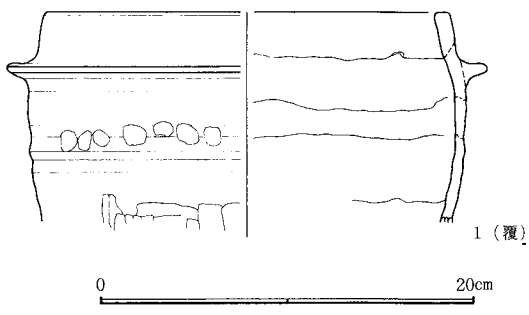
H94号住居跡（図—176、177、178　図版—11、78　表—91）（Ⅷ期）



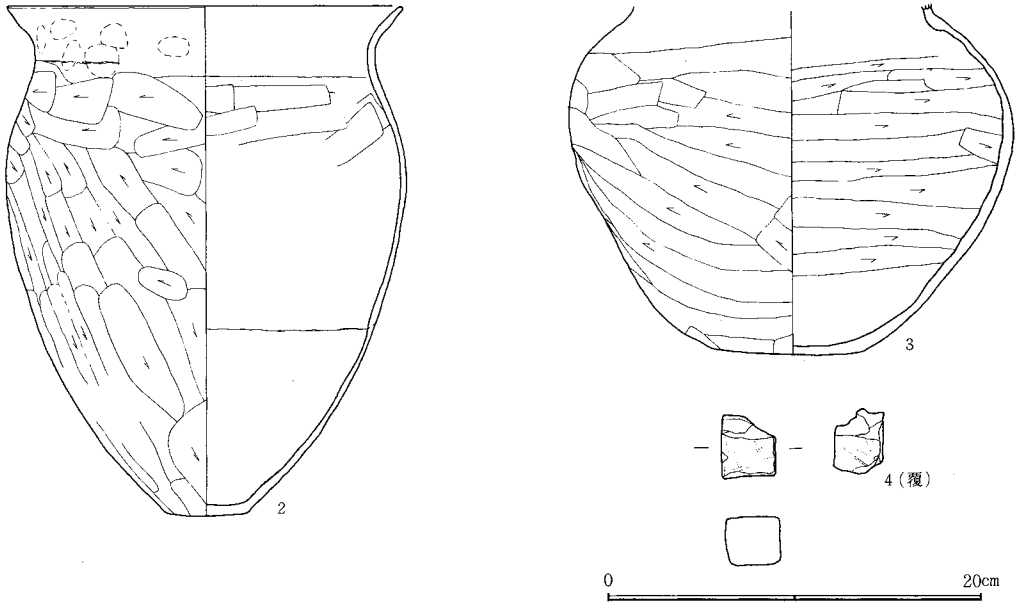
1．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．褐色土。3．褐色土。黒色土少量混入。4．褐色土。1よりやや黒い。5．褐色土。　**カマド**　1．黒色土。焼土、浮石を含む。2．黒色土。焼土少量含む。3．黒褐色灰。焼土を少量含む。4．褐色土。焼土を少量含む。5．桃色焼土。6．灰。褐色土、黒色土、焼土を含む。7．褐色灰。焼土、黒色土を含む。

図—176　Ｈ—94号住居跡

位置　西台地上のＳ14・15に所在する。住居跡が密集する地区から西にはずれ、9軒が一群を成す内の一軒である。東に95号住居跡を臨んでいる。　**形状**　平面は正方形の2.3×2.2mで、面積は5.8m²である。壁現高は46～58cmであるが、地層断面図からは63cmが測れ、深い住居跡である。周溝はなく、長軸方向はN—27°—Eである。北西の位置に方形の張り出し部がある。80×44cmで底は床面より15cm低くなっている。　**床面**　踏み固め部分は不明であるが、平面、断面図から床面全体が貼床になっている。　**ピット**　北西半分にある。平面の大きさは、$P_1$16×12cm、$P_2$18×10cm、$P_3$13×10cm、$P_4$14×11cmでいずれも浅い。柱穴とは考えられない。　**カマド**　北壁の中央から東寄りにある。壁からの掘り込み長150cm、袖部内幅56cm、燃焼部長50cmである。燃焼部は床面より5cm低く、壁への掘り込み角度は20°である。　**貯蔵穴**　認められない。　**遺物**　床面について土師器羽釜（1）、床上3cmより土師器甕（2）胴丸甕（3）が出土している。　**テフラ**　Ｂ軽石の純層が床面上72cmの所に堆積している。（中村）

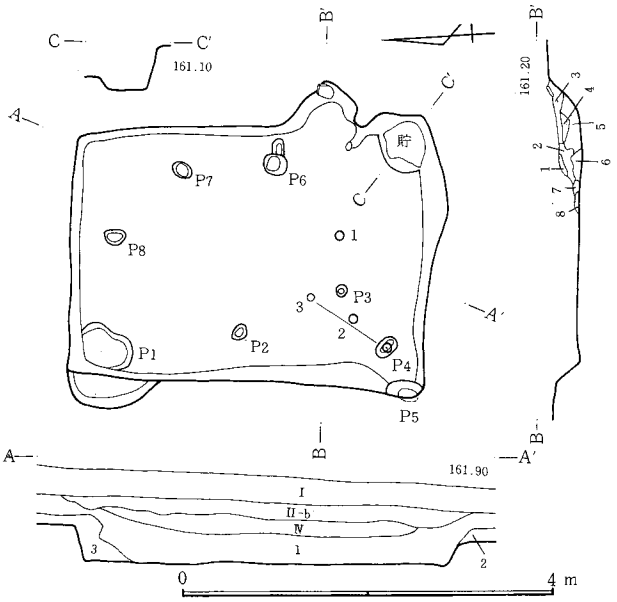


図—177　Ｈ—94号住居跡出土遺物（1）



図－178　H－94号住居跡出土遺物（２）

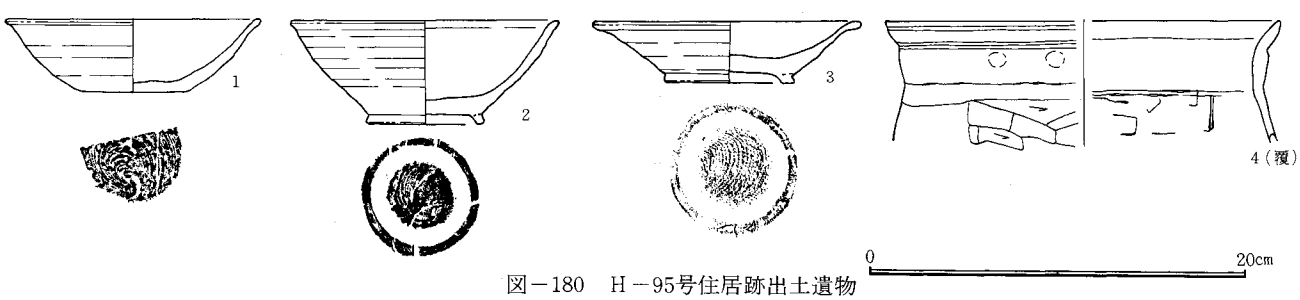
H95号住居跡（図－179、180　図版－11、78　表－92）（X期）



1．褐色土。FP・C軽石、わずかなロームブロックを含む。2．褐色土。3．黒色土。FP・C軽石を含む。　**カマド**　1．黒褐色土。C軽石を含む。2．黒灰褐色土。粘土粒、C軽石、灰を含む。3．赤褐色土。焼土粒を含む。4．黒褐色土。焼土粒を含む。5．赤褐色土。焼土粒を含む。6．薄赤褐色土。焼土粒を含む。7．焼土。8．白灰褐色土。C軽石を含む。

図－179　H－95号住居跡

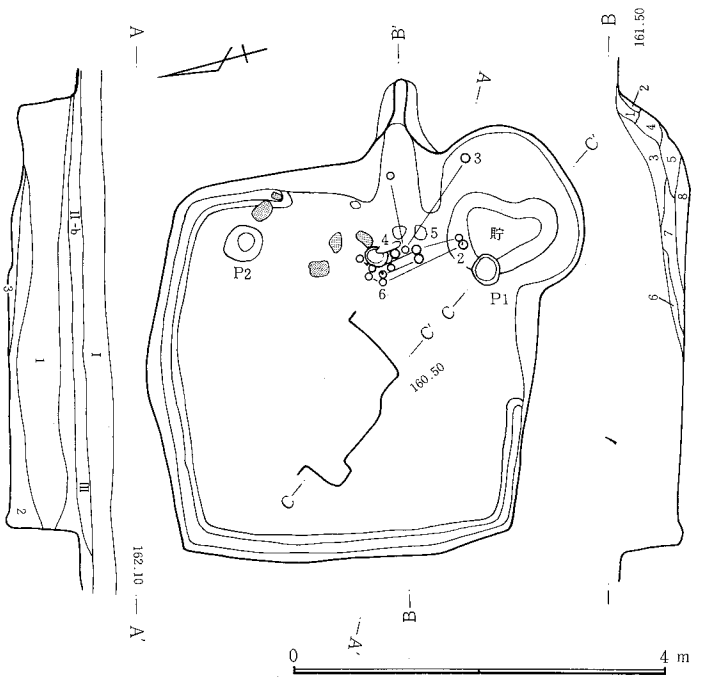
位置　西台地の北西部、南へゆるやかに傾斜するS14・15に所在する。　**形状**　南北3.6m、東西2.5mの長方形の住居である。面積は9.8m²、壁高は32～50cmである。住居の長軸方向はN－10°－Eであり、床面は住居の掘り形より最深で16cm程、黒色上にロームブロックを混入し、床面全体に貼り床を形成している。　**ピット**　ピットは８個確認された。各ピットは、$P_1$62×40cm深さ19cm、$P_2$18×13cm深さ14cm、$P_3$13×10cm深さ10cm、$P_4$25×14cm深さ12cm、$P_5$55×46cm深さ13cm、$P_6$28×22cm深さ21cm、$P_7$21×14cm深さ22cm、$P_8$22×14cm深さ17cmである。　**カマド**　東壁南寄りに、壁外に57cm掘り込み、全長110cm、燃焼部長70cm、袖部内幅55cmのカマドを構築している。壁への掘り込み角度は44°であり、住居床面と燃焼部のレベル差は－５cmである。　**貯蔵穴**　南東隅に不整方形の貯蔵穴をもつ。規模は53×46cm深さ13cm程である。　**遺物**　P_4内より須恵器の高台付埦（２）が出土し、他の遺物（１・３）は住居の中央およびカマド前より出土している。　**テフラ**　住居を埋めている埋土層中II－b層にB軽石が純層がみられ、IV層はC軽石、FP軽石を含む黒色土層であった。II－b層、IV層は住居の埋土として凸レンズ状に住居上に堆積し住居の埋没過程を考える資料となろう。　（江原）



図－180　H－95号住居跡出土遺物

H96号住居跡（図－181、182　図版－11、79　表－93）（VIII期）

位置　西台地の北西部、南へゆるやかに傾斜するR16に所在する。H95号住居跡の北東30m程の所で付近には土師器使用住居跡が８軒存在している。　**形状**　南北3.8m、東西3.8mで長軸方向N－15°－E南東隅に楕円形の張り出しを持つ正方形に近い住居

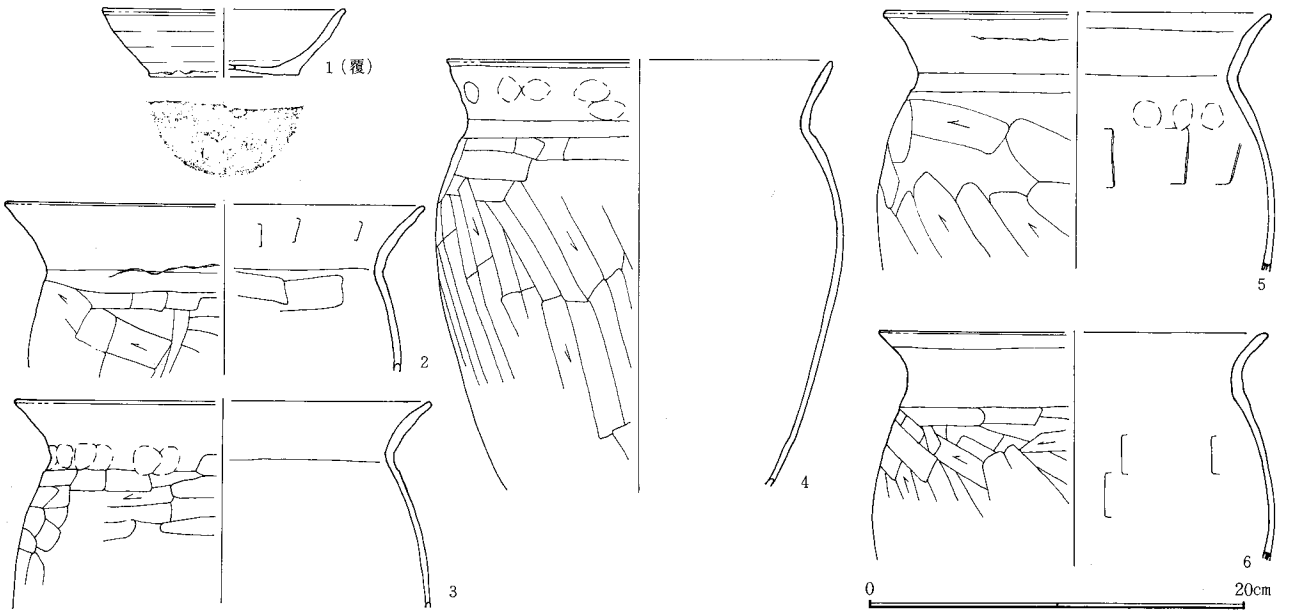


1．黒褐色土。軽石混入。2．黒色土。軽石わずかに混入。3．焼けた粘土。　**カマド**　1．薄紅焼土。2．黒色土。3．黒色土。焼土微粒子、薄桃灰、少量の浮石混入。4．黄土色灰。薄紅白色灰混入。5．桃色焼土。6．黒色土。浮石、焼土混入。7．桃色灰。粒子大浮石混入。8．薄灰色灰。

図－181　H－96号住居跡

である。面積は約15.1m²である。壁高40～81cmである。周溝は幅5～12cm、深さ4cm程で、北壁、西壁下と東壁下北3分の1と、南壁下西3分の1部分に存在する。南東隅に住居の壁と同じ掘り形を持ち、垂直の壁を持つ楕円形の張り出し部1.8×1.3mを付属している。張り出し部の中央には120×80cm深さ15cm楕円形のピットが存在した。床面は貼り床をし、床面下は掘り形のみで施設は特になかった。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄りに、右側袖部は地山を造り出したカマドが存在した。全長134cm、燃焼部長86cm、袖部内幅52cmで、壁への掘り込み角度74°、住居床面と燃焼部とのレベル差、9cmである。カマドの前にはカマドに利用したと考えられる砂岩質の切石が5個残存していた。　**貯蔵穴**　住居の南東隅の張り出し部分のピットに重複して30×30cm深さ26cmのピットが存在し、張り出し部内ピット180×130cm深さ15cmとともに貯蔵穴と考えられる。　**遺物**　遺物はカマドの前および張り出し部のカマド側に近い部分に集中して出土している。土師器の坏（1）、土師器の甕（2～6）がカマド付近より出土している。

（江原）



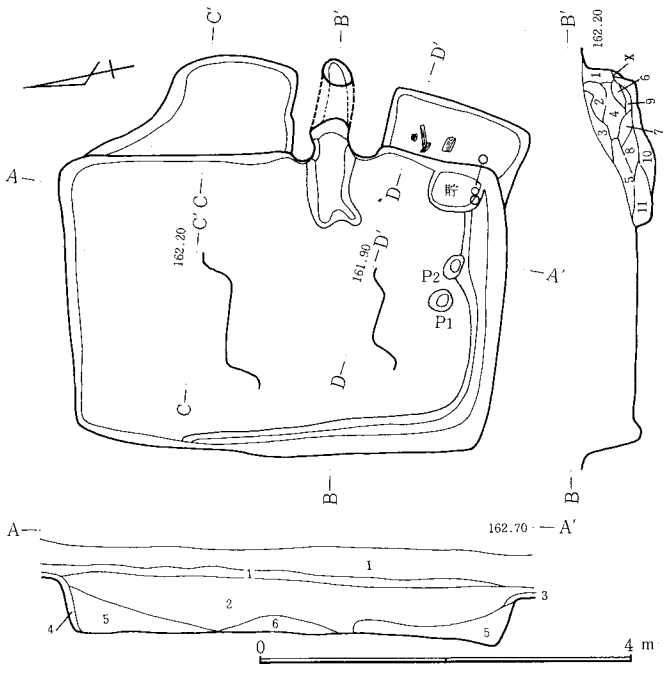
図－182　H－96号住居跡出土遺物

H97号住居跡（図—183、184　図版—11、79　表—94）（IX期）

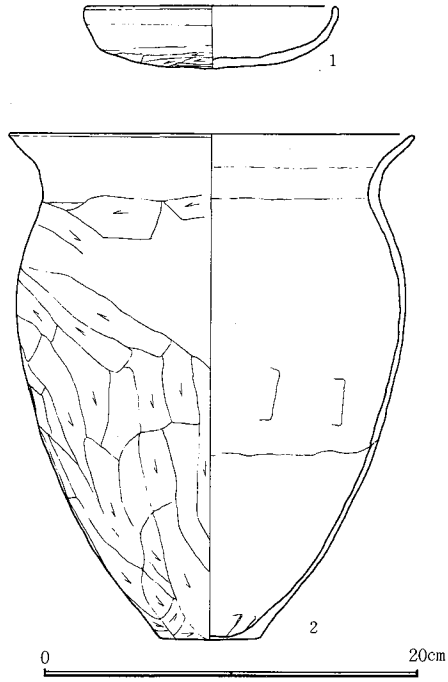
位置　西台地北西のR16に位置する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形である。壁は直角に結ばれるとともにしっかりと掘り込まれている。長軸方向はN—15.5°—Eで面積は12.7m²である。壁高は48～63cm。南壁と東壁の南3分の2に周溝をめぐらす。幅7～23cm、深さ3～9cmである。住居東側に2カ所の張り出しがある。カマドの南は長方形で規模は134cm×56cm、床面とのレベル差は北が＋30cm南が＋20cm。カマドの北は不整形で規模は108×100cmで床面とのレベル差は＋30cm。床面は全面が黒色土まじりのロームやローム・焼土を含む粘土により作られている。厚さは南で32cm、北で3cmで南側を主体に作られている。　**ピット**　床面2カ所。P_1は22×20cmで深さ9cm、P_2は28×16cmで深さ15cm。南壁下中央にあるが性格は不明。入口に関係する施設か。

カマド　東壁南寄り。壁外に構築されている。壁を掘り込み、粘土で両袖と煙道を作る。袖部には構築材で凝灰岩がのこる。煙道はほぼ使用当時のまま検出された。全長165cm、燃焼部長40cm、袖部内幅38cm、壁外掘り込み100cm、壁への掘り込み角度77°である。燃焼部は床面にくらべて5cm低い。　**貯蔵穴**　南東壁隅。規模は54×38cmで深さ14cm。　**遺物**　貯蔵穴内より土師器甕（2）が、その東より土師器坏（1）が出土している。その他炭化物が出土している。

（井野）



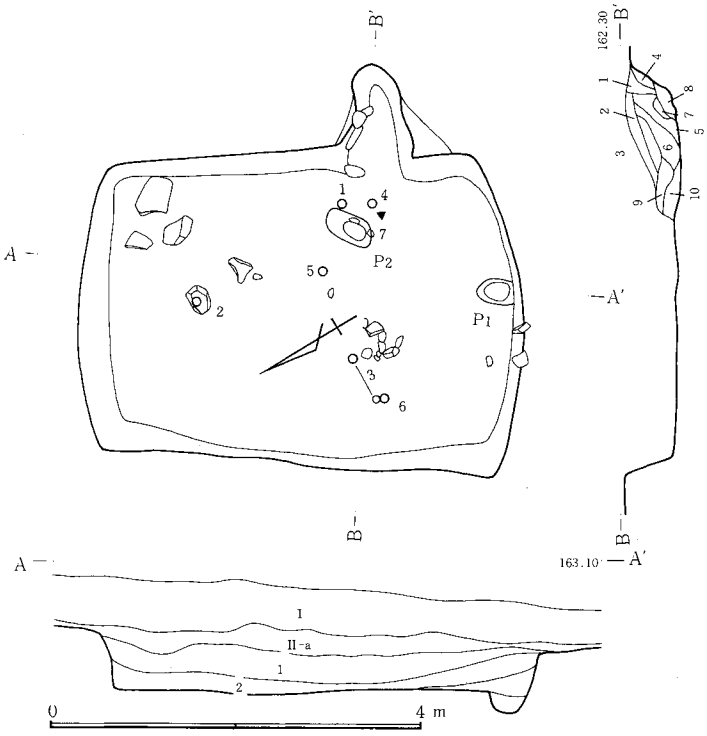
図－183　H－97号住居跡



図－184　H－97号住居跡出土遺物

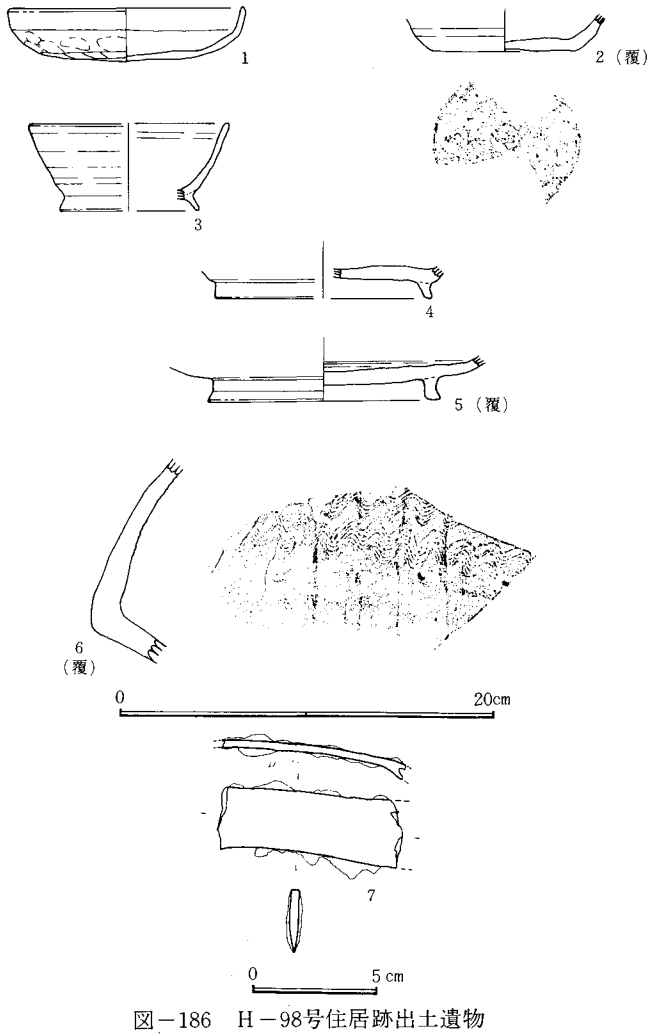
1．黒色土。浮石を含む。2．黒褐色土。浮石、炭化物、焼土を含む。3．黒色土。4．黒褐色土。5．桃色黒褐色土。ロームブロック、多量の炭化物混入。6．炭化物・焼土・粘土・灰混合土。　カマド　1．黒褐色土。2．灰黄色土。粘性あり。3．黒褐色土。軽石混入。4．赤褐色土。灰、多量の焼土混入。5．灰褐色土。わずかな焼土、多量の灰を含む。6．赤褐色土。焼土塊。7．灰褐色土。焼土、灰、ローム粒混入。8．灰褐色土。焼土粒、灰、ローム粒混入。9．青灰白色土。砂質。灰混入。10．黄褐色土。ローム粒、灰混入。11．黒褐色土。ローム粒、灰わずか混入。

H98号住居跡（図—185、186　図版—12、79　表—95）(Ⅷ期)



1．黒色土。2．黒褐色土。FP・C軽石を含む。3．黒褐色土。FP・C軽石わずか混入。　カマド　1．黒褐色土。焼土混入。2．黒褐色土。FP・C混入。3．黒褐色土。粘性あり。FP・C混入。4．5．黒褐色土微砂。6．赤褐色土。焼土、軽石混入。7．赤褐色土。多量の焼土混入。8．赤褐色土細砂。9．灰褐色土。軽石灰混入。10．黒褐色土。軽石混入。

図－185　H－98号住居跡

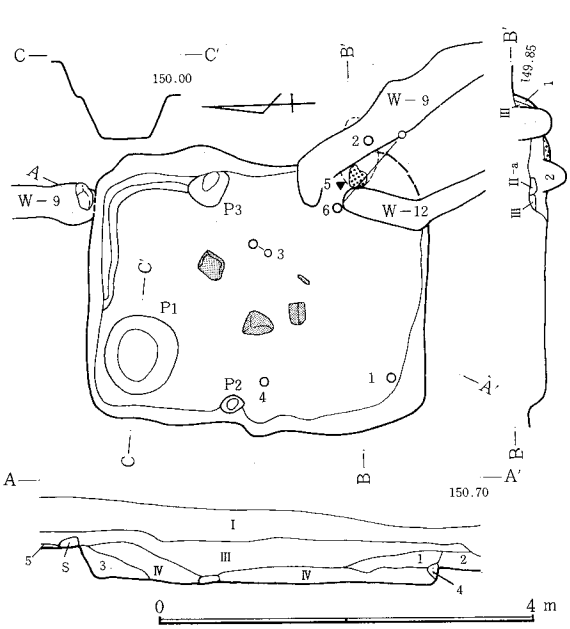


図－186　H－98号住居跡出土遺物

位置　西台地北西のR17に位置する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北4.3m、東西3.0mである。長軸方向はN—23.5°—Eで面積は12.7m²である。壁高は47～71cmで地層断面からは80cmを測る。南東隅の形状は縄文の土坑との重複によるもの。　**ピット**

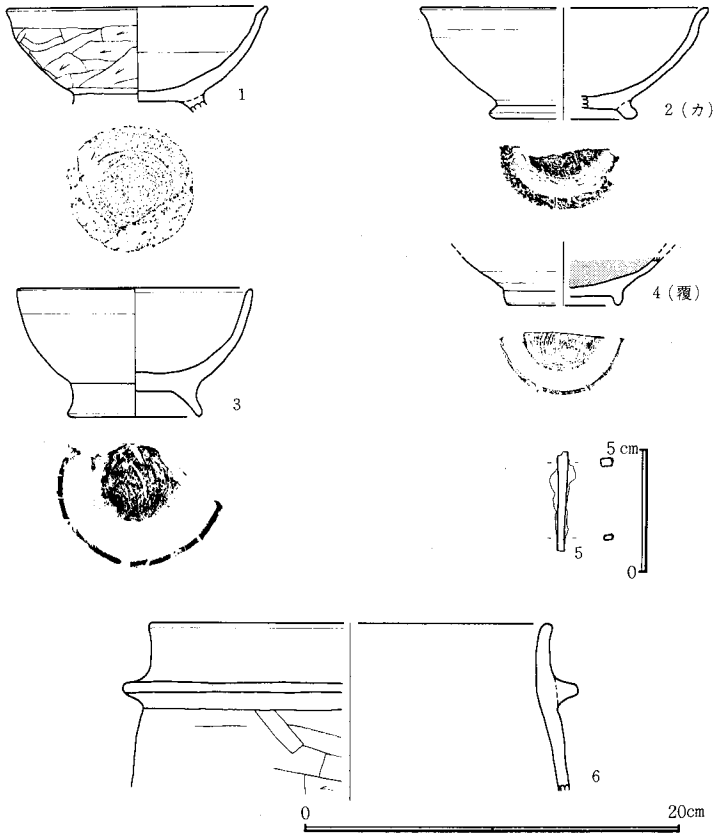
床面2カ所。P_1は36×24cmで深さ12cm、P_2は45×25cmで深さ9cm。P_1は入口に係わるものと思われるが、P_2の性格は不明。 **カマド** 東壁やや南にある。構築材が4石のこる。全長120cmで燃焼部長50cm、袖部内幅46cm、壁外堀り込み117cm、壁への堀り込み角度51°である。燃焼部は床面とくらべると4cm低いがほぼ平坦。 **遺物** カマド前より土師器坏(1)鉄製品(7)須恵器盤(4)が、床面中央部より須恵器盤(5)と埦(3)がその北より須恵器坏(2)が、西より須恵器甕(6)が出土している。 **テフラ** II－a層はB軽石を多く含む。 (井野)

H99号住居跡（図－187、188　図版－12、79　表－96）(XII期)



1．黒褐色土。ロームブロック、焼土混入。2．黒褐色土。3．黒褐色土。FP・C軽石、ローム混入。4．焼土。 **カマド** 1．焼土。2．黒色土(FP・Cを含む)。焼土塊、焼けたロームブロックの混合。3．FP・Cまじりの黒色土と焼けたロームブロック。

図－187　H－99号住居跡

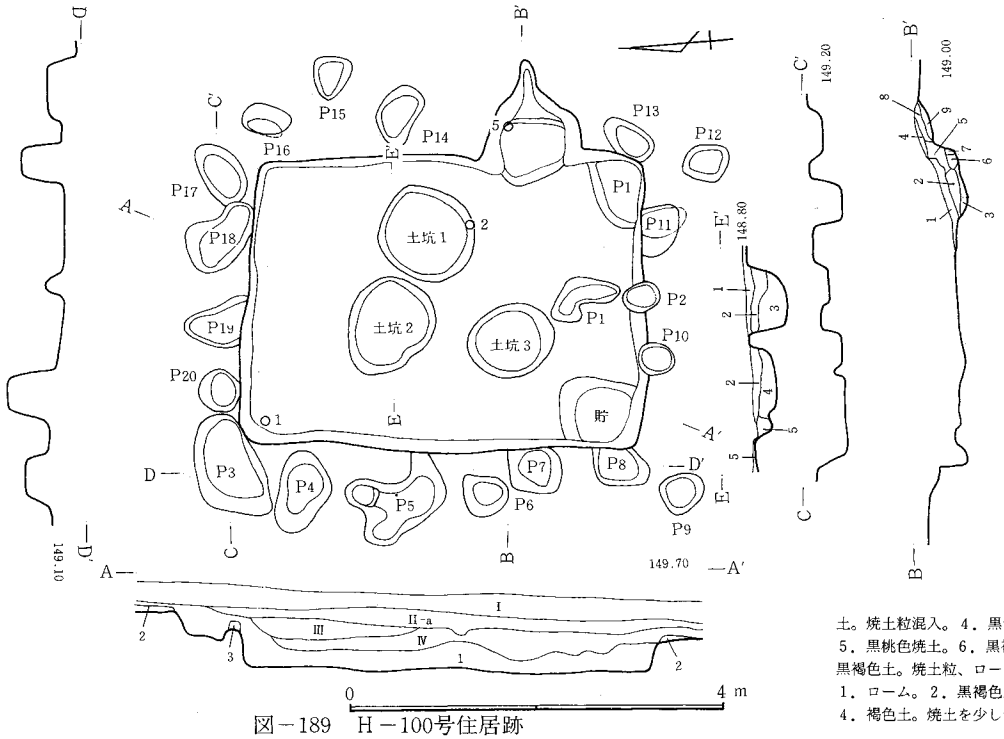


図－188　H－99号住居跡出土遺物

位置 K1に所在する。西台地の南端に位置し、周辺には竪穴住居跡や掘立柱建物跡が密集している。 **形状** 南北に長軸をとる長方形で長軸方向N—17°—W、南北3.4m、東西2.7m、面積8.5m²を測る。壁はほぼ直に立ち、20～35cmの壁高が残る。周溝は北東隅を中心に北壁と東壁の一部に認められる。 **床面** 貼り床が施されている。 **ピット** 北西隅に平面不整円形で、86×70cm、深さ46cmの規模のP_1がある。中からは焼土混りの土層が中位を埋めている。床面、埋土より焼石が多く出土しており、小鍛治的な作業場として使われた事が考えられる。 **カマド** 東壁で南東隅に寄った所に位置する。しかし、B軽石を混ぜる砂質土に埋まる溝（W－9）によって攪乱を受けており、詳細については明らかでない。 **遺物** 住居南西隅床面より、土師器埦(1)、カマド内より土師器埦(2)、カマド前より土師器埦(3)、羽釜(6)、カマド内より鉄製品釘(5)、西壁下より灰釉陶器高台付埦(4)等が出土している。 **重複関係** W－9によってカマド付近が削りとられている。W－9が新しい。W－12とも重複するがW－12が新しい。W－9とW－12の新旧は不明である。 (富澤)

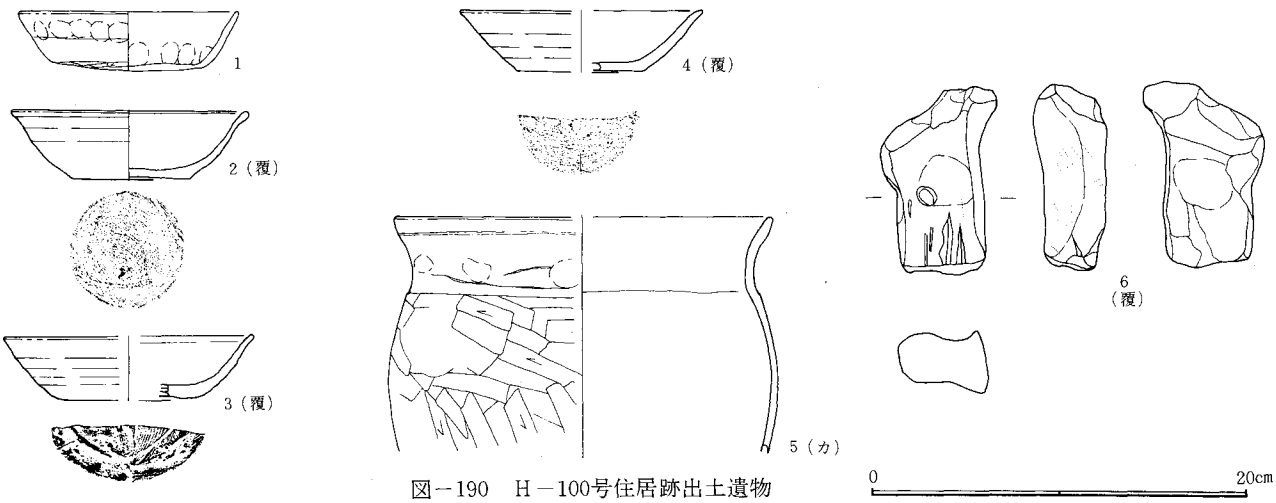
H100号住居跡（図－189、190　図版－12、80　表－97）(IX期)

位置 J・K101に所在する。台地の中央からやや西へ寄った所に位置し、周辺には竪穴住居跡とともに掘立柱建物群が密集している。 **形状** ほぼ南北に長軸をとる長方形で長軸方向N—6.3°—E、南北4.1m、東西3.0m、面積12.1m²を測る。壁は直立し、現状で47～59cmの壁高が残る。周溝は存在しない。 **床面** 床面には92×96cm、深さ42cm(A)、88×100cm、深さ33cm(B)、77×99cm・深さ34cm(C)の三基の土坑がある。平面隅丸方形あるいは円形を呈し、土坑内の上半部には焼土混りの黒褐色土が認められた。床面はこれらの土坑上に貼り床をしている。 **ピット** 床面上から掘り込んだピットは中央よりやや南へ寄った地点に径46cm、深さ19cm程のピット一個が認められたが、柱穴とみられるものは存在しない。また、住居の周囲には必ずしも一直線上には並ばないが、合計19個のピットが存在している。竪穴住居跡との関連ははっきりしなかったが、これらのピットが竪穴住居跡の存在を意識して掘られている事は言えよう。 **カマド** 東壁で南へやや寄った地点において壁外へ造り出している。平面方形の燃焼部から狭い煙道が出ている。全長118cm、袖部内幅62cmを測る。 **貯蔵穴** 南東隅及び南西隅の2カ所に貯蔵穴が存在する。南東隅の貯蔵穴は平面隅丸の三角形を呈し、70×50cm、深さ15cmを測る。一方、南西隅の貯蔵穴は平面方形を呈し、77×66cm、深さ16cmを測る。 **遺物** カマド内より土師器甕(5)が出土し、北西隅より土師器坏(1)が出土し、土坑（A）より須恵器坏(2)が出土、埋土中より須恵器坏(3・4)、砥石(6)が出土している。 (富澤)



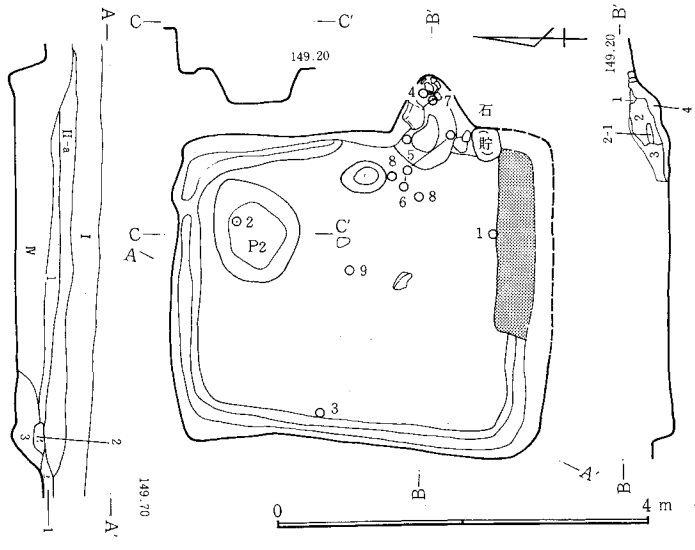
図－189　H－100号住居跡

1．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。2．黒褐色土。3．褐色土。　**カマド**　1．黒桃色灰。焼土、ロームがブロック状に混入。2．桃色焼土。3．褐色土。焼土粒混入。4．黒色土。焼土粒、ローム粒、C軽石混入。5．黒桃色焼土。6．黒褐色灰。焼土粒混入。7．褐色土。8．黒褐色土。焼土粒、ローム粒混入。9．黒褐色土。　**床下土坑**　1．ローム。2．黒褐色土。焼土含む。3．ロームブロック。4．褐色土。焼土を少し含む。5．褐色土と黒色土の混土。



図－190　H－100号住居跡出土遺物

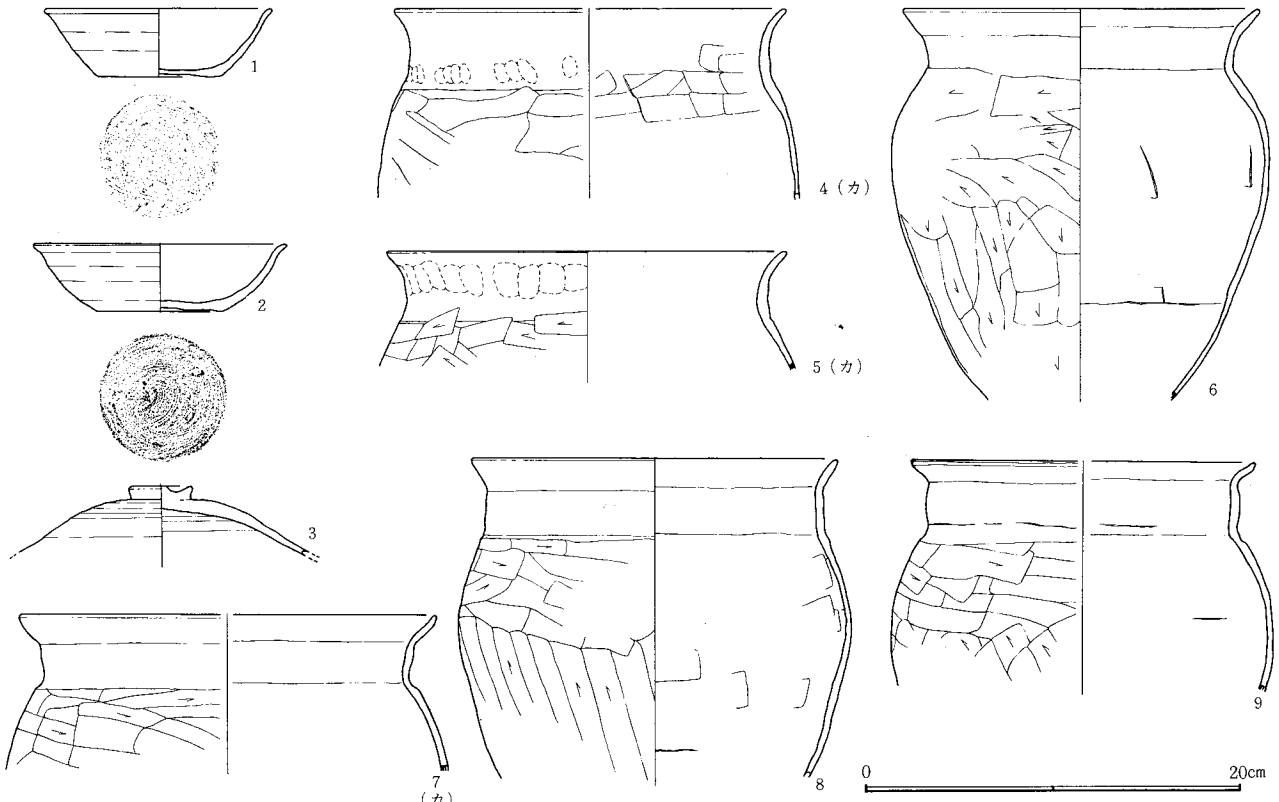
H101号住居跡（図－191、192　図版－12、80　表－98）



図－191　H－101号住居跡

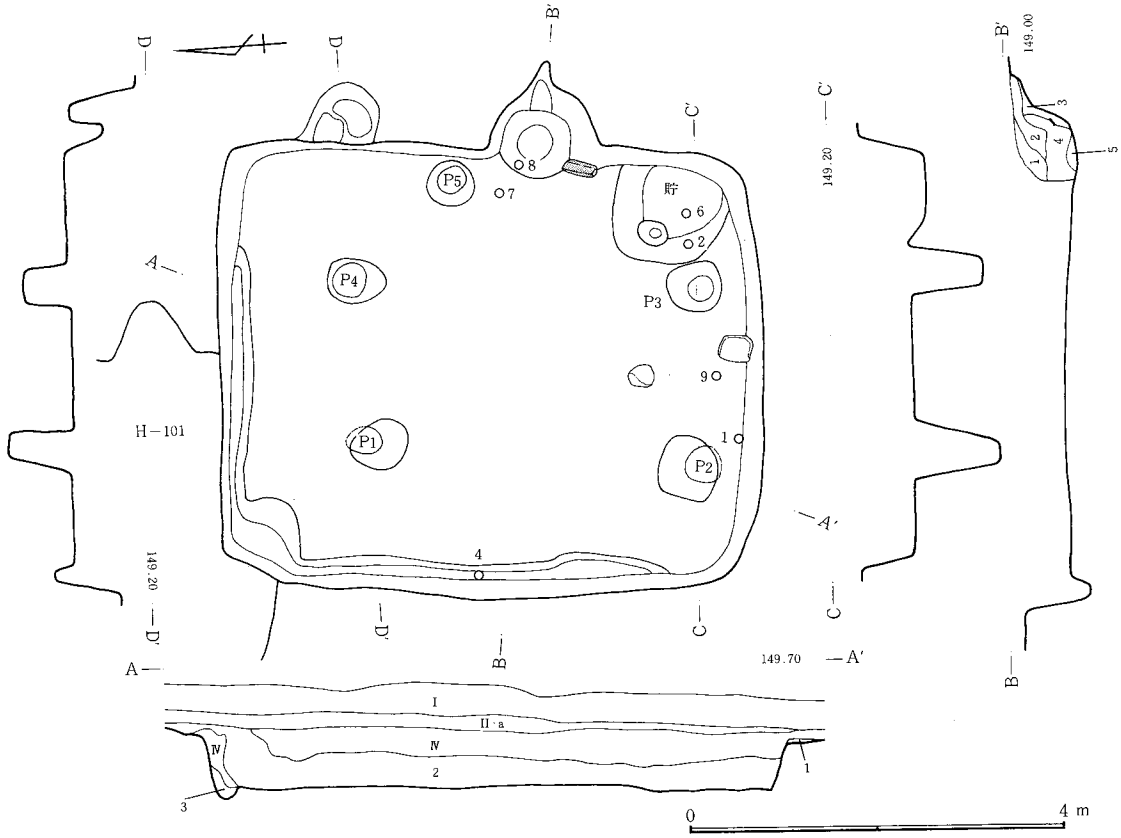
位置　西台地南のJ101に位置する。周辺は竪穴住居跡が多く位置している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形である。南北3.7mで東西は3.1m長軸方向N－0°、面積は11.6㎡である。壁高は23～47cmで地層断面からは65cmを測る。H－102との重複部分では不明であるが、カマド部分を除くほぼ全周に周構をめぐらす。幅は5～20cmで深さ2～5cmである。H－102との重複部分を含む住居南床面に貼り床を施す。厚さは10～15cm。　**ピット**　2カ所。P_1は49×32cmで深さ12cm。P_2は116×87cmで深さ34cm。いずれも性格は不明。　**カマド**　東壁南寄り。全長97cmで燃焼部長35cm、袖部内幅60cm、壁外掘り込み80cm、壁への掘り込み角度30°である。燃焼部は床面とくらべて2cm低い。　**遺物**　カマド内より土師器甕(4・5・7)が、カマド前と中央部より土師器甕(6・8・9)が、床面南とP_2内より須恵器坏(1・2)が、西壁ぎわより須恵器蓋(3)が出土している。　（井野）

1．黒褐色土。B軽石を多量に含む。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．暗褐色土。　**カマド**　1．焼土。2．黒褐色土。ローム、焼土がブロック状に混入。2-1．黒褐色土。2よりロームが多い。3．黒褐色土。浮石を含む。4．黒褐色土。多量の焼土粒を含む。



図－192　H－101号住居跡出土遺物

H102号住居跡（図－193、194　図版－12、80　表－99）（IX期）



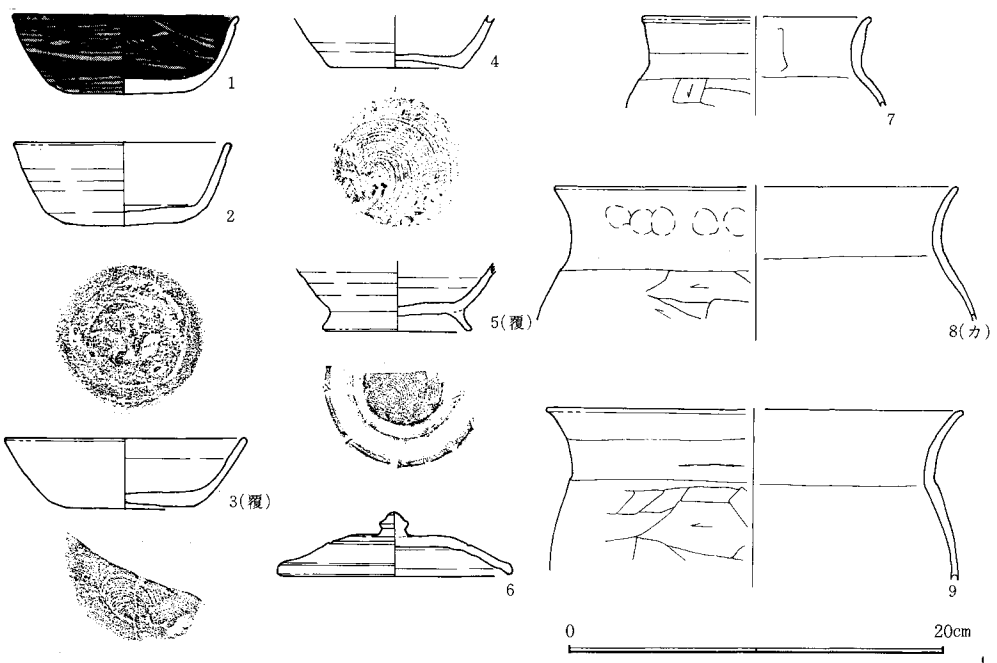
1．黒褐色土。2．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。3．黒褐色土。ローム粒混入。　**カマド**　1．黒褐色土。軽石混入。2．灰黒色土。粘土混入。3．黒褐色土。4．赤褐色土。焼土混入。5．黒褐色土。砂質。焼土、ローム混入。

図－193　H－102号住居跡

位置　西台地南のJ101に位置する。H－101と重複している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で長軸方向N－6°－E、南北5.4m、東西4.4m、面積は23.8m²である。壁はしっかり掘りこまれており、壁高は51～77cmである。北壁西寄り3分の2と西壁に

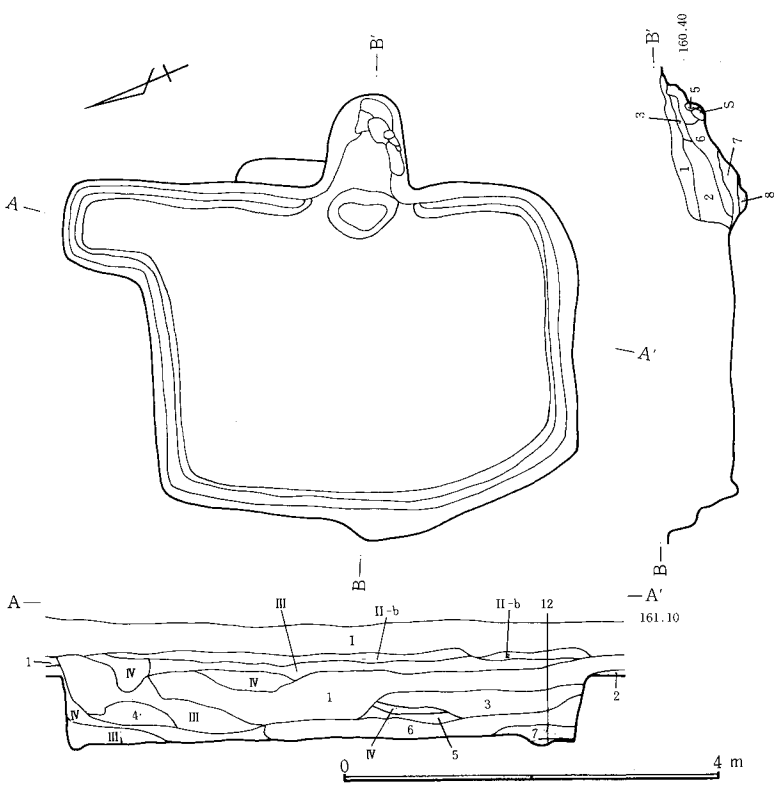
周溝をめぐらす。幅５～３５cmで深さ７～20cmである。　**ピット**　床面５カ所。P_1は52×54cmで深さ68cm、P_2は64×64cmで深さ96cm、P_3は60×50cmで深さ74cm、P_4は60×48cmで深さ50cm、P_5は48×46cmで深さ13cmである。P_1～P_3は他住居跡にくらべても深く掘られている。P_1～P_4は住居柱穴と考えられる。P_5は性格不明である。　**カマド**　東壁中央やや南寄り。壁外に作られている。方形に燃焼部を掘りこみさらに細長く煙道を掘りこんでいる。構築材として右袖に１石がある。全長114cm、燃焼部長64cm、袖部内幅70cm、壁への掘り込み角度66°、壁外掘り込み114cmである。燃焼部と床面をくらべると11cm低い。煙道は燃焼部より急な傾斜で続いている。　**貯蔵穴**　南東壁きわにある。方形に近く、規模は123×101cmで深さ15cmである。　**遺物**　カマド手前より土師器甕(7･8)が出土、貯蔵穴内より須恵器蓋(6)須恵器坏(2)が出土、南壁下より土師器甕(９)が出土、西壁下周溝内より須恵器坏(4)が出土、埋土中より須恵器坏(3)埦(5)が出土している。南壁下より出土の土師器坏(1)は黒色土器である。　**テフラ**　II－a層にはB軽石、C、FPを含む。　**重複関係**　H－101と重複する。東西地層断面より、H－102の埋土をH－101が切り、重複する部分に貼り床を施していることから、H102が旧い。K－22と重複する。遺構の切り合いの様子からK－22が旧いと考えられる。

（井野）



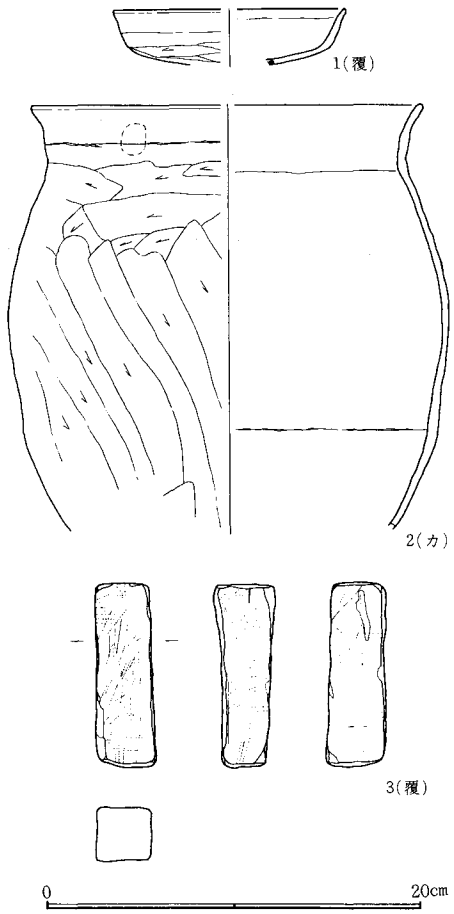
図－194　H－102号住居跡出土遺物

H103号住居跡（図－195、196　図版－12、81　表－100）(IX期)



1．褐色土。FP･C軽石混入。2．黒褐色土。3．褐色土。FP･C軽石、少量のロームブロック混入。4．黒褐色土。FP･C軽石、少量のロームブロック混入。5．黒色土。焼土混入。6．黒褐色土。わずかにFP･C軽石、焼土混入。7．褐色土。FP･C軽石、多量のローム混入。8．よごれたローム。　**カマド**　1．暗褐色土。FP･C軽石、焼土、ロームを含む。2．黒褐色土。3．黒褐色土。焼土若干含む。4．赤褐色土。焼土主体。5．黒色土。焼土少　混入。6．暗褐色土。焼土、粘土混入。7．赤褐色土。焼土多量に混入。8．黒褐色土。

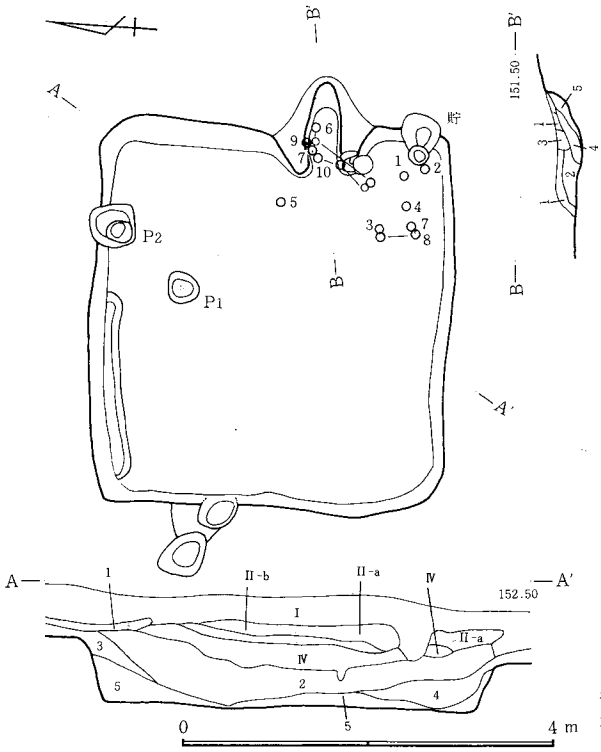
図－195　H－103住居跡



図－196　H－103号住居跡出土遺物

位置　Q14に所在する。西台地の北西端近くに位置し、H92～98住居跡等9軒で一つのグループを作っている。台地中央部の住居の密集する地帯との間に100m程の間隔をあける。　**形状**　北北東に長軸をとる長方形で長軸方向N－19.5°－E、南北4.2m・東西3.3m、面積14.8m²を測る。北東隅には平面方形で、80×77cmの規模の張り出しを持つ。壁は直に立ち、現状で70cm程の壁高が残る。当初は地層断面から90cm以上はあったものと思われる。周溝はカマド部分を除いて全周する。　**ピット**　床面上には柱穴とみられるピット等は存在しない。　**カマド**　東壁の中央部で、壁外に造り出している。全長150cm、袖部内幅77cm、煙道部の傾斜は比較的緩く33°となっている。カマドの燃焼部から煙道部にかけて石材を用いている。　**遺物**　カマド内埋土より土師器坏(1)、甕(2)が、また住居埋土中より砥石(3)が出土している。　**テフラ**　床面上85cmの所にB軽石を主とする砂質土層(II－b層)が水平に堆積する。　(富澤)

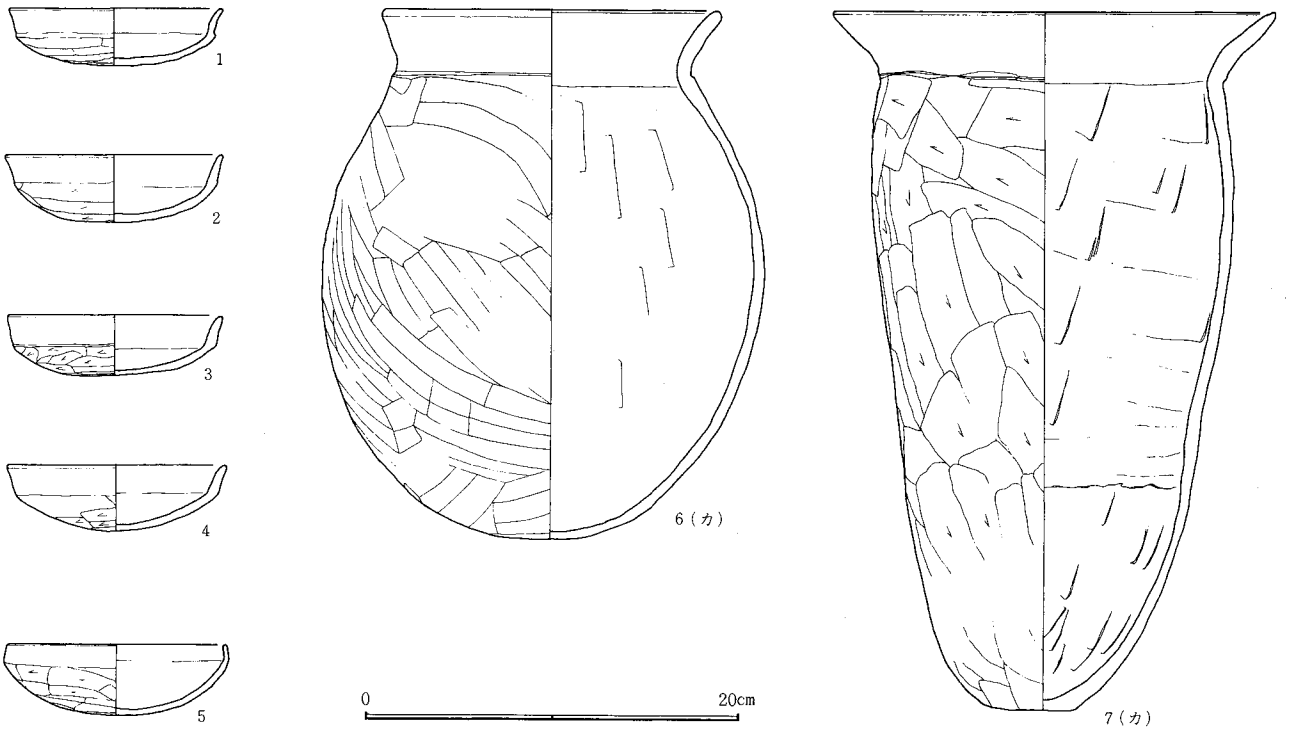
H104号住居跡（図－197、198、199　図版－12、81　表－101）(IV期)



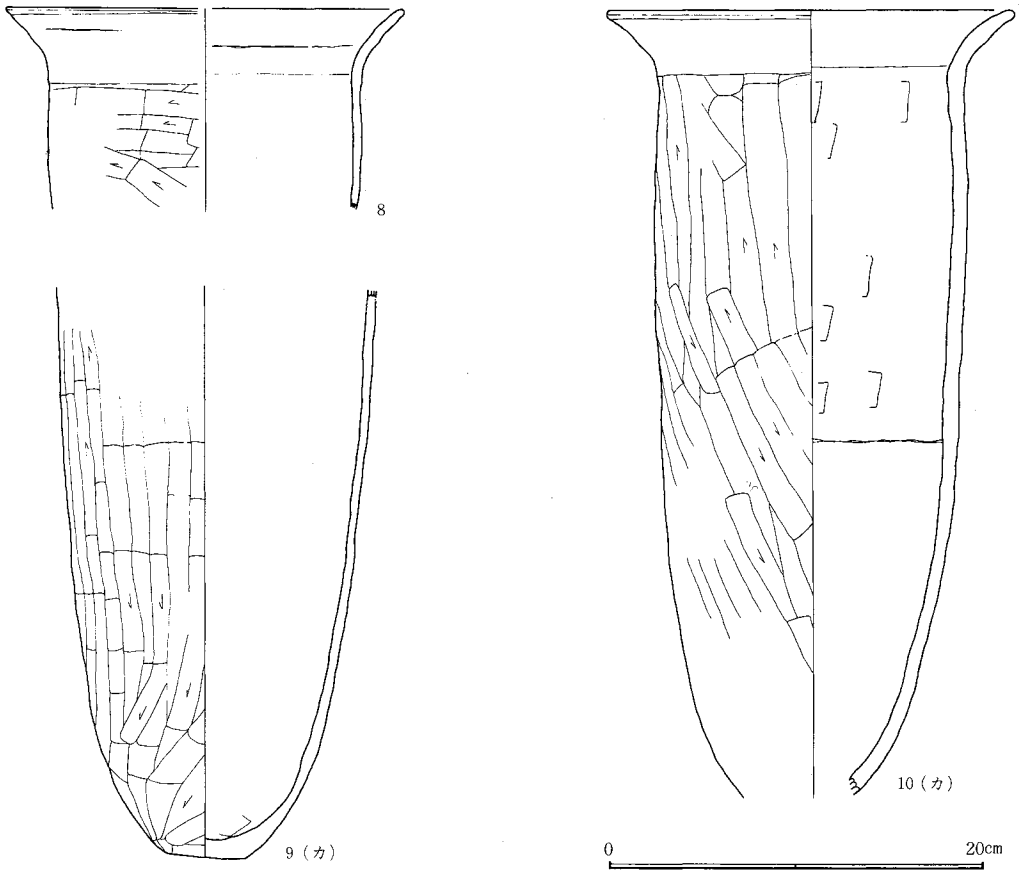
位置　調査区南西部のR1北東隅に所在し、西台地の西縁部に当る。　**形状**　東西方向が若干長い隅丸方形で、東西3.6m・南北3.5mを測る。長軸方向はN－85°－Eで、面積は13、0m²である。北辺の中央から西側には、幅6～12cm・深さ約4cmの周溝が検出された。なお、他の部分の床面は貼り床であった。壁高は54～70cmが確認されており、床面から約54cm上には浅間山給源のB軽石の純層が認められた。　**ピット**　北辺・西辺及び南東隅に壁に接して3個のピットが検出され、北側の床面にも隅丸方形のピットが確認された。P_1は33×32cm・深さ14cm、P_2は43×44cm・深さ12cm、P_3は22×18cm・深さ24cm（西側）。46×26cm・深さ62cm（東側）、P_4は40×35cm・深さ38cm、P_5は45×40cm・深さ8cmであるが、性格は不明である。　**カマド**　東壁中央やや南寄り。土器と川原石及び粘土を使用して構築されており、燃焼部は壁際にある。焚口幅30cm・奥行40cmで、壁への掘り込み角度は59°、全長110cmである。火床面は床面よりも5cmほど窪んでいた。　**遺物**　カマド内及び南東部に集中して出土した。土師器甕(7)はカマドの芯材として使用されていたものと考えられる。焚口の袖部分には川原石が残っており、これも芯材に使用されたものと考えられる。　(飯塚)

1．砂質。2．暗褐色土。C軽石、ローム粒点在。3．暗褐色土。4．黒褐色土。5．暗褐色土。ロームブロック点在。　**カマド**　1．黄褐色土。多量のFP軽石、ローム粒、少量の焼土混入。2．茶褐色土。FP軽石、ローム粒、多量の焼土混入。3．褐色土。焼土、ロームブロック混入。4．赤褐色土。焼土粒、炭、多量に混入。5．ローム粒。

図－197　H－104号住居跡



図－198　H－104号住居跡出土遺物(1)

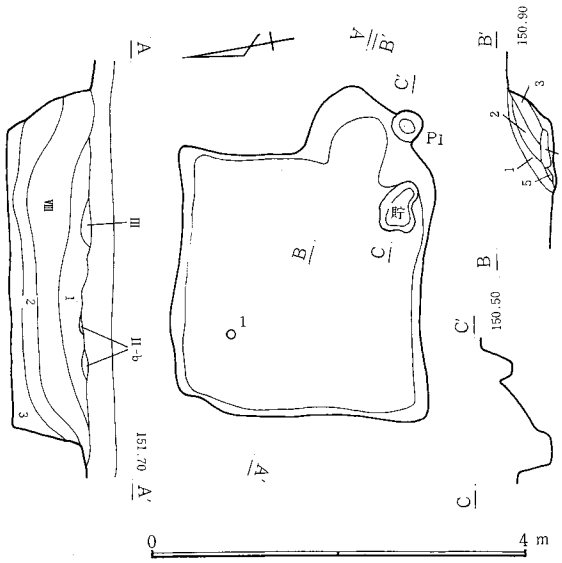


図－199　H－104号住居跡出土遺物（２）

H105号住居跡（図－200、201　図版－12、81　表－102）（XII期）

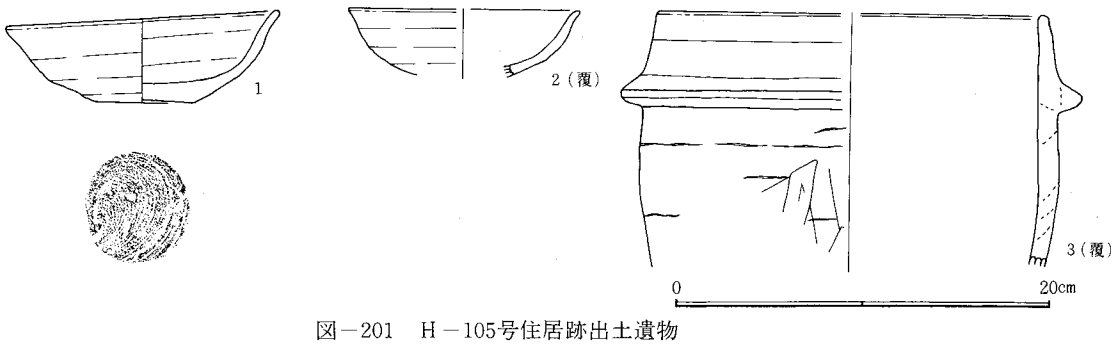
位置　調査区南西隅付近のQ101に所在。藤沢川に流れ込む西方の小河川と東側のD５辺りを谷頭とする低地に挟まれた狭い台地の頂点付近に立地する。付近は高燥の地として、本遺跡では縄文時代の住居跡の一大群集地になっている。　**形状**　南北2.4m、東西2.7m。床面縁辺で測るとほぼ2.4mの正方形にカマド北側の東壁のみ約30cm張り出した形を呈する。従って、カマド右袖部を構成する東壁は約30cm内側に入る。長軸方向N－12°－E、床面積6.5m²を測る。壁高は地層断面図から最高82cmを測る。　**床面**　全体に厚さ８～10cmの褐色土の貼床を施す。床面全体が固くしまる。　**ピット**　P_1、深さ31cm。性格不明。　**カマド**　主軸を住居北西隅方向に斜めにとる。全長約100cm、燃焼部長70cm、袖部幅54cm、煙道部（カマド先端）の壁への掘り込み角度43°を測る。焚口部底面は住居床面より５cm程低くしている。　**貯蔵穴**　南東隅。不整形、深さ30cm。　**遺物**　（１）は住居北西の床面。（２・３）は覆土中出土。　**テフラ**　床面から＋70～80cmの覆土中にB軽石純層。

（唐澤）



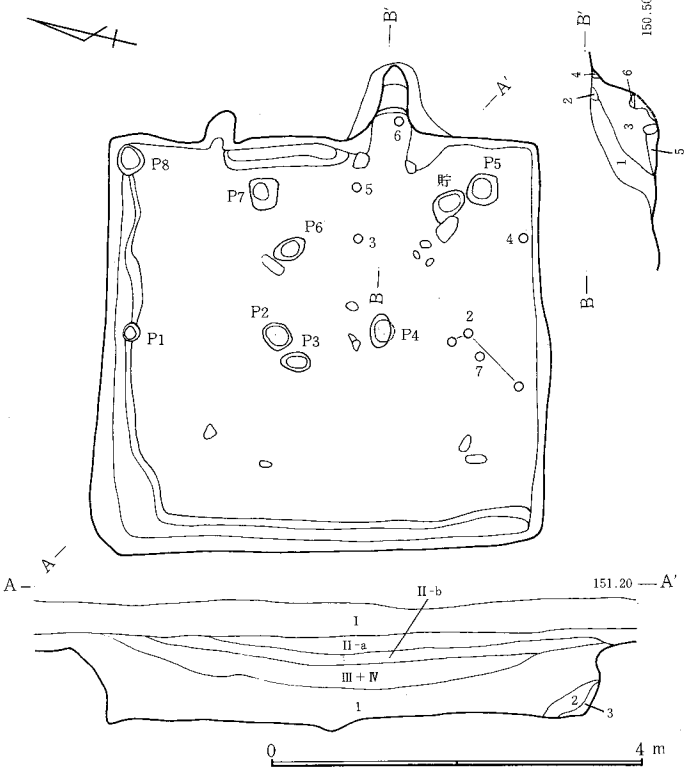
図－200　H－105号住居跡

1．黒色土。締っている。2．黒褐色土。FP・C軽石、ローム小ブロック混入。3．褐色土。多量のロームブロック混入。　**カマド**　1．茶褐色土。炭化物、FP・C軽石混入。2．灰褐色土。焼土粒、灰、炭化物混入。3．暗褐色土。ローム粒、灰、焼土、炭化物を含む。4．焼土塊。5．焼土塊。4より多少黒い。



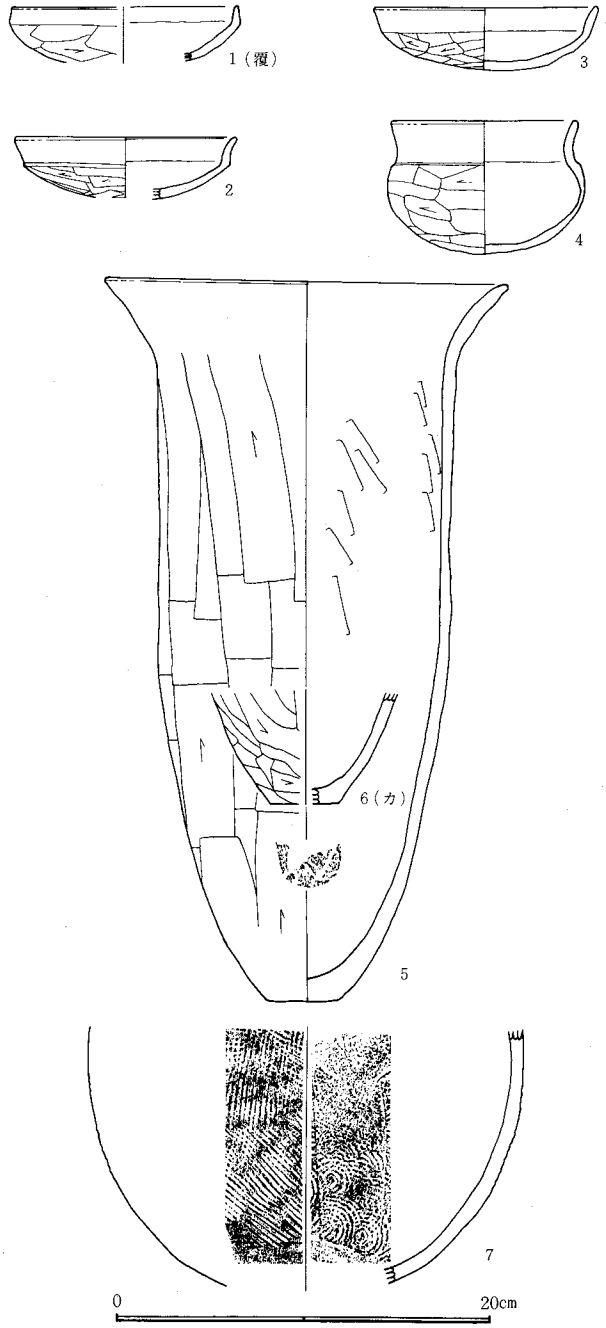
図－201　H－105号住居跡出土遺物

H106号住居跡（図—202、203　図版—13、81　表—103）（V期）



1．褐色土。FP・C軽石を含む。2．黒褐色土。ロームブロック、わずかな焼土混入。3．褐色土。炭化物少量混入。　カマド　1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．焼土。3．黒褐色土。FP・C少量混入。4．黒褐色土。焼土混入。5．黒褐色土。6．焼土。

図—202　H—106号住居跡

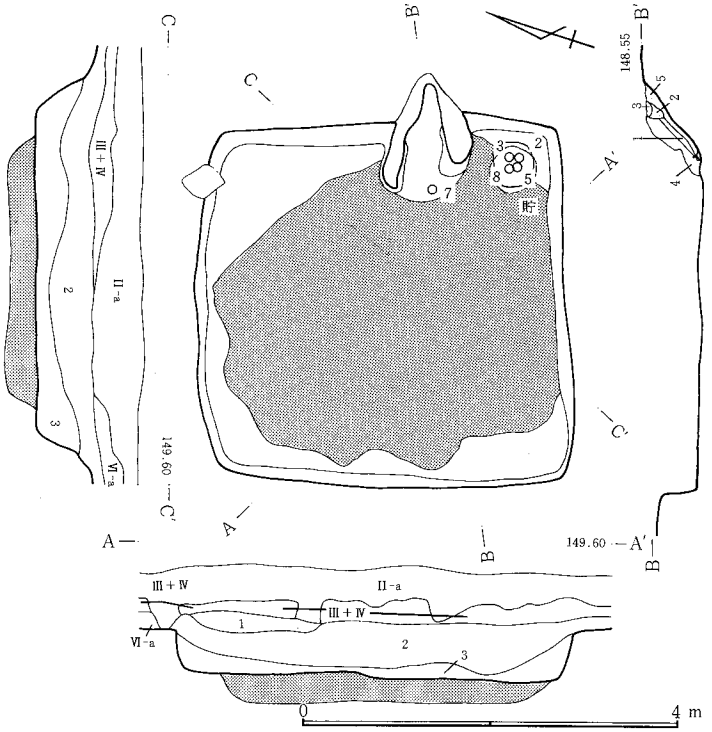


図—203　H—106号住居跡出土遺物

位置　西台地南西端部のQ101に所在する。本住居跡の南側約20mは、住居跡密集地域である。　**形状**　ほぼ正方形で、東西4.2m、南北4.5m、面積18.7m²である。長軸方向はN—13.5°—W、壁高は37～57cmである。北壁と西壁の全てに沿って、および、東壁のカマドより北の一部分に周溝がめぐらされている。幅は2～40cm、深さは1～10cmである。　**ピット**　住居跡東半部分に集中して、カマド焚き口を遠く取り巻くように、都合8個のピットが確認された。規模は17～35cm、深さは11～53cmで、ほぼ円形である。その他、カマドの北側東壁に接してピットが確認される。このピットとP_1P_8は壁に接し柱穴とも推定されるが、前記のピットについての性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄り。左右の袖端部にそれぞれ石1個が使用されている。全長は116cm、壁外掘り込み116cm、燃焼部分60cm、袖部内幅40cm、壁への掘り込み角度75°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差—9cmである。　**貯蔵穴**　南東隅。カマド右袖の手前に位置し小規模な方形で、36×24cm、深さ45cmである。　**遺物**　貯蔵穴西付近と中央部および、北西隅、南西隅に石が散在する。南壁中央部床面上＋10cmから土師器(2)と床面上5cmから須恵器甕(7)、床面上15cmから土師器小型甕(4)、またカマド焚き口手前から長胴甕(5)、土師器坏(3)等が出土。　**テフラ**　II—a層からはB軽石が、また床面から52cmに確認されるII—b層からは、B軽石純層が確認された。III＋IV、1層にはFP、C軽石の混入あり。　（白石）

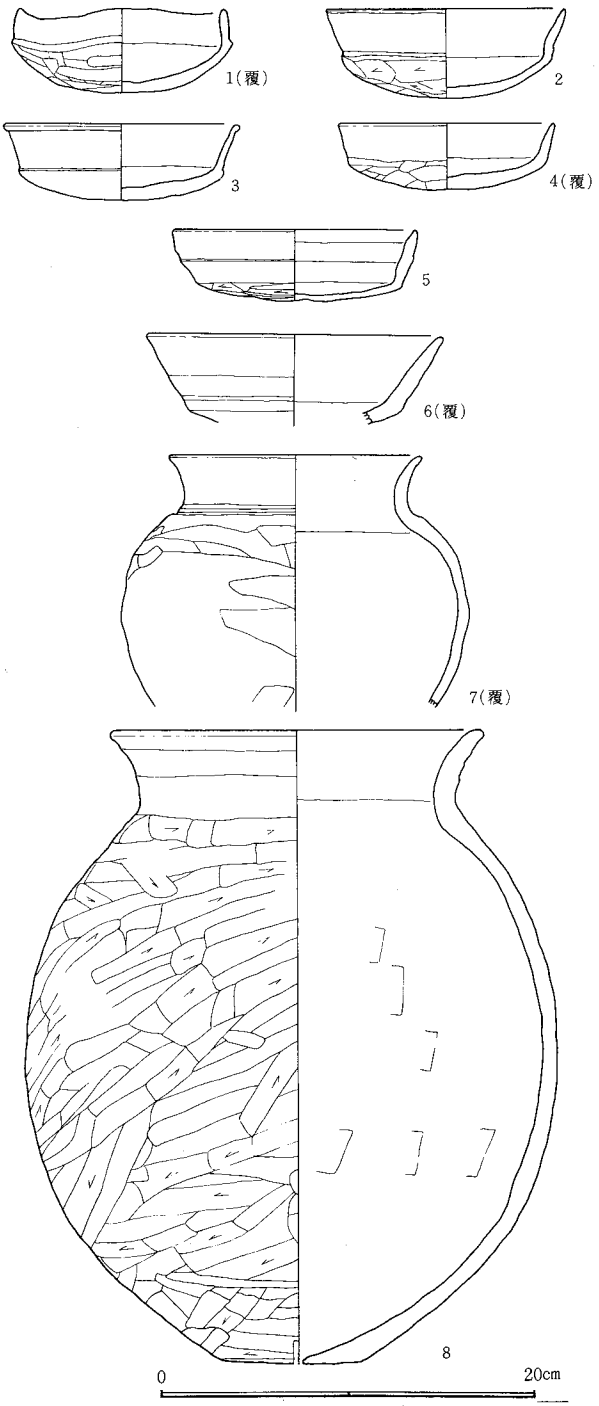
H107号住居跡（図—204、205　図版—13、82　表—104）（III期）

位置　西台地上のP102・103に所在する。調査区の南端にある密集する住居群の内の1軒である。北にH110号住居跡を臨む。　**形状**　平面は正方形で3.7×3.5m、面積12.9m²である。壁現高は42～82cmと深い。長軸方向はN—19°—Wである。　**床面**　踏み固め部分は不明である。貼床は壁際を除く全面に、深さ14～30cm前後掘り込まれた上になされている。　**ピット**　認められない。　**カマド**　東壁中央から南寄りにある。燃焼部を住居内にし、壁外を74cm掘っている。全長は128cm、袖部内幅36cm、燃焼部長90cmである。構築材として白色粘土を使用している。燃焼部と床面とは同じ高さで、壁への掘り込み角度は37°である。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面は長方形に近い隅丸方形である。大きさは48×42cm、深さ56cmである。　**遺物**　貯蔵穴内から土師器甕(8)、坏(2・3・5)、カマド付近から土師器小型甕(7)が出土している。　（中村）



1．黒褐色土。FP・C軽石、ローム小塊混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム小塊混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。 **カマド** 1．白色粘土と黒色土の混合土。少量のブロック状焼土混入。2．粘土と黒色土の混合。多量の焼土混入。3．焼土塊。4．粘土中にFP・C軽石。少量の焼土混入。5．焼土と粘土。

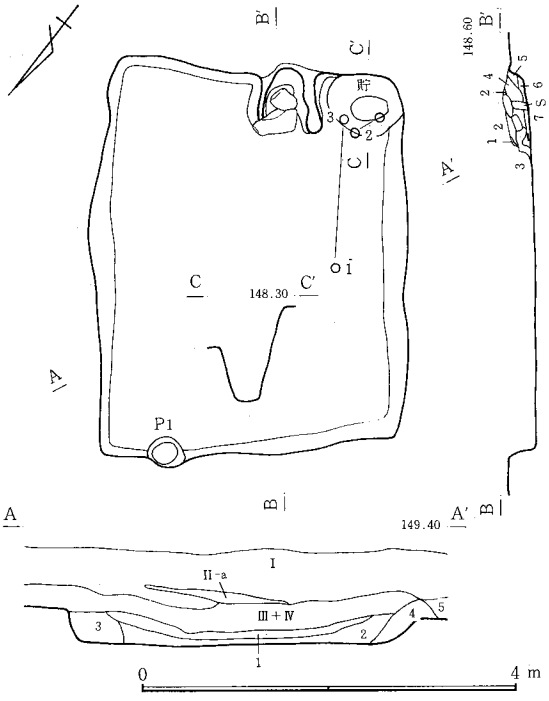
図－204　H－107号住居跡



図－205　H－107号住居跡出土遺物

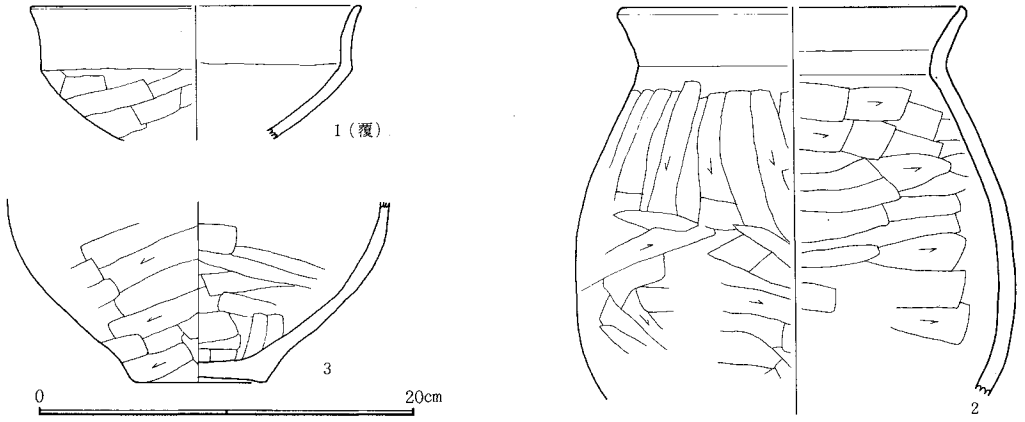
H108号住居跡（図－206、207　図版－13、82　表－105）（III期）

位置　調査区南西端のD103に位置する。台地の南西端で張り出しの上面にあたる。　**形状**　北西から南東に長軸をもつ長方形で、規模は北西から南東が3.8m、北東から南西が2.9mである。長軸方向はN—35.5°—Wで面積は10.9m²である。壁高は39～44cmである。長辺にも差があり、台形に近い形をしている。　**ピット**　規模は40×35cmで深さ12cm。北隅にあるが性格は不明である。　**カマド**　ほとんどが壁内に作られている。燃焼部の上に構築材が2石のこっている。また燃焼部には支石が1石のこっている。全長80cm、燃焼部長40cm、袖部内幅43cm、壁への掘り込み角度50°、壁外掘り込み20cmである。燃焼部と床面をくらべると若干高い。　**貯蔵穴**　南東隅。形状は楕円形である。規模は77×55cmで深さは56cmである。　**遺物**　貯蔵穴内より土師器甕（2・3）、が出土している。また埋土中より土師器坏(1)が出土。　**テフラ**　1・2層はFP軽石を多く含んでいる層である。　（井野）



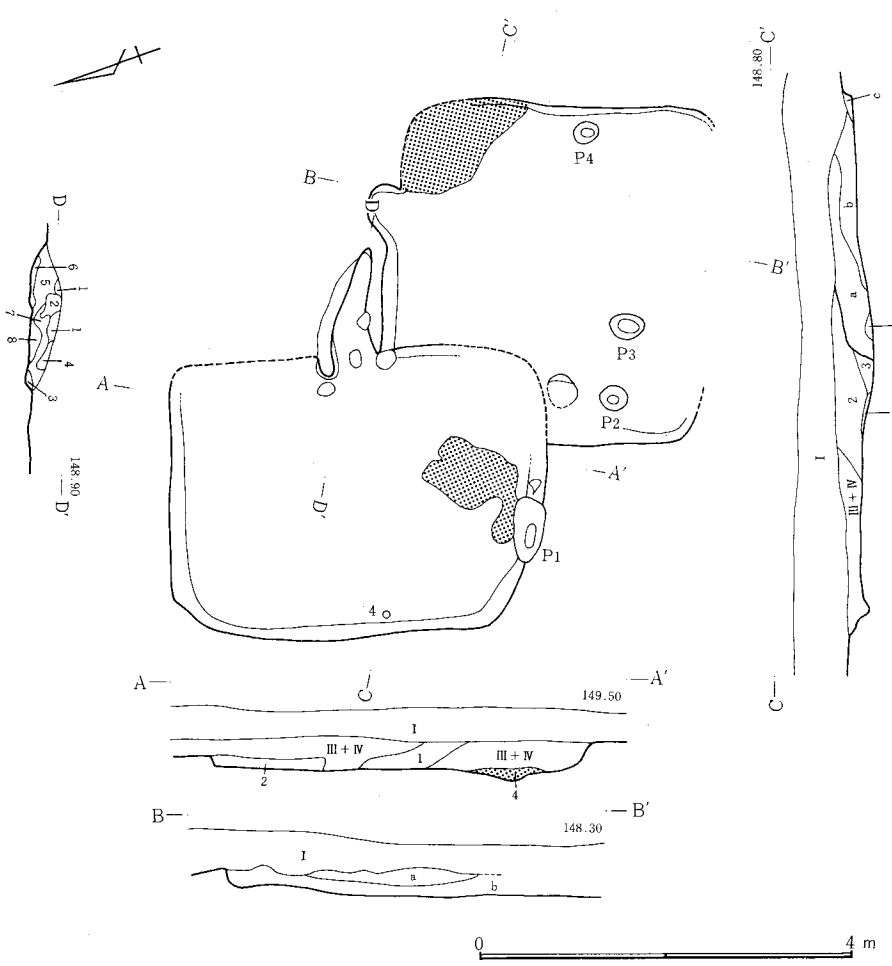
1．黄褐色土。締りあり。FP混入。2．褐色土。FP・(φ2cm)C、ロームブロック多量に混入。3．2よりローム質がさらに多い。4．黄褐色土。ロームブロック多量に混入。5．黒褐色土。C軽石、多量のローム混入。 **カマド** 1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．FP・C軽石。3．黒褐色土。C軽石混入。4．暗褐色土。ローム粒混入。5．暗褐色土。6．5に焼土粒点在。

図－206　H－108号住居跡



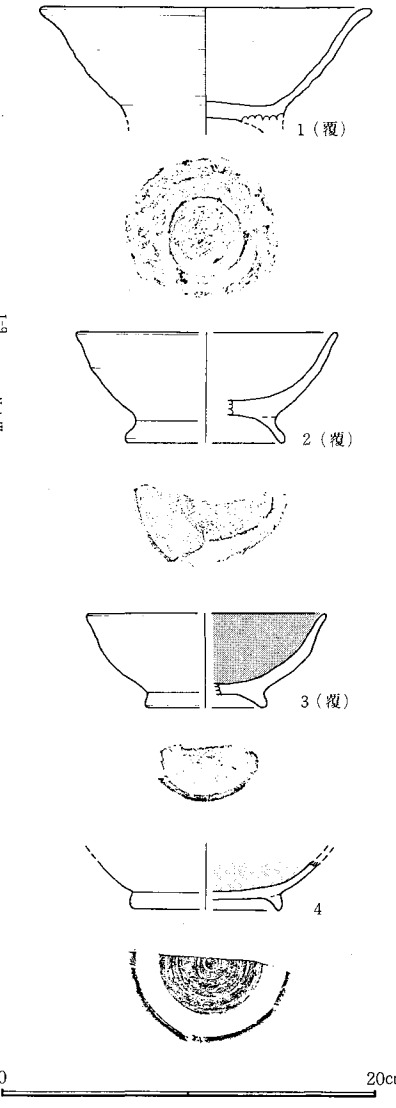
図－207　H－108号住居跡出土遺物

H109、110号住居跡（図—208、209　図版—13、82　表—106）（XIII、III期）



1．黒色土。FP・C軽石、ローム塊混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム塊混入。3．黒色土。FP・C軽石、焼土、一部炭化物混入。4．黒色土。非常に堅い。FP・C軽石、ローム塊、多量の焼土、炭化物混入。a．黒色土。FP・C軽石、一部ローム塊混入。b．黒色土。FP・C軽石混入。b-1．黒色土。ローム粒、一部炭化物混入。c．黒色土。C軽石混入。　**カマド**　1．ローム。焼土粒混入。2．にぶい赤褐色土。FP・C混入。3．黒褐色土。4．黄褐色土。ローム主体。5．黒色土。C軽石混入。6．黒褐色土。ローム混入。7．褐色土。C軽石、少量の焼土混入。8．赤褐色土。ローム、多量の焼土塊（φ10cm）混入。

図－208　H－109・110号住居跡



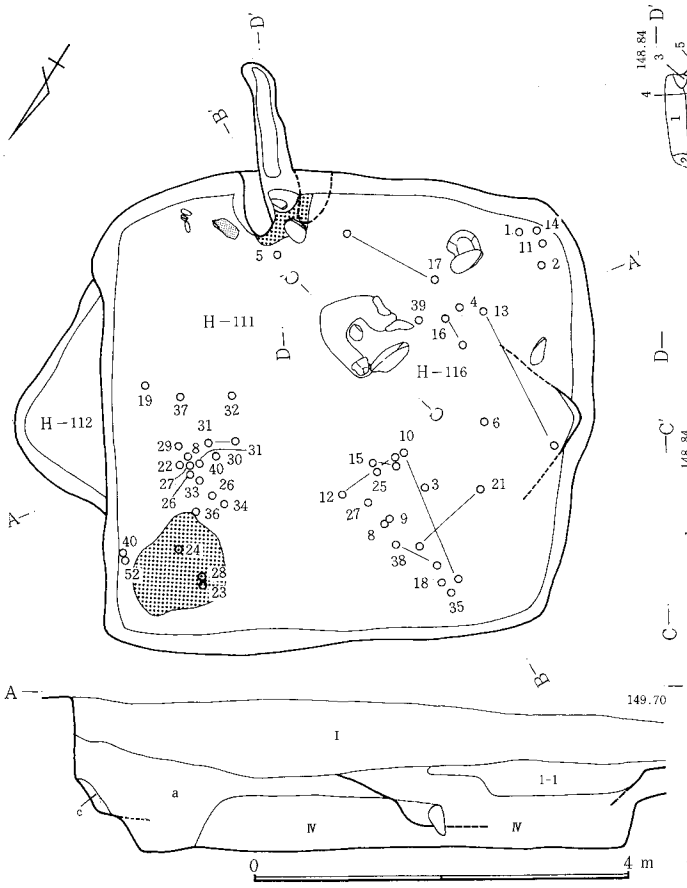
図－209　H－109号住居跡出土遺物

位置　調査区域の西台地南西端の住居跡密集地域、Q・P102に所在する。　**形状**　H－109の南東部分とH—110の北西隅部分が重複する。H—109は南北を長軸とする長方形で規模は推定東西2.8m、南北3.8m、面積10.9㎡である。長軸方向はN－36°—W、壁高は11cm～12cmである。H—110は南壁および北東部分、北西部が不明確である。推定される規模は、東西3.5m、南北約3.3mで面積は9.9㎡以上と思われる。長軸方向は、N—18.5°—E、壁高は4cm～12cmである。　**ピット**　H—109には南壁西寄りに楕円形のP_1、68×31cmがある。H—110には住居の南半部分に4個。ほぼ円形で規模は、$P_1$37×33×35cm、$P_2$27×27×11cm、$P_3$37×28×14cm、$P_4$25×22×11cmである。　**カマド**　H—109は東壁中央、左右の袖端部とカマドの内部右側、および燃焼部支石として石が使用されている。全長140cm、壁外掘り込み110cm、燃焼部長60cm、袖部内幅45cm、壁への掘り込み角度22°、住居床面とカマ

ド燃焼部のレベル差0である。H—109P$_1$の北側床面に広範囲（約70×200cm）の焼土跡が認められる。表面は非常に堅く、炭化物・白色粘土が混入し、下部層はＦＰ、Ｃ軽石を含む黒色土層である。性格等は不明。H—110のカマドは原形を止めていないが、北東隅に焼土跡があり床面下約10cmの焼け込みがあることから、この部分にカマドがあったものと推定される。　**貯蔵穴**　H—109、110ともに認められない。　**遺物**　［H—109］西壁中央部、床面上1cmの位置から灰釉陶器埦(4)、および覆土中から内黒埦(3)と須恵器埦が出土。［H—110］覆土中より土師器小片等の出土が認められただけである。　**重複関係**　H—109の東南隅部分とH—110の北西隅部分が重複する。重複する箇所に現存する壁はお互いに認められないが、H—109の埋土の東西横断面には、H—109の東南壁らしきものが確認される。またH—110の北西壁の上に、H—109のカマド右袖部分が一部現存することから、H—110よりH—109が新しい。　（白石）

H111、112、116号住居跡（図—210、211、212　図版—82、83　表—107、108）（IV、IV、不明期）

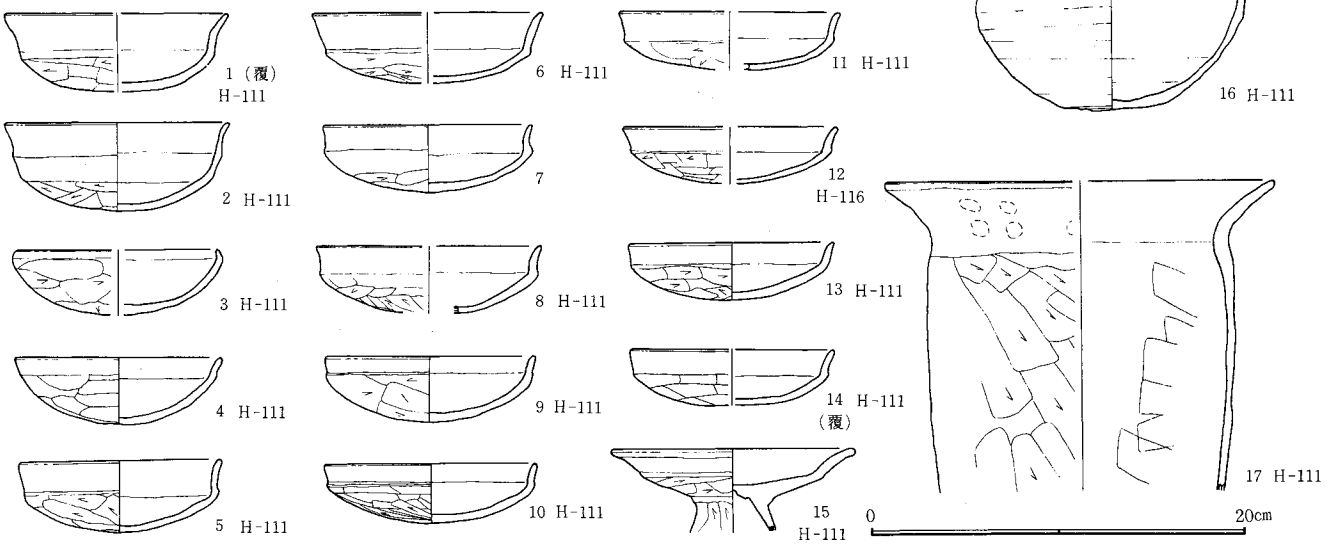
位置　P・Q102。藤沢川に流れ込む西方の小河川と東側のD5付近を谷頭とする低地に挟まれた狭い台地の高台に立地。この付近には縄文時代の住居跡が群集する。本住居跡を含む一群の中には、奈良・平安時代へと展開する本遺跡の古代集落の始源期のものが認められる。［H—111］　**形状**　南北4.8m、東西5.0m。北西隅を除く角は隅丸。床面積21.9m²。長軸方向N—55°—E。壁高は地層断面図から90cm前後。　**カマド**　南壁東寄り。住居壁面を燃焼部先端の立ち上がりとし、その手前に粘質土を寄せて構築。調査時には固く焼土化した左袖部のみが残存していた。また、そのすぐそばの床面上の焼石はカマドの構築材とも考えられる。煙道は住居床面から＋20cm以上の壁面を掘削してそれとしている。幅15～20cm、長さ188cm、深さは住居外の遺構検出面から—45（壁際）～—30（先端）cmを測る。



a．暗褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量のローム混。a-1．明褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、ローム混。b．明褐色土。多量の焼土、Ｃ軽石、ローム小塊混入。c．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量のローム粒・塊混。1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混。1-1．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム混。1-2．黒褐色土。Ｃ軽石混。2．暗褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム混。

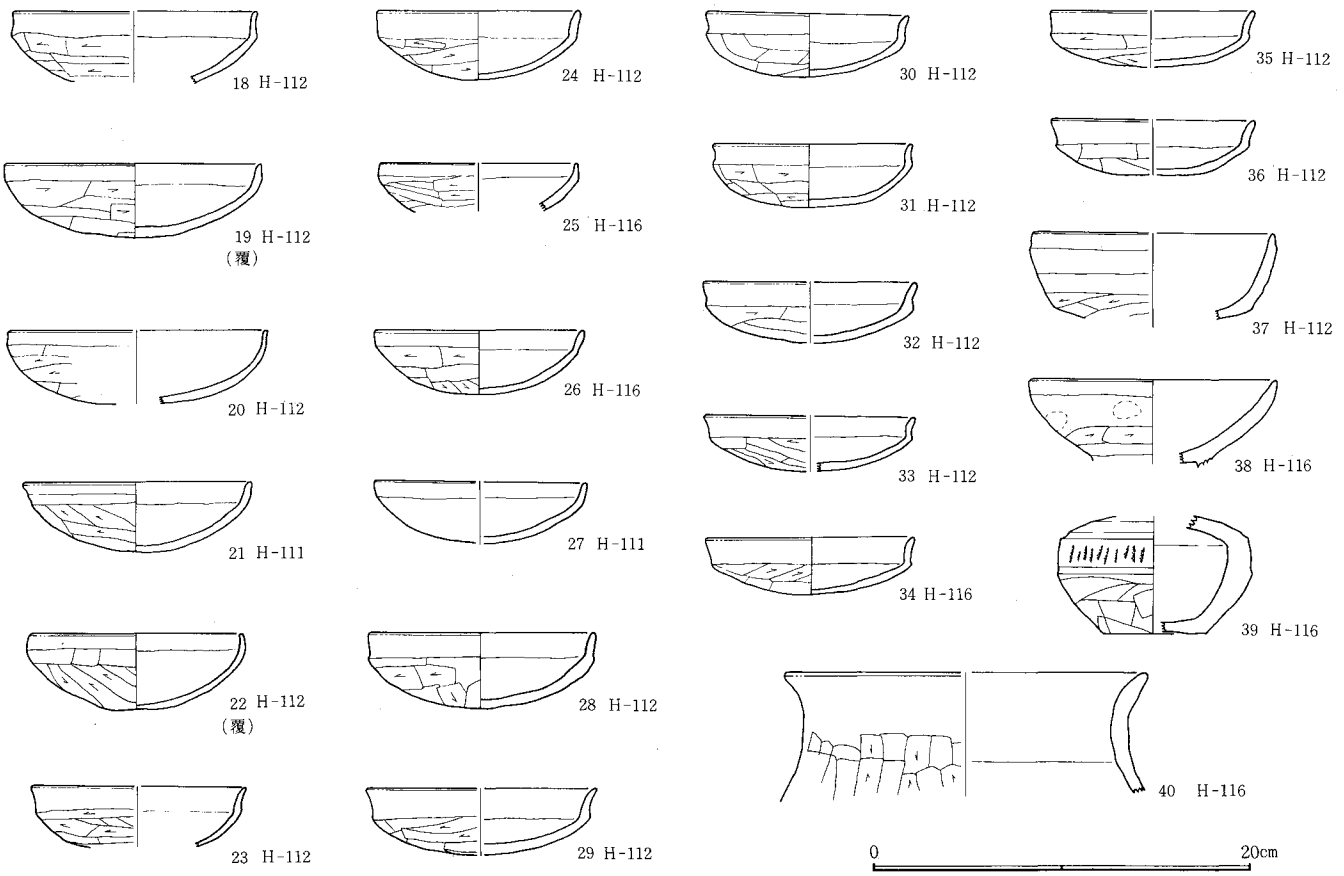
H111カマド　1．黒色土。ローム、焼土混。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混。3．黒色土。灰、焼土塊わずか混。4．黒色土・焼土、ローム混。5．赤褐色土。焼土多量混。6．焼土塊。7．焼土塊と灰の混合土。8．焼土塊。灰混。9．赤褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の焼土混。10．焼土。灰。11．焼土。12．黒色土。H116カマド　1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土。2．1より焼土多い。3．ローム主体。ＦＰ・Ｃを含む黒色土混。

図—210　H—111・112・116号住居跡



図—211　H—111・116号住居跡出土遺物

遺構検出面は同確認面より30cm程度掘り下げているため、煙道の天井部構造に関する資料は得られなかったが、煙道覆土中からも構築材とみられる粘土等は全く検出されなかった。燃焼部とみられる火床面はよく焼けており、この広がりから燃焼部長、袖部内幅とも50cm前後とみられる。 **重複関係** H－111の上にH－122が構築され、またH－122の覆土を掘削しH－116が構築されている。〔H－112〕 **形状** H－111の東壁にかかって北東隅の一部が検出された。壁高は地層断面図から40～50cm程とみられる。長軸方向N－0°－E、 **重複関係** 上記H－111を参照。［H－116］ **形状** H－111の覆土中にカマドが、また同住居跡の西壁を掘削して南西隅が検出。カマド火床面はH－111床面から＋20cmにある。住居は小型で東西2.2m前後、南北はH－111に掘削面が認められることから3m以内とみられる。 **カマド** ローム中心の褐色土を主体とし、両袖部、冠材、芯材及び支石に安山岩軽石使用。 **遺物** レベルの違いで三住居に分けられる。それはまた住居推定範囲に一致する。H－112は床面を北東隅のレベルとすると、H111の床面より＋36cm以上の遺物がH－112となり、H116のカマド断面レベルから、H－111の床面より＋16cm以上＋35cm以下のレベルのものをH－116出土の遺物とし、＋15cm以下のものと、H－112、116の住居推定範囲よりはずれるものをH－111の遺物とした。 （唐澤）

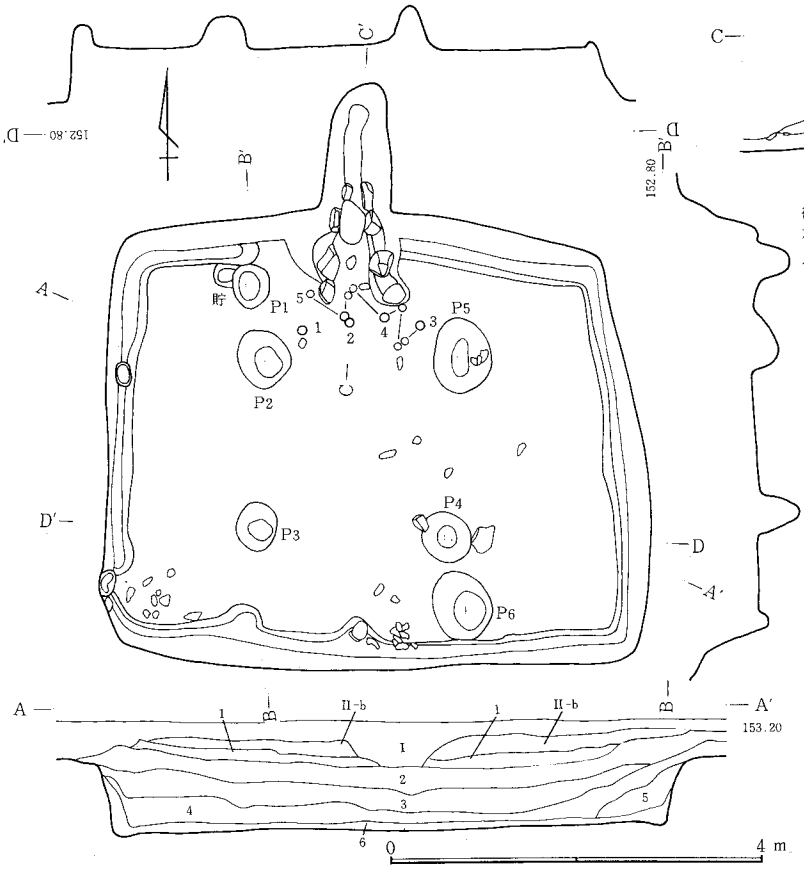


図－212 H－111・112・116号住居跡出土遺物

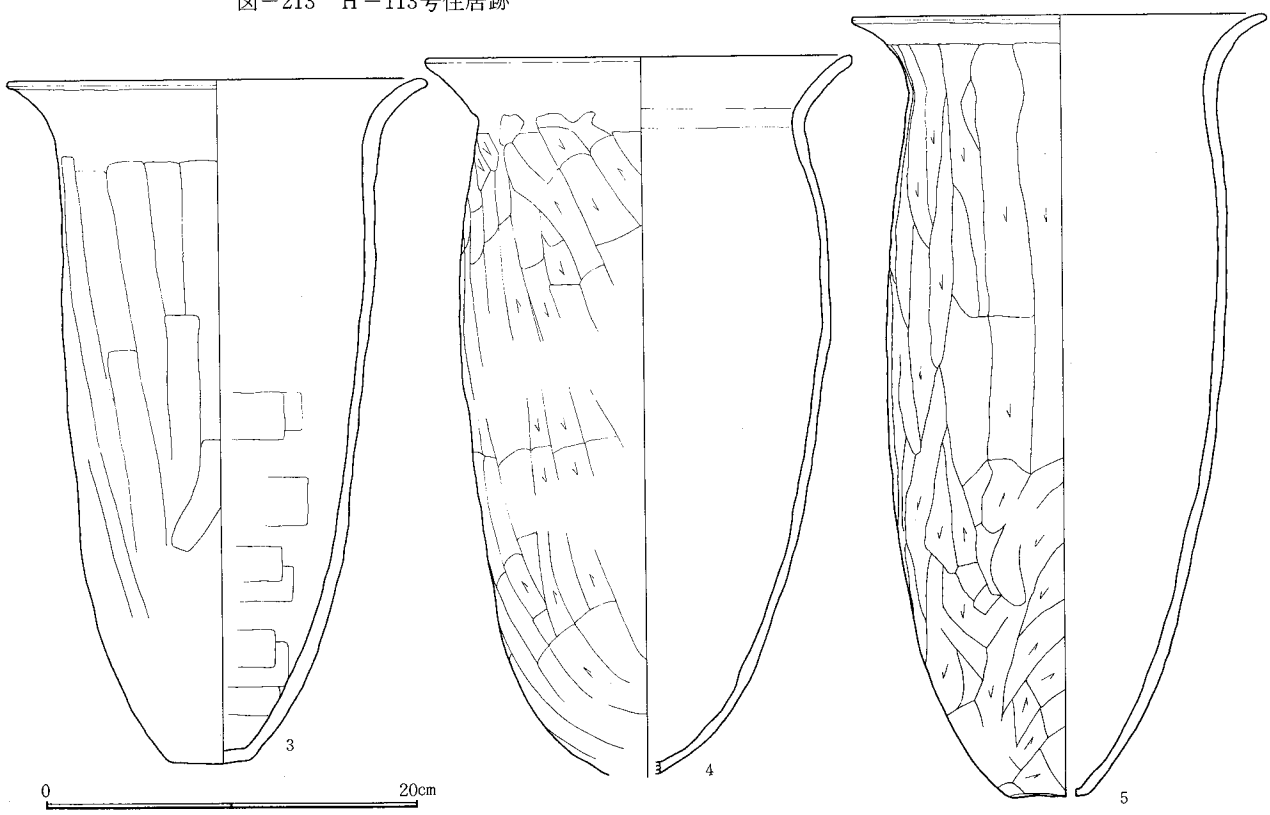
H113号住居跡（図—213、214 図版—13、83 表—109）（IV期）

位置 調査区域の南西部、南へゆるやかに傾斜するP2・3にまたがって所在する。 **形状** 南北4.5m、東西5.4mと他の住居と比べて東西に長い長方形の住居であり、カマドを北壁に構築しているのも特徴的である。面積は23.0m²。壁高は61～88cmである。周溝はカマド付近を除き幅7～28cm、深さ7～13cmの周溝が全周している。住居の長軸方向はN－88°－Eである。住居の壁は垂直に掘られ、住居の隅も直角に作られている。床面は全面貼り床。床面下部に、黒色土に褐色土又はロームブロックを混土し10～20cmほど貼り、上部に1cm程黒色土を貼り床面を構築していた。 **ピット** 住居内には6個のピットが確認できた。6個の内4個はロの字形に並び（P_1～P_4）柱穴である。他はカマドの左前に1個（貯蔵穴）と、南壁下中央部に1個（P_6）検出された。

カマド 北壁中央部に自然石を用ちい、 カマドの両袖に4石ずつと、 天井部に大石1石、カマド内に1個の支石を持つ全長240cmのカマドが認められた。燃焼部分60cm、袖部内幅37cm、壁外への掘り込み160cmと、幅、長さの割合が細長いカマドである。カマドの壁への掘り込み角度21°、燃焼部の床面とのレベル差は18cm程高くなっていた。 **貯蔵穴** 北壁の西側部分のカマドに向って左前に44×40cm深さ32cmで円形の貯蔵穴が存在した。貯蔵穴は他の住居での位置的関係からみれば右前に多く、この左前の貯蔵穴の位置は特徴的である。 **遺物** 遺物はカマド前に集中して出土した。土師器の坏(1)、土師器の長甕(2～5)がカマド前より出土し、皆床面に密着しての出土であった。また、住居内に広く土器、焼石・小石等が散在していた。 （江原）



図－213　H－113号住居跡



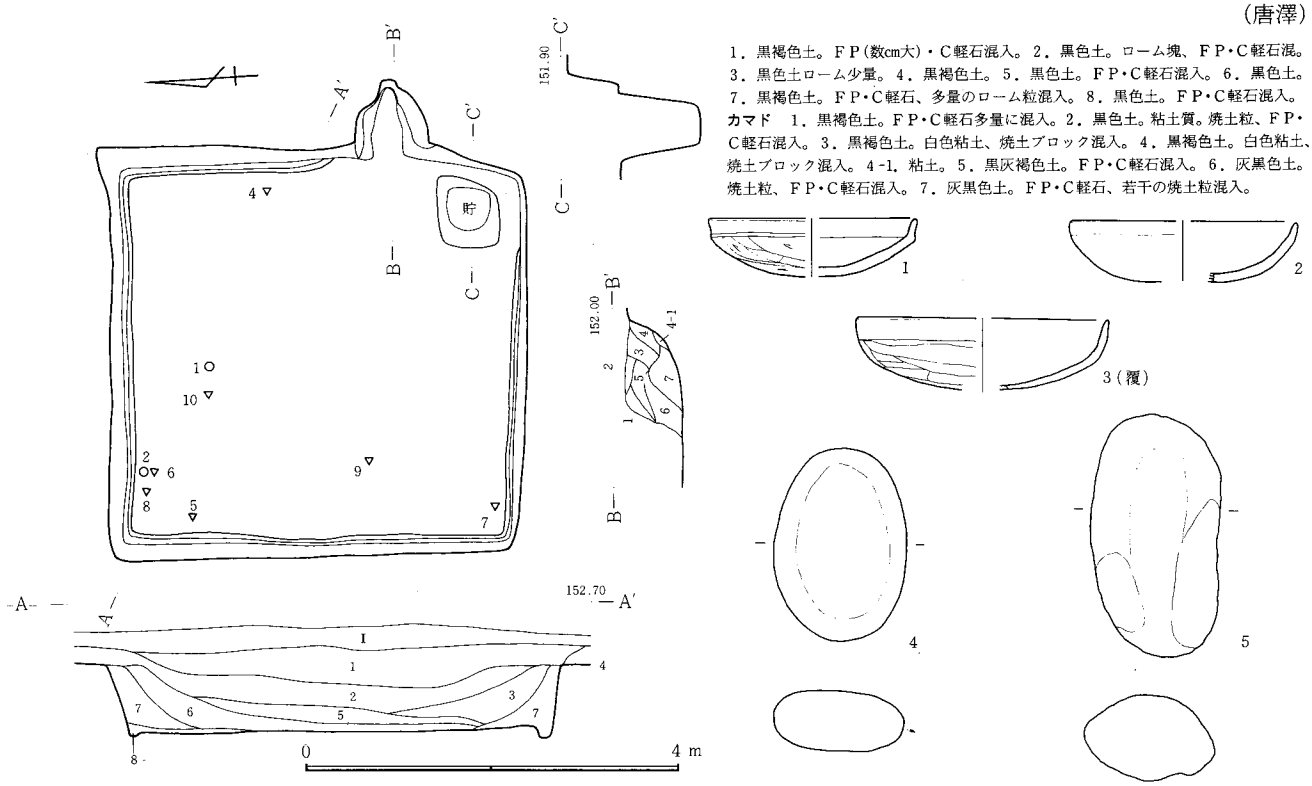
図－214　H－113号住居跡出土遺物

H114号住居跡（図－215、216　図版－13、83　表－110）（V期）

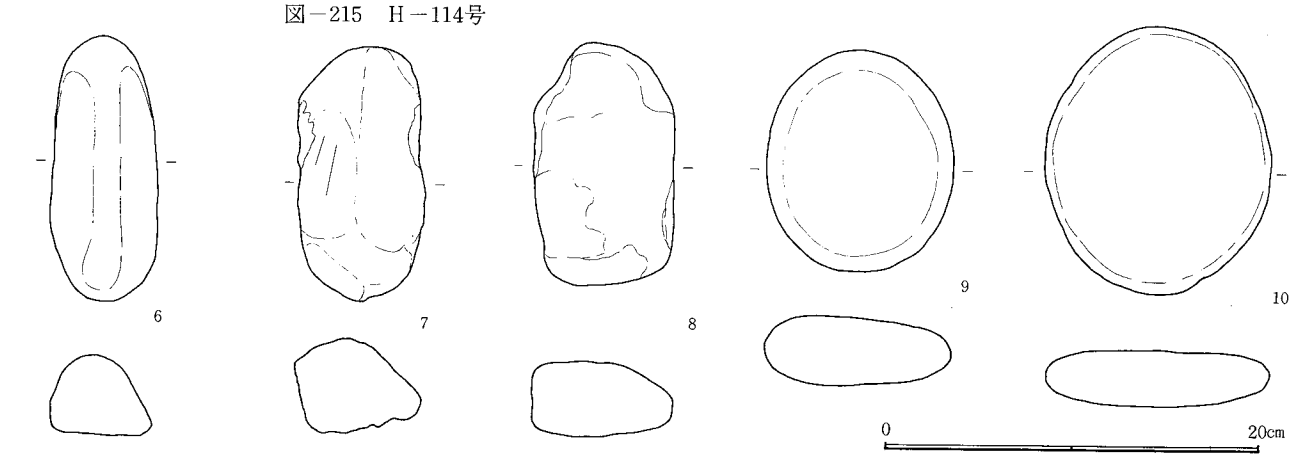
位置　西台地の西を区切る小河川とD5付近を谷頭とする低地に狭まれた高台のN2に立地。P101・1付近を広場状に取り囲む住居跡群の中の一つ。　**形状**　確認面で南北4.1m、東西4.1mのほぼ正方形。東壁は西壁より北端で30cm長く、南壁は北壁より東端で約40cm短い。すなわち南東隅の一点が整然とした正方形を崩す。壁はいずれも整然とした直線で、崩落が少ない。長軸方向N－1°－E、床面積16.8㎡。壁高は概して高く、東西壁で70cm前後(地層断面による)。　**床面**　床全体にロームブロックと黒

色土混土の貼り床。西壁から東壁方向に除々に厚くなる。厚さ3(西)～20cm(東)　**カマド**　。掘り形の内側に白色粘土を巻いて構築。掘り形の壁外掘り込みは検出面で82cm。火床面は東壁線辺りから緩かに高くなり、燃焼部先端で20cm上昇する。これから考えて焚口は東壁より更に内側に入っていたものとみられる。なお、東壁線内側のカマド部分は上記貼床が続く。　**貯蔵穴**　深さ85cm。　**遺物**　図示した土器と礫は混在して床面又は同直上で出土。覆土中より遺物(4～8)類似の自然礫と土師小片出土。

(唐澤)

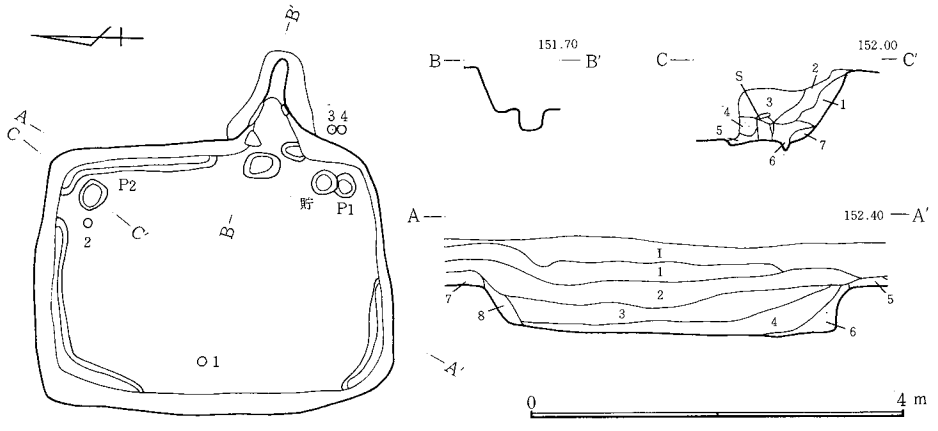


図－215　H－114号



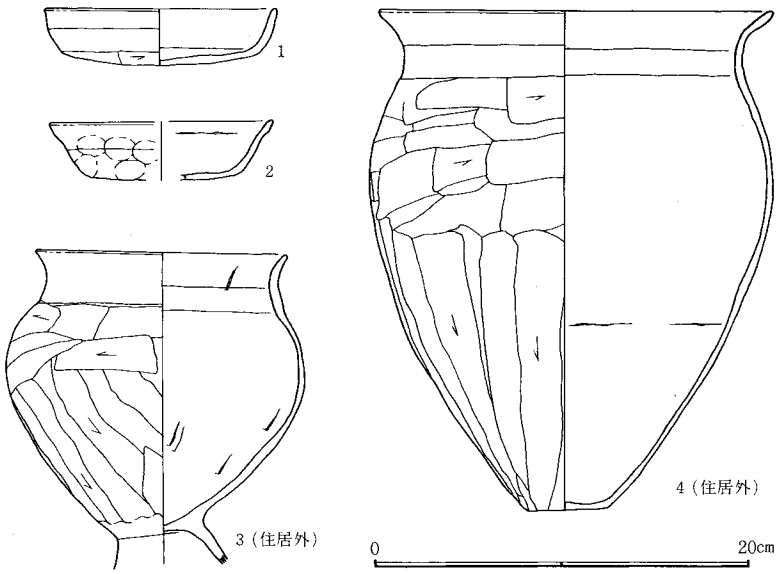
図－216　H－114号住居跡出土遺物

H115号住居跡(図－217、218　図版－13、84　表－111)



図－217　H－115号住居跡

位置　調査区南西のＮ２に所在し、台地南端に近い。　**形状**　南北に長軸をもつ隅丸方形で、南北3.5m、東西2.5mである。長軸方向はＮ－３°－Ｗ、面積は8.6㎡、壁高44～52cmである。周溝は東壁北２分の１と、北壁のほとんど、西壁の北３分の１、南壁の西側２分の１にめぐる。幅は４～７cmで深さ２～４cmである。　**ピット**　床面に２カ所(P_1、P_2)。２つとも柱穴と考えられる。P_1は23×21cmで深さ19cm。P_2は33×26cmで深さ20cmである。　**カマド**　東壁南より。付随する構築材が４石残存している。全長103cm、袖部内幅23cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度58°で、壁外掘り込みは103cmである。床面と火床面はほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東隅。円形で規模は26×25cm、深さは14cm。　**遺物**　西壁中央部近くの床面より土師器坏(1)が出土、P_2西の床面より土師器坏(2)が出土している。また住居外ではあるが、カマド火床南20cmの地点より土師器台付甕(3)と土師器甕(4)が出土している。出土状況からみて住居に関係のある遺物と考えられる。　**テフラ**　１～４層にＦＰとＣ軽石が混入している。　(井野)



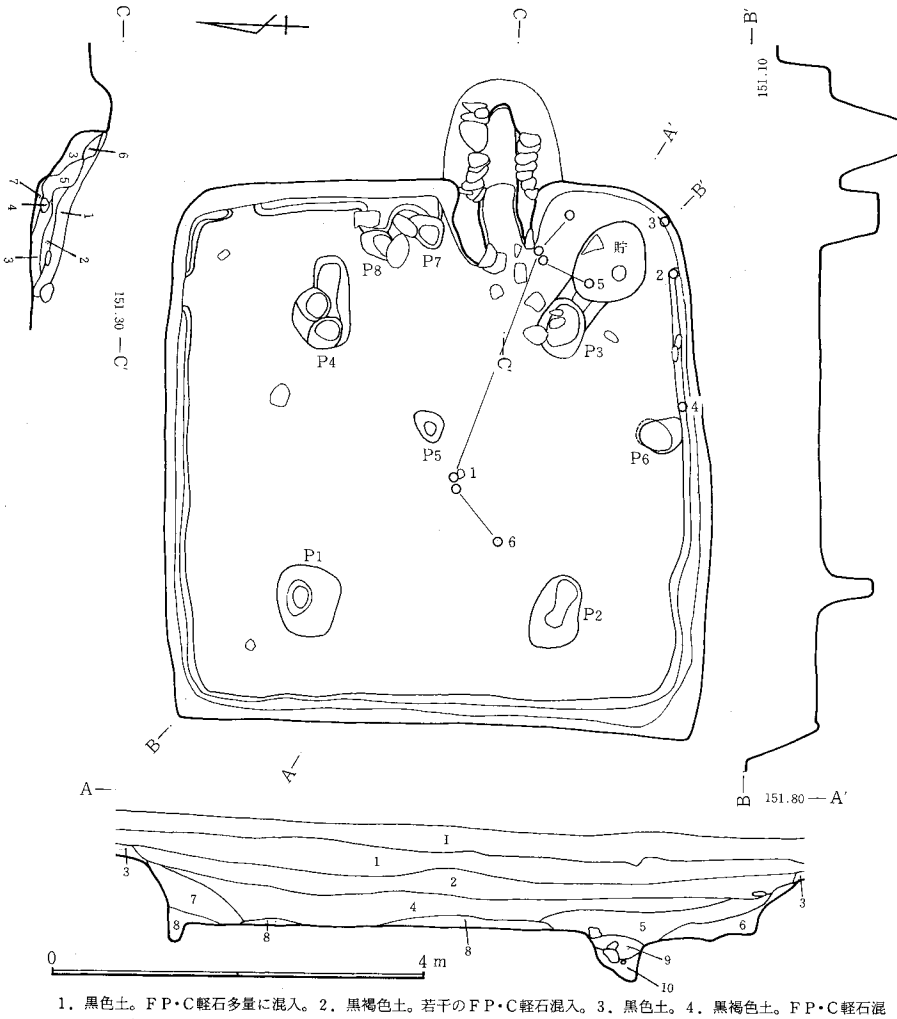
図－218　Ｈ－115号住居跡出土遺物

Ｈ117号住居跡（図－219、220　図版－13、84　表－112）(III期)

位置　Ｄ５付近を谷頭とする東側の低地にかかる傾斜面の最頂部、Ｍ１に立地。Ｐ101・１辺りを広場状に囲む住居跡群の東端を構成する。

形状　南北5.6m、東西5.5mを測るほぼ正方形の住居跡。しかし、南東隅の位置は、純粋な四角形に比べると東側と北側に約50cmずつずれている。これは北東隅を鈍角にし、かつ南壁東半を内側に寄せているためである。長軸方向Ｎ－３°－Ｗ、床面積29.9㎡。壁高は地層断面から西壁で70cm、周溝は幅15～20cm、深さ５～20cm程度。　**床面**　全面に貼床を施す。床面掘り形は蒲鉾形を成し、中央部の貼床の厚さ５～８cm、壁際沿いは幅0.9～1.7mで厚さ20～25cmに貼る。貼床は黒色土を主体。東壁寄りでは焼土を多く混ぜる。　**ピット**　P_1、P_2、P_3、P_4は主柱穴。床面からの深さは$P_1$57cm、$P_2$56cm、$P_3$51cm、P_4東74cm、西56cm。P_2、P_4は建て替えが認められるが、柱穴底部の位置、及び底部の深さから、P_2、P_4とも西側部分が当初のものとみられる。柱穴間の距離は底部の中心で、P_1～P_2間2.7m、P_3～P_4間2.5m、P_1～P_4間2.9m、P_2～P_3間3.2m。P_6は出入口施設に伴うものとみられ、壁方向に傾く。深さ24cm。P_7、P_8は一対のものか。深さ16～17cm。P_5、深さ６cm。

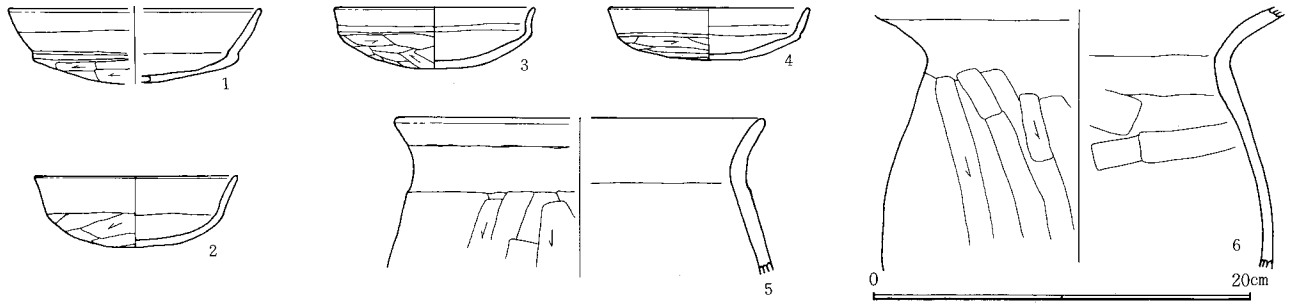
カマド　全体に白色粘土を使用するが、煙道部と袖部に石材を用いる。



1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石多量に混入。2．黒褐色土。若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。3．黒色土。4．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。5．黒褐色土。ロームブロック、炭化物、焼土混入。6．黒褐色土。焼土、多量の炭化物、焼土混入。7．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量のローム混入。8．黒色土。ＦＰ、ローム粒、ロームブロック混入。9．灰褐色土。若干の炭化物、ロームブロック混入。10．灰褐色土。多量のローム混入。　**カマド**　1．灰黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土粒混入。2．赤味がかった灰白色土。炭化物、ローム混入。3．赤灰色土。多量の焼土、ローム混入。4．焼けた白色粘土。5．白色粘土。黒色土混入。6．赤味がかった灰白色土。7．焼土。

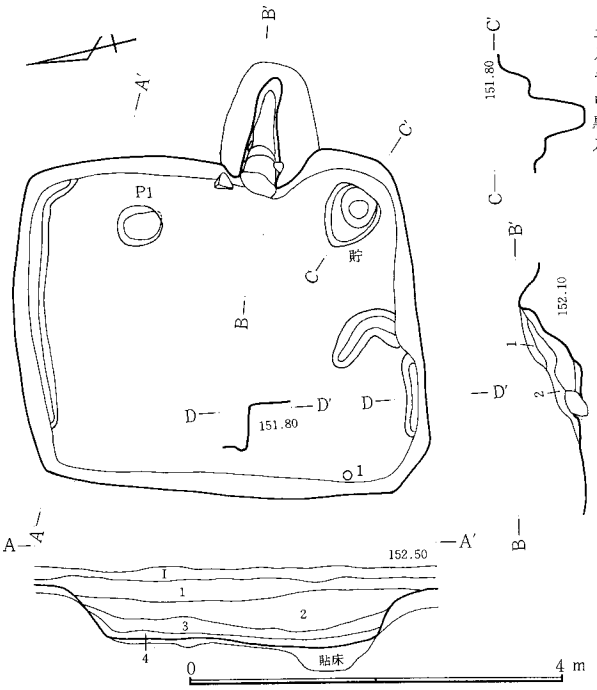
図－219　Ｈ－117号住居跡

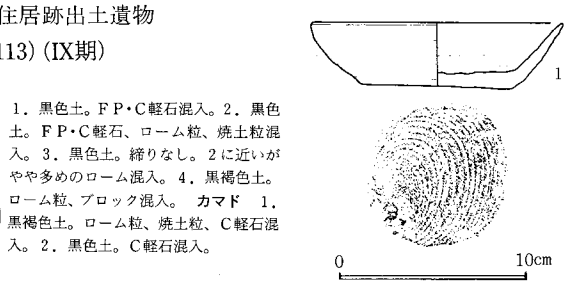
前者では自然石を小口積みにし(現状で１段残存)、後者では立てている。煙道は東壁線から始まり、先端に向かって徐々に高くなる。　**貯蔵穴**　深は97cm。　**遺物**　(１)床面から＋16cm前後。(２・４)床面上。(３)床面直上。(５)＋11～34cm。(６)＋15cm。貯蔵穴内覆土中及び、カマド手前付近で多量の石材出土。床面～＋30cm前後。　(唐澤)



図－220　Ｈ－117号住居跡出土遺物

Ｈ118号住居跡（図―221、222　図版―14、84　表―113）(IX期)



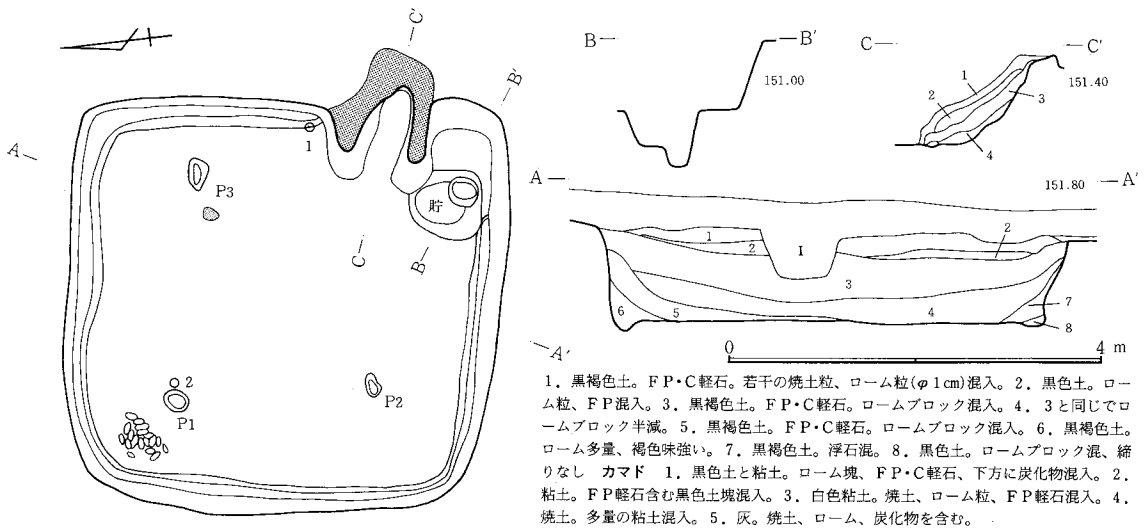


図－222　Ｈ－118号住居跡出土遺物

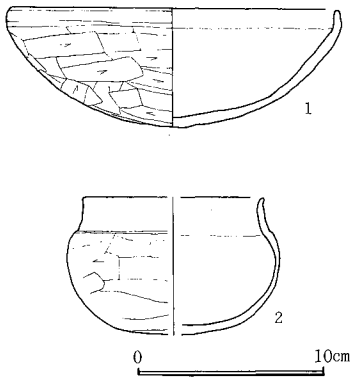
図－221　Ｈ－118号住居跡

位置　Ｄ５付近を谷頭とする低地の傾斜面上端のＭ２に所在。Ｐ101・１付近を広場状に囲む住居跡群の東端を構成。**形状**　南北3.9m、東西3.1mを測る隅丸の平行四辺形。長軸方向Ｎ―13°―Ｅ、床面積12.7m²。壁高は西壁地層断面で最高68cm、周溝は北壁と南壁西半で確認。幅15～20cm、深さ３～７cm。　**床面**　ほぼ全面に貼床を施すが、南壁側と東壁側は10～25cmと厚くする。他は５cm前後。貼床は黒色土とロームの混土。なお、南壁下中央の周溝上の細溝は貼床の掘り過ぎか。　**ピット**　深さ25cm。貯蔵穴的なものか。　**カマド**　燃焼部先端を東壁線より30cm前後外側に置く。煙道は燃焼部先端を上がってやや平坦な面に出、更に直に立ち上げている。焚口部は、ほぼ東壁線に合わせ、そこから焚口部の冠材（安山岩亜角礫）が落下した状態で出土した。燃焼部内面にも石材残存（左袖部床面上の偏平石も燃焼部のものか）。検出面で全長120cm、燃焼部長50cm、焚口部幅45cm前後。　**貯蔵穴**　二段築成。一段目、床面より―11cm。底部、同―53cm。　**遺物**　須恵器坏(１)床面出土。　(唐澤)

Ｈ119号住居跡（図―223、224　図版―14、84　表―114）(Ｖ期)



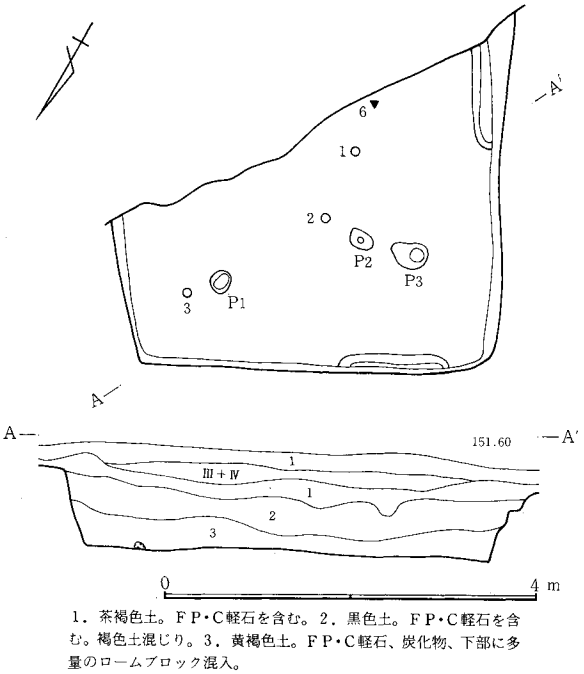
図－223　Ｈ－119号住居跡



図－224　H－119号住居跡出土遺物

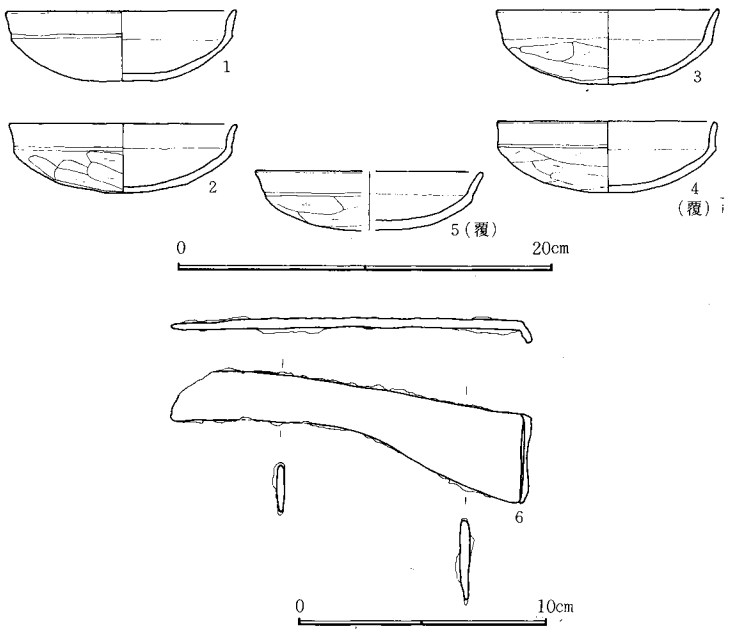
位置　西台地の南西端に近い、ＮＩにある。　**形状**　南北方向にやや長い軸をもつ正方形で、北東隅を除き隅丸である。南北4.3m、東西4.1mを測り、長軸方向Ｎ－11°－Ｅ、面積は16、9㎡である。壁の形状は、ほぼ直線に近く、壁高55～102cmである。特に、北壁と東壁は、直に掘り込まれている。周溝は、カマド部分および貯蔵穴の周辺を除いて、ほぼ全周に認められる。規模は、幅10～28cm、深さ５～25cmである。特に、東壁のカマド以北と、北壁の東側２分の１に接する周溝は、幅が広く、北東隅は深くなっている。　**ピット**　３個確認されている。P_1を中心にP_2、P_3を結ぶ軸線は、約80度で交わる。各ピットとも不整形で、深さも13～17cmと浅く、柱穴とするにはやや難がある。　**カマド**　東壁南寄りに白色粘土で構築されている。全長143cm、燃焼部長40cm、袖部内幅30cmを測る。壁外への掘り込み長80cmで、掘り込み角度は49度である。両袖とも50～60cm住居内に張り出し、焚口付近には灰が堆積していた。なお、カマドより1.5m離れた地点より焼石が１個出土している。　**貯蔵穴**　南東隅やや西寄りにあり、浅い円形の穴の隅がより深く掘り込まれている。長軸80cm短軸70cm深さ60cmである。　**遺物**　北西隅に、長さ10数cmの細長い河原石が19個図のように配されていた。カマド左袖北側より土師器坏(1)が、配石の前より土師器短頸壺(2)がそれぞれ出土している。　（川崎）

Ｈ120号住居跡（図－225、226　図版－14、84　表－115）（Ⅳ期）



1．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石を含む。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石を含む。褐色土混じり。3．黄褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、炭化物、下部に多量のロームブロック混入。

図－225　Ｈ－120号住居跡



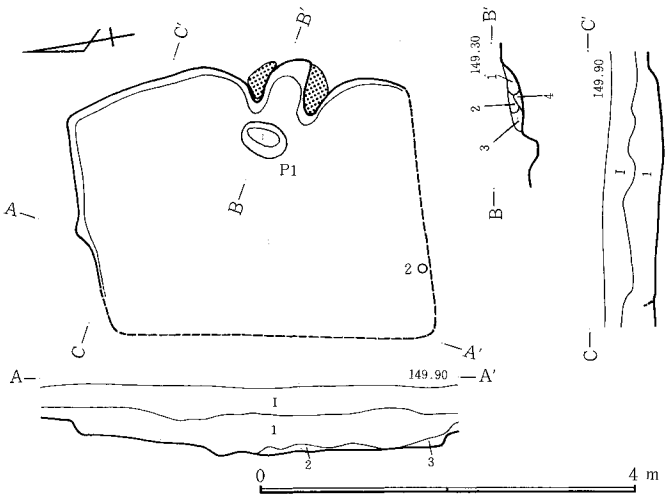
図－226　Ｈ－120号住居跡出土遺物

位置　西台地の南部、南へゆるやかに傾斜するＬ２に所在する。　**形状**　住居跡は東側を旧道が通り３m程深く道路がえぐれているため、規模、形等は不明であるが、南北3.6m以上、東西4.2mの方形の住居と考えられる。面積は現状では9.5㎡であるが、15.1㎡以上の住居であったと考えられる。壁高は60～80cmで、西壁下の一部と北壁下の一部に幅４～13cm、深さ３～４cmの周溝を残す。長軸方向は東壁にカマドが存在し、南北に長い長方形の住居であると仮定した場合Ｎ－30°－Ｗと考えられる。床面は10～30cm程の厚さに貼り床を床面全体にほどこしていた。　**ピット**　小さいピットが３個程認められた。　**カマド**　道路で東側部分が破壊されているためカマド等の施設は確認されなかった。　**貯蔵穴**　貯蔵穴についてもカマド同様確認されなかった。　**遺物**　土師器の坏(1)～(5)と鉄製品鎌(6)が出土している。　（江原）

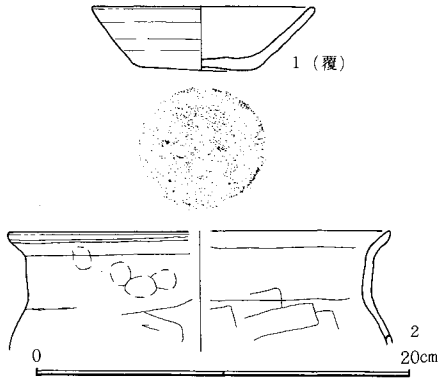
Ｈ121号住居跡（図－227、228　図版－14、84　表－116）（Ｘ期）

位置　西台地の南端中央部に位置し、南へゆるやかに傾斜するＬ101・102に所在する。付近は土師器使用の住居跡が集まり大集落をなしている。　**形状**　南北約3.6m、東西約2.5mの長方形の住居である。面積約9.3㎡である。壁高は10～22cmと低く、耕作により削平されたものと考えられる。住居の長軸方向はＮ－11°－Ｅで、周溝は確認できなかった。床面は黒色土中に住居の床面を構築している関係から、住居内を踏み固め床面としており、貼り床等の構造はみとめられなかった。　**ピット**　ピットはカマドの前に57×34cm、深さ11cmのピットが１つあったが、灰かき穴と考えられ、他には住居中にはピットは認められなかった。

カマド　東壁南寄り。全長82cm、燃焼部分長30cm、袖部内幅45cm。壁外掘り込み50cm。壁への掘り込み角度は27°。住居の床面とのレベル差は、７cmカマド燃焼部分の方が高い位置にあった。　**遺物**　遺物は埋土中より土師質須恵器の坏(1)が出土し、また南壁下より土師器甕(2)が出土している。　**テフラ**　住居を埋めている第１層にＦＰ、Ｃ軽石の混入がみられた。　（江原）

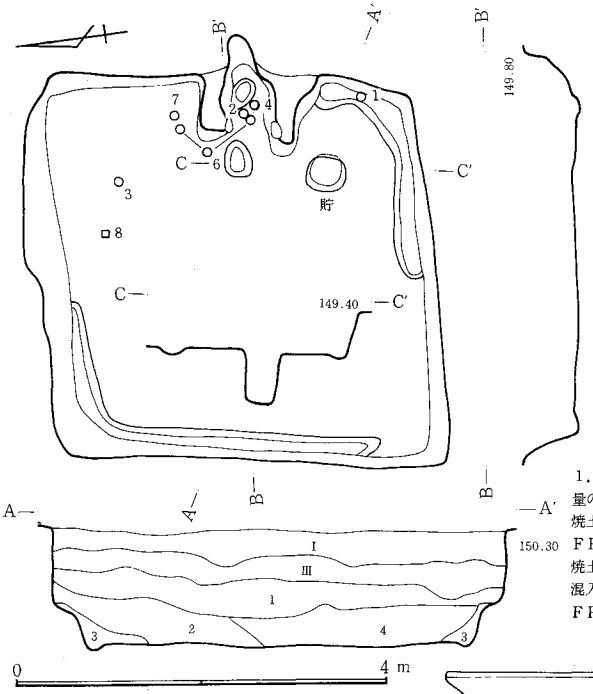


図－227　H－121号住居跡

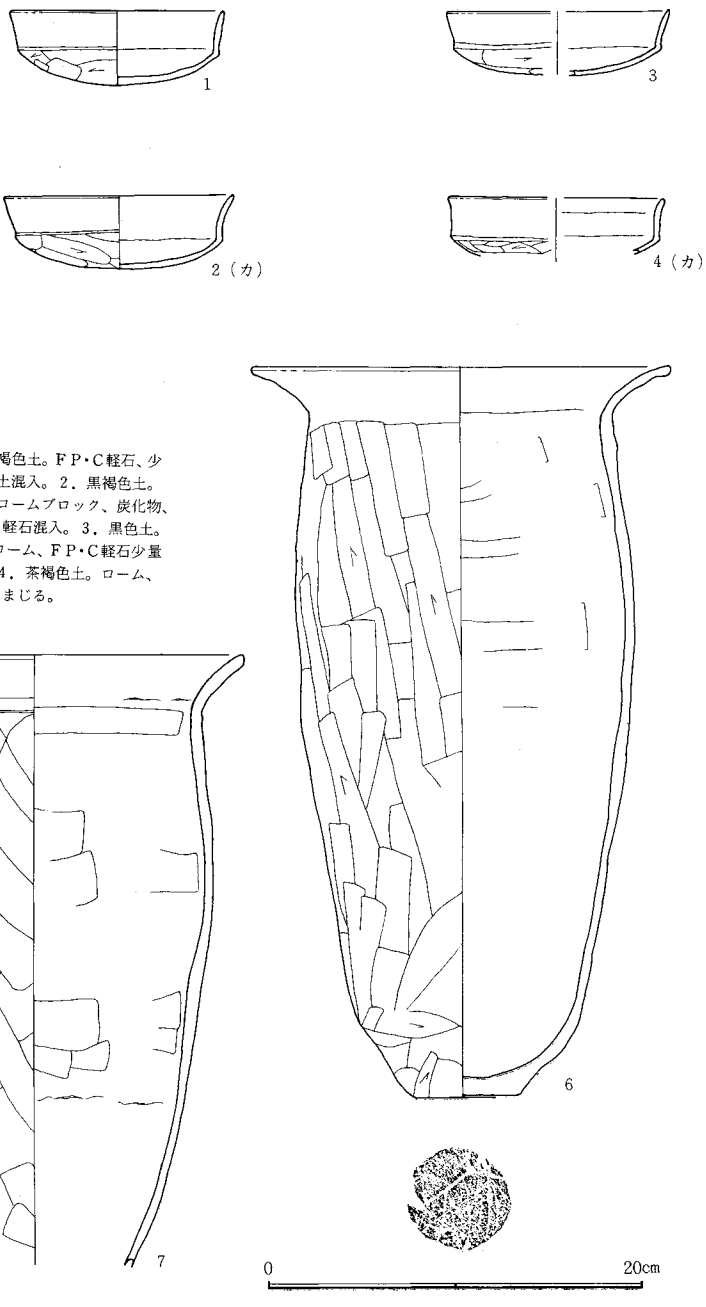


図－228　H－121号住居跡出土遺物

H122号住居跡（図－229、230　図版－14、85　表－117）（III期）



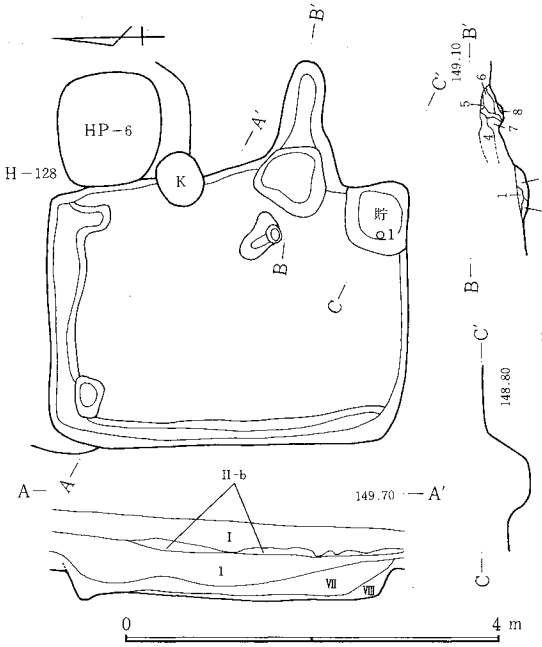
図－229　H－122号住居跡



図－230　H－122号住居跡出土遺物

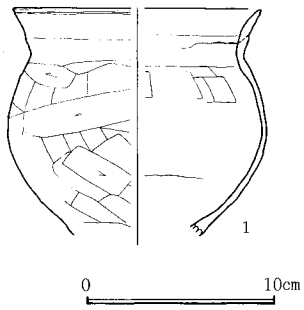
位置　西台地南辺のM102・101にある。南東隅と北西隅が鈍角の、ひし形に近い平面プランをもっている。南北3.8m東西3.8mで、面積は約14㎡である。長軸方向は、N－8.5°－Eを示す。南壁と西壁はほぼ直線的だが、北壁はやや内側に膨らみ、東壁はカマド付近で外側に膨らむ。周溝は、南東隅と、西壁から北西隅にかけて見られ、幅6～18cm、深さ6～9cmである。　**カマド**　東壁中央南寄りに位置する。全長128cm、燃焼部長84cm、袖部内幅40cm、壁外掘り込み52cmを測る。焚き口には自然石が利用されていた。　**貯蔵穴**　住居の南東部、カマド右袖の脇に位置し、37×35cmの方形で深さは52cmあり、一部袋状をなしている。　**遺物**　カマド脇の周溝内より(1)、カマド内より(2.4)、カマド左前より（6）、カマド左脇より(7)等の土師器の出土があった。また、北壁寄りの床面から滑石製の紡錘車(8)と土師器坏(3)が出土している。　（川崎）

H123号住居跡（図－231、232　図版－14、85　表－118）（IX期）



1．黒色土。FP・C軽石、炭化物、焼土混入。　**カマド**　1．桃色灰層。焼土粒混入。2．黒色土。ロームブロック、焼土微粒混入。3．黒色土。焼土粒混入。4．黄土白色粘土。焼土を下部に混入。5．褐色土。6．黒色土。C軽石、炭化物混入。7．黒褐色土。8．褐色土。

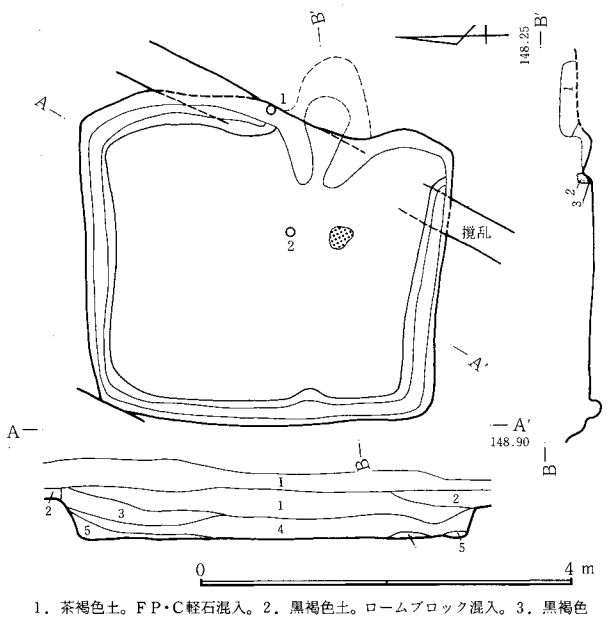
図－231　H－123号住居跡



図－232　H－123号住居跡出土遺物

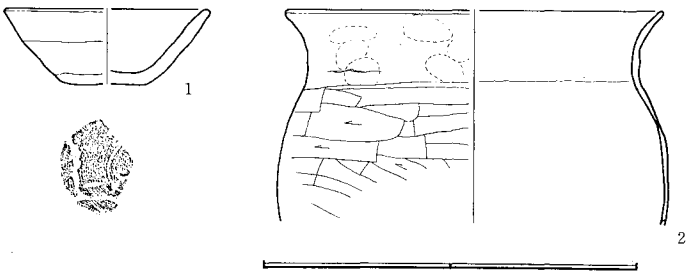
位置　西台地南辺L102にあり、北側にH128号住居跡が重複する。　**形状**　南北に長い長方形で、南西隅の丸味が強い。南北3.7m、東西2.8mを測り、面積は10.1㎡と推定される。周溝は西壁と北壁下に見られ、幅7～30cm、深さ2～7cmで北壁下が広い。長軸方向は、N－0.5°－Eである。　**ピット**　カマド前（P_2）と北西隅の周溝の内測（P_1）にある。P_2は、53×23cmで深さ17cm、P_1は、41×28cmで深さは17cmである。　**カマド**　東壁南寄りに位置し、全長146cm、燃焼部長57cm、袖部内幅56cm、壁外掘り込み長126cmである。手前の凹部は灰かき穴と考えられ、埋土には白色粘土が混じる。壁への掘り込み角度は25°である。　**貯蔵穴**　南東隅に位置し、不整方形のプラン。78×64cm、深さ21cmである。　**遺物**　南壁の東端、貯蔵穴に落ちかかるようにして土師器小型甕(1)が出土している。　**テフラ**　埋土上面にB軽石の純層がある。　**重複関係**　H128号住居跡との切り合いは、地層断面では不明だが、本遺構の床面上18cmにH128号住居跡の床と見られる層があり、本遺構の方が旧いと考えられる。K5－B号堀立柱建物跡、H14号土坑と重複、いずれも本遺構よりも新しい。（川崎）

H124号住居跡（図－233、234　図版－14、85　表－119）（IX期）



1．茶褐色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。ロームブロック混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、ロームブロック混入。4．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。5．黒褐色土。C軽石混入。　**カマド**　1．焼けた粘土灰。2．焼けた粘土灰。3．焼けた粘土灰。下部に黒色土混入。

図－233　H－124号住居跡

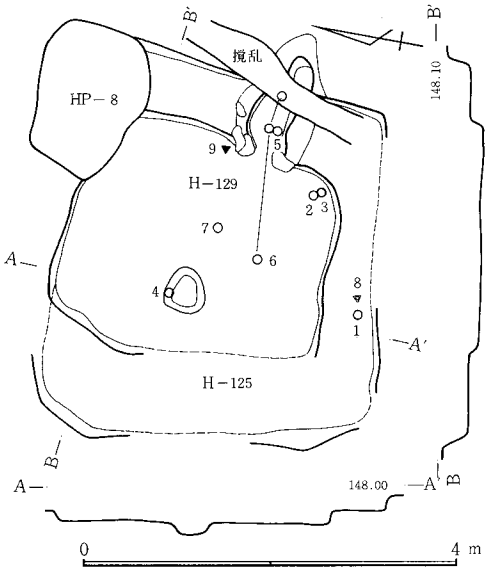


図－234　H－124号住居跡出土遺物

位置　西台地南端のL103に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ不整方形で、南北3・6m、東西3・1mである。北壁と南壁は東にむかって開きぎみになっており、かつ内に膨んでいる。西壁はやや外に膨み、東壁はカマドの北で西壁に対応し、かつ外に膨んでいるが、カマドの南では約20cm住居内側により、かつ外に膨らみ南壁につながっている。長軸方向はN－1°－E、面積は11.0㎡、壁高26～59cmである。周溝は南東隅を除くほぼ全周にめぐる。幅は7～17cmで、深さは1～14cmである。　**カマド**　東壁の南寄り。攪乱等により東部分は失なわれている。推定で全長138cm、袖部内幅16cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度38°で、壁外掘り込みは96cmである。火床面は床面とほぼ同じ高さである。　**遺物**　カマド北の壁面上部より

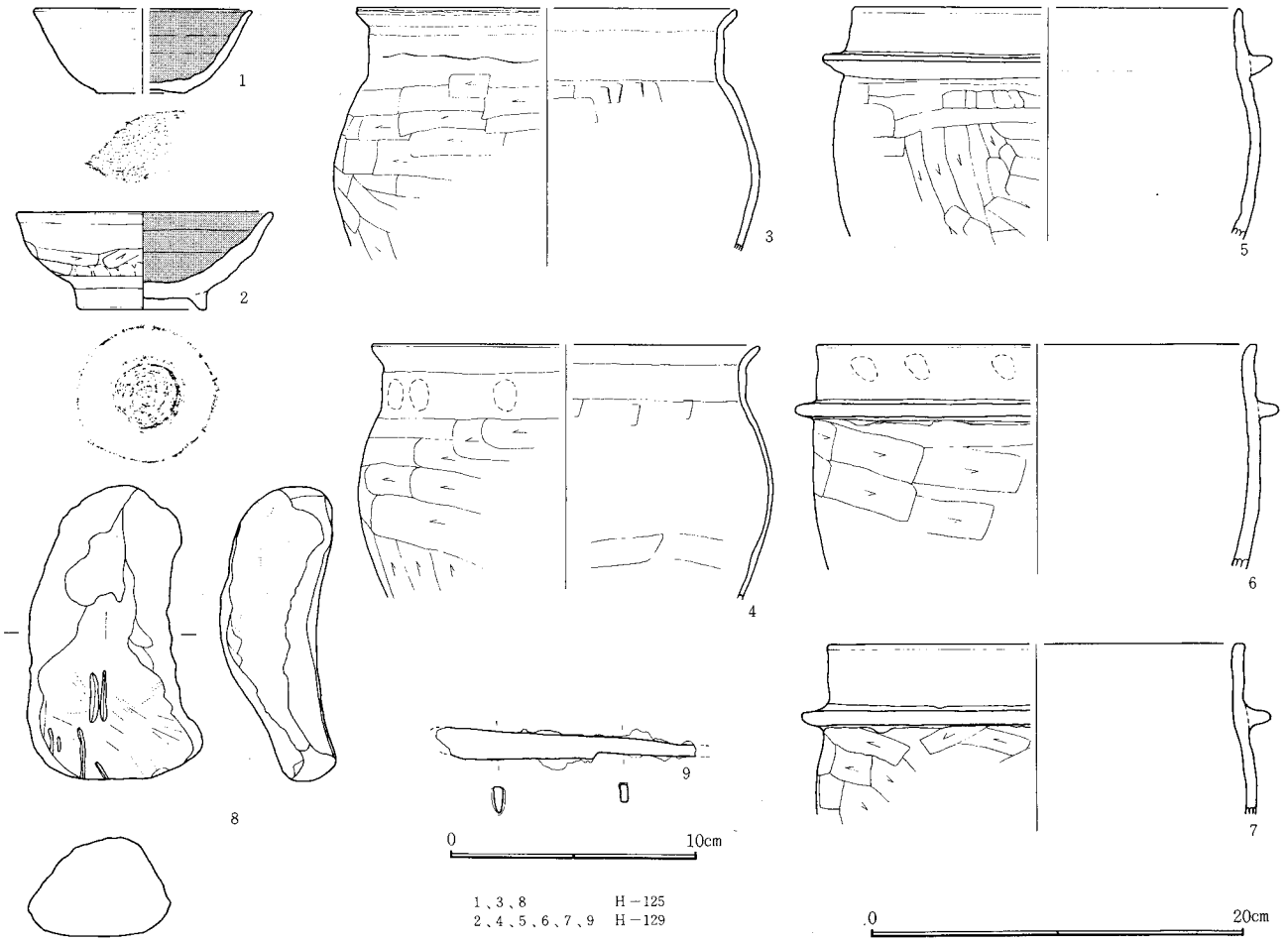
須恵器坏(1)が出土。カマド前より、土師器甕(2)が出土している。　(井野)

H125、129号住居跡（図—235、236　図版—85　表—120）（X、XV期）



図－235　H－125・129号住居跡

位置　L103にある。外側のH—125の内側にすっぽりH—129が入る。北東隅にはHP－8が重複する。　**形状**　HP—8との重複と著しい攪乱のため、全体の形状は不明である。H—125は、南北3.3m東西3.8m、面積12.7m²。H—129は南北2.8m東西2.4m、面積6.2m²とそれぞれ推定される。長軸方向はH—125がN－3°—W、H—129はN－4°—Eである。両者は北壁を共有する形で、H—129が内側にあり、床面も深い。　**ピット**　中央部に1つある。大きさは46×40cm、深さ12cmで、三角形に近い形状である。H—129、H—125のどちらにつくのかは不明である。　**カマド**　東壁南寄りに位置し、山石と白色粘土で構築されている。焚口は石で、よく焼けていた。全長143cm、燃焼部長55cm、袖部内幅33cm、壁外掘り込み長143cmである。他にカマドの痕跡がなく、H—125のカマドも同位置にあったと思われる。カマド部分の切合いは不明であるが、一応H—129につくものと推定する。　**遺物**　H—129からは、中央部より羽釜(7)が出土、同じくカマドより羽釜(5・6)、カマド左手より鉄製品刀子(9)が出土。H—125からは、南壁ぞいから須恵器坏(1)と砥石(8)が出土している。また東壁ぞいから土師器甕(3)が出土している。　**重複関係**　地層断面での切り合いは、後世の攪乱によりつかみ得なかった。カマドの残存状況から見て、H—129の方が新しいと推定するのが妥当だと思われる。HP－8と重複し、HP－8が新しい。　(川崎)



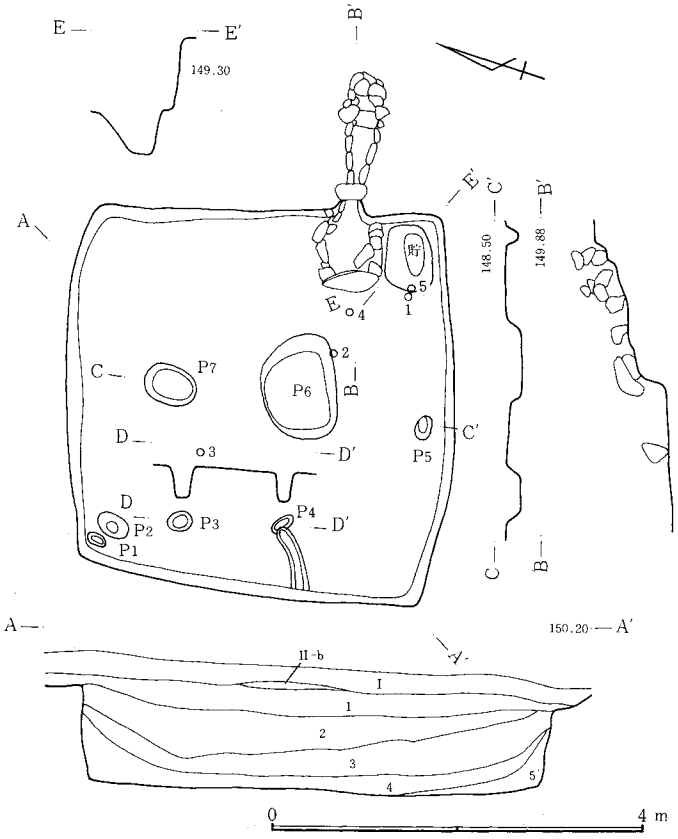
図－236　H－125・129住居跡出土遺物

H126号住居跡（図—237、238　図版—14、15、86　表—121）（IV期）

位置　調査区域の西台地、住居跡密集地域N102に所在する。　**形状**　正方形で規模は東西3.9m、南北3.9m、面積15.4m²である。長軸方向は、N—16°—W、壁高は40～67cmである。西壁の南半分に深い周溝らしきものを認めるが不確か。　**ピット**　大小合計7つ確認された。P_6は住居跡のほぼ中央部で110×80cm、深さ20cmで最大規模、P_7は中央部北寄りで76×42cm、深さ9cm。性格はいずれも不明。　**カマド**　東壁やや南寄り。全長243cm、壁外掘り込み160cm、袖部内幅38cm、燃焼部長55cm、壁への掘り込

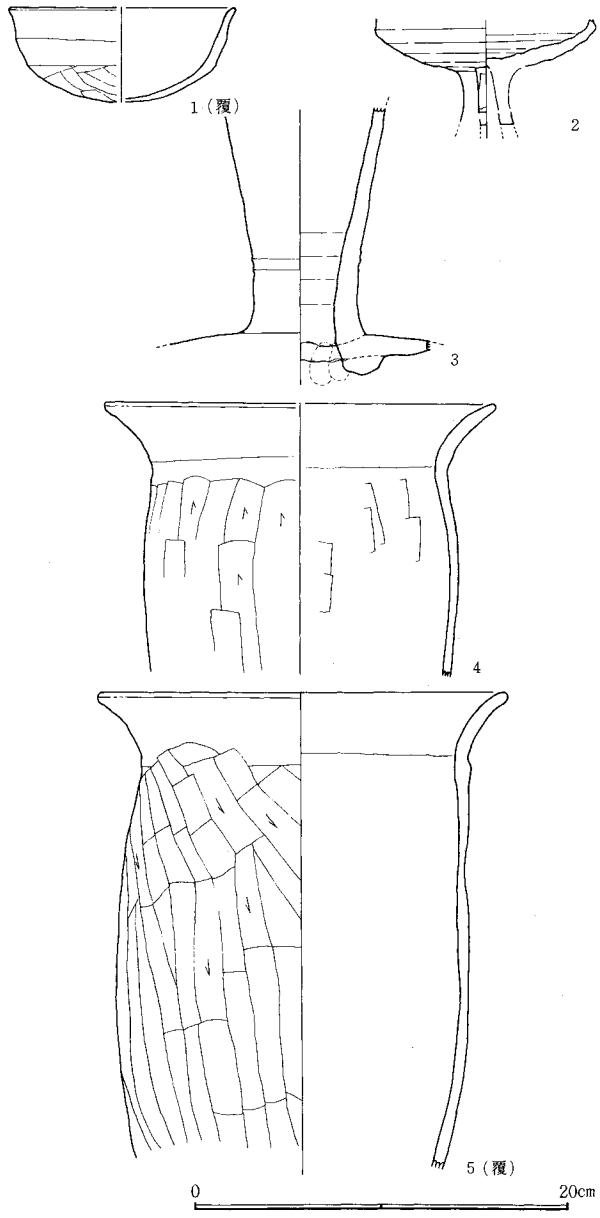
み角度18°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差＋7cmである。全体が数多くの石で整然と構築されている。燃焼部は壁内に位置し、回りの囲みと長い煙道部の両側、および煙出し穴の周辺のすべてが石組みである。　**貯蔵穴**　南東隅。長方形で66×46cm、深さ43cmである。　**遺物**　住居跡中央より須恵器長頸壺(3)、カマド手前より須恵器高坏(2)土師器甕(4)、カマド袖付近から土師器甕(5)坏(1)が出土。

テフラ　床面から106cm、住居中央の一部のII－b層はB軽石の純層。　(白石)



1．黒色土。FP・C軽石混入。2．褐色土。FP・C軽石、ローム粒、ロームブロック混入。3．黒色土。FP・C軽石混入。4．黒色土。FP・C軽石、ローム粒、ロームブロック混入。5．褐色土。

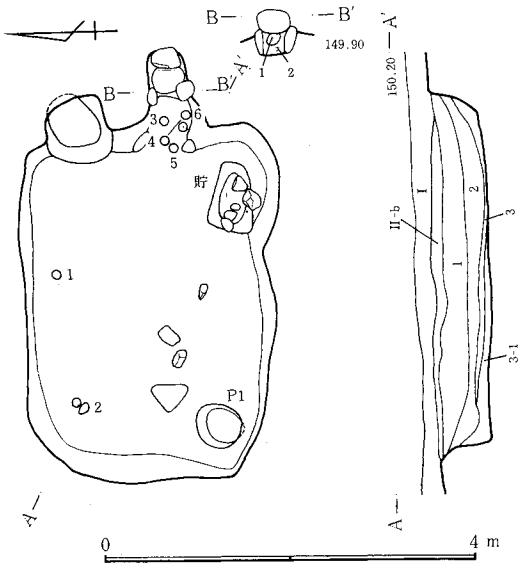
図－237　H－126号住居跡



図－238　H－126号住居跡出土遺物

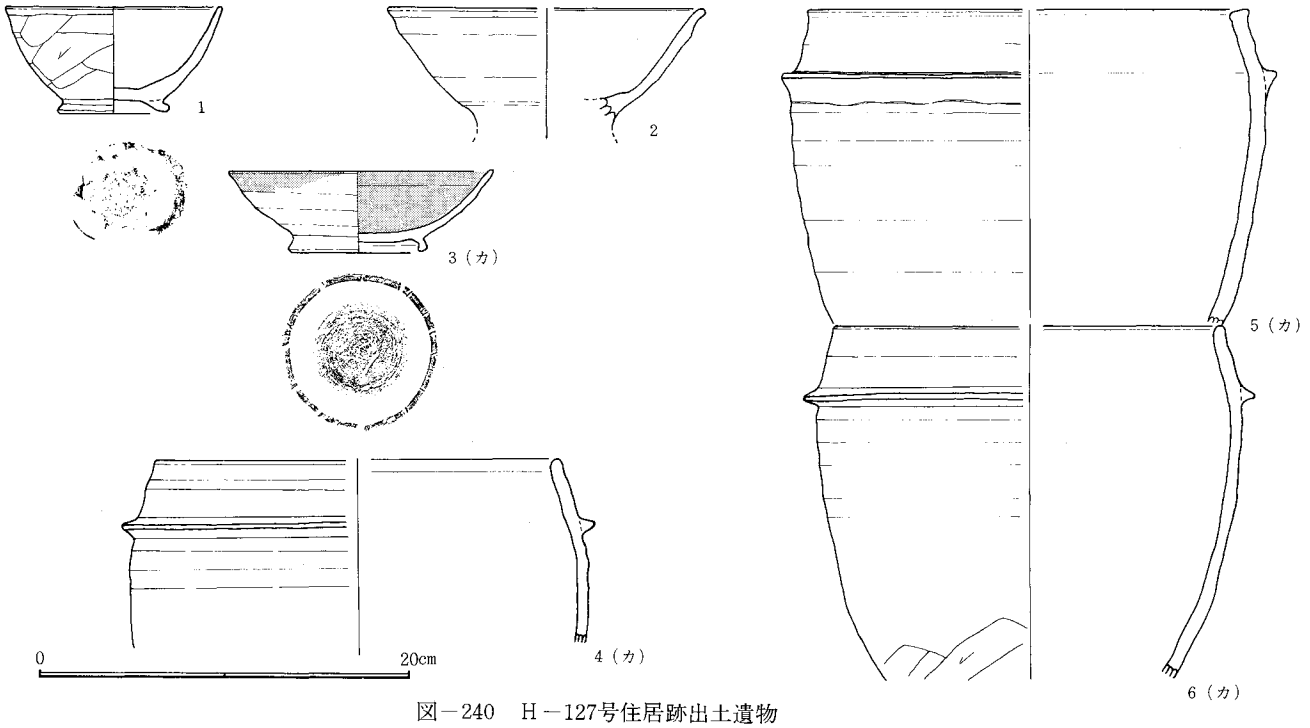
H127号住居跡（図—239、240　図版—15、86　表—122）(XIV期)

位置　調査区域の西台地の南東端、N102に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上の住居跡密集地域に位置する。　**形状**　東西に長軸をもつ長方形で東西3.2m、南北2.3m、面積7.8m²である。長軸方向はN—90°で壁高は17～39cm。　**ピット**　P_1、南西隅、48cm×42cm、深さ53cm。P_2、北東隅。半楕円形で100cm×30cm。　**カマド**　東壁やや南寄り、全長110cm、壁外掘り込み110cm、袖部内幅40cm、燃焼部長60cm、両袖にそれぞれ1個の石が使用されている。また燃焼部右内壁面に1石、および煙道入口の両脇と煙道の天井部が石組みされている。　**貯蔵穴**　南東隅。台形で72cm×40cm、深さ21cm。　**遺物**　貯蔵穴内よりカマドに使用されていたと見られる5個の石が出土。カマド燃焼部より羽釜(4・5・6)、灰釉陶器(3)、北西隅より土師質須恵器埦(2)、北壁中央近くから土師器埦(1)が出土。　**テフラ**　II－b層はB軽石の純層である。住居跡全体を覆い、堆積している厚さは中央部で約10cm、床面からの距離は43cmである。　(白石)



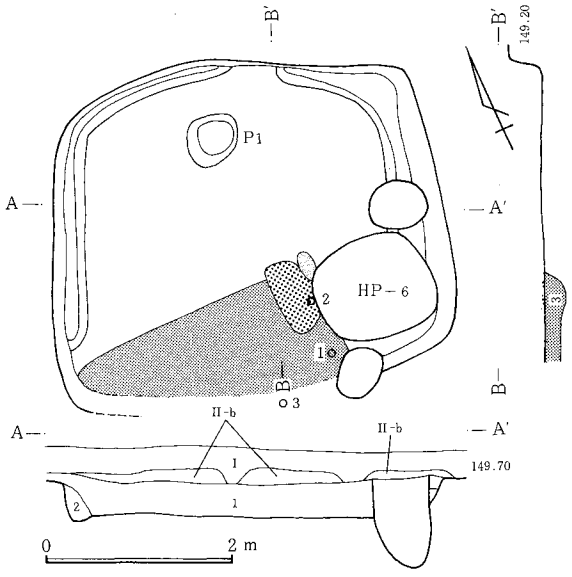
1．黒色土。FP・C軽石混入。2．暗褐色土。FP・C少量混入。3．褐色土。FP軽石、ローム粒混入。3-1．褐色土。一部に焼土混入。　**カマド**　1．黒色土。B軽石混入。2．褐色土。焼土粒混入。

図－239　H－127号住居跡



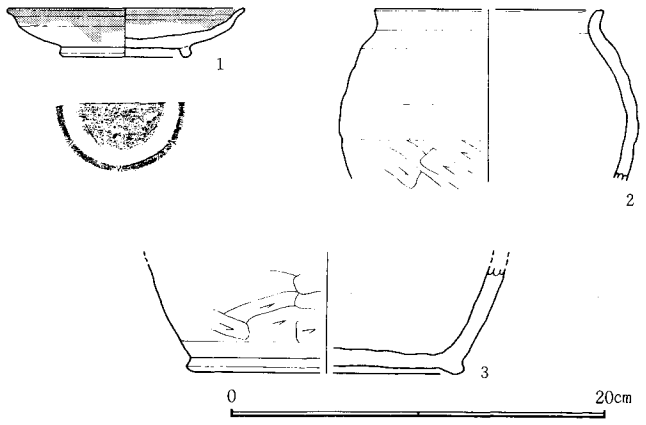
図－240　H－127号住居跡出土遺物

H128号住居跡（図－241、242　図版－15、86　表－123）（XIV期）



1．黒褐色土。2．黒褐色土。ロームブロックを含む。3．黒褐色土。多量のローム塊混入。

図－241　H－128号住居跡

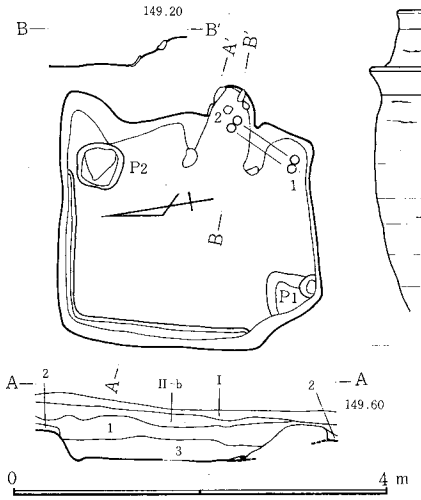


図－242　H－128号住居跡出土遺物

位置　西台地南辺のL102にあり、H－123、HP－6及び掘立柱建物の柱穴と重複する。　**形状**　H－123との重複で南側が、後世の攪乱により東側の一部が不明である。しかし、貼床等からある程度の推定は可能である。南北3.5m、東西3.8mの正方形プランをもち、面積は12.5m²と推定される。東壁及び南壁は不明であるが、北壁はやや外側に膨らみ、西壁はほぼ直線である。周溝は検出された範囲では、北壁の中央部分がなく、そこから西壁、東壁へ続いている。幅8～55cm、深さ1～4cmを測る。長軸方向はN－23°－Eである。　**カマド**　遺物が集中した付近に焼土や炭化物が見られ、カマドの存在を思わせるがHP－6により切られており、カマドは検出されない。　**貯蔵穴**　南東隅と思われる所にあり、50×46cm深さ24cmの方形。　**遺物**　カマドのあった付近より灰釉の折縁皿(1)、小型甕(2)、須恵器の壺(3)が出土している。　**テフラ**　床面より38cmのところにB軽石の純層が堆積していた。　**重複関係**　H－123床面上に本遺構の貼床があることより、本遺構が新しい。カマドの切り合いから、HP－6と重複、本遺構が旧い。K－5－Bと重複。K－5－Bが新しいと考えられる。　（川崎）

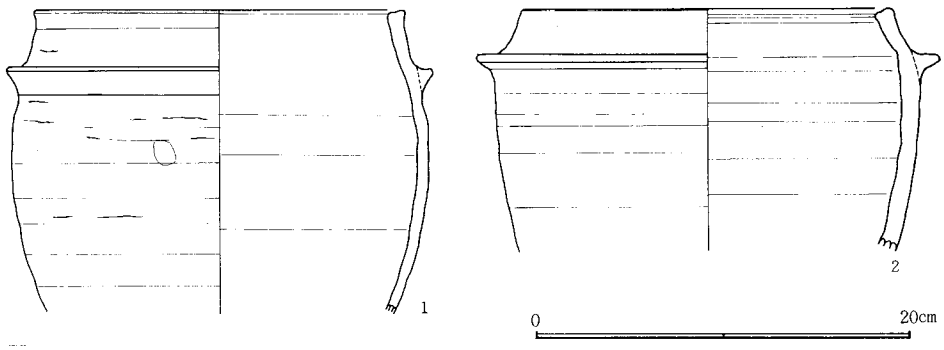
H130号住居跡（図－243、244　図版－15、86　表－124）（XII期）

位置　西台地の南端、東に小さな谷部分を持つ張り出し部の南斜面上L101に立地する。周辺は竪穴住居跡の多いところで、その中央部に位置する。東には掘立柱建物跡の一群が存在している。　**形状**　南北に長軸をもつ正方形で、南北2.6m、東西2.3mである。東壁北寄りに張り出しをもつ。楕円を短軸方向で切った形で、規模は68×47cmである。南西隅は斜めの壁となっている。カマドの北の東壁はやや狭まり張り出し部分に続き、カマドの南の東壁も西へ狭まりつつ南壁に続いている。長軸方向はN－8°－E、面積は5.6m²で、壁高は14～30cmである。張り出し部を除く北壁と南4分の1を除く西壁下に周溝をめぐらす。幅4～9cmで深さ3cmである。　**ピット**　床面2カ所（P_1、P_2）。P_1は46×42cmで深さ13cmで住居南西隅にある。P_2は52×35cmで深さ18cm



1．黒色土。焼土粒、炭化物粒混入。2．黒色土。3．黒色土。炭化物、焼土粒を含む。4．白褐色粘土。

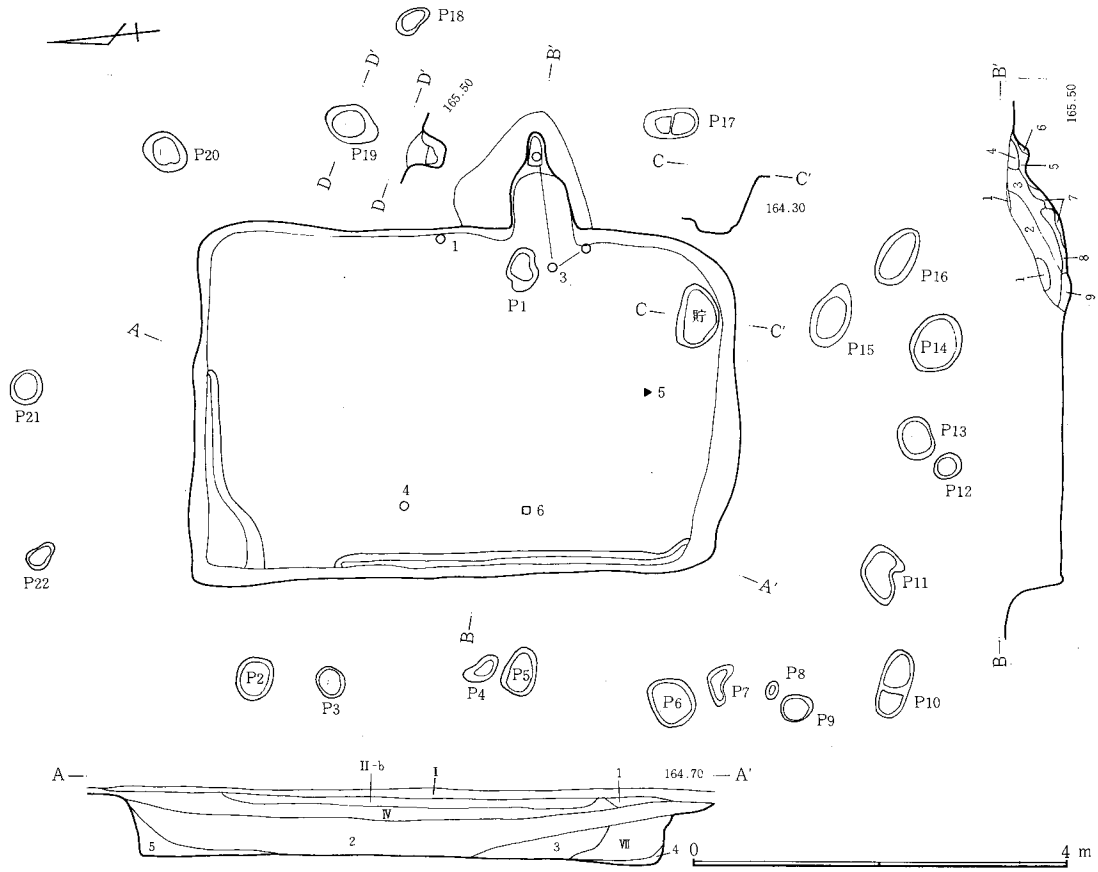
図－243　H－130号住居跡



図－244　H－130号住居跡出土遺物

で住居北東隅の張り出し部の西にあり、ピット内から石が検出されている。41×28cm。性格は不明。　**カマド**　東壁南寄り。構築材の石７石と白色粘土がのこる。全長90cm、袖部内幅50cm、燃焼部長55cm、壁への掘り込み角度37°、壁外掘り込みは43cmである。火床面と床面は同じ高さ。　**遺物**　羽釜（1・2）　**テフラ**　II－b層はB軽石の純層である。　（近藤）

H132号住居跡（図—245、246　図版—15、86　表—125）（Ⅷ期）

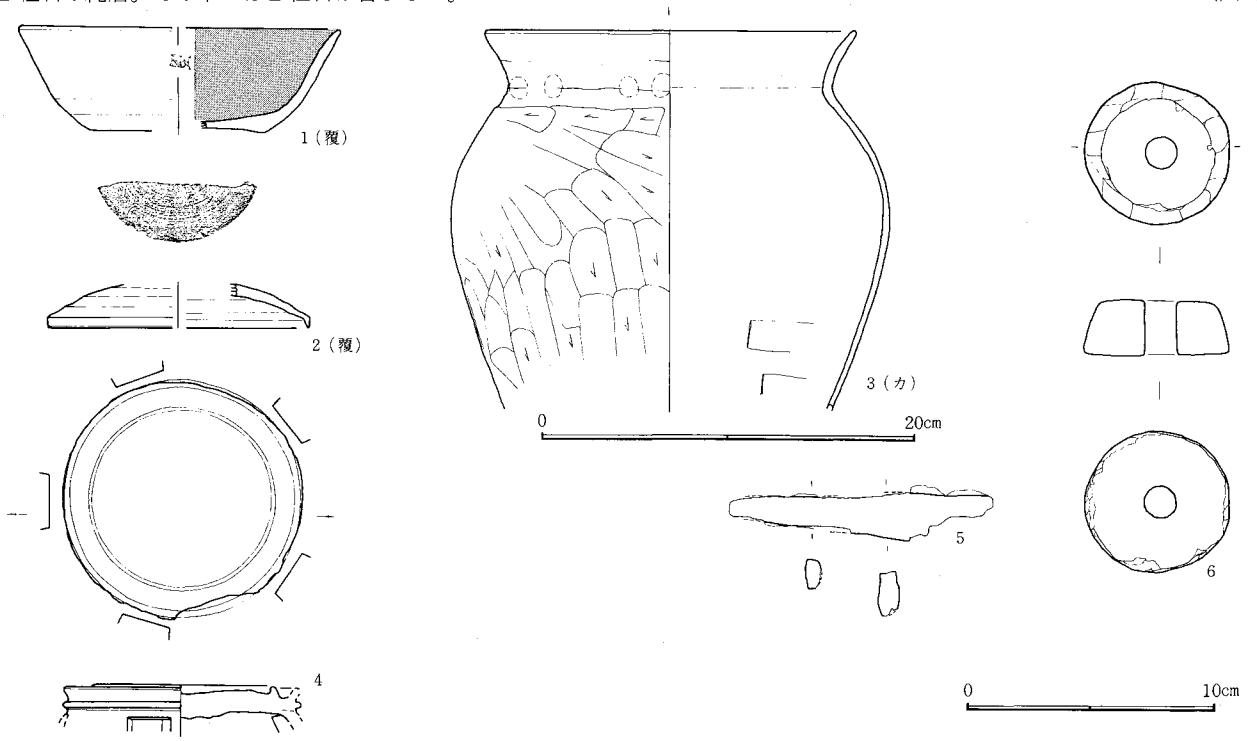


1．黒色土。2．黒褐色土。ロームブロック混入。3．黒褐色土。ロームブロック、多量の軽石混入。4．ロームに黒色土混入。5．黒色土。ロームブロック混入。
カマド　1．黒色土。FP・C軽石、炭化物、多量の焼土混入。2．黒色土。FP・C軽石少量の焼土混入。3．黒色土。ローム粒、部分的に、焼土、炭化物混入。4．赤色土。焼土、FP軽石混入。5．暗赤色土。焼土混入。6．黒色土。ローム粒混入。7．赤色土。焼土。8．黒色土。焼土、炭化物、FP軽石混入。9．黄褐色土。焼土、炭化物、灰混入。**P**19　1．黒色土。FP・C軽石、多量の焼土混入。2．黒色土。ローム粒混入。3．黒色土。多量のローム混入。

図－245　H－132号住居跡

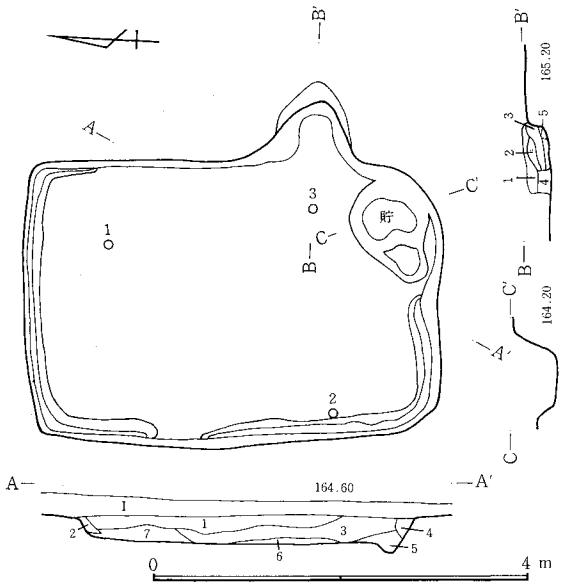
位置　西台地北東端、C20に位置し、H—133、134、135が囲うように接する。　**形状**　南北5.4m、東西3.5mの長方形。周囲に柱穴と思われるものを含めて、21個のピットが存在する。周溝は幅１～４cm、深さ３～45cmで、西壁の４分の３、北壁の２分の１に検出された。面積は18.7㎡あり、長軸方向はN－7°－Eである。　**ピット**　住居の外側に大小21個検出された。東側と西側は住居から90cm内外離れてあり、北側南側は160～140cm離れている。全てのピットを律する規則は不明だが、$P_{2.3.4.5}$と$P_{17.19.20}$とは、長軸方向に沿って並び、それぞれを結ぶ線と、$P_{21.22}$を結ぶ線は、それぞれほぼ直交する。なお、直交地点でのピットは認められなかった。これらのピットは、周辺に掘立柱建物跡がないことから、本遺構に関連するものと思われ、上屋構造等に関係するものではないかと思われる。　**カマド**　東壁中央南寄り。全長142cm、燃焼部長60cm、袖部内幅69cm、壁外掘込み長136cm、掘

り込み角度45°を測る。　**貯蔵穴**　南壁際の東寄りにある。60×41cm、深さ9cmの半円形である。　**遺物**　西壁中央直下より円面硯(4)が、南130cm離れた壁際より紡錘車(6)が出土した。南壁中央、壁際より、刀子(5)が出土した。以上は床面に密着する。東壁中央床面より29cmより墨書「酒」の内黒土器(1)が出土した。土師器甕(3)はカマド内より出土。　**テフラ**　床面より53cmに、B軽石の純層。その下にはB軽石は含まない。　(川崎)



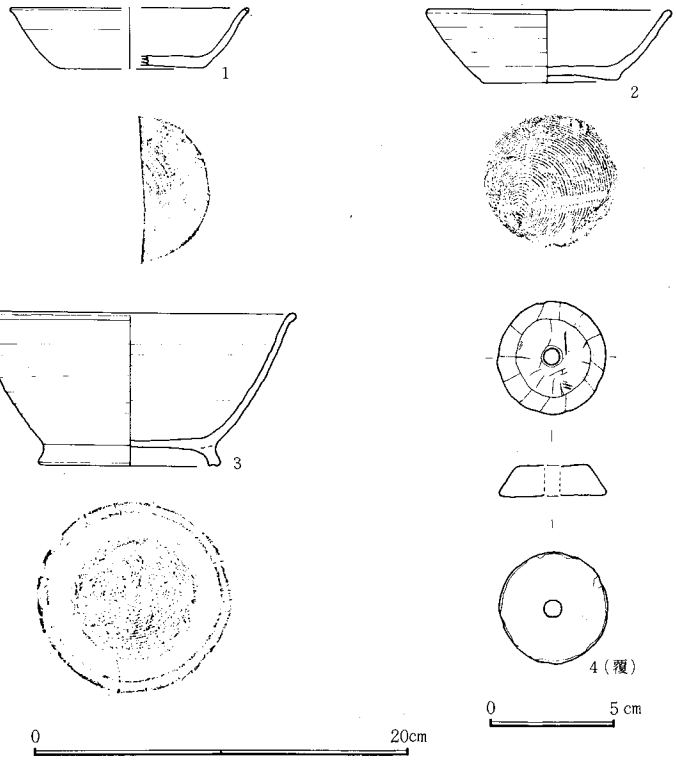
図－246　H－132号住居跡出土遺物

H133号住居跡（図—247、248　図版—15、86　表—126）（IX期）



1．黒色土。FP・C軽石、ロームブロック混入。2．黒色土。FP・C軽石、多量のロームブロック混入。3．黒色土。4．黒色土。焼土少量混入。5．2に焼土混入。6．褐色土。焼土混入。7．黒色土。FP・C軽石混入。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石、灰、焼土粒混入。2．桃色土。焼けた粘土。3．白色粘土。多量の灰、焼土粒混入。4．灰黒色土。多量の粘土、灰混入。5．3と同じで、焼土の混入度高い。

図－247　H－133号住居跡



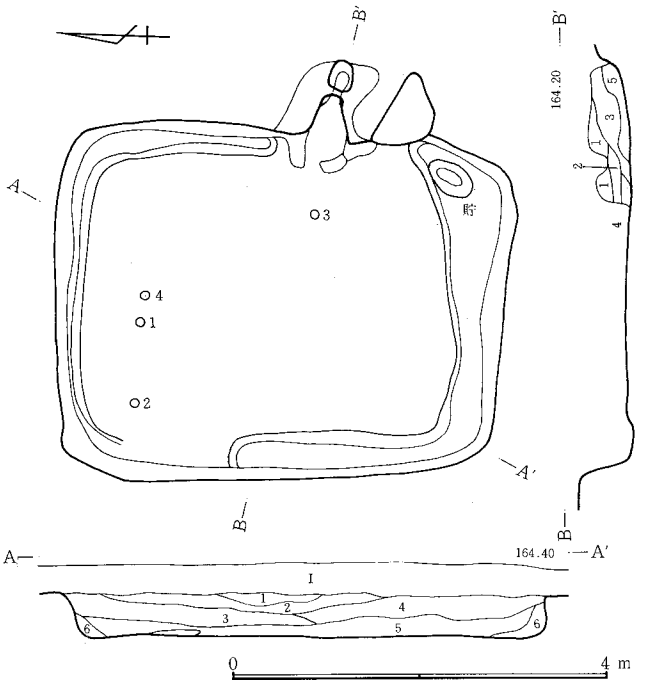
図－248　H－133号住居跡出土遺物

位置　西台地北東端C21にある。H—135が南に並び、H—132が西に接する。　**形状**　南北4.2m、東西2.9mの長方形で、南東隅は大きな弧をえがく。面積は12.1m²あり、長軸方向はN—1.5°—Wである。周溝は、東壁北端60cmから北壁、西壁を通り南壁の西寄り半分に続く。西壁の北から70cmのところで周溝が消える。　**カマド**　東壁南寄りにあり、全長62cm、燃焼部長42cm、袖部内幅54cm、壁外掘り込み長54cm、壁への掘り込み角度62°である。住居床面と燃焼部のレベル差はほとんどない。　**貯蔵穴**　122×76cm、深さ25cmで、南東隅にある。一部に浅く平坦な部

分がある。 **遺物** カマド前の床面より須恵器高台付椀3、西壁の南寄り直下より須恵器坏(2)、北半部の床面より21cm上より須恵器坏(1)が出土している。なお、埋土中より紡錘車(4)が出土した。 (川崎)

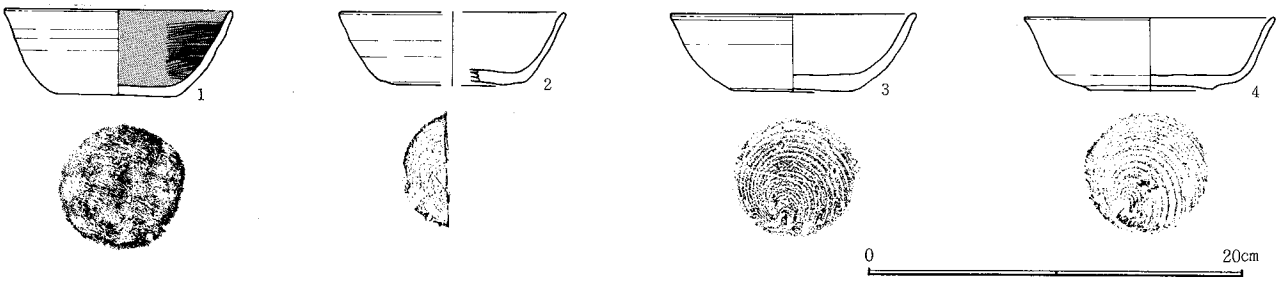
H135号住居跡（図—249、250 図版—15、87 表—127）(IX期)

位置 西台地北端のB・C21に所在する。 **形状** 南北に長軸を持つ隅丸の不整方形である。南北4.4mで東西は3.5mである。南端は東側が外に膨らみ、東壁はカマドの南側で西にせばまり、外に膨らんだ南壁に続いている。長軸方向は、N—2°—W、面積は15.1m²、壁高は30～50cmである。周溝は北壁下、東壁下、南壁下、西壁下の南2分の1にめぐる。幅は10～67cmで深さは3～15cmであるが、幅と深さの最大値は周溝本来のものではない。床全体に貼り床がほどこされている。中央部は固くしまっているが、南、北端はややわらかい。厚さは未調査。 **カマド** 東壁中央南より。カマド前に構築材が1石のこっている。煙道はほぼ残っている。カマド南の壁は掘立柱建物跡の柱穴と重復している。全長112cm、袖部内幅43cm、燃焼部長65cm、壁への掘り込み角度20°、壁外掘り込みは96cmである。火床面は床面と同じ高さである。 **貯蔵穴** 南東隅。長円形で規模は42×32cmで深さ20cmである。 **遺物** カマド前より須恵器坏(3)が、北壁近くより土師器坏(1)、須恵器坏（2・4）が出土している。 (井野)



1．暗褐色土。2．黒色土。FP・C軽石、ロームブロック点在。3．黒褐色土。FP・C軽石、ロームブロック混入。4．黒褐色土、ロームブロック混入。5．黒褐色土。ロームブロック少量混入。6．黒色土。ロームブロック多量に混入。 **カマド** 1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒色土主体の灰。粘土、少量の焼土、FP・C軽石混入。3．赤黒色土。多量の焼土、少量の灰、FP・C軽石混入。4．2に炭化物混入。5．焼土。粘土含。

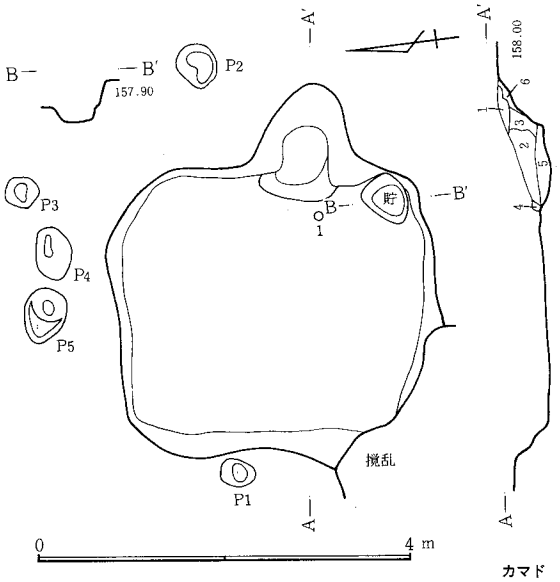
図—249 H—135号住居跡



図—250 H—135号住居跡出土遺物

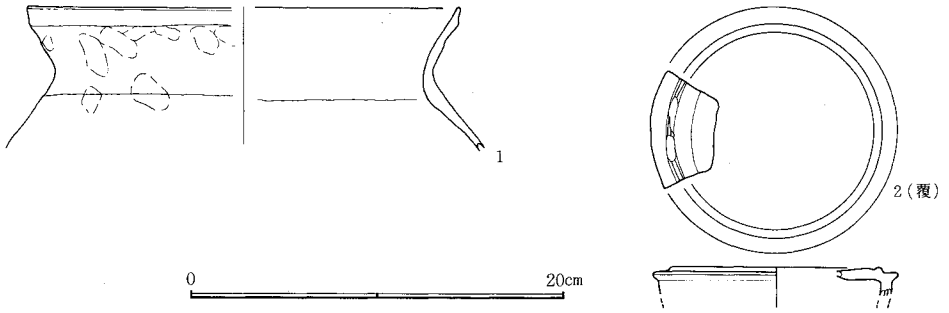
H136号住居跡（図—251、252 図版—16、87 表—128）(VI期)

位置 西台地の東部端中央で、東側は15m程で、4～5mの崖となっているロ13に所在する。付近には土師器使用の住居跡が密集している。 **形状** 南北3.1m、東西2.7mで隅丸方形に近い長方形の住居である。壁高は31～51cmで、面積8.3m²である。周溝はなく、床面には貼り床とせず、ローム層を踏み固め床面としている。住居の長軸方向はN—5.5°—Eである。 **カマド** 東壁やや南寄りに壁外に106cm掘り込み、全長120cm、燃焼部長62cm、袖部内幅52cmのカマドを構築している。壁への掘り込み角度は58°、住居床面とカマド燃焼部とのレベル差は—10cmと燃焼部の方が低い。 **貯蔵穴** 南東隅に51×40cm深さ15cmの規模を持ち三角形に近い形の貯蔵穴が検出されている。 **遺物** カマド内より土師器の甕(1)が出土している。また埋土より須恵器の円面硯(2)も出土している。 **テフラ** 埋土にFP、C軽石を少量含む層が存在した。 **その他** 住居周辺にピットが5カ所、径40～50cmで深さ30～40cmのものが多い、住居に係わるものか。 (江原)



図—251 H—136号住居跡

カマド 1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石、ロームブロック、多量の焼土、灰混入。3．2より焼土の混入度低い。4．1に灰少量混入。5．1にロームブロック多量に混入。6．黄褐色土。

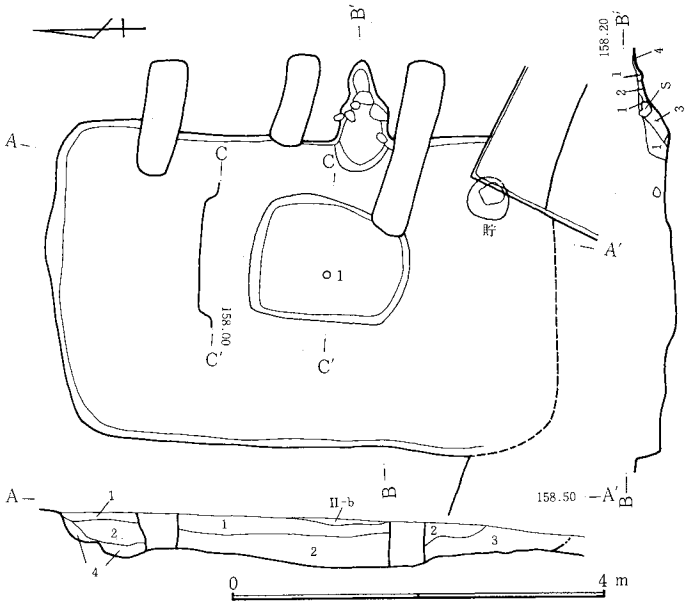


図－252　H－136号住居跡出土遺物

H137号住居跡（図－253、254　図版－15、87　表－129）（XII期）

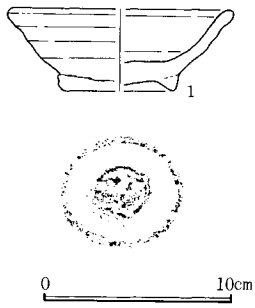
位置　西台地の東側やや北ロ・ハ14で、南への緩斜面に位置している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形である。南部分には攪乱がみられ、南北5.2m（推定）、東西3.1mである。面積は攪乱のため推定部分も含んで8.3m²である。壁高は9～32cmである。地層断面からは44cmを測る。長軸方向はN－3.5°－Eである。　**ピット**　床面中央にある。規模は170×128cmで深さ12cmである。ピット内は床面と同様に踏み固められている。住居に付く施設と考えられる。　**カマド**　東壁のやや南寄りにある。壁外に作られている。構築材として、右袖に1石、燃焼部に5石がのこる。全長94cm、燃焼部長25cm、袖部内幅46cm、壁への掘り込み角度28°、壁外掘り込みは94cmである。燃焼部は床面にくらべ6cm低い。

貯蔵穴　南東隅。楕円形。規模は44×40cmで深さ70cmである。底面は方形である。　**遺物**　ピット内より土師質須恵器高台付埦が出土している。　**テフラ**　II－b層はB軽石層である。床面からのレベルは45cmである。　**重複関係**　W－16と重複する。W－16は本遺構の南を通り南壁をこわしている。地層断面からみても本遺構が旧い。　（井野）



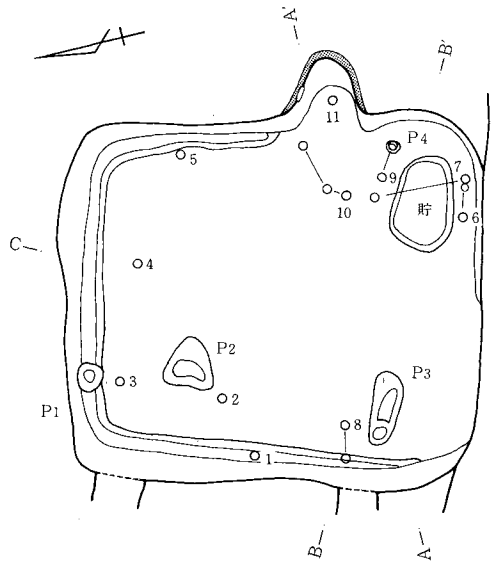
1．黒色土。C軽石混入。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．暗褐色土。FP・C軽石混入。4．暗褐色砂質土。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．暗褐色土。ブロック状に焼土混入。3．焼土。4．黒色土。多量のロームブロック混入。

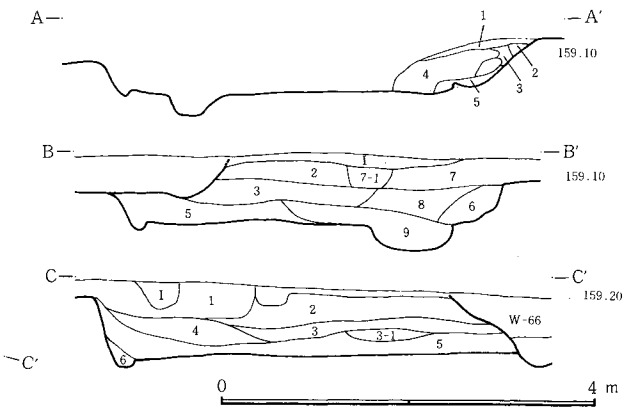
図－253　H－137号住居跡



図－254　H－137号住居跡出土遺物

H138号住居跡（図－255、256　図版－16、87　表－130）（VII期）

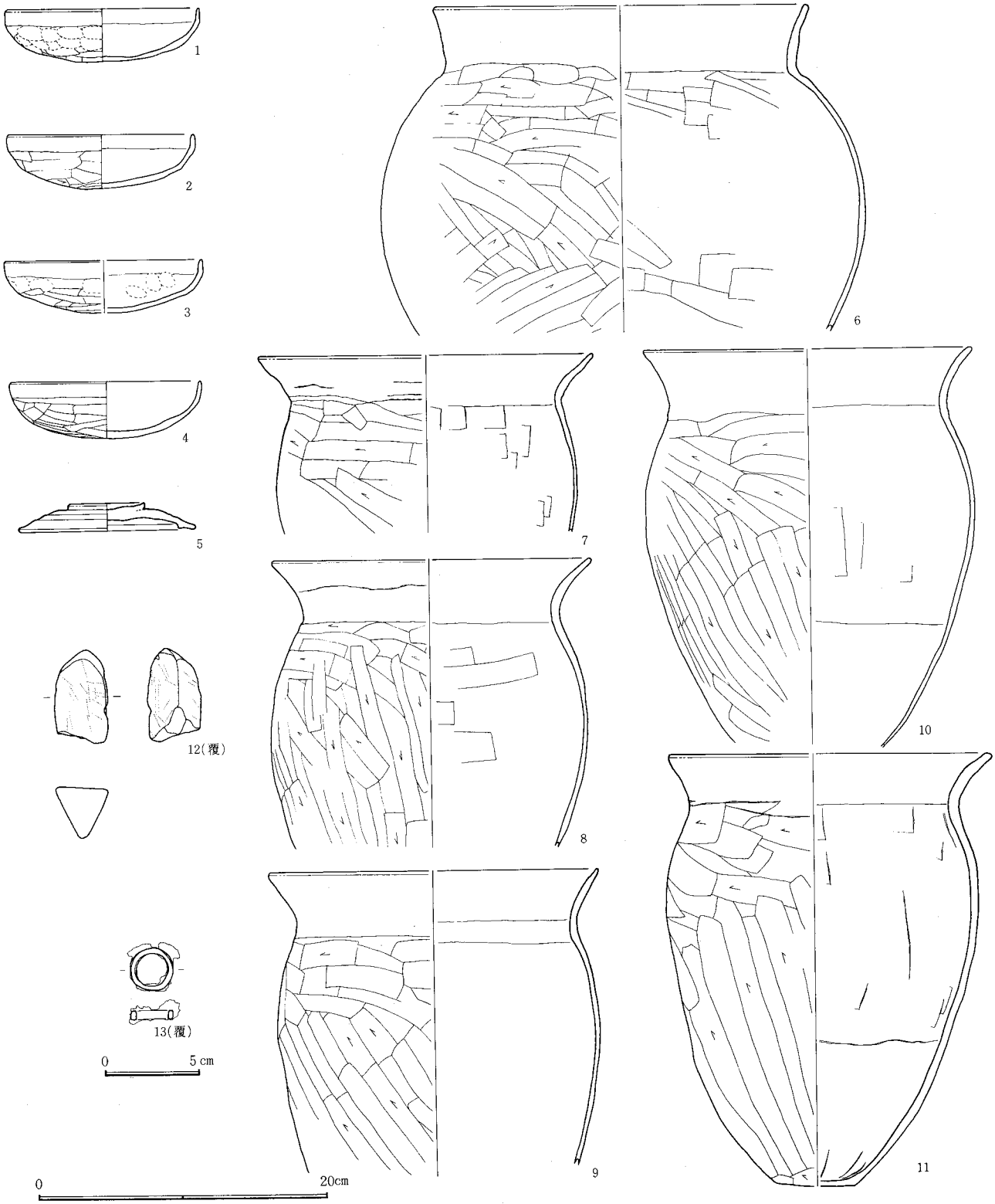




1．黒褐色土。ローム小ブロック点在。2．黒色土。FP・C軽石、少量の焼土混入。3．黒褐色土。FP・C軽石混入。3-1．黒褐色土。FP・C軽石、焼土粒混入。4．黒色土。FP・C軽石、ローム小ブロック混入。5．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、ローム小ブロック混入。6．黒色土。ローム粒点在。7．黒色土。FP・C軽石混入。7-1．黒褐色土。少量のFP・C軽石、焼土粒、ローム粒混入。8．7-1よりFP・C軽石多い。9．黒色土。焼土、炭化物混入。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．黄褐色土。焼けている。4．黒色土。焼土ブロック少量混入。5．焼土・灰・黄褐色土・黒色土の混合土。

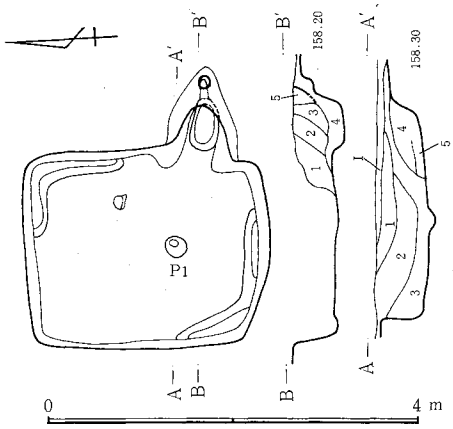
図－255　H－138号住居跡

位置　イ13。南に低くなる緩傾斜面で、この付近は掘立柱建物跡と竪穴住居跡の一大群集地となっている。本住居跡はこの北端に位置する。　**形状**　南北4.3m、東西3.5mの隅丸台形を呈す。北壁を上底、南壁を下底とする台形で、東壁のみを斜めに設定する。南壁西半部は張り出しの可能性もあるが、溝で破壊され不明である。長軸方向N－15°－E、床面積（現状で）14.9m²を測る。壁高は地層断面等から最高70cm前後である。周溝は幅５～18cm、深さ５～10cm前後。　**ピット**　P_1～P_4は柱穴の可能性がある。P_3の形状からみて建て替えが想定され、ピットの形状及び深さからP_1（深さ22cm）、P_3西側（同17cm）、P_4（同17cm）とP_2（同10cm）、P_3東側（同23cm）は別時期のものと考えられる。　**カマド**　燃焼部掘り形を中心に白色粘土を巻いて構築する。また、燃焼部左壁に偏平な安山岩が立てられていることから、石材の使用も想定される。全長86cm、燃焼部長62cm、袖部幅は掘り形で約１m、復元幅で70cm前後。　**遺物**　カマド内と同手前、北壁、西壁沿いで多量の土器が出土した。いずれも床面ないし同直上である。　**重複関係**　南壁を66号溝に切られている。その他カマ掘りが西壁を切っている。　（唐澤）



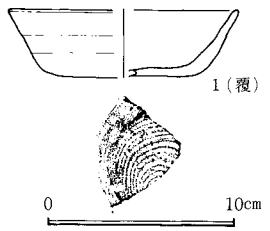
図－256　H－138号住居跡出土遺物

H139号住居跡（図—257、258　図版—16　表—131）（X期）



1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム粒混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、多量のロームブロック混入。4．3に焼土、灰混入。5．灰。ローム粒、粘土、焼土混入。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石、少量のロームブロック混入。2．1に白色粘土ブロック混入。3．2に焼土粒混入。4．1に焼土ブロック混入。5．白色粘土。

図—257　H—139号住居跡

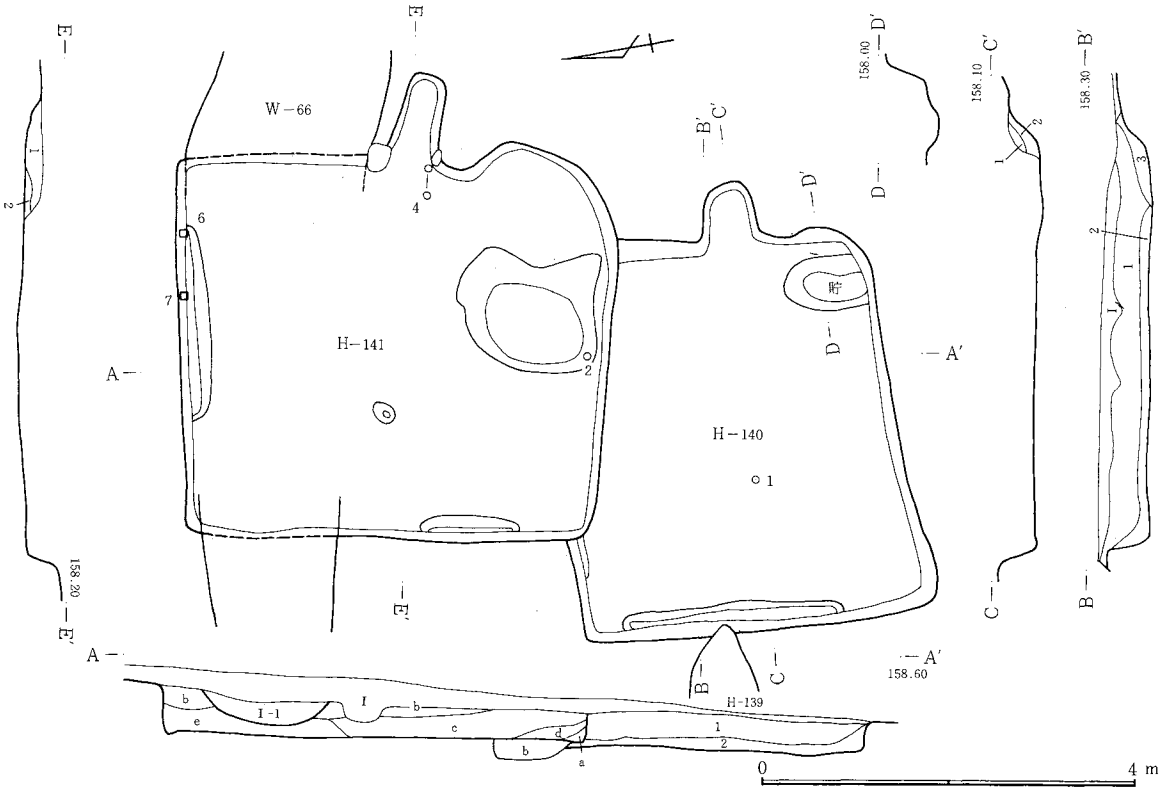


図—258　H—139号住居跡出土遺物

位置　調査区の西台地上の東縁辺中央のロ13に位置する。東にH—140・141が隣接し、南には東西に走る溝に接している。また、この住居は西台地上で最も密集する住居跡群の北東端に位置している。　**形状**　平面長方形で2.9×2.0mの大きさで、壁現高は35～52cmである。周溝周溝は北東隅および南西隅にみられ、幅は6～15cm、深さ2～6cmである。長軸方向はN—7°—Eで、面積は4.6m²である。　**床面**　踏み固め部分、貼床は不明であるが、図面から貼床の存在はないと考えられる。　**ピット**　住居中央から南寄りにあり、大きさは23×21cm深さ9cmである。　**カマド**　東壁南寄りにある。壁からの掘り込み長110cm、袖部内幅40cm、燃焼部長72cmである。燃焼部は床面より5cm高く、壁への掘り込み角度は61°である。　**貯蔵穴**　貯蔵穴は認められない。　**遺物**　覆土中より須恵器坏片(1)が出土している。　**重複関係**　H—140と重複する。カマド断面図、平面図により、本住居跡のカマドが、H—140の覆土を切って作られていることにより、本住居跡が新しい。

（中村）

H140、141号住居跡（図—259、260　図版—16、88　表—132）（V、V期）



1．黒色土。FP・C軽石混入。砂質土。2．黒褐色土。3．褐色土。a．黒褐色土。b．黒色土。FP・C軽石混入。c．黒色土。FP・C軽石、多量の焼土、ローム混入。d．赤色土。粘土に多量の焼土混入。e．黒色土。粘土混入。f．黒褐色土。ローム混入。　**H149カマド**　1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。ロームブロック混入。**H141カマド**　1．耕作によるカマ掘り。2．焼土。FP・C軽石をわずかに含む黒色土混入。

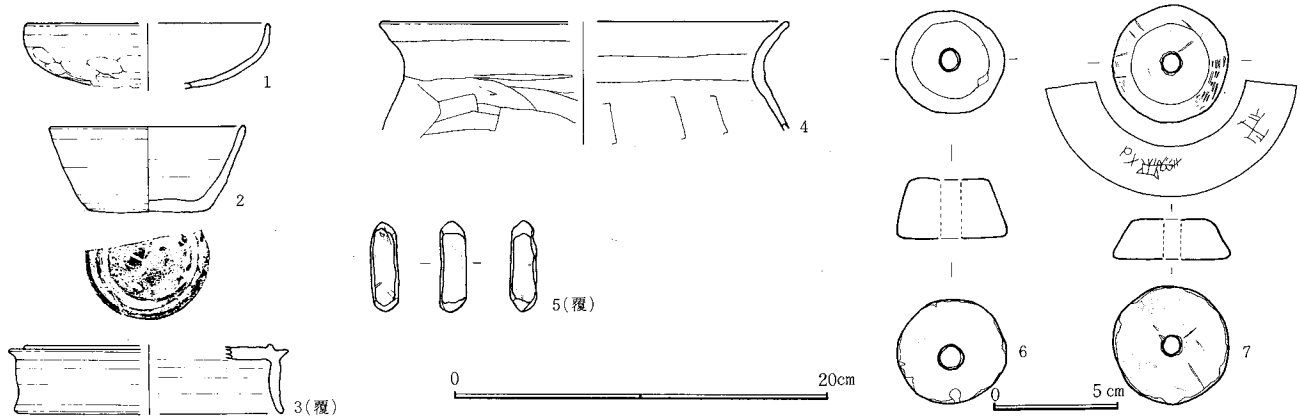
図—258　H—140・141号住居跡

140号住居跡　　**位置**　西台地上の東縁中央のロ13に位置する。　**形状**　平面は長方形の（3.0＋α）×3.9mで、推定面積は12.4m²である。壁現高は28～48cmである。周溝は北壁および西壁の一部に認められ幅4～9cm、深さ6cmである。長軸方向はN—85°—Eで、東西に長い住居である。　**床面**　踏み固め部分は不明、貼床は図から無いと考えられる。　**ピット**　ピットは認められない。　**カマド**　東壁の中央に位置し、壁からの掘り込み長64cm、袖部内幅50cm、燃焼部長62cmである。壁への掘り込み角度は51°で、燃焼部は床面より8cm低い。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面楕円形で68×56cm、深さ13cmである。　**遺物**　床面中央の西よりから土師器坏(1)が出土している。その他埋土中より須恵器台付有蓋短頸壺(3)が出土している。　**重複関係**　H141号139号住居跡と切り合い、その平面図から本住居跡が旧い。

（中村）

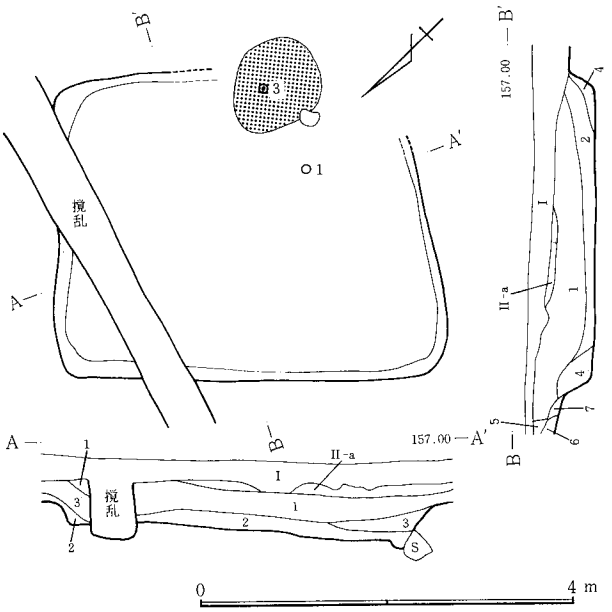
141号住居跡　　**位置**　H140号住居跡を切って北に位置している。ロ13。　**形状**　平面方形の4.4×3.8mの大きさで、面積は17.1m²である。壁現高は23～48cmで地層断面図からは56cmを測る。周溝は北壁中央と西壁の一部に、幅2～10cm、深さ6cm前後のも

のが認められる。長軸方向はN—10°—Eで南北に長い。 **床面** 踏み固め部分は不明であるが、貼床は図面から無いものと考えられる。 **ピット** 床面の中から西に1個あり、29×19cm深さ13cmの大きさである。床面南中央部に床下土坑。173×128cmで深さ37cm。 **カマド** 東壁の中央にあり、壁からの掘り込み長94cm、袖部内幅44cm、燃焼部長90cmである。燃焼部は床面より5cm高く壁への掘り込み角度は38°である。構築材として左袖に1個、右袖に1個石材を使用している。貯蔵穴は認められない。 **遺物** 土師器甕(4)がカマド右袖より、紡錘車(6・7)が北壁下周溝内より、須恵器の坏(2)が床下土坑南西より出土している。 **重複関係** 66号溝と重複、本遺構が旧い (中村)



図—260 H—140号住居跡出土遺物

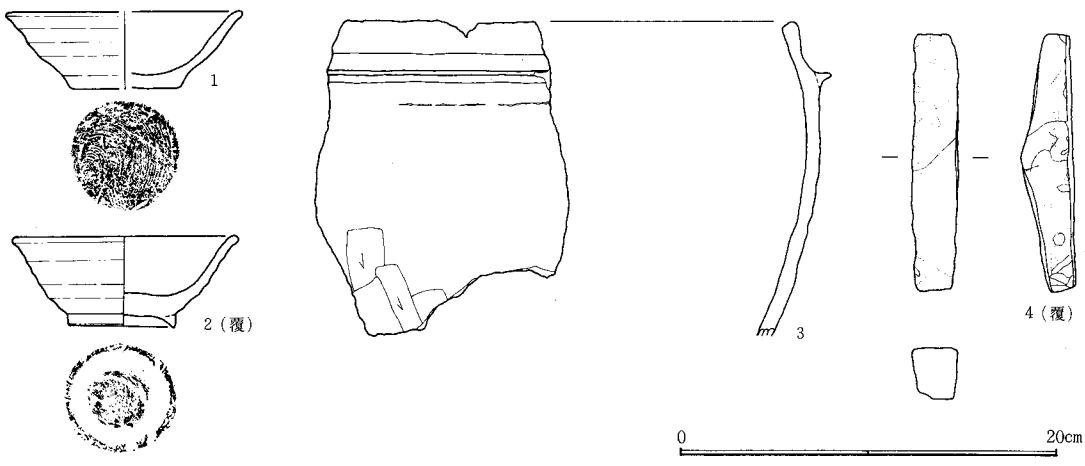
H142号住居跡 (図—261、262 図版—16、88 表—133) (XII期)



位置 西台地の東端中央、ハ12にあり、すぐ東は谷地となっている。 **形状** H大P—4との重複のため、東壁と南壁(カマドのある部分を東壁とする)の大部分が不明であるが、南北に長い長方形と推定できる。南北3.7m、東西3.1mと思われ、面積は11.3m²と推定される。長軸方向はN—46.5°—Eで、対角線がほぼ東西南北を向く。周溝は検出されなかった。 **カマド** H大P—4との重複のため、カマドの全容は不明である。しかし、焼土が集中的に見られ、カマド位置は東壁南寄りと推定できる。焼土範囲は、108×92cmの長円形である。 **遺物** カマド内より須恵器の羽釜(3)、カマド前でH大P—4との重複部分より須恵器坏(1)が出土している。 **重複関係** H大P—4の埋土上に、本遺構の床面と見られる堅い部分が、他より10cm程度沈下した状態で検出されており、本遺構の方が新しいと思われる。 **テフラ** 床面42cmのところに、B軽石を多く含む黒色砂質土層がある。 (川崎)

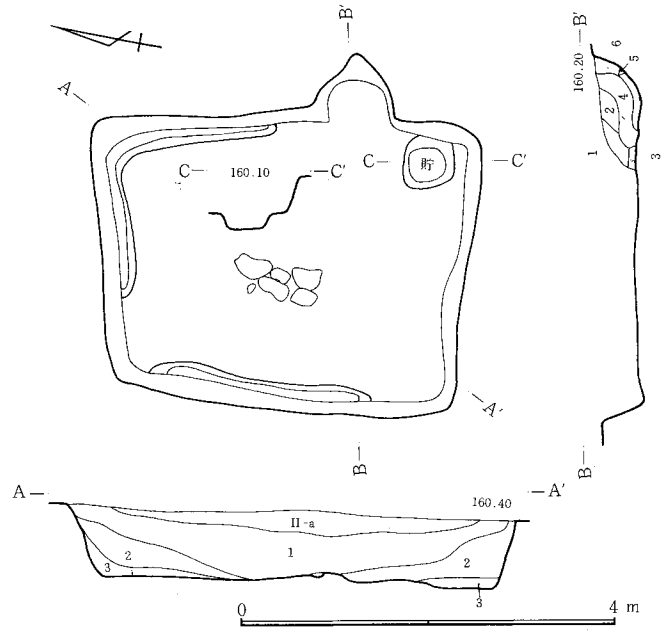
1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。ローム粒少量混入。3．1と2の混合土。4．黒褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。5．黒褐色土。C軽石少量混入。6．黒褐色土。7．黒褐色土。C軽石混入。

図—261 H—142号住居跡



図—262 H—142号住居跡出土遺物

H143号住居跡（図—263、264　図版—16、88　表—134）（VI期）

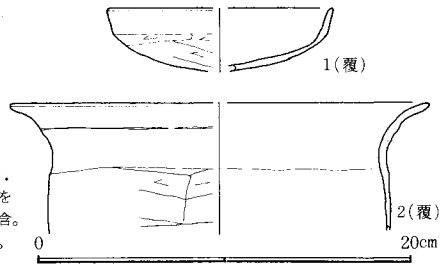


1．黒色土。FP・C軽石、少量のローム混。2．黒褐色土。FP・C軽石、炭化物、ローム粒混。3．黒褐色土。少量のローム、白茶小粒子混。　**カマド**　1．黒褐色土。粘土、焼土、炭化物FP・Cを含。2．黒褐色土。焼土、炭化物、C軽石を含。3．黒色土。ローム塊、ローム粒、焼土、炭化物含。4．黒色土。焼土、焼土塊、炭化物を含。5．ローム。6．茶褐色土。ローム塊、焼土、炭化物含。

図－263　H－143号住居跡

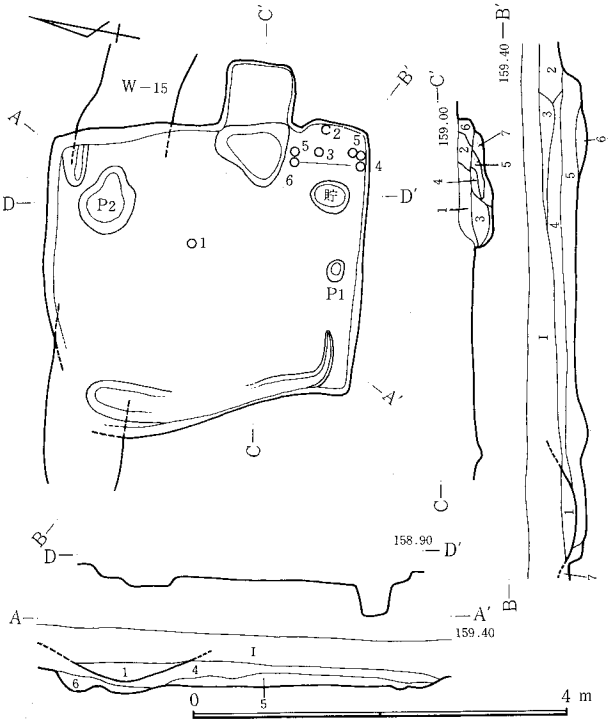
位置　西台地のやや北、A15に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ不整方形で、台形に近い。長軸方向はN－6°—Wで、面積は10.0m²、壁高は32～50cm。南北3.5mで東西2.7m。北壁はやや内に膨らみ、東壁とは鋭角で続く、東壁と西壁は南にむかってひろがっている。東壁は、カマドの南では逆にせばまり南壁につながっている。南壁は中央部より東半分は南に張り出している。周溝は北壁の東3分の2と西壁の北3分の2、東壁の北2分の1に見られる。幅5～13cm、深さ2～7cmである。住居中央に、石が6石長方形に置かれている。規模は95cm×40cm。

カマド　東壁南寄り。全長78cm、袖部内幅62cm、燃焼部長48cm、壁への掘り込み角度64°で、壁外掘り込みは48cmである。火床面は床面より6cm低い。　**貯蔵穴**　南東隅。長方形で規模は55cm×52cmで深さ11cmである。　**遺物**　住居覆土中より土師器坏(1)と土師器甕(2)が出土している。　**テフラ**　床面より55cmにB軽石を多量に含む層がある。　（井野）



図－264　H－143号住居跡出土遺物

H144号住居跡（図—265、266、267　図版—16、88　表—135）（VIII期）



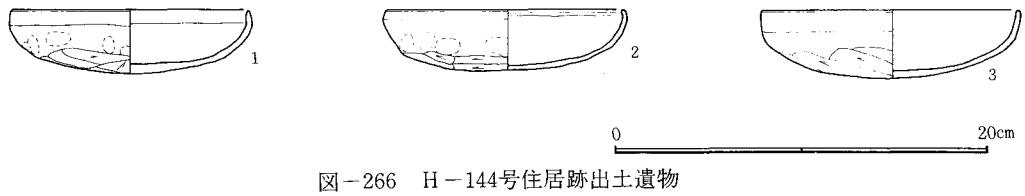
1．Iより褐色が強い。(W15号覆土)。2．ローム、ブロック状点在。3．2より黒くローム、多い。4．暗褐色土。ローム小粒子点在。5．黒色土。FP・C軽石、土器片散在。6．黒色土。多量のロームブロック混。7．黒色土。わずかにローム粒混。　**カマド**　1．灰、粘土、FP・C軽石混入。やや焼け込み。2．1より焼土粒多い。3．茶褐色土。灰、焼土粒、ローム粒多量混。4．茶褐色土。多量のローム粒混入。5．灰と焼土。6．灰褐色土。焼土粒(φ2cm)、灰、ローム粒混入。7．大粒のロームブロックに、焼土粒少量混入。

図－265　H－144号住居跡

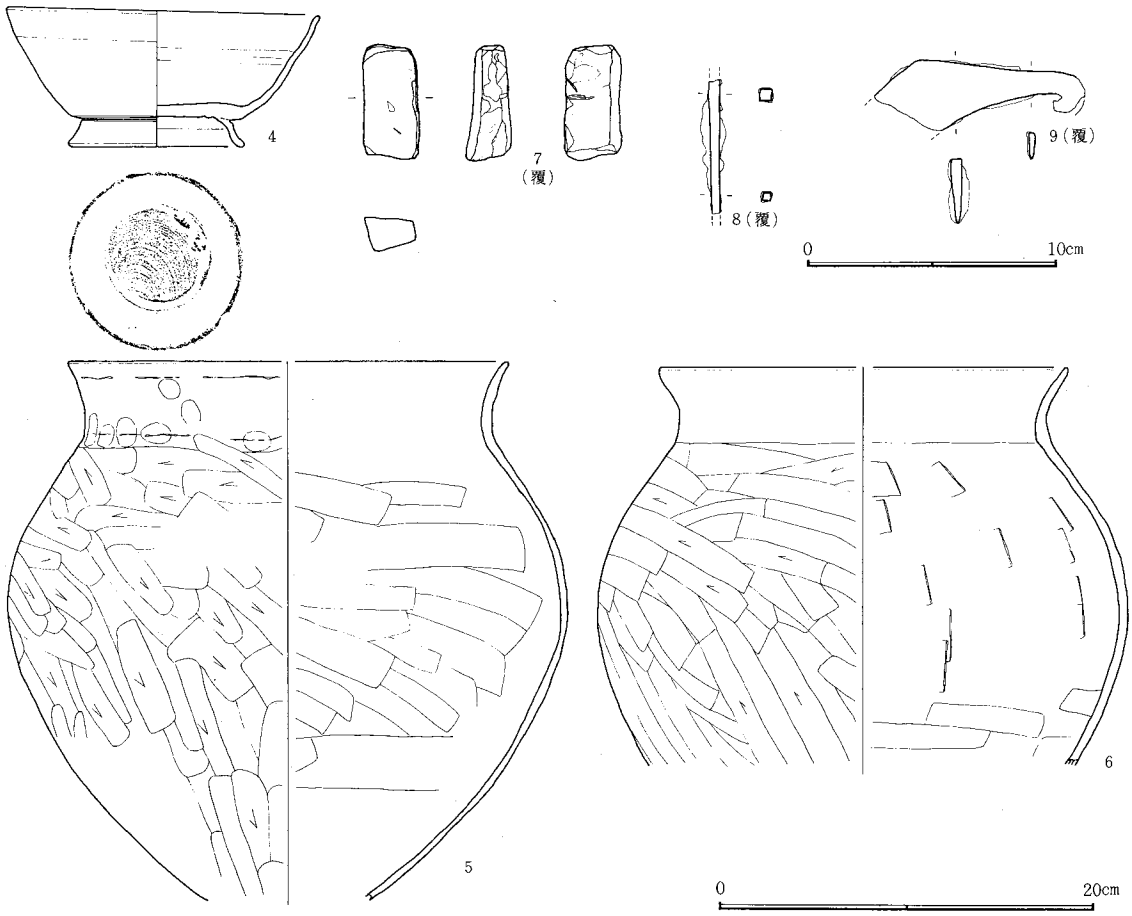
位置　台地北のA14で、周囲には竪穴住居跡と、掘立柱建物群がある。　**形状**　南北に長軸をもつほぼ正方形である。規模は南北3.2mで東西2.9mである。長軸方向はN－8°—Wで面積は9.9m²である。壁高は8～24cm。北東隅と西壁の南と北の一部分に周溝をめぐらす。幅8～15cmで深さ8cmである。　**ピット**　床面2カ所。P_1は24×18cmで深さ17cm、P_2は61×54cmで深さ12cm。性格は不明である。　**カマド**　東壁やや南寄りにある。全長76cm、燃焼部長74cm、袖部内幅62cm、壁への掘り込み角度86°、壁外掘り込み76cmである。燃焼部は床面より14cm低い。

貯蔵穴　南東隅にある。楕円形。規模は40×33cmで深さは31cm。

遺物　住居南東隅の床面やや上より、土師器坏(2・3)と須恵器高台付鉢(4)と土師器甕(5・6)が出土している。また床面中央部より土師器坏(1)が出土している。埋土中より砥石(7)と鉄製品棒状(8)・鎌(9)が出土している。　**重複関係**　W—15と重複する。地層断面によりW—15が新しい。　（井野）

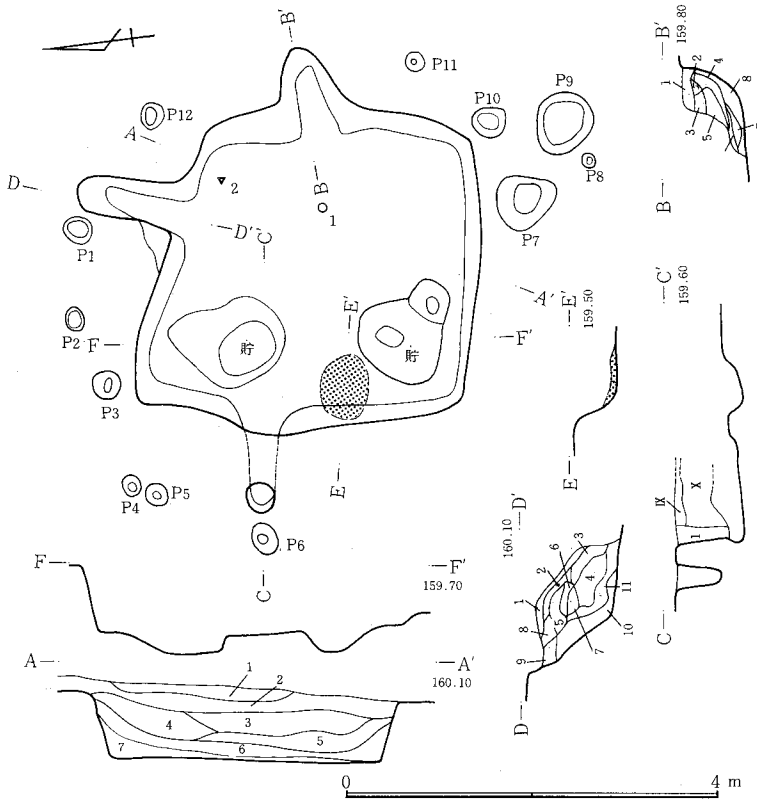


図－266　H－144号住居跡出土遺物



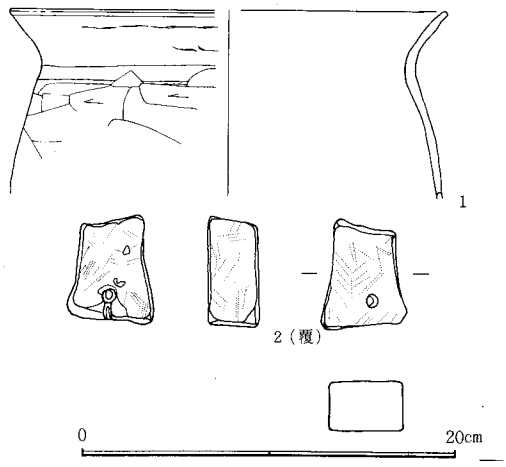
図－267　H－144号住居跡出土遺物（２）

H145号住居跡（図－268、269　図版－16、89　表－136）（Ⅶ期）



図－268　H－145号住居跡

1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．暗褐色土。3．暗褐色土。ロームブロック点在。4．暗褐色土。ローム混入。5．暗褐色土。ローム粒多量に混入。6．暗褐色土。7．暗褐色土。ローム小粒子、多量の焼土粒混入。　**東カマド**　1．茶褐色土。ローム、炭化物、焼土、C軽石混入。2．茶褐色土。ローム混入。3．茶褐色土。C軽石、焼土混入。4．黒褐色土。C軽石、焼土混入。5．茶褐色土。焼土混入。6．灰・ローム粒・炭化物の混合土。7．ロームの焼けた土。焼土塊混入。8．ローム。少量の黒色土混入。　**北カマド**　1．褐色土。焼土、ローム塊、C軽石混入。2．茶褐色土。FP・C軽石、炭化物、多量の焼土混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、多量の焼土混入。4．赤黒褐色土。FP軽石、多量の焼土混入。5．褐色土。FP軽石、焼土混入。6．褐色土。焼土混入。7．暗褐色土。8．暗褐色土。焼土、焼土塊、炭化物、FP・C軽石混入。9．黒褐色土。白茶小粒子混入。10．褐色土。焼土、炭化物混入。11．黒褐色土。焼土ブロック・炭化物混入。　**西カマド**　1．茶褐色土。焼土ブロック混入。



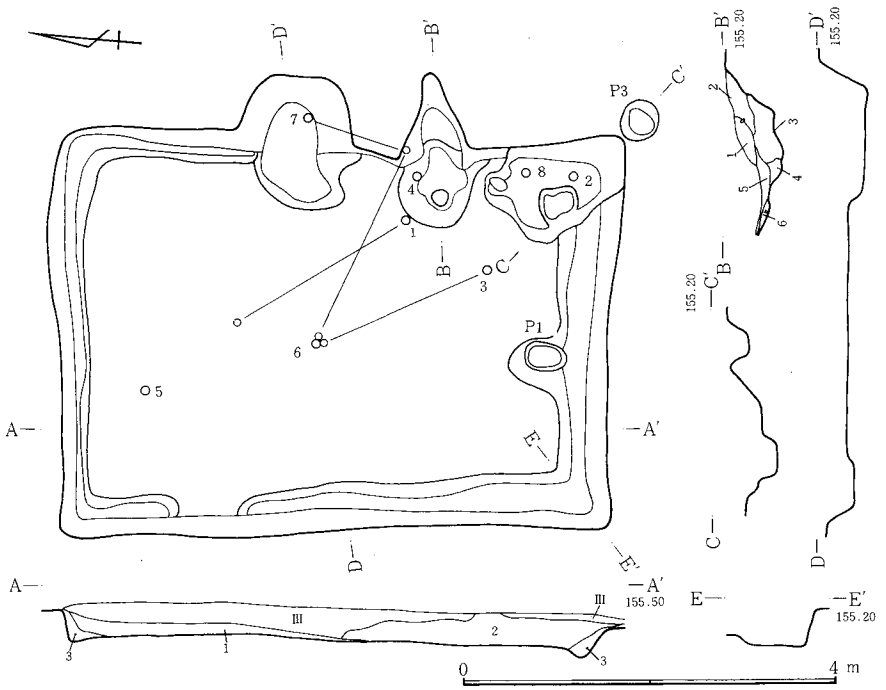
図－269　H－145号住居跡出土遺物

位置　西台地北東部やや南寄りのB15に所在し、南東緩傾斜地の縁に当る。　**形状**　北西部が著しく張り出した隅丸不整方形を呈する。規模は、東西方向2.9m、南北方向2.9～3.4mを測り、面積は9.2㎡である。長軸方向はN－13.5°－Eで、壁高は50～66

cmである。床面はほぼ平坦で、強く踏み固められていたが、周溝及び柱穴は検出されなかった。　**ピット**　南西部を除いて、壁外に12ケ所検出された。P_7・P_9は径50～60cmで、他は、径20～30cm、深さ15～50cm前後で多少のばらつきがあるが、本住居と何らかの関連を持つものと思われる。　**カマド**　東辺（A）・北辺（B）及び西辺（C・D）に4ケ所検出された。Aは全長100cm、袖部内幅43cm、燃焼部長43cmで、壁への掘り込み角度は50°である。Bは全長123cm、袖部内幅43cm、燃焼部長30cmで、壁への掘り込み角度は61°である。Cは全長110cm、袖部内幅56cm、燃焼部長45cmで、壁への掘り込み角度は86°である。さらに、西辺南側のDラインは70×50cmにわたって強く焼けていたのでカマド痕と考えられるものである。先後関係については、Aが最も新しいと考えられるが、他は不明である。　**貯蔵穴**　北西①及び南西②に2ケ所検出した。①は85×120cm、深さ22cm、②は84×116cm、深さ21cmの不整形に掘り込まれていた。　**遺物**　土師器甕(1)砥石(2)は北東部からの出土であるが、土器は、図示したものの他にカマドA内から土師器坏、甕が出土した。　（飯塚）

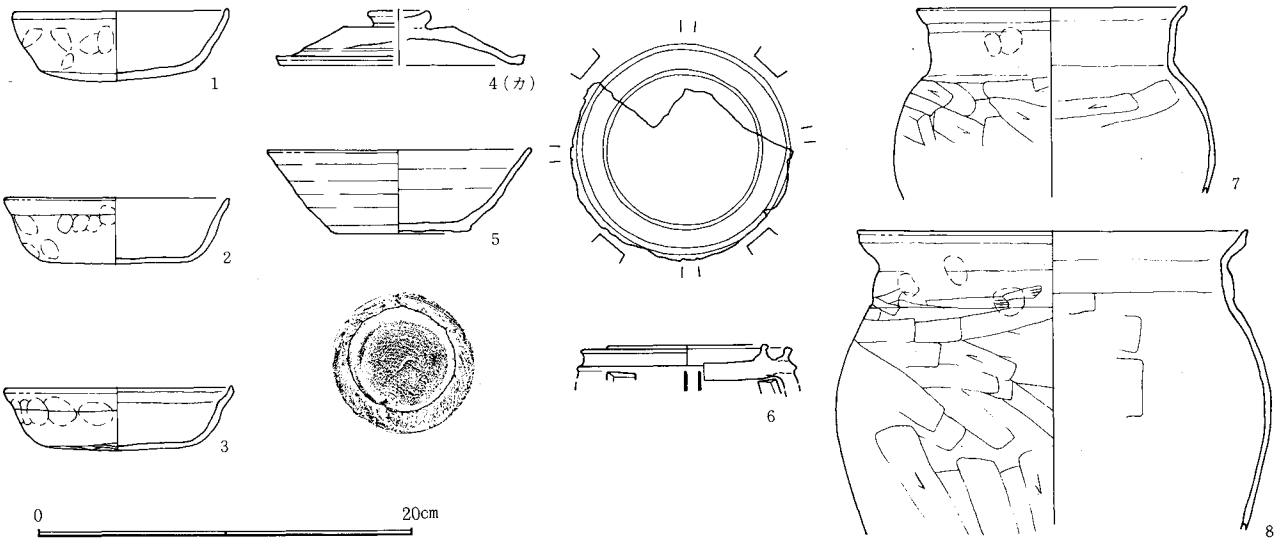
H147号住居跡（図—270、271　図版—17、89　表—137）（XI期）　**位置**　西台地の東部、地形は北より南へ傾斜し、また西より東へ傾斜するC8に所在する。付近には、東側に遺跡が集中し、土師器使用の住居跡、堀立柱建物跡が集落を作っている。

形状　南北5.5m、東西3.8mの長方形に近い住居である。面積は21.5m²で、住居の壁高は20～38cmである。幅3～44cm、深さ2～13cmの周溝が、ほぼ全周している。長軸方向はN—6°—Wで住居の四隅はほぼ直角に作っている。住居の床面は掘り方を住居の床面とし、踏み固めている。　**ピット**　住居内外に3個のピットが存在する。P_1、43×28cm、深さ27cm。P_2、140×106cm、深さ22cm。P_3、43×41cm、深さ22cmである。　**カマド**　東壁やや南寄りに所在する。壁外に98cm掘り込み、全長102cm、燃焼部長32cm、袖部内幅40cmのカマドを構築している。カマドの壁への掘り込み角度は60°で、住居床面とカマド燃焼部のレベル差は—28cmと、住居床面よりかなり低い。　**貯蔵穴**　住居の南東隅の壁ぎわに所在する。119×88cm、深さ34cmの規模を持ち、形状は三角形に近い形である。　**遺物**　カマド前より土師器坏(1)が、貯蔵穴内より土師器坏(2)と甕(8)が、カマド手前床より土師器坏(3)が、床中央より須恵器円面硯(6)が、床北より須恵器高台付埦(5)が出土している。　（江原）



1．黒褐色土。FP・C軽石、南側にロームブロック混入。2．暗褐色土。わずかにFP・C軽石、焼土粒混入。黒褐色土。褐色、暗褐色粒混入。　カマド　1．黒褐色土。浮石混入。2．焼土ブロック多量に混入。3．暗褐色土。焼土粒を多量に混入。4．3に類似。ローム小ブロック点在。5．暗褐色土。多量のローム塊、焼土混入。6．焼土粒とロームの混合土。

図—270　H—147号住居跡

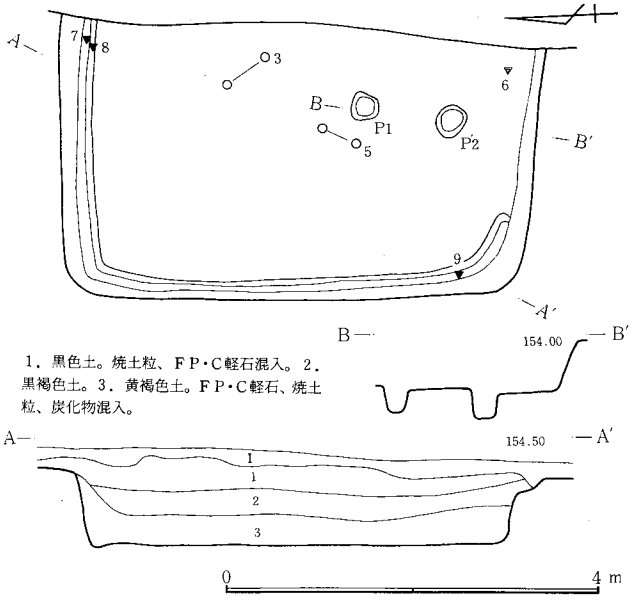


図—271　H—147号住居跡出土遺物

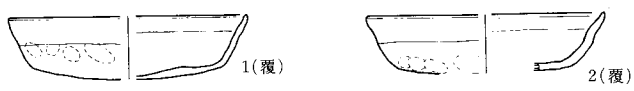
H148号住居跡（図—272、273　図版—17、89　表—138）　（X期）

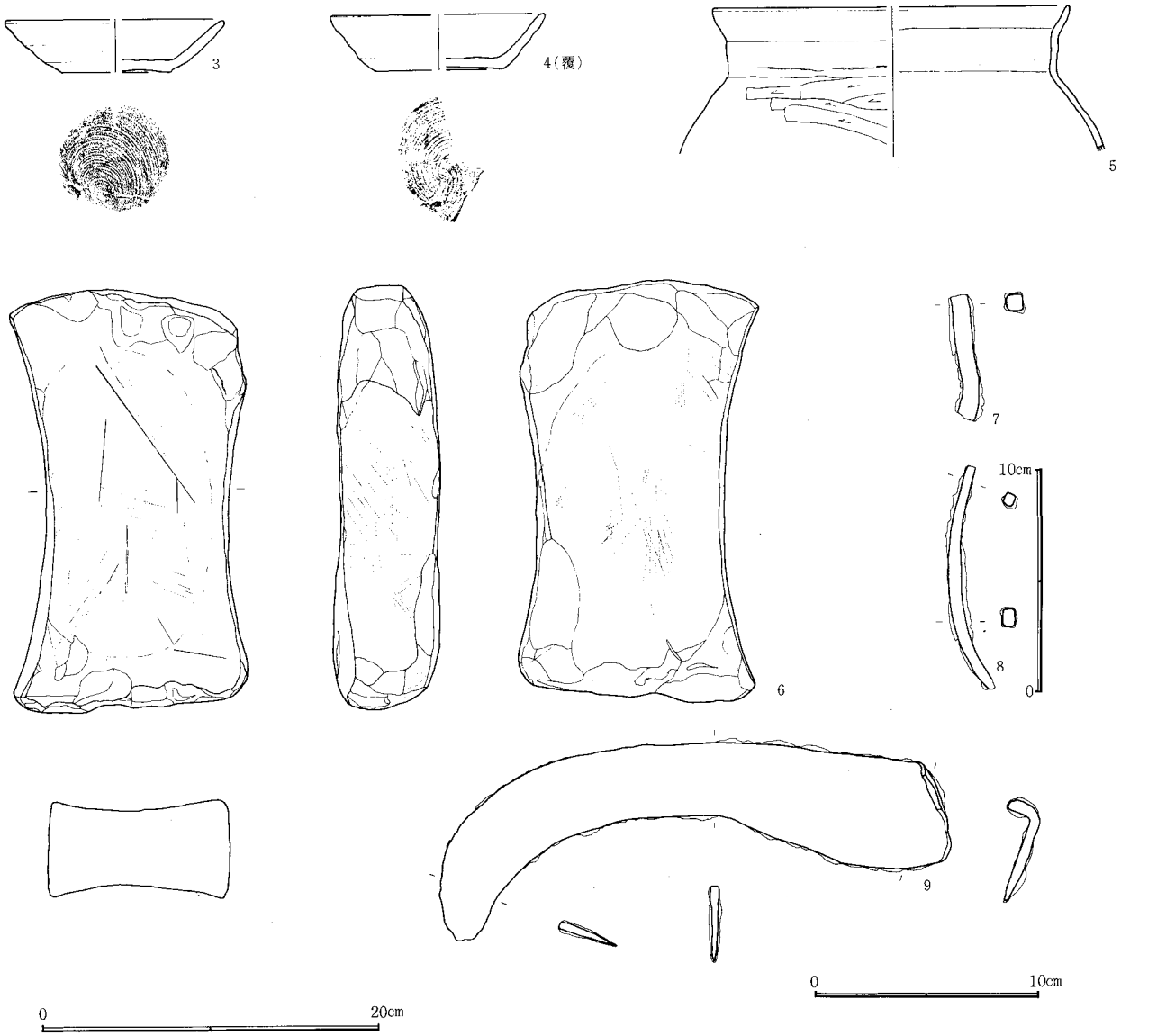
位置　西台地の東部中ほど、C 8に所在する。地形は北より南へ傾斜し、また西より東へ傾斜する。住居の東半分は道路となり調査ができなかった。　**形状**　南北4.7m、東西2.8m以上の規模を持つ方形の住居である。面積は調査部分のみで12.7m²である。壁高は53～82cmと高く、周溝は幅14～20cm、深さ3～6cmで北壁、西壁と南壁の西側の一部に巡る。長軸方向はN—4°—Eと考えられる。床面はローム層を踏み固め、ガリガリで硬い状態であった。　**ピット**　住居内にピットが2個検出された。P_1、26×25cmで深さ24cm。P_2、31×26cmで深さ33cmである。　**カマド**　住居跡の東半分を欠くため不明である。　**遺物**　床面に密着して坏(3)、甕(5)、砥石(6)、鉄製棒状遺物(7・8)、鎌(9)が出土している。砥石(6)は良く使用されたらしく両端が凹んでいる。遺物は比較的壁の直下よりの出土が多い。

（江原）



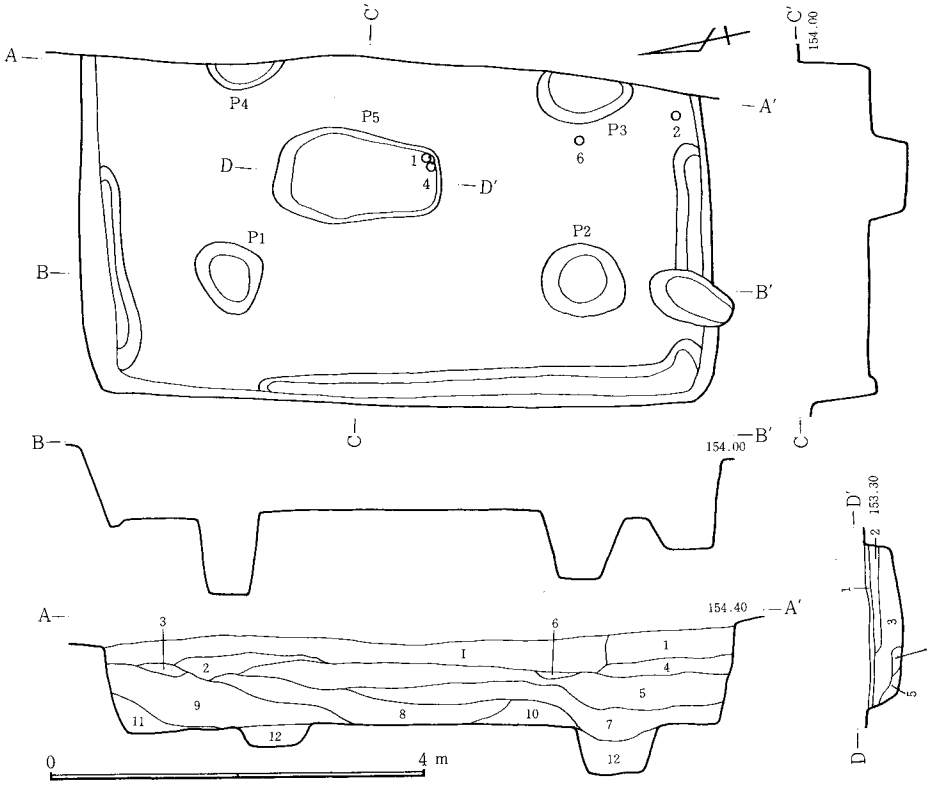
図—272　H—148号住居跡





図—273　H—148号住居跡出土遺物

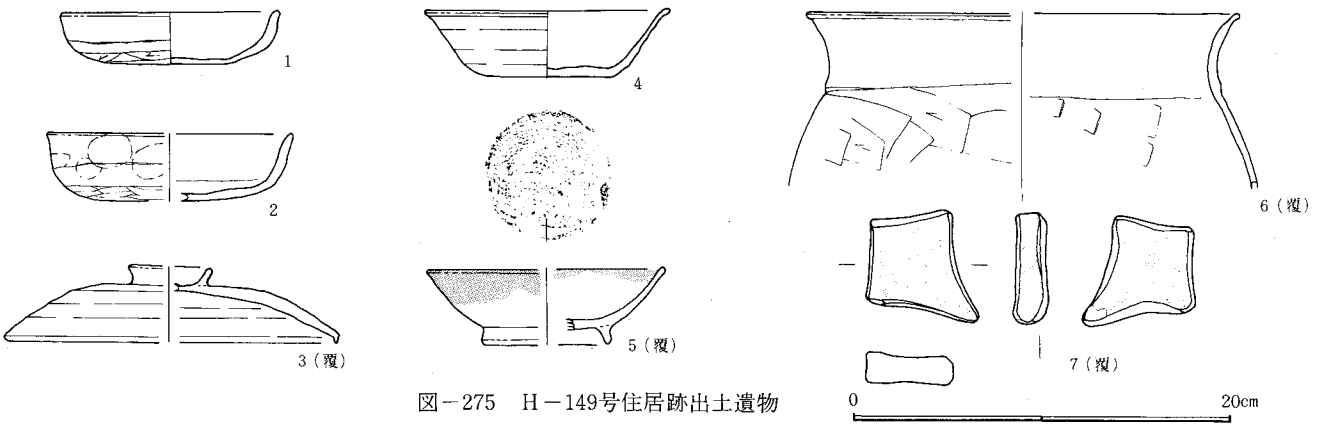
H149号住居跡（図—274、275　図版—17、89　表—139）　（IX期）



1．褐色土。堅い。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．4．焦げ茶褐色土。5．褐色土。6．攪乱。7．焦げ茶褐色土。焼土、粘土粒混入。8．褐色土。ロームブロック混入。9．黒色土。炭化物、焼土、浮石粒混入。10．桃灰色焼土。炭化物混入。11．焦げ茶・黄土褐色土。下部に焼土混入。12．焦げ茶色土。焼土粒混入。　**床下土坑**　1．黒色土。ロームを含む貼床部。2．黒褐色土。ロームブロック混入。3．黒褐色土。4．黄褐色土。ロームブロック混入。5．黒褐色土。

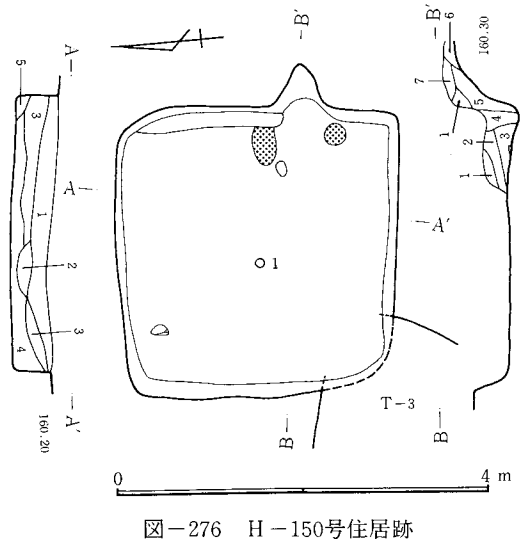
図—274　H—149号住居跡

位置　西台地の東部中ほどB7。H148号住居跡の南に所在する。地形は北より南へ傾斜し、また西より東へ傾斜する。住居の東半分は道路のため未調査である。　**形状**　南北6.3m、東西3.6m以上である。面積は21.0m²（調査部分のみ）以上である。壁高56～100cmと高く、周溝は幅5～17cm、深さ7～10cmで北壁西2分の1、西壁南3分の2、南壁中央2分の1にめぐっている。長軸方向はN—16°—Eである。床面はローム層を踏み固めガリガリの硬い状態であった。　**ピット**　床面には柱穴と考えられる四つの大きなピット（P_1～P_4）が存在する。P_1は72×65cm、深さ85cm。P_2は86×78cm、深さ73cm。P_3は100×53cm、深さ57cm。P_4は77×30cm、深さ21cmである。P_3、P_4は道路のため完掘ではない。　**遺物**　住居内より坏、甕、スラグ、蓋、高台埦、砥石等が出土している。　**その他**　P_5は床下土坑と考えられる。175×96cmで深さ43cm。内より坏（1・4）が出土。　（江原）



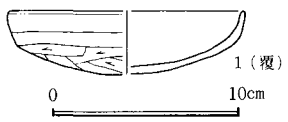
図—275　H—149号住居跡出土遺物

H150号住居跡（図—276、277　図版—17、90　表—140）　（VII期）



図—276　H—150号住居跡

位置　西台地上のA15に所在する。15軒が一グループとなっている内の一軒で東にH145号住居跡が隣接している。　**形状**　平面は正方形の2.8×2.7mで、面積は7.7m²である。壁現高は地層断面図から44cmを測る。周溝は認められない。長軸方向はN—12°—Eである。　**床面**　踏み固め部分は不明、貼床は地層断面図から無いものと推定される。　**ピット**　床面に柱穴は認められない。　**カマド**　東壁の中央からやや南寄りに認められる。壁からの掘り込み長は56cmと短かい。袖部内幅42cm、燃焼部20cmである。燃焼部は床面より11cm低く、壁への

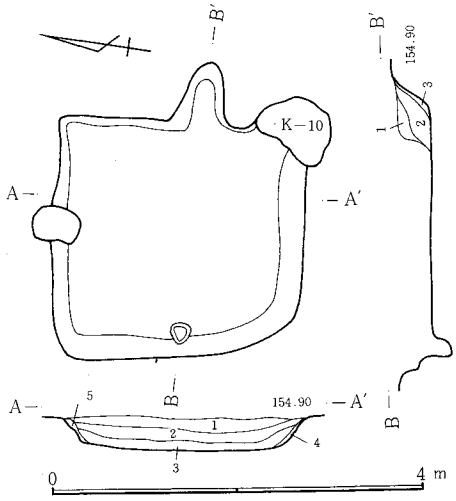


図—277　H—150号住居跡出土遺物

1．黒色土。FP・C軽石、ロームブロック少量混入。2．黒色土。C軽石、少量のロームブロック、焼土混入。3．黒色土。多量のFP軽石（φ2cm）・少量のC軽石混入。4．黒色土。5．茶褐色土。多量のローム漸移層、少量のC軽石混入。　**カマド**　1．灰色土。粘土主体。2．茶褐色土。焼土、炭化物、ロームブロック（φ5mm）灰、FP軽石混入。3．灰褐色土。灰主体。4．ロームブロック、灰、焼土混入。5．黄褐色土。ローム漸移層、灰、焼土、炭化物混入。6．黄褐色土。C軽石、ローム混入。7．黒褐色土。FP・C軽石、少量の焼土、炭化物、灰混入。

掘り込み角度は67°と直に近い。カマド袖部に粘土分布がみられる。左は22×43cmで、右は25×24cmである。位置からみて、カマ掘りで破壊されたカマド袖部である。貯蔵穴は認められない。　**位置**　土師器坏(1)が出土している。　**重複関係**　T－3と重複。T－3の使用面下より検出されたのでT－3が新しいと考えられる。　(中村)

H151号住居跡(図－278　図版－17)

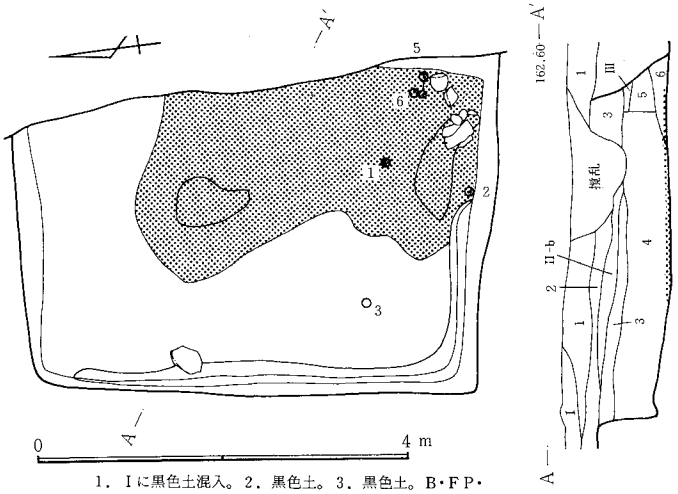


1．黒褐色土。多量のC軽石、ローム、少量の焼土混入。2．黒褐色土。3．黒褐色土。下部にロームブロック多量に混入。4．黒褐色土。ローム多量に混入。5．褐色土。ローム質。　**カマド**　1．黒褐色土。少量のC軽石混入。2．黒褐色土。少量のC軽石混入。焼土(φ2㎜)点在。3．黒褐色土。ローム混入。

図－278　H－151号住居跡

位置　西台地C8に位置する。同時期に属すると考えられる住居跡が、径約100mの円を作るように配置している。　**形状**　正方形を呈し、規模は、南北2.2m、東西2mで、床面積は4.9㎡を測る。壁高は最高35cm最低29cm、地層から35cmである。長軸方向はN－9.5°－Wである。　**ピット**　床面に1カ所。西壁中央下。規模は20×20cmで深さ10cm。柱穴と考えられる。　**カマド**　東壁南寄りに位置する。全長74cm、燃焼部長50cm、袖部内幅40cmであり、壁外掘り込み74cm、壁への掘り込み角度は58°であった。床面とカマドの燃焼部のレベル差－4cmである。　**遺物**　なし。　**テフラ**　覆土は4層に分かれ、1層にC軽石を多量に混入している。床面よりは18cm。2層にもC軽石を含む。　**重複関係**　K－10と重複する。K－10の柱穴が住居内に存在していること、土層等から、本遺構が旧い。　(福田)

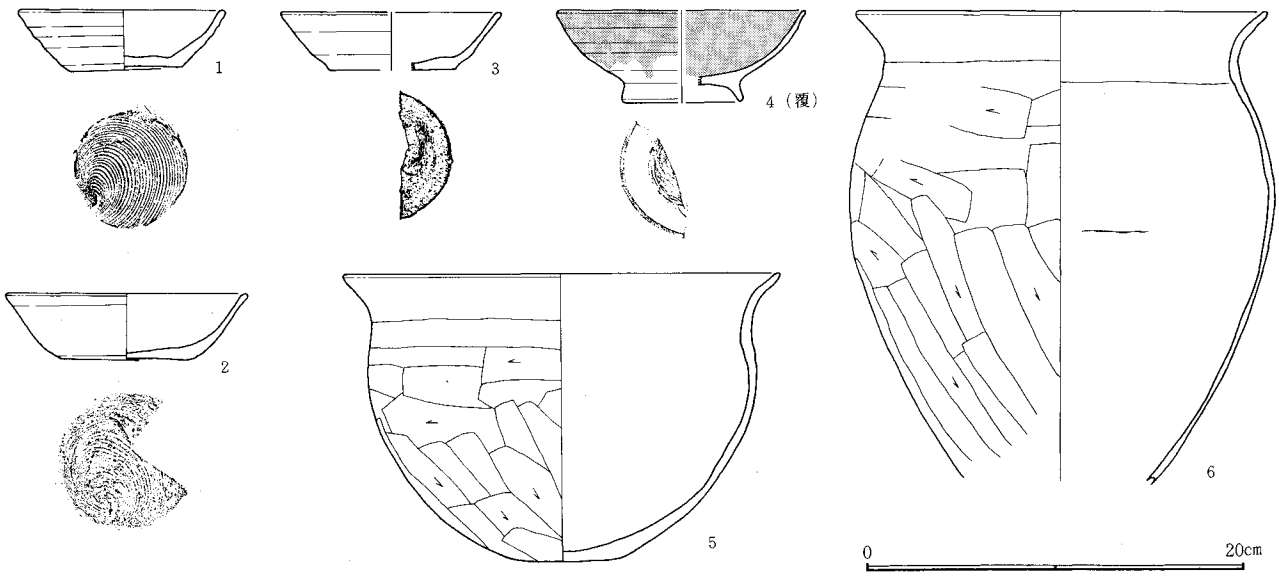
H152号住居跡（図－279、280　図版－17、90　表－141）　(IX期)



1．Iに黒色土混入。2．黒色土。3．黒色土。B・FP・C軽石混入。4．黒褐色土。5．黒色土。FP・C軽石、炭化物、少量の焼土混入。6．黒褐色土。炭化物、焼土混入。

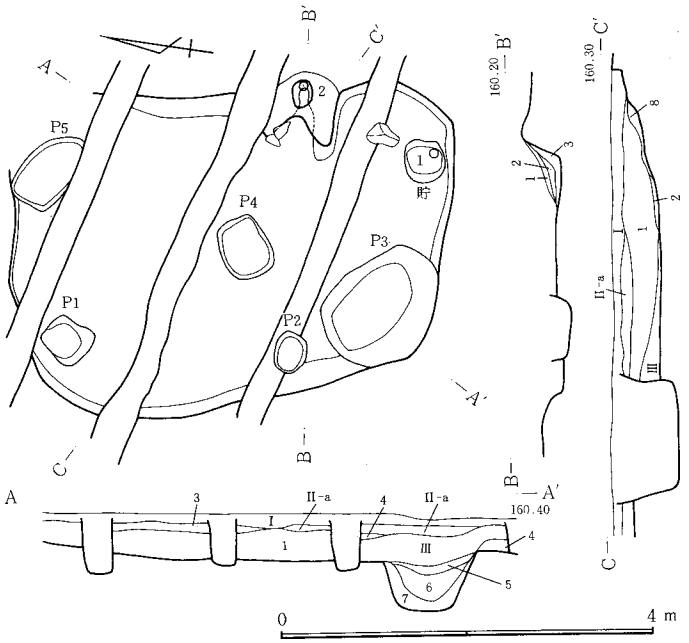
図－279　H－152号住居跡

位置　ホ23。西台地とは沢を隔てる中央の台地上の南への緩斜面にある。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北4.5m、東西3.0mである。東壁はW－11と重複しており、ほとんど残存していない。北壁と南壁は東にむかってひらきぎみで、中央からさらにひろがっている。長軸方向はN－8.5°－E、面積は14.5㎡、壁現高0～59cm(W－11との重複による）である。西壁と、南壁の2分の1に周溝をめぐらしている。幅は4～9cmで深さは4～6cmである。床面東側には広く焼土が散布しており、中央部に焼土が厚く積もった場所がある。　**カマド**　W－11との重複により失なわれている。　**遺物**　カマド前と思われるところから土師器甕(6)鉢(5)が、そのやや西より須恵器坏(1)が、南壁下より須恵器坏(2)、南西隅より須恵器坏(3)が覆土中より須恵器灰釉椀(4)が出土している。住居南東隅からは土器や石の出土が多くみられた。　(井野)



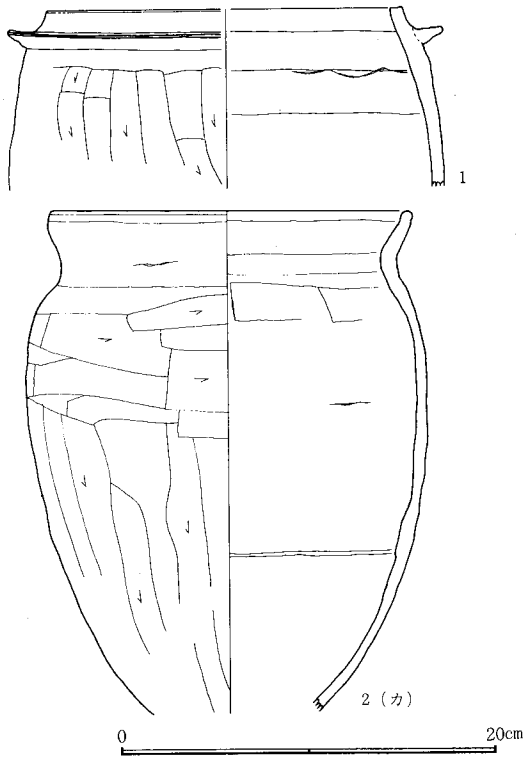
図－280　H－152号住居跡出土遺物

H153号住居跡（図—281、282　図版—17、90　表—142）　（XII期）



1．黒色土。ローム、FP・C軽石多量に混入。2．1より多量のローム混入。3．黒色土。FP・C軽石混入。4．黒褐色土。5．黒色土。FP・C軽石、ロームブロック混。6．黒褐色土。FP・C軽石、多量のローム、少量のロームブロック混入。7．黒褐色土。FP・C軽石、多量のローム混入。8．焼土と粘土の混合土。　**カマド**　1．黒褐色土。焼土粒混入。2．褐色上。焼土粒少量混入。3．褐色土。多量の焼土粒混入。

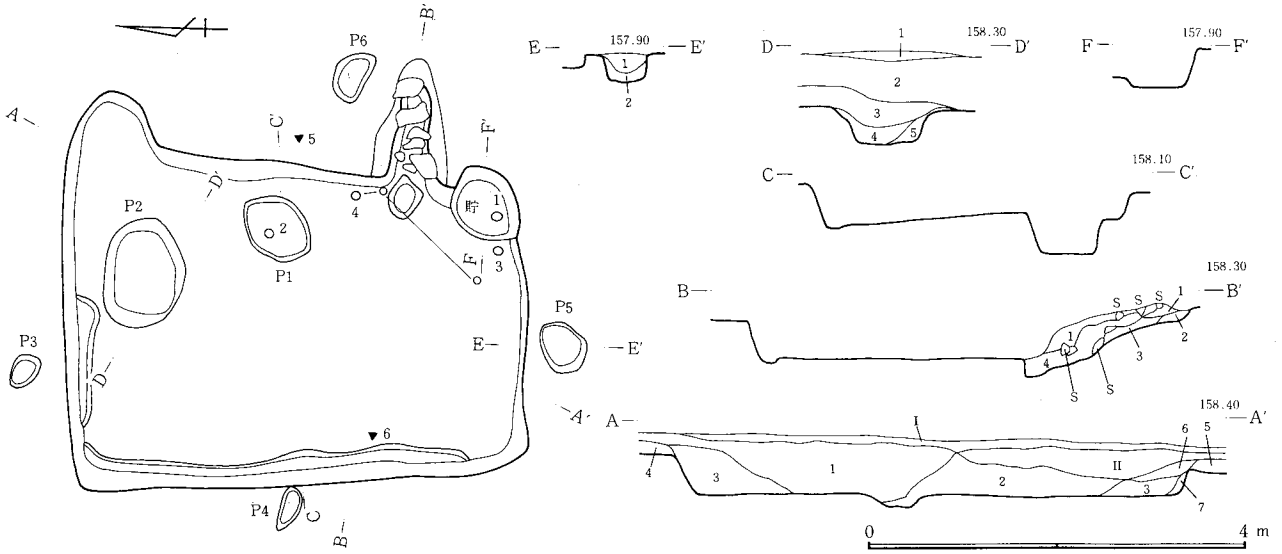
図—281　H—153号住居跡



図—282　H—153号住居跡出土遺物

位置　E12区にあり、W—1とW—7の交点付近に位置する。　**形状**　三条のカマ掘りによって切られており、一部不明な点もあるが、南北4.4m、東西2.9mの長方形で、四隅は丸味が強く整った方形ではない。面積は11.8m²、長軸方向はN—5.5°—Wである。周溝は検出されていない　**ピット**　遺構四隅と中央部に計5個のピットが検出された。四隅の内、南東のものは貯蔵穴と思われる。P_1からP_5は、いずれも方形で、P_1、50×41cmで深さ51cm。P_2、40×35cmで深さ18cm。P_3、134×76cmで深さ51cm。P_4、65×52mで深さ41cm。P_5、90×50cmで深さ40cmの規模である。中央のP_4をはさんだP_3とP_5は大きく、P_2は浅い。地層断面に出ているピットは、P_3である。いずれのピットもピット上に貼床構造は認められなかった。　**カマド**　東壁南寄りで、左袖に山石が2個残り、煙道が比較的よく残っていた。煙道出口には甕(2)を使用していたと思われる。全長96cm袖部内幅50cm、燃燃部長50cm、壁外掘り込み長38cmを測る。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、44×41cmで深さ31cmと他のピットより浅い。P_1と対称的な位置にある。他のピットにはない遺物が出土している。　**遺物**　貯蔵穴内より羽釜(1)が出土し、カマド煙道の出口として使用したと思われる甕(2)が、煙道の続きに口縁を下向きに理設されていた。　（川崎）

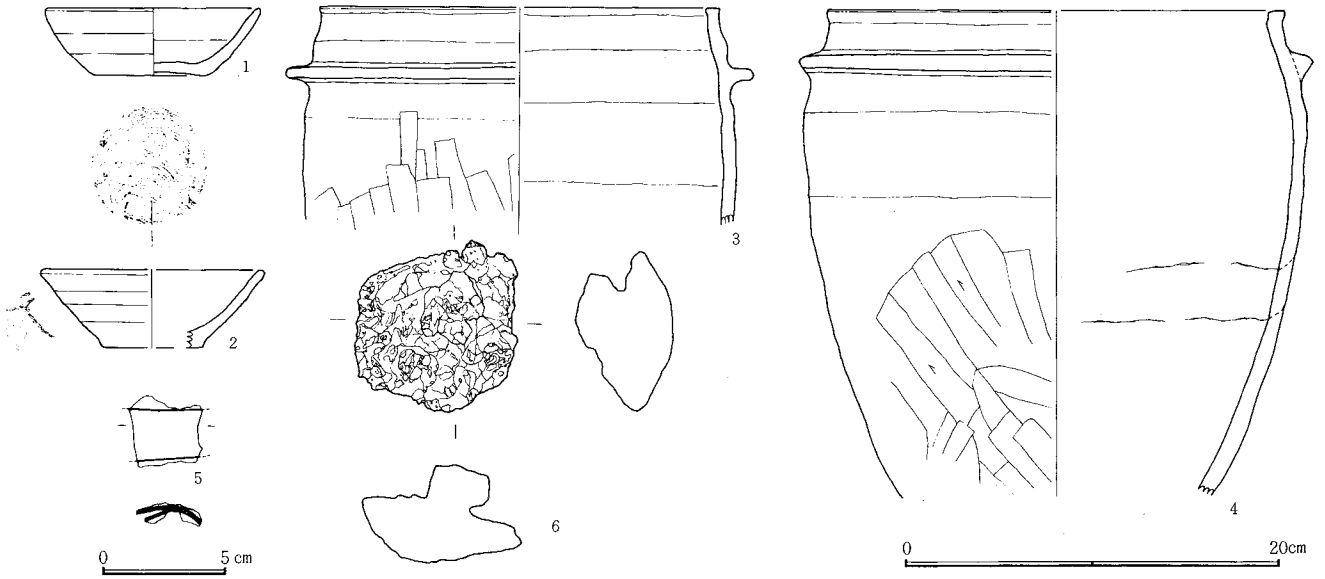
H154号住居跡（図—283、284　図版—17、90　表—143）　（XIII期）



1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム混入。3．黒色土。ローム粒、FP・C軽石混入。4．黒色土。C軽石混入。5．黒褐色土。6．黒色土。FP・C軽石混入。7．黒色土。ローム多量に混入。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石、焼土粒混入。2．黒色土。3．1とロームの混合土。4．赤色土。焼土、FP・C軽石、ローム混。**P_2**1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．黒色土。C軽石、ローム塊(φ1cm)混入。4．ローム漸移層と黒色土の混合。5．ローム漸移層。C軽石混。**P_5**1．黒褐色土。2．褐色土。

図—283　H—154号住居跡

位置　西台地中央やや東寄りのC12に所在し、南東緩傾斜地の縁に当る。　**形状**　北東隅に55×70cmほどの半円形の張り出し部を持つが、比較的均整のとれた南北方向に長い隅丸方形を呈する。規模は、東西3.1m、南北4.7mを測り、面積は約14.9㎡である。長軸方向は磁北と一致しており、壁高は29～50cmである。床面はほぼ平坦で、強く踏み固められており、北壁の西半部及び西壁には幅約20cm、深さ2～7cmの周溝がめぐっていた。　**ピット**　床面に2ケ所、壁外に4ケ所検出された。P_1は63×85cm、深さ39cm、P_2は85×112cm、深さ40cmであるが、性格は不明である。P_3～P_6は、径40～50cm前後、深さ12～26cmで、あるいは柱穴になるものかも知れない。P_3、P_5はほぼ対称的な位置にあるが、全体的には不揃いな配置である。　**カマド**　東壁の中央から1.4mほど南寄りの位置に、角礫と粘土を使用して構築されていた。全長170cm、袖部内幅46cm、燃焼部長86cmで、壁への掘り込み角度は29°である。床面よりも燃焼部は10cmほど低く、中央部には支石が立てられたまま残っていた。また、内壁及び天井部にも6個の礫が残っていた。　**貯蔵穴**　南東隅に、径67～84cm、深さ26cmの不整円形に掘り込まれていた。　**遺物**　カマド及び貯蔵穴周辺に集中して出土した。須恵器坏(1)は貯蔵穴内より、墨書土器(2)はP_1の内から、羽釜(3・4)はカマド左手と貯蔵穴の西より、鉄製品(5)は住居外カマド北より、鉄滓が西壁下より出土した。　(飯塚)

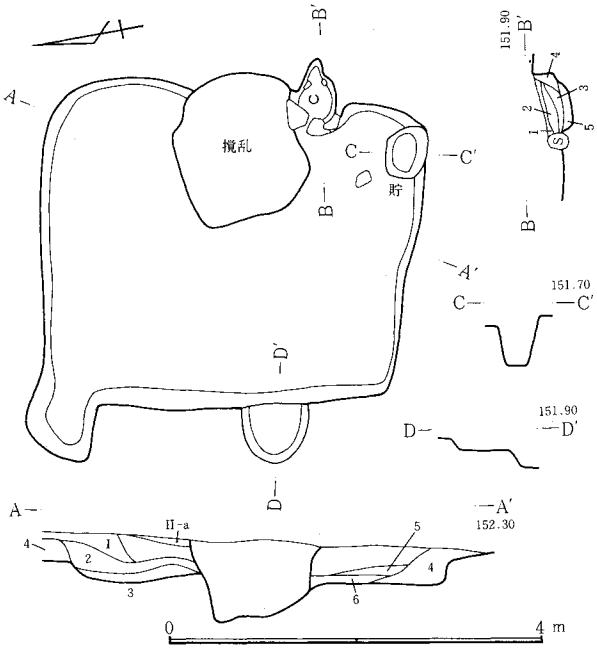


図－284　H－154号住居跡出土遺物

H155号住居跡（図－285、286　図版－18、90　表－144）　(XIII期)

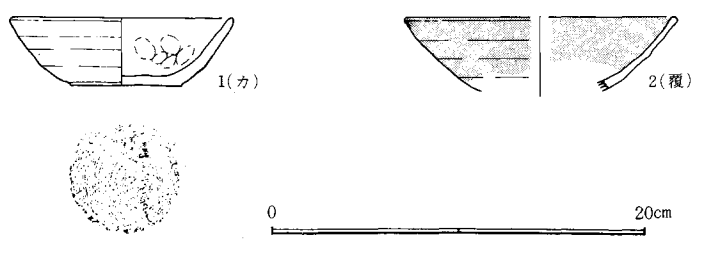
位置　西台地南西端に近いP1にある。　**形状**　南北3.7m東西3.0mの長方形で、面積は11.4㎡ある。長軸方向は、N－15°－Eである。西壁と北壁はほぼ直線で、南壁は中央部分で曲がり、やや外側に広がっている。東壁は攪乱をうけているが、外側に弧状になっていると思われる。北東隅は丸味が強い。北西隅が西側に張り出している。北壁を延長する形で、幅40cm、奥行60cmにわたり床面よりやや高く張り出し部がある。床面との段差はない。また、カマドの反対側の西壁には、床面から21cmの高さに55×55cm深さ13cmの棚状施設がある。立ち上がりは非常にゆるい。張り出し部は本遺構につくが、棚状施設は不明。性格は共に不明である。

カマド　東壁南寄りにあり、焚口と煙道の一部に石が5石残る。全長80cm、燃焼部長40cm、袖部内幅15cm、壁外掘り込み長55cm、掘り込み角度75°。　**貯蔵穴**　南東隅南壁際にあり、51×31cm深さ24cmを測る。　**遺物**　カマドの左袖石の内側より、土師質須恵器坏の完形品(1)が出土している。　(川崎)



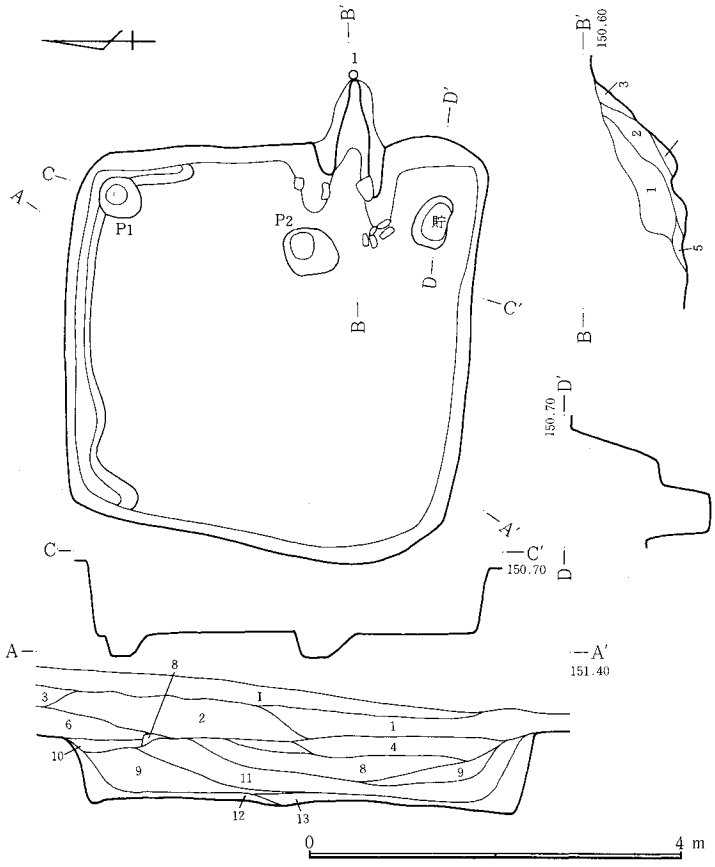
1．黒色土。FP・C軽石混入。2．1に飴色土ブロック、ローム粒少量混入。3．黒色土。FP・C軽石、多量のローム混入。4．黒褐色土。5．黒褐色土。FP・C軽石混入。6．黒褐色土。FP・C軽石わずか混入。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石、灰混入。2．白色粘土と灰の混合土。3．2に焼土少量混入。4．2が焼けてやや赤い。5．2に黒色土混合。

図－285　H－155号住居跡



図－286　H－155号住居跡出土遺物

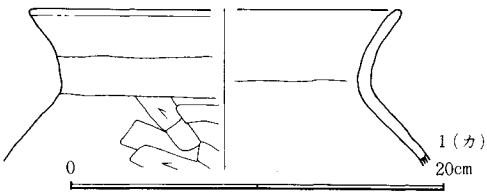
H156号住居跡（図—287、288　図版—18、90　表—145）　（V期）



1．黒褐色土。FP・C軽石、少量の焼土粒、炭化物混入。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．黒色土。FP・C軽石混入。4．黒褐色土。FP・C軽石混入。5．4に褐色土混入。6．黒色土。FP、多くのC軽石混入。7．6に類似でやや黒い。8．黒色土。9．黒色土。FP・C軽石混入。10．黒色土。黒褐色が層状に混入。11．黒褐色土。FP・C軽石混入。12．黒褐色土。粘性あり、FP・C軽石混入。13．黒褐色土。粘性強い。多量のFP・C軽石混。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石、焼土粒混入。2．黒褐色土。焼土粒、FP・C軽石、灰混入。3．黒褐色土。焼土多量に混入。4．焼土と黒褐色土の混合土。5．1に灰、焼土混入。

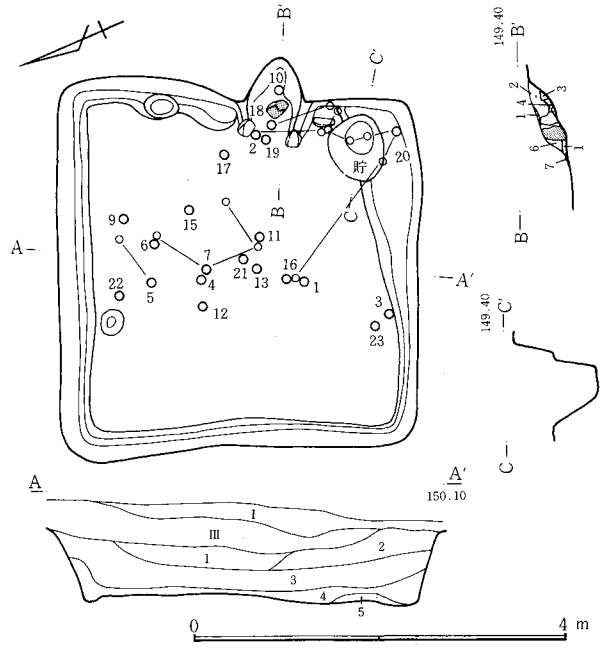
図—287　H—156号住居跡

位置　西台地の南西部、南へゆるやかに傾斜するN101に所在する。付近には土師器使用の住居が集落として存在し、その東に位置する所にある。　**形状**　南北4.0m、東西3.9m（最大幅）～3.7m（最小幅）で、台形に近い形の住居である。面積は約17.2m²である。壁高は60～80m²で、周溝は幅5～27cm、深さ2～7cmで北壁下と、東壁下北4分の1程に存在する。住居の長軸方向はN—5°—Eである。床面は貼り床とし、踏み固めている。床面下構造を見るため床面下を立ち割ってみたが、遺構は見られなかった。　**ピット**　ピットはカマド前(P_2)と、北東隅(P_1)に存在した。P_2、64×56cm、深さ32cm。P_1、43×41cm、深さ24cmであった。　**カマド**　東壁やや南寄りに存在し、構築材として右袖に自然石1個、左袖に自然石2個を立ててカマドを構築していた。壁外へ104cm掘り込み、全長168cm、燃焼部分長114cm、袖部内幅44cm。壁への掘り込み角度は47°、床面とカマド燃焼部のレベル差は＋7cm。　**貯蔵穴**　南東隅。規模は55×33cm、深さ54cmで、形状は楕円形であった。　**遺物**　カマド上部より土師器甕(1)が出土した。　**テフラ**　住居の覆土中にFP・C軽石の混入が見られた。　（江原）



図—288　H—156号住居跡出土遺物

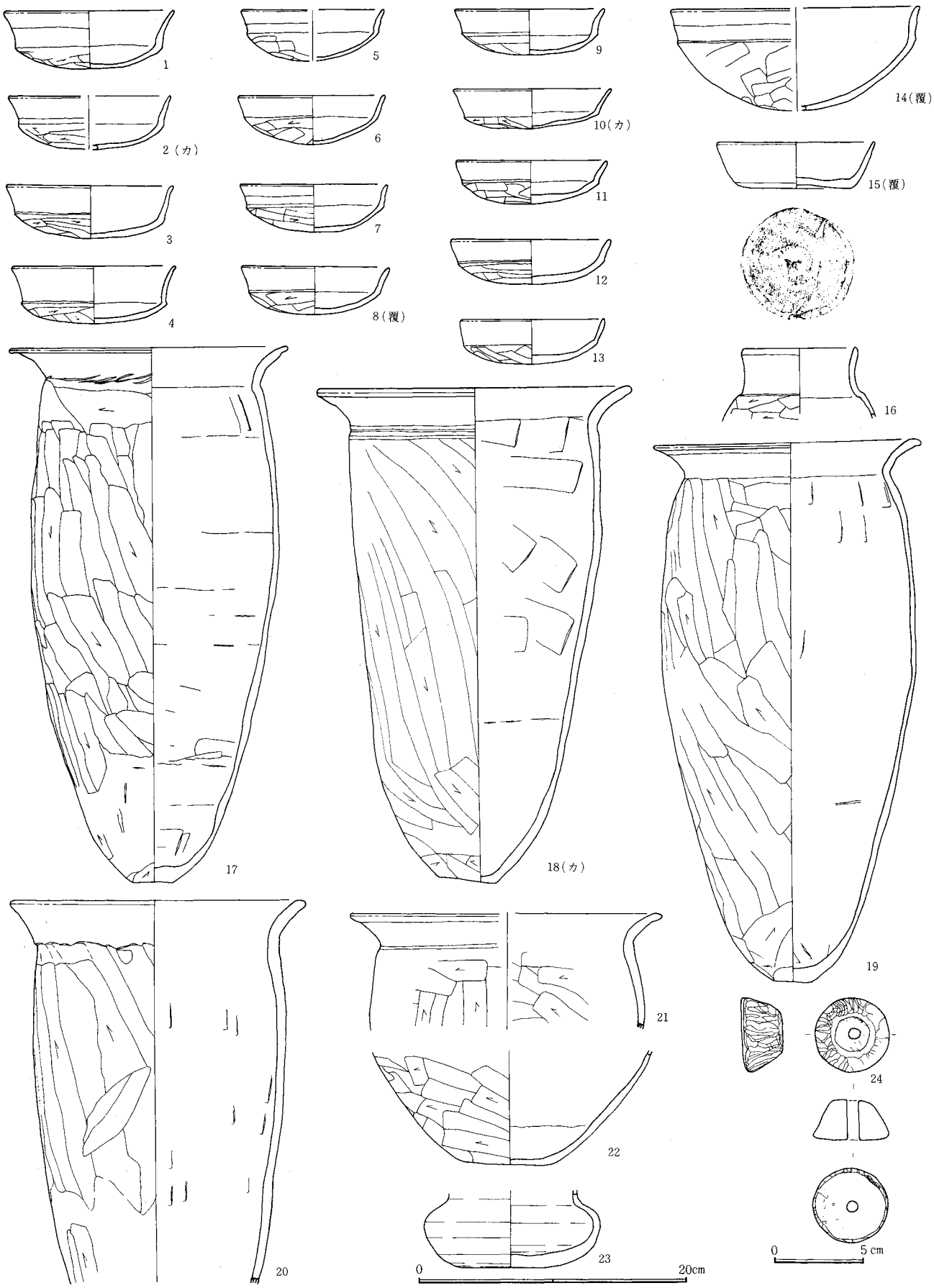
H157号住居跡（図—289、290　図版—18、91　表—146）　（III期）



図—289　H—157号住居跡

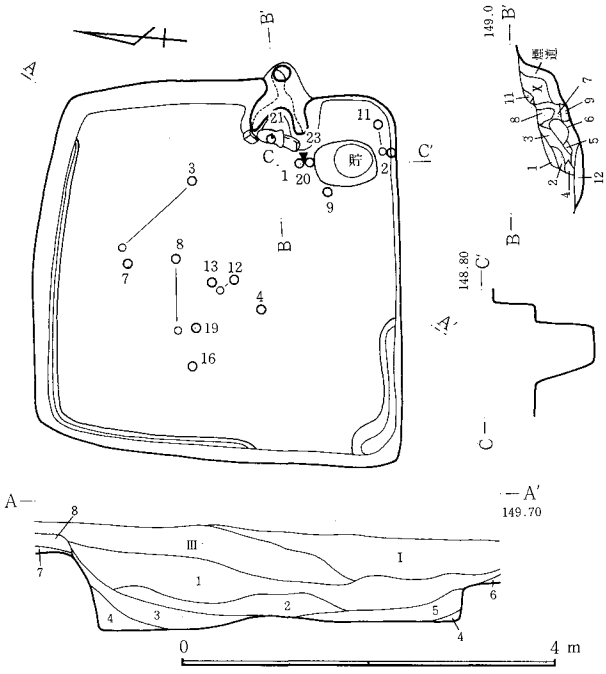
位置　西台地南西端に近いP101にあり、周囲には住居跡が密集している。　**形状**　南北3.5m、東西3.4mの正方形で、北西隅がやや鋭角となり、その分西壁が内側に張り出している。他の壁はほぼ直線で、各壁ともしっかりとした掘り込みである。長軸方向はN—23°—Eで、面積は12.9m²。周溝はカマド部分を除く全周にまわっている。幅2～50cm、深さ4～15cmの規模で、南西隅をはさむそれぞれ1mほどは狭く浅い。南壁下の東3分の2は、貯蔵穴に向って広くなり、幅50cmまで開く。深さは10cm程度である。東壁周溝内及び北壁に隣接して、径30cm、深さ10cmほどの小穴があり、周溝はそれぞれ内側にその部分で張り出している。　**カマド**　東壁南寄りにある。焚口には人頭大の細長い石を使用してあり、原位置から動いていない。左袖石は壁から14cm、右袖石は30cm内側にある。支石は東壁の延長線上にある。全長80cm、燃焼部長34cm、袖部内幅38cm、壁外掘り込み53cm。カマド前に人頭大の石3石があった。　**貯蔵穴**　南東隅のやや内側にあり71×60cm、深さ45cm。西側は緩く落ちこむ。　**遺物**　カマド内より長胴甕(18)、カマド左袖石前の床面より長胴甕(17)・(19)、南東隅より長胴甕(20)が出土している。須恵器小壺(23)は南壁直下より坏(3)とともに出土した。他は住居中央部の床面よりやや高いレベル（3～15cm）から集中的に出土している。　（川崎）

1．黒色土。FP・C軽石、黒褐色土混入。2．IIIに類似で黒褐色土の混入度低い。3．黒色土。FP・C軽石、焼土混入。4．黒褐色土。5．褐色土ブロック。　**カマド**　1．黒色土。2．黒色土。浮石、微量の焼土粒混入。3．褐色土。微量の焼土粒混入。4．黒灰色土。少量の焼土粒混入。5．灰黒色土。焼土粒混入。6．黒色土。焼土粒混入。7．桃色焼土。



図－290　H－157号住居跡出土遺物

H158号住居跡（図—291、292　図版—18、92　表—147）　（IV期）

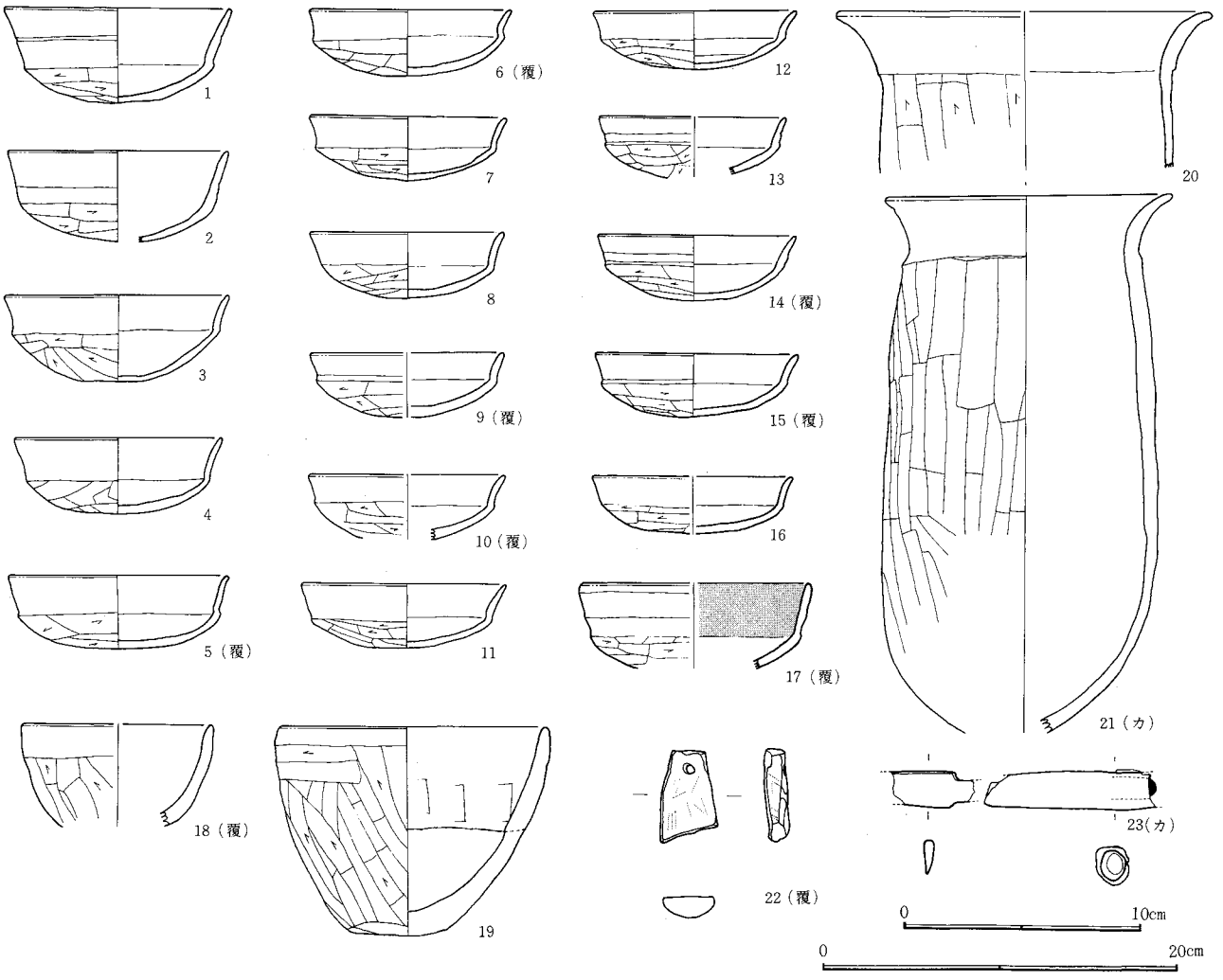


図—291　H—158号住居跡

位置　西台地の南西端P102にある。藤沢川左岸の台地縁にあり、周囲には住居跡が密集している。　**形状**　南北3.6m、東西3.7mの正方形である。北壁はやや短かく、北西隅が鈍角に開く。各壁とも直立し非常にしっかりした掘り形である。面積12.9m²、長軸方向N—2°—Wである。周溝は西壁の北側3分の2と北壁の大部分、および南西隅から南壁沿いに1.4mでる。北側の幅は狭く（5cm内外）、深さ10cmで、南側のそれは広く（30～20cm）、深さ5～10cmである。　**カマド**　東壁南寄りに位置し、保存状態が良好であった。焚き口は、両袖に山石を用い上部に長胴甕(21)を渡してある。左袖石は動いていないと思われ、右袖石が内側にずれており、長胴甕も右を下に傾いていた。両袖ともロームを掘り残してつくられ、煙道もよく残っている。全長88cm、燃焼部長60cm、袖部内幅34cm、壁外掘り込み長43cm、壁への掘り込み角度82°。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、63×47cm、深さ37cm。カマド側の傾斜は緩く、南壁は直に掘られる。　**遺物**　カマドの焚き口を構成する長胴甕(21)は、ほぼ完形品。右袖石の前より土師器坏(1)（完形）、その上より鉄製刀子(23)と甕の口縁部(20)が出土している。その他の完形遺物は(3)(7)(8)(12)(11)がある。(17)は内黒土器で一括遺物。カマド内より出土の他は、住居中央より西側の、西壁から1.5mほど離れた所から帯状に出土し、床面から10数cm高い。

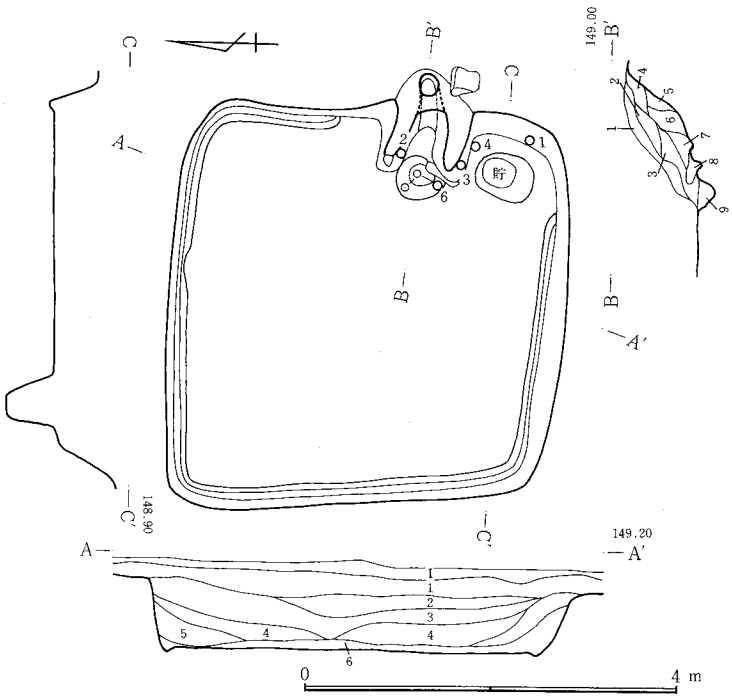
（川崎）

1．黒色土。FP・C軽石、若干のローム粒、焼土混入。2．灰白色土。3．黒色土。FP・C軽石、ローム粒混入。4．黒色土。ローム粒多量に混入。5．黒色土。FP・C軽石、少量の焼土粒混入。6．7．黒色土。　**カマド**　1．黒色土。ローム粒、焼土粒少量混入。2．桃色黒褐色土。ローム粒、焼土混入。3．褐色土。焼土粒、ローム粒、黒色灰混入。4．褐色ローム。焼土。黒灰色土混入。5．ローム。微量の焼土、黒灰色土混入。6．黒色灰。焼土混入。7．3に類似だが明るい。8．赤黒色灰。焼土粒混入。9．桃色灰。焼土混入。10．ローム。焼土粒混入。11．ローム。焼土粒混入。12．黒色灰。焼土混入。



図—292号　図—292　H—158号住居跡出土遺物

H159号住居跡（図—293、294　図版—18、92、93　表—148）　（III期）



位置　P102。藤沢川左岸の台地の縁に近く、周囲に住居跡が密集している。　**形状**　南北3.9m、東西4.0mのひし形に近い正方形で、南東隅は丸く北西隅は鋭角、南西と北東隅は鈍角に開く。各壁とも直線で、壁は直に掘り込まれている。面積は14.6m²、長軸方向N—5°—Eである。周溝はカマドの北45cmと貯蔵穴の周囲をのぞいてほぼ全周をめぐっている。幅3～14cm、深さ1～8cmで、北壁の中央東寄りで極端に細くなる。

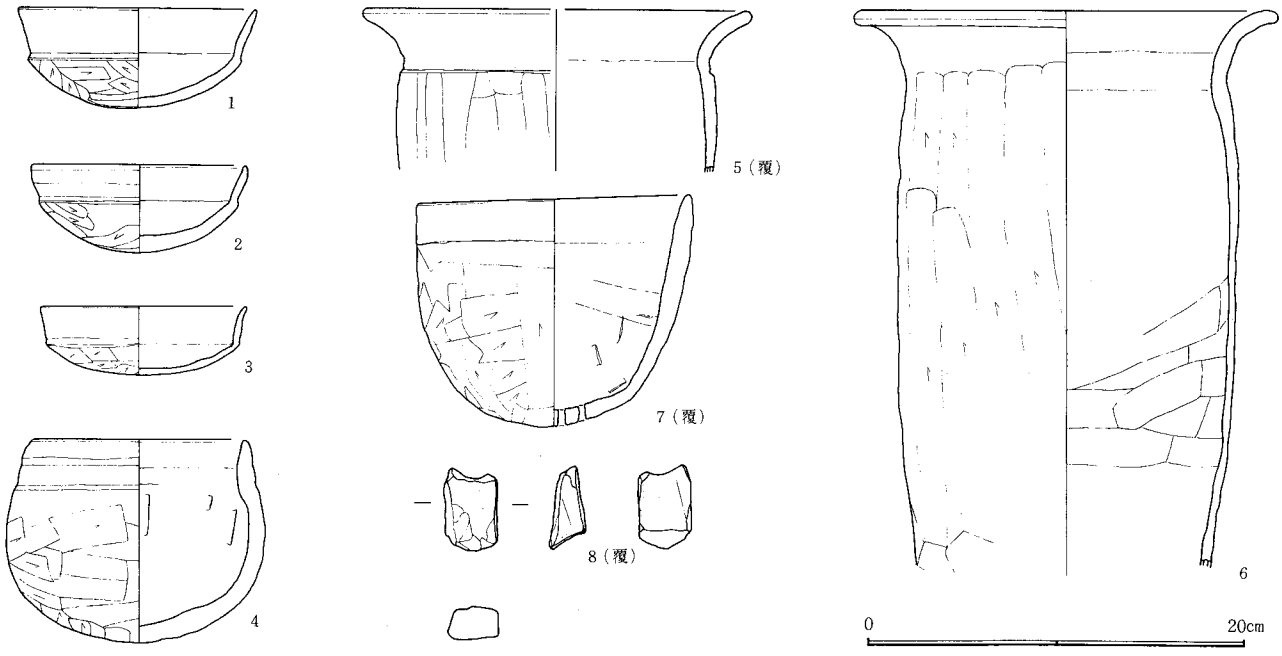
カマド　東壁中央南寄りに位置する。比較的保存状態が良好で、煙道も検出された。煙道出口の中心は、現状で東壁の22cm外側にある。両袖には山石を用いている。袖石の間に横たわって甕(6)が出土した。全長115cm、燃焼部長54cm、袖部内幅38cm、壁外掘り込み長60cm、掘り込み角度49°、焚口のピット、52×45cm深さ21cmは灰かき穴と考えられる。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、60×48cm深さ44cm。　**遺物**　カマド内より長胴甕(6)、坏(2)（完形）(3)（完形）、右袖南の壁際より鉢(4)、南東隅の壁に立てかけて坏(1)（完形）が出土した。

重複関係　本遺構は、北東隅でJ—36と重複している。

（川崎）

1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．黒褐色土。FP・C軽石混入。4．黒色土。FP・C軽石、褐色土粒混入。5．黒色土。FP・C軽石混入。6．黒色土。FP・C軽石、褐色土、少量の焼土混入。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石、少量の焼土粒混入。2．黒褐色土。焼土粒、炭化物混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、焼土粒、灰混入。4．2に同じ。5．黒灰褐色土。白色粘土、少量の焼土混入。6．黒灰褐色土。多量の焼土ブロック混入。7．黒褐色土。焼土粒混入。8．黒褐色土。焼土粒、焼土ブロック混入。9．黒色土。FP・C軽石、ローム粒混入。

図—293　H—159号住居跡

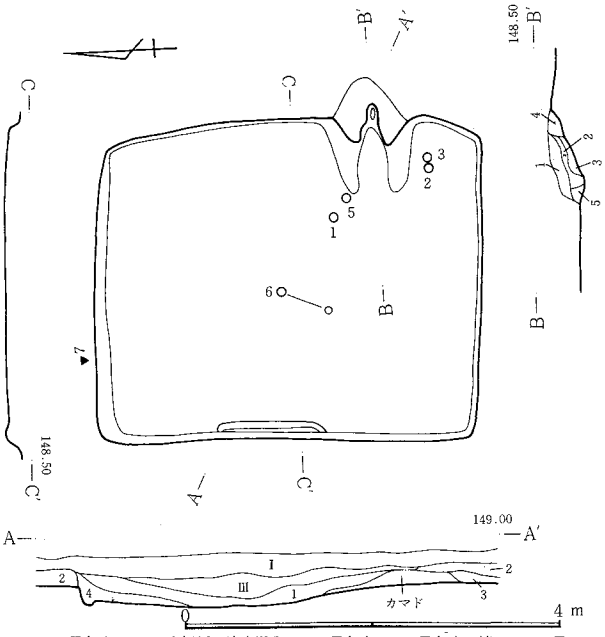


図—294　H—159号住居跡出土遺物

H160号住居跡（図—295、296　図版—18、93　表—149）　（III期）

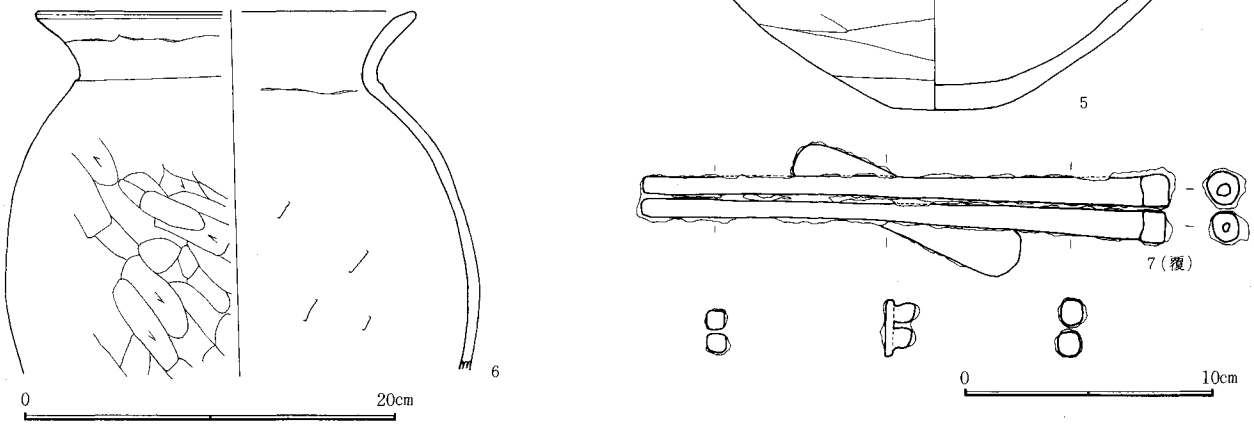
位置　西台地の南西端P103にある。藤沢川左岸の台地の縁に近い場所に位置している。周囲には、竪穴住居跡が多い。　**形状**　南北3.9m、東西3.3mの長方形で、面積12.2m²、長軸方向はN—1.5°—Eを測る。東壁がやや外側に張り出している。周溝は西壁中央の北寄りに幅4～10cmで長さ100cmの部分のみ検出された。　**カマド**　東壁南寄りに位置する。全長120cm、燃焼部長33cm、袖部内幅37cm、壁外掘り込み長48cm、壁への掘り込み度27°を測る。　**貯蔵穴**　貯蔵穴は検出されなかった。　**遺物**　カマド正面の左袖寄りの床面から大甕(5)、カマド前床面より完形の坏(1)、南東隅床面より坏(2・3)が出土している。また、北壁下より鉄製品(7)が出土した。

（川崎）



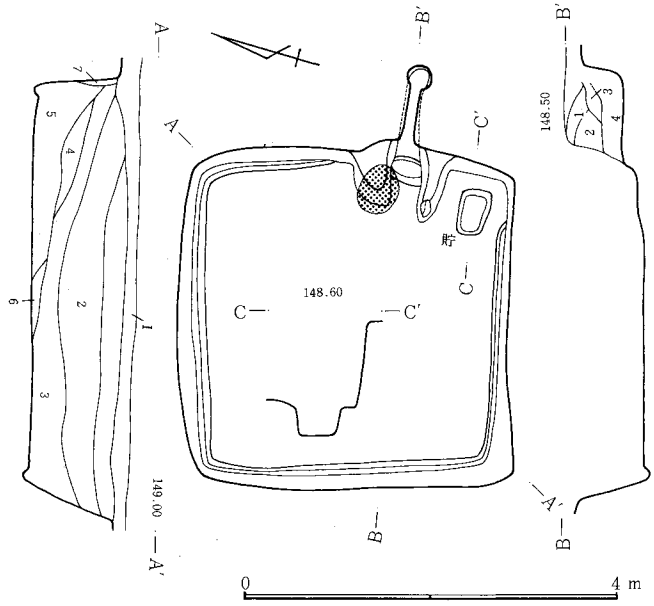
1．黒色土。FP・C軽石、焼土混入。2．黒色土。3．黒色土。締る。4．黒色土。焼土、粘土、FP・C軽石混入。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石、焼土粒混入。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．黒色土。焼土粒、灰混入。4．赤灰色土。浮石、焼土ブロック、灰、粘土混入。5．2に灰混入。

図－295　H－160号住居跡



図－296　H－160号住居跡出土遺物

H161号住居跡（図－297、298　図版－18　表－150）　（IV期）



図－297　H－161号住居跡

位置　西台地南西隅P・N103に位置する。H－161を含む住居跡群は密集して存在している。　**形状**　ほぼ正方形である。南北3.2m、東西3.3m、長軸方向はN－15.5°－Wで面積は10.4㎡である。壁高は77～80cmで、地層断面からは90cmを測る。直にしっかりと掘り込まれている。カマド周辺を除く全周に周溝をめぐらす。幅2～14cmで深さ1～8cmである。　**カマド**　東壁南より。燃焼部は壁内にあり、煙道は壁外に長く作られてあった。煙道はロームを大きく掘りこみ、黒褐色土などで整えられていた。壁外では、ほぼ水平に進み直に曲がり地表に出ている。右袖に構築材が1石のこる。全長165cm、燃焼部長30cm、袖部内幅30cm、壁への掘り込み角度27°、壁外掘り込み107cmである。燃焼部は床面とくらべて9cm高い。カマド手前に焼土がのこる。56×42cmである。　**貯蔵穴**　南東隅。平面は隅丸長方形に近い。規模は80×59cmで深さは36cm。　**遺物**　埋土中より土師器坏(1・2)が出土している。　（富澤）

1．黒色土。多量のFP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石、多量の黒褐色土ブロック混入。3．黒色土。FP・C軽石、褐色土ブロック混入。4．黒褐色土。FP・C軽石少量混入。5．黒褐色土。FP軽石混入。6．黒褐色土。粘性強い。7．黒色土。　**カマド**　1．暗褐色漸移層。2．ローム。3．黒褐色土。FP軽石混入。4．よく焼けている。

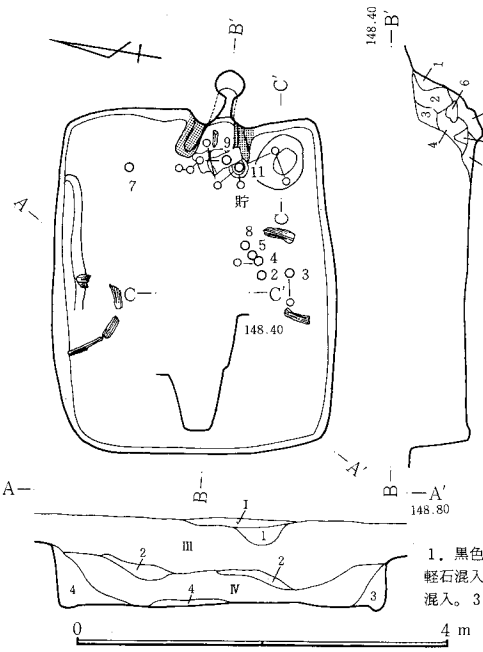
図－298　H－161号住居跡出土遺物

H162号住居跡（図—299、300　図版—18、93、94　表—151）　（III期）

位置　西台地南西隅のN・P103に位置する。　**形状**　南北に2.8mで東西3.5mの長方形である。壁はH—161と同様に直にしっかりと掘り込まれている。四辺の壁もほぼ直角に交わっている。長軸方向N—77°—Eで面積は9.1m²である。北壁の中央部に周溝をめぐらす。幅7～11cm、深さ4cm。　**カマド**　東壁のやや南寄りにある。粘土で左右の袖を作り、両袖口には長甕をたて、土師甕を2つつなげ横におき、冠石のかわりにおいて焚口を作ってあった。支石を1石置く。全長102cmで燃焼部長35cm、袖部内幅37cm、壁外掘り込み60cm、壁への掘り込み角度は50°。燃焼部と床面をくらべると6cm低い。煙道はH—161と同様にローム層を水平に掘りこみ、直角に曲がり外に通じている。

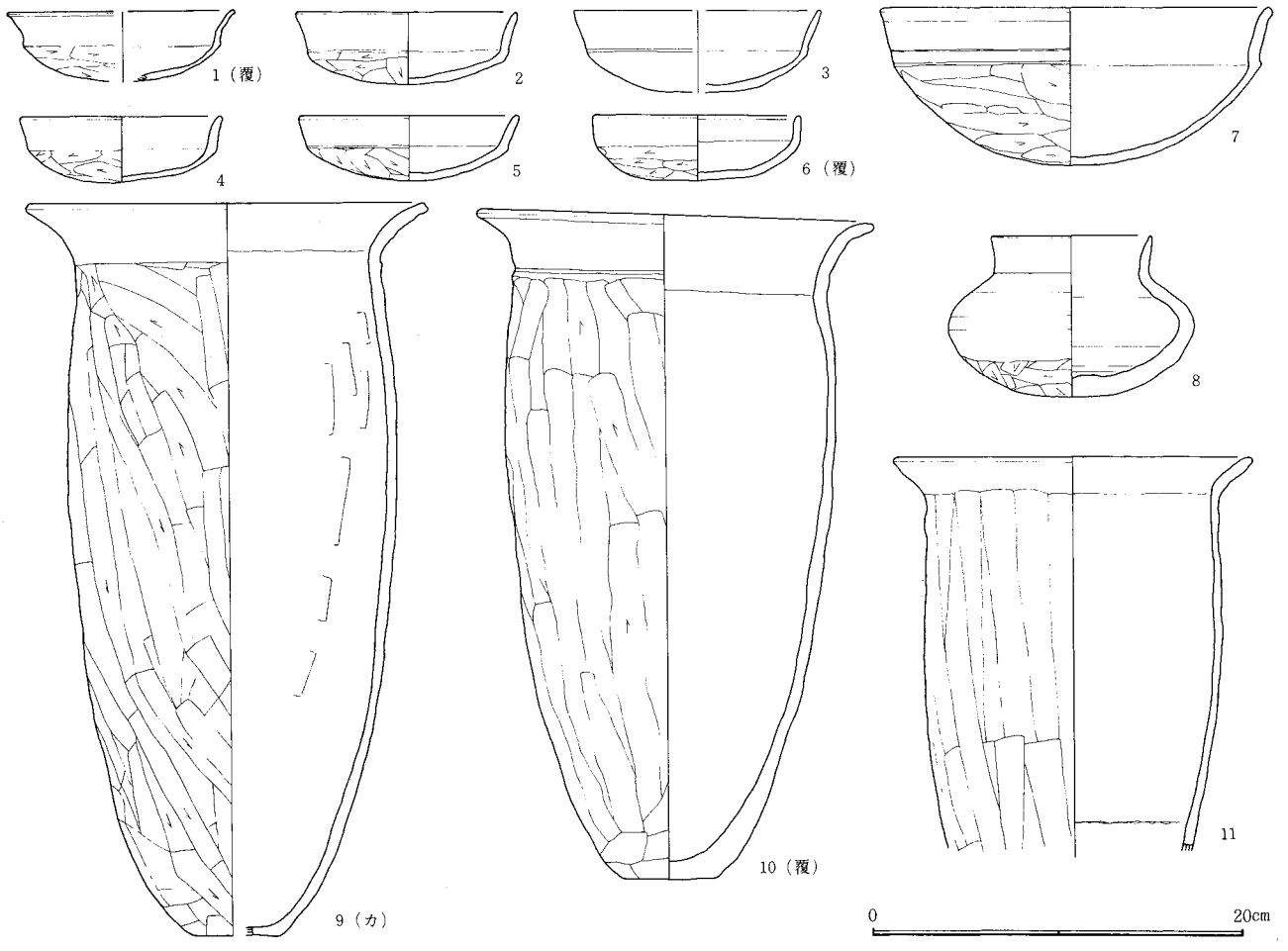
貯蔵穴　南東隅。楕円形。規模は60×48cmで深さ60cm。掘り込みは深い。

遺物　カマド付近と南壁下床面より多量の遺物が出土。カマド付近からは土師器甕(9•10•11)、南壁下からは土師器坏(2～5)須恵器坩(8)など。　**その他**　本住居内床面上及び埋土中より大量の炭化物が出土し、さらに東壁及び西壁等の一部に焼けた痕が残っていることから、この住居は火災にあっていることが推定される。　（富澤）



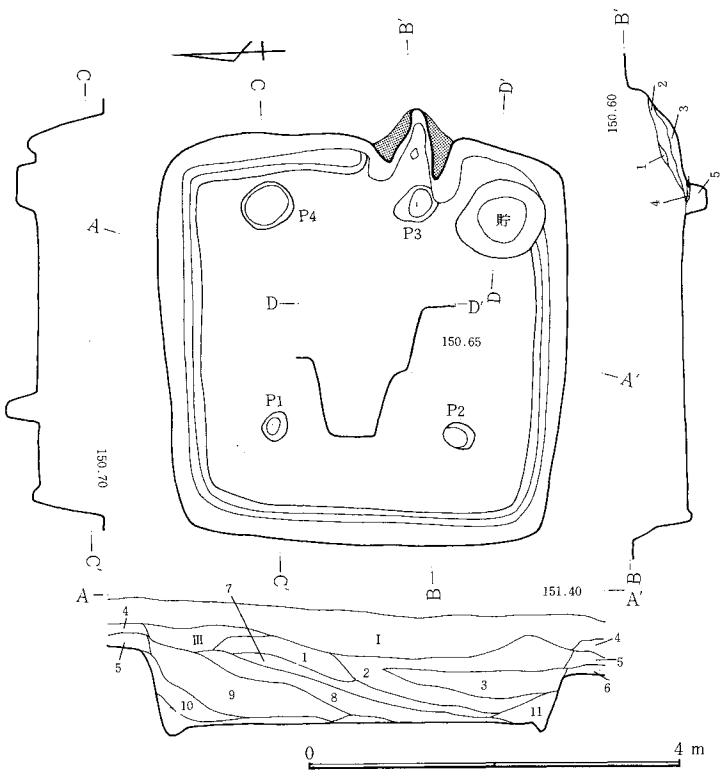
1．黒色土。FP•C軽石混入。2．淡褐色灰。FP軽石混入。3．暗褐色土。粘性なし。4．黒色土。FP•C軽石混入。多量の炭混入。　カマド　1．暗褐色土。ローム混入。2．黒褐色土。ローム、焼土、ブロック状に混入。3．黒褐色土。4．黒褐色土。焼土塊、炭、多量に混入。5．暗灰色灰。焼土多量に混入。6．焼土塊。

図－299　H－162号住居跡



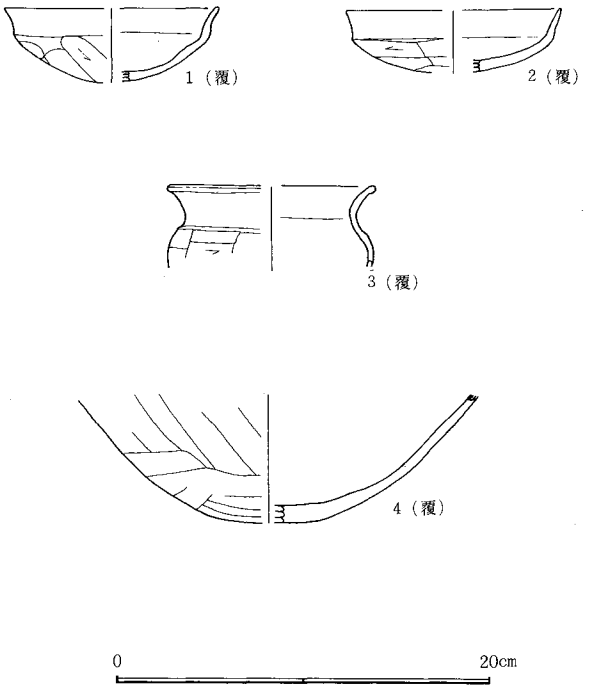
図－300　H－162号住居跡出土遺物

H163号住居跡（図—301、302　図版—19、94　表—152）　（IV期）



1．黒褐色土。2．黒褐色土。多量の灰混入。3．黒色土。FP・C軽石、灰混入。4．5．黒色土。6．黒褐色土。7．黒色土。FP・C軽石、焼土ブロック、灰、粘土混入。8．褐色土ブロック。一部に焼土混入。9．黒色土。FP・C軽石混入。10．黒褐色土。軽石わずか混入。11．黒色土。褐色土との混土。FP・Cを含む。　カマド　1．黒色土。FP・C軽石、焼土粒少量混入。2．灰白色土。浮石、焼土粒少量混入。3．灰白色土。多量の焼土混入。4．焼土。5．黒褐色土。FP・C軽石混入。

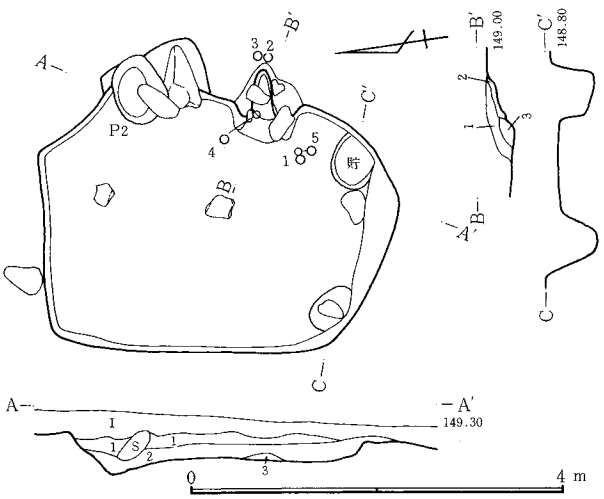
図—301　H—163号住居跡



図—302　H—163号住居跡出土遺物

位置　西台地南西端、N 1・101にある。藤沢川左岸の台地の西縁に近い所に位置する。　**形状**　南北3.9m、東西4.0mの正方形で、東壁と南壁がやや外側に張り出している。北西隅はやや鈍角に開く。面積は14.4m²、長軸方向はN—3°—Eを測る。各壁とも、ほぼ直に掘り込まれており、しっかりした掘り形である。周溝はカマドと貯蔵穴部分を除いた四壁をめぐり、貯蔵穴へ落ち込んでいる。幅14～20cm、深さ3～6cmを測る。　**ピット**　床面4か所にある。内、P_3はカマドの灰かき穴と思われ、44×32cm、深さ21cmである。P_1は32×27cm、深さ33cm。P_2は35×27cm、深さ52cm。P_4は32×27cm、深さ33cmである。P_1を要にP_2、P_4はほぼ直交する位置にあり、P_1～P_2間は心々で194cm、P_1～P_4は心々で236cmを測り、それらを結ぶ線は壁にほぼ平行する。　**カマド**　東壁中央南寄りに位置する。手前には灰かき穴と思われるピット（P_3）がある。P_3の縁から28cmのところに河原石の支石が見られた。全長90cm、燃焼部長39cm、袖部内幅50cm、壁外掘り込み長60cm、壁への掘り込み角度43°を測る。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、84×85cm、深さ85cmと比較的大きい。カマドに接する部分はテラス状になっている。　**遺物**　住居床面につく遺物はなく、掲載した遺物はいずれも一括遺物である。土師器坏(1・2)甕(3・4)、が出土している。　（川崎）

H164号住居跡（図—303、304　図版—19、94　表—153）　（XII期）

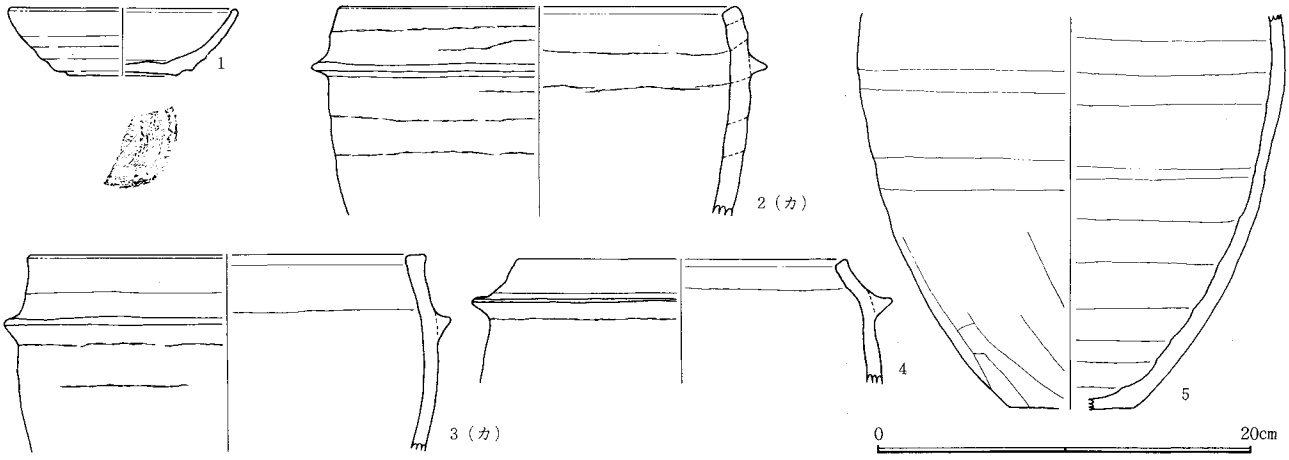


1．黒色土。2．黒褐色土。3．桃色灰。焼土粒混入。　カマド　1．黒褐色土。FP・C軽石、少量の焼土粒混入。2．黒褐色土。焼土粒、灰混入。3．灰褐色土。灰、多量の焼土ブロック混入。

図—303　H—164号住居跡

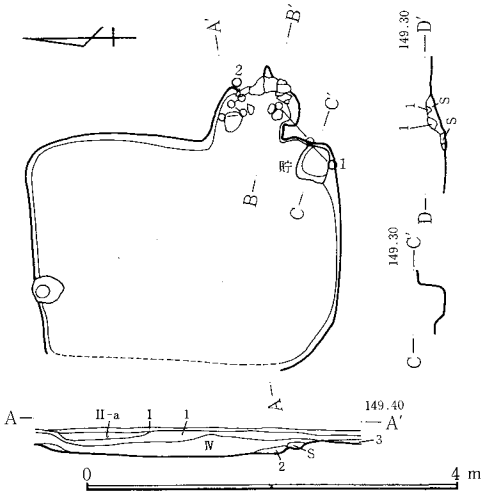
位置　西台地の南西隅、南へゆるやかに傾斜するP102に所在する。付近は土師器使用の住居が集落をなしている。　**形状**　南北3.3m、東西2.6mの規模をもつ、変形した長方形の住居である。面積約8.2m²である。壁高は11～43cmを測る、長軸方向はN—10°—Eである。カマド北側に長円形に近い形で張り出しがあり、川原石2個が張り出し中のピットに落ちこんでいた。　**床面**　ロームを踏み固め床面としていた。　**ピット**　住居内にピットが2個存在した。P_1、54×32cm、深さ35cm。P_2、68×54cm、深さ21cmであった。　**カマド**　東壁南寄りに自然石と粘土で構築している。壁外へ59cm掘り込み、全長75cm、燃焼部分長35cm、袖部内幅35cmのカマドであった。壁への掘り込み角度28°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差は—4cmと燃焼部の方が低い。　**貯蔵穴**　南東壁際に円形の貯蔵穴が存在した。貯蔵穴の底部は東壁に入り込んでいた。貯蔵穴の規模は48×45cm、深さ38cmであった。　**遺物**　住居床面より土師器の坏(1)、須恵質の羽釜(4・5)が出土しており、またカマド上部に密着して羽釜(2・3)が出土している。この住居は他の住居と比較して、自然石および川原石を住居内に持ち込み使用して

いるのが特徴的である。　**テフラ**　覆土中第2層にＦＰ・Ｃ軽石の混入を見ることができた。　（江原）



図－304　Ｈ－164号住居跡出土遺物

Ｈ165号住居跡（図－305、306　図版－19、94　表－154）　（XV期）

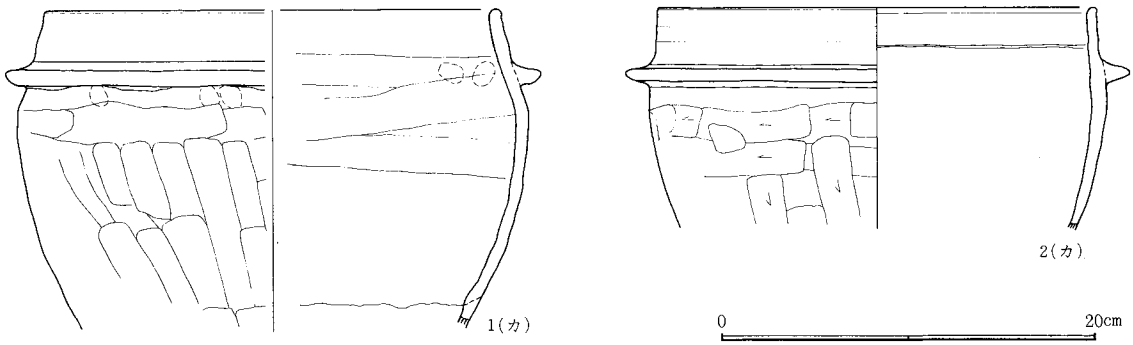


図－305　Ｈ－165号住居跡

位置　西台地上の南中央のＫ101に所在する。この住居の東には東西、南北に走る溝が密着している。　**形状**　平面は長方形の3.2×2.2(推定)mで、面積は推定7.4m²である。壁現高は８～36cmである。周溝はなく長軸方向はＮ－35°－Ｅである。　**床面**　踏み固め部分は不明であり、貼床は図面から無いものと推定される。　**ピット**　北壁の中央から西に寄った位置に１個ある。29×25cm、深さ８cmの大きさである。　**カマド**　東壁の南東隅寄りにある。壁からの掘り込み長は80cm、袖部内幅72cm、燃焼部長30cmである。燃焼部は床面から若干高く、壁への掘り込み角度は22°である。構築材として10個の石材が使用されている。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、平面は方形に近く36×32cm、深さ８cmの大きさである。　**遺物**　カマド内から羽釜の胴部上半(2)が出土し、貯蔵穴内の南寄りに羽釜胴部上半(1)が出土している。

テフラ　覆土のII－ａ層にＦＰ・Ｃ軽石を含むＢ軽石がみられる。１層の下端は床面から13cmの位置にある。　（中村）

１．黒色土。Ｂ軽石と多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。２．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土粒混入。３．黒褐色土。　**カマド**　１．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土混入。

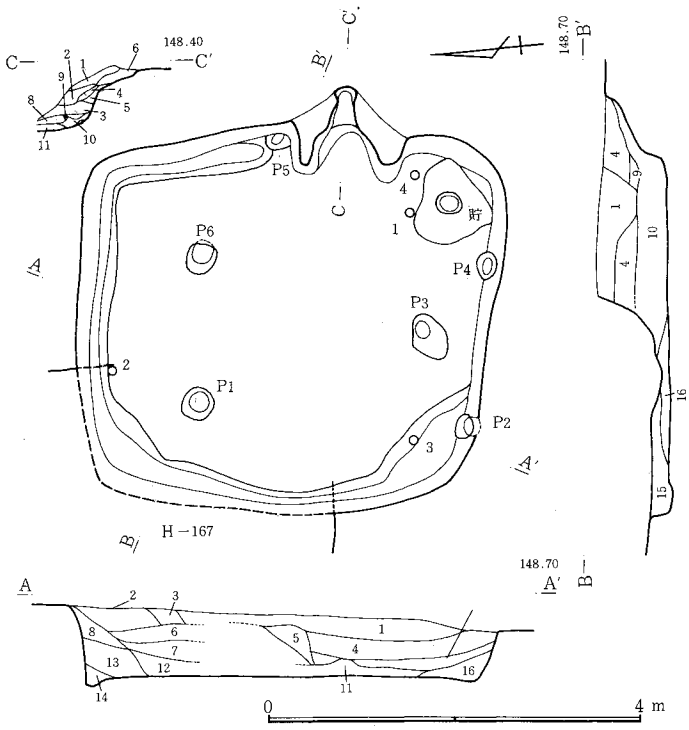


図－306　Ｈ－165号住居跡出土遺物

Ｈ166号住居跡（図－307、308　図版－19、94　表－155）　（IX期）

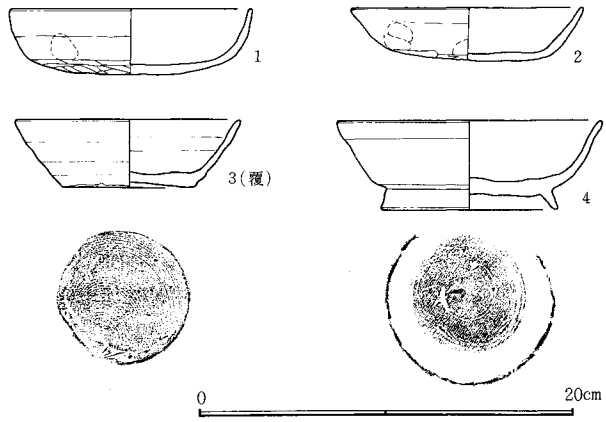
位置　西台地南端、Ｋ101に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ不整方形である。南北4.0m、東西3.7mである。長軸方向はＮ－０°、面積は14.2m²で、壁高は42～66cmである。地層断面からは75cmを測る。周溝は、東壁のカマド北から北・西壁をめぐり、南壁の西側４分の１に続いている。幅９～14cmで深さ６～11cmである。　**ピット**　P_1、P_2、P_4、P_6が柱穴と考えられる。P_2、P_4は南壁にかかっており、北のP_1、P_6に対応し、ななめに掘られている。P_3はP_2、P_4の中央やや北にあるが、出入口に関係のある柱とも考えられる。P_1は36×35cmで深さ35cm、P_2は25×14cmで深さ27cm、P_3は42×36cmで深さ32cm、P_4は28×21cmで深さ27cm、P_6は36×33cmで深さ41cmである。　**カマド**　東壁中央のやや南寄りにある。全長96cm、袖部内幅60cm、燃焼部長40cm、壁への掘り込み角度65°、壁外掘り込みは67cmである。燃焼部は床面より13cm低くなっている。　**貯蔵穴**　南東隅、円形で規模は90×75cmで深さは23cmである。上面は三角形に近く広く開いている。底面は円形で小さい。　**遺物**　カマド手前付近の床面と床面近くより、土師器坏(1)と須恵器高台付鉢(4)が出土している。南東隅より須恵器坏(3)が、北西隅より土師器坏(2)が出土している。

重複関係　H167号住居跡と重なっている。H167号住居跡のカマドがH166号住居跡内に完全な形でのこっており、カマドのレベルもH167号住居跡のカマドが高いこともあり、H166号住居跡のほうが旧い。　（井野）



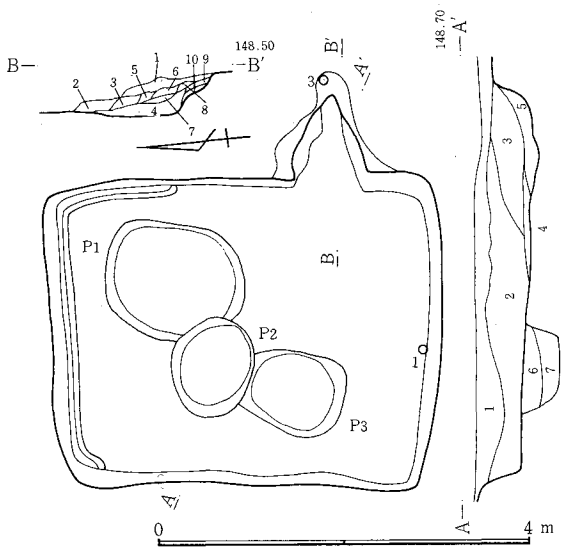
図－307　H－166号住居跡

1．黒褐色土。B・FP・C軽石、焼土、炭化物、ローム混入。2．黒褐色土。B・FP・C軽石、焼土、炭化物混入。3．2にローム、茶褐色土混入。4．1に類似でロームが多い。5．黄褐色土。ローム、B軽石、FP・C軽石、焼土、炭化物混入。6．黒褐色土。7．黒褐色土。ローム少量混入。8．黒褐色土。ローム混入。9．1に類似。より多量のローム混入。10．1に類似。より軟かい。11．1に類似。やや堅い。12．黒褐色土。ローム多量に混入。13．黒褐色土。茶褐色土、多量のローム混入。14．ロームに黒褐色土混入。15．黒色土。FP・C軽石、ロームブロック混入。16．黒色土。FP・C軽石混入。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。2．黒褐色土。ローム、焼土、炭化物混入。3．黒色土。多量の焼土、FP・C軽石混入。4．2に類似。焼土多い。5．3に類似、焼土やや少い。6．4に類似。7．焼土。少量のC軽石混入。8．黒褐色土。焼土、ロームブロック混入。9．黒色土。FP・C軽石混入。10．黒褐色土。焼土、C軽石混入。11．黒褐色土。焼土、FP・C軽石、ローム混。



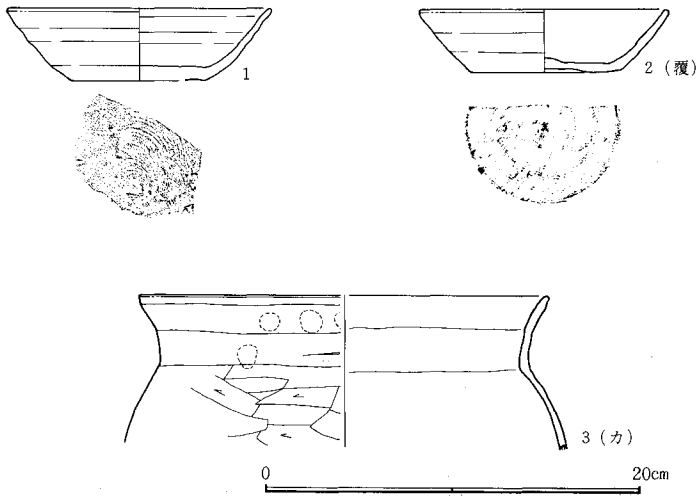
図－308　H－166号住居跡出土遺物

H167号住居跡（図－309、310　図版－19、95　表－156）　（IX期）



1．黒褐色土。B・FP・C軽石、焼土混入。2．褐色土。B・FP・C軽石、焼土、炭化物、ローム塊混入。3．竈。4．黒色土。FP・C軽石、多量のローム混入。5．竈、ローム及び焼け込み。6．黒褐色土。ロームブロック、FP・C軽石混入、堅くしまる。7．茶褐色土。ロームブロック混入。　**カマド**　1．褐色土。ローム粒、FP・C軽石、焼土、炭化物混入。2．黒褐色土。ローム、FP・C軽石、焼土、炭化物混入。3．2にローム、焼土多量に混入。4．黒色土。少量のC軽石、焼土混入。5．3に類似。ローム、焼土の混入度高い。6．3に類似。7．4に類似で焼土は少い。8．茶褐色土。焼土、ローム塊で成る。9．8に類似で焼土少い。10．9に類似で焼土ブロックが多い。

図－309　H－167号住居跡

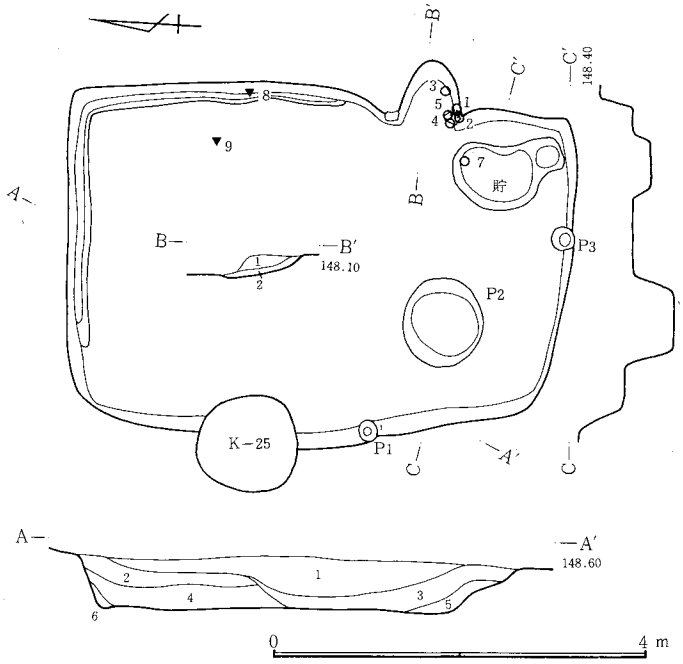


図－310　H－167号住居跡出土遺物

位置　西台地南端のK101に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北3.9m、東西3.0mである。四辺ともやや内側に寄っている。長軸方向は、N－4.5°－W、面積は11.7m²、壁高21～49cmである。北壁と東壁の北3分の1に周溝をめぐらす。幅5～10cm、深さ3～4cmである。床面のうち、H－166との重複部分、床下土坑の上面は貼床となっている。貼床はH－166の床上にFP、C軽石を含んだロームブロックまじりの黒色土で作られている。厚さ16～21cm。

カマド　東壁中央やや南寄り。H－166覆土中に作られている。全長152cm、袖部内幅64cm、燃焼部長48cm、壁への掘り込み角度19°、壁外掘り込みは116cmである。燃焼部床面より5cm低くなっている　**床下土坑**　床面下にP₁～P₃まである。P₁は108×136cmで深さ36cm、長軸方向はN－27°－Eで長円形。P₂は100×90cmで深さ35cm、長軸方向はN－94°－Eで円形。P₃は93×104cmで深さ41cm、長軸方向はN－19°－Eで長円形である。埋土はいずれも類似しており、焼土、炭化物、ロームブロックを多く含む黒色土となっている。重複関係はP₁とP₂にあり、P₂が新しい。遺物はP₂より土師器坏片が出土している。　**遺物**　住居の南壁から須恵器の坏(1)と覆土中より須恵器坏(2)が出土している。また、カマド上部より土師器甕(3)が出土している。　**重複関係**　K－26と重複、新旧不明。　（井野）

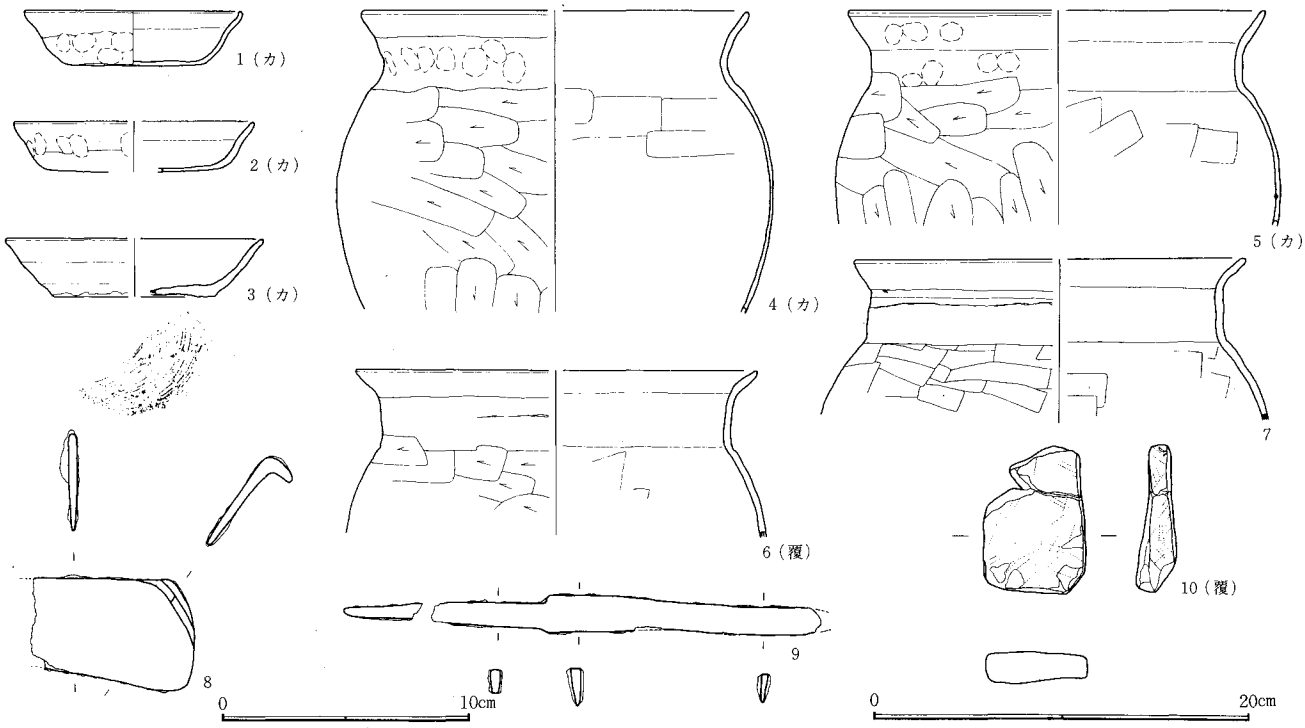
H168号住居跡（図—311、312　図版—19、95　表—157）　（X期）



位置　西台地の南端部、K102に所在する。南方向に傾斜する緩斜面上の住居跡密集地域に位置する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、東西3.6m、南北5.1m、面積16.6㎡である。長軸方向は、N—15°—E、壁高は24～61cmである。北壁の東4分の3と東壁の北2分の1に周溝をめぐらす。幅3～10cm、深さ3～4cmである。　**ピット**　3つ確認される。P_1、P_3は小規模でそれぞれが西壁中央部と南壁中央部に接してある。P_2は住居跡南西寄り、大円形で95×86cm、深さ45cm。　**カマド**　東壁南寄り、全長74cm。全体が壁外に構築されている。袖部内幅54cm、燃焼部長54cm、壁への掘り込み角度57°住居床面とカマド燃焼部のレベル差—3cmである。左袖部に石1個が使用されている。　**貯蔵穴**　南東隅、大小の円形が結合するひょうたん型である。全体の規模は111×65cmで、小さい方が深く、42cmで大きい方の深さは19cm。　**遺物**　カマド内より土師器坏(1•2)、土師器甕(4•5)、須恵器坏(3)、貯蔵穴より土師器甕(7)が、東壁中央部やや上より鉄製品鎌(8)東壁下床上14cmより刀子(9)が出土している。　**重複関係**　K—25と重複。本遺構が旧い。K—26とは新旧不明。　（白石）

1．黒色土。FP•C軽石、少量のローム、部分的に炭化物混入。2．黒色土。FP•C軽石、ローム塊混入。3．褐色土。FP•C軽石、炭化物混入。4．褐色土。FP•C軽石、ローム粒混入。5．明褐色土。FP•C軽石、炭化物混入。6．褐色土。FP•C軽石、ローム粒混入。　**カマド**　1．焼土、灰、ローム、褐色土、炭化物。C軽石混入。2．焼土。

図—311　H—168号住居跡

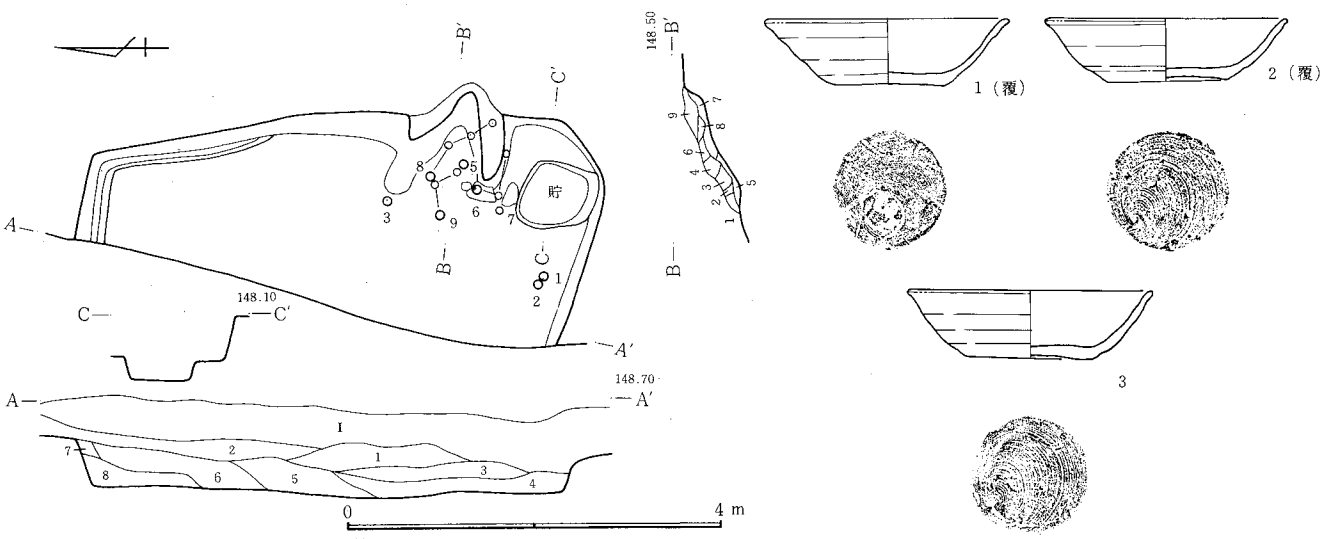


図—312　H—168号住居跡出土遺物

H169号住居跡（図—313、314　図版—19、95　表—158）　（IX期）

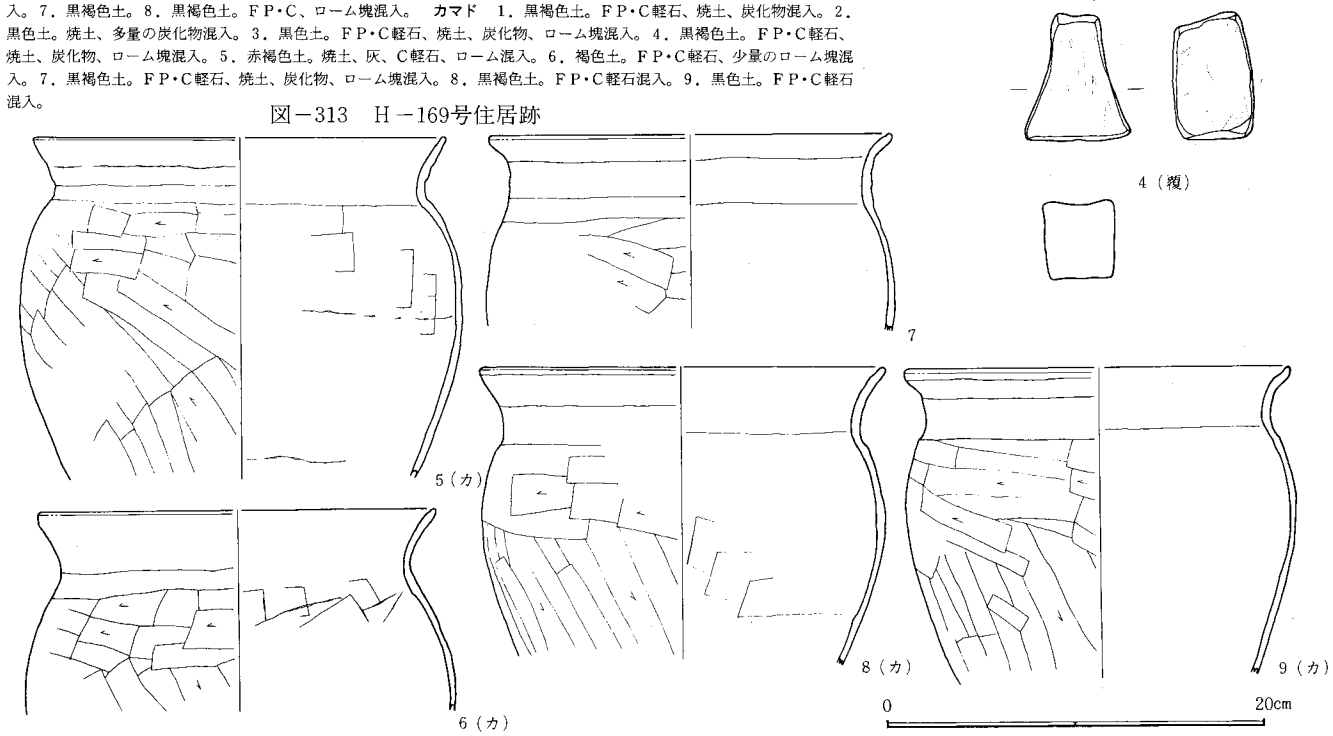
位置　K102。西台地の南端の南東への緩斜面に所在する。　**形状**　調査域からの推定では南北に長軸をもつ不整方形と思われる。南北5.1m、東西1.8m以上である。南壁は、北壁にくらべて走行方向が傾く。長軸方向はN—9.5°—E、面積は8.4㎡以上、壁高は39～50cmである。周溝は、調査域内で、東壁北の3分の1から北壁にかけてめぐっている。幅4～13cm、深さ6cmである。

カマド　東壁南寄り、全長126cm、袖部内幅60cm、燃焼部長80cm、壁への掘り込み角度34°で、壁外掘り込みは116cmである。燃焼部は床面からくらべて2cm低くなっている。カマド右袖部に構築材が2石のこる。　**貯蔵穴**　南東隅、方形に近い。70×70cmで深さ26cmである。　**遺物**　カマド内及びカマド袖付近より、土師器甕（5～9）と、須恵器坏(3)が出土している。貯蔵穴西より、須恵器坏(1•2)が出土している。住居覆土中より砥石(4)が出土している。　（井野）



1．黒褐色土。焼土、炭化物、少量のローム塊、多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土、炭化物、ローム混。3．黒褐色土。ローム塊、ＦＰ・Ｃ軽石、炭化物、少量の焼土混入。4．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、炭化物、ローム塊混入。5．黒褐色土。焼土、炭化物、ローム、少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。6．黒褐色土。ローム、多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。7．黒褐色土。8．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ、ローム塊混入。　**カマド**　1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、炭化物混入。2．黒色土。焼土、多量の炭化物混入。3．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、炭化物、ローム塊混入。4．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、炭化物、ローム塊混入。5．赤褐色土。焼土、灰、Ｃ軽石、ローム混入。6．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量のローム塊混入。7．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、炭化物、ローム塊混入。8．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。9．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。

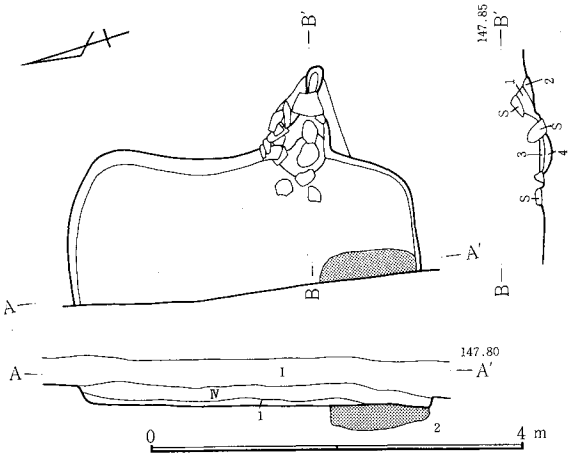
図－313　Ｈ－169号住居跡



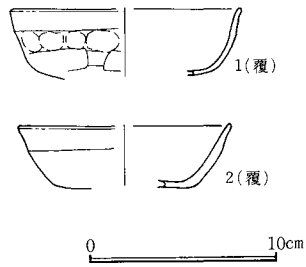
図－314　Ｈ－169号住居跡出土遺物

Ｈ170号住居跡（図－315、316　図版－19、96　表－159）（Ⅸ期）

位置　西台地上の南端中央のＫ103に所在する。住居跡の密集するなかの１軒で、住居跡西半部は調査区域外で未調査ある。　**形状**　平面は未掘により不明、規模は南北3.6m、東西は1.3ｍまで計測で、壁高は、壁現高及び土層断面図で10～28cmを測る、周溝は認められない。長軸方向はＮ－11.5°－Ｅである。　**床面**　踏み固め部分は不明であるが、隣接するＨ173号住居跡と重複する部分で貼床がみられる。この貼床下に床下土坑があった可能性も推定される。



図－315　Ｈ－170号住居跡



図－316　Ｈ－107号住居跡出土遺物

ピット　認められない。　**カマド**　東壁の中央から南寄りにある。壁

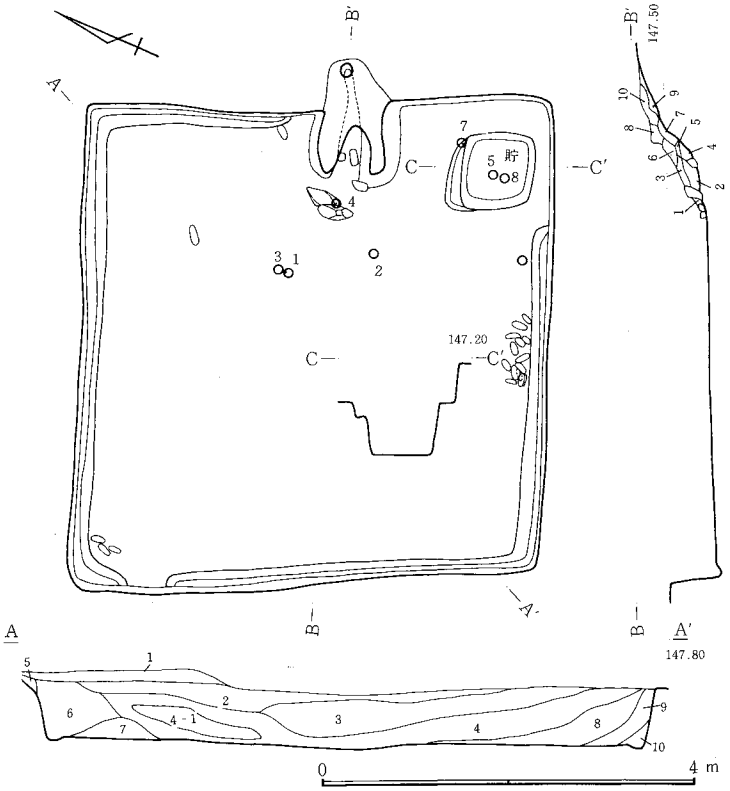
1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、黄褐色土混入。　**カマド**　1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土混入。2．黒褐色土。3．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土ブロック混入。4．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土小粒含む。

から掘り込み長100cm、袖部内幅45cm、燃焼部長60cmである。燃焼部は床面より6cm低く、壁への掘り込み角度19°である。構築材として支石、左袖数個、煙道部に1個の石材が使用されている。貯蔵穴はない。 **遺物** 埋土より坏が2個体分出土している。

重複関係 H173号住居跡を切っており、本住居跡が新しい。 (中村)

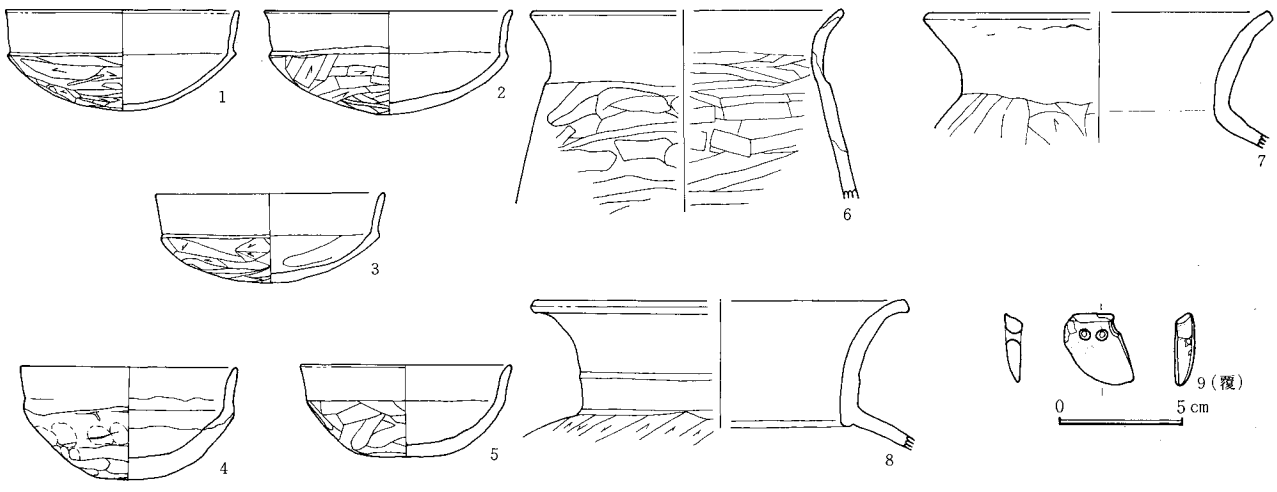
H171号住居跡 (図—317、318 図版—20、96 表—160) (I期)

位置 西台地南端のK103東側に所在し、台地の南縁部に当る。 **形状** 北壁及び西壁が若干歪んだ方形で、東西4.9m、南北4.9mを測る。長軸方向はN—23°—W、面積は23.8m²である。西壁の一部及び南東部を除いて、幅約20cm、深さ約13cmの周溝が確認された。床面は地山層を強く踏み固めており、壁高は43～76cmである。 **カマド** 東壁中央やや南寄り。角礫と粘土を使用して構築されており、袖が張り出し、燃焼部は住居内にある。袖部内幅30cm、燃焼部長68cmで、壁への掘り込み角度は52°、全長140cmである。燃焼部は床面よりもわずかに高かった。 **貯蔵穴** 南東隅。隅丸方形で、規模は82×90cm、深さ55cmである。北壁が床面から16cmほど掘り込まれており、二段になっていた。 **遺物** カマド手前及び貯蔵穴周辺に集中。また、南壁の中央部に14個、北西隅に3個、北東に1個の「こも編み石」が出土。土師器坏(1•3)は重なり合って正位の状態で出土。埋土中より石製品(9)が出土。 (飯塚)



1．黒色土。FP•C軽石混入。2．黒色土。FP•C軽石、ローム粒混入。3．黒色土。FP•C軽石、ローム粒、ローム塊(φ10cm)混入。4．褐色土。FP•C軽石、ローム粒、ローム塊(φ3cm)混入。4-1．暗褐色土。4よりローム粒少量。5．黒褐色土。ローム粒多量に混入。6．暗褐色土。FP•C軽石、ローム粒混入。7．黒色土。FP•C軽石、ローム粒、ローム塊(φ5cm)混入。8．暗褐色土。FP軽石混入。9．8に類似で軟か。10．黒褐色土。FP軽石混入。 **カマド** 1．褐色土。焼土、炭化物、C軽石混入。2．茶褐色土。多量の焼土、ローム塊、炭化物、C軽石混入。3．茶褐色土。C軽石、ローム塊、焼土、炭化物混入。4．2に類似。焼土やや少い。5．ローム。焼土、炭化物少量混入。6．3に類似。焼土は少い。7．4に類似。ローム塊多量に混入。8．黒褐色土。ローム、FP•C軽石、焼土、炭化物混入。9．黒褐色土。焼土、炭化物、C軽石混入。10．8に類似。ローム多い。

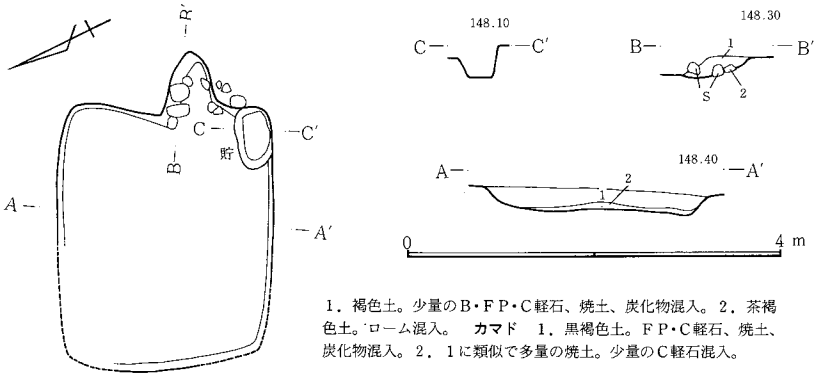
図—317 H—171号住居跡



図—318 H—171号住居跡出土遺物

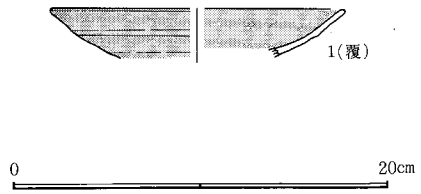
H172号住居跡 (図—319、320 図版—20 表—161) (XI期)

位置 K—102。西台地南端で南東への緩斜面の上に所在する。 **形状** 北々東から南々東に長軸を持つ長方形である。耕作等により覆土の削平をうけており、覆土も表土に近い。住居跡西半分の壁は明確ではない。南北2.3m、東西2.5mである。長軸方向はN—26.5°—E、面積は5.7m²(推定)、壁高18～24cmである。 **カマド** 東壁やや南より、袖石、支石を含め付属する石が10石残っている。全長77cm、袖部内幅35cm、燃焼部長30cm、壁への掘り込み角度25°で、壁外掘り込みは65cmである。燃焼部は床面とくらべて3cm低くなっている。 **貯蔵穴** 南東壁下、長方形に近い。規模は67×37cmで、深さは23cmである。 **遺物** 覆土中より灰釉陶器(1)が出土している。床面からの遺物出土は見られなかった。 (井野)



1．褐色土。少量のB・FP・C軽石、焼土、炭化物混入。2．茶褐色土。ローム混入。 **カマド** 1．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。2．1に類似で多量の焼土。少量のC軽石混入。

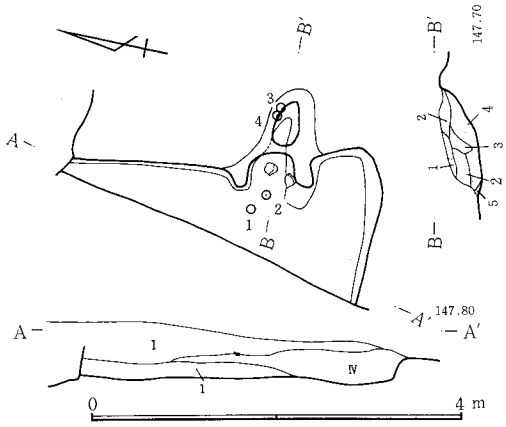
図－319　H－172号住居跡



図－320　H－172号住居跡出土遺物

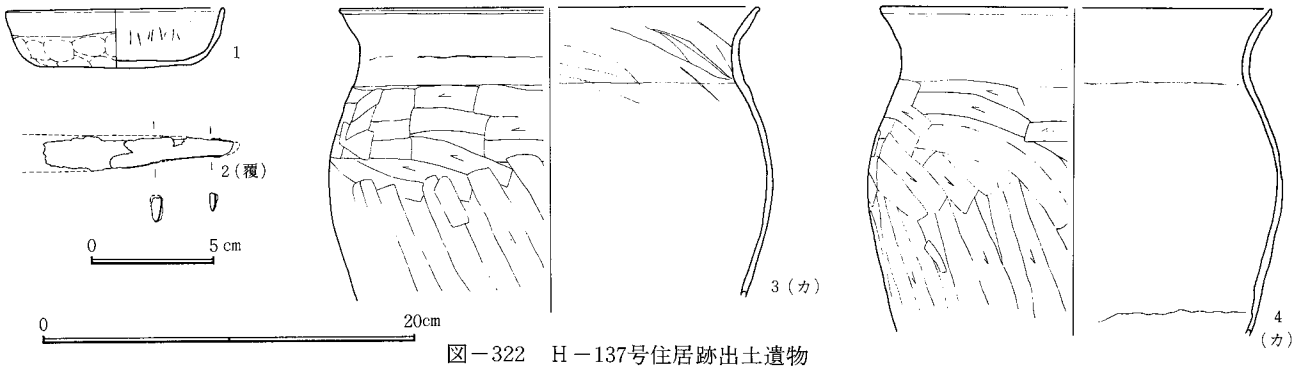
H173号住居跡（図－321、322　図版－20、96　表－162）（IX期）

位置　H－170と重複している。住居の大部分は調査区外にある。 **形状**　完掘が出来ず、平面形、規模とも不明である。壁現高は19～39cm、地層断面図では26cmを測る。周溝はない。長軸方向はN－10°－Wである。 **床面**　踏み固め部分は不明、貼床は図面からないものと推定される。ピットは認められない。 **カマド**　東壁の中央から南寄りに位置している。壁からの掘り込み長は116cm、袖部内幅38cm、燃焼部長60cmである。燃焼部は床面より若干低く、壁への掘り込み角度は38°である。構築材は、支石として1個、他に1個石材を用いている。貯蔵穴は認められない。 **遺物**　刀子状の鉄製品(2)がカマド前から35cmの高さで出土している他、土師器の坏(1)が出土している。また、カマド内から、土師器の甕(3･4)が2個体出土している。　（中村）



1．黒色土。FP・多量のC軽石。少量のローム塊混入。 **カマド**　1．黒色土。FP・C軽石、多量のローム塊混入。2．黒色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。3．黒色土。FP・C軽石、多量の焼土混入。4．焼土。FP・C軽石混入。5．黄褐色土。

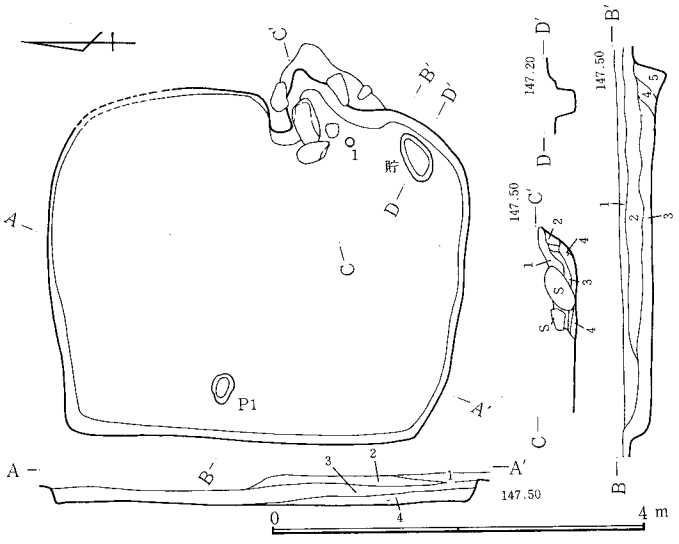
図－321　H－173号住居跡



図－322　H－137号住居跡出土遺物

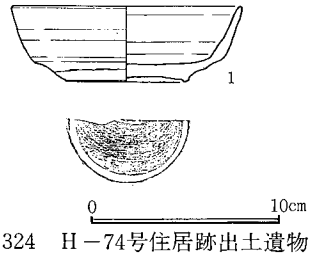
H174号住居跡（図－図323、324　図版－20、96　表－163）（VIII期）

位置　西台地上の最南端の中央、K103に所在する。北にはH171号住居跡が隣接している。 **形状**　平面は長方形の4.3×推定3.5mで、推定面積13.8m²である。壁現高は7～23cmで、地層断面図で20～32cmを測る。周溝はなく、長軸方向は南北に一致している。 **床面**　踏み固め部分は不明であり、貼床については地層断面図からして無いものと推定される。 **ピット**　西壁寄りのほぼ中央にある。30×22cm、深さ9cmの大きさである。 **カマド**　東壁の中央から南寄



1．にぶい黄褐色土。FP・C軽石混入。2．暗褐色土。FP・C軽石混入。3．黒褐色土。FP・C軽石混入。4．3に焼土を含む。5．黒褐色土。C軽石混入。 **カマド**　1．黒色土。FP・C軽石混入。2．1に少量の焼土粒混入。3．白色粘土の焼土ブロック。4．焼土。

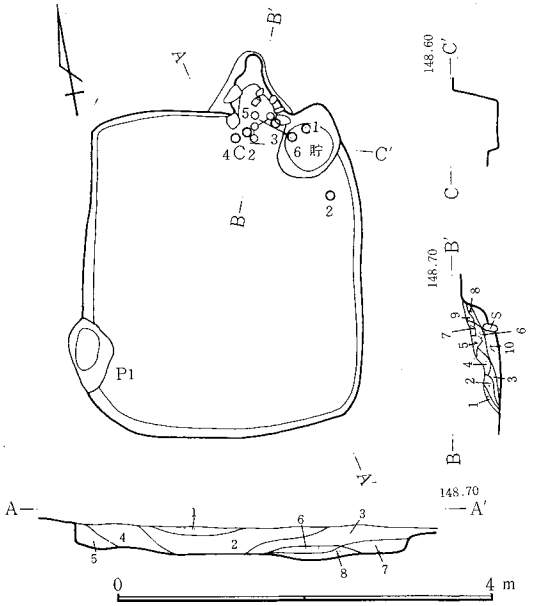
図－323　H－174号住居跡



図－324　H－74号住居跡出土遺物

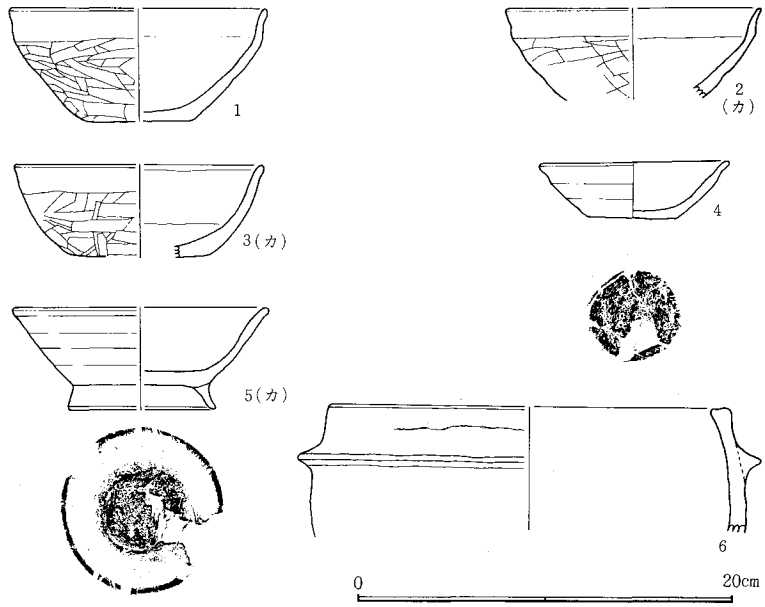
りにある。壁からの掘り込み長は64cm、袖部内幅50cm、燃焼部長56cmである。燃焼部は床面より7cm低く、壁への掘り込み角度は50°である。構築材として焚口に3個、煙道部及び側壁部に計3個の石材を使用している。 **貯蔵穴** 南東隅にあり、平面は楕円形で55×30cm、深さ7cmの規模である。 **遺物** 須恵器の高台付鉢(1)がカマド右袖手前より出土している。 **重複関係** H171号住居跡と重複。本遺構が新しい。 (中村)

H175号住居跡（図—325、326 図版—20、96 表—164）(XIII期)



1．黒色土。FP・C軽石、焼土、炭化物、少量のローム混入。2．黒褐色土。少量のFP・C軽石、多量のローム混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、ローム、ローム塊混入。4．黒色土。FP・C軽石、焼土、炭化物、ローム、ローム塊混入。5．4と同じで、やや軟かい。6．黒色土。ローム、ローム塊、FP・C軽石多量に混入。7．黒色土。FP・C軽石、ローム、ローム塊混入。8．黒色土。ローム、ローム塊、FP・C軽石混入。 **カマド** 1．ローム。焼土混入。2．茶褐色土。ローム、焼土、少量のC軽石混入。3．黒褐色土。ローム、焼土、炭化物、FP・C軽石混入。4．黒褐色土。FP・C軽石、少量のローム、焼土混入。5．黒褐色土。多量のローム、少量の焼土、FP軽石混入。6．黒褐色土。多量のローム塊混入。7．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。8．焦げ茶色土。FP・C軽石、多量の焼土混入。9．8に似るが焼土少。10．焼土。FP・C軽石少量混入。

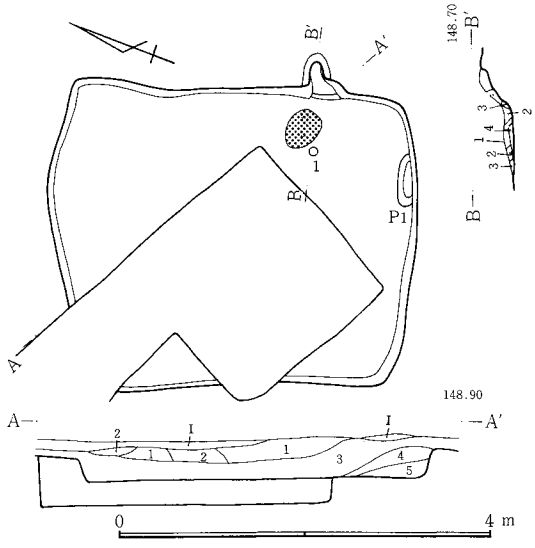
図—325 H—175号住居跡



図—326 H—175号住居跡出土遺物

位置 西台地南端のK101に位置し、南東方向への緩斜面の上に所在する。 **形状** 北々西から南々東に長軸をもつ長方形で、南北3.3m、東西2.7mである。長軸方向はN—21°—E、面積は8.8m²、壁高13～26cmである。 **ピット** 床面上に1カ所。P_1は規模は67×42cmで深さ14cmである。住居との関係は明らかではない。 **カマド** 北壁中央でやや東寄りに位置する。カマドの構築材として使用された石が6石と支石がのこっていた。全長80cm、袖部内幅39cm、燃焼部長40cm、壁への掘り込み角度42°で、壁外掘り込みは73cmである。燃焼部は床面にくらべると11cm高くなっていた。 **貯蔵穴** 北東隅壁際。円形で、規模は80×61cm、深さ12cmである。 **遺物** カマド内及びカマド手前付近より、土師器坏(3)と須恵器椀(5)とかわらけ皿(4)、羽釜(6)が、北東隅より土師器坏(2)が、貯蔵穴内より土師器坏(1)が出土している。 (井野)

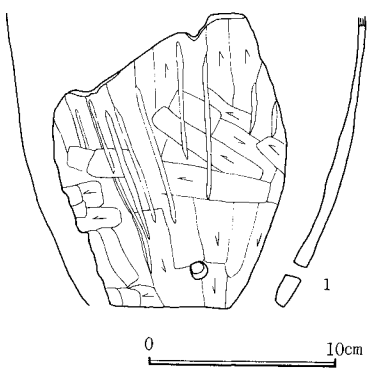
H176号住居跡（図—327、328 図版—20、96 表—165）(IV期)



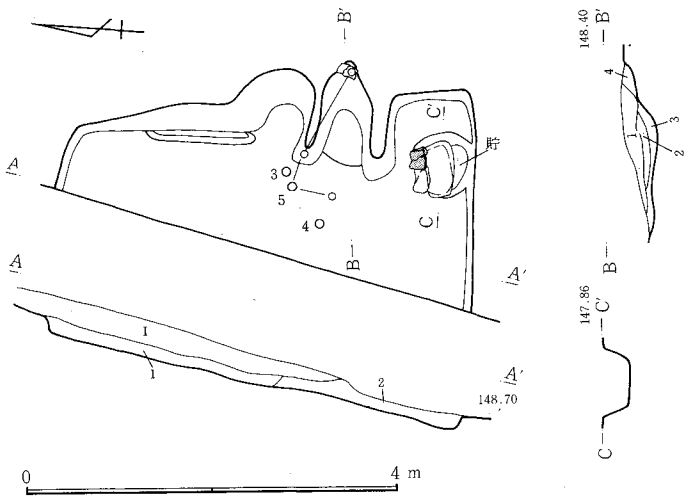
1．暗褐色土。FP・C軽石混入。2．褐色土。ローム多量に混入。3．黒褐色土。FP・C軽石混入。4．暗褐色土。5．黒褐色土。 **カマド** 1．暗褐色土。焼土多量に混入。2．黒褐色土。焼土粒若干点在。3．暗褐色漸移層。4．焼土。

図—327 H—176号住居跡

位置 西台地の南西隅のN・P103に位置する。 **形状** 南北に長軸をもつ長方形で、規模は南北が3.7mで東西は3.0mである。長軸方向はN—23°—Wで、面積は10.7m²である。北東隅はやや張り出し気味になっている。壁高は10～28cmで、地層断面からは34cmを測る。住居中央に方形の攪乱があり、不明の部分が多い。 **ピット** 南壁下。規模は53×15cmで、深さは5cmである。性格は不明である。 **カマド** 東壁南寄り。全長100cm以上、燃焼部長80cm、壁外掘り込み38cm、壁への掘り込み角度45°である。燃焼部と床面との差はない。残存部分が少ない。東壁下の焼土範囲が燃焼部火床面と思われる。 **遺物** カマド手前床面より甑(こしき)が出土している。 (富澤)

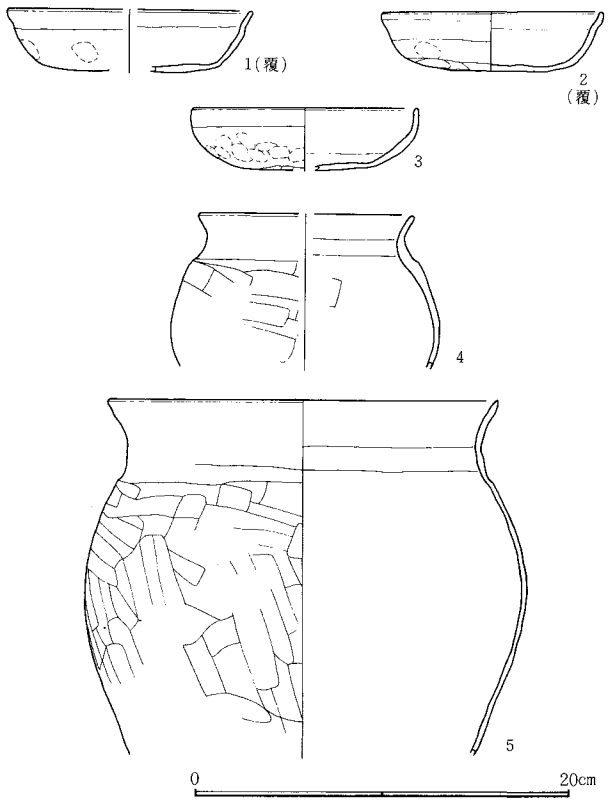


H177号住居跡（図—329、330　図版—20、97　表—166）（IX期）



1．褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。2．黒褐色土。焼土、炭化物、FP・C軽石混入。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、少量の炭化物混入。2．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。3．赤褐色土。C軽石、多量の焼土塊、ローム塊混入。4．黒褐色土。焼土、炭化物、FP・C軽石混入。

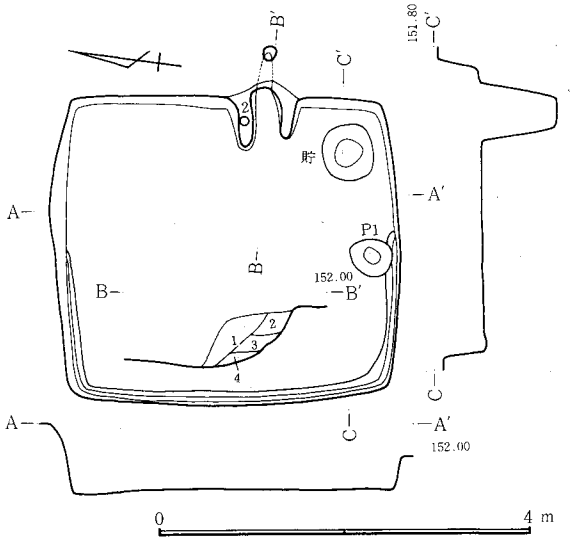
図—329　H—177号住居跡



図—330　H—177号住居跡出土遺物

位置　西台地の南西のK・L102。　**形状**　西側は調査区外のため不明確な部分が多い。南北は4.3mで東西は1.3m（現状）で面積は5.6m²（現状）である。長軸方向はN—4.5°—Wである。壁高は19～28cmで、地層断面からは約20cmを測る。　**カマド**　東壁南寄りにある。両袖部を掘りのこして作られている。全長120cm、燃焼部長68cm、袖部内幅50cm、壁外掘り込み44cm、壁への掘り込み角度41°である。燃焼部と床面とのレベル差はほとんどない。　**貯蔵穴**　南壁東寄り。円形で、規模は70×60cmで深さ28cmである。貯蔵穴の上からは4石が検出されている。北側の小さい2石は焼石である。　**遺物**　カマド手前より土師器坏(3)と小型甕(4)、甕(5)が、埋土中より土師器坏(1・2)が出土している。　**重複関係**　K—25と重複、本遺構が新しい。　（井野）

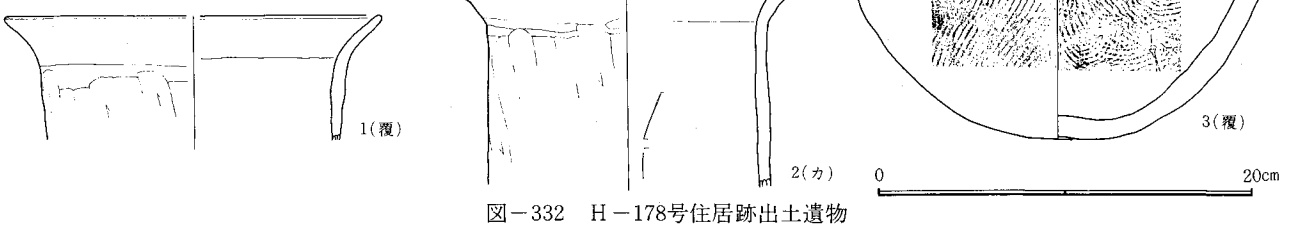
H178号住居跡（図—331、332　図版—20、97　表—167）（IV期）



カマド　1．黒褐色土。FP・C軽石、若干の灰混入。2．1に粘土混。3．灰白色土。灰、粘土、少量のFP・C軽石、焼土粒混入。4．粘土。焼土ブロック多量に混入。

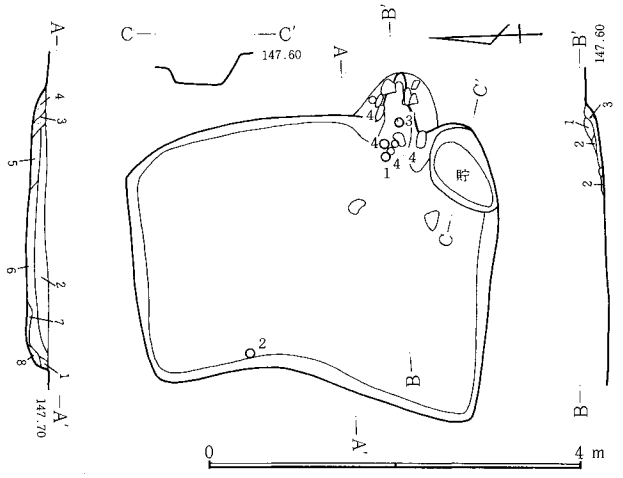
図—331　H—178号住居跡

位置　西台地の南西端のP2に位置する。西台地の南面の小張り出しの東面に位置する。　**形状**　南北に長軸をもつ。ほぼ正方形に近い。南北3.5mで東西3.1m、長軸方向N—8°—Wで面積は10.4m²である。壁高は35～75cmを測る。住居跡西半分の壁下に周溝をめぐらす。幅2～15cmで深さは4～10cmである。壁は直に近く掘り込まれている。　**ピット**　P_1、48×40cmで深さ14cm。南壁下にあり、入口に関係のある柱穴とも考えられる。　**カマド**　東壁南寄りにある。全長110cmで燃焼部長68cm、袖部内幅30cm、壁への掘り込み角度69°、壁外掘り込み42cmである。燃焼部と床面をくらべると約10cm低い。袖部分は掘りのこし、煙道は壁内にうがたれていた。　**貯蔵穴**　南東隅。円形で、規模は62×55cmで深さ89cmである。　**遺物**　カマド左袖部より土師器甕(2)が出土、埋土中より土師器甕(1)と須恵器甕(3)が出土した。住居内堆積土は、カマド前の井戸の掘削での攪乱された土層になっている。　（井野）



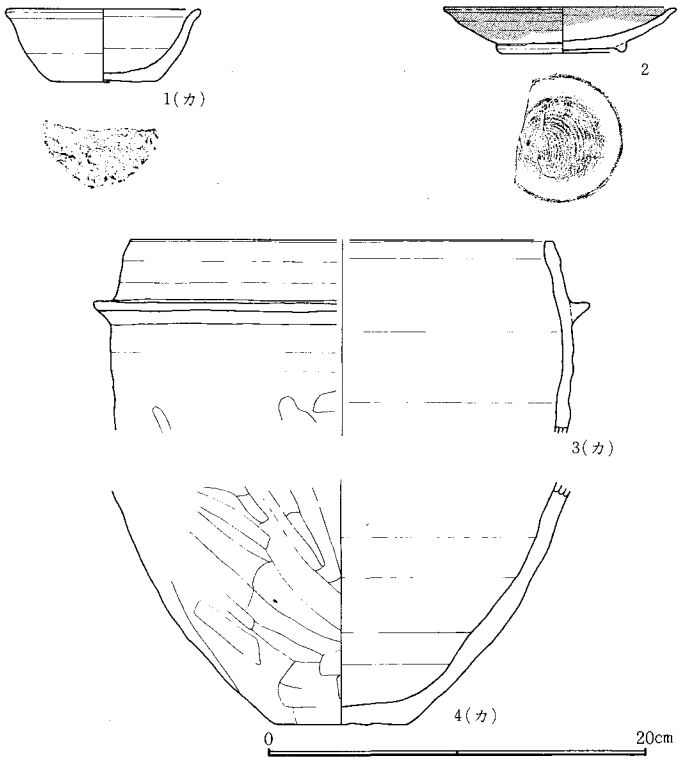
図—332　H—178号住居跡出土遺物

H179号住居跡（図－333、334　図版－21、97　表－168）（XIV期）



1．黒褐色土。C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．黒色土。FP・C軽石、焼土混入。4．黄褐色土。5．黒色土。FP・C軽石混入。6．黒褐色土。FP・C軽石混入。7．黒褐色土。8．黄褐色土。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石、多量の焼土混入。2．黒色土。FP・C軽石、少量の焼土混入。3．焼土。黄褐色土混。

図－333　H－179号住居跡

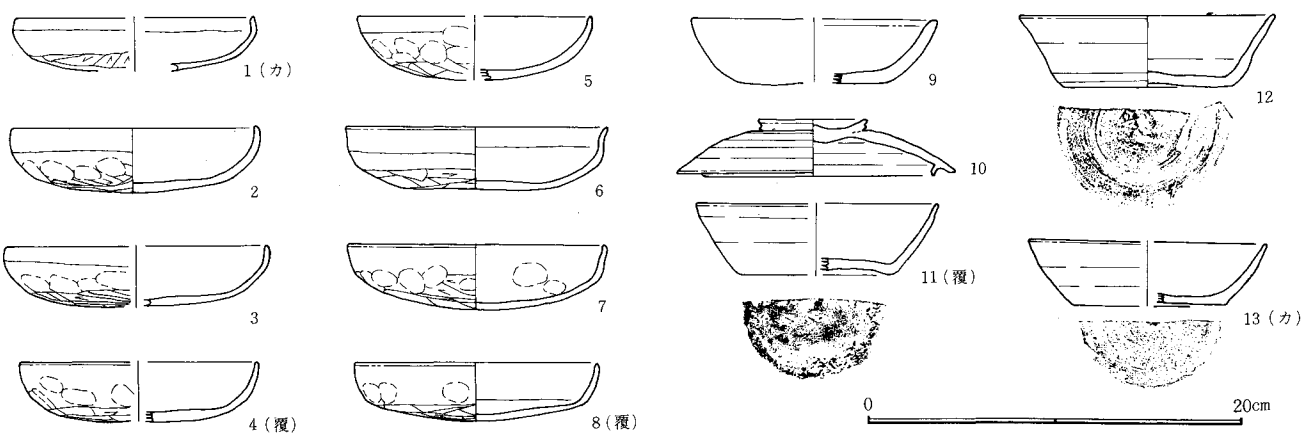


図－334　H－179号住居跡出土遺物

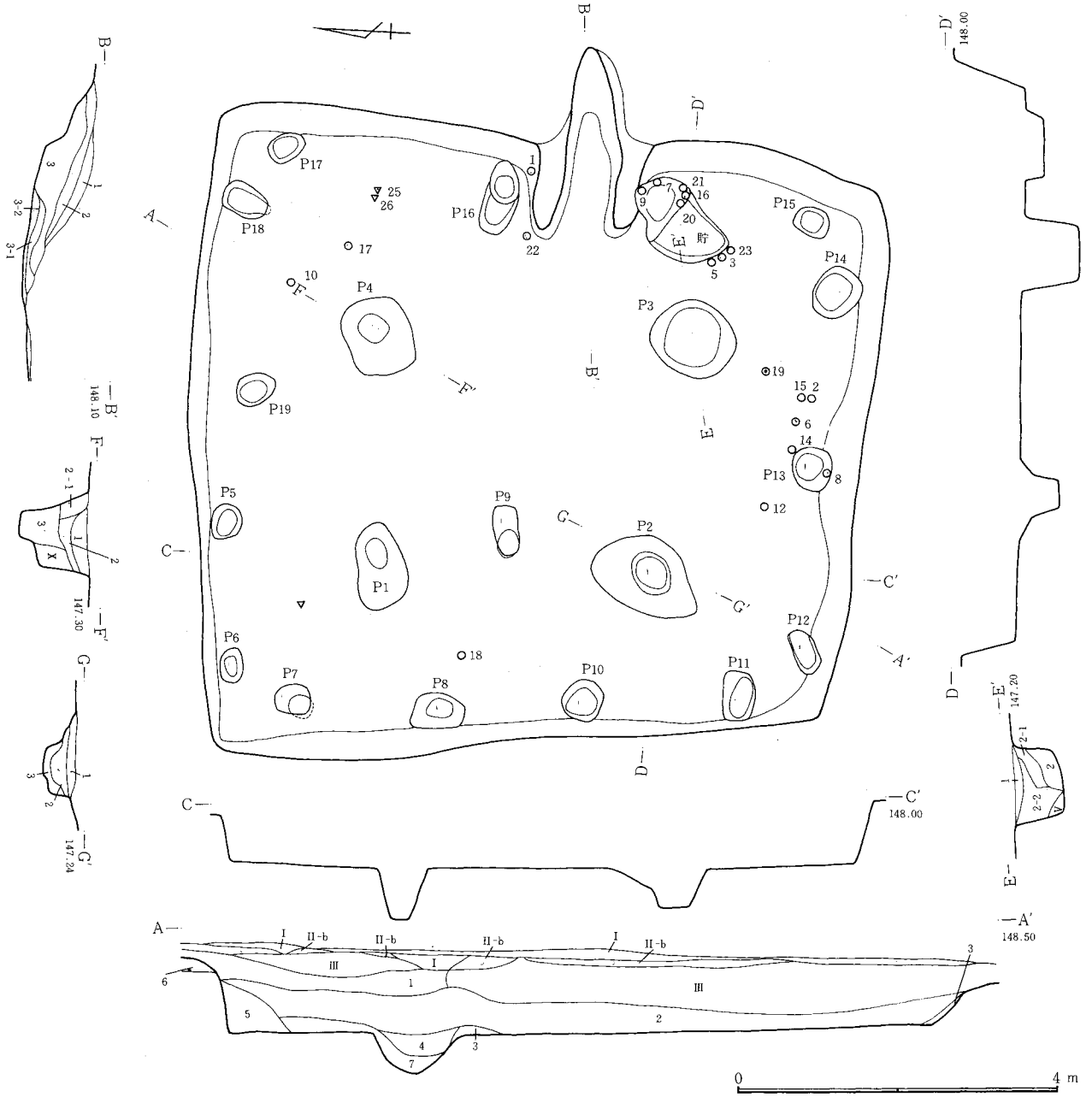
位置　西台地上の南端中央部、J103に所在する。　**形状**　平面は長方形の3.5×2.5mで、面積9.0㎡の比較的小さい住居である。壁現高は10～30cmである。周溝は認められない。長軸方向はN－5.5°－Wである。　**床面**　踏み固め部分は不明であり、貼床は地層断面図から無かったものと推定される。ピットは認められない。　**カマド**　東壁にあり、中央と南東隅の中間に位置している。壁からの掘り込み長は72cm、袖部内幅40cm、燃焼部長80cmである。燃焼部は床面から4cm高く、壁への掘り込み角度48°である。構築材として焚き口に1個、右袖に1個、煙道部に6個の石材が使用されている。　**貯蔵穴**　南東隅にあり平面楕円形で、100×50cm、深さ18cmの大きさである。　**遺物**　灰釉皿(2)、須恵器坏(1)、と羽釜2個体分(3・4)が出土している。　**重複関係**　K－23、24と重複しているが、本住居跡が新しいものと推定される。　（中村）

H180号住居跡（図－335、336、337、338　図版－21、97、98　表－169）（Ⅷ期）

位置　西台地南端部のJ102に所在し、南緩傾斜面に当る。　**形状**　南壁及び東壁がやや歪んだ、南北方向に長い隅丸不整方形を呈する。規模は、東西6.9m、南北7.7mを測り、面積は53.6㎡である。長軸方向はN－1°－Wで、壁高は74～91cmである。床面はほぼ平坦で、強く踏み固められていたが周溝は検出されなかった。　**ピット**　床面中央部に5か所、壁際に14か所検出された。P_1～P_4は、径100cm前後、深さ47～96cmでばらつきがあるが、主柱穴になると考えられる。配置は平面プランと相似形を呈するが、対角線上からはやや北にずれている。P_9は62×34cm、深さ46cmで性格は不明である。他の壁際のピットについては、径50～60cm前後、深さ40～50cm前後で、配置の規則性は認められないが、壁柱穴になると考えられる。　**カマド**　東辺のほぼ中央部に粘土を使用して構築されていた。全長228cm、袖部内幅70cm、燃焼部長158cmで、壁への掘り込み角度は39°である。燃焼部は床面とほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　カマドの南隣りに、80×120cm、深さ22cmの不整形の落ち込みがあり、遺物が多く出土したので、この穴が貯蔵穴の役割を果したものと思われる。　**遺物**　南東部に多く集中して出土している。砥石(24)及び鉄滓(25・26)の出土が注目される。また、本住居からは比較的多数の土師器・須恵器が出土しているが、地層断面の記録に明らかなように、浅間火山給源のB軽石の純層が堆積していることから、遺物の年代を知る上に重要な手掛りを与えてくれる資料が得られた。　（飯塚）

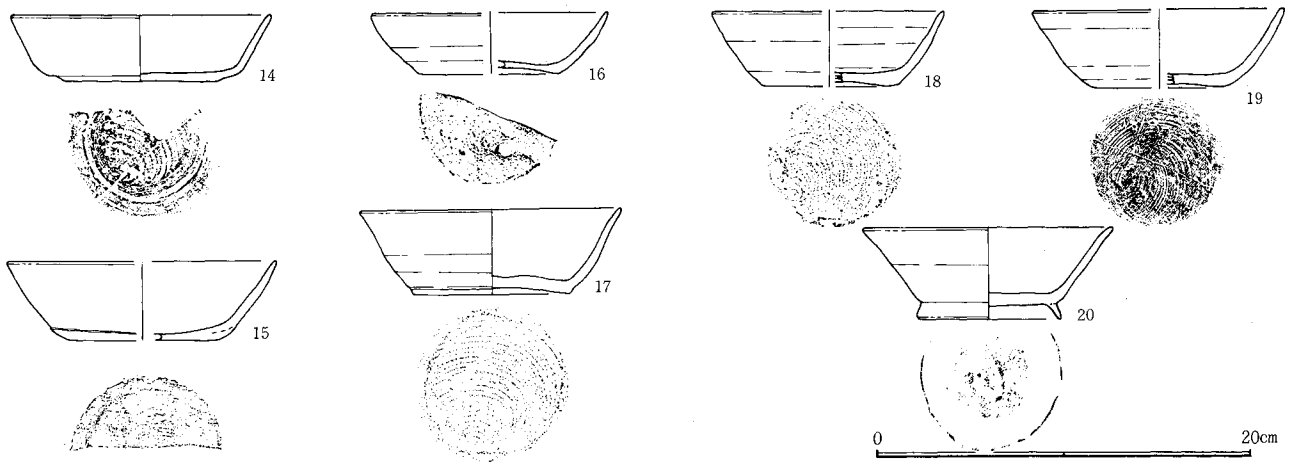


図－335　H－180号住居跡出土遺物(1)

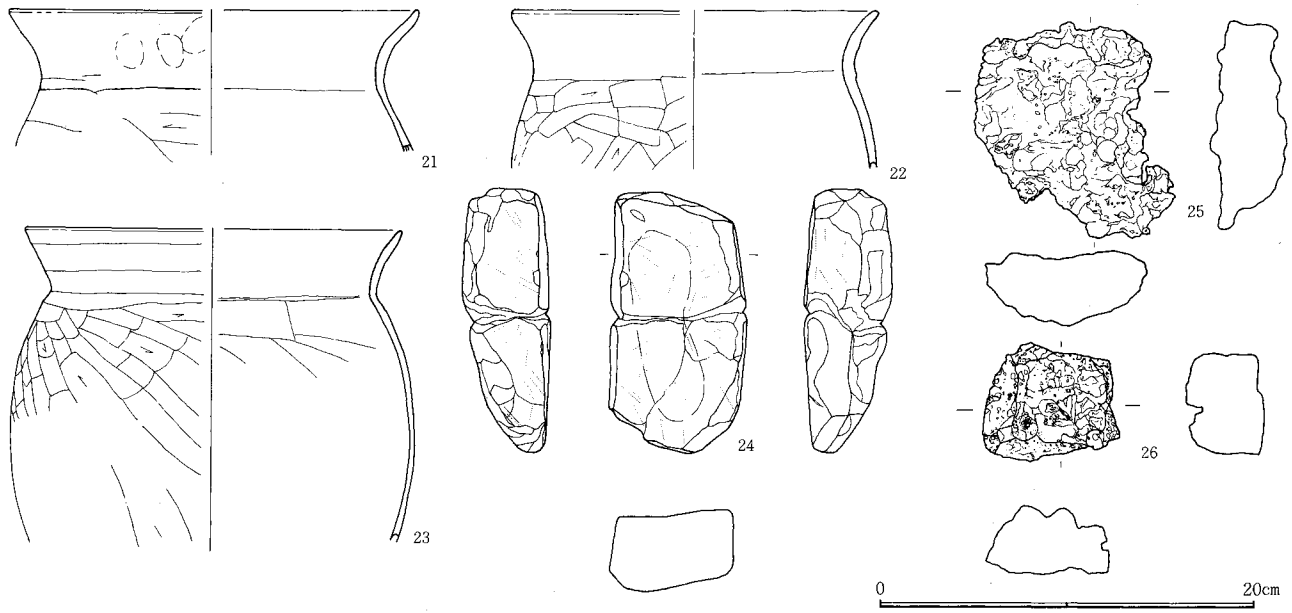


1．黒褐色土。ＦＰ･Ｃ軽石混入。2．黄褐色土。ＦＰ･Ｃ軽石混入。3．2にロームブロック混入。4．3に少量の焼土混入。5．3よりロームが多い。6．褐色土。Ｃ軽石混入。7．ロームに3が少量混入。　**カマド**　1．黒色土。ＦＰ･Ｃ軽石混入。2．焼土。3．赤褐色土。焼土粒、白色粘土、炭化物混入。3-1．3より粘土が多い。3-2．3より灰、炭化物多量に混入。**P.** 1．黒色土。ＦＰ混入。2．褐色土。ロームブロック、炭化物、Ｃ軽石混入。2-1．黄褐色土。2よりロームが多い。2-2．褐色土。ロームブロック、炭化物、ＦＰ･Ｃ軽石混入。3．黒褐色土。

図－336　Ｈ－180住居跡

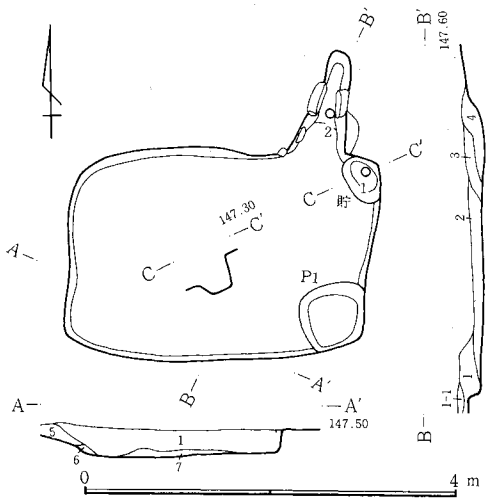


図－337　Ｈ－180号住居跡出土遺物（２）



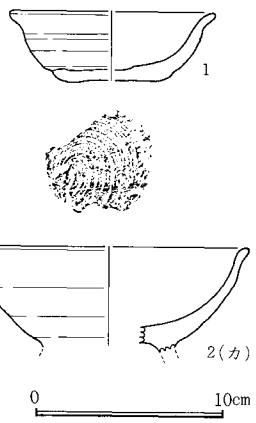
図－338　H－180号住居跡出土遺物（３）

H181号住居跡（図－339、340　図版－21、98　表－170）（XIV期）



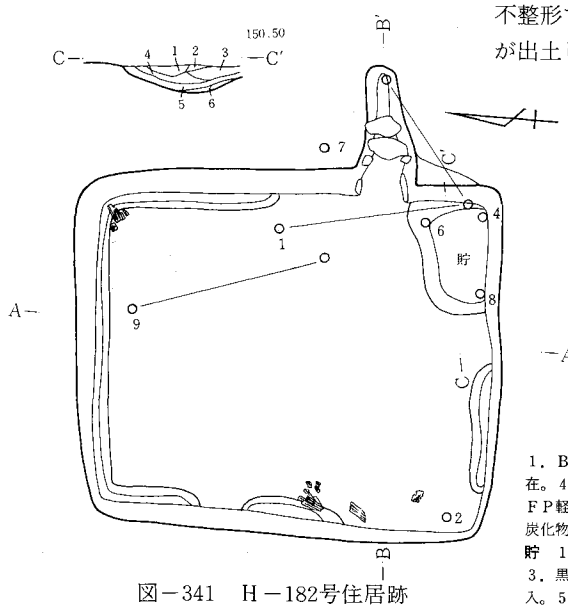
図－339　H－181号住居跡

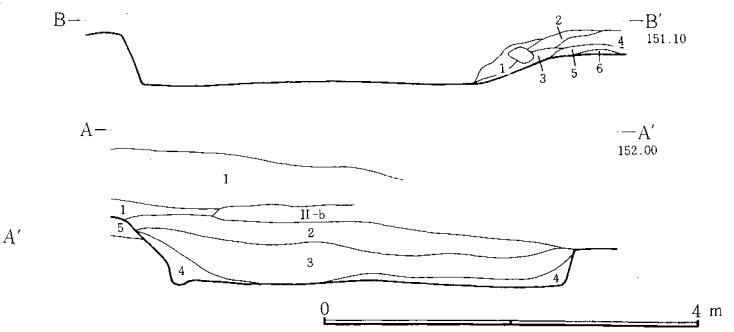
1．黒褐色土。FP・C軽石混入。1-1．1より黒味が強い。2．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、少量のロームブロック混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、ローム混入。4．焼土。黒褐色土、FP・C軽石混入。5．黒褐色土。C軽石混入。6．黒褐色土。ローム塊、FP・C軽石混入。7．黒褐色土。C軽石混入。



図－340　H－181号住居跡出土遺物

位置　西台地南端のJ103南西部に所在し、台地の南縁部に当る。　**形状**　東西方向に長く四辺が歪んだ隅丸不整方形で、東西3.1m、南北2.1mを測る。長軸方向はN－87°－E、面積は6.5㎡である。床面は地山層を踏み固めており、壁高は９～16cmある。なお、地層断面の記録からは24cmまで壁が確認されている。　**ピット**　南東隅に61×60cm、深さ26cmのP_1が検出されたが性格は不明である。　**カマド**　北壁の北東隅際。角礫と粘土を使用して構築されており、燃焼部は壁外にある。袖部内幅46cm、燃焼部長42cmで、壁への掘り込み角度は74°、全長116cmである。燃焼部の奥には板状の角礫２個が立てられており、煙道部との境界が明確にとらえられた。燃焼部は床面よりも約７cm窪んでいた。　**貯蔵穴**　北東隅。50×32cm、深さ19cmの不整形である。　**遺物**　貯蔵穴内より須恵器坏(1)、カマド内より須恵器椀（２）が出土している。　（飯塚）



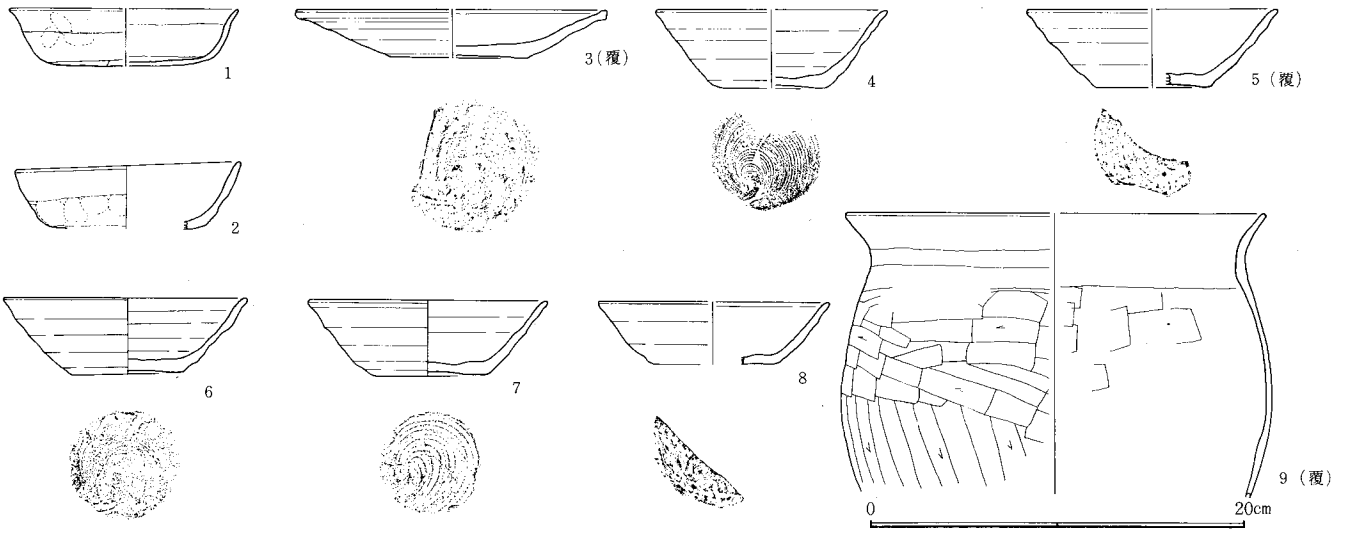


図－341　H－182号住居跡

1．B軽石灰層。2．黒褐色土。FP・C軽石、焼土混入。3．黒褐色土。ロームブロック(φ3cm)点在。4．黒褐色土。ローム粒混入。5．黒褐色土。ローム粒は４より少量。　**カマド**　1．黒褐色土。FP軽石、ローム粒、焼土粒、炭化物点在。2．赤褐色土。多量の焼土を含む。3．茶褐色土。焼土、炭化物混入。4．黒褐色土。FP軽石、ローム粒、焼土混入。5．黒色土。FP混入。6．黒褐色土。
貯　1．赤褐色土。ブロック状の焼土、土師片を含む。2．黒褐色土。焼土、FP・C軽石少量混入。3．黒褐色土。多量のローム、少量のFP・C軽石混入。4．黒色土。少量のローム、FP・C軽石混入。5．黒褐色土。ローム塊、少量のFP・C軽石混入。6．ローム、FP・C軽石、黒色土混入。

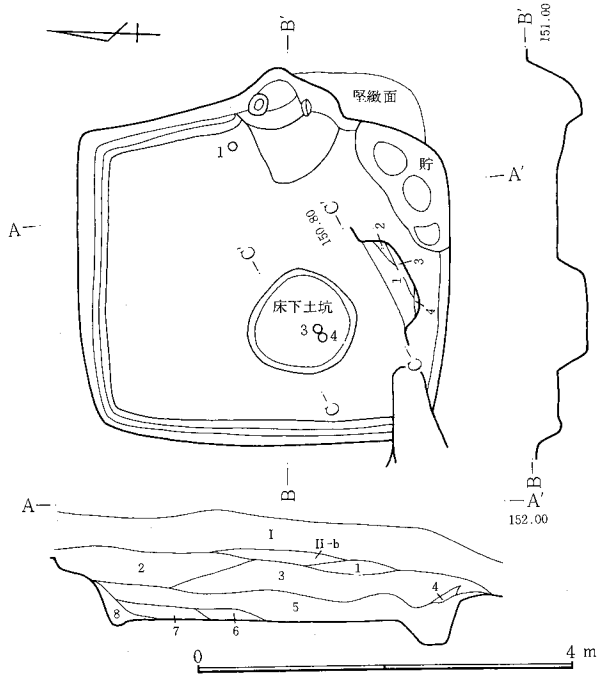
H182号住居跡（図―341、342　図版―21、98　表―171）（X期）

位置　H２。西台地の中央部に当り平坦な所となっている。　**形状**　長方形を呈し南北4.2m、東西3.7mである、床面積は14.4m²を測る。長軸方向はN―4.5°―W、壁高は最高55cm、最低42cmの残存状況であった。周溝は、東壁の北側２分の１から北壁全体をめぐり西壁の北側３分の２、南壁の西寄りにめぐっている。溝の深さは、２～６cmで幅は４～12cmであった。　**カマド**　東壁中央南寄り、全長140cm、袖部内幅47cm、燃焼部長40cm、壁への掘り込み角度20°、壁外掘り込みは138cmである。構築材は、安山岩の割れ石を使用し６石残っている。右袖部２石、左袖部２石、煙道部履石２石。カマド内に支石がすえられている。　**貯蔵穴**　住居南東隅。隅丸長方形で122×70×26cmである。　**遺物**　貯蔵穴内より、須恵器坏(4•6•8)が、北壁下より土師器甕(9)が、南西隅とカマド左手前より土師器坏(2•1)が出土している。　**テフラ**　II―b層がB軽石純層。床面より63cm、自然堆積。　**重複関係**　H―183とカマドが重複しており、本遺構が新しい。　（福田）



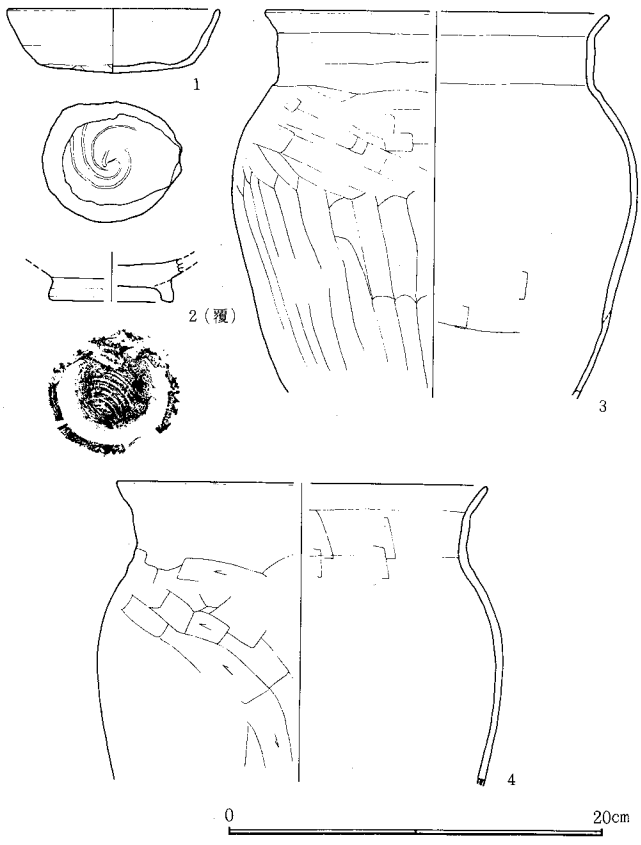
図―342　H―182号住居跡出土遺物

H183号住居跡（図―343、344　図版―21、98　表―172）（X期）



1．FP•C軽石、若干の焼土粒混入。2．黒褐色土。FP•C軽石混入。3．4．黒色土。C軽石混入。5．暗褐色土。FP•C軽石、若干の炭化物、焼土粒混入。6．黒褐色土。FP軽石、多量のローム混入。7．黒褐色土。FP軽石、多量のローム混入。8．褐色土。多量のローム混入。P_1 1．暗褐色土。焼土、ローム塊、少量のFP軽石、炭化物混入。2．黄褐色土。多量のローム塊混入。3．暗黒褐色土。FP軽石、多量の炭化物混入。4．暗褐色土。少量のFP軽石、多量の炭化物、焼土混入。

図―343　H―183号住居跡

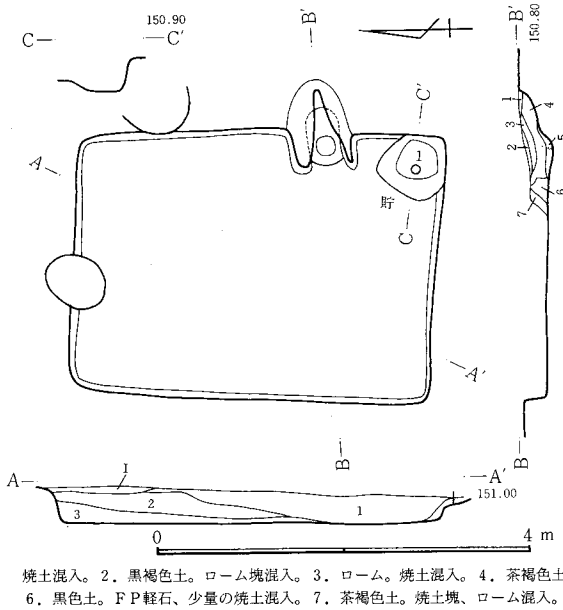


図―344　H―183号住居跡出土遺物

位置　D５付近に谷頭とする東側低地に下る緩傾斜面のH２に所在。ここには掘立柱建物主体の遺構が群集し、その北東部に位置する。　**形状**　南北3.7m、東西3.4mを測る長方形。東壁は南北の両隅と鈍角で交わるが、他の壁同志は直交関係にある。また、南壁とカマド南半の東壁を除き壁は直線傾向。壁高は地層断面から北壁で70cm前後、東壁で45cm、カマド右手の東壁外部の一部には堅い面（住居床面から＋50cm）が検出され、厨房施設の一部とも考えられた。長軸N―２°―W、床面積11.5m²。周溝の

深さは2～5cm。　**ピット**　P_1、深さ33cm。底部の3・4層中に多量の焼土や炭化物。壁面底面に焼け跡等はない。P_2、燃焼部火床面より－10cm。　**カマド**　右側袖部付近の自然石は地山中のものとみられ、石材の使用は未確認。P_2付近の燃焼部先端が最も低く、住居床面より－26cm。　**貯蔵穴**　底面の深さは、北部で15cm、中央部で27cm。　**遺物**　（3・4）はP_1内の3層中出土。（1）は床面着。（2）は覆土中。　**テフラ**　覆土中にB軽石純層（II－b層）。　**重複関係**　南西隅を切ってH182号住居のカマドを構築。本住居の方が旧い。　**その他**　西壁付近の覆土の一部はH182号住居跡の覆土とつながる。　（唐澤）

H184号住居跡（図－345、346　図版－21、98　表－173）（X期）

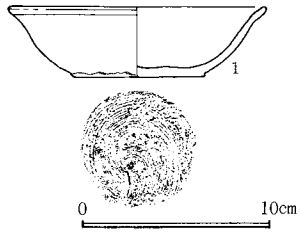


焼土混入。2．黒褐色土。ローム塊混入。3．ローム。焼土混入。4．茶褐色土。ローム、多量の焼土混入。5．黒色土。焼土点在。6．黒色土。FP軽石、少量の焼土混入。7．茶褐色土。焼土塊、ローム混入。

図－345　H－184号住居跡

位置　H2に所在し、西台地中央部に当り平坦な所になっている。　**形状**　長方形を呈し南北3.7m、東西2.8mであり、床面積は10.1m²を測る。長軸方向は、N－4.5°－E　壁高は最高38cm、最低28cmの残存状況であった。床面は、ローム面を踏み固めてある。　**カマド**　東壁南寄りで袖部は住居内に設置し煙道部は外部に掘り込んでいる。全長98cm、燃焼部分64cm、袖部内幅40cm、壁外掘り込み60cmである。住居床面と燃焼部のレベル差は－11cmで深く掘り込まれている。　**貯蔵穴**　カマドの南側で南東壁際に位置し、形状はややゆがんだ円形をしている。規模としては66×60×13cmである。覆土は、暗褐色土を基調に4層に分かれ、自然堆積を示している。　**重複関係**　K－103と重複しており、北壁、東壁に各1基の柱痕がある。新旧関係は本遺構が旧い。　（福田）

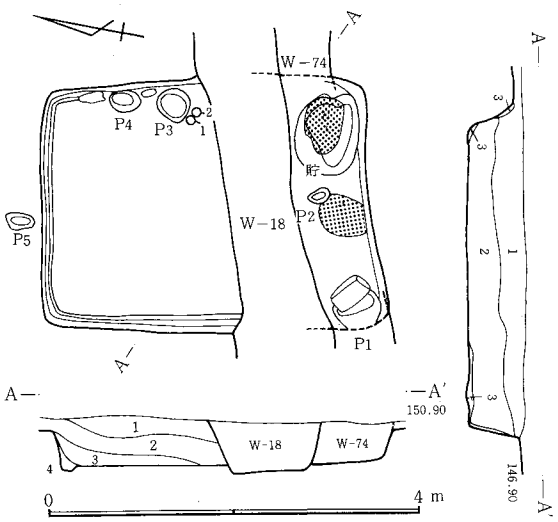
1．暗褐色土。ローム粒多量に混入。2．黒褐色土。焼土、FP・C軽石、ローム小ブロック混入。3．黒褐色土。2に近似でローム粒多量。4．暗褐色土。下部にローム粒多く混入。　**カマド**　1．赤褐色土。



図－346　H－184号住居跡出土遺物

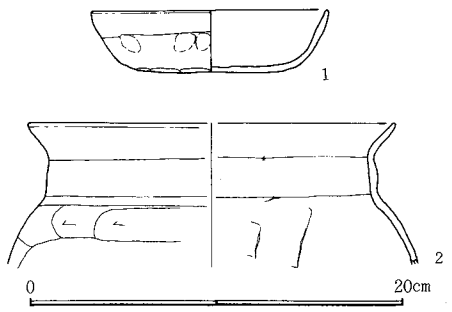
H185号住居跡（図－347、348　図版－21、98　表－174）（XI期）

位置　G2。西台地の南に近く南への緩斜面に所在している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北3.4mで東西2.6mである。長軸方向はN－13°－Wで面積さ8.2m²である。住居跡の中央を東西にW－18・74が通っているためにカマドは失なわれ、住居跡の中央部も破壊されている。周溝は現存する住居跡の東壁の北端、北壁、西壁の3分の2にのこる。幅3～14cmで、深さは3～4cmである。　**ピット**　床面4カ所にのこる。P_1は45×30cmで深さ16cm。P_2は23×14cmで深さ16cm。P_3は32×32cmで深さ15cm。P_4は36×24cmで深さ22cm。P_5は30×17cmで深さ12cmである。P_1は上が石で覆われていた。いずれも性格は明らかでない。P_5は住居外北にある。　**カマド**　溝との重複により失なわれていて不明である。　**貯蔵穴**　南東壁下。規模は77×69cmで深さ16cmである。　**遺物**　東壁中央部やや西より土師器坏(1)と甕(2)が出土している。　**テフラ**　1、2層はFP・C軽石が多量に含まれている。　**重複関係**　W－18、74と重複する。南北の地層断面により、新旧は古い遺構からH－185→W－74→W－18である。　（井野）



1．黒褐色土。FP・B・C軽石混入。2．暗黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊多量に混入。3．暗褐色土。ローム塊、C軽石多量に混入。4．黒褐色土。ローム塊混入。

図－347　H－185号住居跡

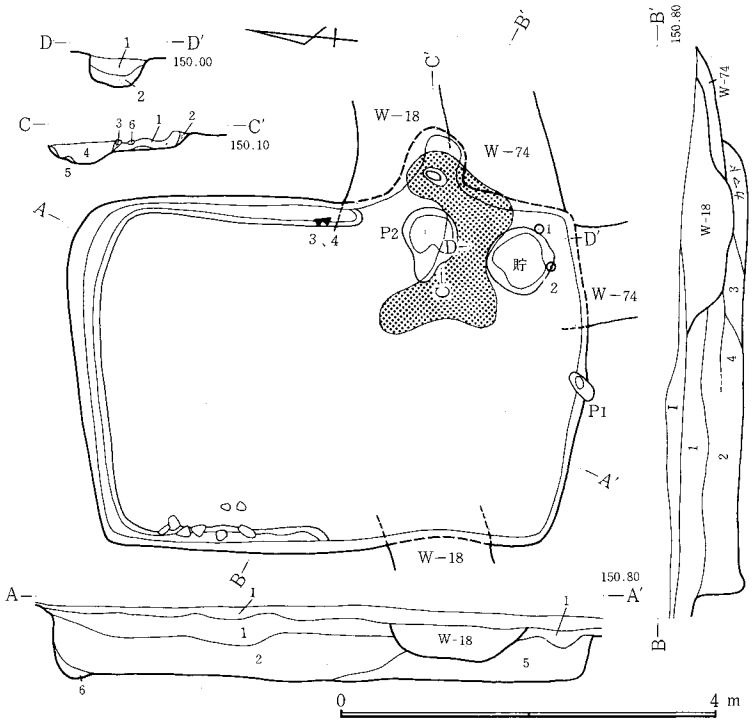


図－348　H－185号住居跡出土遺物

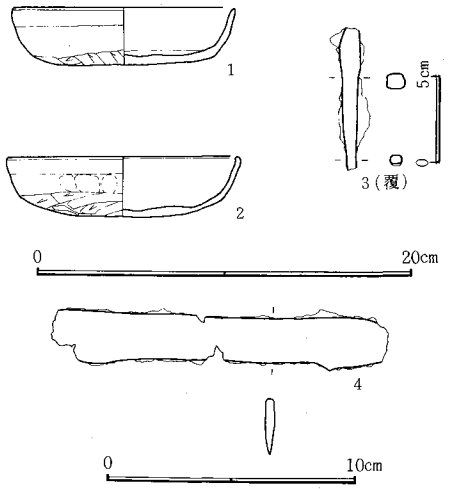
H186号住居跡（図－349、350　図版－21、99　表－175）（VIII期）

位置　G2に位置する。周辺に同時期と考えられる竪穴住居跡はわずかであるが、掘立柱建物群の配置と相関関係が考えられる。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北5.2m、東西3.5mである。長軸方向はN－6°－Wで面積は18.2m²である。壁高は34～68cmで地層断面からは74cmを測る。壁は垂直に近くしっかりと掘り込まれている。北壁と西、東壁の北2分の1に周溝をめぐらす。幅4～20cmで深さ2～9cmである。住居跡南側をW－18・74が通っており、住居跡の南部分の上面とカマドの上面が破壊されている。　**ピット**　2カ所。P_1は35×15cmで深さ19cm、P_2は80×58cmで深さ32cm。P_2はカマドの前面で灰かき穴か。　**カマド**　東壁南寄り。壁外に作られている。全長88cm、燃焼部長68cm、袖部内幅60cm、壁外掘り込み88cm、壁への掘り込み角度37°で

ある。燃焼部と床面のレベル差はない。 **貯蔵穴** 南東隅。円形に近い。規模は74×72cmで深さ31cmである。 **遺物** 貯蔵穴内より土師器坏(1・2)が出土している。(1)はほぼ完形。カマド前左手床面より鉄製品(3・4)が出土。 **重複関係** W－18・74と重複する。H－186→W－74→W－18の順に新しい。K－43とも重複。新旧は不明。 (井野)



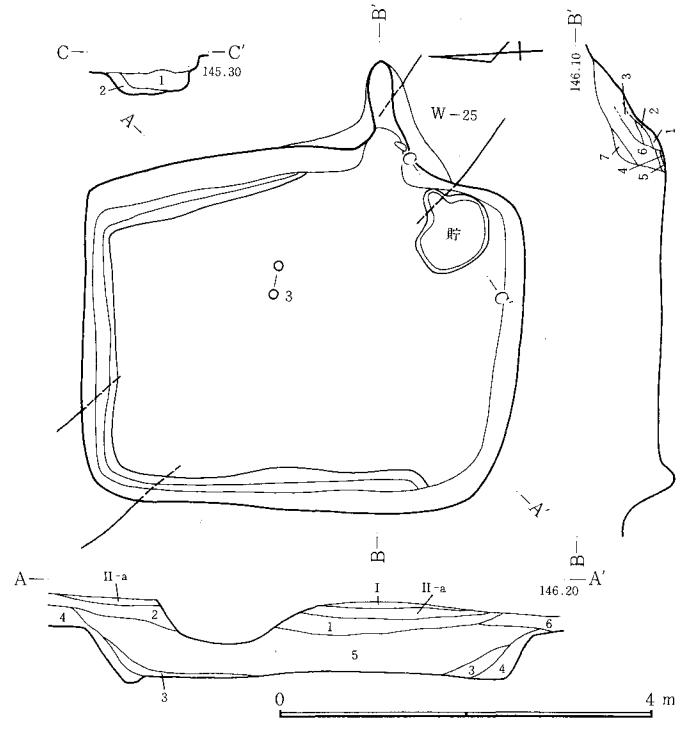
図－349 H－186号住居跡



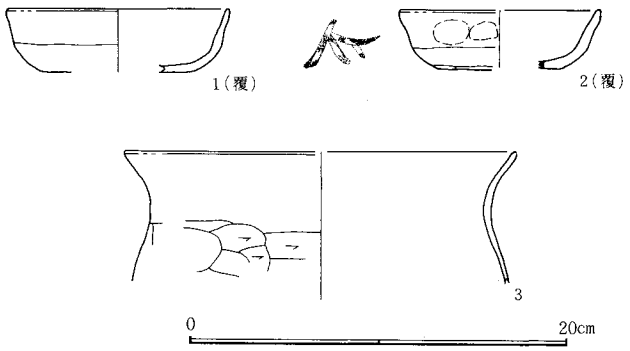
図－350 H－186号住居跡出土遺物

1．暗褐色土。FP・C軽石多量に混入。2．暗褐色土。FP軽石混入。3．暗褐色土。炭化物、FP・C軽石、下部に焼土混入。4．黒褐色土。FP・C軽石、焼土粒、多量の炭化物混入。5．茶褐色土。FP・C軽石、焼土粒混入。6．ロームの二次堆積。 **カマド** 1．暗褐色土。焼土粒点在。2．ロームと黒色砂質土の混合土。3．漸移層。4．黒褐色粘質土。焼土塊点在。5．ローム塊と黒褐色粘質土の混合。6．焼けた凝灰岩。 **貯** 1．黒灰色粘質土。灰、焼土、炭化物混入。2．黒褐色土。ローム塊混入。

H187号住居跡（図－351、352 図版－22、99 表－176）（IX期）



図－351 H－187号住居跡

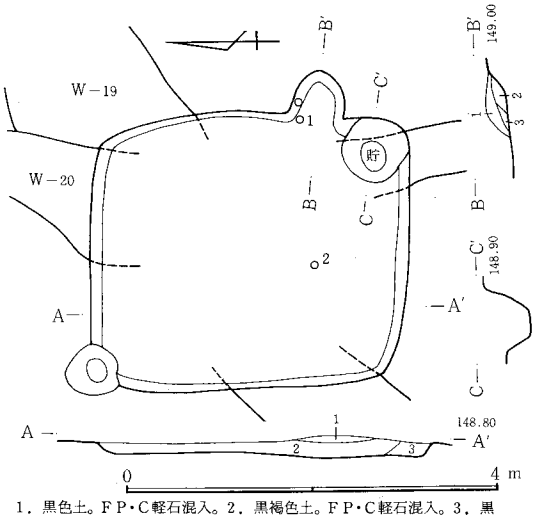


図－352 H－187号住居跡出土遺物

1．黒褐色土。B軽石、ローム粒主体。FP・C軽石多量に混入。2．茶褐色土。ローム粒主体。FP・C軽石多量に混入。3．茶褐色土。FP・C軽石、多量のローム混入。4．暗褐色土。ロームブロック(φ3cm以下)含む。5．茶褐色土。ローム、焼土塊(φ3cm以下)混。6．2と類似で焼土なし。 **カマド** 1．赤色土。灰、炭化物、ローム粒、多量の焼土ブロック混入。2．茶褐色土。粘土、ローム、灰、焼土ブロック、C軽石混入。3．茶褐色土。粘土、やや多めのローム塊、焼土塊、少量のC軽石混入。4．ローム。5．灰茶褐色土。焼土塊、ローム粒、炭化物、灰混入。6．濃茶褐色土。ローム塊、焼土塊、多量のFP・C軽石混入。7．明茶褐色土。多量のローム、C軽石少量の灰混入。 **貯** 1．茶褐色土。多量のローム塊、焼土ブロック、灰、少量のFP・C軽石混入。2．ロームと黒色土の混合。

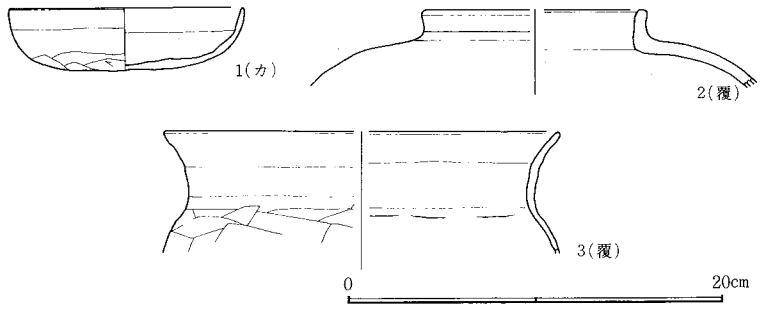
位置 A101に所在し、西台地の南端に位置する。本住居跡の西および東には住居群がみられ、その中間にあるといえる。 **形状** 南北方向に長軸をもつ長方形を呈している。南北4.3m、東西3.4mで長軸方向はN－5°－E、面積13.7m²である。東壁が外側にやや突き出している。壁高は34～56cmを測る。周溝は幅4～24cm、深さ5～12cmで、東壁のカマド北側より北壁、そして西壁に認められる。 **カマド** 東壁中央より南寄り。全長134cm、燃焼部長60cm、袖部内幅44cm、壁への掘り込み角度は40°である。煙道部に土師器の甕を3個ほど使用する（この甕、調査中盗難に遭い、詳細は不明）。 **貯蔵穴** 南東隅にあって形状は不整形をしている。規模は90×80cmの径をもち、深さ27cmを測る。 **重複** W25号溝と重複する。本住居跡の埋土上面にその痕跡が確認されることにより本住居跡の方が旧いと判断する。 **遺物** 住居中心寄りで土師器甕(3)、その他覆土内より土師坏(1・2)が検出された。 (中澤)

H188号住居跡（図—353、354　図版—22、99　表—177）（IX期）



1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．黒色土。FP・C軽石、少量の褐色土混入。　**カマド**　1．褐色土。FP軽石、少量のローム粒、焼土混入。2．赤褐色土。多量の焼土混入。3．褐色土。焼土とFP軽石含む黒色土の混合土。

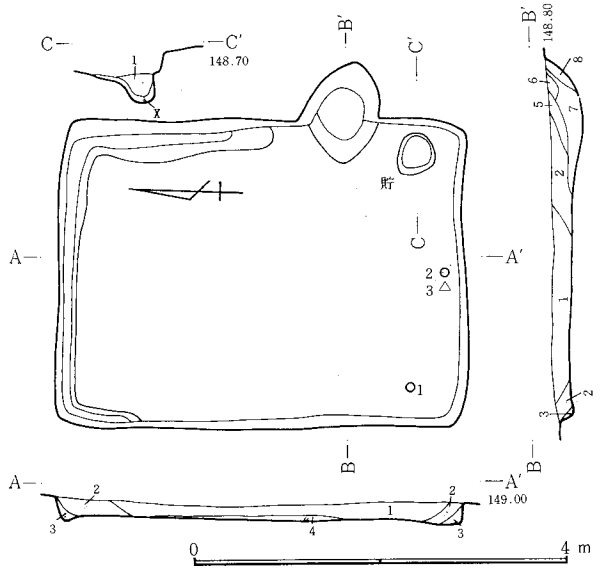
図—353　H—188号住居跡



図—354　H—188号住居跡出土遺物

位置　西台地中央の南辺に近いH101にある。W—20とW—19とが交差する地点にある。H—189が南に隣接する。　**形状**　南北3.2m、東西2.8mの長方形である。東壁の北端の立ち上がりが不明であり、全体的に浅い掘り型である。各壁ともに、ほぼ直線であるが、北西隅を除く三隅は丸味がある。面積は8.5m²で長軸方向はほぼ磁北を向く。周溝は検出されなかった。　**ピット**　北西隅に一つ検出された（P_1）。63×53cm、深さ19cmで床面からの深さは9cmである。性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄りにある。全体が壁外に掘り込まれてあり、全長70cm、燃焼部長60cm、袖部内幅40cm、壁への掘り込み角度52°を測る。　**貯蔵穴**　南東隅。63×53cmの円形で深さ19cm。　**遺物**　カマド内より坏(1)、床面より甕(2)が出土している。　**重複関係**　W—19の断面が本遺構の地層断面に出ており、本遺構が旧い。W—20と重複、W—20が新しい。　（川崎）

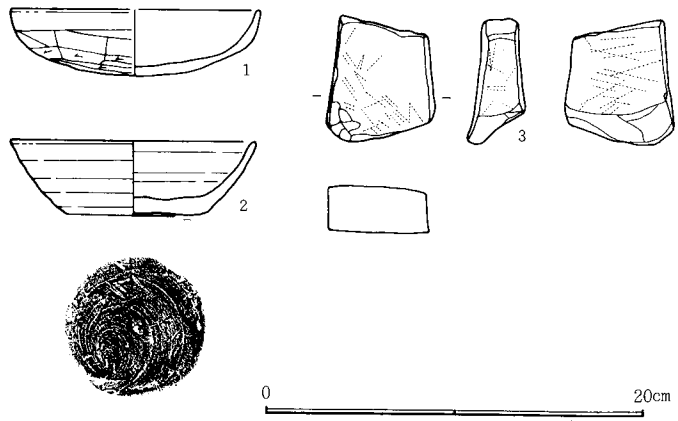
H189号住居跡（図—355、356　図版—22、99　表—178）（VIII期）



1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．暗褐色土。4．褐色土。FP・C軽石少量混入。5．黒褐色土。FP・C軽石、少量の焼土混入。6．焼土。7．赤黒色土。FP・C軽石、多量の焼土混入。8．黒褐色土。　**貯**　1．赤茶けた土。焼土、ローム粒、炭化物混入。

図—355　H—189号住居跡

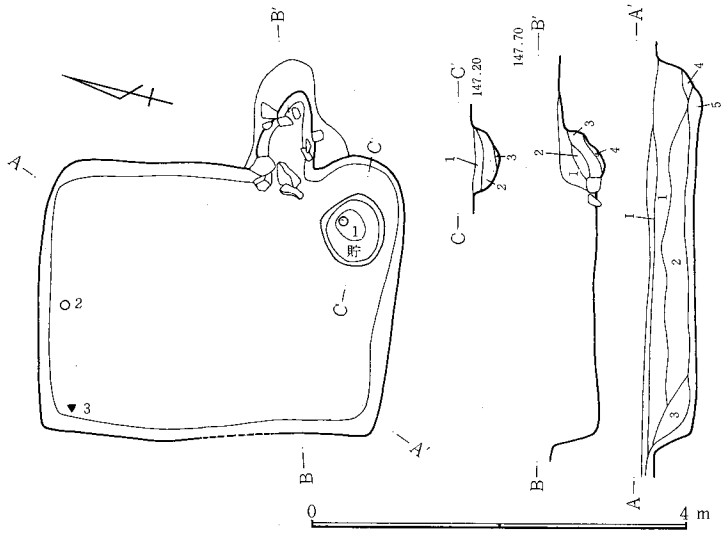
位置　西台地中央の南辺に近いH101にある。H188号住居跡が北に隣接する。　**形状**　南北4.2m、東西3.1mの南北に長い長方形で、各隅とも直角に近いが、南東隅がやや南側に張り出している。面積は13.0m²、長軸方向はN—2.5°—Wを向く。周溝は北西隅から北壁を通り東壁の3分の2のカマドまでまわっている。幅5～21cm、深さ1～6cmを測る。　**カマド**　東壁南寄りにある。全体に壁外に掘り込んであり、右袖の方が8cm短い。カマド前は緩く下がり、床面より15cm低い。全長112cm、燃焼部長58cm、袖部内幅58cm、壁外掘り込み長72cmを測る。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、48×39cm、深さ15cmの円形。　**遺物**　南壁中央の床面より、須恵器坏(2)、砥石(3)が、南西隅より土師器坏(1)が出土している。　（川崎）



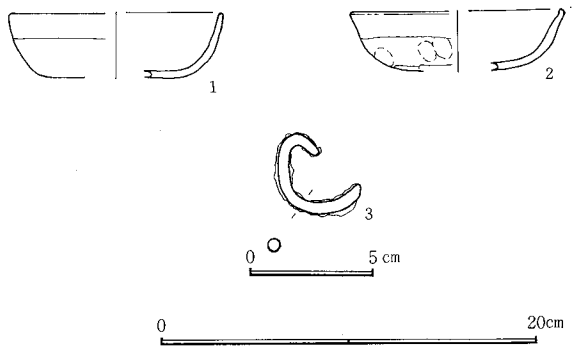
図—356　H—189号住居跡出土遺物

H190号住居跡（図—357、358　図版—22、99　表—179）（X期）

位置　西台地南辺H103にあり、遺跡地の南限にあたる。　**形状**　南北3.5m、東西2.7mの長方形。東壁のカマド以南がやや南側に出ている。西壁の南半分は攪乱を受けており、一部確認できなかった。壁高は、現存で40～50cmを計測し得た。面積は9.5m²、長軸方向はN—8°—Wを向く。周溝は検出されなかった。　**カマド**　東壁南寄りにある。全体に壁を掘り込んでつくってある。両袖に4石、右燃焼部に3石、煙道部に4石の山石を使用している。袖石のうち、左袖の2石は原位置を動いていないと思われる。全長132cm、燃焼部長64cm、袖部内幅32cm、壁への掘り込み角度44°を測る。　**貯蔵穴**　南東隅のやや内側にある。73×65cmの長円形で、深さ26cmである。　**遺物**　貯蔵穴内より土師器坏（1）、北壁中央より土師器坏（2）、北西隅の床面より鉄製品（3）が出土している。　（川崎）



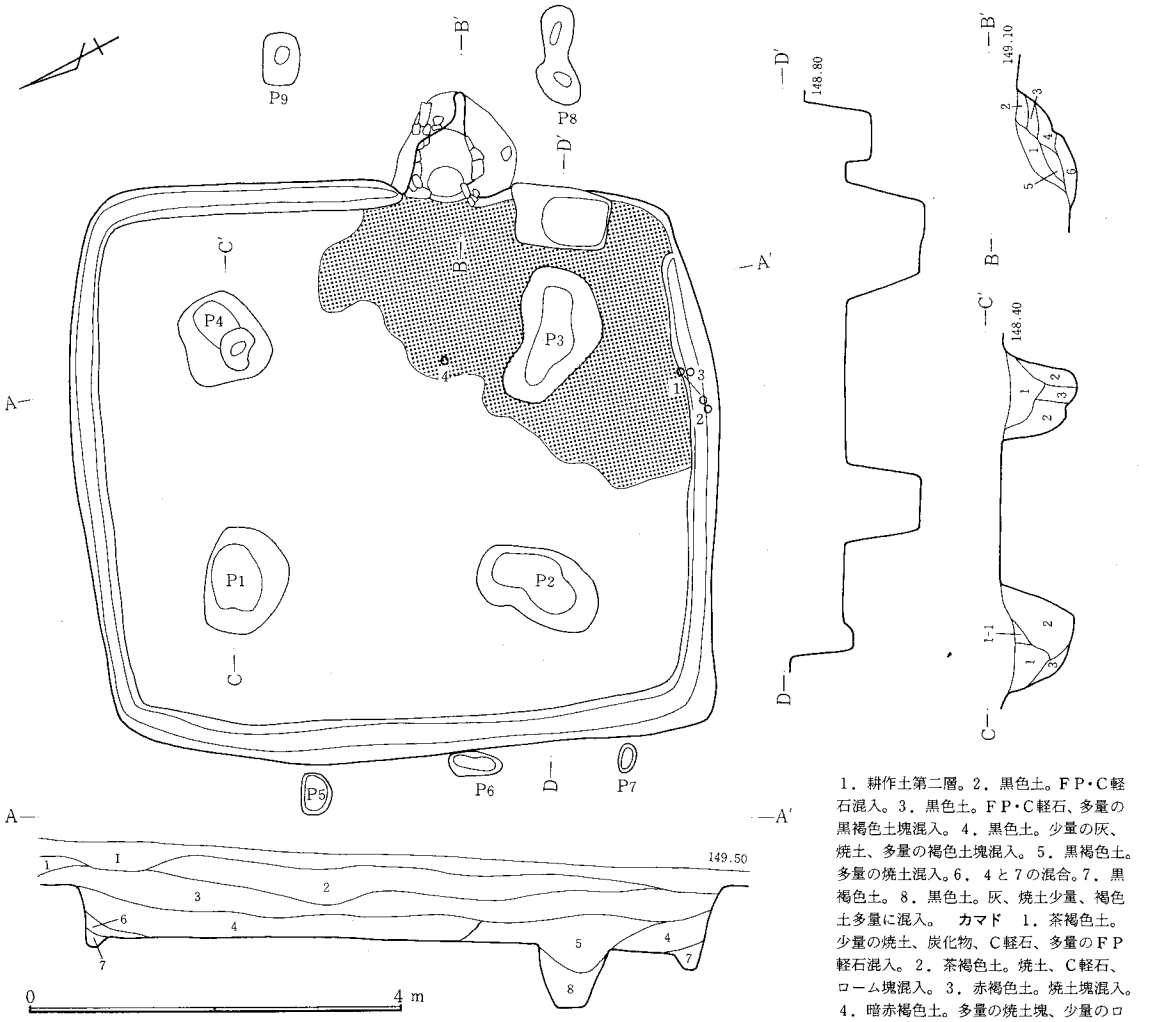
図－357　H－190号住居跡



図－358　H－190号住居跡出土遺物

1．暗褐色土。FP・C軽石多量に混入。2．暗褐色土。多量のFP・C軽石、少量のローム塊混入。3．暗褐色土。FP軽石、多量のC軽石少量のローム塊混入。4．暗褐色土。ローム混入。5．茶褐色土。　**カマド**　1．茶褐色土。FP・C軽石多量に混入。2．茶褐色土。FP・C軽石、少量の焼土ブロック混入。3．赤褐色土。焼土ブロック、灰、少量のFP・C軽石混入。4．赤褐色土。多量の焼土混入。　**貯**　1．茶褐色土。少量のFP・C軽石、焼土混入。2．茶褐色土。焼土、焼土ブロック、炭化物、少量のローム混入。3．ローム。炭化物含。

H191号住居跡（図—359、360　図版—22、99　表—180）（Ⅷ期）

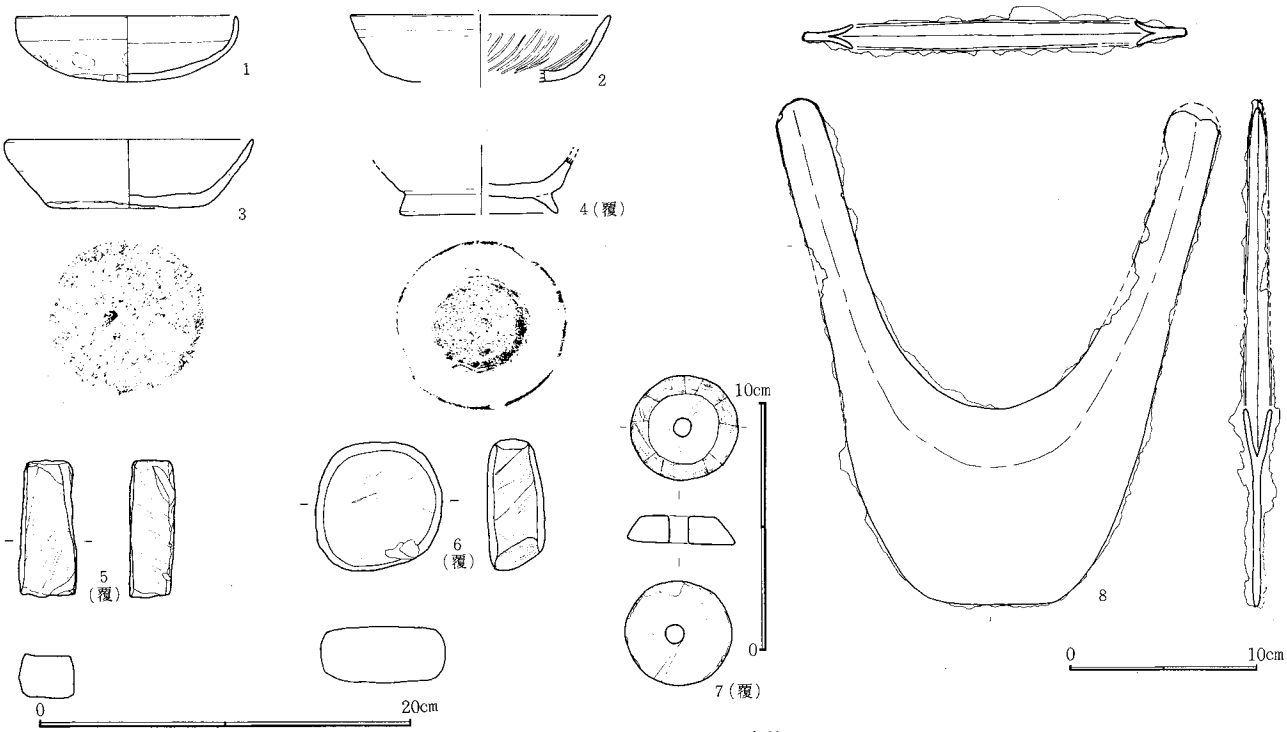


1．耕作土第二層。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．黒色土。FP・C軽石、多量の黒褐色土塊混入。4．黒色土。少量の灰、焼土、多量の褐色土塊混入。5．黒褐色土。多量の焼土混入。6．4と7の混合。7．黒褐色土。8．黒色土。灰、焼土少量、褐色土多量に混入。　**カマド**　1．茶褐色土。少量の焼土、炭化物、C軽石、多量のFP軽石混入。2．茶褐色土。焼土、C軽石、ローム塊混入。3．赤褐色土。焼土塊混入。4．暗赤褐色土。多量の焼土塊、少量のローム塊、C軽石混入。5．明茶褐色土。多量のローム塊、焼土粒、少量の炭化物混入。6．暗赤褐色土。炭化物、多量の焼土塊混入。P.1．黒色土。FP・C軽石、ローム塊混入。1-1．1に類似で炭化物少量混入。2．赤茶褐色土。多量のローム混入。3．黒褐色土。少量のローム、FP・C軽石混入。

図－359　H－191号住居跡

位置　西台地南部の緩やかな南東斜面にあり、G1・101に位置している。　**形状**　南北6.6m、東西5.9mの正方形で、西壁と南北壁がやや外側にふくらむ。各壁ともほぼ直に掘られ、しっかりした掘り形である。面積は37.0m²、長軸方向はN—25°—Eを向く。周溝は東壁のカマド以南を除く全周にみられ、幅6～30cm、深さ10～23cmである。　**ピット**　住居床面に4（P_1～P_4）住居外に5（P_5～P_9）ある。P_1～P_4は、径30cm内外の柱痕が見られる。各ピット間の間隔は、心々でP_1—P_2が340cm、P_2—P_3が310cm、P_3—P_4が360cm、P_4—P_1が280cm。P_1～P_4は長軸100～145cm、短軸79～87cm、深さ80cm前後の規模である。P_5、P_6、P_7は、西

壁上端につくようにあり、P_5—P_7の間隔は330cm、P_5—P_7が170cm、P_6—P_7が160cm。P_8、P_9は東壁上端より約130cm離れ、間隔は297cmある。P_2、P_3、P_4には建て替えの痕跡が見られた。　**カマド**　東壁南寄り、焚口から煙道部まで石材を用いている。ほとんどの石材は原位置を動いていないと思われる。全長116cm、燃焼部長50cm、袖部内幅34cm、壁外掘り込み長108cm、壁への掘り込み角42°。住居の東南部の床面上に、焼土と粘土が分布していた。P_3よりカマド寄りには特に濃密に分布しており、周溝内には見られなかった。　**貯蔵穴**　カマド南の東壁沿いにあり、70×55cmの長方形、深さ25cm。　**遺物**　住居南東の周溝内より土師器坏(1•2)須恵器坏(3)カマド前より高台付埦(4)、及び覆土中より砥石(5•6)、紡錘車(7)鉄製鍬先(8)が出土している。　(川崎)

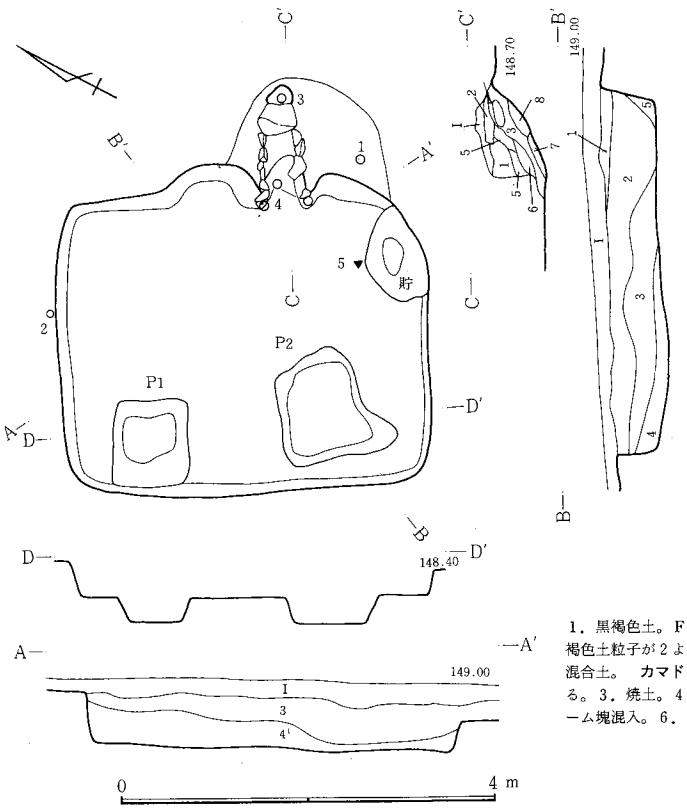


図—360　H—191号住居跡出土遺物

H192号住居跡（図—361、362　図版—22、99　表—181）（X期）

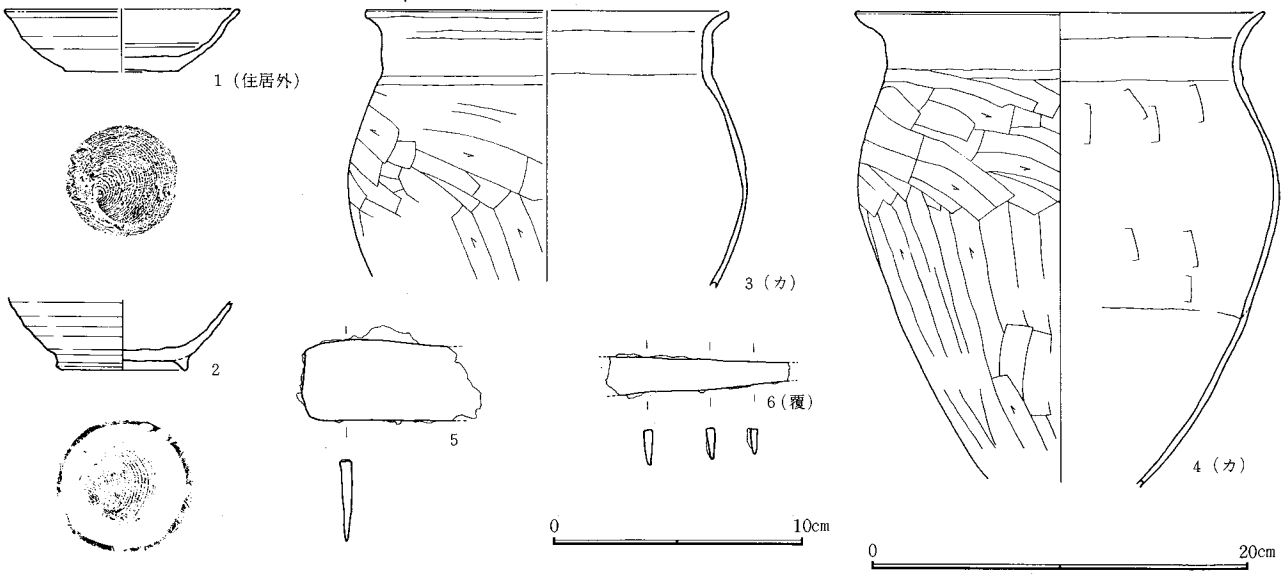
位置　G101　**形状**　北西から南東に長軸を持つ長方形で南北3.7m、東西3.0mである。長軸方向はN—30.5°—W面積は11.1m²。壁高最高54cm、最低27cm。周溝はない。　**ピット**　西壁に近く、2か所にある。P_1は88×78×25cm、P_2は110×87×27cmで、これは床下土坑とも考えられ、貼床があったと考えられる。　**カマド**　東壁南寄り。構築材として石を用いている。左袖2個、右袖1個、煙道部1個、燃焼部に7個見られた。全長132cm、袖部内幅36cm、燃焼部長84cm。壁への掘り込み角度48°、壁外掘り込みは126cmである。燃焼部は、床面よりやや低い。　**貯蔵穴**　南東壁にある。舟底形に近い形状を呈す。98×52cm、深さ34cmである。

遺物　カマド内から「コ」字状の口縁をもつ土師器甕(3•4)が、住居外のカマド南より須恵器坏(1)が出土し、貯蔵穴の北からは鉄製品(5)が出土した。須恵器埦(2)は、住居北壁外より出土した。なお、鉄製品(6)は覆土中より出土した。　(杉浦)



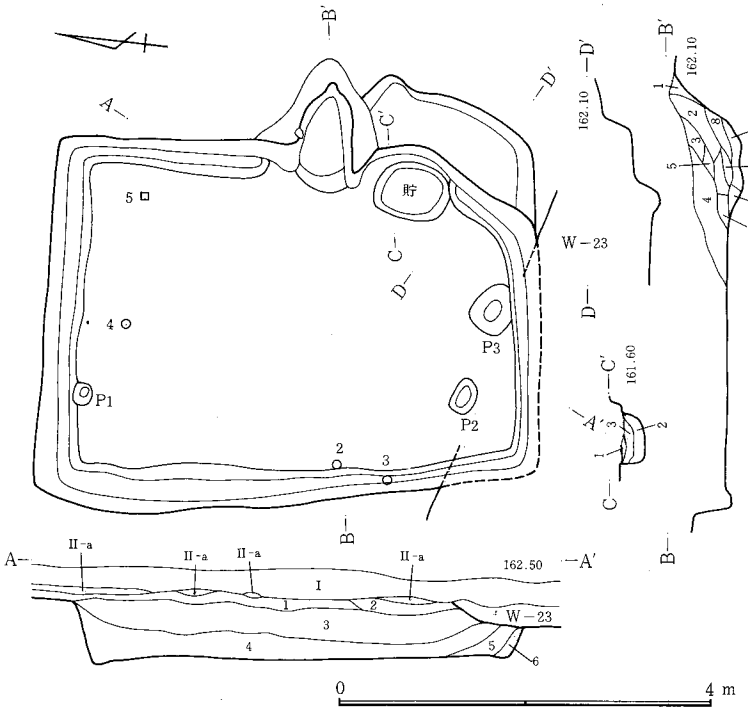
1．黒褐色土。FP•C軽石混入。2．暗褐色土。FP•C軽石混入。3．暗褐色土。2に類似。褐色土粒子が2より少(φ1～3cm)。4．黒褐色土。3にローム粒多量に混入。5．2とロームの混合土。　**カマド**　1．黒褐色土。FP•C軽石多量に混入。2．褐色土。ローム主体。締っている。3．焼土。4．暗褐色土。多量のローム粒、少量の焼土塊混入。5．暗褐色土。焼土塊、ローム塊混入。6．焼土塊。ローム塊の混合。7．褐色土。焼けたローム。8．ローム。軟質。

図—361　H—192号住居跡



図－362　H－192号住居跡出土遺物

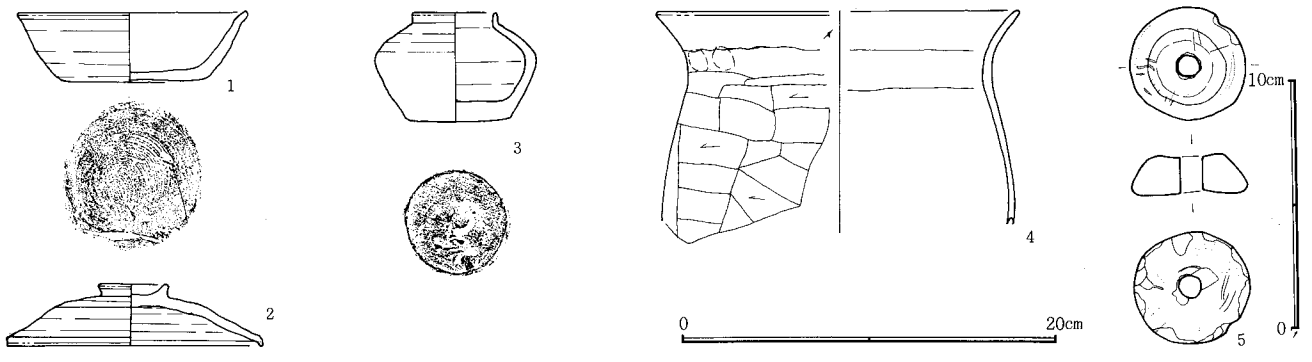
H194号住居跡（図—363、364　図版—22、100　表—182）（Ⅶ期）



位置　B17に所在する。調査地区13区を中心に集中する約25軒ほどの群の中心部に位置する。東60mほどへ行くと谷になる。　**形状**　南北方向に長軸をもち、その方向はN—4.5°—W、面積17.3m²である。南北4.9m、東西3.6m、壁高は40～57cmを測る。周溝はカマド南から貯蔵穴部分を除いて、ほぼ全周しており、幅5～27cm、深さ4～9cmである。なお東壁に設置されているカマドの南より南東隅まで、ほぼ長方形に近い棚状の施設が認められる。その規模は長軸155cm、短軸50cm、床からの高さ25cmを測る。　**カマド**　東壁中央部、構築材として石も使用している。全長130cm、燃焼部長40cm、袖部内幅45cm、壁への掘り込み角度は52°である。　**貯蔵穴**　東壁のカマド南脇にあって、楕円形を呈する。その規模は長軸81cm、短軸63cm、深さ26cmである。　**遺物**　西壁周溝から須恵器の薬壺(3)が完形で出土している。また、北東隅近くの床面より石製の紡錘車(5)が出土している。　**重複関係**　W—23と重複する。南北の地層断面によりW—23が新しい。　（中澤）

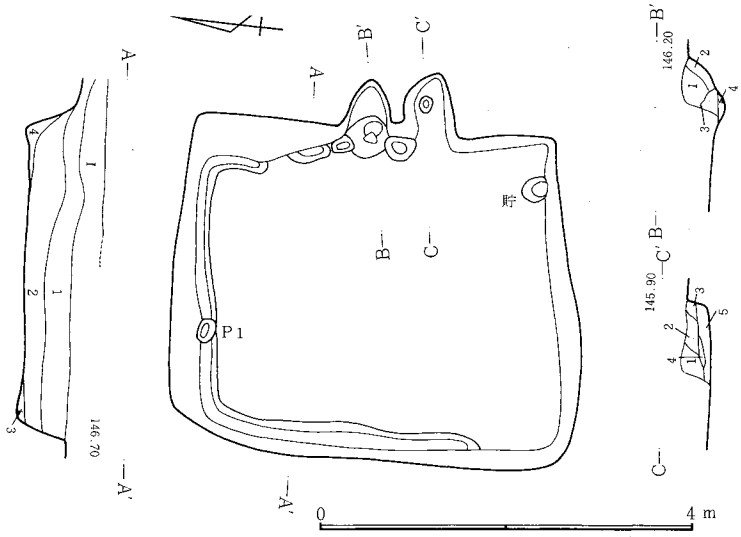
図－363　H－194号住居跡

1．黒色土。FP・C軽石。多量のローム塊混入。2．茶褐色土。C軽石混入。3．茶褐色土。ローム塊、炭化物。焼土塊混入。4．茶褐色土。C軽石、ローム塊(φ1cm)、多量の焼土塊(φ3cm)混入。5．黒褐色土。ローム主体。C軽石混入。6．茶褐色土。ローム、C軽石混入。　**カマド**　1．褐色土。2．赤褐色土。焼土塊、多量に混入。3．黒褐色土。ローム塊少量混入。4．黒色土。ローム粒、焼土、C軽石少量混入。5．褐色土。ローム粒、焼土混入。6．赤褐色土。焼土塊(φ1～2cm)混入。7．黒褐色土。焼土混入。8．黒色土。焼土塊(φ1～2cm)混入。9．赤褐色土。ローム塊(φ1～2cm)混入。10．黒灰色土。ローム塊(φ1～2cm)混入。11．黒灰色土。多量の灰、少量の焼土含む。　**貯**　1．黒色土。ローム塊、灰、焼土混入。2．黒色土。炭化物、焼土、多量のローム混入。3．ローム。黒色土混入。



図－364　H－194号住居跡出土遺物

H195号住居跡（図－365　図版－22）　（IX期）



1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム粒混入。3．暗褐色土。多量のローム混入。4．暗褐色土。灰混入。　**北カマド**　1．灰褐色土。白色粘土混入。2．褐色土。焼土ブロック混入。3．黒色土。焼土、ローム粒、少量混入。4．ローム粒と黒色土の混合。　**南カマド**　1．暗褐色土。多量のローム、若干の軽石混入。2．暗褐色土。3．2に近似、焼土粒点在。4．暗褐色土。焼土混入。5．黒褐色土。若干の焼土。

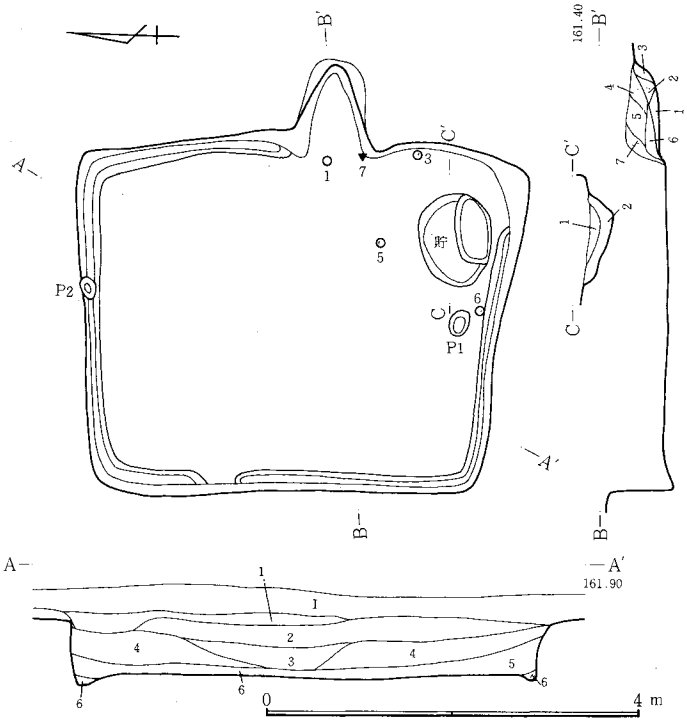
図－365　H－195号住居跡

位置　E・F101。西台地南端で、南に小さい谷状地形をひかえた南斜面に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ、正方形に近い方形である。北壁にくらべてやや南壁が長くなっている。南北3.8m、東西3.3mで、長軸方向N－4.5°－W、面積は12.0m²である。壁高は26～54cmを測る。北壁と西壁の北4分の3、北東壁隅に周溝をめぐらす。幅4～21cmで深さ3～5cmである。

ピット　規模は25×16cmで深さは10cmである。性格は不明。　**カマド**　東壁に2ヵ所。いずれも壁外に作られている。北のカマドは全長68cm、燃焼部長24cm、袖部内幅30cm、壁への掘り込み角度63°である。燃焼部は床面より13cm低い。南カマドは全長90cm、燃焼部長76cm、袖部内幅30cm、壁への掘り込み角度80°である。燃焼部は床面より3cm低い。　**貯蔵穴**　南壁東寄り、円形。規模は30×28cmで深さ18cmである。　**遺物**　なし。　**重複関係**　K－45と重複する。地層断面図により、K－45の柱穴のあるべきところの地層断面にその跡がないことから、本遺構が新しいと考えられる。

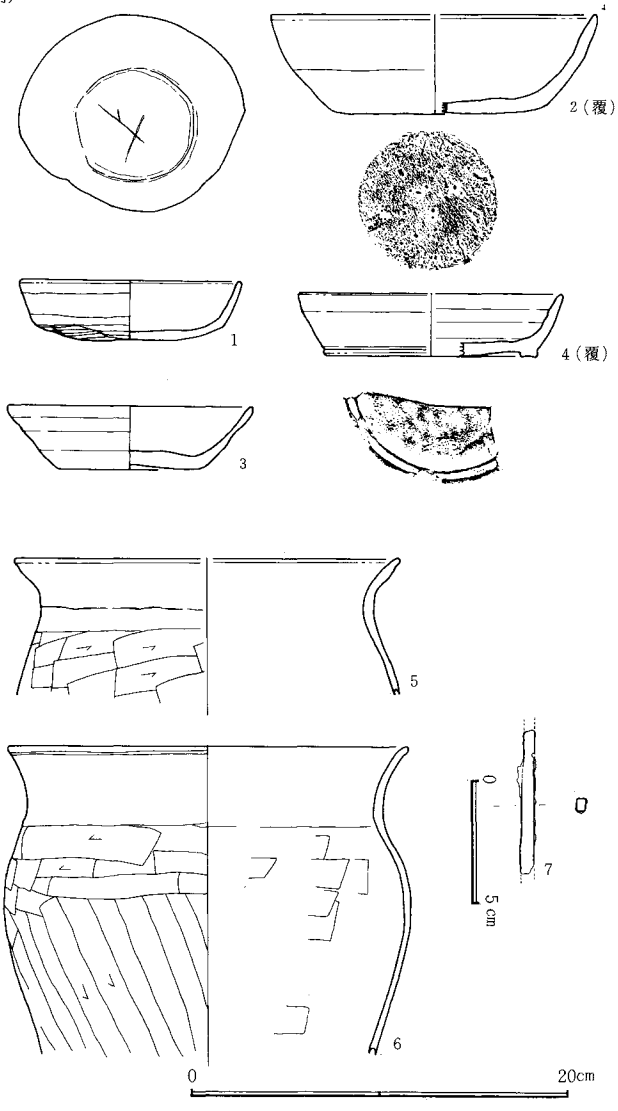
（井野）

H196号住居跡（図－366、367　図版－23、100　表－183）（IX期）



1．茶褐色土。多量のローム、FP・C軽石混入。2．茶褐色土。FP・C軽石、多量のローム粒混入。3．赤褐色土。焼土、多量のローム混入。4．ローム粒と黒色土の混合土。5．黒褐色土。ローム粒多量に混入。6．ローム粒主体。　**カマド**　1．焼土。灰、炭化物混入。2．赤褐色土。焼土ブロック、粘土、灰混入。3．赤褐色土。焼土、灰、少量の炭化物混入。4．灰茶褐色土。粘土主体。C軽石、多量の灰混入。5．茶褐色土。FP・C軽石、ローム塊、焼土塊、炭化物混入。6．茶褐色土。やや多量の焼土塊、炭化物、FP・C軽石混入。7．明茶褐色土。焼土、ローム塊、炭化物、多量のFP・C軽石混入。　**貯**　1．茶褐色土。FP・C軽石、炭化物、焼土塊、多量のローム粒混入。2．ローム粒主体。

図－366　H－196号住居跡



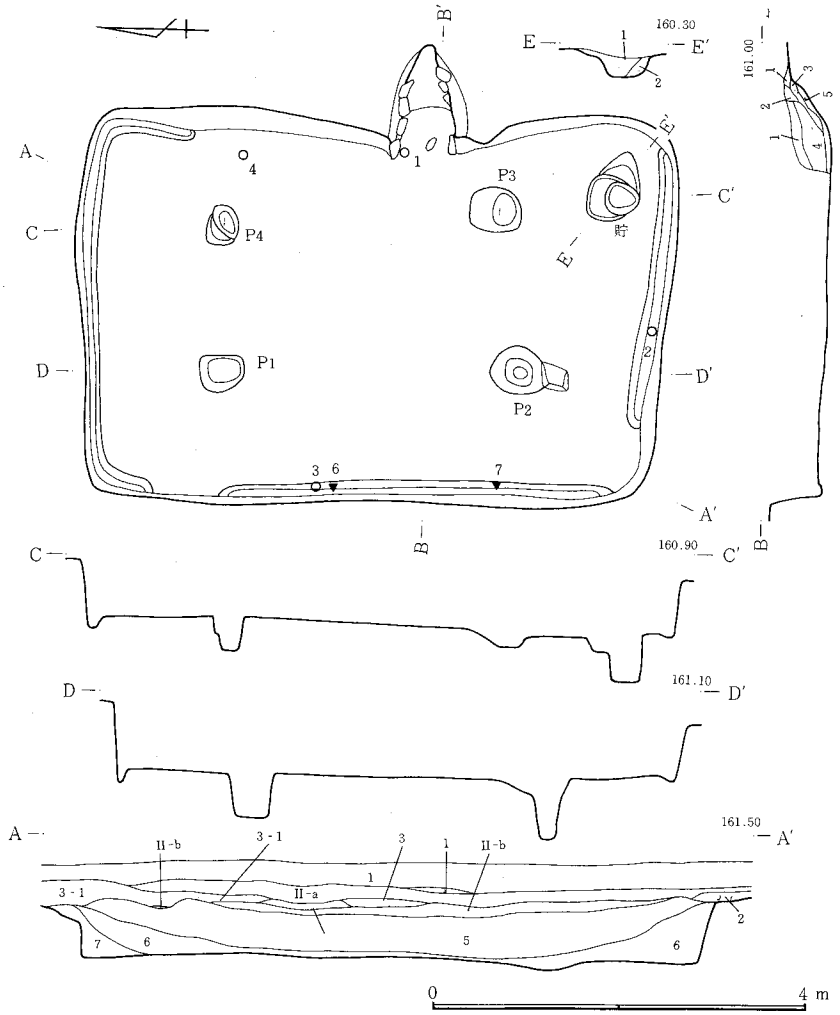
図－367　H－196号住居跡出土遺物

位置　A17に所在する。調査地区13区を中心とする竪穴住居跡群に属し、群の東に位置する。近くにはH197号、198号住居跡および西40mほどにK57号、K58号などの掘立柱建物跡が集中する。　**形状**　南北方向に長軸をもち、その方向はN－2°－Wである。南北長4.3m、東西長3.7m、壁高は34～55cm、面積は17.3m²を測る。平面プラ

ンは長方形ではあるが、西壁よりも東壁の方がやや長くなり、台形に近いものといえよう。周溝はカマドの南側から貯蔵穴にかけて欠ける以外は、ほぼ全周している。幅５～12cm、深さ４～13cmを測る。　**ピット**　北壁下の周溝部と貯蔵穴西側に認められる。その性格は不明である。　**カマド**　東壁中央部。全長106cm、燃焼部長46cm、袖部内幅60cm、壁への掘り込みの角度67°を測る。なお、壁外への掘り込みは100cmである。　**貯蔵穴**　南東隅にあって円に近いプランをもつ。底部は二段になっていて、長軸100cm、短軸78cm、深さ35cm（南）、23cm（北）の規模をもつ。　**遺物**　カマドの南側で須恵器の坏、カマド前では釘が見つかっている。

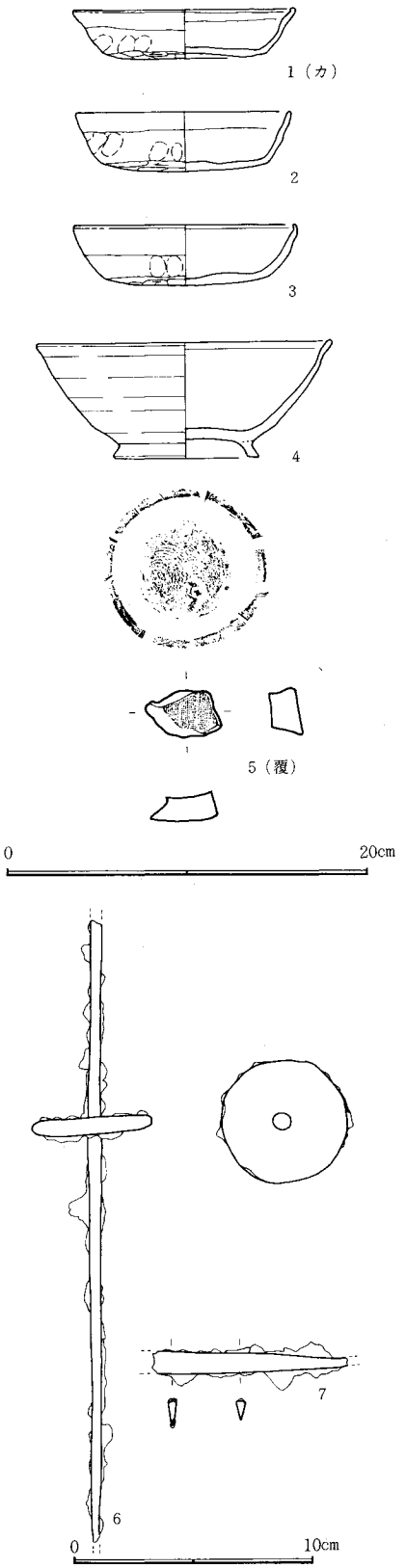
（中澤）

H197号住居跡（図－368、369　図版－23、100　表－184）（X期）



1．茶褐色土。多量のローム、ＦＰ・Ｃ軽石、少量のＦＰ混入。2．茶褐色土。Ｃ軽石、多量のローム。少量のＦＰ軽石混入。3．II－b層にＣ軽石とロームの混入。3-1．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量のローム含。4．茶褐色土。ローム主体。Ｂ・Ｃ軽石、わずかなＦＰ軽石混入。5．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量のローム混入。6．暗褐色土。ローム塊、ＦＰ・Ｃ軽石、わずかな焼土混入。7．明茶褐色土。ローム塊、ＦＰ・Ｃ軽石混入。　**カマド**　1．茶褐色土。白色粘土塊、多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。2．赤褐色土。ローム主体。少量の焼土粒混入。3．焼土ブロック散在。4．黒褐色土。多量のローム粒、少量の焼土粒混入。5．焼土と灰。　**貯**　1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量のローム混入。2．褐色土。ローム粒主体。

図－368　Ｈ－197号住居跡



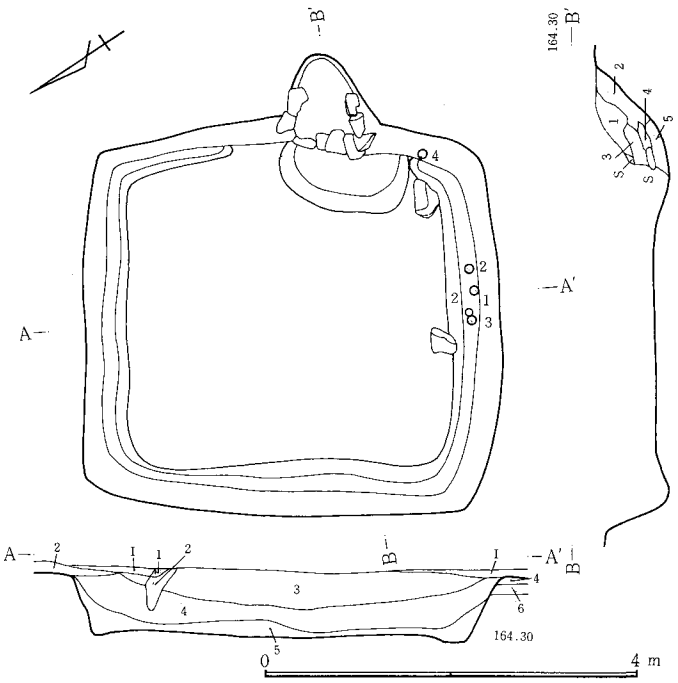
図－369　Ｈ－197号住居跡出土遺物

位置　A17・18からイ17にまたがって所在する。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北6.0m、東西3.7mである。長軸方向は磁北に沿っている。面積23.5m²、壁高は遺構確認面から53～80cmとかなり深い。壁はいずれもほぼ直線的だが、南東隅からカマドにかけての東壁が直線のライン外側にややせり出ている。東壁北側から北壁を通り北西隅までと、70cmおいて南西隅までの西壁、南西隅を除いた南西に周溝をめぐらす。幅４～９cm、深さ３～14cmである。　**ピット**　柱穴と思われるピットが４個（P_1～P_4）検出された。このうちP_3は他の掘り形が円筒形をしているのに対して浅い皿形の形状を呈している。柱間距離はほぼ南北300cmで東西170cmだがややいびつな台形となる。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄り。全長118cm、袖部内幅52cm、燃焼部長52cm、壁への掘り込み角度35°で、壁外掘り込み110cm。燃焼部は住居床面より５cm低い。石材を用いて構築されており、両袖部１石づつ、焚き口に支柱１石、燃焼部及び煙道部左壁に３石、煙道部右壁に３石を残

す。　**貯蔵穴**　南東隅、長円形で80×64cm、深さ50cm。二段に掘られており共に底面は平らである。　**遺物**　カマド左袖から土師器坏(1)、南壁周溝付近及び西壁周溝付近からやはり土師器坏(2・3)を、東壁床面から須恵器椀(4)を出土。また西壁周溝付近からは鉄製紡錘車(6)と刀子？(7)が出土している。なお埋土中から布目瓦破片も出土した。　**テフラ**　床面から40cm程の所で厚さ約15cmのB軽石の純層を認めた。　(松村)

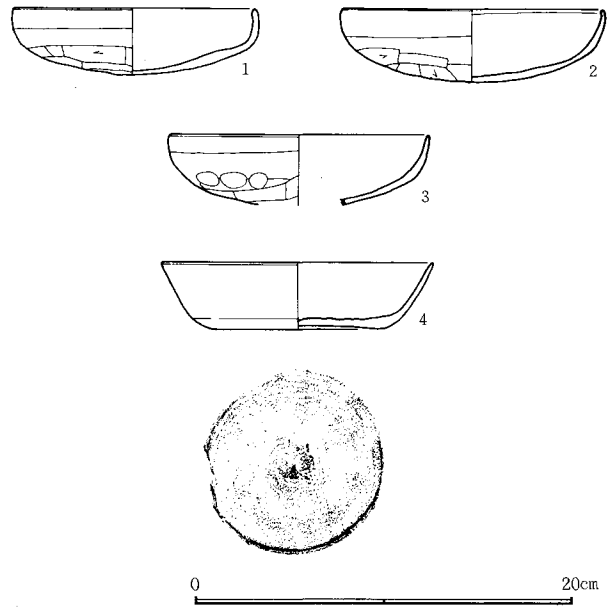
H199号住居跡（図—370、371　図版—23、100　表—185）(VI期)

位置　D20に所在する。　**形状**　南北4.0m、東西3.7mの正方形に近い長方形で、長軸方向はN—34.5°—E。面積14.2m²、壁高は遺構確認面から60～70cmで、壁は全体に曲線化傾向であり隅も隅丸となっている。カマド左右50～60cmの部分を除いて周溝は全周している。幅6～20cm、深さ5～15cm。　**カマド**　東壁南寄り、住居外に構築しており、袖部及び焚き口部分に6個、燃焼部左右壁部分に各2個ずつの石材を残す。全長120cm、袖部内幅60cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度47°である。住居床面とカマド燃焼部の差は16cmとかなり深い。　**遺物**　カマド右袖から60cmの壁に須恵器坏(4)が、南壁中央部分に土師器坏(1・2・3)が、いずれも床面から約10cm位の高さで、流れ込んだような形で出土している。　(松村)



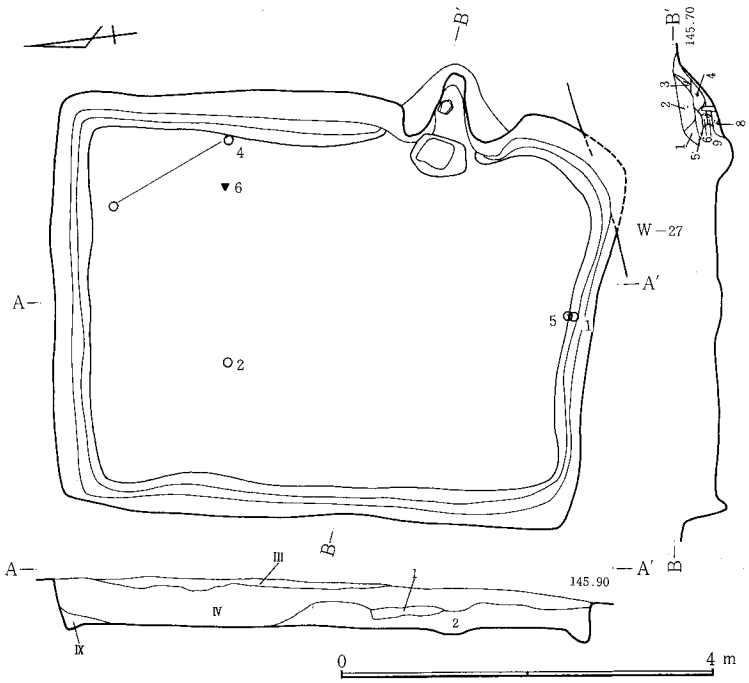
図—370　H—199号住居跡

1．表土と3の混土。2．表土と4の混合。3．黒色土。FP・C軽石混入。4．黒褐色土。多量のFP・C軽石混入。5．4に少量のロームブロック混入。6．褐色土。　**カマド**　1．黒褐色土。FP・C軽石とわずかな焼土混入。2．赤茶色土。焼土塊(φ2～3cm)多量に混入。3．黒色土。少量のFP・C軽石、焼土混入。4．黒灰色土。焼土、灰、炭化物混入。5．赤褐色土。ローム粒、焼土、灰混入。



図—371　H—199号住居跡出土遺物

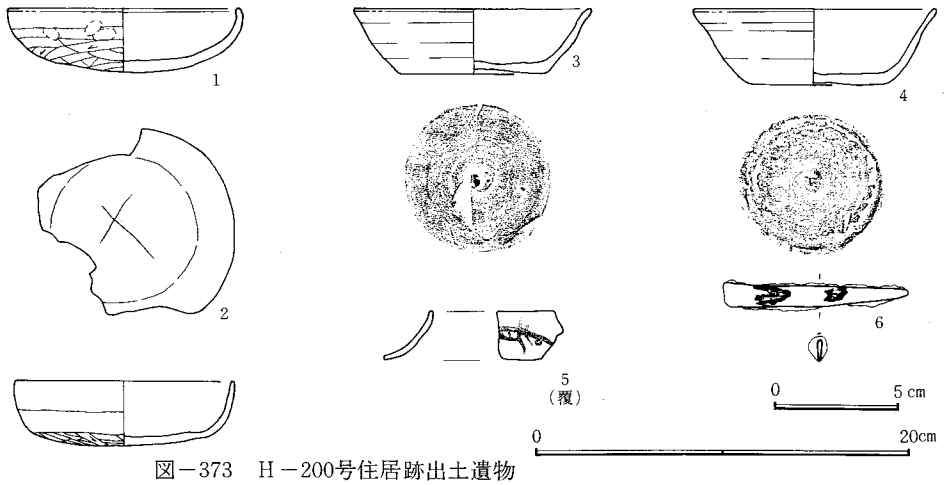
H200号住居跡（図—372、373　図版—23、100　表—186）(VII期)



図—372　H—200号住居跡

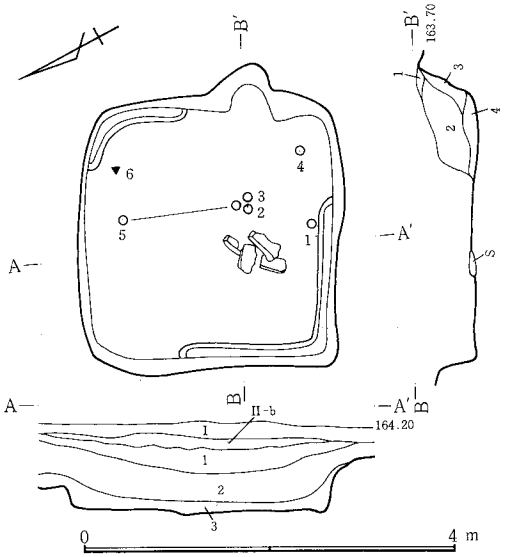
位置　E103からF103に位置する。　**形状**　南北5.4m、東西4.0mの長方形プランを持つ。面積は21.6m²で長軸方向はN—9°—Eである。周溝はカマド部分を除いて、全周しており、幅3.5～14cm、深さ2～16cmを測る。　**カマド**　東壁南寄りに設けられている。燃焼部中央には支石が据えられており、カマド全体が壁外へ造り出されている。全長90cm、燃焼部長70cm、袖部内幅50cm。　**遺物**　南を走る周溝内より完形の土師器坏(1)とこの上に重なる形で完形に近い須恵器坏(5)が出土している。また北東部より刀子状の鉄製品(6)が出土している。　**重複関係**　南東側で、W—27と重複する。新旧はH—199→W—27の順と考えられる。　(田口)

1．褐色土。ローム粒混入。2．黒褐色土。C軽石混入。1．橙色焼土粒含むローム。2．赤褐色土。ローム質。焼土塊(φ1cm)混入。3．赤褐色土。ローム質。焼土粒混入。4．赤褐色土。焼土粒混入。5．暗赤褐色土。焼土粒混入。6．暗赤褐色土。焼土粒、焼土塊混入。7．暗赤褐色土。焼土塊(φ1～2cm)、焼土粒混入。8．明赤褐色土。焼土。



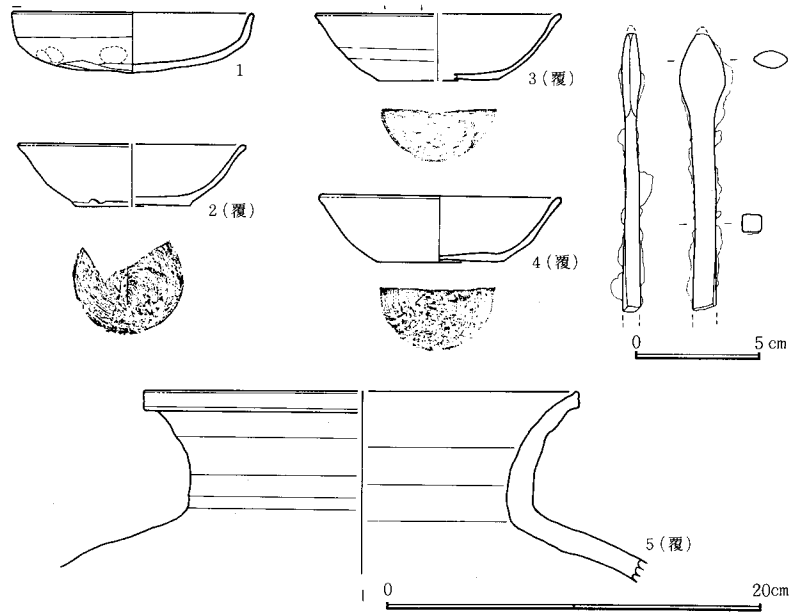
図－373　H－200号住居跡出土遺物

H201号住居跡（図—374、375　図版—23、100　表—187）（IX期）



1．黒色土。FP・多量のC軽石、ローム塊混入。2．茶褐色土。ローム粒主体。FP・C軽石、ローム塊混入。3．明茶褐色土。多量のローム粒、少量のFP・C軽石、ローム塊(φ3cm)混入。　**カマド**　1．褐色土。ローム粒主体。2．黒褐色土。ローム粒主体。少量のFP・C軽石混入。3．茶褐色土。ローム粒、炭化物、焼土混入。4．茶褐色土。焼土塊、ローム塊、灰混入。

図－374　H－201号住居跡

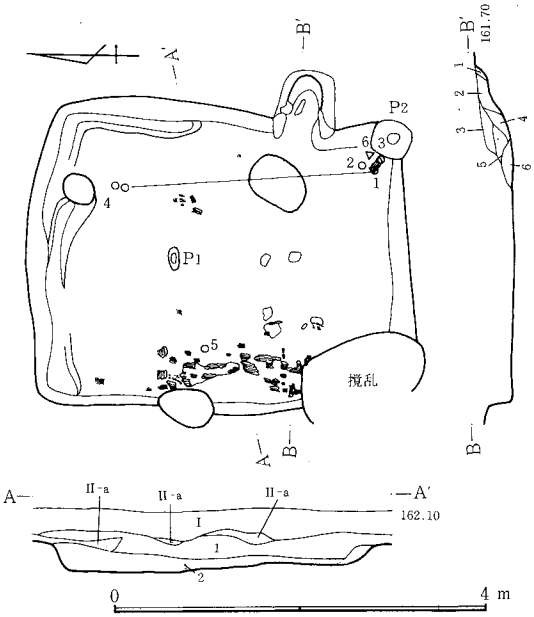


図－375　H－201号住居跡出土遺物

位置　D19からD20にかけて所在する。　**形状**　一辺2.6mの正方形であり、長軸方向はN—27.5°—E、面積6.7m²、壁高は56cm。壁はほぼ直線的であるが、西壁北寄り3分の1程がやや外側にふくらみを持っている。隅は南西隅を除いて隅丸をしている。周溝は北壁東4分の1から北東隅をまわり東壁北3分の1及び西壁南3分の2から南西隅をまわり南壁西3分の2にかけて、対角にめぐっている。深さはあまりなく、幅7～14cm。なお、住居中心部よりやや南西隅寄りに床面に接して偏平な石材が検出された。　**カマド**　東壁南寄りにあり、全長55cm、袖部内幅45cm、燃焼部長30cmでやや短い分、壁への掘り込み角度が64°と急傾斜である。　**遺物**　南壁中央周溝付近より土師器坏(1)、住居東半分に須恵器坏及び大甕口縁部破片（2・3・4・5）が、また、北東隅付近に鏃？(6)を出土。　**テフラ**　住居がほぼ埋り切ってからB軽石が厚さ15cm程（床面より65cm）推積した。　（松村）

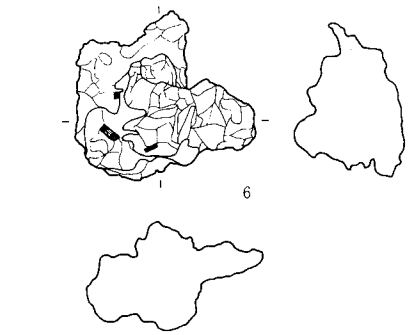
H202号住居跡（図—376、377　図版—101　表—188）（IX期）

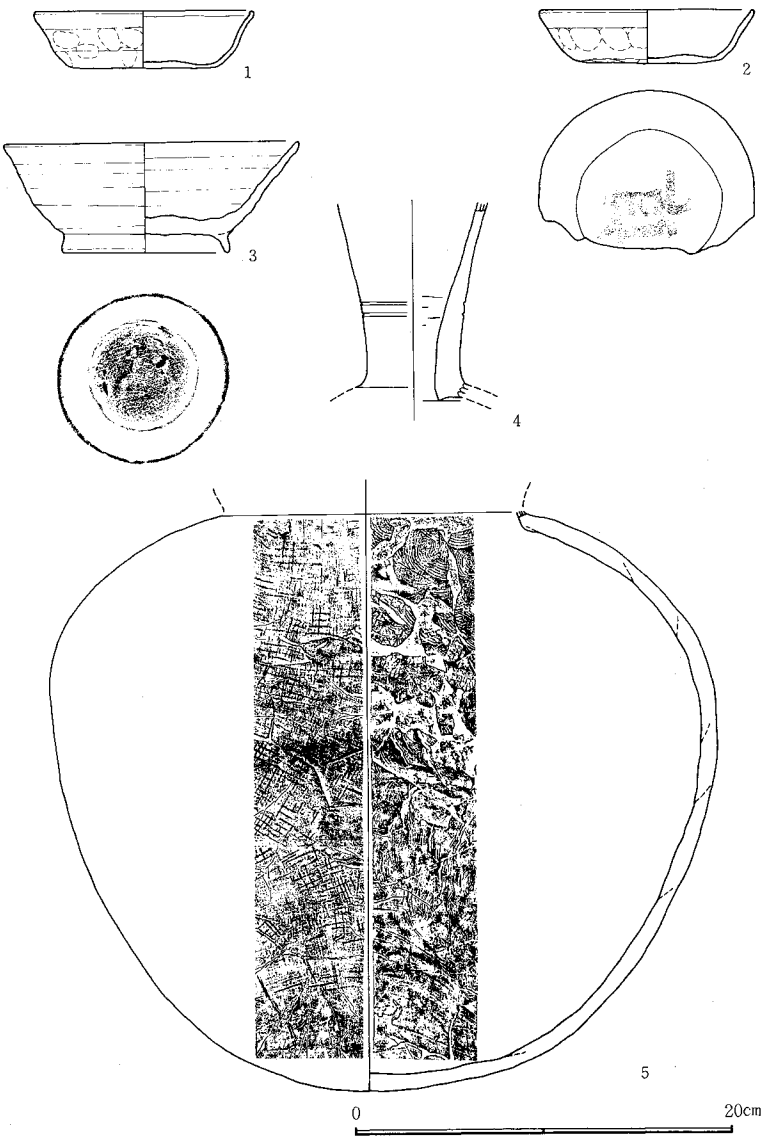
位置　東側の谷地に面する崖に近い南緩傾斜面のB17に立地。ここには掘立柱建物跡と竪穴住居跡が群集しており、その中央部に位置する。　**形状**　南北3.6m、東西3.0m前後を測る台形。南西隅は長方形に後世の破壊を受ける。また、掘立柱建物跡の柱穴による破壊も多い。形は全体にいびつだが、北壁両端を結ぶ線は東壁及び西壁と直交する。しかし、西壁南半は内に寄り、南壁と鈍角に交わる。長軸N—0.5°—W、床面積10.5m²。壁高は地層断面から西壁で30cmを測る。住居の北半部の壁下に周溝を残す。北壁下はやや幅広く10～30cm、深さ5～6cm。他は幅10cm前後、深さ2～6cm。　**ピット**　P_1、深さ7cm。P_2、同11cm。P_2は貯蔵穴的なものか。　**カマド**　東壁線の左右にやや大ぶりな石材を袖石状に置く。しかし、燃焼部床面はその付近から緩やかに上昇しているので、袖部は更に内側にくることも考えられる。煙道部は、緩やかに昇する燃焼部床面の先端から36cm程平坦面が続き、そこで強く斜めに立ち上がって外部に通ずる構造とする。　**遺物**　西壁下中央付近で集中して木材炭化物が検出された。また、この上に重なって更に東へ広がって大甕(5)小片が多量に出土した。木材炭化物は床面から＋8～＋12cm、他の遺物は床面ないし同直上の出土。　**重複関係**　K54・55・62号建物跡と重なるが、切り合い関係から本住居が最も旧い。K54号建物跡との新旧関係は不明。　（唐澤裕）



1．黒褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒、少量の焼土塊、炭化物混入。2．暗褐色土。ローム粒、ローム塊混入。3．黒褐色土。ローム粒、ＦＰ・Ｃ軽石、炭化物混入。 **カマド** 1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土塊、少量の焼土粒混入。2．暗赤褐色土。焼土粒、焼土ブロック多量に混入。3．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土塊(φ5㎜)混入。4．黒褐色土。ローム塊(φ1cm)、多量の焼土粒、少量の焼土塊、炭化物混入。5．灰赤色土。焼土、焼土塊、灰が主体。6．黒褐色土。ローム塊(φ1.5cm)を含む。

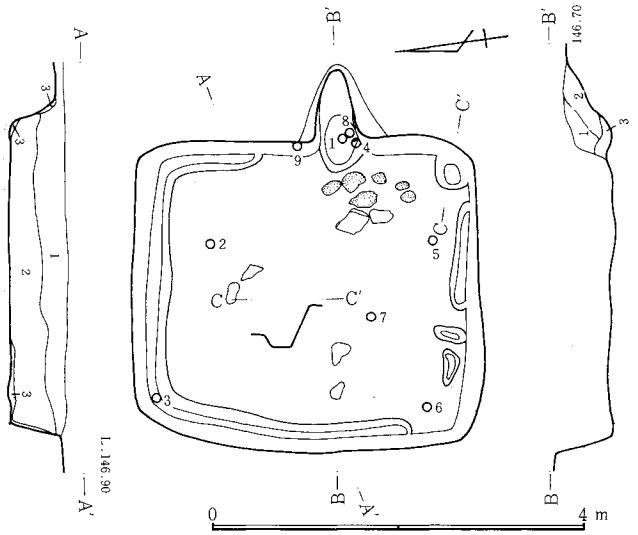
図－376　Ｈ－202号住居跡





図－377　Ｈ－202号住居跡出土遺物

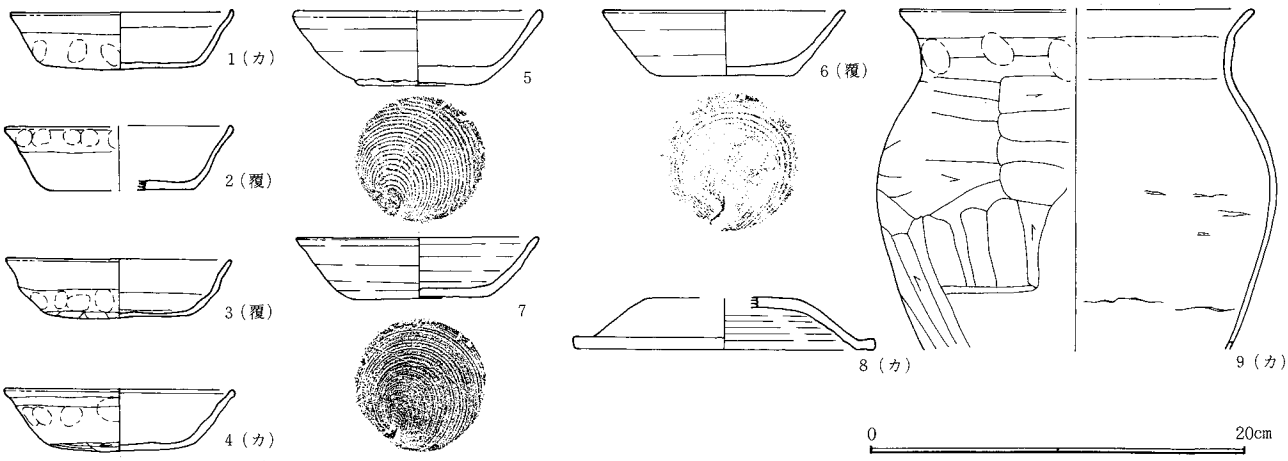
Ｈ203号住居跡（図―378、379　図版―23、101　表―189）（Ｘ期）



1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒褐色土。1より少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。3．褐色土。ローム主体。 **カマド** 1．黒色土。Ｃ軽石、ローム粒、焼土少量混入。2．赤茶色土。焼土、焼土塊(φ1cm)多量に混入。3．黒灰色土。灰、焼土混入。

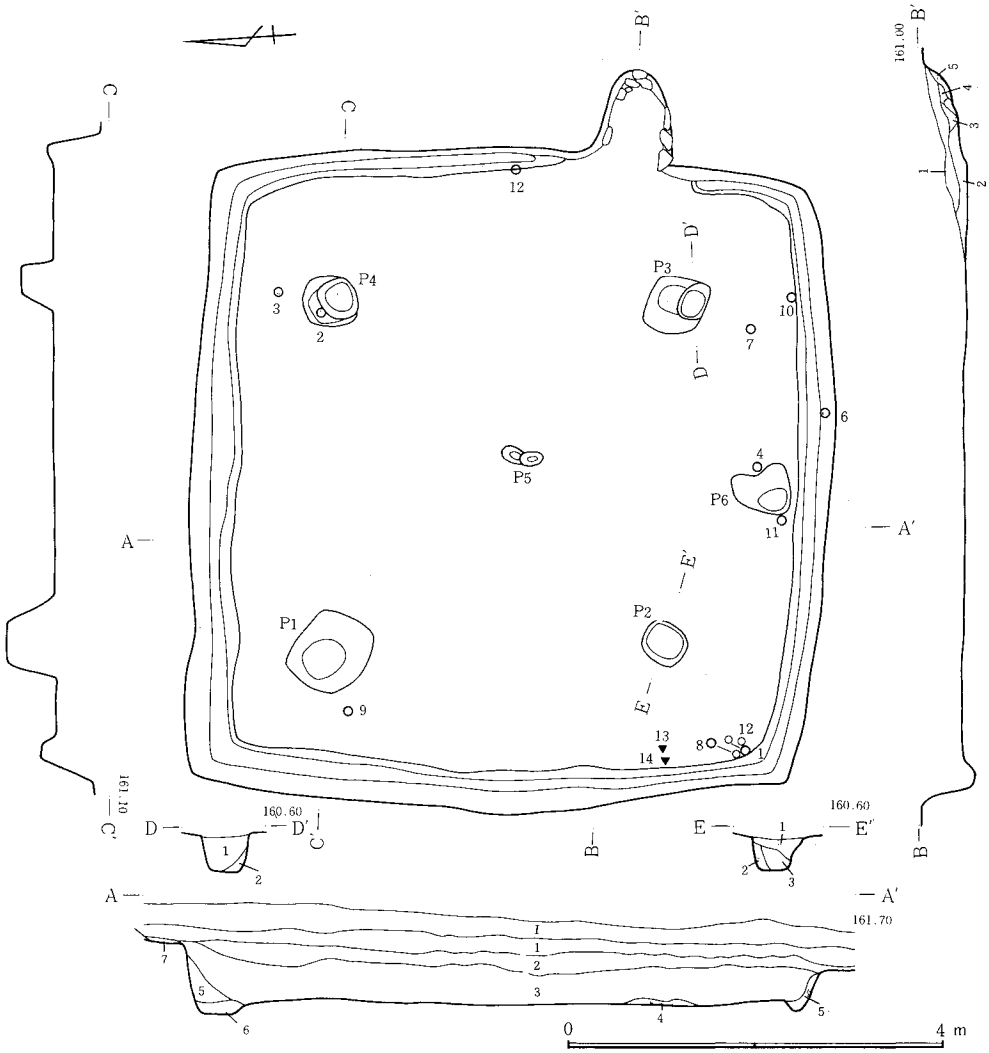
図－378　Ｈ－203号住居跡

位置　Ｅ102に所在する。 **形状**　南北に長軸を持つ正方形に近い長方形を呈する。南北3.4m、東西3.0mで長軸方向はＮ－7°－Ｅ。面積は10.1㎡、壁高は46～67cm。壁は東壁、南壁が直線的なのに対して西壁から北壁にかけてやや凸凹な掘り形を持つ。カマドをはさんで東壁南側３分の２と南西隅を除いて幅４～16cm、深さ２～７cmの周溝をめぐらす。 **ピット**　南壁西側に深さ３～４cmの不整形なピットを検出したが、南壁の周溝がここでＬ字型に住居内側に掘られていることや南西隅に周溝が掘られていないことなどから出入口状あるいは間仕切り状の施設があったことを推測させる。 **カマド**　東壁中央やや南寄りにあり、住居外に造り出している。全長100cm、袖部内幅50cm、燃焼部長46cm、壁への掘り込み角度35°で、燃焼部は床面より５cm低い。焚き口前に凝灰岩が検出されたがカマドの構築材として用いたかどうかは不明。 **貯蔵穴**　南東隅で径30cm深さ13cm程の小さな円形を呈する。 **遺物**　カマド内より土師器坏(１・４)と須恵器蓋(8)を、ほぼ床着の須恵器坏(５・７)、カマド左袖上部に土師器甕破片(9)を出土。 **重複関係**　Ｋ－64（旧）、Ｋ－74（新旧不明）（松村）



図－379　H－203号住居跡出土遺物

H204号住居跡（図－380、381　図版－23、101　表－190）（Ⅷ期）



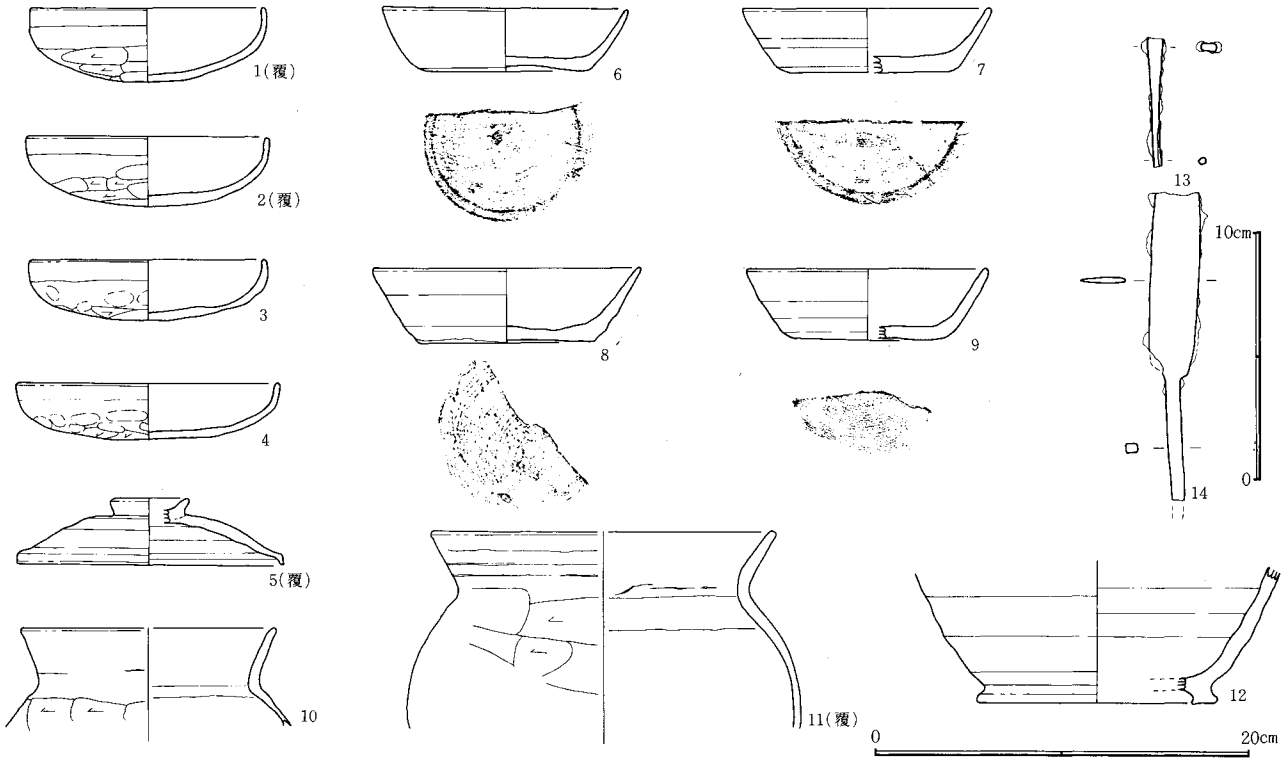
1．茶褐色土。ローム粒主体。B・C軽石、少量のＦＰ軽石混入。2．黒色土。ローム粒塊、1より少量のＦＰ・C軽石混入。3．茶褐色土。少量のＦＰ・C軽石混入。ローム粒塊、焼土塊、炭化物散在。4．3よりローム粒斑点多量に混入。5．明褐色土。多量のローム粒、ごく少量ＦＰ・C軽石混入。6．暗茶褐色土。多量のローム粒、ローム塊、少量のＦＰ軽石混入。7．2に多量のローム。　**カマド**　1．茶褐色土。焼土塊、多量のローム粒混入。2．赤紫色土。多量の粘土、少量の炭化物の混入する焼土。3．灰赤色。焼土主体。4．赤褐色土。焼土、ローム粒混入。5．赤紫色土。全体に焼けている。焼土塊混入。**P**$_2$ 1．褐色土。ローム粒、ローム塊、少量のＦＰ・C軽石混入。2．黒褐色土。ローム粒、ローム塊多量に混入。3．黒褐色土。ローム、ローム塊多量に混入。**P**$_3$ 1．茶褐色土。焼土、ローム塊（φ0.7cm）、ＦＰ・C軽石少量混入。2．ローム主体。茶褐色土混入。

図－380　H－204号住居跡

位置　A16に所在する。調査地区13区に分布する約25軒ほどの竪穴住居跡群に属し、群の東南に位置する。群のなかで一番大きな規模を持っている。40m東は谷となる。　**形状**　南北6.4m、東西6.8m、面積41.4㎡とその規模は周辺の住居跡と比して大きい。長軸方向はＮ－6°－Ｅを測る。壁高は39～52cm。周溝はカマド付近を除いてほぼ全周し、その幅７～40cm、深さ１～14cmで

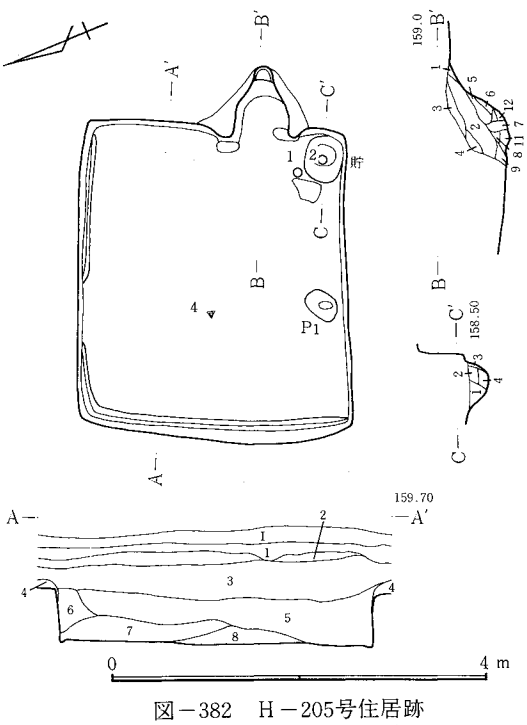
ある。　**ピット**　6個確認されている。P_1～P_4は覆屋を支えたものと思われる。その規模はP_1（長径86cm、短径75cm、深50cm）、P_2（110cm、55cm、52cm）、P_3（62cm、59cm、49cm）、P_4（60cm、57cm、30cm）を測る。ピットの傾きは余りみられなかった。P_5（41cm、14cm、31cm）は床面のほぼ中央にあることから、P_1～P_4に関わりをもつ可能性もある。P_6は南壁のほぼ中央部にあるが、その性格は不明である。　**カマド**　東壁で中央より南寄りに設置されている。構築材として石を用いる。壁外の掘り込み105cm、全長105cm、燃焼部長45cm、袖部内幅50cm、壁への掘り込みの角度は38°を測る。カマドの内部はカマドを構築する土、石ともよく焼けており、灰も多く認められている。なお、住居床面とカマド燃焼部とのレベルの差は燃焼部の方が5cmほど高くなっている。

貯蔵穴　なし。　**遺物**　南壁下より須恵器坏（6・7）と土師器坏(4)と甕(10・11)が、南西隅より鉄製品釘(13)鏃(14)、土師器坏(1)須恵器坏(8)が、北西隅より須恵器坏(9)が、北東部より土師器坏（2・3）が、カマド左手前より須恵器瓶(12)が、埋土中より須恵器蓋(5)が出土している。　（中澤）

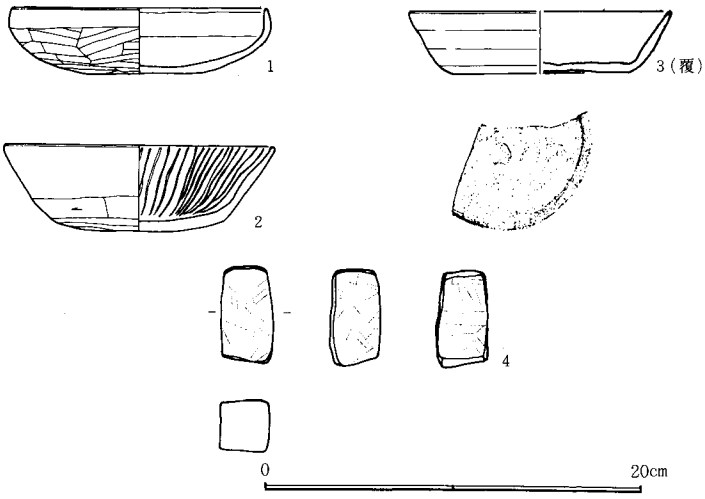


図－381　H－204号住居跡出土遺物

H205号住居跡（図－382、383　図版－23、102　表－191）（VI期）



図－382　H－205号住居跡

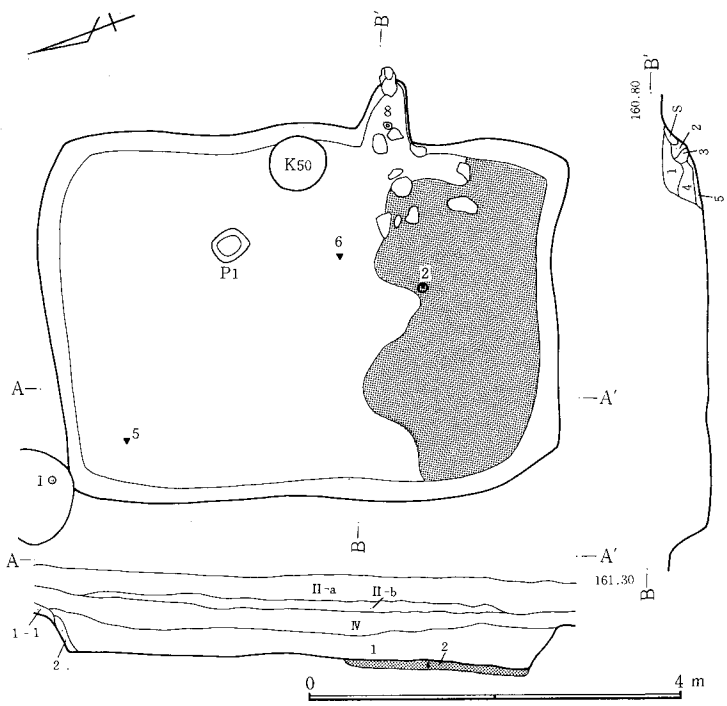


図－383　H－205号住居跡出土遺物

1．茶褐色土。B・FP・C軽石混入。2．黒褐色土。B・FP・C軽石混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、少量の炭化物混入。4．黒褐色土。5．褐色土。FP・C軽石、多量のローム混入。6．黒色土。少量のFP・C軽石混入。7．黒褐色土。FP・C軽石、ローム混入。8．黒褐色土。C軽石、ローム混入。　**カマド**　1．暗赤灰色土。焼土、焼土塊混入。2．灰紫色土。焼土、多量の粘土混入。3．茶褐色土。ローム粒、ローム塊、少量のFP・C軽石、ごくわずかな焼土、炭化物混入。4．茶褐色土。少量の粘土、ローム混入。5．灰褐色土。粘土混入。黒色土点在。6．焼土ブロック（φ3～5cm）、灰混入。安定しない。7．焼土塊。粘土、黒褐色土を混入。8．少量の炭化物、灰混入。9．茶褐色土。灰、焼土粒、ローム塊混入。10．焼土。11．茶褐色土。灰、焼土粒、ローム塊多い。12．灰を多く含む層。　**貯**　1．茶褐色土。ローム塊、少量の焼土塊混入。2．黒褐色土。3．黒褐色土。多量のローム粒、ローム塊混入。4．褐色土。ローム塊（φ2cm）混入。

位置　西台地東端の崖に近いA15に所在。本住居跡の北には掘立柱建物を中心とする遺構群があり、本住居跡もその一部を構成する。　**形状**　東西に長軸を持つ住居跡（N－110.5°－E）で、南北2.8m、東西3.3mを測る。カマドは東側短辺に設置する。西壁は緩やかな弧、南壁と東壁は直線とする。西壁は東壁に比べ南端が10cm程長い。隅角は南角に交わる。壁高は地層断面から東壁で85～90cmに復元される。床面積8.8m²。周溝の深さ１～６cm。　**ピット**　P_1、深さ９cm。出入口施設に伴うものか。　**カマド**　焚口両袖部にのみ石材を残す。この袖石は平面を手前に向け、その幅22～25cm、床面上の高さ30～40cmを測る。燃焼部等での石材使用の有無は不明だが、白色粘土は使われる。　**貯蔵穴**　深さ17cm。西に接して一部が床面下に沈む偏平石出土。　**遺物**　（１・４）は住居床面、（２）は貯蔵穴底部、（３）は覆土中出土。　（唐澤裕）

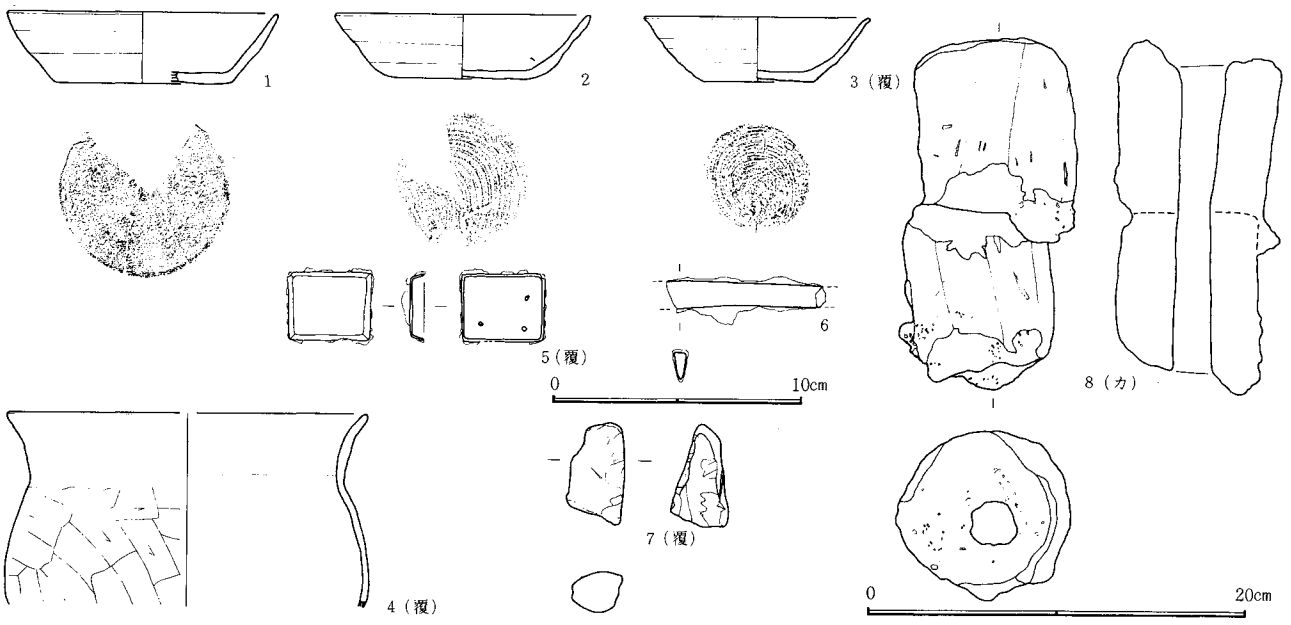
H206号住居跡（図－384、385　図版－24、102　表－192）（IX期）



図－384　H－206号住居跡

位置　西台地上の東縁辺で調査区の北部B15に所在する。　**形状**　平面は長方形で5.1×3.6m、面積は17.3m²である。壁現高は33～62cmと比較的深い。周溝はなく、長軸方向はN－20°－Eである。　**床面**　踏み固め部分は不明、貼床は南３分の１の範囲に認められる。　**ピット**　住居中央から北東寄りにあり、35×32cm、深さ８cmの大きさである。　**カマド**　東壁の中央からやや南寄りにある。壁外掘り込み長74cm、袖部内幅54cmで燃焼部長64cmである。燃焼部は床面から12cm高く、壁への掘り込み角度は52°である。構築材として各部１個石材を使用している。貯蔵穴はない。　**遺物**　鉄製の巡方(5)刀子(6)や羽口(8)をはじめ、須恵器坏３点（１・２・３）、土師器甕(4)などが出土している。　**テフラ**　Ⅱ－ｂ層がB軽石の純層で、床面から50cm高位にその下端が位置している。　**重複関係**　K－50の柱穴が床面を切って掘られていることから、本住居跡が旧いと推定される。（K－50参照）　（中村）

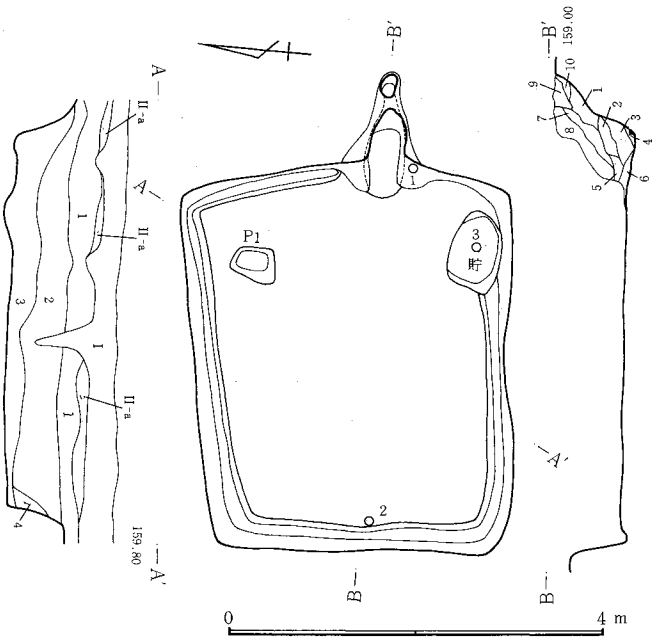
１．黒褐色土。FP・C軽石、少量のローム塊混入。1-1．黒褐色土。１より軽石少。２．ローム。FP・C軽石、黒色土混入。　**カマド**　１．黒褐色土。FP・C軽石、わずか焼土混入。２．黄褐色土。FP・C軽石、焼土粒少量混入。３．FP・Cを含む褐色土。多量の焼土塊混入。４．褐色土。FP・C軽石、少量の焼土塊、ローム塊混入。５．焼土。FP・C軽石。



図－385　H－206号住居跡出土遺物

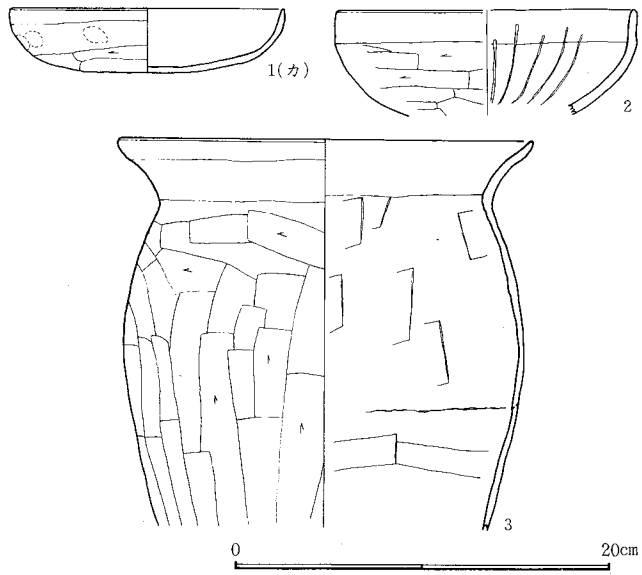
H207号住居跡（図－386、387　図版－24、102　表－193）（VII期）

位置　西台地上のB15に所在し、H206号住居跡に隣接している。　**形状**　平面は長方形で3.1×3.9m、面積は11.7m²である。壁現高は43～58cm、地層断面図では62cmを測り比較的深い住居跡である。周溝は北、西壁に全部、南壁４分の３、東壁の２分の１に認められる。幅は16～18cm、深さ９cm前後である。長軸方向はN－79°－Eで東西に長い住居である。　**床面**　踏み固め部分は不明であり、貼床は地層断面からはないと推定される。　**ピット**　北東隅寄りに１個あり、46×32cm、深さ６cmの大きさであ



1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。FP・C軽石、少量のローム塊混入。3．黒色土。FP・C軽石、多量のローム塊混入。4．黒褐色土。FP・C軽石混入。　**カマド**　1．赤褐色土。ローム粒、多量の焼土塊(φ4cm以下)混入。2．赤色土。焼土塊、多量の灰、少量のローム粒混入。3．にぶい赤褐色土。灰、焼土塊、ローム粒混入。4．黒色土とローム粒の混合土。焼土ブロック混入。5．灰赤褐色土。炭化物、焼土塊、多量の灰、ローム粒、粘土混入。6．赤褐色土。ローム、粘土、焼土塊、灰、炭化物混入。7．赤茶褐色土。焼土塊、FP・C軽石、ローム塊、多量のローム混入。8．茶褐色土。多量のローム、FP・C軽石、少量の焼土塊混入。9．赤褐色土。ローム主体。焼土塊(φ3cm)混入。10．赤褐色土。9に類似。焼土塊少量混入。

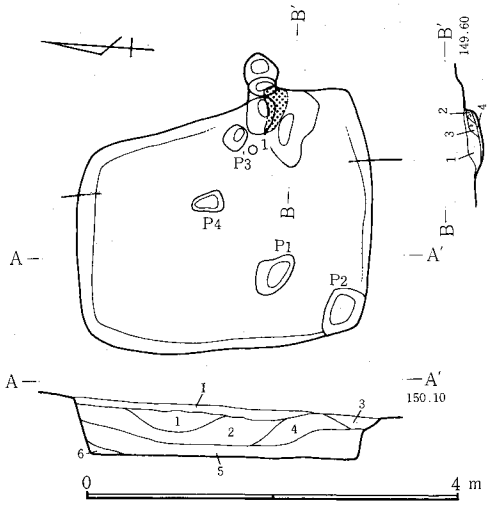
図－386　H－207号住居跡



図－387　H－207号住居跡出土遺物

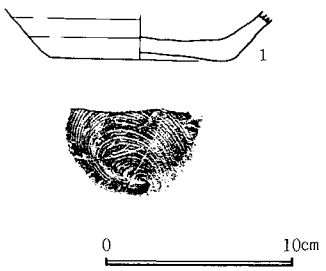
H208号住居跡（図－388、389　図版－24　表－194）（Ⅷ期）

位置　調査区南G1・2～F1・2に所在する。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北2.9m、東西2.4m（推定）である。長軸方向はN－9°－W。面積は6.6m²（推定）。W74号溝と重複があり、溝がカマドの付近にかかっているものと考えられる。カマドを中心に、東壁の約2分の1、南壁西が削られている。壁面最高38cm、最低19cm。周溝はない。　**ピット**　床面　床面3ヵ所（P_1、P_2、P_3）。南西端、壁にかかって1ヵ所ある。平面は楕円状であるが、どれも深さ10cm以内であり、住居との関係及びその性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄。壁外掘り込み56cm。全長不明。燃焼部48cm、壁への掘り込み角度80°、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－10cm。　**貯蔵穴**　貯蔵穴と考えられるようなピットは、検出されなかった。　**遺物**　カマド手前の床面上から須恵器坏(1)(回転糸切り未調整)が出土したが、全体の遺物量は、少ない。　**重複関係**　W－74と重複がみられる。カマド上部がかなり削られていることから、本遺構が古いものと考えられる。（全体図参照）　（杉浦）



1．黒褐色土。FP・多量のC軽石混入。2．黒色土。FP・多量のC軽石混入。3．黒褐色土。C軽石、焼土混入。4．黒褐色土。C軽石混入。5．黒褐色土。C軽石、汚れたロームを斑点状に混入。6．黒色土。ローム塊(φ2cm)混入。　**カマド**　1．黒色土。焼土粒、ローム塊混入。2．赤黒褐色土。多量のローム混入。3．赤黒褐色土。焼土粒、多量のローム混入。4．赤黄褐色土。ローム。

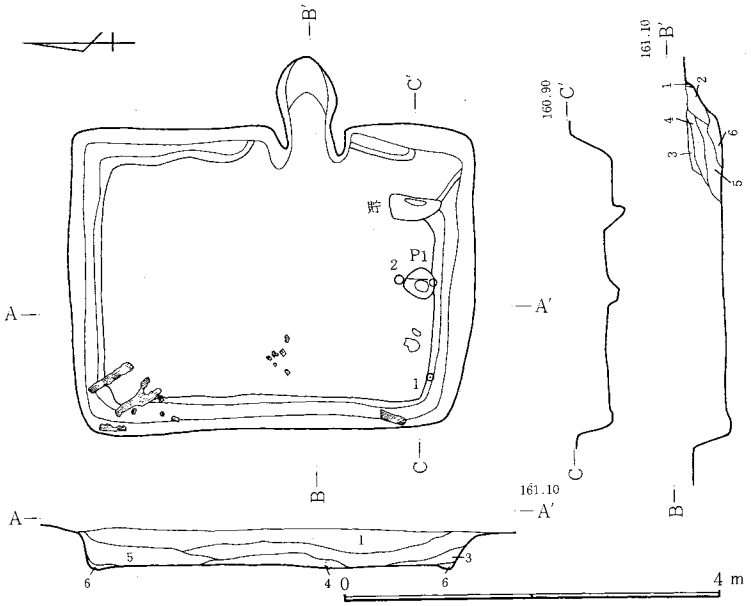
図－388　H－208号住居跡



図－389　H－208号住居跡出土遺物

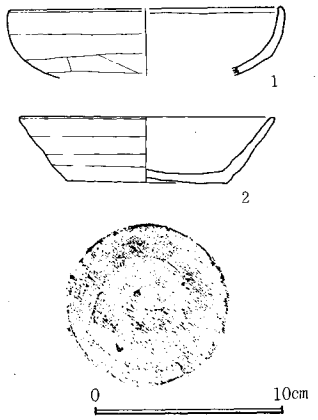
H209号住居跡（図－390、391　図版－24、102　表－195）（Ⅷ期）

位置　B16に所在する。調査地区13区に分布する竪穴住居跡群に属し、その群の南端に位置する。60mほど東は谷になっている。　**形状**　南北3.9m、東西2.9mの長方形を呈する。南北に長軸方向をとり、その方向はN－2.5°－Wである。面積は11.6m²、壁高は32～43cmを測る。周溝はカマド部分を除いてほぼ全周している。その幅8～25cm、深さ2～7cmである。　**ピット**　南壁のほぼ中央に周溝と接するように存在する。半径32cmの円形を呈し、深さは11cmを測る。　**カマド**　東壁、中央からやや南寄りに設置されている。壁外への掘り込み94cm、全長116cm、燃焼部長78cm、袖部内幅40cm、壁への掘り込みの角度32°を測る。なお、燃焼部は床面より2cmほど低くなっている。　**貯蔵穴**　南東隅にあって、長軸55cm、短軸25cm、深さ12cmの規模をもつ。　**遺物**　北西隅から棒状の炭化物（長さ40cmほど）が2本出土している。さらに床面西側や西壁近くの周溝にも炭化物が多く認められている。炭化物の状態から本住居跡は焼失住居の可能性が強い。　（中澤）



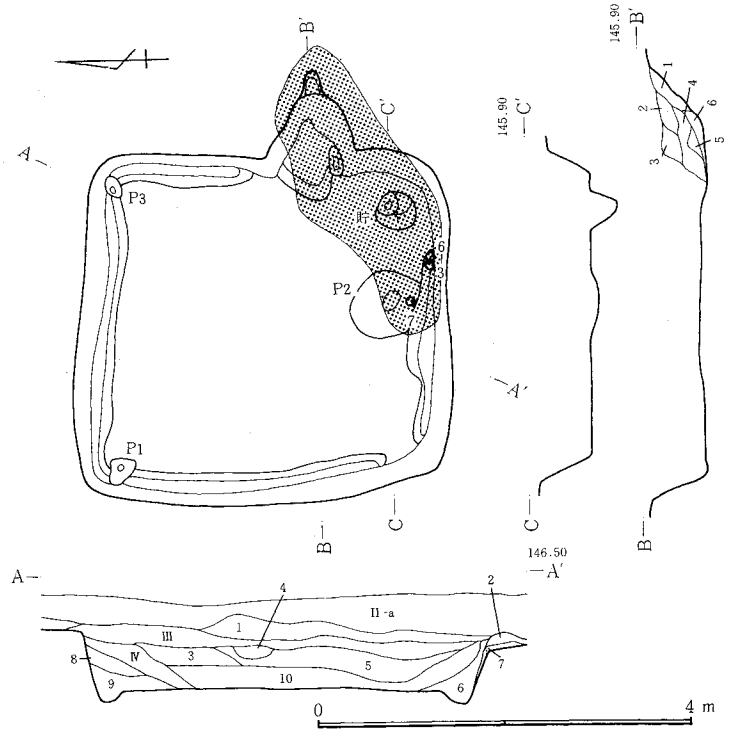
図－390　H－209号住居跡

1．黒茶褐色土。多量のローム、ローム塊、FP・C軽石混入。2．黒茶褐色土。FP・C軽石、炭化物、ローム塊混入。3．黒茶褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。4．暗赤褐色土。FP・C軽石、焼土ブロック、多量のローム粒、少量の炭化物混入。5．黒茶褐色土。FP・C軽石、炭化物混入。6．暗褐色土。多量にローム粒混入。　**カマド**　1．明赤褐色土。ローム。2．赤褐色土。焼土塊(φ3cm)多量に混入。3．黒茶褐色土。FP・C軽石、少量の焼土塊、多量のローム粒混入。4．灰黒茶褐色土。粘土、ローム塊、少量のFP・C軽石、炭化物、焼土塊混入。5．灰茶褐色土。ローム、灰、粘土主体。炭化物、FP・C軽石少量混入。6．赤褐色土。灰、ローム粒、焼土ブロック、炭化物混入。



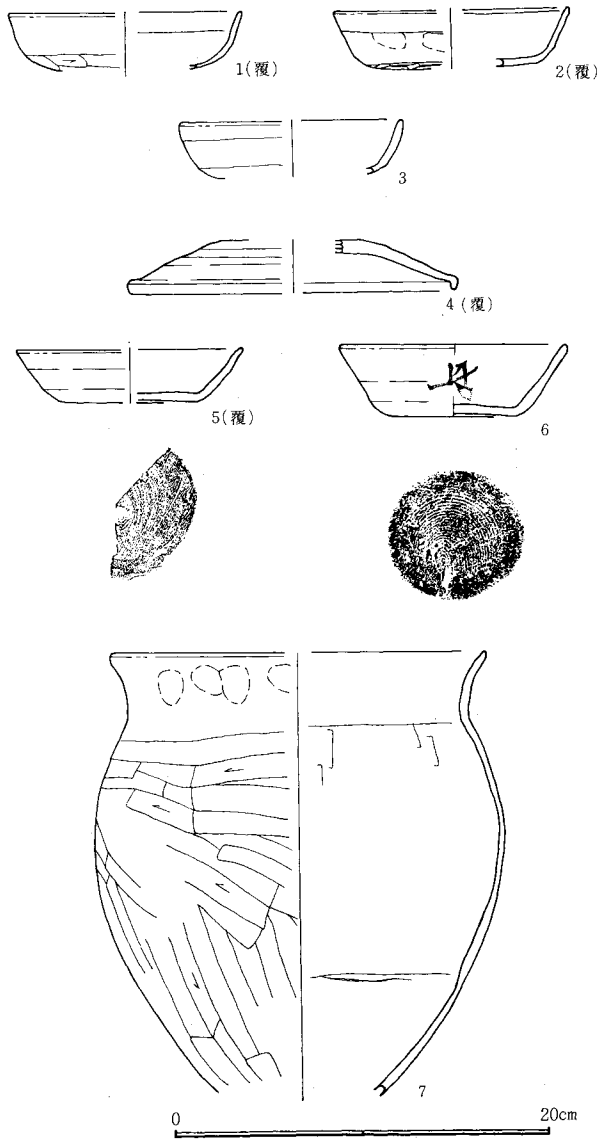
図－391　H－209号住居跡出土遺物

H210号住居跡（図－392、393　図版－24、102　表－196）（IX期）



1．II－aに褐色土混入。2．褐色土。3．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。4．焼土・ロームの混合土。5．黒褐色土。FP・C軽石、焼土、ローム少量混入。6．黒色土。7．黒色土。FP・C軽石混入。8．IIIに類似。9．黒褐色土。10．黒色土。ローム粒、ローム塊混入。
カマド　1．赤褐色土。焼土塊多量に混入。2．褐色土。ローム粒主体。焼土塊少量混入。3．黒色土。ローム粒混入。4．黒色土。焼土、少量のローム混入。5．黒褐色土。ローム粒、ローム塊、焼土塊混入。6．褐色土。ローム主体。焼土塊混入。

図－392　H－210号住居跡



図－393　H－210号住居跡出土遺物

位置　E103。西台地の南端にあたり、南に低地をひかえた斜面に位置する。　**形状**　南北3.6m、東西3.3mのほぼ正方形をしている。長軸の方向は、N－0°である。カマドの北側の袖から、南東隅の貯蔵穴の付近まで、カマドを除く形で、住居の周囲を周溝がめぐる。幅3～17cm、深さ3～9cmを測る。　**ピット**　周溝中、住居北西隅と北東隅にP_1、P_3がある。P_1は30×20cm、P_3は24×16cmの大きさで、深さは5cm。P_2は74×64cmで、深さは13cm。P_1とP_3は住居隅にあり、対応した位置になっている。住居に係わる施設のピットと考えられる。P_3は南側入

口に関係するピットとも考えられる。 **カマド** 東壁南寄り。前面に焼土が広く散らばる。全長114cm、燃焼部長62cm、袖部内幅70cm、壁への掘り込み角度44°で壁外掘り込みは14cmである。燃焼部は床面とほぼ同じ高さである。 **貯蔵穴** 南東隅。円形を呈し、44×40cm。深さは30cmを測る。 **遺物** 南壁ぎわ、周溝中より、墨書土器(6)を出土した。それと重なるようにして、土師器の坏片(3)が、付近の床面からは、土師器甕(7)が出土した。また、(4)の須恵器蓋と(5)の須恵器坏は、覆土に含まれていた。

(杉浦)

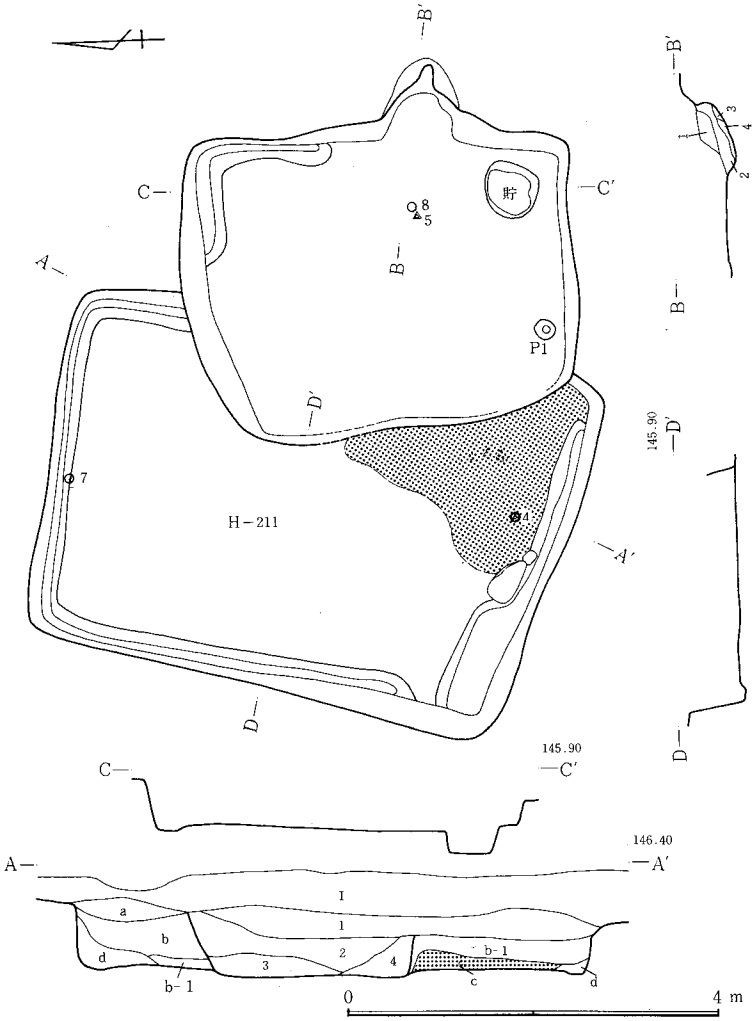
H211、215号住居跡（図—394、395 図版—24、102 表197）(IX期)

位置 西台地南辺E103にある。周囲には竪穴住居跡が密集しており、W—27が両遺構のすぐ南側を東西に走っている。W—27との間隔は、最小で5cmほどである。東に向かって緩やかに傾斜する斜面の端部で、すぐ東は近代まで湧水のあった低い谷が入り込んでいる。[H—211]

形状 南北5.2m、東西3.5mの台形に近い長方形。東壁が西壁より約60cm長い。周溝はH—215との重複部分を除き、ほぼ全周をめぐる。幅12～50cm、深さ2～6cm。面積は18.3m²、長軸方向はN—12°—Eを向く。 **カマド** 東壁南寄りに相当する部分に焼土の痕跡が認められた。 **遺物** 須恵器坏(4)、土師器甕(7)等が出土している。 [H—215] **形状** 南北3.8m、東西3.0m(推定)の長方形。北西隅から南東隅までの西壁の立ち上がりは一部不明瞭である。H—211との床面のレベル差は5～8cmで、本遺構の方が低い。周溝は北東隅に見られ、幅14～30cm、深さ3～5cm。面積は11.2m²と推定され、長軸はほぼ磁北を向く。 **カマド** 東壁中央南寄りにあり、全体が壁外に掘り込まれている。全長92cm、燃焼部長56cm、袖部内幅72cm。壁への掘り込み角度は36°で、床面と燃焼部のレベル差は12cmで、燃焼部が低くなっている。 **ピット** 南壁の西寄りに22×21cm深さ2cmのP_1が検出された。 **貯蔵穴** 南東隅のやや内側に入った所にあり、60×56cmの円形で、深さ27cm。

遺物 H—215は、カマド前より、須恵器坏(5)、砥石(8)が出土している。埋土中からは、土師器坏(2・3)、甕(6)が出土した。 **重複関係** 地層断面の切り合い、及び、H—211のカマドがH—215に破壊されている点よりH—215の方が新しい。

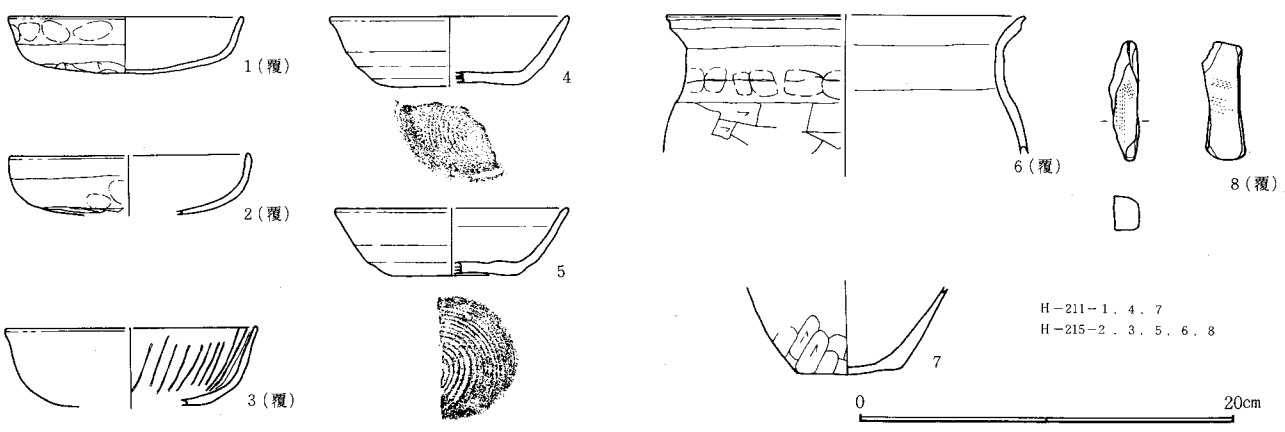
(川崎)



1．黒色土。FP・C軽石、黒褐色土塊、少量の焼土混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム粒、焼土粒混入。3．黒色土。ローム、若干の焼土混入。4．黒色土。

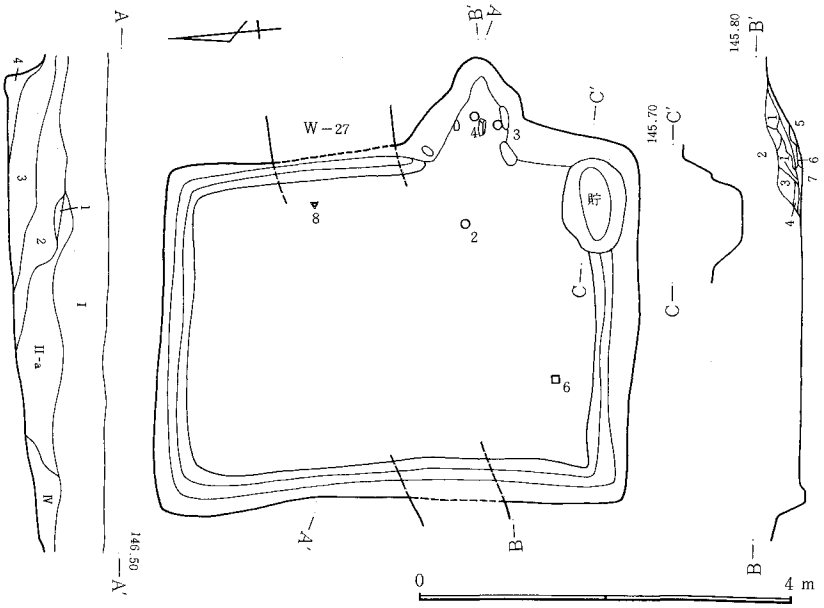
a．黒褐色土。FP・C軽石混入。b．黒色土。FP・C軽石混入。b-1．黒褐色土。FP・C軽石、ローム、少量の焼土混入。c．焼土・粘土・炭化物、黒色土の混土。d．黒色土。若干のローム粒混入。 **カマド** 1．黒色土。焼土少量の混入。2．黒色土。焼土塊多量に混入。3．黒褐色土。多量のローム、少量の焼土粒混入。4．黒色土。ローム、多量の焼土塊混入。

図—394 H—211・215号住居跡



図—395 H—211・215号住居跡出土遺物

H212号住居跡（図—396、397　図版—24、103　表—198）（X期）



1．黒色土。FP・C軽石混入。2．褐色土。ローム粒、C軽石、焼土粒混入。3．2に類似、ローム塊(φ1cm)混入。4．黒褐色土。ローム混入。　**カマド**　1．赤茶色土。焼土塊多量に混入。2．黒褐色土。ローム粒主体。焼土少量混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、焼土塊少量混入。4．黒色土。ローム粒、焼土少量混入。5．赤茶色土。焼土主体。6．赤褐色土。ローム粒主体。焼土混入。7．赤茶色土。焼土塊(φ1～5㎜)混入。

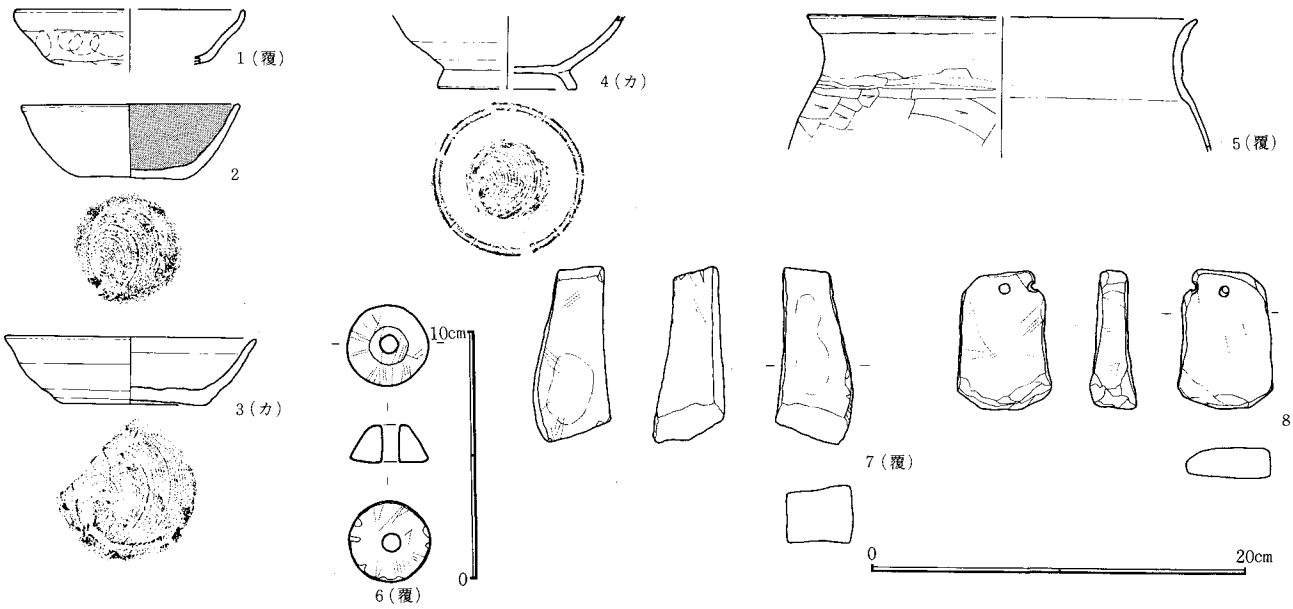
図—396　H—212号住居跡

位置　E103に位置する。南へ傾斜する台地上で、住居跡群のほぼ中央に位置する。

形状　南北4.7m、東西3.4mの長方形プランを呈する。ほぼ北を向いており、面積16.1m²を測る。周溝はカマド部分を除く全周に、幅20cm前後、深さ2～7cmで巡る。

カマド　東壁南寄りに付設され、左右袖部は山石を核に構築、燃焼部中央には支石と見られる山石出土。全長は114cmで、壁外への掘り込みは108cmを測る。　**貯蔵穴**　南東隅に、南壁へ一部かかる形でうがたれている。東西に長い楕円で長軸100cm、短軸66cm、深さ32cmを測る。　**遺物**　カマド内より須恵器坏と埦(3・4)が、カマド手前より須恵器坏(2)が、東壁中央下より砥石(8)が、南西隅より紡錘車(6)が出土している。その他土師器坏(1)と砥石(7)が出土。　**重複関係**　K—90よりも新しく、W—27に先行する。

（田口）

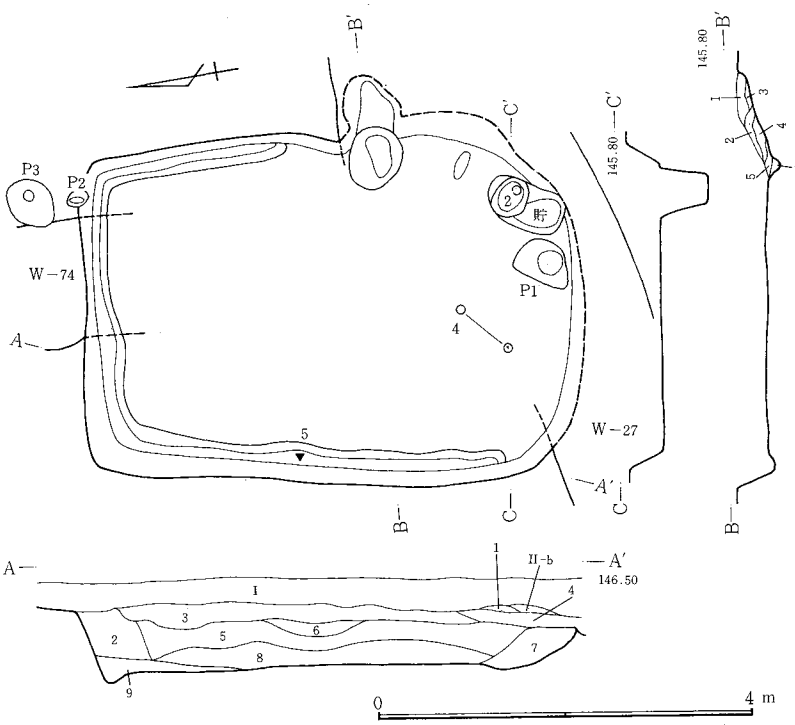


図—397　H—212号住居跡出土遺物

H213号住居跡（図—398、399　図版—24、103　表—199）（IX期）

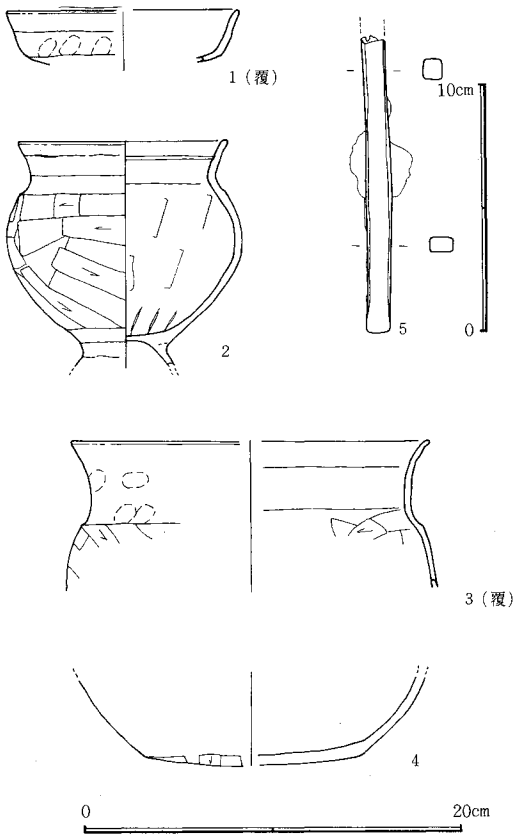
位置　D102～E102。西台地南端で、周辺には竪穴住居跡と掘立柱建物跡が多く存在している。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北5.0m、東西3.3m。面積16.3m²。長軸方向はN—9°—E。壁高は最高61cm、最低39cm。北・西壁全部と東壁北2分の1に周溝をめぐらす。幅5～17cm、深さ4～9cmを測る。　**ピット**　P_1は貯蔵穴の西にあり、56×42cm、深さ65cm。P_2は北壁上の東隅にあり、24×16cm、深さ37cm。P_3は北壁外P_2の北にあり、52×48cmの大きさで平面形は円形を呈する。深さ37cm。いずれも性格は不明である。　**カマド**　東壁中央やや南寄り。全長106cm、燃焼部長40cm、袖部内幅40cm、壁への掘り込み角度25°、壁外掘り込みは90cmである。住居床面とカマド燃焼部のレベル差—11cm。貯蔵穴、南東隅。長円形で、2つ穴があわさった形をしている。85×46cm、北側が深く53cm。中から小型甕が出土した。南側29cm。　**遺物**　カマド内より土師器坏(1)土師器甕(3)を、貯蔵穴より、土師器小型甕(2)を、住居ほぼ中央の床面より土師器埦(4)を、西側周溝内より鉄製品(5)を出土した。　**その他**　W—27と重複関係があるが東西の地層断面図で、W—27がH—213の埋土を切って作られていることから本遺構が古いと考えられる。W—74がH—213の北西隅より入っているが、南には通っておらず、またW—27とは埋土に差があることから、H—213内で終結しているとも考えられる。また、W—27がH—213の南を東西に通っている。

（杉浦）



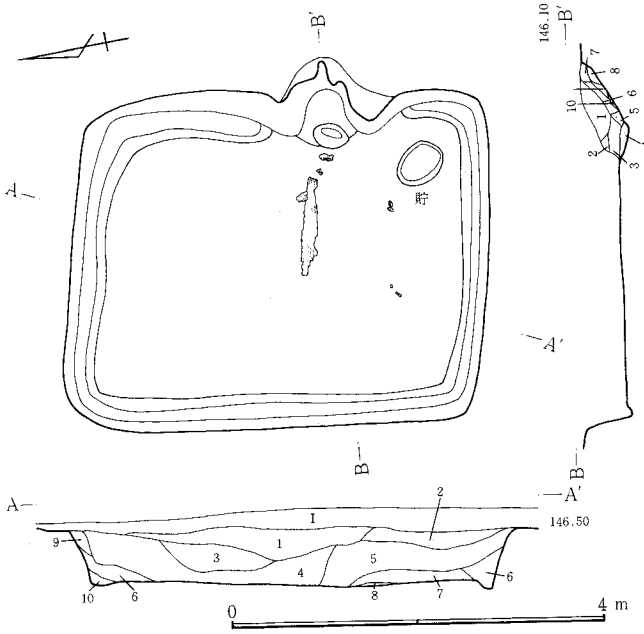
1．粗砂。2．黒褐色土。FP・C軽石、多量のローム混入。3．黒褐色土。B・FP・C軽石混入。4．黒褐色土。B軽石混入。5．褐色土。ローム、焼土粒、少量のFP・C軽石混入。6．黒褐色土。FP・C軽石混入。7．褐色土。ローム、少量の焼土粒混入。8．黒褐色土。焼土粒、ローム粒混入。9．黒色土。ローム混入。　**カマド**　1．黒褐色土。少量の焼土粒混入。2．黒褐色土。焼土塊(φ2～5㎜)混入。3．黒褐色土。焼土粒、焼土塊混入。4．明赤褐色土。焼土。5．黒色土。焼土塊混入。6．黒色土。ローム粒、焼土粒混。

図－398　H－213号住居跡



図－399　H－213号住居跡出土遺物

H214号住居跡（図－400、401　図版－25、103　表－200）（Ⅷ期）



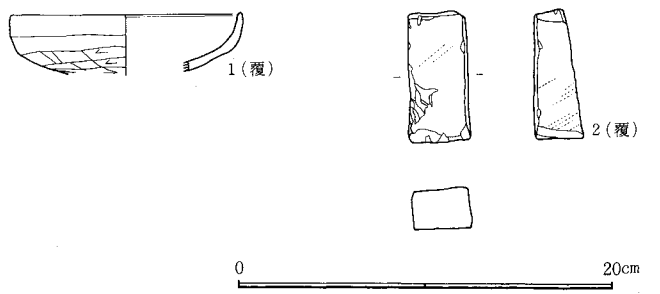
1．黒褐色土。FP・B・C軽石、焼土粒、ローム粒混入。2．黒褐色土。ローム粒、FP・C軽石混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、焼土粒、ローム粒、灰混入。4．黒褐色土。FP・C軽石、焼土粒、ローム塊混入。5．黒褐色土。FP・C軽石、多量のローム塊、少量の焼土混入。6．黒色土。C軽石少量混入。7．黒色土。ローム塊、焼土、軽石少量混入。8．赤褐色土。多量の焼土混入。9．黒褐色土。少量のFP・C軽石混入。10．黒褐色土。　**カマド**　1．黒褐色土。ローム塊、灰塊、焼土塊少量混入。2．黒褐色土。ローム塊、焼土塊混入。3．黒褐色土。2よりローム塊少並、焼土多量に混入。4．黒色土。ローム塊(φ5㎝)混入。5．黒褐色土。多量の焼土混入。6．黒褐色土。灰塊(φ1㎝)混入。7．赤褐色土。焼土粒混入。8．赤褐色土。焼けている。9．赤褐色土。10．黒色土。焼土ブロック混入。

図－400　H－214号住居跡

位置　D－102。西台地の南端で南東への斜面上に所在する。

形状　北々西から南々東に長軸を持つ長方形で、南北が4.2mで、東西が、3.0mである。東西の壁はほぼ平行であるが、北壁は南壁にくらべて西北西から東南東への傾きが大きく、全体の形は台形に近い。長軸方向はW－9.5°－E、面積は13.4㎡、壁高は36～45cmである。地層断面からの壁高は56cmを測る。周溝は壁の全周にめぐっている。幅5～21cmで、深さ5～16cmである。

カマド　東壁中央やや南寄り。左右の袖部の30cm程の地山を掘り残している。全長84cm、袖部内幅66cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度33°、壁外掘り込みは60cmである。燃焼部は床面にくらべて6㎝低い。　**貯蔵穴**　南東隅。円形で規模は55×42cmで深さは22cmである。　**遺物**　住居床面からの出土はない。住居付近より土師器坏(1)と砥石(2)が出土している。またカマド前の床面やや上より炭化物が出土している。　（井野）



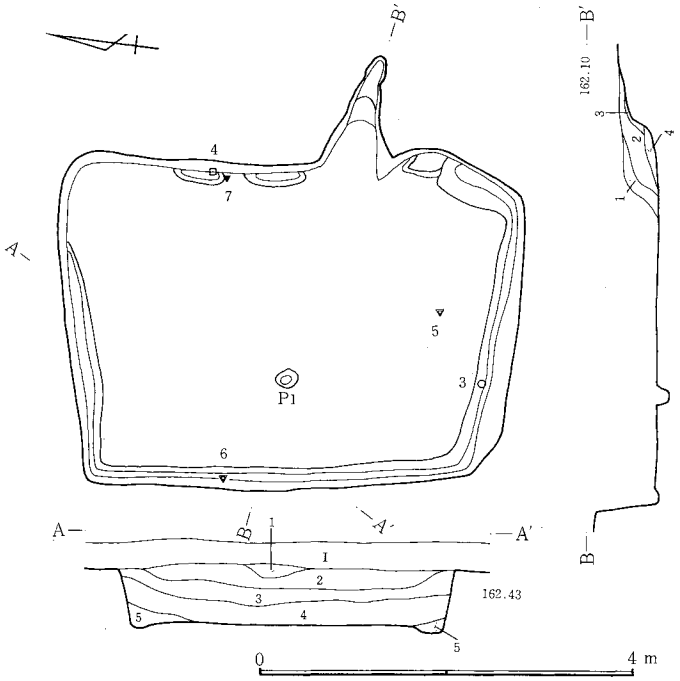
図－401　H－214号住居跡出土遺物

H217号住居跡（図－402、403　図版－25、103　表－201）（Ⅷ期）

位置　西台地東端を区切る崖に近いA18に所在。ここには掘立柱主体の住居跡群があり、その一画を構成する。　**形状**　南北4.5m前後、東西3.3m（長軸N－5.5°－W）の住居跡。南壁と北壁は東壁に向かって開くが、北壁東端と東壁南端を内側に寄せる

ためやや歪んだ台形状を呈する。床面積14.6m²。壁高は北壁で地層断面から最高70cmを測るが、後世の削平を考慮するとそれ以上あったであろう。周溝の深さ2～11cm。 **ピット** P_1、深さ13cm。 **カマド** カマド覆土中からは白色粘土が検出された。構築材と考えられる。検出時で袖部内幅、燃焼部長、煙道部長、いずれも60cm前後。

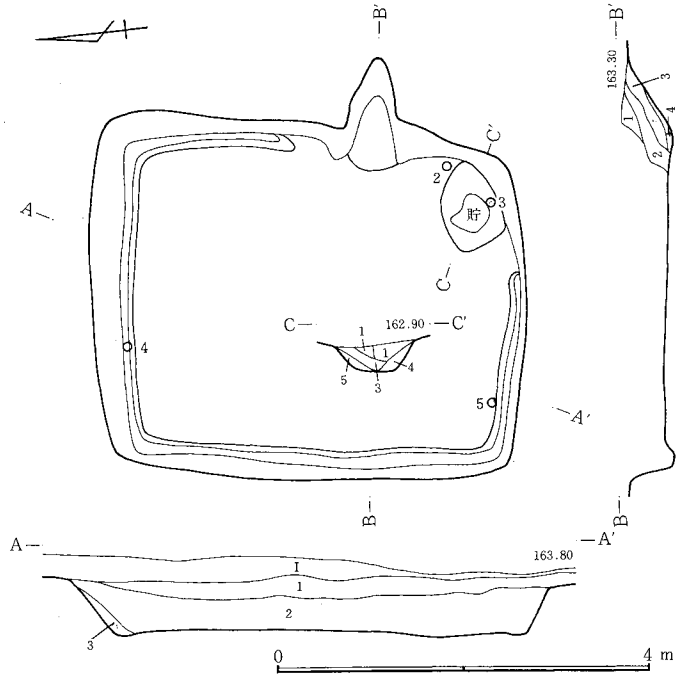
遺物 (1・2)覆土中。(3)南壁下周溝内床面から＋8cmのもの、カマド内出土のもの、覆土中の三者を接合。(4)床面から＋15cm。(5)床着。(6)西壁下周溝内。 **その他** カマド右手の東壁下で床面から＋9cmの高さの所に、狭い平坦面が検出された。(唐澤裕)



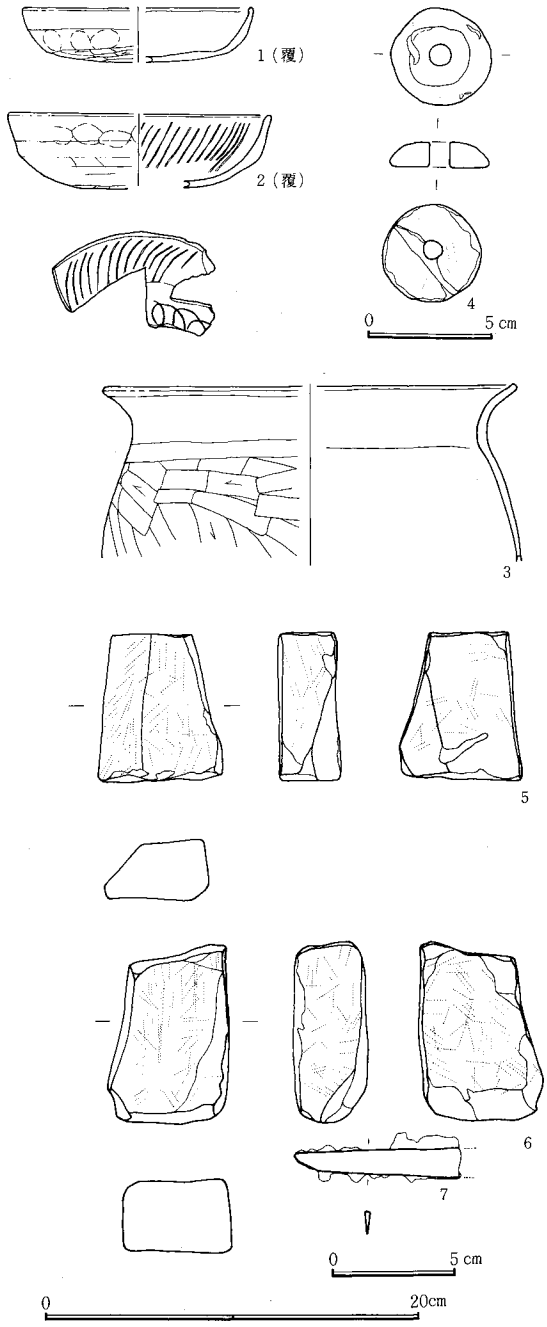
1．B軽石、黒色土、ローム粒主体。C軽石少量混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム塊混入。3．ローム粒と黒色土主体。FP・C軽石混入。4．ローム粒と黒色土主体。FP・C軽石3より少量。5．ローム粒、黒色土主体。 **カマド** 1．ロームと黒色土主体。2．白色粘土、黒色土、ローム粒主体。3．焼土ブロック。4．焼土粒、焼土ブロック。

図－402 H－217号住居跡

H218号住居跡（図－404、405 図版－25、103 表－202）（X期）



図－404 H－218号住居跡

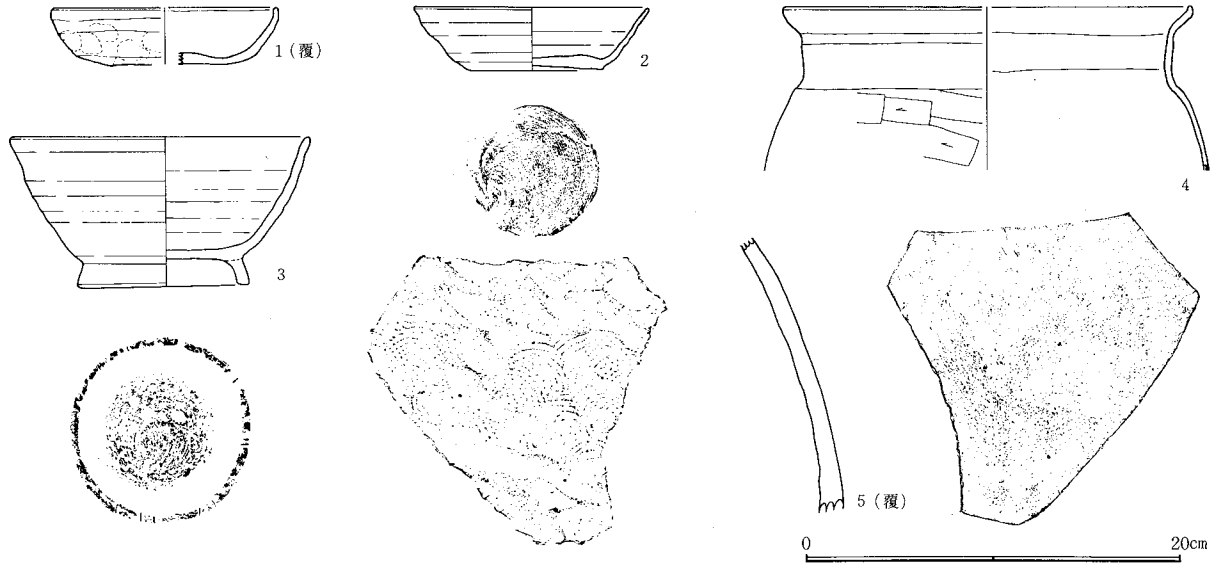


図－403 H－217号住居跡出土遺物

位置 C19に所在する。13区の竪穴住居跡群に属する。

形状 南北4.3m、東西3.5mの長方形を呈し、面積13.7m²を測る。長軸方向はN－12.5°－Eである。周溝はカマドと貯蔵穴周辺を除いて、ほぼ全周に認められる。 **カマド** 東壁の中央より南寄りで、壁外の掘り込み114cm、全長118cm、燃焼部長76cm、袖部内幅48cm、壁への掘り込み角度は36°を測る。 **貯蔵穴** 南東隅で、長軸80cm、短軸62cm、深さ33cmの規模をもつ。 **遺物** 土師器甕(4)や須恵器埦(3)の破片が床面より出土している。(中澤)

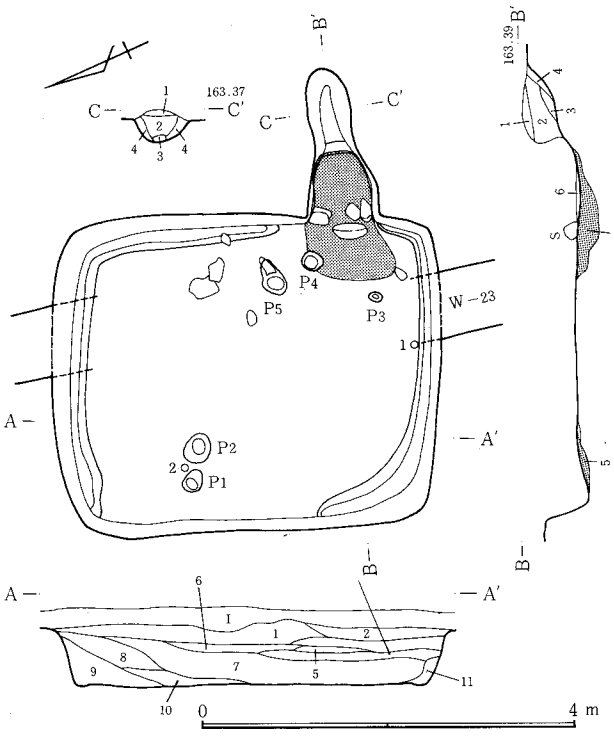
1．黒色土。FP・C・B軽石、ローム粒混入。2．黒茶褐色土。ローム粒、少量のFP・C軽石混入。3．暗茶褐色土。ローム粒多量に混入。 **カマド** 1．白色粘土と黒色土主体。FP・C軽石少量混入。2．白色粘土と黒色土主体。3．焼土塊と黒色土主体。4．灰と黒色土主体。 **貯** 1．灰褐色土。粘土、灰、ローム主体。FP・C軽石、焼土ブロック、炭化物混入。2．赤灰色。灰、ローム主体。C軽石、炭化物、焼土粒混入。3．赤灰色。灰、ローム主体。FP軽石、炭化物、多量の焼土塊混入。4．黒褐色土。ローム粒、微量の炭化物混入。5．暗褐色土。灰、ローム主体。微量の炭化物、焼土粒混入。



図－405　H－218号住居跡出土遺物

H219号住居跡（図－406、407　図版－25、104　表－203）（IX期）

位置　西台地東端を画する崖に近いC18～19に所在。ここは南に下がる緩傾斜面で、ここにある竪穴住居跡を主体とする小住居群の一画を構成する。　**形状**　南北3.8m、東西3.1m（長軸N－22°－E）のやや平行四辺形ぎみの隅丸長方形。壁高は地層断面から四壁とも60cm前後を測る。周溝の深さは2～6cmである。　**床面**　東壁下でカマド掘り形に続く焚口部手前付近、及び西壁下に若干の貼り床が見られた。範囲不明。　**ピット**　P_2とP_5は最も深く前者47cm、後者43cm。P_2に接するP_1は深さ16cm、カマド前のP_3深さ25cm、$P_4$16cm。これらの性格は不明。　**カマド**　東壁の南端近くに位置し、その中軸線の一端は住居南西隅を通る。調査時の所見では壁体は原状をとどめず、掘り形を直接覆土が覆っていた。一方、煙道部は底部には認められないが7～8cmの壁体らしきものが残存していた。また、燃焼部から焚口部にかけてはカマド掘り形に貼床を施し、火床面としていた。焚口部は東壁線に合わせて設置しており、そこでは左右の袖部から崩れた袖石（左右とも2石分積み上げたものが崩れていた）、及び袖石に架構されていた冠材（袖石とも安山岩亜角礫）が出土した。　**遺物**　（1）床面から＋17cm。（2）同＋4cm。　**その他**　南壁に近い床面はローム塊で覆われ、また、住居跡覆土中には自然堆積とみなされる層で多量のローム粒・ロームブロックを含む層が見られた（左図地層断面5・7・8・10層）。これは住居周囲を取りまく盛土が流れ込んだものとも考えられる。W－23（新）と重複。　（唐澤裕）



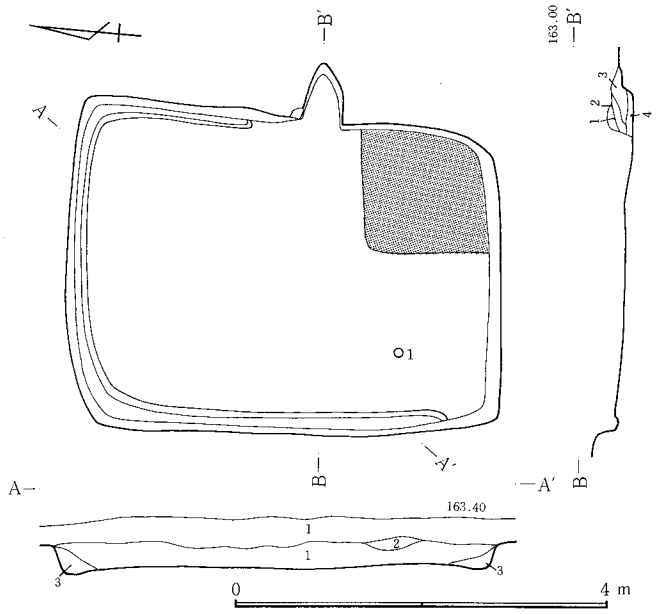
1．黄褐色土に多量の浮石。2．黄褐色土。浮石質。3．黒褐色土に多量の浮石。4．黒色土に浮石。5．黒褐色土。6．黒色土に浮石。7．黒色土に褐色土塊。ローム塊点在。8．褐色土。9．黒色土。10．褐色土にローム塊。11．褐色土にローム塊と黒色土。　**カマド**　1．茶褐色土。焼土塊多量に混入。2．黄褐色土に焼土塊と浮石。3．黒褐色土。灰主体。4．ローム漸移層。5．黄褐色土。ローム塊混入。燃焼部中央は黒味を帯びる。6．黒褐色土。灰質。焼土塊多量に混入。

図－406　H－219号住居跡

図－407　H－219号住居跡出土遺物

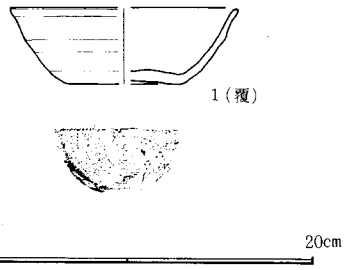
H220号住居跡（図－408、409　図版－25　表－204）（IX期）

位置　B19および20に所在する。地形が大きく東へ傾斜しているところに立地していて、東50mほどで谷になっている。　**形状**　南北4.4m、東西3.2mの長方形を呈し、面積13.9m²である。壁高は西壁34cm、東壁12cmほどである。長軸方向はN－1°－Wで、周溝は北壁から西壁にかけてと、東壁の北側部分とに認められる。　**床面**　貼床が南東隅の周辺で認められた。貼床は3層になっていて、ロームを最下層にして、その上にロームを主体とした土を固くついている。更に最上層に黒色土、ローム、焼土粒など



図－408　H－220号住居跡

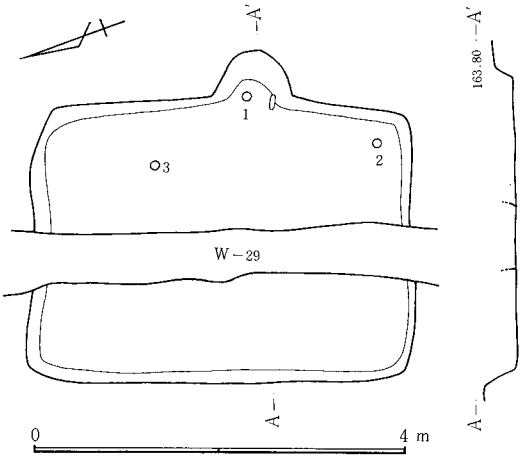
の混じった土をつき固めている。　**カマド**　東壁中央やや南寄りに設置されている。壁外の掘り込み70cm、全長70cm、燃焼部長50cm、袖部内幅44cm、壁への掘り込み角度48°を測る。なお、燃焼部は床面よりも7cmほど低くなっている。　**遺物**　須恵器坏破片(1)が西壁近くより出土している。　（中澤）



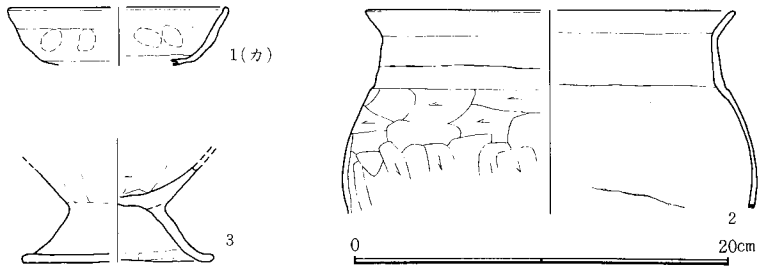
図－409　H－220号住居跡出土遺物

1．黒色土主体。ローム塊(φ3cm)、ローム粒、FP・C軽石混入。2．黒茶褐色土。FP・B・C軽石混入。3．黒色土。多量のローム粒、少量のFP・C軽石混入。　**カマド**　1．灰茶褐色土。焼けたローム粒、粘土主体。FP混入。2．ローム。3．灰茶褐色土。多量のローム粒、少量の焼土塊、灰、粘土、FP・C軽石混入。4．赤茶褐色土。ローム粒、灰、焼土塊主体。

H221号住居跡（図—410、411　図版—25、104　表—205）（XI期）



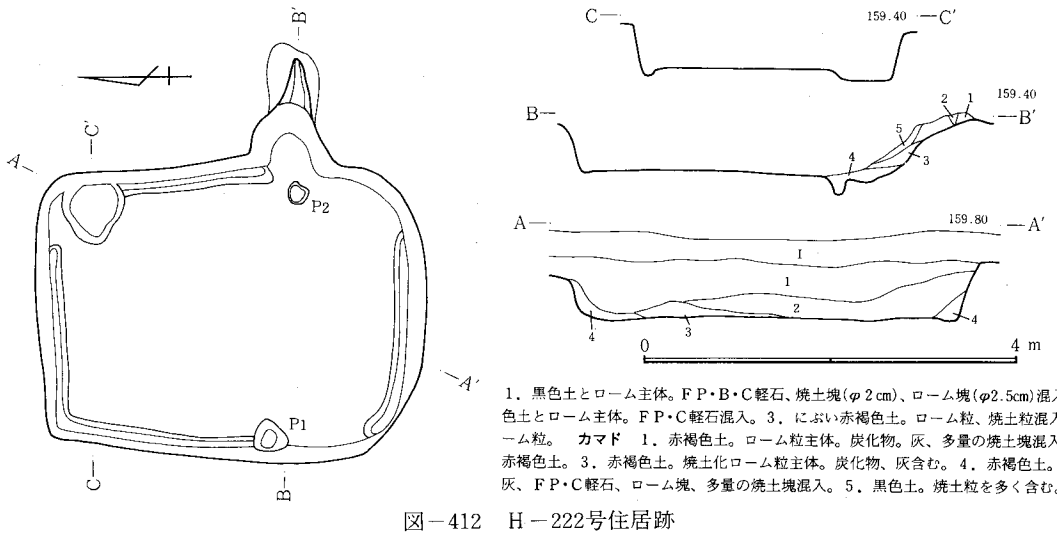
図－410　H－221号住居跡



図－411　H－221号住居跡出土遺物

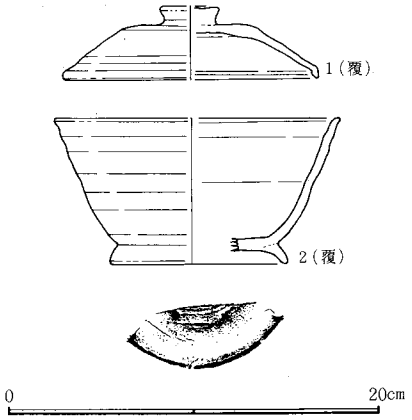
位置　C20に所在する。調査地区13区に分布する一群の竪穴住居跡の1つである。南にH—227号住居跡が接する。　**形状**　南北3.8m、東西2.9m、面積10.4m²（一部推定）で長方形を呈する。長軸方向はN—21.5°—Eである。周溝は認められない。　**カマド**　東壁の中央より南寄りに設置されている。本住居跡の上は墓地として使用されていたため、カマドの覆土の地層は明らかにできなかった。しかし、規模は全長62cm、燃焼部長32cm、袖部内幅60cmを測る。　**遺物**　床面より土師器坏(1)、甕(2)、台付椀(3)の破片が出土している。　**重複関係**　W30号溝と重複し、当跡が本住居跡のほぼ中央を北から南へ走っている。地層が篠によって攪乱されており、その新旧は次の①、②により本住居跡が旧いと判断する。①住居の床面よりも上に砂層の堆積がある。②W30号溝の覆土に本住居跡の掘り込み跡がみられない。　（中澤）

H222号住居跡（図—412、413　図版—25、104　表—206）　（IX期）



1．黒色土とローム主体。FP・B・C軽石、焼土塊(φ2cm)、ローム塊(φ2.5cm)混入。2．黒色土とローム主体。FP・C軽石混入。3．にぶい赤褐色土。ローム粒、焼土粒混入。4．ローム粒。　**カマド**　1．赤褐色土。ローム粒主体。炭化物。灰、多量の焼土塊混入。2．淡赤褐色土。3．赤褐色土。焼土化ローム粒主体。炭化物、灰含む。4．赤褐色土。ローム粒、灰、FP・C軽石、ローム塊、多量の焼土塊混入。5．黒色土。焼土粒を多く含む。

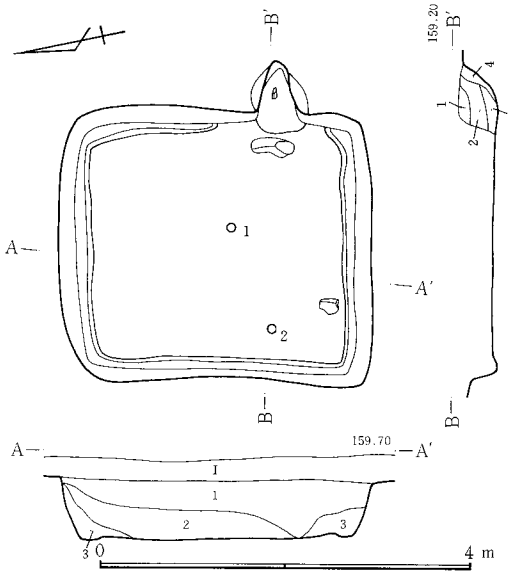
図－412　H－222号住居跡



図－413　H－222号住居跡出土遺物

位置　E14に所在する。中央台地のG12～E14にかけて円形の空間地を囲むようにして分布する約15軒ほどの竪穴住居跡群に属する。群の東端に位置する。　**形状**　南北3.8m、東西2.9mの長方形を呈するが、南東隅および南西隅は隅丸が認められる。壁高は39～50cm、面積は10.6㎡で長軸方向は真北を指す。周溝はカマド北側の東壁に、北壁から西壁にかけて、さらに南壁の一部にそれぞれ認められる。幅４～17cm、深さ１～５cmの規模をもつ。しかし、東壁の周溝の北端は径60cmほどのすり鉢状のくぼみになっている。また、西壁の周溝の南端はP_1が作られている。　**ピット**　２個あって、P_1は長径34cm、短径26cm、深さ21cmの規模をもち、西壁の周溝の南端に位置するが、性格は不明。P_2はカマド前にあって径22cmの円形で深さ24cmである。これはカマドに付属する灰かき穴とみられる。　**カマド**　東壁中央より南寄りに設置されている。全長146cm、壁外への掘り込み128cm、燃焼部長50cm、袖部内幅44cm、壁への掘り込みの角度47°を測る。燃焼部と床面との比高差は床面の方が10cmほど高くなっている。　**貯蔵穴**　なし。　（中澤）

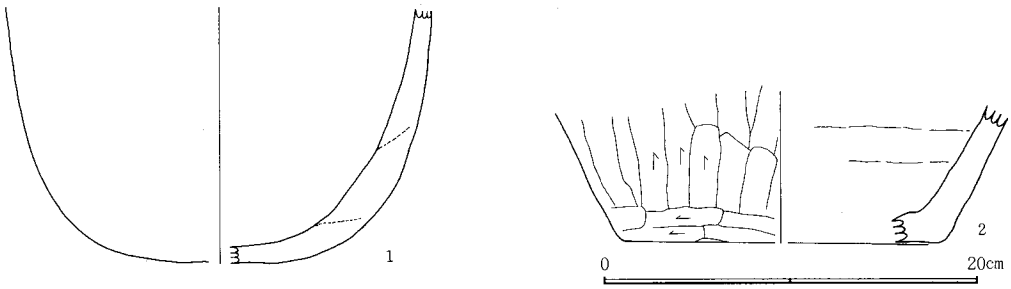
H223号住居跡（図－414、415　図版－25　表－207）（Ⅷ期）



図－414　H－223号住居跡

位置　E14に所在する。H222号住居跡が南接し、円形の空間地を囲む約15軒ほどの竪穴住居跡群の一つで、群の東端に位置する。　**形状**　南北3.0m、東西2.6mのほぼ正方形を呈する。長軸方向はN－12.5°－Eを示す。壁高は29～48cm、面積は7.8㎡を測る。周溝はカマド部分を除いて全周認められ、その幅４～15cm、深さ３～６cmである。　**カマド**　東壁南寄りに設置されている。燃焼部に石が出土していることやカマド前に長さ50cmほどの石（おそらくカマドの冠材に用いたと思われる）がみつかっていることなどから、石も構築材として使用したと思われる。全長68cm、燃焼部長50cm、袖部内幅42cm、壁への掘り込みの角度55°を測る。なお、床面と燃焼部との比高差は４cmほど床面の方が高くなっている。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　カマド前の床面より須恵器大甕(1)、西壁近くより須恵器鉢(2)の破片がそれぞれ出土している。　（中澤）

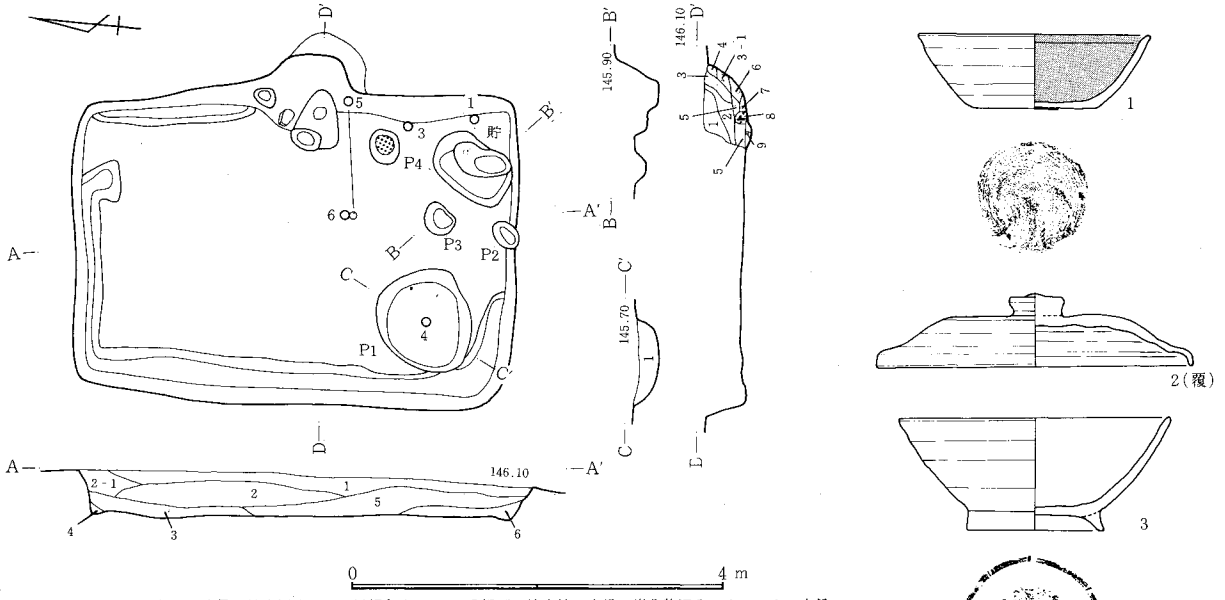
1．ローム粒と黒色土主体。FP・B・C軽石、ローム塊混入。2．ローム主体。3．黒色土。FP・C軽石混入。　**カマド**　1．褐色土。ローム主体。FP・C軽石混入。2．灰褐色土。焼けたローム粒、白色粘土、灰、炭化物、焼土塊混入。3．褐色土。ローム粒主体。焼土塊（φ1cm）、灰、炭化物混入。4．赤褐色土。多量の焼土塊、少量の炭化物、灰混入。



図－415　H－223号住居跡出土遺物

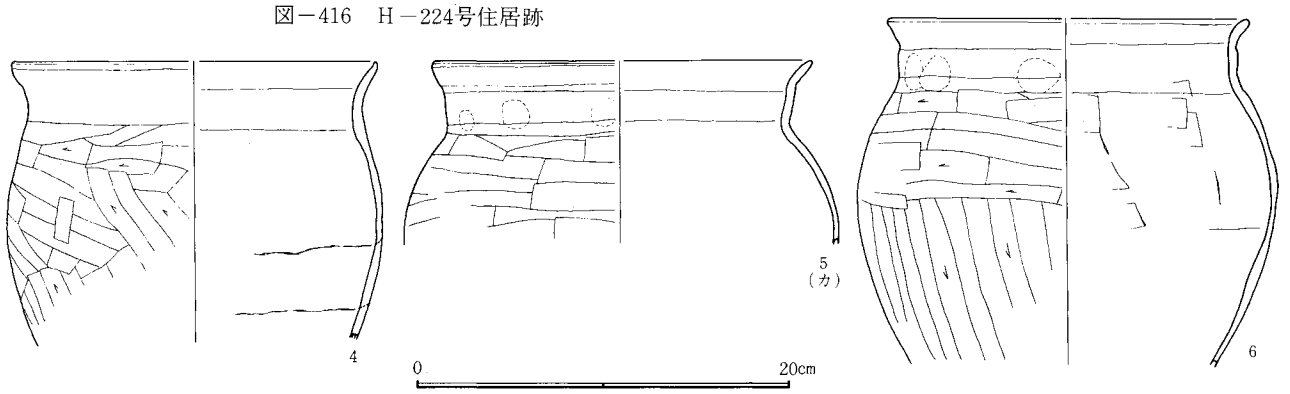
H224号住居跡（図－416、417　図版－26、104　表－208）（Ⅺ期）

位置　西台地南辺のD102にある。周辺は竪穴住居及び掘立柱建物跡が密集している。また、H－225が南に隣接している。地形は、東に緩やかに下がる斜面の端部に当たり、すぐ東は近代まで湧水のあった浅い谷が入り込んでいる。　**形状**　南北4.45m、東西3.0mの長方形。南壁の方が北壁より40cm長い。周溝は、東壁北２分の１から北壁、西壁、南壁西２分の１を巡り、幅12～24cm、深さ１～５cmを測る。西壁下の周溝は幅が広い。　**ピット**　住居内に４ヶ所ある。P_1は最大で、径106cmの円形で深さ29cm。遺物の出土が見られた。P_2は南壁の中央直下にあり、32×28cm、深さ４cm。P_3は36×28cm、深さ12cm。P_4は、カマド右袖前にあり、38×32cmの円形、深さ30cm。　**カマド**　東壁中央に全体を壁に掘り込んで作ってある。左袖の焚き口に山石が一石残存しており、燃焼部中央に固い焼土の塊が立っていて支石の代用とされた可能性がある。全長62cm、燃焼部長28cm、袖部内幅84cm、壁への掘り込み角度60°を測る。燃焼部は、床面より10cm低い。　**貯蔵穴**　南東隅にあり、88×50cmの長方形、深さ25cmを測る。　**遺物**　P_1内より土師器甕(4)が出土した。カマド内より土師器甕(5)が、P_3の周囲の床面から土師器甕(6)、内黒の須恵器坏(1)、須恵器高台付埦(3)が出土している。須恵器蓋(2)は埋土中よりの出土。　**重複関係**　完全な重複ではないが、H－－225との新旧関係は、地層断面の切り合いから、本遺構が新しいと思われる。K－70と重複するが、新旧関係は不明である。　（川崎）



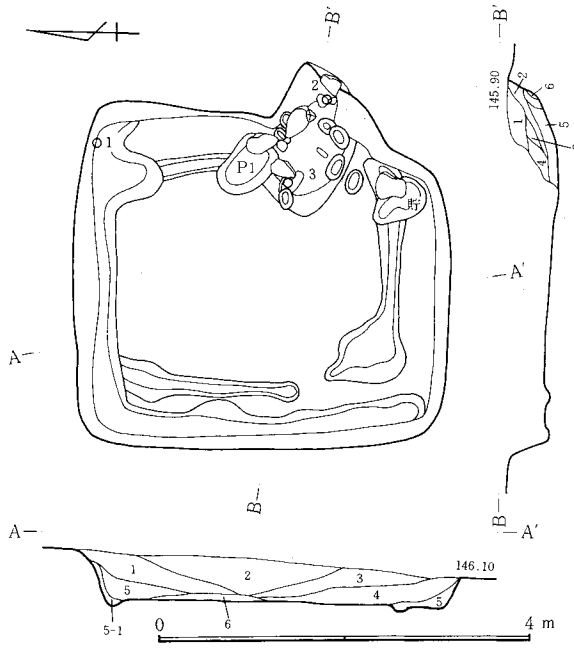
1．淡褐色土。FP・C軽石、少量の焼土混入。2．黒褐色土。FP・C軽石、焼土粒、少量の炭化物混入。2-1．2に少量のローム粒混入。3．黒褐色土。ローム粒、FP・C軽石混入。4．褐色土。ローム多量に混入。5．暗赤褐色土。多量の焼土粒、FP・C軽石、炭化物、ローム塊混入。6．黒褐色土。ローム粒、塊、焼土混入。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石、少量のローム、黒灰色土塊混入。2．黒色土。焼土混入。3．黒色土。ローム粒、少量の焼土混入。3-1．3に多量の焼土。4．焼土とロームの混合。5．2層に焼土多く含む。6．黒色土。焼土粒。ローム塊。粘土混入。7．多量の焼土、ローム粒、黒色土主体。炭化物混入。8．焼土。9．黒色土。少量の焼土粒混入。P_1焼土。ローム粒、FP・C軽石含。

図－416　H－224号住居跡



図－417　H－224号住居跡出土遺物

H225号住居跡（図－418、419　図版－26、104　表－209）（IX期）

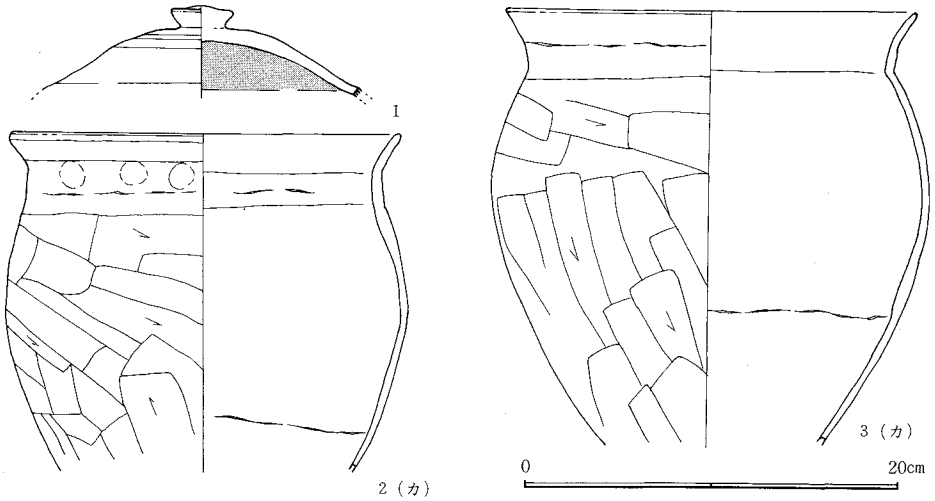


1．黒褐色土。ローム粒混入。2．黒褐色土。FP・C軽石、少量の炭化物、焼土粒混入。3．茶褐色土。FP・C多量のローム粒混入。4．黒褐色土。ローム塊、ローム粒混入。5．黒褐色土。FP・C軽石、少量のローム塊混入。5-1．5と類似でローム粒多量。6．黒褐色土。ローム粒散在。　**カマド**　1．黒褐色土。ローム粒、少量の焼土粒混入。2．赤褐色土。灰、焼土混入。3．黒褐色土。焼土塊（φ1cm）、少量の灰混入。4．黒褐色土。ローム塊混入。5．赤褐色土。焼土塊混入。6．焼土。

図－418　H－225号住居跡

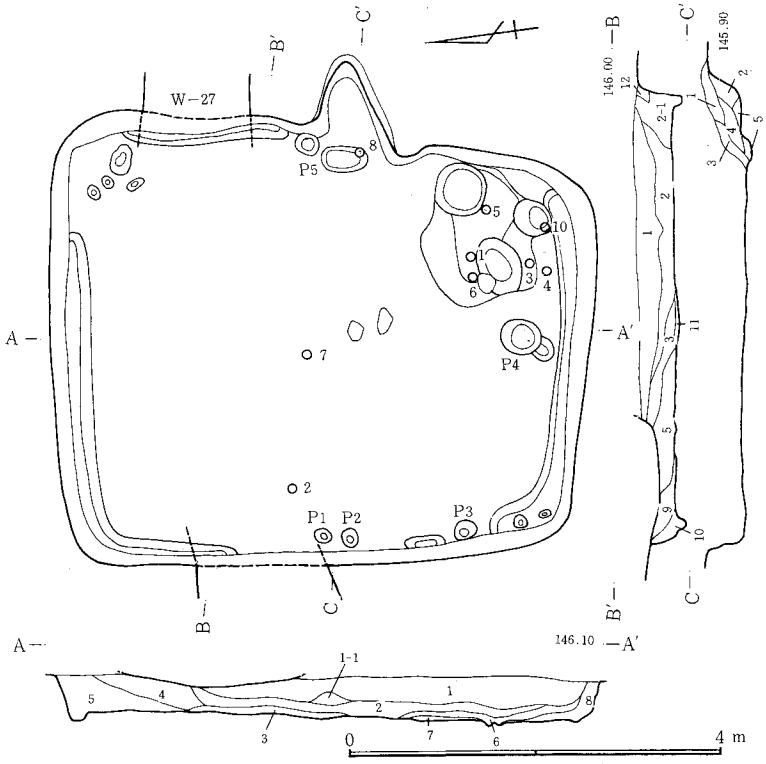
位置　D102。すぐ東の浅い谷地に向かう微傾斜地に立地する。多数の掘立柱建物跡を含む一大住居跡群の中の一つである。　**形状**　南北3.6m、東西3.4m、長軸N－4.5°－E。床面積11.6m²（拡張後）を測る。東・西・南壁から離れた床面にも周溝（拡張前）の跡を残すが、本住居跡はこれを南側と西側に約40cm、東側は北壁東端のみ約60cm拡げて台形につくる。壁の形状は拡張前後とも非常によく似る。周溝の深さは拡張前後とも5～10cm前後である。　**ピット**　カマド付近のP_2～P_8の小ピットはカマド壁石に伴うものか。P_2～P_3は袖石部分と考えられる。東壁の拡張のあり方、及び他にカマドのない点から、建て替え後もカマド位置に変化はないものとみられる。P_1は貯蔵穴的なものか。深さ23cm。　**カマド**　P_2、P_3を袖石の位置とすると、検出面で全長約100cm、袖部内幅40cm前後。燃焼部は床面より－5～－8cmを測る。燃焼部先端近くに自然石の支石を認む。　**貯蔵穴**　（1）は北東隅周溝内より出土。床面より＋6cm。（2・3）はカマド内より出土。床面より＋30cm。近接してカマド壁石とみられる大、小の安山岩が出土した。これらは、カマドに伴うものであろうか。　**重複関係**　K－92と重複す

る。切り合い関係により、K－92の柱穴が、H－225の床面下となっているので本遺構が新しい。　（唐澤）



図－419　H－225号住居跡出土遺物

H226号住居跡（図－420、421、422　図版－26、104　表－210）（IX期）



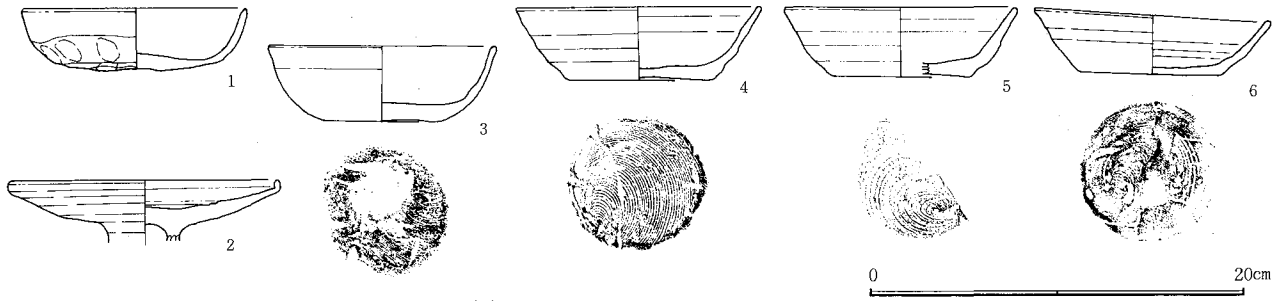
1．黒色土。FP・C軽石。多量の粘土、灰混入。1-1．灰。2．黒色土。FP・C・B軽石、焼土混入。2-1．2層に焼土、灰の混入多い。3．ローム、ローム塊に黒色土混入。4．黒色土。焼土、灰混入。5．黒色土。FP・C軽石混入。6．暗灰色土。7．暗赤灰色。焼土粒多量に混入。8．黒色土（FP・C軽石混入）とローム主体。9．黒灰色土。ローム塊まじる。10．黒色土とロームの混土。11．ロームと黒色土の混土。12．黒色土。浮石は含有せず粒子は細く粘性あり。　カマド　1．灰白色土。灰、粘土、焼土混入。2．黒褐色土と焼土の混合。3．赤褐色土。焼土粒多量に混入。4．灰白色土。焼土粒多量に混入。5．黒褐色土。焼土塊（φ3cm）、灰、ローム混入。

図－420　H－226号

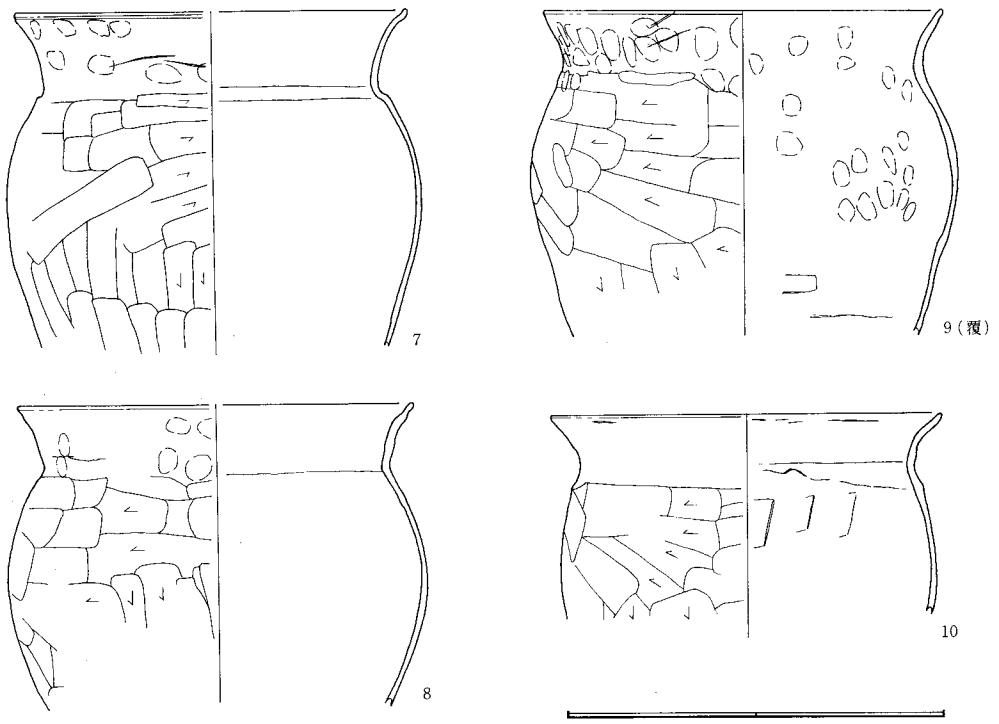
位置　D5付近を谷頭とすると南北低地の西側斜面に立地し、掘立柱建物跡を多量に含む小群中に所在する。この小群は遺構構成のよく似た2小群と共に東側に開いた空間を3方向から囲む。　**形状**　N－10.5°－Eに方位を取る、やや大型な住居跡で、南北5.4m、東西4.4mを測る。壁下には深さ6～8cm程度の周溝を巡らすが、西壁側では小ピット列の所もある。（床面からの深さ7～12cm）。ところで、北東隅内側にもほぼ同規模のピット列がある。両者が一連のものとすれば、東壁北半には拡張が想定される。床面積22.6m²。　**床面**　住居中央部や東壁沿い、南壁中央部等に顕著な凹凸がみられる。一方、北壁沿いや西壁沿いの床面は比較的平坦である。両者の間には機能的差異が想定される。　**ピット**　P_1～P_3は貯蔵穴の掘りかえか。深さはいずれも18～19cm。P_4は出入口施設に伴うか。深さ17cm。P_5性格は不明。深さ10cm。　**カマド**　掘り形のみ残存。全体がよく焼ける。焚口部床面下に南北50cm、東西26cm、深さ14cmのピット。　**貯蔵穴**　ピット項参照。　**遺物**　（1・3・6・10）は床面とほぼ同レベルで出土。（2）は床面から＋3cm。（4）は同＋8cm。（5）は同＋19cm。（7）床着。（8）カマド覆土中。（9）住居覆土中。

重複関係　住居跡北西隅をW27号溝に切られる。

その他　西壁から住居跡中央部にかけて、覆土中にロームを主体とする暗褐色土層が検出された（左図東西断面3層）。自然堆積層とみられ、あるいは住居外施設に関連するものが流れ込んだか。（唐澤）

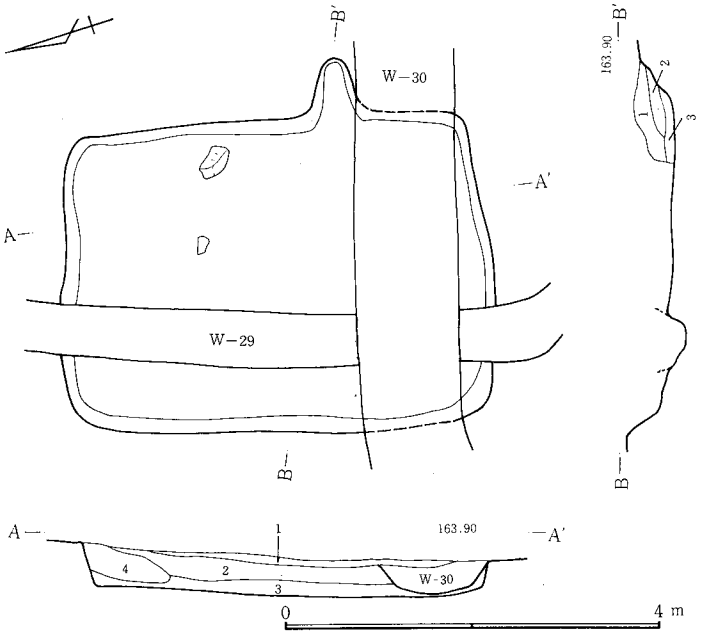


図－421　H－226号住居跡出土遺物（1）



図－422　H－226号住居跡出土遺物（２）

H227号住居跡（図―423　図版―26）　（X期）



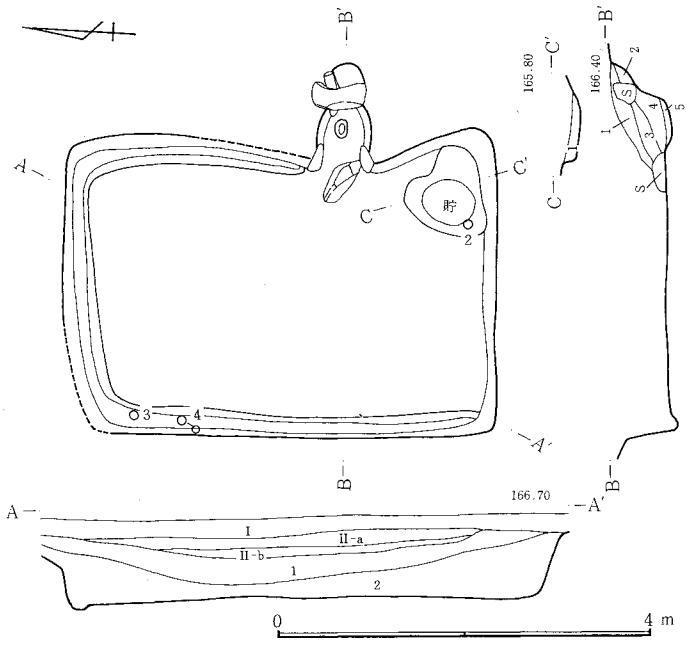
位置　C19およびC20に所在する。北にH221号住居跡が接する。　**形状**　南北4.3m、東西2.9mの長方形を呈し、長軸方向はN－15°－Eである。壁高は北壁48cm、南壁38cmを測り、面積は13.0㎡である。　**カマド**　東壁南寄りに設置される。壁外への掘り込み82cm、全長82cm、燃焼部長76cm、袖部内幅46cm、壁への掘り込み角度35°、住居床面とカマドの燃焼部とのレベル比は床面の方が６cmほど高くなっている。カマド燃焼部は内側があまり焼かれていない。これはH221号住居跡と同じように墓地のための攪乱によるものか、もともとカマドがあまり使用されずに住居が捨てられたものか、はっきりしない。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　なし。　**重複関係**　W29、30号溝と重複する。本住居跡の覆土と溝の覆土の切り合いにより、本住居跡の方が旧いといえる。　（中澤）

１．B軽石主体。ローム粒、ＦＰ・C軽石混入。２．黒色土。ＦＰ・C軽石、少量のローム塊混入。３．茶褐色土。ローム粒、ローム塊混入。４．黒色土とローム粒主体。多量のローム塊、少量のＦＰ・C軽石混入。　**カマド**　１．黒褐色土。ＦＰ・C軽石、少量の焼土混入。２．褐色土。ＦＰ・C軽石、少量のローム塊混入。３．黄褐色土。ＦＰ・C軽石混入。

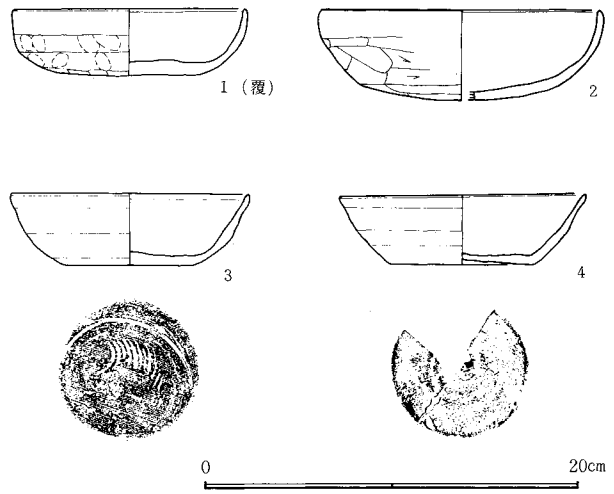
図－423　H－227号住居跡

H228号住居跡（図―424、425　図版―26、105　表―211）（Ⅷ期）

位置　H19から20にかけて所在する。西台地の北端に位置している。周辺に住居跡等はみられない。　**形状**　南北4.3m、東西2.9mの長方形を呈し、長軸方向はN－２°―Wである。壁高40～50cm、面積12.6㎡を測る。周溝は北壁から西壁にかけてみられる。また、東壁の北２分の１ほどにもみられる。幅７～27cm、深さ６～13cmである。　**カマド**　東壁南寄りに設置される。左右袖部や煙道部を作るのに使用した石（偏平な）がみつかっていて、石を主構築材としている。全長118cm、燃焼部長66cm、袖部内幅48cm、壁への掘り込みの角度67°を測る。床面と燃焼部との比高差は床面が３cmほど高くなっている。　**貯蔵穴**　南東隅にあって、長軸88cm、短軸68cm、深さ24cmを測る。　**遺物**　南壁貯蔵穴近くで土師器坏(2)、北西隅の周溝部で須恵器坏（３・４）、（いずれも完形でない）が出土している。　**テフラ**　床面より40cmほど上でB軽石の純層が厚さ10cmほど堆積している。さらにその上の層もB軽石の純層に近いが、下層はあづき色であるのに対し、本層は黒色を呈している。さらにＦＰ、Cがわずか混入して、砂質である。　（中澤）



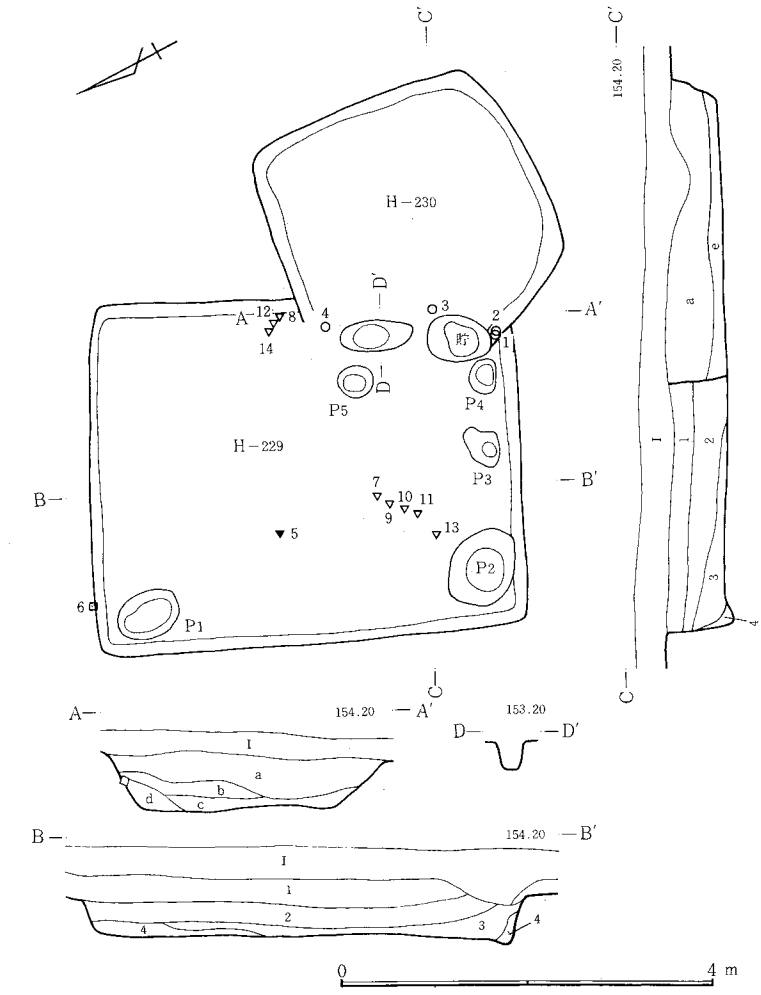
図－424　H－228号住居跡



図－425　H－228号住居跡出土遺物

1．黒色土。多量のFP・C軽石、ローム粒、少量の焼土粒混入。2．暗茶褐色土。ローム主体。FP・C軽石、焼土粒少量混入。　**カマド**　1．茶褐色土。ローム主体。FP・C軽石混入。2．赤色土。ローム主体。白色粘土。焼土塊、FP・C軽石混入。3．にぶい赤褐色土。ローム主体。白色粘土。FP・C軽石、焼土塊混入。4．赤褐色土。ローム粒主体。多量の焼土塊（φ1～3cm）、灰、微量のFP・C軽石混入。5．黒色土。FP・C軽石、多量の灰、ローム粒混入。　**貯**　1．黒茶褐色土。焼土粒、焼土塊、炭化物多量に混入。

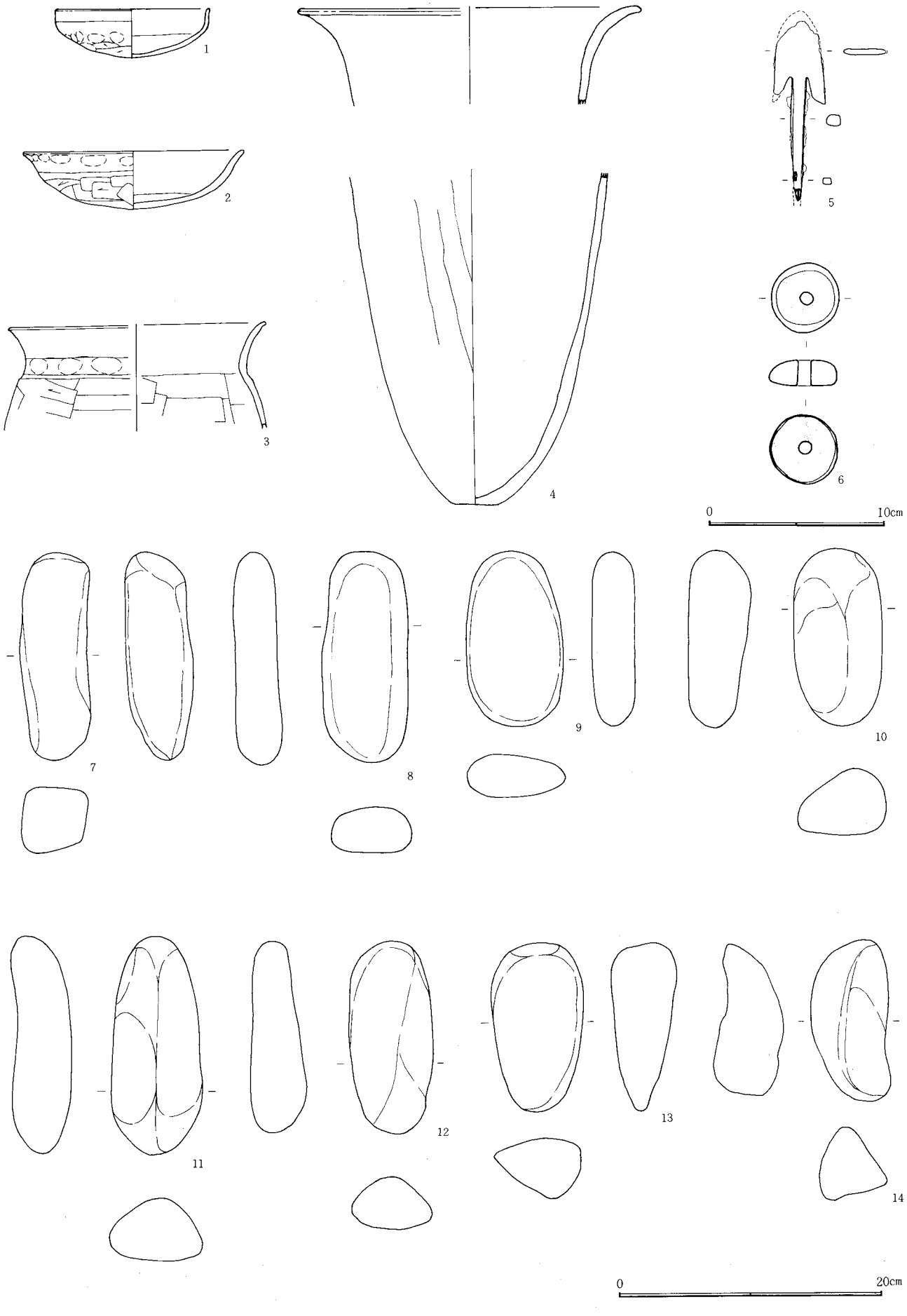
H229号住居跡（図－426、427　図版－26、105　表－209）（III期）



1．黒褐色土。FP・C軽石、若干のローム粒、炭化物混入。2．褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。3．茶褐色土。ローム粒、FP・C軽石混入。4．黄褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。5．淡褐色土。FP・C軽石、灰混入。
a．黒褐色土。b．茶褐色土。ローム塊、FP・C軽石混入。c．淡褐色土。d．黄褐色土。ローム塊、FP・C軽石混入。e．淡褐色土。ローム粒、FP・C軽石、灰混入。

図－426　H－229号・230号住居跡

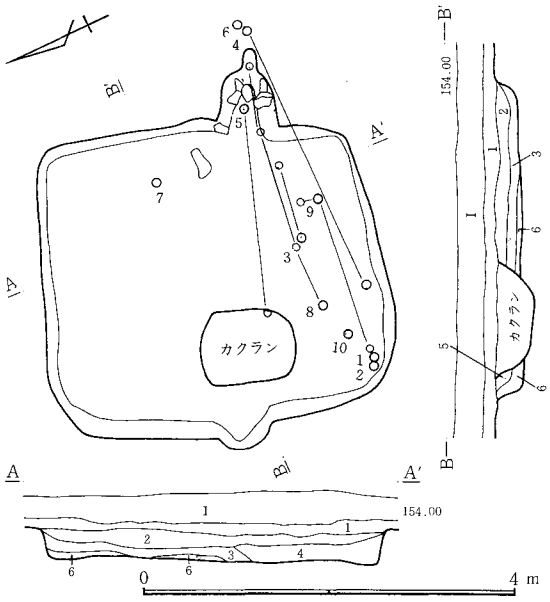
位置　西台地東側のA6に所在し、南東緩傾斜地の縁に当る。先後関係については、地層断面の記録及び遺存状況に明らかなように、H－229→H－230の順になると考えられる。［H－229］　**形状**　西壁がやや歪んだ、南北方向に長い隅丸方形を呈すると考えられる。規模は東西3.4m・南北4.3mを測り、面積は14.6m²である。長軸方向はN－22.5°－Eで、壁高は約62cmである。床面には多少の凹凸があるが、強く踏み固められていた。なお、周溝は検出されなかった。　**カマド**　東壁の中央からやや南寄りの位置に構築されていたと考えられるが、H230号住居跡によって壊されてしまっており、詳細は不明である。30×80cm・深さ29cmの不整形の穴があり、若干焼けていたことから推して、燃焼部はちょうどこの穴の位置にあったものと思われる。　**ピット**　住居内5ヵ所。P_1は51×71cmで深さ11cm、P_2は76×66cmで深さ32cm、P_3は34×32cmで深さ23cm、P_4は35×27cmで深さ23cm、P_5は35×32cmで深さ7cm、いずれも柱穴もしくは住居施設に係わるものと考えられる。　**貯蔵穴**　南東隅、不整円形で、規模は51×66cm・深さ29cmである。　**遺物**　棒状の礫（7～14）が、東壁際に3個・南西部に5個集中して出土した。線刻の紡錘車(6)は北西壁上から出土したもので、注目すべき遺物である。床中央より鉄製鏃(5)出土。［H－230］H－230号住居跡については、調査手順の関係上から北西部の壁を残し得なかったが、形状は南壁及び西壁がやや張り出した隅丸不整形を呈すると考えられる。規模は、東西2.5m・南北2.6mを確認し、長軸方向はN－6°－E、壁高は45～60cmである。床面はほぼ平坦で、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。　**カマド**　手掛りを全く欠く。あるいは当初から構築されなかったのかも知れない。　**遺物**　実測に耐え得るようなものは出土しなかった。カマドの件と合わせて注意すべき遺構である。　（飯塚）



図－427　H－229号住居跡出土遺物

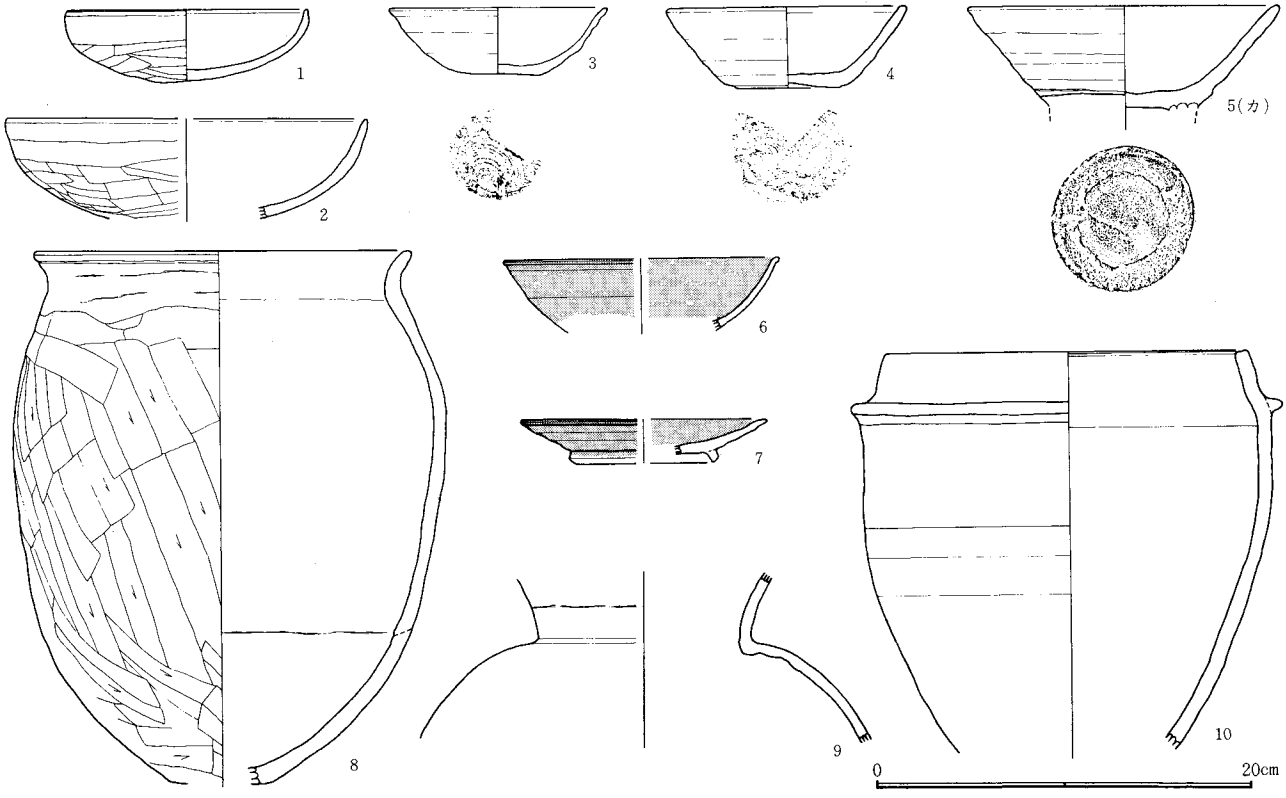
H231号住居跡（図―428、429　図版―26、105　表―213）（Ⅻ期）

位置　西台地南東部のイ6中央部に所在し、台地の南東緩傾斜地に当る。　**形状**　南北方向が若干長い隅丸方形で、東西3.1m・南北3.4mを測る。長軸方向はN－20°－E、面積は9.9m²である。床面は地山を踏み固めており、残存壁高は12～15cmしかなかったが、地層断面の観察では32cmの高さまで壁を確認している。　**ピット**　西壁のほぼ中央部が若干えぐられたような状態になっており、柱穴としての機能を果した可能性が考えられるが、詳細は不明である。西側の穴は後世の攪乱によるものであり、周溝及び貯蔵穴は検出されなかった。　**カマド**　東壁の中央からやや南寄りの位置に、角礫と粘土を使用して構築されており、燃焼部は壁外にある。袖部内幅42cm・燃焼部長60cmで、全長82cmである。燃焼部は床面よりも2cmほど窪んでいた。　**遺物**　カマドの手前及び南壁際に多く集中して出土した。須恵器埦(5)はカマド内に落ち込むような状態で出土。土師器甕(8)・須恵器羽釜(10)等は南壁際に散らばっていた。　（飯塚）



1．黒褐色土。FP・C軽石混入。砂質。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．暗褐色土。C軽石、ローム塊、若干焼土粒混入。4．茶褐色土。C軽石、焼土粒、ローム粒混入。5．黒褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。6．黒褐色土。ローム塊混入。

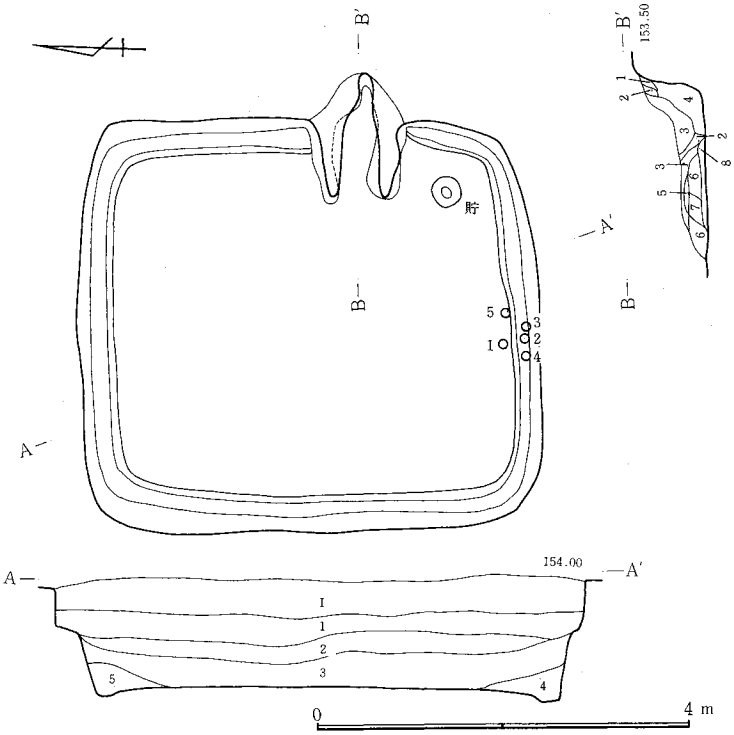
図－428　H－231号住居跡



図－429　H－231号住居跡出土遺物

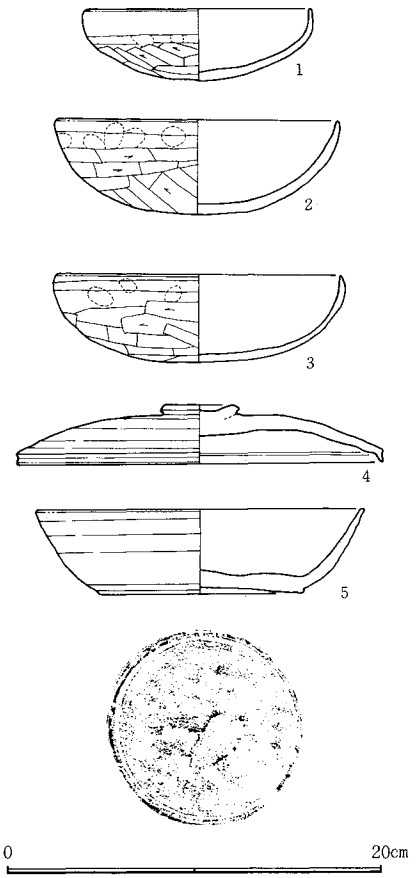
H232号住居跡（図―430、431　図版―26、105　表―214）（Ⅵ期）

位置　イ－6。西台地の中央部東で、東南への緩斜面上に所在している。　**形状**　ほぼ南北に長軸を持つ隅丸の方形で、南北が4.6mで東西が4.1mである。長軸方向はN－2°－Wで面積は17.6m²である。壁高は60～62cmでほぼ垂直にしっかりと掘りこまれている。周溝は壁下全周に、幅8～20cm、深さ10～11cmでめぐっている。　**カマド**　東壁中央よりやや南より。袖部には約50cmほどの造り出しがある。全長136cm、袖部内幅50cm、燃焼部長90cm、壁への掘り込み角度68°、壁外掘り込み82cmである。燃焼部は床面と同じ高さである。　**貯蔵穴**　南東隅。円形で規模は30×30cmで深さは23cmである。　**遺物**　南壁周溝内とその付近より、須恵器坏(5)、土師器坏（1・2・3）、須恵器蓋(4)が出土している。これらの遺物は周溝内からまとまって出土しており、またななめになった状態で出土してきており、壁の上にあったものが下におちてきたのではないかと考えられる。　（井野）



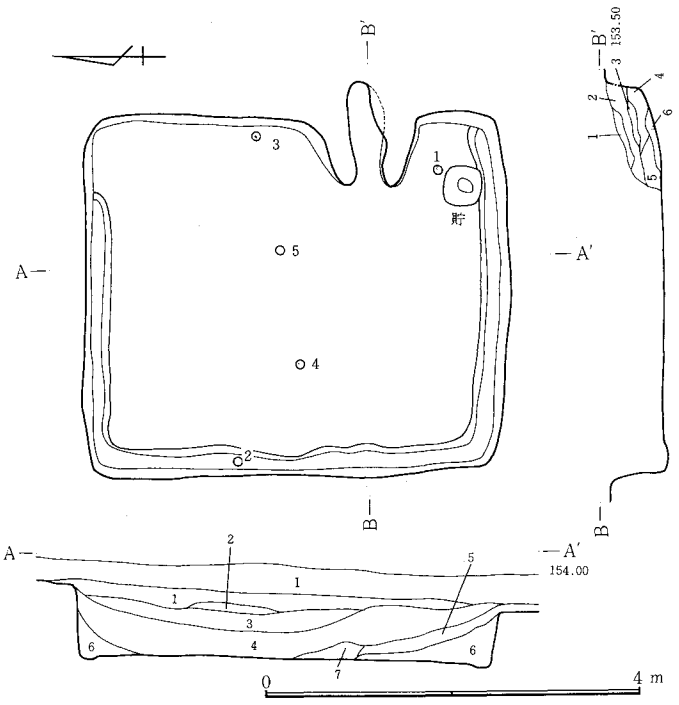
1．黒色土。ＦＰ・軽石多量に混入。2．黒褐色土。少量のローム、ＦＰ軽石、多量の軽石混入。3．黒褐色土。小ローム塊、ＦＰ軽石、多量の軽石混入。4．黒褐色土。細かい軽石、少量のローム塊混入。5．黒褐色土。少量のローム塊混入。　**カマド**　1．焼土、ロームの混合土に粘土混入。2．焼土とロームの混合土。3．黄褐色土。焼土粒、ローム粒混合。4．焼土とロームの混合土。大粒のローム塊混入。5．焼土。6．灰白色粘土・焼土・炭化物・ロームの混合土。7．6に類似で、粘土の混入が少ない。8．灰白色粘土。焼土粒、炭化物混入。

図－430　Ｈ－232号



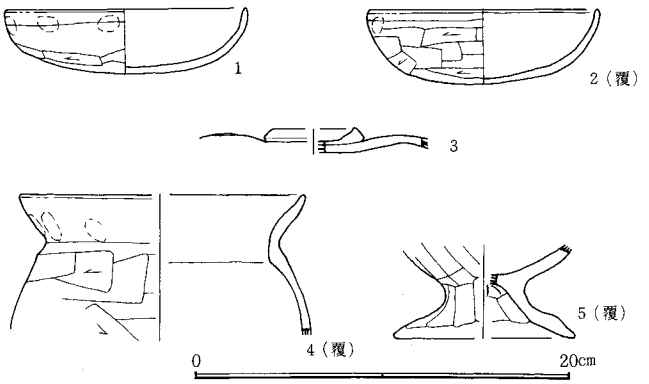
図－431　Ｈ－232号住居跡出土遺物

Ｈ233号住居跡（図－432、433　図版－27、105　表－215）（Ⅴ期）



1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊混入。2．赤褐色土。焼土塊(φ3㎝)、焼土粒、ＦＰ・Ｃ軽石混入。3．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。4．茶褐色とロームの混合土。ＦＰ・Ｃ軽石少量混入。5．黒褐色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。6．ローム粒主体。ＦＰ・Ｃ軽石混入。7．粘土(カマドの崩れたもの。)　**カマド**　1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊(φ2㎝以下)2．灰色土。粘土とローム主体。少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。3．黒色土。多量のローム塊、ローム粒、少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。4．灰色土。粘土主体。若干のＦＰ・Ｃ軽石、焼土塊(φ3～4㎝)混入。5．灰褐色土。ローム粒、灰、粘土主体。焼土粒、ＦＰ・Ｃ軽石多量に混入。6．黒色灰。焼土塊(φ3～8㎝)・粒多量に混入。

図－432　Ｈ－233号住居跡



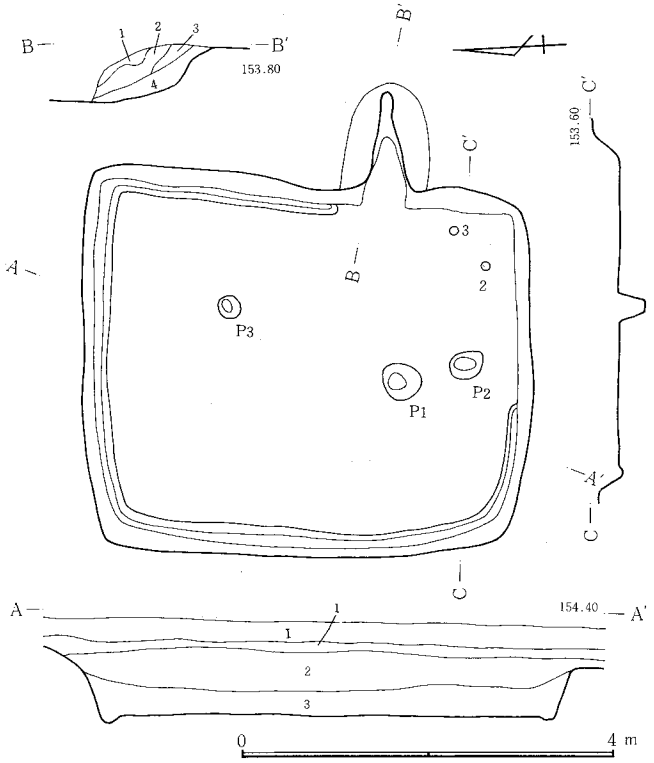
図－433　Ｈ－233号住居跡出土遺物

位置　ロ６から７にかけて所在する。西台地14区の一大竪穴住居跡群に属する。東へ30mほど行くと谷になる。　**形状**　南北4.3m、東西3.6mの長方形を呈し長軸方向はＮ－1.5°－Ｗを示す。壁高は60cm前後、面積15.1㎡を測る。周溝は北壁東側５分の１ほどを除いて、西壁から南壁全体にみられる。幅７～24cm、深さ２～８㎝を測る。なお、東壁には認められない。　**カマド**　東壁で南寄りに設置されている。全長114cm、壁外への掘り込みは50cm、燃焼部長104cm、袖部内幅30cm、壁への掘り込みの角度60°を測る。本カマドは両袖部を大きく床面につき出していて、燃焼部の中心には住居内に入っている点が特徴といえよう。構築材は粘土を中心とし、煙道部には土師器長胴甕を使った様子がみられる。なお、床面と燃焼部との比高差は０である。　**貯蔵穴**　東壁南寄り。円形を呈し径40cm前後、深さ16cmを測る。　**遺物**　西壁下の周溝上より土師器坏(2)、カマドの

北側の袖近くで須恵器蓋(3)、貯蔵穴近くからは土師器坏(1)、床面中央より土師器甕(4)と土師器台付甕(5)のそれぞれ一部が出土している。（中澤）

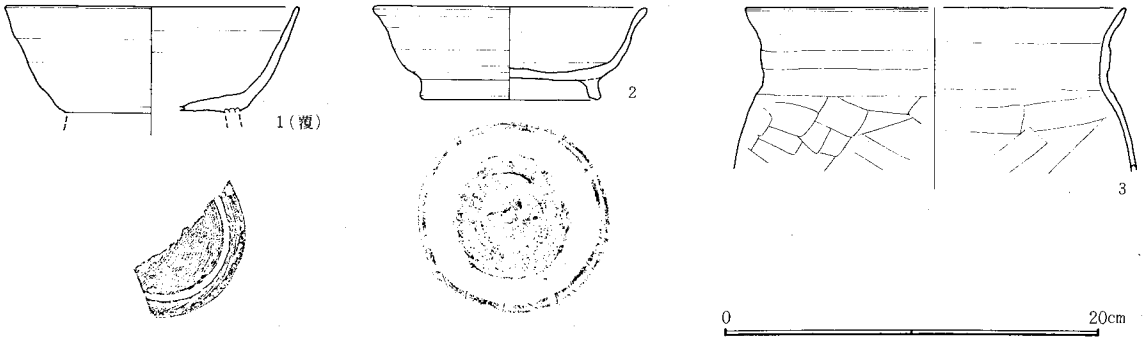
H234号住居跡（図—434、435　図版—27、105　表—216）（IX期）

位置　西台地東側中央付近に所在し、ゆるく南に傾斜する所に位置する。**形状**　ほぼ南北に長軸を持つ長方形で、南北4.5m、東西3.6mである。長軸方向はN—5.5°—E、面積16.2m²、壁高は記録がなく不明。カマド南と南壁下東2分の1を除く全ての壁下に周溝をめぐらす。幅2～22cm、深さは記録がなく不明。**ピット**　北側にP_3、南側に$P_{1.2}$があるが、住居跡との関係は不明。P_1、42×40cm、深さ5cm。P_2、38×28cm、深さ29cm。P_3、26×24cm、深さ10cm。**カマド**　東壁南寄り。全長132cm、袖部内幅44cm、燃焼部長76cm、壁への掘り込み角度63°で、壁への掘り込みは132cmである。燃焼部は床面より約2cm低い。**貯蔵穴**　なし。**遺物**　土師器甕(3)がカマドから出土。須恵器の椀(1・2)が南壁寄りに出土。カマド南袖部より約40cm南の東壁中より細長い鉄片2×8cmを出土した。**テフラ**　2層中に多量のFP、C軽石が混入していた。（木部）



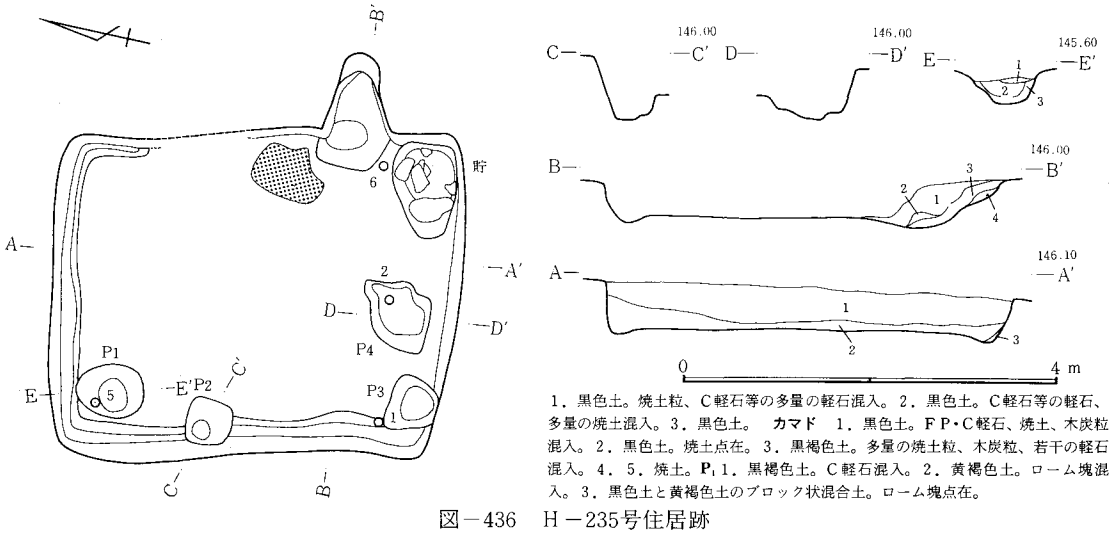
1．耕作土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。FP・C軽石多量に混入。3．黒褐色土。少量のFP・C軽石、ローム塊(φ1cm)、焼土粒混入。　**カマド**　1．黒色土主体。ローム粒・塊多量に混入。2．黒色土主体。部分的に焼土、白色粘土、少量のローム粒・塊混入。3．褐色土。下面は非常に赤く焼けている。4．黒灰色土、焼土塊、焼土粒含む。

図—434　H—234号住居跡



図—435　H—234号住居跡出土遺物

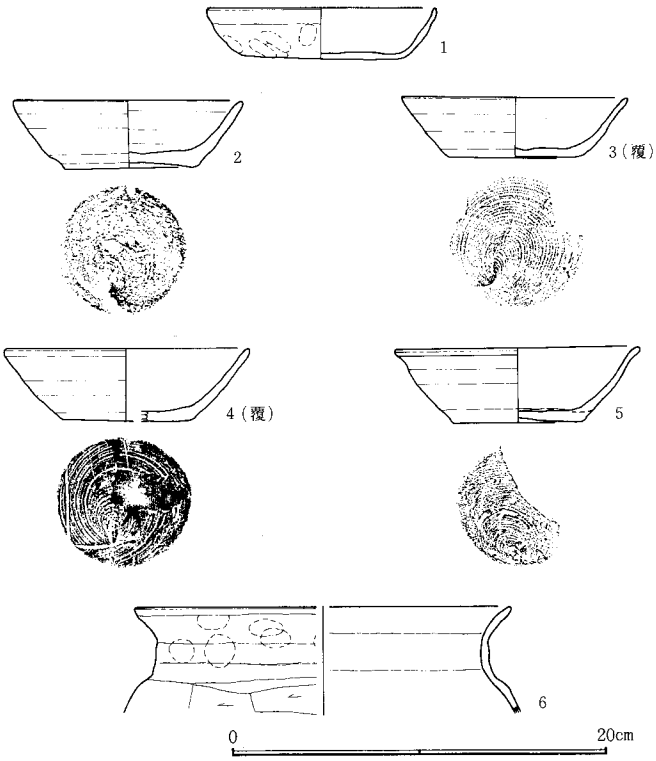
H235号住居跡（図—436、437　図版—27、106　表—217）（X期）



1．黒色土。焼土粒、C軽石等の多量の軽石混入。2．黒色土。C軽石等の軽石、多量の焼土混入。3．黒色土。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石、焼土、木炭粒混入。2．黒色土。焼土点在。3．黒褐色土。多量の焼土粒、木炭粒、若干の軽石混入。4．5．焼土。**P**1．黒褐色土。C軽石混入。2．黄褐色土。ローム塊混入。3．黒色土と黄褐色土のブロック状混合土。ローム塊点在。

図—436　H—235号住居跡

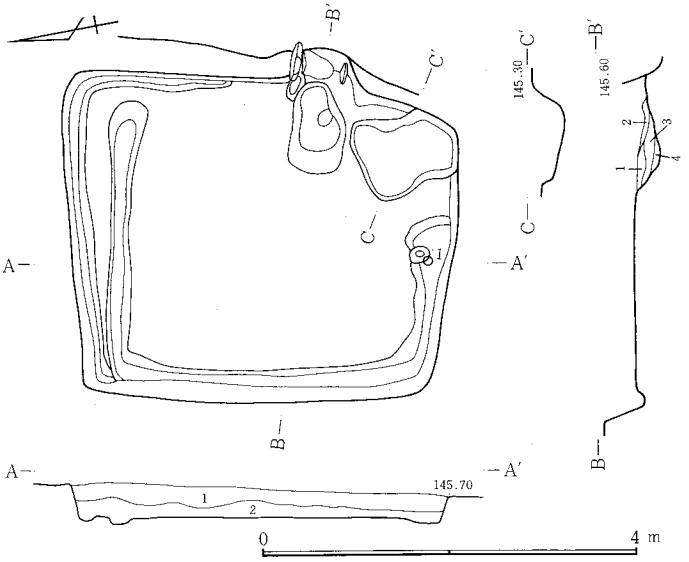
位置　西台地南のD－101に位置する。台地の南端に近く南東に小さな低地をのぞむ南東斜面に所在している。この南東斜面には時期は異なるが、多数の竪穴住居跡と掘立柱建物群が所在する。このような南に低地をのぞむ斜面に住居跡が集まる傾向は台地の他の場所にも見られる。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北4.1m、東西3.2mである。長軸方向はN－13°－Wで面積は13.2m²である。攪乱により形状に不明な部分がある。壁高は31～51cmを測る。北・西壁と東壁の北端に周溝をめぐらす。幅3～19cmで深さ2～12cmである。　**ピット**　床面4ヶ所。P_1は70×60cmで深さ37cm、P_2は48×48cmで深さ26cm、P_3は56×42cmで深さ18cm、P_4は76×60cmで深さ25cmである。P_1、P_3は住居柱穴とも考えられる。　**カマド**　東壁南寄り。全長140cm、燃焼部長74cm、袖部内幅70cm、壁への掘り込み角度47°、壁外掘り込み98cmである。燃焼部は床面にくらべて11cm低い。カマド手前左手に焼土面がある。約80×50cm。　**貯蔵穴**　南東隅。規模は94×68cmで深さ16cm。貯蔵穴上からは多くの石が検出されている。　**遺物**　カマド前より土師器甕(6)が、南西隅より土師器坏(1)が、P_1より須恵器坏(5)が、P_4より須恵器坏(2)が出土している。また埋土中より須恵器坏(3・4)が出土している。　**テフラ**　1層にはC軽石・FPを多く含む。　（井野）



図－437　H－235号住居跡出土遺物

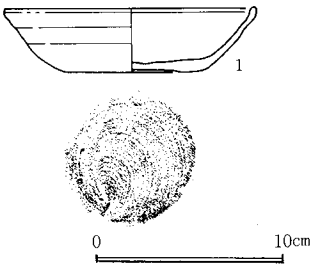
H236号住居跡（図—438、439　図版—27、106　表—218）（Ⅷ期）

位置　D102に位置する。　**形状**　南北3.9m、東西3.2mの長方形プランを持つ。面積は12.1m²で、西から東へ続く住居跡の一群の中では比較的小規模な部類に属する。壁高は現状で30～41cmを測り、カマドを除いたほとんど全面に周溝が巡らされている。南壁に沿った周溝は西では顕著に残るものの、東へ進むにつれて浅くなり、はっきりした掘り形を残さない。深さは最も顕著に残る西壁沿いでは9cmと比較的深く、北壁沿い、南壁沿いでは1～3cmと浅くなる傾向がある。尚、北壁沿いには二重に溝が走るが、内側に設けられた溝は、南壁走向、及び推定されるカマドの長軸方向の走向ともほぼ一致する様相が見られる。これらのことから、住居使用のある時点で、内側周溝に伴ったと考えられる北壁から現在確認される北壁まで拡張されたと推定することができそうである。概算では、1.7m²前後の拡張空間となる。長軸はN—14°—Eである。　**ピット**　南壁沿いの周溝が内側に向かって開き始めるあたりで確認される。楕円形を呈し、22×18cmで深さ11cmを測る。　**カマド**　東壁南寄りに設けられているが、燃焼部の一部と煙道部が攪乱によって欠けており、全体の規模は確認できない。現状からカマド全体を壁外へ造り出しており、左、右袖部には山石を用い、燃焼部中央に支石を据えていることがわかる。このカマドの造り方はH—200、H—212などを含む一群の住居に共通する要素である。　**遺物**　ピットに一部かかる形で完形の須恵器坏が出土している。　（田口）



1．黒褐色土。焼土、ローム塊多量混入。2．黒色土。FP・C軽石、焼土粒混。　**カマド**　1．黒色土。焼土、ローム粒含。2．黒褐色土。焼土、ローム塊多混。3．暗褐色土。白色粘土塊含。4．黒色土。ローム粒含。

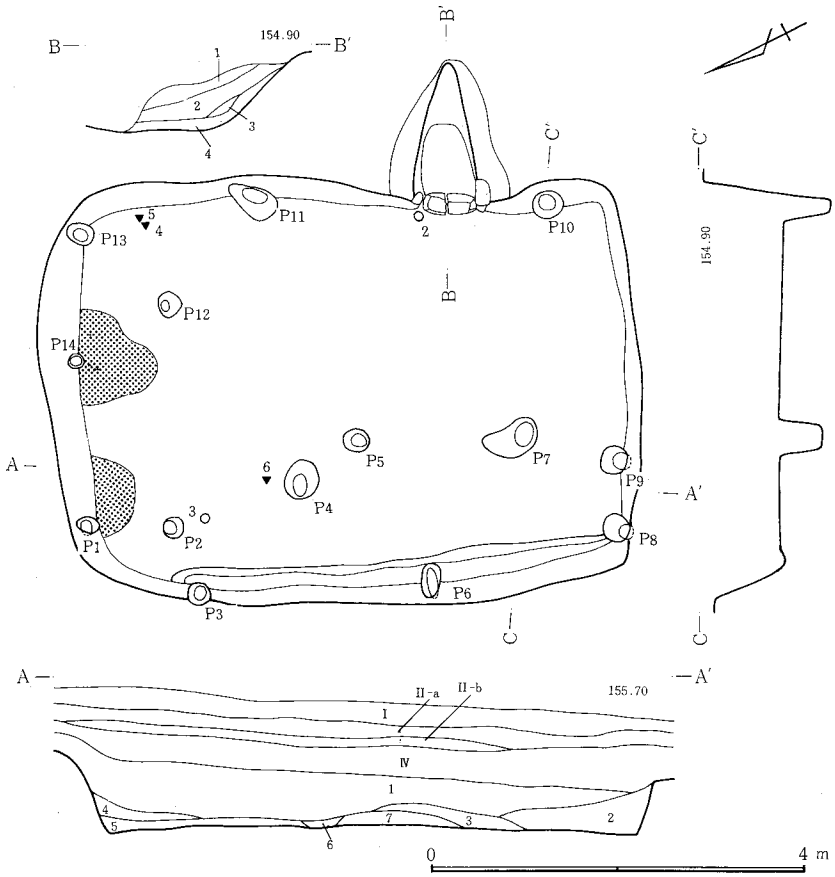
図－438　H－236号住居跡



図－439　H－236号住居跡出土遺物

H237号住居跡（図—440、441　図版—27、106　表—219）（Ⅸ期）

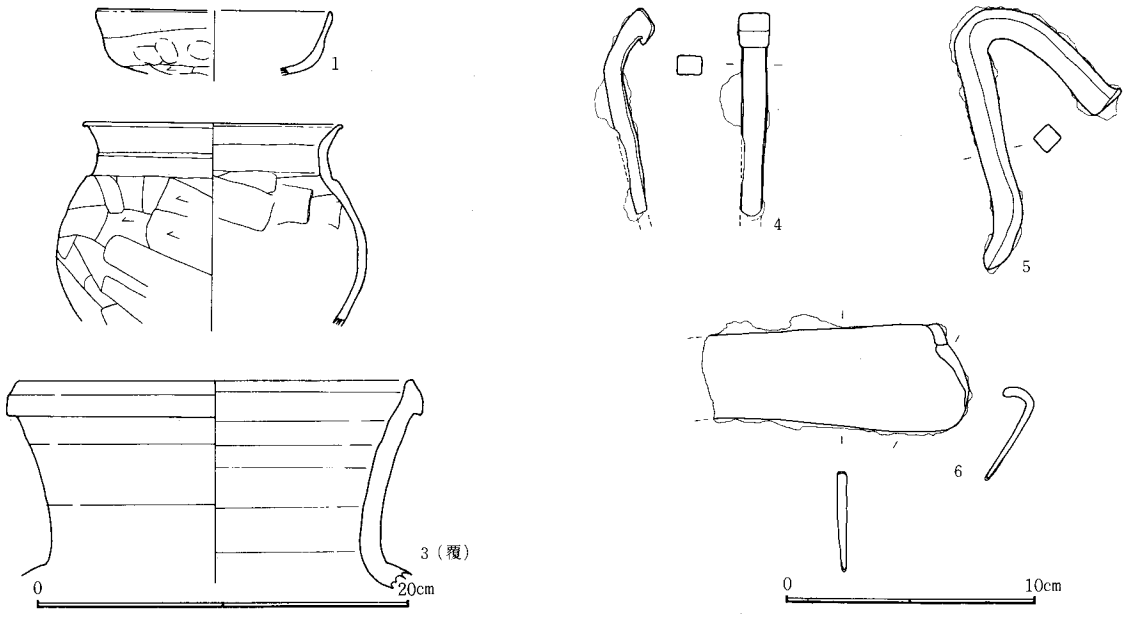
位置　西台地東端、ロ9に所在し、南北位置のほぼ中央に位置し、南にややなだらかに傾斜する所にある。　**形状**　北々東から南々西に長軸を持つ長方形で、南北5.8m、東西4.0mである。北東の隅がやや外側に突き出すように広がっている。長軸方向はN—26°—E、面積は22.8m²、壁高は50～80cmである。西壁下の南4分の3に周溝をめぐらす。幅4～23cmである。　**ピット**　北壁中に3、西壁中に2、南壁中に2、東壁中に2、合計9つのピットはいずれも壁中にあり、柱穴と推定されるが、他の住居跡のピットと比べ、位置的にみて特殊なものと言える。規模はP_1、23×18cm、深さ20cm。P_3、24×22cm、深さ20cm。P_6、38×20cm、



深さ23cm。P_8、28×28cm、深さ47cm。P_9、30×28cm、深さ不明。P_{10}、32×32cm、深さ50cm。P_{11}、64×24cm、深さ49cm。P_{13}、30×22cm、深さ20cm。P14、17×16cm、深さ16cmである。なお、他のピットの規模は、P_2、24×22cm、深さ25cm。P_4、40×35cm、深さ78cm。P_5、25×23cm、深さ25cm。P_7、60×33cm、深さ46cm。P_{12}、30×24cm、深さ28cmである。　**カマド**　東壁南寄り。石材を焚き口に1個、左袖に1個、右袖に2個使用している。全長166cm、袖部内幅50cm、燃焼部長98cm、壁への掘り込み角度46°で、壁外掘り込みは162cmである。燃焼部は床面と比べ約5cm低い。　**貯蔵穴**　なし　**遺物**　カマド内から台付の甕、北壁にかかって北側床面に広がった焼土範囲上に近接して須恵器甕(3)、P_{11}の北側の床面から鉄製品(4・5)、及び北西側に鎌(6)がそれぞれ出土している。　**テフラ**　II—b層にB軽石の純層がみられた。IV、1層にC、FP軽石が混入していた。　**重複関係**　J—42に重複して造られていた。　(木部)

1．茶褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．2に炭化物を加える。4．焼土塊。5．ロームと黒色土の混合土。6．炭化物。7．二次堆積ローム。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石混入。2．灰色土。白色粘土主体。焼土混入。3．白色粘土塊の焼土と炭化物の混合。4．灰の堆積。焼土塊混入。

図—440　H—237号住居跡

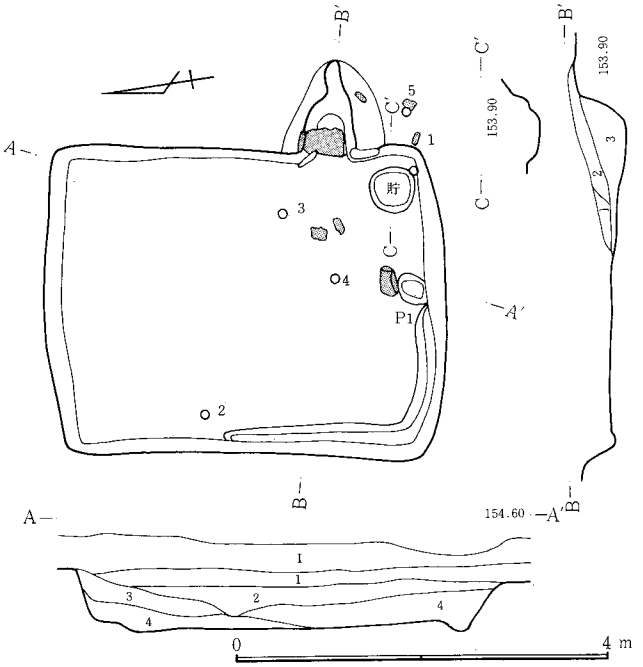


図—441　H—237号住居跡出土遺物

H238号住居跡（図—442、443　図版—27、106　表—220）（IX期）

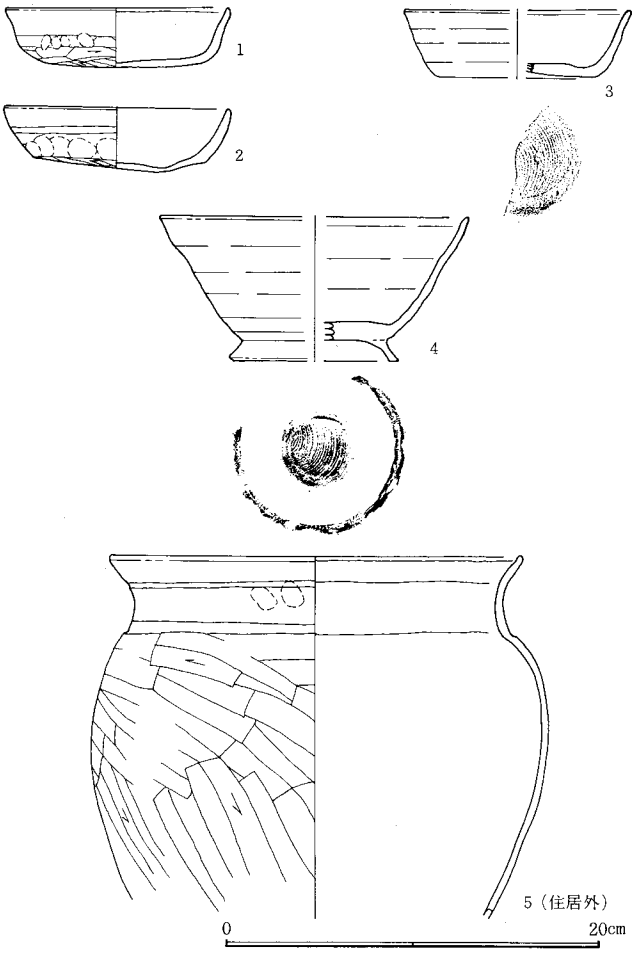
位置　西台地南東部のA7中央部に所在し、台地の東縁部に当る。　**形状**　南北方向が長く、南壁がやや歪んだ隅丸長方形で、東西3.0m・南北3.9mを測る。長軸方向はN—7.5°—E、面積は11.8m²である。西壁の中央から南壁にかけて、幅4～20cmの周溝がL字状に検出された。壁高は約50cmを確認している。　**ピット**　南壁中央部の壁際が若干窪んでいたが、他に明確なピットは検出されなかった。床面は地山層を強く踏み固めていた。　**カマド**　東壁の南隅から若干北寄りの位置に、板状の角礫と粘土を使用して構築されており、燃焼部は壁外にある。袖部内幅35cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度は64°、全長110cmである。燃焼部は床面よりも18cmほど窪んでおり、長期にわたって使用したと考えられる。また、カマドの手前にもカマドに使用したと思われる焼石が散乱していた。あるいは意図的に壊したものかも知れない。　**貯蔵穴**　南東隅52×48cmの隅丸方形で、深さは14cm

である。南側は6cmほど窪んでおり、二段になっていた。 **遺物** カマドの手前に集中して出土したが、量は少ない。土師器甕(5)はカマド南側の壁外から出土。あるいは棚状の施設があったものかも知れない。土師器坏(1・2)が貯蔵穴と西壁下より、カマド前より須恵器坏と埦(3・4)が出土。 (飯塚)



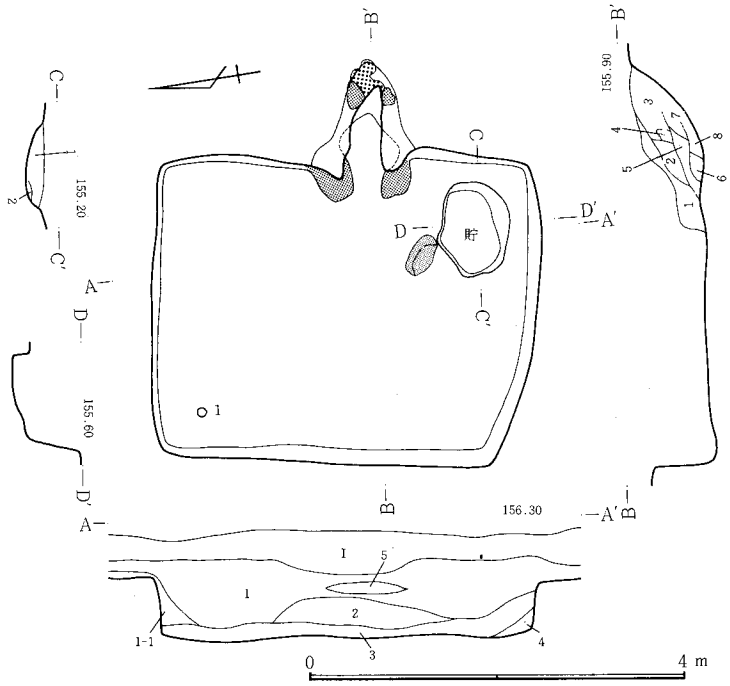
1．灰褐色土。FP・C、炭化物。2．褐色土。FP・C、ローム粒、少量の炭化物、焼土。3．2に類似。ローム粒多い。4．黒色土。ローム塊点在。 **カマド** 1．焼土。炭火物にFP・B。2．1より炭火物、焼土少。3．焼土。炭火物、灰混。

図－442 H－238号住居跡



図－443 H－238号住居跡出土遺物

H239号住居跡（図－444、445 図版－27、106 表－221）（IX期）

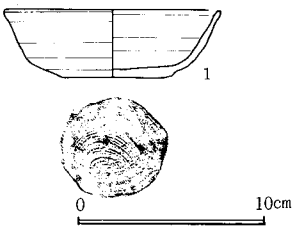


1．茶褐色土。ローム粒、FP・C軽石、炭化物、焼土粒が多量に混入。1-1．茶褐色土。FP・C軽石、少量混入。2．赤褐色土。多量のローム粒、灰、白色粘土、焼土粒、炭化物、わずかなFP・C軽石混入。3．ローム粒・塊と黒色土主体。炭化物、焼土粒、FP・C軽石少量混入。4．黒色土。FP・C軽石極少量混入。5．ローム塊・粒多量に混入。 **カマド** 1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、ローム粒、白色粘土、少量の炭化物、焼土粒混入。2．茶褐色土。FP・C軽石、焼土塊(φ2cm)混入。3．明褐色土。焼けたローム主体。少量の炭化物混入。4．白褐色。白色粘土主体。ローム粒、少量の焼土混入。5．茶褐色土。FP・C軽石混入。6．橙色土。白色粘土、ローム粒主体。焼土少量混入。7．あずき色土。焼けたローム主体。8．茶褐色土。ローム主体。焼土粒・塊、少量の炭化物混入。 **貯** 1．茶褐色土。ローム塊、白色粘土多量に混入。2．白色粘土。

図－444 H－239号住居跡

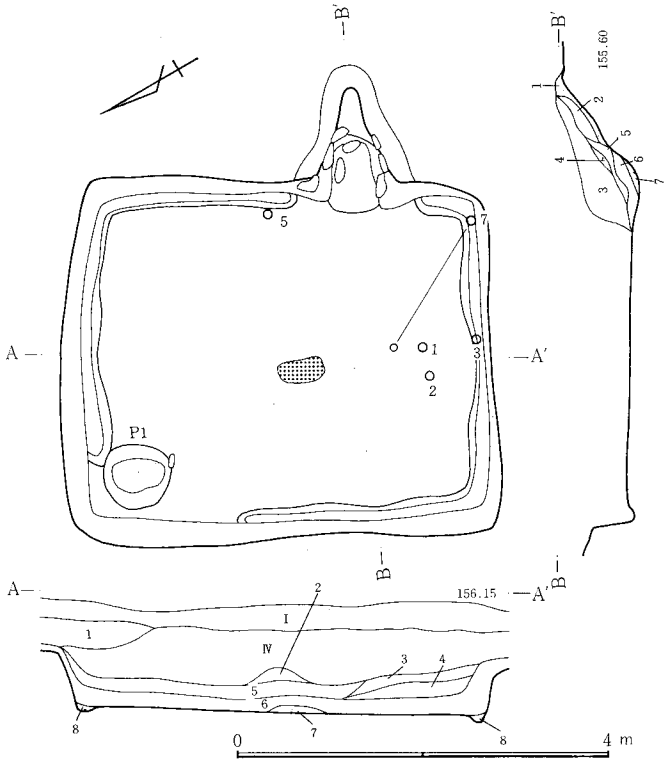
位置 イ9に所在する。調査地区14区の一大住居跡群に属し、東に位置する。40mほど東は谷となっている。 **形状** 南北3.9m、東西2.9mの長方形を呈する。長軸方向はN－9.5°－Eで面積11.7m²である。壁高は58～62cmを測る。周溝やピットは認められない。 **カマド** 東壁中央より南寄りに設置されている。壁外への掘り込みは92cm、全長146cm、燃焼部長92cm、袖部内幅30cmで袖部が住居内につき出している様子が観察できる。カマド内部や袖部周辺からは多量の白色粘土が出土しており、白色粘土を主体にした構築が想像できる。 **貯蔵穴** 南東隅にあって、長軸102cm、短軸70cm、深さ19cmの規模をもち、楕円形を呈している。貯蔵穴の覆土には、多量の白色粘土を認めることができる。

遺物 須恵器坏が北西隅近くの床面より出土している。またカマド前からは少し焼けている石(長軸45cm、短軸28cm)が認められている。 (中澤)



図－445 H－239号住居跡出土遺物

H240号住居跡（図—446、447　図版—27、106　表—222）（Ⅷ期）

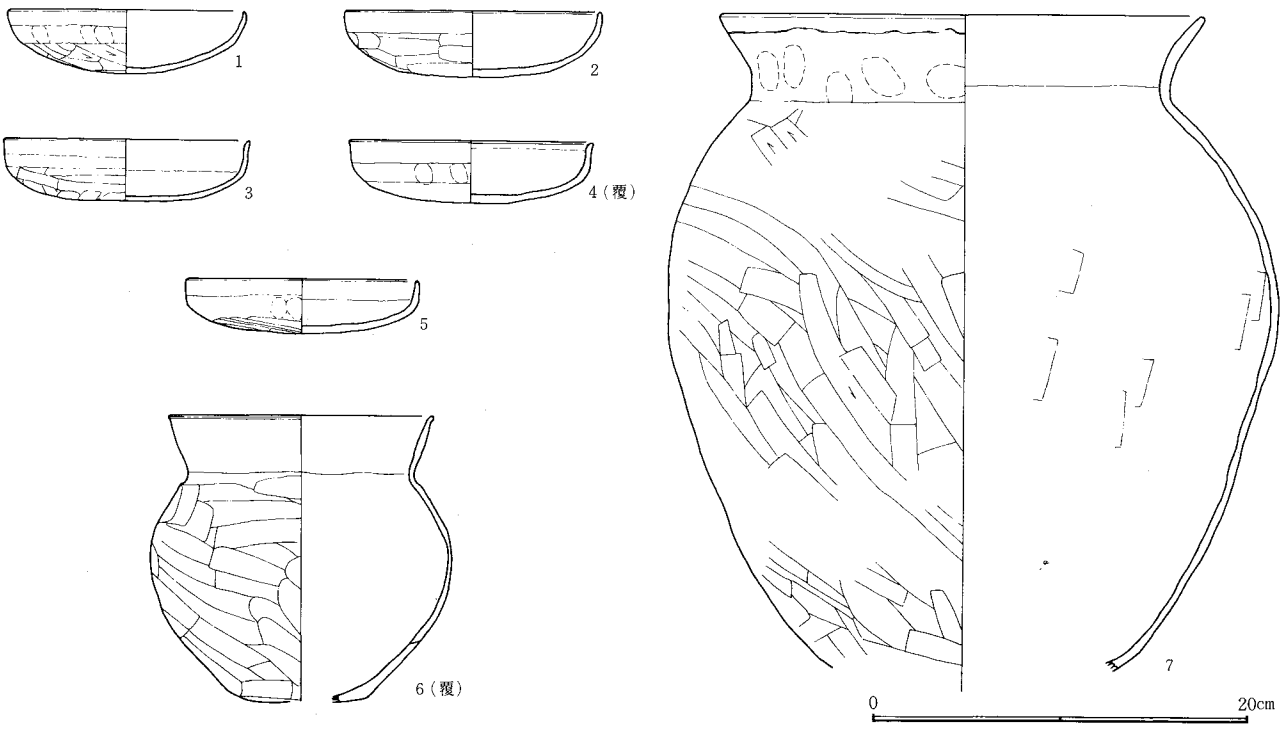


図—446　H—240住居跡

位置　西台地東端、ロ9に所在し、台地南北位置の中央付近にある。　**形状**　北々東から南々西に長軸を持つ長方形で、南北4.3m、東西3.5mである。長軸方向はN—27.5°—E、面積14.8m²である。周溝は北壁東4分の3、西壁南3分の2、南壁全部、東壁北2分の1にあり、幅2～25cm、深さ6～8cmである。　**ピット**　北西隅床面に1ヵ所ある。P_1の規模は70×68cm、深さ17cmであり、性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄り。全長160cm、袖部内幅54cm、燃焼部長64cm、壁への掘り込み角度42°、壁外掘り込みは、142cmである。両袖部に各1個ずつ石があり、燃焼部に4個の焼石が出土した。燃焼部は床面より約8cm下がる。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　土師器の甕、坏が出土した。　**テフラ**　1、5、6層にFP、C軽石が混入している。

（木部）

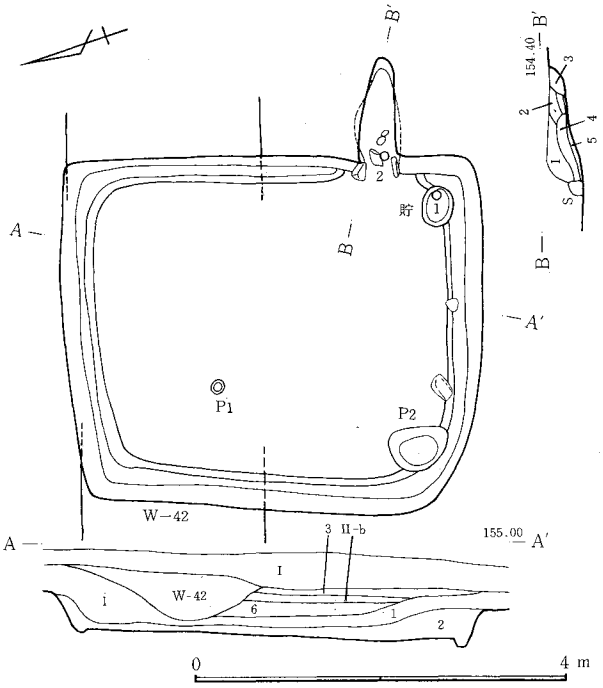
1．黒色土。少量のC軽石混入。2．黒褐色土。白色粘土点在。3．暗褐色土。小粒のローム混入。4．黒色土。ローム塊（φ1cm）混入。5．黒色土。FP・C軽石、ローム粒混入。6．茶褐色土。ローム塊（φ2cm）、FP軽石多量に混入。7．多量の粘土。8．褐色土。軟かい。　**カマド**　1．黄褐色土。2．焼土。3．茶褐色土。少量の焼土、部分的に粘土混入。4．焼土塊。5．黒色土。炭化物主体。6．焼土。7．炭化物・灰の堆積。



図—447　H—240号住居跡出土遺物

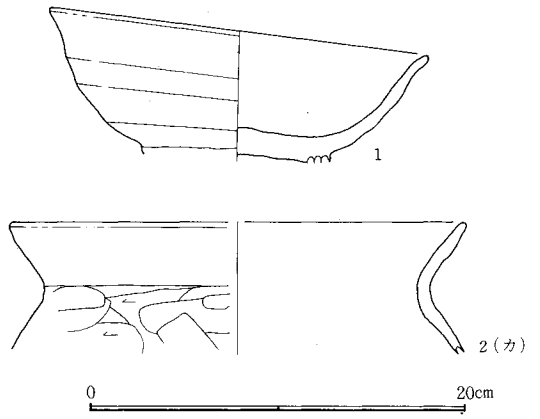
H241号住居跡（図—448、449　図版—28、106　表—223）（Ⅹ期）

位置　西台地東端中央部、イ—7・8に所在する。台地を区切る沢の西にあたる。　**形状**　北々西から南々東に長軸を持つ長方形で、南北4.1m、東西3.5mである。西壁は東壁にくらべて南にひろがりぎみになっている。また南北の壁も東にむかいややひろがりぎみである。長軸方向はN—20.5°—E、面積は14.2m²、壁高は28～40cmである。壁下全周に周溝をめぐらす。幅5～25cm、深さ9cmである。　**ピット**　床面に1ヵ所（P_1）、南壁にかかって（P_2）がある。P_1、P_2ともに性格は不明である。P_1は14×14cmで深さ24cm、P_2は62×48cmで深さ48cmである。　**カマド**　東壁南寄り。構築材が右袖1、左袖1、焚き口1、支石2の5石のこっていた。全長127cm、袖部内幅32cm、燃焼部長46cm、壁への掘り込み角度13°、壁外掘り込み122cmである。燃焼部と床面のレベル差はない。　**貯蔵穴**　南東隅、楕円形で、43×30cmで深さ19cmである。　**遺物**　カマド内より土師器甕(2)が、貯蔵穴内より須恵



図−448　H−241号住居跡

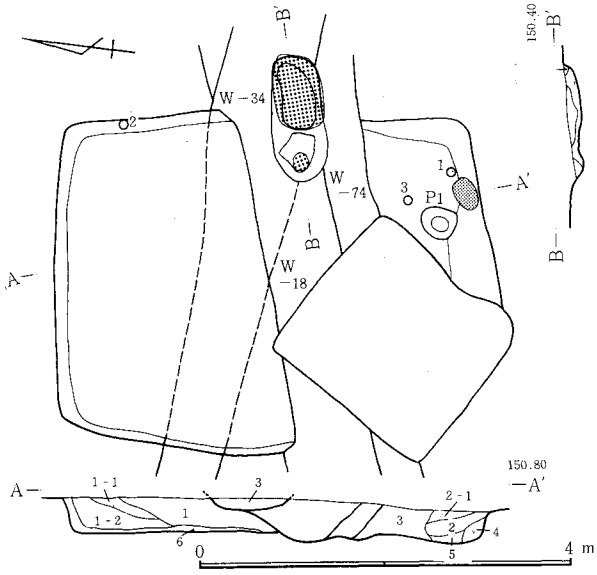
器埦(1)が出土している。　**テフラ**　II−b層がB軽石の純層である。床面からは32cmである。　**重複関係**　W−42と重複しているが、W−42が新しい。　(井野)



図−449　H−241号住居跡出土遺物

1．黒色土。多量のFP・C軽石、若干のローム粒混入。2．黒色土主体。多量のローム塊混入。3．薄青色土。火山灰。4．黒色土。多量のFP軽石混入。
カマド　1．黒色土主体。FP・C軽石混入。2．明赤色土。焼土塊混入。3．1に似た土層 4．淡赤橙色土。焼土粒主体。5．灰。

H242号住居跡（図−450、451　図版−28、107　表−224）(IX期)

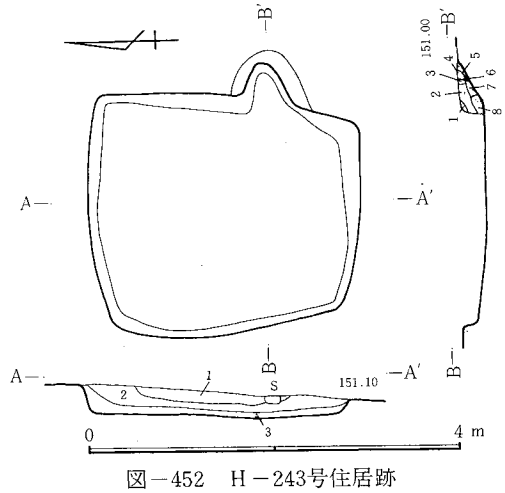


図−450　H−242号住居跡

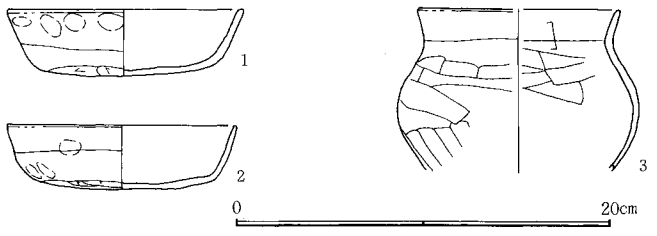
1．暗褐色土。FP・C軽石、ローム塊、ローム粒、焼土粒混入。1-1．暗褐色土。1-2．暗褐色土塊が1-1より少い。2．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊(φ1cm)、焼土粒混入。2-1．黒褐色土。焼土少し含む。3．暗褐色土。FP・C軽石、ローム粒、焼土粒混入。4．暗褐色土。白色粘土塊混入。5．暗褐色土。FP・C軽石、ローム塊、焼土粒混入。6．黒褐色土。　**カマド**　1．にぶい黒褐色土。焼土粒、灰、木炭粒多量に点在。2．ローム塊・黒色土塊の混合土。焼土粒点在。貼床形成層。

位置　G2・3、F2・3　**形状**　長軸をN−5.5°−Wにとる。やや平行四辺形気味の住居跡。東壁はカマドを境にして南側が40〜50cm内側に入る。西壁南半はW18・74・34号溝により、南壁西半は調査グリットにより破壊される。南東隅の床面は南側にやや張り出す。この部分では南壁に接して白色粘土の大塊が出土した。床面積13.4m²(推定)。　**床面**　西壁沿いに幅100〜160cm、厚さ15cm前後の貼り床が認められた。(溝重複部分不明)。南東隅付近も貼床となる。　**ピット**　南東隅張り出し部に接するP_1は貯蔵穴とも見られる。深さ約60cm。　**カマド**　重複する溝により破壊され、燃焼部と掘り形を残す。長さ約140cm、深さ25cm前後の細長い掘り形全体に厚さ10cm前後の貼床を施し、その東側約80cm分を火床としていた(この部分が焼土化していた)。燃焼部は当初は住居床面とほぼ同じに計画か。　**遺物**　(1)小破片接合。床面から＋15cm。(2)東壁に貼り付くように出土。同＋15cm。(3)床面、又は貼床中か。　**重複関係**　土層よりH−242→W−74→W−18→W−34。　(唐澤裕)

H243号住居跡（図−452　図版−28）　[VIII期]



図−452　H−243号住居跡

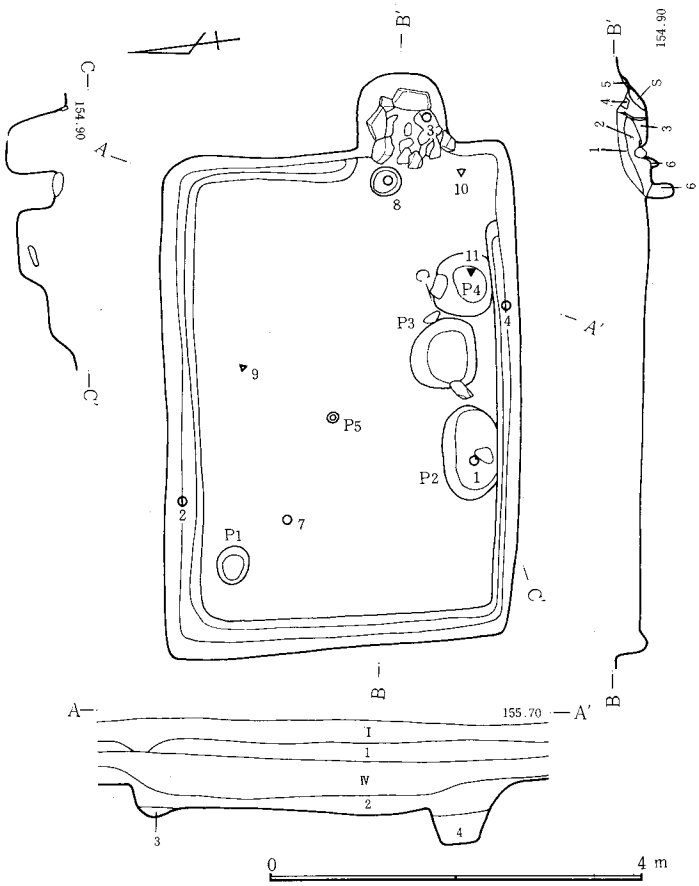


図−451　H−242号住居跡出土遺物

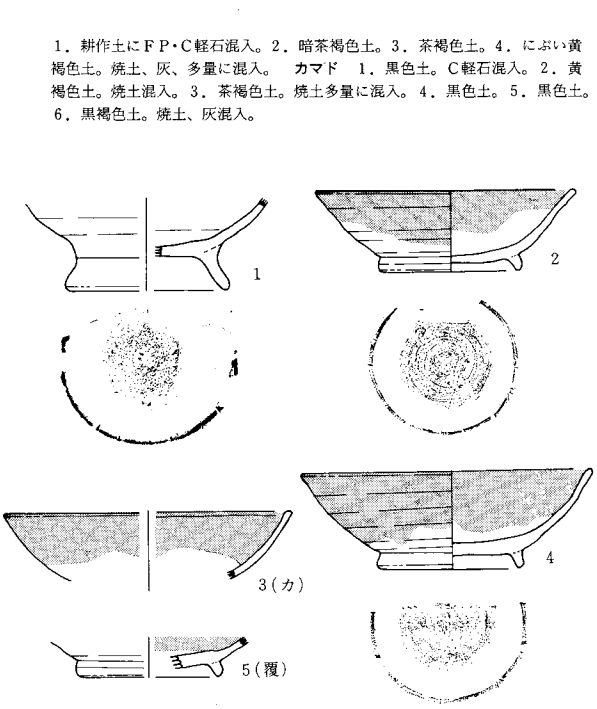
1．褐色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。C軽石主体。FP軽石、ローム粒混入。3．黒褐色土。ローム塊、C軽石混入。　**カマド**　1．暗褐色土。焼土塊若干混入。2．黒褐色土。焼土塊、白色粘土(φ1cm)混入。3．黒色土。焼土粒わずかに混入。4．黄褐色土と黒色土の混合。5．黄褐色土。6．4に類似。7．黄褐色土。ローム粒下部に若干混入。8．黄褐色土。7より若干黒味が強い。

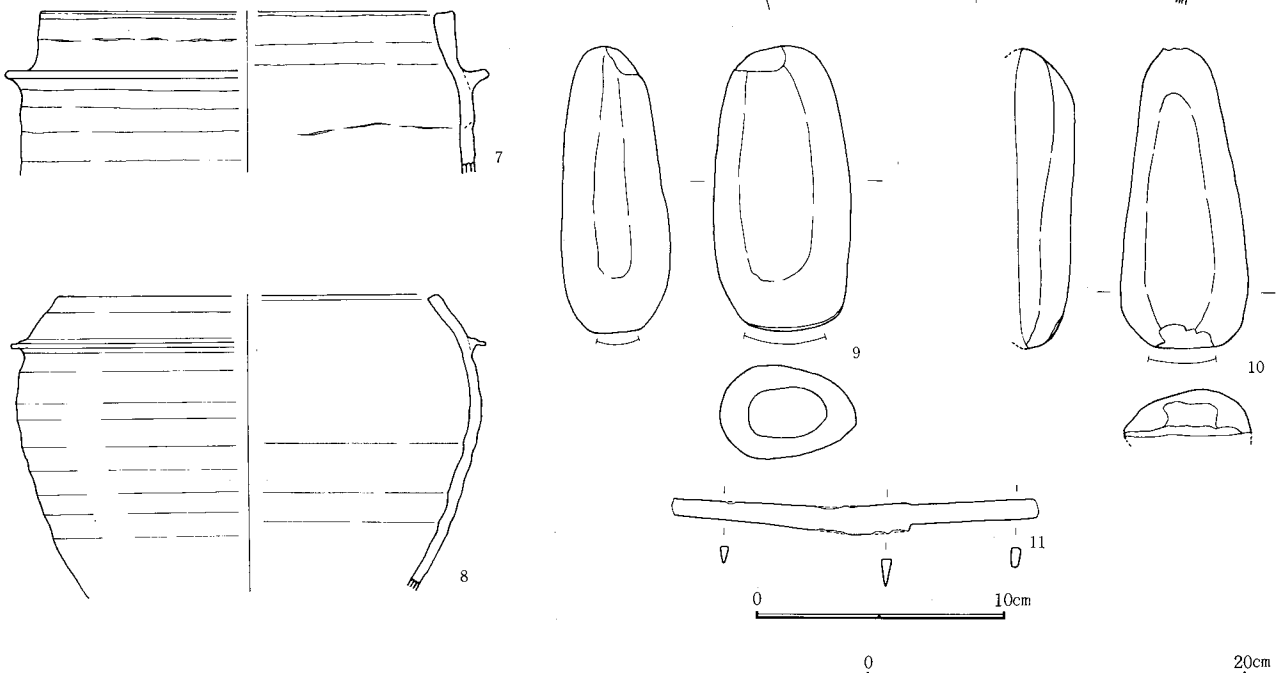
位置　Ｆ３に位置し、南に南西から北東に走る溝が隣接する。　**形状**　南北2.7m、東西2.3mで、面積5.8㎡を測る。南西隅と北東隅は角を意識しているようであるが、北西隅は丸を呈し、その分だけ若干外側にはらむ傾向がある。従って、プランは南から北へ向かって開く台形状を呈する。　**周溝**　確認されていない。　**カマド**　東壁南寄りに設けられている。全長74cm、燃焼部52cm、袖部内幅40cmを測る。壁への掘り込み角度は30度と比較的緩やかな傾斜である。支石など特別な造作は見られない。　**遺物**　遺構自体、非常に大ざっぱな造りを思わせているが、遺物の面でもほとんど出土を見なかった。　（田口）

Ｈ244号住居跡（図―453、454　図版―28、107　表―225）（XIII期）



図－453　Ｈ－244号住居跡





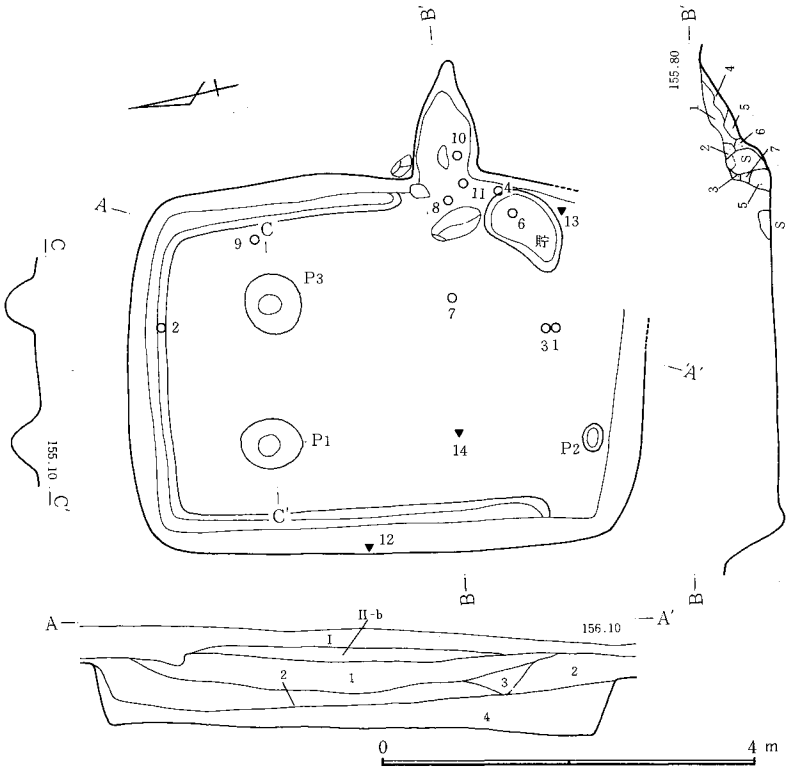
図－454　Ｈ－244号住居跡出土遺物

位置　調査区東端、南北位置のほぼ中央イ９に所在し、南にゆるやかに傾斜する所にある。　**形状**　ほぼ東西に長軸を持つ長方形で、南北3.5m、東西5.0mである。長軸方向はN—97.5°—E、面積17.6m²、壁高24～36cmである。カマドから南側の東壁下及び南壁下東５分の１を除いて全ての壁下に周溝を巡らす。幅４～37cm、深さ10cmである。　**ピット**　北西の隅にP_1、南壁に沿うような形でP_2、P_3、P_4がある。規模はP_1、37×31cm、深さ不明。P_2、95×49cm、深さ38cm。P_3、75×67cm、深さ52cm。P_4、68×62cm、深さ39cm。P_5、12×10cm、深さ48cmである。P_2の埋土は軽石を含まず、黒色土に焼土を含む。やわらかく粘性がある。P_3の埋土は軽石を含まず、ローム混じりの黒色土、穴の上の面は焼土を含む土がおおっていたが、内部には焼土はほとんど見られない。P_4の埋土は軽石を含まず、焼土と灰を多量に含み、やわらかく粘性がある白色を帯びた黄土であった。なお、住居跡のほぼ中央部に８×８cmの小穴がある。　**カマド**　東壁南寄り、両袖に各１個、焚き口に６個、燃焼部に４個、煙道部に２個の石材が見られ、いずれも焼けて赤化していた。全長94cm、袖部内幅64cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度34°、壁外掘り込み94cmである。燃焼部と床面とはほぼ同じ高さである。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　周溝内から灰釉陶器（２・４）、カマド内より羽釜(8)、磨製石器(9)、鉄製品刀子(11)などが出土している。　**テフラ**　Ⅰ・Ⅳ層にＦＰ、Ｃ軽石を含む。　（木部）

H245号住居跡（図—455、456、457　図版—28、107　表—226）（XIV期）

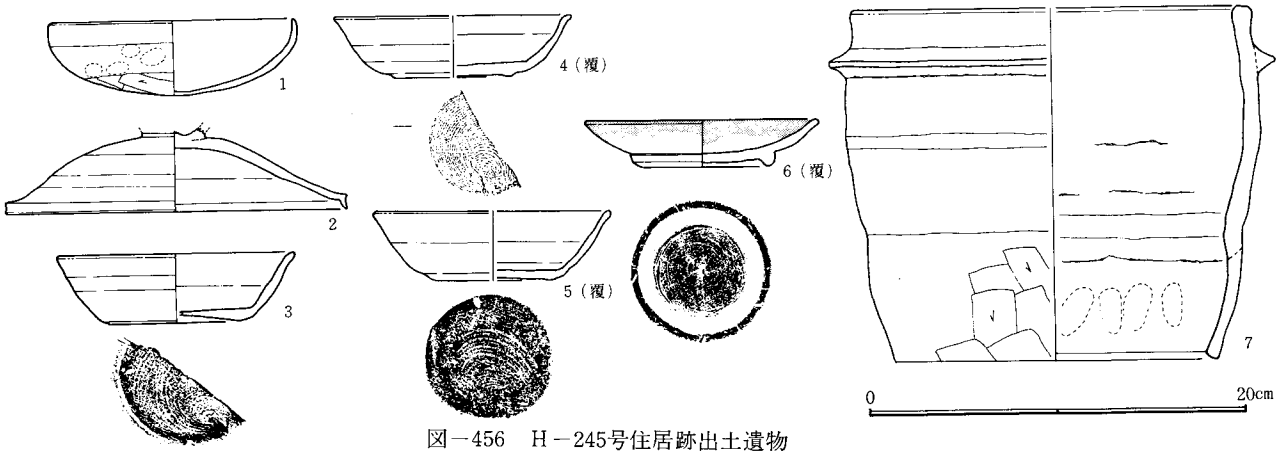
位置　ロ９に所在する。　**形状**　南北5.0m、東西3.4mの長方形を呈し、長軸方向はN—10°—E、面積は16.9m²である。南東隅は重複のため壁が明確に検出されなかった。壁高23～49cm、周溝は東壁のカマド北側から北壁、西壁にかけて認められる。南東隅の隅丸部分にも一部認められる。幅７～20cm、深さ５～13cm。　**ピット**　３個認められた。P_1（長径65cm、短径53cm、深さ28cm）とP_3（62cm、62cm、32cm）は覆屋を支える柱穴とも考えられるが、P_1、P_3に対応して南壁近くには柱穴が確認できない。なおP_2（33cm、21cm、40cm）については性格は不明。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄りに設置されている。石を構築材として使用し、左の袖部に使った石１個、支石１個などが見つかっている。カマドの規模は全長146cm、燃焼部長56cm、袖部内幅46cm、壁への掘り込みの角度33°、住居床面と燃焼部の比高差は＋15cmで床面の方が低くなっている。　**貯蔵穴**　東壁南端寄り。規模は長軸92cm、短軸54cm、深さ19cmである。　**遺物**　北壁下の周溝より須恵器蓋（完形）、カマド内より羽釜破片が出土している。また、貯蔵穴周辺からは刀子、西壁近くの床面からは鉄製品が出土している。本住居跡の西壁上端からは鉄製紡錘車も出土している。遺物で見る限り、本住居跡は羽釜と鉄製品を多く出土していることが特徴といえよう。

重複関係　Ｊ—46が本住居跡の南端で重複している。土坑と重複、地層により土坑が新しい。　（中澤）

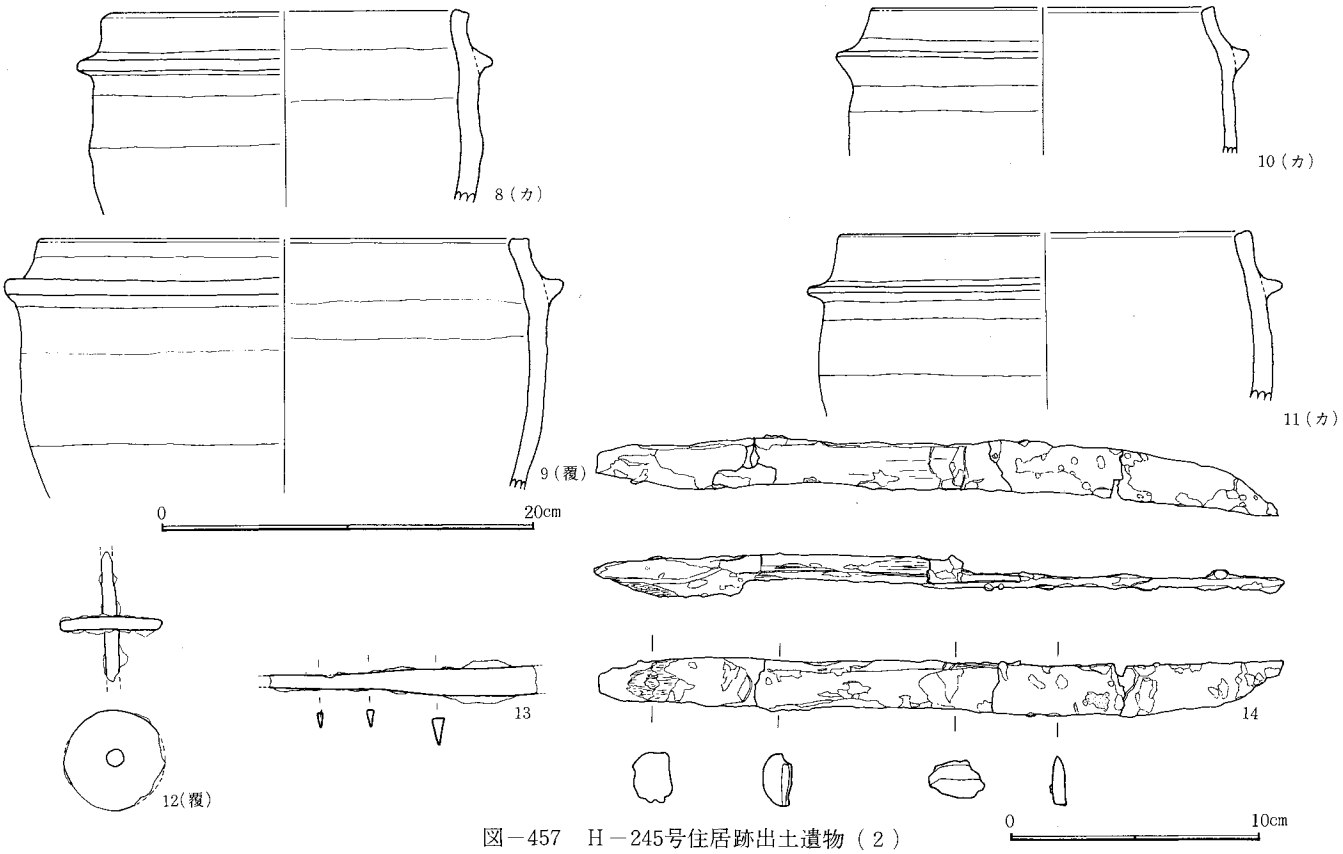


1．黒色土、ＦＰ・Ｃ軽石、焼土粒混入。2．黒色土。ローム粒、ＦＰ・Ｃ軽石、焼土粒、炭化物混入。3．暗茶褐色土。焼土粒、ＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。4．赤褐色土。焼土粒、ローム粒、ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊混入。　**カマド**　1．茶褐色土。ローム主体。焼土粒、ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．焼土塊。3．茶褐色土。ローム粒主体。多量のＣ軽石混入。4．暗茶褐色土。ローム粒主体。焼土少量混入。5．赤茶褐色土。6．黒色土。ローム粒、多量の焼土、わずかな灰混入。7．黒色土。焼土粒、炭化物わずかに混入。8．にぶい赤茶褐色土。焼けたローム粒主体。焼土粒・塊、ＦＰ軽石、灰混入。

図—455　Ｈ—245号住居跡

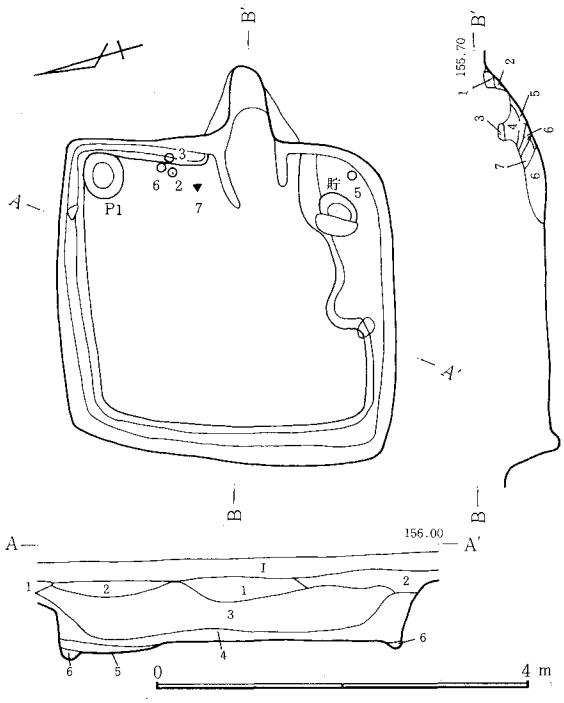


図—456　Ｈ—245号住居跡出土遺物



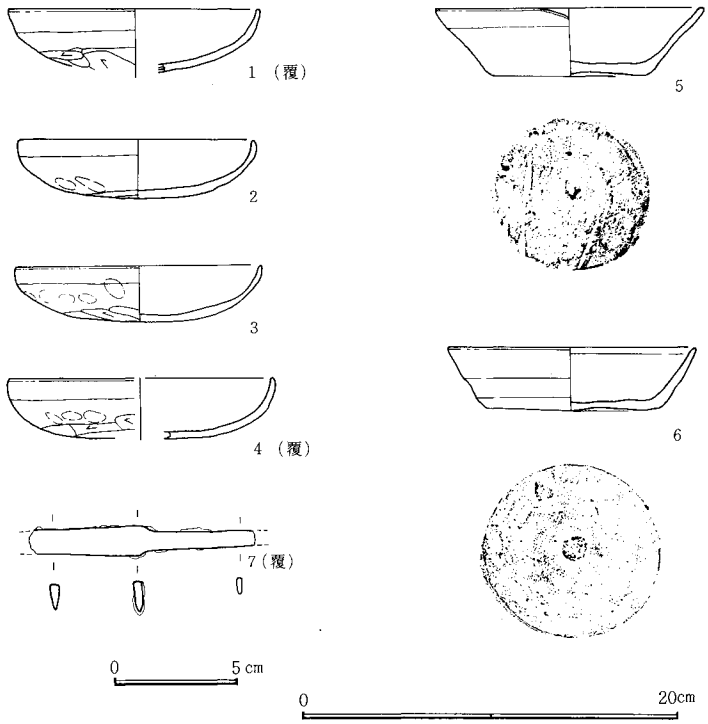
図－457　H－245号住居跡出土遺物（２）

H246号住居跡（図－458、459　図版－28、108　表－227）（VI期）



1．攪乱。2．茶褐色土。ローム粒主体。多量のＦＰ・Ｃ軽石、炭化物、少量の焼土粒混入。3．褐色土。ローム粒主体。微量のＦＰ・Ｃ軽石混入。4．黒色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。5．桃色土。焼けたローム主体。灰、焼土粒、炭化物、少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。6．黒色土とロームの混合。　**カマド**　1．赤茶褐色土。焼けたローム主体。2．焼けたローム。3．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。4．黒色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。5．焼けたロームと黒色土主体。焼土粒・塊混入。6．焼けたローム・焼土粒・塊の混合土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、下部に灰混入。7．灰、焼けたローム主体。多量の焼土粒混入。

図－458　H－246号住居跡

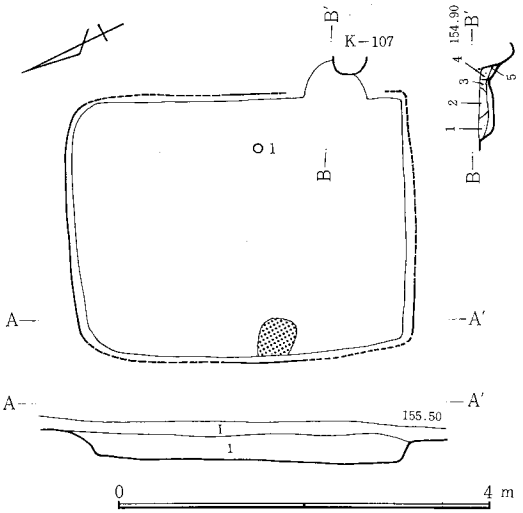


図－459　H－246号住居跡出土遺物

位置　西台地南東端のロ９に所在する。台地を区切る沢の西で東への緩斜面上に所在する。　**形状**　北々西から南々東に長軸をもつ方形で、南北3.4m、東西3.1mである。東西壁と南北壁はそれぞれ平行で、平行四辺形に近い形をしている。長軸方向はＮ－18.5°－Ｅ、面積は10.1㎡、壁高39～73cmである。東壁下の２分の１を除く全周に周溝をめぐらす。幅は７～24cm、深さ５～９cmである。　**ピット**　床面１ヵ所（P_1）。P_1は規模が46×41cmで深さ19cmである。P_1は住居の北西隅にあるが、住居との関係は不明である。　**カマド**　東

壁中央。壁を方形に掘りこんだあとに、袖部・燃焼部・煙道を造り出している。全長148cm。袖部内幅46cm、燃焼部長104cm、壁への掘り込み角度36°、壁外掘り込みは92cmである。燃焼部は床面と同じ高さである。 **貯蔵穴** 南東隅。楕円形で、規模は45×32cmで深さは58cmである。 **遺物** カマド左の周溝上より、土師器坏（2・3）と須恵器坏（6）がすべり落ちてきて途中で止まったような状態で出土している。カマド左で手前の床面より24cmの地点より鉄製品（7）が、貯蔵穴東の東壁下より須恵器坏（5）が、埋土中より土師器坏（1・4）が出土している。 **重複関係** 本遺構はJ－48と重複している。 （井野）

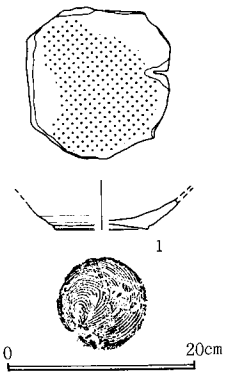
H247号住居跡（図－460、461 図版－28、108 表－228）（IX期）



1．黒褐色土。FP・C軽石混入。 **カマド** 1．黒褐色土と暗褐色土。焼土、炭化物混入。2．焼土に暗褐色土と褐色土混入。3．暗褐色土に焼土少量混入。4．黒褐色土。少量のローム塊、焼土混入。5．暗褐色土。多量の軽石混入。6．暗褐色土。焼土少量混入。

図－460 H－247号住居跡

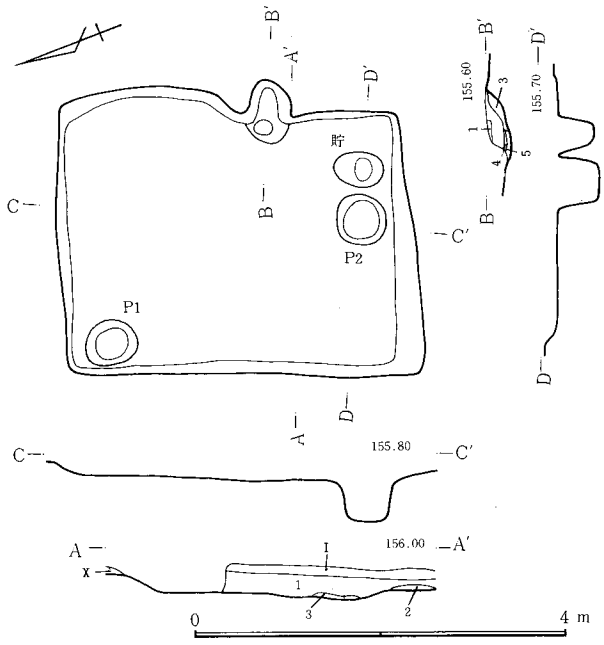
位置 西台地南東端区切る沢の西にあたり、東緩斜面上にある。 **形状** 住居の上部は、カマ掘りによる削平をうけている。北々面から南々東に長軸をもつ長方形である。南北は3.5mで、東西は2.7mである。面積は9.5m²で壁高は23～31cmである。長軸方向はN－23.5°－Eである。 **カマド** K－107のP_{10}と重複しており、そのために破壊をうけ、明らかでない点が多い。東壁南寄り、全長41cm。燃焼部は床面より10cm低いと推定される。 **遺物** カマド前の左より須恵器坏（1）が出土している。 **重複関係** K－107と重複している。K－107のピットによりH－247のカマドが破壊されていることによりH－247が旧い。 （井野）



図－461 H－247号住居跡出土遺物

H248号住居跡（図－462 図版－28） （XIII期）

位置 西台地南東端、ハ9に所在し、東の谷に近い所にあり、南になだらかに傾斜する所となっている。 **形状** 北々東から南々西に長軸を持つ長方形で、南北3.5m、東西2.5mである。カマドより北及び南の東壁は東側にやや湾曲して張り出している。長軸方向はN－23.5°－E面積は9.3m²、壁高14～22cmである。周溝はない。 **ピット** 北西の隅及び南壁側中央東寄りに、貯蔵穴と同じ位の大きさのP_1、P_2がある。規模はP_1が51×49cm、深さ33cm、P_2が53×47cm、深さ44cmである。両者とも性格は不明である。 **カマド** 東壁やや南寄りに付設される。全長50cm、袖部内幅36cm、燃焼部長40cm、壁への掘り込み角度50°で、壁外掘り込みは50cmである。燃焼部は床面より約15cm低い。 **貯蔵穴** 南東隅にあり、ほぼ楕円形をしている。規模は54×40cm、深さ33cmである。 **遺物** 床面上からの出土はみないが、P_2及び貯蔵穴の埋土中から土師器の破片が数点出土している。 **テフラ** 1層にFP、C軽石の混入をみた。 （木部）

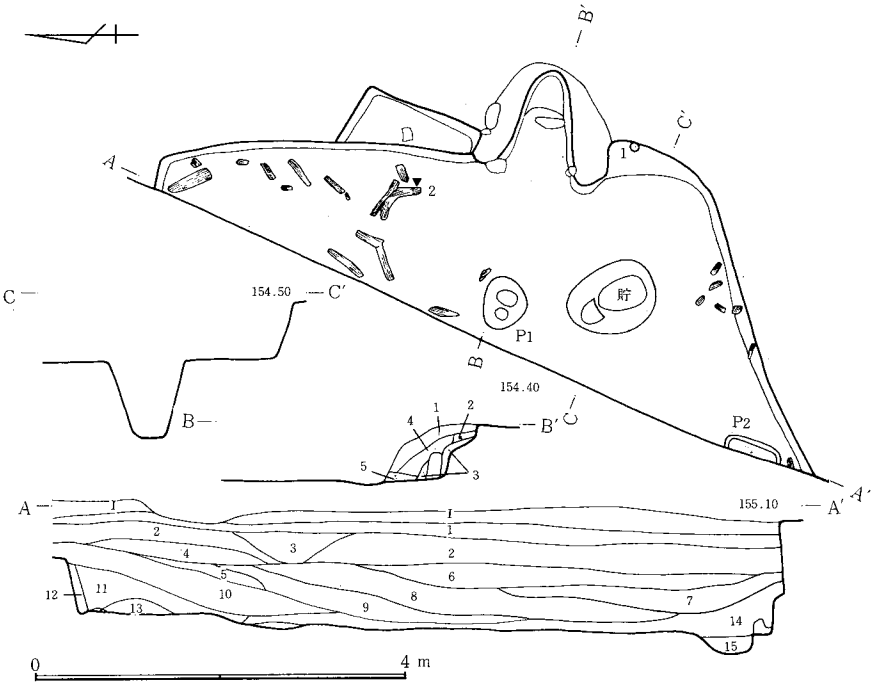


1．黒色土。FP・C軽石、部分的に焼土混入。2．黒褐色土。3．黒褐色土。焼土混入。 **カマド** 1．黒色土。ローム塊（φ3cm）混入。2．暗黄褐色土。ローム塊、焼土塊混入。3．暗灰黄色土。4．黒色土。焼土塊混入。5．暗黄褐色土。焼土塊混入。

図－462 H－248号住居跡

H249号住居跡（図－463、464 図版－29、108 表－229）（VII期）

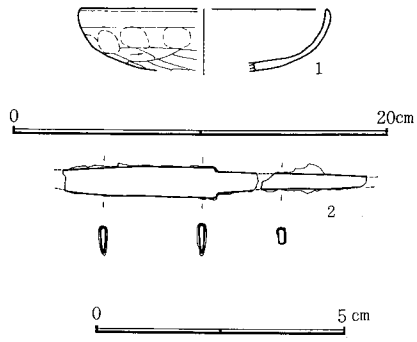
位置 西台地南東部のB7北東隅に所在し、台地の南東緩傾斜地に当る。 **形状** 道路によって西側の大部分を掘り取られてしまっているため、平面形不詳。東西は1.6m以上、南北5.9mの大きさになる。長軸方向はN－2.5°－Eで、10.1m²の床面を確認した。床面には炭化材が残っており、焼失家屋であることは明らかだが、上屋構造を知るような資料は得られなかった。現壁高は約60cmで、東辺のほぼ中央にはカマドに接して、床面から約30cm上位に120×30cmの棚状の施設が認められた。 **ピット** P_1は



1．黒色砂質土。FP・B軽石混入。2．黄褐色土。FP・B・C軽石、焼土、炭化物、ローム粒混入。3．灰褐色砂質土。4．黄褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物、ローム塊(0.5～3cm)混入。5．茶褐色土。FP・C・B軽石、焼土、ローム粒混入。6．5と類似。7．4と類似。4よりやや褐色土に近い。8．黄白色土。ローム粒・塊主体。FP・C軽石混入の黒色土点在。9．8と類似で軽石を含む黒色土塊多量混入。10．暗褐色土。FP・C軽石、ローム粒、焼土、炭化物混入。11．黒色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。12．茶褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。13．二次堆積ローム。14．暗褐色土。FP・C軽石少量混入。15．灰白色粘質土。焼土、炭化物、ローム粒、少量のFP・C軽石混入。　**カマド**　1．褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。2．赤褐色土。焼土混入。3．淡赤褐色土。焼土主体。灰、炭化物混入。4．灰褐色土。焼土、灰、炭化物、粘土混入。5．赤褐色粒。

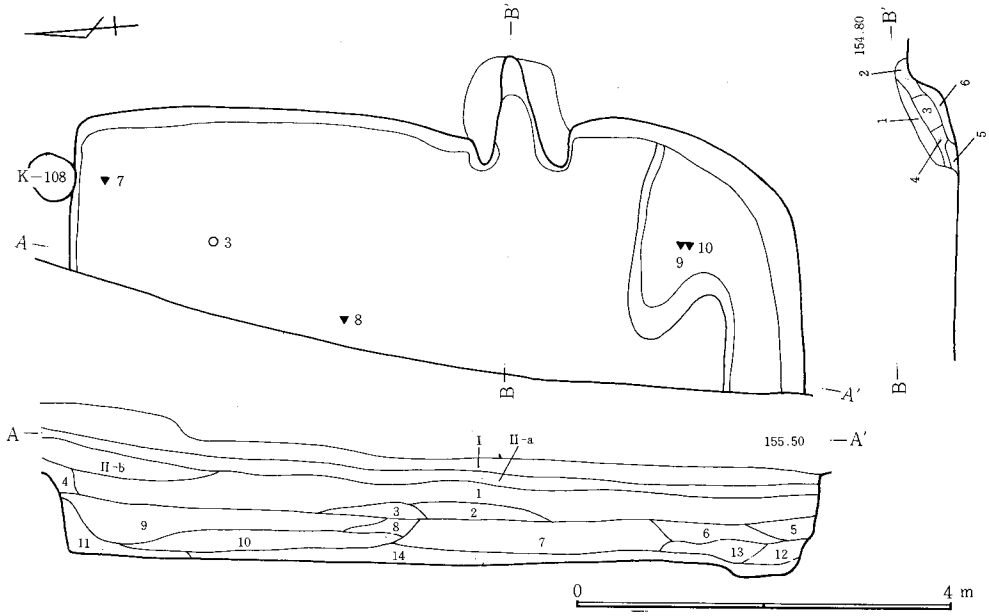
図－463　H－249号住居跡

54×40cm、深さ18cmの不整形。P_2は60×12cm以上、深さ24cmの隅丸方形を呈するが、共に性格不明。　**カマド**　東辺の中央やや南寄りの位置に角礫と粘土を使用して構築されており、燃焼部は壁外にある。袖部内幅70cm、燃焼部長58cmで、壁への掘り込み角度は76°、全長140cmである。燃焼部は床面よりも2cm高く、中央部には支石に使用したと考えられる角礫が残っていた。　**貯蔵穴**　南東隅から1mほどの中央寄り。95×70cm、深さ86cmの不整円形。　**遺物**　図示したものの他に土師器坏、甕等が出土した。　(飯塚)



図－464　H－249号住居跡出土遺物

H250号住居跡（図－465、466　図版－29、108　表－230）（IX期）

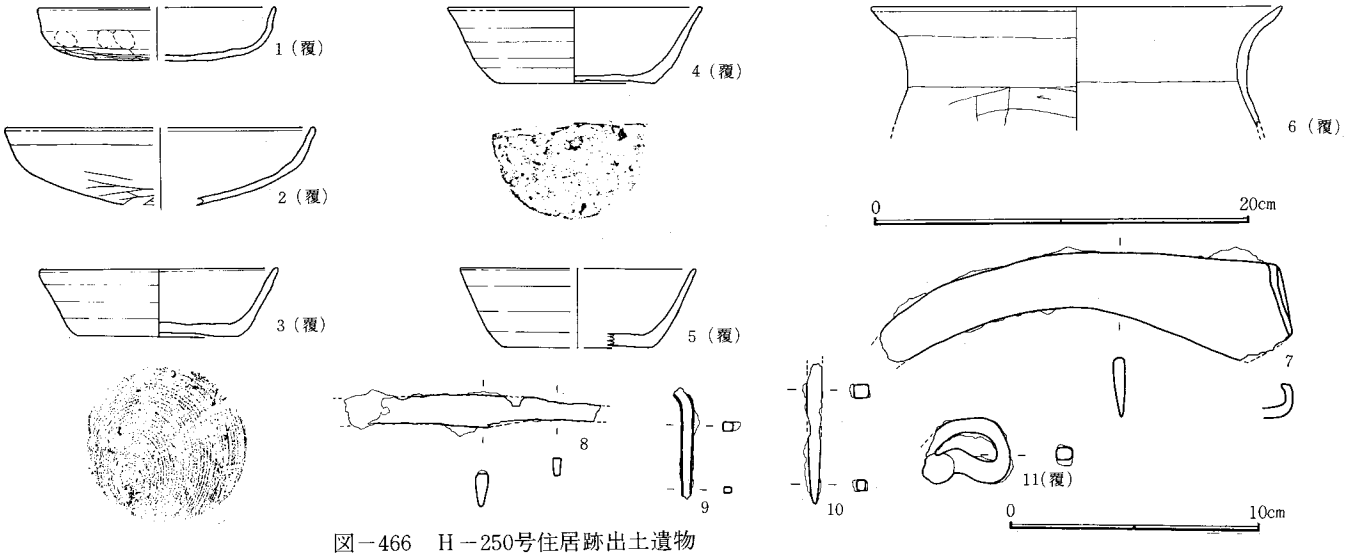


1．茶褐色土。FP・C・B軽石、ローム粒混入。2．赤褐色土。ローム粒、FP・C・B軽石、炭化物、少量の焼土混入。3．赤褐色土。ローム粒、FP・C・B軽石、焼土、炭化物混入。4．暗褐色土。比かく的しまる。FP・C・B軽石、ローム粒、焼土粒、炭化物混入。5．黄白色土。FP・C軽石、焼土、炭化物、ローム粒混入。6．黄褐色土。FP・C軽石、ローム塊、焼土、炭化物混入。7．6に類似でローム塊がやや大ぶり。8．7と類似でローム粒多。9．暗褐色土。FP・C軽石、ハードローム塊、焼土、炭化物、少量のB軽石。10．7に類似で軽石多量に混入。11．黄褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。12．暗褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物混入。13．7と類似。14．暗褐色土。ローム塊、FP・C軽石、焼土、炭。15．灰白色粘質土。焼土、炭火物、ローム、FP・C混。　**カマド**　1．焼土塊。粘土、炭化物、ローム塊混入。2．焼土粒とローム粒の混合。3．1に類似。ローム塊大きく多量。4．焼土。ローム粒混入。5．焼土。6．暗赤褐色土。焼土、灰、炭化物混入。

図－465　H－250号住居跡

位置　南東緩傾斜地の縁に当る。K－108と重複関係にあるが、先後関係については本住居が先行すると考えられる。B8。
形状　西側の大部分を道路によって掘り取られてしまっていたために、平面形は判然としないが、南辺がやや歪んだ隅丸方形を呈すると思われる。南壁下床面が約30cm低くなっている。規模は、南北7.5m、東西2.2mを確認し、長軸方向はN－11°－E壁高

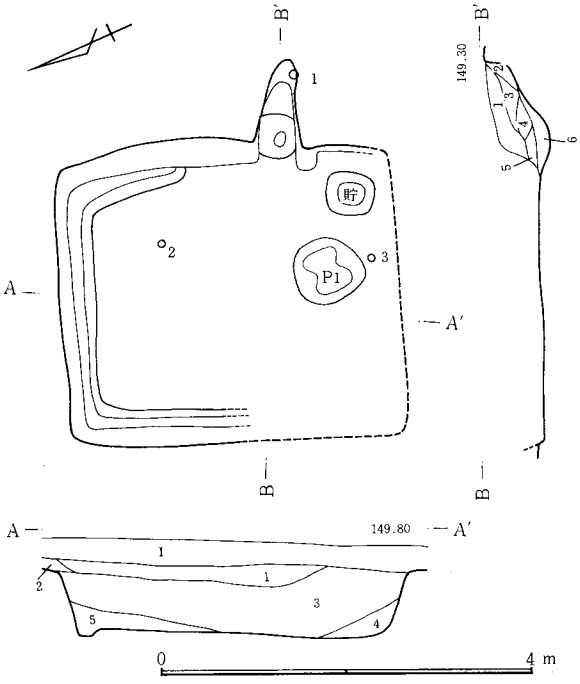
は約85cm～95cmである。床面は南壁際を除いて貼床が施されていたが、周溝・柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。　**カマド**　東辺の中央からやや南寄りの位置に粘土を使用して構築されていた。地山を掘り残して袖としており、全長117cm、袖部内幅42cm、燃焼部長77cmで、壁への掘り込み角度は44°である。燃焼部は床面より2cmほど窪んでいた。　**遺物**　ほぼ全域に散在して出土したが北壁際の鉄製鎌（7）及び南壁際の釘（9・10）の他鉄製品の出土点数が多い事が注目される。　（飯塚）



図－466　H－250号住居跡出土遺物

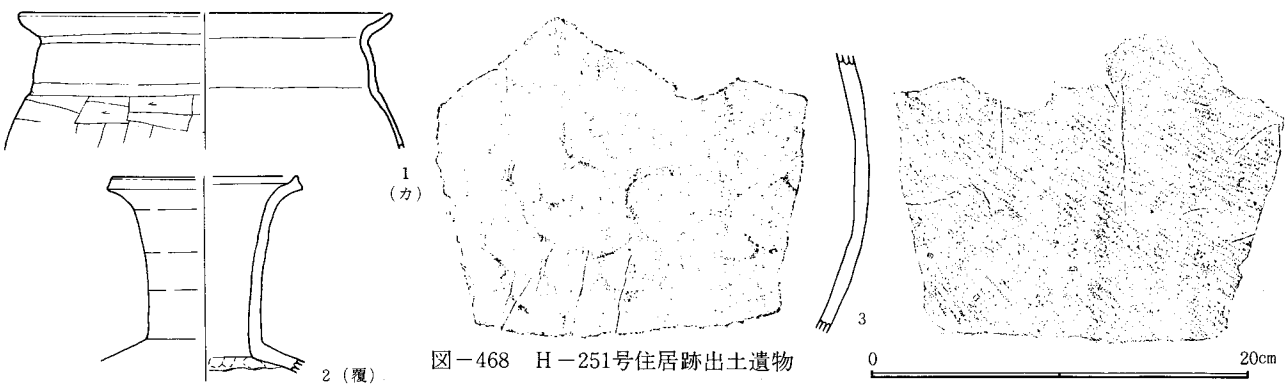
H251号住居跡（図—467、468　図版—29、108　表—231）（XI期）

位置　台地の東側を画する谷地の崖に面したロ1に所在。　**形状**　南北に長軸をとる（N—21.5°—E）住居跡で、南北3.4m前後、東西2.85mを測る。南壁と東壁、西壁の一部は、本住居がH252号住居跡の覆土中に掘り込まれているためうまく検出されなかった。面積10m²前後。壁高は北壁側と西壁側で地層断面から最高76cmを測る。北壁から東壁にかけての周溝の深さは、5cm前後である。　**床面**　H252号住居跡より床面を10～15cm高くする。床はH252号住居跡の覆土をそのまま利用し、特に貼り床は施していないものとみられる。　**ピット**　P_1は出入口施設に伴うものか。深さ15cm。　**カマド**　壁外に細長く造り出す。全長120cm。燃焼部火床面は住居面より12cm程低いピット状にする。　**貯蔵穴**　南東隅。やや方形気味の円形。深さ17cm。　**遺物**　（1）カマドの煙道先端上部からカマド内にかけて出土。（3）床面から＋15cm。（2）床面から＋40cm前後。　**重複関係**　南半部をH252号住居と重複。本住居が新しい。　**その他**　重複関係にあるH252号住居と南北長や床面積等をほぼ同じにする。　（唐澤裕）



1．黒色土主体。FP・C軽石多量に混入。2．黒色土主体。FP・C軽石混入。3．黒色土主体。FP・C軽石、焼土、炭化物、ローム混入。4．黒色土主体。FP・C軽石混入。5．黒色土。　**カマド**　1．黒色土主体。FP・C軽石、ローム粒焼土塊混入。2．汚れたローム。3．黒褐色土。ローム粒混入。4．ローム粒主体。5．6．灰。焼土塊混入。

図－467　H－251号住居跡

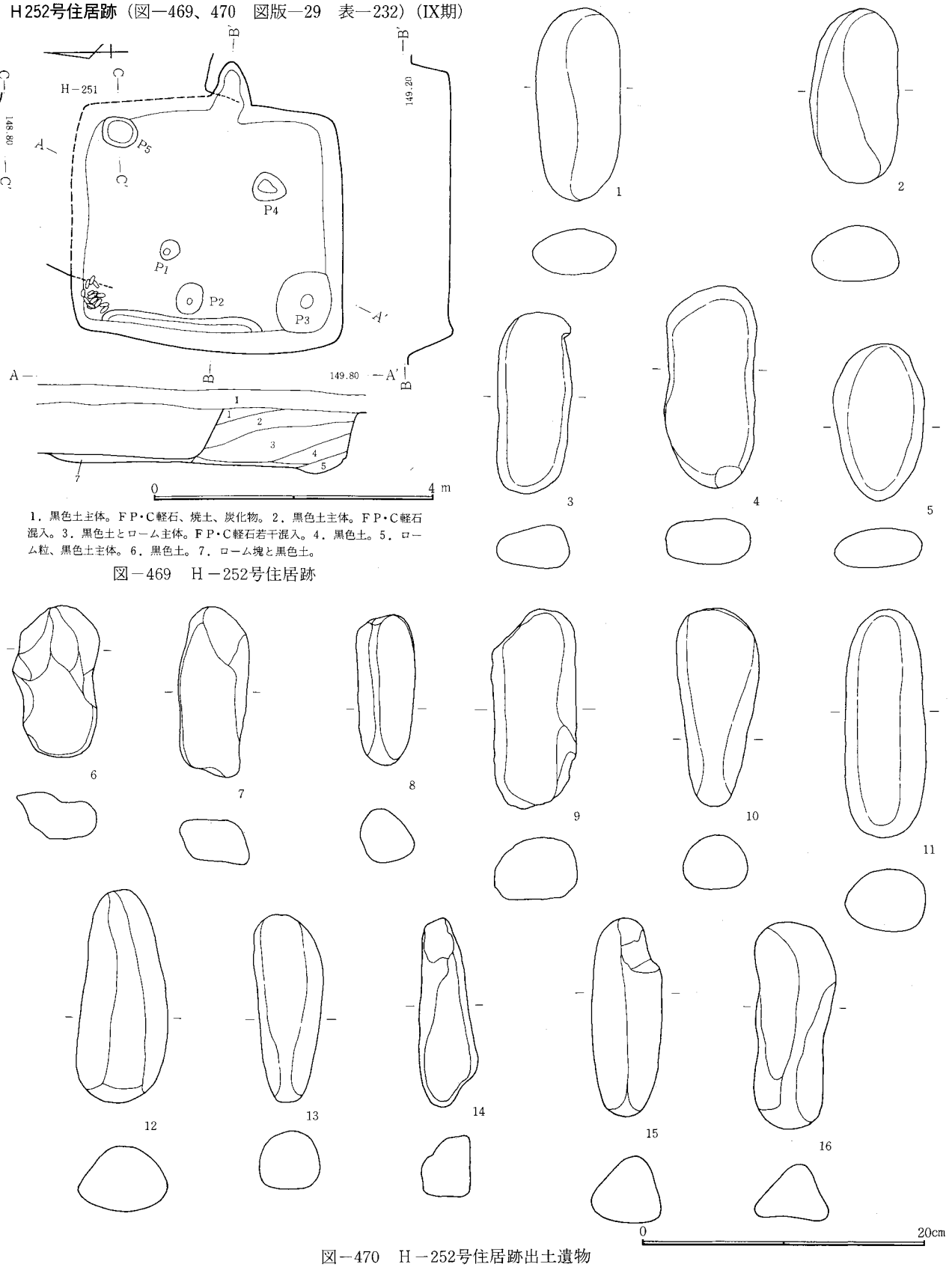


図－468　H－251号住居跡出土遺物

H252号住居跡（図—469、470　図版—29　表—232）（IX期）

1．黒色土主体。FP・C軽石、焼土、炭化物。2．黒色土主体。FP・C軽石混入。3．黒色土とローム主体。FP・C軽石若干混入。4．黒色土。5．ローム粒、黒色土主体。6．黒色土。7．ローム塊と黒色土。

図—469　H—252号住居跡

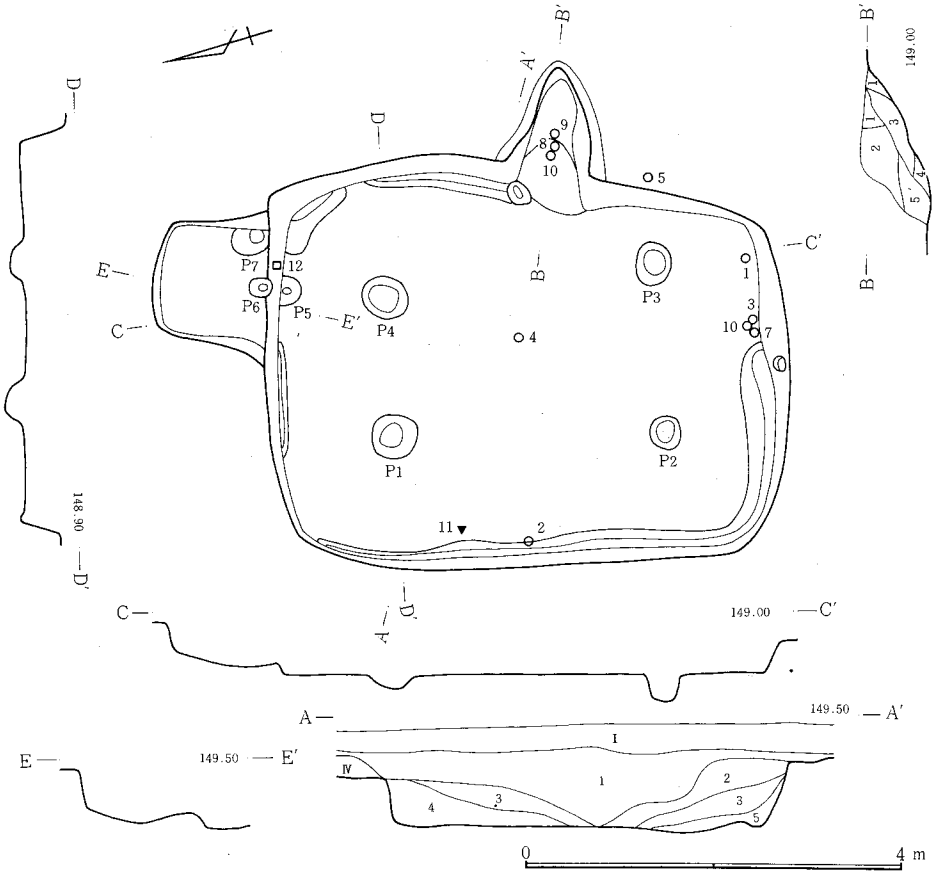


図—470　H—252号住居跡出土遺物

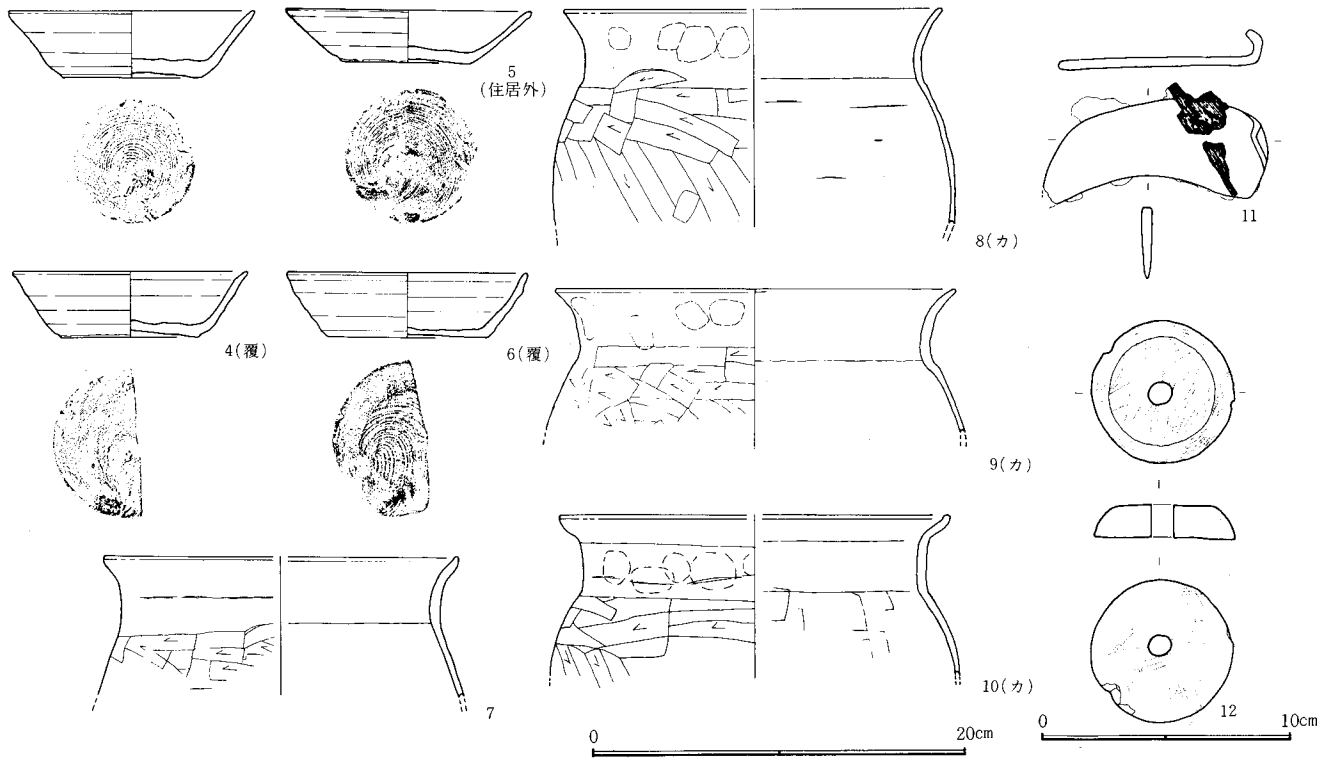
位置　H251号住居跡に同じ。　**形状**　南北3.3m、東西3.1m前後を測るほぼ正方形の住居跡。長軸は南北方向（N—0.5—E）にとる。床面積は10.1m²前後で中規模の竪穴住居である。西壁下には深さ10cm程度の周溝をめぐらす。壁高は南壁側地層断面で最高80cmを測る。壁の形態をみると西壁のみ円弧状に膨らます。また、南壁は東壁側に近づくにつれ内側に入り、従って南西隅は鋭角（逆に南東隅は鈍角）となる。　**ピット**　P_4は出入口施設に伴うものとみられる。深さ20cm。P_5は深さ6cm程であるが、H251号住居の貯蔵穴と形や規模の似ている点が注目される。貯蔵穴的なものか。P_3は住居内施設に伴うものか、深さ3cm。P_1、

P_2は深さ19cm、P_1、41cm。性格は不明　**カマド**　壁外に構築する。全長90cm。袖部内幅は焚口底面で50cm。　**貯蔵穴**　P_5が貯蔵穴的な機能を持つか。（ピット項参照）　**遺物**　北西隅の住居床面から周溝にかけて、長石（転石）がまとまって出土した。　**重複関係**　北半部をH251号住居跡と重複する。H251号住居は本住居跡の覆土を掘削して構築する。　**その他**　本住居とH251号住居は、南北長や床面積等で類似し、両者の間に何らかの関係があるのかも知れない。　（唐澤裕）

H253号住居跡（図—471、472　図版—29、108　表—233）（IX期）



図—471　H—253号住居跡



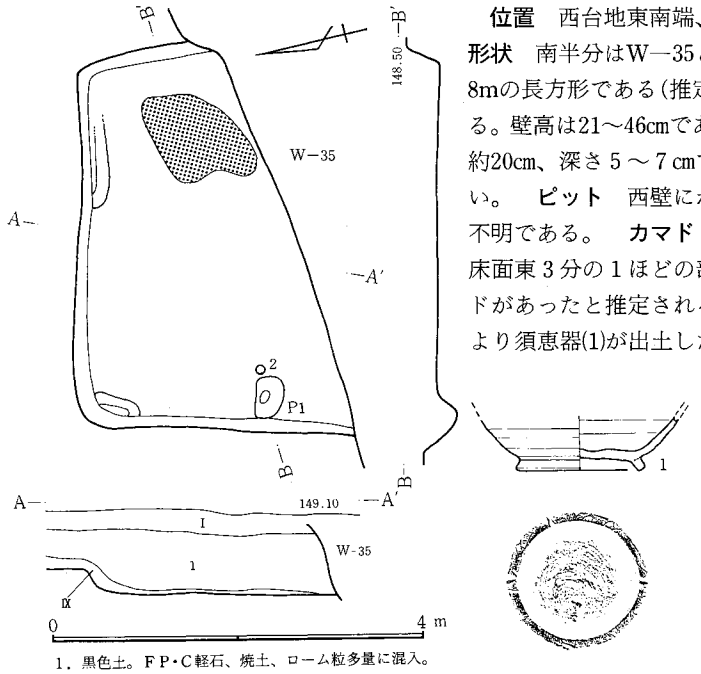
図—472　H—253号住居跡出土遺物

位置　西台地東南端、ロ１に所在し、台地が南へなだらかに傾斜する所にある。　**形状**　ほぼ南北に長軸を持つ長方形で、南北5.3m、東西3.9mである。長軸方向はN－19°－E、面積19.6m²、壁高36～53cmである。周溝は北壁下中央、西壁下全部、南壁下西２分の１、東壁下北２分の１にみられる。幅３～34cm、深さ１～26cmである。なお、北壁外東寄りにほぼ正方形をした張出し施設が確認された。規模は116×116cmである。　**ピット**　P_1、P_2、P_3、P_4はそれぞれ対応する位置にあり柱穴と推定される。規模はP_1、50×38cm、深さ23cm。P_2、35×32cm、深さ不明。P_3、48×38cm、深さ29cm。P_4、50×45cm、深さ16cmである。なお、床面中央の小ピット、南壁中央部にかかって周溝の外側にある小ピット及びP_5の支柱穴と推定される。P_5の規模は32×24cm、深さ７cmである。P_6、P_7は張り出し施設内にあり、規模はP_6、25×20cm、深さ26cm。P_7、39×29cm、深さ９cm、性格は不明である。

カマド　東壁中央。全長146cm、袖部内幅56cm、燃焼部長100cm、壁への掘り込み角度35°、壁外掘り込み130cmで、燃焼部は床面より約２cm低い。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　土師器及び須恵器の坏、甕が多数出土している。床面から12cm上がった所に墨書土器、西壁中央やや北寄りの床面から４cm上がった所に鉄製品、北壁東寄りの床面から１cm上がった所に紡錘車が出土している。

テフラ　１、２、３層にＦＰ、Ｃ軽石が混入している。　**重複関係**　K－110と重複している。本遺構の南にH－256があり、本遺構とは、土器様相からH－256の方が古く、K－110はH－256より古いので本遺構がK－110より新しい。　（木部）

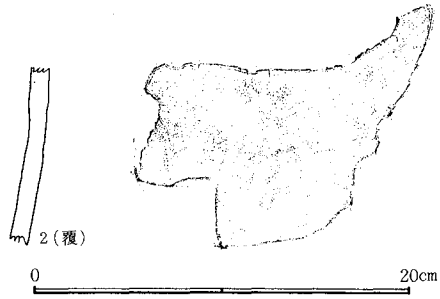
H254号住居跡（図－473、474　図版－29　表－234）（X期）



1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、ローム粒多量に混入。

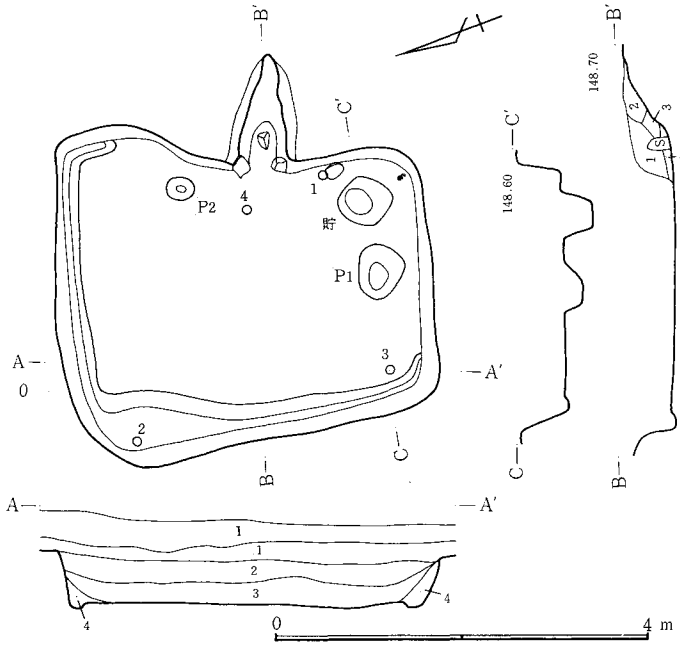
図－473　H－254号住居跡

位置　西台地東南端、ロ101・１に所在し、台地が南に傾斜する所に当たる。　**形状**　南半分はW－35と重複しているため不明であるが、南北2.2m以上、東西3.8mの長方形である（推定）。長軸方向はN－11.5°－E、面積8.2m²以上と推定される。壁高は21～46cmである。北壁東3分の１、及び北西隅には周溝をめぐらす。幅約20cm、深さ５～７cmである。　**重複関係**　W－35と切り合う。本住居の方が旧い。　**ピット**　西壁にかかって１ヵ所（P_1）あり、47×29cm、深さ12cmで性格は不明である。　**カマド**　W－35との重複によってカマドの有無は不明であるが、床面東３分の１ほどの部分に焼土が広がって付着していたことから、東壁にカマドがあったと推定される。　**遺物**　須恵器甕胴部(2)が床面上より出土した。埋土より須恵器(1)が出土した。　**テフラ**　第１層中にＦＰ、Ｃ軽石が混入していた。　（木部）



図－474　H－254号住居跡出土遺物

H255号住居跡（図－475、476　図版－29、109　表－235）（XI期）

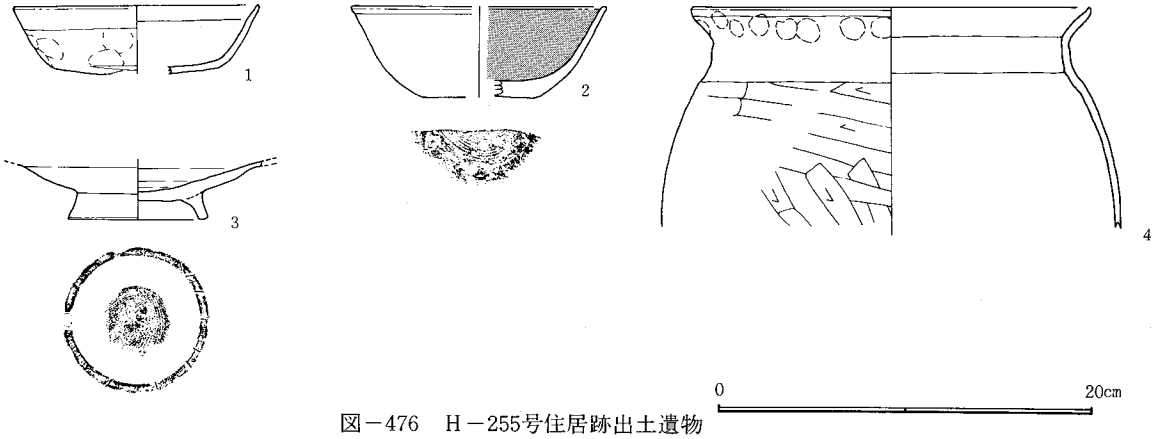


位置　西台地東南端、ハ・ニ１に所在し、台地の南へ傾斜する所に位置する。　**形状**　西壁にやや歪みを持つ長方形で長軸方向はN－17°－Eである。面積は10.8m²、壁高は39～46cmである。北及び西の壁下全部に周溝をめぐらす。幅２～５cm、深さ８～44cmである。貼床はないと推定される。　**ピット**　P_1は58×47cm、深さ20cm。P_2は30×26cm、深さ11cmである。ピットの性格は二つとも不明である。　**カマド**　東壁中央やや南寄り。カマド部分は東壁が北３分の１を残して内側に40cm近くはり出してきている。はり出しの中央にカマドがある。左右の袖に石各１個煙道に１個構築材を残す。全長128cm、袖部内幅24cm、燃焼部長58cm、壁への掘り込み角度38°で、壁外掘り込みは128cmである。燃焼部は床面より３cmほど高い。袖石・支石ともにしっかりとついており、袖石は長さ20cm、支石は長さ30cmである。火床は長円形で、煙道とは、はっきり分けられている。　**焼土範囲**　カマド手前に半径80cmの半円状に認められている。　**貯蔵穴**　南東隅、ほぼ円形で規

1．黒色土主体。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒色土とローム粒主体。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、炭化物混入。3．2にローム塊混入。4．2と類似。　**カマド**　1．黒褐色土。ローム主体。焼土少量混入。2．赤色土。多量の焼土混入。3．黒色土。焼土塊（φ1cm）混入。4．焼土。灰混入。

図－475　H－255号住居跡

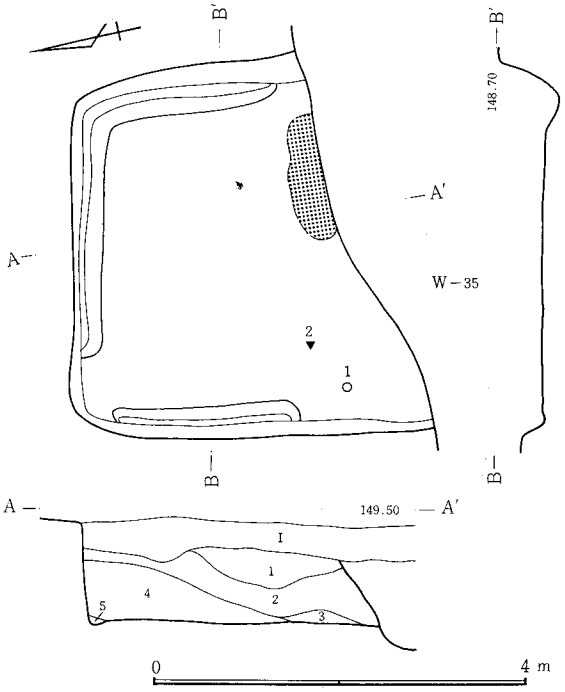
模は51×50cm、深さ32cmである。埋土は黒色土とローム粒の混土で炭化物を含み軽石は含まない。 **遺物** カマド南の東壁下より土師器の坏(1)が出土。住居北西隅の周溝内より土師器の坏(2)が出土。内黒。住居南西隅より須恵器の皿(3)が出土している。カマドの左手前より土師器甕(4)が出土している。埋土中より砥石(5)が出土している。 **テフラ** 1・2・3層にFP・C軽石が混入していた。 (木部)



図－476 H－255号住居跡出土遺物

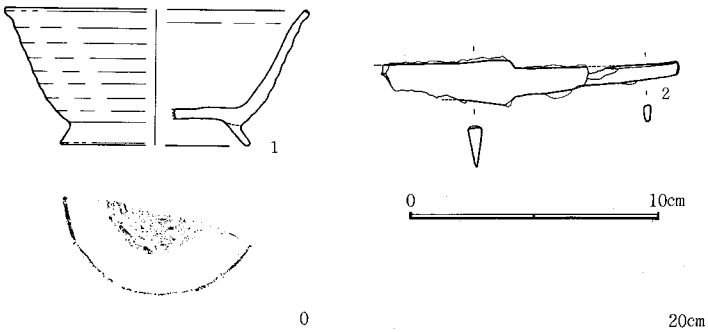
H256号住居跡（図—477、478 図版—29、109 表—236）(IX期)

位置 西台地南東端、ロ1に所在し、南にゆるやかに傾斜する所にあたる。 **形状** 南側はW—35と重複し、破壊されているため形状は不明。規模は南北3.2m以上、東西3.6m、面積は11.2m²以上と推定される。長軸方向はN—12°—E、壁高は36～53cmである。北壁4分の3、西壁北2分の1、東壁北4分の3、壁下に周溝をめぐらす。幅5～8cm、深さ6～7cmである。 **ピット** なし。 **カマド** 不明、ただし本遺構東壁南部分から床面について遺構中央部分にのびるように焼土が広がって検出された。このことから東壁にカマドがあったと推定されるが確証はない。 **貯蔵穴** 不明。 **遺物** 焼土内からは土師器片、床面西部より須恵器椀(1)、鉄製品刀子(2)が出土。 **テフラ** 1、2、4層にFP、C軽石が混入していた。 **重複関係** W—35が本遺構の南側で重複している。新旧関係はH—256（旧）→W—35（新）と推定される。K—110と重複、柱穴に焼土が入っていることから本遺構が旧い。 (木部)



1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム、多量の焼土混入。3．黒色土。焼土、ローム塊(φ1cm)混入。4．黒色土。FP・C軽石、少量の焼土混入。5．黒褐色土。

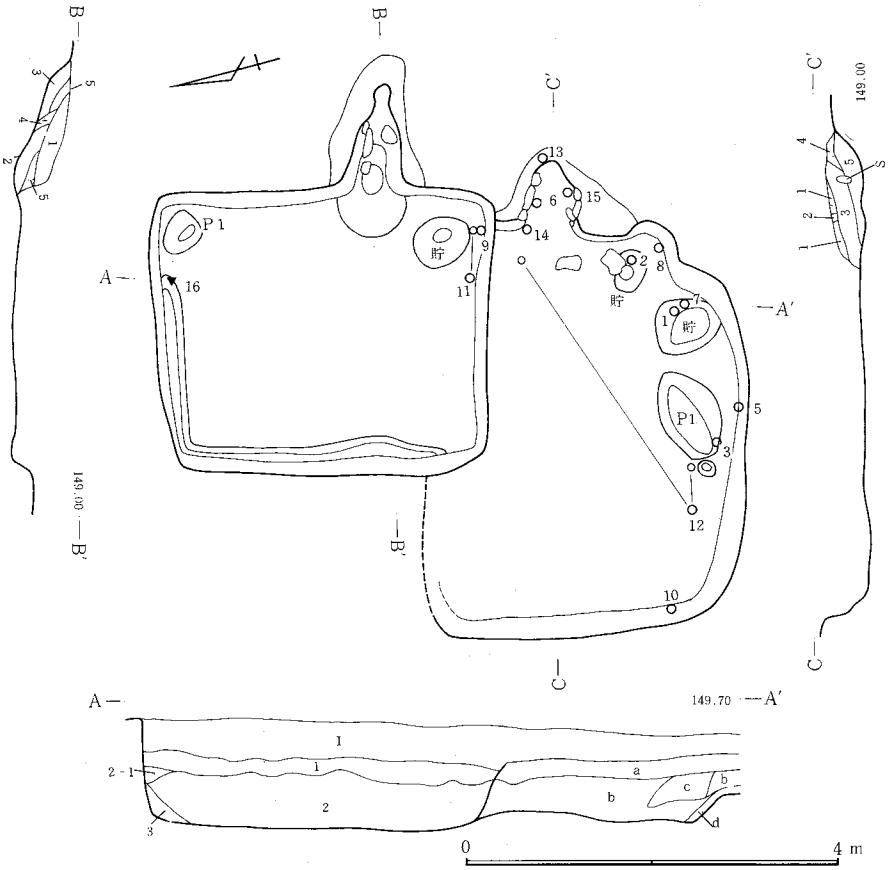
図－477 H－256号住居跡



図－478 H－256号住居跡出土遺物

H257、258号住居跡（図—479、480、481 図版—30、109 表—237）(X期)

H257号住居跡 位置 西台地南東端、ハ1に所在する。南へなだらかに傾斜する東の谷寄りの所にある。 **形状** 北々東から南々西に長軸を持つ長方形で、南北3.3m、東西2.7mである。長軸方向はN—13°—Eで、面積9.4m²、壁高43～51cmである。北壁下西寄り3分の2から西壁下にかけて周溝をめぐらす。幅3～14cm、深さ5～6cmである。 **ピット** 北東隅にP_1がある。規模は47×36cm、深さ16cmであり、性格は不明。 **カマド** 東壁南寄り。構築材としては自然石を使用しており、支脚として1個、そのほかカマド内に3個残存していた。全長150cm、部内幅40cm、燃焼部長35cm、壁への掘り込み角度31°で、壁外掘り込みは156cmである。燃焼部と床面はほぼ同じ高さである。 **貯蔵穴** 南東隅、ほぼ円形で64×50cm、深さ28cmである。 **遺物** 南壁附近から土師器小形甕（9・11）が出土し、北壁附近からは鉄製品鋤(16)が出土している。 **テフラ** 1、2層にFP、C軽石が多量に混入していた。 **重複関係** 北より本遺構、H—259、H—258と三軒重複している。新旧関係は、H—259(旧)→H—258→H—257(新)である。 (木部)

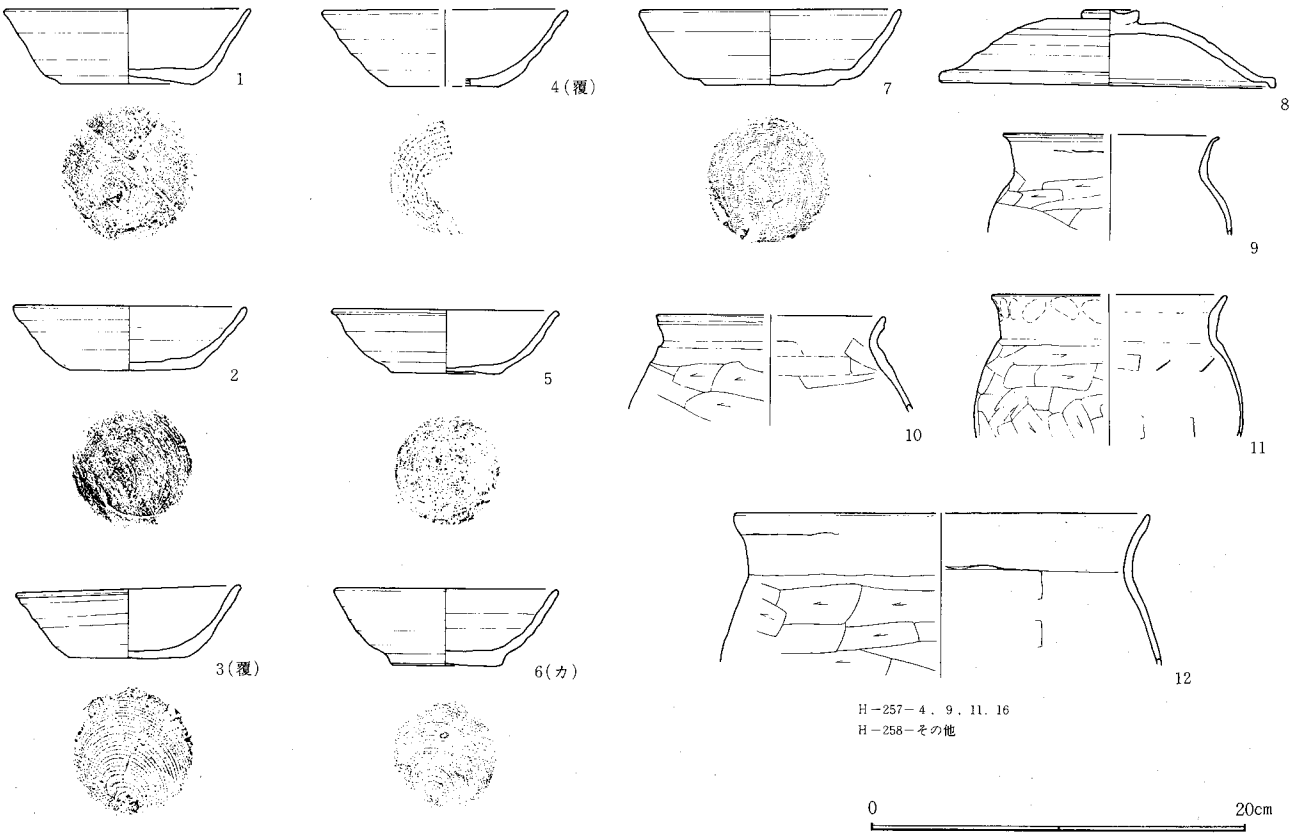


H258号住居跡　位置　西台地南東端、ハ・ロ1に所在する。H257号住居跡に重複し、その南にある。　**形状**　北々東から南々西に主軸を持ち、長軸方向はN—15°—E、形は不明。規模は南北3.2m以上、東西4.1m、面積は12.4m²以上（推定）である。壁高は26～34cmである。　**ピット**　P_1の規模は95×63cm、深さ27cmである。　**カマド**　東壁南寄り。自然石が左壁3石、右壁3石残存。全長90cm、袖部内幅48cm、燃焼部長40cm、壁への掘り込み角度45°、壁外掘り込みは90cmである。燃焼部は床面より約3cm低い。多量の土器片で埋まり、煙道部は短かく、煙道の口と思われるところに土器が埋められていた。　**貯蔵穴**　南東隅東壁寄りに1つ、規模43×35cm、深さ28cm、南東隅南壁寄りに1つ、規模69×59cm、深さ31cm、両者とも中から土器が出土した。　**遺物**　須恵器の坏、蓋、土師器の甕、小型甕が出土した。テフラ及び重複関係はH257号住居跡と同じ。　（木部）

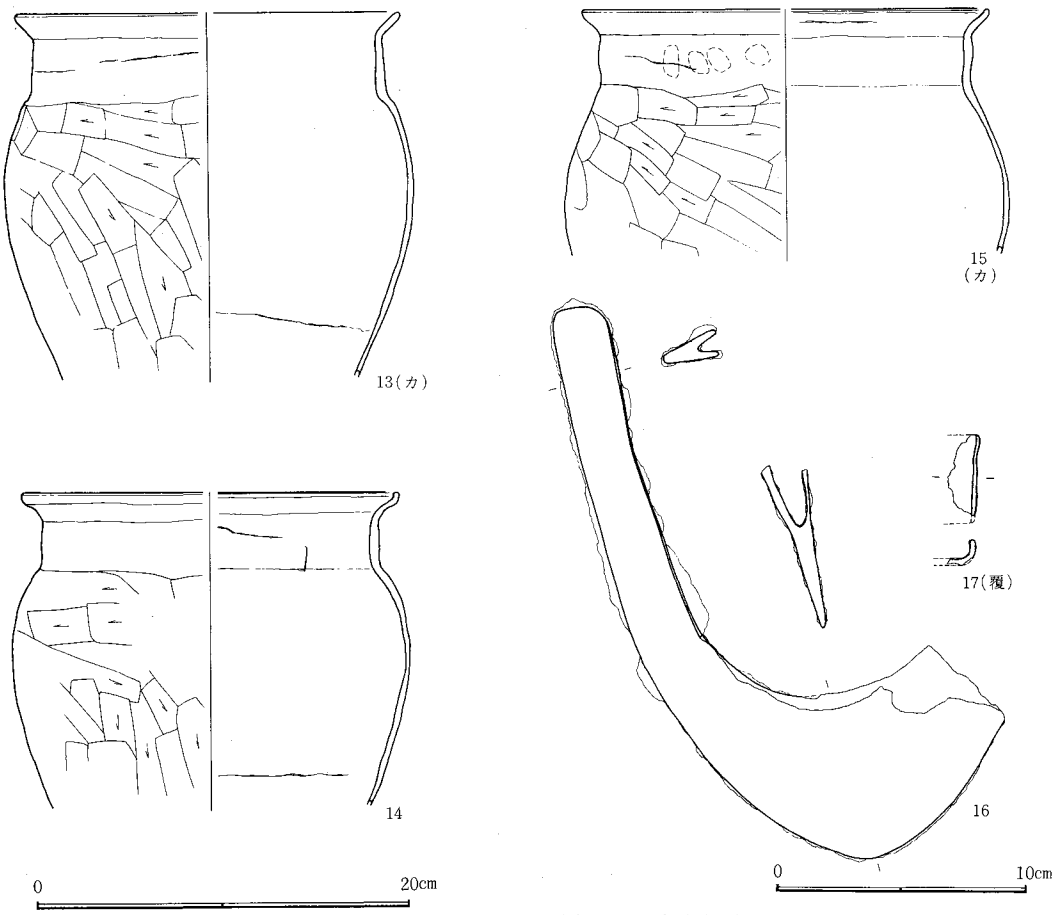
1．黒色土主体。多量のFP・C軽石混入。2．黒色土主体。FP・C軽石、焼土、炭化物多量に混入。2-1．黒色土主体。FP・C軽石混入。3．よごれたローム。a．黒色土主体。FP・C軽石多量に混入。b．黒色土主体。多量のFP・C軽石、焼土、炭化物、少量のローム粒混入。c．灰褐色土。FP・C軽石、多量の焼土、粘土混入。d．よごれたローム。　H257カマド　1．黒色土とローム粒。焼土少量混入。2．黒色土。焼土多量に混入。3．黒色土とローム粒。4．粘土。少量の黒色土、焼土混入。5．黒色土。ローム塊（φ2～3cm）混入。

H258カマド　1．黒色土。多量のローム粒、焼土混入。2．粘土。少量の黒色土、ローム粒混入。3．黒色土主体。少量のローム塊、焼土混入。4．ローム粒、黒色土混入。5．焼土。

図—479　H—257・258号住居跡

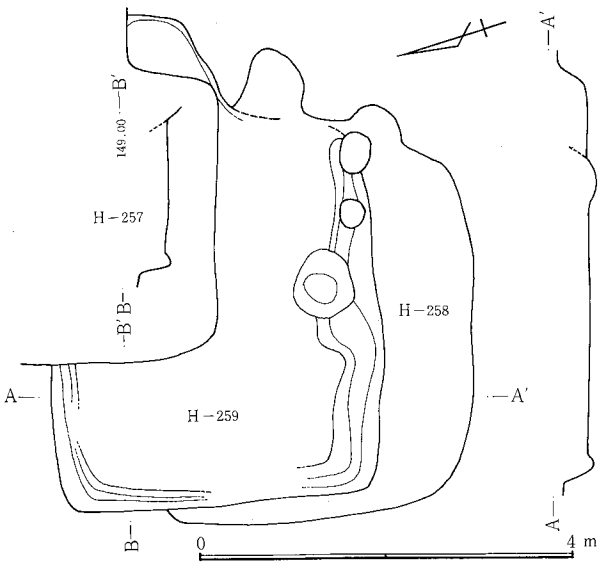


図—480　H—257・258号住居跡出土遺物（1）



図－481　H－257・258号住居跡出土遺物(２)

H259号住居跡（図－482　図版－30）（時期不明）



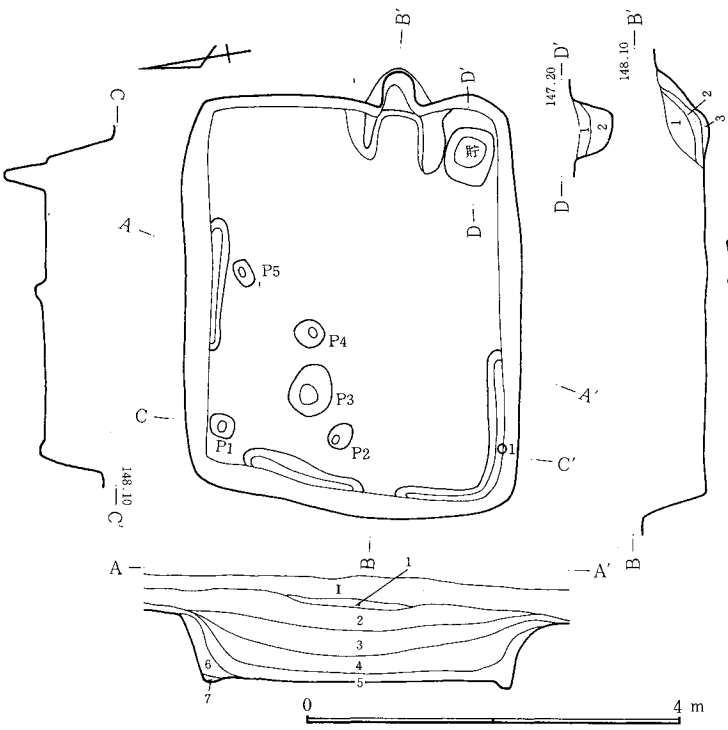
図－482　H－259号住居跡

位置　西台地の南東ハ・ロ１に位置する。周辺は、竪穴住居跡と掘立柱建物跡がそれぞれ６～７軒集中している地区である。**形状**　H257・258号住居跡と重複のため形状は明確ではないが、東西が長軸の長方形と推定される。南北3.1m以上（推定）で東西4.4m（推定）である。長軸方向はN－16°－E、面積は14.1m²以上（推定）、壁高22～27cmである。現状で北壁、西壁の一部と南壁下に周溝をめぐらす。幅３～37cmで深さ４～23cmである。住居全体が検出されていないため、他は不明である。　**ピット**　南壁下中央に１ヵ所。規模は72×64cmで深さ37cmの長円形。住居との係わり、性格は不明である。　**カマド**　カマドは東壁と推定されるがH257・258号住居跡との重複のため失なわれていて不明である。　**遺物**　住居域は全て、本住居跡よりも新しい住居跡と重なっており、本住居跡のものと特定できる遺物はない。　**新旧関係**　H257・258号住居跡と重複しているが、本遺構が一番古く、次はH258号、次がH257号である。　（井野）

H260号住居跡（図－483、484　図版－30、110　表－238）（II期）

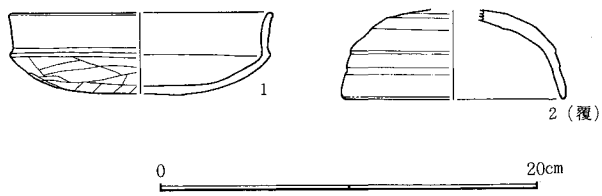
位置　西台地の南東端のニ101に位置する。周辺はあまり住居跡はない。　**形状**　東西に長軸をもつ長方形で南北3.0m、東西4.0mである。西壁は東壁にくらべ北にむかい狭まっている。北西隅を除き壁は直角に近く交わっている。長軸方向はN－97.5°－E、面積は12.0m²、壁高は53～72cmである。北壁下中央部３分の１と、西壁下中央から北３分の１、西壁下南３分の１から南壁西側３分の１にかけて周溝をめぐらす。幅は７～18cmで、深さは３～６cmである。貼床はないと考えられる。　**ピット**　床面５ヵ所、P_1は26×24cmで深さ44cm。P_2は31×25cmで深さ８cm。P_3は57×44cmで深さ35cm。P_4は32×29cmで深さ35cm。P_5は29×19cmで深さ９cm。いずれも性格は不明である。　**カマド**　東壁中央やや南寄りである。両袖部を造り出している。全長112cm、袖部内幅44cm、燃焼部長60cm、壁への掘り込み角度44°、壁外掘り込み角度48°である。燃焼部は床面にくらべて７cm低くなっている。火床は方形

に作られている。 **貯蔵穴** 南東隅、隅丸の長方形で規模は65×54cm深さ46cmである。 **遺物** 住居南西隅の壁下より土師器坏(1)が出土。埋土中より須恵器蓋(2)が出土している。 **テフラ** 1～5層にＦＰ・Ｃ軽石を含む。 (井野)



1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量のローム粒混入。3．2と類似でローム粒は少ない。4．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。5．暗褐色土。黒色土とローム。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊(φ1～2cm)混入。6．黒色土とローム。5より軽石少量。7．黒褐色土。 **カマド** 1．黒色土とローム。少量の焼土混入。2．褐色土。黒色土とローム。多量の焼土混入。3．黒色土。ローム粒、多量の焼土混入。 **貯** 1．暗褐色土。焼土粒、灰のブロック点在。2．暗褐色土。

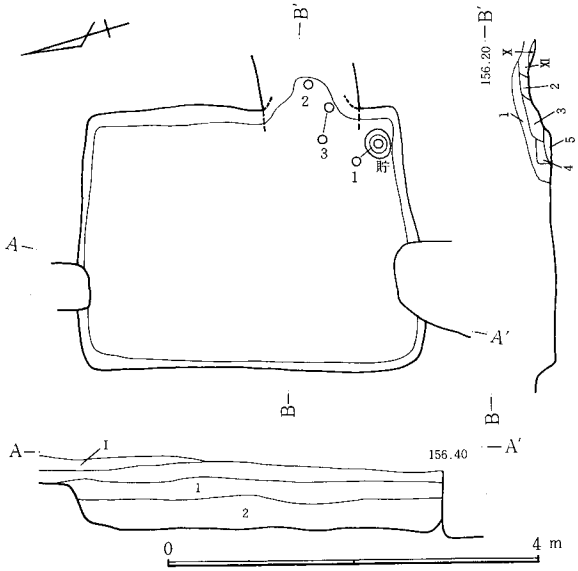
図－483 Ｈ－260号住居跡



図－484 Ｈ－260号住居跡出土遺物

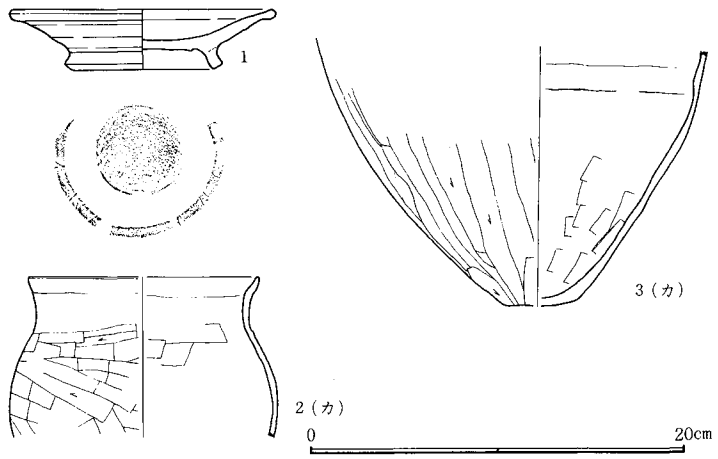
Ｈ261号住居跡（図－485、486 図版－30、112 表－239）（Ｘ期）

位置 西台地東縁中央のロ9に所在する。台地を区切る沢の西で、南への緩斜面上に所在する。付近は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の多いところである。 **形状** 北々西から南々東に長軸をもつ長方形で、南北は3.4mで、東西は2.5mである。住居跡西半分はカマ掘りにより破壊されており、壁の一部は失なわれている。さらに南半分を別のカマ掘りにより破壊されており、カマドと壁の一部を失なっている。長軸方向はＮ－17°－Ｅ、面積は8.7m²である。壁高は16～48cmである。 **カマド** 東壁南寄り。全長50cm、燃焼部長30cm、袖部内幅76cm、壁への掘り込み角度33°、壁外掘り込み50cmである。燃焼部は床面より2cm低い。 **遺物** カマド内より土師器甕（2・3）と、貯蔵穴内より須恵器皿(1)が出土している。 **重複関係** Ｊ－48と重複している。Ｊ－48の埋土が本遺構の壁となっている。 (井野)



1．黒褐色土。砂質。2．黒褐色土。ローム塊、Ｃ軽石、多量の浮石混入。 **カマド** 1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、ローム粒混入。2．ローム二次堆積。少量のローム混入。3．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊(φ1cm)混。4．3に類似でローム塊が小粒。5．暗褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒、焼土、灰、炭化物混入。

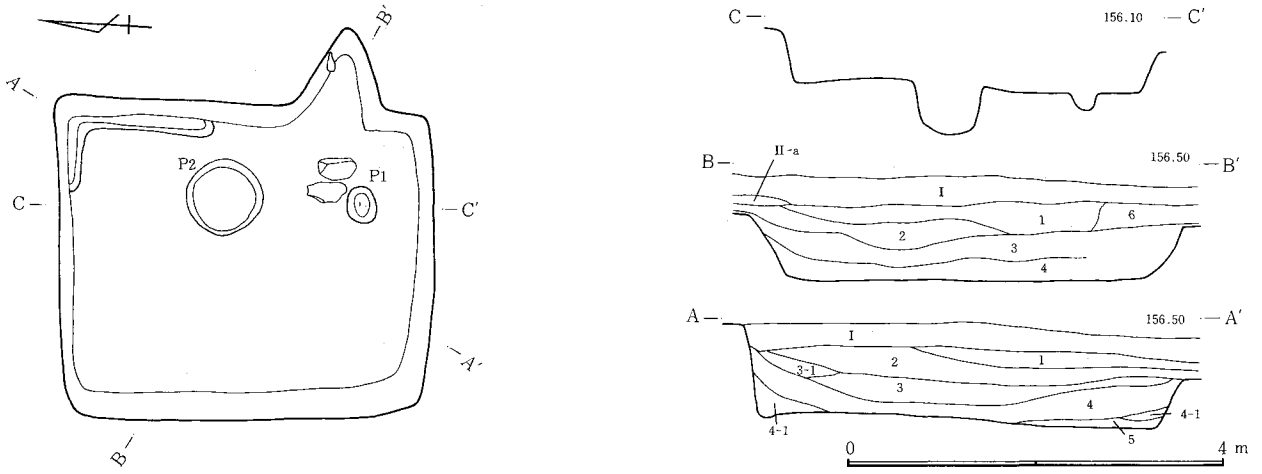
図－485 Ｈ－261号住居跡



図－486 Ｈ－261号住居跡出土遺物

Ｈ262号住居跡（図－487、488 図版－30 表－240）（Ⅷ期）

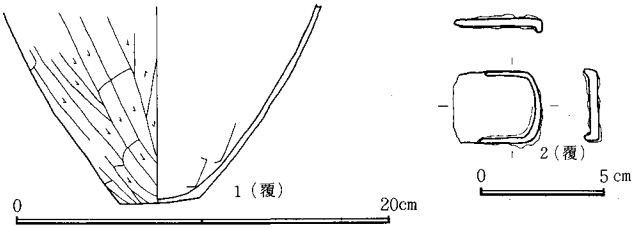
位置 ロ－9。台地を区切る沢の西にあたり、南への緩斜面になっている。付近は竪穴住居跡や掘立柱建物跡の多いところである。 **形状** ほぼ南地に長軸をもつ長方形で、南北3.5m、東西2.8mである。壁はいずれもしっかりと掘られている。長軸方向はＮ－3°－Ｗで、面積は10.3m²、壁高は52～92cmである。北壁下東4分の1と東壁下北3分の1には周溝をめぐらす。幅1.5～14cmである。 **ピット** 床面上に2ヵ所(P_1、P_2)。P_1は36×30cmで、深さは20cm、貯蔵穴とも考えられる。P_2は80×76cmで深さは58cm。P_2の上を通る地層断面には特に変化がないので、P_2は床下土坑と考えられる。貼床はP_2上にはあったと思われる。 **カマド** 東壁南寄り。全長112cm、袖部内幅86cm、燃焼部長50cm、壁外掘り込みは112cmである。構築材は、煙道部に1石、カマド手



1．黒褐色土。砂質。FP・B軽石、焼土、炭化物混入。2．暗褐色土。多量のFP・C軽石、焼土、炭化物混入。3．暗褐色土。FP・C軽石、ローム塊、焼土、炭化物混入。3-1．茶褐色土。ローム塊混入。4．茶褐色土。4-1．茶褐色土。ローム粒混入。5．ローム主体。6．黒褐色土。砂質。

図－487　H－262号住居跡

前に2石あり。残存状態はあまり良くない。　**遺物**　床面よりの遺物の出土はなかった。埋土中より土師器の小片が出土している。遺構上部はカマ掘りによる攪乱をうけている。　（井野）

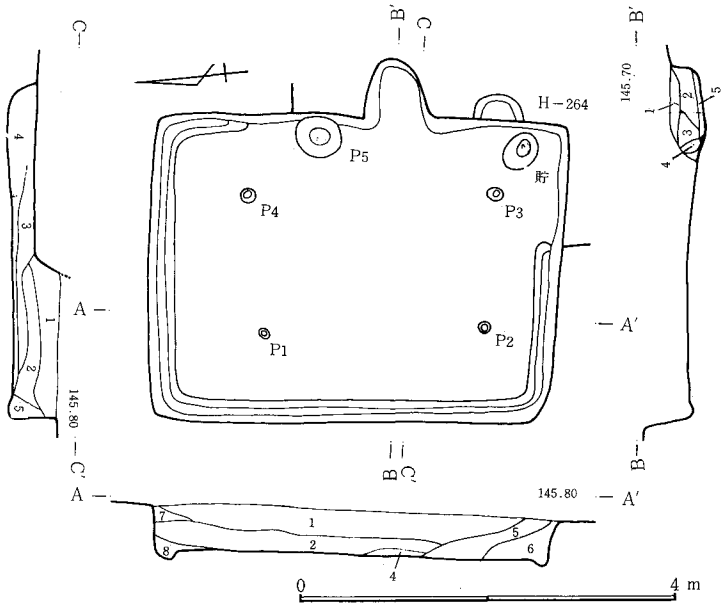


図－488　H－263号住居跡出土遺物

H263号住居跡（図－489　図版－30）（時期不明）

位置　西側の台地では最南端のホ106～105に所在する。上武国道予定地の南に位置し、台地の東を画する谷地の崖に面して立地する。　**形状**　南北に長軸（N－6.5°－E）をとる隅丸方形で、南北4.1m、東西3.0mを測る。床面積12.9m²。壁高は地層断面から最高50cmを測る。東壁の大部分と南壁東半分を除いて周溝をめぐらす。深さは7cm前後である。　**ピット**　ほぼ対角線上に位置するP₁～P₄は柱穴と考えられる。東西の柱穴間の距離は南北ともほぼ同じだが、南北の柱穴間の距離は東側（P₃～P₄）で265cm、西側（P₁～P₂）235cmとなり、全体に台形状に配置する。また、壁との関係をみると、北壁との間を広くとり、次に西壁との間を広くとる。逆に南壁との間は最も狭く、次に東壁との間を狭くしている。居住空間の機能的差異に基くものであろう。P₅には貯蔵穴的な機能が想定される。深さ、P₁・P₂・P₄、16cmないし38cm、P₃77cm、P₅39cm、　**カマド**　壁外に造り出す。焚口部付近の東壁を内側に引き入れ、袖部を意識的につくり出している。カマドは掘り形をそのままカマド壁面としていた。カマド壁面はほぼ直に立ち上がる。燃焼部全面に厚さ5～8cmの灰が堆積していた。また、カマド内覆土中から粘質黒色土の大塊が出土しており、構築材の一つとみられる。　**貯蔵穴**　42×32cm。深さ不明。P₅も同様の機能のものと考えられる。　**遺物**　小片を除き全くなかった。　**重複関係**　本住居跡を破壊してH264号住居跡をつくる。　**その他**　覆土中にロームを多量に混ぜる自然堆積層がある。

（唐澤裕）



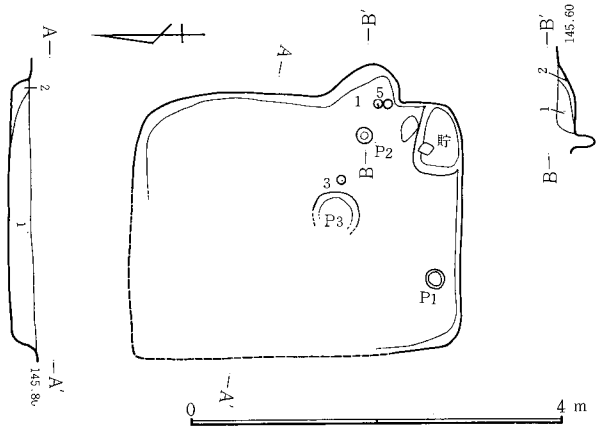
1．暗褐色土。FP・C軽石、ローム粒、塊、焼土、炭化物混入。2．黒色土。1に類似でローム粒少量。3．ローム粒・塊。4．ローム粒・少量の黒色土。5．黒色土とロームの混合土。6．暗褐色土。ローム粒多量に混入。7．ローム粒主体。黒色土混入。8．ローム粒主体。黒色土少量混入。　**カマド**　1．黒色土とローム粒。2．焼土と焼土塊。3．焼土・黒色土・粘土。4．黒色土。5．灰の堆積。

図－489　H－263号住居跡

H264号住居跡（図－490、491　図版－30、110　表－241）（IX期）

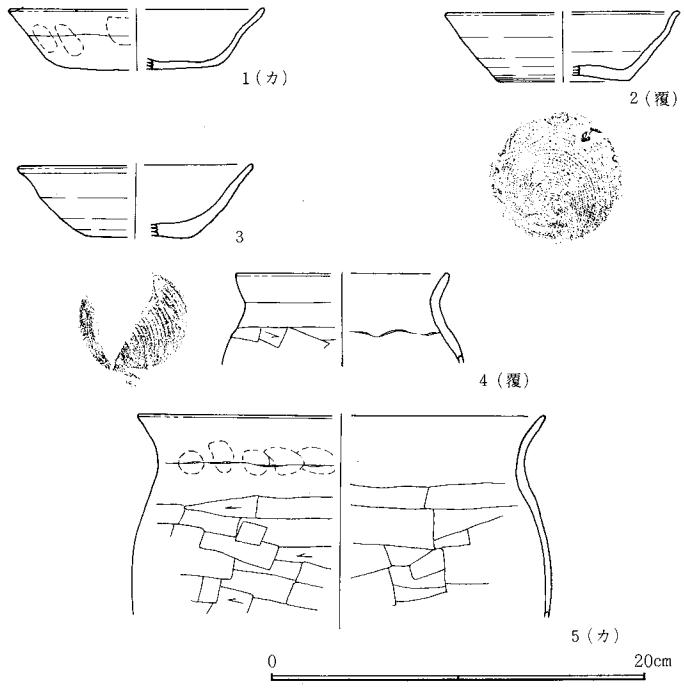
位置　H263号住居跡に同じ。　**形状**　本跡は北西部でH263号住居跡の覆土を掘削して構築しているため、北壁と西壁の立ち上がりは不明瞭。南北3.3m前後、東西2.6m前後の隅丸方形。壁線は緩く曲線をなす。床面積8.6m²前後、長軸方向N－0°。周溝は検出されなかった。　**床面**　重複部分でH263号住居跡のローム多量混の褐色土層を床面とするが、特に貼り床とは考えがたい。また住居北側では、他面に比べ平面が12cm程沈下していた。　**ピット**　P_1～P_3とも性格不明。深さP_1、P_3不明、$P_2$25cm。　**カマド**　現状で全長50cm、断面図からみて燃焼部長は20cm弱しかなく、袖が住居内に位置するとも想定される。P_2は支柱を固定するピットとも考えられるがやや深すぎる。構築材等は全く検出されなかった。　**貯蔵穴**　69×44cm、深さ不明。　**遺物**　（1・5）カマド内出土。＋7cm。(3)床着。（2・4）は覆土中。　**重複関係**　H263号住居跡を掘削、破壊して構築する。

（唐澤裕）



1．黒色土。FP・C軽石少量混入。2．褐色土。ローム粒多量に混入。　**カマド**　1．黒色土。FP・C軽石少量混入。2．焼土粒。部分的に焼土塊混入。

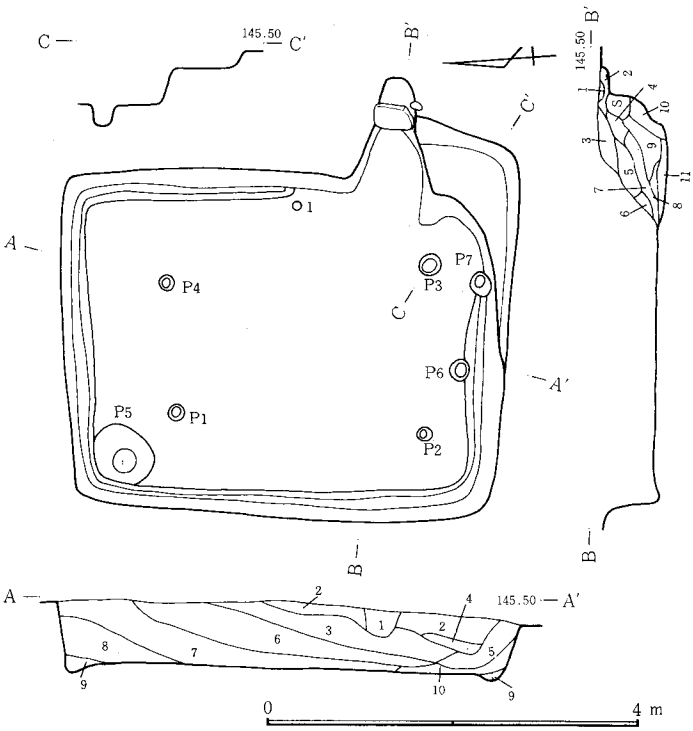
図－490　H－264号住居跡



図－491　H－26号住居跡出土遺物

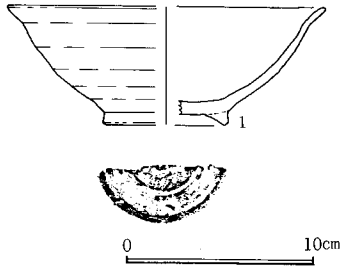
H265号住居跡（図－492、493　図版－30、110　表－242）（X期）

位置　上武国道予定地の南ホ106に所在する。本住居跡を含め3棟の竪穴住居跡で一グループをなすが、本住居跡は西台地調査区の南東端に位置するため、このグループが更に大きな広がりを持つか否か不明である。ただ、この場所は東西の谷地にはさまれた極めて狭い台地であるため、大住居跡群が存在する可能性はない。恐らくこのグループが、芳賀東部団地遺跡における古代集落の南端の一画をなすものであろう。　**形状**　南北に長軸（N－9.5°－E）を取る隅丸長方形で、長軸4.4m、短軸3.3mを測る。北壁は東側で北に開くため、東壁は西壁より約30cm長い。カマド南の南東隅の壁外には、床面から約35cm高さの棚状の張り出しを設けている。カマドに接している所でその東西幅は50cmである。住居床面積14.6m²。壁高は覆土の堆積の様子から70cm以上。　**ピット**　P_1～P_4は柱穴とみられる。この柱穴は短径がいずれも14～16cmと細くなっているので、柱掘り形ではなく直接柱材を打ち込んだ穴ともみられる。深さ、P_1・$P_2$36cm、$P_3$40cm、$P_4$26cm。P_5は規模の類似からあるいは貯蔵穴的な機能を持つか。深さ32cm。P_6はその位置から入口施設に伴うものか。深さ不明。P_7深さ56cm。機能不明。　**カマド**　掘り形をそのままカマド内壁とし、壁外に構築する。燃焼部は住居床



1．攪乱。2．暗褐色土。ローム粒多量に混入。3．ローム粒とローム塊。4．黒色土。ローム粒・塊少量混入。5．ローム粒と黒色土。少量の焼土混入。6．ローム粒と黒色土。7．黒色土。FP・C軽石少量混入。8．黒色土。FP・C軽石混。9．黒褐色土。10．黒色土。ローム粒、わずか焼土含む。　**カマド**　1．黒色土。2．赤褐色土。焼土、部分的に粘土、ローム粒。3．黒色土。FP・C軽石少量混入。4．黒色土とローム粒。微量の焼土粒混入。5．6．7．黒色土とローム塊。8．ローム粒と白色粘土。9．黒色土・ローム粒・焼土粒・灰の混合土。10．灰・焼土塊・黒色土。11．灰と焼土。

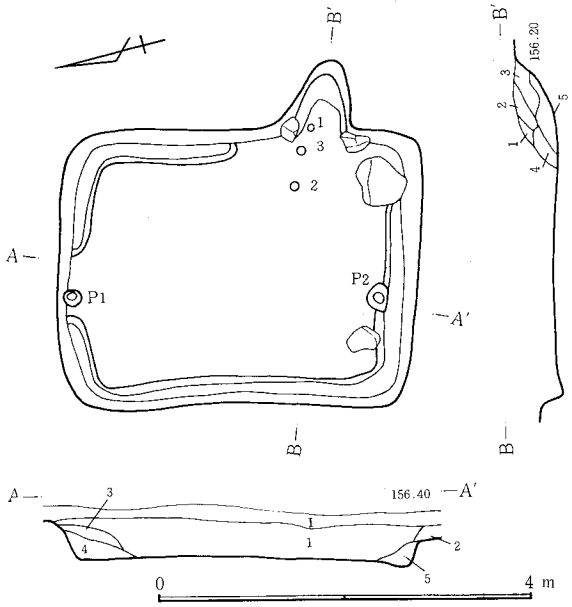
図－492　H－265号住居跡



図－493　H－265号住居跡出土遺物

面より10cm程低くし、ここに厚さ10cm前後の灰が堆積していた。燃焼部先端には安山岩石が架構され、その先は煙出しとなる。カマド覆土中からは白色粘土が出土している。 **貯蔵穴** P_5が相当か。南東隅壁外の棚状施設の存在も注目される。 **遺物** (1)床面より＋16cmと覆土中を接合。 **その他** 住居跡覆土上部にローム主体層あり。 (唐澤裕)

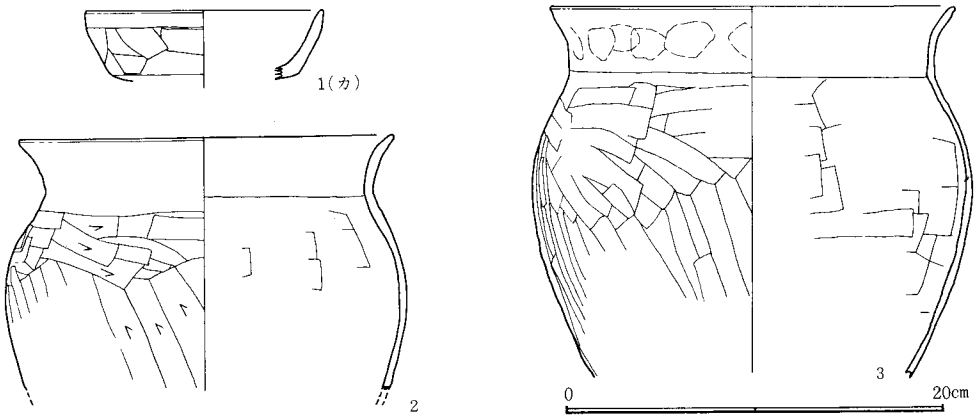
H266号住居跡（図—494、495 図版—30、110 表—243）(IX期)



位置 西台地東縁中央付近のロ9に所在する。台地を分ける沢の西にあたり南への緩斜面上にある。付近は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の多いところである。 **形状** 北々西から南々東に長軸を持つ長方形で、南北3.6m、東西2.6mである。4壁ともやや内に膨んでいる。長軸方向はN—13°—Eで、面積は9.8m²、壁高は21～40cmである。北壁中央部と南壁東端を除く全周に周溝をめぐらす。幅は10～22cmで深さは4～7cmである。 **ピット** 床面に2ヵ所（P_1、P_2）がある。いずれも壁直下であり、南北に対称の位置にあたるため住居に関係のあるピットと思われる。P_1は20×16cmで深さ37cm、P_2は28×19cmで深さ24cmである。 **カマド** 東壁南寄り。袖部左右に構築材を一石ずつもつ。全長98cm、袖部内幅56cm、燃焼部長58cm、壁への掘り込み角度47°、壁外掘り込み84cmである。燃焼部は床面と同じ高さである。 **遺物** カマド内より土師器坏(1)が、カマド手前より土師器甕（2・3）が出土している。 **その他** 住居内南壁下に2石あり。カマドのそばの石は56cm、西側の石は36×24cmである。いずれも用途ははっきりとしない。(井野)

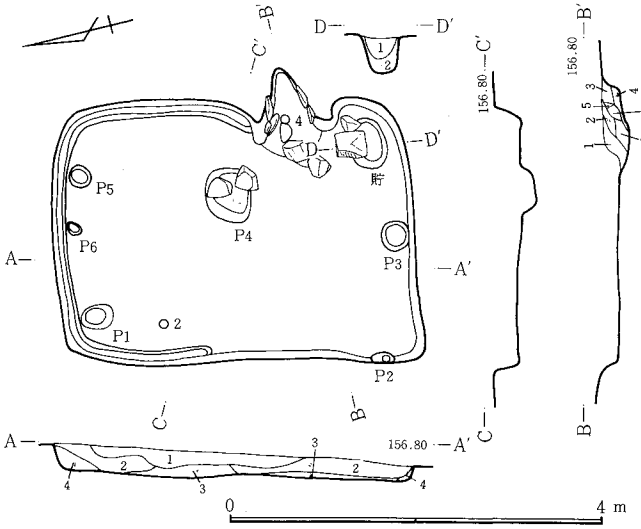
1．黒褐色土。C軽石多量に混入。2．褐色土。3．黒色土。C軽石混入。4．褐色土。5．褐色土。 **カマド** 1．暗褐色土。FP・C軽石、ローム粒、焼土粒混入。2．黄褐色土。FP・C軽石、ローム粒、焼土粒混入。3．焼土塊。4．2に類似で焼土多い。5．茶褐色土。FP・C軽石、ローム粒、焼土、炭化物、灰混入。

図—494 H—266号住居跡



図—495 H—266号住居跡出土遺物

H321号住居跡（5H—50）(図—496、497 図版—30、110 表—244）(XIV期)

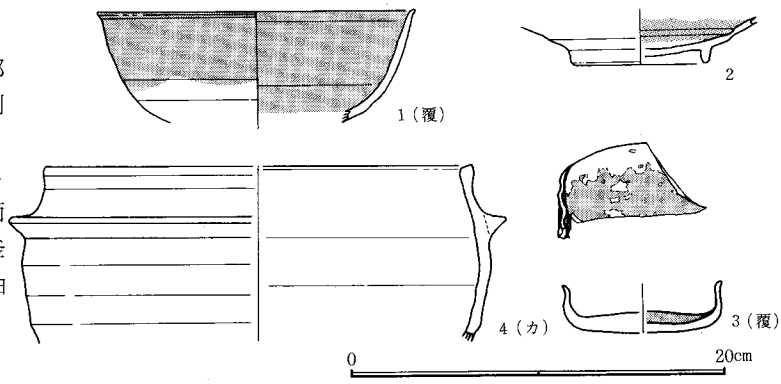


1．黒色土。FP・C軽石多量に混入。2．茶褐色土。FP・C軽石混入。3．暗褐色土。ローム、ローム塊混入。4．暗褐色土。ローム主体。 **カマド** 1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量の焼土、炭化物混入。2．暗褐色土。ローム主体。3．茶褐色土。ローム主体。焼土粒多量に混入。4．赤褐色土。多量の焼土塊、ローム混入。5．茶褐色土。少量の焼土、ローム粒混入。 **貯** 1．茶褐色土。FP・C軽石少量混入。2．暗褐色土。ローム主体。

位置 ロ10からハ10にかけて所在する。14区に展開する住居跡群のなかに属し、東端に位置する。20mほど行くと谷になる。近くにH—325号などがみられる。 **形状** 南北3.7m、東西2.6mの長方形を呈し、長軸方向はN—12.5°—Eを示す。壁高15～30cm、面積9.4m²である。西壁は直線でなく住居内にややカーブして入り込んでいる。また南西隅は外側へややつき出している。周溝は幅5～7cm、深さ1cmのものが、カマド北側の袖部から北壁、西壁の半分ほどまでにみられる。 **ピット** 6個のピットがみられる。最大はP_4で長径53cm、短径46cm、深さ16cmである。最小はP_6で17×13cm、5cmを測る。位置的には釈然としないものがあるが、柱穴との性格も考えられよう。 **カマド** 東壁南寄りに設置されている。燃焼部内部から3個の石

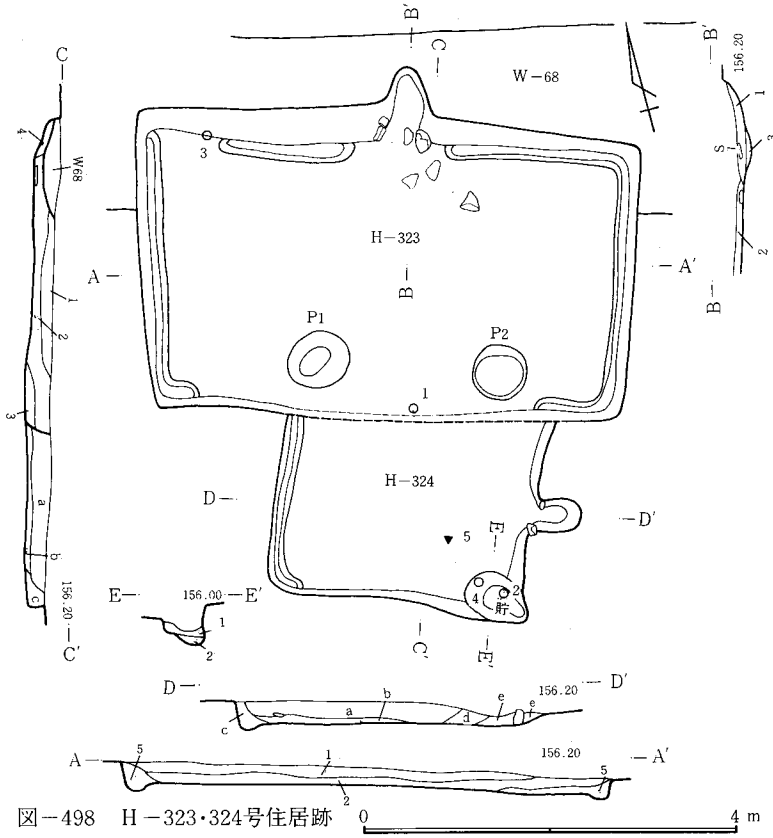
図—496 H—321号住居跡

が、カマド前や貯蔵穴上P_4上から石がみつかっているところから、構築材は石といえる。全長100cm、燃焼部長40cm、袖部内幅60cm、壁への掘り込みの角度54°を測る。なお袖部は地山をそのまま残して築いている。**貯蔵穴**　南東隅にあって、長軸53cm、短軸39cm、深さ42cmを測る。　**遺物**　灰袖の皿(2)が北西隅近くの床面より出土している。またカマド燃焼部より須恵器羽釜の破片(4)が出土している。　**その他**　埋土中より灰袖坏(1)と耳皿(3)が出土している。　（中澤）

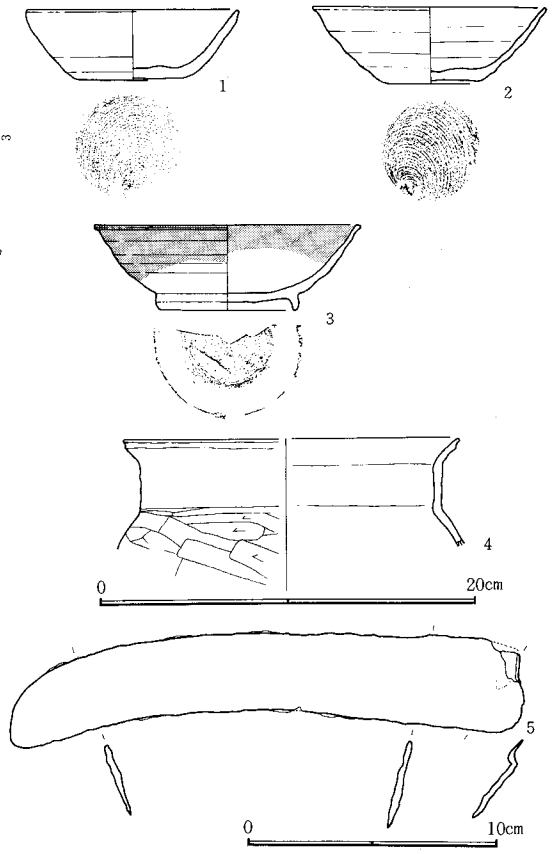


図－497　H－321号住居跡出土遺物

H323、324号住居跡（5H—52、53）（図—498、499　図版—31、110　表—245）（X、Ⅷ期）



図－498　H－323・324号住居跡



図－499　H－323・324号住居跡出土遺物

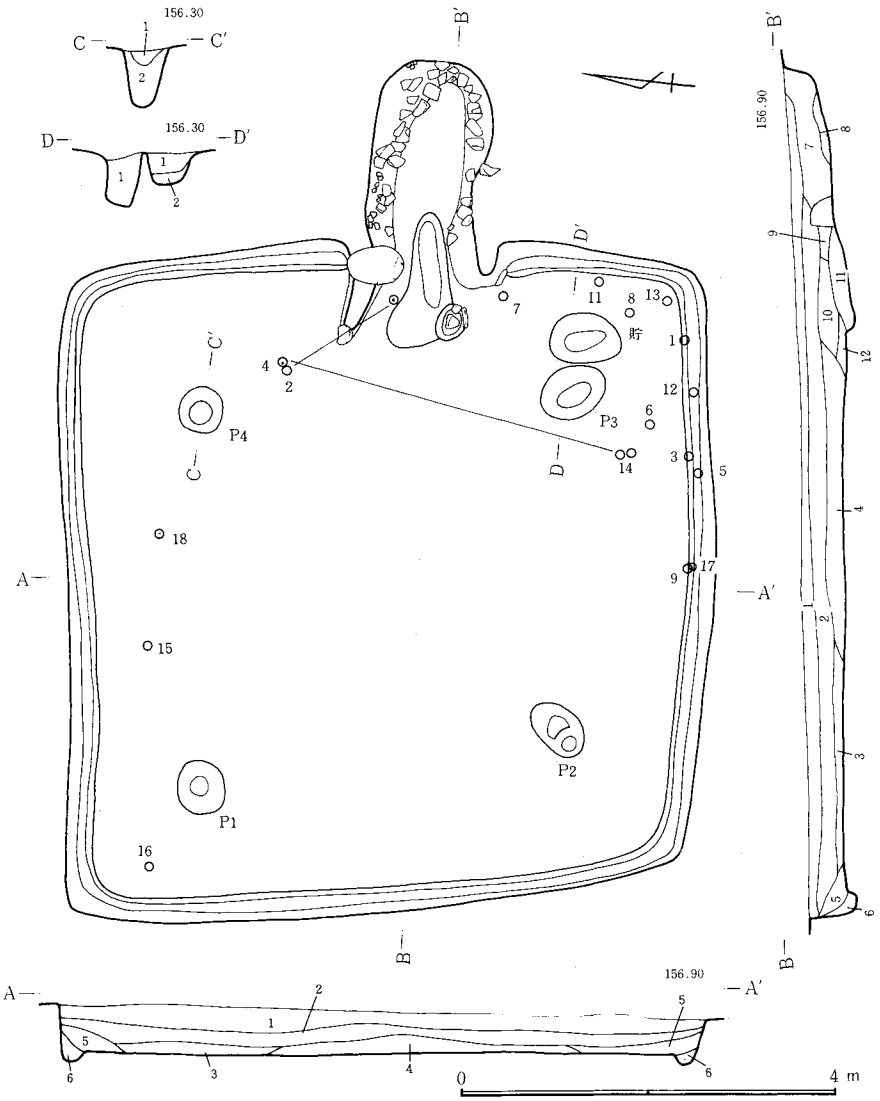
1．黒茶褐色土。FP・C軽石多量に混入。2．茶褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。3．茶褐色土。ローム塊少量混入。4．茶褐色土。ローム主体。焼土粒、炭化粒少量混入。5．茶褐色土。ローム主体。a．茶褐色土。多量のFP・C軽石、ローム塊混入。b．茶褐色土。FP・C軽石、焼土塊、炭化物粒、ローム塊各少量混入。c．ローム主体暗褐色土。
H323カマド　1．茶褐色土。ローム、焼土粒わずか混入。2．暗褐色土。多量のローム粒、わずかな焼土混入。3．赤色ローム。
d．茶褐色土。ローム粒、塊、少量の焼土、炭化物粒混入。　**H324**　e．赤褐色土。焼土塊多量に混入。　**貯**　1．茶褐色土。2．暗褐色土。ローム主体。

位置　ハ10に所在する。調査地区14区の集落の東端にあって10mほど東へ行くと谷になる。なお、本住居跡は二軒重複したもので、H—324の方が旧い。

形状　〔H—323〕南北3.0m、東西長5.0mの長方形を呈し、長軸方向はN—73°—Wを示す。面積は14.3㎡である。幅5～10cm、深さ3～14cmの周溝がカマド部分と南壁を除くほぼ全周にめぐる。〔H—324〕南北はH—323によって破壊されているため1.7m以上、東西長2.6mである。東壁の方向はN—23°—Eを示している。幅5～11cm、深さ1～10cmの周溝が西壁にみられる。　**ピット**　〔H—323〕南壁近くに2箇みられる。径60cm前後、深さ20cm未満のもので、性格は不明である。

カマド　〔H—323〕北壁のほぼ中央部に設置され、構築材は石を用いている。全長94cm、壁外の掘り込み82cm、燃焼部長70cm、袖部内幅36cm、壁への掘り込みの角度41°を測る。〔H—324〕東壁に設置されている。左右袖部に石が使用されている。支石もみつかっている。全長54cm、壁外の掘り込みは64cmで、住居外にカマドが構築されている傾向を示している。燃焼部長52cm、袖部内幅22cm、壁への掘り込みの角度28°を測る。　**貯蔵穴**　〔H—323〕なし。〔H—324〕南東隅にあって、長軸76cm、短軸35cm、深さ28cmを測る。　**遺物**　〔H—323〕北西隅近くで灰袖の坏(3)（部分）、その他南東隅近くより刀子が出土している。〔H—324〕貯蔵穴内より須恵器坏(2)や土師器甕(4)の破片が出土している。また、貯蔵穴近くで鉄製鎌(5)も出土している。　**重複関係**　W—68と重複する。南北地層断面によりW—68が新しい。　（中澤）

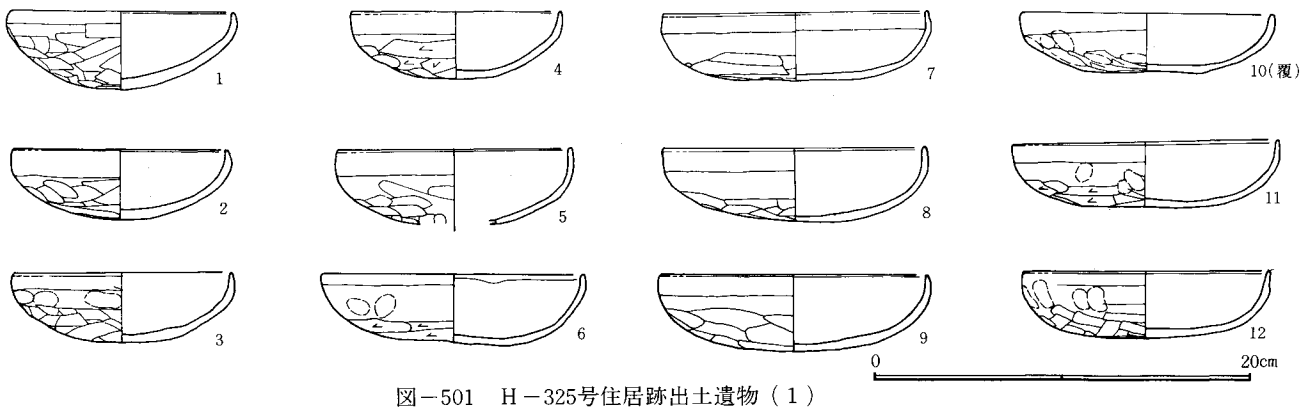
H325号住居跡（5H—54）（図—500、501、502　図版—31、111　表—246）（III期）



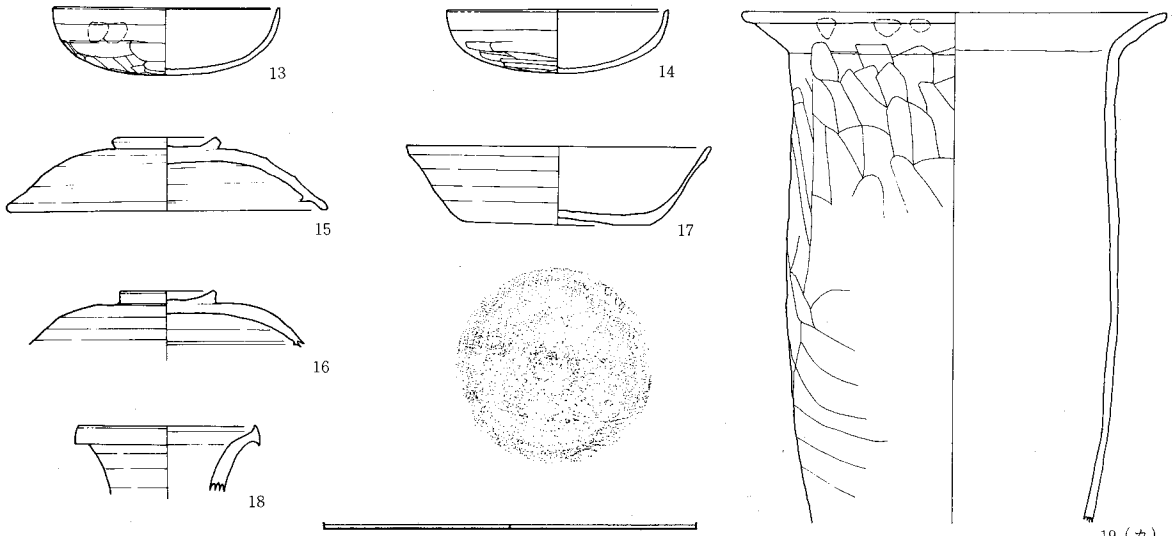
1．茶褐色土。FP・C軽石、礫多量に混入。2．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量の焼土粒混入。3．茶褐色土。1より多量のFP・C軽石、ローム混入。4．茶褐色土。FP・C軽石、多量のローム、ローム塊、少量の焼土粒、炭化物混入。5．暗褐色土。ローム主体。FP軽石微量に混入。6．暗褐色土。ローム粒多量に混入。7．茶褐色土。ローム塊(φ2cm)、焼土粒、FP・C軽石少量混入。8．茶褐色土。焼土粒、白色粘土。焼け石、(φ3cm)、炭化物粒多量に混入。9．黒茶褐色土。ローム主体。小石(φ2～3cm)、焼土粒多量に混入。10．暗褐色土。ローム主体。FP・C軽石、焼土塊(φ1cm)少量混入。11．赤色土。焼土塊(φ3cm)、灰多量に混入。12．茶褐色土。白色粘土、焼土粒多量に混入。　貯　1．茶褐色土。FP・C軽石、ローム多量に混入。2．暗褐色土。少量のFP・C軽石、多量のローム塊(φ1～2cm)P_3 1．暗褐色土。多量のローム塊混入。P_4 1．茶褐色土。FP・C軽石、ローム粒多量に混入。2．暗褐色土。多量のローム塊混入。

図—500　H—325号住居跡

位置　ロ10に所在する。調査地区14区に展開する一大集落の東端の方に位置する。約20m東は谷となっている。　**形状**　南北6.6m、東西6.8mの正方形を呈している。東の偏きはN—9°—Wを示す。壁高7～50cm、面積44.7m²を測り、14区に分布するどの住居跡よりも大きな面積をもつ。周溝は幅5～20cm、深さ8～16cmのものが、カマド部分を除いて全周している。　**ピット**　4個確認できている。P_1は径54cm。P_2は長径66cm、短径40cm、深さ30cm。P_3は70cm、56cm、62cm。P_4は径48cm、64cmを測る。この4個のピットは柱穴と考える。なおピットの断面には柱痕跡はみられない。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄りに位置する。全長306cmと芳賀東部団地遺跡のなかでも最大級を誇る。燃焼部長146cm、袖部内幅90cm、壁外への掘り込み238cm、壁への掘り込みの角度62°を測る。床面に比して燃焼部が5cmほど高くなっている。構築材は石が多く使われている。燃焼部から煙道部にかけては径20～30cmほどの石で輪部をつくり、それらの石の間や内側に細かな石を一面に配している。袖部、とくに左側は大きな石で固めている。燃焼部でよく焼けている部分は、東壁を延長した部分にあって、多量の灰が出る。　**貯蔵穴**　南東隅に位置し、長軸76cm、短軸58cm、深さ36cmの規模をもつ。　**遺物**　坏を中心としておびただしい量を出土している。出土場所はカマド周辺、貯蔵穴など東壁近くに集中する傾向がみられる。とくに貯蔵穴近くでは完形に近いものも含めて土師器坏が4箇ほどみつかっている。また、南壁中央部では坏が2枚重なって、すべり落ちたような状態で出土している。　（中澤）

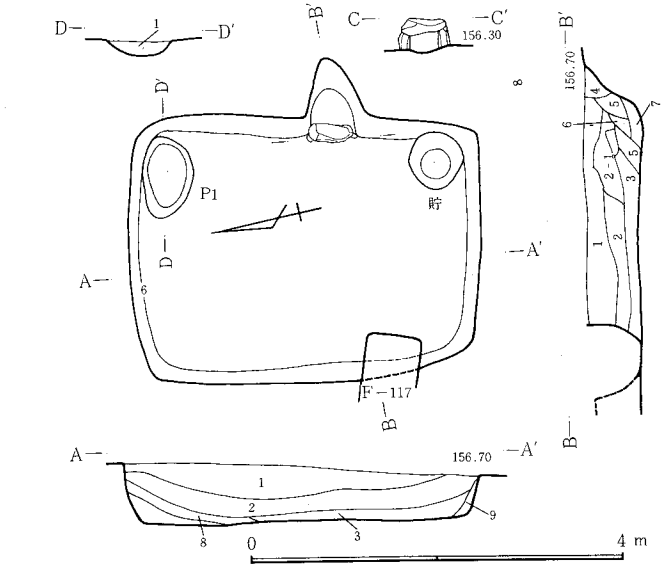


図—501　H—325号住居跡出土遺物（1）



図－502　H－325号住居跡出土遺物(２)

H326号住居跡（５H－55）（図－503　図版－31）（IX期）



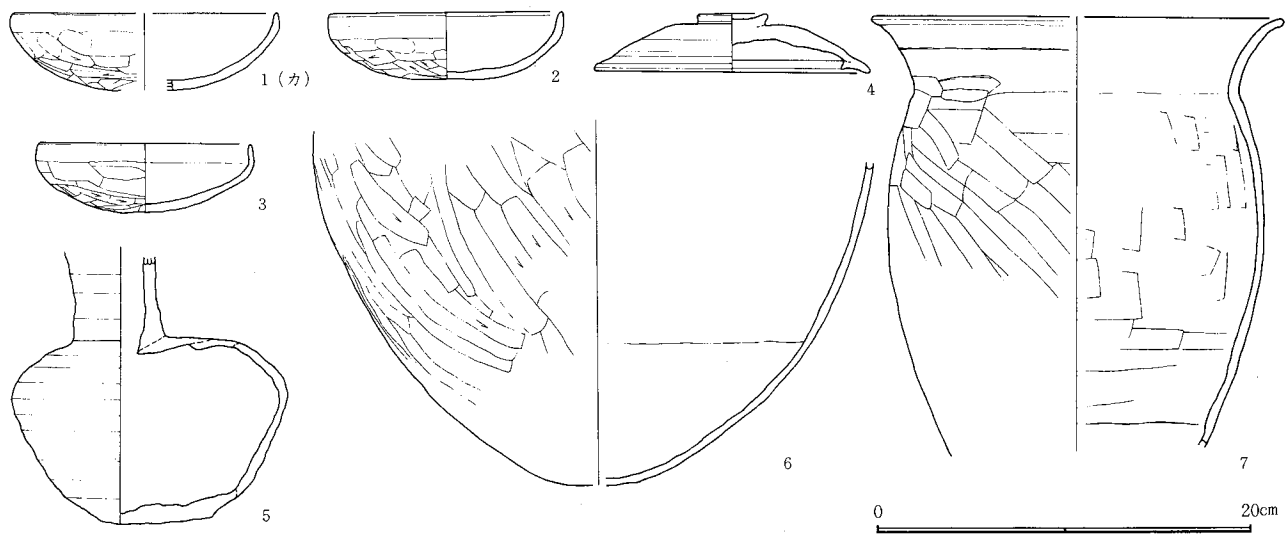
1．茶褐色土。ＦＰ･Ｃ軽石多量に混入。2．茶褐色土。多量のローム粒・塊、1より少量のＦＰ･Ｃ軽石混入。2-1．茶褐色土。ローム粒、焼土粒、炭化粒混入。3．黒茶褐色土。4．茶褐色土。焼土粒･塊(φ3cm)･ロームの混合土。少量のＦＰ･Ｃ軽石混入。5．茶褐色土。ローム粒･塊(φ3cm)主体。焼土少量混入。6．黒色土。少量のローム粒混入。7．赤茶褐色土。ローム粒、焼土塊主体。多量の灰混入。8．黒色土。9．茶褐色土。多量のローム粒混入。P_1 1．茶褐色土。ローム塊多量に混入。

図－503　H－326号住居跡

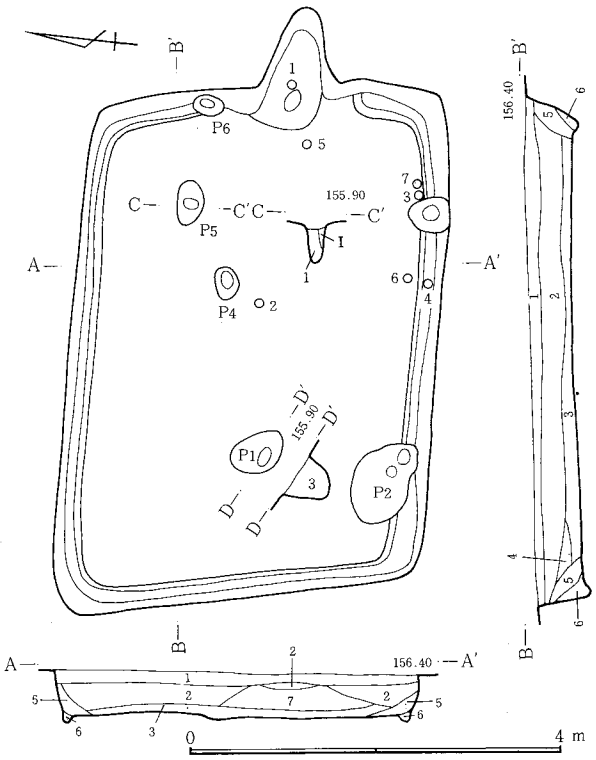
位置　ロ10に所在する。西台地の東縁ほぼ中央に位置し、調査地区14区に分布する一大竪穴住居跡群の１つである。東40mほど行くと谷になる。　**形状**　南北3.5m、東西2.4mの長方形を呈し、長軸方向はＮ—13°—Ｅを示す。壁高40～67cm、面積8.4㎡を測る。　**ピット**　北東隅に長径86cm、短径54cm、深さ16cmのピットがみられるが、その性格は不明である。覆土はロームブロック(径１～２cm)が多く入る。　**カマド**　東壁南寄りに設置されていて、構築材は燃焼部は粘土、袖部分は石を使用している。冠材(石)も元の状態でみつかっている。全長112cm、壁外への掘り込み88cm、燃焼部長58cm、袖部内幅50cm、壁への掘り込みの角度57°を測る。住居床面と燃焼部との比高差は床面の方が８cmほど高くなっている。なお、カマドの焚き口は鳥居状に石を組んであって、燃焼部には多くの灰の堆積がみられる。　**貯蔵穴**　南東隅にあって、径58cmほどの円形。　**遺物**　なし。　**重複関係**　Ｆ117号土坑と重複。本遺構が古い。

（中澤）

H327号住居跡（５H－56）（図－504、505　図版－31、111　表－247）（VI期）



図－504　H－327号住居跡出土遺物



位置　ロ10に所在する。H326号住居跡に南接し、調査地区14区に所在する一大住居群の１つである。東30mほどで谷となる。　**形状**　南北3.7m、東西5.1mの長方形で、長軸を東西にもち、その方向はN－82°－Eを示す。壁高44～53cm、面積18.9m²である。カマド部分を除いて、幅７～25cm、深さ４～６cmの周溝がみられる。

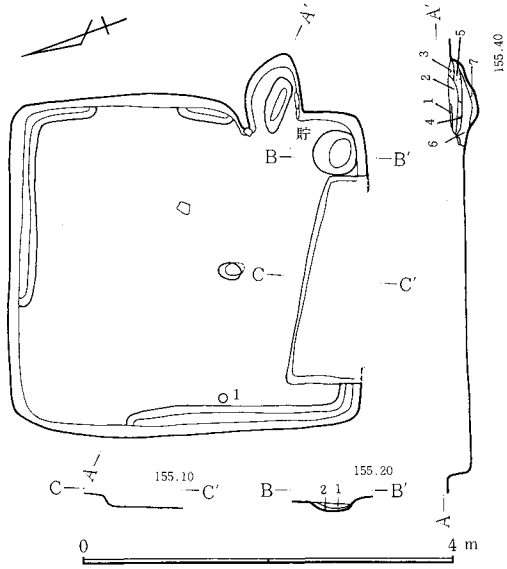
ピット　６個みられる。P_6は東壁に、P_2、P_3は南壁に接するように作られている。床面にはP_1、P_4、P_5がみられるが、その性格は不明である。　**カマド**　東壁中心からやや南寄りに設置されている。全長114cm、壁外への掘り込み96cm、燃焼部長98cm、袖部内幅76cmを測る。床面と燃焼部との比高差は０である。燃焼部の内壁は赤く焼け、使用が多かったことがうかがえる。なお、煙道部分はカマ掘(ゴボウを掘る溝)らしきものによって破壊されており、確認はできていない。　**貯蔵穴**　なし。　**遺物**　カマド前から須恵器平瓶(5)がほぼ完形の状態で出土している。南壁のP_6周辺からは土師器甕の破片が多くみつかっている。また住居のほぼ中央床面からは土師器坏(完形)(2)が出土している。西壁では長円形の偏平な石が数個体みつかっている。　**重複関係**　本住居東壁(カマドの南側)から東へW68号溝が走っている。本住居の覆土中に溝の断面がないところから、本住居跡の方が新しいと判断する。

(中澤)

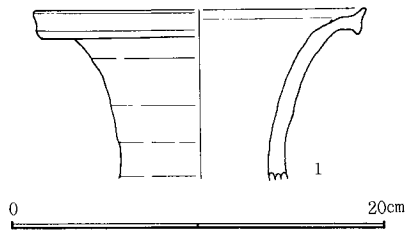
1．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石多量に混入。2．茶褐色土。やや粘性あり。ＦＰ・Ｃ軽石多量に混入。3．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。4．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石多量に混入。5．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、やや多量のローム粒混入。6．暗褐色土。ローム粒主体。7．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石１より多量。ローム粒、焼土粒白色粘土、灰混入。
P1．茶褐色土。多量のローム塊混入。2．暗褐色土。ローム主体。3．褐色土。ローム塊(φ２～５cm)混入。

図－505　Ｈ－327号

H328号住居跡（５Ｈ－57）（図－506、507　図版－31、111　表－248）（Ｘ期）



位置　西台地東端、Ａ９にある。台地東部の南緩斜面上に位置する。周囲には住居跡が密集している。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北3.6m、東西3.4mである。四隅とも隅丸を呈する。長軸方向はN－22°－E、面積は11.9m²、壁高は16～48cmである。北壁東３分の２、西壁南３分の２、東壁中央、東壁北隅直下に周溝が認められる。幅４～14cm、深さ１～５cmである。南側には200×60cmほどの平坦な掘り込み部分が見られる。なお、床面との差は10cmほどである。　**ピット**　西壁直下の周溝部と、床面中央部にある。大きさは22×20cm、深さ27cmであるが、その性格、機能については不明である。



図－507　Ｈ－328号住居跡出土遺物

カマド　東壁南寄りにあり、両袖と燃焼部に石材の使用が見られる。全長90cm、袖部内幅46cm、燃焼部長68cm、壁への掘り込み角度62°、壁外掘込み66cm。燃焼部と住居床面との差10cm。　**貯蔵穴**　南壁東寄り隅にある。円形で、規模は46×46cm、深さ13cmである。　**遺物**　西壁下周溝に接して須恵器甕(1)、中央右に石が確認される。

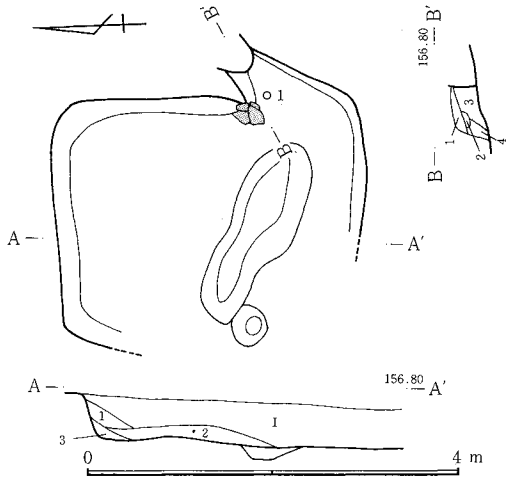
(鵜木)

カマド　1．黒褐色土。微量のＣ軽石、ローム粒混入。2．黄褐色土。多量のローム塊、焼土塊混入。3．茶褐色土。多量のローム粒、少量の焼土粒混入。4．茶褐色土。焼土粒少量混入。5．黒褐色土。少量のローム粒、焼土粒混入。6．茶褐色土。多量の焼土塊、ローム粒混入。7．黄褐色土。ローム。　**貯**　1．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石少量混入。2．暗褐色土。ローム主体。

図－506　Ｈ－328号住居跡

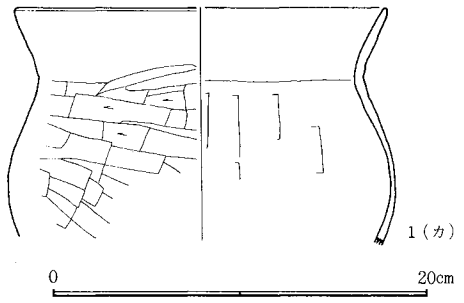
H329号住居跡（５Ｈ－58）（図－508、509　図版－31、111　表－249）（Ⅶ期）

位置　西台地東端、イ10にある。台地東部の南緩斜面上に位置する。周囲には住居跡が密集している。　**形状**　南北に主軸を持つ長方形で、南北2.9m、東西2.4mである。西壁は不分明であるが、四隅とも隅丸を呈するものと思われる。長軸方向はN－２°－E、面積は7.2m²(推定)、壁高は43～54cmである。西壁から南壁、さらに東壁南半分にかけて攪乱を受けたと思われる痕が見える。　**ピット**　床面南半分を横切るように、細長いピットが一つある。又、西壁(推定)中央南寄りにも深さ20cmほどのピットもあるが、両方とも本住居に付属するものかどうか不明である。地層断面図等から持に前者は後代のものと考えられる。その性格、機能も不明である。　**カマド**　東壁南寄りにあると思われる。左袖の構築材と推定される石材が４個かたまってあった。



図－508　H－329号住居跡

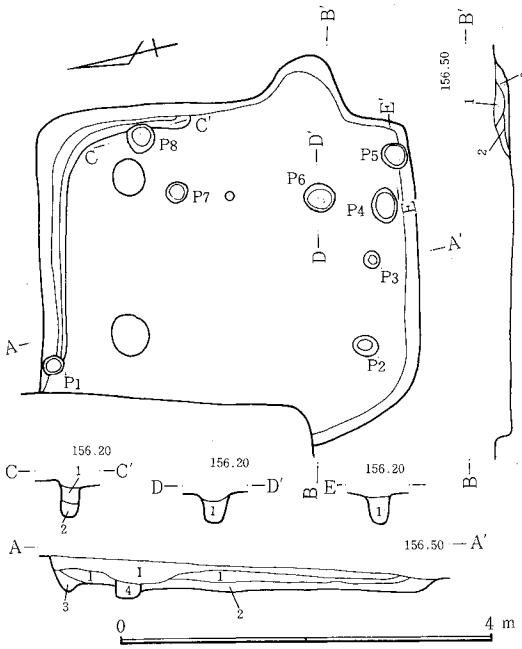
いずれも焼けていた。袖部内幅は66cm、住居床面と燃焼部のレベル差は11cmである。攪乱が大きく、煙道部分は不分明である。　**遺物**　カマド左袖付近に土師器甕の破片が見られる。　（鵜木）



図－509　H－329号住居跡出土遺物

1．黒色土。2．暗褐色土。ローム粒主体。3．暗褐色土。ローム主体。　**カマド**　1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、微量の焼土混入。2．赤褐色土。多量の焼土塊混入。3．赤褐色土。多量の焼土粒混入。4．茶褐色土。少量のローム塊混入。

H330号住居跡（5H－59）（図－510、511　図版－31、112　表－250）（X期）



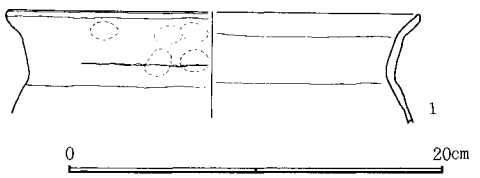
1．黒色土。FP・C軽石、自然石多量に混入。2．暗褐色土。ローム主体。微量のFP軽石混入。3．暗褐色土。ローム主体。4．黒茶褐色土。FP・C軽石多量に混入。　**カマド**　1．茶褐色土。FP・C軽石、焼土粒多量に混入。2．茶褐色土。ローム粒、FP・C軽石多量に混入。3．赤茶褐色土。ローム、少量の焼土塊、炭化物混入。**P1**．茶褐色土。FP・C軽石、ローム粒多量に混入。2．暗褐色土。ローム粒主体。

図－510　H－330号住居跡

位置　イ10に所在する。西台地の調査地区14区の集落のほぼ中央部に位置する。近くにはH331号、332号住居跡やK134号堀立柱建物跡がみられる。　**形状**　南北3.8m、東西3.1mの長方形を呈するものの、西壁の3分の2はカマ堀（ごぼうを掘る溝）によって破壊されている。壁高16～30cm、面積11.4m²、長軸方向はN－11.5°－Eを測る。周溝は幅3～11cm、深さ4～5cmのものが東壁カマド北側から北壁にみられる。

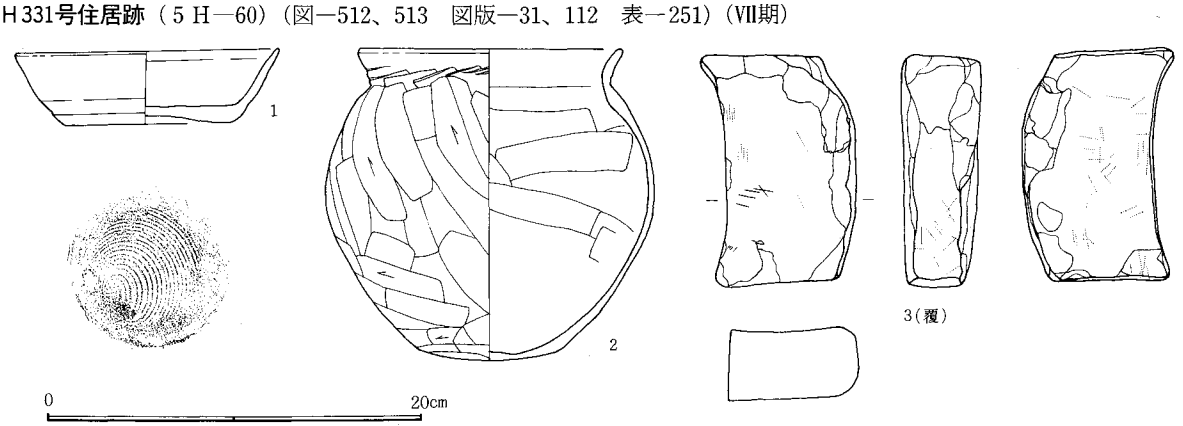
ピット　8個のピットがみられる。とくにP_5は南東隅近くにあって壁にくい込むようにして掘られている。柱穴にはどのピットが該当するかは不明である。　**カマド**　東壁南寄りに設置されている。全長68cm、燃焼部長46cm、袖部内幅90cm、壁への掘り込みの角度44°を測り、全長に比して袖部内幅が広くなっていることが、本カマドの一特徴になっている。住居床面よりも燃焼部は約8cmほど低くなっている。

貯蔵穴　P_5は当初、貯蔵穴と思われたが覆土の様子からピットとして扱うことにより、貯蔵穴はない。　**遺物**　住居のほぼ中心部より土師器甕(1)の破片が出土している。　**重複関係**　K134号堀立柱建物跡と重複する。K134号堀立柱建物跡のP_6が本住居跡の地層断面に出ていることにより、本住居跡の方が旧いと考える。　（中澤）

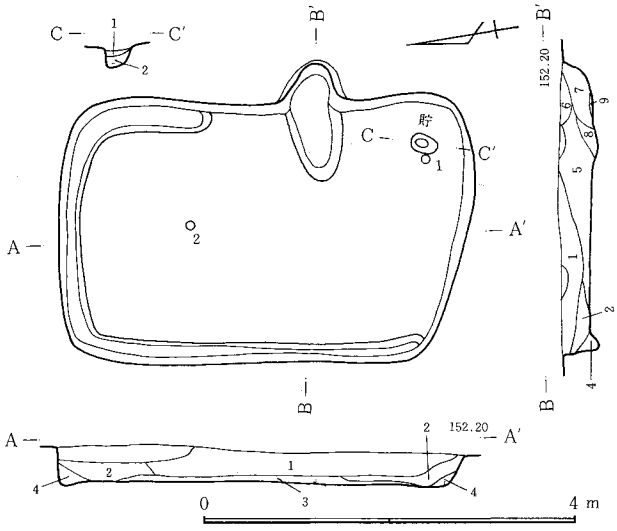


図－511　H－330号住居跡出土遺物

H331号住居跡（5H－60）（図－512、513　図版－31、112　表－251）（Ⅶ期）



図－512　H－331号住居跡出土遺物



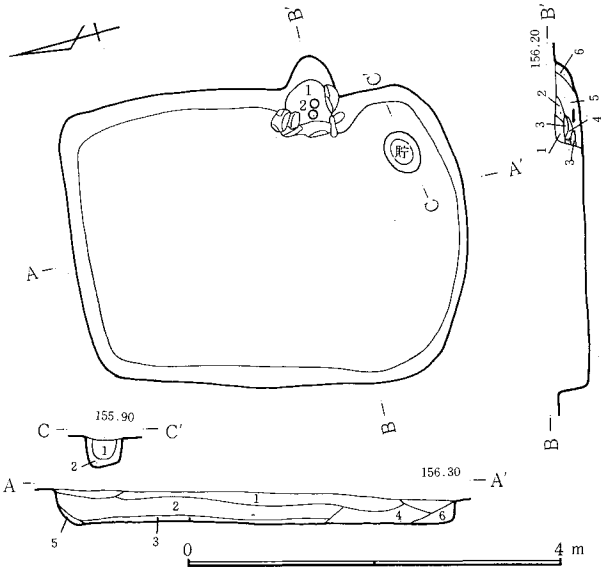
位置　イ10に所在する。西台地東部に所在する一大集落のほぼ中央部に位置する。40mほど東が谷となる。西接してH332号住居跡がある。　**形状**　南北4.1m、東西2.6mの長方形で長軸方向はN－9°－Eである。しかし長方形とはいえ南壁は北壁と平行でなく、東の方が外に広がっている。壁高は29～39cm、面積11.3㎡を測る。南東隅の壁面は外にえぐられている状態である。周溝は幅3～7cm、深さ3～5cmで東壁のカマド北側から北壁、そして西壁にめぐらされている。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄りに設置されている。全長64cm、燃焼部長54cm、袖部内幅38cm、壁への掘り込みの角度61°を測る。　**貯蔵穴**　南東隅に設置する。長軸27cm、短軸18cm、深さ29cmである。　**遺物**　貯蔵穴近くより須恵器坏(1)(一部破損)、床面中央よりやや北側で土師器甕(2)の破片が出土している。　(中澤)

1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量のローム塊混入。2．茶褐色土。多量のFP・C軽石混入。3．茶褐色土。多量のローム混入。4．暗褐色土。ローム主体。5．茶褐色土。FP・C軽石、焼土粒多量に混入。6．茶褐色土。多量の焼土粒、白色粘土混入。7．赤褐色土。焼土塊・赤色ローム主体。白色粘土少量混入。8．赤褐色土。焼土粒、炭化物少量混入。9．黒色土。焼土粒、ローム粒少量混入。　**貯**　1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量のローム塊混入。2．汚れたローム。

図－513　H－331号住居跡

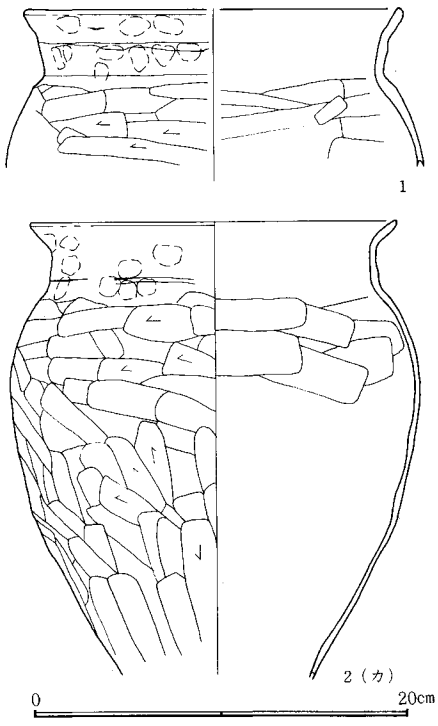
H332号住居跡（5H－61）（図－514、515　図版－32、112　表－252）（XI期）

位置　A10およびイ10にかけて所在する。調査地区14区の一大集落のほぼ中央部に位置する。60mほど東へ行くと谷になる。　**形状**　南北長4.1m、東西2.9mの長方形で長軸方向はN－13°－Eを示している。壁高は26～62cmで面積10.4㎡を測る。長方形とはいいながら南壁は中央部が外へつき出し「く」の字を逆にしたような線を描く。周溝はみられない。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄りに設置されている。袖部やその上に覆われる冠材と思われる石がみられるところから、構築材は石を中心にしたと思われる。全長92cm、壁外への掘り込み58cm、燃焼部長68cm、袖部内幅50cm、壁への掘り込みの角度59°を測る。　**貯蔵穴**　南東隅で、長軸45cm、短軸36cm、深さ22cmを測る。　**遺物**　カマド内部より土師器甕2個体が出土している。底部が欠けていたり、口縁部のみの甕である。これらの甕はカマドの壁を構築するものに使用したものでないことは出土の状況から推測できる。　**重複関係**　J－53と重複する。　(中澤)



1．黒色土。FP・C軽石少量混入。砂質。2．黒茶褐色土。多量のFP・C軽石、ローム混入。3．茶褐色土。多量の褐色ローム、少量のFP・C軽石混入。4．茶褐色土。FP・C軽石、焼土粒、炭化物粒混入。5．暗褐色土。6．茶褐色土。炭化物、軽石混入。
カマド　1．茶褐色土。少量のC軽石、ローム粒、焼土粒混入。2．茶褐色土。多量のローム粒混入。3．茶褐色土。多量の焼土、少量のローム混入。4．茶褐色土。多量の焼土、ローム混入。5．赤褐色土。多量の焼土塊、ローム混入。6．茶褐色土。多量のローム含。　**貯**　1．黒茶褐色土。FP・C軽石混入。2．黒っぽい土。堅く締る。

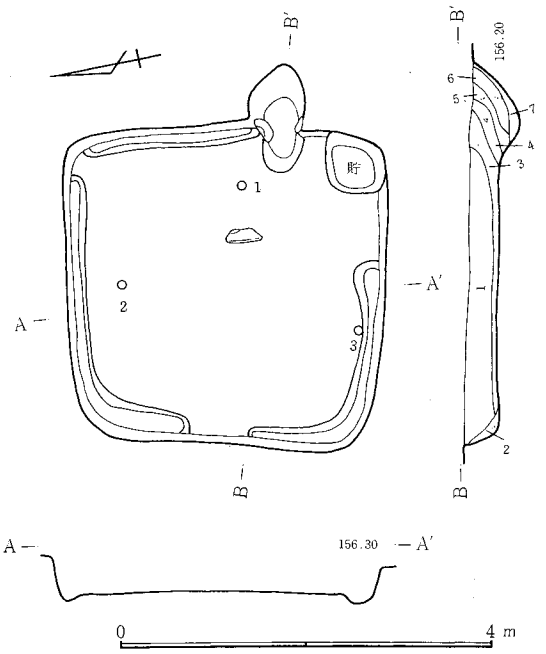
図514　H－332号住居跡



図－515　H－332号住居跡出土遺物

H333号住居跡（5H－62）（図－516、517　図版－32、112　表－253）（X期）

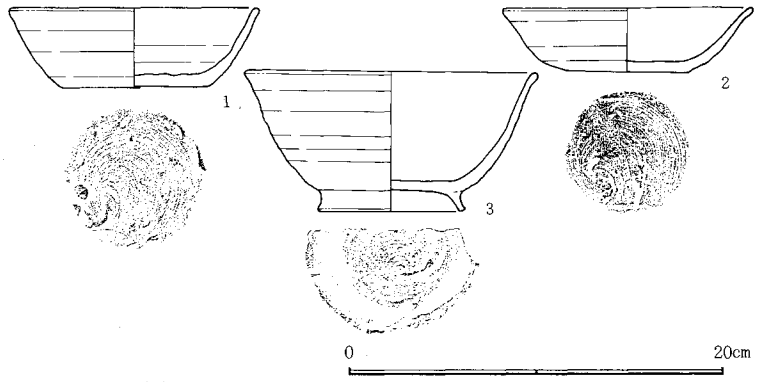
位置　A10に所在する。H332号住居跡の西約20mほどに位置する。約70mほど東へ行くと谷になる。　**形状**　南北3.2m、東西長3.3mの正方形を呈す。東壁の偏きはN－15.5°－Eを示す。壁高25～41cm、面積10.0㎡である。周溝は北東隅、西壁中央部、カマド部分、貯蔵穴周辺を除いた他はみられる。周溝の幅5～17cm、深さ3～5cmを測る。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄りに設置されている。袖部を構築した石が2個確認できる。全長82cm、壁外への掘り込み77cm、燃焼部長48cm、袖部内幅24cm、壁へ



図－516　H－333号住居跡

1．黒色土。多量のFP・C軽石、ローム塊混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム粒混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。4．黒色土。FP・C軽石混入。5．茶褐色土黒色土、焼土、灰白色粘土。6．茶褐色土。灰白色粘土、焼土混入。7．黒褐色土。ローム、焼土混入。

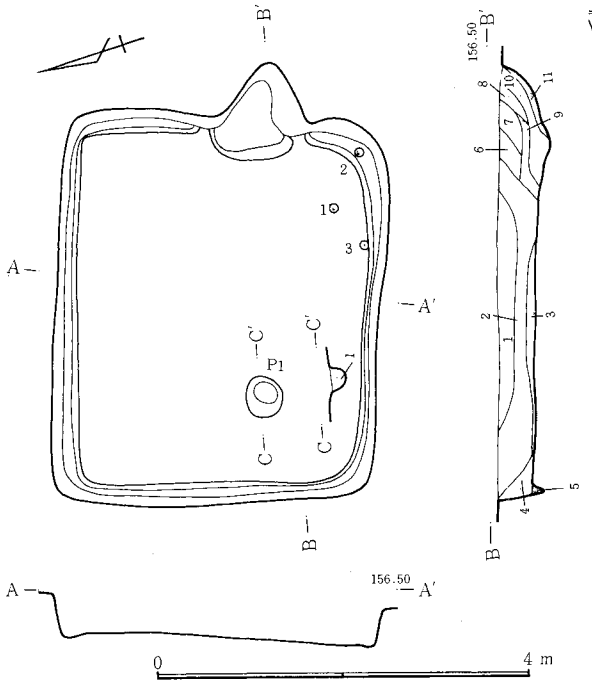
の掘り込みの角度46°を測る。燃焼部は床面より22cm低くなっている。　**貯蔵穴**　南東隅にあって径60cmほどの円形を呈し、深さ32cmを測る。　**遺物**　カマド左側袖部前方で須恵器坏(1)、北壁寄りの床面より同じく須恵器坏(2)の破片や一部分が出土している。また、南壁の周溝部から須恵器埦(3)(部分)が、上からすべり落ちるような状態で出土している。　(中澤)



図－517　H－333号住居跡出土遺物

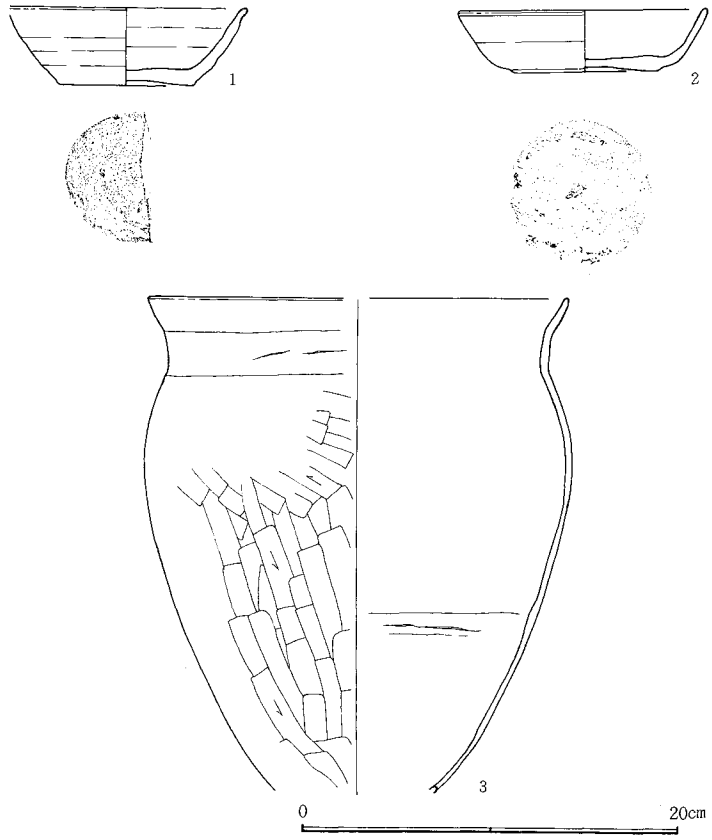
H334号住居跡（5H－63）（図－518、519　図版－32、112　表－254）（X期）

位置　B10に所在する。西台地の中央部やや東に位置している。　**形状**　南北3.2m、東西3.9mの長方形を呈する。長軸方向は本遺跡ではめずらしく東西で、N－68°－Wを測る。壁高は37～47cm、面積は12.7m²である。幅3～18cm、深さ2～4cmの周溝がカマド部分を除いて全周にみられる。　**ピット**　P_1、床の中央より南西に寄ったところ。長径43cm、短経35cm、深さ18cmの規模をもつピットがみられる。その性格は不明である。　**カマド**　東壁中央より南寄りに設置されている。全長90cm、燃焼部長72cm、袖部内幅74cm、壁への掘り込み角度39°を測る。床面と燃焼部との比高差は燃焼部の方が16cm低くなっている。　**遺物**　須恵器坏(2)が南壁下の周溝部より出土している。(完形)。また、南壁近くでは土師器甕(3)、須恵器坏(1)の破片が出土している。　(中澤)



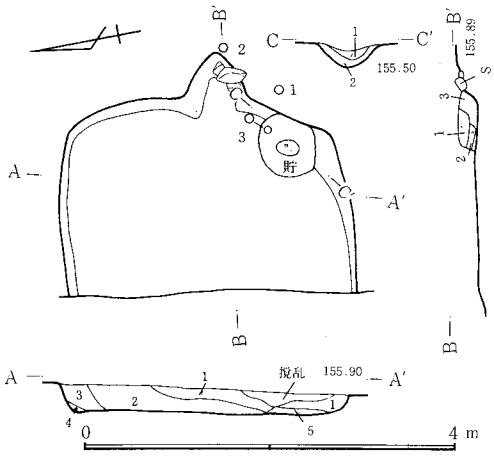
1．黒色土。FP・C軽石混。2．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊・粒混入。3．黒色土。FP・C軽石、ローム粒混入。4．黒色土。FP・C軽石、下層にローム混入。5．黒色土。6．茶褐色土。FP・C軽石混入。7．褐色土。ローム粒、FP・C軽石、少量の焼土混入。8．黒褐色土。FP・C軽石、ローム粒。塊、多量の焼土混入。9．黒褐色土。8に類似で、焼土は少量。10．赤褐色土。焼土、FP・C軽石混入。11．黒褐色土。焼土、ローム粒混入。P_1 1．黒褐色土。FP・C軽石多量に混入。

図－518　H－334号住居跡



図－519　H－334号住居跡出土遺物

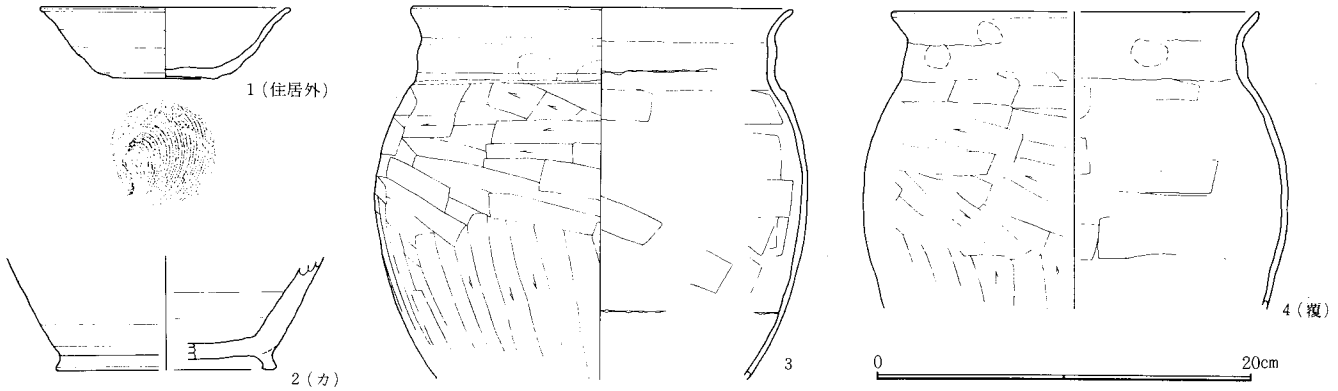
H335号住居跡（5H－64）（図－520、521　図版－32、112　表－255）（XI期）



位置　B9に所在する。西台地中央部よりやや東に位置し、近くには竪穴住居跡群がある。80m東へ行くと谷になる。　**形状**　南北2.9m、東西1.9m以上〔西壁はカマ堀(ごぼうを掘った穴)によって破壊され不明〕の長方形で、長軸方向はN－11°－Eである。壁高は24～35cm、面積は5.3m²以上を測る。　**カマド**　東壁のほぼ中央に位置し、構築材は石を主に使用しており、煙道部や燃焼部に石が残っている。全長70cm、壁外への掘り込み62cm、燃焼部長44cm、袖部内幅40cm、壁への掘り込みの角度52°を測る。　**貯蔵穴**　南東隅に径58cmほどの円形で深さ29cmを測る。　**遺物**　カマド内より土師器甕の口縁部から胴部にかけて残存するものが埋設された状態で出土している。貯蔵施設なのか、カマドに関する施設なのかは不明である。　（中澤）

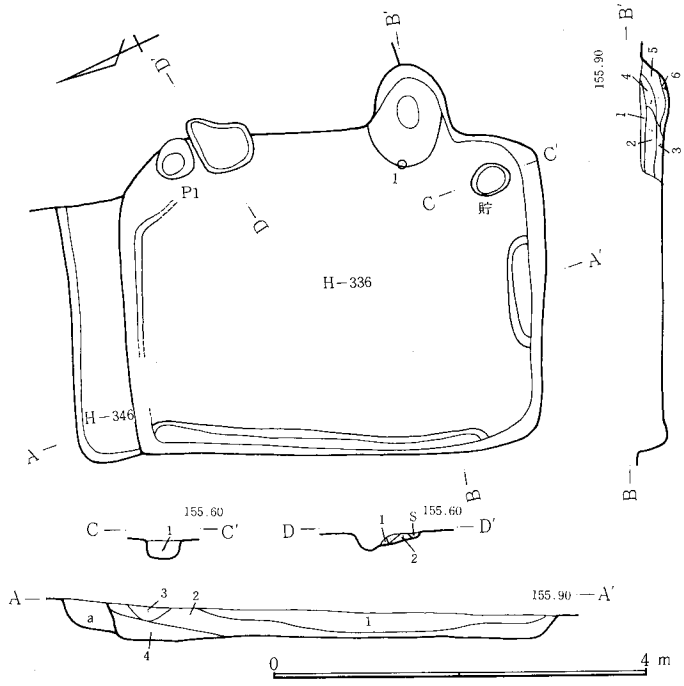
1．黒茶褐色土。FP・C軽石、ローム粒多量に混入。2．茶褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。3．茶褐色土。ローム、FP・C軽石混入。4．暗褐色土。ローム主体。5．茶褐色土。ローム混入。　**カマド**　1．茶褐色土。多量のFP・C軽石混入。2．茶褐色土。ローム、焼土、FP・C軽石混入。3．赤茶褐色土。焼土、炭粒。
貯　1．茶褐色土。ローム主体。2．暗褐色土。ローム主体。

図－520　H－335号住居跡



図－521　H－335号住居跡出土遺物

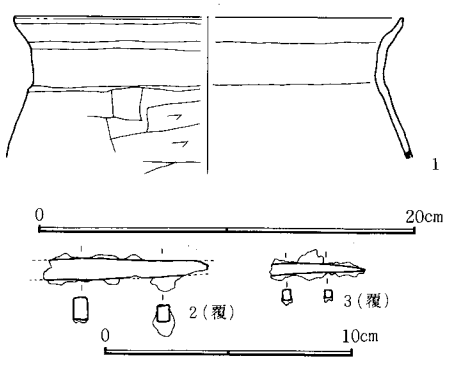
H336、346号住居跡（5H－65、75）（図－522、523　図版－32、112　表－256）（X、不明期）



1．茶褐色土。FP・C軽石、ローム混入。2．多量のローム・FP・C軽石混入。3．褐色土。ローム主体。4．茶褐色土。ローム塊(φ1～3cm)多量に混入。a．茶褐色土。ローム塊(φ2～6cm)混入。　**H336カマド**　1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量の焼土混入。2．茶褐色土。多量のFP・C軽石、焼土混入。3．茶褐色土。焼土わずか混入。4．茶褐色土。多量のC軽石、焼土混入。5．赤褐色土。多量の焼土粒混入。6．茶褐色土。少量の焼土粒混入。　**貯**　1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、灰、焼土混入。
H346　1．黒茶褐色土。FP・C軽石、ローム塊少量混入。2．暗褐色土。ローム塊少量混入。

図－522　H－336・346号住居跡

位置　A9に所在する。西台地の14区のほぼ中央に位置する。　**形状**　〔H－336〕南北4.3m、東西3.3mの長方形を呈し、長軸方向はN－23°－Eを示す。壁高22～35cm、面積13.8m²(推定)を測る。〔H－346〕H－336北壁部分に南北47cm、東西270cmの規模で床面の一部がみつかっているのみで、全体の形状等については不明である。　**ピット**　〔H－336〕1個みつかっている。その規模は径38cm、深さ53cmである。〔H－346〕なし。　**カマド**　〔H－336〕東壁南寄りに設置されている。全長86cm、燃焼部長52cm、壁への掘り込みの角度47°を測る。燃焼部内幅の規模については、H－335によって破壊されているので不明である。〔H－346〕H－337およびH－336の住居が作られる過程において破壊されているが、底面に赤みを帯びたピットの状態でみつかっている。みつかったときの規模は南北60cm、東西60cm



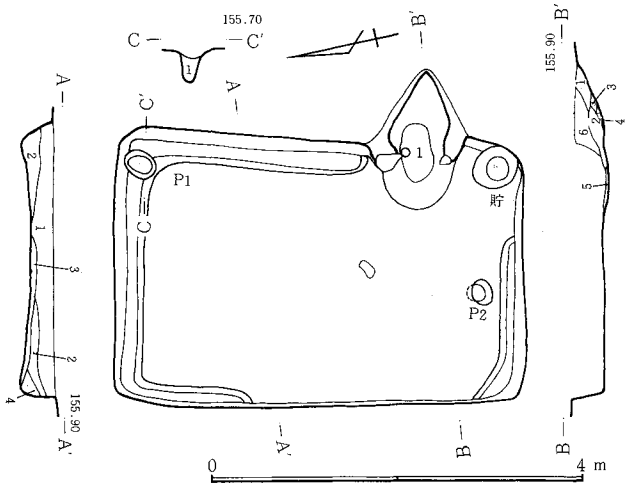
図－523　H－336・346号住居跡出土遺物

（一番長いところで）ほどである。その他のことについては不明である。　**貯蔵穴**　〔H－336〕南東隅にあって、長軸38cm、短軸33cm、深さ26cmを測る。〔H－346〕不明である。　**遺物**　〔H－336〕カマド前より土師器甕の破片(1)が出土している。〔H－346〕なし。ただし住居跡の覆土中より鉄製品が二点出土している。　（中澤）

H337号住居跡（図－524、525　図版－32、112　表－257）（XI期）

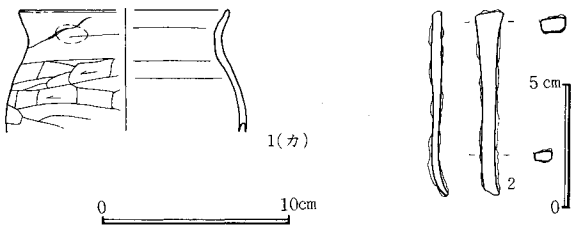
位置　A 9に所在する。H333号住居跡に南接する。　**形状**　南北4.1m、東西2.7mの長方形を呈し、長軸方向はN－13.5°－Eを示す。壁高22～31cm、面積11.0m²を測る。周溝は幅７～20cm、深さ５～９cmで、カマド部分とH336号住居跡と重複する部分を除いた他は、確認できる。　**ピット**　北東隅近くのP_1は長径32cm、短径20cm、深さ39cmを測る。南壁近くのP_2は28cm、20cm、22cmの規模をもち、底部は口縁部に比してやや北に偏いている。いずれもその性格は不明である。　**カマド**　東壁中央より南寄りに設置されている。左右の袖部から石が見つかっていることから、石も構築材として用いていたようである。全長114cm、壁外への掘り込み100cm、燃焼部長56cm、袖部内幅40cm、壁への掘り込み角度25°を測る。住居床面に比して燃焼部は２cmほど低くなっている。

貯蔵穴　東壁の南端に設置されている。長軸46cm、短軸40cm、深さ13cmである。　**遺物**　カマド内より土師器甕(1)の破片が出土している。本住居跡の覆土中より鉄製品が出土している。　**重複関係**　H336号住居跡およびH346号住居跡と重複する。地層の切り合いをもとにすると、三住居跡の新旧関係は次のように考えられる。(旧)H346号→H336号→H337号(新)。　（中澤）



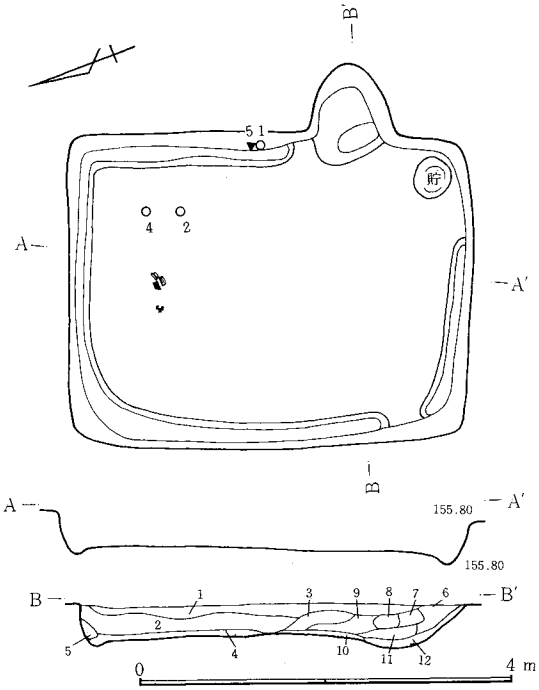
1．茶褐色土。ローム、ＦＰ・Ｃ軽石多量に混入。2．黒色土。ローム混入。ＦＰ・Ｃ軽石わずか。3．暗褐色土。ローム主体。4．茶褐色土。軟かい。　**カマド**　1．赤茶褐色土。焼土多量に混入。2．赤茶褐色土。焼土、ローム多量混入。3．赤色土。焼土塊主体。灰少量混入。4．赤茶褐色土。黒色土、ローム多量に混入。5．茶褐色土。焼土、ローム少量混入。6．住居跡断面の１に同じ。P_1 1．黒茶褐色土。

図－524　H－337号住居跡



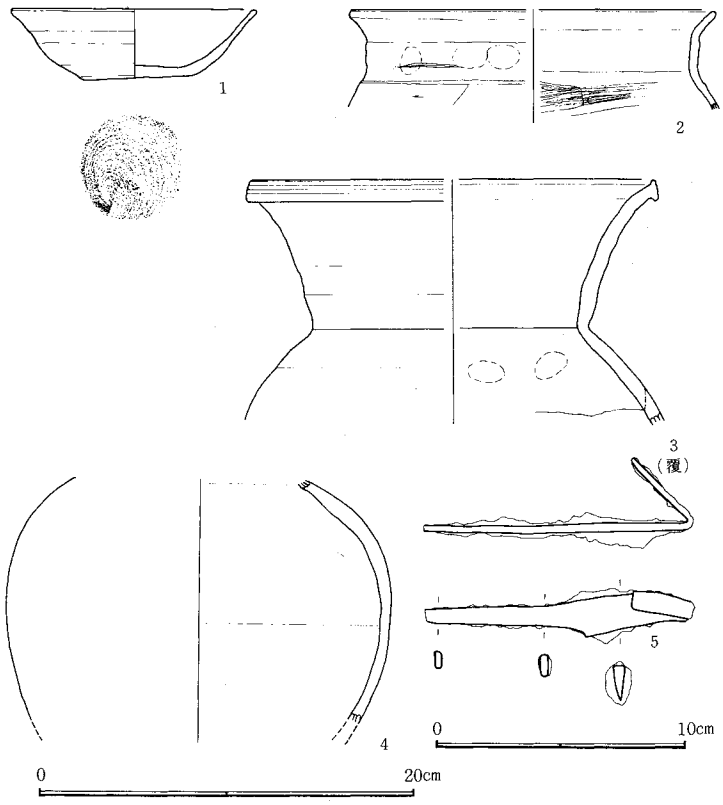
図－525　H－337号住居跡出土遺物

H338号住居跡（５H－67）（図－526、527　図版－32、112　表－258）（X期）



1．黒茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム多量混。2．黒茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム、少量の焼土、炭化物混。3．黒茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、炭粒、ローム混。4．暗褐色土。ローム主体。5．茶褐色土。多量ローム粒混。6．赤色土。焼土塊(φ１～３cm)主体。7．茶褐色土。焼土、ローム多量混。8．ローム塊。9．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土、炭粒混。10．褐色土。焼土、ＦＰ・Ｃ軽石少量混。11．赤茶褐色土。ローム主体。焼土多。12．褐色ローム主体。焼土少量混。下部灰。

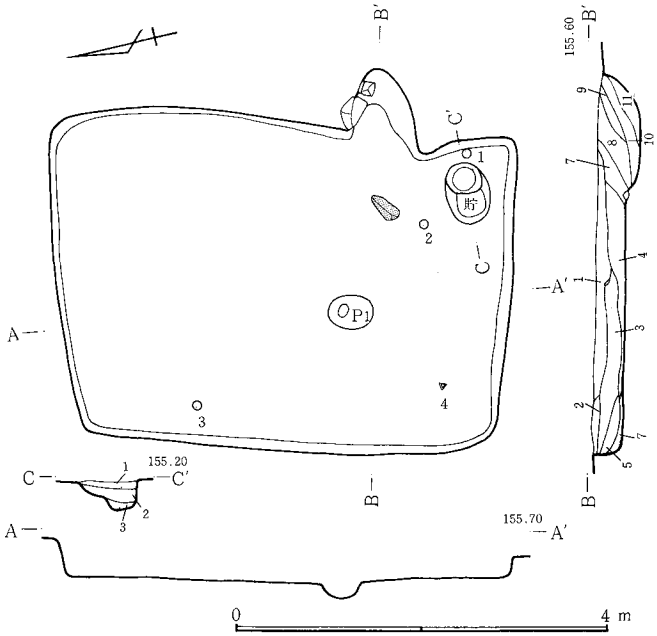
図－526　H－388号住居跡



図－527　H－338号住居跡出土遺物

位置　A９に所在する。H－335に南接する。　**形状**　南北4.1m、東西3.1mの長方形で、長軸方向はN－23°－Eを示す。壁高29～35cm、面積12.6m²を測る。幅７～27cm、深さ３～７cmの周溝が東壁カマド北側から北壁、西壁の下にみられる。また、南壁の３分の２ほどにもみられる。　**カマド**　東壁南寄りに設置されている。全長84cm、燃焼部長60cm、袖部内幅70cm、壁への掘り込み角度40°、床面に比して燃焼部はおよそ17cmほど低くなっている。　**貯蔵穴**　南東隅にある。長径43cm、短軸34cmの楕円形である。　**遺物**　東壁下の周溝より須恵器坏破片(1)、鉄製品(5)が出土している。鉄製品は何であるか不明。北東隅近くでは土師器甕(2)の破片が、北壁下の周溝際からは須恵器壺の破片がそれぞれみつかっている。土師器甕の破片が出土した西側で炭化物がみつかっている。15cmほどの長さをもつものや、５～６cmのもの、さらに小さなものなどがみつかっている。　（中澤）

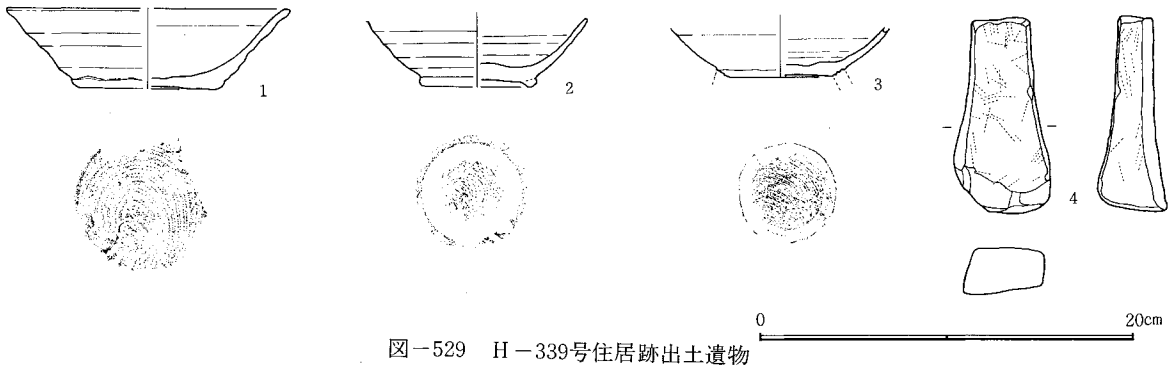
H339号住居跡（５H－68）（図－528、529　図版－32、113　表－259）（X期）



位置　A９に所在する。H338号住居跡の東隣に位置する。60mほど東へ行くと谷になる。　**形状**　南北4.7m、東西3.6mの長方形であるが、西壁よりも東壁の方が長く、台形に近いものである。しかも四隅の角度がそれぞれ異なるのも特徴的である。壁高30～40cm、面積15.5m²を測る。なお長軸方向はN－15°－Eを示す。周溝はみられない。　**ピット**　カマドと西壁の中間ほどに１個みつかっている。規模は長径45cm、短径33cm、深さ16cmである。　**カマド**　東壁南寄りに位置する。燃焼部や煙道部から石がみられるところから構築材として石の使用もあったと考える。全長80cm、燃焼部長50cm、袖部内幅70cmを測り、長さと幅がほぼ同じ値を示し、全体としては丸味を帯びている。壁への掘り込みの角度は37°である。　**貯蔵穴**　南東隅にあって長軸66cm、短軸48cm、深さ35cmを測る。　**遺物**　カマド近くで須恵器埦(一部破損)、北西隅近くから須恵器坏の底部がそれぞれ出土している。南西隅近くからは、よく使い込まれた砥石が出土している。なお、カマド前ではカマドに使われたと思われる焼石がみつかっている。　（中澤）

1．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。2．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土混入。3．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石。4．茶褐色土。多量のＣ軽石、ローム塊、少量のＦＰ軽石、焼土混入。5．茶褐色土。少量のローム、Ｃ軽石混入。6．茶褐色土。多量のローム混入。7．茶褐色土。多量のローム混入。8．茶褐色土。多量のローム、少量の焼土混入。9．８に類似で締る。10．茶褐色土。多量のローム、焼土混入。11．10類似。　貯　1．茶褐色土。少量のＣ軽石混入。2．茶褐色土。少量のローム混入。3．茶褐色土。多量のローム粒混入。

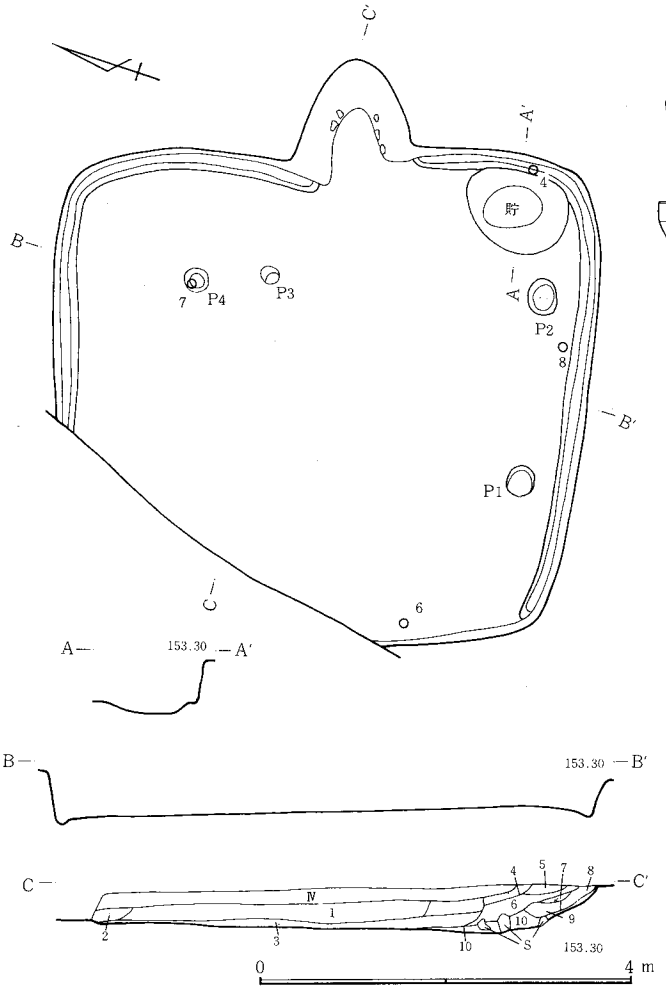
図－528　H－340号住居跡



図－529　H－339号住居跡出土遺物

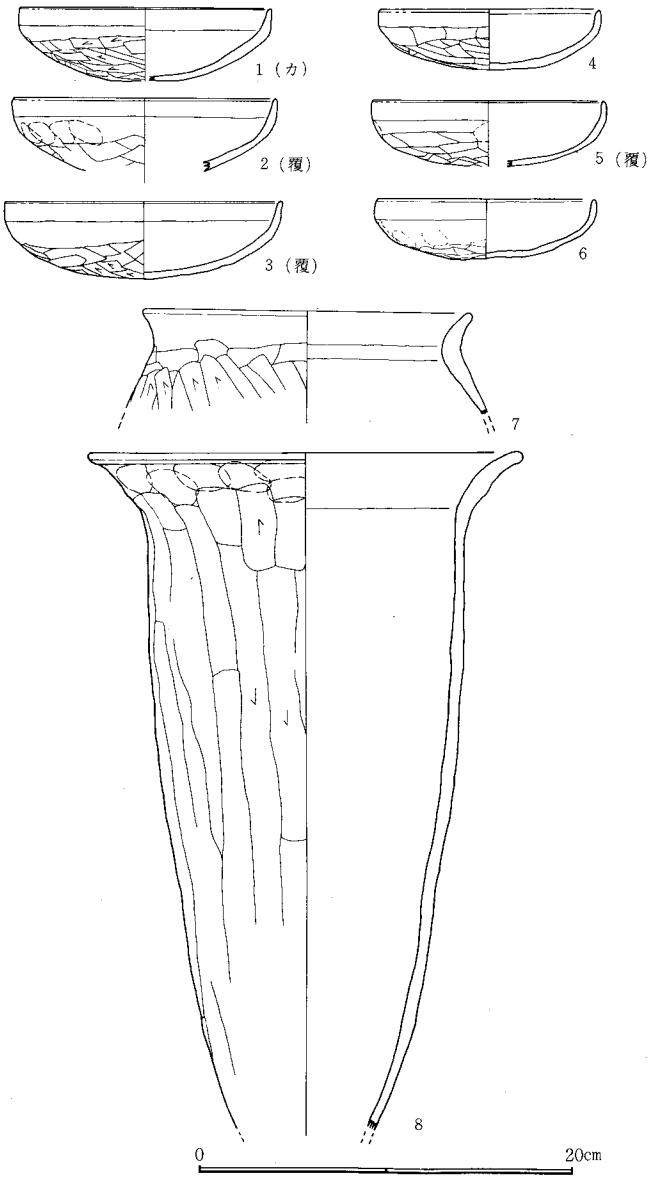
H340号住居跡（５H－69）（図－530、531　図版－32、113　表－260）（V期）

位置　西台地東端、A５に所在し、南へゆるく傾斜する所にある。　**形状**　北西の隅から北壁約3分の１、西壁約３分の２の部分が現在の道路及び側溝で壊されているため全貌が明らかでないが、ほぼ南北に長軸を持つ長方形と推定される。南北5.5m、東西4.6m以上であろうか。長軸方向はN－16.5°－W、面積は24.2m²以上、壁高26～48cmである。北、南、東壁下全部に周溝をめぐらす。幅６～12cm、深さ３～10cmである。　**ピット**　P_1～P_4いずれも柱穴と推定される。P_1は32×27cm、深さ52cm、P_2は40×27cm、深さ37cm、P_3は18×18cm、深さ26cm、P_4は28×26cm、深さ43cmである。　**カマド**　東壁ほぼ中央に位置し、燃焼部に５個の礫構築材が出土している。全長140cm、袖部内幅64cm、燃焼部長86cm、壁への掘り込み角度30°、壁外掘り込み118cmである。燃焼部は床面より約２cm低い。　**貯蔵穴**　東壁南隅、ゆがんだ円形で規模は112×84cm、深さ13cmである。　**遺物**　土師器の坏と甕が出土している。　**テフラ**　Ⅳ層にＥＰ、Ｃ軽石を多量に含んでいる。　（木部）



1．暗褐色土。少量のC軽石混入。2．黒褐色土。少量のC軽石混入。3．黒色土とローム塊。4．褐色土。FP・C軽石少量混入。5．黒色土。焼土少量混入。6．暗褐色土。焼土塊混入。7．黒褐色土。焼土少量混入。8．赤褐色土。焼土塊少量混入。9．暗褐色土。焼土、焼土塊混入。10．黒色土。焼土粒、炭化物混入。

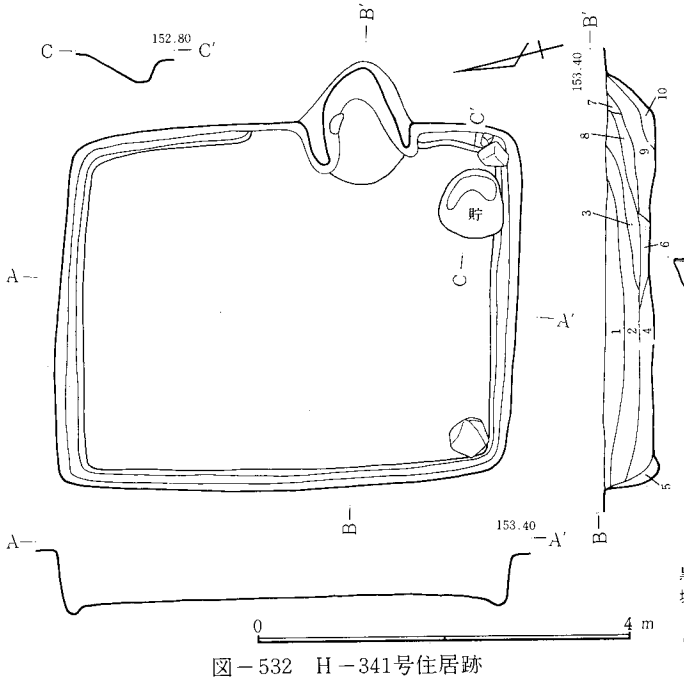
図－530　H－340号住居跡



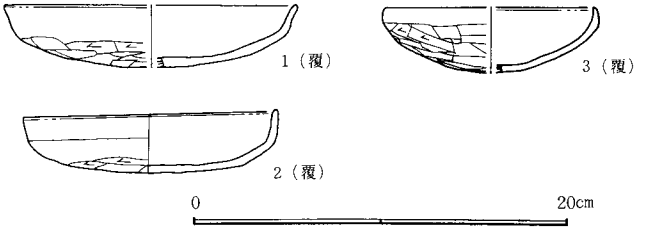
図－531　H－340号住居跡出土遺物

H341号住居跡（5H－70）（図－532、533　図版－33、113　表－261）（Ⅶ期）

位置　西台地の南東のA－5・6に位置する。付近は竪穴住居跡の多いところである。南への緩斜面にある。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北4.6mで東西3.7mである。長軸方向は、N－10°－Eで面積は15.6m²、壁高は47～62cmである。ほぼ全周に周溝をめぐらす。幅5～17cmで深さ4～13cmである。　**ピット**　なし　**カマド**　東壁南寄りにある。住居内に袖部を造り出している。構築材に1



図－532　H－341号住居跡



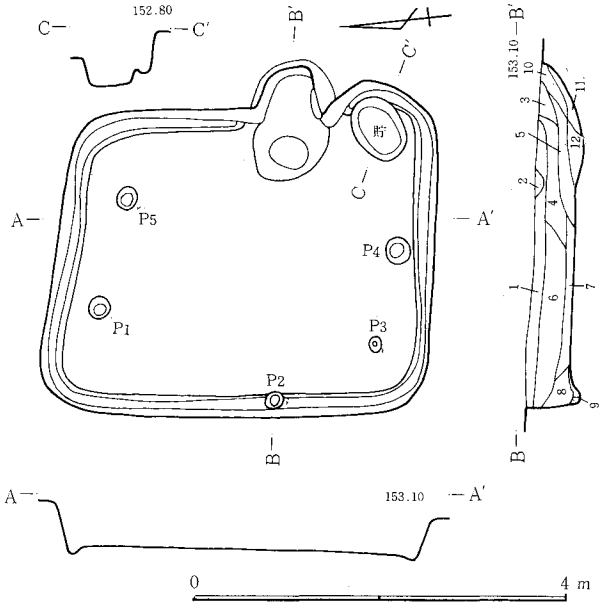
図－533　H－341号住居跡出土遺物

1．暗褐色土。多量のFP・C軽石、少量の焼土混入。2．1に類似。焼土多量に混入。3．黒色土。焼土ブロック主体。FP・C軽石、ローム塊少量混入。4．黒色土。多量のローム塊混入。5．ローム塊と黒色土。6．暗褐色土。焼土、FP・C軽石、ローム塊少量混入。7．灰白色土。灰主体。焼土塊多量に混入。8．灰白色土。灰主体。焼土塊多量に混入。9．黄褐色土。多量の焼土、C軽石混入。10．黒色土。少量の焼土混入。

石が燃焼部左壁にある。全長122cm、袖部内幅70cm、燃焼部長84cm、壁への掘り込み角度41°で壁外掘り込みは76cmである。燃焼部は床面にくらべて5cm低い。 **貯蔵穴** 南壁東寄り、長円形で、規模は76×64cmで深さ30cmである。 **遺物** 埋土中より土師器坏(1・2・3)が出土している。住居南西隅に1石と南東隅に2石。性格はいずれも不明。 **テフラ** 1層にはFP・C軽石を多量に混入している。2層・3層にも少量FPとC軽石が混入している。 (井野)

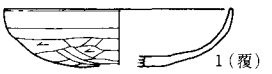
H342号住居跡 (5H—71) (図—534、535 図版—33、113 表—262) (Ⅶ期)

位置 西台地南東のイ5・6区に位置する。南への緩斜面上に所在する。竪穴住居跡・掘立柱建物跡が密集して大きな半円を作っている地区の南西に位置する。東側は住居跡・建物跡も少なくなっている。 **形状** ほぼ南北に長軸をもつ長方形で、西壁と南壁はほぼ直角に交わっているが、北壁はやや東端が南をむき、鈍角で東壁と交わっている。南北3.9mで東西3.1mである。長軸方向はN—3.5°—E、面積は12.1m²である。全周の壁下に周溝をめぐらす。幅は6～23cmで、深さ5～8cmである。壁高は30～50cmである。壁は直にしっかりと掘り込まれている。 **ピット** 床面下5ヵ所。P_1は25×23cmで深さ48cm。P_2は18×15cmで深さ24cmで西壁周溝内。P_3は17×13cmで深さ10cm。P_4は37×22cmで深さ26cmで南壁下。P_5は25×18cmで深さ27cm。大きさ深さともまちまちではあるが、位置からは柱穴と推定することもできる。 **カマド** 東壁中央やや南寄り。燃焼部右壁に構築材を一石もつ。全長82cmで袖部内幅70cm、燃焼部長68cm、壁への掘り込み角度49°で壁外掘り込みは58cmである。燃焼部は床面より11cm低く、焚口の手前は灰かき穴がみとめられる。 **貯蔵穴** 東壁南寄り。規模は67×52cmで深さ26cmの長円形である。 **遺物** 埋土中より土師器坏(1)が出土している。 **テフラ** 1・4・7層は多量にC軽石を含んでいる。 (井野)



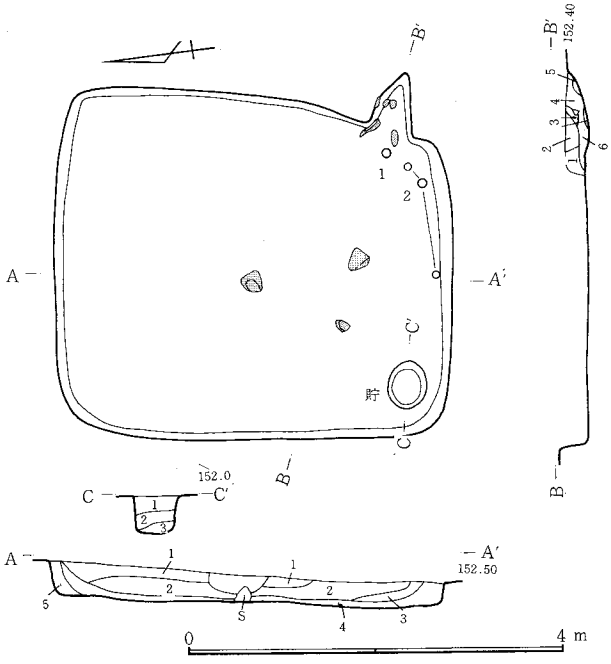
1．暗褐色土。多量のC軽石混入。2．褐色土。焼土混入。3．黒色土。焼土混入。4．黒色土。多量のC軽石混入。5．黒色土。FP・C軽石、少量の焼土混入。6．黒褐色土。少量のC軽石混入。7．黒色土。多量のC軽石混入。8．黒色土と褐色土の混合土。9．褐色土。10．黒色土。焼土塊主体。11．黒色土。焼土混入。12．黒色土。少量の焼土混入。

図—534 H—342号住居跡

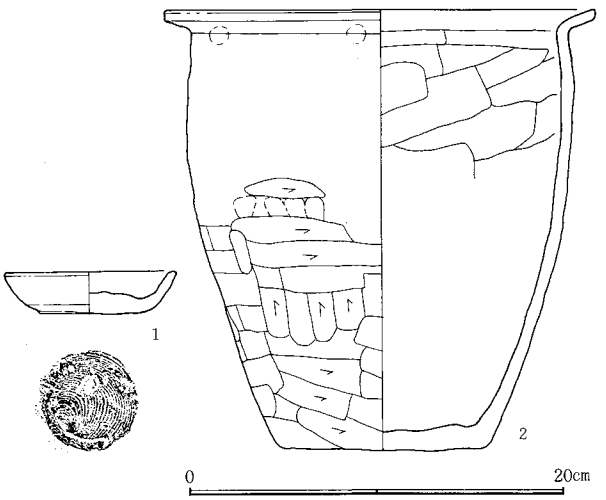


図—535 H—342号住居跡出土遺物

H343号住居跡 (5H—72) (図—536、537 図版—33、113 表—263) (XV期)



図—536 H—343号住居跡

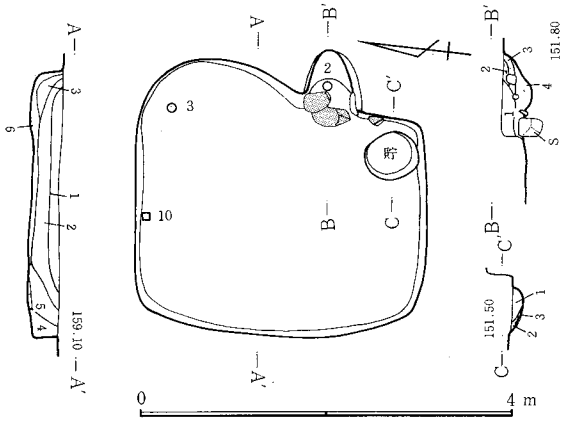


図—537 H—343号住居跡出土遺物

1．黒色土。少量のFP・多量のC軽石混入。2．黒色土。C軽石少量混入。3．黒褐色土。FP・C軽石混入。4．暗褐色土。C軽石少量混入。5．黒褐色土。 **カマド** 1．黒褐色土。少量のFP・多量のC軽石混入。2．黒褐色土。多量のC軽石、微量の焼土混入。3．焼土塊。4．黒色土。焼土塊多量混入。5．褐色土。少量の焼土混入。 **貯** 1．黒色土。C軽石多量混入。2．黒褐色土。C軽石少量混入。3．黒色土。ローム混入。

位置　西台地南東端、ロ５に所在し、なだらかに南へ傾斜する所にある。　**形状**　ほぼ南北に長軸を持つ長方形で、北西隅と南西隅は丸くなっている。規模は南北4.0m、東西3.5mである。長軸方向はN－3°－E、面積13.5m²である。　**ピット**　なし。　**カマド**　東壁南のかどに近い所にある。全長84cm、袖部内幅36cm、燃焼部長68cm、壁への掘り込み角度50°で、壁外掘り込みは74cmである。燃焼部は床面より約３cm低い。左袖石１個、支石１個、燃焼部に３個の石が確認された。いずれも焼石で赤化していた。　**貯蔵穴**　南西隅、ほぼ円形で48×44cm、深さ44cmである。貯蔵穴としては特殊な位置にある。　**遺物**　床面から10cm上がった所に焼石３個、同じレベルに土師器甕(2)が出土している。　**テフラ**　３層にC軽石多量に混入している。　（木部）

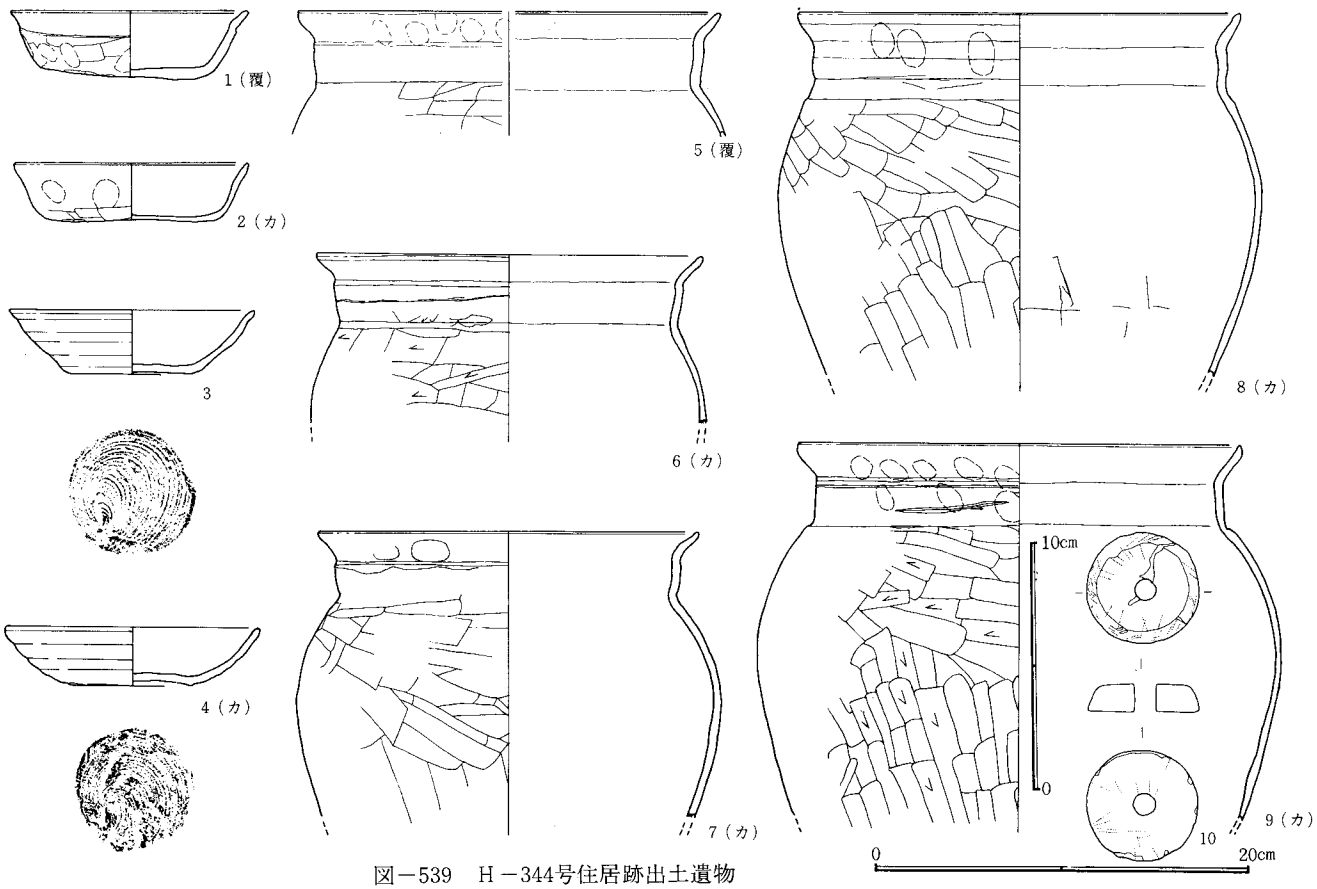
H344号住居跡（５H－73）（図－538、539　図版－33、115　表－264）（X期）



1．黒色土。C軽石多量混入。2．暗褐色土。C軽石多量混入。3．黒褐色土。C軽石少量混入。4．褐色土。5．黒色土。C軽石、焼土混入。6．黒色土。少並のローム塊混入。　**カマド**　1．黒色土。C軽石少量混入。2．褐色土。焼土塊混入。3．暗褐色土。焼土主体。4．黒褐色土。焼土少量混。　**貯**　1．暗褐色土。C軽石少量混入。2．黒褐色土。C軽石少量混入。3．褐色土。

図－538　H－344号住居跡

位置　西台地東端南寄り、ロ５に所在する。　**形状**　ほぼ南北に長軸を持つ長方形で、南北2.9m、東西2.4mである。カマドより北側の東壁は東へ湾曲して張り出す。長軸方向はN－5°－W、面積は6.2m²、壁高26～34cmである。周溝はなし。　**ピット**　なし。　**カマド**　東壁南寄り。全長72cm、袖部内幅44cm、燃焼部長44cm、壁への掘り込み角度50°で、壁外掘り込み72cmである。燃焼部は床面より５cm程低い。右側袖部から１個、焚き口から２個石材が出土している。いずれも焼けて赤化している。　**貯蔵穴**　南東隅、ほぼ円形で規模は54×47cm、深さ10cmである。　**遺物**　カマド内より、土師器坏(2)が、北東隅より須恵器坏(3)が、北壁中央下より紡錘車(10)が出土している。その他埋土中より土師器坏(1)と須恵器坏(4)、土師器甕（５・６・７・８・９）が出土している。　**テフラ**　１・２層中にC軽石が多量に混入していた。　（木部）



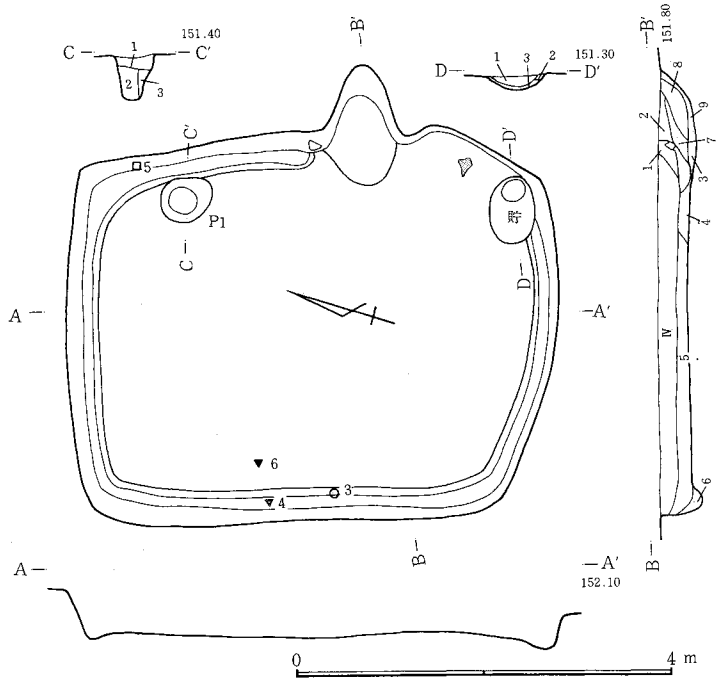
図－539　H－344号住居跡出土遺物

H345号住居跡（５H－74）（図－540、541　図版－33、113　表－265）（IX期）

位置　西台地東端、ロ４・５に所在し、南へなだらかに傾斜する所にある。　**形状**　北々西から南々東に長軸を持つ長方形で、南北5.0m、東西2.7mである。南壁がやや外側に湾曲して張り出す。東壁のカマドより南部分は、南壁に向かうに従ってせばまっている。長軸方向はN－20°－W、面積は17.9m²、壁高24～52cmである。東壁の北２分の１と西、南、北壁全部に周溝をめぐらす。幅７～28cm、深さ６～12cmである。　**ピット**　東壁のカマドより北の周溝にややかかって１つある。規模は54×48cm、深さ42cm。

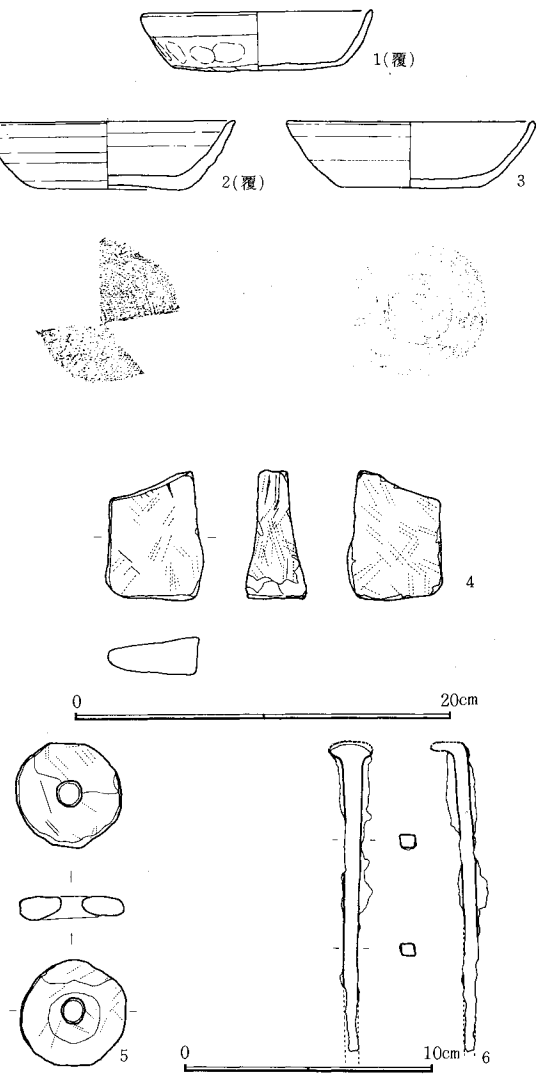
カマド　東壁やや南寄り。左袖部分に１個石材検出。全長94cm、袖部内幅74cm、燃焼部長62cm、壁への掘り込み角度46°で、壁外掘り込みは84cmである。燃焼部は床面より約５cm低い。　**貯蔵穴**　南壁東寄り、長円形で規模は69×52cm、深さ20cmである。　**遺物**　西壁下より砥石(4)、鉄製品(6)が出土、北東隅より紡錘車(5)が出土した。南東隅からは焼石が１個出土した。　**テフラ**　Ⅳ層にＦＰ、Ｃ軽石が多量に混入していた。

(木部)



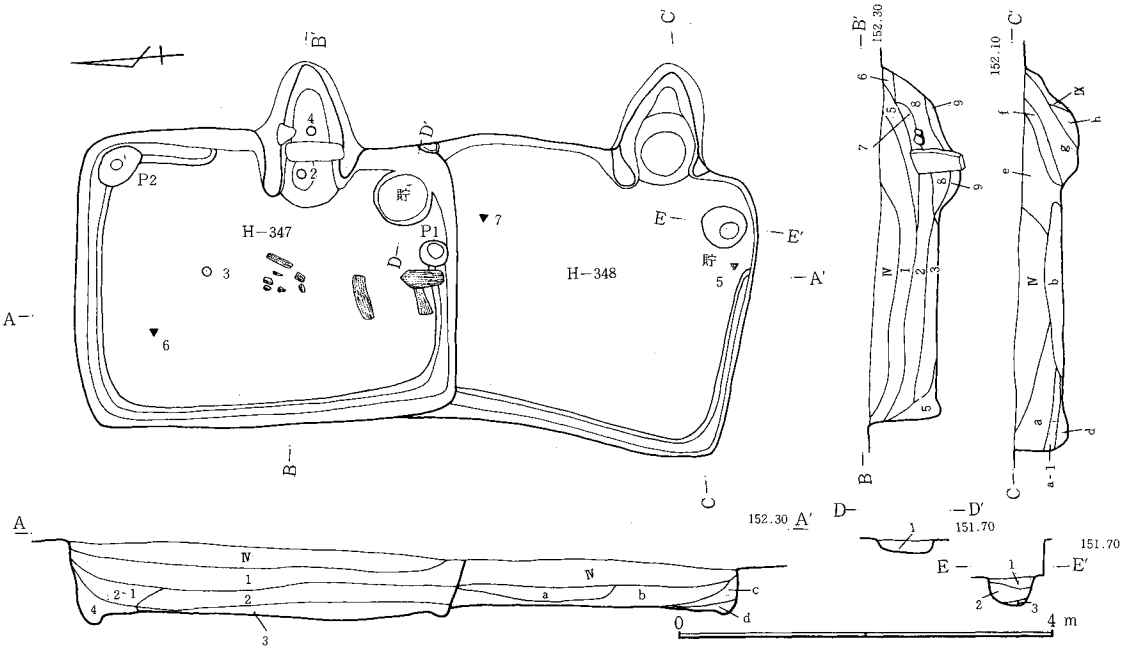
1．Ⅳに類似。焼土少量混入。2．暗褐色土。C軽石、焼土少量混入。3．黒色土。焼土、炭化物少量混入。4．黒褐色土。C軽石、少量の焼土混入。5．暗褐色土。C軽石混入。6．黒褐色土。7．焼土塊。8．黒褐色土。焼土塊、粒主体。9．黒色土。ローム塊、焼土。P_1 1．ロームと黒色土主体。C軽石少量混入。2．ローム塊と黒色土主体。3．暗褐色土。　貯　1．黒色土。C軽石少量混入。2．暗褐色土。C軽石少量混入。3．ロームと黒色土。

図－540　Ｈ－345号住居跡



図－541　Ｈ－345号住居跡出土遺物

Ｈ347、348号住居跡（５Ｈ－76、77）（図－542、543　図版－33、114　表－266）（Ⅸ、Ⅸ期）

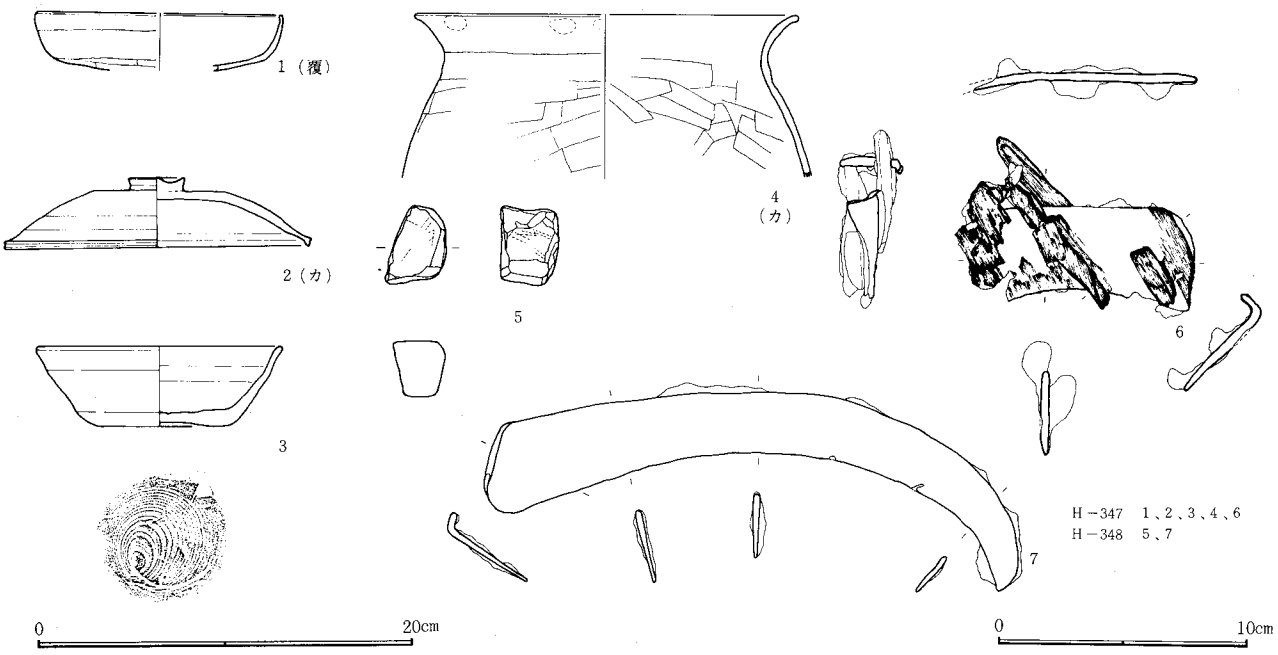


1．黒色土。C軽石主体。ＦＰ少量混入。2．暗褐色土。C軽石、ローム塊混入。2-1．暗褐色土。C軽石、ローム塊、微量のＦＰ軽石混入。3．黒褐色土。炭化物多量に混入。4．褐色土主体。5．暗褐色土。焼土少量混入。6．焼土。7．焼土塊。8．黒色土。焼土粒・塊混入。9．黒褐色土。炭化物、焼土混入。a．黒褐色土。ローム塊(φ1cm)、多量のＦＰ・C軽石混入。a-1．黒色土。ＦＰ・C軽石混入。b．黒褐色土。焼土粒、多量の炭化物混入。c．黒褐色土。d．暗褐色土。ローム塊多量に混入。e．茶褐色土。焼土、炭化物混入。f．黒褐色土。焼土、炭化物混入。g．赤褐色土。多量の焼土塊、焼土粒、炭化物混入。h．黒褐色土。焼土粒、多量の炭化物、灰混入。　H347　貯　1．黒褐色土。ローム、少量の焼土混入。

H348　貯　1．黒色土主体。焼土粒、炭化物、ローム、C軽石混入。2．茶褐色土。ローム塊(φ2～3cm)炭化物、C軽石混入。3．ローム粒、黒色土混入。

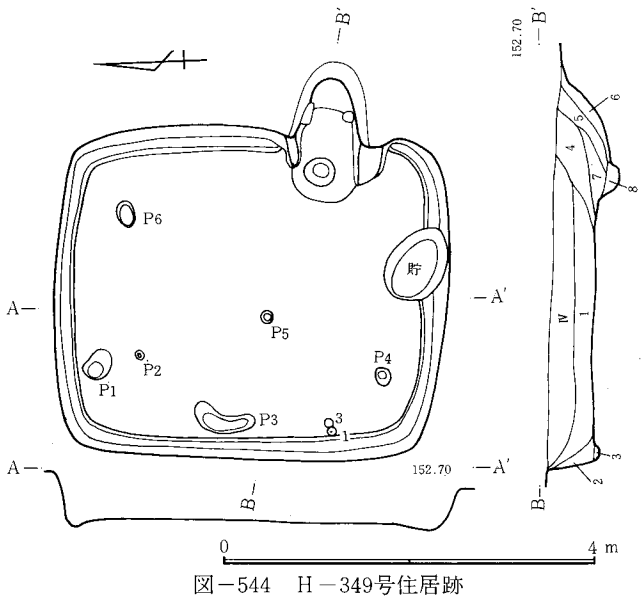
図－542　Ｈ－347・348号住居跡

〔H－347〕　**位置**　西台地南東端、イ4・5に所在し、南へなだらかに傾斜する所にある。　**形状**　ほぼ南北に長軸を持つ長方形で、南北3.8m、東西2.9mである。南壁に比べ北壁の方がやや長く、北に広がる形状を有する。長軸方向はN－6.5°－E、面積は10.4㎡、壁高は71～79cmである。北・西壁下全部、南壁下西3分の2、東壁下北3分の1に周溝を巡らす。幅4～25cm、深さ7～15cmである。　**ピット**　南壁下周溝内にP_1、28×27cm、深さ21cm。北東隅壁下にP_2、50×34cm、深さ16cmがある。性格は不明。　**カマド**　東壁やや南寄り。煙道部に2個の石材を使用。全長148cm、袖部内幅56cm、燃焼部長120cm、壁への掘り込み角度58°で、壁外掘り込みは112cmである。燃焼部は床面に比べ25cm程低い。　**貯蔵穴**　南東隅ほぼ円形で規模は62×59cm、深さ19cmである。　**遺物**　土師器の甕、須恵器の坏、須恵器の蓋が住居跡内とカマド内から出土した。また、住居跡内北西寄りの床面から鎌と推定される鉄製品が出土した。この鉄製品の床面側には木片が付着していた。住居跡中央から南にかけた床面から多量の炭化物が出土した。　**テフラ**　Ⅳ層ＦＰ、Ｃ軽石を多量に含む。1層Ｃ軽石を多量に含む。2層Ｃ軽石が混入している。　**重複関係**　H348号住居跡と重複、切り合い関係から本遺構の方が新しい。〔H－348〕　**位置**　西台地南東端、イ4に所在し、南へなだらかに傾斜する所にある。　**形状**　北々東から南々西に長軸を持つ長方形で、南北3.1m以上、東西2.6mである。長軸方向はN－16.5°－E、面積は9.0㎡以上、壁高39～53cmである。西壁下全部と南壁下西3分の2に周溝を巡らす。幅6～20cm、深さ3～5cmである。　**ピット**　なし。　**貯蔵穴**　東壁南寄り。全長142cm、袖部内幅48cm、燃焼部長92cm、壁への掘り込み角度56°で壁外掘り込みは118cmである。燃焼部は床面より約18cm低い。　**貯蔵穴**　南東隅、ほぼ円形で規模は48×44cm、深さ30cmである。　**遺物**　住居跡北側から鎌と推定される鉄製品、貯蔵穴の西側からは砥石が出土した。　**テフラ**　b層にＦＰ、Ｃ軽石混入。　**重複関係**　前述より本遺構が旧い。　（木部）



図－543　H－347・348号住居跡出土遺物

H349号住居跡（5H－78）（図－544、545　図版－33、114　表－267）（Ⅴ期）

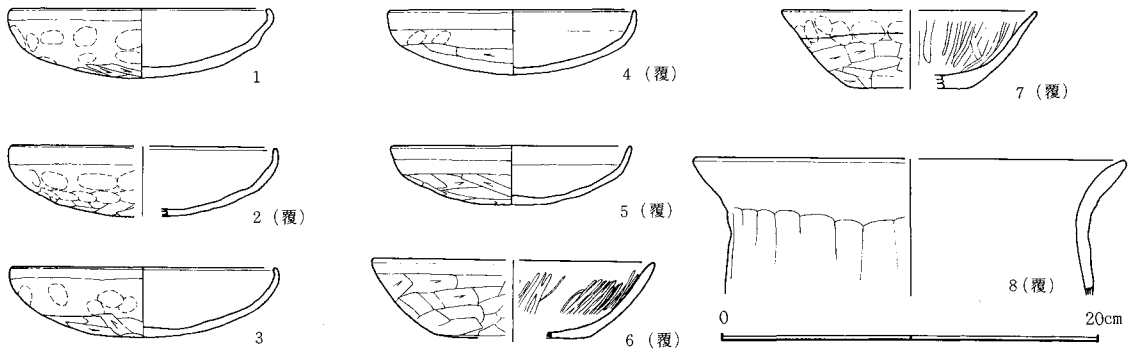


図－544　H－349号住居跡

位置　西台地南東端、イ5に所在し、南へゆるやかに傾斜する所にある。　**形状**　ほぼ南北に長軸を持つ長方形で、南北4.0m、東西3.3mである。長軸方向はN－4°－E、面積は12.7㎡、壁高は45～57cmである。東西南北の壁下全部に周溝をめぐらす。幅4～14cm、深さ4～8cmである。　**ピット**　P_1、P_4、P_5、P_6は柱穴と推定される。規模はP_1が33×21cm、深さ11cm。P_4が18×14cm、深さ21cm。P_5が12×12cm、深さ不明。P_6が27×16cm、深さ4cmである。P_2は柱穴と考えられる位置にはあるが、規模が9×8cm、深さ不明で極めて小さい。P_3は西壁寄りの周溝内側にあり南北に細長く、規模は59×18cm、深さ9cmである。　**カマド**　東壁南寄り。煙道部に2個の石が構築材として使用されている。全長130cm、袖部内幅58cm、燃焼部長80cm、壁への掘り込み角度44°で、壁外掘り込みは84cmである。燃焼部は床面より

1．黒褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。2．黒褐色土。ローム塊（φ2～3cm）、ＦＰ・Ｃ軽石混入。3．黒色土。4．黒褐色土。ローム塊（φ1～2cm）、ＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土混入。5．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の焼土塊・粒混入。6．褐色土。多量のローム、少量の焼土混入。7．黒褐色土。焼土塊（φ5．2cm）混入。8．茶褐色土。多量の焼土粒、少量の炭化物混入。

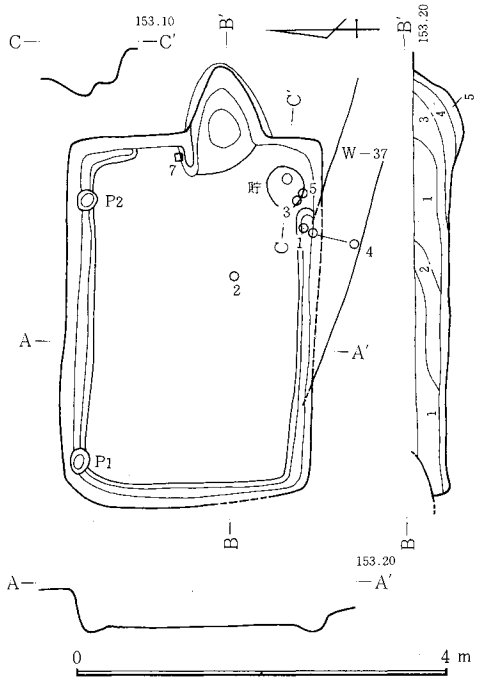
約25cm低い。 **貯蔵穴** 南壁下中央、周溝にかかってある。形状は長円形で、規模は70×53cm、深さ19cmである。 **遺物** 土師器の坏(1)、(3)が出土している。 **テフラ** Ⅳ、1層にＦＰ、Ｃ軽石が多量に混入し、さらに、2、4、5層にも若干ＦＰ、Ｃ軽石の混入がみられた。 **重複関係** 北壁東側及び北東の隅にかけてH26号土坑と重複している。地層断面はないが、切り合いからH26号土坑が新しいと考えられる。 (木部)



図－545 Ｈ－349号住居跡出土遺物

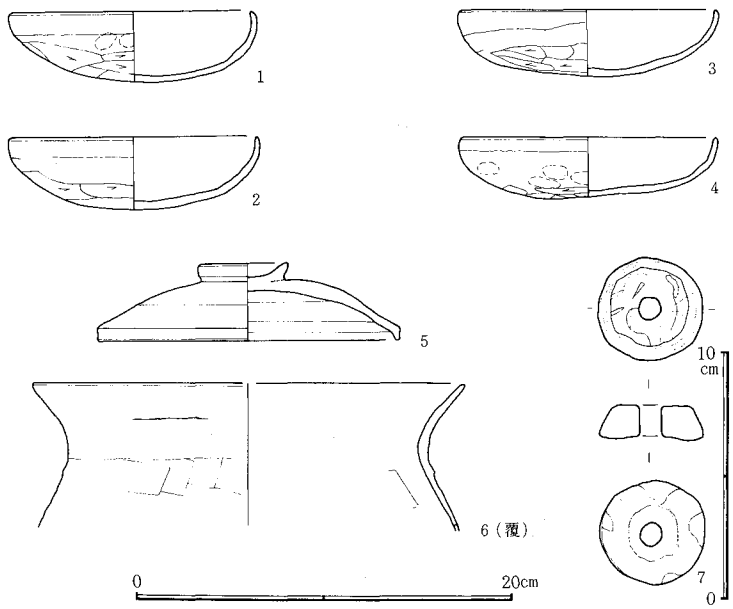
H350号住居跡（5Ｈ—79）（図—546、547 図版—34、114 表—268）（Ⅶ期）

位置 西台地南東端、Ａ5に所在し、なだらかに南へ傾斜する所にある。 **形状** ほぼ東西に長軸を持つ長方形で、南北2.5m、東西3.7mである。長軸方向はＮ—87.5°—Ｗ、面積9.3㎡、壁高26～42cmである。カマドの北と南の壁下を除いた部分に周溝をめぐらす。幅5～21cm、深さ3～7cmである。 **ピット** 北西の隅と北東の隅付近の北壁にかかる周溝の中にP_1、P_2がある。規模はP_1、24×15cm、深さ17cm。P_2、20×18cm、深さ28cm。 **カマド** 東壁中央やや南寄り。全長116cm、袖部内幅60cm、燃焼部長96cm、壁への掘り込み角度69°で、壁外掘り込みは86cmである。燃焼部は床面より約17cm低い。 **貯蔵穴** 南東隅、ほぼ円形で44×36cm、深さ15cmである。 **遺物** 貯蔵穴内から土師器の坏(3)、須恵器の蓋(5)、周溝内から土師器の坏（1・4）が出土している。また、カマドの左袖の北側付近から紡錘車(7)が出土している。 **テフラ** 1層にはＦＰ、Ｃ軽石が多量に混入し、2、3層にもＦＰ、Ｃ軽石が混入していた。 **重複関係** 本遺構の南側はＷ—37と重複している。地層断面の様子から本遺構の方が旧いと推定される。 (木部)



1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土混入。3．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土粒混入。4．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の焼土塊混入。5．黄褐色土。多量のローム混入。

図－546 Ｈ－350号住居跡

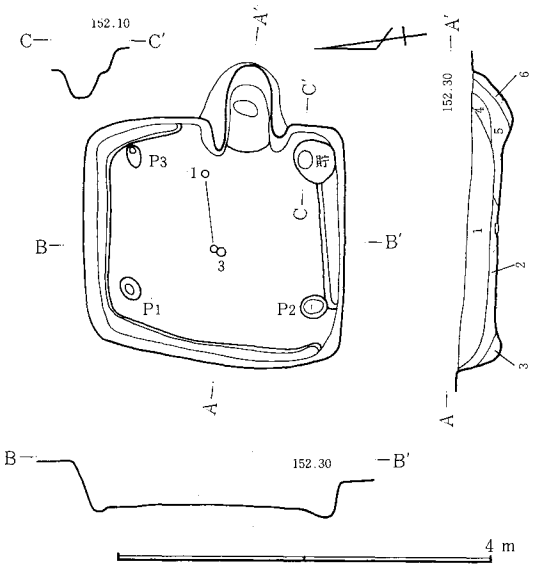


図－547 Ｈ－350号住居跡出土遺物

H351号住居跡（5Ｈ—80）（図—548、549 図版—114 表—269）（Ⅵ期）

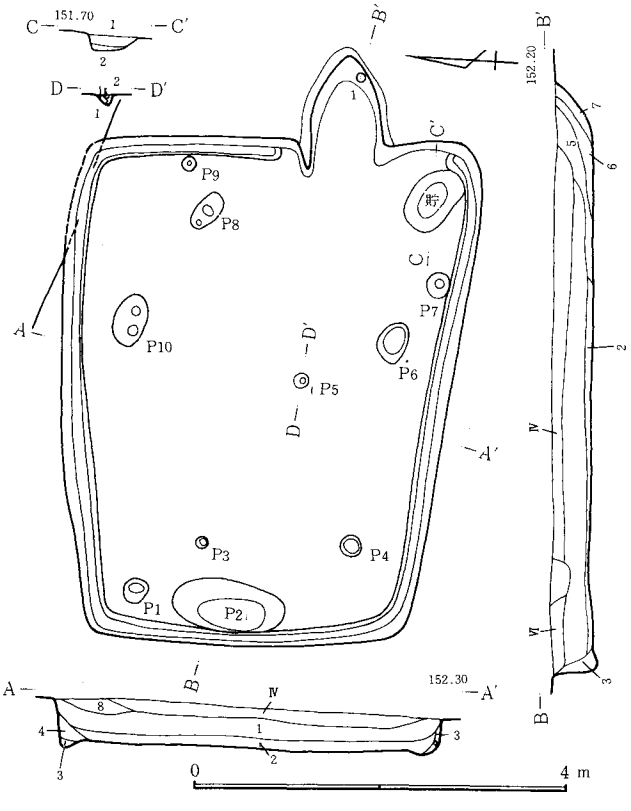
位置 西台地南東端、イ4に所在し、南へゆるく傾斜した所にある。 **形状** 西壁が南へ行くにしたがい、やや西側に湾曲して張り出した形の、ほぼ正方形に近い形で、南北に2.6m、東西に2.4mを測る。長軸方向はＮ—14°—Ｅ、面積は5.9㎡、壁高31～50cmである。東壁下北2分の1及び南北西壁下全部に周溝をめぐらす。幅2～17cm、深さ2～5cmである。 **ピット** 床面の北西、南西、北東の隅にP_1、P_2、P_3があり、規模は$P_1$25×12cm、深さ8cm。$P_2$31×22cm、深さ4cm。$P_3$25×12cm、深さ10cmである。位

置関係、規模から柱穴と推定される。 **カマド** 東壁やや南寄り。全長98cm、袖部内幅46cm、燃焼部長80cm、壁への掘り込み角度50°で、壁外掘り込みは70cmである。燃焼部は床面より約16cm低い。 **貯蔵穴** 南東隅にあり、やや長円形で規模は47×34cm、深さ27cmである。 **遺物** 土師器の坏(1)、甑（2・3）が出土している。 **テフラ** 床面に着いて4層中にもＦＰ、Ｃ軽石が混入していた。 （木部）

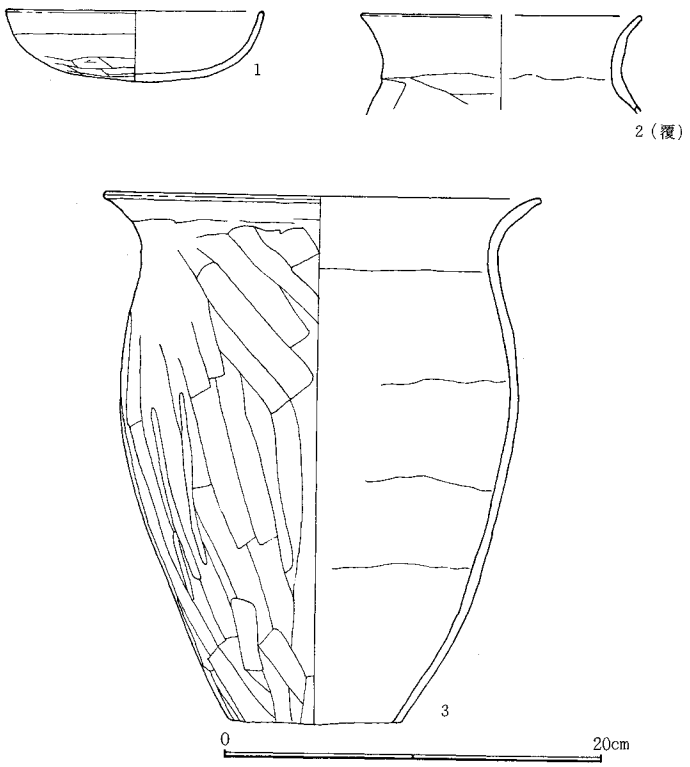


図－548 Ｈ－351号住居跡

1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土塊(φ0.5～1cm)少量混入。2．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒・塊混入。3．茶褐色土。ローム粒・塊混入。4．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、焼土粒混入。5．赤褐色土。多量の焼土粒・塊混入。6．黄褐色土。多量のローム粒混入。



図－550 Ｈ－352号住居跡

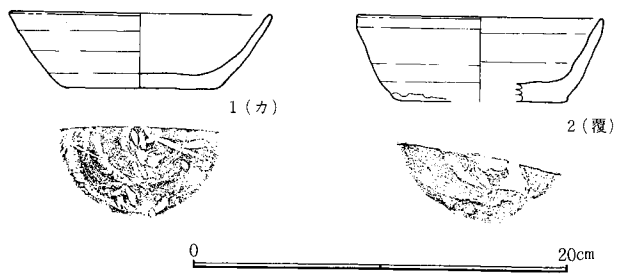


図－549 Ｈ－351号住居跡出土遺物

Ｈ352号住居跡（５Ｈ－81）（図－550、551 図版－34、114 表－270）（Ⅷ期）

位置 西台地南東寄り、イ4に所在し、南へゆるく傾斜する所にある。 **形状** 東西に長軸を持ち、西壁に行くにしたがいややすぼむようになる不整長方形で、規模は南北3.9m、東西5.2mである。長軸方向はＮ－90°－Ｅ、面積20.1㎡、壁高31～46cmである。周溝は東壁のカマド南袖部から貯蔵穴までの間を除き、全壁下にある。幅24～37cm、深さ4～10cmである。貼床はなしと推定。

ピット P_3、P_4及びP_6、P_{10}はそれぞれ対応した位置にある柱穴と推定される。各ピットの規模は$P_1$25×21cm、深さ12cm。$P_2$120×55cm、深さ7cm。$P_3$22×20cm、深さ18cm。$P_4$22×19cm、深さ25cm。$P_5$15×14cm、深さ15cm。$P_6$40×27cm、深さ9cm。$P_7$28×26cm、深

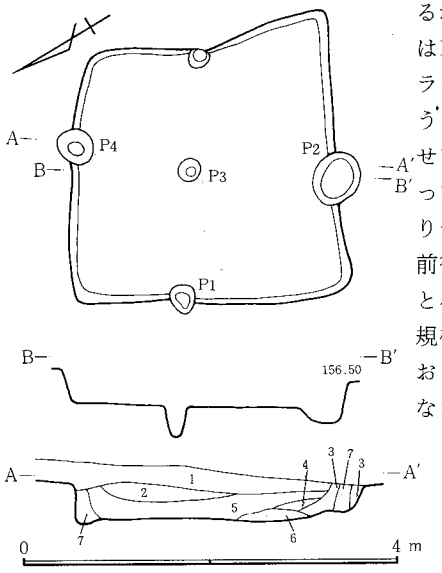


図－551 Ｈ－352号住居跡出土遺物

1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒褐色土。ローム粒・塊(φ2cm)混入。3．黒褐色土。ローム粒多量に混入。4．黒褐色土。やわらかい。5．黒色土主体。ローム塊、灰白色粘土塊多量に混入。6．赤褐色土。焼土、焼土塊、Ｃ軽石混入。7．焼土粒、ローム粒、黒色土混入。8．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。 **貯** 1．茶褐色土。ローム粒、炭化物、少量の焼土混入。2．茶色土。ローム粒多量に混入。$P_5$1．赤褐色土。焼土塊混入。2．茶褐色土。ローム粒、炭化物、少量の焼土混入。

さ不明。$P_8$42×23cm、深さ12cm。$P_9$18×16cm、深さ10cm。P_{10}59×32cm、深さ13cmである。P_5は小さいが周りを堅く踏み固められたしっかりした柱穴である。カマドの東西の中心線のほぼ延長線上にある。 **カマド** 東壁南寄り。全長132cm、袖部内幅64cm、燃焼部長106cm、壁への掘り込み角度32°で、壁外掘り込みは100cmである。燃焼部は床面より約5cm高い。 **貯蔵穴** 南東隅、不整楕円形で規模は75×48cm、深さ17cmである。埋土は炭化物、焼土粒、ローム粒を含む茶褐色土であった。 **遺物** カマド内より須恵器坏(1)が出土。 **テフラ** IV。1。2層ともにFP、C軽石を少し含む。 **重複関係** 北側に接してW—65が重複する。北壁隅がW—65によりけずられていることから、W—65が新しいと考えられる。 (木部)

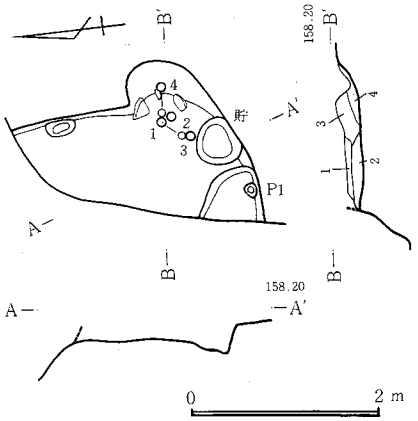
H353号住居跡(5H—82)(図—552 図版—34)(IX期) **位置** イ10。 **形状** 南北2.5m、東西2.6mでほぼ正方形を呈するが東壁が西壁に比べてやや短い。東西壁の走向はN—27°—E、面積7.3m²で、壁高は19～36cm。壁は全体に曲線化傾向を持つが特に西壁と北壁はP_1とP_4を境に掘り方のラインが段違いとなっている。東壁南側の掘り方上端が住居外側に張り出しているようになっているが、掘り形が不整形で、カマド上部がとばされていることと考え合わせて、後掘であり張り出し状施設ではないと思われる。貼床及び周溝は認められなかった。 **ピット** カマドのある東壁を除いたそれぞれ3壁のほぼ真ん中と住居中央よりやや北寄りに4つのピットを検出した。南、北壁のP_2、P_4が径40～60cm、深さ20cm前後と大きく浅いのに対して、西壁のP_1と住居中央のP_3は径20～30cm、深さ40cm前後と小さいが深く掘られている。 **カマド** 東壁中央に確認されたが後掘されており、規模、形状については不明である。ただ床面付近に固くしまった粘土層が検出されており、粘土で構築されていたと推定される。 **遺物** 本遺構に関連する遺物の出土はなかった。 (松村)



1．褐色土。ローム粒・塊(φ0.5～1cm)少量混入。2．褐色土。ローム粒・塊(φ0.5～1cm)、少量のFP軽石混入。3．褐色土。ローム塊(φ3cm)混入。4．褐色土。ローム粒・塊(φ1cm)混入。5．褐色土。ローム粒・塊主体。少量のFP軽石、炭化物混入。6．粘土。少量の焼土混入。7．黒褐色土。ローム粒・塊混入。

図—552 H—353号住居跡

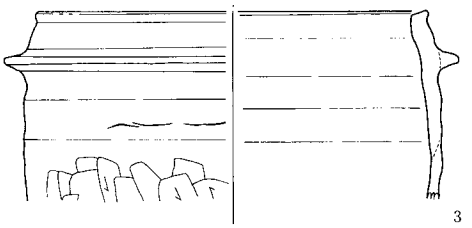
H480号住居跡(5H—209)(図—553、554 図版—34、115 表—271)(XIII期)

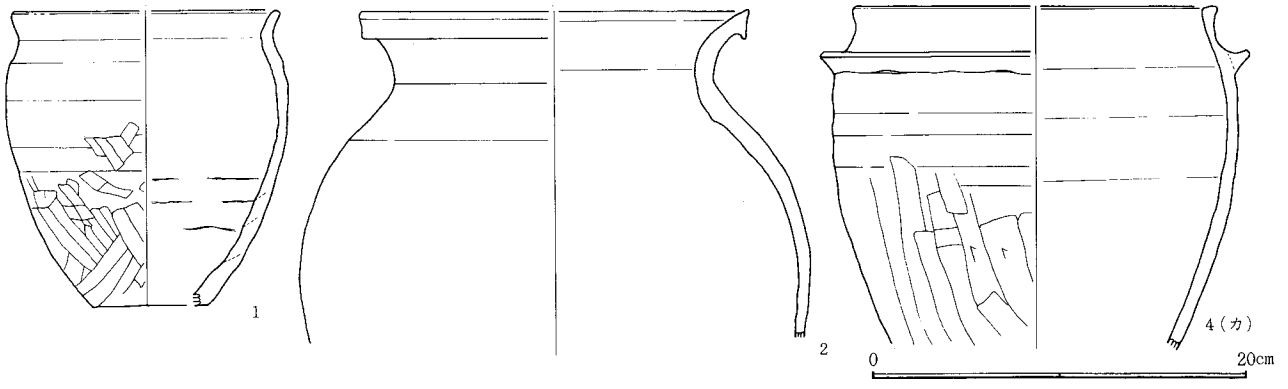


1．黒色土。ローム粒混入。2．ローム粒、ローム塊(φ1.5cm)主体。黒色土混入。3．黒色土。ローム粒、焼土、灰混入。4．淡赤褐色土。焼土、ローム粒混入。

図—553 H—480号住居跡

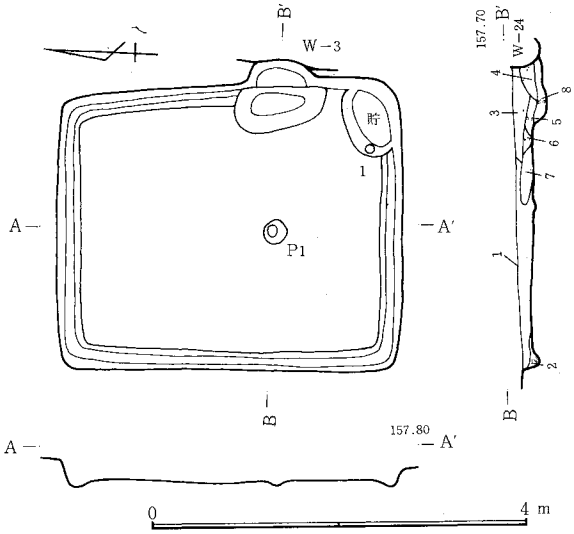
位置 B12からC12にかけて所在する。 **形状** W3号溝に住居の大半を削られており、東壁約2m、南壁約1mと南東隅を残すのみで、形状、規模については不明である。現状で、壁高28～31cm。周溝は溝で削られていない部分については認められなかった。東壁の走行はN—5°—Wでほぼ磁北を示す。 **ピット** 溝に一部削られているが現状で約50cmの径と13cmの深さをもつ。 **カマド** 南東隅に石材を用いて構築されている。全長58cm、袖部内幅28cm、燃焼部長26cm、壁への掘り込み角度38°で、全体にぼんやりとした半円形状に掘られており、両袖部1石づつ、燃焼部に支石と思われる1石を残す。 **貯蔵穴** 南東隅、南壁に接してある。48×36cm、深さ33cm。 **遺物** カマド内及び焚き口付近に集中して甕(土師器、須恵器)、羽釜を出土。 **重複関係** W3号溝に削られており、本遺構が旧い。 (松村)



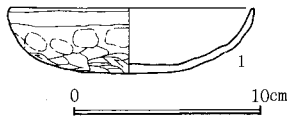


図—554 H—480号住居跡出土遺物

H481号住居跡（5H－210）（図－555、556　図版－34、115　表－272）（VI期）



位置　B11・12、C11・12　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北3.5m、東西2.9mである。長軸方向はN－2°－Wでほぼ磁北に沿っている。面積10.1m²、壁高は8～25cmと浅く、壁はいずれも直線的に掘られている。貼床は特に認められなかったが、周溝はカマドから貯蔵穴までのわずかな間を除いては全周している。幅3～11cm、深さ3～12cmである。　**ピット**　東西壁のほぼ中央、北壁から南へ3分の2程の所に24×22cm、深さ12cmの円形のピット1個を検出した。　**カマド**　東壁中央やや南寄りにあるが、溝により壊されており、形状や規模のデータはとれなかった。しかし、カマド周辺の埋土から多量の白色粘土が検出されており、カマド構築に白色粘土が用いられたことはまちがいない。　**貯蔵穴**　南東隅、長円形で78×44cm、深さ38cm。　**遺物**　貯蔵穴より土師器坏(1)を検出した。　**重複関係**　W3号溝にカマドが壊されており、本遺構が旧い。　（松村）

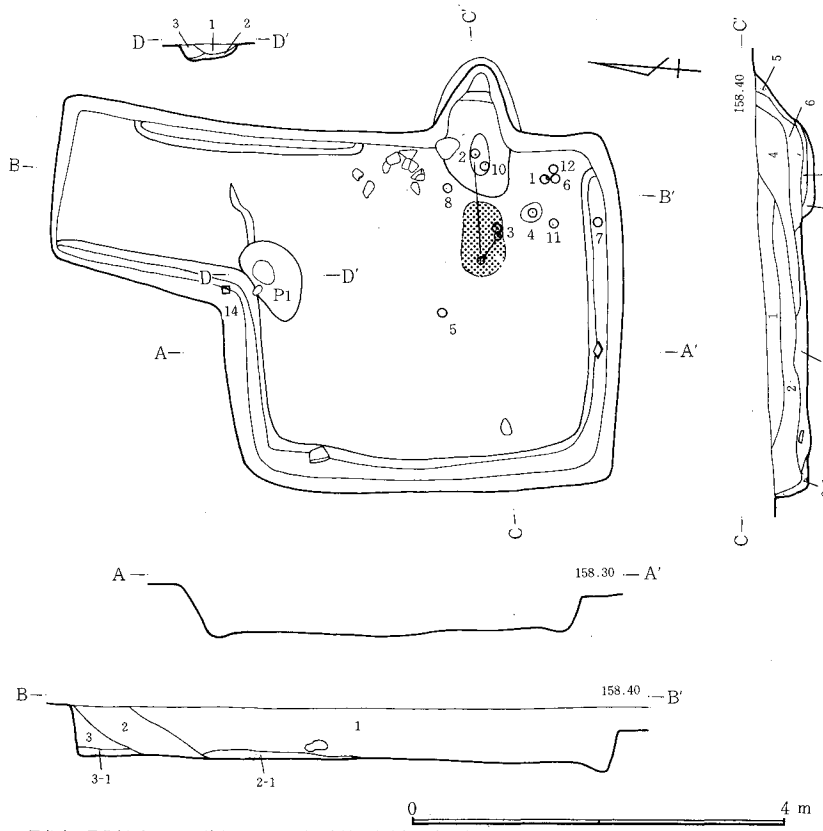


図－556　H－481号住居跡出土遺物

1．ローム粒・塊(φ1～3cm)と黒色土混合。2．ローム粒主体。黒色土混入。3．灰色土。白色粘土、焼土塊、ローム塊(φ0.5～1cm)混入。4．赤茶色土。焼土塊(φ2～3cm)混入。5．灰色土。焼土塊(φ0.5～5cm)混入。6．灰色土。焼土塊、ローム塊、少量の白色粘土混入。7．黒色土。ローム塊、焼土塊(φ0.5～2cm)混入。8．ローム塊主体。黒色土混入。

図－555　H－481号住居跡

H482号住居跡（5H－211）（図－557、558、559　図版－34、115　表－273）（VI期）

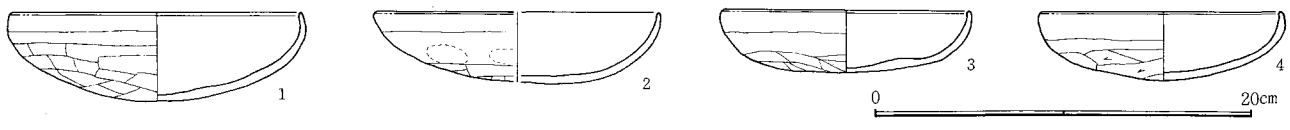


位置　B12。　**形状**　南北3.9m、東西3.5mでほぼ正方形を呈するが、北側東壁延長上に1.9×1.54mの長方形の張り出しを持つ。長軸の方位は磁北に一致する。面積は住居本体部分が13.5m²で、これに約3m²の張り出し部分が加わる。壁高32～46cm。周溝は南壁から西壁、北壁と続き、張り出し部分の西壁及び東壁の張り出し部分から住居本体3分の1に掘られている。幅6～32cm、深さは7cm。　**ピット**　住居本体と張り出し部分との接合部分の住居側に84×55cm、深さ10cmのピットを検出し、これに連なって張り出し部分との間仕切り状の溝が掘られていた。　**カマド**　東壁南寄りにあり、全長104cm、袖部内幅46cm、燃焼部長64cm、壁への掘り込み角度41°で、壁外への掘り込みは92cmである。燃焼部は床面より6cm程下がっており、左袖部に1石を残す。

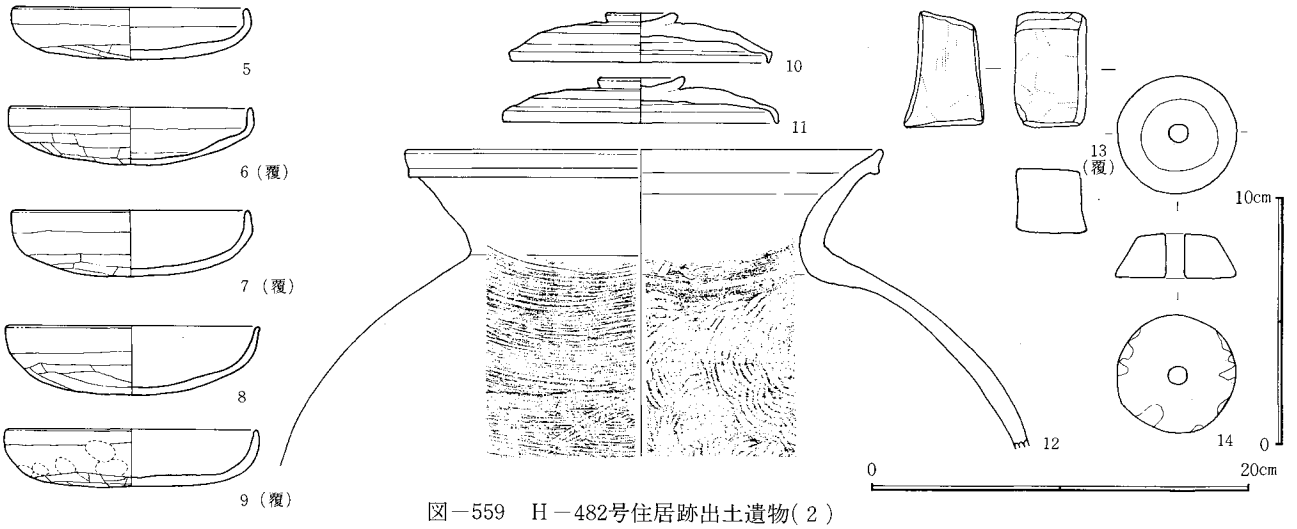
遺物　カマド前から住居南東隅にかけて集中して出土した。本遺構に貯蔵穴はなかったがそれに替わって須恵器甕(12)の上半部を南東隅に埋め込んで使用しており、この上に土師器坏2個（1・6）が重なって出土した。また、須恵器蓋がカマド前(10)と住居南東隅(11)に2個出土した。張り出し部西壁周溝内より紡錘車(14)を出土。　（松村）

1．黒色土。FP軽石、ローム塊(φ0.5～2cm)、少量の炭化物、焼土塊混入。2．黒褐色土。ローム塊(φ1～4cm)混入。2-1．ロームと黒色土の混合土。3．黒褐色土。ローム少量混入。3-1．暗褐色土。ローム塊(φ1cm)と黒色土。4．黒色土。焼土塊(φ0.5～2cm)、ローム塊、灰混入。5．ローム粒と黒色土。6．黒色土。焼土塊(φ1～4cm)多量に混入。7．赤灰色土。ローム、灰混入。8．ローム・焼土・灰混合。P1．1．茶褐色土。多量のローム塊、少量のFP・C軽石混入。2．黄褐色土。ローム。3．茶褐色土。多量のローム塊、FP・C軽石混入。

図－557　H－482号



図－558　H－482号住居跡出土遺物

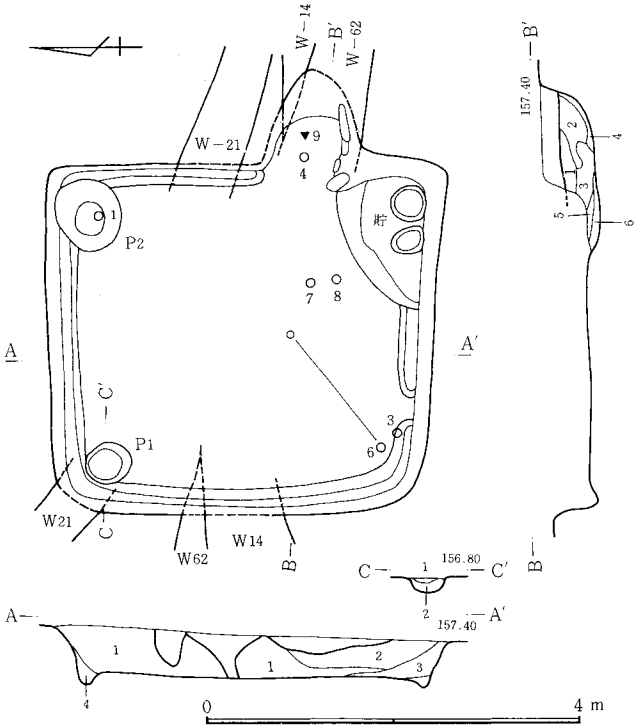


図－559　H－482号住居跡出土遺物（２）

H483号住居跡（５H－212）（図－560、561　図版－34、115　表－274）（Ⅶ期）

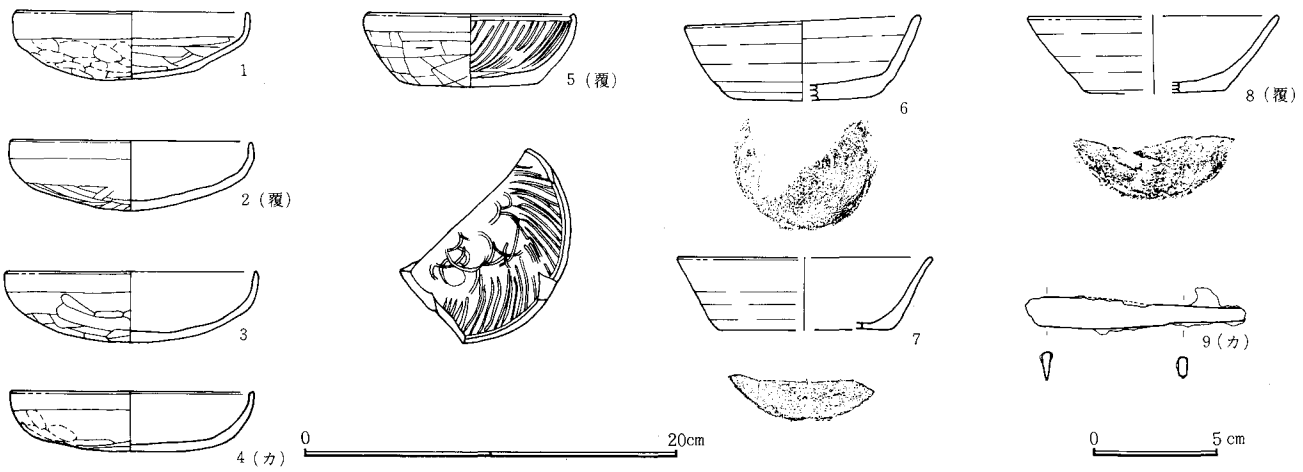
位置　A11。　**形状**　ほぼ正方形をしており、南北が3.8m、東西が3.6m。長軸方向はN－1.5°－E、面積は13.6m²。壁高38～50cmで、壁は直線的に掘られている。周溝は南壁中央よりやや西寄りの一部住居南東の隅にかかる貯蔵穴の部分を除いて全周している。幅７～43cm、深さ５cmである。貼床は特に認められなかったが、南壁から北壁に向って４分の３程の所までが非常に固く踏み固められていた。　**ピット**　住居北西隅の周溝に接して径40～50cmの円形のピットを検出。　**カマド**　東壁南寄り。全長125cm、袖部内幅は溝で壊されていた左袖部を復元したもので、幅50cm、燃焼部長72cm、壁への掘り込み角度55°で、壁外への掘り込み105cm。燃焼部は住居床面より６cm低い。石材が使用されており、右袖から煙道部右壁にかけて４石が残っていた。　**貯蔵穴**　南東隅、カマド右袖から南壁際まで伸びており、130×91cm、深さ41cm。南壁際に小ピット２個を持っている。

遺物　カマド内より土師器坏(4)と刀子破片(9)が出土。南西隅付近の周溝内より土師器坏(3)、同じく南西隅から須恵器坏(6)が床面で、また、貯蔵穴付近（７・８）と住居北東隅(1)より土師器坏を出土した。　**重複関係**　W－14・21・62と重複。新旧は、旧→新として、H－483→W－62→W－14→W－21。　（松村）



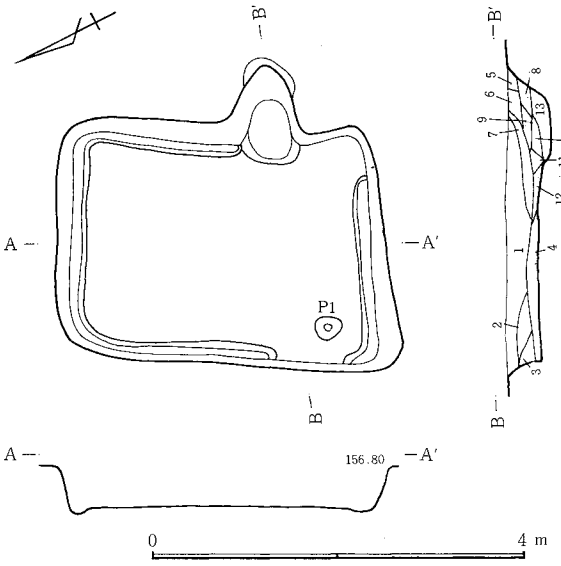
1．黒褐色土。ローム粒、少量の焼土、F系・C軽石混入。2．黒褐色土。多量の焼土、少量のローム混入。3．黒褐色土。少量のローム、焼土混入。4．暗褐色土。多量のローム粒混入。　**カマド**　1．黒褐色土。ローム粒、FP軽石、炭化物少量混入。2．赤色土。焼土塊(φ１～５cm)、灰混入。3．赤灰色土。炭化物、焼土塊、灰混入。4．黒褐色土。ローム粒、灰混入。5．赤黒色土。灰主体。焼土塊混入。6．ローム塊・焼土塊・黒色土の混合。**P**₁　1．茶褐色土。F・ローム粒多量に混入。2．褐色土。ローム粒主体。

図－560　H－483号住居跡



図－561　H－483号住居跡出土遺物

H484号住居跡（5 H－213）（図－562　図版－34）（IX期）



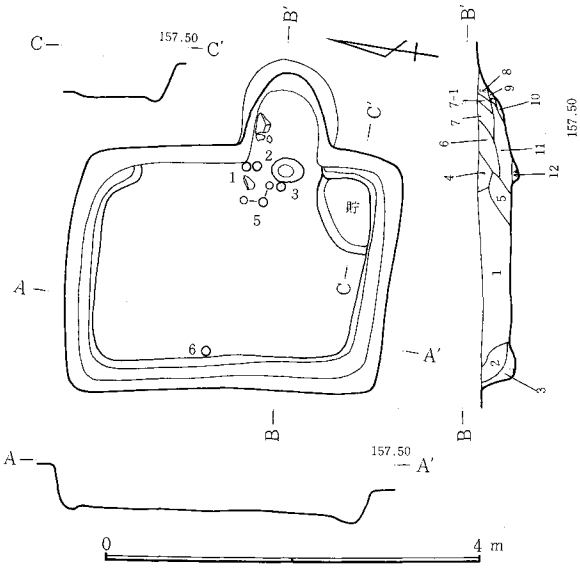
図－562　H－484号住居跡

位置　竪穴住居跡と掘立柱建物跡の一大群集地中のA10に所在する。　**形状**　南北に長軸（N－28.5°－E）をとる長方形で、南北3.2m、東西2.3mを測る。壁線はいずれも内側に膨む形になっており、結果として南壁の西隅や北壁の東隅は外方に張り出した形になる。床面積7.5m²、壁高は地層から最高46cmを測る。周溝の深さは6～7cm程度である。　**床面**　カマド前から住居中央部にかけて固く踏みしめられていた。しかし、西壁側にはこれがなく居住空間の機能的差異が想定される（北壁・南壁側は不明）。　**ピット**　南西隅近くにP_1、深さ8cm。　**カマド**　全長100cmで壁外に構築する。燃焼部火床面は住居床面より13cm程低く拵え、これは住居内にも約20cm延びる。掘り形をそのままカマド内壁としたものと考えられ、内壁は深くほぼ直に立ち上がる。　**重複関係**　南壁で中世の井戸と若干切り合う。　（唐澤）

1．黒褐色土。C・F系軽石、焼土塊、若干のローム塊混入。2．黒褐色土。若干のローム粒、他は1に同じ。3．黒褐色土。少量のローム粒・塊、他は1に同じ。4．暗褐色土。多量のローム混入。5．暗赤褐色土。多量の焼土粒混入。6．暗褐色土。多量のローム粒混入。7．黒褐色土。焼土粒、少量のローム粒混入。8．黒褐色土。若干の焼土粒混入。9．暗褐色土。多量のローム粒、少量の焼土混入。10．暗赤褐色土。多量の焼土混入。11．暗赤色土。焼土塊主体。12．暗褐色土。少量のローム、焼土混入。13．黒褐色土。ローム、焼土粒若干混入。

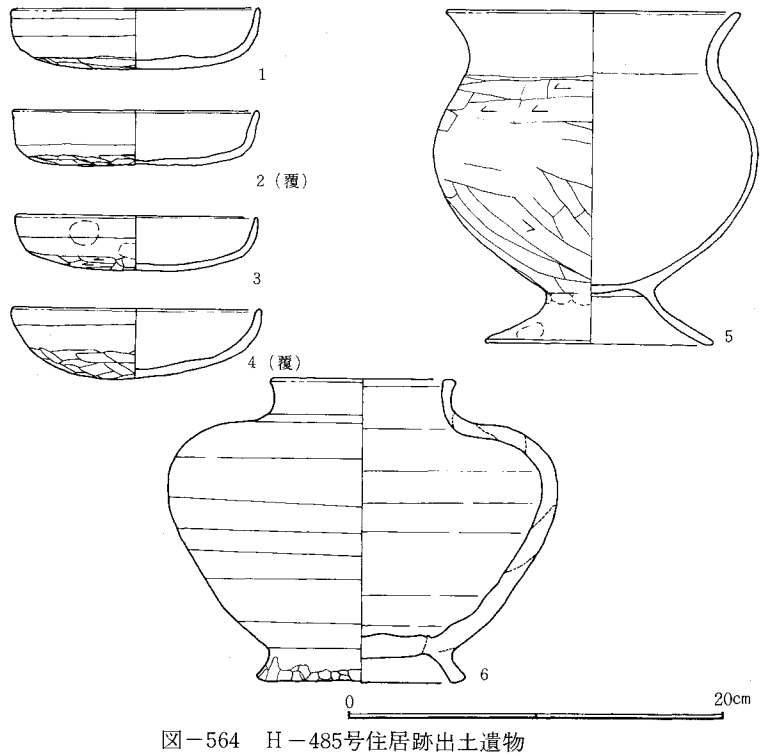
H485号住居跡（5 H－214）（図－563、564　図版－35、115　表－275）（IX期）

位置　竪穴住居跡と掘立柱建物跡の一大群集地中イ11に所在する。　**形状**　南北に長軸（N－20°－E）を取る住居跡で、南壁が東に行くにつれ開くため、全体に台形状を呈す。壁線は東壁を除き内側に弱く膨らむ。隅はいずれも丸い。南北3.2m、東西2.2m、床面積7.5m²を測る。壁高は東壁で検出面から36cmである。周溝の深さは5cm前後である。　**床面**　カマド前から住居中央部にかけて固く踏みしめられていた。しかし、これは西壁側では壁より1m手前で終り、中央部と西壁付近の利用の仕方の相違をうかがわせた（南壁・北壁側は不明）。　**カマド**　壁外を100cm程掘り込んで構築するが、燃焼部は東壁上端線より内側である。カマド中の小ピットを支柱用の穴とすると、袖はもう20～30cm程内側に延びていたものと考えられる。壁外の先端部分は15cm程平坦面（焼土化）をなし、再び立ち上がる。構築材に灰黒色粘土使用。　**遺物**　（1～3）(5)カマド内及び焚口部付近出土。完形の坏もあり、本来カマド付近に置かれていたか。(6)床着。　（唐澤）



1．黒褐色土。ローム塊、C・F系軽石混入。2．黒褐色土。C・F系軽石、若干のローム混入。3．暗褐色土。多量のローム混入。4．黒褐色土。締り弱い。5．黒褐色土。灰黒色粘土塊、若干のローム、炭化物、焼土混入。6．黒褐色土。若干のローム粒、焼土混入。7．暗赤褐色土。若干の焼土塊、灰混入。7-1．7基調、焼土多量に混入。8．赤褐色土。焼土塊混入。9．暗赤褐色土。多量の焼土混入。10．黄黒色土。ローム少量混入。11．暗赤褐色土。ローム少量混入。12．黒褐色土。ローム塊、若干の焼土粒混入。

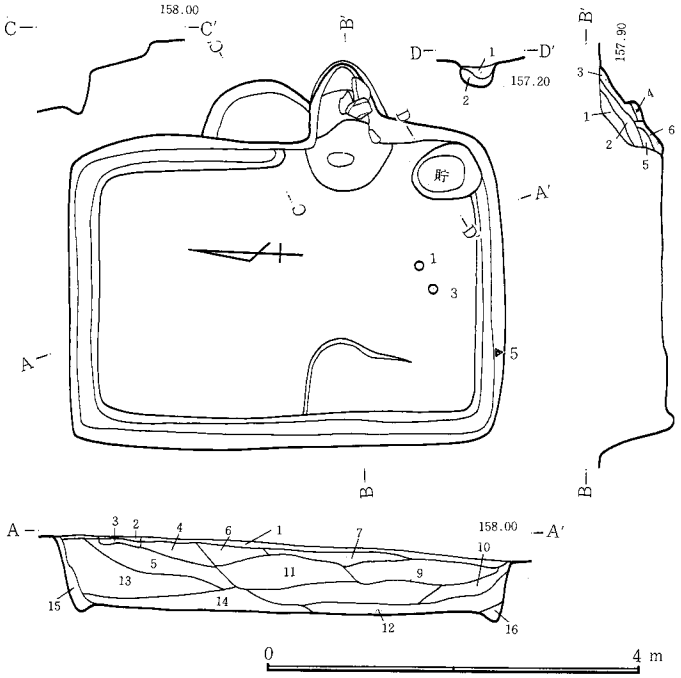
図－563　H－485号住居跡



図－564　H－485号住居跡出土遺物

H486号住居跡（5 H－215）（図－565、566　図版－35、116　表－276）（IX期）

位置　西台地東端、ロ－12にある。周囲は南北にわたって、住居跡が密集している。　**形状**　東北から南西にかけて長軸を持つ長方形で、南北4.40m、東西3.03mである。四隅とも隅丸を呈する。長軸方向はN－6.5°－W、面積は13.5m²、壁高は64～79cmである。東壁北寄り半分から北壁、西壁、南壁にかけて周溝が認められる。幅9～28cm、深さ1～10cmである。カマドの北側に

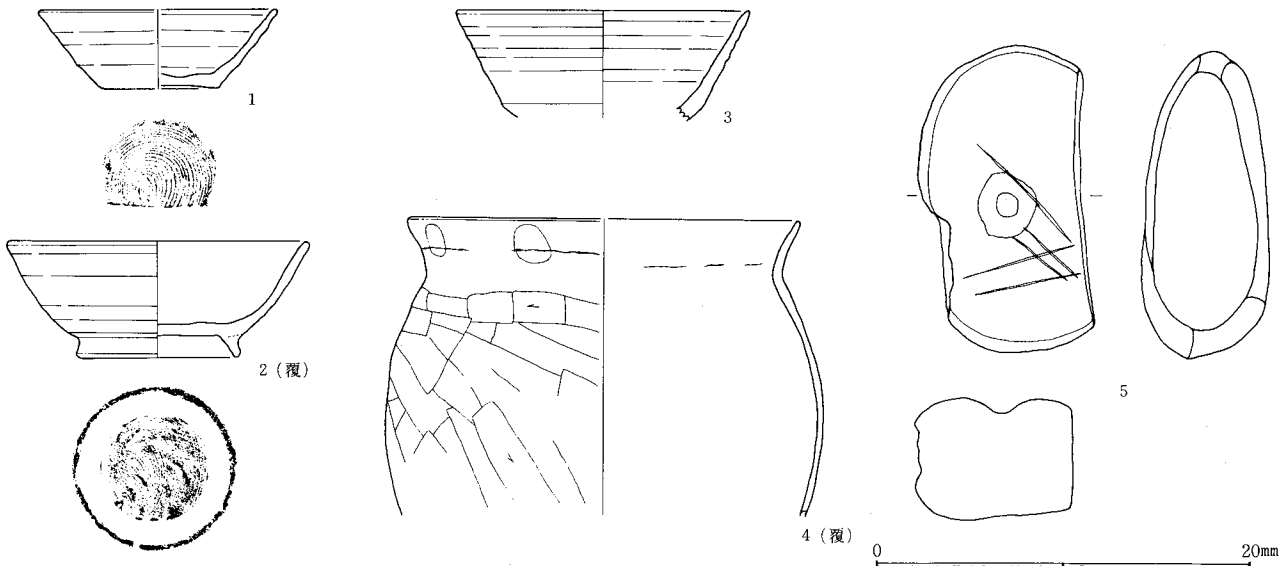


隣接して、棚状の張り出し遺構がある。形状は半円形を呈し、規模は110×66cmである。又、西壁南寄りの直下に、浅いピット状のくぼみも認められるが、両者ともその性格、機能等は不明である。　**カマド**　東壁南寄りにあり、右袖部分に1個、煙道部分に3個の石材使用が認められる。全長102cm、袖部内幅50cm、燃焼部長72cm、壁への掘り込み角度41°、壁外掘り込み102cm、住居床面とカマド燃焼部のレベル差は17cmである。　**貯蔵穴**　南東壁直下にある。形状は方円形を呈し、規模は63×52cm、深さ54cmである。　**遺物**　床面南側に土師器坏片(3)、須恵器坏(1)の散布が見られる。又、南壁直下の周溝内から砥石(5)の出土も見られる。

（鵜木）

1．黒褐色土。多量のB・C、少量のFP軽石混入。2．黄褐色土。多量のローム粒、C軽石混入。3．2に類似でC軽石少量。4．黒褐色土。多量のFP・C軽石混入。5．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量の炭化物、ローム混入。6．黒褐色土。多量のFP・C軽石、少量の炭化物混入。7．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量のローム混入。8．7に類似でローム塊混入。9．茶褐色土。多量のローム塊、少量のFP・C軽石混入。10．黒褐色土。少量のFP・C軽石混入。11．茶褐色土。多量のローム粒、FP・C軽石、少量の炭化物混入。12．茶褐色土。多量のローム、C軽石、少量のF軽石、炭化物混入。13．茶褐色土。ローム、少量のC軽石、炭化物混入。14．茶褐色土。多量のローム塊、少量のFP・C軽石、炭化物混入。15．黄褐色土。ローム、少量のC軽石混。16．黄褐色土。多量のローム、少量のC軽石混入。　**カマド**　1．茶褐色土。少量の焼土、FP・C軽石、ローム粒混入。2．茶褐色土。少量のローム、炭化物、FP・C軽石混入。3．赤褐色土。多量の焼土、C軽石、少量のFP軽石、ローム粒混入。4．茶褐色土。多量のローム、少量のFP軽石、炭化物混入。5．茶褐色土。少量のFP・C軽石、焼土粒、ローム粒混入。6．赤褐色土。多量の焼土、ローム混入。　**貯**　1．赤褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。2．茶褐色土。多量のローム粒混入。

図－565　H－486号住居跡

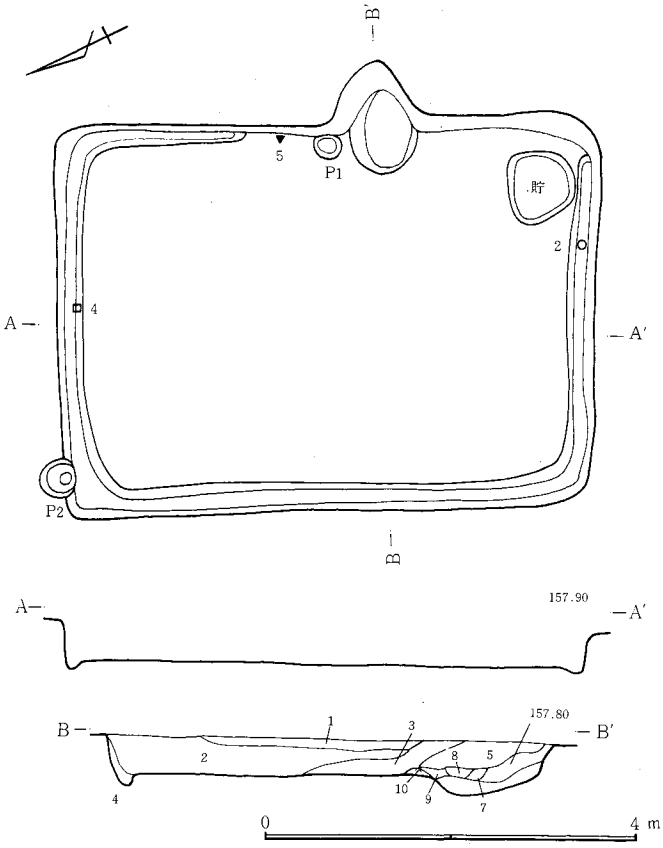


図－566　H－486号住居跡出土遺物

H487号住居跡（5H－216）（図－567、568　図版－35、116　表－277）（Ⅷ期）

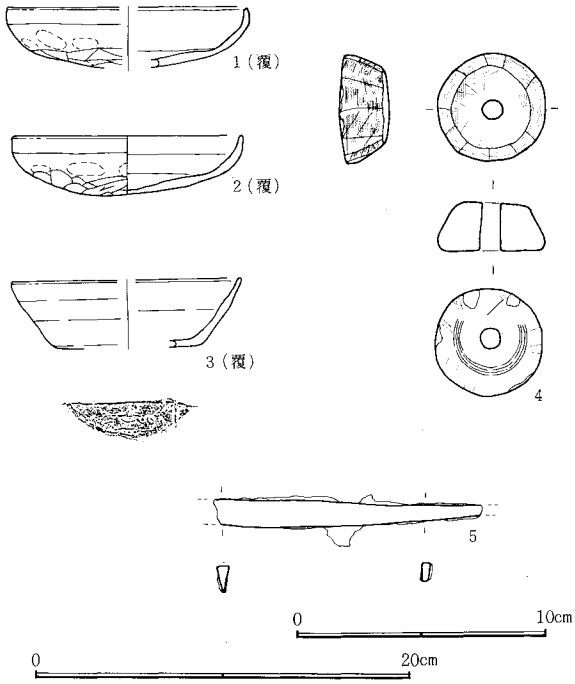
位置　ロ12。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形をしており、南北5.5m、東西3.9mである。長軸方向はN－26°－E、面積21.7㎡、壁高は30～47cm。壁の掘り方は直線的である。周溝はカマド北側1m程と貯蔵穴のある南側の南壁までの東壁南3分の2を除いて北、西、南壁と全周している。幅5～45cm、深さ6cm。貼床はないが、床面は全面固くしまっている。　**ピット**　カマド左袖の東壁に接して30×22cm、深さ5cmの浅いピット(P_1)と北壁北西隅の住居外に北壁に接して39×35cm、深さ43cmのピット(P_2)が検出された。しかし、P_2は住居に関係するかどうか不明である。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄り。全長92cm、袖部内幅64cm、燃焼部長64cm、壁への掘り込み角度57°、壁外への掘り込み84cmであった。燃焼部は床面より15cm低い。　**貯蔵穴**　住居南東隅。不整形で83×66cm、深さ26cm。　**遺物**　貯蔵穴付近の南壁周溝より土師器坏(2)、北壁中央の周溝より紡錘車(4)、東壁のP_1付近より刀子(5)が出土した。　**テフラ**　住居をほぼ埋めている2層にFP軽石が混入していた。　**重複関係**　K193号堀立柱建物跡と接するが前後関係は不明である。

（松村）



図－567　H－487号住居跡

1．砂質土。2．黒色土。FP軽石、ローム混入。3．黒褐色土。焼土塊多量に混入。4．ロームと黒色土。5．黒色土。焼土塊、ローム塊混入。6．赤褐色土。焼土塊多量に混入。7．赤色土。焼土、ローム塊混入。8．焼土とローム塊。9．赤色土。焼土、ローム塊混入。10．赤灰色土。焼土、ローム塊混入。11．黒色土。灰、焼土、ローム塊混入。

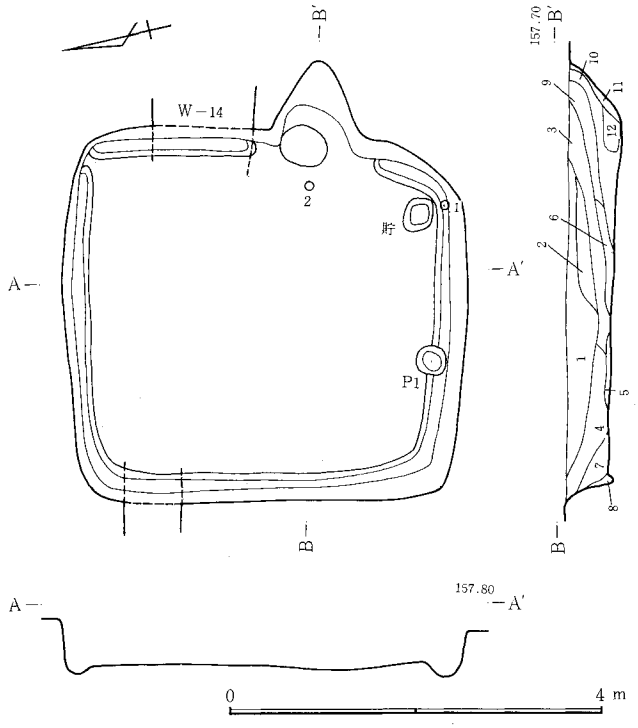


図－568　H－487号住居跡出土遺物

H488号住居跡（5H－217）（図－569、570　図版－35、116　表－278）（Ⅷ期）

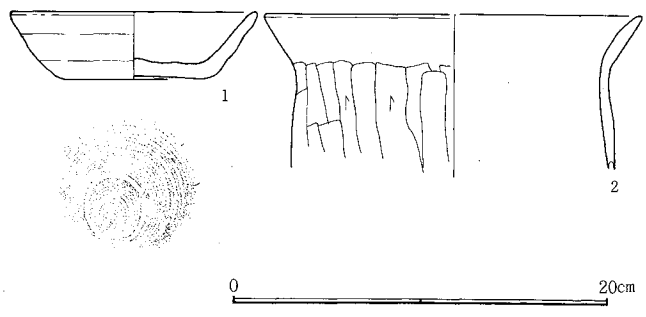
位置　ロ11に所在する。　**形状**　南北4.1m、東西3.6mでほぼ正方形に近い。長袖方向はN－13.5°－E、面積14.12m²。壁高は44～57cmで、壁は南東隅と北西隅が丸味を持っているのを除いてほぼ直線的に掘られている。周溝はカマドの両脇20～30cmと北東の隅を除き全周している。幅6～18cm、深さ2～9cm。貼床は確認できなかった。　**カマド**　東壁中央よりやや南寄りにあり、全長104cmで住居外への全体が掘り込まれている。袖部内幅76cm、燃焼部長60cm、壁への掘り込み角度44°で、燃焼部は住居床面よりも14cmも深く掘られている。

遺物　住居南東隅の周溝内より須恵器坏(1)が、カマド前より土師器甕(2)の上半部が出土した。　**重複関係**　K193号堀立柱建物跡と重複する。住居内で検出されたピットは埋土、底の深さの一致からK－193のものと思われるが新旧関係は不明である。また、W－14についても住居東壁から西壁にかけて検出されているが新旧関係は不明である。　（松村）



1．黒褐色土。FP・軽石、ローム粒、焼土、炭化物混入。2．黒褐色土。1に類似で焼土多量。3．褐色土。ローム、焼土混入。4．黒褐色土。ローム混入。5．黒色土。FP軽石、ローム粒混入。6．黒灰色土。灰、焼土混入。7．黒褐色土。ローム混入。8．ローム・黒色土の混合。9．赤灰色土。FP軽石、焼土塊、灰混入。10．赤灰色土。焼土塊、灰主体。11．ローム・黒色土の混合。12．多量の灰、焼土塊。

図－569　H－488号住居跡

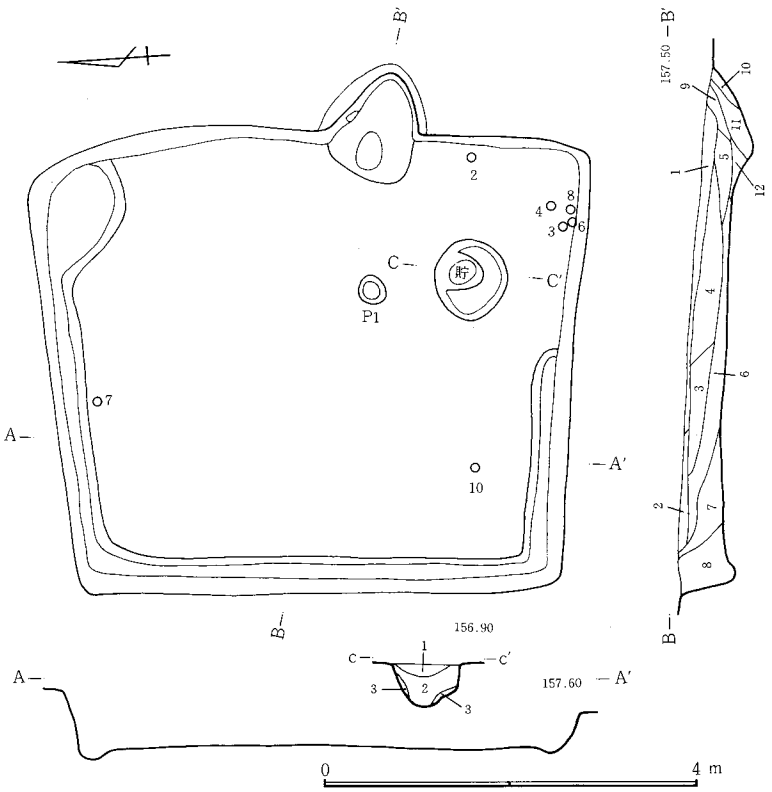


図－570　H－488号住居跡出土遺物

H489号住居跡（5H－218）（図－571、572　図版－35、116　表－279）（Ⅸ期）

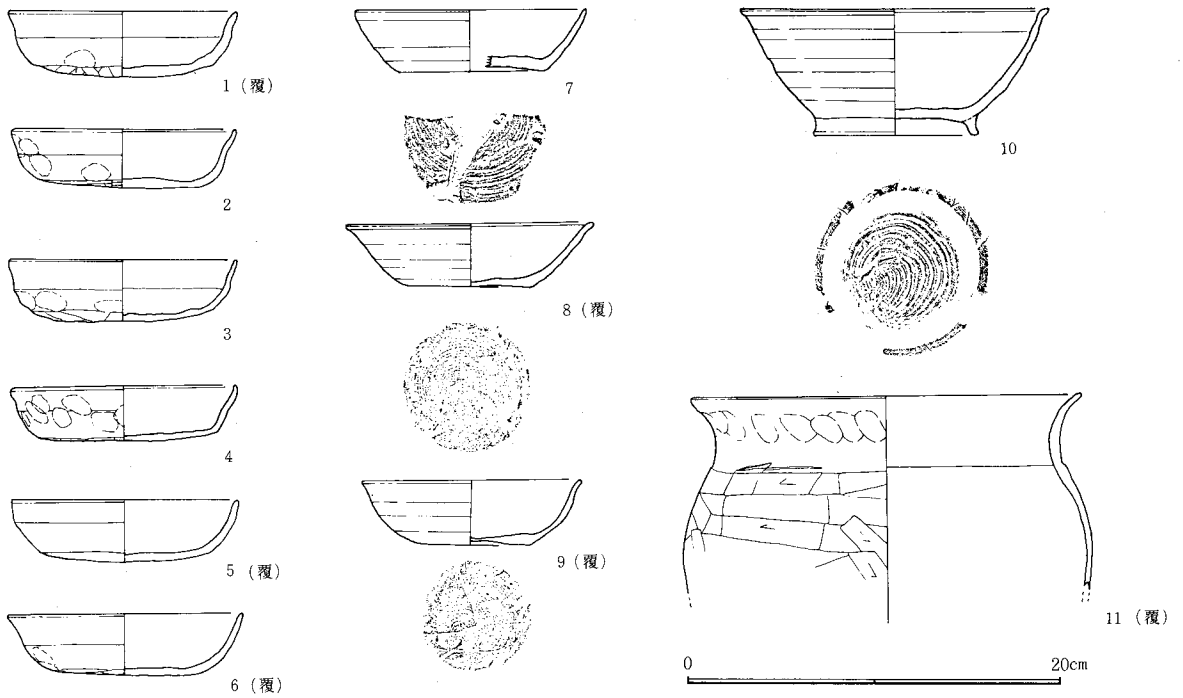
位置　西台地東端、ロ・ハ12にある。台地東部の斜面上に位置する。周囲は住居跡が密集している。　**形状**　東北から南西に

かけて長軸を持つほぼ正方形の住居跡で、南北5.3m、東西4.6mである。長軸方向はN－4°－E、面積は24.3m²、壁高は41～63cmである。南壁西寄り半分、東壁北隅から北壁、西壁下にかけて周溝が認められる。幅は1～77cm、深さは8～35cmと差が大きい。カマド前面より北側にかけて、床面には凹凸が多いが、地層断面図等から推して、貼床は存在しないと考えられる。　**ピット**　カマド正面にある。規模は28×24cm、深さ8cmである。性格、機能等不明である。　**カマド**　東壁やや南寄りにあり、燃焼部に石材が1個検出されている。全長86cm、袖部内幅86cm、燃焼部長60cm、壁への掘り込み角度36°、壁外掘り込み86cm、住居床面とカマド燃焼部のレベル差－30cmである。　**貯蔵穴**　南東隅にある。形状は円形を呈し、規模は78×78cm、深さ49cmである。　**遺物**　貯蔵穴南側、住居南西隅に、須恵器椀片(10)、土師器坏片(3・4・6)、石材の出土が見られる。又、北壁直下付近にも須恵器坏片(7)が検出されている。　**重複関係**　K－185との重複関係があるが、K－185の柱穴が、H－489により削られているので、H－489が新しい。　（鵜木）



1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量の炭化物混入。2．黒褐色土。多量のFP・C軽石、炭化物、少量のB軽石混入。3．茶褐色土。多量のF・C軽石、少量の炭化物混入。4．茶褐色土。多量のF・C軽石、少量のローム粒、炭化物混入。5．茶褐色土。多量のC軽石、少量のF軽石、炭化物混入。6．茶褐色土。多量のF・C軽石、少量のローム、炭化物混入。7．茶褐色土。多量のローム塊、FP・C軽石、少量の炭化物混入。8．茶褐色土。多量のローム塊、F・C軽石混入。9．茶褐色土。多量の焼土、少量のF・C軽石、炭化物、灰混入。10．茶褐色土。焼土、F・C軽石、ローム、炭化物少量混入。11．赤褐色土。多量の焼土、少量のローム、炭化物混入。12．茶褐色土。多量の焼土、少量のローム、炭化物混。　貯　1．茶褐色土。多量のローム粒、F・C軽石混入。2．茶褐色土。多量のローム塊、少量のF・C軽石混入。3．黄褐色土。ローム。堅く締る。

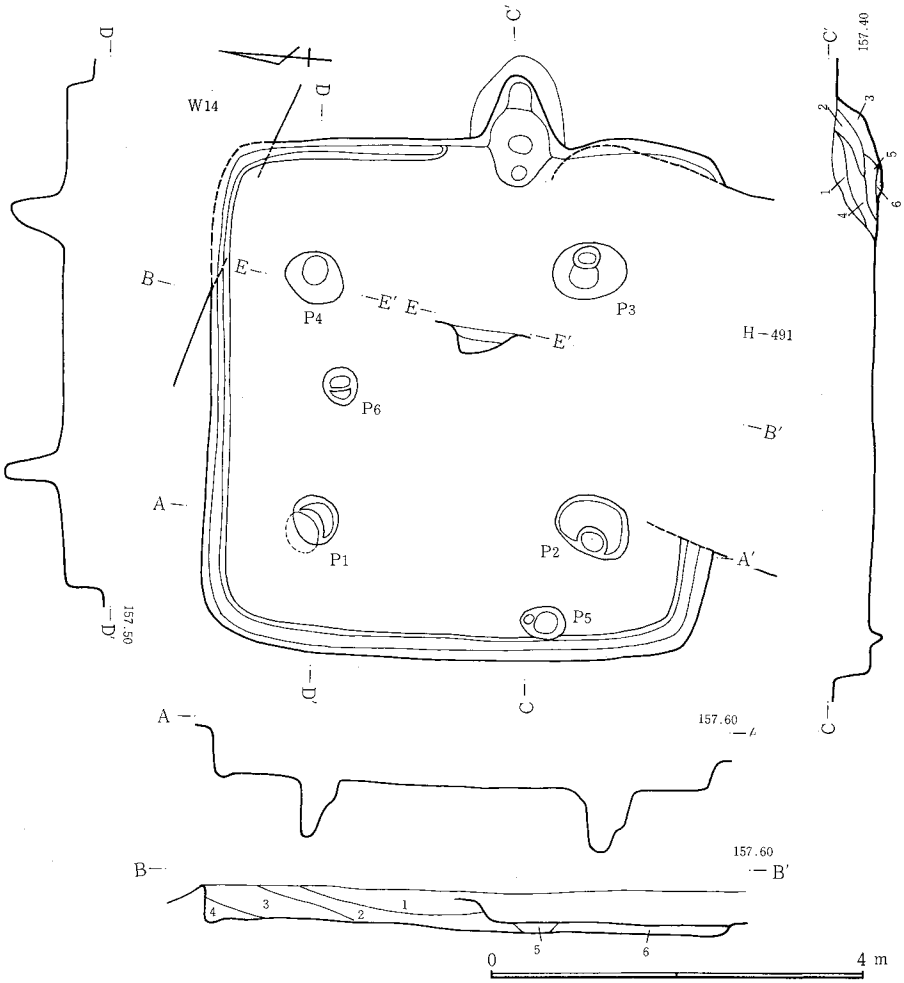
図－571　H－489号住居跡



図－572　H－489号住居跡出土遺物

H490号住居跡（5H－219）（図－573、574　図版－35、116　表－280）（X期）

位置　芳賀中学校に向って北上する道路の東側の調査区の中程で、東の谷に近いロ11に所在する。　**形状**　東西5.3m、南北は南壁のわずかに残された西側部分で約5.3mが計測され、正方形と思われる。長軸方向はN－7°－E、面積は推定で約28m²。壁高は25～43cm。壁は直線的に掘られている。カマドの左右を除いた東壁北側2分の1と北壁、西壁に周溝をめぐらす。大半をH491号住居跡に切られている南壁も南西隅の一部に周溝が確認されており、連続していたものと思われる。幅5～21cm、深さ2～5

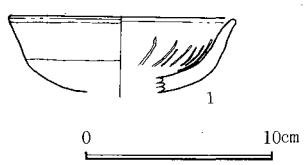


1．褐色土。ローム主体。ＦＰ混入。2．ローム・黒色土の混合。3．褐色土。ローム主体。ＦＰ混入。4．ローム・黒色土の混合。5．ローム塊主体。締っている。6．ロームと黒色土。　**カマド**　1．黒褐色土。ＦＰ軽石、ローム塊混入。2．赤灰色土。白色粘土と焼土塊。3．黒褐色土。ローム少量混入。4．白色粘土。炭化物、焼土、ローム塊少量混入。5．赤灰色土。灰と焼土。6．焼土塊。**P**$_4$1．茶褐色土。多量のローム塊、少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黄褐色土。少量のＣ軽石混入。堅く締っている。

図－573　Ｈ－490号住居跡

cm。　**ピット**　柱穴と考えられるピット4個（P_1～P_4）の他、西壁南側（P_5）とP_1とP_4の中間に小振りで浅いピット（P_6）がある。柱間距離はほぼ3×3mの範囲におさまるが、北側東西間隔がやや狭くなっている。　**カマド**　東壁ほぼ中央。全長82cm、袖部内幅66cm、燃焼部長46cm、壁への掘り込み角度52°で、燃焼部は床面よりも8cm程低い。掘り形は方形で2段になっており平面形は凸形を呈する。白色粘土を使用してカマドを構築していたようである。　**重複関係**　H491号住居跡と重複する。地層断面及びH491号住居跡の踏み固められた床面が本遺構にかかっていることから、本遺構が旧い。また、W14号溝が北壁際で重複するが、地層断面にW14号溝が現われないことからW14号溝が旧いと考えられる。

（松村）

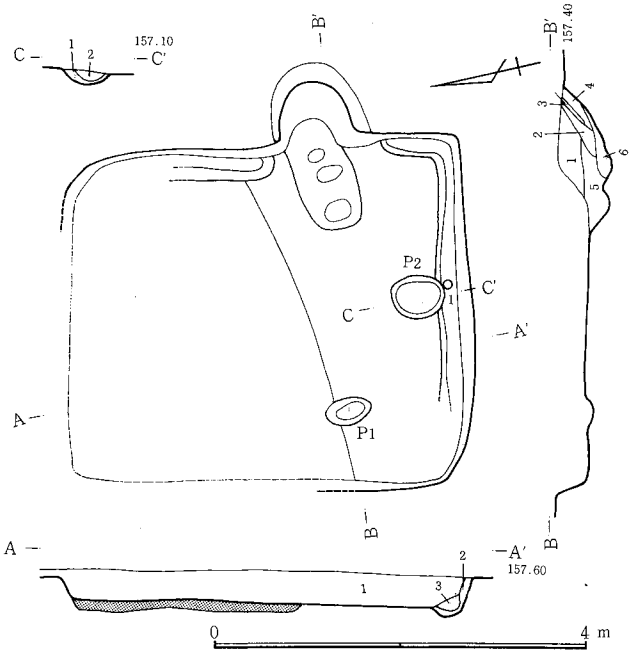


H491号住居跡（5H－220）（図－575、576　図版－35、116　表－281）（Ⅵ期）

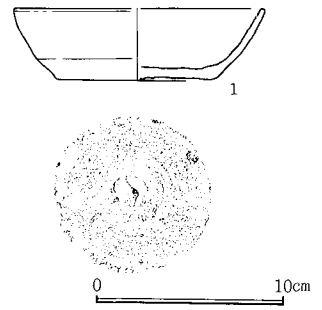
位置　ロ11に所在する。H490号住居跡が埋まってから、南東隅から南西隅付近までにかけてやや斜めに掘り込んでいる。

形状　地層断面及び貼床の範囲から南北4.1m、東西3.4mの南北に長軸を持つ長方形を呈する。長軸方向はN－12°－E、面積は14.2m²で、壁高は30～37cmである。周溝は東壁のカマド左側4分の1程と東壁南東隅から南壁南西隅付近までが確認された。幅5～25cm、深さ7～9cm。H490号住居跡と重複している部分は貼床が施されており、上面は固く踏みしめられていた。

ピット　南壁中央、周溝に接してP_2、南西隅付近にP_1、いずれも深さ10cm程の浅い長円形のピッ



図－575　Ｈ－491号住居跡

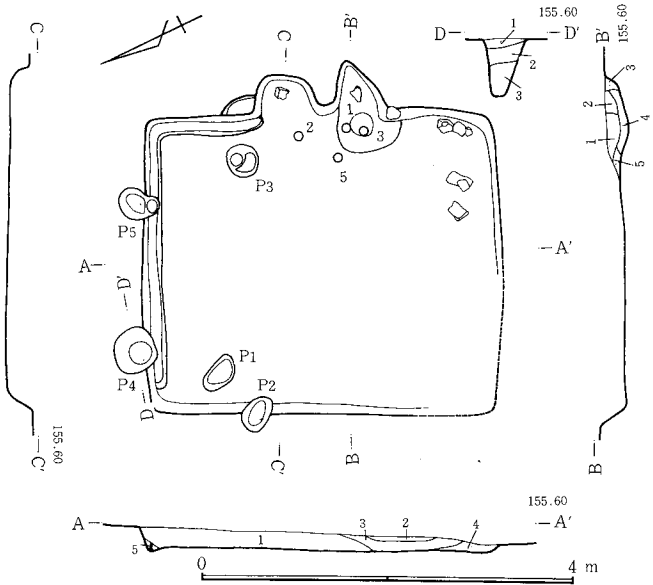


図－576　Ｈ－491号住居跡出土遺物

1．黒色土。ローム粒、ＦＰ軽石、焼土粒混入。2．ロームと黒色土。3．ローム粒と黒色土。　**カマド**　1．黒褐色土。ローム塊、ＦＰ軽石、焼土、灰の塊混入。2．赤色土。焼土多量に混入。3．黒色土。4．赤色土。焼土多量に混入。5．焼土塊・ローム塊・灰・黒色土の混合。6．黒褐色土。ローム塊、焼土塊、灰塊。**P**$_2$1．黒色土。少量のローム塊、ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．茶褐色土。多量のローム粒、少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。

トを検出。　**カマド**　東壁南寄り。全長84cm、袖部内幅68cm、燃焼部長44cm、壁への掘り込み角度47°で、円形に掘り込まれている。焚き口部は方形の掘り形を持ち、床面から27cm程も深く掘られている。　**遺物**　須恵器坏(1)がP_2付近の周溝から出土。　**重複関係**　H490号住居跡を掘り込んでいる。本遺構が新しい。　（松村）

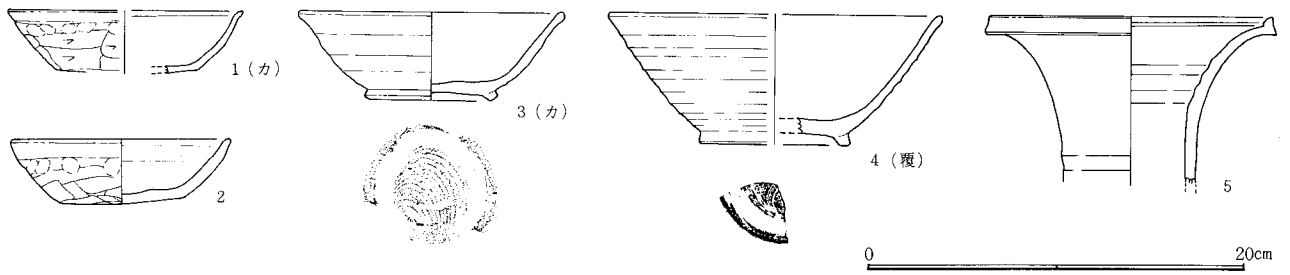
H492号住居跡（5H—221）（図—577、578　図版—35、116　表—282）（X期）



1．黒色土。FP軽石、ローム少量混入。2．砂質土。3．黒色土。FP軽石、ローム、焼土少量混入。4．黒色土。浮石、ローム混入。5．ローム粒主体。黒色土多量に混入。　**カマド**　1．砂・ローム粒・黒色土の混合。2．赤褐色土。ローム塊、焼土塊混入。3．黒色土。FP軽石、焼土混入。4．赤褐色土。焼土混入。5．黒色土。FP軽石、ローム塊、焼土混入。**P_4**　1．黒褐色土。少量のF・C軽石、ローム粒混入。2．茶褐色土。多量のローム塊、少量のC軽石混入。3．黒褐色土。少量のローム、C軽石混入。

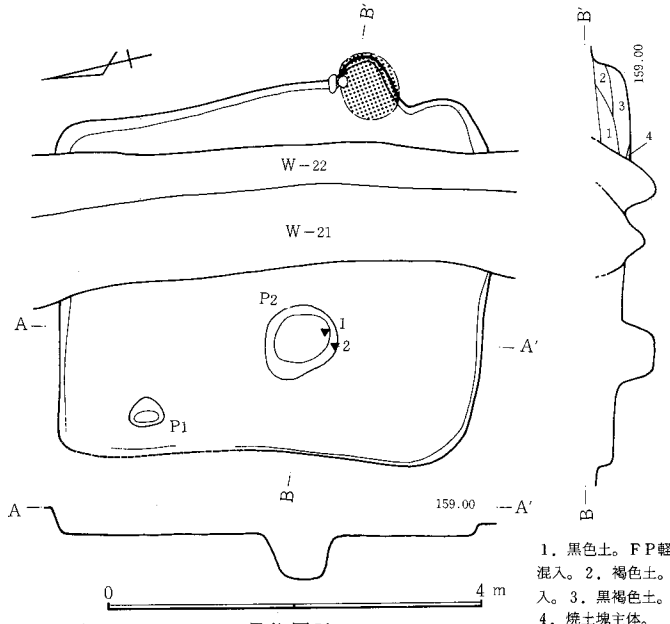
図—577　H—492号住居跡

位置　ロ9。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北3.7m、東西3mである。長軸方向はN—26°—E、面積11.3㎡、壁高は21～26cmと浅く、壁はいずれも直線的に掘られている。東壁カマド北側に、50×40cmの半円形に近い形状の張り出しを持つ。周溝は東壁の張り出し部から北東隅を経て北壁にかけて掘られている。幅5～13cm、深さ1～9cm。貼床は特に認められなかった。　**ピット**　北壁に2個（P_4、P_5）、西壁北側に1個（P_2）が壁にかかって、住居内に西壁、東壁の北側、壁付近に2個（P_1、P_3）、いずれも住居北側3分の1に片寄って検出された。P_4は特に64cmと深く、他はP_1とP_5が35～38cm、P_2とP_3が10～14cmであった。　**カマド**　東壁南寄り。全長68cm、袖部内幅42cm、燃焼部長50cm、壁への掘り込み角度58°、燃焼部は床面より6cm低い。構築材に石を用いたようで右袖部に1石を残す。　**貯蔵穴**　貯蔵穴と思われるものはなかったがカマド左側の張り出しはそれにかわる機能を持つか。張り出しの床面は住居床面と同レベルである。　**遺物**　カマド焚き口部から土師器坏(1)、須恵器埦(3)が、カマド前から須恵器壺(5)、張り出し部前に土師器坏(2)が出土した。他に住居南東隅と張り出しにいくつか石が検出されている。特に張り出しからは磨石と思われる丸い石が検出されている。　（松村）



図—578　H—492号住居跡出土遺物

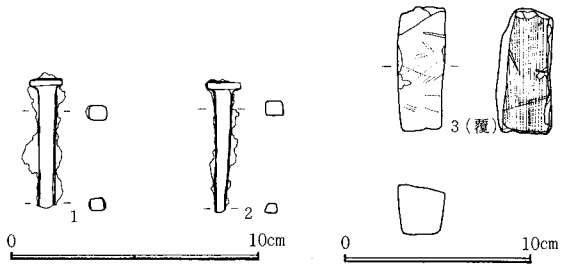
H493号住居跡（5H—222）（図—579、580　図版—36、116　表—283）（XIV期）



1．黒色土。FP軽石、ローム粒、焼土混入。2．褐色土。ローム主体。焼土混入。3．黒褐色土。焼土、ローム混入。4．焼土塊主体。

図—579　H—493号住居跡

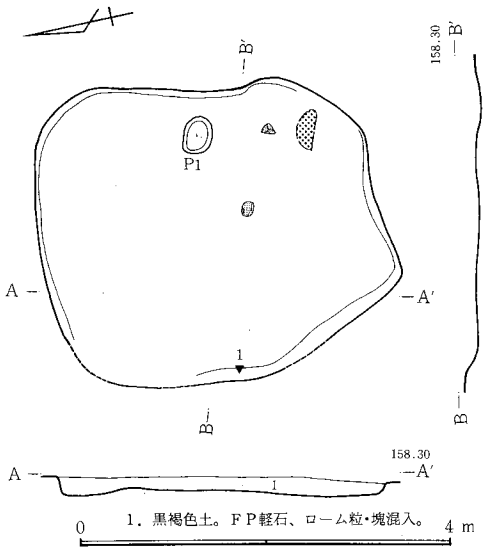
位置　A13からイ13にかけて所在する。　**形状**　南北に長軸を持つ長方形で、南北4.5m、東西3.6mだが、西壁掘り形はカマ掘りにより相当攪乱を受けており、推定値である。長軸の方向はN—17.5°—E、面積は推定で約15.8㎡、壁高は7～36cm。壁はほぼ直線的であるが、残された北東隅、南東隅は隅丸を呈する。周溝は確認できなかった。　**ピット**　住居北西隅に40×34cm、深さ11cmの小振りのP_1と住居



図—580　H—493号住居跡出土遺物

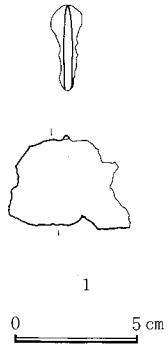
中央よりやや西寄りのところに74×70cm、深さ43cmの大きなP_2を検出した。　**カマド**　東壁南寄り。攪乱を受けており、焼土範囲と左袖に残った石でそれと知れる。壁への掘り込み角度31°。　**遺物**　P_2内及びピットの際より鉄製釘（1・2）が出土した。　**重複関係**　W—21・62と重複する。東西地層断面により、本遺構が旧い。W—21と62ではW—62が旧い。　（松村）

H494号住居跡（5H—223）（図—581、582　図版—36　表—284）（X期）

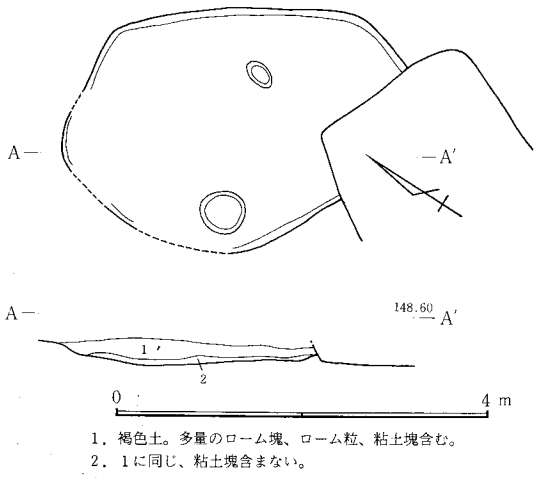


図—581　H—494号住居跡

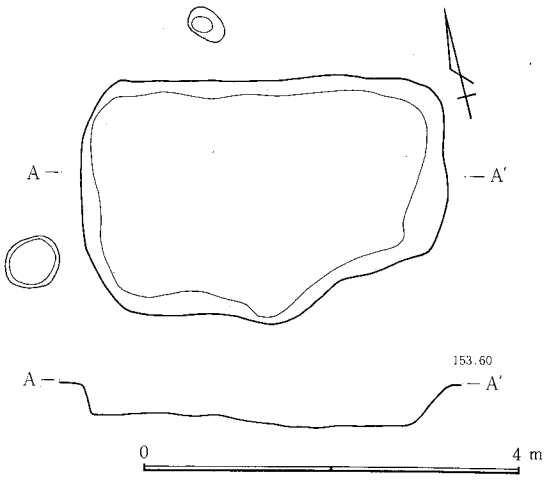
位置　ロ12からロ13にかけて所在する。　**形状**　カマ掘りによる攪乱が激しく、わずかに残った壁から南北に長軸を持つ長方形と推定される。南北3.6m、東西2.9m、面積9.4m²はいずれも推定値。現存形で長軸はN—13.5°—Eである。壁高は上部をかなり削り取られており、現状で平均約15cm。周溝及び貼床については確認できなかった。　**ピット**　東壁中央付近に41×25cm、深さ20cmの長円形のピットを検出。　**カマド**　カマ掘りにより壊されていて残っていなかったが、東壁南側に焼土範囲を確認した。　**遺物**　西壁際から鉄製品(1)を出土した他、焼土範囲の近くと住居中央部分に土器破片が、円形で扁平な石がやはり住居中央部分から出土している。また焼土範囲の北側から焼石が2個出土。　（松村）



3　竪　穴　遺　構



図—583　H—1号竪穴遺構



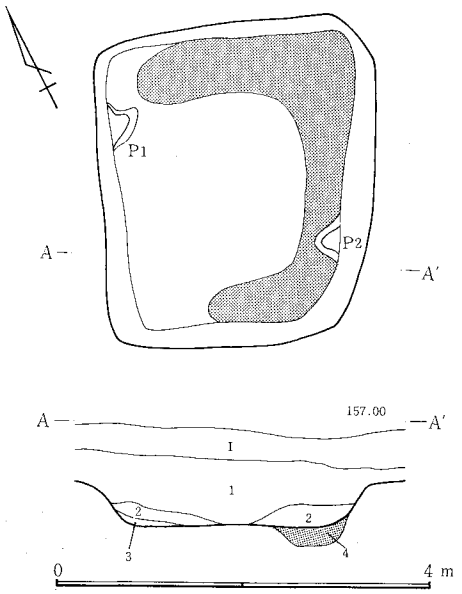
図—584　H—2号竪穴遺構

H1号竪穴遺構（図—583　図版—36）

位置　西台地南端のJ101に所在する。南への緩斜面上にある。　**形状**　南北3.7m、東西2.5mの楕円形。面積7.4m²、長軸方向N—40°—E、壁高8～18cm。　**ピット**　遺構内の東寄りと西寄りから各1検出されている。いずれも円形で、P_1は規模が46×44cm。P_2は規模が34×18cmである。遺構との関係、性格は不明である。　**遺物**　遺構内からの遺物の出土はみられなかった。　**重複関係**　JP—64と重複している。　**その他**　掘り形はレンズ状であり、土坑に近い性格と考えられる。周辺は竪穴住居跡や掘立柱建物跡の多いところで、その中心に近い位置にある。　（井野）

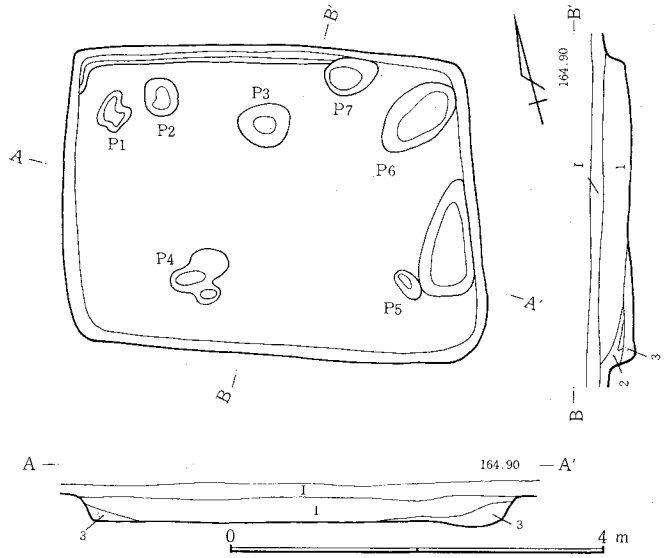
Ｈ２号竪穴遺構（図―584　図版―36）

位置　西台地東端のイ７に所在し、南への緩斜面上にある。　**形状**　長方形で南東隅を方形に欠く形をしている。東西3.8mで南北2.5mである。面積は8.9㎡である。長軸方向はＮ―77°―Ｅで、壁高は38～43cmである。　**ピット**　遺構周辺にピットが２つあるが、住居との関係、性格は不明である。P_1は42×28cmでP_2は56×52cmである。　**遺物**　遺構内からは遺物の出土はみられなかった。　**その他**　住居構築の途中で放棄されたものか。南・北に竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多い地区がある中間のやや遺構の少ないところである。　（井野）



1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。２．黒褐色土。２より黒い。
３．暗褐色土と黒色土の混土。４．ロームと黒褐色土の混土。

図―585　Ｈ－６号竪穴遺構



1．黒色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、若干のロームブロック混入。２．黒褐色土。ローム多量に混入。３．黒褐色土。ローム多量に混入。

図―586　Ｈ－７号竪穴遺構

Ｈ６号竪穴遺構（Ｈ―26）（図―585　図版―36）

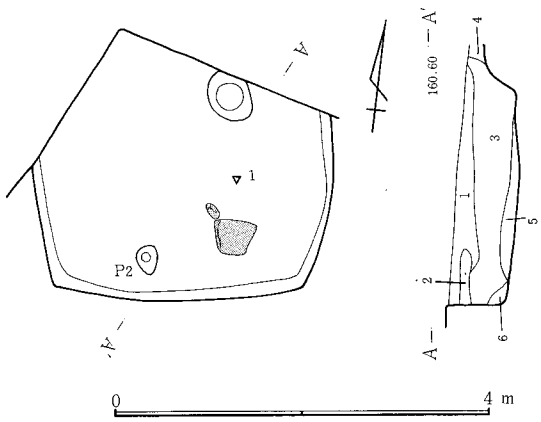
位置　西台地中央部のＣ10に位置する。周辺には竪穴住居跡が多く存在する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北3.0cmで東西2.2cm、東壁は凹凸があり、南辺は北辺にくらべ短い。長軸方向はＮ―21°―Ｅで面積は6.9㎡である。壁高は35～43cmを測る。　**床面**　住居の南東４分の１は平坦で、踏み固められているが、その他の部分は凹凸が多く、地層断面からも貼床（１～25cm）が施されていたことがわかる。西壁北部と東壁南部の床面に小規模な高まりが見られる。いずれも30×20cm程度である。　**ピット　炉　カマド**　なし。　**遺物**　なし。　**テフラ**　２層にＦＰ・Ｃ軽石が混入。　**その他**　遺構の覆土は周辺の奈良・平安時代の竪穴遺構と似ており同時期と考えられる。住居跡構築途上の遺構と考えられる。　（井野）

Ｈ７号竪穴遺構（Ｈ―134）（図―586　図版―36）

位置　西台地北端のＣ・Ｄ21に位置する。南に住居群をのぞむ。　**形状**　東西に長軸をもち、東西4.1mで南北3.1mである。長軸方向はＮ―73°―Ｗで、面積は12.4㎡である。壁高は22～31cmを測る。北壁の西３分の２に周溝をめぐらす。幅２～12cmで深さ2～５cmである。　**ピット**　床面８ヵ所。P_1は25×11cmで深さ５cm、P_2は68×22cmで深さ６cm、P_3は53×44cmで深さ７cm、P_4は60×58cmで深さ22cm、P_5は34×12cmで深さ６cm、P_6は66×118cmで深さ16cmP_7は101×60cmで深さ18cm、P_8は61×36cmで深さ７cmである。不整形を呈するものが多く、性格も明らかではない。炉・カマドはない。　**遺物**　なし。　**テフラ**　２層にＣ軽石とＦ・Ｐを多く含んでいる。覆土は周辺の奈良平安時代の竪穴住居跡と似ており、同時期と考えられる。　**その他**　構築途上で放棄された住居跡と考えられる。　（井野）

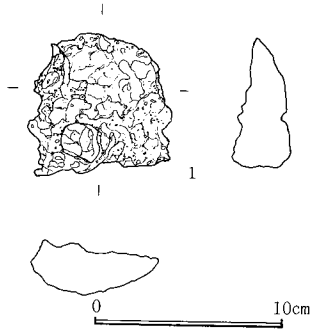
Ｈ８号竪穴遺構（Ｈ146）（図―587、588　図版―36　表―285）

位置　西台地の中央部やや北のＢ15に所在し、南への緩斜面上にある。北側には竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多く分布する。南側にはあまり遺構がない。　**形状**　遺構の北側及び西側の一部が耕作等により削平をうけており、規模等の形状ははっきりとはしていない。東西は現状で3.0m、南北は2.6mを測る。面積は4.8㎡（現存）。長軸方向は南北を長軸とすると、Ｎ―９°―Ｗ。壁高は、北を除くと10～62cmである。　**ピット**　床面２ヵ所（P_1、P_2）がある。P_1は60×44cmで深さ27cm、P_2は30×20cmで深さ17cmである。いずれも遺構との関係は不明である。　**遺物**　床面より鍛冶滓(1)が出土している。　**その他**　床面よりやや焼けた安山岩が出土。他に出土遺物はない。埋土はまわりの竪穴住居跡のものに似ており、ほぼ同時期のものと考えられる。（井野）



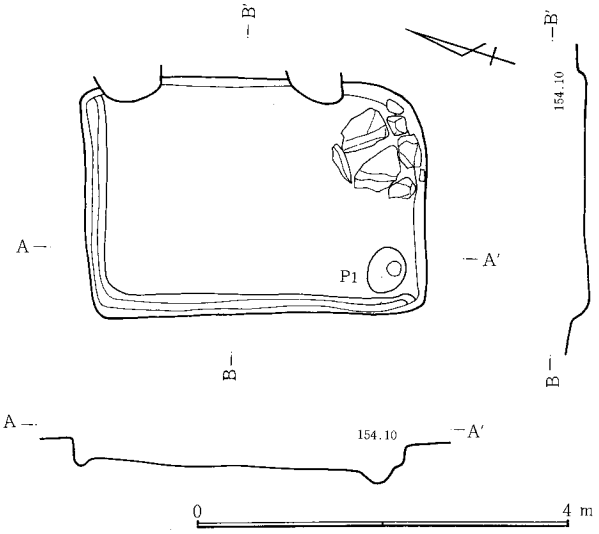
1．黒褐色土。B・FP・C軽石混入。2．黒褐色土。FP・C軽石、炭化物、多量の砂を含む。3．黒褐色土。B・C軽石をわずかに含む。4．黒褐色土。白、茶小粒子混入。5．黒褐色土。堅く締る。

図－586　H－8号竪穴遺構



図－588　H－8号竪穴遺構出土遺物

H9号竪穴遺構（H261）（図―589　図版―36）



図－588　H－9号竪穴遺構

位置　西台地中央のハ7・8に所在する。台地を区切る沢の西にあたり、東への緩斜面上にある。周辺は竪穴住居跡の多いところである。　**形状**　北々東から南々西に長軸をもつ長方形で、南北は3.4mで、東西は2.4mである。長軸方向はN―17.5°―Wで面積は7.9m²である。壁高は16～25cm。北と西の壁下に幅4～13m²の周構をめぐらす。　**ピット**　床面上に1ヵ所P_1は規模が49×39cmで深さ16cm。性格は不明である。　**遺物**　床面からは遺物は発見されなかった。　**その他**　住居内南東隅に石が8石ある。組み合わされたような状態で出土しており、石組みのカマドの壊れたものに見えるが、使用した跡はない。石組みがカマドとすれば、南西隅のピットが貯蔵穴として考えられる。埋土にも土器は含まれず、住居として使用される前に廃棄されたものか。　（井野）

芳賀東部団地遺跡では、9軒の竪穴遺構の調査を行った。（うちH3～5号竪穴遺構については第1巻に収録済）第2巻では残りの6軒の竪穴遺構について収録した。いずれも竪穴住居の形態をもっているが、カマドがなく、その他柱穴等の住居施設ももたないものである。なお、第1巻刊行後の整理のなかで当初住居跡と考えられていたが、検討の結果竪穴遺構としたものが4軒あり、第1巻の記述にくらべ4軒ふえている。

H1号竪穴遺構は楕円形の平面で、掘り形はレンズ状を呈している。円形のピットが2検出されているが、遺物は出土していない。土坑に近い性質をもつものと考えられる。付近は住居跡・建物跡の多いところである。

H2号竪穴遺構は長方形で、南東隅を欠く形をしている。遺構内からは遺物の出土はみられなかった。構築の途上で放棄されたものか。周辺はやや遺構の少ないところである。

H6号竪穴遺構は方形で、規模はやや小さい、北～東壁下の床面に貼り床は施されてはいるものの、カマド、貯蔵穴、柱穴は見られず、構築途上の遺構と考えられる。

H7号竪穴遺構は部分的にしか残存していないが、方形で小規模の遺構と考えられる。カマド・炉の跡とみられるものはなく、H6号と同様に構築途上の遺構と考えられる。

H8号竪穴遺構は耕作等の削平で形状は不明である。カマド・炉はなく、床面より鍛冶滓と焼けた安山岩が出土している。埋土は周辺の竪穴住居跡とほぼ同じである。住居でなく作業場として使用したものか。

H9号竪穴遺構は長方形で、周溝をめぐらしていた。南東隅より石が組み合わされたような形で出土しており、カマドのこわれた跡とも考えられるが、使用された跡はない。住居として使用される前に廃棄されたものと考えられる。

H8号竪穴遺構を除きその他の竪穴遺構には使用した跡がなく構築途上に廃棄した、もしくは使用する前に廃棄されたものと考えられる。　（井野）

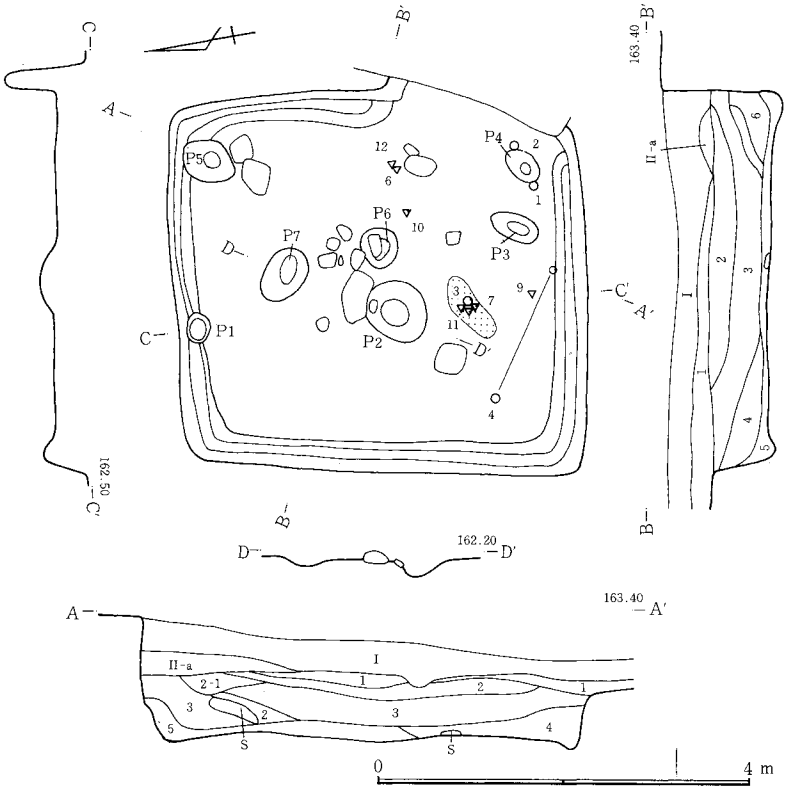
4　鍛冶址、鍛冶関連遺物出土遺構

竪穴住居跡関連遺構

H58号住居跡（図—590、591、592　図版—37、117　表—286）（VI期）

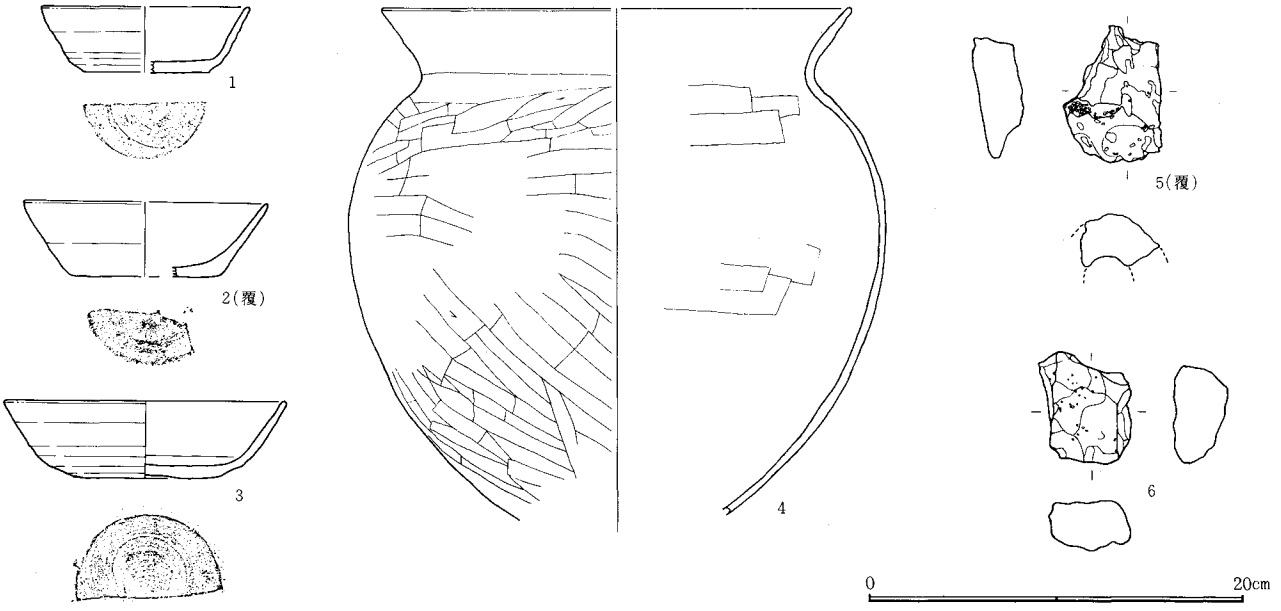
位置　西台地北のG17に所在する。南緩斜面に位置する。　**形状**　南北に長軸をもつが、正方形に近い。南北4.2mで、東西3.9mである。長軸方向はN—9.5°—Eで面積は15.6m²である。壁高は25～58cmを測る。東壁の南半分を除く全周に周溝をめぐらす。幅7～18cmで深さは1～9cmである。　**ピット**　床面7ヵ所。P_1は29×24cmで深さ53cm、P_2は67×53cmで深さ16cm、P_3は54×23cmで深さ8cm、P_4は42×27cmで深さ10cm、P_5は50×43cmで深さ7cm、P_6は42×40cmで深さ11cm、P_7は60×48cmで深さ8cm。ピットはP_1を除き10cm前後の浅いものである。P_1が北壁下、P_5、P_4が北供・南東隅にあり、柱穴とも考えられる。床面中央部には浅目のピット、P_2、P_6、P_7がまとまってあり、本住居跡に付随する施設のものと考えられる。住居内より多数の石が住居中央のほぼ床面より多く出土している。この住居跡は鉄滓が多く出土しており鍛冶関連の遺構と考えられる。　**遺物**　床面の南東隅より、須恵器坏（1・2）と土師器甕(4)が、床面中央のやや南より須恵器坏(3)が出土、その周辺からはスラグ（7・8・10・11）が、床面中央よりスラグ（6・10・12）が出土している。また埋土中より羽口(5)が出土している。（4・6・9・12）は床着である。　**テフラ**　2層はC軽石を多量に含む層である。床面からは30cmを測る。

（井野）

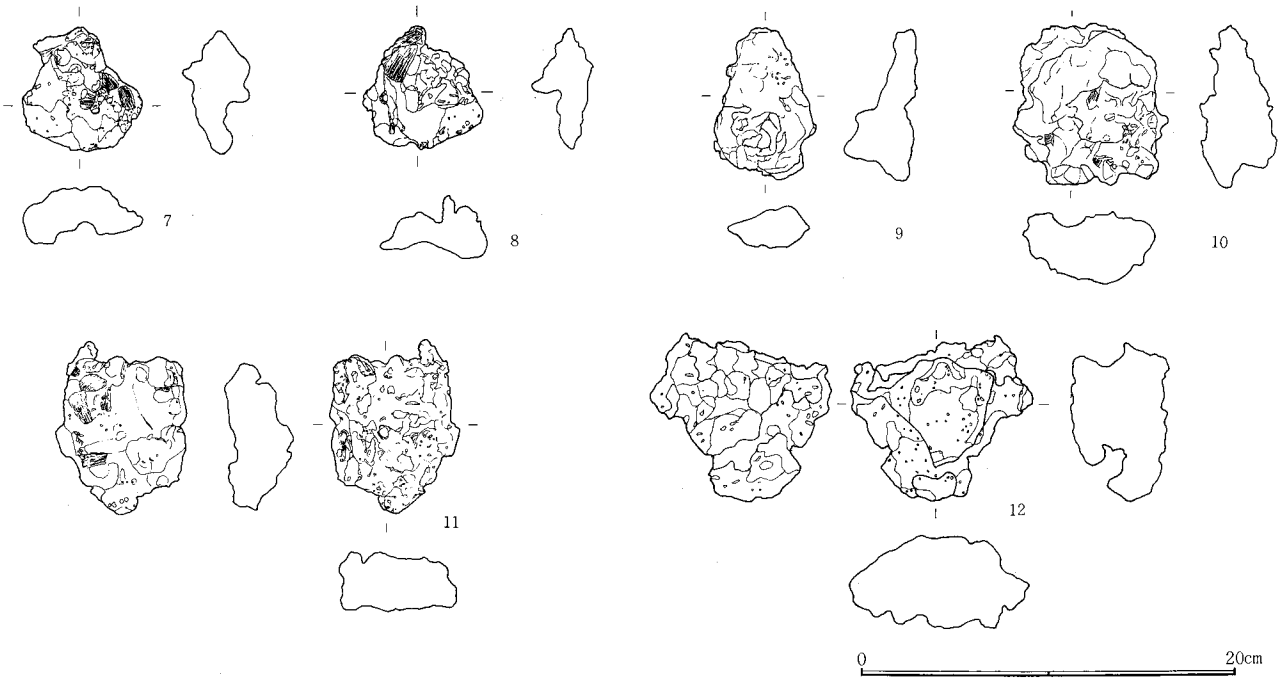


1．黒褐色土。多量の浮石混入。2．暗褐色土。C軽石等混入。2-1．暗褐色土。C軽石等混入。2より黒い。3．黒褐色土。FP(φ5cm)数個混入。4．黒褐色土。5．黒褐色土。ロームブロック少量混入。6．黒色土微砂。

図—590　H—58号住居跡



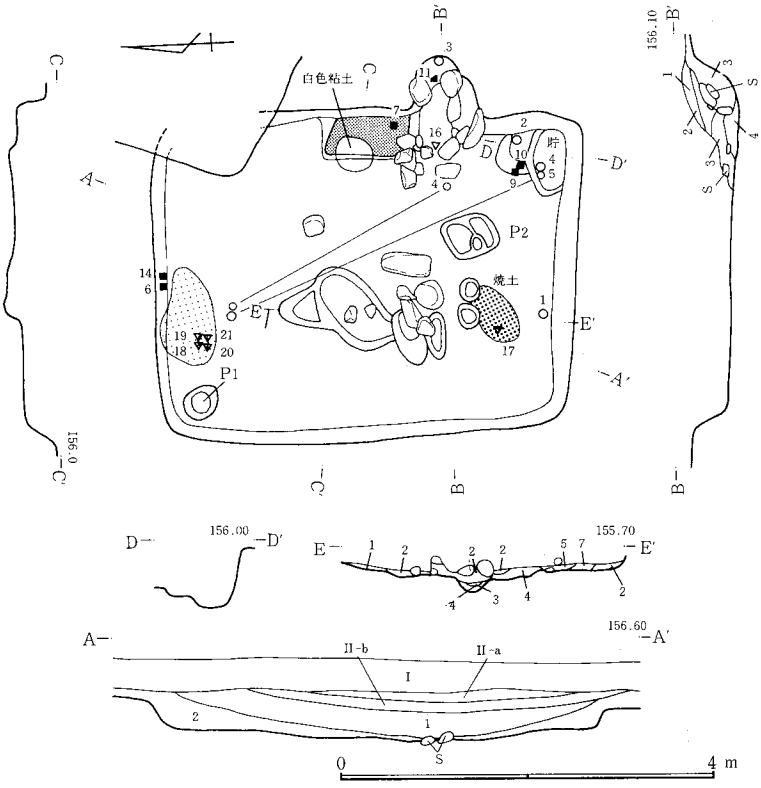
図—591　H—58号住居跡出土遺物（1）



図－592　H－58住居跡出土遺物（２）

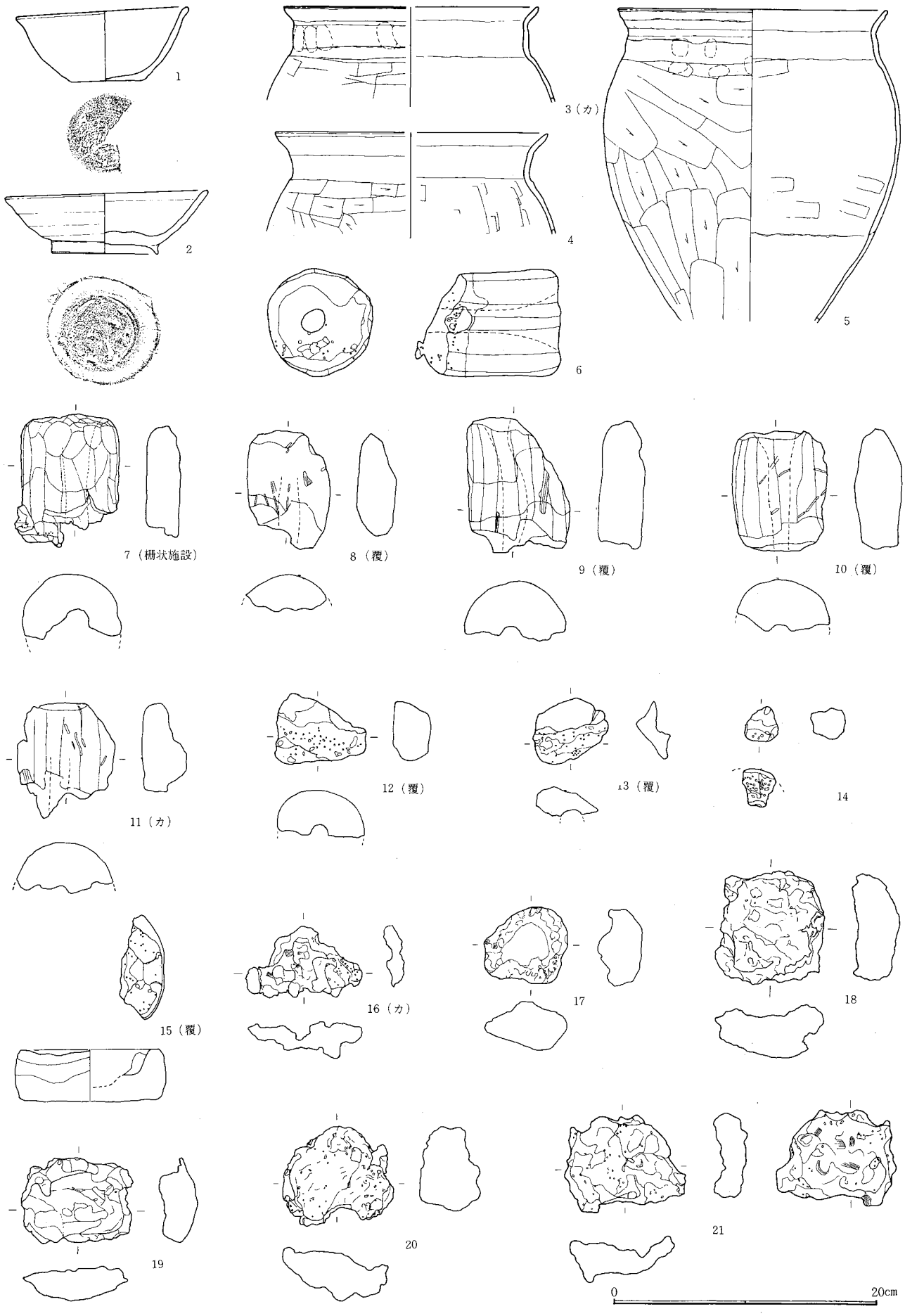
H87号住居跡（図－593、594　図版－37、117　表－287）（X期）

位置　西台地西のN７・８に位置する。付近は竪穴住居跡が散在するが、本遺構と同時期と考えられる住居跡はわずかしか存在していない。　**形状**　南北4.1mで東西3.8mの長方形である。長軸方向はN－4°－Eで面積は13.2m²である。一部に攪乱をうけている。壁高は33～40cmを測る。カマド左手に一段高い所がある。床面との差＋８cm。規模は86×74cm。小石まじりの白色粘土で作られている。粘土の下は床面下の小ピットになっている。カマド左袖に続いており、柵状の施設か。南壁南にも張り出しがある。床面より＋11cm。148×48cm。床面中央に石組みの施設がある。石の下は床面下の小ピットになっており、チップス・鉱滓を含む埋土になっていた。一部のピット底面は強く焼けていた。石組みの北の北壁下よりは多量の鉱滓や羽口が出土している。　**ピット**　床面２ヵ所。P_1は38×32cmで深さ15cm。P_2は50×48cmで深さ８cm。　**カマド**　東壁南寄り。構築材に石が多く使われている。全長96cmで、燃焼部分50cm、袖部内幅35cmで壁外掘り込み68cm、壁への掘り込みの角度74°である。燃焼部は床面にくらべて９cm低く特によく焼けていた。貯蔵穴、南東隅。長方形に近い。60×30cmで、深さ14cmである。　**遺物**　カマド煙道部より土師器甕(3)と羽口(11)が、左袖の左より羽口(7)燃焼部より鉱滓(16)、南東隅より須恵器埦(2)が、石組みの南より須恵器埦(1)鉄滓(17)が、北壁中央下から、土師器甕(5)、鉄滓（18・19・20・21）などが出土している。その他埋土中より、るつぼ(15)が出土している。　**テフラ**　II－b層はB軽石を主としている。床面からは27cmを測る。その他、床面の中央の石組みの南には焼土面（160×38cm）がある。北側の石組、北壁下の鉄滓と合わせて考えると、小鍛冶跡の存在が考えられる。　（井野）



1．黒褐色土。ＦＰ軽石多量に含む。2．黒褐色土。床面直土ローム若干混入。カマド
1．黒色砂質土。C軽石点在。2．暗褐色土。浮石、焼土粒を含む。3．黒褐色土。焼土粒若干含む。4．暗褐色。焼土、灰、ブロック状に混入。5．暗褐色土。焼土多量に混入。床面下、1．黒色土とロームの混入。2．黒褐色土。ローム粒少量点在。3．黒褐色土。下層にチップス、鉄滓小粒子、若干のローム塊混入。4．暗褐色土。ローム粒点在。5．焼土塊。6．暗褐色土。7．黒褐色土。焼土塊多量に混入。

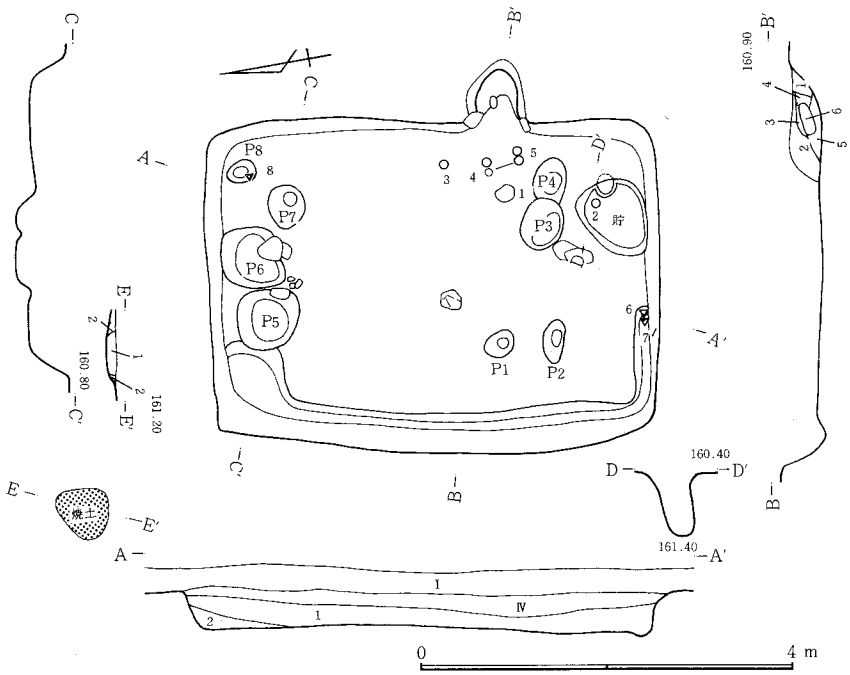
図－593　H－87号住居跡



図－594　H－87号住居跡出土遺物

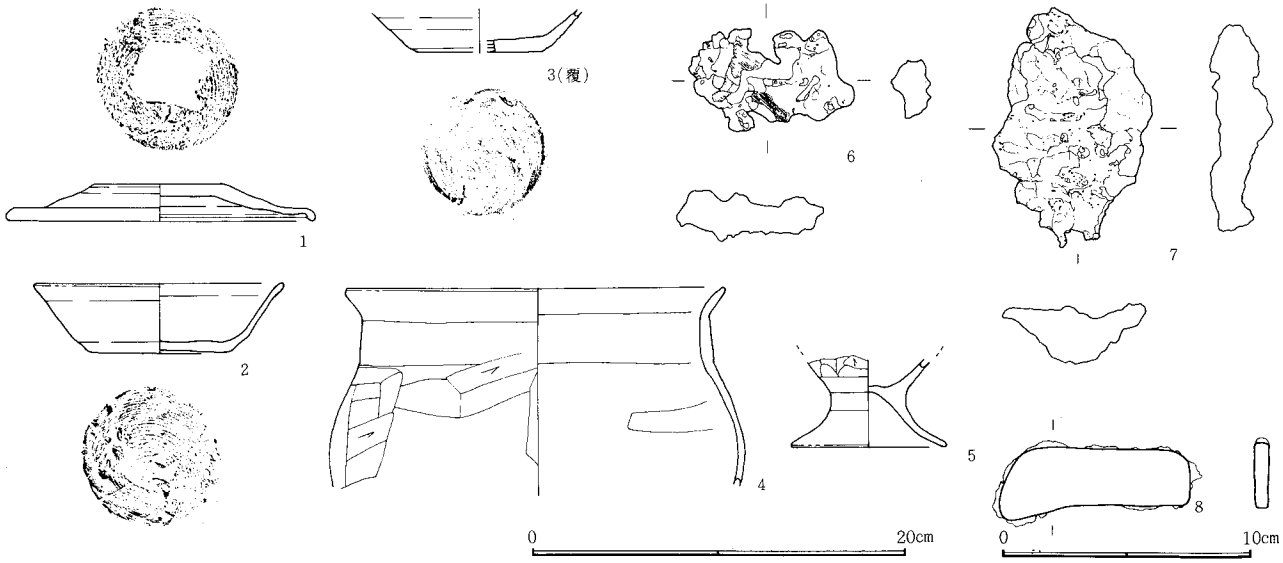
H198号住居跡（図—595、596　図版—37、117　表—288）（XI期）

位置　西台地北のA16・17に位置する。周辺の竪穴住居跡で同時期と考えられるものは少ない。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北4.5m、東西3.2mである。長軸方向はN—9°—Eで、面積は13.9m²である。壁はしっかりと掘り込まれており、壁高は22～61cmを測る。西壁と南壁の西2分の1に周溝をめぐらす。幅4～15cmで、深さ3～7cmである。　**ピット**　床面8ヵ所。P_1は36×24cmで深さ10cm。P_2は40×23cmで深さ13cm。P_3は53×42cmで深さ22cm。P_4は46×32cmで深さ9cm。P_5は63×61cmで深さ24cm。P_6は68×62cmで深さ21cm。P_7は46×39cmで深さ7cm。P_8は30×21cmで深さ8cmである。P_2、P_3、P_5、P_7は柱穴とも考えられる。P_3、P_5は深いが、P_2、P_7は浅い。　**カマド**　南壁東寄り、構築材に凝灰岩を使用している。袖部に各1石と燃焼部に1石がのこる。全長85cmで、燃焼部長40cm、袖部内幅50cmで壁外掘り込み80cm、壁への掘り込み角度38°である。燃焼部は床面にくらべて4cm高い。　**貯蔵穴**　東南隅寄り、83×70cmで深さ15cmである。　**遺物**　カマド前より須恵器蓋(1)と貯蔵穴内より坏(2)が、カマド手前より須恵器坏(3)と土師器台付埦(5)が、北東隅より鉄製品(8)が、南壁下周溝内より鉄滓（6・7）が出土している。　**テフラ**　IV・1層にはFP・C軽石が含まれている。　**その他**　南壁下の鉄滓は壁から落ち込んだ状態で出土している。最も下のもので床面より＋2～3cm。周囲に焼けは認められない。床面に凝灰岩と焼石が多く散布している。　（井野）



1．褐色土。FP・C軽石、焼土、少量のローム塊混入。2．褐色土。FP・C軽石、焼土、炭化物多量のローム塊混入。カマド、1．赤褐色土。焼土塊(φ2cm)多量に混入。2．茶褐色土。FP・C軽石混入。4．茶褐色土。焼土塊多量に混入。5．茶褐色土。多量の焼土塊、凝灰岩粒、炭化物、灰混入。6．凝灰岩、焼土範囲、1．赤褐色土。炭化物、焼土混入。2．暗褐色土。ローム多量に混入。

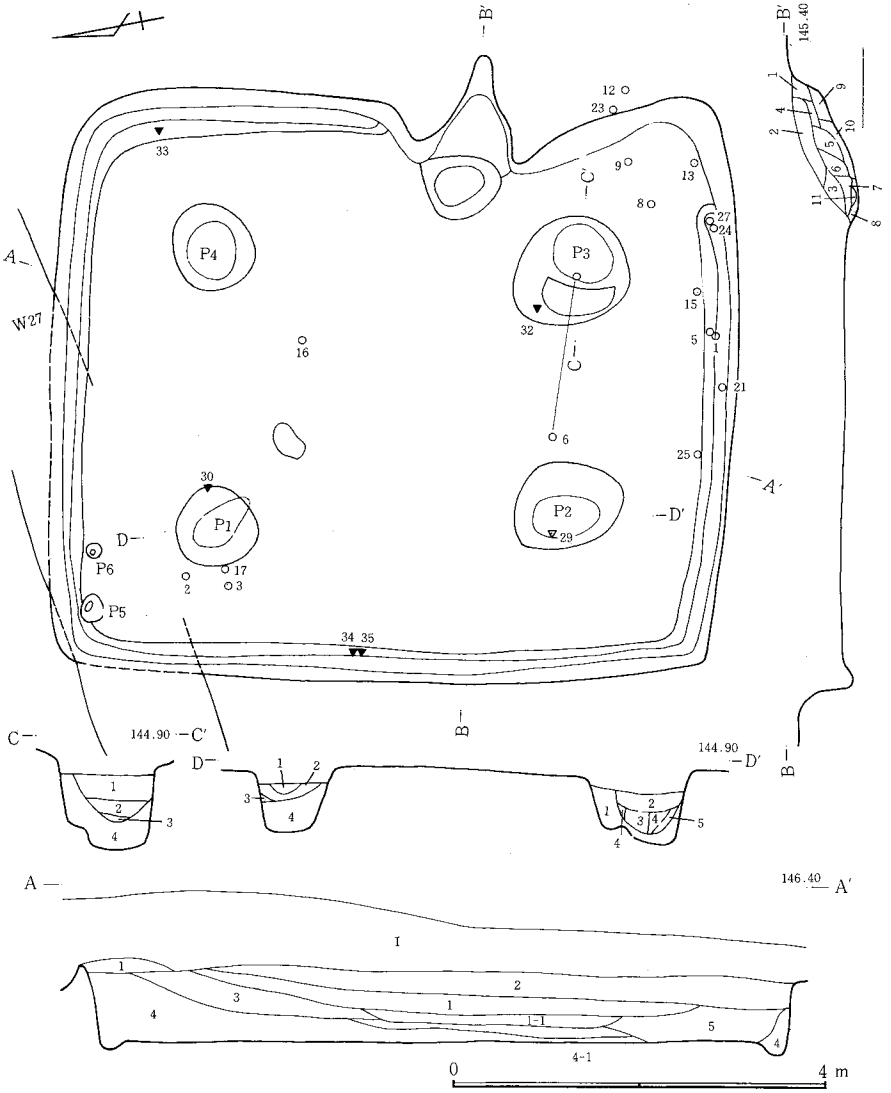
図—595　H—198号住居跡



図—596　H—198号住居跡出土遺物

H216号住居跡（図—597、598、599　図版—37、118　表—289）（VIII期）

位置　西台地南端のE103に位置する。周辺には竪穴住居跡が密集している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、南北7.0m、東西5.4mである。長軸方向はN—13.5°—Eで面積は39.1m²である。壁高は47～83cmを測る。東壁の南2分の1を除く全周に周溝をめぐらす。幅3～17cmで、深さ3～11cmである。　**ピット**　住居内6ヵ所。P_1は82×80cmで深さ87cm。P_2は118×94cmで深さ88cm。P_3は108×116cmで深さ101cm。P_4は90×88cmで深さ73cm。P_5は28×26cmで深さ18cm。P_6は16×12cmで深さ8cmである。P_1～P_4は柱穴である。P_5、P_6の性格は不明である。柱痕はP_3で確認された。径は22～26cmを測る。P_1～P_4は掘り形の断面は円筒形に近い。　**カマド**　東壁の中央やや南寄りにある。全長226cmで燃焼部長70cm、袖部内幅94cm、壁外掘り込み112cm、壁への掘り込み角度は40°である。燃焼部は床面にくらべて8cm低い。　**遺物**　南東隅より土師器坏（8・9・13）須恵器坏(24)が出土、P_3内の西より鉄製品刀子(32)が、南壁周溝内とそのそばから土師器坏（1・5）、須恵器蓋(15)坏(21)盤(25)が出土。P_2の東からは、土師器坏(6)が、床面



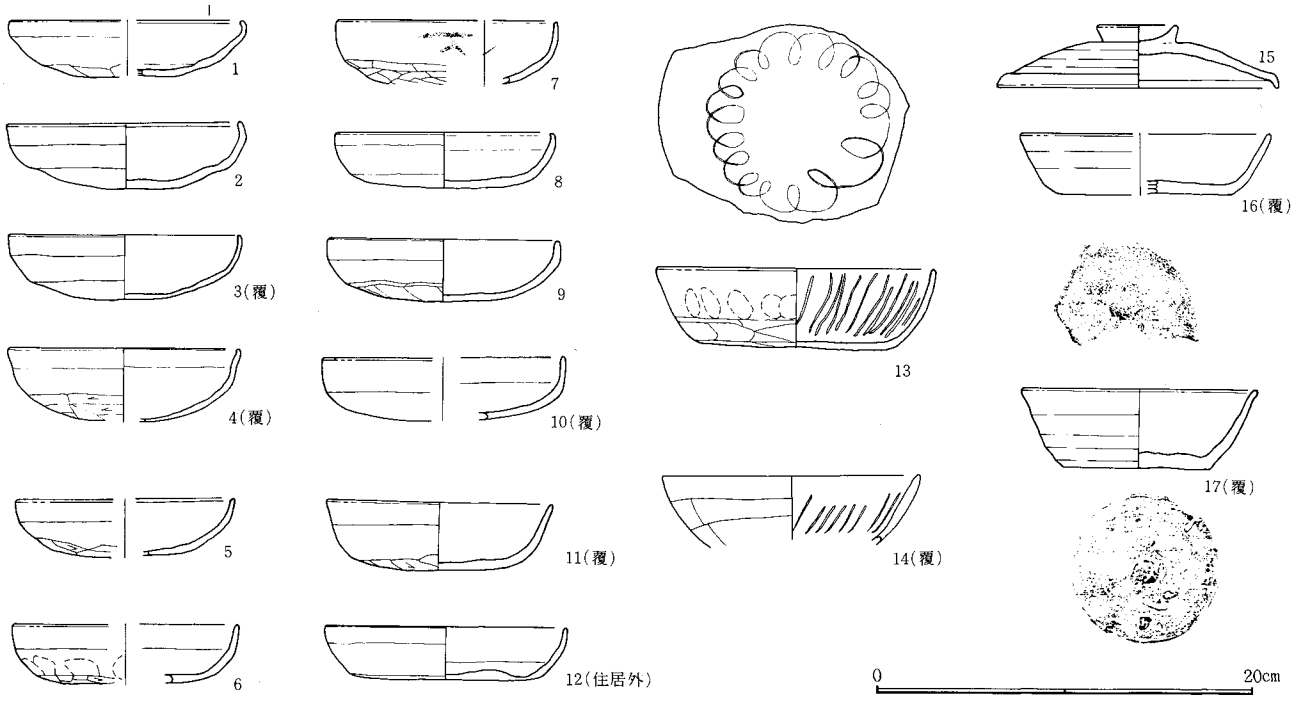
図－597　H－216号住居跡

南西東の周溝内からは土師器甕(27)が出土。西壁中央周溝内からは、鉄製品馬具(34・35)が出土。P_1のまわりからは、土師器坏(2・3)、須恵器坏(17)、鉄製品紡錘車(30)が出土している。P_4の南東からは須恵器坏(16)が、北東隅の周溝内からは鉄製品鎌(33)が出土している。その他埋土中よりも土師器坏(4・7・11・13・14)や須恵器坏(18・19・20・22)土師器甕(26)、鉄製品(31)が出土している。またP_2より鉄滓(29)が出土。住居外カマド南より土師器、須恵器坏(12・23)が出土。　**重複関係**　W－27と重複する。地層断面により、本遺構が旧い。

（井野）

1．黒褐色土。FP・C軽石、ローム、焼土粒混入。1-1．1に粘土混入。2．黒褐色土。2に近似でローム混入なし。

3．褐色土。ローム。4、黒色粘質土。4-1、黒色粘質土。FP・C、ロームブロック、焼土粒含む。5．黒色土。FP・C軽石、多量の粘土粒、少量の炭化物混入。カマド、1．暗黄褐色土。2．黒褐色土。焼土、ローム、灰、粘土塊混入。3．黒褐色土。焼土ブロック、灰、白色粘土混入。4．黒褐色土。灰、炭化物、白色粘土粒、焼土粒混入。5．灰赤色。焼土塊、多量の灰塊混入。6．灰赤色土。5に類似で焼土は少ない。7．黒色土。多量の焼土混入。8．黒色土。ローム塊、焼土粒混入。9．黒褐色土。白色粘土、焼土塊多量に混入。10．にぶい赤褐色土。焼土塊多量に混入。11．黒色土。P_1．1．黒色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．黒褐色土。ローム多量に混入。4．黒褐色土。ローム塊、多量のローム粒混入。P_2．1．黒褐色土。多量のローム混入。2．黒色土。FP・C軽石、焼土粒混入。3．黒褐色土。焼土粒、多量のローム混入。4．3にくらべ黒色土が多い。5．黒褐色土。多量のローム混入。P_3．1．黒褐色土。焼土粒、白色粘土塊、ローム塊、FP・C軽石混入。2．黒褐色土。1より混入物少量。3．褐色土。ローム粒多量に混入。4．褐色土。ローム塊、焼土塊、炭化物混入。



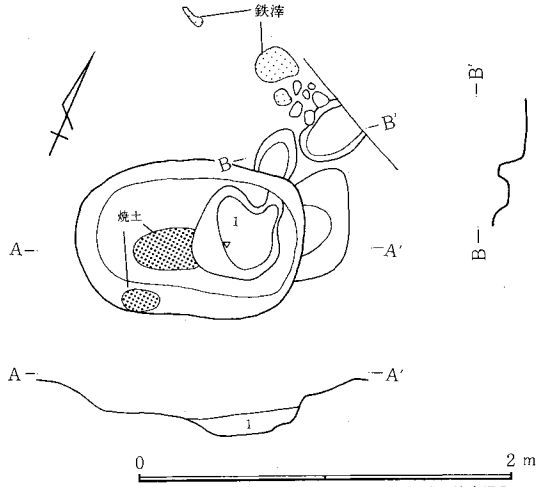
図－598　H－216号住居跡出土遺物(4)

図－599　H－216号住居跡出土遺物(２)

鍛冶址関連遺構

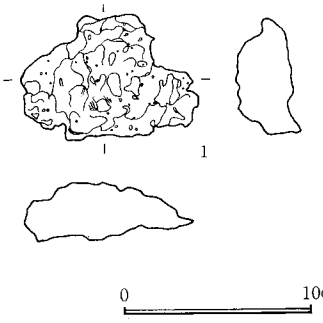
Ｔ１号鍛冶址（図－600、601　図版－37、118　表－290）

位置　Ｑ４・５に所在する。　**概要**　隅丸の長方形状のピットとなっており、長辺×短辺の測定値は上端で1.23m×0.83m、下端で1.05×0.58mである。深さ20cmくらいの浅いものであるが、東半分にはさらに15cmほど下がる小穴がある。主軸の方向はＮ－69.5°－Ｅである。壁はほぼ垂直に切られており、南半の壁２個所と床面中央部に焼土が認められる。東半のさらに深い小穴中には、炭化物・鉄滓・焼土を含む栗色土が、埋められていた。なお、この小穴中からは鞴(ふいご)の羽口の残片１個と鉄滓１片も出土している。以上の所見からして、本遺構は小鍛冶的な役割を果たしたものとみられる。ピット内床面が炉及び作業場であり、東半の小穴が廃棄物の処理穴かと思われる。しかし、遺物も乏しく定かなことは不明である。とくに、時期を特定できる資料は得られていない。　（石川）



1．栗色土。軽石、ローム粒、炭火物、鉄滓、焼土混入。

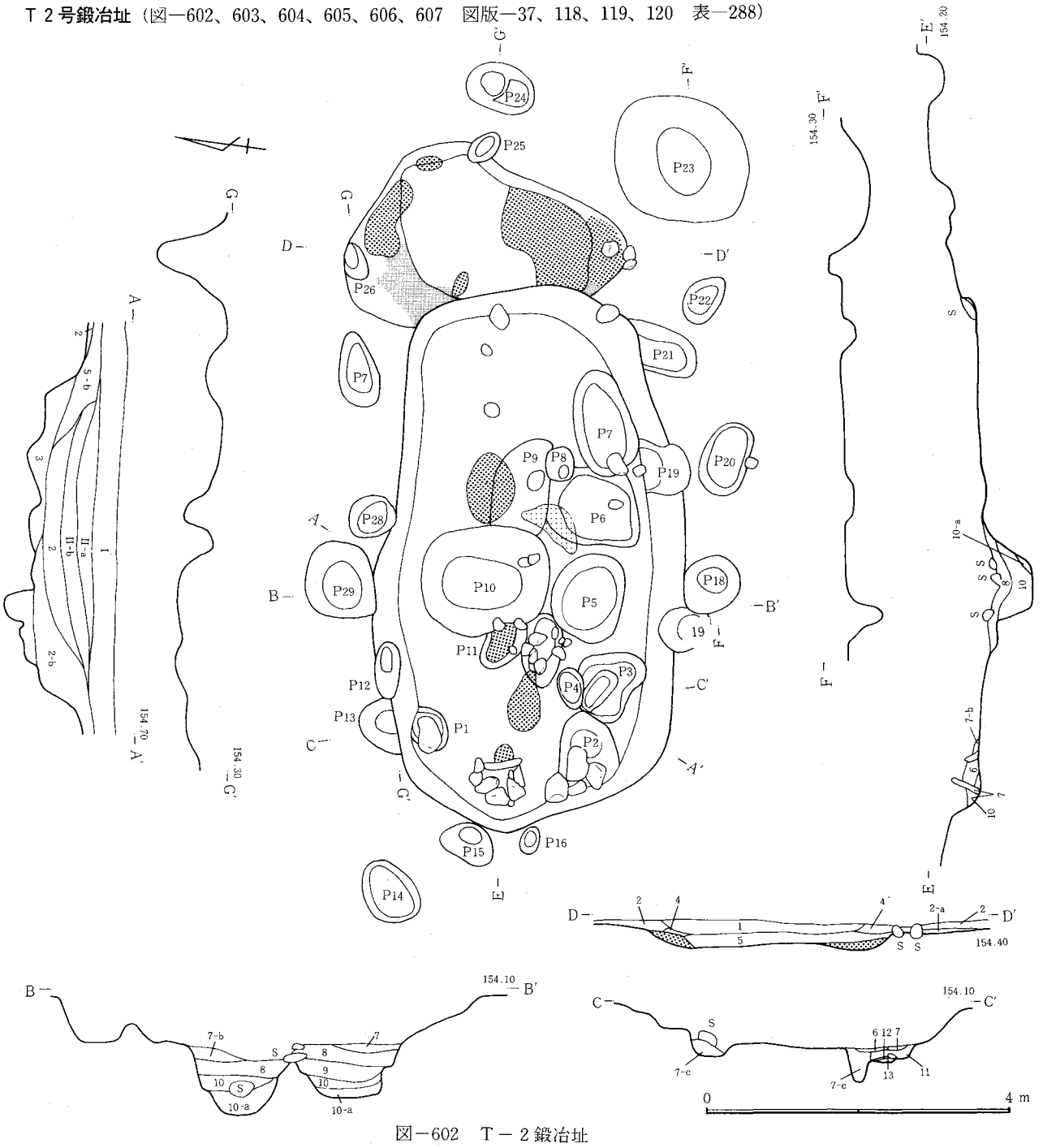
図－600　T－1号鍛冶址



図－601　T－1鍛冶址出土遺物

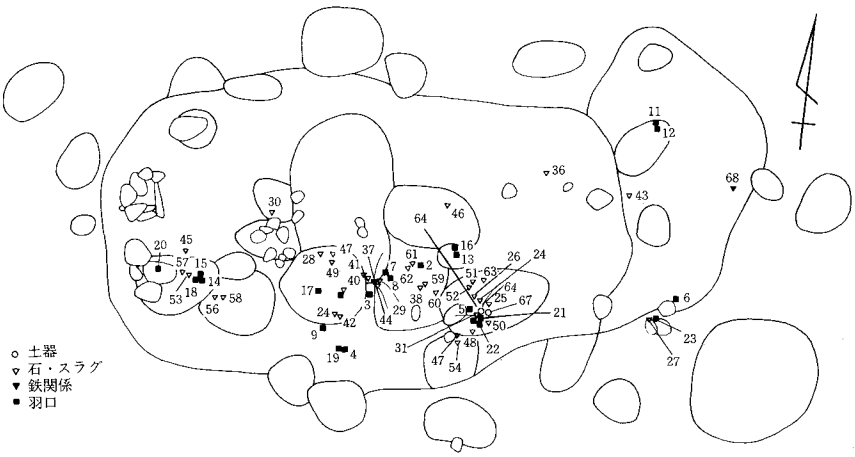
1．ローム主体。黒色土点在。(撹乱)。2．黒色土。少量の軽石混入。2-a．黒色土。2-b．2に褐色土点在。3．黒褐色土。多量のローム混入。4．黒色土。軽石、ローム粒、焼土粒混入。5．黒色土。多量の鉄滓、炭火物、少量の軽石混入。6．黒褐色土。少量のB軽石混入。7．黒褐色土。ローム混入。7-a．黒褐色土。少量のローム、粘土混入。7-b．黒褐色土。ローム混入。7-c．黒褐色土細砂。少量のローム粒混入。7-d．黒褐色土。ローム、焼土混入。8．黒褐色土。ローム粒、少量の軽石混入。9．黒褐色土。ローム多量の鉄滓混入。9-a．黒褐色土。炭火物、白色粘土。鉄滓、焼土、B軽石混入。10．黄褐色土。多量のローム粒混入。10-a．ローム主体。少量の黒褐色。鉄滓混入。11．黒褐色土。ローム、多量の鉄滓混入。12．鉄滓。13．黒褐色土。ローム、少量の鉄滓混入。

T 2号鍛冶址（図－602、603、604、605、606、607　図版－37、118、119、120　表－288）



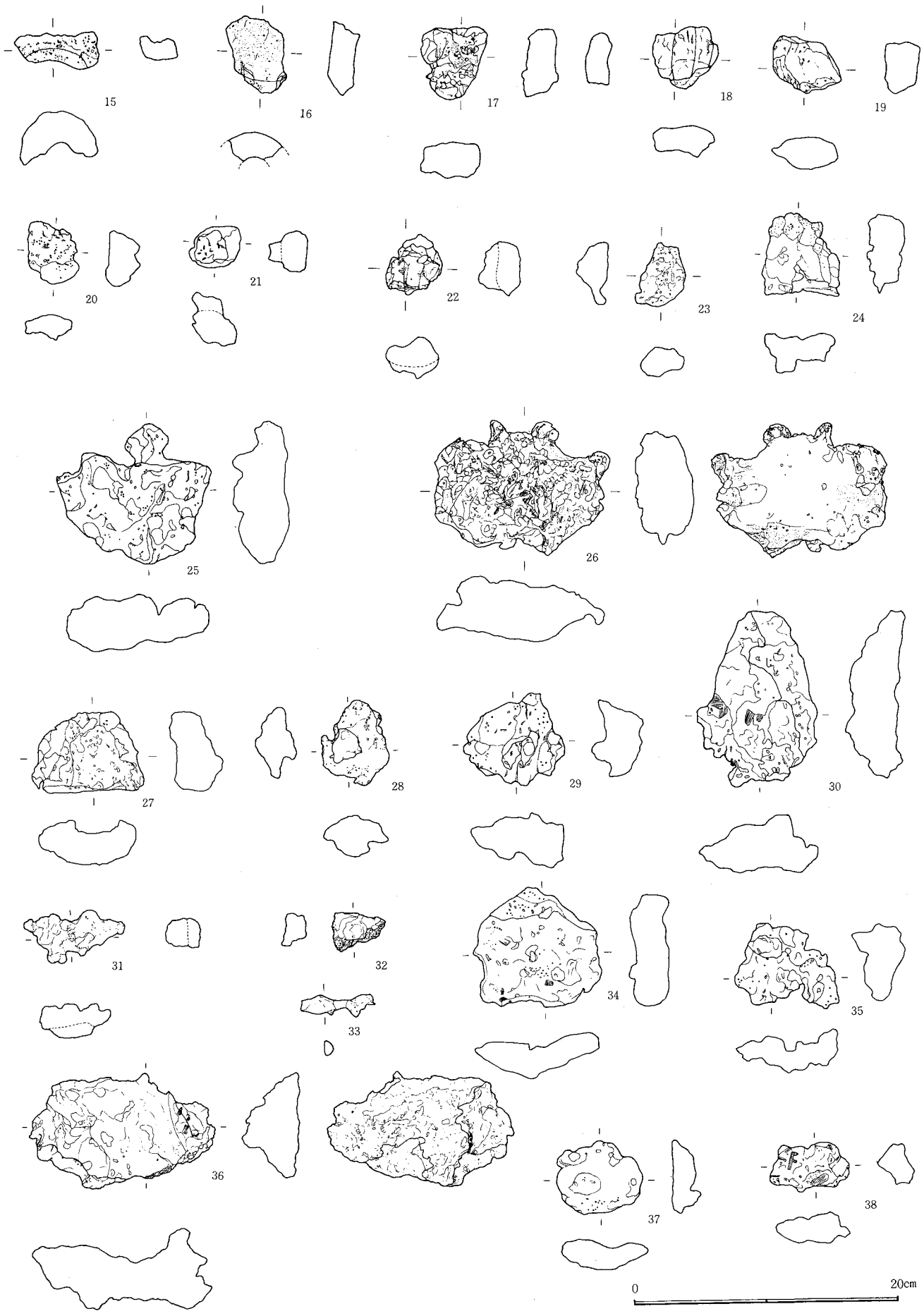
図－602　T－2鍛冶址

位置　P４に所在する。　**概要**　東西に長い舟形を呈し、東に張り出した付属施設を有する。舟形部分の計測値は下端で3.25×6.50m、張り出し部分は2.85×1.88mである。舟形部は深さ40cm前後であるが、張り出し部は深さ20cm前後と浅く、舟形部より一段高い位置にある。主軸はN－81°－Eを測る。舟形部のほぼ主軸線上の西壁付近に石組の炉１基があり、これより主軸線上を２mほど中央部へ寄った所にも焼石など数個と焼土がみられるが、炉跡であろう。ピット10を隔てた反対側にも焼土の範囲が確認されている。舟形の内部には河原石が十個以上散在しておりさらに炉があった可能性もある。また、張り出し部南端にも焼土と焼石３個が確認されている。この遺構からは大小29個のピットが確認されているが、とくに、舟形の遺構内にみられるP_2からP_8までのピット中からはいずれも鉄滓やチップスが多量に検出されている。P_7では、鉄滓が50片弱と鞴の羽口残片が認められている。P_2、P_3でもローム面に鉄滓やチップスが付着しているのが認められ鞴の羽口残片も出土している。P_2、P_{10}は遺構中央部にあり、大きく深いピットであるが他のピットに比して鉄滓やチップスの出土量が著しく多い。これら遺構内で多量の鉄滓等を出土するピットは残滓の廃棄穴であろう。遺構周囲のピットには上屋の柱穴とみられるものもある。張り出し部からは鉄鉗（かなはし）が出土している。炉は２基のうち中央部寄りのP_5の脇にある方が古く、西壁寄りの方が新しいとみられる。当初からこのような形状ではなく拡張して現形状になったとも考えられる。奈良時代後期の鍛冶遺構とみられる。　（石川）

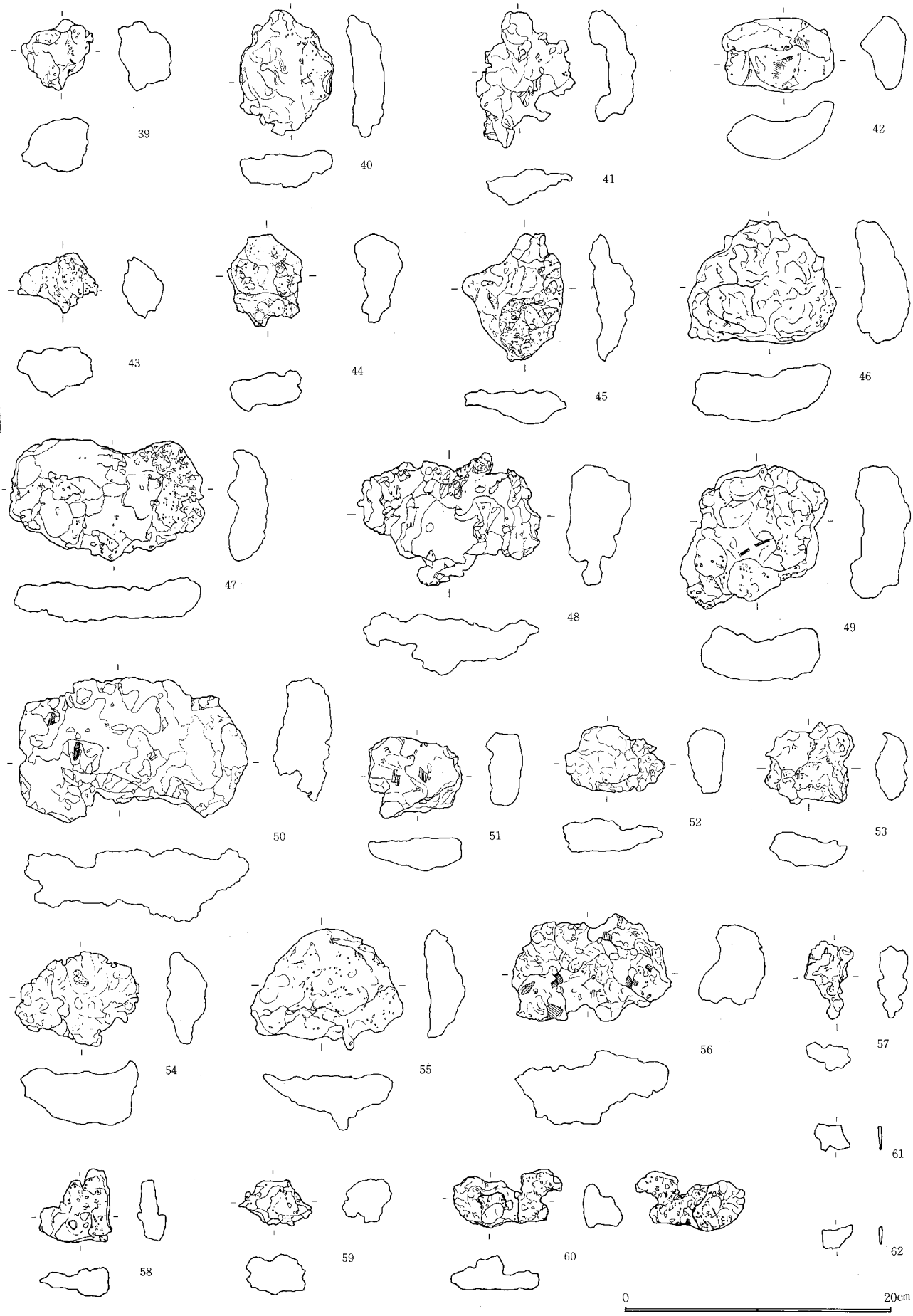


図－603　Ｔ－２号鍛冶址遺物分布図

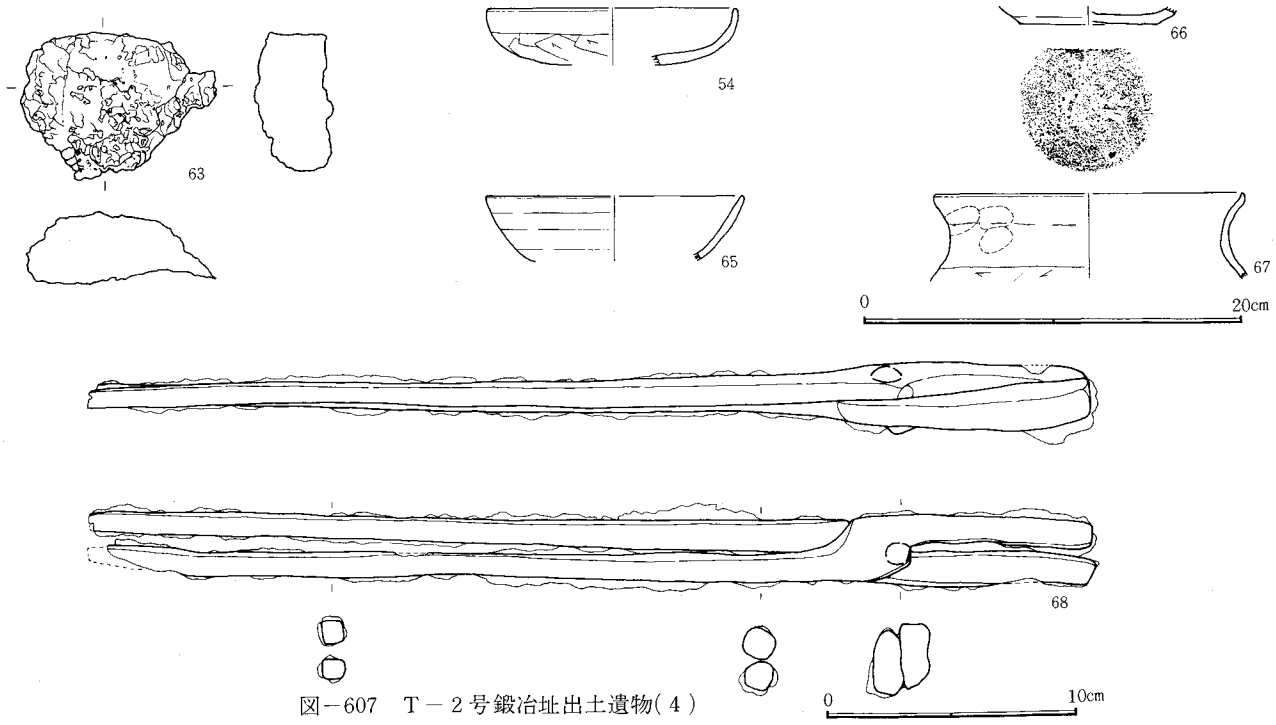
図－604　Ｔ－２号鍛冶址土遺物（１）



図－605　Ｔ－２鍛冶址出土遺物(２)

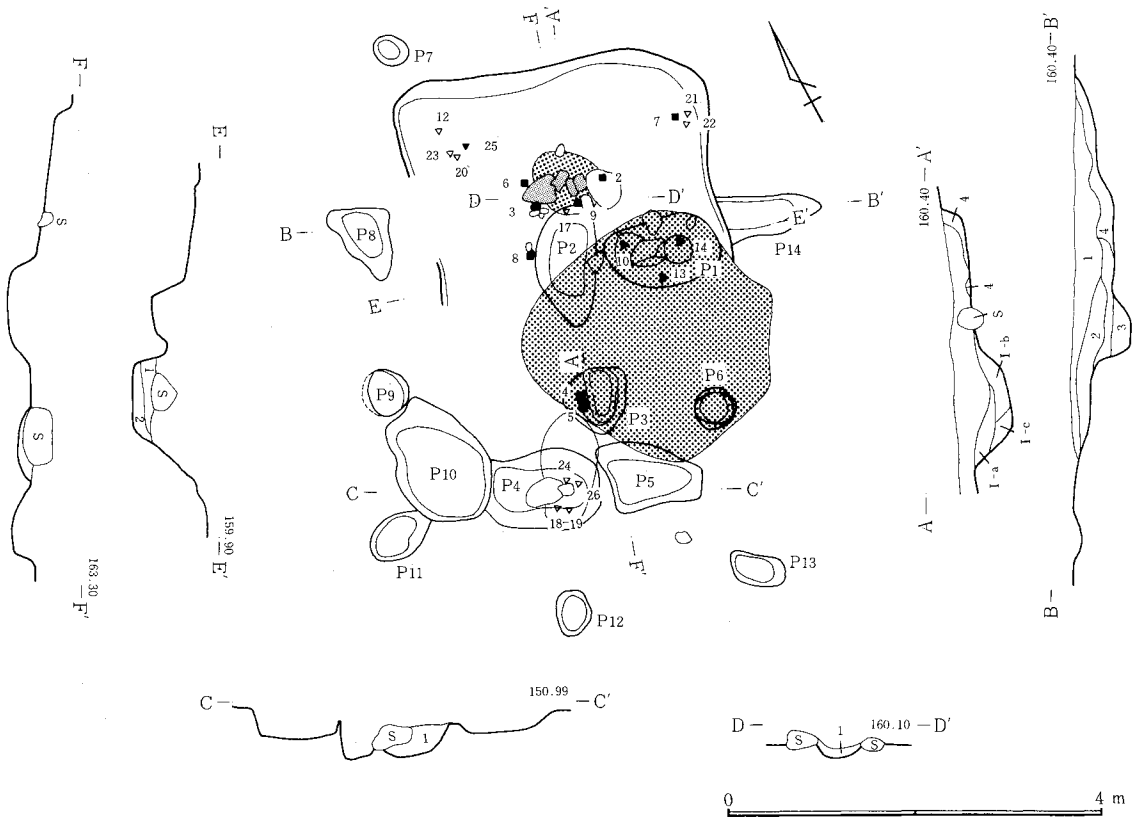


図－606　Ｔ－２鍛冶址出土遺物（３）



図－607　T－2号鍛冶址出土遺物(4)

T3号鍛冶址（図—608、609　図版—38、120、121　表—289）

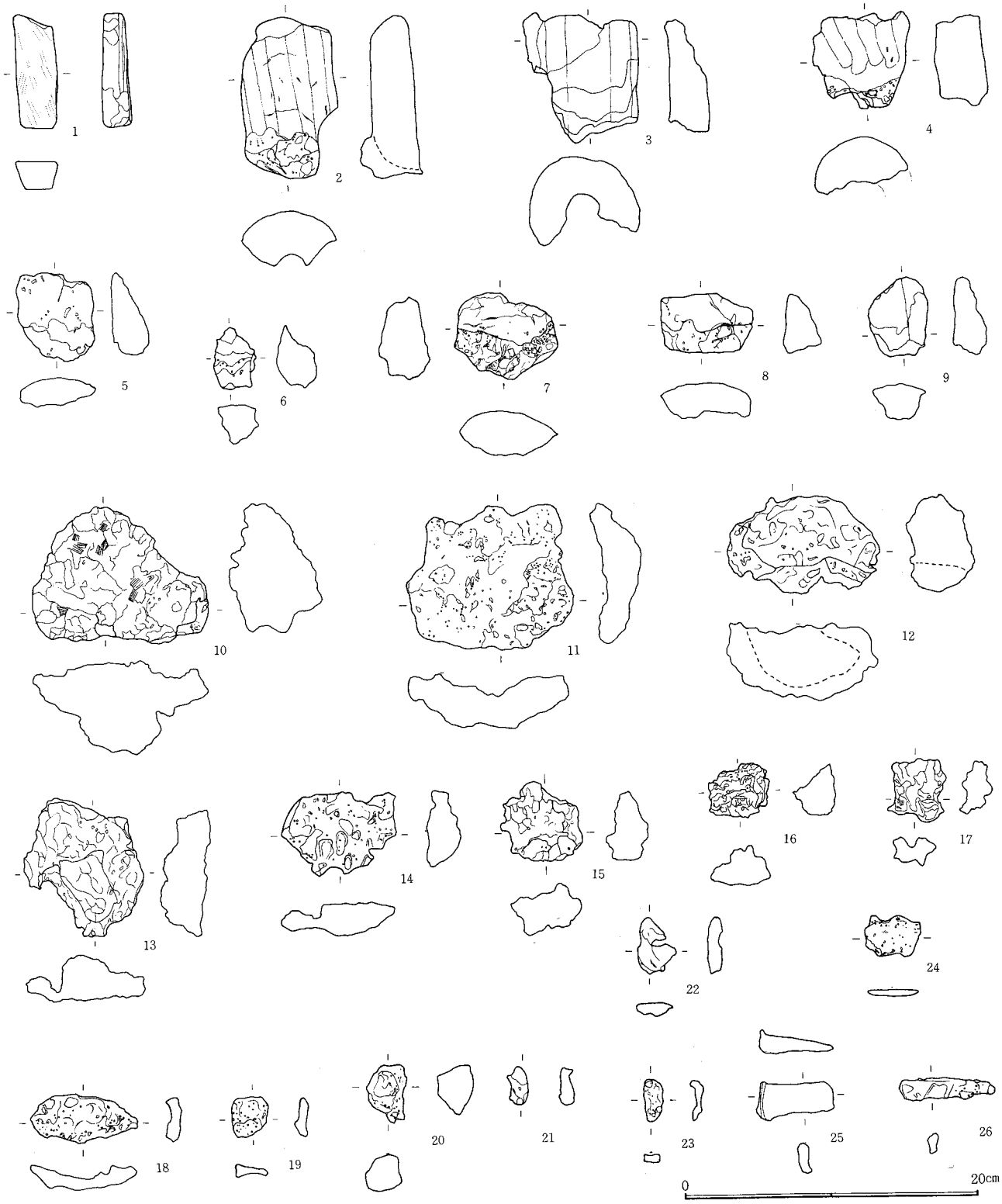


P_1 1．黒褐色土(FP・C軽石混入)と黄褐色土の混入。2．1にローム塊混入。P_4 1．鉄滓(φ1～5cm)。底部にチップス混入。D～D′、1．黒色土。FP・C軽石、多量の焼土混入。A～A′、B～B′、1．火山灰質黒色土。FP・C軽石、焼土鉄滓混入。1-a．1に多量の鉄滓混入。1-b．1にローム塊、少量の鉄滓混入。1-c．1に多量のローム、少量の鉄滓混入。2．黒褐色土。3．黒褐色土。軽石粒、炭火物混入。4．黒色土(FP・C軽石)と黄褐色土の混合土。炭火物混入。

図－608　T－3号鍛冶址

位置　調査区のやや北のA・B15に位置する。周辺は竪穴住居の小集団が形成されている。　**概要**　北は隅丸方形に近く、掘り方もしっかりしている部分が多いが、南はピット部以外は掘り形がはっきりせず周辺よりなだらかに傾斜している。推定の形状は南北に長軸をもつ隅丸の長方形で、南北5m（推定）、東西3m（推定）で、面積15m²（推定）である。遺構中央部と周りとのレベル差は北が36cm、南が23cmである。遺構内にはピットが6ヵ所、遺構のまわりに8ヶ所確認されている。P_1は120×70cmで

深さ68cm、P_2は130×62cmで深さ49cm、P_3は70×68cmで深さ40cm、P_4は117×80cmで深さ59cm、P_5は100×60cmで深さ32cm、P_6は45×41cmで深さ13cm、P_7は40×28cmで深さ33cm、P_8は80×45cmで深さ10cm、P_9は50×50cmで深さ21cm、P_{10}は122×95cmで深さ49cm、P_{11}は70(現状)×46cmで深さ35cm、P_{12}は48×40cmで深さ26cm、P_{13}は58×30cmで深さ17cm、P_{14}は104×40cmで深さ22cmである。P_1~P_6とP_5は遺構内施設で、P_5はピット内に、P_3はピット上面に長さ40～60cmの石をのこす。同様の石が2石P_2の北にのこる。その他小さい石がP_{12}周辺とP_4の北に多い。P_3の花崗岩の北東のP_1、P_2、P_3、P_6の囲む円内にはチップスが出土する。P_4の東半からP_3にかけては径1～2cmの鉄滓が多く出土した。P_6よりも鉄滓、焼土、チップスが検出されている。東北のピットは未掘であるがP_7~P_{13}のピットが遺構をめぐっており、柱穴と考えられる。P_3の花崗岩には鉄滓が付着しており、鍛冶施設として使われたと考えられる。炉は$P_{1\sim2}$の位置と$P_{4\sim10}$の位置と考えられる。 **遺物** 鉄滓や羽口等が多く出土している。 **重複関係** H－150はT－3の構築面下に作られており、T－3が新しい。 (井野)

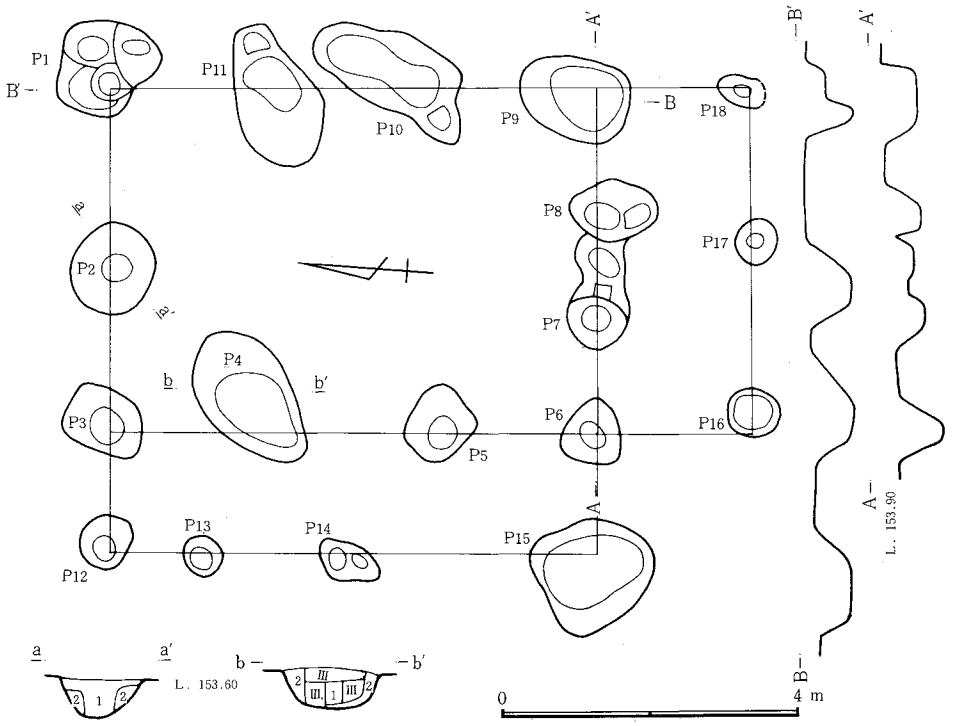


図－609　T－3号鍛冶址出土遺物

3　掘立柱建物跡

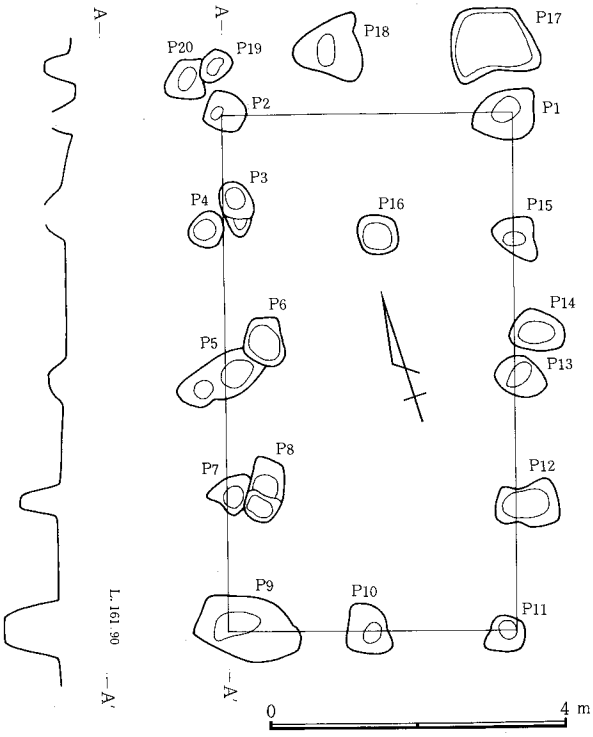
K 1号掘立柱建物跡（図—610　図版—38）

位置　西台地のほぼ中央、6区のC 6・7 に所在し、北に掘立柱建物跡、東に竪穴住居跡が隣接する。**形状**　南北3間(6.5m)東西2間(4.5m)の長方形建物跡で、長軸方向はN—4°—W、面積は29.3m²である。柱間は南北2.2+2.2+2.1m、東西2.2+2.3mである。しかし、これらを含めて周辺には柱穴が多く、建て替え、あるいは重複の可能性がある。P_1～P_3を除いた2間四方の東西は、南辺の柱穴列から3間ともみられる。また、P_3～P_6の西1.8mには柱間1.3+1.8+3.4mの柱穴列が、さらにP_6～P_9の南2mには柱間2.5+2.0mの柱穴列がそれぞれある。各柱穴の形状よりP_1～P_{11}の3間・2間をK 1号掘立柱建物跡とした。**柱穴**　円形の掘り形で、大きさはさまざまあり、P_6は86×72cm、深さは各々42～58cmである。P_2では柱痕径28cmが判明している。　**遺物**　甕の口縁部が出土している。　（相澤）

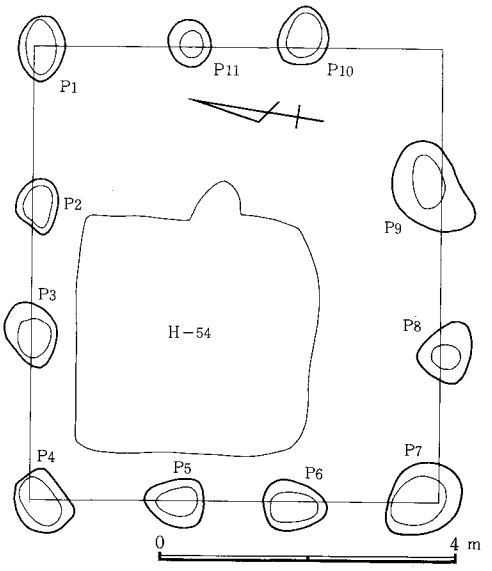


1，Ⅲにローム点在。2，ロームと黒褐色土。　図—610　K—1号掘立柱建物跡

K 2号掘立柱建物跡（図—611　図版—38）



図—611　K—2号掘立柱建物跡



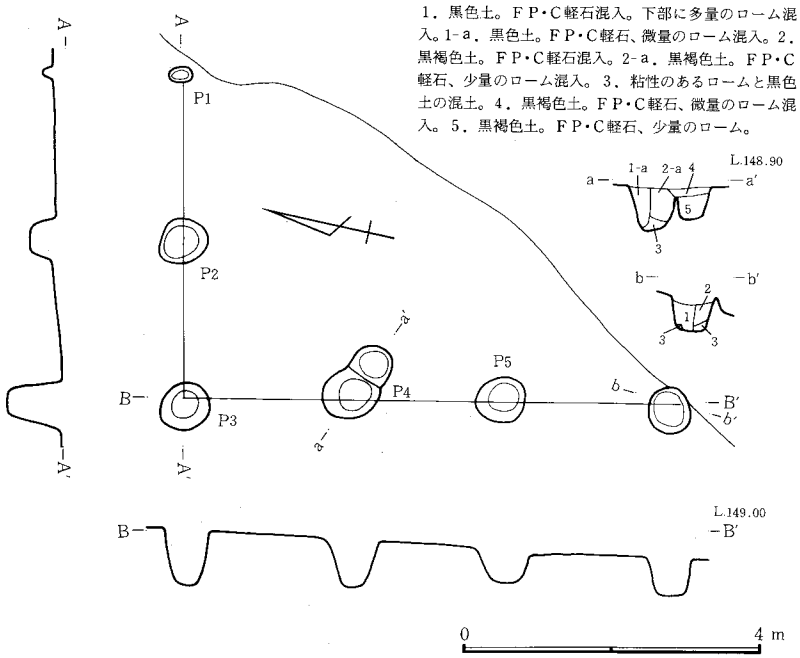
図—612　K—3号掘立柱建物跡

位置　西台地中央の北寄り、H16に所在し、K 3号堀立柱建物跡、H54号住居跡が東に隣接している。　**形状**　南北4間(6.8m)、東西2間(3.8m)で、長軸方向はN—14°—E、面積は25.8m²である。北辺では中間の柱を欠くが、P_1、P_2の北60cmにはそれぞれ柱穴があり、そのP17、P_{19}の中間にも柱間1.4+2.4mとして柱穴P_{18}がある。南北の柱間は北より1.6+1.8+1.7+1.7mで、南側は1.9+1.9mである。各柱穴は1～3個あり、北側の状態と合せて、1～2回の建て替えが推定される。　**柱穴**　円形を主体とし，直径60～70cm、深さは、おしなべて規格性は認めがたい。　（相澤）

K３号掘立柱建物跡（図―612　図版―38）

位置　H15・16。**形状**　南北３間（5.4m）×東西３間（6.0m）で、南側の柱穴列はやや歪み、南東隅を欠く。N―10°―Wをとり、面積は32.4㎡、柱間は北側2.1＋1.8＋2.1m、西側2.1＋1.5＋2.1mである。**柱穴**　楕円形で直径90cm前後が多い。**重複関係**　各柱穴がH54号住居跡を囲続する形で重複するが、前後関係は不明。（相澤）

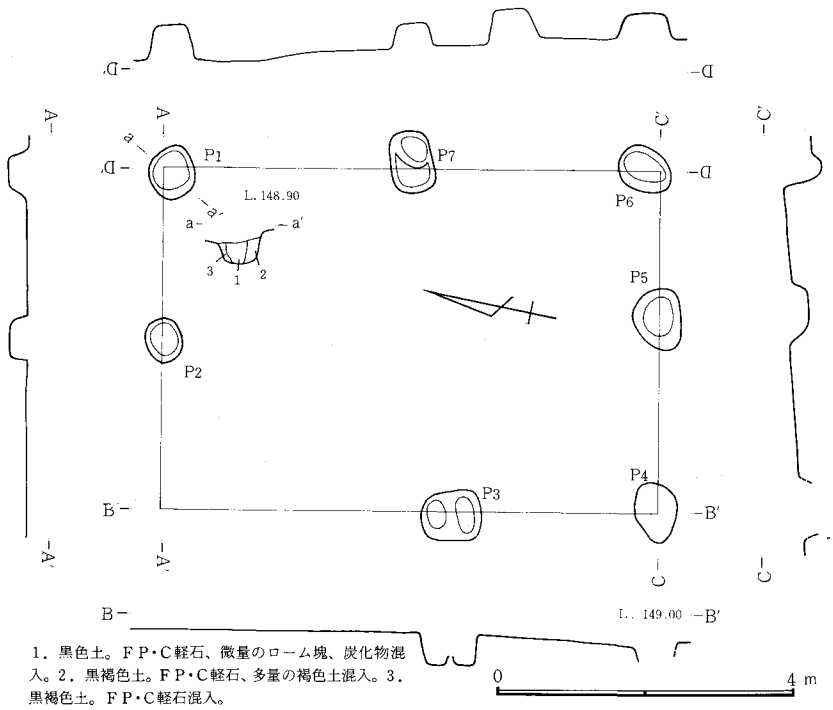
K５A号掘立柱建物跡（図―613）



図－613　K－５－A号掘立柱建物跡

位置　L102。K－５のピット群からA～Dの４棟を認定した。**形状**　東部分を欠くが、南北３間（6.6m）×東西２間（4.2m）の長方形と推定される。推定される面積は27.7㎡で長軸方向はN―13.5°―Wである。柱間寸法は南北が（西辺のみ）北より2.4＋1.8＋2.4mで、東西が（北辺のみ）2.1＋2.1mである。**柱穴**　平面はほぼ円形である。P_1はやや小さい。掘り形の断面は円筒形に近い。径はP_1が29×18cmでやや小さく、P_2～P_6は径53～78cmと大きい。深さはP_1が12cmと浅いがP_2～P_6は36～66cmと深い。柱痕は不明である。底面標高はP_1が148.7m前後で、P_2～P６は148.1m～148.6m前後である。P_1が他と異なることから柱穴の組み合せとしては別のものも考えられる。（井野）

K５B号掘立柱建物跡（図―614　図版―38）

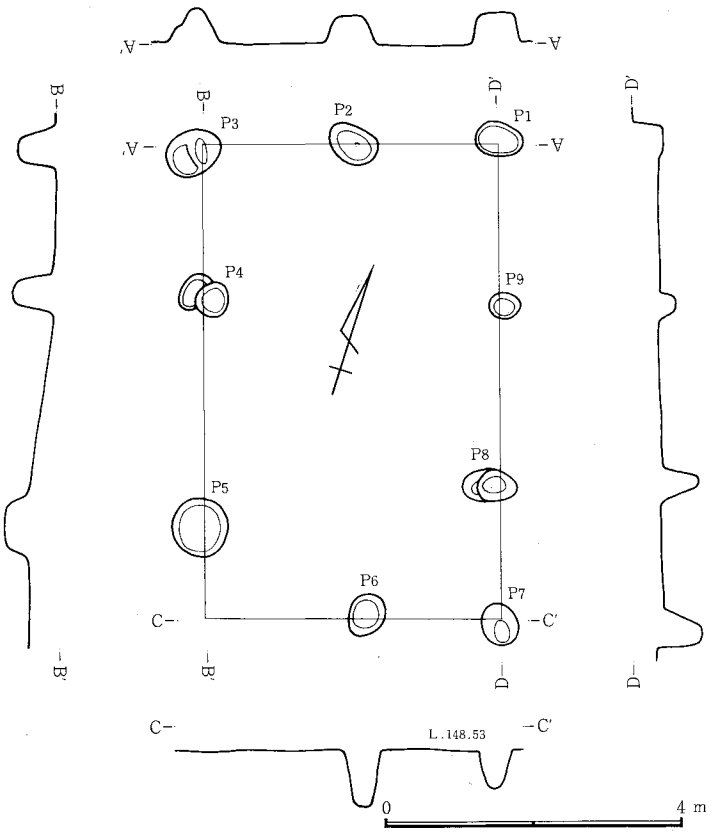


図－614　K－５－B号掘立柱建物跡

位置　L102。**形状**　南北２間（6.6m）×東西２間（4.5m）の長方形を呈す。面積は29.7㎡で、長軸方向はN―12°―Wである。北西隅の柱穴はH―123との重複で失なわれたと考えられる。柱間寸法は南北が、西辺北より3.9（推定）＋2.7mで、東辺が3.3＋3.3mである。東西は北辺が西より2.1（推定）＋2.4mで、南辺が2.4＋2.1mである。**柱穴**　不整円形の平面を呈するものが多い。掘り形の断面は円筒形に近い。径は80×60cm前後のものが多い。深さはP_5が26cmと残いが、他は40～49cmである。柱痕はP_1で認められる。径は32cmを測る。底面標高は148.2m～148.5m前後である。H―123、H―128と重複する。埋土、切り合い関係からK－５－Bが、H―123、H―128の両方より新しいと考えられる。（井野）

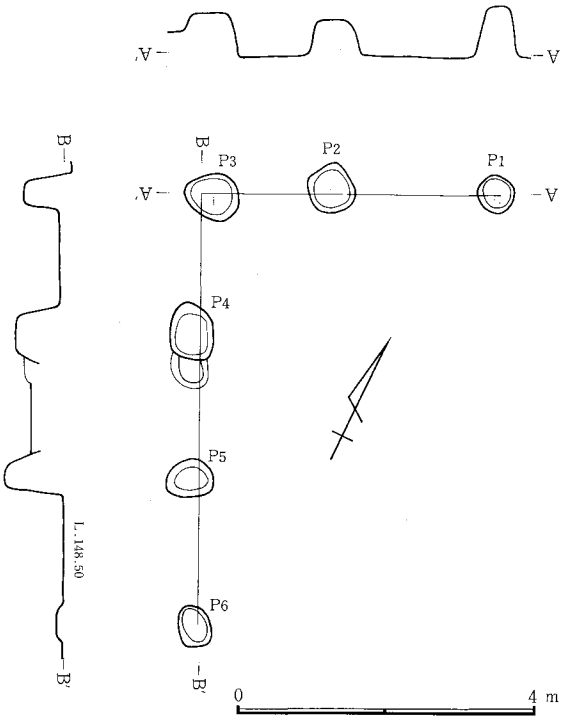
K５C号掘立柱建物跡（図―615）

位置　L102・103　**形状**　南西隅の柱穴を欠くが、南北３間（6.3m）×東西２間（3.9m）の長方形の建物跡と考えられる。長軸方向N―18.5°―Wで面積は25.6㎡と推定される。柱間寸法は南北が西辺北より、2.1＋3.0＋1.2m（推定）で、東辺が2.1＋2.4＋1.8m、東西が南北辺ともに西より2.1＋1.8mである。東西辺の中間の柱穴は位置、規模ともにあまり対応はしていない。**柱穴**　平面は円形が多いが径は40～70cmと差が大きい。掘り形の断面はP_3、P_7が逆円錐で、他は円筒形に近い。深さはP_5、P_9が、12，25cmと浅いが他は40～60cm前後である。柱痕は不明である。底面標高は北辺が148.1m前後で南辺は147.6～７m前後である。



図－615　K－5－C号掘立柱建物跡

ピット群からの机上の認定であるので、別の組み合せも考えられる。P_3、P_4、P_6、P_8は二段の掘り形で建て替えも考えられる。（井野）

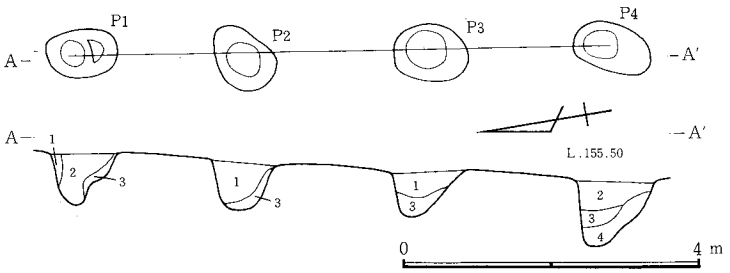


図－616　K－5－D号掘立柱建物跡

K5D号掘立柱建物跡（図616）

位置　L102　**形状**　東半分を欠くが、南北（西辺のみ）3間（5.7m）×東西（北辺のみ）2間（3.9m）の長方形の建物跡と推定される。長軸方向はN—25.5°—Wで、面積は22.2㎡と推定される。柱間寸法は、西辺が北より1.8+2.1+1.8mで、北辺が西より1.8+2.1mである　**柱穴**　平面はやや方形に近いものが多く、掘り形の断面は円筒形に近い。径はP_4を除くと50～60cm前後のものが多い。深さはP_4、P_5が40、70cmであるが、他は50～60cm前後である。柱痕は不明である。底面標高は147.7～148.1m前後である。K－5－A～DはK－5ピット群から4棟分認定したものであるが、その他多数のピットが存在しておりさらに建物跡が存在すること、またA～Dの建物跡も別の組み合せになることも考えられる。（井野）

K6号掘立柱建物跡（図—617）



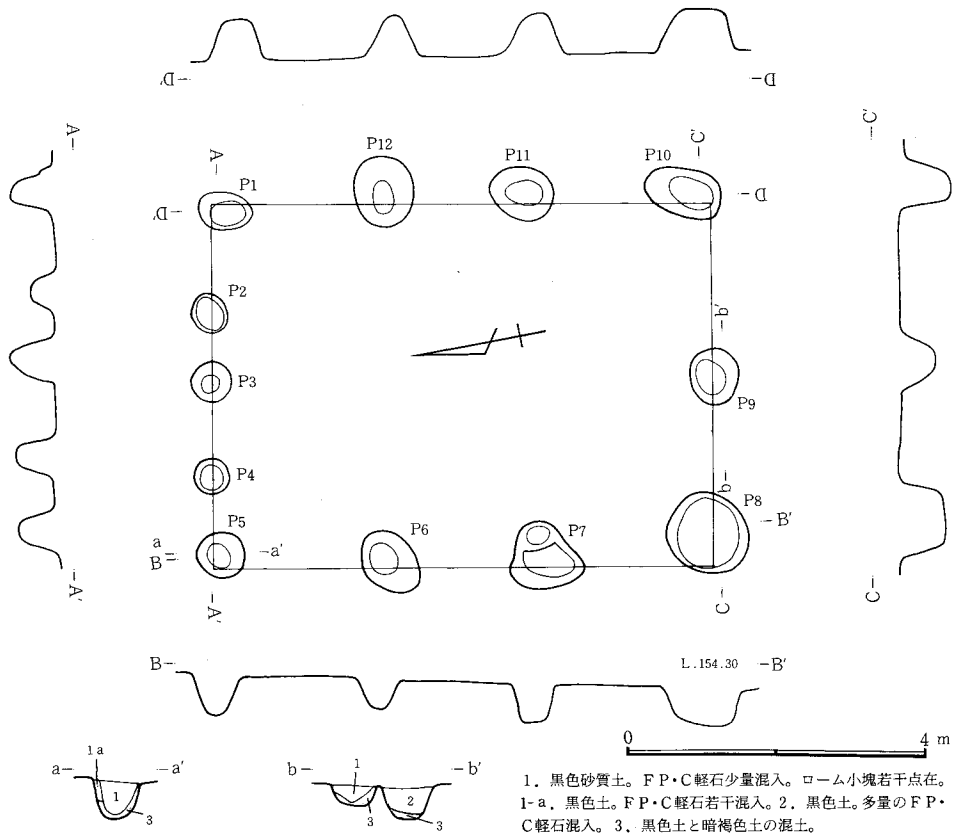
1．黒褐色土。FP・C軽石混入。2．暗褐色土。微量の軽石混入。3．黒褐色土。ローム混入。4．黒褐色粘質土。

図－617　K－6号掘立柱建物跡

位置　C8・9にかけて所在する。すぐ東側を道路が横切り、堀立柱建物跡は東側へのびていると考えられるが、道路のため破壊されている。　**形状**　南北3間（7.2m）×東西の方形の建物跡と考えられる。長軸方向はN—8°—E。　**柱穴**　柱列の方向に長軸をとっており、長径90～100cm、短径54～72cm、深さ61～80cmである。掘り形の底面はP_1、P_2は円形に、P_3、P_4は方形に近い。柱間寸法は2.4+2.4+2.4m＝8＋8＋8尺である。　**遺物**　P_2、P_3より須恵器坏蓋が出土している。（江原）

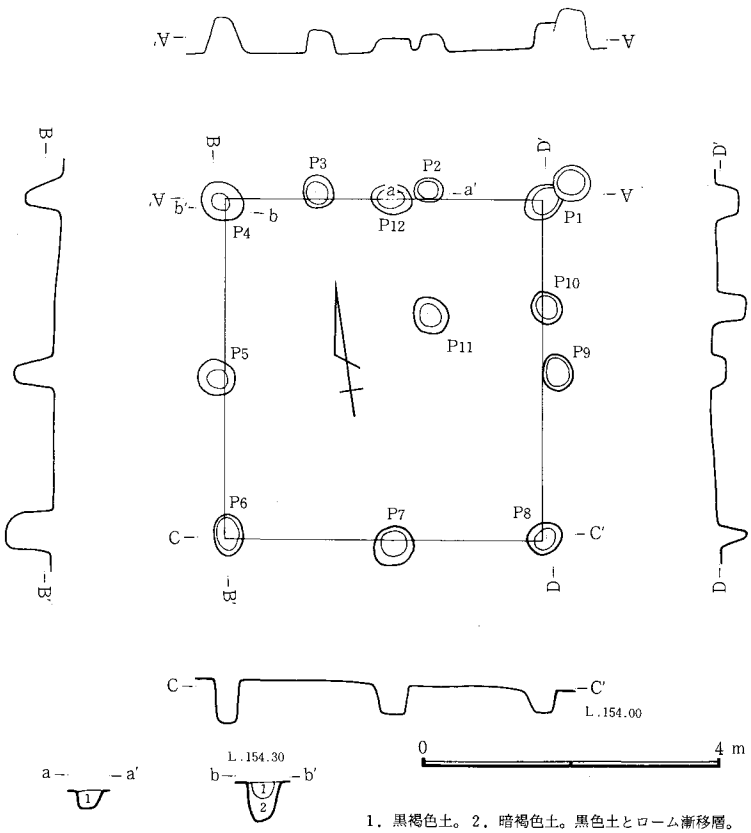
K7号掘立柱建物跡（図—618、619　図版—38、121　表—290）

位置　西台地中央部のC7に位置する。東はH—149に接し、西はK—13、15、16に接する。東側には竪穴住居跡が密集して存在し、掘立柱建物跡もそれに重なるように大きな円の形に存在している。本遺構はその西端に位置する。**形状**　南北3間（6.6m）×東西〔北辺は4間で、南辺は2間〕（4.8m）の長方形である。柱間寸法は、南北が、東辺は北より2.3+1.8+2.5mで、西辺が2.1+2.1+2.4m、東西が、北辺は西より1.2+1.2+0.9+1.5mで南辺は2.5+2.3mである。長軸方向はN—8.5°—Eで面積は31.7㎡である。　**柱穴**　平面は円形が多く、北辺は小ぶりのものが多い。掘り形の断面は円筒形に近いものがほとんどである。径は50～100cm×60～80cmで、深さは50～60cm前後である。柱痕は明らかでない。　**遺物**　P_3より羽口と須恵器甕、P_7、P_8より土師器坏、須恵器坏が出土、その他須恵器蓋(10)が出土している。　**重複関係**　K—18，K—12と重複している。K－8とでは切り合い関係から本遺構が新しい。（K－8参照）。K—12との新旧は不明である。（井野）

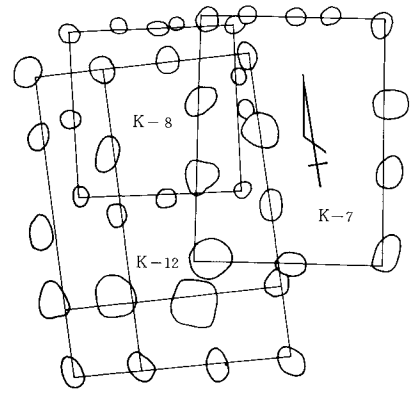


図－618　K－7号掘立柱建物跡

K 8号掘立柱建物跡（図－619、620　図版－39）



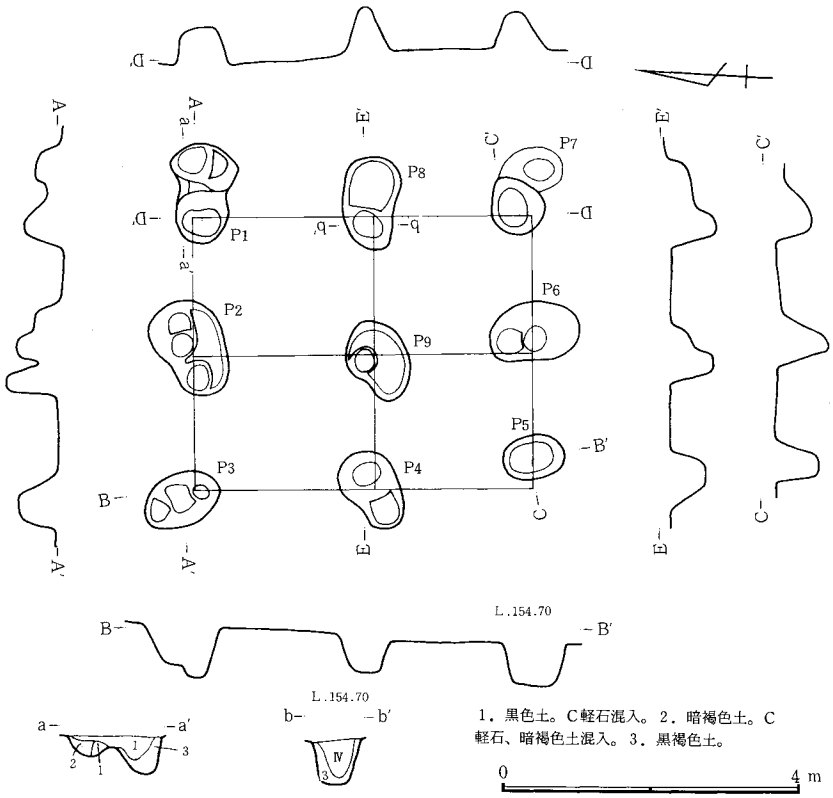
図－620　K－8号掘立柱建物跡



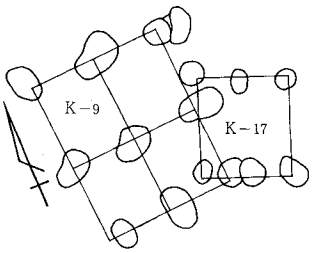
図－619　K－7・8・12号掘立柱建物跡関係図

位置　C 7。西台地の東端に所在し、付近から台地の東縁にかけて掘立柱建物跡が10数軒存在するとともに、土師器使用の竪穴住居跡も同様混在している。　**形状**　2間（4.5m）×（2間（4.2m）の、南北方向に長軸を取る建物跡である。なお北側は東西3間（4.2m）となっている。柱間の長さは長軸方向の西側2.4＋2.1m、東側2.4＋2.1mと柱間の長さをかえている。短軸方向は南側2.1＋2.1m、北側は1.2＋1.5＋1.5mと3間で梁（はり）を構成している。長軸方向はN－7°－E、面積18.9m²である。　**柱穴**　掘り形の形状は平面形は円に近く、断面は円筒に近い、柱痕は顕著なものがなかった。ピットの深さは21～43cm程が多く、他に深いものとして、53cm、57cm、60cmの深さをもつピットも存在した。　**その他**　K－12、K－7と重複しているが、K－12との新旧関係は不明である。K－7とは切り合い関係から、K－7が新しい。なお南にK－16、K－13が接している。　（江原）

K 9号掘立柱建物跡（図—621、622　図版—39、121　表—293）



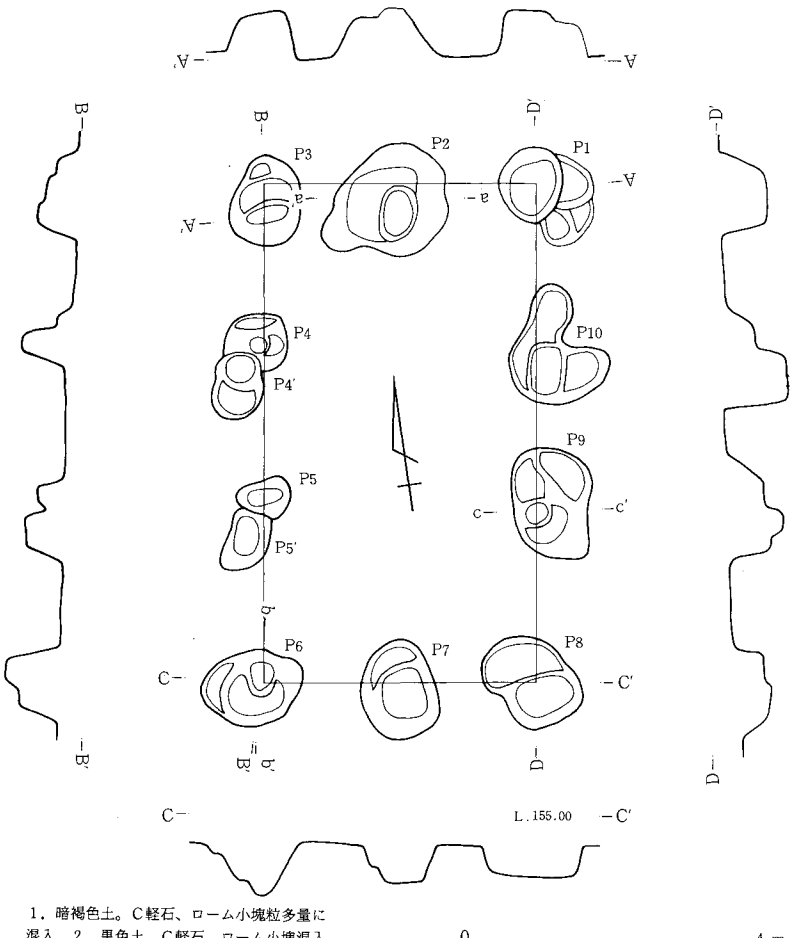
図—621　K—9号掘立柱建物跡



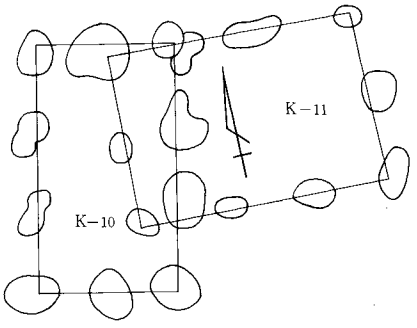
図—622　K—9・17号
掘立柱建物跡関係図

位置　C 7に所在し、南傾する西台地中央部に立地する。K17号掘立柱建物跡が南東部で重複する。**形状**　2間(4.5m)×2間（3.6m）の総柱で長軸方向はN—5°—W、面積は16.2m²である。桁行は、西側、2.4+2.1m、東側、2.4+2.1m、梁間北面側とも1.8+1.8mである。**柱穴**　掘り形はかなり不定形であるが、柱穴底部となる部分は、大きさ深さにかなりの共通点がみられる。柱痕跡は顕著なものはみられなかった。深さは、浅いもので40cm前後、深いものでは70cm前後である。P_1、P_2、P_3は3回、P_4、P_6、P_8、P_9は2回の柱の建て替えがある。P_5、P_7は1回のみである。**遺物**　P_6で須恵器坏(15)の他、P_1、P_4から土師器、須恵器が出土。**重複関係**　K—17（新）と重複。（K—17参照）（福田）

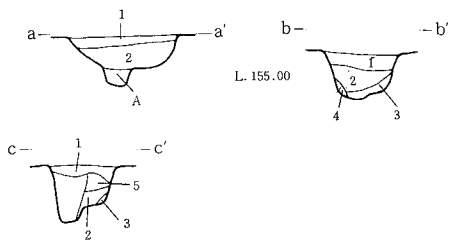
K10号掘立柱建物跡（図—623、624　図版—39）



図—623　K—10号掘立柱建物跡



図—624　K—10・11号掘立柱建物跡関係図



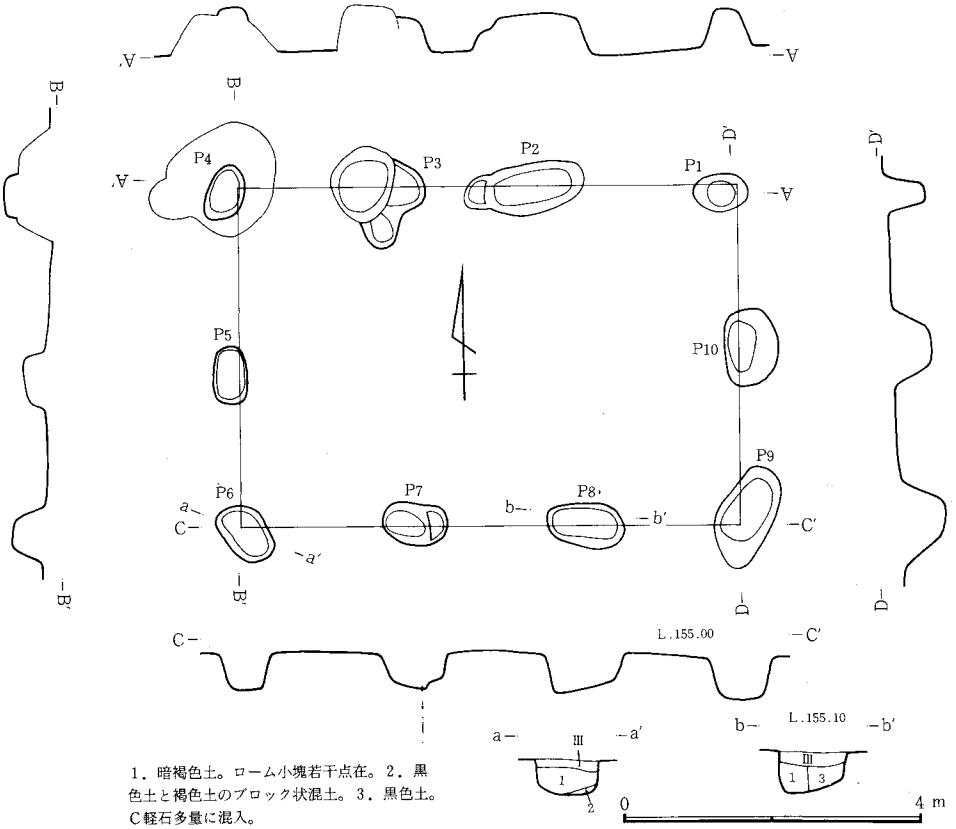
位置　C 8に所在。西台地の東側端に掘立柱建物群、土師器使用竪穴住居群と混在して存在する。**形状**　南北3間(6.6m)×東西2間(3.6m)の、南北方向に長軸を取る建物跡である。柱間の長さは、長軸方向が2.1+2.1+2.4mである。短軸方向は、1.8+1.8mである。長軸方向はN—9°—E、面積22.7m²。**柱穴**　形状は平面形はかなり不定形であり、断面は横に広い台形を呈している。柱穴は二段の掘り形をもつもの

が多く、また建て替えを想定させるもの（P_4、P_5など）がある。H－151、K－11と重複しているが、新旧関係はH－151が旧く、K－11とはK－11の方が旧いと考えられる。（江原）

K11号掘立柱建物跡（図－624、625　図版－39）

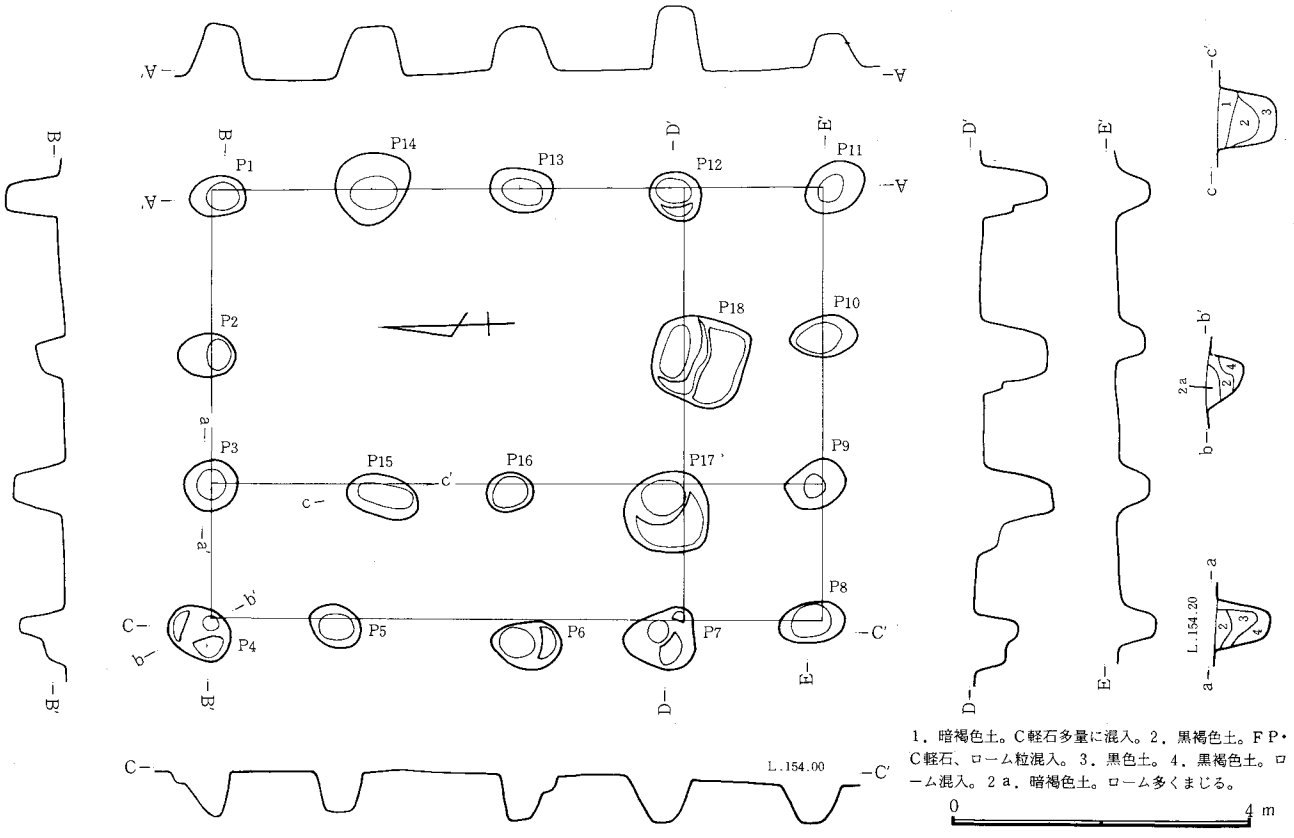
位置　C8に所在。西台地の東側端に掘立柱建物群、竪穴住居群と混在して存在する。　**形状**　東西3間（6.6m）×南北2間（4.5m）の東西方向に長軸を取る建物跡である。柱間の長さは、長軸方向が、北は、西より2.1＋2.1＋2.4mで、南は2.4＋2.4＋1.8mである。短軸方向は北より2.4＋2.1mである。長軸方向はN－88°－E。面積31.7m²。　**柱穴**　掘り形の形状は平面が長方形に近く、断面は比較的上幅と下幅の差の少の少い台形を呈している。柱穴は柱の方向に長い長方形である。深さは46～71cmと比較的深い。

その他　K－10と重複しているが、地層断面で本建物跡の方が旧いと考えられる。（江原）



図－625　K－11号掘立柱建物跡

K12号掘立柱建物跡（図－619、626　図版－39）

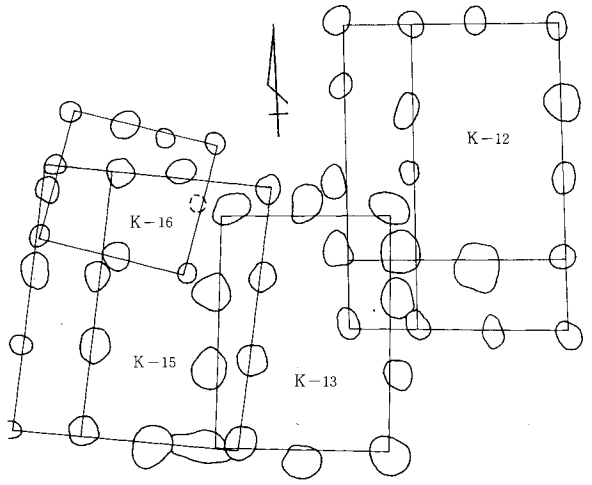


図－626　K－12号掘立柱建物跡

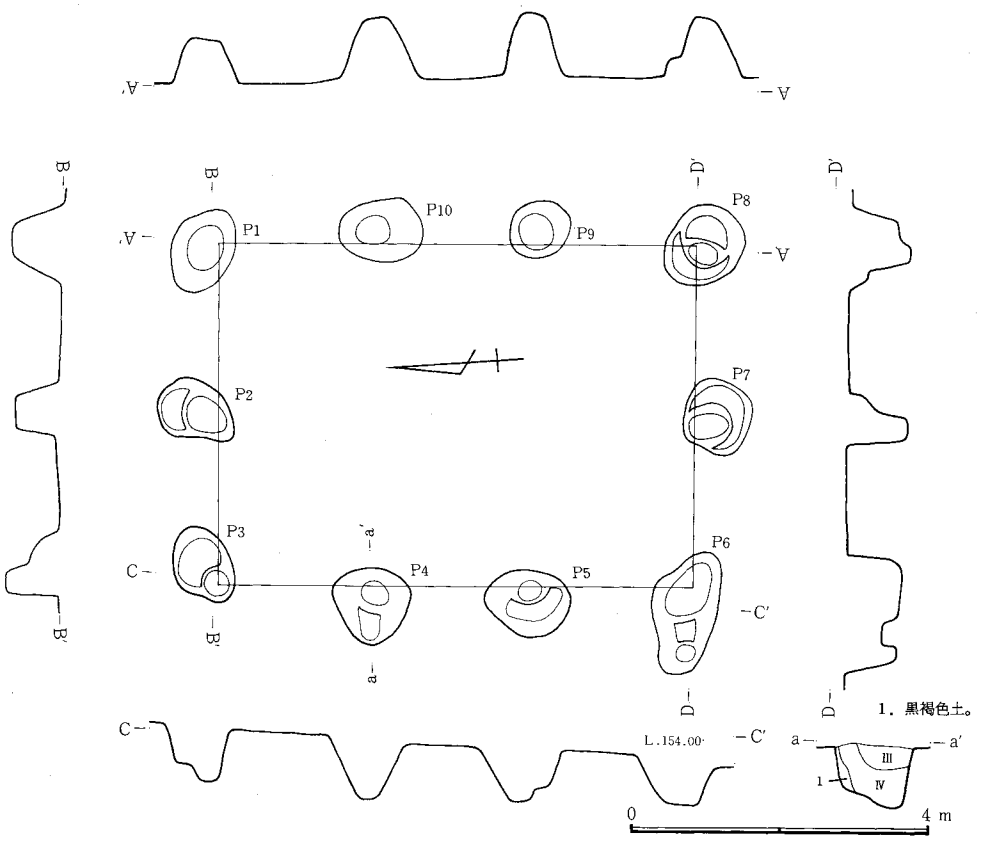
位置　C７に所在。西台地の東側端に掘立柱建物群、土師器使用竪穴住居群と混在して存在する。付近には、K７、８、13、16号掘立柱建物跡が集中し、その中央に存在する。　**形状**　南北４間（8.1m）×東西３間（5.7m）の南北方向に長軸を取る建物跡である。なお西側と南側に廂（ひさし）が出た形の建物と考えられる。柱間寸法は身舎の部分が３間(6.3m)＝2.1＋2.1＋2.1m×２間(3.9m)＝1.8＋2.1mであり、西側と南側に、1.8mの廂に相当する部分が存在する。面積は身舎の部分で24.6㎡、廂も入れると46.2㎡である。長軸方向はN－2°－E。　**柱穴**　掘り形の形状は平面形は円に近い。南側の廂列が比較的小ぶりであるが、他の住穴は深さ40～94cmと深くなっている。柱痕等は特にはっきりしていない。　（江原）

K13号掘立柱建物跡（図－627、628　図版－39）

位置　C７に所在。西台地の東側端に掘立柱建物跡群、土師器使用竪穴住居群と混在して存在する。付近には北にK－８、南にK－１、H－３がある。　**形状**　南北３間(6.3m)×東西２間（4.5m）の南北方向に長軸を取る建物跡である。柱間寸法は桁行2.1＋2.1＋2.1mであり、梁行2.1＋2.4mである。長軸方向はN－４°－E。面積28.4㎡である。　**柱穴**　円形の平面で掘り形は円筒形に近く、柱痕等は顕著ではなかった。柱穴の深さは64～94cmと比較的深い。　**その他**　本遺構と重複している遺構はK－12、K－15があるが、K－12とK－13の柱穴の切り合い関係から、K－12→K－13の新旧関係が考えられた。K－15との新旧は不明。　（江原）



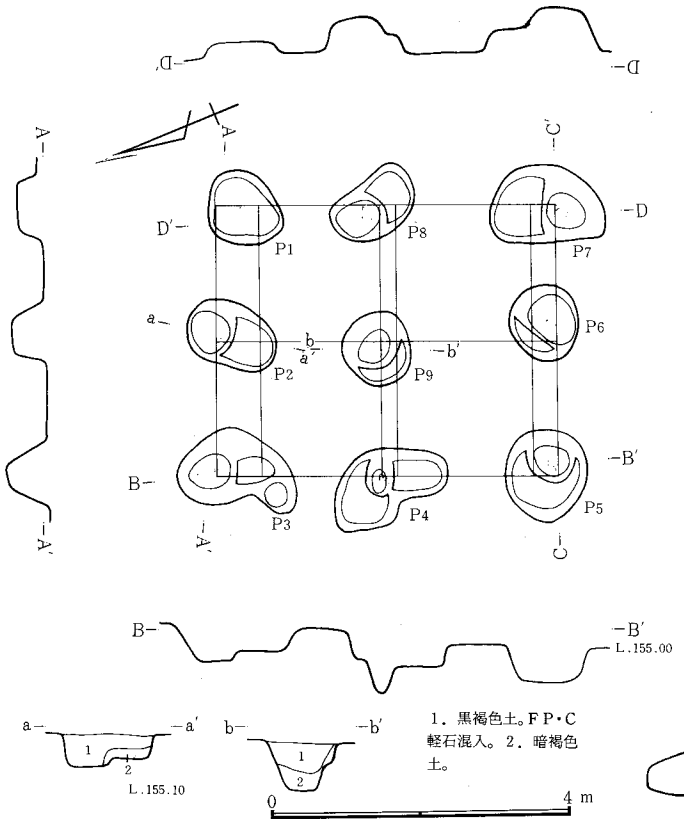
図－627　K－12・13・15・16掘立柱建物関係図



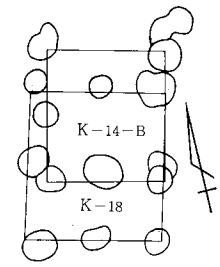
図－628　K－13号掘立柱建物跡

K14A号掘立柱建物跡（図－629　図版－39）

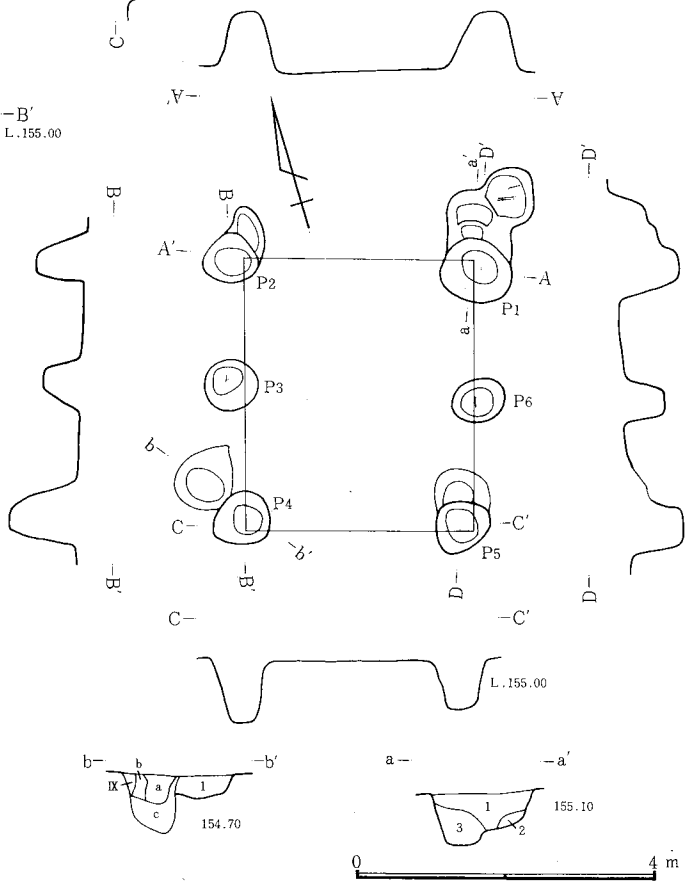
位置　D８に所在する。西台地の中央で掘立柱建物跡の密集している地区である。南への緩斜面上に位置している。　**形状**　〔新〕２間（4.5m）×２間（3.6m）と〔旧〕２間（3.6m）×２間（3.6m）の総柱の建物で、建て替えが認められる。南北に長軸をとる長方形〔新〕と正方形〔旧〕である。柱間寸法は、1.8＋1.8m〔新・旧〕で、南北が1.8m＋1.8m〔旧〕と2.1m＋2.4m〔新〕である。長軸方向はN－22.5°－Eで面積は15.1㎡である。　**柱穴**　不整円形の平面で、円筒形の掘り形である。径は100～140cm前後×70×90cm前後で、深さは、〔旧〕が35cm前後で、〔新〕は50～60cm前後で、明らかな違いが認められる。　**その他**　当初K－14であったが検討の結果K－14AとK－14Bに分けた。　**遺物**　土師器甕・羽釜・ほうろくが出土している。　（井野）



図－629　K－14－A号掘立柱建物跡



図－630　K－14－B・18号掘立柱建物跡関係図



図－631　K－14－B号掘立柱建物跡

K14B号掘立柱建物跡（図－630、631　図版－39）

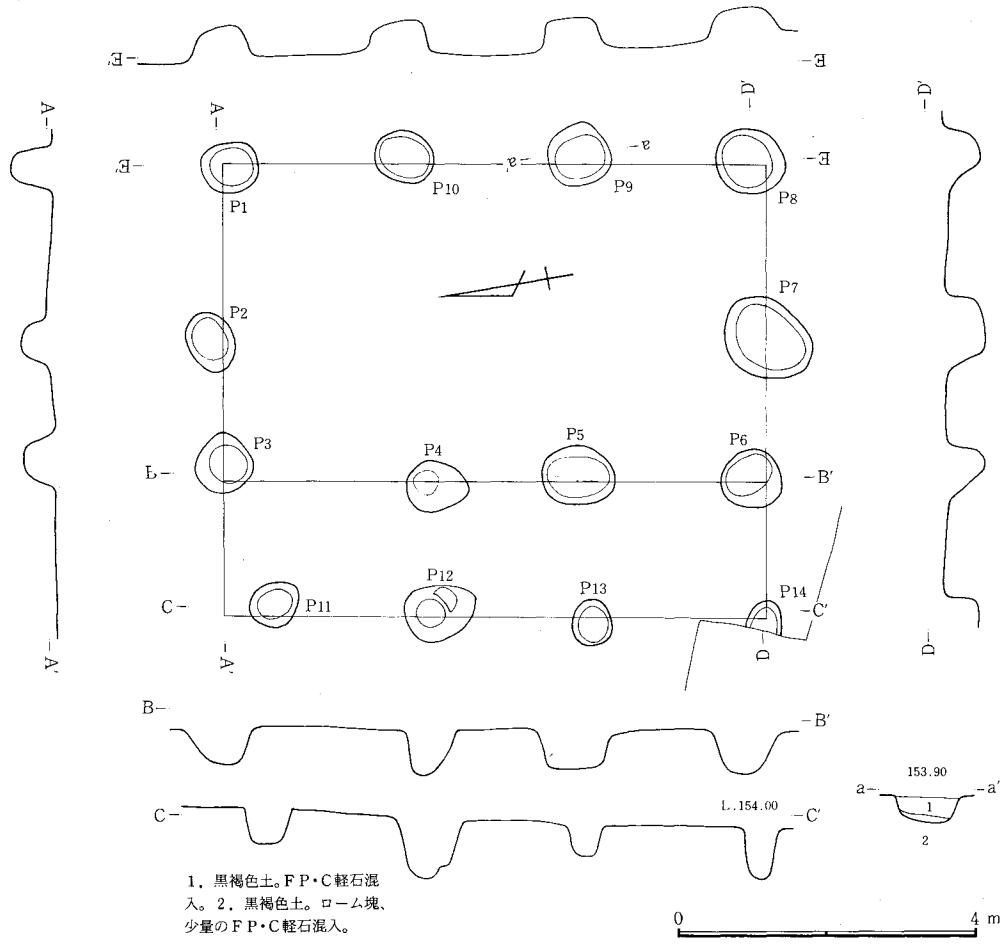
位置　D7・8。　**形状**　2間（3.6m）×1間（3.0m）の長方形の建物跡で南北に長軸をとる。柱間は南北はいずれも1.8＋1.8mである。長軸方向N－17°－E、面積10.8㎡。建て替えの可能性。　**柱穴**　平面プランは円形で、掘り形は円筒形でしっかりしている。径は60～70cm前後×60cm前後で、P_1がひと回り大きい。深さはまちまちだが、四隅は80cm前後で、P_3、P_6は、47cm、57cmと浅い。　**遺物**　K－14Aに同じ。　**重複関係**　K－18と重複している。K－14BのP_4とK－18P_4が重複しているが、P_4の南北地層断面図の切り合いによりK－14Bが古い。　（井野）

K15号掘立柱建物跡（図－627、632　図版－39）

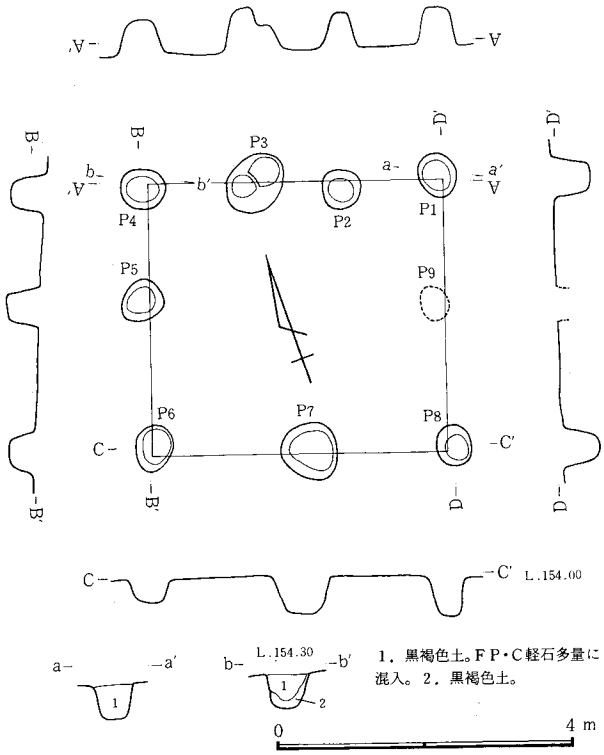
位置　C7。　**形状**　3間（7.2m）×2間（4.2m）の長方形で、西に廂が3間（7.2m）×1間（1.8m）続く。柱間は、南北方向が、西の廂と身舎の西が、北より2.7＋2.1＋2.4mで、東が2.4＋2.4＋2.4mである。東西方向は、南北辺ともに1.8＋2.4mである。長軸方向はN－9.5°－Eで、面積は身舎が30.24㎡で、廂もいれると43.20㎡である。　**柱穴**　身舎は80m前後×70cm前後で、廂は50cm前後である。柱穴の底面の標高は北辺が153.6m前後、南辺153.3m前後と、北辺の柱穴の標高が高い。身舎と廂の柱穴は廂の柱穴がやや小ぶりなほかは違いはない。柱穴は径が深さよりやや大きい逆台形の断面をしている。　**遺物**　なし　**重複関係**　K－16、K－13と重複しているが、K－16とは新旧は不明、K－13とはわずかに切り合うが、地層断面からは新旧は不明である。本遺構の東側には掘立柱建物群があり、本遺構もその一部となっている。　（井野）

K16号掘立柱建物跡（図－627、633　図版－40）

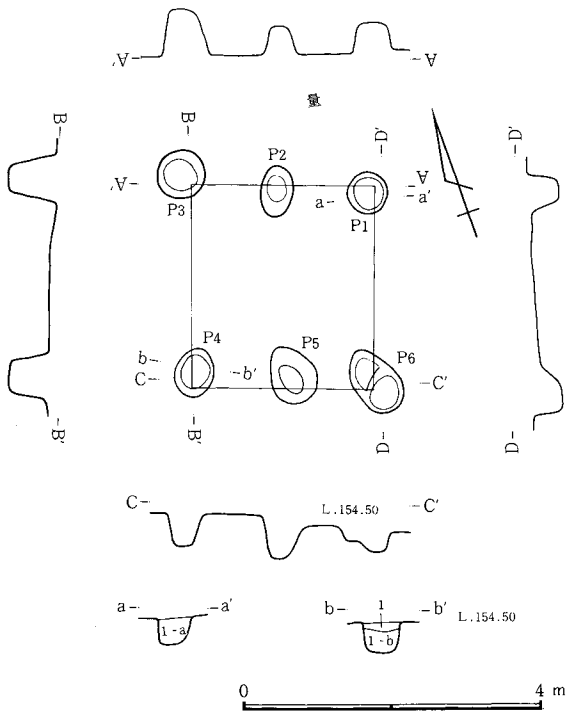
位置　西台地東の掘立柱建物群の西端に位置をする。南への緩斜面上に立地する。C7。　**形状**　3間（3.9m）×2間（3.6m）の長方形。南辺は2間（3.9m）。柱間寸法は東西方向が北辺は西から1.2＋1.2＋1.5mで、南辺は2.1＋1.8m。南北方向は西辺が1.5＋2.1m。長軸方向はN－109°－Eで面積は14.0㎡である。　**柱穴**　平面は円形で、50～60cm前後で、深さは40～50前後である。柱穴の底面の標高はP_7、P_8を除きほぼ153.6m前後である。　**遺物**　なし　**重複関係**　K－15と重複している。新旧の関係は不明である。　（井野）



図－632　K－15号掘立柱建物跡



図－633　K－16号掘立柱建物跡



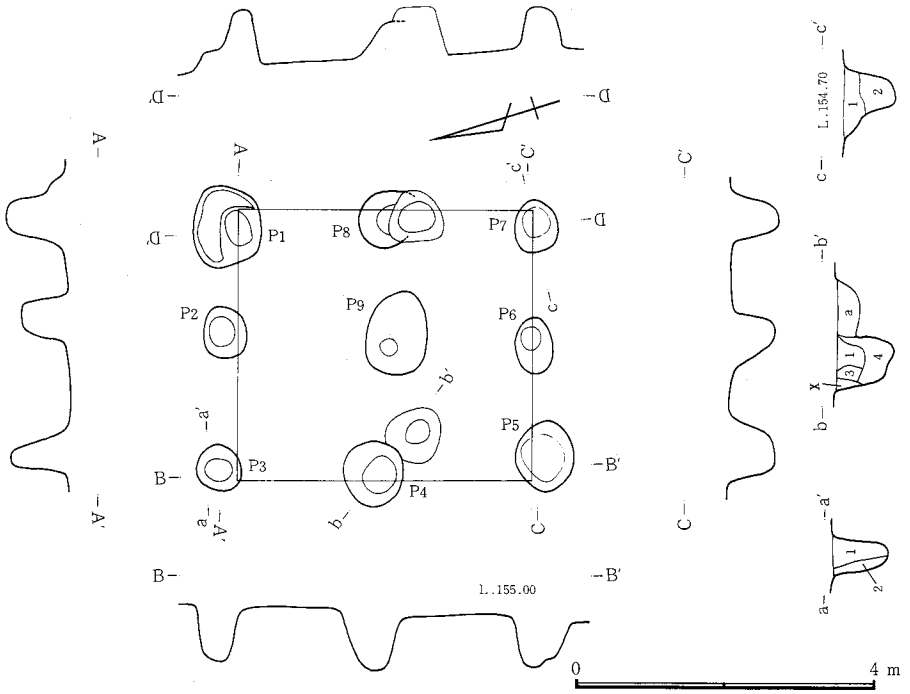
1．黒褐色土。1-a．黒褐色土。多量の浮石混入。ローム点在。1-b．暗褐色土。多量の浮石、ローム塊混入。

図－634　K－17号掘立柱建物跡

K17号掘立柱建物跡（図—622、634　図版—40）

位置　西台地の中央部やや東のC７に位置する。南への緩斜面上に立地する。　**形状**　１間（2.7m）×２間（2.4m）の長方形である。柱間寸法は東西方向が北辺、南辺ともに1.2+1.2mである。長軸方向はN—20°—Eで面積は6.5m²である。　**柱穴**　平面は円に近く、掘り形はほぼ円筒形に近い。柱痕は確認されなかった。径は50～60cm前後のものが多く、深さは40cm前後のものが多い。柱穴の底面のレベルは153.9m前後のものが多い。　**重複関係**　K—９と重複している。K—９のP_7とK—17のP_5の地層断面の切り合いにより本遺構が新しい。　（井野）

K18号掘立柱建物跡（図—630、635　図版—40）

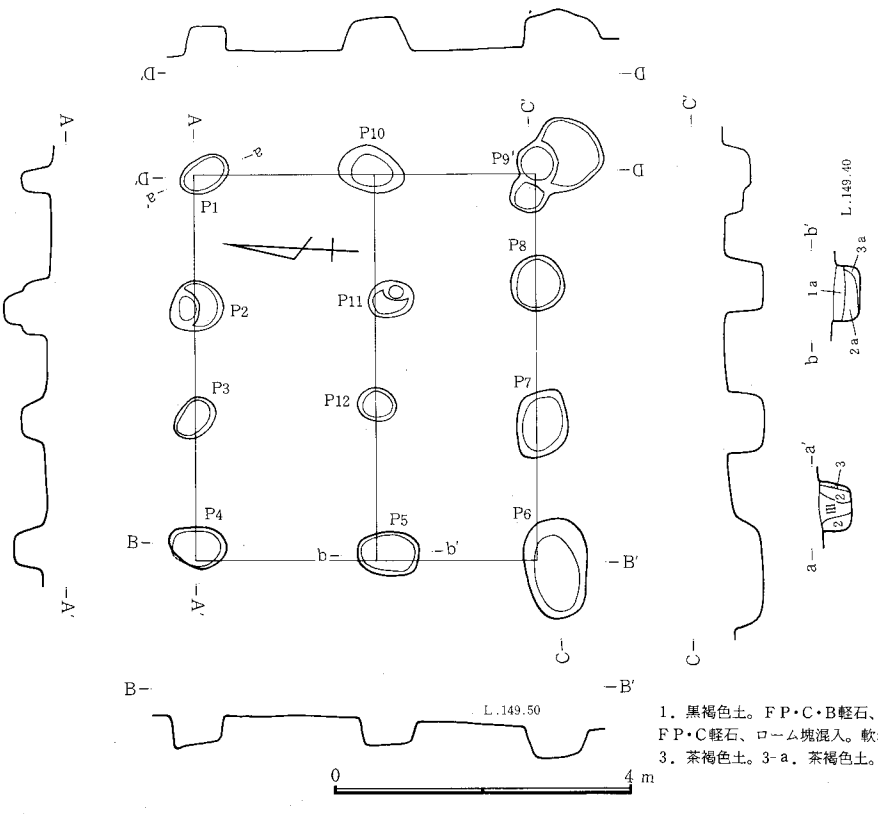


1．黒褐色土。2．黒褐色土。若干のローム塊混入。3．暗褐色土。ローム、軽石混入。4．黒褐色土。微細な軽石混入。a．(K14-B)黒褐色土。

図—635　K—18号掘立柱建物跡

位置　西台地中央部のD７・８に位置する。東側は掘立柱建物跡の密集している地区である。　**形状**　２間（3.9m）×２間（3.6m）の総柱の建物である。柱間寸法は南北方向が、北から2.0+1.9mで、東西方向が西から1.9+1.7mである。長軸方向はN—16°—Eで、面積は13.9m²である。　**柱穴**　平面は円形で、掘り形は、底面も狭く、径にくらべ深さのある逆台形をしている。径は、60～100cm前後×60～70cm前後で、深さは60～70cmが多い。西辺は80～90cm前後と一段深い。柱穴の底面の標高はほぼ153.8m前後が多い。柱痕径はP_3が上径40で下径16cm、P_4が36cmである。　**遺物**　なし。　**重複関係**　K—14Bと重複する。K—14BのP_4とK—18のP_4との切り合い関係から本遺構が新しいと考えられる。　（井野）

K19号掘立柱建物跡（図—636　図版—40）

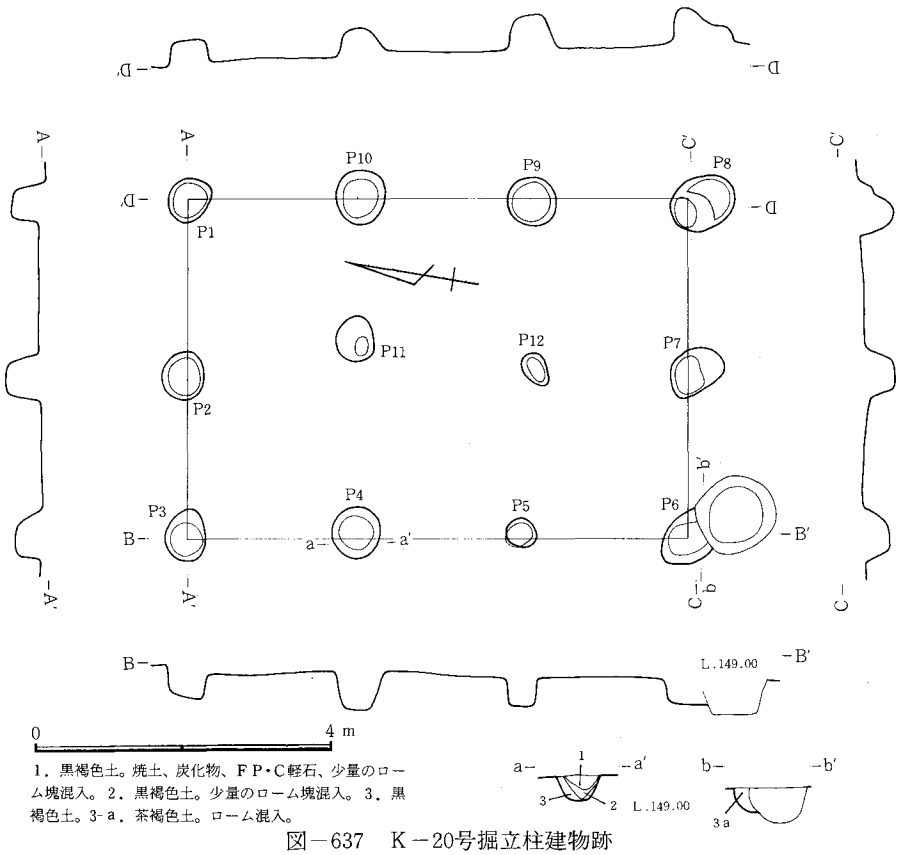


1．黒褐色土。FP・C・B軽石、焼土、炭化物、ローム塊混入。2．黒褐色土。茶褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。軟かい。2-a．黒褐色土。ローム塊、少量のFP・C軽石混入。3．茶褐色土。3-a．茶褐色土。黒色土。ローム混入。

図—636　K—19号掘立柱建物跡

位置　K101に所在し南緩斜面上に立地する。南側は掘立柱建物跡や竪穴住居跡の多いところである。　**形状**　３間(5.1m)×２間（4.5m）の建物跡で東西に長軸をもっている長方形である。柱間寸法は、長軸方向が、北の列は西より1.8+1.5+1.8m、中の列は西より2.0+1.4+1.6mで、南の列は西より1.8+1.8+1.5mである。短軸方向は東・西列ともに北より2.4+2.1mである。P_{11}・P_{12}は、深さは他のピットと変わらないが、太さはやや小ぶりであり、束柱とも考えられる。長軸方向N—86°—E、面積22.9m²。　**柱穴**　隅丸の長方形に近い掘り形で、径40～80cm前後、深さ30～50cm前後である。柱痕跡はP_1は上径60cmで下径24cm、P_7が60cm、P_9が40cmである。　**遺物**　土師器片（坏・甕）と須恵器片（坏・甕）が出土している。　（井野）

K20号掘立柱建物跡（図－637　図版－40）

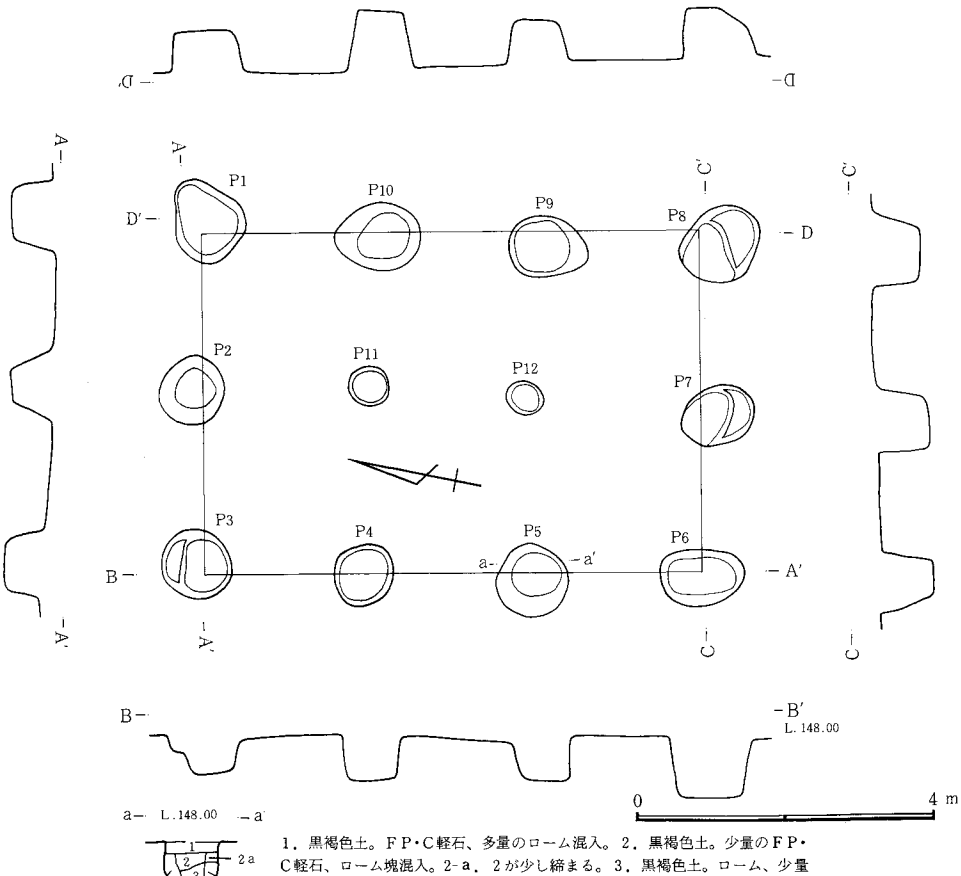


1．黒褐色土。焼土、炭化物、FP・C軽石、少量のローム塊混入。2．黒褐色土。少量のローム塊混入。3．黒褐色土。3-a．茶褐色土。ローム混入。

図－637　K－20号掘立柱建物跡

位置　K101に所在し、南緩斜面に立地する。南に掘立柱建物跡が多く所在し、K－20も含め一群を成すと考えられる。　**形状**　3間（6.6m）×2間（4.5m）の長方形で南北に長軸をとる。長軸方向はN－10°－Wで、面積は29.7m²である。柱間寸法は長軸方向が、東西ともに北より2.1+2.4+2.1mである。短軸方向は南北ともに西より2.1+2.4mである。P_{11}とP_{12}は径、深さ共に小ぶりであり束柱の可能性がある。　**柱穴**　円形でしっかり掘られている。径は40～70cm前後で、深さは40～50cm前後である。　**重複関係**　P_6がK－26と重複するが、切り合い関係から本遺構が旧い。　**遺物**　P_8、P_9、P_{11}より土師器片と須恵器片が出土している。　（井野）

K21号掘立柱建物跡（図－638　図版－40）

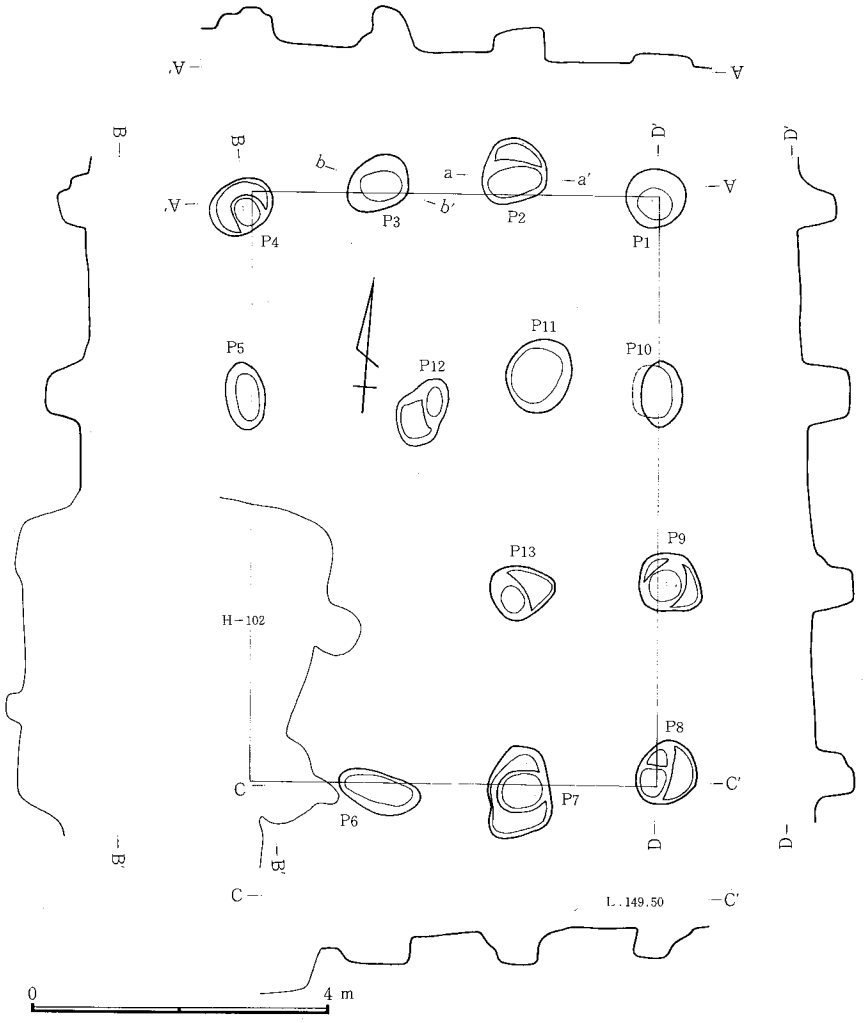


1．黒褐色土。FP・C軽石、多量のローム混入。2．黒褐色土。少量のFP・C軽石、ローム塊混入。2-a．2が少し締まる。3．黒褐色土。ローム、少量のC軽石混入。3-a．黒褐色土。少量のローム、C軽石混入。

図－638　K－21号掘立柱建物跡

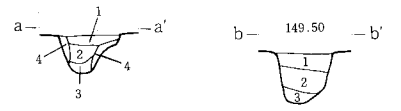
位置　K102・103。　**形状**　東西が2間（4.5m）南北3間（6.6m）の長方形で、面積は29.7m²である。柱間寸法は、東西が北は西より2.4+2.1mで南は2.1+2.4mである。南北は西が北より2.1+2.4+2.1mで、東は2.4+2.1+2.1mである。長軸方向はN－22°－W。　**柱穴**　平面は円形で、掘り形は円筒形。径は90～110cm前後×70～80cm前後で、深さは60～70cm前後である。P_5から上径40cmで下径28cm、P_7から径17cm、P_9からは径26cmの柱痕と思われる跡が見られる。P_{11}とP_{12}はそれぞれ小ぶりとなっているが、位置からみて束柱と考えられる。径50×45cm前後で深さ30～40cmである。　**遺物**　柱穴内より土師器片、須恵器片が出土している。周辺の掘立柱建物跡と一群を成している。　（井野）

K22号掘立柱建物跡（図—639　図版—40、121　表—293）



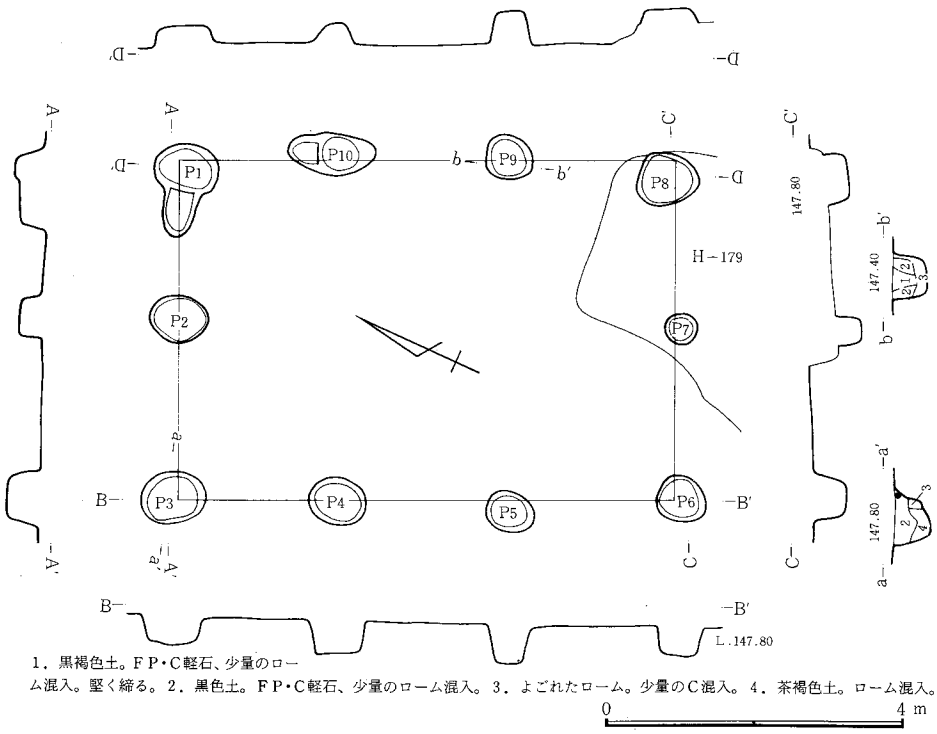
図—693　K—22号掘立柱建物跡

位置　J101に所在する。本建物跡を含んで16軒の掘立柱建物跡が1つの群としてまとまっている。16軒の新旧関係は不明だが、その配置の形状は半円を描く。本建物跡は半円の東端にあたる。　**形状**　3間（7.8m）×3間（5.4m）の長方形の建物跡で、現況からみて総柱の建物跡か。南北方向に長軸をとる。柱間は梁行で西から1.8＋1.8＋1.8m、桁行で東辺北から2.7＋2.4＋2.7mを測る。四辺に囲まれた内部には柱穴が3個しか確認されなかった。なお、長軸方向はN—6°—Wで、面積は42.1㎡である。　**柱穴**　掘り形は隅丸長方形に近いものが多い。径は40cm前後のものが多く、深さは50cm前後の円筒形の掘り形のものが多い。P_4、P_7、P_8、P_9は二段の掘り形をもつ。　**遺物**　須恵器坏(16)が出土している。　**重複関係**　H102号住跡と重なる。その新旧については、本掘立柱建物跡が旧いと思われる。本来ならば、南西隅の柱穴とその北隣りの柱穴は存在したと推測される。　（中澤）



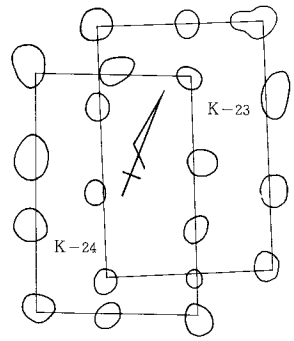
1．黒色土。ローム塊、少量のFP・C・B軽石混入。堅く締る。2．茶褐色土。多量のローム粒、少量のC軽石混入。3．茶褐色土。多量のローム塊混入。4．汚れたローム。

K23号掘立柱建物跡（図—640、641　図版—40）



1．黒褐色土。FP・C軽石、少量のローム混入。堅く締る。2．黒色土。FP・C軽石、少量のローム混入。3．よごれたローム。少量のC混入。4．茶褐色土。ローム混入。

図—640　K—23号掘立柱建物跡



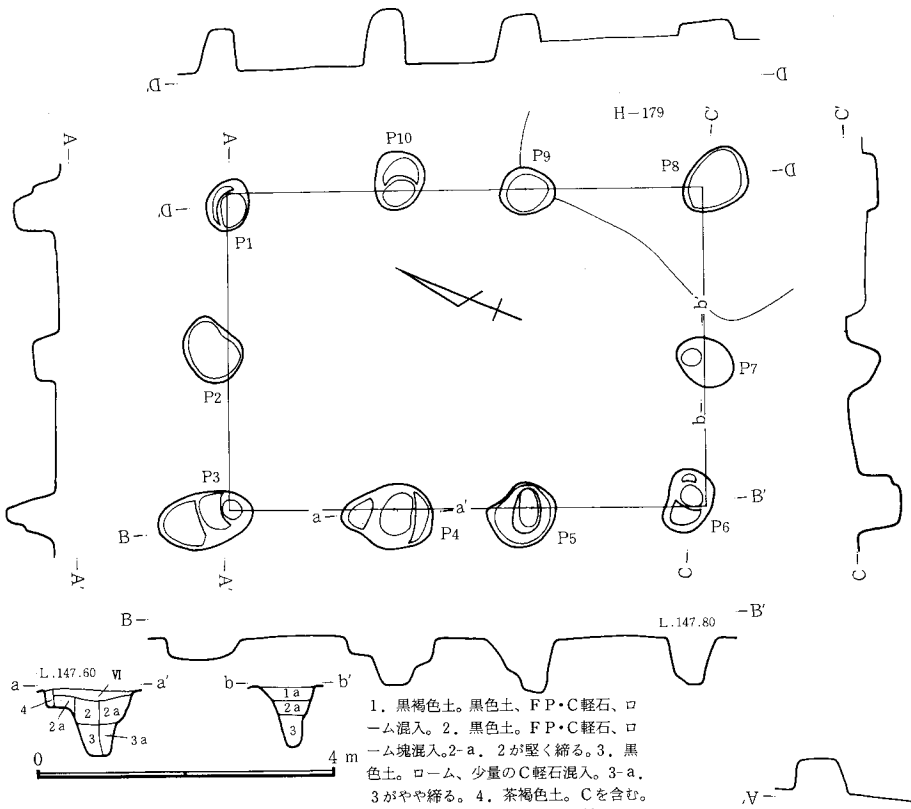
図—641　K—23・24号掘立柱建物跡関係図

位置　K・J103。　**形状**　3間（6.6m）×2間（4.5m）の長方形で、長軸方向はN—26°—E、面積は29.7㎡である。柱間寸法は長軸方向は、東西ともに2.1＋2.4＋2.1mである。短軸方向は南北ともに2.4＋2.1mである。　**柱穴**　平面は円形で、P_1とP_{10}以外はかなりしっかりとした円筒型をしている。径は60～80cm前後×50～60

cm前後である。深さは30～60cm前後。柱痕跡はP_2とP_7にある。P_2は径27cm、P_7は径19cmである。P_1とP_{10}の形状は建て替えを示すものか。 **重複関係** K－24とH－179と重複する。H－179が旧いと推定される。K－24とは新旧不明。 **遺物** 遺構内よりは遺物は発見されていない。 **その他** 周辺のK－21等と一群を形成している。 （井野）

K24号掘立柱建物跡（図－641、642 図版－41）

位置 K・J 103。西台地南辺近くの中央部。 **形状** 3間(6.3m)×2間（4.2m）の長方形の建物跡。柱間は南北方向で東側列北から2.4＋1.5＋2.4m、西側列2.4＋1.5＋2.4m。東西方向で北側西から2.1＋2.1m、南側2.0＋2.2m。長軸方向はN－25°－E。面積は26.5m²。 **柱穴** 掘り形平面はP_4及び建物の角部となるP_3、P_6、P_8が長楕円形をうかがわせ、他は不整円形を呈する。P_1、P_3、P_4、P_6、P_{10}は建て替えをうかがわせる掘り形及び土層断面を呈し、いずれも深い方が新しい。規模は比較的形状の整っているP_1が70×54cmで最小となり、深さは34～78cmを測る。 **重複関係** K－23と長軸方向をほぼ同じとする重複状態を示すが切り合いがなく新旧は不明。H－179中のP_8には貼り床が見られるので本遺構が古い。 （前原）



1．黒褐色土。黒色土、FP・C軽石、ローム混入。2．黒色土。FP・C軽石、ローム塊混入。2-a．2が堅く締る。3．黒色土。ローム、少量のC軽石混入。3-a．3がやや締る。4．茶褐色土。Cを含む。

図－642 K－24号掘立住建物跡

K25号掘立柱建物跡（図－643、644 図版－41）

位置 K102・101、L102に位置する。東側には竪穴住居跡と掘立柱建物跡が集中している。 **形状** 3間(7.8m)×3間(5.1m)の長方形である。長軸はN－2°－Wで、面積は推定39.8m²である。 **柱穴** 西側の柱穴2本の内1本はH177号住居跡により切られ、残りの1本および北西隅は検出されなかった。掘り形は、平面方形に近く短辺40～100cm、長辺70～130cm、深さ40～70cm前後である。隅の柱穴が他より大きく、向きも45°の角度がみられる。柱痕は顕著でない。

重複関係 K26号掘立柱建物跡H177号住居跡は本跡より新しく、H168号住居跡は旧い。 **遺物** P_1から須恵器坏・甕・高台埦破片、土師器坏・甕破片が、P_4から須恵器坏・壺破片、土師器甕破片が出土。 （中村）

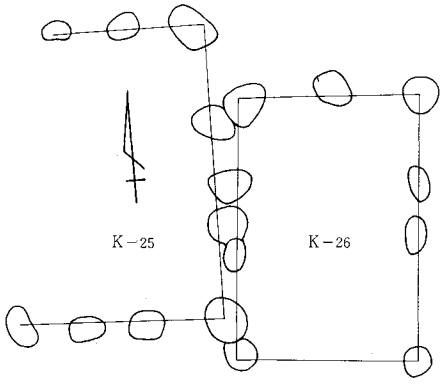
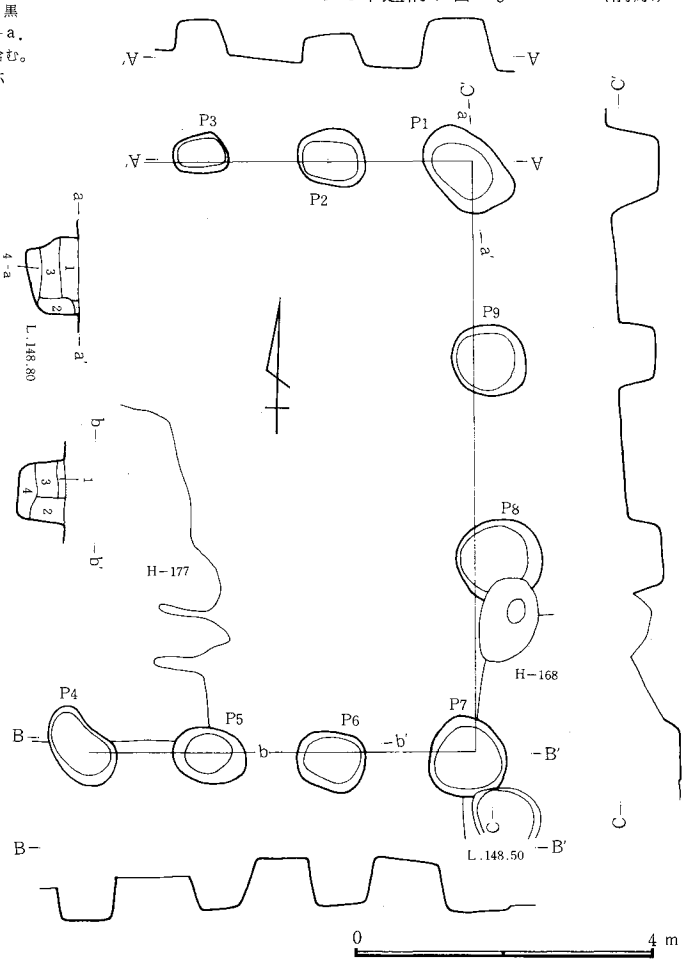


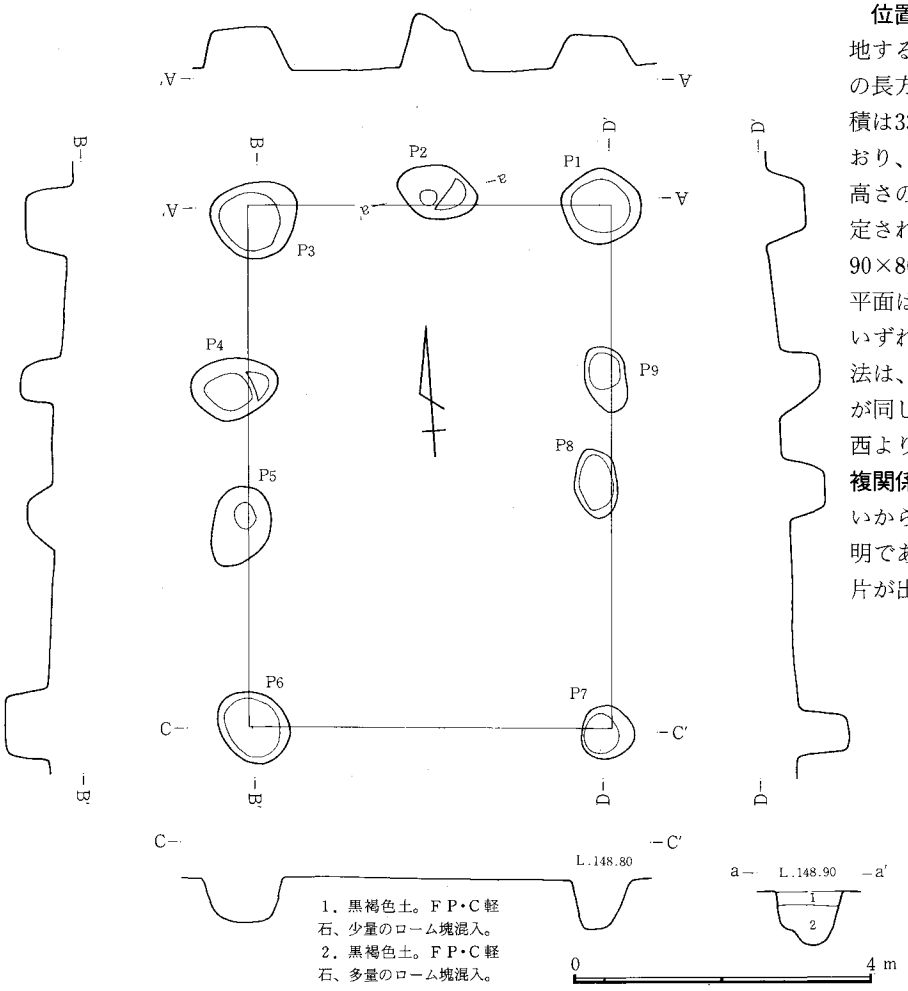
図644 K－25・26号掘立柱建物跡関係図



1．黒褐色土。FP・C軽石、ローム混入。堅く締る。1-a．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。砂質。2．黒褐色土。FP・C軽石、多量のローム混入。3．黒色土。ローム、少量のC軽石混入。4．ロームに黒色土混入。4-a．黒色土にローム混入。

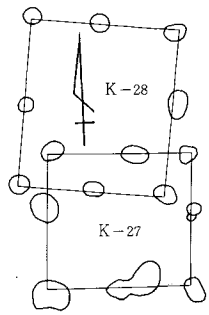
図－643 K－25号掘立柱建物跡

K26号掘立柱建物跡（図—644、645　図版—41）

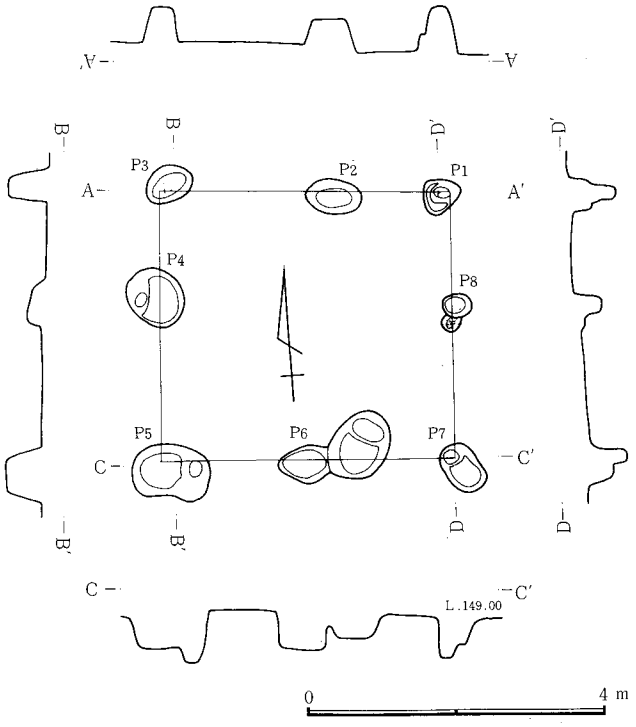


図—645　K—26号掘立柱建物跡

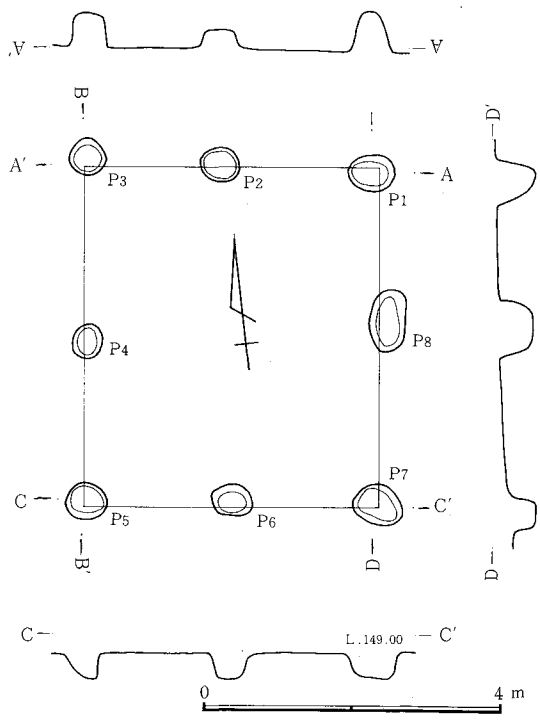
位置　K101・102に所在し、南緩斜面に立地する。　**形状**　3間(6.9m)×2間(4.8m)の長方形である。長軸方向はN—4°—Eで面積は33.1m²である。南側はH—168と重複しており、柱穴の深さも住居跡の床面とほぼ同じ高さのため、H—168内にK—26南辺中央と想定される柱穴は確認できなかった。　**柱穴**　90×80cm前後の径で深さは50cm前後である。平面は円形だが、桁間の柱穴は長方形に近い。いずれも深さより径のほうが大きい。柱間寸法は、長軸が西は北から2.4+1.8+2.7m、東が同じく2.1+1.8+3.0mである。短軸は北が西より2.4+2.4mで、南が4.8mである。　**重複関係**　K—25と重複するが、P_5との切り合いから本遺構が新しい。H—168との新旧は不明である。　**遺物**　P_2、P_4より頃恵器・土師器片が出土。　（井野）



図—646　K—27・28号掘立柱建物跡関係図



図—647　K—27号掘立柱建物跡



図—648　K—28号掘立柱建物跡

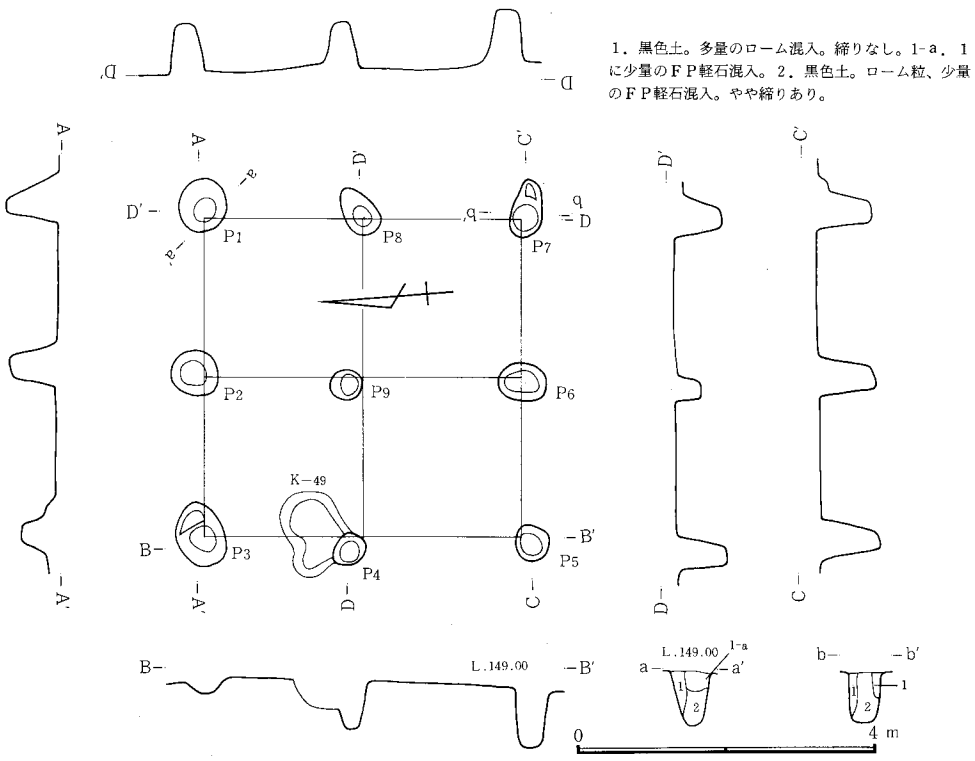
K27号掘立柱建物跡（図—646、647）

位置　西台地南西端のK101に位置する。　**形状**　南北2間（3.6m）×東西2間（3.9m）の長方形である。柱間寸法は南北が1.5+2.1mで、東西が2.1+1.8mである。長軸方向はN—13°—Eで面積は14.0m²である。　**柱穴**　径は70cm前後×60cmが多い。深さは50cm前後が多く、P_1は二段の底をもつ。P_8は径・深さともに小ぶりである。形状がさまざまなのは建て替えによるものか。柱穴の底面の標高は148.3m前後である。　**遺物**　覆土中より土師器坏が出土している。　**重複関係**　K—28と重複しているが、切り合いはなく新旧は不明である。（井野）

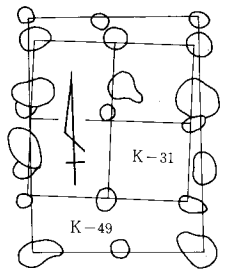
K28号掘立柱建物跡（図—646、648　図版—41）

位置　西台地南西ののK101に位置する。付近は掘立柱建物跡が多い。掘立柱建物跡群は三つの小群に分けられるが、本遺構はそのうちの西の群に属す。この群は南への小張り出し上に所在している。　**形状**　南北2間（4.5m）×東西2間（3.9m）の長方形である。柱間寸法は、南北は西辺が北より2.4+2.1m、東辺は2.1+2.4m、東西はいずれも西より1.8+2.1mである。長軸方向はN—8°—Eで面積は17.5m²である。　**柱穴**　平面は円形（径にくらべて深さのない円筒形の掘り形のものが多い）。径は50～60cmで、深さは40cm前後である。柱穴の標高は148.5cm前後のものが多い。　**重複関係**　K—27と重複。新旧は不明。（井野）

K31号掘立柱建物跡（図—649、650　図版—41、121　表—293）



図—649　K—31号掘立柱建物跡



図—650　K—31・49号掘立柱建物跡関係図

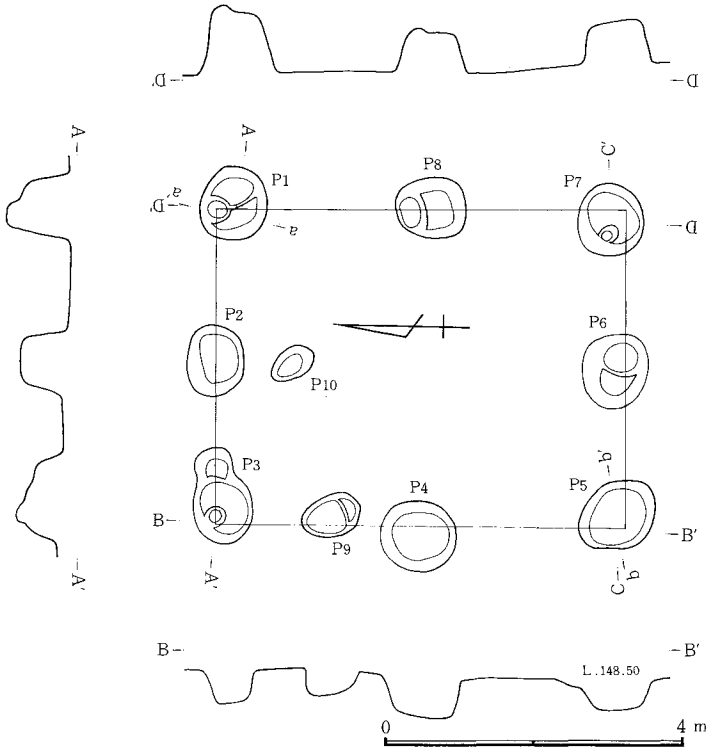
位置　西台地南辺のJ101にある。コの字状に並ぶ16棟の掘立柱建物跡の南東の端に位置し、K—49と重複する。付近には10数軒の竪穴住居跡が見られる。　**形状**　2間（4.2m）×2間（4.2m）の正方形で、面積9.2cm²。西辺での方位はN—4°—E。一応総柱である。各辺での柱間寸法はすべて2.1mを測す。　**柱穴**　円形の掘り形で、最大82×60cm（P_3）、最少42×36cm（P_4）とバラつきがある。深さは39～84cmで、東辺南辺の柱穴が深い。P_9は中央にあって、規模も小さく浅い（42×36×39cm）。P_1、P_2、P_7に径23～30cmの柱痕が見られた。　**遺物**　P_3より高台付埦の底部（21）が出土した。　**重複関係**　K—49と同一方向で重複し、南北にずれている。切り合いがなく新旧は不明。（川崎）

K32号掘立柱建物跡（図—651　図版—41）

位置　調査区南のK・J101・102に位置する。西台地南西端の小さな張り出しの東で、南緩斜面に所在している。　**形状**　南北2間（5.4m）×東西2間（4.2m）である。長軸方向はN—15°—Wで面積は22.7m²である。柱間寸法は、南北が2.7+2.7mで、東西が2.1+2.1mである。　**柱穴**　平面形ではさまざまであるが、P_1～P_8のうちP_1～P_7までは柱痕がのこっていた。径は90～100cm前後のものが多く、深さは対角の位置のP_1とP_6が81～82mと深く、他は60cm前後である。柱痕径はP_5、P_6が40cmで、P_1、P_2が30cm前後、他は20cm前後である。底面標高は147.6～147.8m前後を示す。P_1、P_3、P_6、P_8は二段の掘り形をもつ。　**遺物**　なし。　**重複関係**　H9号土坑と重複、新旧不明。（井野）

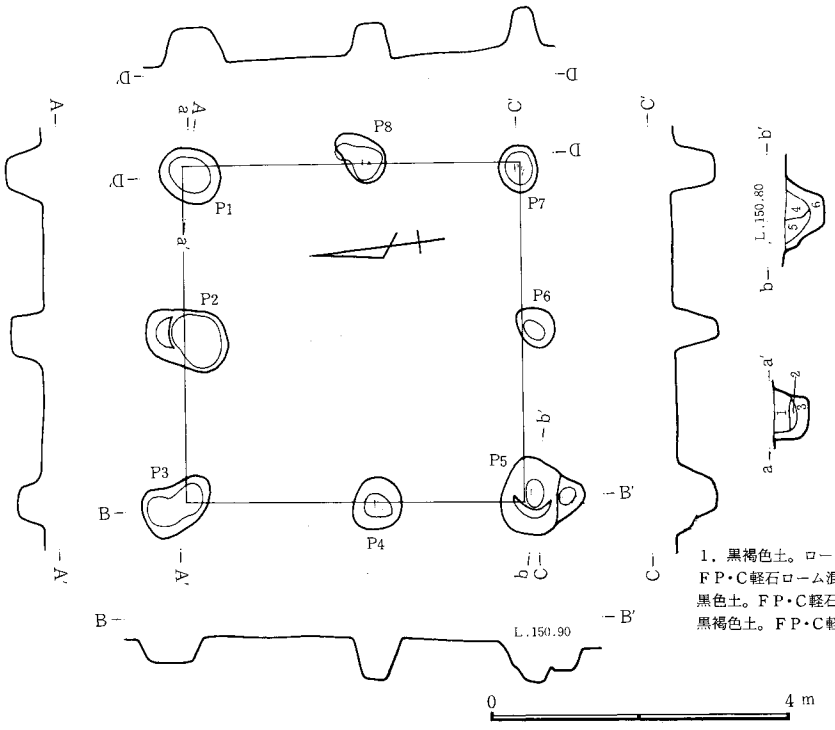
K33号掘立柱建物跡（図—652、653　図版—41）

位置　H2に所在し、K103号掘立柱建物跡と重複する。北にH182、183号住居跡を臨み、東にH184号住居跡と接する。　**形状**　2間（4.5m）×2間（4.5m）の正方形を呈す。柱間寸法は、南北列、東西列ともに、2.4+2.1m。面積、20.3m²。長軸は、N—6°—Eの方向を示している。　**柱穴**　平面形は、やや方形に近い円形を呈す。径は、50cm前後のものから90cm以上のものまであり、一定でない。断面は、比較的幅があり、深くない。柱痕は、顕著でない。P_2、P_3、P_5は建て替えを示すものか。　**遺物**　土師器坏片、甕片が出土した。　**その他**　K103号掘立柱建物跡と重複するが、切り合い関係はなく、新旧の関係は、不明。（杉浦）



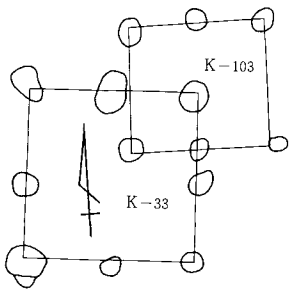
1．黒褐色土。C軽石混入。堅く締る。1-a．黒色土。C軽石混入。締りあり。2．黒色土。ローム粒混入。2-a．黒色土。C軽石混入。3．褐色土。ローム粒、C軽石、炭化物混入。締る。3-a．褐色土。ローム粒混入。3-b．黒褐色土。C軽石、ローム粒混入。3-c．黄褐色土。多量のローム混入。4．黄褐色土。C軽石、多量のローム塊混入。5．よごれたローム。

図－651　K－32号掘立柱建物跡



1．黒褐色土。ローム、多量のFP・C軽石混入。2．黒褐色土。FP・C軽石ローム混入。3．黄褐色土。多量のローム混入。4．黒色土。FP・C軽石混入。5．黄褐色土。FP・C軽石混入。6．黒褐色土。FP・C軽石混入。

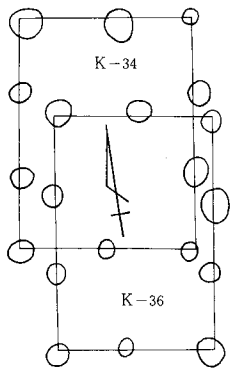
図－652　K－33号掘立柱建物跡



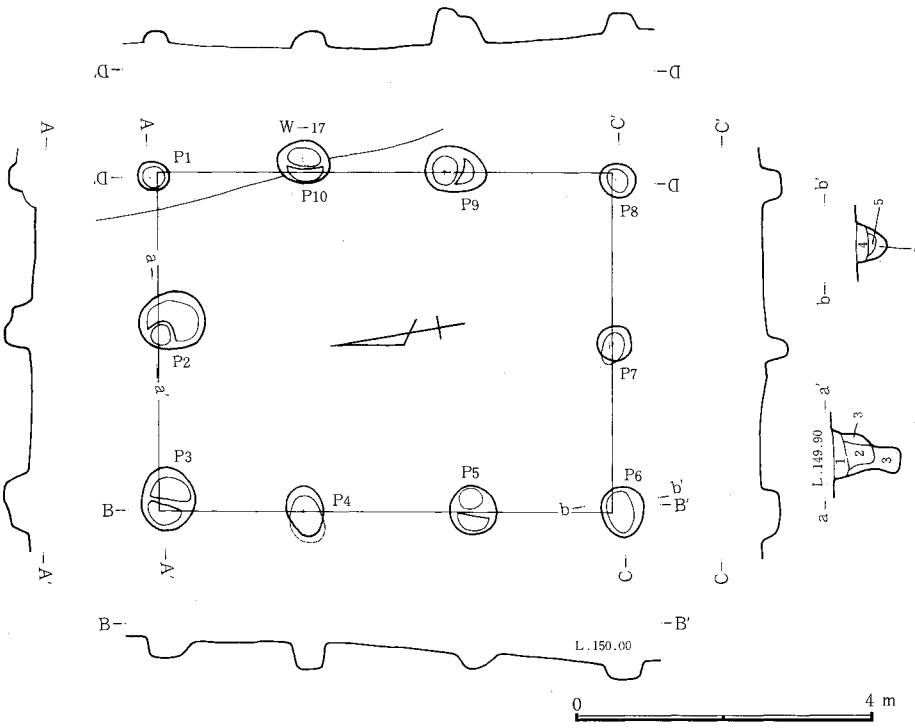
図－653　K－33・103号掘立柱建物跡関係図

K34号掘立柱建物跡（図－654、655、図版－41）

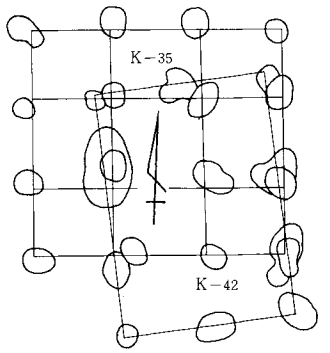
位置　H1に所在し、台地上を南流下するW17号溝に北東隅のP_1の上端を削り取られている形となっている。　**形状**　3間（6m）×2間（4.5m）の、南北方向に長軸をとる建物跡である。柱間の距離は、長軸方向の北から南へ2.1+2.1+1.7mで南側がやや短い。短軸方向は2.3+2.2mを測り南辺のほぼ中央に中間の柱穴が位置しているのに比べて北辺のそれはやや東寄りに位置している。長軸方向N－10°－E、面積27㎡。　**柱穴**　全体に平面は円形で、径60～80cmのものと40cm位のものがあり、深さは20～40cm前後で比較的浅い。柱穴の底面の標高は底北辺で149.5m前後なのに対して南辺は149.2mとなっている。P_2、P_3、P_9は二段の掘り形をもつ。　**重複関係**　K36号堀立柱建物跡とW17号溝に一部重複するが、切り合い関係の地層断面がなく、前後関係不明。　（松村）



図－654　K－34・36号掘立柱建物跡関係図



図－655　K－34号掘立柱建物跡

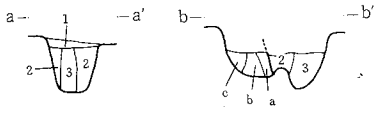


図－656　K－35・42号
掘立柱建物跡関係図

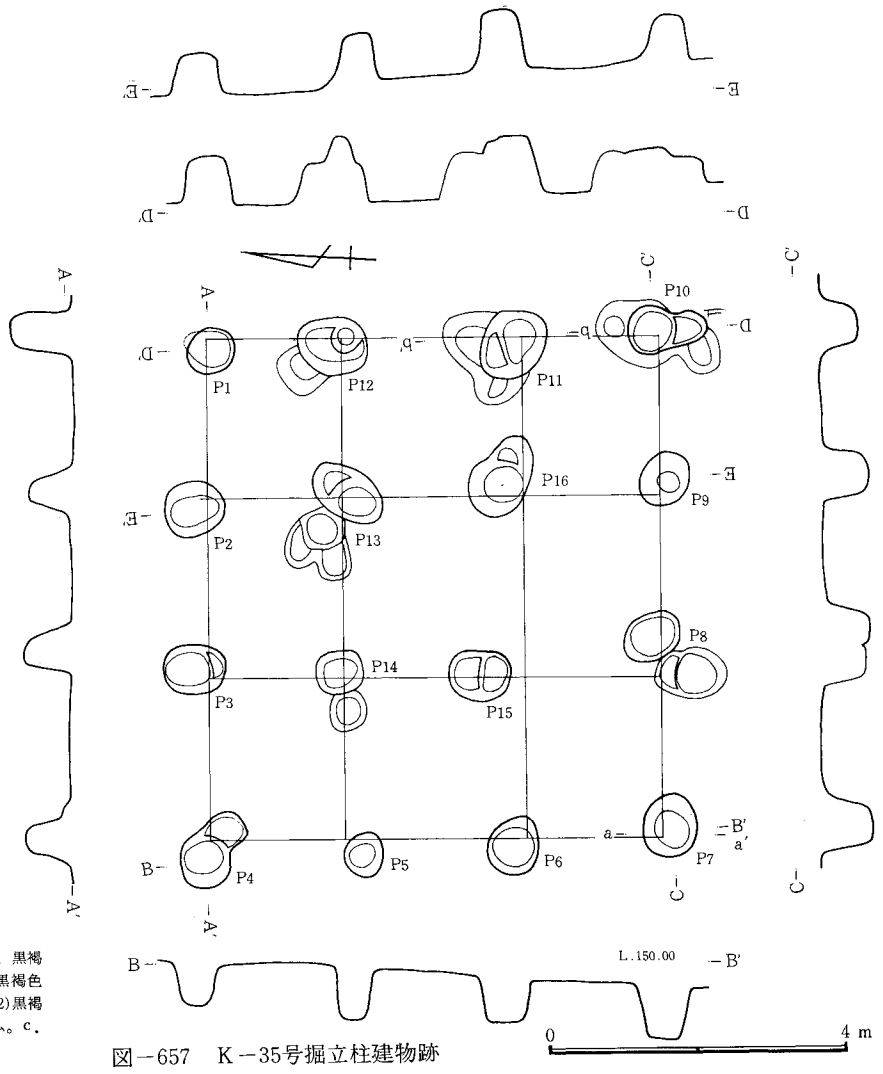
1．黒褐色土。C軽石混入。2．黒褐色土。多量のローム粒混入。3．よごれたローム。4．黒褐色土。FP・C軽石、少量のローム粒混入。5．黒褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。

K35号掘立柱建物跡（図—656、657　図版—42、121　表—293）

位置　H・B1　**形状**　3間（6・6m）×3間（6.0m）のほぼ正方形の建物跡で、東辺に長軸をとる。総柱である。長軸方向N—3.5°—Wで面積は39.6㎡である。柱間寸法は東西が、2.1+2.4+2.1mで、南北が北より、1.8+2.4+1.8mである。　**柱穴**　平面は円形が多く、掘り形も比較的しっかりとした円筒形である。径は60～70cm前後が多く、深さは70cm前後が多い。柱痕径は20～25cm前後が多い。底面標高は、南にむかうにつれて低くなる。北辺は149.1m前後で南辺は149.0m前後になっている。P_4、P_8、P_{10}～P_{16}は建て替えを示すものか。　K—42と重複する。P_{11}とK—42P_{10}との切りあいにより本遺構が新しいことがわかる。　**遺物**　P_4より土師器杯（5）、須恵器蓋（11）等出土。　（井野）

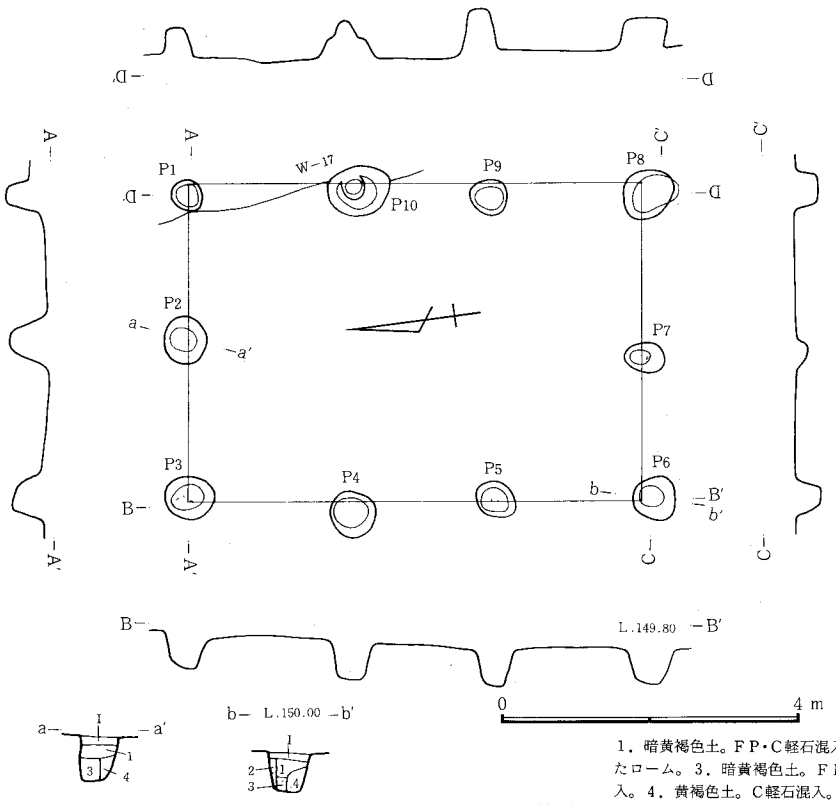


1．黒褐色土。FP・C軽石、若干のローム粒混入。2．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。締りあり。3．黒褐色土。C軽石、若干のローム混入。締りなし。a．(K42)黒褐色土。C軽石混入、締りあり。b．(K42)汚れたローム。c．(K42)黒褐色土。FP・C軽石混入。



図－657　K－35号掘立柱建物跡

K36号掘立柱建物跡（図—654、658図版—42）

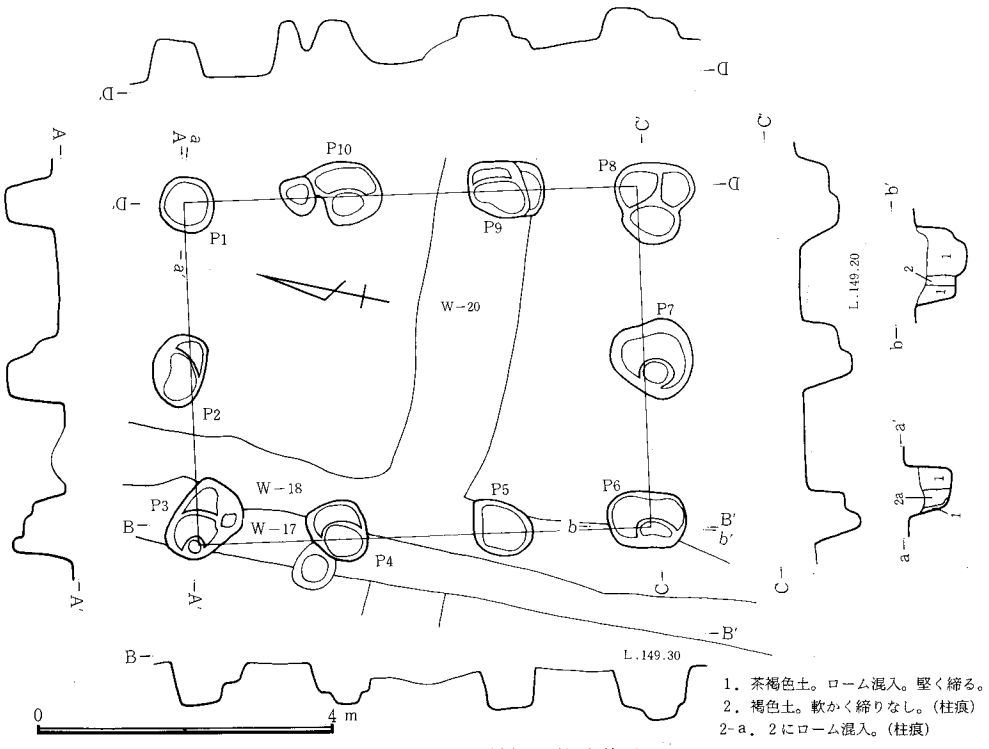


図—658　K—36号掘立柱建物跡

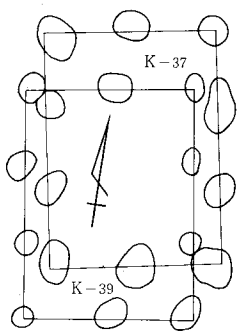
位置　H1に所在し、K34号掘立柱建物跡と重複する。南東のK37・39号掘立柱建物跡に接し、東にK35・42掘立柱建物跡を臨む。　**形状**　桁行3間(6.0m)梁行2間（4.2m）の長方形。南北方向に長軸をとっており、N—8°—Eの方向を示している。柱間寸法は、桁行西列2.1+2.1+1.8m、東列2.1+2.1+1.8m、梁行北列2.1+2.1m、南列2.1+2.1m。面積は25.2m²。　**柱穴**　平面形は円形を呈す。径は60cm前後のものが多い。掘り形はP_{10}のみ二段の底をしている。他は、径より深さの方がややある、比較的整った円筒形をしている。P_9には柱痕が認められ、径は19cm。　**遺物**　P_7内より、土師器坏片が出土した。その他K34号堀立柱建物跡、W17号溝と重複するが、切り合い関係がなく、新旧は、不明である。

（杉浦）

K37号掘立柱建物跡（図—659、660、図版—42）



図—660　K—37号掘立柱建物跡

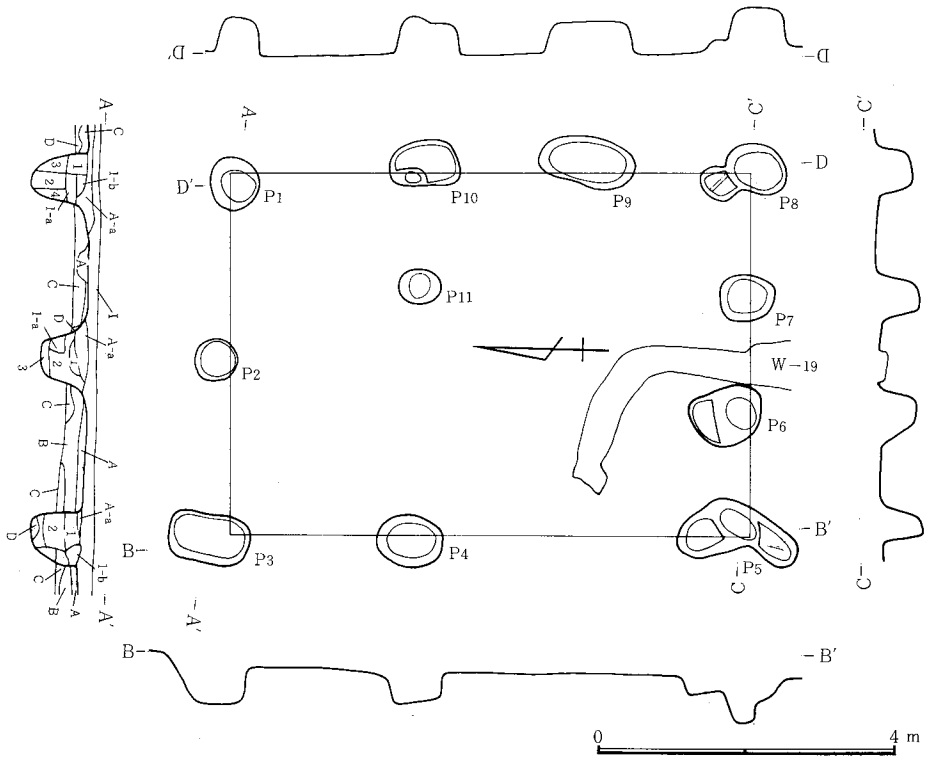


図—659　K—37・39号掘立柱建物跡関係図

位置　G・H101・1。本遺跡西台地南辺から60m程北の遺構、特に掘立柱建物跡の集中部中央やや南寄り。　**形状**　3間(6.0m)×2間（4.5m)の長方形の建物跡。柱間は南北方向で西・東側列、北から2.1+2.1+1.8m、東西方向で北・南側列、西から2.1+2.4m。長軸方向はN—13.5°—W。面積は27.0m²　**柱穴**　規模は比較的形の整っているP_1が最小で70×70cm、他は長径ではP_{10}の120cm、短径ではP_7の100cmが最大である。深さは48～75cmを測る。柱痕は土層断面から最大径を測ればP_1が23、P_2が26、P_3が28、P_4が18、P_5、P_6が15cmとなる。P_1、P_5を除き二段の掘り形をもつ。建て替えを示すものか。　**重複関係**　K39号掘立柱建物跡と長軸方向がかなり近い重複関係状態を示すが切り合いがなく新旧は不明。W17・18号溝とはP_3、P_5の上層にかなりの砂質を含むことから本遺構が旧。W20号溝とH10号土坑とは新旧は不明。

（前原）

K 38号掘立柱建物跡（図—661、図版—42）

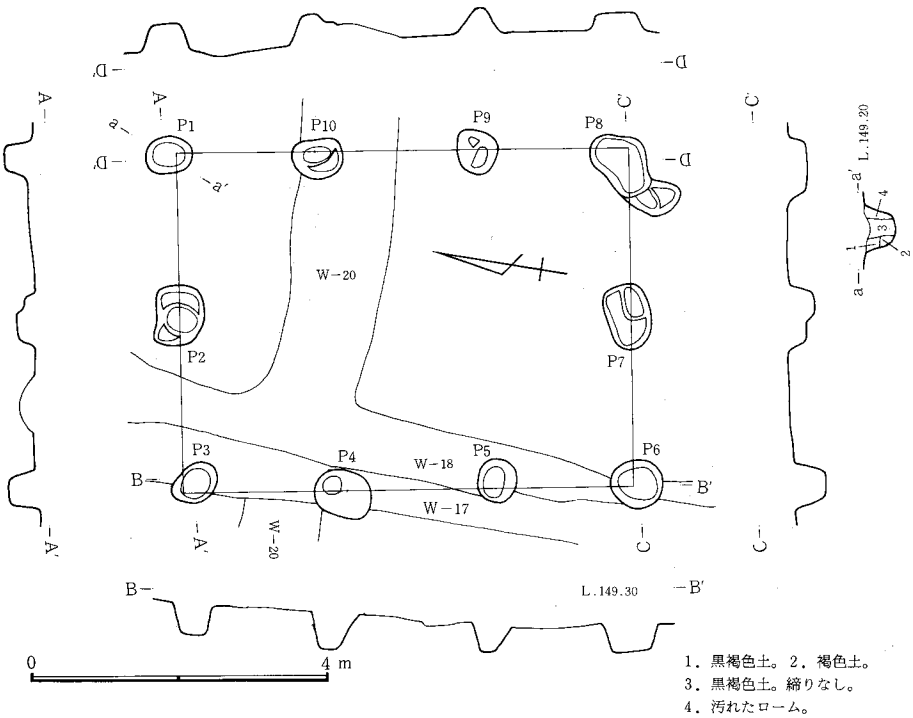


A．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。A-a．Aが非常に堅い。B．黒色土。C．黒褐色土。D．褐色土。1．黒褐色土。ローム、少量のＦＰ・Ｃ軽石。下になる程ローム量多くなる。1-a．黒色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石、ローム混入。1-b．黒色土。ＦＰ・Ｃ混入。2．黒色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊混入。3．黒色土とロームの混土。ＦＰ・Ｃ軽石少量混入。4．黒色土。浮石、ロームの混入わずか。

図－661　Ｋ－38号掘立柱建物跡

位置　西台地南辺に近いＪ１にある。コの字状に連なる16棟の掘立柱建物群の北東端に位置し、やや北方へ突出する位置にある。**形状**　２間(6.9m)×２間(4.8m)の南北方向に長軸をもつ長方形で、面積は33.1m²。長軸方向はＮ—1°—Ｗである。変形プランをもち、東辺と南辺は柱間３間となっており、P_4とP_{10}の間にP_7と対応して束柱（P_{11}）がある。　**柱穴**　方形に近い長円形で、最大128×63m（P_9）、最小55×45cm（P_{11}）である。深さは58～60cmで、径の割には浅いがしっかりした掘り形をもつ。P_5はへの字形に掘られており、底面標高は他より20～48cm低い。柱痕はP_1、P_2、P_3、P_6、P_7、P_{11}に見られ、径20～25cmであった。P_5、P_6、P_8、P_{10}は建て替えを示すものか。　**重複関係**　W—19と重複するが、新旧関係は不明である。　（川崎）

K 39号掘立柱建物跡（図—659、662　図版—42）



1．黒褐色土。2．褐色土。3．黒褐色土。締りなし。4．汚れたローム。

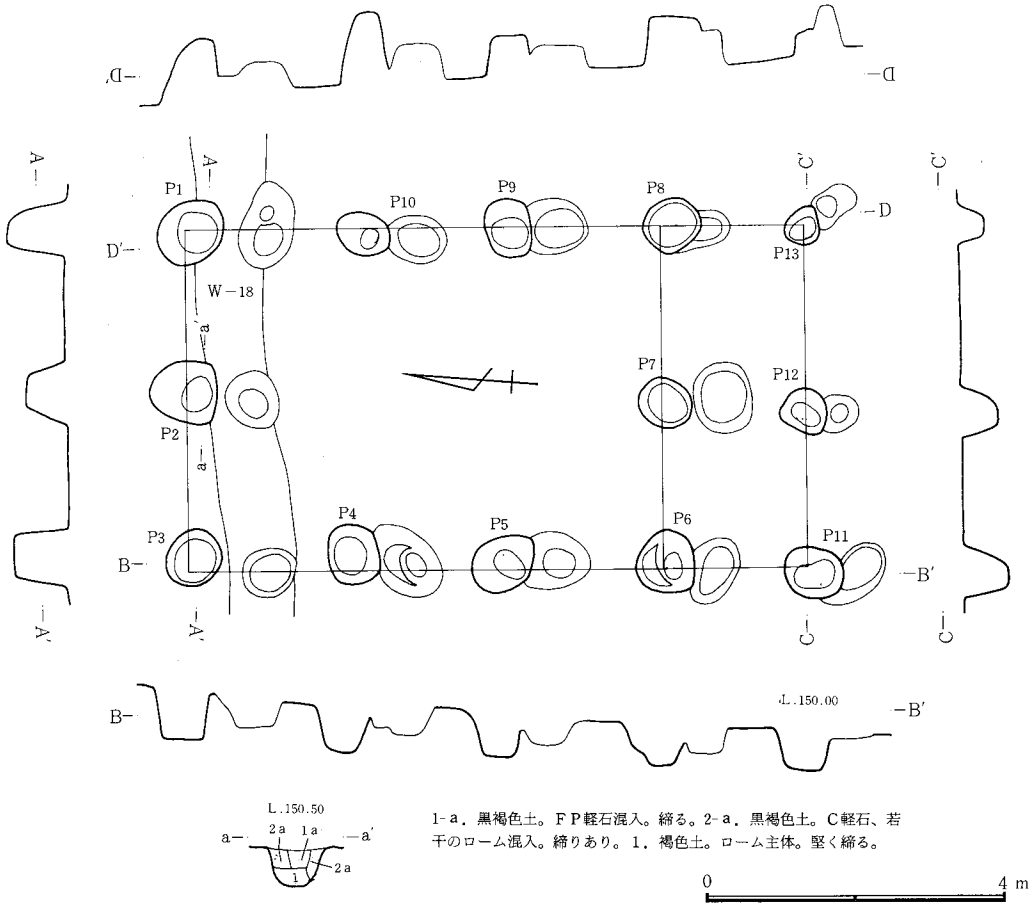
図－662　Ｋ－39号掘立柱建物跡

位置　Ｈ・Ｇ101。　**形状**　３間(6m)×２間（4.5m）の長方形の建物跡。柱間は南北方向、西側列北から2.1+2.1+1.8m、東側列北から1.8+2.4+1.8m、東西方向、北・南側列西から2・4+2.1m。長軸方向は、Ｎ—11°—Ｗ。面積は27m²。　**柱穴**　掘り形平面は全体的に小ぶりな隅丸長方形をうかがわせる。規模は不整なP_8を除いて、長径は57～86cm、短径は45～62cm。深さはP_4が49cmで最大、P_2が23cmで最少。柱痕は土層断面での最大径がP_1で26cm、P_2で20cm。P_2、P_7、P_8、P_{10}は建て替えを示すものか。　**重複関係**　K—37と長軸方向が近く規模も全く同じなので時期を接しての建て替えと考えられるが、切り合いがなく新旧関係は不明。W—17・18・20、ＨＰ—10との新旧は不明。　（前原）

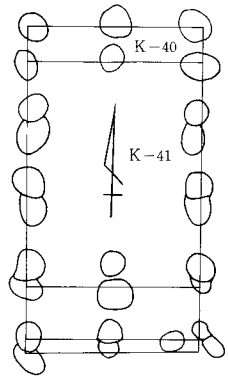
K 40号掘立柱建物跡（図—663、664　図版—42）

位置　西台地南のＧ１・２に位置する。K—41と重複している。南北の並びがほぼ一直線なのでK—40とK—41は建て替えか。**形状**　３間（6.3m）×２間（4.5m）の長方形の建物跡で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はＮ—5°—Ｗで面積は37.8m²である。柱間寸法は南北方向が2.1+2.1+2.1mである。東西方向が、北辺は西より2.4+2.1mで、南辺は2.1+2.4mである。南に廂をもつ。P_6、P_8の南へ1.8mで、柱間は2.1+2.4mである。　**柱穴**　平面は方形に近い円形が多く、掘り形は円筒形に近くしっかりとしている。径は70～80cm前後である。深さは50～100cmと深く。K—41が40cm前後なのとくらべると差がある。柱痕径は、20

cm前後のものが多い。　**重複関係**　K－41、W－18と重複する。K－41とはK－40P_8との切り合いからK－40が新しく、W－18とはW－18が新しいと思われるが、地層断面がなく不明である。　（井野）

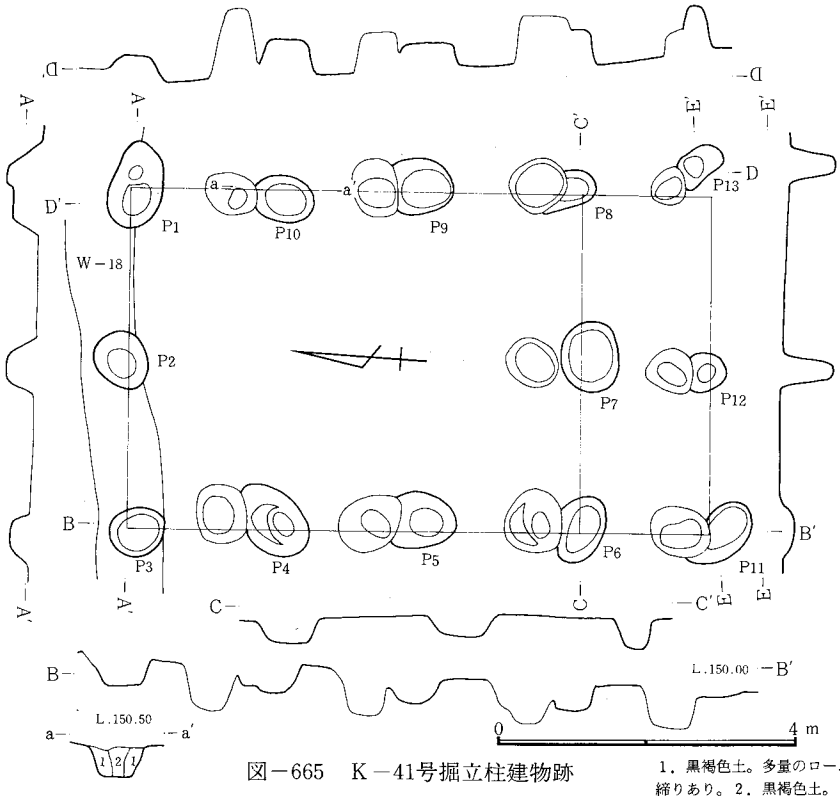


図－663　K－40号掘立柱建物跡



図－664　K－40・41号掘立柱建物跡関係図

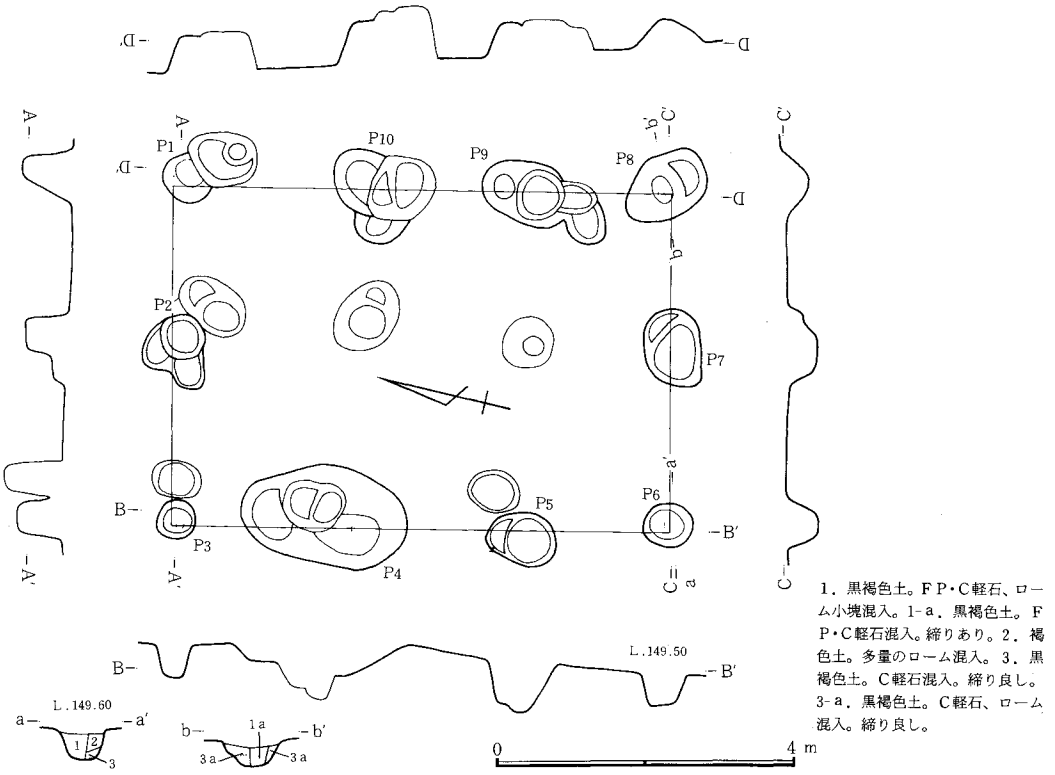
K41号掘立柱建物跡（図—664、665　図版—42）



図－665　K－41号掘立柱建物跡

位置　G1・2に位置する。K—40と重複。　**形状**　南北に長軸をもつ建物跡で、南北３間（6.0m）×２間（4.5m）の長方形である。南に廂をもつ。長軸方向はN—3.5°—Wで面積は27.0㎡である。柱間寸法は、南北が、2.1＋1.8＋2.1mで、東西が西より2.1＋2.4mである。廂部分は南に1.2mのところ。柱間寸法は西より2.1＋2.4mである。東端のP_{13}はややずれている。　**柱穴**　平面は円形に近いものが多い。断面は台形に近く。径は70～80cmが多い。深さは40cm前後である。柱痕径は20cm前後である。底面標高は北辺から南辺へと低くなっている。北辺は149.8m前後で、南辺は149.4m前後である。　**遺物**　P_iより土師器坏が出土している。　**重複関係**　K—40の項参照のこと。　（井野）

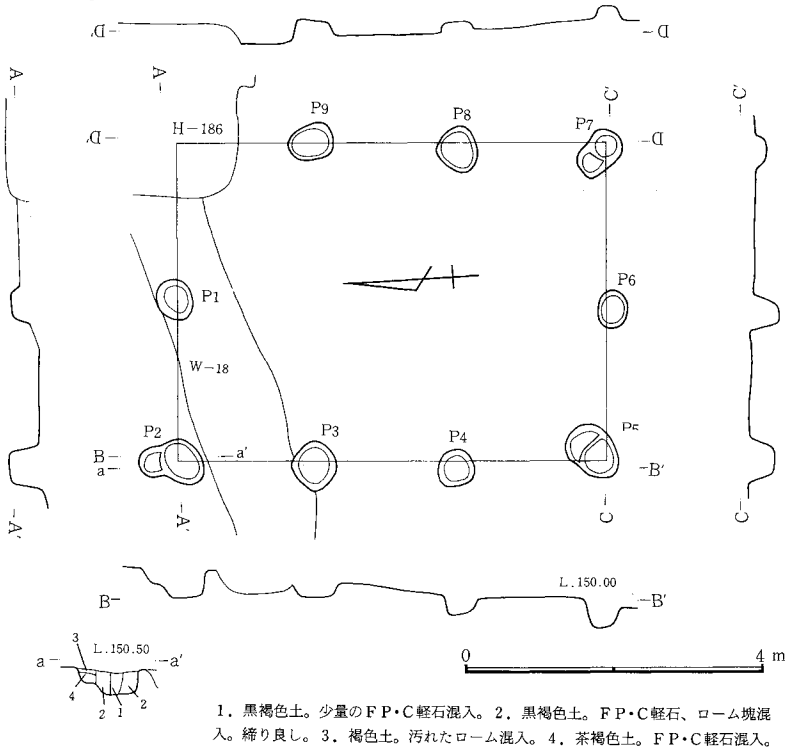
K42号掘立柱建物跡（図—656、666　図版—42）



図—666　K—42号掘立柱建物跡

位置　西台地南端のH・G1に位置する。掘立柱建物跡が東西に並ぶ中央付近に所在している。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形の建物跡で、南北3間（6.6m）×東西2間（4.5m）である。長軸方向はN—12°—Wで、面積は29.7m²である。柱間寸法は南北が2.4＋2.4＋1.8mで、東西は2.4＋2.1mである。　**柱穴**　平面はK—35との重複のため不整形をなしているものが多く、重複のないものは円形が多い。掘り形は、平面が円形のものは円筒形に近いものが多い。径は、平面円形のものは径50～60cm、深さは50～60cmである。柱痕はP_6とP_8に残り、径は25cmと21cmである。底面標高は、斜面南の柱穴が低い。P_2、P_4、P_5、P_7～P_{10}は建て替えを示すものか。　**遺物**　P_8より土師器坏出土。　**重複関係**　K—35の項参照のこと。　（井野）

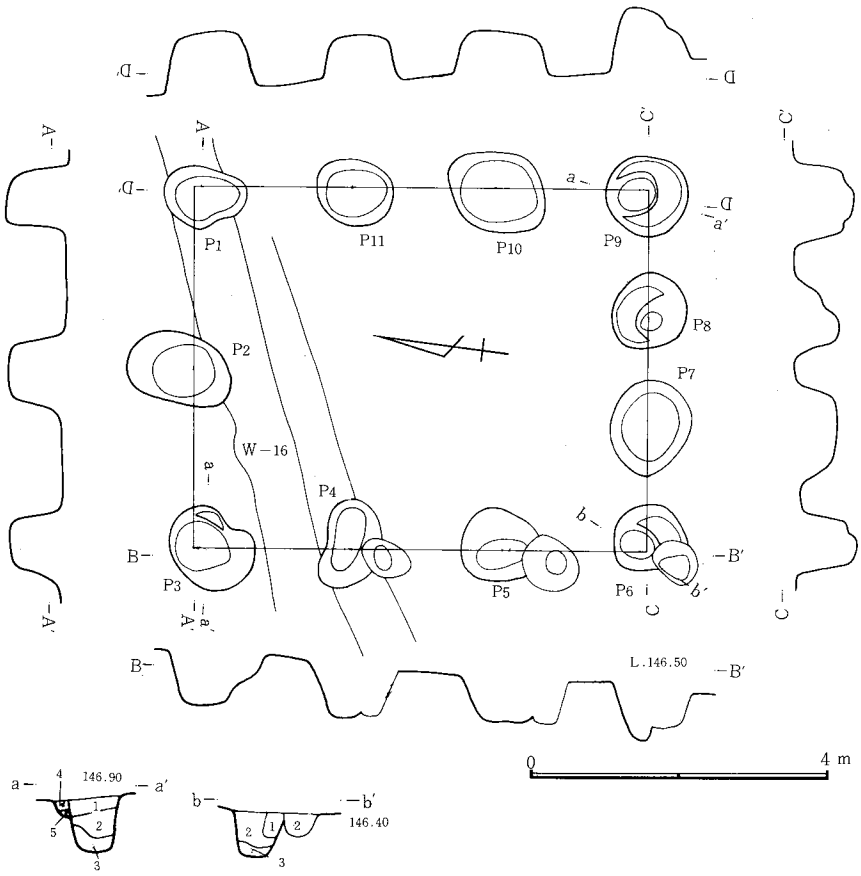
K43号掘立柱建物跡（図—667、図版—43）



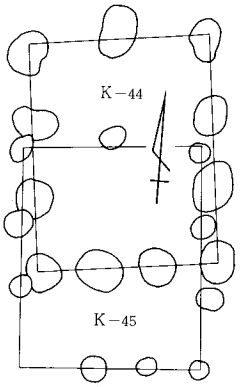
図—667　K—43号掘立柱建物跡

位置　G2。掘立建物跡集中部。　**形状**　3間（5.7m）×2間（4.2m）の長方形の建物跡。柱間は南北方向、西列北から1.8＋1.8＋2.1m、東列は—＋1.8＋2.1m。東西方向、西からは2.1＋2.1m。長軸方向はN—4°—E。面積は23.9m²。　**柱穴**　北東角の柱穴は重複により欠損。掘り形平面は方形をうかがわせる円形で角にあるP_2、P_5、P_7は建て替えをうかがわせるだるま形。規模は角を除いてP_8が58×50cm、P_6が50×37cmでおおむねその範囲にある。角も新と考えられる部分のみでは他の柱穴に近い。深さはP_5が最大で46cm、P_8が最少で18cm。柱痕は土層断面から最大径を測れば、P_3が14cm、P_5が22cmとなる。　**重複関係**　H186住居跡、W18号溝と重複しているが、W18号溝より本遺構は旧であり、H186号住居跡とは新旧関係不明。　**遺物**　関係遺物の出土なし。　（前原）

K44号掘立柱建物跡（図—668、669　図版—43、121　表—293）



図—669　K—44号掘立柱建物跡

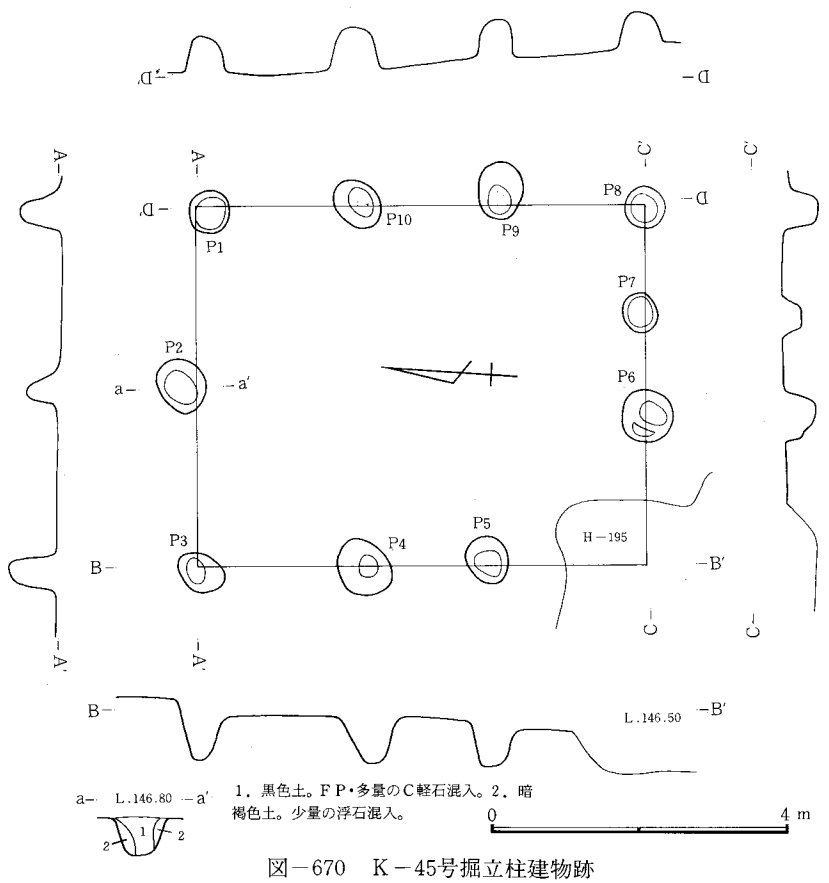


1．褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。2．黒色土。C軽石、ローム塊混入。3．黒色土とロームの混土。4．黒色土。FP・C軽石混入。5．ローム漸移層。

図—668　K—44・45号
掘立柱建物跡関係図

位置　西台地の南のE・F102に位置する。　**形状**　3間(6.0m)×2間(4.8m)。北辺は2間で南辺は3間である。柱間寸法は、南北辺が、北から2.1+1.8+2.1mである。東西辺は、北辺が2.4+2.4mで、南辺は1.8+1.2+1.8mである。長軸方向はN—8.5°—Wで、面積は28.8m²である。　**柱穴**　やや長方形に近い長円形の平面は円筒型に近い。径は94～140cm前後×80～100cm前後で、深さは60～80cm前後である。柱穴の底面の標高は145.7～145.9mである。柱痕跡は顕著ではない。P_3、P_6、P_8、P_9は二段の掘り形をもつ。　**遺物**　P_{11}より土師器坏(1・3)、須恵器蓋・坏(12・13)が、出土場所は不明だが須恵器坏(17)が出土。　**重複関係**　K—45と重複。K—44 P_6の断面図によりK—44が旧い。W—16との新旧は不明。　（井野）

K45号掘立柱建物跡（図—669、670　図版—43）

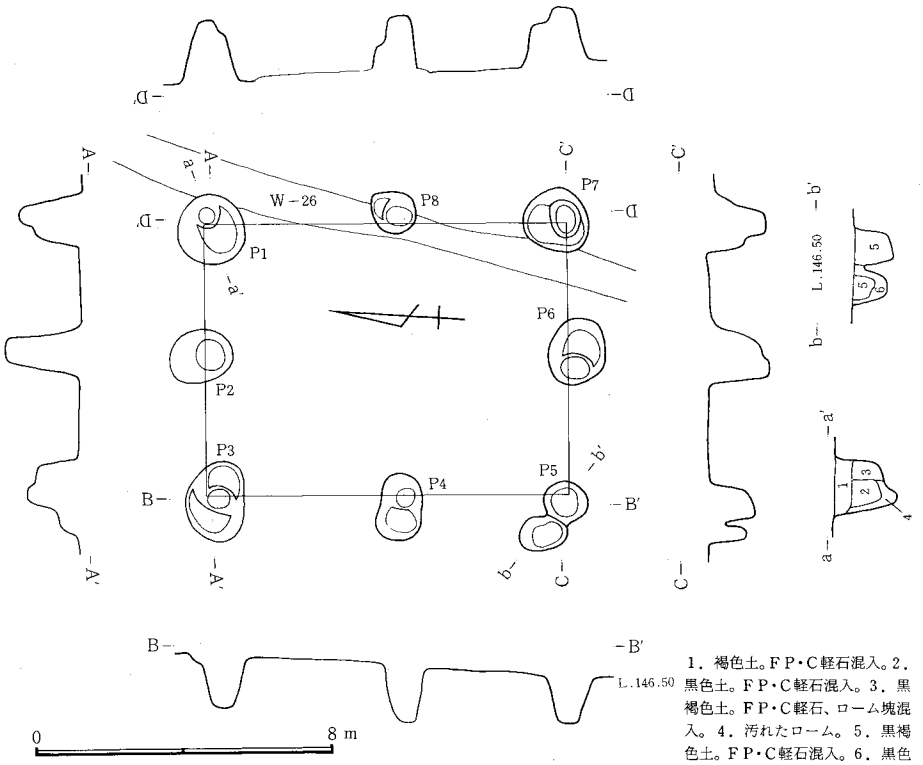


1．黒色土。FP・多量のC軽石混入。2．暗褐色土。少量の浮石混入。

図—670　K—45号掘立柱建物跡

位置　西台地南のE・F102に位置する。南への緩斜面に所在する。　**形状**　南北に長軸をもつ長方形で、3間（6.0m）×2間（4.8m）である。南辺は3間(推定)。柱間寸法は南北が、北より2.4+1.5+2.1mで、東西が、北辺は2.4+2.4mで、南辺は西より—+1.2m+1.5mである。長軸方向はN—5°—Wで面積は28.8m²である。　**柱穴**　ほとんどが60cm前後の径をもつ円筒形の掘り形をもつ。柱痕は顕著なものはなかった。柱穴の底面の標高は北辺が146.0m前後で、他は145.8m前後である。　**遺物**　土師器坏が出土。　**重複関係**　K—44と重複。K—44が旧い。H—195と重複しているが、ピットにあたる部分の地層断面に柱穴の跡がみられないことからK—44が旧いと考えられる。　（井野）

K46号掘立柱建物跡（図—671　図版—43、121　表—293）

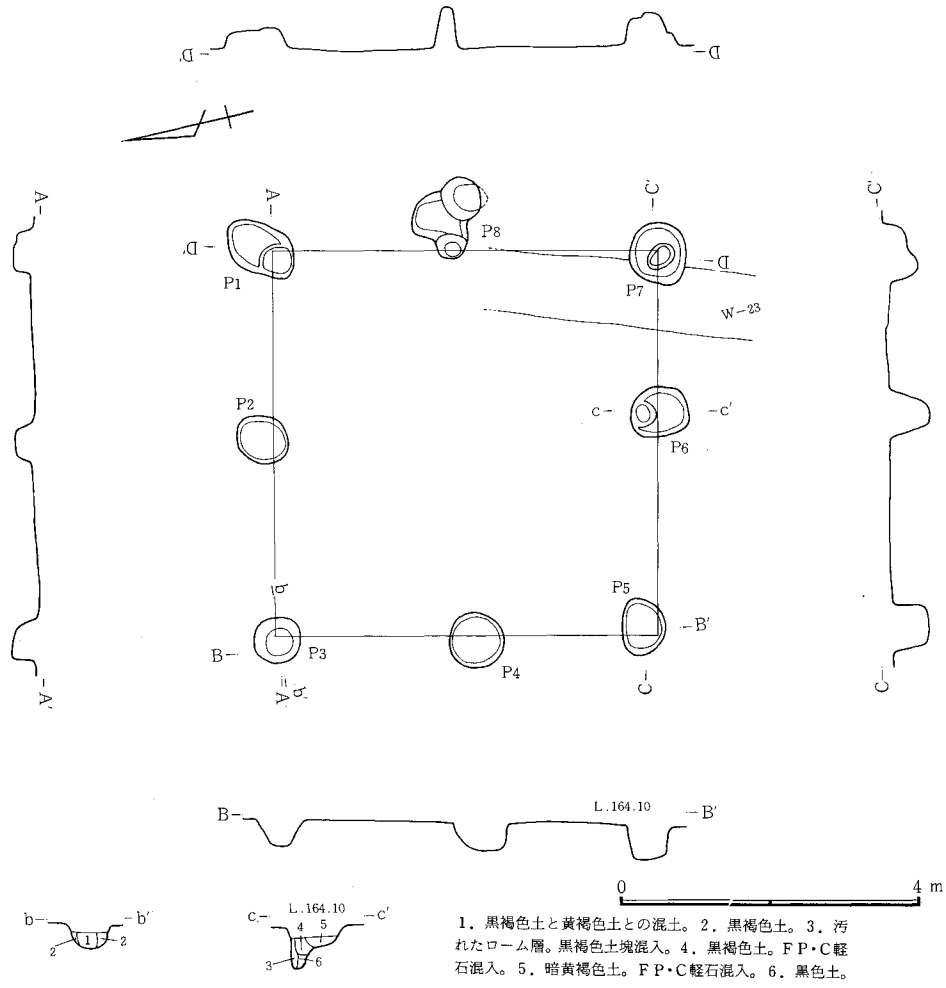


1．褐色土。FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石混入。3．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。4．汚れたローム。5．黒褐色土。FP・C軽石混入。6．黒色土。FP・C軽石混入。

図—671　K—46号掘立柱建物跡

位置　F103に所在しほぼ長軸方向を同じくするK—44とK—48の間にある。　**形状**　2間(4.8m)×2間(3.6m)の長方形で南北に長軸をとり、長軸方向N—3.5°—W、面積17.3m²を測る。西側柱穴列が2列の並びをもつことから、建て替えの可能性が考えられる。　**柱穴**　掘り形は基本的には円形であり深くしっかりしたものが大半である。特にP_2は現状で104cmを測り、ほぼ円筒形に掘られている。また、建て替えの想定される西側柱穴列は外側が内側のものよりも深くなる傾向にある。西側柱穴を除き二段の掘り形をもつものが多い。　**遺物**　坏(4・8)が出土している。　**重複関係**　W—26と重複する。P_8と重複するが、地層断面からは新旧は不明である。　（田口）

K47号掘立柱建物跡（図—672　図版—43）

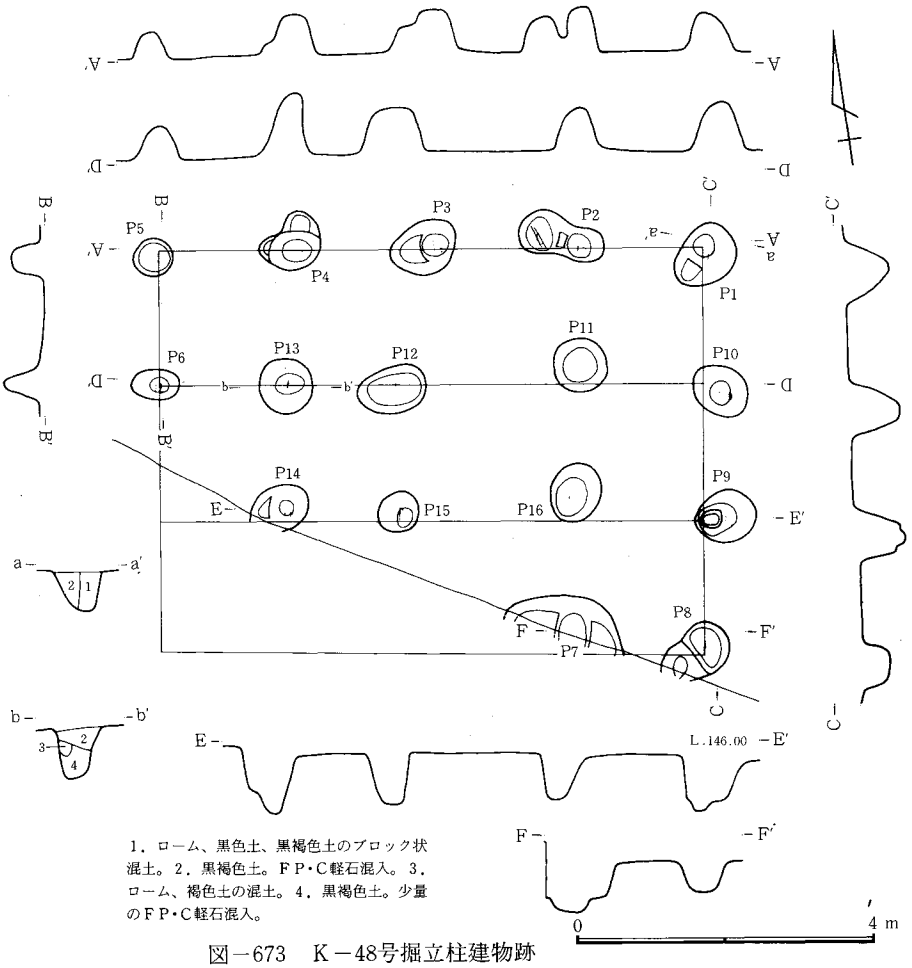


1．黒褐色土と黄褐色土との混土。2．黒褐色土。3．汚れたローム層。黒褐色土塊混入。4．黒褐色土。FP・C軽石混入。5．暗黄褐色土。FP・C軽石混入。6．黒色土。

図—672　K—47号掘立柱建物跡

位置　西台地北端に近いD・C20に位置する。南40mに掘立建物跡群をのぞむ。　**形状**　2間（5.1m）×2間（5.1m）の正方形の建物跡で、長軸方向はN—41.5°—E、面積は26.0m²である。柱間寸法は、東辺は北より2.4+2.7m、西辺は2.7+2.4m、北辺は西より2.7+2.4mで、南辺は3.0+2.1mである。　**柱穴**　平面形はやや楕円形のものが多く、掘り形は断面が円筒形で、底の一部に柱痕らしいくぼみをもつ。径はP_1、P_8を除き70cm前後のものが多い。深さは30cm前後が多く、二段の底をもつものは50cm前後になる。底面標高は、北辺が、163.7m前後で、南辺は163.5m前後である。柱痕はP_3での推定では径21cmである。　**重複関係**　W—23と重複する。切り合いはないが地層断面の土層中に軽石が混入られることによりW—23が新しい。　（杉浦）

K48号掘立柱建物跡（図—673　図版—43、121　表—290）

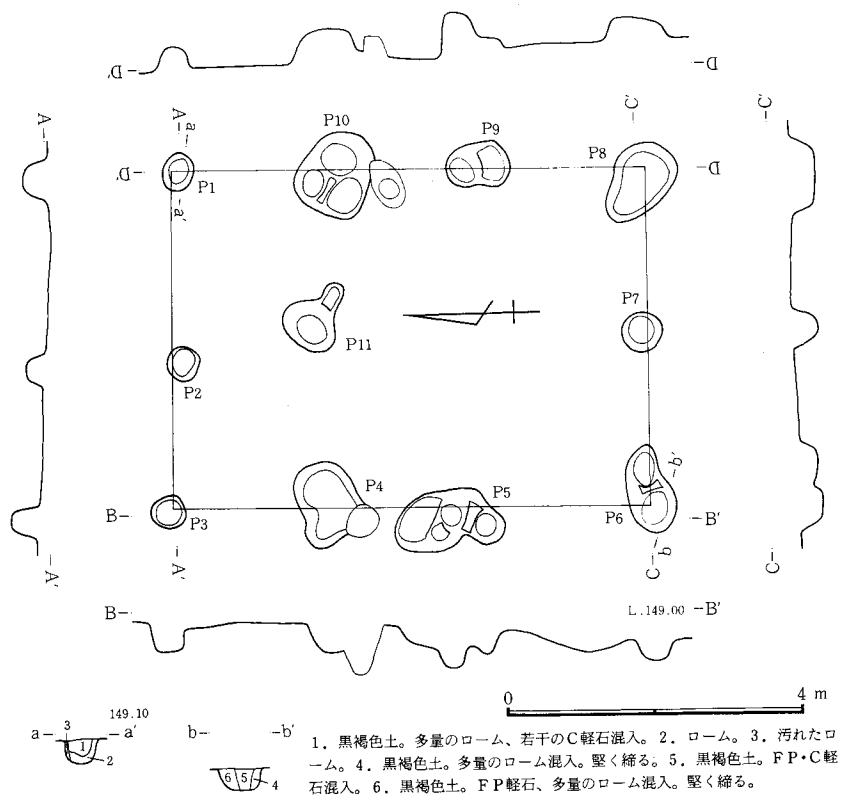


1．ローム、黒色土、黒褐色土のブロック状混土。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．ローム、褐色土の混土。4．黒褐色土。少量のFP・C軽石混入。

図—673　K—48号掘立柱建物跡

位置　西台地南端のF103に位置する。この地区は掘立柱建物跡が大きな集団となっており、K—48はその南の一群の中心部に所在する。　**形状**　4間（7.2m）×3間（5.4m）の長方形である。南西は調査区外になっている。柱間寸法は、東西方向が、西より1.8＋1.8＋1.8＋1.8mと1.8＋1.5＋2.1＋1.8mと1.5＋2.1＋1.8＋1.8mになっており、南北方向はすべて1.8mになっている。長軸方向はN—5°—Eで面積は推定31.0m²である。　**柱穴**　平面は円形で深くしっかり掘ってある。P_3、P_4、P_9は二段の底をもつ掘り形になっている。径はP_7を除き80cm前後×60～70cmである。深さは50～70cm。P_5、P_6は径が45cm前後で深さ40cm前後と小さく、廂の柱とも考えられる。柱穴の底面の標高は北列が145.3m前後であるが南列は145.1m前後である。廂と思われるP_5、P_6は145.5m前後と深い。　**遺物**　P_{11}より須恵器坏と土師器坏が出土している。　（井野）

K49号掘立柱建物跡（図—650、674　図版—43）

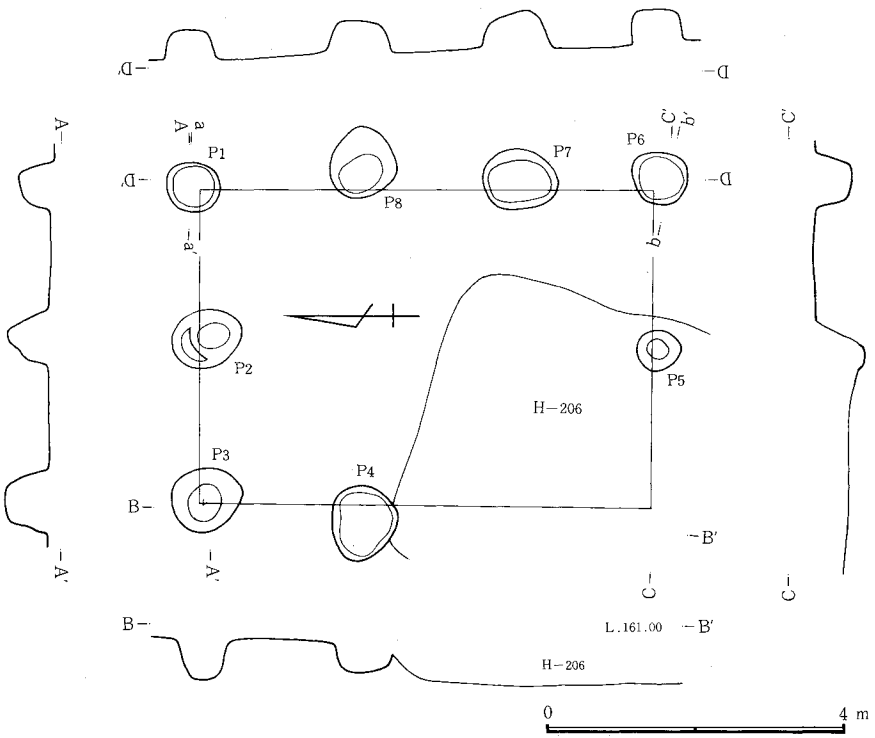


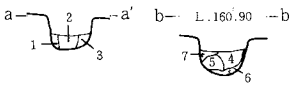
1．黒褐色土。多量のローム、若干のC軽石混入。2．ローム。3．汚れたローム。4．黒褐色土。多量のローム混入。堅く締る。5．黒褐色土。FP・C軽石混入。6．黒褐色土。FP軽石、多量のローム混入。堅く締る。

図—674　K—49号掘立柱建物跡

位置　J101、H101に所在し、K31号掘立柱建物跡と重複する。東はH188・189住居跡と北はK22号掘立柱建物跡・H101・102号住居跡と接している。　**形状**　桁行3間（6.3m）、梁行2間（4.5m）、総柱とすると南北中央列の柱を一つ欠くような、変形プランを呈している。柱間寸法は、桁行西列2.1＋1.8＋2.4m、中央2.1＋4.2m、東列2.1＋1.8＋2.4m、梁行北列2.1＋2.4m、南列2.4＋2.1m。面積28.4m²。長軸はN—0.5°—Eの方向を示す。　**柱穴**　P_5、P_{10}は3個の、P_6、P_9は2個の柱穴が重複しており、複雑な平面形及び断面を呈している。このことから、1ないし2回の建て替えのあったことも推定できる。またP_4は、K31号掘立柱建物跡の柱穴と一部で重複がある。　**遺物**　P_{10}内から、土師器の坏片が出土した。その他、K31号掘立柱建物跡とは南北にずれがあるだけで、長軸の方向はほぼ一致している。切り合いが明確でなく新旧の関係は不明。　（杉浦）

K50号掘立柱建物跡（図—675　図版—43）



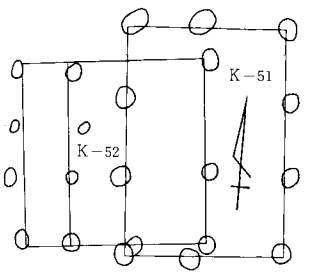


1．黒褐色土。ローム粒・塊混入。締りあり。2．黒褐色土。ローム粒・塊混入。3．黒色土。少しローム混入。締りあり。4．黒褐色土。FP・C軽石、ローム混入。5．黒色土。少量のFP・C軽石混入。締りあり。6．褐色土。多量のローム混入。7．よごれたローム。

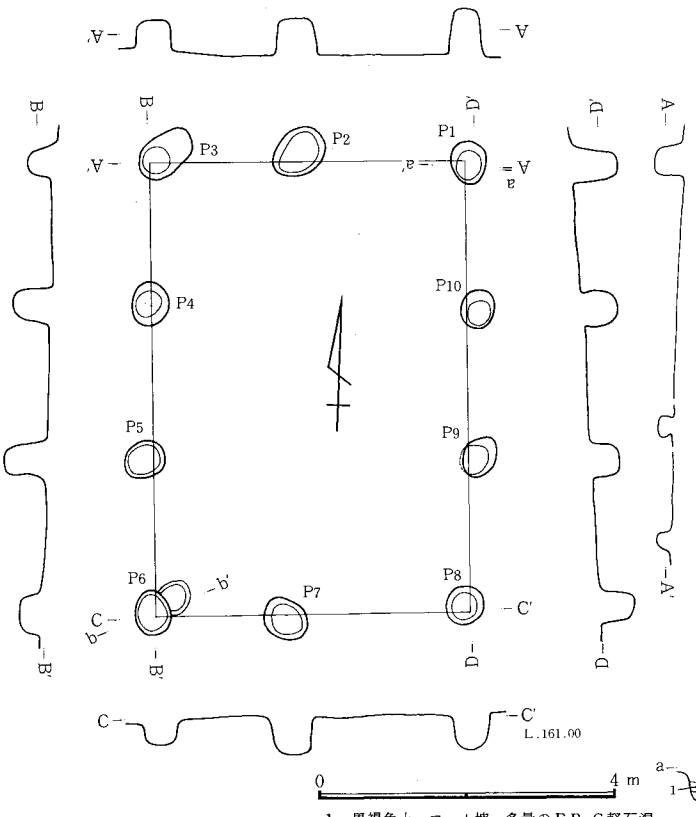
図—675　K—50号掘立柱建物跡

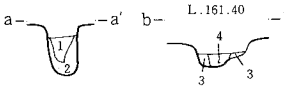
位置　B15・16、西台地北東遺構集中部の掘立柱建物跡群では南端。　**形状**　3間（6.0m）×2間（4.2m）の長方形の建物跡。柱間は南北方向西列北から2.1＋—東列は2.1＋2.1＋1.8m。東西方向は北列、西から2.1＋2.1m。長軸方向はN—1°—W。面積は25.2m²。　**柱穴**　掘り形平面はおおむね楕円形。規模は最大がP₇の92×78cm、最小はP₅の56×50cm。深さはP₁が47cmで最小、P₅の70cmが最大。柱痕は、土層断面からの最大径は、P₁が30cm、P₄が18cm、P₇が20cm。　**重複関係**　H206号住居跡と南西で重複。H206号住居跡の床を切ってP₅が作られているので本遺構が新しい。なおH206号住居跡はB軽石の純層が埋めている。　**遺物**　本遺構関係の遺物は検出されなかった。

（前原）



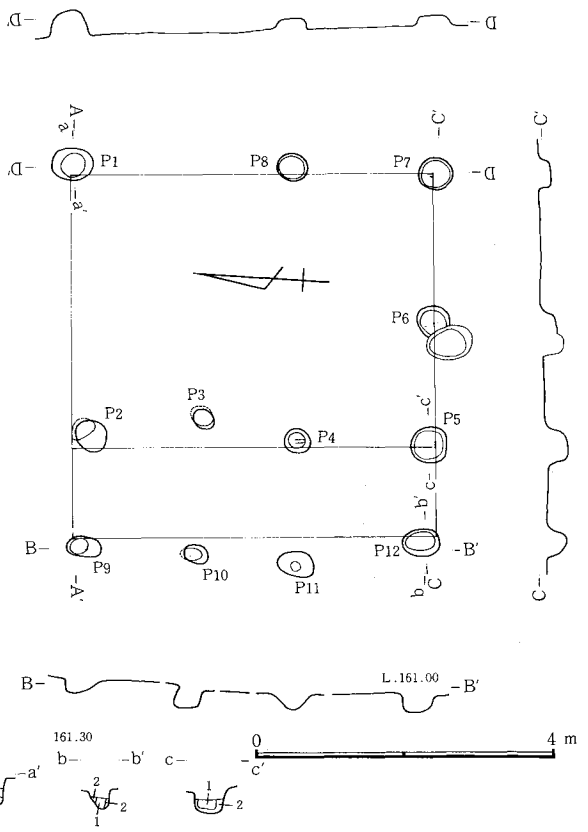
図—676　K—51号・52号掘立柱建物跡関係図





1．黒褐色土。ローム塊、多量のFP・C軽石混入。2．黒褐色土。若干のローム塊混入。3．黄褐色土。FP・C軽石、若干のローム塊混入。4．褐色土。FP・C軽石、若干の汚れたローム混入。

図—677　K—51号掘立柱建物跡



K—52号掘立柱建物跡

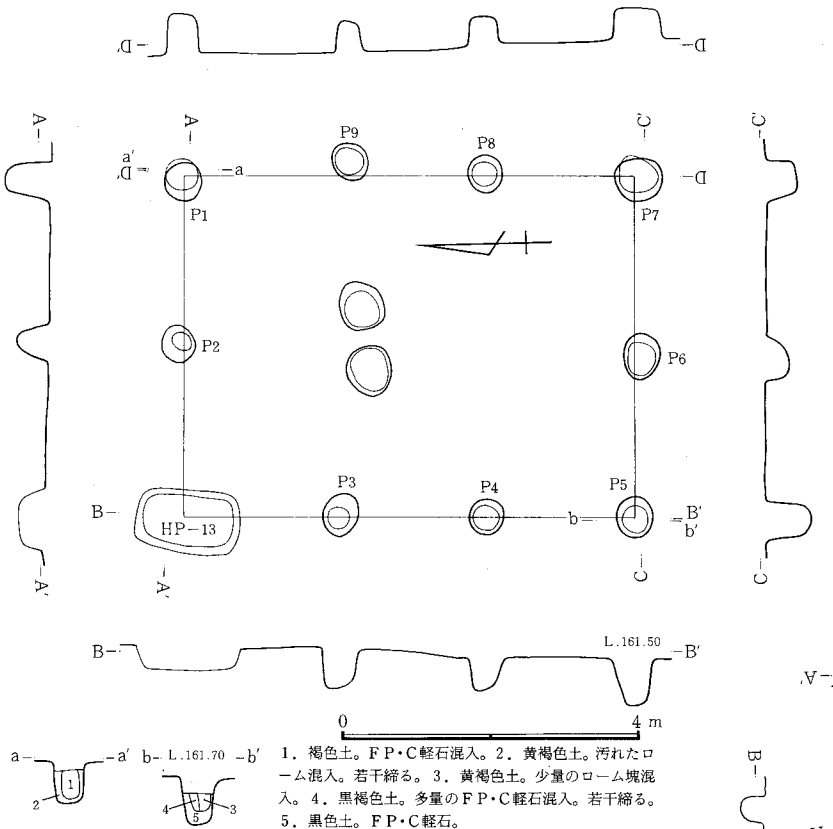
K51号掘立柱建物跡（図—676、677）

位置　B16に位置し、北にK53号掘立柱建物跡が、東南にH209号、南にH206・207号住居跡がある。　**形状**　3間（6.0m）×2間（4.2m）の長方形である。長軸方向はN—3°—Wで、面積は25.2m²である。　**柱穴**　両面はほぼ円形を呈し径40～80cm、深さ30～60cmで断面はしっかりした円筒形である。柱痕跡らしいものがP_7、P_{10}でみられたが径は20cm前後であった。柱間はP_3～P_4・P_{10}～P_9・P_6～P_7間が1.8m、P_7～P_8間が2.4mで他は全て2.1mである。　**重複関係**　K52号掘立柱建物跡と重複しているが、P_6における平面の状況からすると、K51号掘立柱建物跡が新しいものと推定される。　（中村）

K52号掘立柱建物跡（図—676、678）

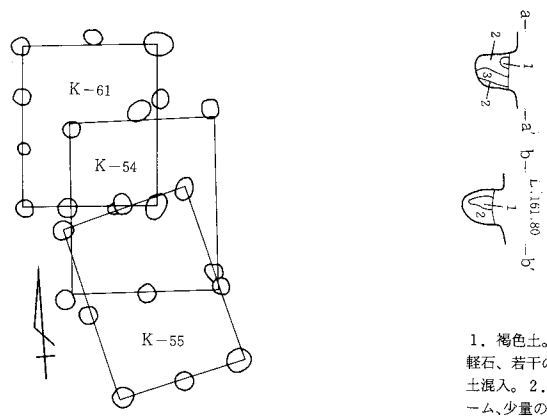
位置　B16に位置し、K51号掘立柱建物跡と重複している。　**形状**　2間（3.6m）×3間（4.8m）の長方形の桁行に、1間（1.2m）の廂がついた形を示している。主軸はN—4°—Wで、面積は23.0m²である。廂は山側にみられる。　**柱穴**　平面は円形を呈し、母屋のそれは30～60cm、深さ20～40cm、廂のそれは径20～50cm、深さ20～35cmで、廂の柱穴が小さ目である。柱間は前記の他、P_7～P_8間が1.5m、P_8～P_9間が2.1m、P_1～P_{10}間が3.6mで他は1.8mである。柱痕はP_3、P_4にそれらしいものが認められるが、径18cmであった。柱穴の並びからすると、P_4、P_{11}が若干内側に入り気味である。　**重複関係**　K51号掘立柱建物跡の項参照のこと。　（中村）

K53号掘立柱建物跡（図—679　図版—44）

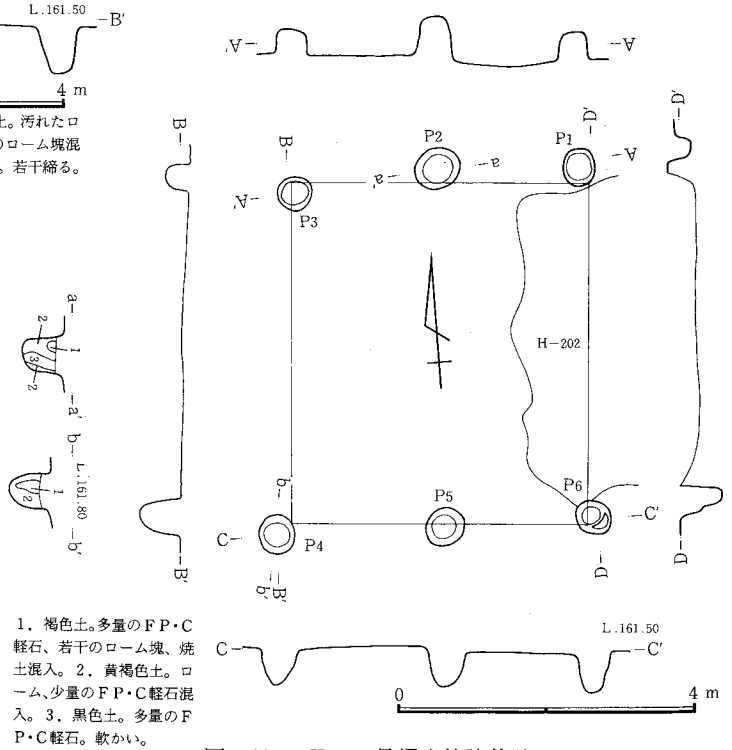


図—679　K—53号掘立柱建物跡

位置　B16・17。南にはK51号・52号掘立柱建物跡が、東にはK54・55・61号掘立柱建物跡・H202号住居跡がある。　**形状**　2間（4.5m）×3間（6.0m）の長方形で、面積は27.0m²である。長軸方向はN—2°—Eで南北に長い。　**柱穴**　計11個検出されたが、北西隅は土坑により切られている。平面はP_7を除き円形を呈し、径40～65cm、深さ30～56cmで、断面形も比較的しっかりした円筒形である。P_7は平面やや方形で、向きが他と異なり45度である。柱痕跡はP_1、P_2、P_7、P_8、P_9で認められたが、径16～28cmであった。柱間は1.8m、2.1m、2.4mという数値である。　**重複関係**　前記のとおり、H13号土坑により柱穴が切られていることから、K53号掘立柱建物跡が古いと推定される。　（中村）



図—680　K—54・55・61号掘立柱建物跡関係図

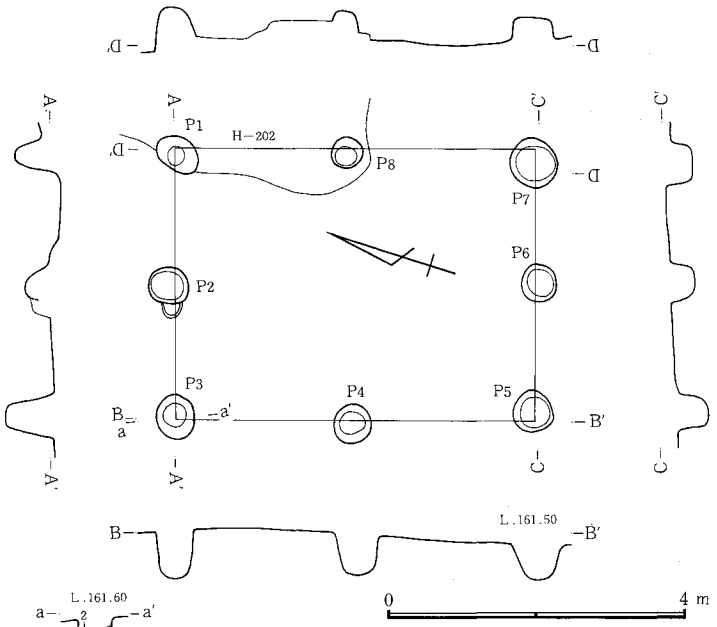


図—681　K—54号掘立柱建物跡

K54号掘立柱建物跡（図—680、681　図版—44）

位置　B_{16}・B_{17}。東でK62号掘立柱建物跡に接し、北にH194号住居跡、南にH204号住居跡、西にK53号掘立柱建物跡を臨む位置にある。　**形状**　2間（3.9m）×1間（4.5m）の長方形を呈している。長軸方向はN—4°—Wで、南北に長い。面積は17.6m²である。　**柱穴**　掘り形は平面円形で、径40～55cm、深さ34～59cmである。断面は円筒形を呈し、径に比較して深さがあり比較的しっかりした丸底の柱穴である。柱痕跡はP_2、P_3、P_5、P_6に認められ、径15～30cmの太さである。柱間はP_1～P_6間が4.5m、P_1～P_2間が2.1m、P_2～P_3間が1.8m、P_3～P_4間が4.5m、P_4～P_5間が1.8m、P_5～P_6間が2.1m。　**重複関係**　K61・55号掘立柱建物跡、　H202号住居跡と重複関係にあるが、ピットなどの切り合いがなく前後関係は不明である。　（中村）

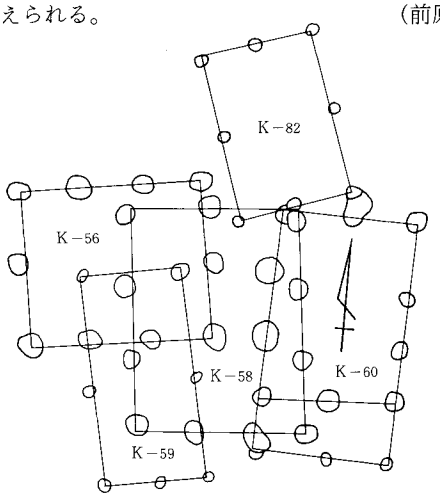
K55号掘立柱建物跡（図—680、682　図版—44　表—293）



1．黒色土。FP・C軽石、焼土粒混入。2．褐色土。炭化物混入。3．褐色土。

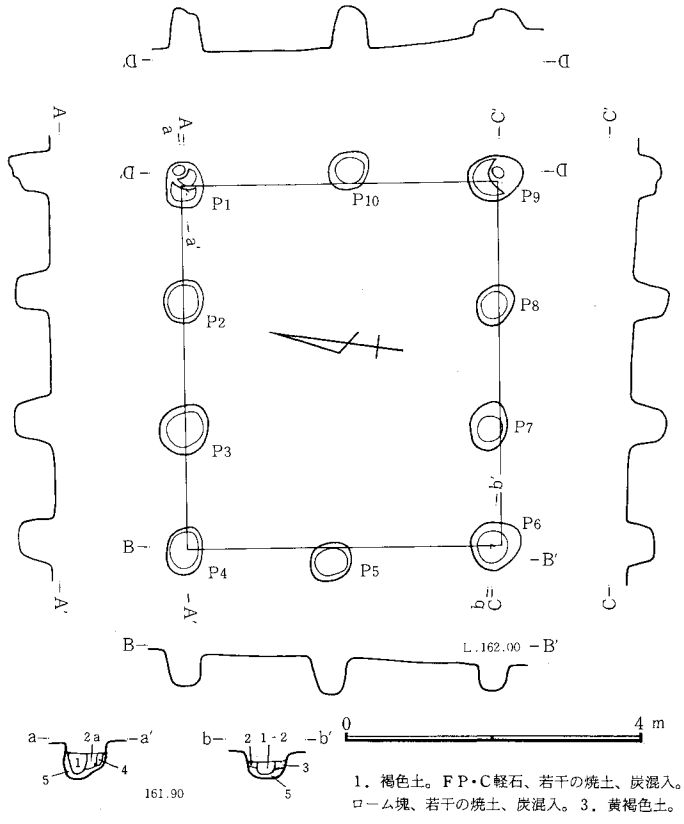
図—682　K—55号掘立柱建物跡

位置　B16・17。　**形状**　2間（4.8m）×2間（3.6m）の長方形の建物跡。柱間は、南北方向が東、西側とも2.4+2.4m、東西方向は北、南側とも1.8+1.8m。長軸方向はN—14°—E。面積は17.3m²。　**柱穴**　掘り形平面はほぼ円形。規模はP_7が60×53cmで最大。P_8が42×40cmで最少。深さはP_3が67cmで最大、P_7が42cmで最小。柱痕は、P_3、P_4、P_7の土層断面図に見られ、最大径が17cm前後である。　**重複関係**　北側で長軸方向がやや東に偏してK—54、61北東部でH—202と重複関係にあるがK—54とは切り合いがないので新旧関係は不明。P_2はK—61P_8を切り、P_1はH—202の床面炭火物を切っているので、K—61、H—202とも本遺構より古いと考えられる。　（前原）



図—683　K—56・58・59・60・82号掘立柱建物跡関係図

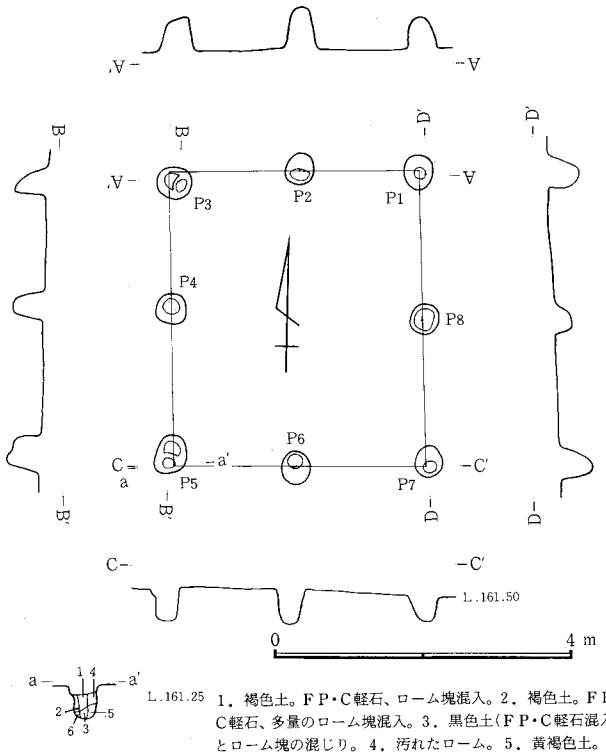
K56号掘立柱建物跡（図—683、684　図版—44）



1．褐色土。FP・C軽石、若干の焼土、炭混入。1-a．1にローム塊混入。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。2-a．2にローム塊、若干の焼土、炭混入。3．黄褐色土。FP・C軽石混入。4．黄褐色土。多量のローム混入。5．汚れたローム。

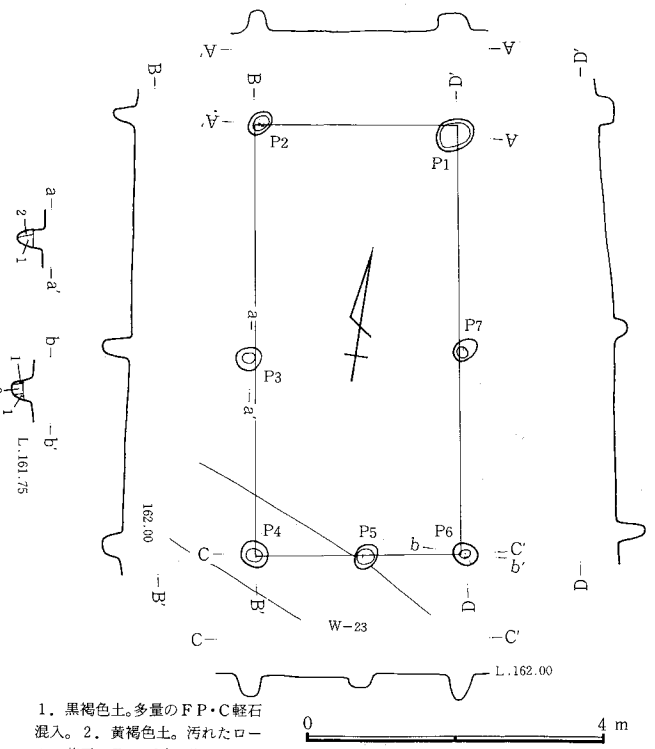
図—684　K—56号掘立柱建物跡

位置　A・B17に位置し、東でK82・60に、南西でK—62に接し、南でK—57に、西でH—194と接している。　**形状**　3間（4.8m）×2間（4.2m）の長方形を呈している。長軸方向はN—19°—Wで東西に長く、西へのぶれが他に比して大きい。面積は20.2m²である。　**柱穴**　掘り形は平面隅丸長方形を呈し、短辺は44～63cm、長辺は52～70cm、深さ36～55cmの大きさである。掘り形断面は円筒形で、径に比較して深さがあり、しっかりした柱穴である。隅柱のP_9は他と異なり45度の向きに掘られている。柱痕跡はP_2、P_{10}を除き認められたが径20～29cmであった。柱間は桁行（東西方向）が西から東へ1.5+1.8+1.5m、梁行が北から南へ2.1+2.1mの間隔で整然としている。　**重複関係**　K—58・59と重複しているが、ピットの切り合い関係がなく、新旧関係は不明である。　**遺物**　P_2から炭化物（縄？）が出土。　（中村）



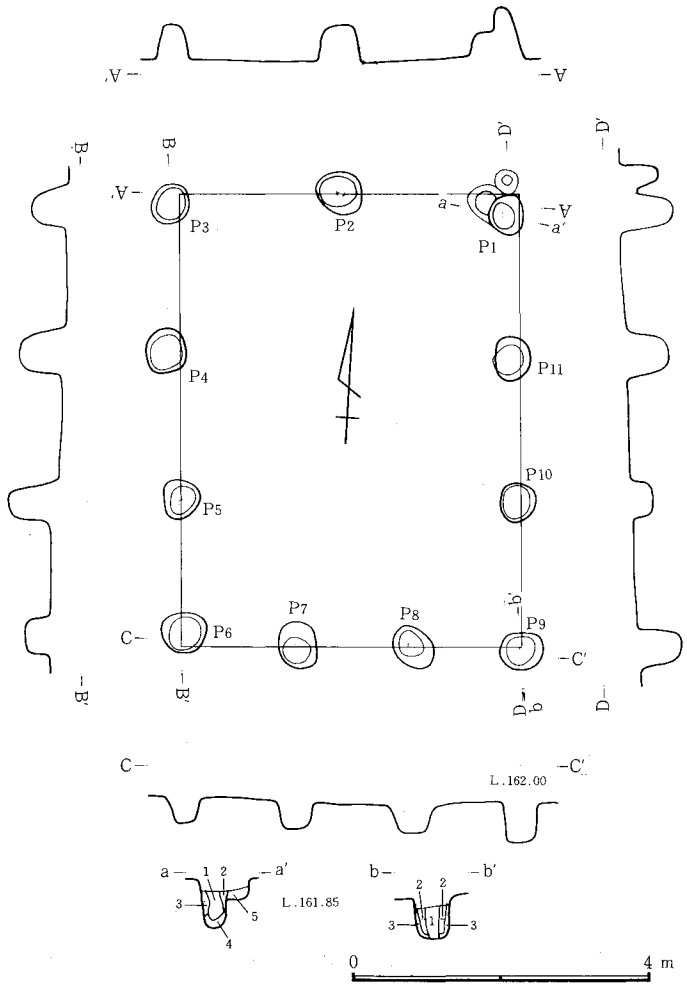
1．褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。2．褐色土。FP・C軽石、多量のローム塊混入。3．黒色土（FP・C軽石混入）とローム塊の混じり。4．汚れたローム。5．黄褐色土。FP・C軽石混。6．二次堆積のローム。

図－685　K－57号掘立柱建物跡



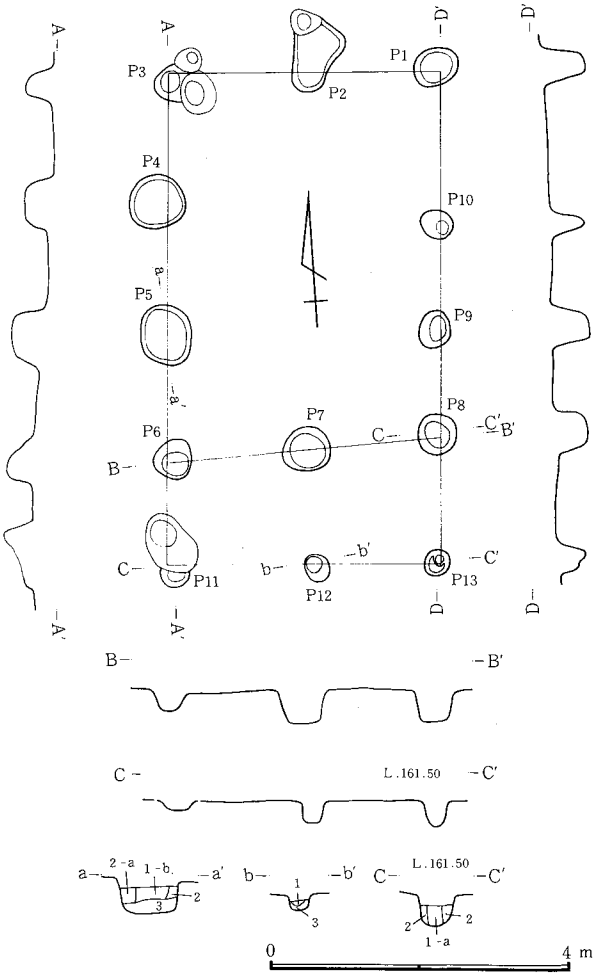
1．黒褐色土。多量のFP・C軽石混入。2．黄褐色土。汚れたローム、若干のFP・C軽石混入。

図－678　K－59号掘立柱建物跡



1．褐色土。多量のFP・C軽石、若干の焼土粒混入。締りなし。2．褐色土。FP・C軽石混入。締り強し。3．黒色土。FP・C軽石混入。4．黄褐色土。FP・C軽石、ローム混入。5．黄褐色土。FP・C軽石混入。6．褐色土。FP・C軽石、少量の焼土、炭化物粒、ローム塊混入。7．黒褐色土。FP・C軽石混入。8．汚れたローム。FP・C軽石含む黒色土混入。

図686　K－58号掘立柱建物跡



1．褐色土。FP・C軽石、焼土、炭粒、ローム塊混入。1-a，1より焼土、炭化物が少く白っぽい。1-b，1が堅く締る。2．褐色土。FP・C軽石、ローム塊、若干のローム粒。2-a，黄褐色土。少量のFP・C軽石。3，汚れたローム。

図－688　K－60号掘立柱建物跡

K57号掘立柱建物跡（図—685）

位置　A17に位置し、北にK59号掘立柱建物跡を、西にK62号掘立柱建物跡を臨み、南西にH204号・南東にH198号・北東にH196号住居跡を臨む位置にある。　**形状**　2間（3.9m）×2間（3.3m）の長方形を呈している。長軸方向はN—9°—Wで、南北に長い建物跡である。面積は12.9m²である。　**柱穴**　掘り形平面形は円形で、径36～48cm、深さ23～53cmの大きさである。断面は円筒形で、径に比較して深く、しっかりしている。底は四隅が丸底で、中間が平底の傾向がみられる。柱痕跡はP_7を除き全てに認められ、径19～23cmの太さであった。柱間は桁行（南北方向）西側・東側ともに1.8mと2.1mであり、梁行は1.6mと1.7mである。なお、P_3の掘り形は、平面が若干長楕円形であるが、その向きは、他の柱の並びに対して45度に掘られている。P_5にもP_3に以た傾向がみられる。　（中村）

K58号掘立柱建物跡（図—683、686　図版—44）

位置　A17。東でK82・60号掘立柱建物跡に、西でK62号掘立柱建物跡に接し、南にK57号掘立柱建物跡を、北西にH194号住居跡に臨んでいる。　**形状**　3間（6.0m）×3間（4.5m）の長方形を呈している。長軸方向はN—5°—Wで、南北に長い建物跡である。面積は27.0m²である。　**柱穴**　掘り形平面は、やや方形に近い円形で、径36～62cm、深さ32～73cmである。断面は円筒形であり、P_6・P_7・P_8・P_{10}は浅いが、他は径に比べて深い掘り形となっている。柱痕跡と推定されるものは全てに認められ、径18～26cmの太さである。柱間は桁行が2.1+1.8+2.1mである。梁行は南側で1.5mの等間隔の3間であるが、北側は2.1+2.4mの2間となっている。　**重複関係**　K56・59・82号建物跡と重複しているが、切り合いがないことと、あっても不明瞭なため、新旧関係は不明である。K60号掘立柱建物跡と重複。（K60号掘立柱建物跡の項参照）　（中村）

K59号掘立柱建物跡（図—683、687　図版—44）

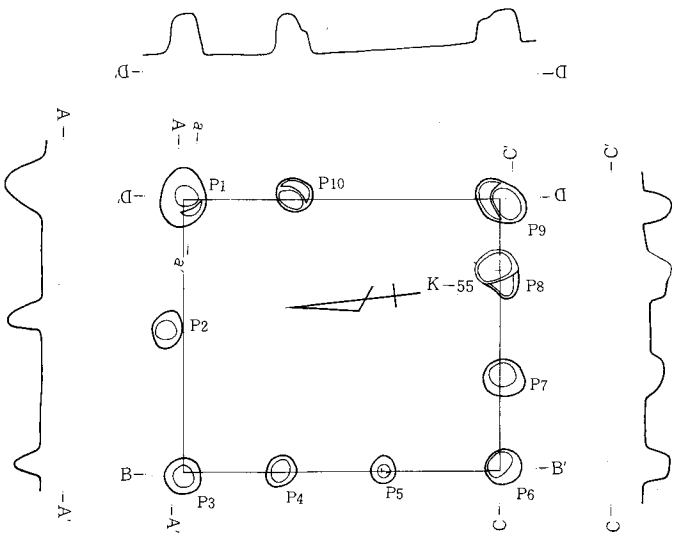
位置　A17。東はK60号掘立柱建物跡に、西はK62号掘立柱建物跡に、南にK57号掘立柱建物跡、北西にH194号住居跡に臨んでいる。　**形状**　2間（5.7m）×2間（2.7m）の長方形を呈している。長軸方向はN—5°—Wで、南北が特に長に建物である。面積は15.4m²である。　**柱穴**　掘り形平面形はP_1が隅丸方形であるが、他は小ぶりな円形をしている。径は21～55cm、深さは19～42cmである。掘り形断面は円筒形で底は丸底である。柱痕跡はP1に認められ径16cmの太さである。柱間は桁行が3.0+2.7mで、梁間は南側は1.5+1.2mの2間であるが、北側は2.7mの1間である。桁行が梁行の2倍以上あり、細長い建物跡である。

重複関係　K56・58号掘立柱建物跡と重複しているが、ピット間の切り合い関係がないため、新旧関係は不明である。W—23と重複するが、W—23が新しく、時期差があるので切り合い関係はない。　（中村）

K60号掘立柱建物跡（図—683、688）

位置　A17。西でK56・59号掘立柱建物跡に接している。　**形状**　3間（5.1m）×2間（3.6m）の身舎に南に1間（1.5m）の廂が付いた長方形である。長軸方向はN—3°—Eで南北に長く、他と異なり東にふれている。面積は身舎が18.4m²、廂を含めると23.8m²となる。　**柱穴**　P_1～P_3、P_9、P_{10}は明瞭でないが、身舎部の柱穴は平面が隅丸長方形に近く、底部は平らでしっかりしている。大きさは短辺30～72cm、長辺33～96cm、深さ13～58cmである。断面は円筒形で、柱痕径14～37cmである。柱間は身舎の桁行西側で1.8+1.5+1.8m、東側で2.2+1.2+1.5mである。梁行は北側で1.8m・南側で1.8+1.8mに等間隔である。　**重複関係**　K58号・82号掘立柱建物跡と重複している。その内、K58号掘立柱建物跡のP_1の切り合いの状態からすると、K60号掘立柱建物跡が旧ということになる。　**遺物**　埋土中から土師器坏破片32点、須恵器坏6点が出土。　（中村）

K61号掘立建物跡（図—680、689　図版—44）

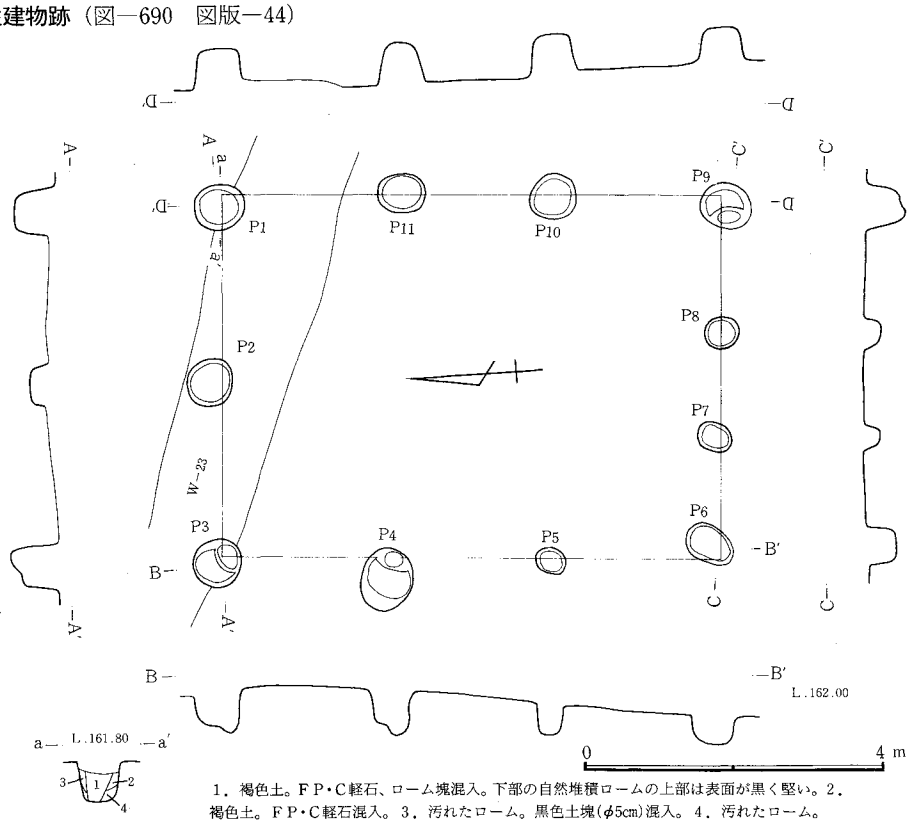


図—689　K—61号掘立柱建物跡

位置　B17。東でH202号住居跡に接し、北にH194号、西にH53号住居跡に臨んでいる。　**形状**　3間（4.2m）×3間（3.6m）の長方形で、南北に長い建物跡である。長軸方向はN—6°—Eで、やや東にブレている。面積は15.1m²と小さい。　**柱穴**　掘り形平面はP_1、P_9は隅丸長方形で、他は円形である。大きさは長径34～77cm、短径14～48cm、深さ25～65cmである。断面はほぼ円筒形であるが、P_7、P_8は径に比較して浅く、すり鉢状になっている。柱間は桁行西側で1.2+1.5+1.5mの3間、東側は1.4+2.2mの2間となっている。梁行は北側で1.8mの等間隔2間、南側は1.2+1.2+1.2mの等間隔となっている。P_1、P_9、P_{10}は比較的大きく、P_9、P_{10}は二段の底。　**重複関係**　K54号・55号掘立柱建物跡と重複しているが、K54号掘立柱建物跡との関係は不明。K55号掘立柱建物跡とは本跡の方が旧い。

（中村）

K62号掘立柱建物跡（図—690　図版—44）

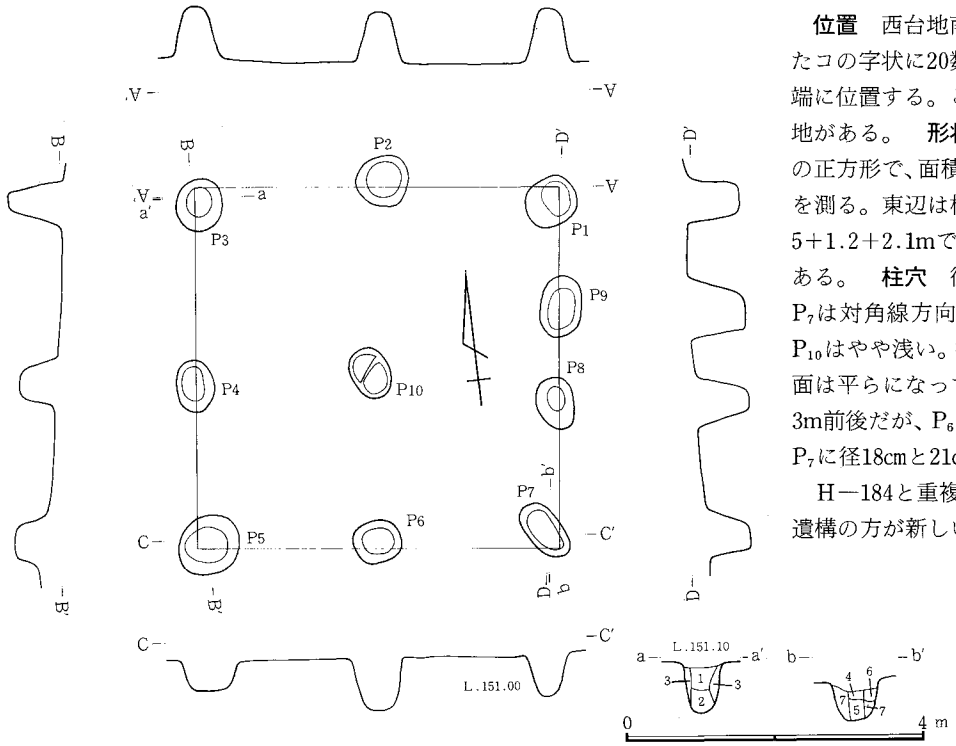


1．褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。下部の自然堆積ロームの上部は表面が黒く堅い。2．褐色土。FP・C軽石混入。3．汚れたローム。黒色土塊(φ5cm)混入。4．汚れたローム。

図—690　K—62号掘立柱建物跡

位置　A・B17。北東にK—56・58・59・60、南西にK54・55・61に接する。　**形状**　3間（6.6m）×3間（4.8m）の長方形で、南北に長い。長軸方向はN—4°—E、面積は31.7m²　**柱穴**　平面は隅丸長方形、P_2、P_7、P_8は比較的小さく浅いが、東西の柱穴は径も深さも大きい。柱間は桁行西・東側とも2.4+2.1+2.1m、梁行は北側が2.4+2.4mの2間、南側で1.5+1.5+1.8mの3間である。P_3、P_4、P_9は二段の底。　**重複関係**　P_7がH—202のカマドを切っており、本遺構が新しい。また、W—23と重複するが溝が新しい。　**遺物**　P_{10}からスラグ1、P_4から土師坏片11、甕片4、須恵器坏片2、甕片5点が出土　（(中村）

K63号掘立柱建物跡（図—691　図版—45、121　表—293）

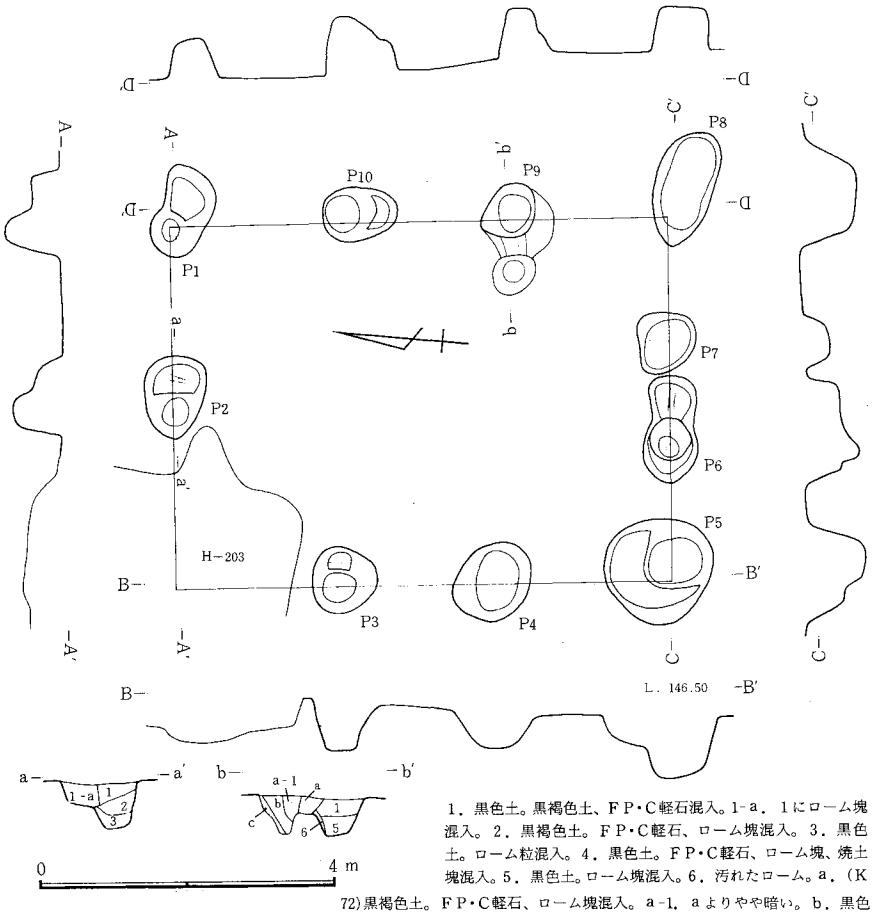


1．黒褐色土。FP・C軽石混入。堅い。2．黒褐色土。ローム粒混入。締りなし。3．褐色土。多量のローム塊・粒混入。4．褐色土。多量の黒色土混入。5．黒褐色土。FP軽石、多量のC軽石混入。6．黒褐色土。7．黒褐色土。FP・C軽石、ローム粒・塊混入。

位置　西台地南辺に近いH2にある。南が空いたコの字状に20数棟密集する掘立柱建物群の北西端に位置する。この群の北側には遺構がない空白地がある。　**形状**　2間（4.8m）×2間（4.8m）の正方形で、面積23.0m²。長軸方向はN—6.5°—Eを測る。東辺は柱間3間で、柱間寸法は北から1.5+1.2+2.1mである。他の三辺は、2.4+2.4mである。　**柱穴**　径70cm前後の方形に近い円形で、P_7は対角線方向に長い。東柱と思われ思われるP_{10}はやや浅い。掘り形は深いものが多く、大体底面は平らになっている。底面標高はおおむね150.3m前後だが、P_6のみ150.08mとなっている。P_6、P_7に径18cmと21cmの柱痕が見られた。　**重複関係**　H—184と重複する。柱穴の埋土の様子から、本遺構の方が新しい可能性がある。　（川崎）

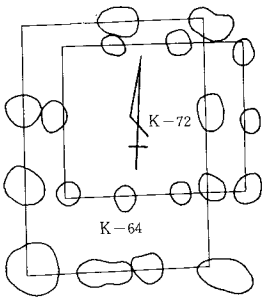
図—691　K—63号掘立柱建物跡

K64号掘立柱建物跡（図—692、693　図版—45）



1．黒色土。黒褐色土、FP・C軽石混入。1-a．1にローム塊混入。2．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。3．黒色土。ローム粒混入。4．黒色土。FP・C軽石、ローム塊、焼土塊混入。5．黒色土。ローム塊混入。6．汚れたローム。a．(K72)黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。a-1．aよりやや暗い。b．黒色土。FP・C軽石、ローム塊混入。堅く締る。c．黒褐色土。ローム塊混入。

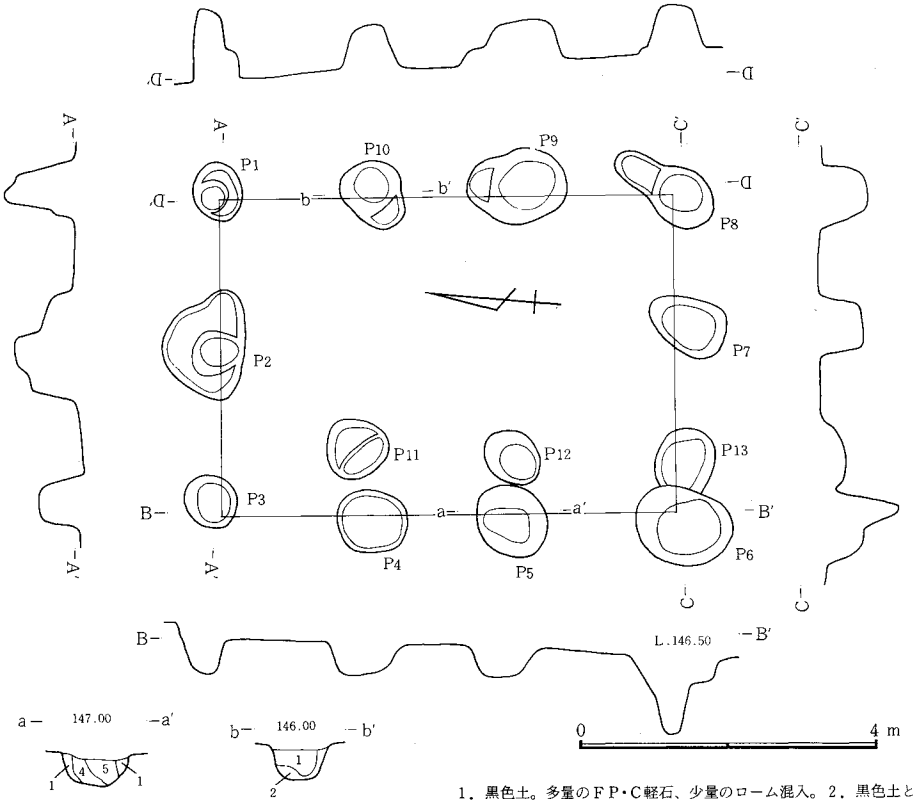
図－692　K－64号掘立柱建物跡



図－693　K－64・72号
掘立柱建物跡関係図

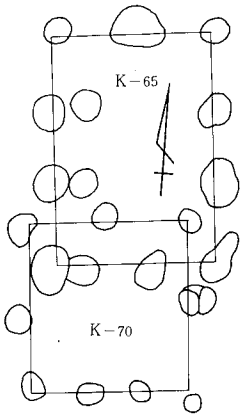
位置　E102。K—72、H—203と重複する。南にH—211～215を臨み、東にK—65・70を臨む。　**形状**　桁行3間（6.6m）×梁行2間（4.8m）の長方形。長軸はN－5°—Wの方向を示す。柱間寸法は桁行西列2.1+2.1+2.4m、東列2.4+2.1+2.1m、梁行北列2.4+2.4m、南列1.8+1.2+1.8m（3間）。面積は31.7m²。北短辺西のピットを、H—203との重複により欠いている。　**柱穴**　2つの柱穴がついたような平面形と複雑な落ち込みを示すものが多いので、柱の建て替えが、一度は行われたと考えられるが、柱穴間の新旧の関係ははっきりしない。　**遺物**　埋土中より土師器坏片、甕片、須恵器坏片が出土した。　**その他**　K—72との重複では、ピットの切り合い関係から、本遺構が旧。　（杉浦）

K65号掘立柱建物跡（図—694、695　図版—45、121　表—293）



1．黒色土。多量のFP・C軽石、少量のローム混入。2．黒色土とロームの混土。3．黒色土。FP・C軽石、多量のローム塊混入。4．黒色土。少量の軽石、黒褐色土塊混入。5．黒色土。黒褐色土塊、少量の軽石混入。

図－694　K－65号掘立柱建物跡

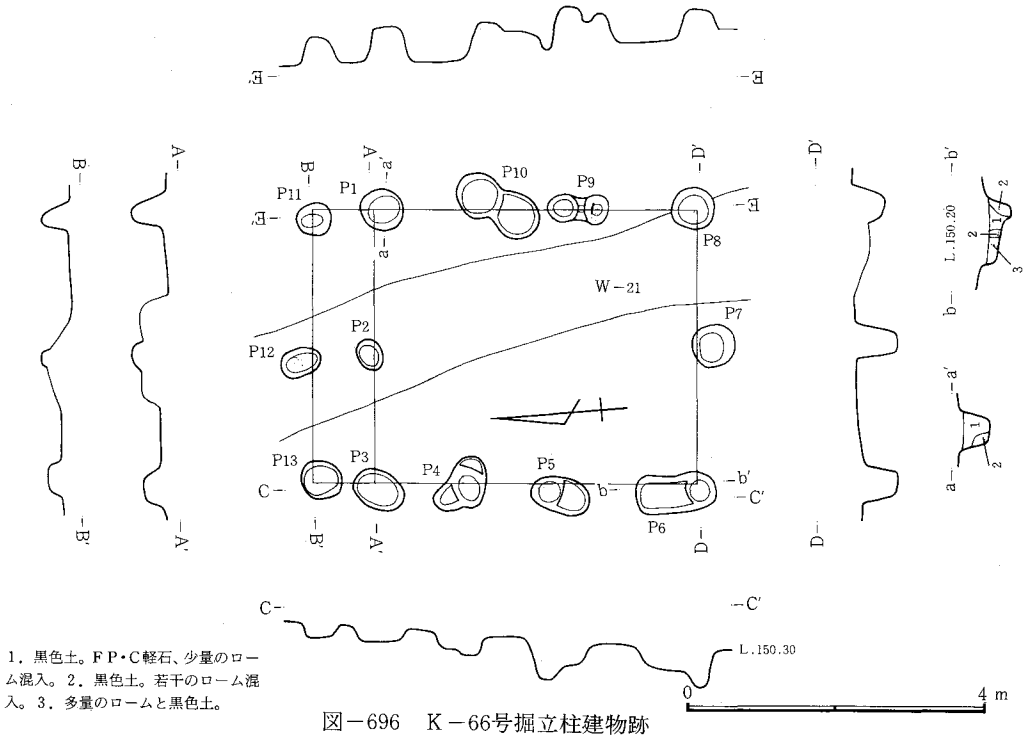


図－695　K－65・70号
掘立柱建物跡関係図

位置　D101。掘立柱建物群と竪穴住居が密集した場所に位置する。東に向う緩斜面上にあり、すぐ東には近代まで湧水のあった浅い谷が入り込んでいる。　**形状**　3間(6m)×2間（4.2m）の長方形で、南北方向に長軸をもつ。面積25.2m²、長軸方向はN—4.5°—Wを向く。西辺のP₄、

P_5、P_6の東にP_{11}、P_{12}、P_{13}がつく。東列の柱穴とあわせ考えると建て替えを示すものか。柱間寸法桁行が2.1＋1.8＋2.1m。梁行が2.1＋2.1mだが、南辺は0.6＋1.8＋1.8mとなる。　**柱穴**　掘り形は円形を呈すものが多く、径80～100cm前後である。P_2が大きく130×107cmの規模。深さは60cm前後が多く、P_{11}、P_{12}、P_{13}は浅い。P_2に、径12cmの柱痕が見られた。　**遺物、**　土師器坏(14)の他P_8より、坏甕蓋の破片が出土している。　**重複関係**　K—70と重複するが、切り合いがなく新旧関係は不明。　(川崎)

K66号掘立柱建物跡（図—696　図版—45）

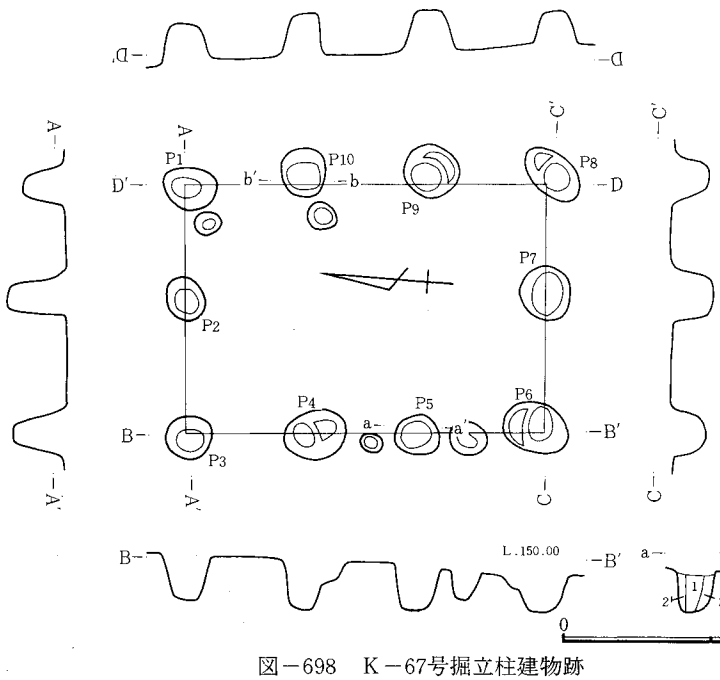


1．黒色土。FP・C軽石、少量のローム混入。2．黒色土。若干のローム混入。3．多量のロームと黒色土。

図－696　K－66号掘立柱建物跡

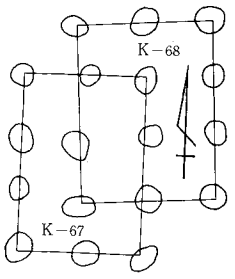
位置　西台地南辺のG 2にある。コの字状に20数棟密集する掘立柱建物群の東辺中央に位置し、W—21と重複する。　**形状**　南北３間（4.2m）×東西２間（3.6m）の南北に長軸をもつ長方形。面積は15.1㎡、長軸方向はN－4°－Eを向く。柱間寸法は桁行北から1.2＋1.2＋1.8m、梁行は1.8＋1.8m。　**柱穴**　方形に近い円形の掘り形で、径40～70cm前後である。深さは40～50cm前後で、建て替えのあとがうかがえるP_4、P_5、P_6、P_9、P_{10}では南側が概して浅くなっている。また、P_{11}、P_{12}、P_{13}は他より比較的小さく北辺より北0.9mにあり、北側に廂のあったことをうかがわせる。　**重複関係**　W—21の埋土はB軽石を多く含むが、本遺構柱穴にはB軽石がなく、本遺構の方が旧い。　(川崎)

K67号掘立柱建物跡（図—697、698　図版—45）



1．黒色土。やや多めのローム、少量の軽石混入。2．黒色土。ローム塊、少量の軽石混入。3．黒褐色土。少量の浮石混入。締りあり。4．黒色土。FP・C軽石、少量のローム混入。5．ロームと黒色土。締りなし。6．汚れたローム。7．黄褐色土。多量のローム混入。

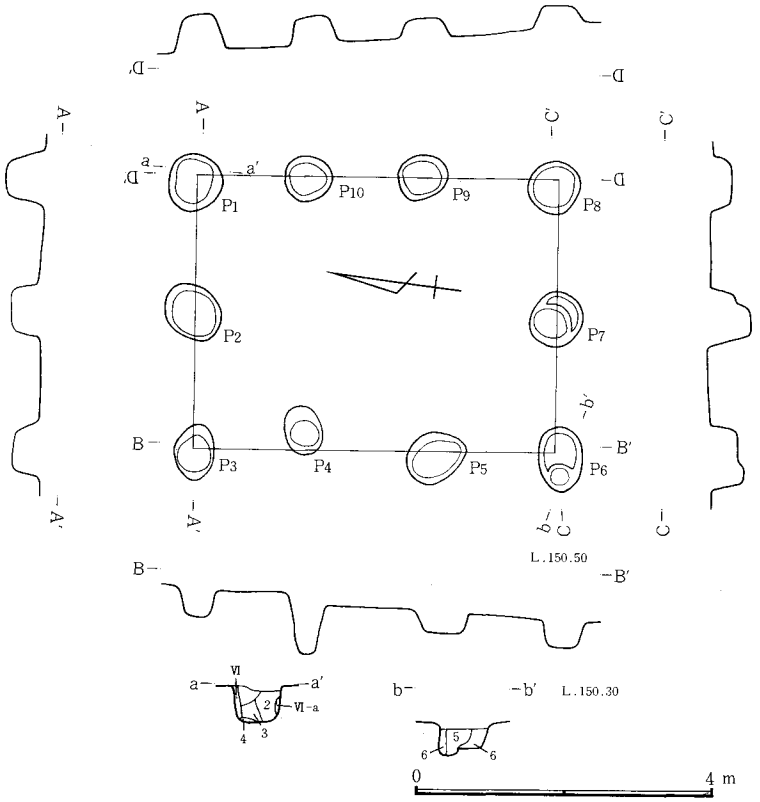
図－698　K－67号掘立柱建物跡



図－697　K－67・68号掘立柱建物跡関係図

位置　西台地の南辺に近いF 2にある。　**形状**　3間（4.8m）×2間（3.3m）の南北に長い長方形。東辺と西辺の対称的な位置に、径30cm前後の小穴がある。面積は15.8㎡、長軸方向は　N－5°—W　を向く。　**柱穴**　径60～80cm前後の円形で、深さ50～80cm前後のしっかりした円筒形の掘り形をもつ。底面標高は149.4m前後。柱痕はP_4とP_{10}より径24cmのものが検出された。P_4、P_6、P_8、P_9は二段の底をもつ。　**重複関係**　K—68参照。　(川崎)

K68号掘立柱建物跡（図—697、699　図版—45）

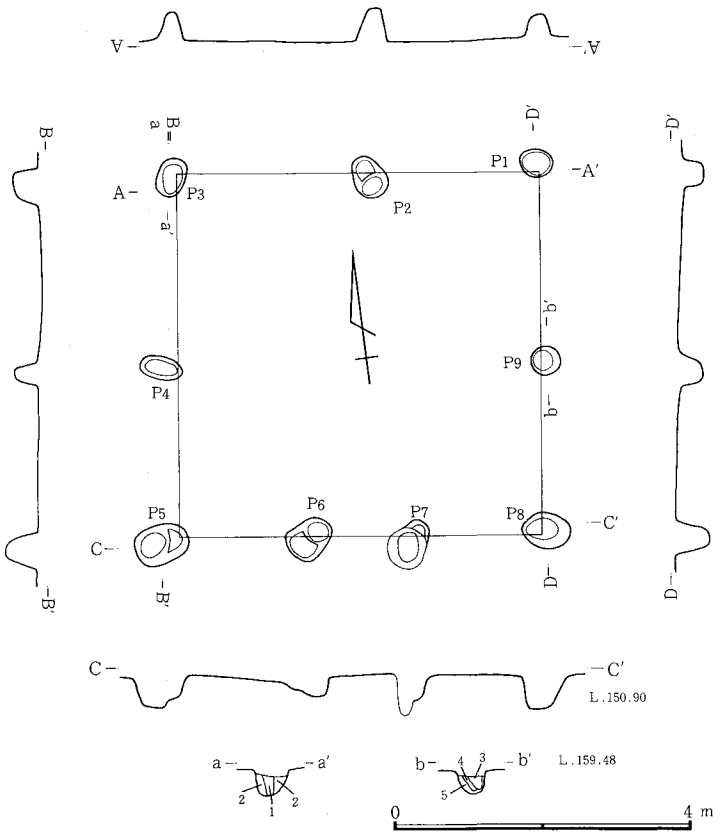


図—699　K—68号掘立柱建物跡

位置　K—67に同じ。　**形状**　3間(4.8m)×2間(3.6m)の南北に長い長方形。面積17.3m²、長軸方向N—8°—Eを向く。柱間寸法は桁行西辺が北から1.5+1.8+1.5m、同じく東辺で1.5+1.5+1.8m。梁行で1.8+1.8mである。　**柱穴**　平面形は、方形に近い円形で、径60～80cm前後、深さは24～61cmで、径より浅いがP_4のみ88cmで深い。掘り形は、円筒形で底面は平ら。底面標高は149.7m前後で、東辺南辺北辺ともほぼ一定しているが、西辺はバラつきがあり、南へ行くほど下がっている。柱痕は認められなかった。P_6、P_7は二段の掘り形をもつ。　**重複関係**　K—67と重複している。両者はK—67P_2とK—68P_4、およびK—67P_9とK—68P_7をそれぞれ共有している。K—67P_2（K—68P_4）の埋土は、K—68と似ているが、確定的ではない。切り合いも地層断面には現れず、新旧関係を見きわめることはできなかった。　（川崎）

1．黒色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、少量のローム混入。2．黒褐色土。多量のローム混入。3．黒色土。多量のローム混入。4．褐色土。5．黒色土。少量の軽石、少量のローム。6．黄褐色土。ローム主体。

K69号掘立柱建物跡（図—700　図版—45）

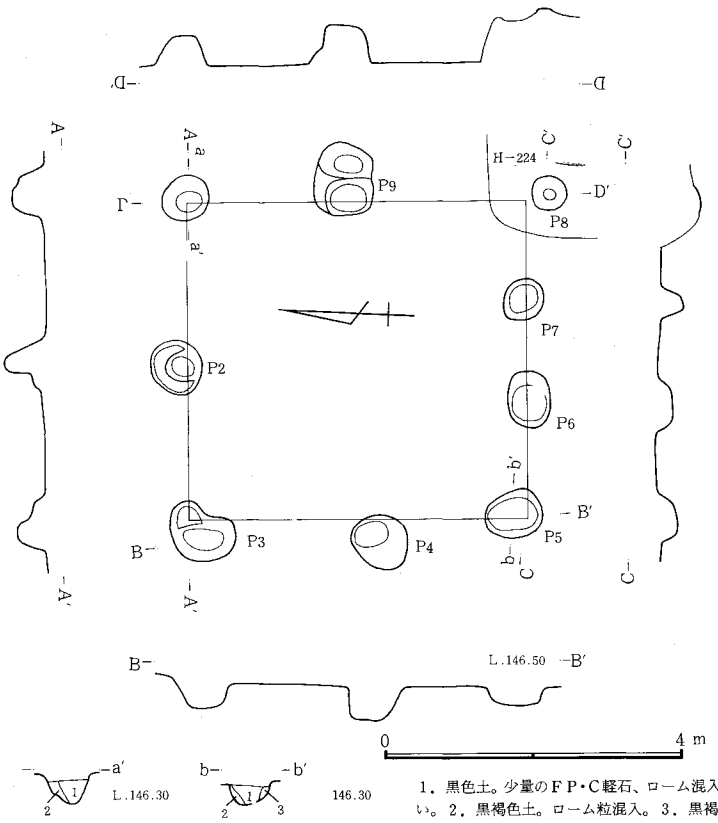


図—700　K—69号掘立柱建物跡

位置　E14。本遺跡西台地中心部に近い北東寄り、周辺では掘立柱建物跡は検出されず、竪穴住居跡のみ南西側に隣接する。　**形状**　2間（4.8m）×2間（4.8m）。ただし南辺のみ3間の正方形の建物跡。柱間は南北方向で東・西側列とも北から2.7+2.1m、東西方向で北側列2.4+2.4m、南側列1.8+1.4+1.6m。長軸方向は、N—6.5°—E。面積は23.0m²。　**柱穴**　掘り形平面はP_9がほぼ円形、P_2、P_5、P_6、P_7はだるま形、P_7は本遺構より新しいピットにより切られているため全体の形状はうかがえない。他は隅丸長方形に近い。規模はP_5が68×42cmで最大、P_7が31×14cmで最少。深さはP_6の24cmが最小であり、P_8の43cmが最大となる。なおP_7は残存部底部の標高がP_6のそれとほとんど同じとなり、P_6と一対となる入口施設の柱穴と考えられる。柱痕はP_7以外柱穴確認面で検出され、P_2が21×13m、P_8が21×17cmの長方形、他は直径10～23cmの円形を呈す。P_2、P_5、P_6は二段の底。　**重複関係**　P_7が新しいピットにより切られているほかは、他の遺構との重複関係なし。　**遺物**　なし。　（前原）

1．黄褐色土。少量の黒色土混入。締りなし。2．褐色土。軽石、ローム塊混入。堅く締る。3．褐色土。多量の軽石混入。締りなし。4．黄褐色土。僅か軽石混入。やや締りなし。5．黒色土。ローム、黄褐色土の混土。堅く締る。

K70号掘立柱遺物跡（図—695、701）

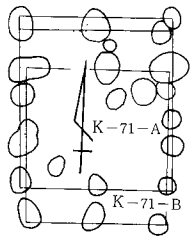


1．黒色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石、ローム混入。締り弱い。2．黒褐色土。ローム粒混入。3．黒褐色土。

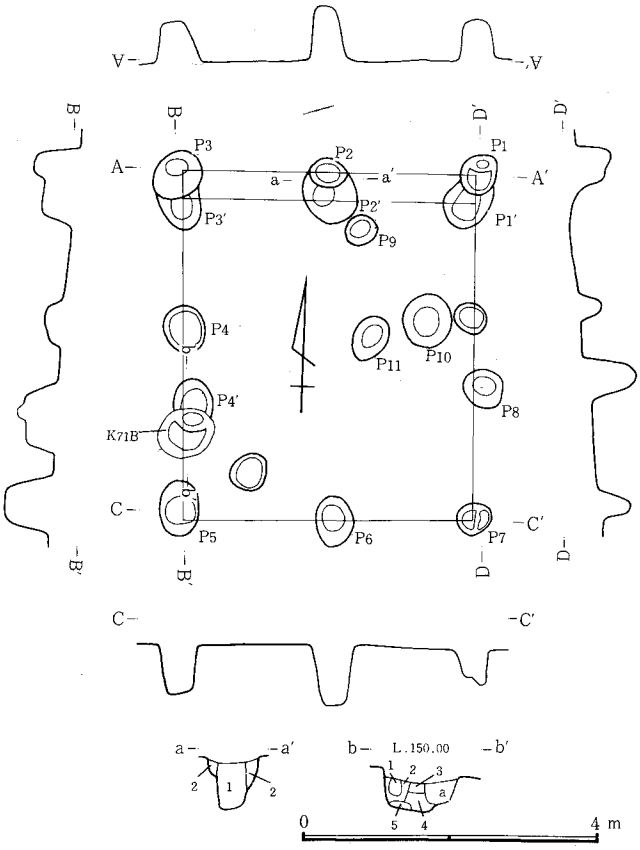
図—701　K—70号掘立柱建物跡

位置　西台地南辺のD102にある。周辺は掘立柱建物跡が多く、東にはK—93、91、92、101が位置し、西にはK—88、84、72、64が位置している。本遺構は東に緩やかに下がる斜面上にあり、すぐ東は浅い谷が入り込む。　**形状**　2間(4.5m)×2間(4.2m)の南北にやや長い台形。面積は18.9mで、長軸方向はN—3.5°—Wを向く。柱間寸法は西辺で2.4+2.1m、東辺は2.2+2.6m。北辺は2.1+2.1m、南辺は3間あって1.5+1.2+1.5mある。P_8が30cm南にずれている。　**柱穴**　P_1、P_2は円形、他は隅丸方形に近い円形。径は50～80cm前後で、深さは28～50cm。掘り形は舟底形で、径にくらべ浅いものが多い。P_5は対角線に対しほぼ直角に掘られている。P_1、P_2、P_3のは二段の底をもつ。建て替えを示すものか。　**重複関係**　K—65および、H—224と重複しているが、切り合い関係がつかめず、新旧関係は不明である。

（川崎）

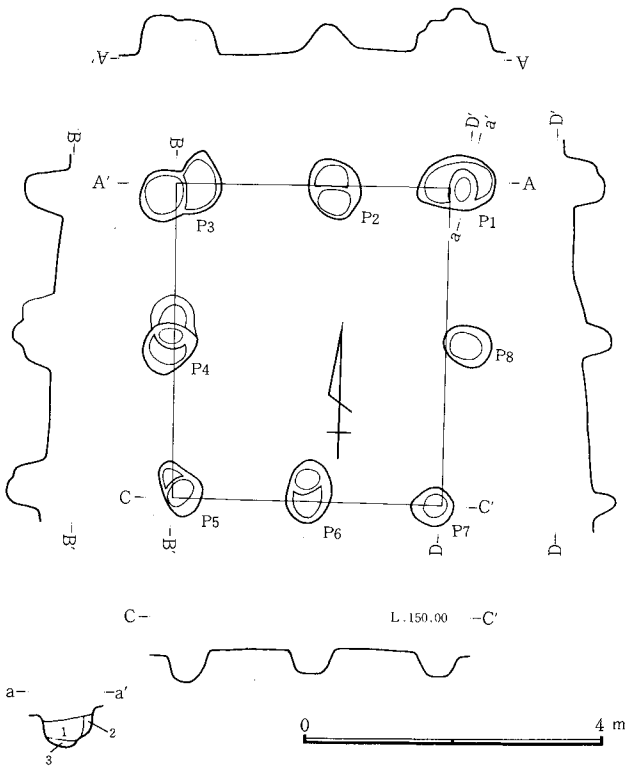


図—702　K—71—A(Ⅰ・Ⅱ)・B号掘立柱建物跡関係図



1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、若干のローム混入。2．暗褐色土。ローム粒混入。締りよし。3．黒褐色土。Ｃ軽石混入。4．褐色土。ローム粒混入。5．黒褐色土。若干のローム粒混入。6．黒褐色土。締り良し。7．多量のローム粒・塊と褐色土の混土。a．(71B)黒褐色土。ローム塊混入。

図—703　H—71—A(Ⅰ・Ⅱ)号掘立柱建物跡



1．褐色土。ローム粒・塊混入。2．黒褐色土。締りよし。3．暗褐色土。多量のローム混入。

図—704　K—71—B号掘立柱建物跡

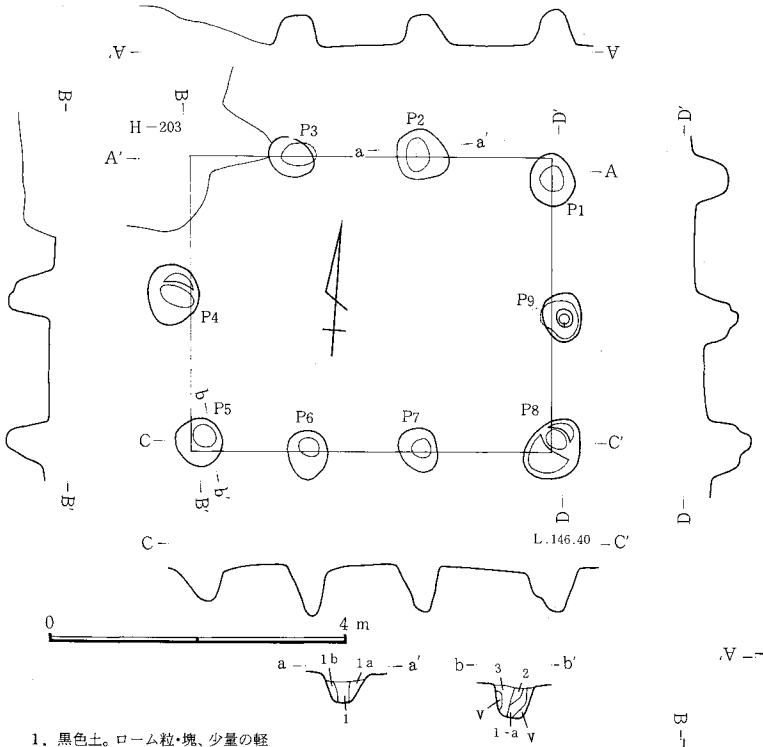
K71A（I・II）号掘立柱建物跡（図—702、703　図版—45）

位置　F2に位置する。　**形状**　71—Aは二軒の重複。Iは2間（4.5m）×2間（3.9m）。南北は北より1.8m＋2.7m、東西は西より1.8＋2.1m。長軸方向N—2°—Eで、面積は17.5m²である。IIは2間（4.2m）×2間（3.9m）。南北は北より2.4＋1.8m。面積は16.4m²である。　**柱穴**　P_5、P_6、P_7はI・IIの共通。平面は円形が多い。径は50～60cm前後である。I・IIで差はない。深さはIが50cm前後である。IIの柱穴でIに隣接しているものは、それぞれ10cm前後ほど浅くなっている。底面標高は、Iは149.5m前後が多い。掘り形の断面は円筒形をしている。共通のP_6、P_7は他より深くなっている。　**重複関係**　P_1とP_1'の切り合いによりP_1の属すIが新しい。IはP_1～P_8、IIはP_1'～P_4'、P_8'。P_9～P_{12}は建物に関連か。　（井野）

K71B号掘立柱建物跡（図—702、704　図版—46）

位置　F2。　**形状**　2間（4.2m）×2間（3.6m）の長方形の建物跡で、南北に長軸をもつ。長軸方向はN—0°で、面積は15.1m²である。柱間寸法は南北が2.1＋2.1mで、東西が北辺は西より2.1＋1.5mで、南辺は1.8＋1.8mである。　**柱穴**　平面ではやや楕円に近い。径は60cm前後のものが多く、深さは30～40cmである。掘り形は径にくらべて、深さがない台形の断面をしている。柱痕は顕著ではない。底面標高は、北辺が149.5m前後で、南辺が149.3m前後である。　**重複関係**　K—71A（I・II）と重複。P_4がK—71A（I・II）のP_5と重複。切り合いによりK—71Bが新しい。　（井野）

K72号掘立柱遺物跡（図—693、705）



1．黒色土。ローム粒・塊、少量の軽石混入。1-a．1よりローム更に少量。1-b．1にローム混じらず。2．灰褐色砂質土。少量の軽石、ローム混入。2．1よりローム多い。3．黒色砂質土。少量の焼土混入。

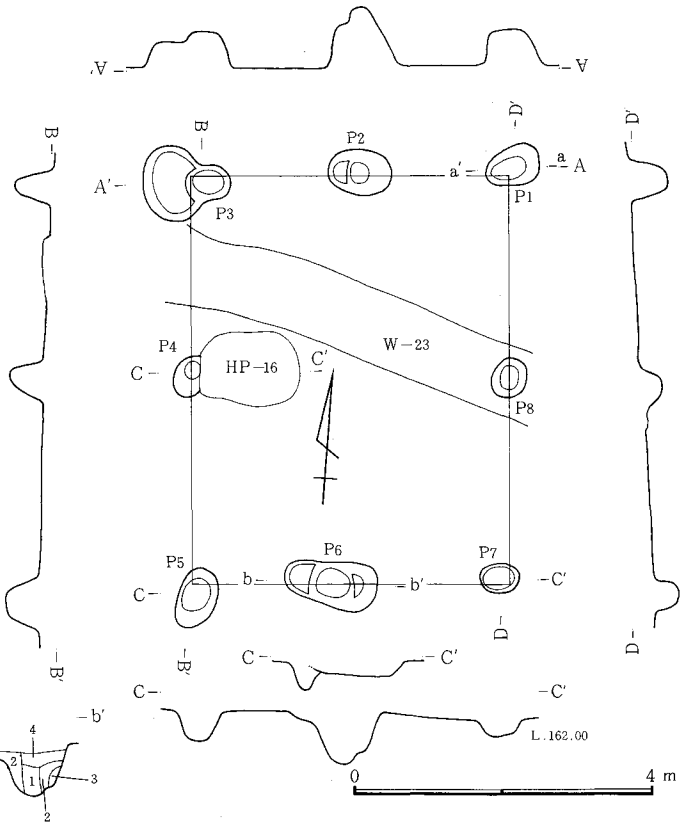
図—705　K—72号掘立柱建物跡

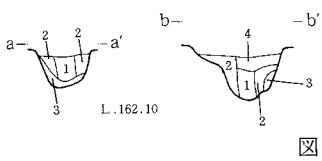
位置　西台地南辺のE102にある。東に向かう緩やかな斜面上にあり、東方60cmには浅い谷が入る。周囲には19棟の掘立柱建物跡が密集し、竪穴住居跡も15軒存在する。　**形状**　3間（4.8m）×2間（3.9m）の東西に長い長方形で、面積18.7m²、長軸方向はN—6°—Eを向く。北西隅の柱穴はH—203により失われている。柱間寸法は、桁行で西から1.5＋1.5＋1.8m、梁行西辺1.8＋2.1m、東辺2.1＋1.8m。　**柱穴**　不整円形を呈し、径60cm前後、深さは34～68cmで南辺と東辺の柱穴が深い。P_8は86×70cmと大きく、軸線とは斜めになっている。柱痕はP_2で認められ、径は19cm。P_4、P_8、P_9は二段の底をもつ。　**重複関係**　H—203及びK—64と重複する。K—64とは地層断面から本遺構の方が新しい。H—203とは本遺構P_3の上にH—203のカマドがのっており、H—203の方が新しい。　（川崎）

K73号掘立柱建物跡（図—706　図版—46）

位置　B17。　**形状**　2間（5.4m）×2間（4.2m）の長方形で、南北に長い。長軸方向はN—5°—Wで、面積は22.7m²である。　**柱穴**　掘り形平面は楕円形に近い。径に比較して深さはあるが、底が狭くなる傾向がみられる。大きさは短径37～55cm、長径49～124cm、深さは35～88cmである。柱痕はP_4、P_7を除き認められ、径20～33cmの太さである。

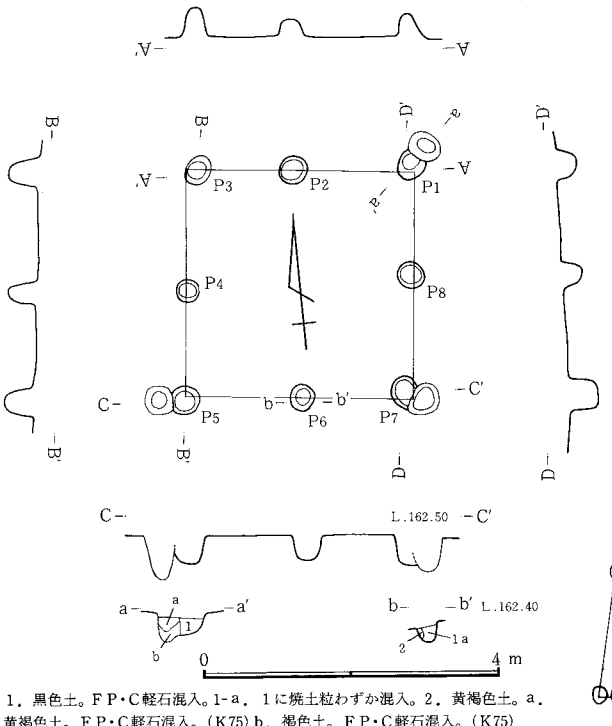
重複関係　P_4がHP16号土坑により切られている。したがって、本遺構が古いことになる。W23号溝とP_8が重複するが、地層断面からは新旧は不明。　**遺物**　土師器坏破片11点等が出土。　（中村）





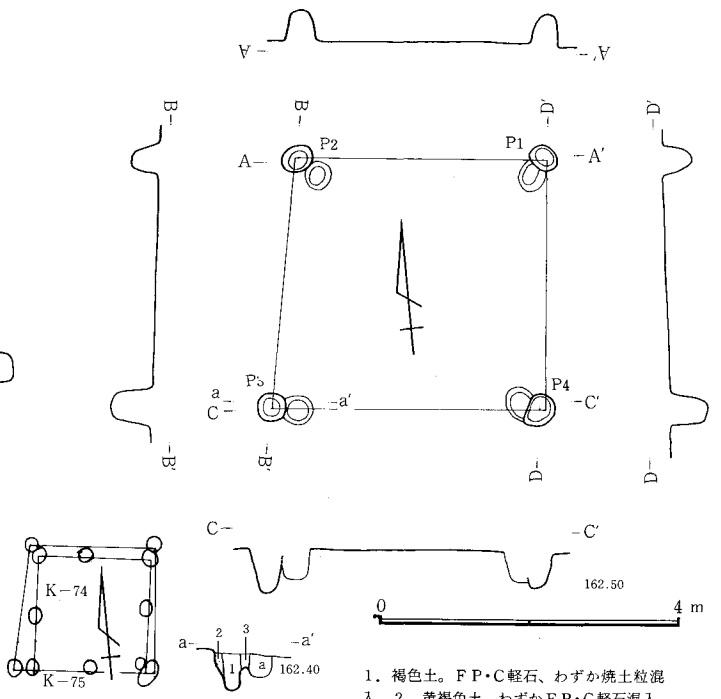
1．黒褐色土。多量の軽石、若干のローム塊混入。堅い。2．成分は1と同じで締っている。3．黄褐色土。FP・C軽石、ローム塊（φ3～4cm）混入。4．黄褐色土。FP・C軽石を含む。

図—706　K—73号掘立柱建物跡



1．黒色土。FP・C軽石混入。1-a．1に焼土粒わずか混入。2．黄褐色土。a．黄褐色土。FP・C軽石混入。(K75) b．褐色土。FP・C軽石混入。(K75)

図－707　K－74号掘建柱建物跡



1．褐色土。FP・C軽石、わずか焼土粒混入。2．黄褐色土。わずかFP・C軽石混入。3．黄褐色土。FP・C軽石混入。a．(K74) 黒色土。FP・C軽石、わずかに焼土粒混入。

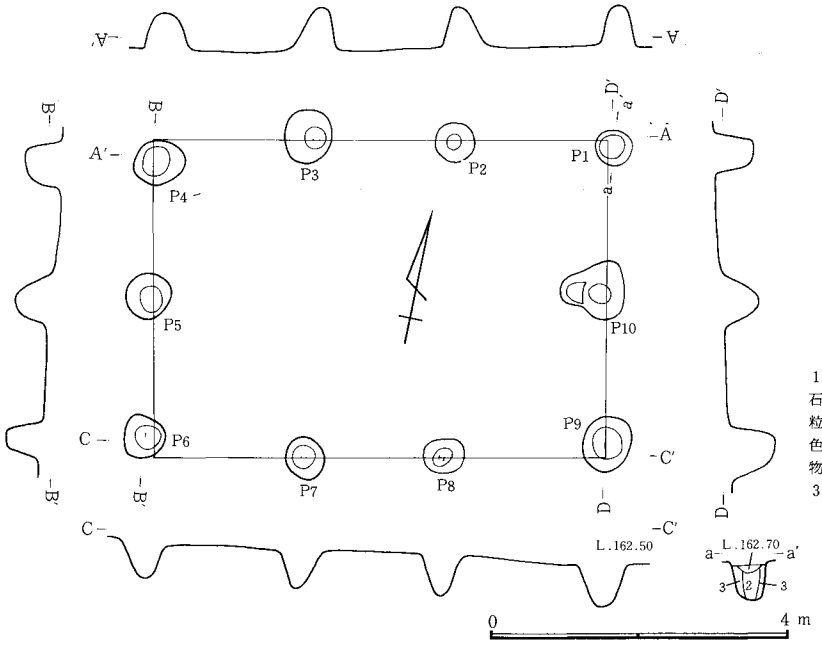
図－708　K－74・75号掘立柱建物跡関係図

K74号掘立柱建物跡（図—707、708　図版—46）

位置　B・C17に位置する。北東にK76号、南に73号掘立柱建物跡に臨む。　**形状**　2間（3.0m）×2間（3.0m）の正方形である。長軸方向はN－6°—Eで、面積は9㎡と小さい。　**柱穴**　掘り形平面は円形で、径に比較して深いが、全体に小さい。径は33～40cm、深さ23～50cmの大きさで、柱痕は認められない。柱間は桁行、西側・東側とも1.5＋1.5mと等間隔である。梁間も北側・南側ともに1.5＋1.5mの等間隔である。　**重複関係**　K75号掘立柱建物跡と重複しているが、P_1の切り合い状態から、本遺跡が古いと推定される。　**遺物**　埋土中から土師器甕破片1点が出土している。　（中村）

K75号掘立柱建物跡（図—708、709　図版—46）

位置　B・C17に位置する。K74号掘立柱建物跡と同様に北東にK76号掘立柱建物跡を、南にK73号掘立柱建物跡を臨む。　**形状**　1間（3.3m）×1間（3.3m）の正方形である。長軸方向はN－5°—Eで、面積は11.4㎡と小さい。　**柱穴**　掘り形平面は円形で、径に比較して深いが、全体に小さい。径は32～43cm、深さ39～66cmの大きさで、柱痕は認められない。柱間は桁行3.3m、梁行は北側で3.3m、南側で3.6mと、若干ゆがみがみられる。　**重複関係**　前記のとおりK74号掘立柱建物跡と重複して本遺構が新しいが二者が一つの建物とも、また、建て替えの可能性も考えられる。　（中村）



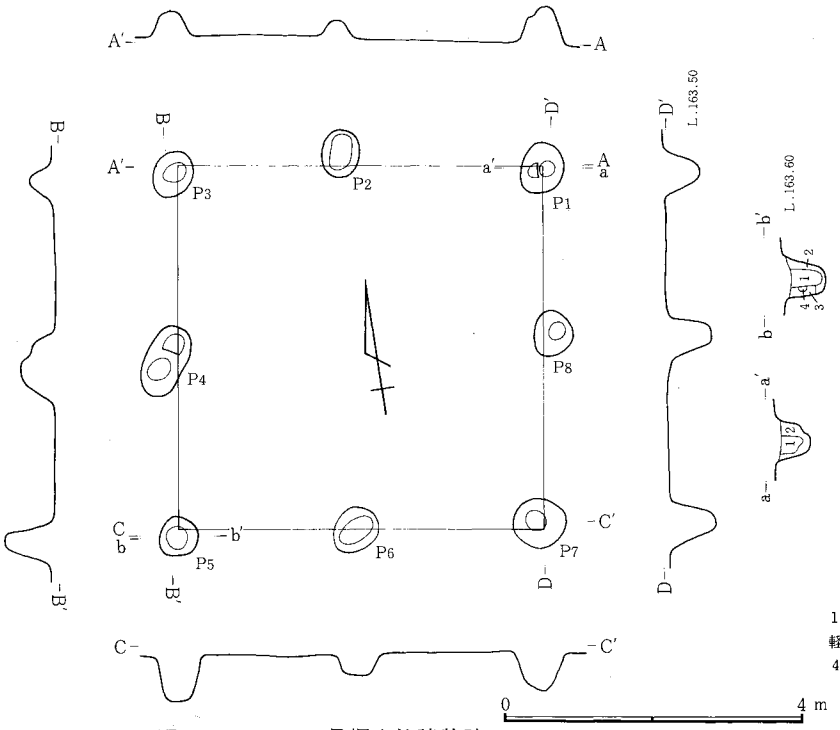
1．茶褐色土。黒色土、焼土粒、石粒、多量のFP・C軽石、ローム粒混入。カリカリ堅い。2．茶褐色土。FP・C軽石、少量の炭化物、焼土粒、多量のローム粒混入。3．汚れたローム。締りあり。

図－710　K－76号掘立柱建物跡

K76号掘立柱建物跡（図―710　図版―46）

位置　B18に所在する。本建物跡はB16からD20にかけて南北に展開する掘立柱建物跡約20軒のうちの一つである。群での位置はほぼ中央である。近くにK74、75、78号の各掘立柱建物跡が、またH218、219号住居跡が認められる。50～60m東へ行くと谷に至る位置でもある。　**形状**　3間（6.0m）×2間（4.2m）の長方形で、長軸方向を東西にとる。長軸方向はN―78°―Eで面積は25.2m²である。　**柱穴**　P_1、P_4、P_6、P_9、つまり4隅の柱穴は、他の柱穴よりも底部において径が大きくなっている。掘り形はほぼ円形を呈すものが多く、径は40～80cm前後、深さは50cm前後になっている。P_1、P_3、P_4、P_5、P_7、P_8、P_{10}に柱痕が認められる。その径は20～37cmにおよんでいる。柱痕をもとにして1間の長さを計測してみると、2.1mと1.8mの二種類の長さを測ることができる。　（中澤）

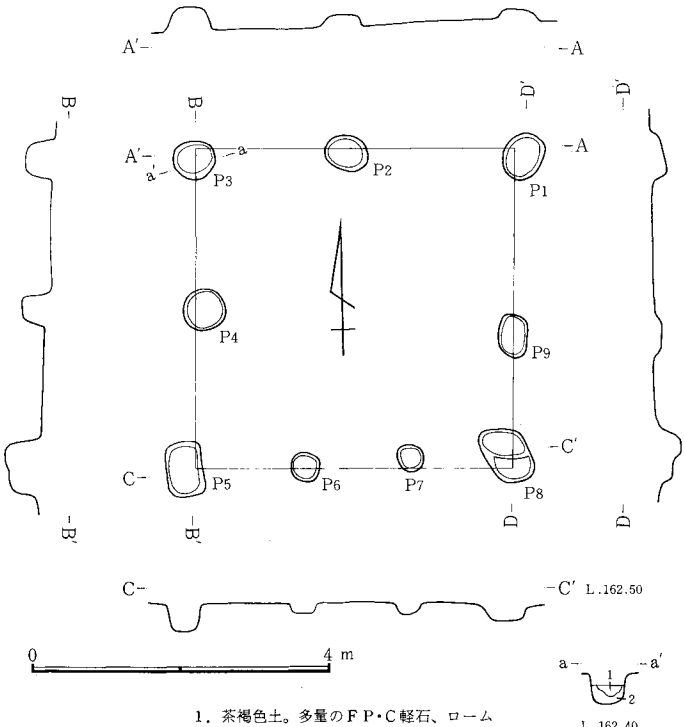
K77号掘立柱建物跡（図―711　図版―46）



1．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。2．褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。3．黄褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。4．黒色土。FP・C軽石混入。非常に堅い。

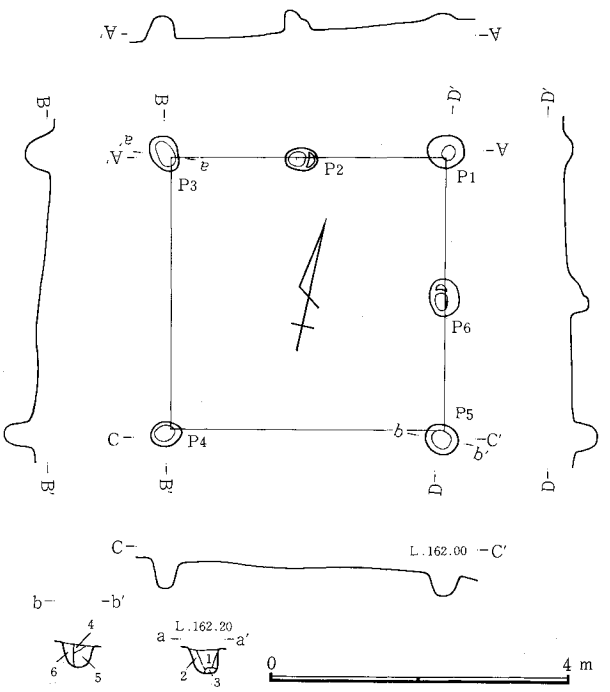
図―711　K―77号掘立柱建物跡

位置　C19に位置し、北にH227号、南にH218号住居跡と接する。　**形状**　2間（4.8m）×2間（4.8m）の正方形である。長軸方向はN―8°―Eで、面積は23.0m²である。　**柱穴**　掘り形平面はP_1、P_7、P_8は円形で、他は隅丸長方形である。径に比較して深く、底は平底である。大きさは短辺48～65cm、長辺53～92cm、深さ20～60cmである。柱痕はすべてに認められ、径20cmと同じ太さである。柱間は桁行西側、東側ともに2.4＋2.4mと等間隔、梁間北側で2.1＋2.7m、南側は2.4＋2.4mである。柱は整然とした配置をみせているが、隅にあるP_7が若干内側に入り気味である。P_1、P_4は二段の底をもつ。　（中村）



1．茶褐色土。多量のFP・C軽石、ローム粒、焼土粒混入。2．汚れたローム。軟かい。

図―712　K―78号掘立柱建物跡



1．黒茶褐色土。小豆色微砂塊、FP・C軽石、焼土粒混入。下部軟かい。2．黒茶褐色土。ローム粒、少量のFP・C軽石混入。堅い。3．暗褐色土。多量のローム、わずかなFP・C軽石混入。軟かい。4．黒茶褐色土。多量のローム粒、FP・C軽石、焼土粒混入。締り強い。5．茶褐色土。FP・C軽石、多量のローム粒混入。締りは1より甘い。6．黒茶褐色土。ローム粒、焼土、C軽石混入。

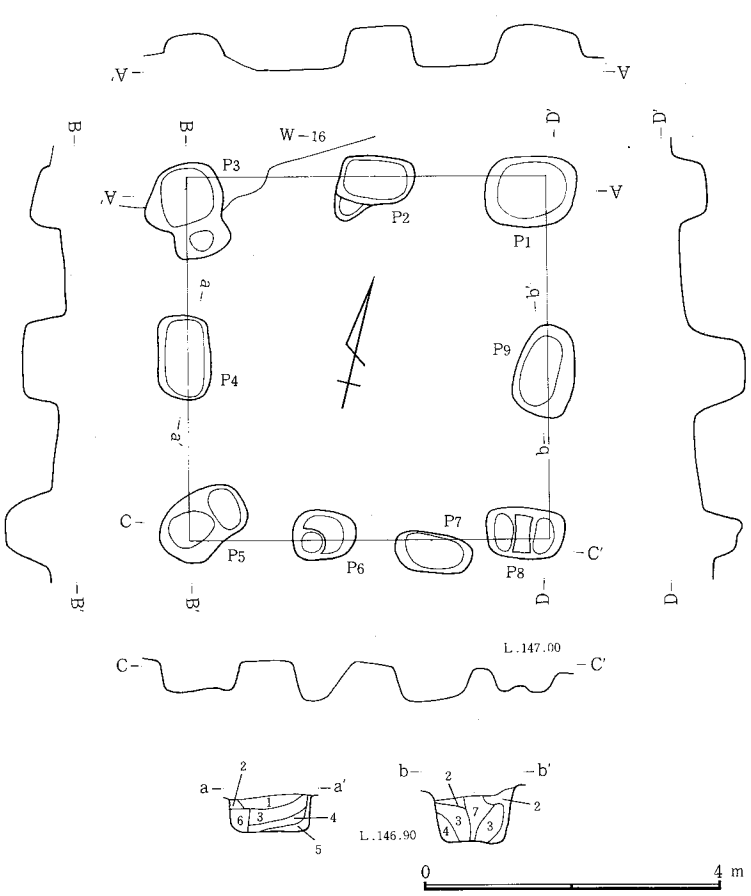
図―713　K―79号掘立柱建物跡

K78号掘立柱建物跡（図—712　図版—46）

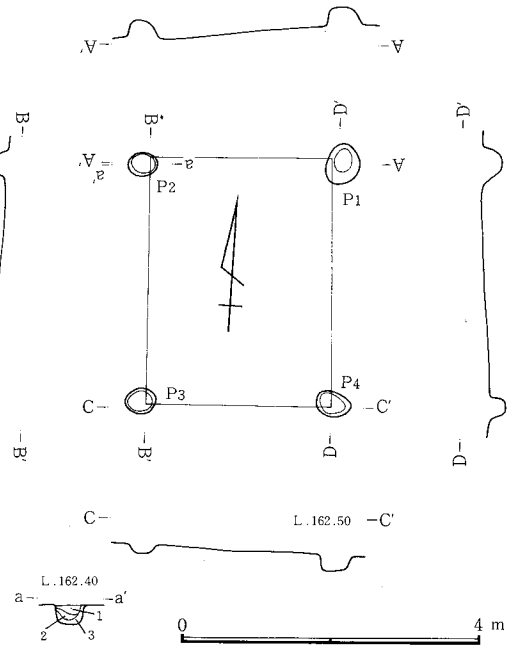
位置　A・B18。K76号掘立柱建物跡同様、B16～D20の約20軒の掘立柱建物跡の一群に属す。群のほぼ中央に位置し、東40mは谷となっている。近くにはK76、81、82号掘立柱建物跡やH217号住居跡がある。　**形状**　2間（4.2m）×2間（4.2m）の正方形を呈し、面積は9.2m²で、長軸方向はN—1.5°—Eである。北、東、西の各辺は中間に柱穴が一個認められるが、南辺のみ2個の柱穴が認められる。　**柱穴**　掘り形はP_4がほぼ円形、他は隅丸長方形を呈している。径は34～75cm、深さは16～45cmに及んでいる。9個の柱穴のうちP_5は長方形に近い形をしており、径は72×42cm、深さ45cmを測る。本建物跡の柱穴の特徴としては、柱痕が9個中8個確認できたことであろう。柱痕径はP_2の32×30cmを最高にして、P_9の10×16cmを最小にしている。　（中澤）

K79号掘立柱建物跡（図—713　図版—46）

位置　A18・19に所在する。本建物跡はK76号掘立柱建物跡を含む約20軒の掘立柱建物跡の一群に属している。近くには、K81、83号掘立柱建物跡、H217号住居跡がある。　**形状**　1間（3.6m）×1間（3.6m）の正方形で、長軸方向はN—13°—W、面積は13.0m²である。1間といっても、北辺および東辺は中間に一個柱穴が認められる。　**柱穴**　掘り形は不整な楕円形を呈し、径は30～40cm台、深さは10～40cm台に及ぶ。ただし、P_1は円形に近い掘り形をしている。　（中澤）



図—714　K—80号掘立柱建物跡



1．黒色土とロームの混土。多量のFP・C軽石混入。2．褐色土。多量のローム混入。3．茶褐色土。

図—715　K—81号掘立柱建物跡

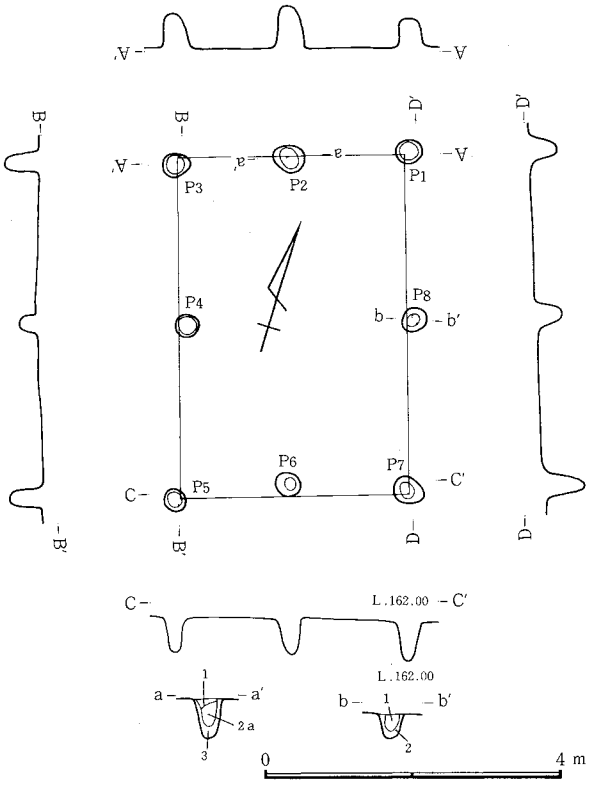
1．黒褐色土。多量のFP・C軽石、ローム塊混入。堅く締る。2．褐色土。少量のFP・C軽石混入。3．黒褐色土。ローム塊混入。4．黒色土。微量のローム混入。5．黒色土。ローム塊（φ3～6cm）混入。6．ローム漸移層。7．灰黒色土。砂質。8．灰黒色土。ローム混入。9．黒色土。ローム塊混入。10．黒色土とロームの混土。

K80号掘立柱建物跡（図—714　図版—46）

位置　西台地南辺のD101にある。19棟の掘立柱建物跡がL字形に屈曲する地点にある。東側には浅い谷が入る。　**形状**　2間（4.8m）×2間（4.8m）の正方形で、南辺は、柱間3間となる。面積23.6m²、長軸方向N—14°—Wを向く。柱間寸法は、南辺が1.8+1.2+1.8m。他の三辺は2.4+2.4mである。　**柱穴**　隅丸長方形で、最大114×92cm、最小83×66cmである。長径方向を軸線に沿って掘られているが、P_5のみは長径方向を対角線に向けている。深さは50cm前後で、P_9のみ深く（80cm）、P_3'は浅い（19cm）。P_3'は柱穴とするにはやや小さく、P_5のそれからみて支柱穴等を想定させる。掘り形は、すべて直方体に近いしっかりしたもので、底面はおおむね平らである。底面標高は北辺が高く、南辺とは最大59cmの差がある。　**重複関係**　W—16と重複するが、新旧関係は不明。　（川崎）

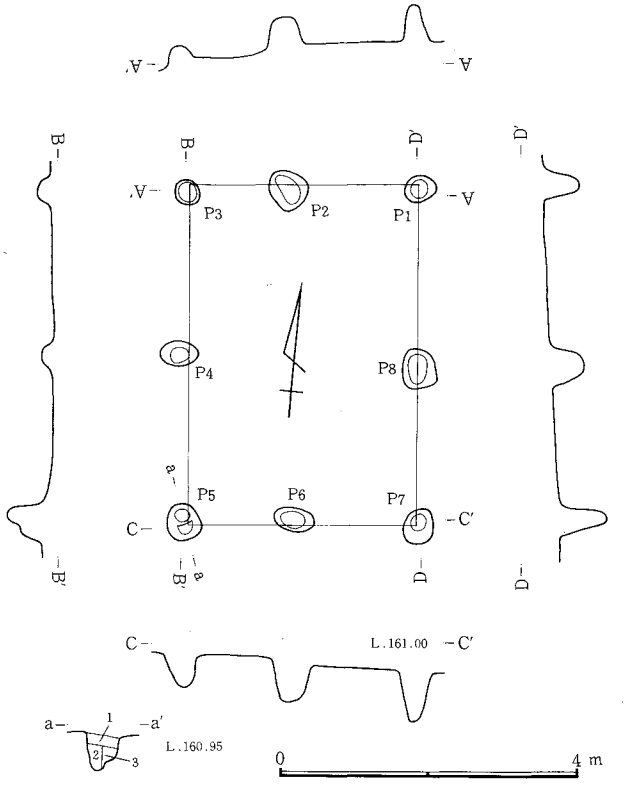
K81号掘立柱建物跡（図—715　図版—47）

位置　AおよびB17に所在する。本建物跡はK76号掘立柱建物跡同様、B16からD20にかけて分布する掘立柱建物跡の群に属する。群での位置はほぼ東端にあたる。近くにはK78、79号掘立柱建物跡、H217号住居跡などがみられる。　**形状**　1間（3.3m）×1間（2.4m）の長方形で、南北に長軸方向をとる。長軸方向はN—4°—Wで、面積は7.9m²を測る。　**柱穴**　4個の柱穴の掘り形は楕円形を呈し、径は30～50cm、深さは13～57cmに及んでおり、概して深さよりも径の方が大きな柱穴が特徴といえよう。さらに本建物跡の柱穴には柱痕が全て認められていることも特徴といえよう。柱痕の径はP_3の36×35cmを最大にして、35×18cmを測るP_4を最小にしている。4個とも柱痕はほぼ円形である。　（中澤）



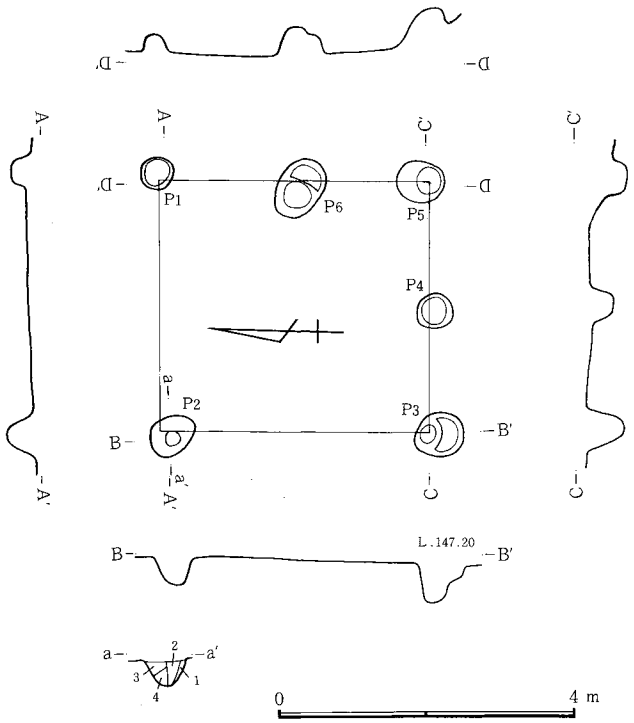
1．茶褐色土。ローム、ＦＰ・Ｃ軽石、焼土粒混入。堅い。2．茶褐色土。少量の黒色土混入。2-a．2にＦＰ・Ｃ軽石混入。軟かい。3．褐色土。ローム多量に混入。粗い。

図－716　Ｋ－82号掘立柱住居跡



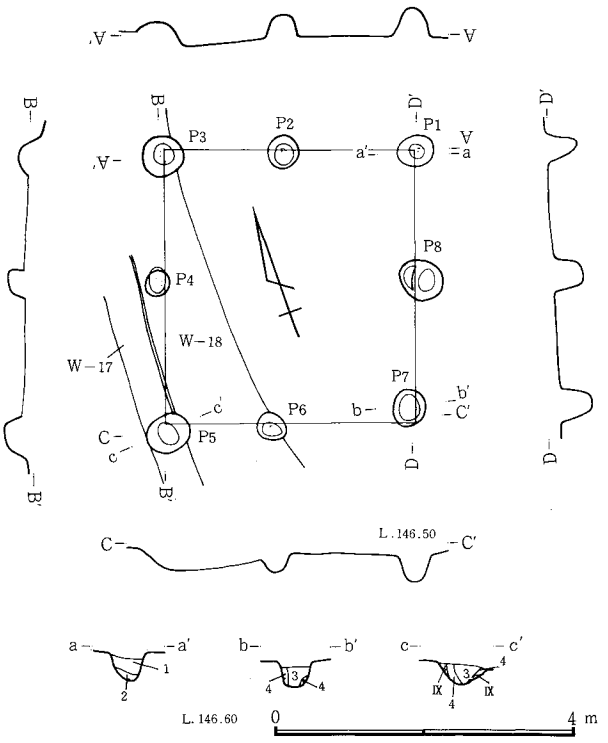
1．黒褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。3．褐色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。

図－717　Ｋ－83号掘立柱建物跡



1．褐色土。2．黒色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、黒褐色土混入。3．黒褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。4．黒色土。多量のローム混入。5．褐色土。微量のＦＰ・Ｃ軽石混入。締りあり。6．黒褐色土。ローム塊混入。

図－718　Ｋ－84号掘立柱建物跡



1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊混入。2．黒色土。多量のローム混入。3．黒色土。多量のローム粒、軽石混入。上面１cm程、堅く締っている。4．褐色土。少量の黒色土混入。堅く締る。

図－719　Ｋ－85号掘立柱建物跡

Ｋ82号掘立柱建物跡（図―716　図版―47）

位置　Ａ17およびＡ18にかけて所在する。本建物跡はＫ76号掘立柱建物跡と同じ一群に属し、群のほぼ中央に位置する。約束20mは谷となっている。南接してＫ56、57、58、59号掘立柱建物跡がみられる。　**形状**　２間（4.5m）×２間（3.0m）の長方形を呈し、南北に長軸方向をとる。長軸方向はＮ―19°―Ｗで、面積は13.5㎡である。　**柱穴**　掘り形はほぼ円形に近く、径は30～40

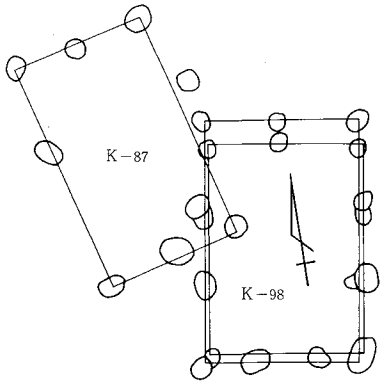
cm前後である。深さは30～60cmに及び、概して径の2倍前後の深さをもつことが指摘できよう。柱痕はP_6以外の全てに認められた。その径はP_3の26×23cmを最大にして、P_7の18×17cmを最小とする。柱痕の形状（平面）は円形を呈す。 **重複** K58、60号掘立柱建物跡とP_6がわずかに重複しているが、地層の切り合いがはっきりしないためいずれも新旧は不明である。 （中澤）

K83号掘立柱建物跡（図—717 図版—47）

位置 A19に位置し、西にK79号掘立柱建物跡を臨む。 **形状** 2間（4.5m）×2間（3.0m）の長方形である。長軸はN—4.5°—Wで南北に長く、面積は13.5m²である。 **柱穴** 掘り形平面は全体に楕円形に近い。柱穴は地山の標高が低い東側と南側にある。P_1、P_5、P_6、P_7、P_8が深くしっかりと掘られている。大きさは長径31～50cm、短径30～46cm、深さ19～65cmである。柱痕はいずれからも確認出来なかった。柱間は桁行西側で2.3+2.2m、東側で2.4+2.1mあり、梁間は北側1.5+1.5m、南側1.5+1.5mと等間隔である。 **遺物** 土師器坏破片1点が出土している。 （中村）

K84号掘立柱建物跡（図—718 図版—47）

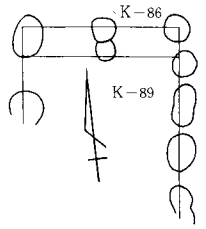
位置 西台地南辺のE102にある。東に向かう緩やかな斜面上にあり、東側には浅い谷が入り込む。W—16とW—74との交点の西に位置し、周囲には掘立柱建物跡と竪穴住居跡が密集している。 **形状** 2間（3.6m）×2間（3.3m）の長方形で、南北方向に長軸をもつ。面積11.9m²、長軸方向N—3°—W。柱間寸法は桁行1.8+1.8m、梁行1.5+1.8m。北辺と西辺は1間で、西壁の中央の柱穴は試掘段階でとばされた可能性が高い。 **柱穴** 大体円形を呈し、径40～60cm前後。深さは30～50cm前後で、146.8m前後（P_1、P_2）と146.5m前後（P_3、P_4、P_5、P_6）に分かれる。P_3、P_6は二段の底をもつ。 **重複関係** W—16と重複する。P_5の地層断面より本遺構が新しいと推定する。 （川崎）



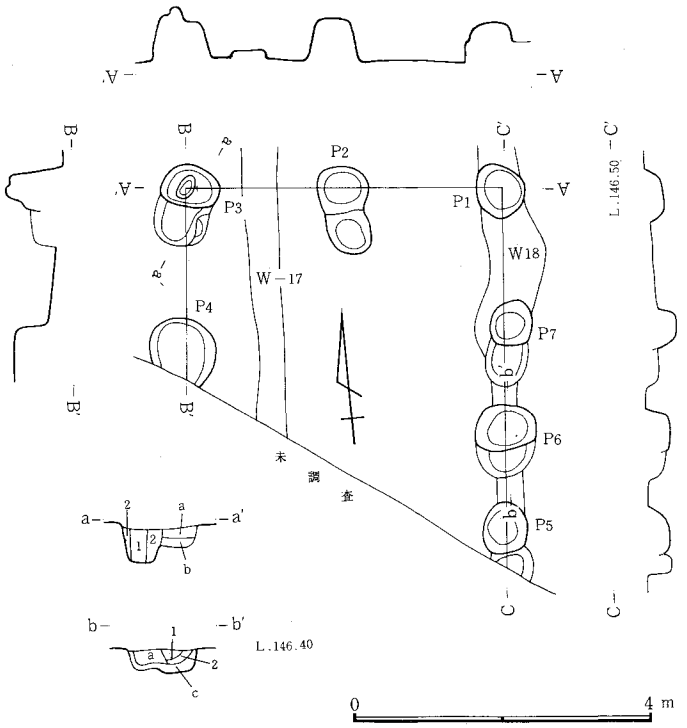
図—722 K—87・98号掘立柱建物跡関係図

K85号掘立柱建物跡（図—719 図版—47、121 表—293）

位置 西台地南辺のF103にある。台地南限に近く、東側100mほどのところに浅い谷が入る。 **形状** 2間（3.6m）×2間（3.3m）の南北に長い長方形。面積11.9m²、長軸方向N—20°—E。柱間寸法は桁行1.8+1.8m、梁行北辺が1.5+1.8m、南辺が1.5+1.8m。P_7が北側へズレている。 **柱穴** 円形を呈し、径は50cm前後。深さは30cm前後で底が平らな円筒形に近い掘り形をもつ。P_5は、長軸方向を対角線方向に向けている。 **遺物** 埋土中より、須恵坏(18)やカワラケ等が出土している。 **重複関係** W—17、18と重複し、P_5の埋土上に水流の痕があり、本遺構の方が旧いと推定する。 （川崎）

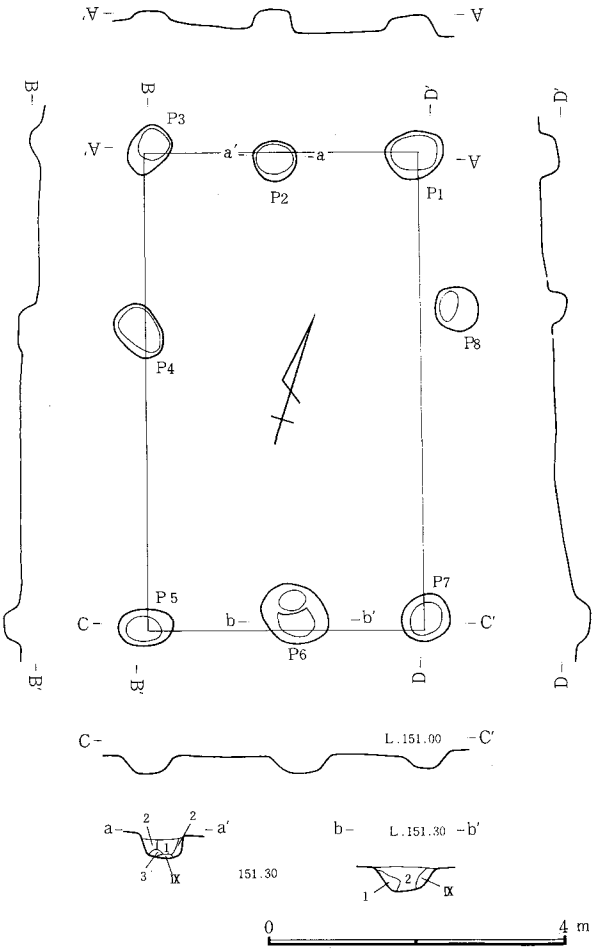


図—720 K—86・89号掘立柱建物跡関係図



1．黒褐色土。FP・C軽石混入。締りなし。2．黒褐色土。ローム粒・塊混入。a．(K89)褐色土。ローム粒主体。b．(K89)褐色土。ローム粒・塊主体。堅く締る。c．汚れたローム。

図—721 K—86号掘立柱建物跡



1．黒色土。多量のFP・C軽石、少量のローム混入。2．軽石を含む黒色土とロームの混土。3．ローム。軽石含む黒色土少量混入。

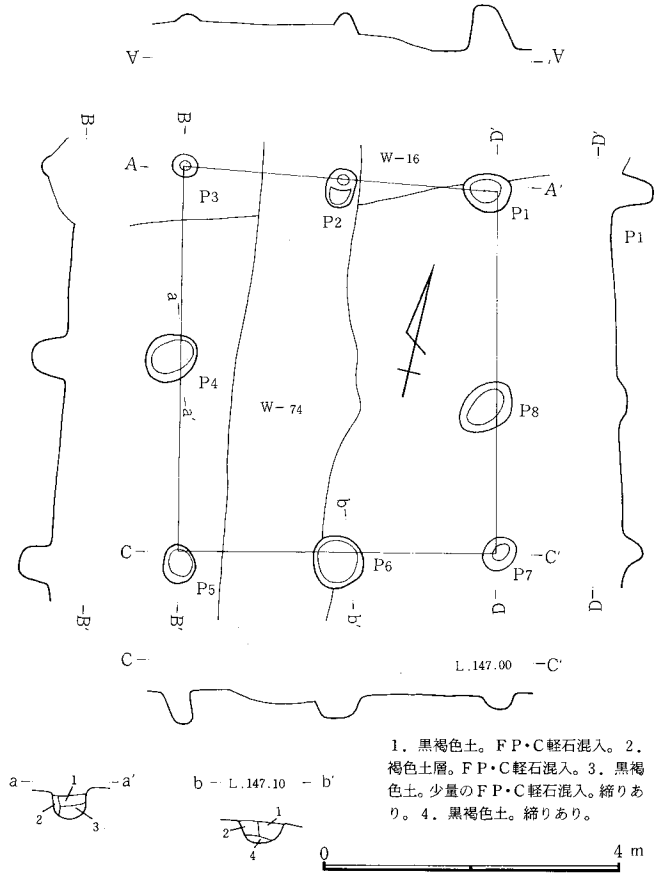
図—723 K—87号掘立柱建物跡

K86号掘立柱建物跡（図—720、721　図版—47）

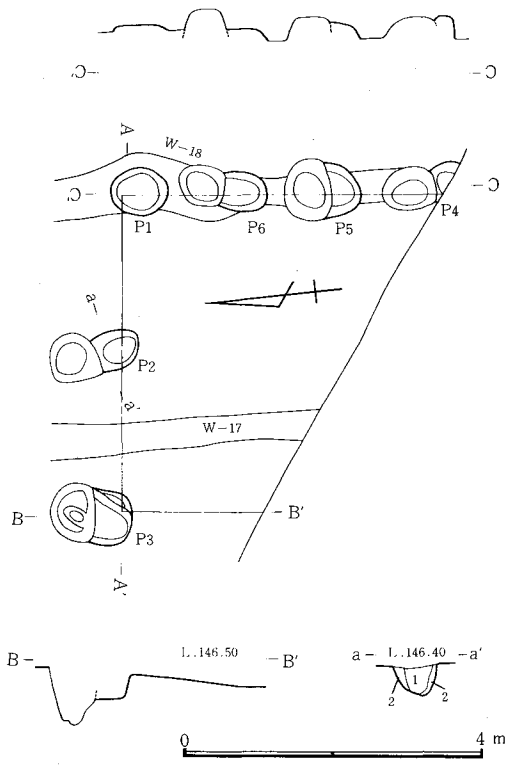
位置　西台地の南辺にあたるF103にある。K—89、W—17、W—72と重複している。南側が調査区域外なので、完掘していない。　**形状**　完掘していないので詳細は不明だが、東西方向に2間（4.2m）南北に3間（4.5m）は確実。P_5を南東隅と仮定すると、2間×2間（東辺3間）の可能性があることを付記しておく。柱間寸法は、北辺が2.1+2.1m東辺が1.8+1.5+1.2m（現状）、西辺が2.1m（現状）。長軸方向はN—4°—E。　**柱穴**　方形に近い円形で、径60～90cm前後、深さは40～60cm前後である。よく残っているP_1、P_2、P_3の掘り形は、深く底部が平らでしっかりしている。K—89と重複する柱穴では、本遺構の方が約20cm深くなっている。P_3は二段の底をもつ。　**重複関係**　K—89参照　（川崎）

K87号掘立柱建物跡（図—722、723　図版—47）

位置　西台地南辺に近いG2にある。この字状に連なる掘立柱建物跡の一つ。　**形状**　2間（6.3m）×2間（3.6m）の長方形。南北に長軸をとり、長軸方向はN—17°—W、面積24.6m²。柱間寸法は桁行西辺で2.4+3.9mの2間、東辺は2.1+4.2m。梁行1.8+1.8m。東辺のP_8は東に約60cmずれている。　**柱穴**　不整円形で、径60～70cm前後、深さは15～35cm前後である。全体的に径に比べて浅い掘り形である。底面標高は、北辺と南辺とでは約40cm南辺が低い。P_5に径18cmの柱痕が検出された。　**重複関係**　K—98及びK—104と重複しているが、切り合いがなく、新旧関係は不明である。　（川崎）



図—724　K—88号掘立柱建物跡



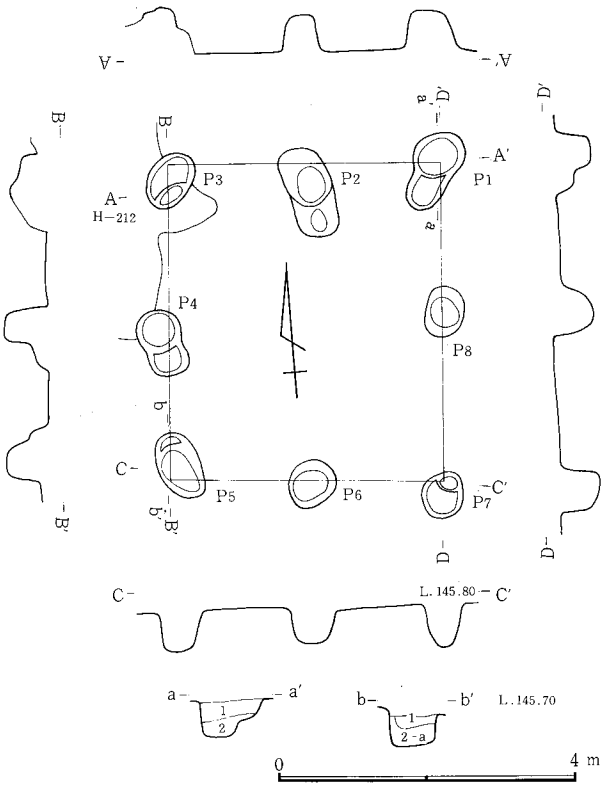
図—725　K—89号掘立柱建物跡

K88号掘立柱建物跡（図—724　図版—47）

位置　E102・101。西台地南辺中央やや東寄りで40m程北。　**形状**　2間（5.1・4.8m）×2間（4.2m）のやや不整な建物跡。柱間は南北方向で東側列北から2.7+2.1m、西側列2.4+2.7m、東西方向で北・南側とも2.1+2.1m。長軸方向はN—13°—W。面積は、26.5m²　**柱穴**　掘り形平面は、溝との重複関係から確認面に高低があり大きさはかなりふぞろいだが円形に近い。比較的大ぶりなP_1、P_4、P_6、P_8はやや長方形をうかがわせる。規模は重複に係わらない柱穴で見れば比較的小ぶりなP_5が43×40cm、大ぶりなP_8が72×57cm。深さはP_5が57cmで最大、P_8が21cmで最小。柱痕は不明。　**重複関係**　W16号溝が本遺構北側に東西に重なり、W74号溝が本遺構中央西寄りに南北に走っているが、いずれも新旧関係不明。　**出土遺物**　P_5内より土師甕片2庁出土。　（前原）

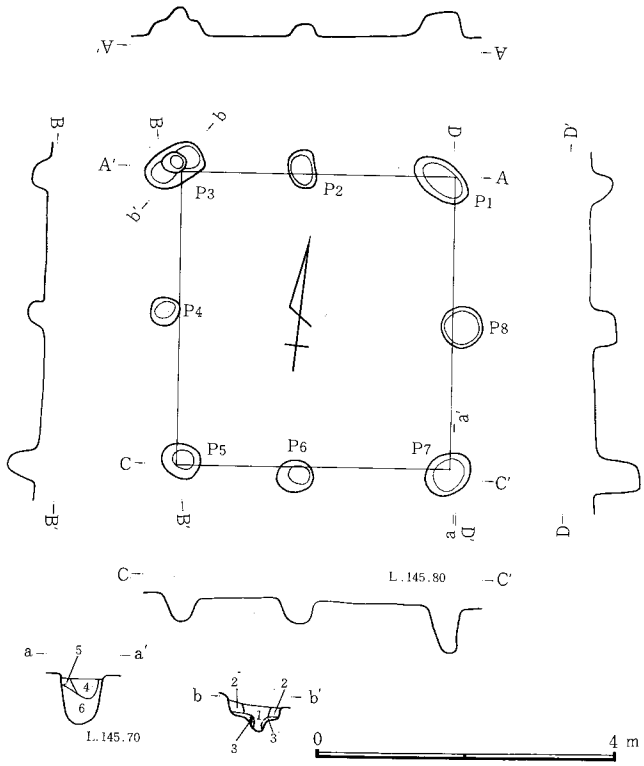
K89号掘立柱建物跡（図—720、725　図版—47）

位置　K—86に同じ。K—86から柱穴1つ分南にずれ、南側は調査区域外のため完掘していない。　**形状**　現状では、東西2間（4.2m）×南北3間（4.2m）で、長軸方向はN—7°—Eを向く。柱間寸法は北辺2.1+2.1m、東辺1.5+1.2+1.5mである。P_4を南東隅と仮定すれば、桁行3間、梁行2間（4.2m）のプランが推定できる。　**柱穴**　長方形に近い円形で、径70cm前後、深さ30cm前後で浅い。　**重複関係**　K—86、W—17、W—18、W—72と重複する。K—86との切り合い関係にあるP_3の地層断面（K—86参照）により、本遺構の方が旧いと思われる。W—17・18とは、本遺構のP_4の埋土をW—17・18が切っており、本遺構が旧い。またW—17・18にはB軽石が含まれており、古い順にK—89→K—86→W—18→W—17となる。W—72とは切り合いがなく不明。　（川崎）



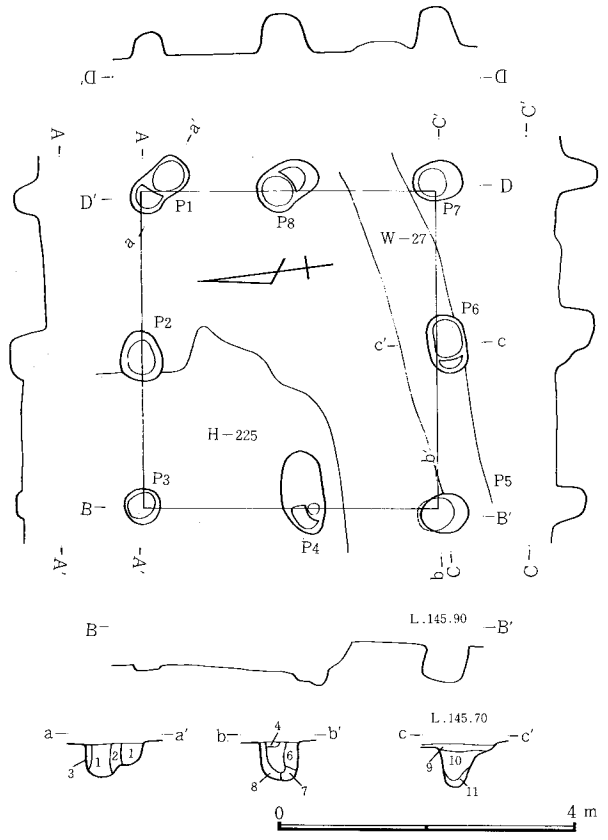
1．暗褐色土。ローム塊、若干のC軽石、焼土粒混入。2．黒褐色土。ローム塊混入。2-a．黒褐色土。若干のC軽石混入。

図－726　K－90号掘立柱建物跡



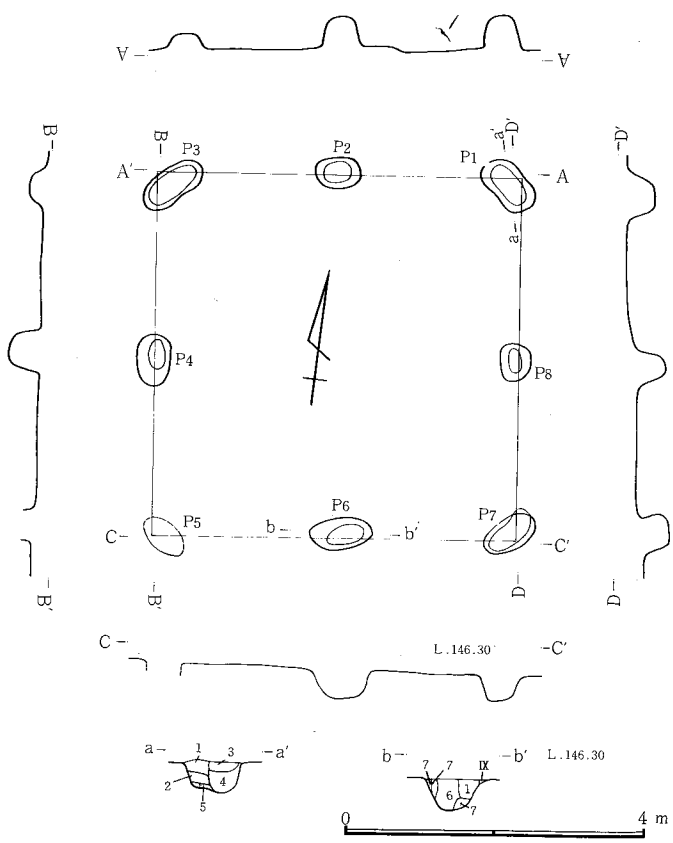
1．黒色土。若干のC軽石混入。締り弱い。2．黒色土。ローム塊混入。3．褐色土と黒色土の混土。4．黒色土。焼土、若干のC軽石混入。締り弱い。5．黒褐色土。締り弱い。6．黒色土。多量の褐色土混入。非常に堅く締る。

図－727　K－91号掘立柱建物跡



1．黒色土。炭化物、少量のローム塊、FP・C軽石軽石混入。締り弱い。2．黒褐色土。ローム粒、若干のFP・C軽石混入。締り弱い。3．褐色土。多量のローム混入。4．黒褐色土。暗褐色塊混入。5．黒色土。軽石混入。6．暗褐色土。軽石、多量のローム粒点在。7．黒色土。8．ロームと黒色土。9．暗褐色砂質土。(溝)10．暗褐色土。ローム塊、黒色土塊点在。11．汚れたローム。

図－728　K－92号掘立柱建物跡



1．黒褐色土。軽石、暗褐色土塊混入。2．黒褐色土。ローム粒、少量の軽石混入。3．黒褐色土。軽石、若干のローム粒、多量の暗褐色土塊混入。4．黒褐色土。軽石、暗褐色土塊、ローム粒点在。5．ローム。若干の黒色土混入。6．黒色土。多量のFP・C軽石、褐色土塊混入。7．黒褐色土細砂。

図－729　K－93号掘立柱建物跡

K90号掘立柱建物跡（図―726　図版―48）

位置　D103。本遺跡西台地南辺やや東寄りで15m程北、掘立柱建物跡集中部南縁。　**形状**　2間（4.2m）×2間（3.6m）の長方形の建物跡。柱間は南北方向で東、西側とも2.1+2.1m、東西方向で北・南側とも1.8+1.8mが計測される。長軸方向はN―4°―E。面積は15.1m²。　**柱穴**　掘り方平面は、P_1が円形を基本としながら2～3度の建て替えをうかがわせる不整形が多い。P_5は長楕円形。他は円形に近い。規模は平均的なP_6で66×54cm。深さはP_3が58cmで最大、P_8が43cmで最小。　**重複関係**　北西部でH212と重複し、H212のカマドが本遺構P_3の埋土を切っているので本遺構が旧。　**出土遺物**　付近全体に須恵器椀、土師器坏・甕の細片多数が散布していた。　**その他**　柱穴埋土の上部には粘土粒、焼土、炭化物、C軽石を含む赤茶けた層が見られた。

（前原）

K91号掘立柱建物跡（図―727　図版―48）

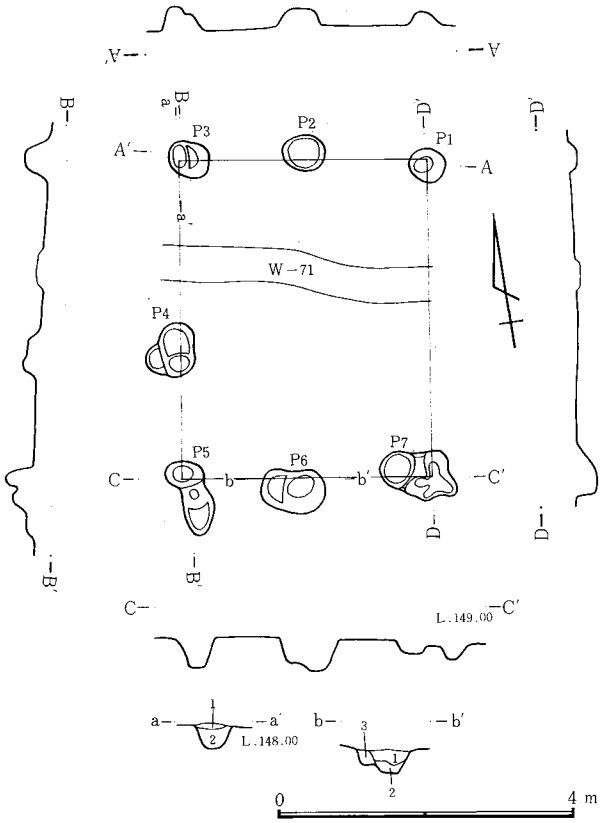
位置　D102。本遺跡西台地南辺中央よりやや東側を北へ20m程入った掘立柱建物跡集中部の東端。　**形状**　2間（3.9m）×2間（3.6m）の長方形の建物跡。柱間は南北方向東西列とも北から1.8+2.1m、東西方向南北列とも1.5+2.1m。長軸方向はN―6°―W。面積は14m²。　**柱穴**　掘り形平面のP_1、P_3、P_5、P_7が長軸を建物中央に直角に向けた楕円に近い形、その間はP_8が円形、他は、小ぶりな方形をうかがわせる円形。規模はP_3が78×46cmで最大、P_4が36×30cmで最小。深さはP_7が64cmで最大、P_1が20cmで最小。柱痕は不明。P_3は二段の掘り形をもつ。　**重複関係**　なし。　**その他**　本遺構に関する出土遺物なし。柱穴埋土は若干のFP・C軽石を含むかまたは含まず。全体的に軽石量、ロームブロック量の極めて少ない黒色土。P_7、P_8の東側は谷に近く落ち込んでいるため付近の表面の土も黒味がある。　（前原）

K92号掘立柱建物跡（図―728　図版―48）

位置　西台地南端のD102に位置する。掘立柱建物跡が一群として存在するなかの南の一群の東に所在する。　**形状**　2間（4.2m）×2間（3.9m）で、ほぼ正方形に近い。柱間寸法は東西方向が2.1+2.1mで、南北方向は西辺が北より2.1+1.8mで、東辺が同じく1.8+2.1mである。長軸方向はN―7.5°―Eで面積は16.4m²である。　**柱穴**　平面は隅丸長方形に近く、径に比して深目の円筒状の掘り形のものが多く、P_1、P_4、P_6、P_8は建て替えをうかがわせる。径は50～60cm前後で深さは50cm前後である。柱痕は顕著ではない。柱穴の底面の標高はほぼ145.2m前後である。　**遺物**　なし。　**重複関係**　H―225とW―27と重複する。H―225とは、P_3、P_4が床面下となり埋土が堅くなっているので、本遺構が旧いと考えられる。W―27とは、P_6の地層断面の上層にW―27の埋土があり、本遺構が旧いと考えられる。　（井野）

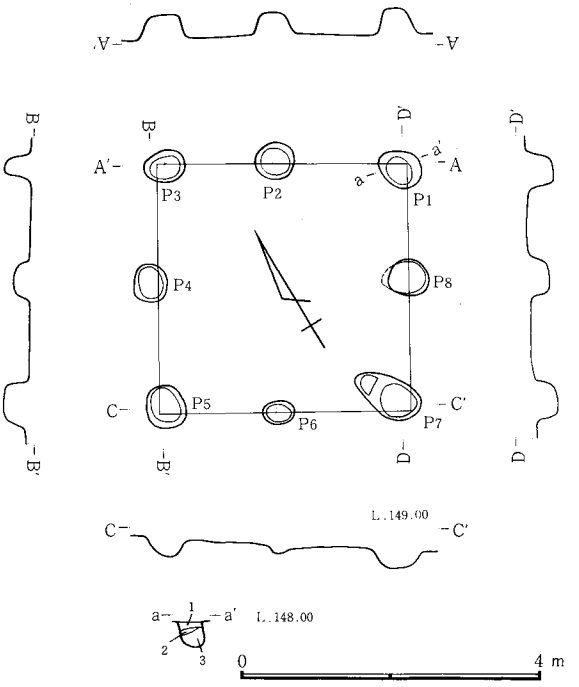
K93号掘立柱建物跡（図―729　図版―48）

位置　D101。　**形状**　2間（4.8m）×2間（4.8m）の正方形である。柱間寸法は全て2.4mである。長軸方向はN―7.5°―Wで面積は23.0m²である。　**柱穴**　四隅は長楕円形の平面で建物の対角線に直交するように掘られている。中間は棟の側筋に長軸をあわせるように掘られている。楕円形。径は80cm前後×40cm前後で深さは40cm前後である。柱穴の底面の標高は北辺が145.8m前後で南辺は145.6m前後である。　**遺物**　なし。南西隅の柱穴はグリッドにより失なわれている。　（井野）



1．暗褐色土。ローム塊、若干のFP・C軽石混入。締り強し。2．黒褐色土。褐色土、ローム粒混入。締り弱い。3．黒褐色土。若干のC軽石混入。締りあり。

図―730　K―94号掘立柱建物跡



1．黒褐色土。C軽石、ローム塊混入。堅く締る。2．黒褐色土。ローム塊。多量のC軽石混入。堅く締る。3．黒褐色土。C軽石、ローム粒・塊混入。

図―731　K―95号掘立柱建物跡

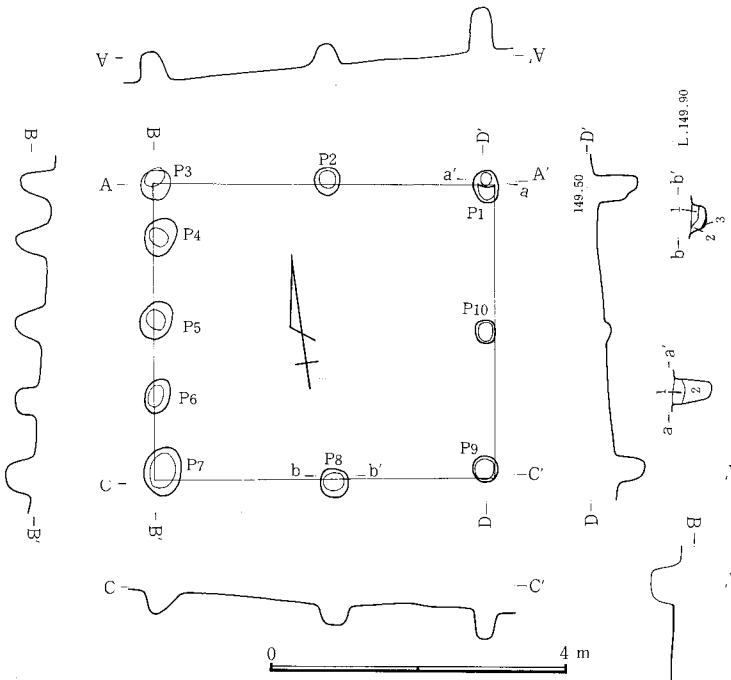
K94号掘立柱建物跡（図—730　図版—48）

位置　F1。本遺跡西台地南辺より北へ70m程の中央部やや東寄り。掘立柱建物跡集中部の南縁東寄り。北にH—208を臨む。**形状**　2間（4.2m）×2間（3.3m）の長方形の建物跡。柱間は南北方向で西側列北から2.4+1.8m、東側は中間にあたる柱穴は検出されず、東西方向は北側が1.7+1.6m、南側は西から1.7+1.6m。長軸方向はN—20°—E。面積は13.9m²。**柱穴**　掘り形平面はP_1、P_2、P_7がほぼ円形、P_3、P_4、P_5、P_6、P_7は、だるま形で円に近い形を主としながらも数度の建て替えをうかがわせる不定形。規模はP_1が44×41cmで最少。建て替えと考えられる部分を含めP_7が103×45cmで最大。深さはP_6が43cmで最大。P_1が22cmで最少。柱痕は確実と思われる検出状態なし。**重複関係**　W71号溝が東西に通っているが新旧不明。（前原）

K95号掘立柱建物跡（図—731　図版—48、121　表—293）

位置　E2に位置し、北西にK96号、西に99号掘立柱建物跡が並ぶ。**形状**　2間（3.3m）×2間（3.3m）のきちんとした正方形を呈す。柱間寸法は1.5mと1.8mを基本とする。南北方向を主軸とした時、北から30.5°東に振れており、面積10.9m²を測る。**柱穴**　P_6を除いてしっかりした掘り形を持つ。平面形は西側に並ぶP_3、P_4、P_5が隅丸方形に近い形状を示すのに対し、それ以外は円形を基本としているようである。底も安定したフラットな面を持ち、全般的に丁寧な掘り形と見ることができる。**遺物**　底部にヘラ削りを持ち、口縁部が直に立ち上がる傾向の土師器坏3個体（2・3・7）と比較的厚手の壺1個体(24)が出土している。（田口）

K96号掘立柱建物跡（図—732　図版—48）



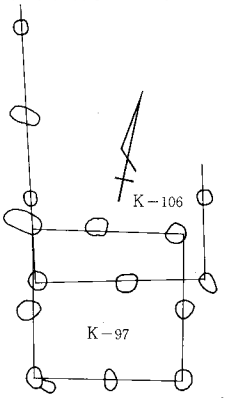
1．黒色土。ローム粒、C軽石混入。堅く締る。2．ローム塊、黒色土の混土。締りなし。3．汚れたローム。

図—732　K—96号掘立柱建物跡

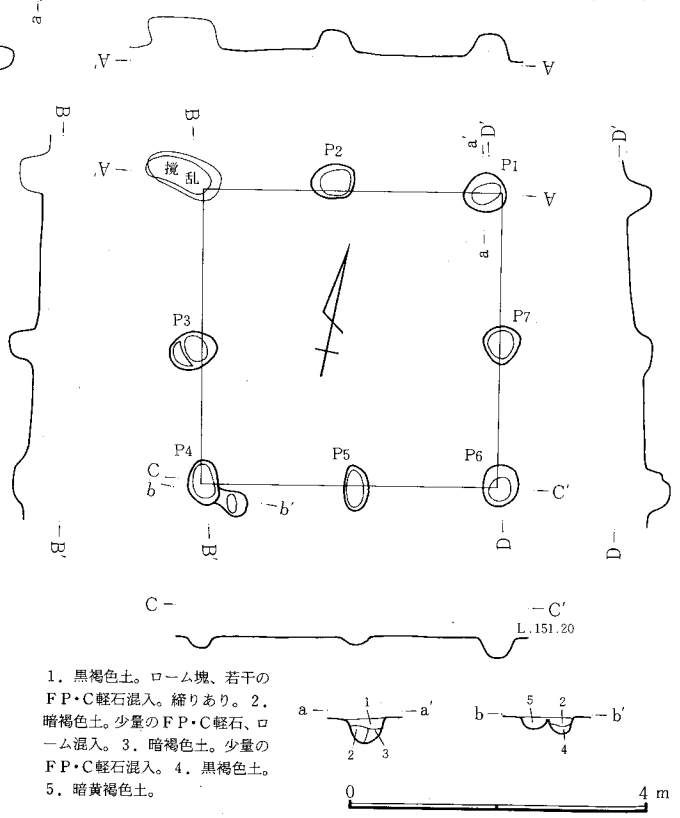
位置　E2に位置し、北にK100号、西に71号、南に95号掘立柱建物跡がそれぞれ隣接する。**形状**　基本的には2間（4.5m）×2間（3.9m）の長方形プランであるが、西側梁行には5個の柱穴が並ぶ。面積は17.6m²を測り、長軸をN—8°—Eの方位にとる。**柱穴**　平面円形を呈し、全てしっかりした掘り形を持ち、特に四隅に位置するP_1、P_3、P_7、P_9は深くなる傾向がある。西側梁行の5個の柱穴は径が大きく、柱間寸法も狭くなることから入口施設、あるいはそれに類する施設の造作を思わせる。**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土は見られなかった。（田口）

K97号掘立柱建物跡（図—733、734）

位置　G2・3。掘立柱建物跡集中部北縁。**形状**　2間（3.9m）×2間（3.9m）の正方形の建物跡。但し北西角にあたる柱穴P_3はカマ掘による攪乱を受けており、位置、規模とも不確実。従って以下それに関する記述は推定か除外。柱間は南北方向で東、西側列とも2.1+1.8m、東西方向で北側列西から1.8+2.1m、南側列2.1+1.8m。南北軸の傾きはN—12.5°—W。面積は15.2m²。**柱穴**　掘り形平面は方形に近い不整な円形が基本である。全体的に掘り込みは浅く、規模は平均的なP_2で52×45cm、短軸が最小のP_6で



図—733　K—97・106号掘立柱建物跡関係図

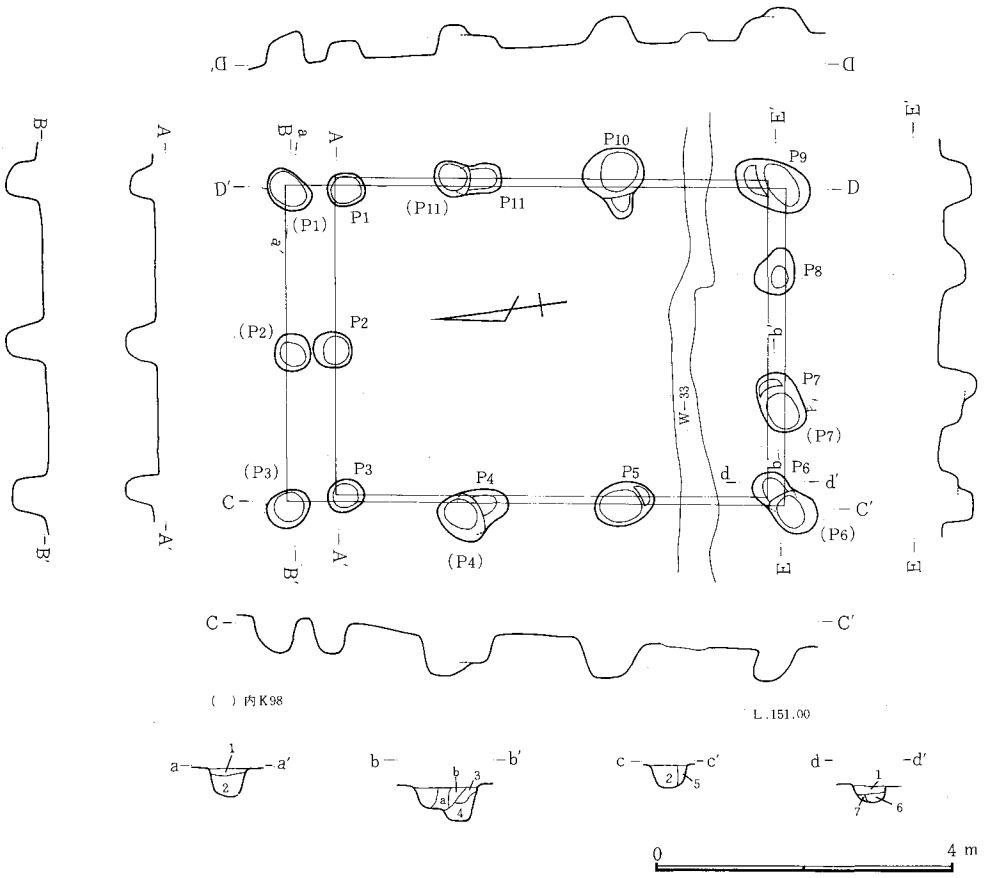


1．黒褐色土。ローム塊、若干のFP・C軽石混入。締りあり。2．暗褐色土。少量のFP・C軽石、ローム混入。3．暗褐色土。少量のFP・C軽石混入。4．黒褐色土。5．暗黄褐色土。

図—734　K—97号掘立柱建物跡

58×28cm。深さはP_6が17cmで最小。柱痕は確実なものは検出されなかった。 **重複関係** 北側に南北軸をほぼ同じとするK106号掘立柱建物跡と重複。切り合いなく新旧は不明。 **遺物** 本遺構に関係する遺物は検出されなかった。 (前原)

K98、104号掘立柱建物跡 (図—722、735 図版—48)



1．暗褐色土。FP・C軽石混入。2．黒褐色土。若干のFP・C軽石、ローム塊混入。締りはやや弱い。3．暗褐色土。若干のローム混入。4．暗褐色土。ローム、若干の軽石混入。a．(K14)暗褐色土。軽石若干混入。b．(K14)暗褐色土。ローム塊、黒色土塊混入。締りあり。5．暗黄褐色土。ローム塊混入。6．褐色土。多量のローム塊混入。7．褐色土。

図—736 K—98・104号掘立柱建物跡

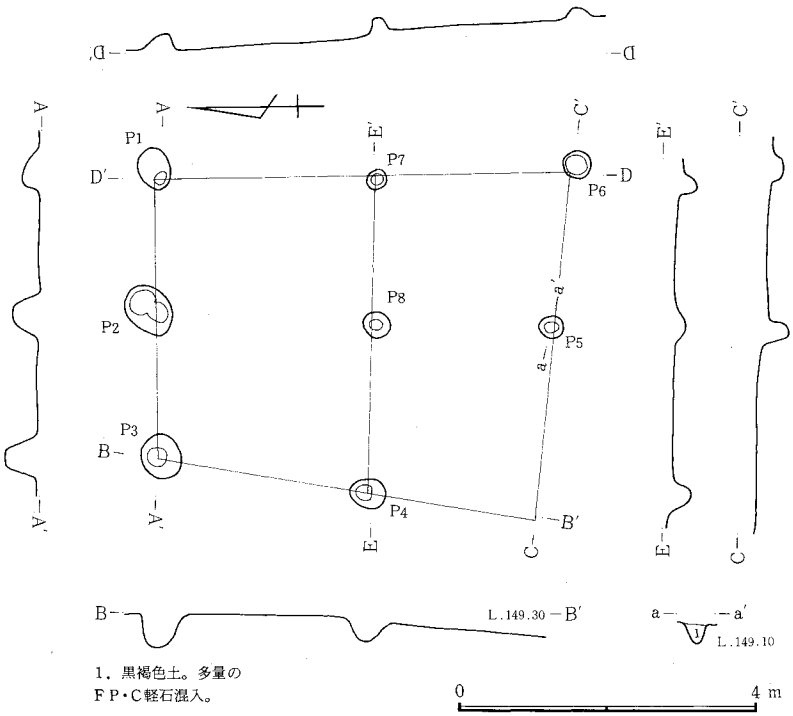
〔K98〕 **位置** 調査区南西端のG2に位置する。西台地の南への緩斜面上に所在する。付近には竪穴住居跡や掘立柱建物群があり、北の掘立柱建物跡群の中央部に位置している。 **形状** 3間(6.6m)×2間(4.2m)の長方形である。南辺は3間(柱間寸法は南北方向両辺とも北より)2.2+2.2+2.2mで、東西方向は、北辺が2.1+2.1mで、南辺が西より1.5+1.5+1.2mである。長軸方向はN—8.5°—Eで面積は27.7m²である。 **柱穴** 平面は隅丸長方形に近い。掘り形は円筒形に近い。重複するK—104にくらべると深く径も大きい。径は60cm前後で深さは50cm前後である。柱穴の底面の標高は、南辺ほぼ150.3m前後が多く、北辺は150.5m前後が多い。 **遺物** なし。 **重複関係** K—104と重複する。K—98のP_7、K—104のP_7の地層断面の切り合いによりK—98が古い。 〔K—104〕 **位置** G2。K—98と重複している。 **形状** 3間(5.7m)+2間(4.2m)の長方形である。南辺は3間である。柱間寸法は、南北方向が、西辺、東辺ともに北より1.8+1.8+2.1mを計る。東西方向は、北辺が、2.1m+2.1mで、南辺が西より、1.2m+1.8m+1.2mである。長軸方向は、N—8.5°—Eで面積は23.9m²である。 **柱穴** 重複するK—98にくらべて浅目である。新旧関係でK—104が新しいことにも関係しているか。平面はP_1、P_2、P_3が円形で、P_4、P_7、P_{11}は方形である。円筒形の掘り形である。径は、P_1、P_2、P_3が45cm前後で、P_4、P_7、P_{11}は40×50cm前後になっている。深さは30cm前後のものが多く、K—98にくらべて10cm浅い。 **重複関係** K—98と重複する。P_7の切り合いより、本遺構が新しいと考えられ、K—104は、K—98の建て替えとも考えられる。W—33と重複する。切り合い関係はないが、構が新しいと考えられる。K—87とは新旧不明である。 (富澤)

K99号掘立柱建物跡 (図—736)

位置 E2。 **形状** 南西角にあたる柱穴が試掘トレンチ内となり確認されないが2間(5.4m)×2間(北側3.7m、中央部4.2m、南側推定4.6m)で北辺に比べ南辺の広がった台形に近い形の総柱建物跡と考えられる。柱間は南北方向西列2.8m、中央列北から2.8+2.4m、東側列2.9+2.6m、東西方向北側列西から1.9+1.8m、中央列2.2+2.0m。長軸方向はN—4°—W。面積は推定22.4m²。 **柱穴** 掘り形平面はP_2が隅丸長方形を呈すが、底部は建て替えをうかがわせるだるま形。他は不整な円に近い形。規模はP_2が最大で71×54cm、P_4〜P_8は小ぶりでP_7の28×26cmが最小。深さはP_3の44cmが最大で、P_6、P_8が17cmで最小。柱痕は認められなかった。 **重複関係** なし。 **遺物** 本遺構に関する出土遺物なし。 (前原)

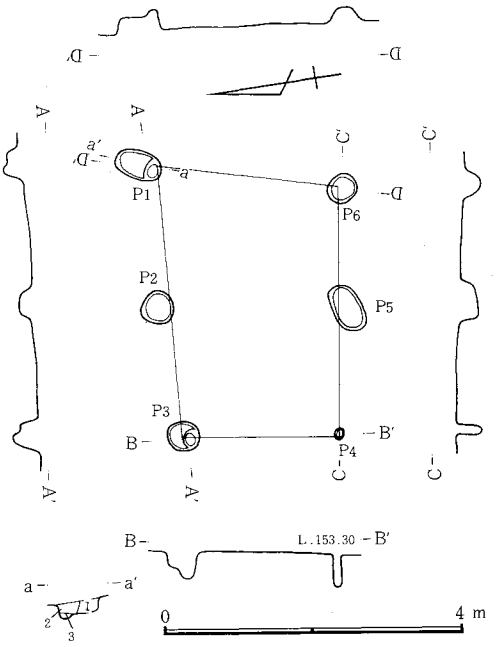
K100号掘立柱建物跡 (図—737)

位置 E3に位置し、南西にK71号、南に96号掘立柱建物跡が隣接する。 **形状** 2間×1間を基本とするものの、北に向かって大きく開く傾向にあり、台形に近いプランを持つ。東辺2.4m、西辺2.1m北辺西より1.8+1.8m、南辺西より1.8+1.5m。 **柱穴** P_4は試掘グリッドによってほとんど掘り形をとどめていなかったが、P_1、P_5、P_6は隅丸方形の、P_2、P_5は円形のプランを持つようである。特にP_3はしっかりした掘り形を持っており、中央に一段低い部分があることから、柱の受けを示すものと考えられる。P_1も二段の底をもつ。 **遺物** 関連する遺物の出土は見られなかった。 (田口)



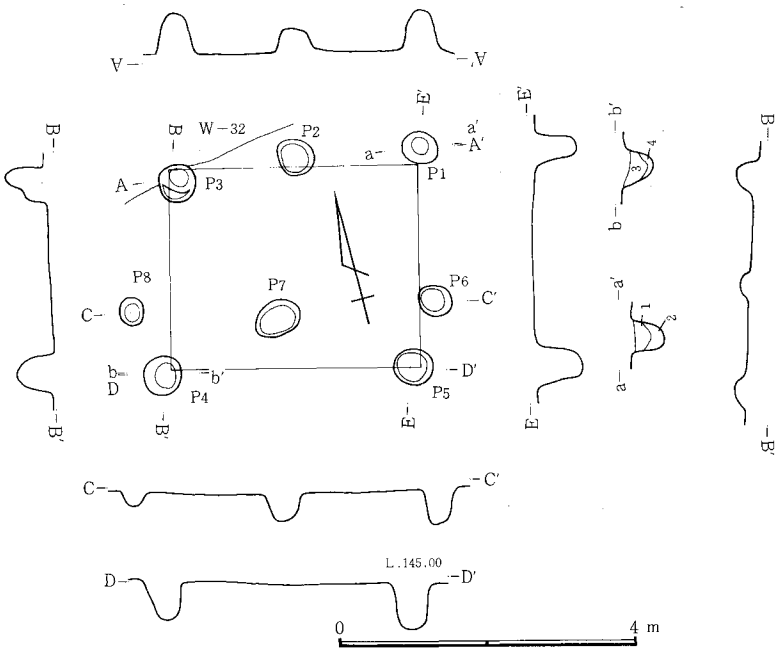
1．黒褐色土。多量のFP・C軽石混入。

図－736　K－99号掘立柱建物跡



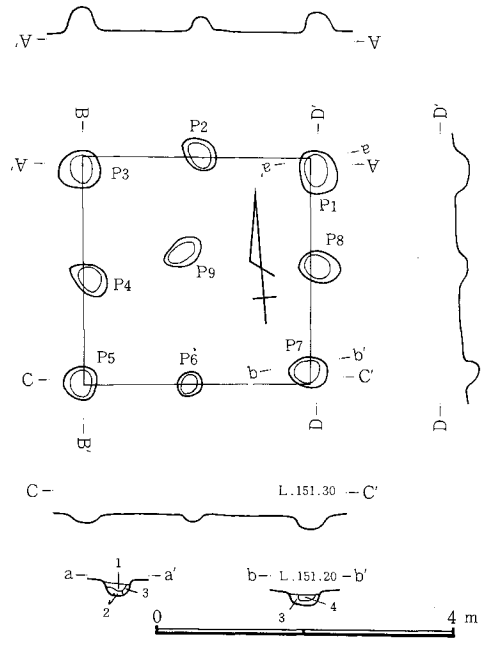
1．黒色土。C軽石、ローム塊混入。堅く締る。2．暗褐色土。C軽石、ローム塊混入。3．暗褐色土。ローム粒混入。締りなし。

図－737　K－100号掘立柱建物跡



1．黒色土。多量のC軽石混入。2．黒褐色土。粘性あり。堅く締る。3．黒色土。ローム塊混入。締り弱い。4．黒褐色土。多量のローム粒混入。粘性あり、締り弱い。

図－738　K－101号掘立柱建物跡



1．黒褐色土。若干のC軽石、ローム塊混入。2．暗黄褐色土。3．褐色土。ローム塊混入。4．褐色土。締り弱。

図－739　K－102号掘立柱建物跡

K101号掘立柱建物跡（図—738　図版—49、121　表—290）

位置　C・D102。西台地の南で、南への緩斜面上に所在する。周辺は掘立柱建物跡群となっており、それに属する南の小掘立柱建物跡群の東に位置する。　**形状**　建物跡としては北辺が変則的な並びをもっている。2間（3.3m）×1間（2.7m）の長方形である。柱間寸法は北辺が1.7＋1.7mである。長軸方向はN－102.5°－Eで面積は8.9㎡である。P_6～P_8は南辺と同じ方向に並ぶが関係はないものと考えられる。　**柱穴**　平面は円形で、掘り形は径にくらべて深さがある円筒形になっている。径は50cm前後で、深さも50cm前後である。柱穴底面のの標高は四隅が144.3m前後で、P_2・P_8は浅くなっている。　**遺物**　埋土中に須恵器蓋(26)、高台埦、土師器坏、羽釜。　**重複関係**　W—32と重複。本遺構が新しい。　（井野）

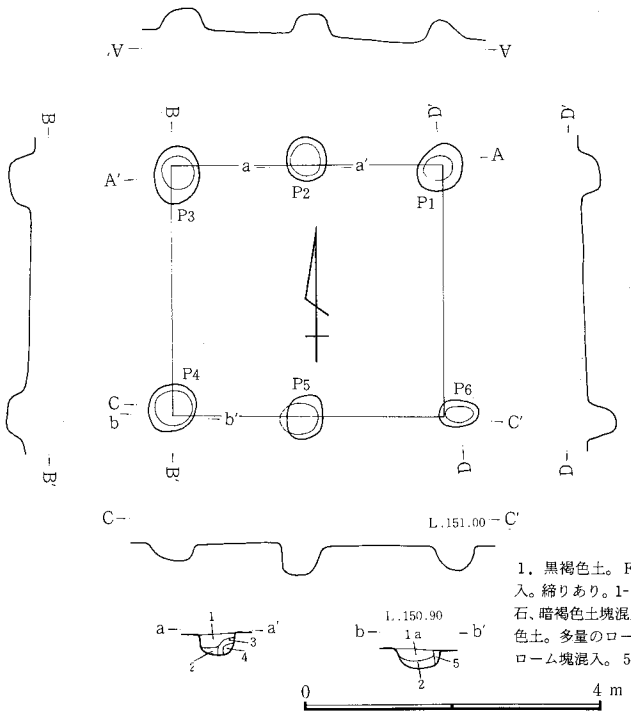
K102号掘立柱建物跡（図—739　図版—49、121　表—290）

位置　H2。　**形状**　2間（3.0m）×2間（3.0m）の正方形の建物跡。P_9が埋土に他の柱穴との共通点がうかがわれるので、位置的にはやや問題はあるが総柱建物跡の可能性もある。柱間はP_9を除けば東西方向、南北方向とも1.5＋1.5mと考えられる。南

北軸の傾きはN－5°－E。面積は9.0m²。 **柱穴** 掘り形平面はおおむね隅丸長方形に近い。規模はP_3が55×50cmで最大、P_6が32×32cmで最少。深さは全体的に浅くP_3の34cmが最大、P_6の15cmが最小。なおP_9は48×36cm、深さ23cmを測る。 **重複関係** なし。K87号掘立柱建物跡が隣接。 **出土遺物** 図－780に掲示した須恵器坏(20)の他、土師器甕、須恵器高台埦・蓋、土師器杯・甕破片多数、羽釜片1、灰釉高台埦破片1、鉄滓3が本遺構範囲内に散布。 (前原)

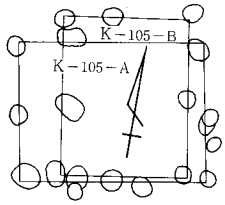
K103号掘立柱建物跡（図－740 図版－121 表－293）

位置 H2。 **形状** 東西に長軸をもつ長方形で、東西2間(3.6m)×南北1間(3.3m)、面積は11.2m²である。柱間寸法は東西が1.8mで、南北が3.3mである。長軸方向はN－92°－E。 **柱穴** 平面は円形のものが多く掘り形の断面は径にくらべ深さのない逆台形のものが多い。径は50～60cmで、深さは30cm前後のものが多い。P_5、P_6は51、41cmと深い。柱痕は不明。底面標高はP_1～P_3が150.5～6mで、P_4～P_6が150.2～4m前後である。 **重複関係** H－184、K－33と重複する。H－184とはP_1の埋土との新旧で、K－103が新しいと考えられる。K－33とは切り合い関係がなく不明である。H－182と重複するが、すでに埋土がなく新旧は不明である。 (井野)

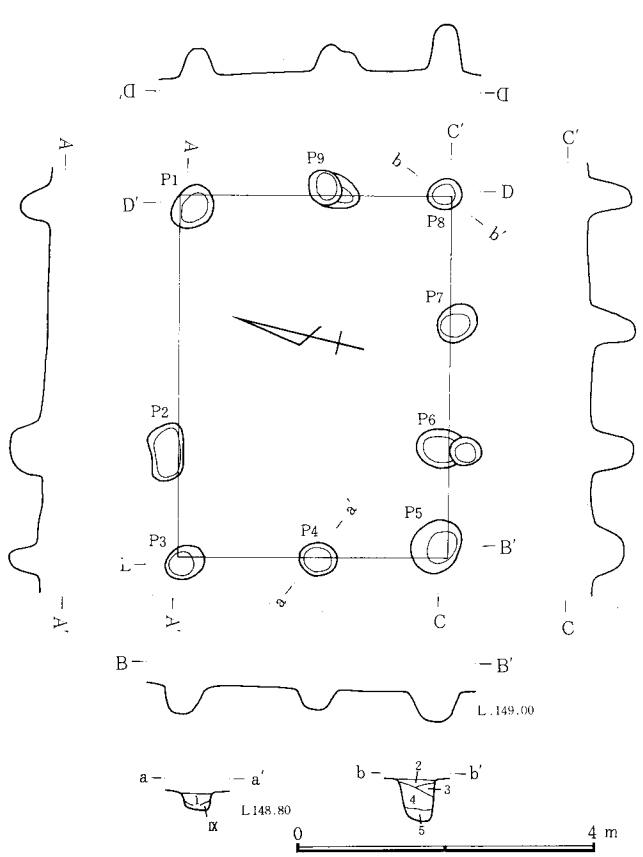


1．黒褐色土。FP・C軽石、ローム塊混入。締りあり。1-a．黒褐色土。FP・C軽石、暗褐色土塊混入。2．黒褐色土。3．褐色土。多量のローム塊混入。4．黒色土。ローム塊混入。5．黄褐色砂層。

図－740 K－103号掘立柱建物跡

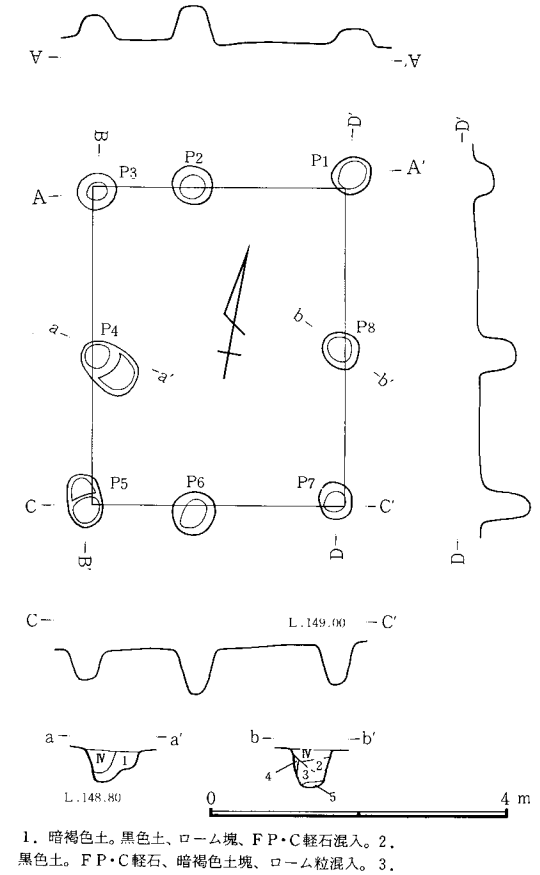


図－741 K－105－A・B号掘立柱建物跡関係図



1．黒色土。多量のC軽石、若干のFP軽石混入。2．暗褐色砂質土。(耕作土)3．暗褐色砂質土。ローム混入。4．暗褐色土。FP・C軽石混入。5．黒色土。多量のローム混入。

図－742 K－105－A号掘立柱建物跡



1．暗褐色土。黒色土、ローム塊、FP・C軽石混入。2．黒色土。FP・C軽石、暗褐色土塊、ローム粒混入。3．暗褐色土。若干のローム粒混入。4．暗褐色砂質土。5．黒色土。軽石混入。堅く締る。

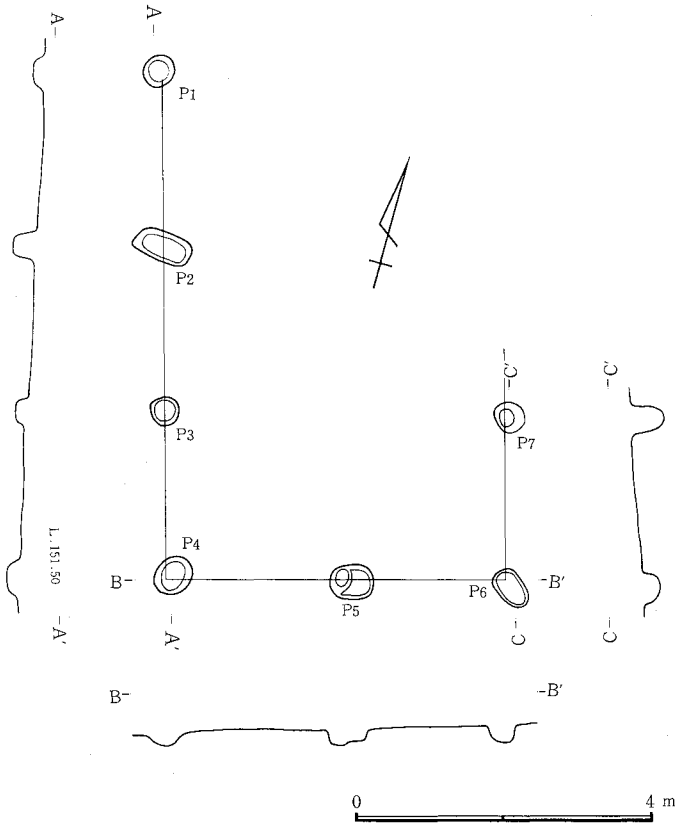
図－743 K－105－B号掘立柱建物跡

K105A号掘立柱建物跡（図―741、742　図版―49）

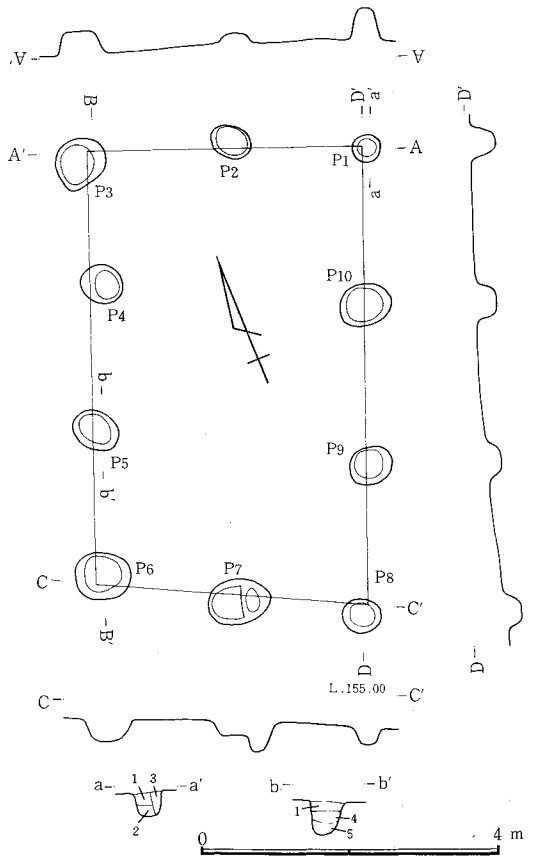
位置　G101に位置し、北でK39号と37号掘立柱建物跡の重複遺構に接する。　**形状**　北側柱列2間(3.6m)、南側柱列3間×2間(4.8m)の変則的な間取りを持つ。P_2に対応する形でP_6が存在し、何が特別な施設のあったことを推定される。長方形を呈し、長軸は北から9°西に振れている。また、P_6、P_9は建て替えであろうか。面積は17.3㎡を測る。　**柱穴**　基本的には円形の掘り形を持つものと考えられる。いずれもしっかりした掘り形を持つが、特に南側柱列、P_5、P_6、P_7、P_8のラインはその中でも深くなる傾向がある。　**重複関係**　K105B号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。　**遺物**　関連する遺物の出土は見られなかった。　（田口）

K105B号掘立柱建物跡（図―741、743）

位置　K105A号掘立柱建物跡同様、G101に位置する。　**形状**　2間(4.2m)×2間(3.3m)の長方形プランを持ち、面積13.9㎡を測る。　**柱穴**　全て平面円形の掘り形を持ち、径に比して深さのあるしっかりした柱穴が多い。P_4とP_5はダルマ形を呈し、建て替えの可能性をうかがわせる。また、径は50cm前後にまとまりを見せるようである。　**重複関係**　K105A号掘立柱建物跡とほぼ同様の長軸方向を持って重複するが、新旧関係は不明である。　**遺物**　関連する遺物の出土は見られなかった。　（田口）



図―744　K―106号掘立柱建物跡



1．黒褐色砂質土。2．黒褐色土。3．黒褐色土。やや砂質。4．黄褐色土。ローム主体。5．汚れたローム。

図―745　K―107号掘立柱建物跡

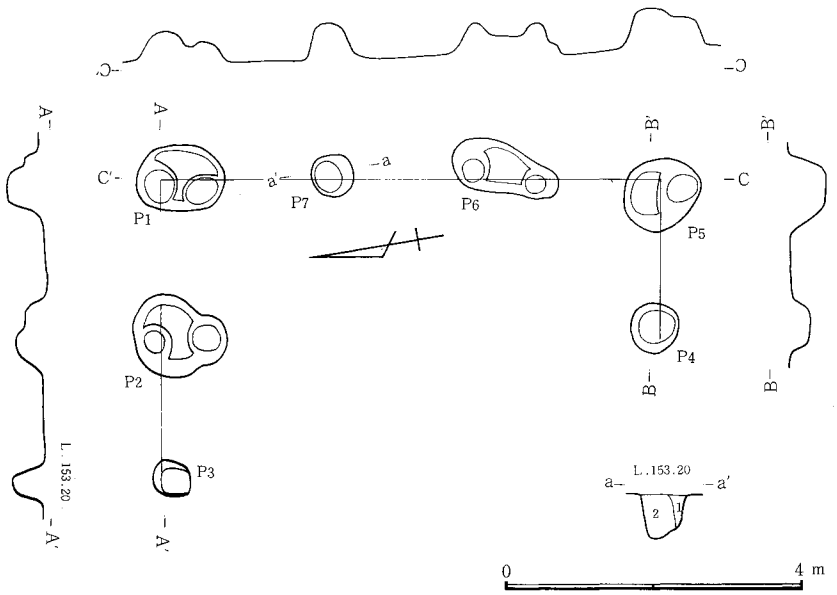
K106号掘立柱建物跡（図―733、744　図版―49）

位置　G3。北東部は未調査区であり遺構として完掘されていない。以下調査部分のみか、調査部分からの推定を含む。　**形状**　3間(6.6m)×2間(4.5m)と考えられる建物跡。柱間は東西方向南側列西から2.4+2.1m、南北方向西側列2.1+2.4+2.1m、東側列南端2.1m。長軸方向N―16°―W。推定29.7㎡。　**柱穴**　掘り形平面、P_2、P_4、P_5が長方形、P_1、P_3が円形、P_6、P_7が楕円形。規模はP_1が42×38cm、P_2が72×35cm、P_4が50×45cm、深さはP_7が43cmで最大、P_3が16cmで最少。全体的に小ぶりで浅い。柱痕は不明。　**重複関係**　K97号掘立柱建物跡と重複するが切り合い関係がないため新旧は不明。　**遺物**　関係遺物の出土なし。　（前原）

K107号掘立柱建物跡（図―745　図版―49、121　表―293）

位置　ロ8に位置し、南への緩斜面に立地する。　**形状**　3間(5.7mないし6.0m)×2間(3.6m)の長方形である。長軸は東西で差があり、西は北より1.8+1.8+2.1mで、東は同じく2.1+2.1+1.8mである。短軸は南北とも1.8+1.8mである。長軸方向はN―19.5°―Eで面積は20.5㎡である。　**柱穴**　やや方形に近い円形で、径にくらべて浅い掘り形をしている。径は40～70cm前後×40～60cm前後である。深さは20～40cm前後である。　**重複関係**　H247号住居跡と重複しているが、P_1がカマドを切っているため本遺構が新しい。　**遺物**　P_{10}から土師器杯が出土。P_4から鉄滓、P_7から須恵器片が出土している。また須恵器坏(図19)と羽釜(図27)が出土している。　（井野）

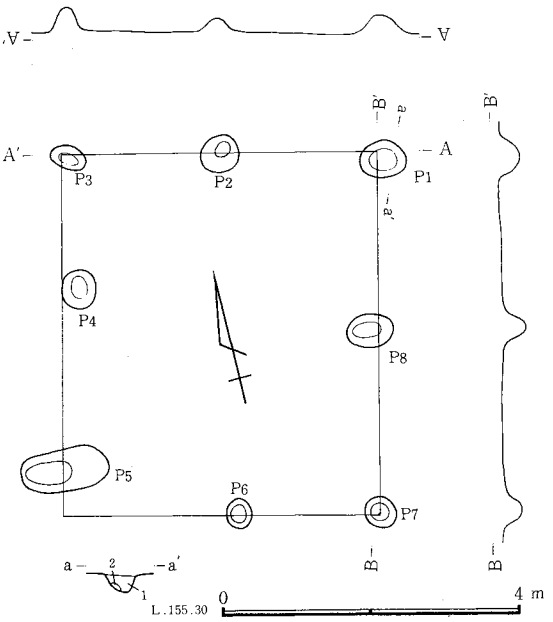
K108号掘立柱建物跡（図—746　図版—49）



1．黒色土。FP・C・B軽石、ローム塊混入。締りなし。2．茶褐色土。FP・C・B軽石、ローム粒、焼土混入。

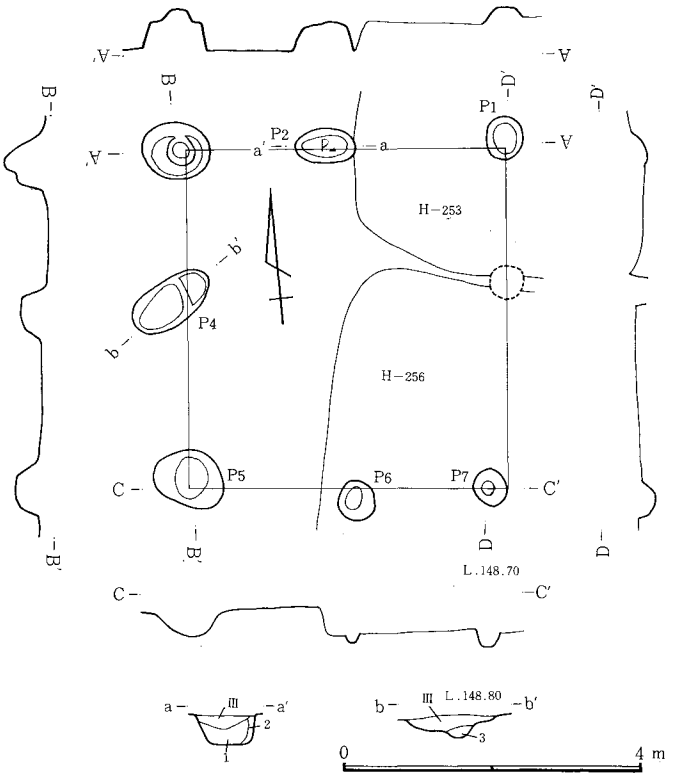
図—746　K—108号掘立柱建物跡

位置　B8。　**形状**　西側が失なわれているが、南北に長軸をもつ長方形と推定される。南北（東辺のみ）3間（6.6m）×東西2間（3.9m以上）〔南辺は1間（2.1m）以上〕。面積は3間×2間で、25.7m²と推定される。柱間寸法は南北が（東のみ）2.1+2.1+2.4mで、東西は、北辺が、西より1.8+2.1m、南辺が2.1mである。長軸方向はN—20°—Eである。　**柱穴**　平面は小さな円形に近いものと、やや大きな長円形のものに分かれる。断面は逆台形状を呈す。大きな柱穴は小さな小ピットを伴っており（P_1、P_2、P_5、P_6）、束柱もしくは建て替えと考えられる。径は小さいものが50～60cm前後で、大きなものが80～120cm前後のものが多い。深さは小径のものが28～54cm、大径のものは33～45cmで、大径の柱穴に伴う小ピットは11～22cm浅い。H—250と重複。H—250が旧い。　（井野）



1．黒色土。FP・C・B軽石混入。2．汚れたローム。

図—747　K—109号掘立柱建物跡



1．黒色土。FP・C軽石、ローム塊混入。2．ローム主体。黒色土混入。3．黒色土。

図—748　K—110号掘立柱建物跡

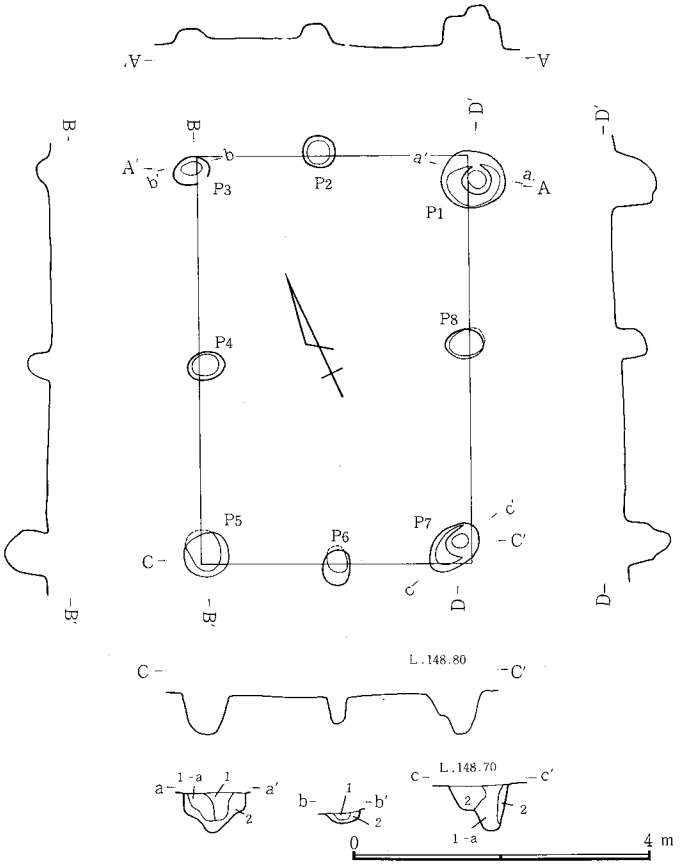
K109号掘立柱建物跡（図—747　図版—49）

位置　B8。　**形状**　2間（東辺4.8m、西辺4.2m）×東西2間（4.2m）の長方形である。面積は20.2m²。柱間寸法は、南北は西辺が1.8+2.4mで東辺が2.4+1.8mである。長軸方向はN—23.5°—Eである。柱穴の位置はP_4～P_6はP_1～P_3、P_7、P_8にくらべると対応する位置よりずれている。柱穴平面は小ぶりな円に近い形で、断面はすり鉢形で浅い。径は40～60cm前後のものが多い。深さは不明のものがあるが、14～36mを測る。柱痕は明らかではない。　（井野）

K110号掘立柱建物跡（図—748　図版—49）

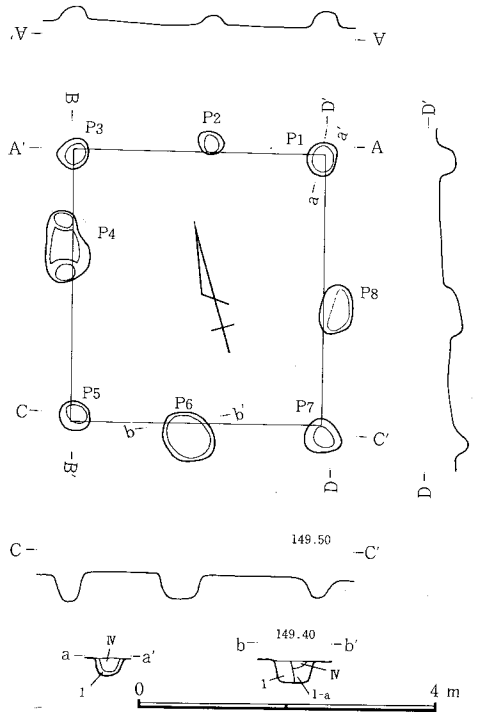
位置　ロ1。　**形状**　2間（4.5m）×2間（4.2m）の南北方向に長軸をとる建物跡で、正方形に近い長方形をしている。柱間の距離は、長軸方向2.1+2.4mで北側がやや短いが、短軸方向は中間の柱穴が左右にややずれている。長軸方向の方位はN—5°—E。面積18.9m²。　**柱穴**　P_1、P_6、P_7が円形、P_2、P_3、P_4、P_5が楕円形に近い形をしており、重複しているP_3を除くピッ

トは底の平らな大振りな逆台形の断面を持つ。　**重複関係**　H253・256号住居跡と重複。P_7に焼土が入っていることからH256住居跡が新しく、土器形式の違いからH253住居跡が更に新しい。P_3はK111号掘立柱建物跡のP_1と共有で、地層断面の観察からK111号掘立柱建物跡が新しい。　**遺物**　精査中埋土より須恵器坏片を出土した。　（松村）



1．黒色土主体。FP・C軽石、ローム粒混入。1-a．1よりローム粒多い。2．ローム粒と黒色土の混土。

図－749　K－111号掘立柱建物跡

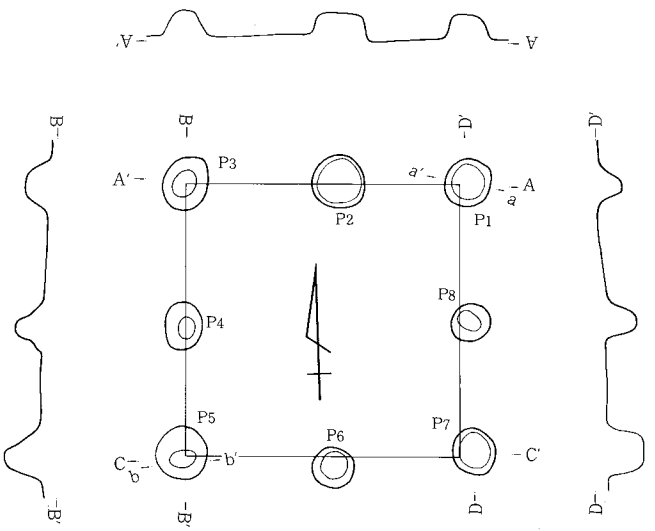


1．ローム粒主体。黒色土混入。1-a．1より部分的に黒色土が多い。

図－750　K－112号掘立柱建物跡

K111号掘立柱建物跡（図—749　図版—50）

位置　ロ1にあり、東にH253、256号住居跡を臨む。　**形状**　2間（5.4m）×2間（3.6m）の南北方向に長軸をとり、P_2、P_6がやや外側にはみだした形の長方形。柱間の距離は、東、西辺で2.7＋2.7m、南、北辺で1.8＋1.8mと各辺ともほぼ中間に小振りな柱穴をもつ。長軸方向はN—24°—Eで、面積19.4㎡。　**柱穴**　ほぼ円形の掘り形で、四隅の柱穴はP_3を除けば径50cm以上と大きく、深さも50cm前後と深い掘り形の底面はほぼ平らで、柱の規模は、地層断面で認められた柱痕跡から20cm前後である。また、南東隅のP_7は2段に掘られており、下段のピットの径ともほぼ符号する。　**重複関係**　K110号掘立柱建物跡とP_1を共有するが本遺構が新しい。　**遺物**　P_7内から灰釉破片、須恵器坏片他が出土。　（松村）

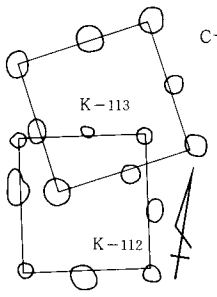


1．黒褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。1-a．1に焼土混入。2．黒色土主体。ローム粒、若干の軽石混入。3．黒色土とローム粒・塊の混土。

図－751　K－113号掘立柱建物跡

K112号掘立柱建物跡（図—750、751　図版—50）

位置　ロ1・2に所在し、西にH251、252号住居跡が接し、東にK114号掘立柱建物跡、南東にH253号住居跡を臨む。　**形状**　2間（3.6m）×2間（3.3m）の南北方向に長軸をとる建物跡で、正方形に近い長方形。柱間距離は長軸方向が1.5＋2.1m、短軸方向が1.5＋1.8mだがいずれの柱穴も時計回りの四隅の柱穴に対して近い。長軸方向N—17°—E、面積11.9㎡。　**柱穴**　平面形はP_4、P_8が建て替えを思わせる不整形の他は円形。掘り形はP_5、P_6がやや深く、特

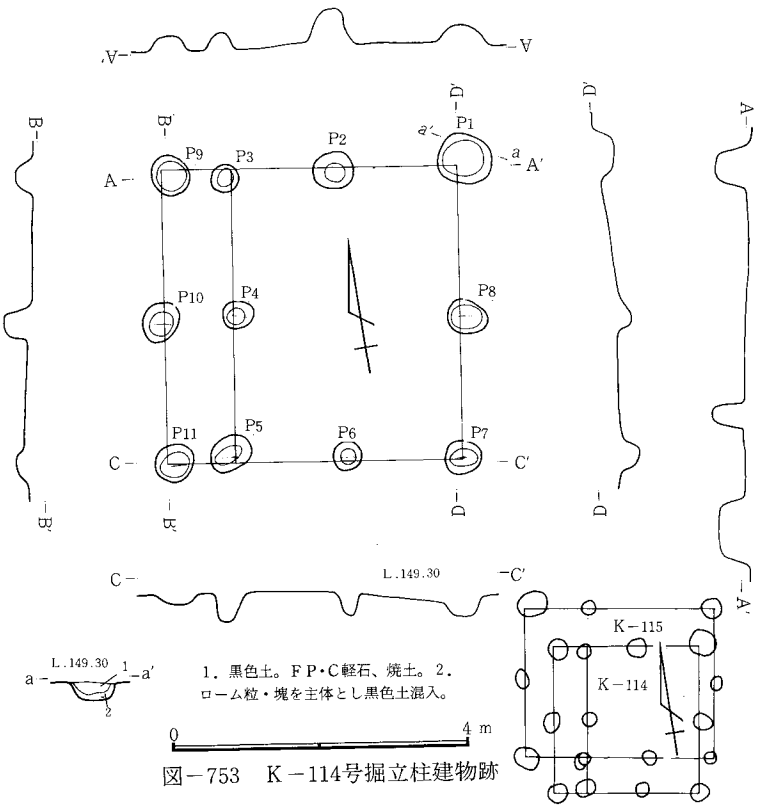


図－751　K－112・113号掘立柱建物跡関係図

にP_6は径も68×62cmと大きく、底面も平らである。他のP_1、P_2、P_3、P_5、P_7は小振りで浅い。柱の規模は地層断面から20cm位と推定される。 **重複関係** K113号掘立柱建物跡と重なるが切り合いがなく新旧は不明。 **遺物** 埋土より土師器、須恵器片を出土。 (松村)

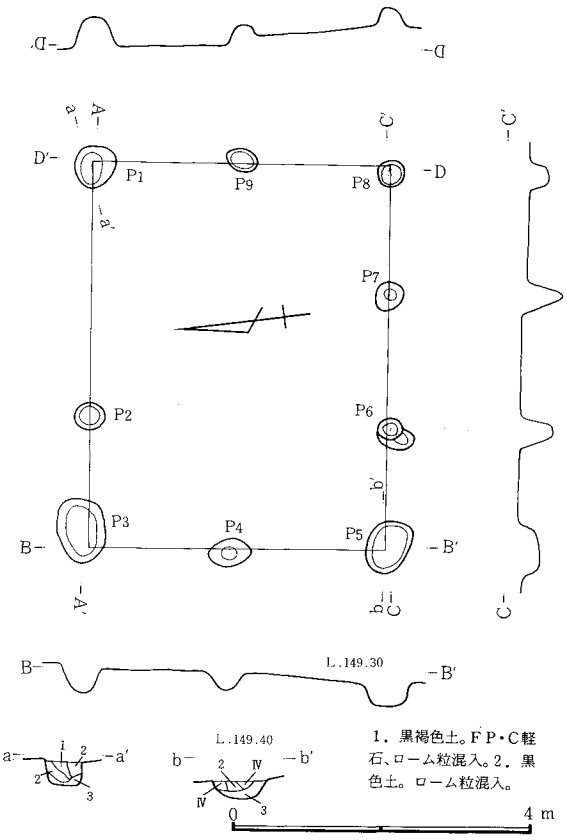
K113号掘立柱建物跡（図—751、752 図版—50、121 表—293）

位置 ロ2に所在し、西にH251、252号住居跡を臨み、東側2.1mに柱列がほぼ平行するK115号掘立柱建物跡がある。 **形状** 2間（3.6m）×2間（3.6m）のほぼ正方形を呈する。柱間の距離はいずれの辺も1.8+1.8mと真中に中間の柱を置く。南北方向の柱列はN—1°—Wで、面積1.3m²。 **柱穴** 最小48×48cmから最大70×70cmで、いずれもかなり整った円形をしている。掘り形は断面も底面から逆台形をなす。 **重複関係** K112号掘立柱建物跡と南側で重複するが新旧関係は不明。 **遺物** P_4の付近建物跡内側で紡錘車(28)を出土した他、P_6の底部から須恵器破片を出土した。 (松村)



図—753 K—114号掘立柱建物跡

図—754 K—114・115号掘立柱建物跡関係図



図—755 K—115号掘立柱建物跡

K114号掘立柱建物跡（図—753、754 図版—50）

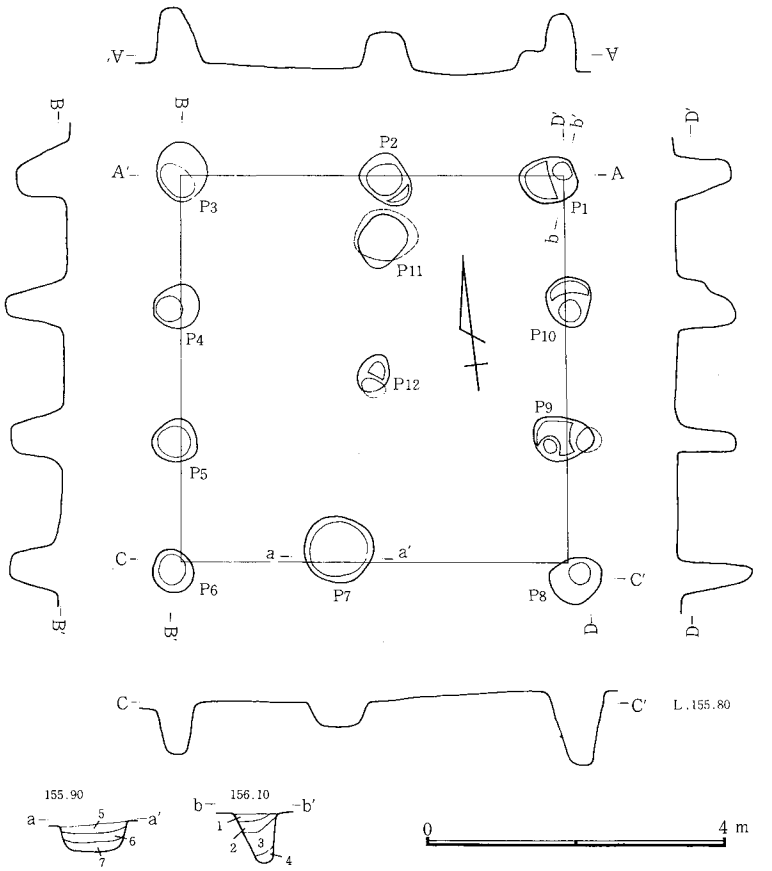
位置 ロ・ハ2。南にH257、258号住居跡を臨む。東側の谷より10～15mの位置にある。 **形状** 2間（3.9m）×2間（3m）の南北方向に長軸をとる建物跡で、西側に90cm離れて廂を設けている。柱間距離は東西列が1.5+1.5m、南北列が2.1+1.8mで南側がやや短い。長軸方向はN—8°—E。面積は11.7m²で廂部分を含めると15.2m²の正方形を呈する。 **柱穴** 隅丸の長方形をうかがわせる円形で掘り形はP_2を除き浅い逆台形。 **重複関係** K115号掘立柱建物跡と重複するがピットの切り合いなく新旧は不明。 **遺物** 本遺構に関連する遺物の出土はみられなかったが、建物跡内側の北東隅P_1付近に焼土の分布がみられた。 (松村)

K115号掘立柱建物跡（図—754、755 図版—50）

位置 ロ・ハ2に所在する。南にH257、258号住居跡を、西にK112、113号掘立柱建物を臨む。 **形状** 3間(5.1m)×2間(3.9m)の東西方向に長軸をとる建物跡。柱間距離は南北列が北から2.0+1.9mと正対するが、東西列は南辺が1.7mの等間隔なのに対して、北辺は西から1.8+3.3mとなっている。なお、本来P_2があるべき位置は電柱を立てる際に破壊されて確認できなかった。長軸方向はN—85°—W。面積19.9m²。 **柱穴** P_3、P_5は大振りの楕円形でP_4は隅丸方形を呈する他は小振りな円形をしている。掘り形はP_2、P_6、P_7が径の小さい割に深い。P_6が二重なのは建て替えか。 **重複関係** K114号掘立柱建物跡と重なっているが、新旧関係は不明。 **遺物** 本遺構に関連する遺物の出土はなかった。 (松村)

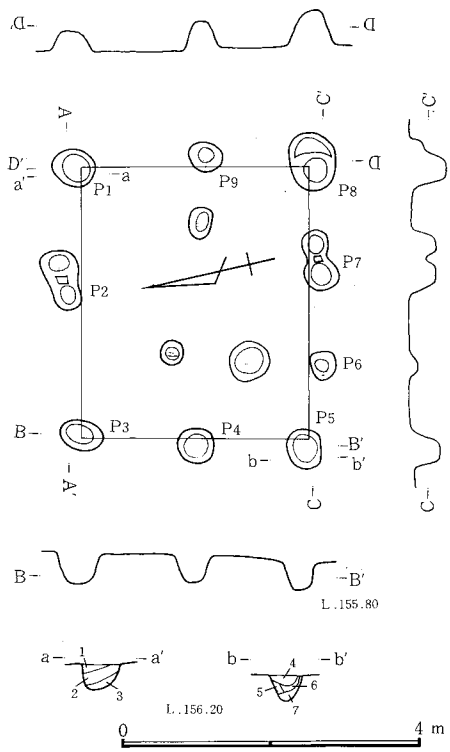
K126（5K—7）号掘立柱建物跡（図—756 図版—50）

位置 イ9にあり、西台地東斜面上に位置する。東にK—127、H—327を、西にH—328を臨む。 **形状** 3間(5.1m)×2間(5.1m)の正方形で、長軸方向はN—6.5°—E、面積は26.0m²である。柱間寸法は東西2.7+2.4m（北側）、2.1+3.0m（東側）、南北1.8+1.8+1.5m（西側）、1.8+1.5+1.8m（東側）である。各辺ともほぼ等間隔に柱穴が相対している。 **柱穴** 全体的に円形を呈し、掘り形は深い円筒状となっている。径50～90cm前後、深さ30～90cm前後である。底の形についても、大部分はU字状を呈すか、平担になっている。P_1、P_2、P_9、P_{10}には建て替えと思われる痕跡が認められる。建物跡中央に、関連するとみられるP_{11}、P_{12}がある。 **遺物** 本遺構に関連する遺物の出土はなかった。 (鵜木)



1．茶褐色土。多量のC軽石、少量のローム粒、FP軽石混入。2．茶褐色土。多量のローム粒、少量のFP・C軽石混入。3．茶褐色土。多量のローム塊、少量のC軽石混入。4．黄褐色土。多量のローム粒混入。5．茶褐色土。少量のローム粒、FP・C軽石混入。6．茶褐色土。少量のローム粒、多量のC軽石、微量のFP軽石混入。7．茶褐色土。多量のローム粒、少量のFP・C軽石混入。

図－756　K－126号(５K－７)掘立柱建物跡



1．茶褐色土。多量のC軽石、微量のFP軽石、少量のローム塊混入。2．茶褐色土。少量のローム粒、微量のFP・C軽石、焼土粒混入。3．黄褐色土。多量のローム粒混入。4．茶褐色土。少量のFP・C軽石、ローム粒混入。5．茶褐色土。多量のローム塊、微量のC軽石混入。6．茶褐色土。少量のローム塊、微量のC軽石混入。7．茶褐色土。多量のローム塊混入。

図－757　K－127(５K－８)掘立柱建物跡

K127（５K－８）号掘立柱建物跡（図—757　図版—50）

位置　ロ９にあり、西台地東端の緩斜面上に位置する。西に隣接してK—126がある。　**形状**　２間（3.6m）×２間（3.0m）、南３間の長方形で、長軸方向はN—103.5°—E、面積は10.8㎡である。柱間寸法は東西1.8＋1.8m（北側）、0.9＋1.8＋0.9m（南側）、南北1.5＋1.5m（西側）、1.5＋1.5m（東側）である。各辺ともほぼ等間隔に柱穴が相対している。　**柱穴**　円形を呈し、掘り形は深さと径が同じくらいの丸底である。径30～80cm前後、深さ30～50cm前後である。P_2、P_7、P_8には建て替えと思われる痕跡が認められる。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

K128（５K－９）号掘立柱建物跡（図—758　図版—50）

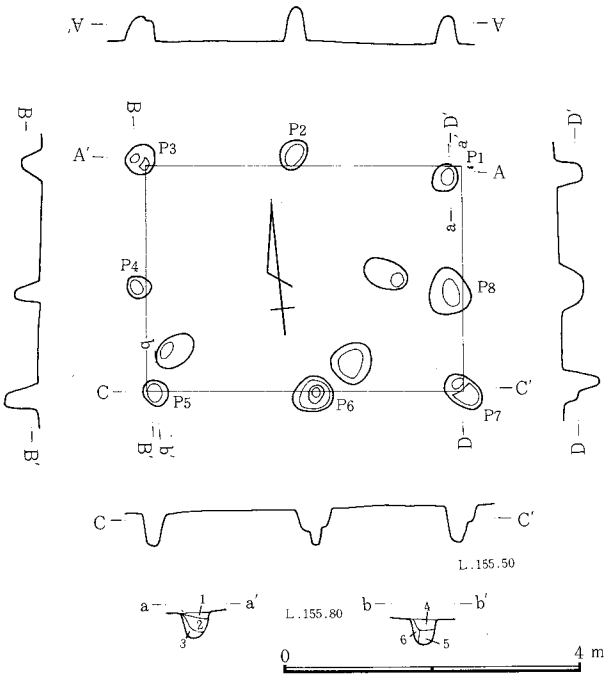
位置　イ９にあり、西台地東端の緩斜面上に位置する。周囲には数軒の掘立柱建物跡が隣接する。　**形状**　東西に長軸を持つ２間（4.2m）×２間（3.0m）の長方形で、長軸方向N—96°—E、面積は12.6㎡である。柱間寸法は東西2.1＋2.1m（北側、南側）、南北1.5＋1.5m（北側、南側）である。各辺とも等間隔に柱穴が相対している。　**柱穴**　平面は円形を呈し、掘り形の断面はU字状になっている。径30～60cm前後、深さ33～46cm前後である。底面は円か平担状を呈するが、柱痕は顕著でない。P_1～P_8までが本遺構を構成すると思われ、それ以外のものは関連は薄い。P_3、P_6、P_7は二段の底をもち建て替えと思われる痕跡が認められる。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

K129（５K—10）号掘立柱建物跡（図—759　図版—51）

位置　Ｂ９にあり、西台地東部の中央斜面上に位置する。周囲には数軒の掘立柱建物跡が隣接する。　**形状**　２間(3.6m)×２間（3.6m）の正方形で、主軸方向N—19.5°—E、面積は12.9㎡である。柱間寸法は南北1.8＋1.8m（東側、西側）、東西2.1＋1.5m（北側、南側）である。各辺ともほぼ等間隔に柱穴が相対している。　**柱穴**　平面は円形を呈し、径より深さの方がやや長い逆台形である。径30～50cm前後、深さ20～50cm前後である。柱痕は顕著ではない。P_1、P_8に建て替えと思われる痕跡が認められる。　**遺物**　本遺構に関連する遺物は出土はなかった。　（鵜木）

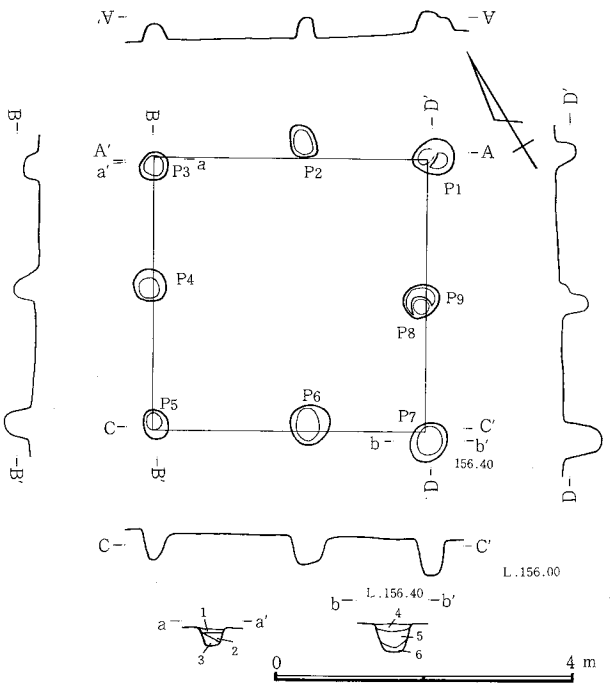
K130（５K—11）号掘立柱建物跡（図—760　図版—51）

位置　イ・ロ５に位置し、H343号、344号、345号、347号、348号の各竪穴住居跡に囲まれる形で所在する。　**形状**　３間（6.0m）×２間（3.6m）の長方形を呈す。P_{10}とP_4を結ぶ軸線の中間位置にP_{11}がうがたれており、間仕切り的な施設に関連するものと思われる。　**柱穴**　円形のプランを基本とするが、径に比して深さを余り持たない傾向にある。P_4、P_8、P_{10}は建て替えの可能性があり、南ピットから北ピットへの推移が考えられる。同様に、これに対応するP_4も南から北への柱穴の推移が考えられそうである。P_3から柱痕跡が視察でき、径19cmを測る。　**遺物**　関連する遺物の出土は見られなかった。　（田口）



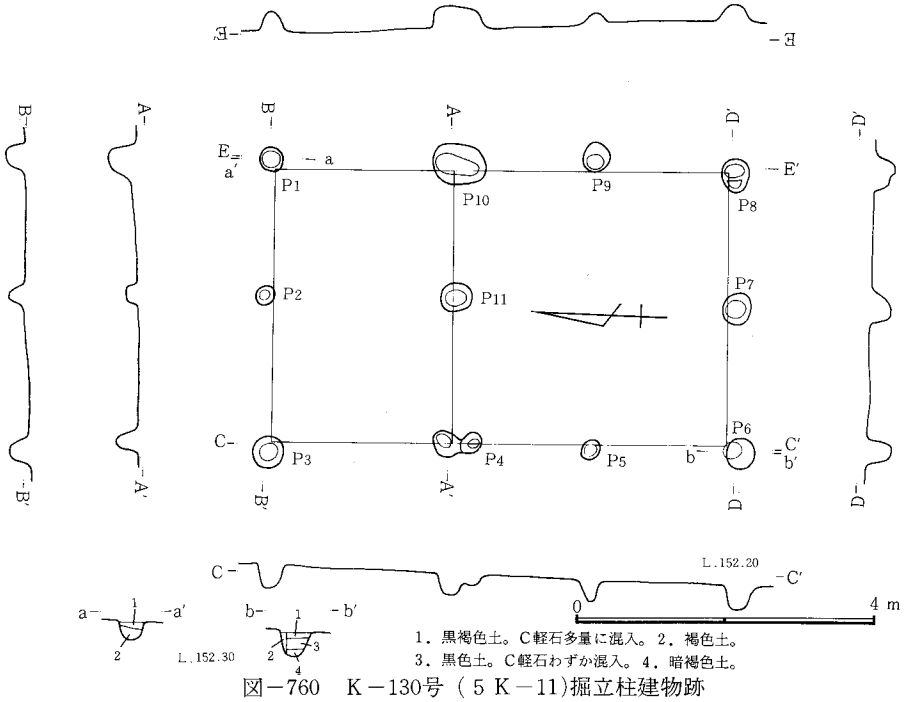
1．茶褐色土。少量のC軽石混入。2．茶褐色土。微量のC軽石混入。3．茶褐色土。多量のローム粒混入。4．茶褐色土。多量のFP・C軽石混入。5．茶褐色土。微量のC軽石混入。

図－758　K－128(５K－９)掘立柱建物跡



1．茶褐色土。微量のC軽石混入。2．茶褐色土。少量のC軽石混入。3．茶褐色土。微量のC軽石混入。締りあり。4．茶褐色土。多量のC軽石、微量のFP軽石混入。5．茶褐色土。少量のC軽石、ローム粒、微量の炭化物混入。6．多量のローム粒混入。

図－759　K－129(５K－10)号掘立柱建物跡



1．黒褐色土。C軽石多量に混入。2．褐色土。
3．黒色土。C軽石わずか混入。4．暗褐色土。

図－760　K－130号（５K－11)掘立柱建物跡

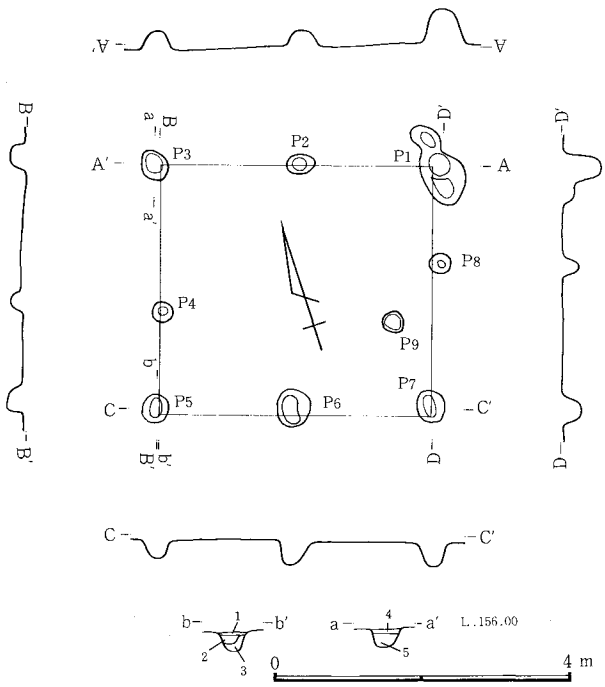
K131（５K－12）号掘立柱建物跡（図－761　図版－51）

位置　A10にあり、西台地東斜面の高台に位置する。周囲には数軒の掘立柱建物跡が存在する。又東にはH－332を臨む。　**形状**　東西２間（3.6m）×南北２間（3.3m）の長方形で、長軸方向はN－18°－E、面積は11.9m²である。柱間寸法は東西1.8＋1.8m（北側、南側）、南北2.0＋1.3m（西側）、1.3＋2.0m（東側）である。　**柱穴**　平面は円形を呈し、小ぶりで比較的浅い。径24～58cm前後、深さ17～61cm前後である。柱痕は顕著ではない。P_1は建て替えの痕跡が認められる。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

K132（５K－13）号掘立柱建物跡（図－762　図版－51）

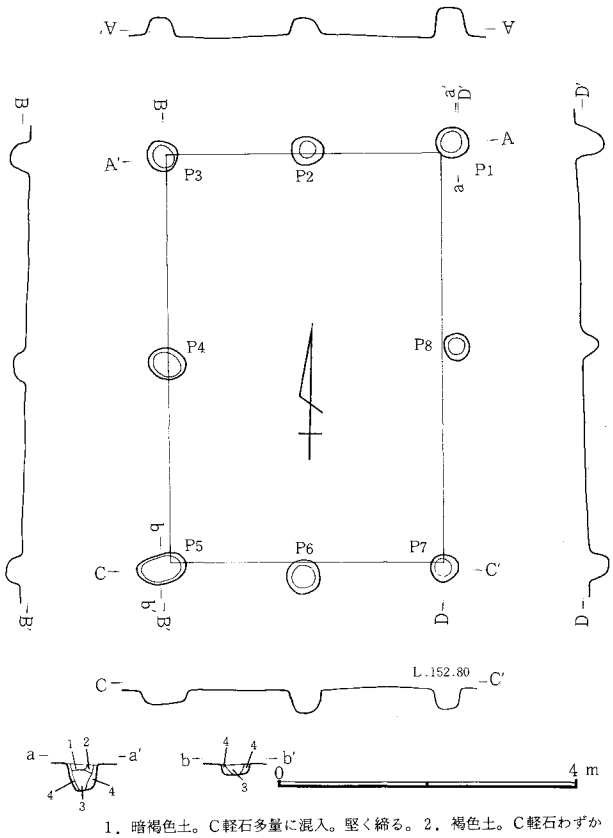
位置　A４、A５にかけて位置し、北東にK181号掘立柱建物跡、南東にH349号住居跡、南にK186号掘立柱建物跡がそれぞれ隣接する。　**形状**　２間（5.4m）×２間（3.6m）の長方形プランを有する。長軸はほぼ真北を向き、面積19.4m²を測る。　**柱穴**　径40cmを基本とする円形掘り形を持つ。P_1、P_2、P_4、P_5、P_6、P_7より、柱痕跡が観察でき、25cm前後にまとまる傾向がありそ

うである。 **重複関係** W64号溝とP_6が切り合い関係にあるが、本遺構が新しい。 **遺物** 関連する遺物の出土は見られなかった。 （田口）



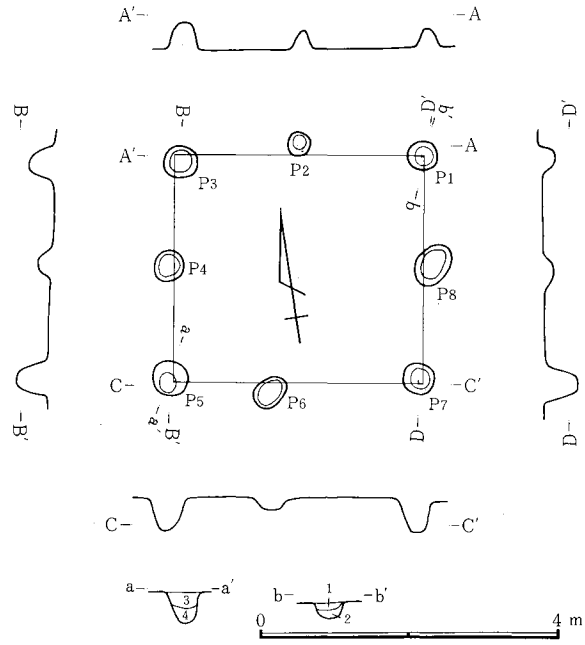
1．茶褐色土。微量のC軽石混入。2．茶褐色土。少量のC軽石、ローム粒混入。3．茶褐色土。微量のC軽石、少量のローム粒混入。締りあり。4．茶褐色土。少量のC軽石混入。5．明茶褐色土。少量のC軽石混入。

図－761 K－131号(5K－12)掘立柱建物跡



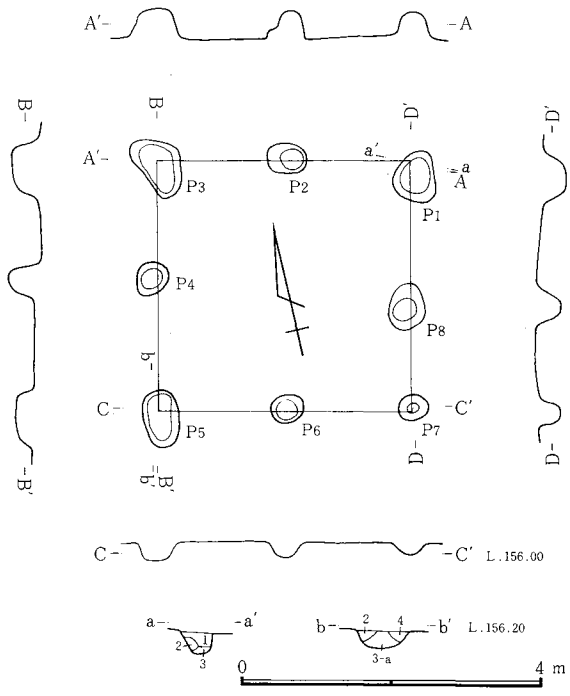
1．暗褐色土。C軽石多量に混入。堅く締る。2．褐色土。C軽石わずか混入。3．黒色土。多量のFP・C軽石混入。締りなし。4．黒褐色土。

図－762 K－132(5K－13)号掘立柱建物跡



1．暗褐色土。多量のC軽石混入。2．褐色土。3．暗褐色土。ローム塊、わずかなC軽石混入。4．黒褐色土。締りなし。

図－763 K－133号掘立柱建物跡



1．茶褐色土。多量のローム粒混入。締りなし。2．茶褐色土。ローム粒、若干のFP軽石混入。3．暗褐色土。ローム粒主体。締りなし。3-a．茶褐色土。ローム粒主体。締りなし。4．黒茶褐色土。締りなし。

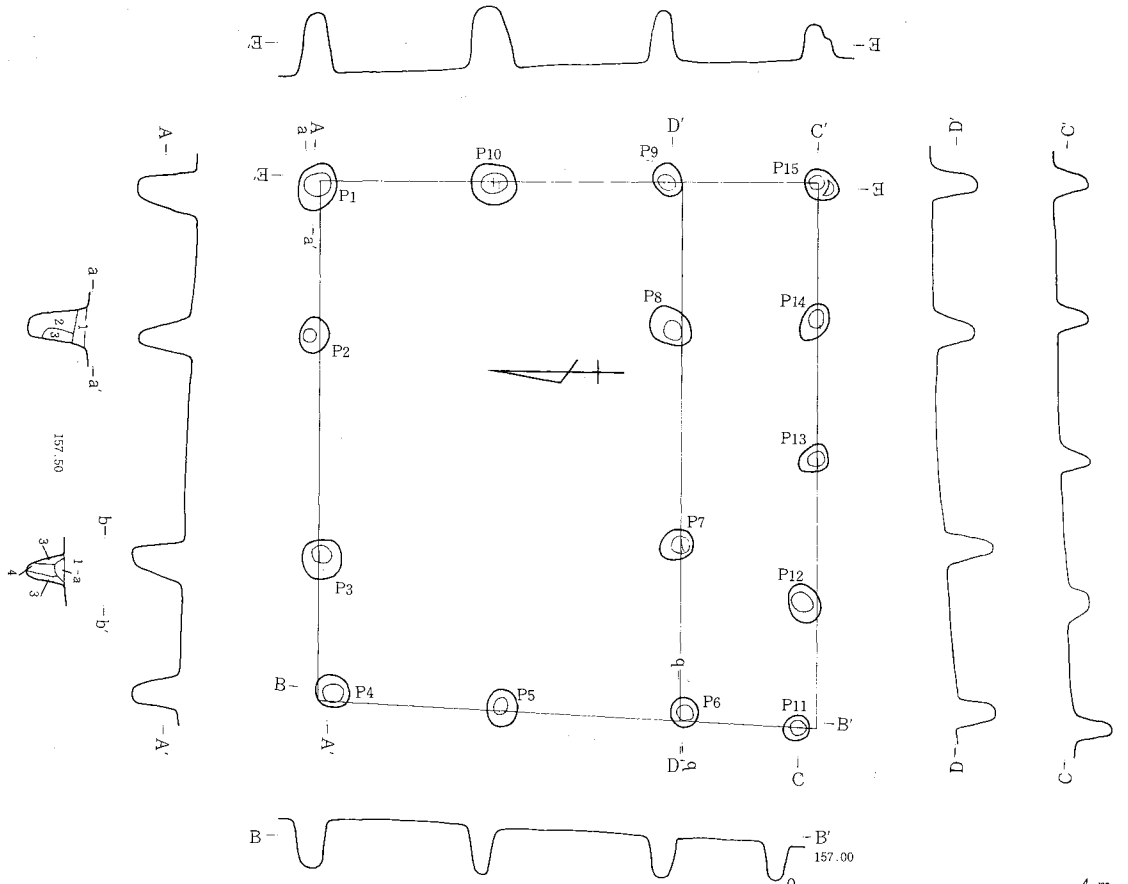
図－764 K－134号掘立柱建物跡

K133（5K－14）号掘立柱建物跡（図－763 図版－51）

位置 A5に位置し、南東にH341号住居跡、南にH340号住居跡が隣接する。 **形状** 2間（3.3m）×2間（3.0m）の正方形に近似した矩形プランを有する。東側と西側の柱穴列は等間隔に柱穴がうがたれており、1.5mの短離を置く。 **柱穴** 円形プランを基本とし、四隅に位置するP_1、P_3、P_5、P_7は深く、しっかりした掘り形を持つ。それに対して、各柱穴列の中央にあるP_2、P_4、P_6、P_8の各柱穴は比較的浅く、だれたプランを持つ。 **遺物** 関連する遺物の出土は見られなかった。 （田口）

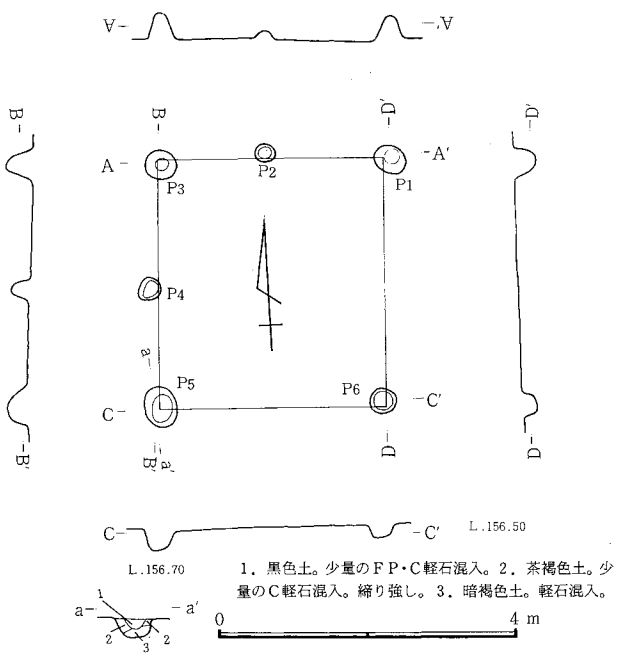
K134（5K－15）号掘立柱建物跡（図－764　図版－51）

位置　イ10に所在する。C7からからハ12にかけて北東にのびる約30軒の掘立柱建物跡の一群に属し、そのほぼ中央に位置する。　**形状**　2間(3.3m)×2間(3.3m)の正方形を呈し、東辺の偏きはN－12°－Eで、面積は10.9m²である。　**柱穴**　P_1、P_3、P_5、つまり隅にくる柱穴は掘り形が楕円に近く、他はほぼ円形になっている。径は38×35cmを最小に、最大80×50cmとなっている。深さは12～41cmに及んでいる。　**重複関係**　H330号住居跡と本建物跡のP_6が重複し、本建物跡の方が新しく建てられたことが、地層断面から確認できた。　（中澤）



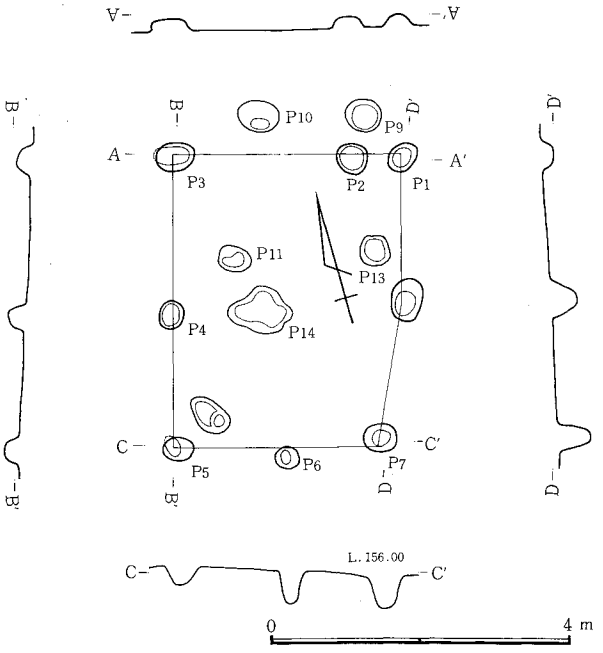
1．黒褐色土。多量のFP・C軽石混入。1-a．1に少量のローム混入。2．黒褐色土。少量のFP・C軽石、締りあり。3．茶褐色土。多量のローム粒、少量のFP・C軽石。4．茶褐色土。多量のFP・C軽石、少量のローム粒混入。

図－765　K－157(5K－38)号掘立柱建物跡



1．黒色土。少量のFP・C軽石混入。2．茶褐色土。少量のC軽石混入。締り強し。3．暗褐色土。軽石混入。

図－766　K－173(5K－54)号掘立柱建物跡



図－767　K－179(5K－60)号掘立柱建物跡

K157（5K－38）号掘立柱建物跡（図－765　図版－51）

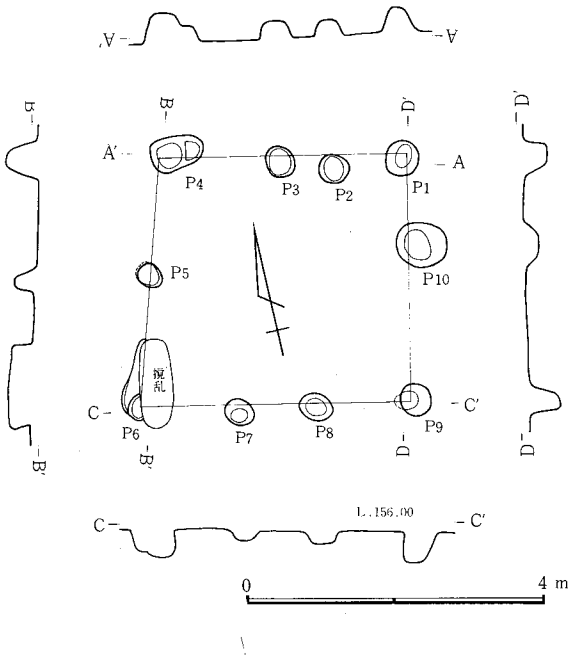
位置　ロ・イ11にあり、西台地東斜面上の高台に位置する。周囲には数軒の掘立柱建物跡が存在する。又、北西にH－485、北東にH－488、490、491を臨む。　**形状**　東西3間（北辺6.9m、南辺7.1m）×南北2間（4.8m）の長方形で、南側1.8mの位置に廂が付いている。長軸方向はN－66°－W、面積は廂部分を含めた全体が46.5㎡、それ以外では33.6㎡である。柱間寸法は東西2.1+2.7+2.1m（北側）、2.3+2.8+2.0m（南側）、1.8+1.8+1.8+1.8m（廂）、南北2.4+2.4m（西側）、2.4+2.4m（東側）である。　**柱穴**　平面は円形を呈し、いずれも深い円筒形に掘削されている。径32～60cm前後、深さ26～93cm前後である。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

K173（5K－54）号掘立柱建物跡（図－766　図版－51）

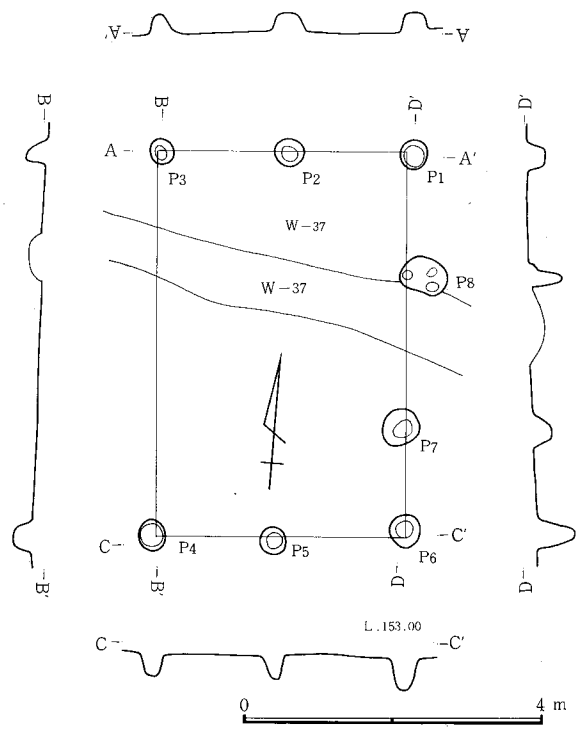
位置　A10、11にあり、西台地東斜面上の高台に位置する。周囲には数軒の掘立柱建物跡が存在する。（西にK－192、東にH－484を臨む）　**形状**　東西2間（3.0m）×南北2間（3.3m）の正方形に近い長方形で、長軸方向はN－29°－E、面積は9.9㎡である。柱間寸法は東西1.5+1.5m（北側）、3.0m（南側）、南北1.8+1.5m（西側）、3.3m（東側）である。　**柱穴**　平面は円形を呈し、四隅のものはやや大きめである。径20～54cm前後である。柱痕は顕著ではない。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

K179（5K－60）号掘立柱建物跡（図－767）

位置　西台地のB9・10に位置する。　**形状**　2間（3.9m）×2間（3.0m）の長方形の建物跡で、南北方向に長軸をもつ。長軸方向はN－21°－Eで面積は11.1㎡である。東辺はP_7が西による。柱間寸法は、東辺が、2.1+1.8mでP_7より曲がる。西辺は2.1+1.8m。北辺は西より2.4+0.6m、南辺が西より1.5+1.2mである。　**柱穴**　平面は円形が多い。P_6、P_7、P_8はしっかりした掘り形だが、他は浅い。径は40cm前後で、深さは40cm前後がP_6～P_8で、20cm前後がP_1～P_5である。柱痕は不明である。底面標高は北辺が156m前後で、南辺が155.5m前後である。P_9～P_{12}は別の建物跡が想定されるが、不明の部分が多い。　（井野）



図－768　K－180（5K－61）号掘立柱建物跡



図－769　K－181（5K－62）号掘立柱建物跡

K180（5K－61）号掘立柱建物跡（図－768）

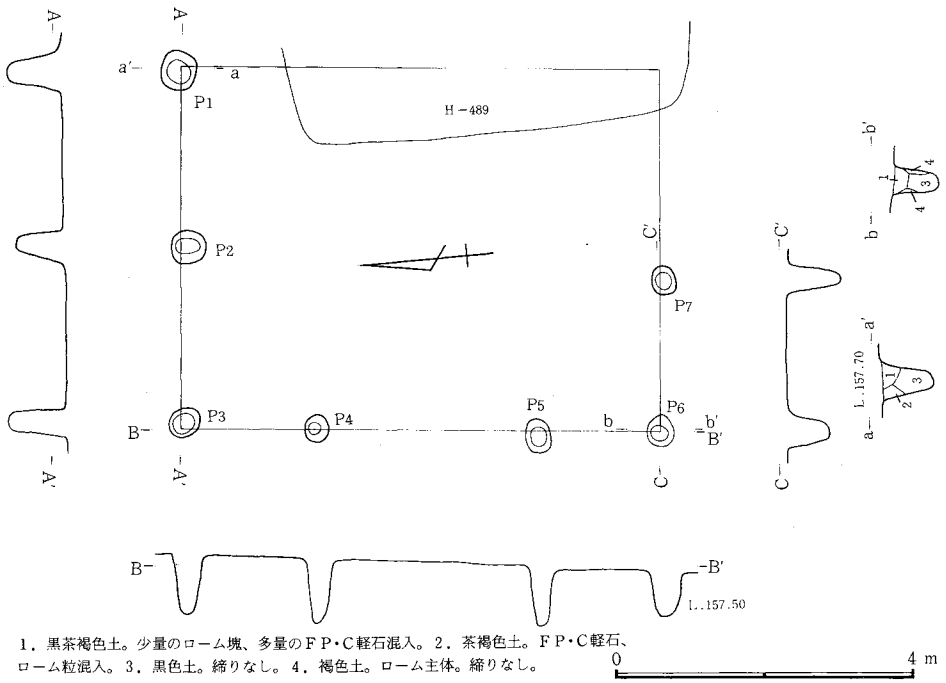
位置　西台地のB9に位置する。周辺は掘立柱建物跡が比較的多い。

形状　2間（3.3m）×3間（北辺は3.3m、南辺は3.6m）の台形の建物跡で、東西に長軸をとる。東西辺の中間の柱穴はややずれている。柱間寸法は南北が西辺は1.5+1.8m、東辺は1.2+2.1m、東西は北辺が1.5+0.9+0.9mで、南辺が1.2+1.2+1.2mである。長軸方向はN－12°－Eで面積は11.4㎡である。　**柱穴**　平面はほとんどが円形。径は40cm前後のものが多い。深さは30cm前後で、掘り形断面は台形に近い。底面標高は155.7m前後が多い。柱痕は不明である。四隅の柱穴はしっかりしている。　（井野）

K181（5K－69）号掘立柱建物跡（図－769　図版－52）

位置　西台地のイ・A5に位置する。掘立柱建物跡の小集団を成している。　**形状**　3間（5.1m）×2間（3.3m）の長方形の建物跡で、南北に長軸をとる。西辺は1間となっている。長軸方向N－4.5°－Eで面積は16.8㎡である。柱間寸法は、東辺が5.1mで、より1.5+2.1+1.5mで、北辺が西より1.8+1.5mで、南辺が西より1.5+1.8mである。　**柱穴**　比較的小ぶりなものが多い。平面は円形で、断面は台形のものが多い。径は30～40cmで、深さは30cm前後のものが多い。柱痕は不明である。底面標高は北辺は152.7m前後で、南辺は152.4m前後である。　**重複関係**　W－37と重複。新旧については不明である。　（井野）

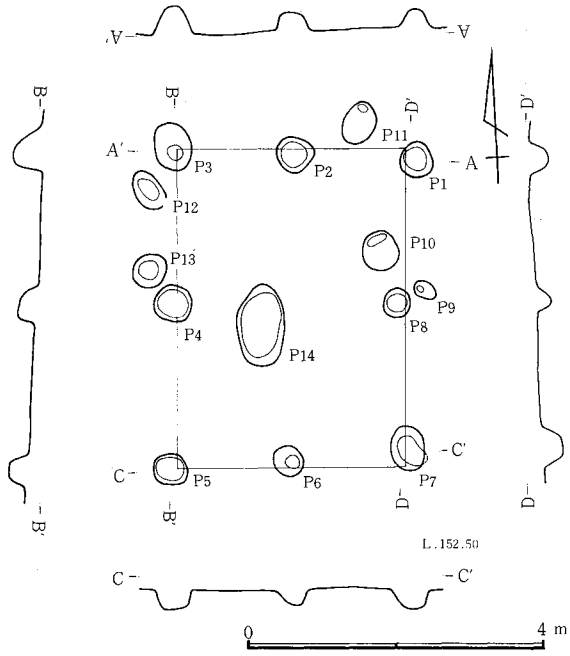
K185（5K－66）号掘立柱建物跡（図－770　図版－52）



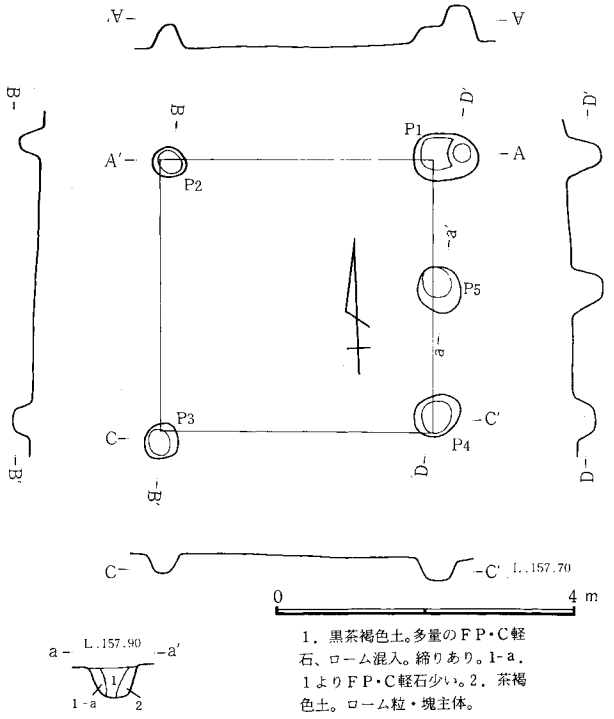
1．黒茶褐色土。少量のローム塊、多量のFP・C軽石混入。2．茶褐色土。FP・C軽石、ローム粒混入。3．黒色土。締りなし。4．褐色土。ローム主体。締りなし。

図－770　K－185(5K－66)号掘立柱建物跡

位置　ロ12に所在する。本建物跡はC7からハ12にかけて、北東の方向に展開する約30軒の掘立柱建物跡の一群に属し、東端に位置する。近くにはK194号掘立柱建物跡もあり、東へ20mほど行くと谷である。　**形状**　3間（6.3m）×2間（4.8m）の長方形を呈し、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN－26.5°－Eで、面積は30.2m²（推定）である。　**柱穴**　掘り形は隅丸長方形に近い円形で、径は30～50cm前後、深さは60～90cmである。P_8、P_9、P_{10}は確認できなかった。　**重複関係**　H489号住居跡と重複する。本建物跡の方が旧い。なおP_8、P_9、P_{10}が欠けているのは、H489号住居跡が建てられる際、削り取られたものと考えられる。　（中澤）



図－771　K－186(5K－67)号掘立柱建物跡

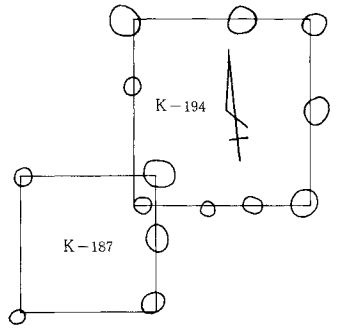


1．黒茶褐色土。多量のFP・C軽石、ローム混入。締りあり。1-a．1よりFP・C軽石少い。2．茶褐色土。ローム粒・塊主体。

図－772　K－187(5K－68)号掘立柱建物跡

K186（5K－67）号掘立柱建物跡（図－771　図版－52）

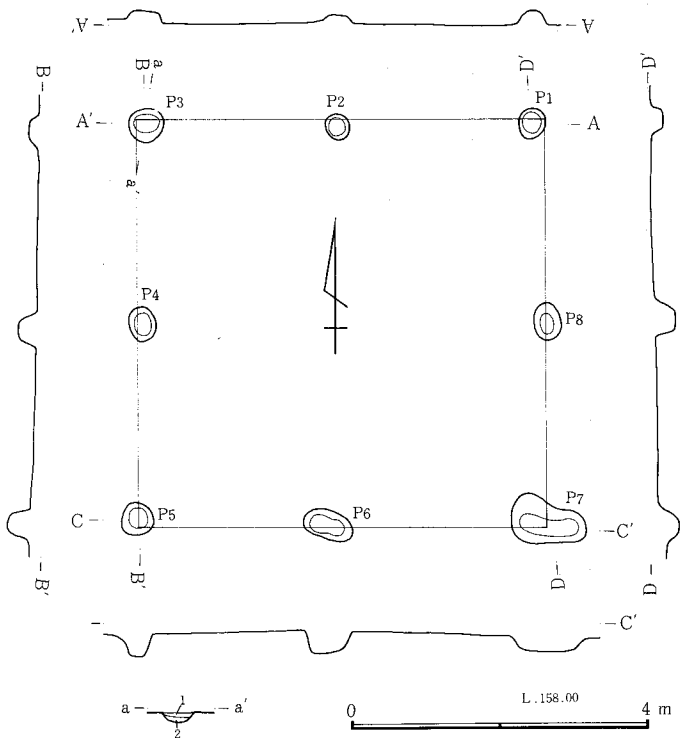
位置　西台地南東のイ4に位置する。　**形状**　2間(4.2m)×2間（3.0m）の長方形で、南北に長軸をもつ建物跡である。長軸方向はN－3°－Eで面積は12.6m²である。柱間寸法は南北が2.1mで、東西が1.5mである。　**柱穴**　平面はほぼ円形で、掘り形の断面は台形に近い。小ぶりで浅い柱穴が多い。径は40～50cmで、深さは30cm前後が多い。柱痕は不明である。底面標高は北辺が152.2m前後で、南辺が152.1m前後である。P_9～P_{14}は建物施設に係わる柱穴と考えられる。　**その他**　掘立柱建物跡群は南にやや低地を臨む地形の場所に所在する傾向がみられ、本遺構を含む建物群にも同様の傾向がみられる。　（井野）



図－772　K－187・194号掘立柱建物跡関係図

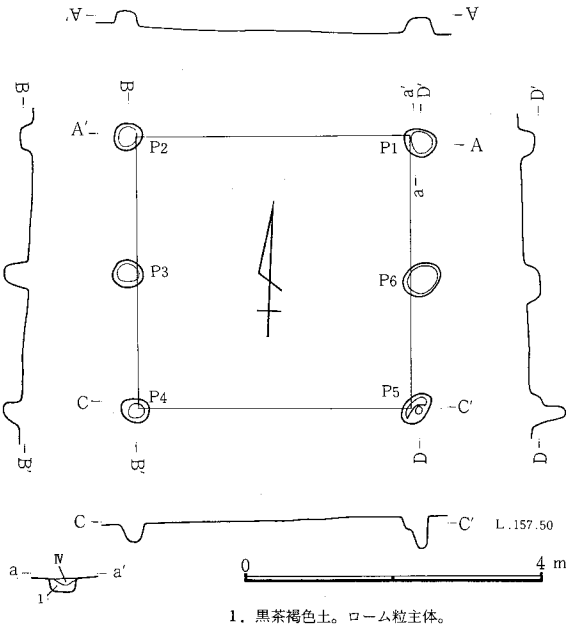
K187（5K－68）号掘立柱建物跡（図－772　図版－52）

位置　ロ12にあり、西台地最東端の斜面中央部に位置する。周囲には数軒の掘立柱建物跡や住居跡が存在する。（北東にK－194、南にK－185、西にH－486が接する）　**形状**　東西1間（3.6m）×南北1間（3.6m）（東辺2間）の正方形で、長軸方向はN－22.5°－E、面積は13.0m²である。柱間寸法は東西3.6m（南北両側）、南北3.6m（西側）、1.8＋1.8m（東側）である。　**柱穴**　平面はおおむね円形を呈するが、P_1はダルマ形で、断面を見ると、ピット中に更にピットがあるような形である。他は径より深さの方が短い逆台形である。径38～84cm前後、深さ29～50cm前後である。　**重複関係**　K－194と北東隅で重複するが、両者の新旧関係は不明である。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）



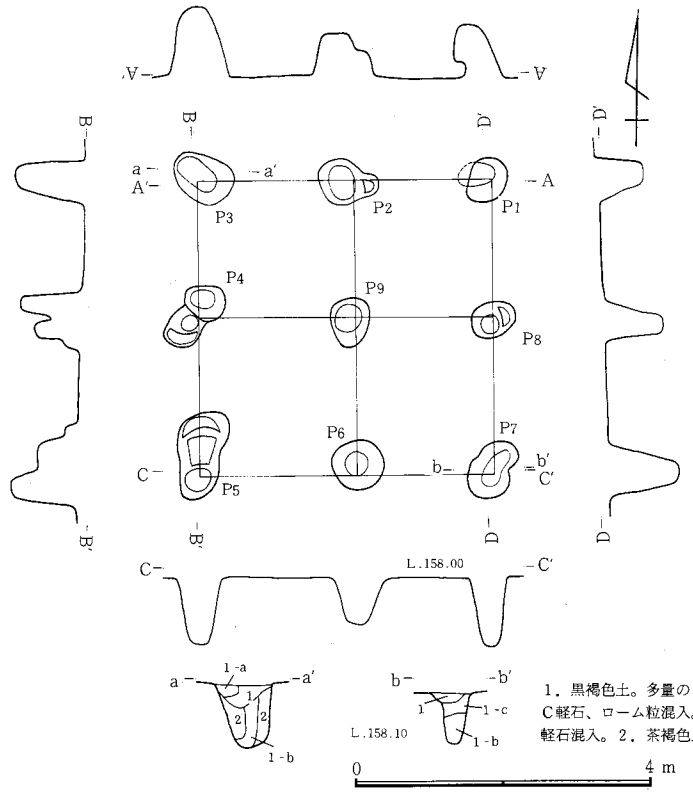
1．黒茶褐色土。少量のF・C軽石、多量のローム粒混入。2．暗褐色土。ローム粒主体。

図－773　K－188（5K－69）号掘立柱建物跡



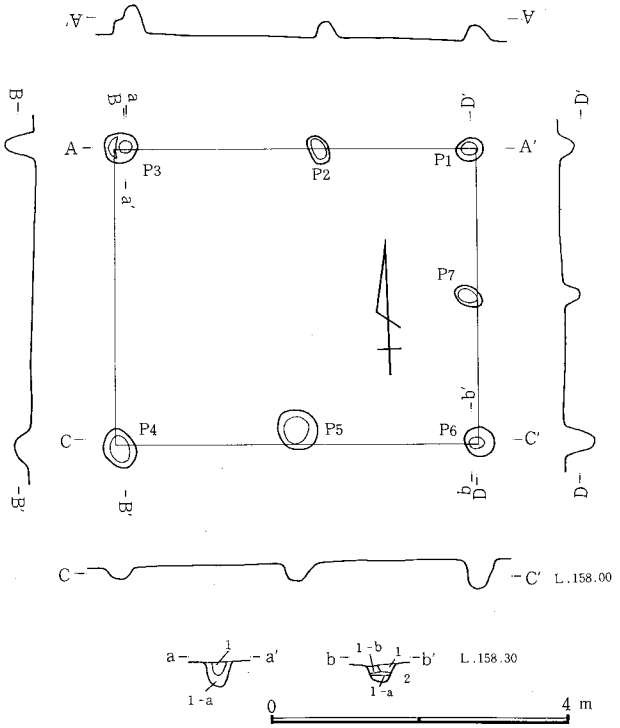
1．黒茶褐色土。ローム粒主体。

図－775　K－190（5K－71）号掘立柱建物跡



1．黒褐色土。多量のF・C軽石、少量のローム塊混入。1-a．茶褐色土。F・C軽石、ローム粒混入。1-b．黒色土。締りなし。1-c．茶褐色土。若干のF軽石混入。2．茶褐色土。ローム塊混入。

図－774　K－189（5K－70）掘立柱建物跡



1．黒色土。多量のF・C軽石、ローム粒混入。1-a．黒茶褐色土。多量のローム粒、少量のF・C軽石混入。1-b．茶褐色土。1-aより多量のローム粒、若干のFP・C軽石混入。2．ローム粒。

図－775　K－191号掘立柱建物跡

K188（5K—69）号掘立柱建物跡（図—773　図版—52）

位置　ロ12からイ12にかけて所在する。本建物跡はC7からハ12にかけて展開する約30軒の掘立柱建物跡の一群に属し、その位置は東端に近い。本建物跡の西にK189号掘立柱建物跡、東にK185・194号掘立柱建物跡がみられる。　**形状**　2間（5.4m）×2間（5.2m）の正方形を呈し、東辺の偏きはN—5°—Wである。面積は29.2m²。　**柱穴**　掘り形はほぼ円形に近く、径は30～40前後が多い。深さは7～32cmと比較的浅い。掘り形に関してはP₆およびP₇が他と趣を異にしている。P₆はダルマ形を、P₇は長方形に近い形を呈している。（中澤）

K189（5K—70）号掘立柱建物跡（図—774　図版—52）

位置　イ12に所在する。K188号掘立柱建物跡と同様に、本建物跡はC7からハ12にかけて展開する約30軒の掘立柱建物跡群に含まれる。群における位置はほぼ北端にあたるといえる。東へ50mほど行くと谷になる。近くにはK188号やK190号などの掘立柱建物跡が存在する。　**形状**　2間（3.9m）×2間（3.9m）の総柱で、正方形を呈している。東辺の偏きはN—1.5°—Wで、面積は15.2m²である。　**柱穴**　P₁、P₂、P₃、P₇はその掘り形がダルマ形を呈している。また、P₂、P₄、P₅、P₈は底部が2段になっている。こうした柱穴の形状から、本建物跡は建て替えが行われた可能性があると考えられる。径は小さなもので52×42cm、大きなものは100cmをこすもの（P₅）もある。深さは61～94cmとまちまちである。2段に底部が認められる柱穴の深さは、例えばP₂では37cm、61cmとなっている。（中澤）

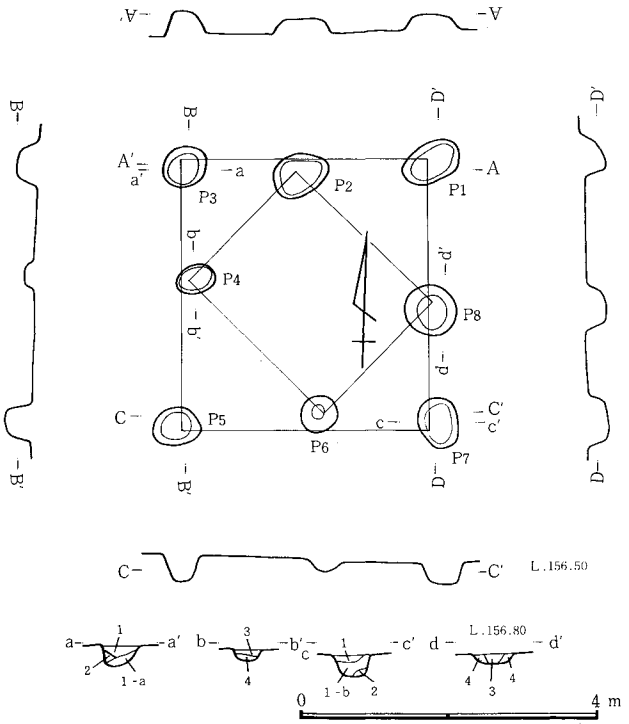
K190（5K—71）号掘立柱建物跡（図—775　図版—52）

位置　イ11からA11にかけて所在する。K189号掘立柱建物跡と同様、本建物跡もC7からハ12へと展開する約30軒の掘立柱建物跡の一群に属する。群での位置は中央より若干北東になる。近くには、H483号住居跡やK189号掘立柱建物跡がみられる。　**形状**　2間（3.6m）×1間（3.6m）の正方形を呈し、東辺の偏きはN—2°—Wで面積は12.1m²となっている。東および西辺は2間（1間は約1.8m）で、南および北辺は1間（約3.6m）である。　**柱穴**　掘り形は円形に近い。径は小さいもので33×30cm（P₄）、最大のもので50×42cm（P₆）であり、深さは8～45cmに分布する。ただ、P₅は掘り形が長方形で径は48×27cm、底部は2段になっていて16cmと45cmで、他の柱穴と趣を異にしている。形状のところでも述べたように、東および西辺は中間にそれぞれ1個ずつ柱穴が認められる。しかし、南および北辺は中間に柱穴が存在しない。（中澤）

K191（5K—72）号掘立柱建物跡（図—776　図版—52）

位置　B12に所在する。本建物跡もK188号掘立柱建物跡と同じようにC7からハ12にかけて展開する約30軒程の掘立柱建物跡の一群に属する。位置は群の北端で、近くにはH482号住居跡やW3、W7号溝がある。　**形状**　2間（4.8m）×2間（3.9m）の長方形で東西方向に長軸をとる。長軸方向はN—60°—Wで面積は18.7m²である。なお、西辺は中間に柱穴が認められないので1間となる。　**柱穴**　P₁、P₅、P₆の平面形は、ほぼ円形を呈し、径は27～51cm、深さ24～42cmとなっている。P₂、P₃、P₄、P₇は楕円形や不整形を呈す。径は26～45cm、深さは15～39cmとなっている。とくにP₃は底部が2段になっていて、深さは37及び39cmである。底面標高は、北辺は158.0m前後で、南辺は157.9m前後である。柱痕は顕著でない。（中澤）

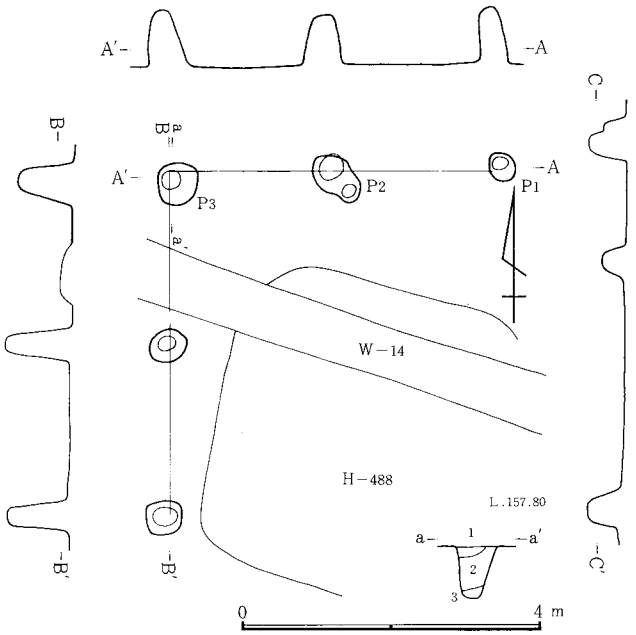
K192（5K—73）号掘立柱建物跡（図—777　図版—53）



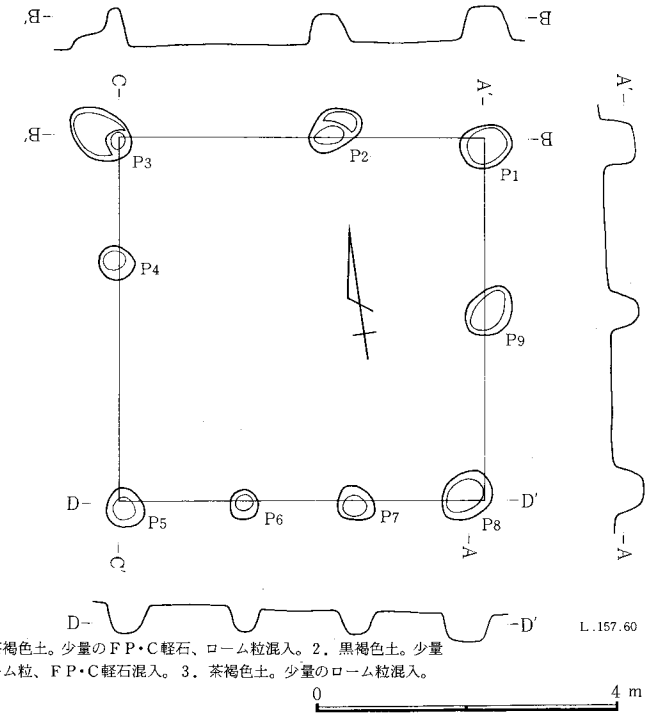
1．黒色土。多量のF・C軽石、ローム粒混入。1-a．黒茶褐色土。F・C軽石、多量のローム粒混入。1-b．暗褐色土。少量のF・C軽石、1-aより多量のローム粒混入。2．茶褐色土。ローム塊、少量のF・C軽石混入。3．茶褐色土。F軽石混入。4．暗褐色土。ローム主体。

図—777　K—192（5K—73）号掘立柱建物跡

位置　B10に所在する。C7からハ12にかけては、北東に約30軒の掘立柱建物跡が一つの群をなし、帯状に分布している。本建物跡は、その群のほぼ中央に位置している。本建物跡から東へ30mほど行くと谷になる。　**形状**　2間（3.6m）×2間（3.3m）のほぼ正方形に近い建物跡で、南北方向に長軸をとる。長軸方向はN—26°—E、面積は11.9m²である。　**柱穴**　掘り形はやや楕円形を呈するものが多くなっている。径は50×36cmを最小に、最大70×64cmである。深さは14cmから31cmに及ぶ。柱間の心々距離は1.5mから1.95mに分布している。柱穴の覆土についてみると、そこに含まれる土砂、軽石、そして土層の色から、8個ある柱穴を2つのグループに分けることが可能である。つまり、P₁、P₃、P₅、P₇とP₂、P₄、P₆、P₈の2グループである。本建物跡は基本的には、2間×2間の形状を考えてはいるが、時を前後して、1間×1間の形状をした掘立柱建物跡が、45度ずらしたかたちで建てられたとも考えられるのである。このことは、また柱穴の深さに注目しても、上記2つのグループに分けられることからも考えられる。（中澤）



図－778　K－193(５K－74)号掘立柱建物跡



1．茶褐色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。2．黒褐色土。少量のローム粒、ＦＰ・Ｃ軽石混入。3．茶褐色土。少量のローム粒混入。

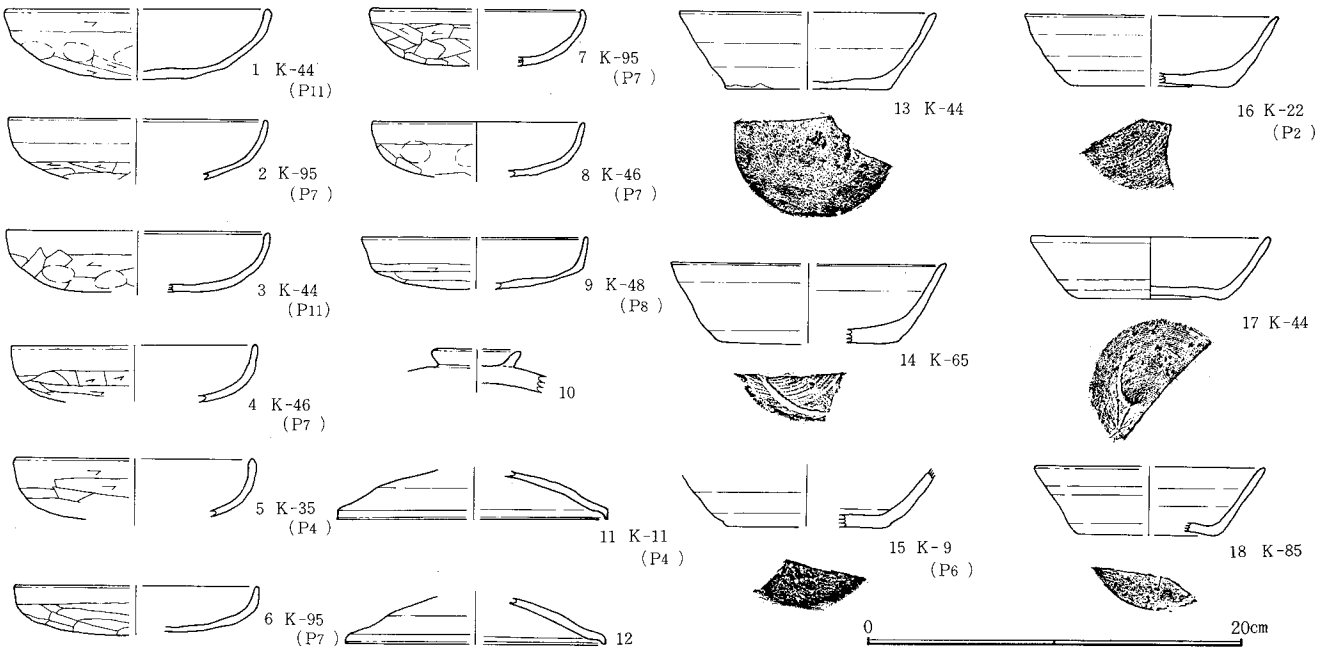
図－779　K－194(５K－75)号掘立柱建物跡

K193（５K－74）号掘立柱建物跡（図－778　図版－53）

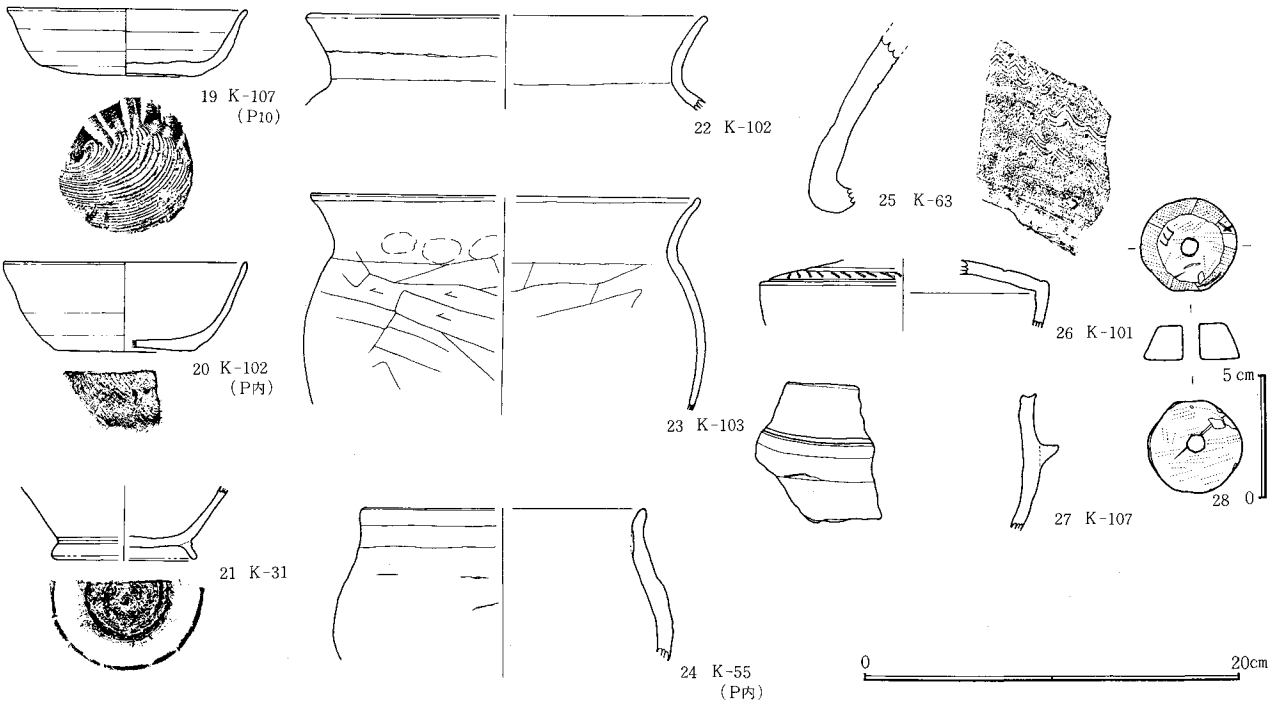
位置　ロ11にあり、西台地東端の斜面上に位置する。周囲には数軒の掘立柱建物跡や住居跡が存在する。　**形状**　東西２間(北側のみ4.2m)×南北２間(西側のみ4.5m)の長方形で、長軸方向はN－32.5°－W、推定面積18.9㎡である。柱間寸法は東西2.1＋2.1m、南北2.1＋2.4mである。　**柱穴**　平面はP_2を除き円形を呈し、掘り形は径に比べ、深さが２倍前後の円筒形をしている。径は32～76cm前後、深さ25～84cm前後である。　**重複関係**　H－487、488とは新旧関係は不明である。W－14と重複するが、本遺構の方が古いと思われる。　**遺物**　本遺構に関連する遺物の出土はなかった。　（鵜木）

K194（５K－75）号掘立柱建物跡（図－779　図版－53）

位置　ロ12に所在する。Ｃ７からハ12にかけて北東の方向へ展開する約30軒の掘立柱建物跡の一群に属し、その東端に位置する。本建物跡から約20m東へ行くと谷になっている。　**形状**　２間（4.8m）×２間（4.8m）、（南辺は３間）の正方形を呈し、長軸方向はＮ－23°－Ｅで、面積は23.0㎡である。　**柱穴**　平面形は円形に近く、径は最小が38×34cm、最大88×68cmとなっている。深さは30～50cm台である。９個の柱穴のうち、P_2、P_3は楕円形を呈し、二段の底を持ち、他の柱穴と趣を異にしている。　**重複**　K187号掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴どうしの切り合いがないため新旧は不明である。　（中澤）



図－780　掘立柱建物跡出土遺物(１)



図－781　掘立柱建物跡出土遺物(２)

5　土　　坑

芳賀東部団地遺跡の西側台地から検出された土坑は、埋土の様子と形態によりいくつかに大別することができる。埋土中に含まれている軽石でわけると、B軽石を下層に至るまで含むもの、上層にBの純層もしくはそれに近い土層をもつもの、ＦＰとC軽石を含むもの、C軽石のみを含むものになる。B軽石を含むものには耕作土に以た土層のものも含まれる。形態でわけると、円形のもの、方形のもの、長方形のもの、掘り形では、鉢状のもの、浅く平坦なもの、周溝状の落ちこみをもつもの（H47・52号土坑）にわけられる。B軽石を含む土坑は円形のものが多く、概して浅い。埋土中に多量の木炭片や焼土を含むものが約20基あり、H23号土坑は底面の一部に焼けが認められる。ほとんどが長円形もしくは長方形を呈す。C軽石のみを含む土坑（50号）は、茶褐色土の埋土でロームブロックが多い。H40号土坑は浮石を含まず、黒色土とロームの混土になっている。

土坑の性格は不明のものが多いが、1・2は井戸とも考えられ、木炭片・焼土を含む長円形、長方形の土坑は他の調査例(西大室遺跡群II、昭和54年、前橋市教委などから考えて、火葬墓とも考えられる。また耕作土に近い土が埋土の土坑は土葬の墓壙とも考えられるものである。火葬墓と考えられる土坑の埋土は、ほとんどがＦＰ・C軽石を含む黒色土で、底面は浅く平坦である。この火葬墓とも考えられる土坑は出土位置にも特徴がみられ、台地の南端と北端に多い。住居跡の密集度とほぼ以ている。また第２巻では扱わないが、近世の墓壙が９区をはじめとする多数の調査区より発見されている。長方形で、寛永通宝などの古銭を伴出した。その他の土坑は円形が多く、性格も不明である。　（井野）

大Ｈ１号土坑（Ｈ大Ｐ－１）（図―782　図版―53、121　表―291）

位置　西台地南のＧ４。掘立柱建物跡群の中にある。　**概要**　やや楕円形に近い平面で、断面は漏斗(ろうと)状をしている。東西3.1mで南北2.7mで、面積は6.8m²、深さは159cmを測る。底面はさらに31×24cmの楕円形で34cmの深さに掘りこまれている。埋土は周辺の住居跡のものと同様のもので、同時期と考えられる。内部より、須恵器片(１)、石が検出されている。　（井野）

大Ｈ２号土坑（Ｈ大Ｐ－２）（図―782　図版―53、121　表―291）

位置　西台地南西隅のＱ101。南に竪穴住居跡群を臨む。　**概要**　ほぼ円形に近い平面で、断面は漏斗状をしている。径3.1mで、面積は7.9m²で深さは191cmを測る。底面はさらに62×51cmの楕円形で47cmの深さに掘りこまれている。埋土は、５層にＦＰを含み、上層にB軽石の純層を含む。２層の上面に石が多く検出された。底面下の掘り込み内からも５石検出されている。その石の間より須恵器坏が出土した。大Ｈ１号土坑とともに井戸とも考えられるが、明らかではない。　（井野）

大Ｈ３号土坑（Ｈ大Ｐ－３）（図―782　図版―53）

位置　西台地南西隅のＲ３。東に竪穴住居跡群を臨む。　**概要**　上部平面は不整円形を呈し、底部は不規則に壁に横穴がうがたれている。Ⅸ層から掘りこまれ、下層はロームの埋土が多く、３～６層にはC軽石のみを、２層にＦＰ・C軽石を含む。底部の形状からみて、大木の根の部分と考えられる。南北2.4mで東西2.1mで面積は4.1m²、深さは168cmを測る。

大H４号土坑（H大P－４）（図―782　図版―53）

位置　西台地中央部東端のハ12･13。周辺は竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多い。　**概要**　平面はほぼ円形で、断面はすり鉢状をしている。東西4.1mで南北3.6m、面積は11.3㎡である。深さは161cmを測る。大型の貯蔵穴のものか。埋土は２～４層にＦＰ･Ｃを含んでいる。２層の上面から須恵器甕片が検出されている。H―142と重複するが、１層がH―142の貼り床と考えられることから、本遺構が旧い。遺構にそって小ピットがめぐっている。施設に伴うものか。　（井野）

大H５号土坑（H大P－５）（図―783　図版―53、121　表―294）

位置　ロ８。南北に竪穴住居跡、掘立柱建物跡をのぞむ。　**概要**　平面は不整円形で、すり鉢状の断面をもつ。南北3.6mで東西3.2m、面積は9.8㎡である。深さは163cmを測る。埋土は全層に焼土粒、１～３層に炭化物を含む。最大層までＦＰ･Ｃを含む。Ｂ軽石は認められない。底部より多量の石と、その間から須恵器坏(９･17･21)埦(24)鉄製鏃(34)などが出土。底部は径70cmでさらに深く掘られており、井戸とも考えられ、石その他は廃棄の際に投棄されたものか。

大H６号土坑（H大P－６）（図―783　図版―54、121　表―294）

位置　ロ９。　**概要**　平面は円形で、断面はすり鉢状である。南北･東西とも2.8mで面積は6.7㎡を測る。深さは124cmを測る。埋土は茶褐色土主体で、３層までＦＰを含む。２層には焼土粒・炭火物を含む。底面＋６cmより須恵器甕片(30･31･33)や須恵器坏(12･15)土師器坏(６)甕(26･27)が出土している。底部は径65cmでさらに深く掘られており、井戸とも考えられる。　（井野）

大H８号土坑（ＨＰ―20）（図―783　図版―54、121　表―294）

位置　西台地北端のＣ20。南に竪穴住居跡をのぞむ。　**概要**　平面は円形で、断面はややいびつなすり鉢状をしている。南北2.7mで、東西2.6mを測る。面積は5.7㎡で、深さは147cmを測る。埋土は黒色土が主体でロームも多く、７層までＦＰ･Ｃ軽石を含む。やわらかい土である。１層のやや上より須恵器片が、その他土師器坏・甕等が出土している。貯蔵穴か。　（井野）

大H９号土坑（ＨＰ―28）（図―789　図版―54）

位置　西台地北西のH18。やや南に竪穴住居跡があるほか、周辺には遺構は少ない。　**概要**　平面は不整形である。底部は掘りすぎた部分があり、規模・形状は推定である。埋土は下層にはロームブロックが多く含まれる。ほぼ全層にＦＰが含まれる。南北2.9mで、東西2.0m、面積は5.4㎡、深さは139cmを測る。性格は不明。　（井野）

Ｈ１号土坑（ＨＰ－１）（図―784　図版―54、121　表－294）

位置　西台地北西のＱ17。西に竪穴住居跡が散在する。　**概要**　平面はほぼ長方形である。南北1.1mで東西0.9m、面積は0.9㎡である。深さは９～14cmで、長軸方向はＮ―21°―Ｅ。埋土はＦＰ･Ｃを含む黒色土。須恵器坏片が出土。床上７cm。悲壙か。　（井野）

Ｈ２号土坑（ＨＰ－２）（図―784）

位置　西台地南西隅のＱ102。東に竪穴住居跡の集落をのぼむ。　**概要**　平面はほぼ長方形で、南北2.2m、東西1.4m、面積は2.7㎡である。深さは21～42cmで長軸方向はＮ―15°―Ｗ。底面近くに木炭片がみられる。底面は水平。火葬の墓壙か。　（井野）

Ｈ３号土坑（ＨＰ－３）（図―784　図版―54）

位置　西台地南西のＭ１。周辺は竪穴住居跡が多い。　**概要**　平面は楕円形で、断面はすり鉢状である。南北1.4mで、東西0.9m（推定）で、面積は1.0㎡（推定）、深さは37cm。長軸方向はＮ―27°―Ｅ。多量の炭化物を含み、火葬の墓壙か。　（井野）

Ｈ４号土坑（ＨＰ－４）（図―784　図版―54）

位置　Ｍ１。ＨＰ－４、11･12はＪ－24内に位置する。　**概要**　平面は楕円形で、円筒形の掘り形である。東西1.5mで、南北0.9m、面積は1.1㎡、深さは４～54cmである。長軸方向はＮ―10.5°―Ｅ。埋土はＦＰ・Ｃ軽石を含む。貯蔵穴か。　（井野）

Ｈ５号土坑（ＨＰ－５）（図―784　図版―54）

位置　Ｍ１。Ｊ－24の西。　**概要**　平面は不整円形で、すり鉢状の掘り形である。南北1.1mで東西0.8m、面積は0.7㎡である。深さは22～29cmで、長軸方向はＮ―15°―Ｗである。埋土は砂質で、ＦＰ・Ｃを含んでいる。　（井野）

Ｈ６号土坑（ＨＰ－６）（図―784　図版―54）

位置　西台地南端のＬ102。　**概要**　隅丸の方形に近い。浅く平坦な底面をもつ。東西1.2mで南北1.1m、面積は1.2㎡。深さは18～25cmで、長軸方向はＮ－２°―Ｗ。Ｈ―128、Ｈ―123と重複、本遺構が新しい。埋土に焼土と炭化物を多く含む。墓壙か。　（井野）

H７号土坑（ＨＰ－７）（図―784　図版―55）

位置　Ｌ102。　**概要**　長円形に近い。南北1.3mで東西1.1m、1.2㎡である。深さは20～28cmで、長軸方向はＮ－15°－Ｗ。平坦な底をもち、円筒形に掘りこまれている。埋土は黒色土で炭化物を含む。Ｋ－５・Ａと重複する。ＨＰ－７が古い。墓壙か。（井野）

H８号土坑（ＨＰ－８）（図―784）

位置　Ｌ103。　**概要**　長方形に近い平面で、底面は平坦。東西1.5mで南北1.2m、面積は1.6㎡である。深さは20～54cmで長軸方向はＮ－８°－Ｅ。埋土は黒色土でロームがまじる。Ｈ―125、129と重複。Ｈ―125→Ｈ―129→ＨＰ－８で新しい。（井野）

H９号土坑（ＨＰ―15）（図―784　図版―55）

位置　Ｋ101（Ｋ―32内）。　**概要**　隅丸の方形に近い。南北0.5mで東西0.4mで面積は0.2㎡である。円筒形の掘り形をもち、深さは24～29cmで長軸方向はＮ―17°－Ｅである。周辺からは土師器片などが多く検出されている。（井野）

H10号土坑（ＨＰ―16）（図―784　図版―55）

位置　Ｇ101。西台地南端。　**概要**　隅丸の長方形。東西1.6mで南北0.6m。浅く、底面は平坦である。面積は0.9㎡。深さは13cm、長軸方向はＮ―85°－Ｅである。Ｋ―37P_8、Ｋ―39P_9と重複するが、カマ掘りの攪乱があるため新旧は不明である。埋土の１層には大量の炭化物が含まれており、壁の焼けこみ具合は不明であるが、火葬の場をそのまま墓にした墓壙とも考えられる。（井野）

H11号土坑（ＨＰ－17）（図―785　図版―55、121　表―294）

位置　Ｃ15。　**概要**　平面は楕円形で、南北1.6m、東西0.8m、面積は1.0㎡である。深さは72～100cm、長軸方向はＮ―12°－Ｅである。埋土はＦＰ・Ｃ軽石を含む黒色土で炭化物を多量に含んでいる。墓壙か。（井野）

H12号土坑（ＨＰ―18）（図―785）

位置　Ｂ16。　**概要**　隅丸の長方形で、南北1.7m、東西1.0mである。面積は1.5㎡、深さは40～48cm、長軸方向はＮ―13°－Ｅである。埋土は下層ほど炭化物が多く、焼土も含まれ、ＨＰ―10と同様の火葬墓とも考えられる。（井野）

H13号土坑（ＨＰ―19）（図―785）

位置　Ｂ16。　**概要**　平面は長方形で、南北1.4m、東西0.9m。面積は1.1mで深さは30～40cm、長軸方向はＮ－６°－Ｅである。埋土には中央部に炭化物が多く、南よりからは焼土も検出されている。ＨＰ―10・12と同様の火葬墓とも考えられる。Ｋ―53P_3と重複するが、本遺構が新しい。（井野）

H14号土坑（ＨＰ―22）（図―785）

位置　Ｂ15。　**概要**　隅丸の長方形。東西1.5mで南北0.7m。面積は0.9㎡である。深さは22～23cmで、長軸方向はＮ―65°－Ｅである。埋土はロームまじりの黒色土で、下層に炭化物が多く含まれ、墓壙とも考えられる。（井野）

H15号土坑（ＨＰ―23）（図―785　図版―55）

位置　Ｅ14。　**概要**　やや細長の楕円形。南北1.3mで東西0.6mで面積は0.7㎡である。深さは10～26cmで、長軸方向はＮ―６°―Ｗ。埋土は炭化物が多く、焼けたような感のある褐色土や、中央部底のロームがやや焼けていることから、火葬後にそのまま墓とした墓壙とも考えられる。（井野）

H16号土坑（ＨＰ―24）（図―785　図版―55）

位置　Ｂ17。　**概要**　隅丸の方形に近い平面。東西1.3mで、南北0.9mで面積は1.1㎡である。深さは18～20cmで、長軸方向はＮ―108°―Ｅ。埋土には多量の炭化物と焼土粒を含む。ＨＰ―10・12と同様の墓壙とも考えられる。Ｋ―73P_4と重複するが、断面により、ＨＰ―16が新しいとわかる。（井野）

H17号土坑（ＨＰ―27）（図―785）

位置　Ａ18。　**概要**　不整円形。南北1.3mで東西1.0m、面積は1.1㎡、深さは８～21mで、長軸方向はＮ―25°―Ｗである。埋土の２層には炭化物が多量に含まれ、３・５層には焼土粒も含まれる。火葬墓か。（井野）

H18号土坑（ＨＰ―29）（図―785　図版―55）

位置　Ｅ102。　**概要**　ほぼ円形。南北1.3m、東西1.2m、面積は1.3㎡、深さは37～47cm、長軸方向はＮ―16°―Ｅである。埋土はロームブロックの多くまじる褐色土。平面に比して深さがなく、底もあまり平坦ではない。（井野）

H19号土坑（ＨＰ－30）（図－785）

位置　Ｅ101。　**概要**　ほぼ円形。東西1.3m、南北1.1m、面積は1.2㎡、深さは22～34cm、長軸方向はＮ－47.5°－Ｅである。埋土はＨＰ－18に以ており、ロームブロックのまじる黒褐色土である。（井野）

H20号土坑（ＨＰ－31）（図－786）

位置　Ｅ１。　**概要**　ａ、ｂ、ｃの三つのピットよりなる。いずれも不整形。南北×東西は、ａは1.2×0.9m、ｂは1.3×0.9m、ｃは1.5×1.1m。面積はａが1.0㎡、ｂが1.0㎡、ｃは1.4㎡である。深さはａが20～21cm、ｂが38～53cm、ｃが17～26cm。長軸方向はａがＮ－2.5°－Ｗ、ｂがＮ－17.5°－Ｗ、ｃがＮ－16°－Ｗである。ａ、ｂ、ｃともに炭化物、焼土を含んでおり、火葬の墓壙とも考えられる。ａ、ｂ、ｃの新旧関係は不明である。（井野）

H21号土坑（ＨＰ－37）（図－786　図版－55）

位置　西台地南端のハ101。　**概要**　隅丸の長方形に近い平面。南北1.4mで東西1.0mである。面積は1.3㎡で、深さは20cm、長軸方向はＮ－18°－Ｅ。埋土は黒色土で炭化物を含んでおり、墓壙と考えられる。（井野）

H22号土坑（５Ｐ－85）（図－786　図版－56）

位置　イ５。　**概要**　隅丸の長方形に近い。東西1.2m×南北0.6mで面積は0.6㎡、深さは21～35cm、長軸方向はＮ－100°－Ｅである。底は浅く平坦である。埋土は黒色土で、ローム、炭化物を少し含む。墓壙か。（井野）

H23号土坑（５Ｐ－86）（図－786　図版－56）

位置　イ６。　**概要**　長円形。南北1.6mで東西0.9m。面積は1.2㎡で、深さは37～44cm。長軸方向はＮ－11°－Ｅである。埋土下層に炭化物を少し含む。円筒形に近い方をもつ。墓壙か。（井野）

H24号土坑（５Ｐ－87）（図－786　図版－56）

位置　ロ５。　**概要**　長円形。東西1.3mで南北1.0m。面積は1.2㎡、深さは20～26cmで長軸方向はＮ－97°－Ｅである。埋土は黒色土で下層には炭化物を含む。浅く平坦な底面をもつ。墓壙か。

H25号土坑（５Ｐ－88）（図－786　図版－56）

位置　イ３・４。　**概要**　二つのピットをもち、全体としては菱形。南北1.4mで東西1.0mで、面積は1.4㎡である。深さは北のピットが42cm、南が61cm。長軸方向はＮ－20°－Ｗ。底は漏斗状を呈す。埋土は黒褐色土が主体。（井野）

H26号土坑（５Ｐ－89）（図－786　図版－56）

位置　イ５。　**概要**　Ｈ－349と重複しているが、平面は方形と推定。一辺1.3m、面積は1.1㎡(現状)。浅く平坦な底。深さは20～39cm。長軸方向はＮ－10°－Ｅ。　**重複関係**　Ｈ－349と重複するが、新旧は不明である。埋土はやわらかな黒色土。（井野）

H27号土坑（５Ｐ－282）（図－786　図版－56）

位置　Ａ12。　**概要**　部分的に深いピットをもつ不整形。東西1.5m、南北1.1mで面積は1.5㎡。深さは中央部が20～26cm、西のピットが62～74cm、東のピットが36～45cm。長軸方向はＮ－100°－Ｅ。埋土は上層には炭化物が少量まじり、下層はローム主体の土層になっている。部分的に深いピットがH27号土坑本来のものかは不明。（井野）

H28号土坑（５Ｐ－283）（図－786　図版－56）

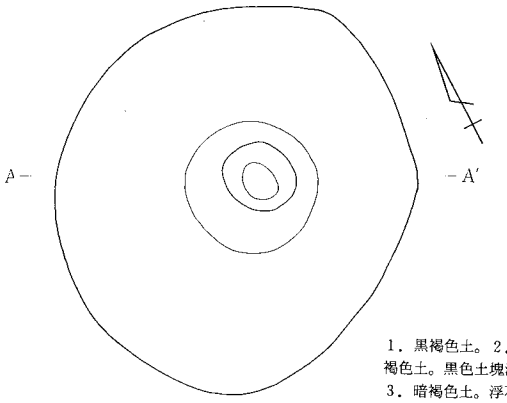
位置　Ａ12。　**概要**　長円形の平面で、中央部分が円筒形に深い掘り形をもつ。南北0.9mで東西0.5m、面積は0.4㎡、深さは周辺部が19～18cmで、中央部が48cm。長軸方向はＮ－13°－Ｅ。埋土はＦＰ・Ｃまじりの黒色土と、ロームまじりの茶褐色土。（井野）

H29号土坑（５Ｐ－284）（図－786　図版－56）

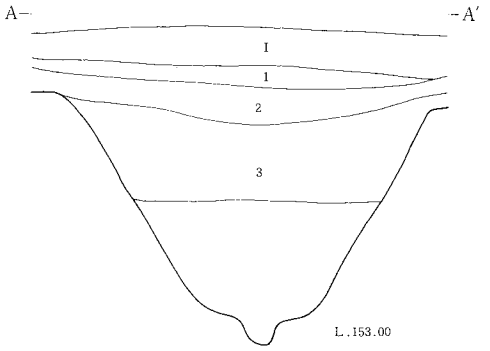
位置　Ａ11。　**概要**　隅丸の長方形。南北1.8mで東西0.7m、面積は1.5㎡である。浅く平坦な底で深さは11～18cm。長軸方向はＮ－116.5°－Ｅ。埋土はＦＰ・Ｃに炭化物に炭化粒を含む茶褐色土である。墓壙か。（井野）

H30号土坑（５Ｐ－288）（図－786　図版－57）

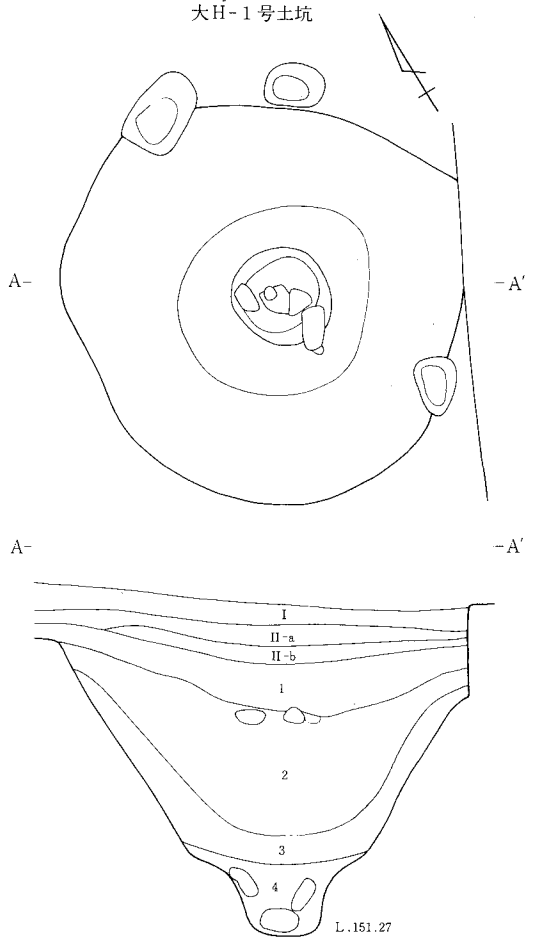
位置　イ－11。　**概要**　不整方形の平面をもつ。底面にはやや凹凸。東西1.4mで南北0.8m、面積は1.0㎡である。深さは27～29cmで長軸方向はＮ－102°－Ｅである。埋土は炭化物をかなり含んでいる。墓壙か。（井野）



1．黒褐色土。2．暗褐色土。黒色土塊混入。3．暗褐色土。浮石小粒子混入。

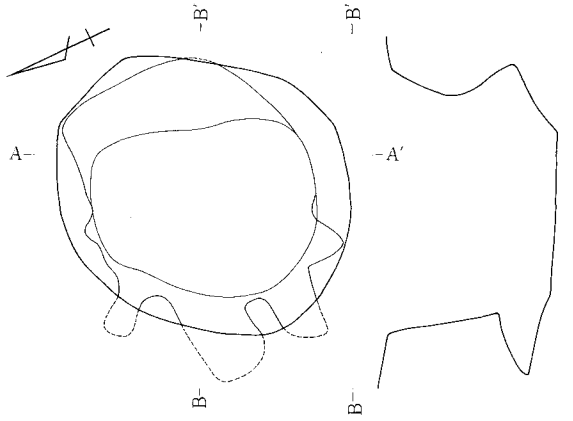


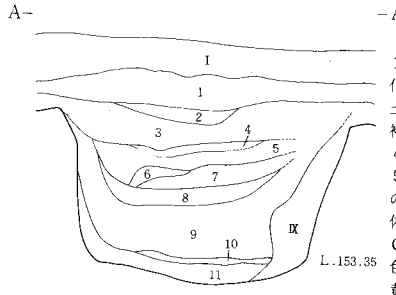
大H-1号土坑



大H-2号土坑

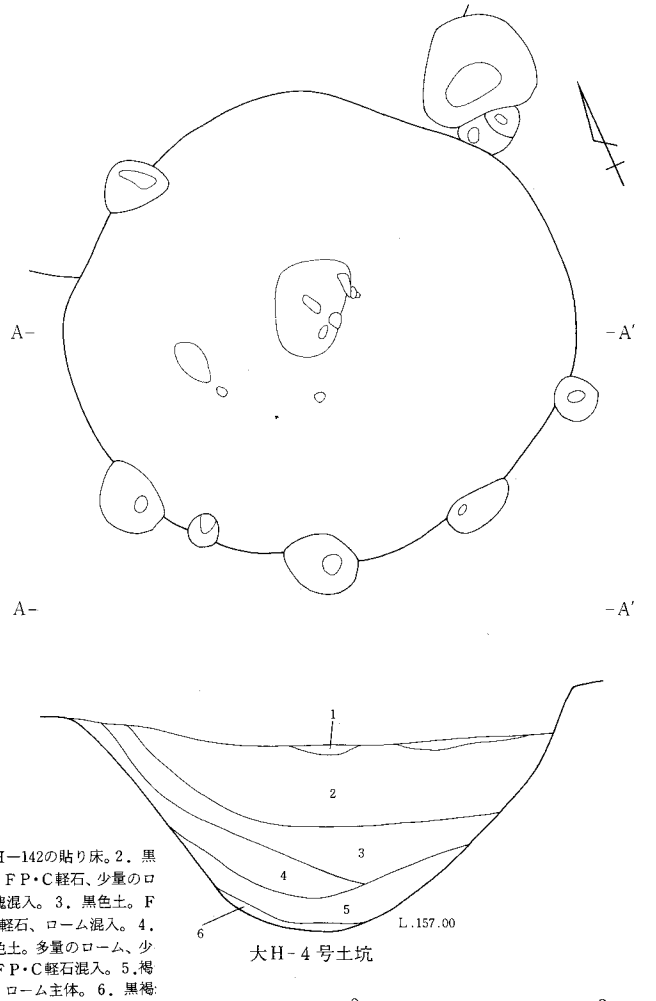
1．黒色土。黒褐色土塊混入。2．黒褐色土。少量のローム粒混入。3．暗褐色土。ローム粒、少量の浮石混入。4．灰褐色土。若干のローム粒、FP軽石混入。





大H-3号土坑

1．茶褐色土。FP・C軽石、炭化物、ローム粒混入。2．黒色土。C軽石多量に混入。3．黒褐色土。C軽石、ローム粒混入。4．黒色砂質土。C軽石主体。5．黒褐色土。ローム粒、多量のC軽石混入。6．FP軽石主体。黒色土混入。7．褐色土。C軽石、ローム粒混入。8．褐色土。多量のローム粒混入。9．黄褐色土。ローム粒と黒色土の混土。締りなし。10．C軽石、石英、角閃石の混合土。11．ローム。黒色土少量混入。

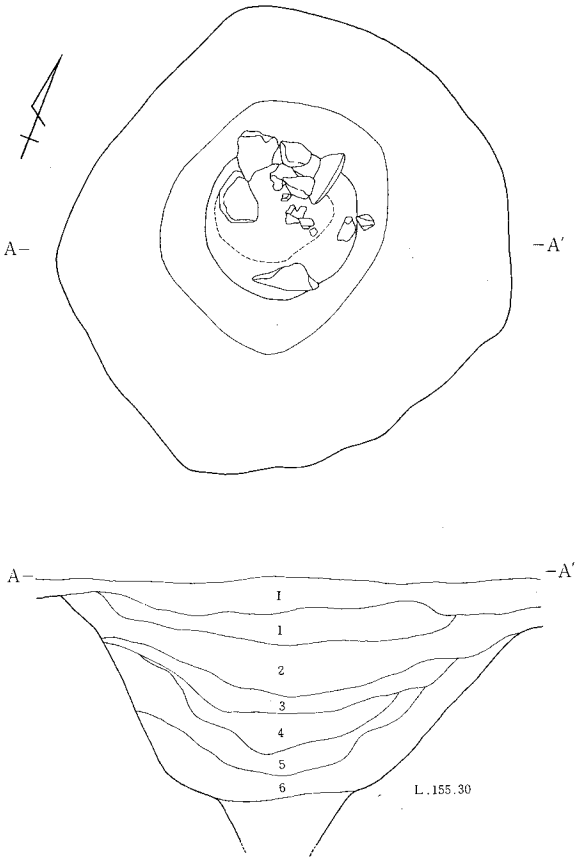


大H-4号土坑

1．H—142の貼り床。2．黒色土。FP・C軽石、少量のローム塊混入。3．黒色土。FP・C軽石、ローム混入。4．黒褐色土。多量のローム、少量のFP・C軽石混入。5．褐色土。ローム主体。6．黒褐色土。粘土質ローム。

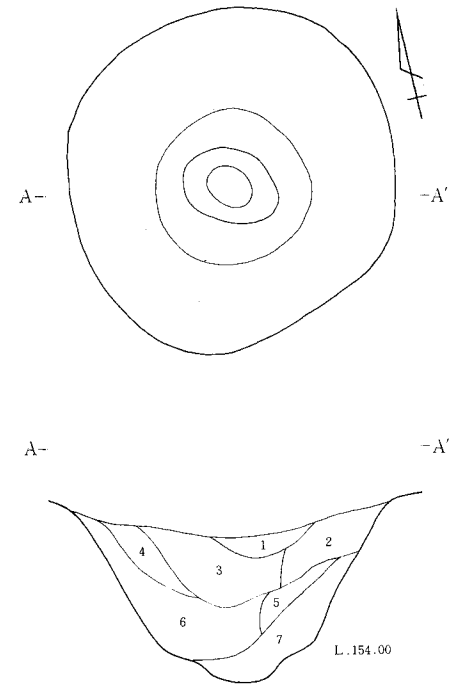
0 2 m

図—782　大H—1～4号土坑



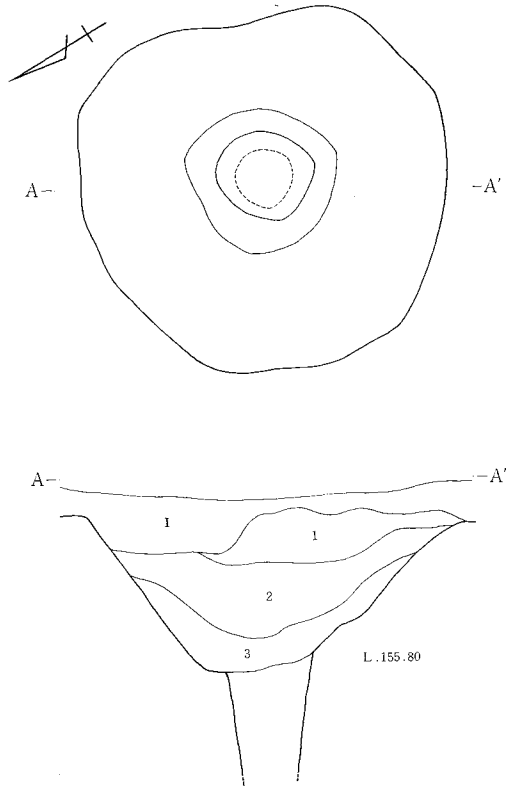
大H－5号土坑

1．黒茶褐色土。ローム、多量のＦＰ・Ｃ軽石、少量の焼土粒、炭化物混入。2．黒茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量のローム、若干の焼土粒、炭化物混入。3．黒色土。若干のローム粒、焼土粒、炭化物混入。4．茶褐色土。ローム粒主体。若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。5．茶褐色土。ローム粒混入。若干のＦＰ・Ｃ軽石、自然石混入。粘性強し。6．褐色土。ローム粒主体。若干のＦＰ軽石、自然石、焼土粒混入。粘性強し。



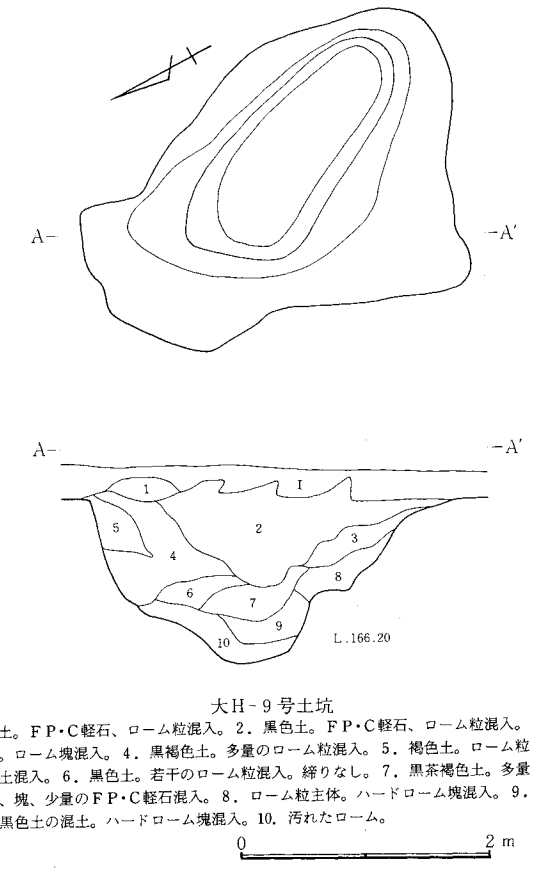
大H－8号土坑

1．黒褐色土。ローム粒、塊、ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、少量のローム粒混入。3．黒色土。ローム粒、少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。締り弱し。4．黒色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。締り弱し。5．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。締り弱し。6．黒褐色土。ローム粒、塊、炭化物、ＦＰ・Ｃ軽石混入。締りなし。7．暗褐色土。ローム粒中心。黒色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。



大H－6号土坑

1．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、若干のローム粒、焼土粒混入。2．茶褐色土。炭化物、ローム粒、多量のＦＰ・Ｃ軽石、焼土粒混入。3．茶褐色土。多量のローム粒、若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。粘性あり。

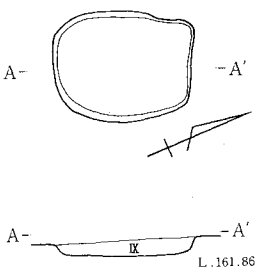


大H－9号土坑

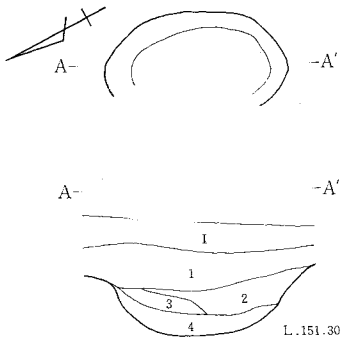
1．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。3．黒色土。ローム塊混入。4．黒褐色土。多量のローム粒混入。5．褐色土。ローム粒主体。黒色土混入。6．黒色土。若干のローム粒混入。締りなし。7．黒茶褐色土。多量のローム粒、塊、少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。8．ローム粒主体。ハードローム塊混入。9．ローム粒と黒色土の混土。ハードローム塊混入。10．汚れたローム。

0　2 m

図－783　大Ｈ－５・６・８・９号土坑

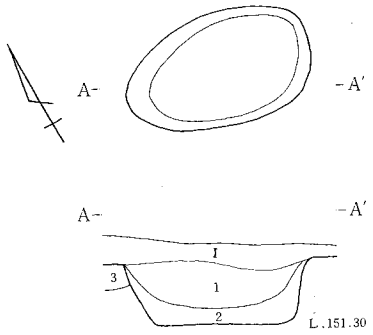


H－1号土坑



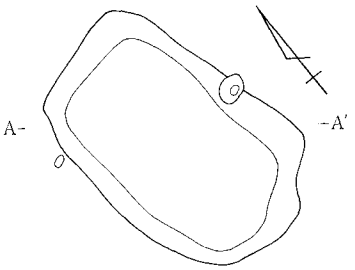
H－3号土坑

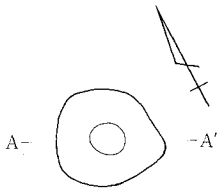
1．黒色土。若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒茶褐色土。Ｃ軽石、多量の炭化物混入。3．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。4．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の炭化物混入。

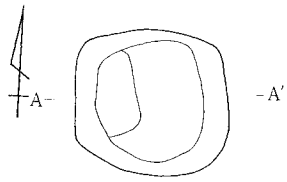


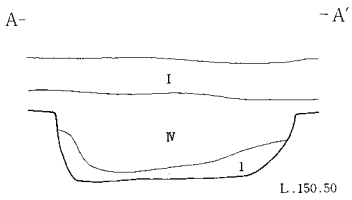
H－4号土坑

1．黒色土。ＦＰ軽石、多量のＣ軽石混入。2．黒色土。砂質。ＦＰ・Ｃ軽石混入。3．黒褐色土。



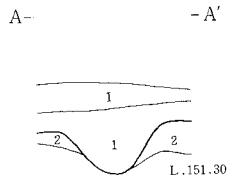






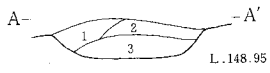
H－2号土坑

1．黒褐色土。



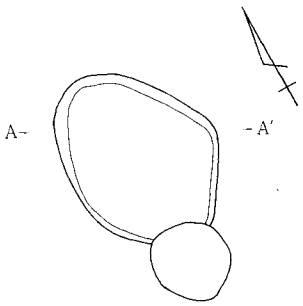
H－5号土坑

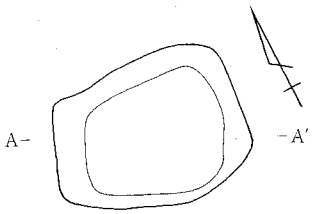
1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、黒褐色土混入。2．褐色土。Ｃ軽石混入。

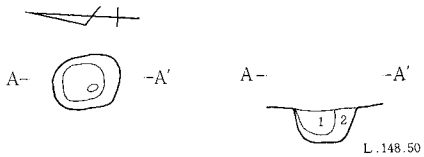


H－6号土坑

1．黒褐色土。焼土、ＦＰ軽石、若干の炭化物混入。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、炭化物混入。3．黒色土。砂質。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の炭化物混入。

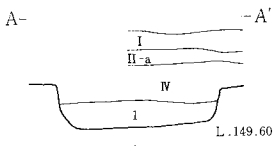






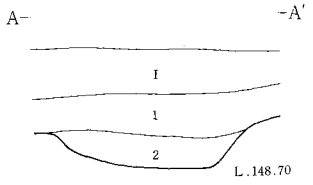
H－9号土坑

1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊混入。2．黒褐色土。ローム、Ｃ軽石混入。



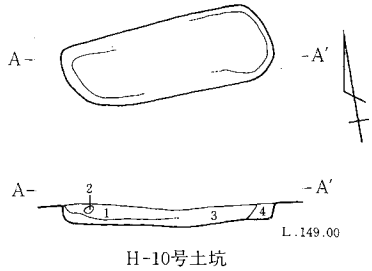
H－7号土坑

1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、炭化物混入。



H－8号土坑

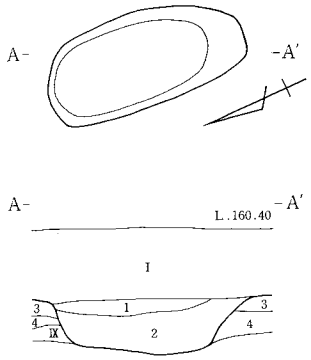
1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊混入。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊混入。



H-10号土坑

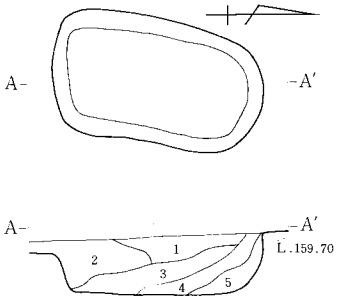
1．黒紫色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の炭化物混入。2．ロームブロック(φ6cm)。3．茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、若干のローム粒、少量の炭化物混入。4．汚れたローム。

図－784　Ｈ－１～10号土坑



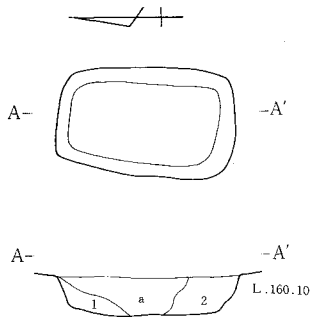
H-11号土坑

1．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の炭化物混入。3．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。4．黒褐色土。



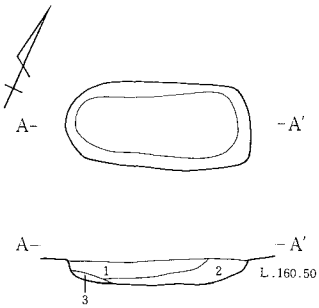
H-12号土坑

1．黒褐色土。ローム、少量のＦＰ・Ｃ軽石、若干の炭化物混入。2．褐色土。ローム混入。3．黒色土。多量の炭化物、少量の焼土混入。4．黒褐色土。ローム粒、炭化物混入。5．黒色土。多量の炭化物混入。粘性あり。



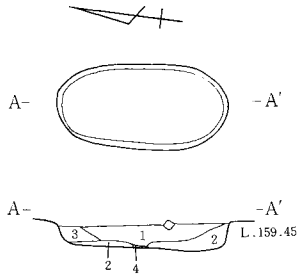
H-13号土坑

1．黒色土。ローム粒を多く含む。2．茶褐色土。ローム粒を多量に含む。炭化物、焼土を若干含む。a．黒色土。炭化物を多量に含む。



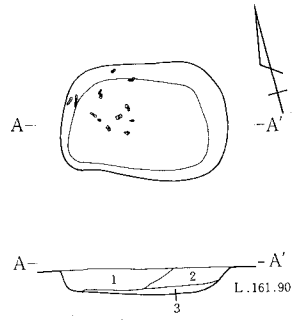
H-14号土坑

1．暗褐色土。多量のローム粒、ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒色土。多量の炭化物混入。3．汚れたローム。



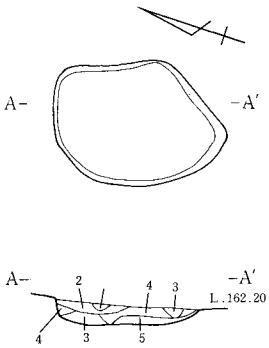
H-15号土坑

1．黒茶褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒、炭化物混入。2．褐色土。焼けてぱさぱさしたローム粒主体。3．黒色土とローム粒の混土。少量のＣ軽石、焼土混入。4．しっかりしたロームの床面。やや焼けている。



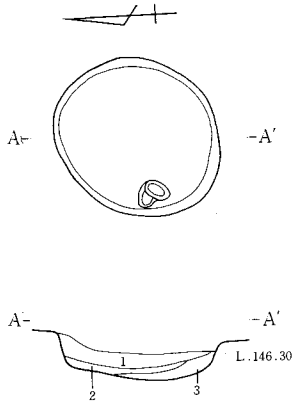
H-16号土坑

1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の炭化物混入。2．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、若干の焼土粒混入。3．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊、多量の炭化物混入。



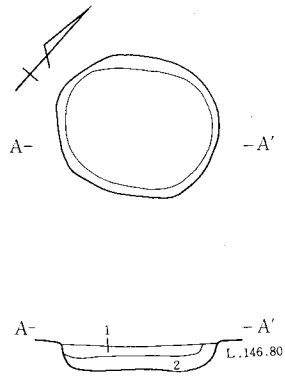
H-17号土坑

1．汚れたロームにＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量の炭化物混入。3．褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石、若干の焼土粒、炭化物混入。4．黄褐色土。若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。5．暗褐色土。若干の白色小粒軽石、焼土粒、炭化物混入。



H-18号土坑

1．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．褐色土。ローム塊主体。3．汚れたローム。

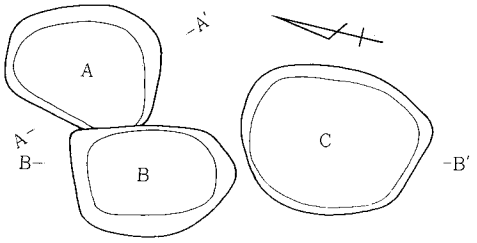


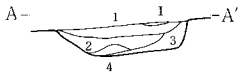
H-19号土坑

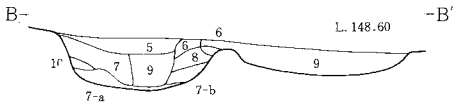
1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量のローム混入。2．黒褐色土。ローム塊混入。

0　2 m

図－785　Ｈ－11～19号土坑

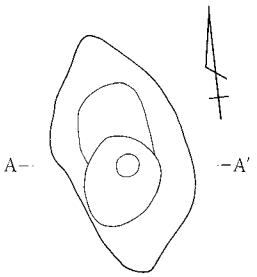


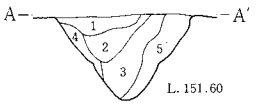




H-20号土坑

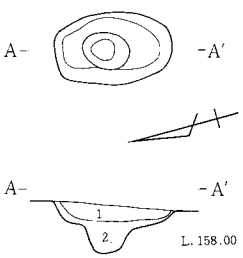
1．黒色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、炭化物、ローム塊、若干の焼土混入。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、多量のローム塊、少量のローム塊混入。3．黒褐色土。ローム粒・塊、若干のＦＰ・Ｃ軽石、下部に炭化物混入。4．黒色土と黒褐色土の混土。5．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、炭化物、ローム粒混入。締り強し。6．黒褐色土。ローム粒・塊、若干のＦＰ・Ｃ軽石、炭化物混入。締りあり。7．黒色土。焼土粒、若干のＦＰ・Ｃ軽石、多量の炭化物混入。7－a．黒色土。炭化物、焼土粒混入。7－b．黒色土。炭化物、焼土塊混入。4．黒褐色土。ローム粒、炭化物点在。9．黒褐色土。炭化物、若干のＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊混入。10．赤黒色土。多量の焼土粒、若干の炭化物、ローム粒混入。a．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム塊、炭化物、焼土粒点在。締り強し。b．暗褐色土。ローム塊、焼土粒点在。





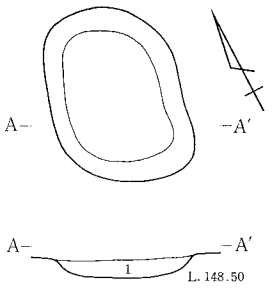
H-25号土坑

1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。2．黒色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。3．黒褐色土。4．黒褐色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。5．黒色土と褐色土の混土。5．褐色土。多量の黒色土混入。



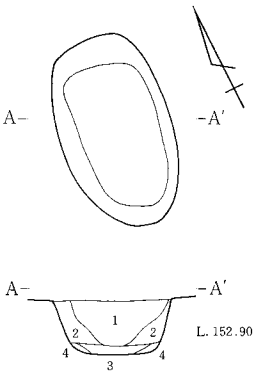
H-28号土坑

1．黒色土。F・C軽石混入。2．茶褐色土。少量のローム塊、若干のF・C軽石混入。



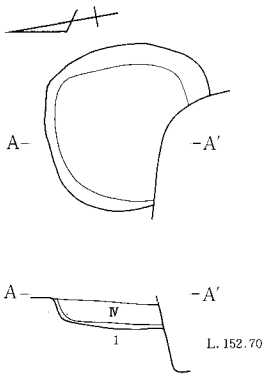
H-21号土坑

1．黒色土。炭化物、下部にローム粒混入。



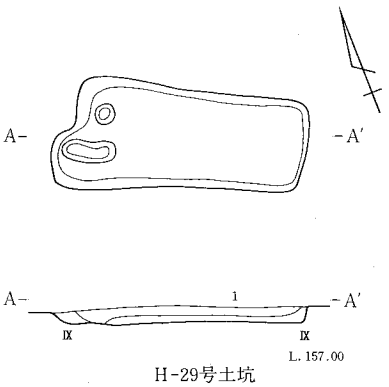
H-22号土坑

1．黒色土。若干のＦＰ・Ｃ軽石、ローム粒混入。2．黒色土。ローム粒、若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。3．黒色土。炭化物、少量のローム粒・塊、若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。4．汚れたローム。



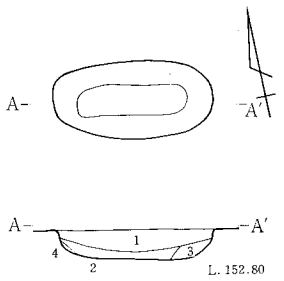
H-26号土坑

1．黒褐色土。多量のローム粒混入。



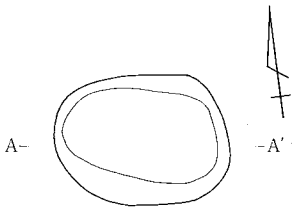
H-29号土坑

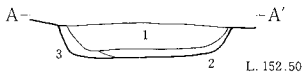
1．茶褐色土。多量のF・C軽石、少量の炭化粒混入。



H-23号土坑

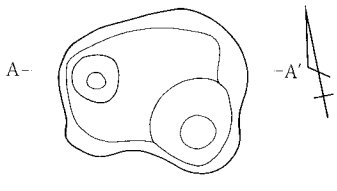
1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、若干のローム粒混入。2．黒色土。炭化物、少量のローム粒・塊、若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。3．黒色土。ローム粒、若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。4．汚れたローム。

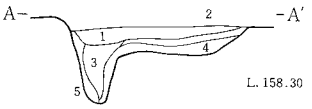




H-24号土坑

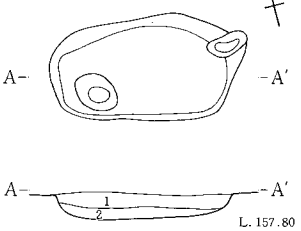
1．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石混入。2．黒色土。ＦＰ・Ｃ軽石、炭化物混入。3．黒褐色土。





H-27号土坑

1．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、少量の炭化物混入。締りあり。2．黒色土。多量のＣ軽石、少量のＦ系軽石、炭化物混入。3．茶褐色土。多量のＣ軽石、少量のローム塊、若干のＦ系軽石混入。4．汚れたローム。5．茶褐色土。ローム主体。

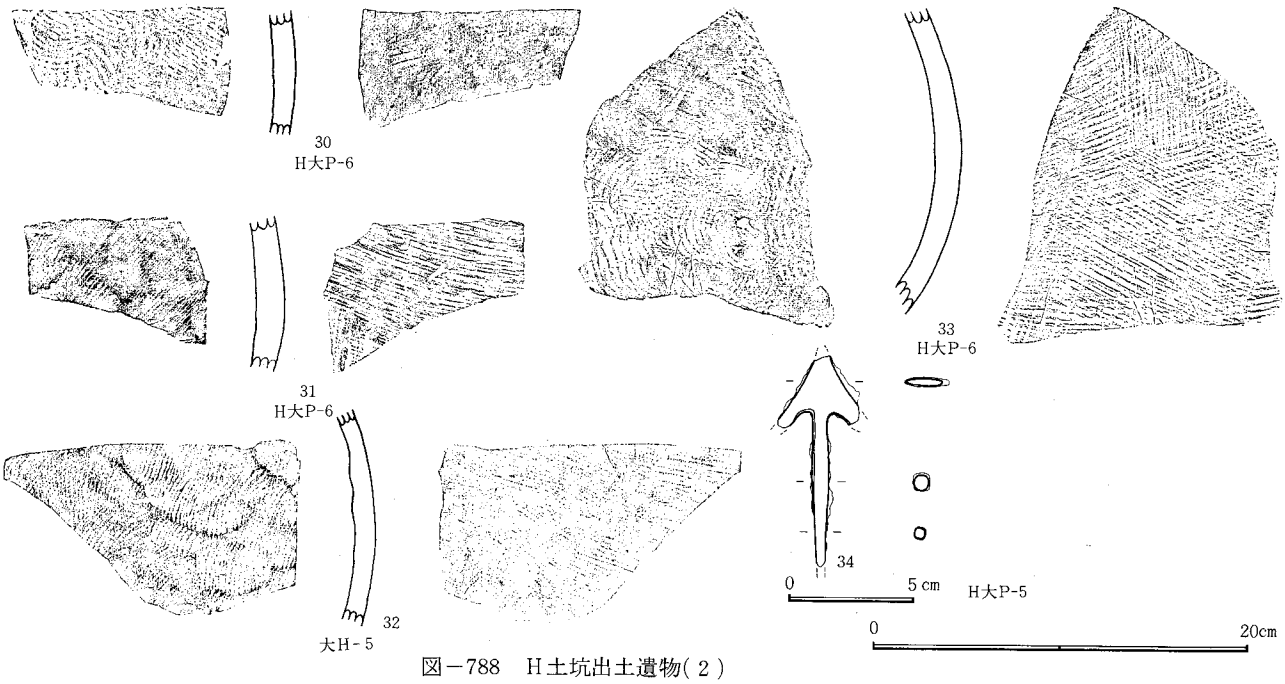


H-30号土坑

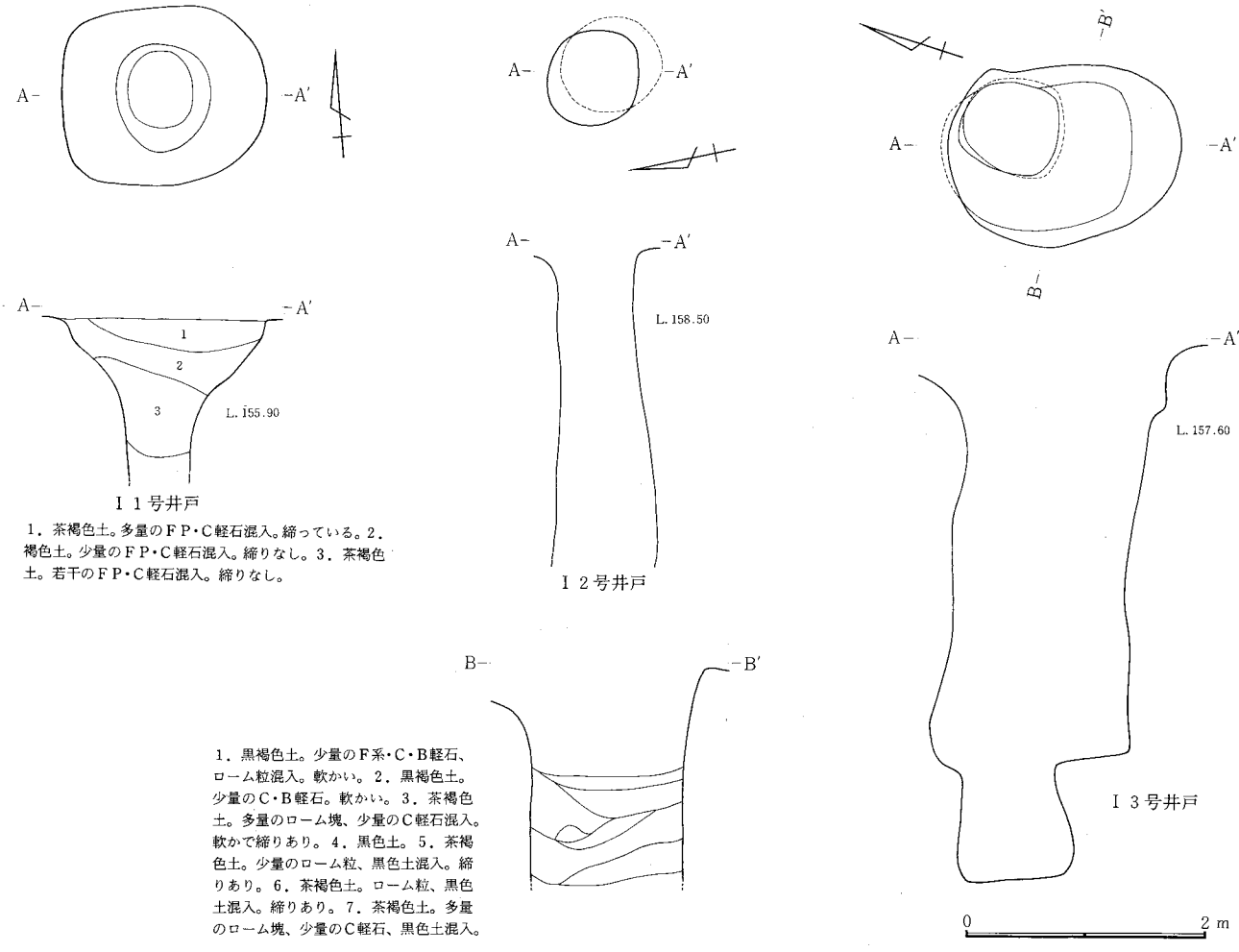
1．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石、炭化物混入。2．暗褐色土。ローム主体。

図―786　Ｈ－20～30号土坑

図－787　H土坑出土遺物(１)



図－788　H土坑出土遺物(２)



Ｉ１号井戸

1．茶褐色土。多量のＦＰ・Ｃ軽石混入。締っている。2．褐色土。少量のＦＰ・Ｃ軽石混入。締りなし。3．茶褐色土。若干のＦＰ・Ｃ軽石混入。締りなし。

Ｉ２号井戸

Ｉ３号井戸

1．黒褐色土。少量のＦ系・Ｃ・Ｂ軽石、ローム粒混入。軟かい。2．黒褐色土。少量のＣ・Ｂ軽石。軟かい。3．茶褐色土。多量のローム塊、少量のＣ軽石混入。軟かで締りあり。4．黒色土。5．茶褐色土。少量のローム粒、黒色土混入。締りあり。6．茶褐色土。ローム粒、黒色土混入。締りあり。7．茶褐色土。多量のローム塊、少量のＣ軽石、黒色土混入。

図－789　Ｉ－１～３号井戸

6 井　　戸

Ｉ１号井戸（５Ｐ―78）（図―789　図版―57）

位置　Ａ９。周囲は竪穴住居跡や掘立柱建物跡の密集したところである。その中央部に近いところにある。　**概要**　上面は隅丸の長方形に近く、中央部に楕円形の深い掘り込みをもつ。掘り込み面の規模は92×76cmである。埋土はＦＰ・Ｃ軽石を含む茶褐色でロームを多く含んでいる。１層を除きやわらかい。遺物は特に検出されなかった。　（井野）

Ｉ２号井戸（５Ｐ―286）（図―789　図版―57）

位置　イ13。南側に竪穴住居跡と掘立柱建物跡の密集地を臨む。周囲には遺構はあまり多くない。　**概要**　円形に近い平面をもつ。ほぼ上面の規模で掘り込まれている。規模は83×75cmである。埋土はやわらかい砂質層であった。2.5m以下は未掘。遺物は特に検出されなかった。　（井野）

Ｉ３号井戸（５Ｐ―294）（図―789　図版―57）

位置　Ａ10。Ｉ１号井戸の近くで、周囲は掘立柱建物や竪穴住居跡の密集地である。　**概要**　上面は長円形で円筒形に約3.5m掘り込まれている。やや固い中段があり、その北部分がさらに平面が長円形で円筒形の掘り形で掘り込まれている。上面の規模は南北が1.0m、東西1.4mである。埋土はロームを含んだ茶褐色土が主体である。遺物は特に検出されなかった。　（井野）

7　溝（図―790　図版―57、58）

芳賀東部団地遺跡の第２巻で扱う調査区の、西台地と中央台地からは54条の溝が検出されている。（東台地の溝については第１巻を参照のこと）その他中世と考えられる溝もあるが、中世の遺構と縄文時代は第３巻なので省く。また、個々の溝について平面図はのせず、一覧表とした。全体的な位置関係については付図の全体図を参照されたい。

溝を埋土と、そこに含まれている軽石とにより分けると４種類にわけられた。ＦＰ・Ｃ軽石のみ検出されたもの、Ｂ軽石の純層が検出されたもの、Ｂ軽石が埋土全体に含まれているもの、耕作土とほぼ同じ土質のものである。ＦＰ・Ｃ軽石のみ溝は数が少なく、台地中央部を東西に走るＷ―５や、中央部やや北のＷ―２８である。他に現状ではＦＰ・Ｃ軽石しか認められない溝はあるが、その上層は耕作で削平されてしまったとみられるものもある。

Ｂ軽石純層を埋土に含む溝にはＷ―１、Ｗ―２、Ｗ―４などがある。Ｗ―１は台地の中央部を南北に走る。Ｗ―１の走る地点の地形はやや谷状であり、終末に近いところはやや広い谷になっている。Ｗ―２は調査区の南端の一区画を方形にめぐる形を呈している。溝の周辺は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の密集している地区である。付近には溝が多いが、等高線にそうように東西を走り、西端がまがりさらに南北に溝が走るものが認められる。南北の溝は等高線に直角に近く交わる傾向がみられる。

Ｂ軽石を埋土全体に含む溝がほとんどを占める。調査区やや北のＷ―23、Ｗ―29は南西端で直角に近くまがっており、その周辺は竪穴住居跡や掘立柱建物跡の多いところで、溝との関連性がうかがわれる。西台地中央の溝は、東西に長い、もしくは、南に曲がってから、再度曲がり東西に走るものが見られる。この周辺も遺構が多いところである。

耕作土に似た土層の溝は数は少なく、また東西に走るものがほとんどである。同じく耕作土を埋土とするものにカマ掘りがあるが、カマ掘りは掘り形の断面が、はっきりした円筒形になっている。

断面はすり鉢状を呈するものが多い。なかには円筒形に近いものもある。収録した溝断画図は他の溝や住居跡と重複関係があるものを中心に使用してある。

溝の性格については、用水路とも、区画のためのものとも考えられる。Ｗ―23、Ｗ―27、Ｗ―34などは住居跡や掘立柱建物跡に並立、中央を通るなど区画とも考えられるが、住居跡の多い調査区南西隅やその北の住居跡群からは溝は検出されていない。また、Ｗ―４、Ｗ―５、Ｗ―１などはその周辺にほとんど遺構がなく、用水路とも考えられる。

溝よりの遺物の出土は多くない。Ｗ―16より土師器片、Ｗ―17・19より土師器・須恵器片、Ｗ―18より須恵器片、Ｗ―21より鉄滓、Ｗ―27より土師器片が出土している。　（井野）

表―１　溝　一　覧　表（Ｗ―39～41、45～61は第１巻に収録、位置関係については別添の全体図を参照されたい。）

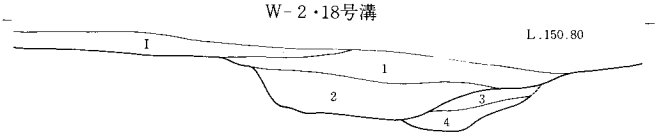
溝番号	旧　番　号	埋土と埋土中の軽石	重複（旧→新）	溝番号	旧　番　号	埋土と埋土中の軽石	重複（旧→新）
1	W-1	B軽石純層（上層）	1→3・7	28	W-J14・5	黒色土、FP・C軽石	なし
2	W-14・21	B軽石（上層）	1→2	29	W-29	B軽石（全層）	29→30
3	5W-24	B軽石（全層）	5→3、3→7	30	W-30	耕作土に近い。	29→30
4	W-5(53・54)	B軽石純層（上層）	なし	31	W-S-19	B軽石純層（上層）	なし
5	W-5	黒褐色土、ＦＰ・Ｃ軽石	5→3	32	W-32	B軽石（全層）砂質	27→32
6	W-6	B軽石純層（上層）	なし	33	W-33	黒色土、Ｃ軽石	74→18→33
7	W-7	B軽石（全層）	3→7、1→7	34	W-34	黒色土、Ｃ軽石	74→18→34
8	W-F・E-1	不明	なし	35	W-35	B軽石（全層）	36→35
9	H-199内	黒色土、黒褐色土、ＦＰ・Ｃ	不明	36	W-36	B軽石純層（上層）	36→35
10	W-10	火山灰性土。ＦＰ・Ｃ軽石	なし	37	5W-10	黒色土，ＦＰ・Ｃ軽石	なし
11	W-11	耕作土に近い。	なし	38	53W-F・G-103	B軽石（全層）	18→17→38
12	H-199内	W-9に同じ	不明	42	W-42	B軽石（全層）	なし
13	H-199内	不明	不明	43	W-43	B軽石（全層）砂質	なし
14	5W-28・32	黒色土にＦＰ・Ｃ軽石	62→14→21	44	W-44	B軽石（上層）	なし
15	H-144内	耕作土、黒色土、ローム混土	なし	62	5W-27	黒褐色土、ＦＰ・Ｃ、砂質	62→14→21
16	W-16	B軽石（全層）	16→74・26・17・18	63	5W-30	黒色土、ＦＰ・ローム	なし
17	W-17	B軽石（全層）	18→22→17→20	64	5W-12	黒色土、ＦＰ・Ｃ、ローム	なし
18	W-18	B軽石（全層）	18→33・34 74→18	65	5W-11	黒色土、ＦＰ・Ｃ、砂質	なし
19	W-19	B軽石（全層）	20→19	66	S-53-Wハ-11-44	耕作土に近い	なし
20	W-20西	B軽石（全層）	20→19	67	5W-26	黒色土、ＦＰ	なし
21	H27内5W-25	B軽石（全層）砂質	62→14→21	68	5W-9-1	耕作土に近い、砂質	なし

22	W-22	B軽石（全層）	18→22→17	69	5W-31	黒色土、FP、ローム	14→69
23	W-23	B軽石（全層）	23→30	70	W-A-13	耕作土に近い、ローム	なし
24	W-24	不明	不明	71	W-20東	耕作土に近い	74→71
25	W-25	黒色土、ローム、FP軽石	25→1→35	72	W-31	B軽石（全層）	なし
26	W-26	B軽石（全層）砂質	16→26	73	W-37	黒色土にFP・C・ローム粒	なし
27	W-27	B軽石（全層）	27→32	74	W-14	B軽石(全層)下層は少ない	73→18

W-3・52号溝　L.157.50

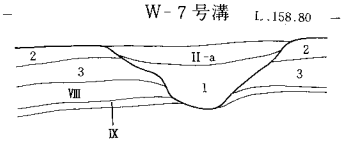
1．黒色砂質土。2．暗褐色砂質土。3．黒色土とローム混土。4．砂質土。B含む。5．黒色土。FP・C含む。

W-2・18号溝　L.150.80



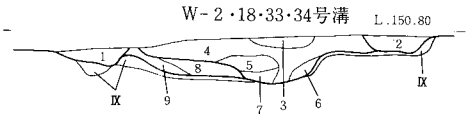
1．暗褐色砂質土。FP・C・B含む。2．暗褐色土。FP・B含む。3．黒暗褐色砂質土。焼土、炭火物含む。4．黒褐色とロームの混土。

W-7号溝　L.158.80



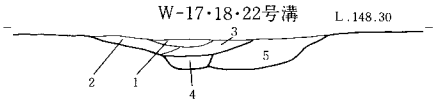
1．黒褐色土。B軽石、ローム小ブロック混入。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．黒色土。

W-2・18・33・34号溝　L.150.80



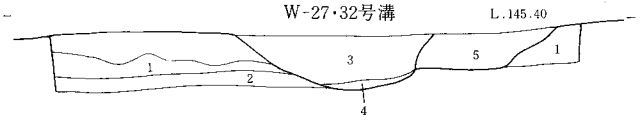
1．黒色土。2．黒色土。多量のローム塊混入。3．D。C軽石、若干の焼土混入。4．黒色土。C軽石焼土混入。締り良し。5．黒褐色土。C軽石混入。締りなし。6．黒色土とロームの混土。7．D。ローム主体。8．黒色土とローム塊の混土。9．ローム。黒色土混入。

W-17・18・22号溝　L.148.30



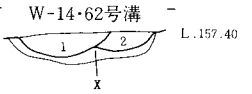
1．茶褐色土。FP・C軽石、多量のB軽石、ローム粒混入。2．黒褐色土。FP・C軽石混入。3．茶褐色土。FP・C軽石、多量のB軽石混入。堅く締る。4．灰茶褐色土。粗砂主体。ローム粒多量に混入。5．茶褐色土。ローム粒、B軽石主体。

W-27・32号溝　L.145.40



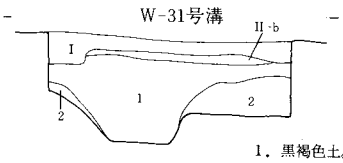
1．FP・C軽石混入。2．黒色土。粘性あり。3．灰色土。B軽石、若干のFP・C軽石、焼土粒混入。4．黒色土。B軽石主体。5．砂質黒色土、C軽石混入。

W-14・62号溝　L.157.40



1．(W—28)黒褐色土。砂質。少量のFP・C軽石混入。2．(W—27)黒褐色土。砂質。少量のFP・C軽石、ローム混入。

W-31号溝

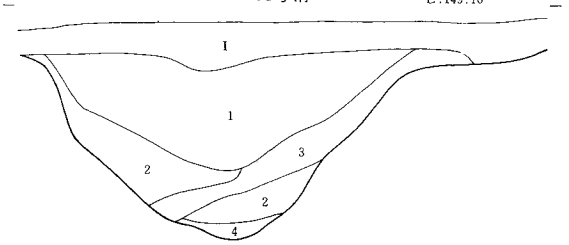


1．黒褐色土。さらさらしている。浮石混入。2．黒褐色土。

W-29号溝　L.163.90

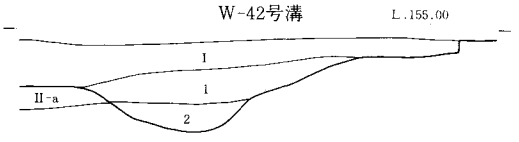
1．茶褐色土。B軽石、ローム粒主体。多量のFP・C軽石混入。2．D。ローム粒主体。若干の黒色土混入。

W-35号溝　L.149.10



1．灰黒色粗砂。2．黒色土粗砂。多量のB軽石混入。3．黒色土。多量のB軽石混入。4．黒色土と砂の混合土。

W-42号溝　L.155.00



1．黒色土。B軽石主体。2．黒色土粗砂。多量のB軽石混入。

0　2 m

図—790　W—2・3・7・17・18・22・31～35・42号溝土層断面図

Ⅳ　芳賀東部団地遺跡の鉱滓分析結果について（図版—122、123）

高　塚　秀　治（東京工業大学）
井　上　唯　雄（群馬県埋文センター）

1　はじめに

芳賀東部団地遺跡の発掘調査に伴い出土した鍛冶関連遺構から出土した鉄滓及び炉壁等について定性、定量分析を実施した結果の報告である。今回、分析を実施した試料は4遺構、14点で、内12点が鉄滓で他は炉壁及び羽口片である。この分析によって、遺構の性格を明らかにすることをねらいとしている。

2　試料とその分析について

試料は、住居跡出土のもの2遺構、2点、鍛冶址からの出土遺物2遺構、12点である。これにより、住居跡内からの出土鉄滓と鍛冶址から出土した鉄滓の間に質的相違が認められるか否かについて検討したいためである。また、それぞれの試料については、外見上で変化の認められるような試料を選んだ。

試料分析は、化学組成については蛍光X線分析法(ガラスビード法)、鉱物組成については粉末X線分析法によって行った。なお、蛍光X線分析においては、分析用試料を作成するため、試料の前処理を以下のように行なった。試料は電気炉中（大気中）で、一昼夜加熱し、共存する水分、有機物、揮発性物質を除去した。この条件では、二価の鉄 (Fe_2O) は総て、三価の鉄 (FeO_3) となる。

なお分析の対象とした成分は9原素 (Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、K、P) で表示した9成分の数値が100%となるよう規格化した。

表—2　芳賀東部団地遺跡出土鉄滓の化学組成および鉱物組成

高　塚　秀　治（東京工業大学）

分析番号	遺　物	出土遺構	番　号	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	K_2O	Ti/Fe	
1	鉄　滓	H87号住居跡	No.18	13.75	1.16	4.72	75.88	0.10	1.61	2.30	0.49	0.013	
2	鉄　滓	H198号住居跡	No.7	8.01	0.10	2.59	87.79	0.10	0.83	0.38	0.20	0.001	
3	羽　口	T2号鍛冶址	No.19	59.66	0.89	26.25	12.10	0.01	0.23	0.76	0.11		
4	鉄　滓	〃	No.27	14.43	0.17	4.01	77.14	0.11	1.31	1.51	1.32	0.002	
5	鉄　滓	〃	No.30	20.55	2.18	6.30	63.12	0.25	1.09	5.23	1.28	0.003	
6	鉄　滓	〃	No.34	15.40	3.32	5.70	71.01	0.22	1.35	2.20	0.80	0.04	
7	鉄　滓	〃	No.47	1.40	0.03	0.55	95.03	0.03	0.24	0.06	0.04	0.0003	$SO_3$2.66
8	鉄　滓	〃	No.50	23.40	1.09	5.01	64.03	0.24	0.93	4.47	0.83	0.015	
9	鉄　滓	〃	No.54	16.07	2.09	5.82	72.85	0.17	1.01	1.80	0.19	0.025	
10	鉄　滓	〃	No.63	14.98	2.05	4.71	72.67	0.17	1.66	3.25	0.51	0.024	
11	炉　壁	T3号鍛冶址	No.4	64.27	0.86	21.65	8.21	0.29	0.25	3.17	1.30		
12	鉄　滓	〃	No.10	14.52	3.42	5.23	70.82	0.29	1.70	3.36	0.66	0.041	
13	鉄　滓	〃	No.11	25.47	0.46	11.34	59.30	0.09	0.32	2.55	0.47	0.007	
14	鉄　滓	〃	No.12	8.40	5.24	3.34	77.99	0.34	1.73	2.67	0.29	0.058	

Ti/Fe＝TiO×6÷7÷Fe

3　各試料の分析結果

資料1（H87号住居跡出土）　本遺構は周辺に同時に存在したとみられる遺構はみられない。一般の竪穴住居と異なり、床面中央に石組みの施設があり、その脇に地床炉が認められている。床面には二つの大型ピットが穿たれ、その中に鉄滓、羽口、炭火物等を埋めた廃棄穴とみられた。石の周辺には鍛造の際のチップスが飛散していた。また、るつぼ片も出土して、この遺構の性格を示しているとみられる。

分析試料は廃棄穴出土の一点で、塊状を呈する多孔質の鉄滓である。分析値は他資料に比し、特徴的なものは認められない。

資料2（H198号住居跡出土）　本遺構は特に製鉄関連の遺構とみられるものは認められないが、南壁下周溝内に鉄滓2点が出土したものの1点で、薄い多孔質の塊状滓である。Ti分が極端に少なく、Fe_2O_3が高比率である。SiO_2も微量で他の成分も極端に少ない。X線分析結果でも Wüstite、Magnetite が確認された。（図版参照）

資料3～10（T2号鍛冶址）　本遺跡は総じて、製鉄関連の工房跡とみられる。即ち、時期的に二時期に分かれ、東側の一段高い部分の製鉄遺構を後に切って深い舟型の土坑を掘り、これに複数の地床炉を設けたものと考えられる。地床炉は、このピットの南側に多少寄せて三つが並列していた可能性があり、廃棄穴とみられるピットからは鉄滓、羽口、鉄鉗、るつぼ等が出土して、この遺構の性格を示している。

分析資料は3が羽口残片で特異な数値を示している他は、すべて鉄滓である。この内、4は内部が緻密な椀状滓、5は大型の多孔質椀状滓、6は流状模様のある滓、7は内部の緻密な滓、8は流状滓、9は多孔質の椀状滓である。

組成的にみるとSiO_2はかなりバラツキがみられ、5、8のように20をこえるものから、4、6、9の10台のものの他、7のように1台のものも含んでいる。おそらく、炉の中における位置のちがいによる炉内温度や炉壁との関連であろうとみられる。TiO_2は最も多い6で3.32、最少で7の0.03であるが平均1.56と低い数値を示している。Fe_2O_3は7の95.03が極端に高く70台が4、6、9、10である。その他の成分では5のCaOが5.23と高く、8がこれに続く。

総じて、7は鉄分95.03と高く、他の不純物をほとんど含まないもので、鍛練滓としてはほぼ鉄塊に近いもので、それの酸化したものとみられる。4もこれに近い性格をもつものとみられる。それに比べて5、6、8、9などは、不純物が多く、特にチタン分が多く、進んだ状態ではないとみられる。

X線分析では、6はWüstiteとMagnetiteが、8はFayaliee、Wüstite、9はWüstite、Magnetiteが認められる。また7には2.66のSO_3が含まれるが、これがいかなる状態で入りこんだものか不明である。

資料11～14（T3号鍛冶址）　遺構中に40×60cmほどの平石を据え、上面が磨耗している。また、その周辺に鍛冶の際のチップスが飛散し、床面には廃棄穴が掘り替えられている。中央やや北寄りには地床炉もあり、小鍛冶的遺構の典型として受けとれる様相を示している。

資料11は羽口片である。また12、14は内部が緻密な滓で、13は多孔質の椀状滓である。Sio_2は13が、Tio_2は0.46と13が低く、Fe_2O_3は13が59.3で他は70台の数値を示している。全体的には各成分にバラツキはみられるものの傾向としてはそれぞれ、12、14が資料の6と、13は8が類似する傾向をみせることから、遺構としては同種のものを推察させる。

4　分析結果の考察

分析した資料の内3及び11は羽口残片であり、その成分組成について論及する資料を持ち合わせていないので、ここでは除外して考えることにする。

本遺跡から出土した鉄滓は製鉄遺構に伴うものであることは明らかである。その製鉄工程は一般的には、鉄素材の品質を調整する（炭素含有量の調整、不純物の除去）ための工程の精錬と鋼から鉄器を作るための鍛造の工程（いわゆる小鍛冶）が考えられるが、本遺跡から出土した鉄滓は、すべて後者の工程に伴なうものとみられる。

即ち、製錬時の不純物は、総じて少なくなってきている。その最も顕著な資料がNo.7の資料で、ほとんど純鉄に近いものと思われる。この資料は精錬の工程で生み出された鋼とみてまず誤りあるまい。即ち、後者の工程の原料として持ち込まれたものか、それに近い原料とみられる。これに近いものが、資料2、4であろうか。

それに比べて、他の資料はSiO_2、Al_2O_3、MgO、CaOなどの成分が増加している。このことは、これらの成分の大半は、その後の作業工程（小鍛冶）で、新たに加えられた成分であるとみることができる。その指標となるTi／Fe値でみると、製錬滓（たたら滓）の場合の0.12前後の数値と比較すると極端に小さくなっている。特に2、4、5、7、13は小さく、とりわけ、7は特に小さい値を示す。最大値を示す14でも0.058であり、全体として、バラツキが少なく、傾向は一致している。このことは工程を多く経た証左である。

個々の成分でみてもSi、Al、Caが少ない傾向が他の遺跡の資料分析結果から指摘できる。また、チタン分が少なく、ほとんどにウスタイト、フェアライト、マグネタイトが検出される。チタンの少ないのは原料鉄との関連であろうか。

いずれにしても、これら一連の鉄滓は、小鍛冶に伴なうものとみることが妥当である。このことは、遺構との関連においても首肯されることで、更に、共伴する遺物の中に鉄鉗、るつぼ、鉄製品が周辺の遺構から多く認められることもその裏づけとなろう。

出土遺物の共伴関係でみるとH198号、T2号の一部は9世紀第2四半期ごろのものとみられ、H87号住居とT2、T3は9世紀第3四半期のものであろう。このようにみてくると、少なくともこの遺跡では9世紀の第2四半期には製鉄が開始されたとみることができる。更にH58号住居例でみれば9世紀初頭までは確実にさかのぼらせうるであろう。更に可能性とすれば、T2号遺構の先行する上段の遺構は、それより更にさかのぼる可能性をもゥている。この傾向は集落におけるこの種の遺構が、他遺跡でも同時期に急激に増加する傾向を考えれば、少なくとも赤城南麓地域では共通に認められるものであろう。こうした製鉄技術普及が背景にあると共に、製鉄技術集団が、こうした集落に配された可能性を示すものかも知れない。

特にT2号遺構におけるあり方は、小鍛冶炉の集中であり、鳥羽遺跡（前橋市、群馬町）でみられた長屋風の建物の中に十数個の小鍛冶炉を配する方法より小型化したものとも受取れる。そうした見方からすれば、このT2号遺構は、この集落の中の小鍛冶集団が、自給自足的にこの集落の鉄製品を生産する施設であった可能性もある。更に、集落中の時期と鉄器との関連について詳細に検討する必要があろう。

V　芳賀東部団地遺跡出土の線刻紡錘車について

(図—79)

井　上　唯　雄

最近の県内の発掘調査で資料が急増して注目されるようになったものに線刻紡錘車がある。紡錘車の上・下面及び側面に細い線刻で文様や文字を表わしたものがある。すでに30例を超える例が収集されるが、その芳賀東部遺跡群でも4例が指摘されている。そこで、本稿では、その線刻紡錘車について紹介し、その意味について述べてみたい。

資料1　　H—77　出土

形状は、扁平な薄形で、大径5.4cm、小径4.3cm、厚さ1.2cmをはかる。側面との稜は比較的鋭く、表面の研磨はていねいで使用擦痕も弱い。中央部に径8㎜の穴が一方方向からあけられている。材質は滑石製である。

文字は大径面に、横書きに「春日ア」、中央から端方向に「春日」が二カ所、先端が平たくつぶされた形の記号様のもの3つにより画され、その他に、中央から端部方向に「上上 T」とある。更に、小径面には、中央から端部方向に向って、縁部に「麿春日ア国麿」の六字が線刻されている。特に文字画数の多い「麿」は側面には出るようにして刻されている。　　重量73g。

資料2　　H—61　出土

形状は、截頭円錐台形を呈し、大径3,7cm、小径2.6cm、厚さ1.8cmの大きさである。側面はほぼ平らであるが、小径面はつぶれて平滑面がみられないまでになっている。使用擦痕などのあとからの傷も多い。中央部には径8㎜の孔があけられている。石材は、滑石製である。

文字は側面に右まわりに9字が線刻されている。文字の不明な部分もあるが、「勢多郡□(楊カ)　五百□都□(厭カ)」と読めるという。ただ、かなりいろいろな線が入り組んでいるので、多少、不確定要素をもつものとみられる。　　重量38g

資料3　　K—113　P_4出土

形態的には、資料2に類似する。截頭円錐台形の断面で、側面には削痕をとどめている。大径3.7cm、小径2.5cm、厚さ1.4cmで、表面は平滑さを欠き、円形も一部歪んで、つくりはあまりよくない。大径面には、中央部に一条のキズが走っている。

文字とみられるものは、小径面に「山」字様のものが、端部から中央に向って、縁にかかってみられる。ただ、これは、先端が、流れていて、止めが弱いこと、たての線が直線でないことなど、不確定要素もある。重量26g。滑石製

資料4　　H—141　No.2

形状は、截頭円錐台形で、前2つに比較するとやや大型である。大径4.6cm、小径3.1cm、厚さ1.6cmをはかる。各面とも削痕がややのこっており、つくりはやや雑である。稜は特に側面と小径面が変わる部分で丸味をもち、側面も中央部がやや内湾するようにくぼみ気味である。

線刻は側面部にあるが、これが文字を表わすか、記号か、絵画かについてははっきりとしない。ただ、その一部には、大きい径をもつ面から小径の面に向って、家様のものを認めることもできるが判然としない。更にもう一カ所にも明らかに人工の線が刻まれているのが確認されるが、これについても、その内容は、はっきりしない。　　重量50g

以上、みてきたように、これら資料については、はっきりしないものも含まれるが、一応県内の他資料との関連で考えてみたい。形態面でみると、資料1を除く3つについては一応截頭円錐台形の断面形である。県内全体では扁平形のものが70%を占めることからすると、やや本遺跡の場合はその比率が低いといえる。形態的には円錐台形のものは古墳時代の紡錘車に多く見られるタイプであり、その意味からすると、資料3・4は、両者の中間に位置するものである。

石材は、一般的には滑石製であり、一部蛇紋岩製のものや陶製のものを含んでいる。これについては、特筆すべき特徴はないといえよう。ただ、資料2のように、一つの面が潰れるほどの損傷を受けているものは他に例をみない。形状との関連でみると資料2、3については伝世的に扱われてきた可能性を示すかも知れない。

線刻部位については平面・側面ともほぼ同数であるが、概して文字数の多いものは平面に線刻されるものが多い。スペースとの関連からいえば、当然のことであろう。しかし、これとてあくまでも原則であり、平面や側面に原則と反した線刻を伴なう例は多い。たとえば、資料3のような例である。

次に問題の線刻内容についてであるが、これについては、人名とみられるものが65%、不明確だが人名の可能性のあるものも含めると80%が人名である。その他、郡郷名を示すものがわずかにあり、他に同字を複数書いた習書的なものや、意味不明のもの、吉祥的な意味がうかがえるものがある。そこで、本遺跡出土のものについて、次にみてみよう。

資料1については「春日部国麿」は明らかに人名である。春日部姓は従来・県内関係では確認されていない。春日部は安閑朝ごろ設定された名代(なしろ)とみられ(安閑天皇の春日皇后の名代)、6世紀初頭ごろおかれたものという。文献にみられない春日部姓が存在したことが、この資料で確認される。しかし、春日部国麿がいかなる人物かは全く不明である。

また、「上上T」が、なにを意味するかも不明である。籍帳などの記載例にみられる「上上戸」のような意味をもつとすれば一般的には、郷戸主階層に属するものであるかも知れない。

資料2の「勢多郡□(楊カ)　五百□都□(厭カ)」の線刻は「勢多郡」は当然、倭名抄中の勢多郡を示すものであることはいうまでもない。次の字は、やや不分明なところはあるが、「楊」とすれば、渡来系の民族である可能性がある。續日本記などに見られる楊氏は、渤海の人であると記されている。こうした渡来人が多く居住した上野国内にも、この楊氏が移住していることが考

えられる。

太田市清水田遺跡では奈良末～平安前期の集落の中で、その「楊」の墨書を施した土師器坏が5点ほど出土している。しかも集落中の一画に、この「楊」の墨書をもつ竪穴住居が集中していた様相が推察される。その状況からすると楊氏の存在は確実なものとなってこよう。

楊氏姓の人物が勢多郡にも居住していたことがわかるが、その後の「五百□都□」は名であるとみなければなるまい。地名＋氏姓＋名とすることが、最も無理のない見方で、その意味では、資料1と同様である。

資料3の「山」が正しいとすれば、この一字のみでは、いかなる内容を表わしているのか不明である。ただ、この「山」を刻した紡錘車が、板倉町小保呂遺跡でも出土している。しかし、この「山」が二つとも同じ意味をもつとは断定できない。ただ、県内の他例からの人名が多い事実からすれば人名の一字であるとする見方もできよう。しかし、限定はさしひかえなければならない。

資料4については、現状ではその内容は不明とせざるを得ない。

以上、4個の紡錘車の線刻についてみてきたが、この文字の意味するものは何であろうか。筆者は別稿で県内の線刻紡錘車について集成し、その性格についてふれた。『古代学研究』。

その中で、紡錘車は機織と関連する点を重視し、特に調布については厳密な規定があり、それが実際の調布でも守られていること、だとすれば、それを調する紡錘車についても厳しい規制があったと推定し、そのためにこのように特別の扱いである線刻を施すことになったと考えた。しかも、調布は郷戸主階層により納められたとすれば、そのための指定を受けた郷戸主がその名を紡錘車に刻したことはなかったろうか。勢多郡という郡名を冠しているのも、その間の事情を示しているかも知れない。

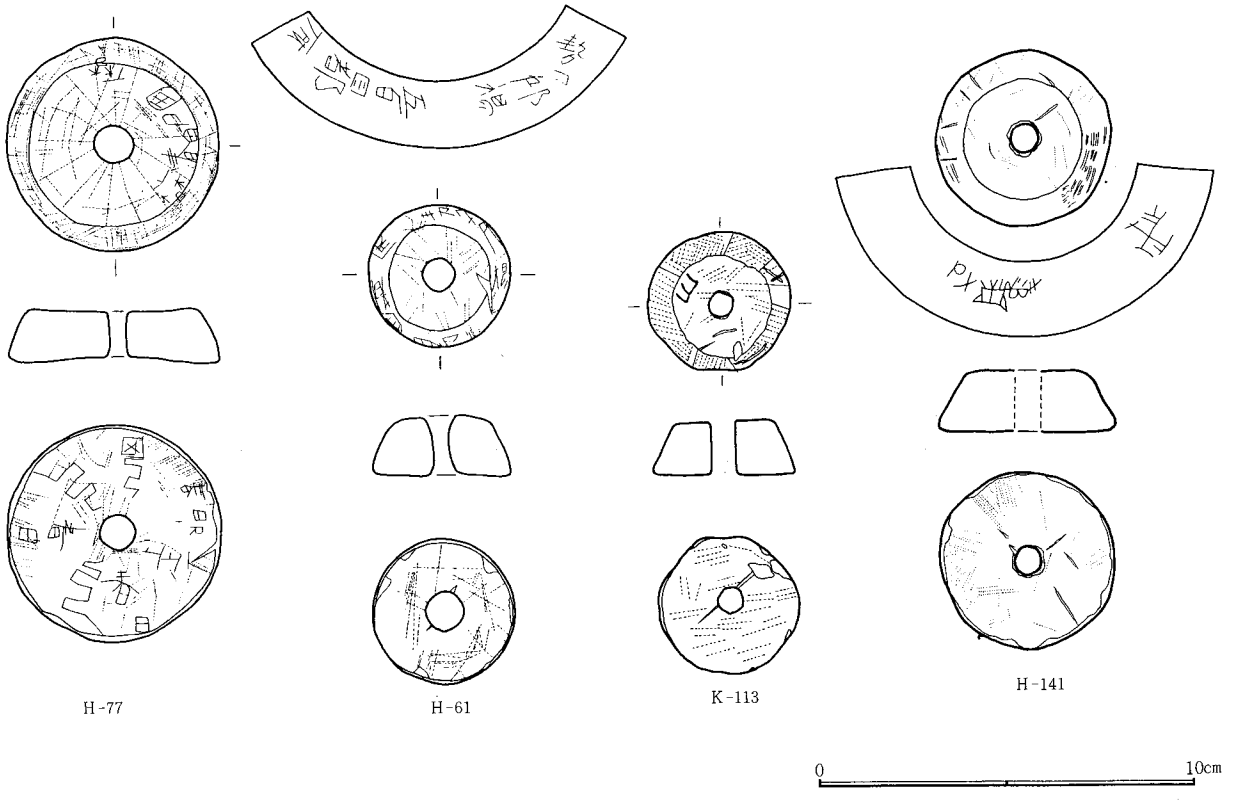
また、機織りの技術は渡来人の技術に負うところが多いといわれる。ここにみられる「楊氏」の線刻もこの渡来人の技術が背景にあったことを暗示するものであるかも知れない。

このようにみてくると、勢多郡の1郷である本遺跡の中の郷戸主層の名が刻されているとみられ、その意味では、この地域が律令制の中に組み入れられていたことは確実であろう。地域的にも洪積台地で、古くから養蚕地帯であったことは想像に難くない。そうした自然条件を背景に養蚕、機織りが盛んに行なわれたのであろうか。

一方、本遺跡には多くの墨書・刻書土器が出土している。その中に「山」の墨書があり、「上上T」の「T」のたて画が上につきぬければ「十」となり、この墨書も数例ある。「楊」の字についても「木」へんにつくりが不明確なものが2例あり、特にK—47から出土している土師器坏に書かれた墨書はつくりの筆づかいからみて「楊」」の可能性のあることを指摘しておきたい。

こうした墨書土器との共通性が指摘できるとすれば、線刻紡錘車のもつ意味も本質的には墨書土器と共通するものである可能性が考えられる。その意味では、この紡錘車の所属を示すものが線刻であるとみられる。線刻の文字が比較的フルネームで書かれていることは、それだけ日常雑器に比べて、器物として重視されていたことを示すものかも知れない。ごく、限られた資料から、推定の上に推定を重ねた形になったが、更に類例を検討していく中で、より確実な検討を試みていきたい。

なお、本文中の資料1・2については、平川南氏の解読に従った。



図—791　(刻書)紡錘車実測図

VI 土器の分類

1 はじめに

芳賀東部団地遺跡は東西を谷地に挟まれた3つの台地からなる。ここから検出された竪穴式住居跡の総数は約550軒である。この中からは縄文土器や石田川期の土師器が出土しているが、本稿では最も分量が多く、しかも継続的にみられる鬼高期～国分期の土器に分類の的をしぼり、もって、当該期の古代集落分析のための基礎作業とするものである。

遺構は竪穴式住居跡以外に、掘立柱建物跡や土坑、溝等があるが、分類に当っては比較的良好な一括資料を得やすい竪穴式住居跡出土の土器で行うこととする。また、分類の対象とする土器は、第2巻所収のものに限らず、第1巻に収録した土器も含むものとする。これは、第1巻の東側台地と第2巻の中心をなす西側台地とでは、土器相に若干の相違があり、両者を総体的にとらえるためには、両者を一緒に扱う必要があること、また、サンプル数をできるだけ多くして、より精度の高い分類を心がけたためである。従って、第2巻の土器分類は第1巻のそれに優先するものである。なお、東側台地（第1巻）は西側台地に比べやや特徴のある土器が出土したり、羽釜などは1段階前に出現したりする。そこで、各段階で東側台地にのみ見られるものは、挿図の遺物番号を○で囲ってある。

土器の分類に当っては、第1巻同様、(1)どの竪穴式住居跡からも出土し、長期間継続してみられるもので、なおかつ、(2)消耗が激しく短期間で取りかえられるため、形態的・技法的変遷がとらえやすいものを、分類の中心に置いた。これに該当するものとして、土師器では甕と坏、須恵器では坏・椀・蓋・羽釜、そして、灰釉陶器の椀と皿がある。挿図ではできるだけ各種の土器を網羅するよう努めたが、上記の器種以外は、参考的な要素が強い。また、分類の各段階は、後述するようにそのまま年代的序列を示している。

ところで、竪穴式住居跡は、その性格上遺構に伴う遺物の認定の困難なことが多い。本分類の中心を占める奈良・平安時代は、特にその傾向は強い。従って、分類に当っては、型式差の明らかなものを除いては、覆土中と床面出土の遺物の両者を一括遺物と仮定して作業を進めた。従って、以下の分類自体仮説の域を出るものではない。当該地域の一層精度の高い分類を行う際の踏み台としての役割を期待するものである。

第2巻では、分類の各段階の名称を第1巻の「――号住類土器群」から「――類」に変更した。これは、第1巻の土器分類が芳賀東部団地遺跡の一部を対象とし、そのサンプル数も十分でないことから、試案的な意味を強く持たせていたためである。しかし、第2巻では、サンプル数も増え、芳賀東部団地遺跡における古代集落の全体をほぼうかがうことができるため、本遺跡の鬼高期以降の土師器の分類名として使用するものである。

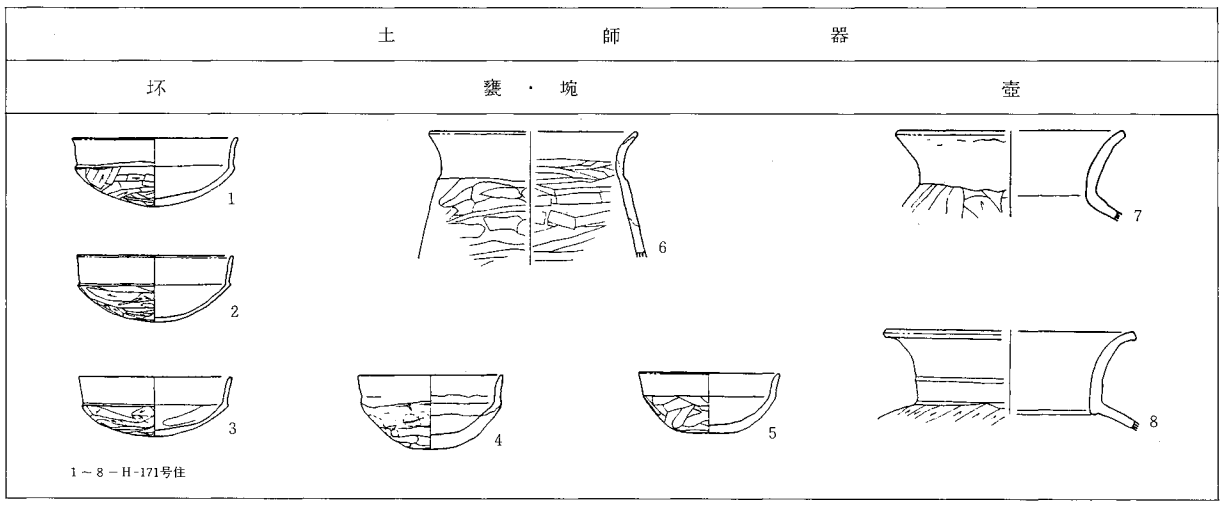
なお、本分類が曲りなりにもできたのは、先学諸賢の成果による所が大きい。一々名前は記さないが、謝意を表するものである。

2 土器の分類

I 類 （図―792）

器種構成は、土師器が甕・坏・椀・壺の四種類から成り、須恵器は見られない。ただし本類に属すと考えられる竪穴式住居跡は一軒であるため、器種構成をこの範囲に限定することはできない。

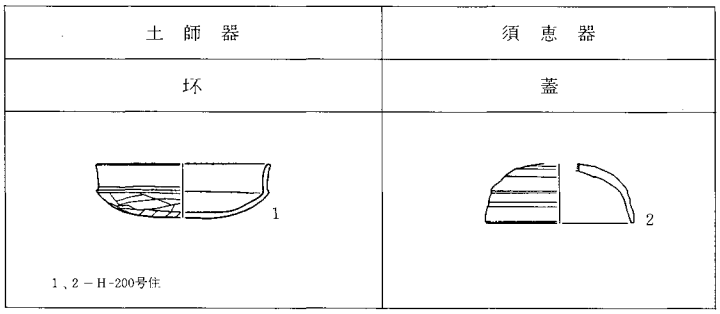
甕(6)は、胴部中央または下半に最大径を持つ長甕で、頸部のしまりは弱く、口縁部は短く肥厚して外反する。調整は、口縁部横位のナデ、体部内面横位のナデ、外面縦方向のヘラ削り。坏(1.2.3)は、深めの丸底と直立する長めの口縁部から成る。椀は、



図―792 I 類

厚い器肉で深い体部と直立した口縁部の境に弱い稜を有し、底部は丸底(4)と平底(5)がある。壺(7・8)は、直立気味に外反する口縁部を持つ厚い器肉でがっしりした作り。

本類土器群の特色は、頸部のしまりの弱い長甕と、しっかりした稜を持つ模倣坏、坏に似た埦、がっしりした作りで、直立気味の口縁を持つ壺であるが、住居跡群としてとらえることができないので器種構成等、幅を考慮する必要がある。



図－793　II　類

II　類（図—793）

本類に属する竪穴式住居跡も前類と同様一軒であり、更に出土遺物点数も限られているので、器種構成の一部として土師器坏、須恵器蓋があげられる。

土師器坏(1)は、平底気味で浅い底部と直立気味に外反する口縁部を持つ。

須恵器蓋(2)は、弱い稜で天井部と口縁部が隔され、全体的に半球状を呈す。口縁部中程に浅い沈線が施され、口唇部は丸い。

本類土器群の特色の全貌はとらえられないが、直立気味に外反する口縁部を持つ浅い平底気味の模倣坏を持つ。

III　類（図—794）

器種構成は、土師器が甕・甑・壺・鉢・坏の五種類から成り、須恵器は極めてまれに壺・鬶が共伴している。

土師器甕は、長甕・球形の胴部を持つ大甕の二種類ある。一口に長甕と称せる甕は細部の形態や技法によって、a)胴部下端がこけ、底部に木の葉痕、胴部は縦方向のヘラ削りが施され、器高が40cm程のもの(14)、b)形態はaとほとんど同じで、胴部の調整が斜縦位のもの(15)、c)胴部上位にやや強いふくらみを持ち、斜縦位のヘラ削りが施されるもの(16)、d)口縁部が立上がり気味に外反し、胴部は縦位のヘラ削りが施され器高36cm程のもの(17)、e)口縁部は短く肥厚し直線的に外反し、胴部は縦位のヘラ削りが施されるもの(18)、f)著しく頸部がしまり、胴部の張りは大きく、最大径は口径に近い。調整は斜縦位であるが肩部には横位のヘラ削りが部分的に認められ、器高40cm程のもの(19)、g)胴部最大径を上位に持ち、下位で急激に丸味を持ってすぼまり底部に至り胴部下半の接合部位に弱いくびれを持つ。調整は斜縦位のヘラ削りで器高36cm程のもの(20)と多様である。大甕は厚い器肉でやや縦長の胴部に外反する口縁部を持つもの(21)、横に張った球形の胴部に直立して外反する口縁部を持ち、底部が厚いもの(22)の二者あり、二者とも平底で前者図版化したものは、底部中央を薄く仕上げ焼成後穿孔されている。土師器小型壺は球形の胴部に直立して外反する口縁部を持つもの(13)、直立する長い口縁部と肩部との接合部に稜を持つ(12)二者があり後者は一層小型化し器肉が薄い。土師器甑は丸底の多孔で、口縁部に最大径を持つ鉢形(11)。土師器鉢は丸底で、器肉厚く口縁部が内傾し胴部下半に最大径を持つもの(10)、器肉薄く口縁部と胴部の境に稜を持つ深い底部の坏形(8・9)の二者で後者は大小がある。坏はa)深い丸底に直線的に外傾する口縁を持つもの(1・2)、b)平底気味の浅い底部に外傾する口縁部を持つもの(3・4)、c)極めて浅い底部に調整による凹凸を残す長めな口縁部を持つもの(5・6)、d)器肉厚く平底化した底部に短く直立する口縁部を持つもの(7)があり、a・bは大小があり、cは大のみ、dは小のみである。

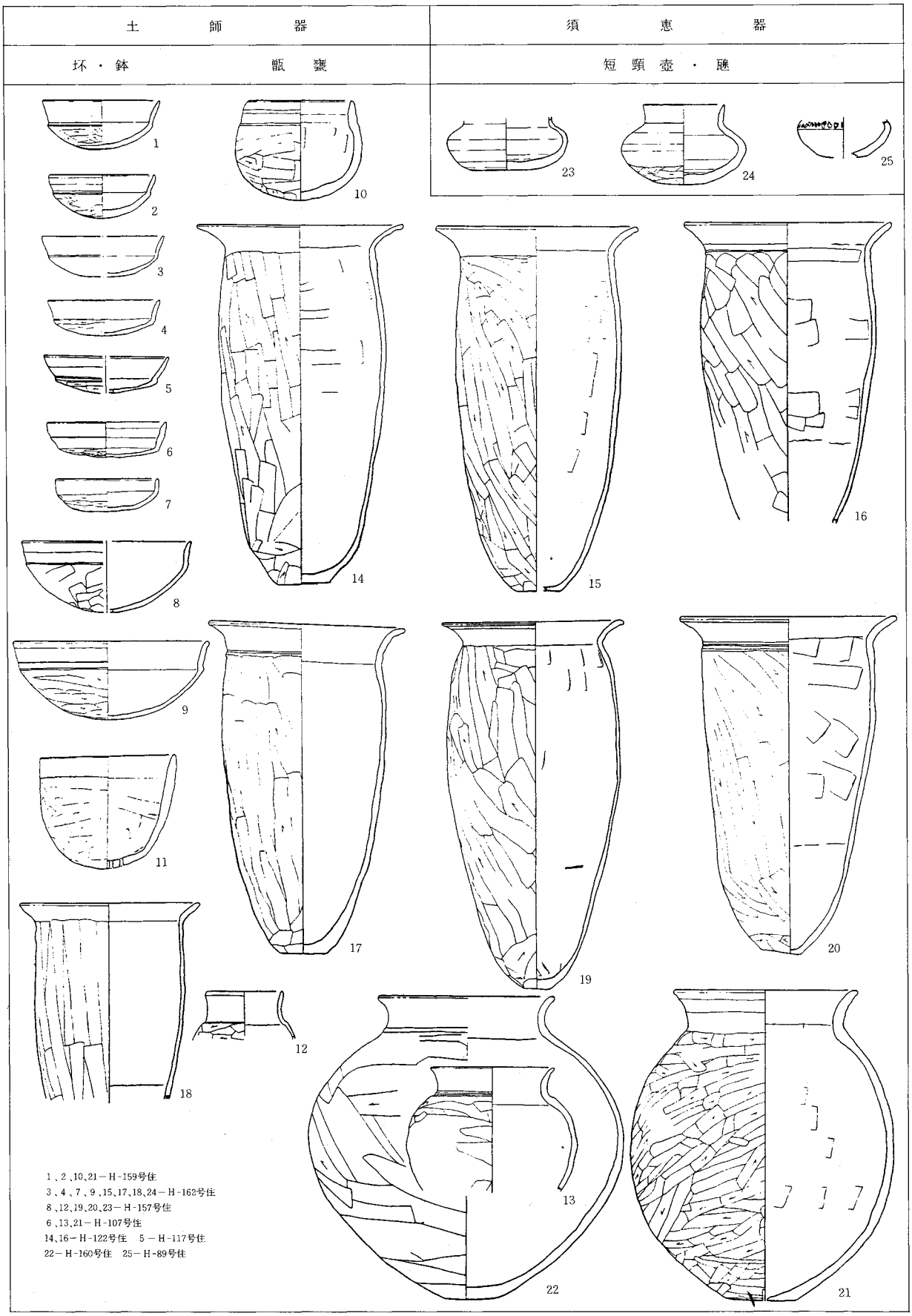
須恵器小型壺は、短頸で、扁平な胴部下端に横位の手持ちヘラ削りが施され底部は厚く、平底で幅の狭いヘラで一定方向のナデを加えた結果柾目状を呈すもの(23)、丸底(24)のものの二者がある。須恵器鬶は扁平な胴部で肩部に櫛目の刺突文を施す(25)。

本類土器群の特色は、土師器甕では、しまりのある頸部と外反する口縁部、ややふくらみのある胴部を持ち、縦位または斜縦位の調整を施すものを主流とする長甕、器肉の厚い球形の胴部を持つ大甕、土師器坏は、前類に比べ口縁部の外傾が顕著であること、口縁部に有段に近い凹凸の見られる調整痕を残し底部の一層浅いものがあること、須恵器の伴出は少ないが、小型で扁平な短頸壺と鬶を伴うことがあげられる。

IV　類（図—795）

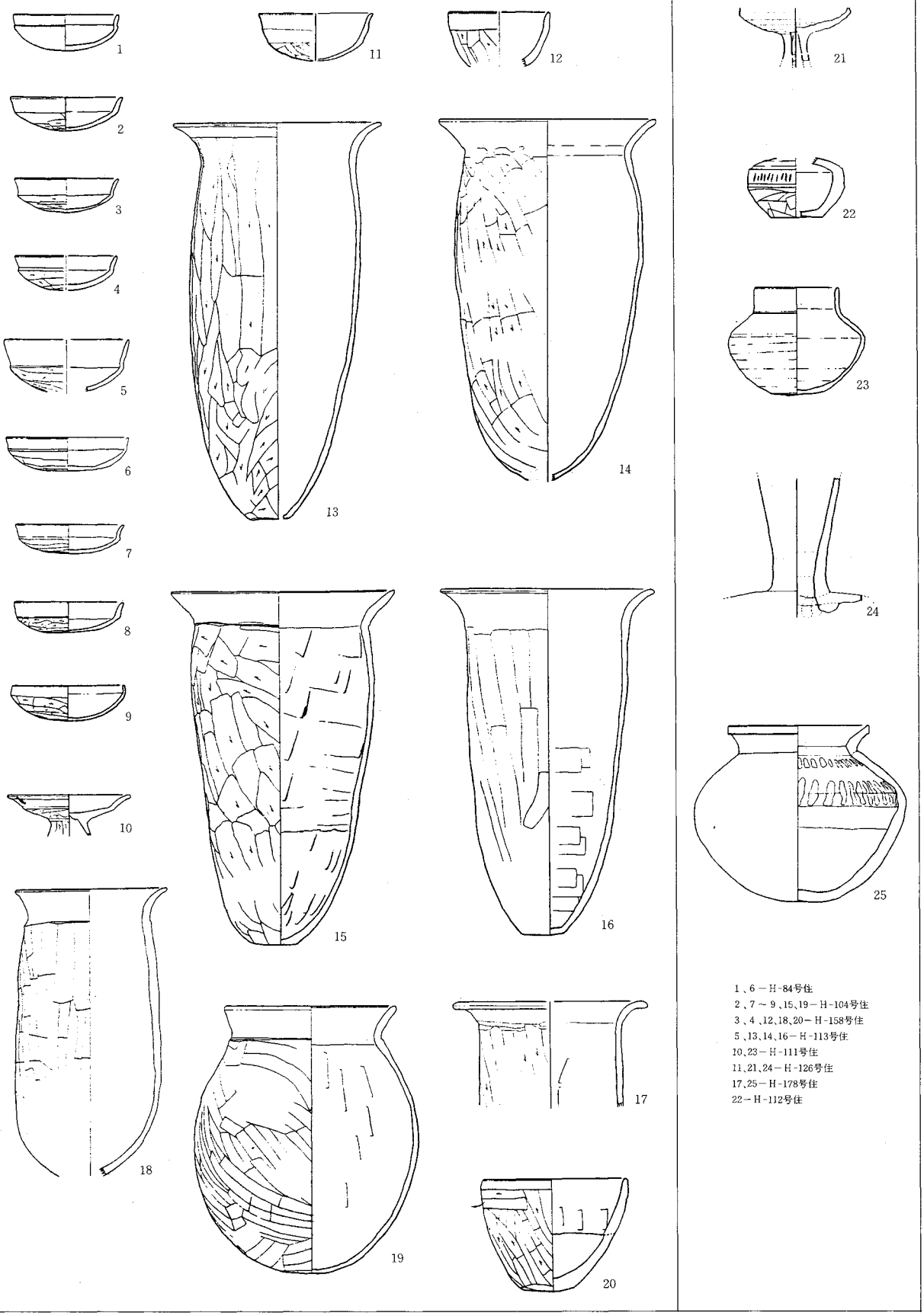
器種構成は、土師器が甕・鉢・坏・埦・高坏の五種類から成り、須恵器は極めてまれに、甕・壺・高坏・鬶が伴出している。

土師器甕は、長甕と丸甕の二種類ある。前類同様長甕は、形態・技法により、a)中央部付近に最大径を持ち、緩やかにふくらむ長い胴部は上半が縦位、下半斜位のヘラ削りが施され、器高41cm程のもの(13)、b)上位に最大径を持ちややふくらむ胴部は全面斜位ヘラ削りが施され、比較的器肉が薄く、器高38cm程のもの(14)、c)上位に最大径を持ち、下位に急激に丸味を持ってすぼまり底部に至る胴部は、下半接合部位に弱いくびれを持ち、肩部は横位、以下は斜縦位のヘラ削りが施され、器高37cm程のもの(15)、d)最大径を頸部に持ち、そのまま上位に至り、下半部ですぼまる胴部と緩やかに外反する口縁部を持ち、縦位のヘラ削りが施され、器高36cm程のもの(16・17)、e)器高30cm程の小型で、胴部下半に最大径をもち縦位のヘラ削りが施されるもの(18)と多様である。なお、a・bは焼成後底部に穿孔。長甕は全体的に前類と比べ口縁部調整が雑になり、胴部に続くヘラ削りを残しているため胴部と口縁部の境が明瞭でない。丸甕は、心持ち縦長の球形の胴部に「く」の字状に直線的に外反する口縁で丸底(19)。土師器鉢は器肉の厚い丸底気味の底部から内湾気味に開き、口縁部は調整によって外側のみわずかに内傾する(20)。土師器埦は器肉薄く、口縁部と胴部との境に稜を持つ深い坏型(11)と器肉が厚く鉢形(12)の二者がある。土師器坏は、短く外反する口縁部を持ち、a)深い丸底(1)、b)浅い丸底(2～4)、c)浅い平底気味の底部で大(6)、小(7・8)とd)古い様相を残す長い口縁部に深めの丸底で内黒


土　師　器
坏・鉢
甑　甕
須　恵　器
短頸壺・𤭯
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
1、2、10、21－H-159号住
3、4、7、9、15、17、18、24－H-162号住
8、12、19、20、23－H-157号住
6、13、21－H-107号住
14、16－H-122号住　5－H-117号住
22－H-160号住　25－H-89号住

図－794　Ⅲ　類

土師器		須恵器
坏・高坏	埦・甕・鉢	高坏・瓶・短頸壺・長頸瓶・甕



1、6－H-84号住
2、7～9、15、19－H-104号住
3、4、12、18、20－H-158号住
5、13、14、16－H-113号住
10、23－H-111号住
11、21、24－H-126号住
17、25－H-178号住
22－H-112号住

図－795　Ⅳ　類

処理とヘラ磨きが施されるもの(5)、e)丸底に短く内傾する口縁部(9)と多様な形態がある。全体的に稜が弱くa～cは前類の様相を残し小型化している。土師器高坏は浅い坏部と斜めに外反する口縁部を持ち、脚に縦方向のヘラ削りが施される(10)。なお、土師器高坏の伴出は極めてまれである。須恵器甕は小型で厚い器肉、丸味を帯びた平底、外側はたたき目の上にロクロナデ調整、内側は下半が青海波、上段が指押さえ後ロクロナデ調整(25)。須恵器長頸瓶は頸部下位に三条の沈線を持つ(24)。須恵器短頸壺はやや厚みのあるそろばん珠形の胴部に丸味を帯びた平底を持ち器肉は薄く底部は回転ヘラ削り調整(23)。須恵器𤭯は横長の長円形で平底、体部上位に櫛目刺突文、体部下半はヘラ削り調整(22)。須恵器高坏は長脚二段透しで脚部に稜を残す。

本類土器群の特色は、土師器長甕の長さに長短各種が混じり、頸部のしまりの無いものが多くなること、全体的に口縁部のナデ調整が雑になること、球形の胴部の甕は前類に比し口縁部や底部の作りが簡略化していること、土師器坏は前類に続く稜のあるものは一般に小型化し、口縁が短く内傾するもの、内黒処理とヘラ磨きの施されたものの存在、須恵器短頸壺と須恵器𤭯が前類より胴部最大径に対する高さの比が大きくなる、すなわち扁平でなくなり、底部が平底化してくること、さらに短頸壺は回転ヘラ削りによって器肉が薄く仕上げてあることがあげられる。

V　類（図—796）

器種構成は、土師器は甕・短頸壺・盤・坏の四種類、須恵器は坏・蓋・椀・甕・瓶・壺の六種類あるが、椀・甕・瓶・壺の伴出はごくまれである。

土師器甕は、長甕・大型甕・中型甕・小型甕の四種類がある。長甕はa)胴部最大径を頸部に置き、口縁部と胴部の境が不明瞭で縦位のヘラ削りが施されるもの(19)、b)胴部にわずかなふくらみを持ち、口縁部は直線的に折れ、胴部上位は縦、下位は斜位のヘラ削りが施されるもの(20)、c)aと共通点を持ちながら短胴化し下半は斜縦位のヘラ削りが施されるもの(21)、d)しまりのある頸部で胴部最大径を持つ中位から張りを持ちながらも一気に底部へとすぼまる短胴化の進んだ形態で上位は縦方向、下位は斜方向のヘラ削りが施されるもの(22)から成る。大型甕は口縁が「く」の字状に外反し、肩部に顕著な横位のヘラ削りが施され、器肉が薄い(23)。中型甕はa)器肉は厚いが大型甕と同じ型態、調整のもの(24)、b)短い口縁部は器肉が厚く肩部に縦のヘラ削り(25)、c)口縁部は器肉が厚く直立気味に外反するもの(26)、d)口縁はやや薄く、「く」の字状に外反し端部が直立気味になるもの(27)と多様である。土師器小型甕は脚付きと思われ、薄い器肉で口縁部立ち気味に外反し(28)、脚部は縦位のヘラ削り調整(29)。土師器短頸壺は丸底椀形の体部を持ち、口縁部に直立するもの(17)、直立気味に外反するもの(18)の二者がある。土師器盤は、平底で浅い体部に折れるように外反する口縁部を持つもの(16)とやや深みを持つ丸底から自然に口縁部に移行するものの二者がある。なお、後者は、体部と外反する口縁部の境に明瞭な稜を持つもの(14)と持たないもの(15)に分けられ、稜を持つ形態は本類のみに見られる。土師器坏は、a)前類b形態を継続しながら底部と口縁部境の稜が弱くなるもの(1・2)、b)深い丸底で短く内傾する口縁を持つもの(3～5)、c)やや深い丸底から直立した口縁に移行するもの(6～10)、d)暗文を有するもの(11～13)がある。なお、bは、大中小、cは大小があり、dの暗文は放射状と螺線状があり、さらに平底と丸底の二形態に分けられる。

須恵器坏は底部ヘラ切り後の調整技法は多様であり、体部下端に回転ヘラ削り調整の有無がある。有には底部の調整がa)弱いナデ(36)、b)全面手持ちヘラ削りと見られる(37・38)、c)全面回転ヘラ削り(39)、無には底部の調整がd)ヘラナデ(か)(40)、e)全面手持ちヘラ削り(41・43)、f)全面回転ヘラ削り(42)がある。形態は全体的に大ぶりである。須恵器蓋はつまみが大きく、かえりがあり、外面調整に、かえり付近まで回転ヘラ削りが施されているもの(30～32)、天井部のみのもの(33～35)がある。大きさに各種ある。須恵器椀は「ハ」の字状に開く付け高台を持ち、体部外面下端は回転ヘラ削り、口縁寄りに二条の沈線が巡る(44)。須恵器小型壺は胴部外面平行叩き目痕、内面指ナデ痕(46)。須恵器甕は内外面ロクロナデ(47)。

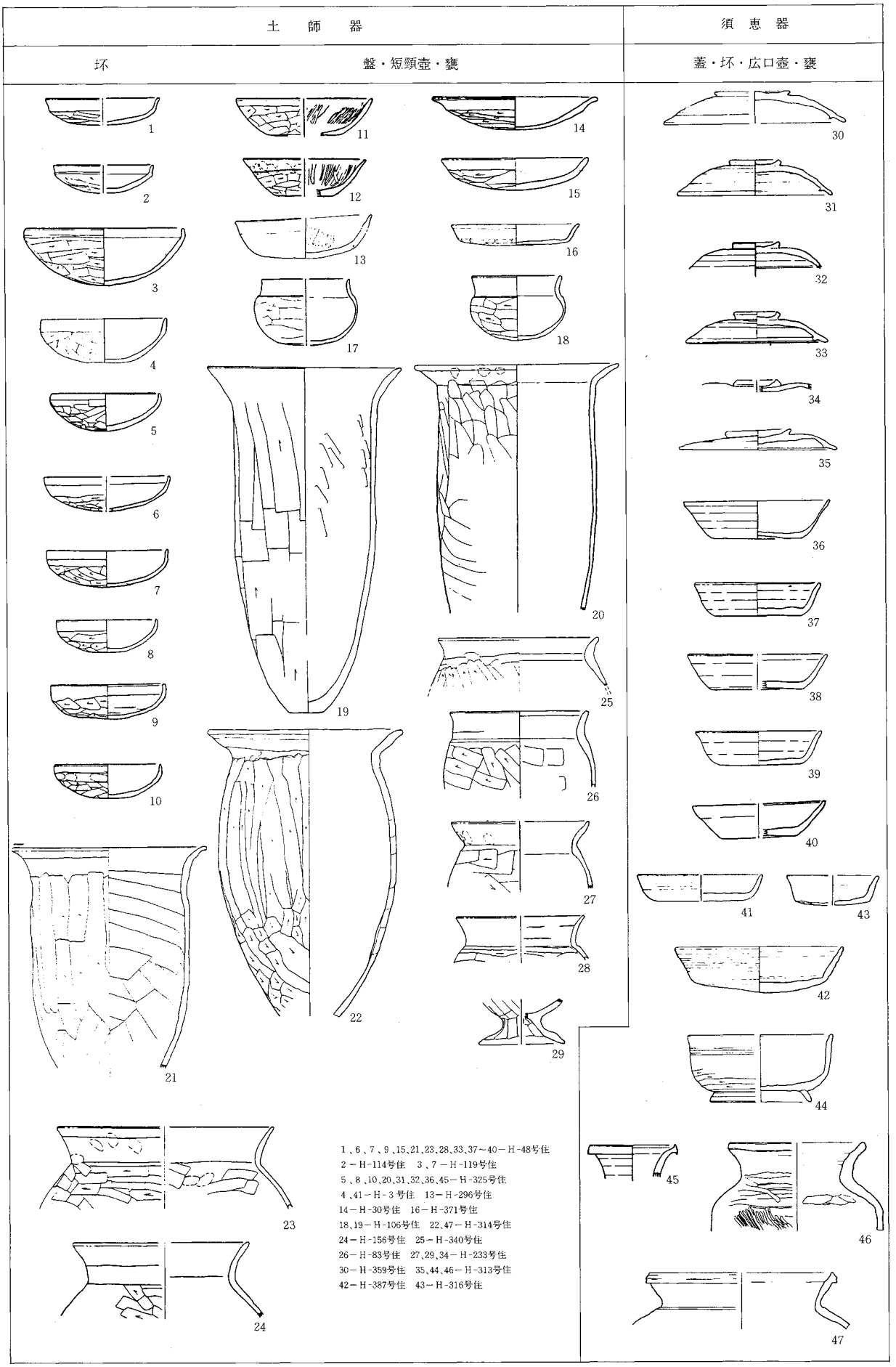
本類土器群の特色は、土師器甕では、長甕は胴部と口縁部の境のしまりが無いものが主となり、前類よりさらに粗雑な調整による口縁部と胴部の不明瞭化が顕著になること、短胴化したものが出現することがあげられる。また、球形の胴部で器肉の比較的薄手の甕が出現する。土師器坏の形態の多様化と同形態の中で大中小の見られることは、土師器盤が出現し、これも形態の多様化が見られることと共に盛る器としての土師器の画期をうかがわせる。なお、土師器坏に暗文を施すものが出現する。暗文は放射状と螺線状である。また稜を持つ土師器盤は、本類のみに現れる形態である。須恵器は、本類から出土量が多くなる。すなわち蓋と坏の出現である。須恵器蓋はかえりと径の大きなつまみを持つ。須恵器坏は底部はヘラ切り後手持ちのヘラナデと全面ヘラ削りを施すものが中心となる。

VI　類（図—797）

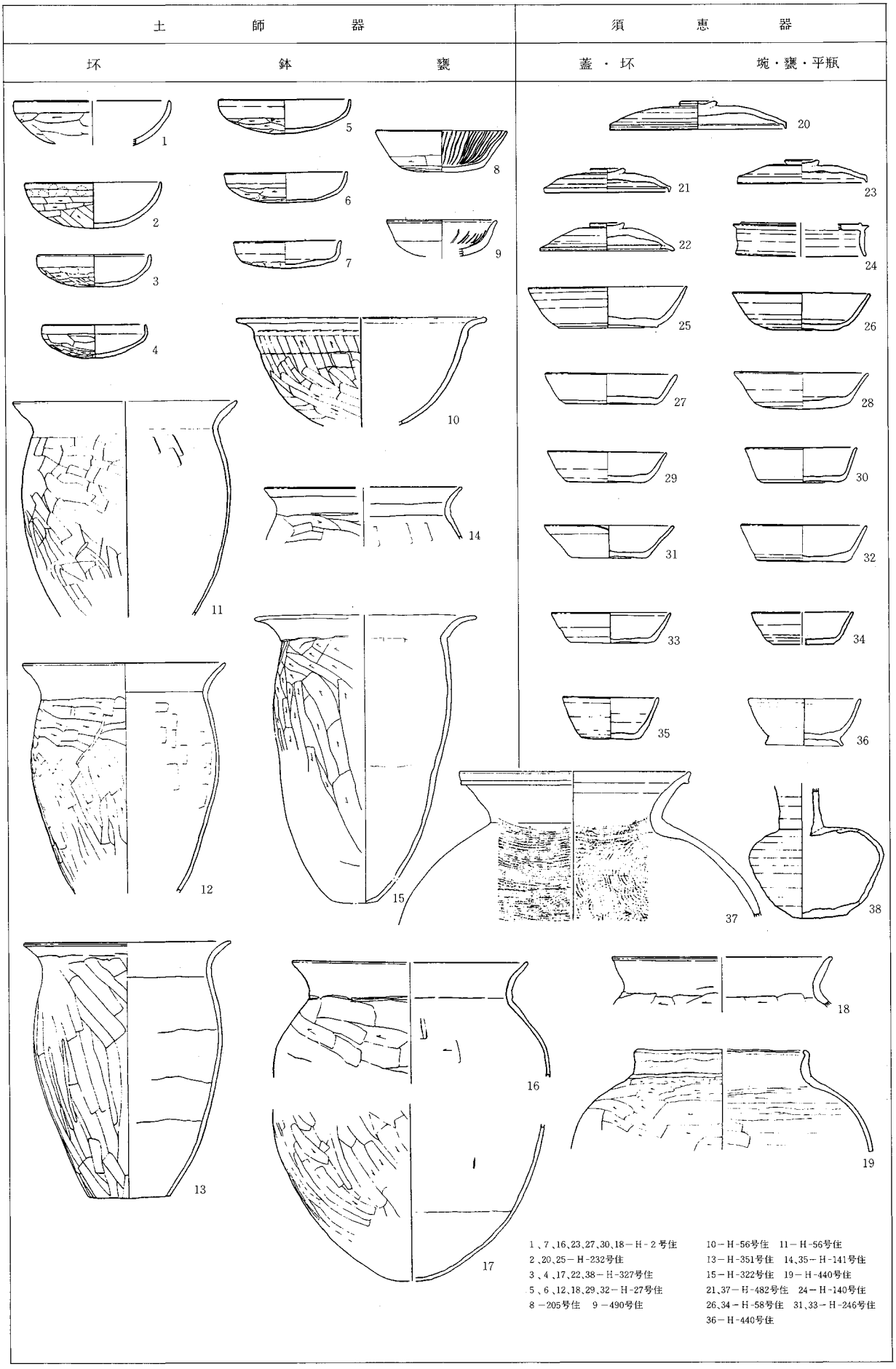
器種構成は、土師器は、甕・鉢・坏の三種類から、須恵器は坏・蓋・椀・平瓶・甕の五種類から成る。しかし土師器鉢と須恵器の椀・平瓶・甕は、本類における共伴は極めてまれである。

土師器甕は一般的な甕と大型甕の二種類あるがどちらも前類と大きく変わり器肉が薄くなっている。一般的な甕は、前類まで主流を成した長甕に比べ短胴化し、肩部に横位もしくはそれに近いヘラ削り調整が施され口縁部に最大径を持つ。口縁部がa)「く」の字状に外反するもの(11・12)、b)緩やかに外反するもの(13)、c)短いもの(14)、d)強い「く」の字状で胴部の張りが少ないもの(15)がある。大型甕は、a)口縁部「く」の字状、丸底で器肉が極めて薄いもの(16・17)、b)口縁部の器肉が厚いもの(18)、c)口縁部が短く直立し端部を内側につまみ出すもの(19)がある。土師器鉢は口縁は強く外反し、体部の張りが少ない(10)。土師器坏は、a)深い丸底のもの(1～4)、b)浅い丸底のもの(5～7)、c)暗文を施す坏で、放射状暗文のみで器肉薄く平底気味のもの(8)、放射状暗文と螺線状暗文で器肉の厚い丸底のもの(9)。なおa・bは大中小あり。

須恵器坏の底部はすべて回転ヘラ切りと見られる。その後の調整は多様であると共に、体部下端の調整の有無があり、有では、a)削り出し高台を有し全面回転ヘラ削り(25)、b)全面回転ヘラ削り(28～30)、c)周縁部のみ回転ヘラ削り(26・27)、無では、d)ナデ調整、e)手持ちヘラナデ(31)、f)回転ヘラナデ(33)、g)全面回転ヘラ削り(34)、h)無調整のものがある。須恵器椀はa)小型で


土　師　器
須　恵　器
坏
盤・短頸壺・甕
蓋・坏・広口壺・甕
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
43
42
44
45
46
47
1、6、7、9、15、21、23、28、33、37～40－H-48号住
2－H-114号住　3、7－H-119号住
5、8、10、20、31、32、36、45－H-325号住
4、41－H-3号住　13－H-296号住
14－H-30号住　16－H-371号住
18、19－H-106号住　22、47－H-314号住
24－H-156号住　25－H-340号住
26－H-83号住　27、29、34－H-233号住
30－H-359号住　35、44、46－H-313号住
42－H-387号住　43－H-316号住

図－796　V　類



1、7、16、23、27、30、18－H－2号住
2、20、25－H－232号住
3、4、17、22、38－H－327号住
5、6、12、18、29、32－H－27号住
8－205号住　9－490号住
10－H－56号住　11－H－56号住
13－H－351号住　14、35－H－141号住
15－H－322号住　19－H－440号住
21、37－H－482号住　24－H－140号住
26、34－H－58号住　31、33－H－246号住
36－H－440号住

図－797　Ⅵ　類

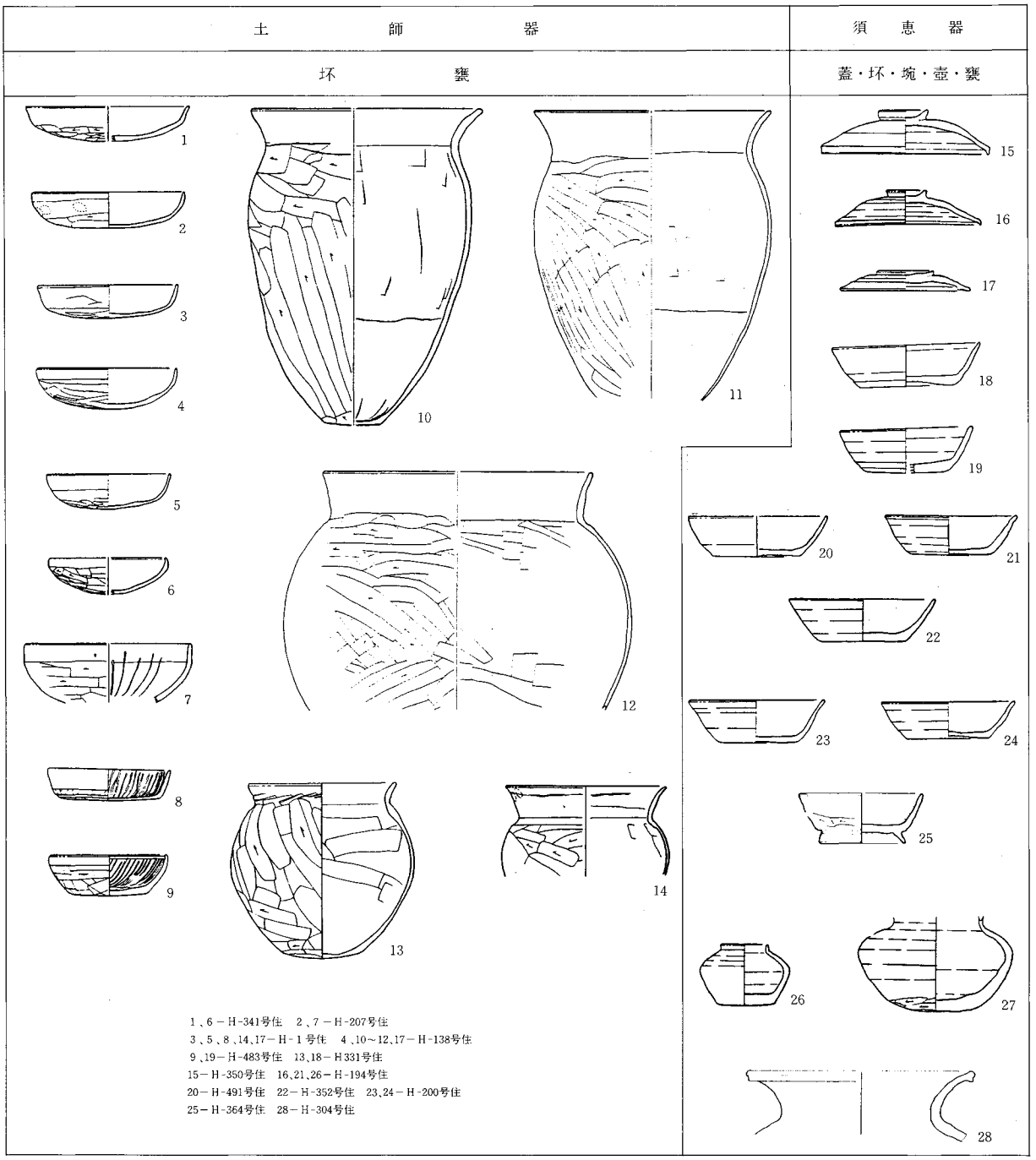
深いもの(35)、b)やや大型で高台は「ハ」の字状に強く張るもの(36)。須恵器蓋はかえりの無いものが出現し主流をなすと共につまみが小型化する。かえりの無いものは、外面回転ヘラ削りがa)笠の斜面の中位までのもの(20・21)、b)天井部のみのもの(23)がある。c)かえりのあるもので、外面調整は笠部の中位まで回転ヘラ削りが施されている(22)。さらに本類のみに、d)短頸壺用と見られる蓋(24)を持つ。

本類土器群の特色は、土師器甕は器肉が薄くなり短胴化したいわゆる「く」の字甕で、最大径が口縁部にある。土師器坏は、前類に比べ形態が単純化し、浅いか、深いかの丸底のみとなる。また前類に続き暗文を施す坏があるが、暗文は放射状と螺線状を施すものと放射状のみのものがある。須恵器蓋はかえりのないものが多くなり、つまみは小さくなる。須恵器坏は底部がすべて回転ヘラ切りで調整は施されないものを含め様々である。

Ⅶ　類（図－798）

器種構成は、土師器が甕と坏の二種類、須恵器は坏・蓋・埦・壺・甕の四種類から成り、土師器の衰退傾向が見られる。なお、埦・壺・甕の伴出は極めてまれである。

土師器甕は、一般的な甕・大型甕・小型甕の三種類ある。一般的な甕(10・11)は、口縁部が緩かに外反し、前類と比べ、肩部



図－798　Ⅶ　類

の張りが大きくなり、口径と胴部最大径がほぼ同じになる。大型甕(12)は、口縁部が直立気味に外反する。小型甕は口縁部の器肉が、厚く短く外反するもの(13)、薄く長く外反するもの(14)の両者ある。土師器坏は、a)平底傾向の強いもの(1～3)、b)丸底傾向の強いもの(4～6)、c)暗文を施す坏があるが、これには大型で深い丸底のもの(7)、小型で平底のもの(8・9)があり、前者はあらい放射状、後者は放射状及び螺線状の暗文を施す。

須恵器坏は前類同様、底部外面に様々な調整技法が見られると共に、底部切り離し技法に回転糸切りが出現し、ますます多様な様相を示す。すなわち体部下端にヘラ削り調整を施すものに、a)底部は回転ヘラ切り(19)、b)回転糸切り(18・21)があり両者とも、切り離し後、周縁部回転ヘラ削り調整が施され、後者は酸化炎焼成の様相を一部に留める。体部下端に回転ヘラ削り調整のないものに、底部は回転ヘラ切りでc)周縁部回転ヘラ削り調整を施すもの(20)、d)無調整のもの(22・23)がある。またe)底部糸切り無調整のものも極めてまれに見られる。d)が本類の主流でありほとんどのものに薄い燻しが施される。さらに全面回転ヘラ削りのものも若干見られる須恵器蓋はかえりの無いものにa)外面の中位まで回転ヘラ削り調整が施されるもの(15)、b回転ヘラ削り調整が天井部のみのもの(16)があり、かえりのあるもの(17)もある。須恵器埦は、小型で高台が強く張り体部外面下位に手持ちヘラ削り調整を施す(25)。須恵器短頸壺は、a)丸底で外面全面回転ヘラ削り後、底部周辺にあらい手持ちヘラ削りを施すものと、b)小型で平底、外面はロクロ利用ヘラナデを施す(27)ものがある。

本類土器群の特色は、土師器甕では、口径と胴部最大径がほぼ等しく前類に比べ胴部の張りが大きくなる。土師器坏は前類同様丸底と平底に近いものがある。須恵器坏は底部切り離し技法に、回転糸切りが出現するが中心は回転ヘラ切り無調整であり、これには、ほとんど外面に燻しが施される。また酸化焔焼成の傾向を部分的に留めるものが出現する。

Ⅷ　類（図—799）

器種構成は、土師器は甕と坏の二種類から、須恵器は坏・埦・盤・蓋・壺・瓶・高坏の六種類から成る。しかし、須恵器の盤・壺・瓶・高坏は、本類における伴出は極めてまれである。

土師器甕は、前類と同様な一般的な甕・大型甕・小型甕の三種類の他に、共伴例の少ない中型の甕がある。最も数多く一般的にみられる甕(16・17)は、肩部の発達が顕著になり、ここに最大径を置くようになる。また、一層の短胴化が進む。大型甕は口縁部が短かく立つもの(19)と外反するもの(18・20)の二者がある。前者は大型の短頸壺状を呈し、口縁部を厚く短かく仕上げ、口縁端部を細くつまみ出す。後者は口縁部が緩やかに外反し薄手大型のものと、口縁部下半の立ち上がり傾向が強く「コ」の字状に近い形態をなすものがある。小型甕には脚付のもの(13・15)と平底(14)の二者がある。前者は大小があるが、緩やかに外反する口縁部、球形に近い胴部など共通した特徴が多い。後者の小型甕は、口縁部が「く」字状に直線的に外反し、底部の大きい点が前者と異なる。なお、土師器甕には共伴例は少ないものの、次のIX類にも継続してみられる。肩部の張りと底部の極めて大きい中型の甕(21)も認められる。土師器甕全体を通して、前類に比べ、頸部のしまりが弱くなり、口縁部が緩やかに外反するようになる。土師器坏は平底傾向の強いもの(4～6)が一般化する。前類に続き、内面に粗い暗文（螺線状・放射状）を施す坏もあるが、これには平底(8・9)と丸底気味(7・10)の2者がある。また、本類からロクロ成形で内面にヘラ磨き、黒色処理を施す坏(11・12)が小数ながら認められる。何れも体部下端に回転ヘラ削り、底部に全面回転ヘラ削り調整を施す。色調は灰色がかった黄橙色で、他の土師器坏や須恵器とも異なる。

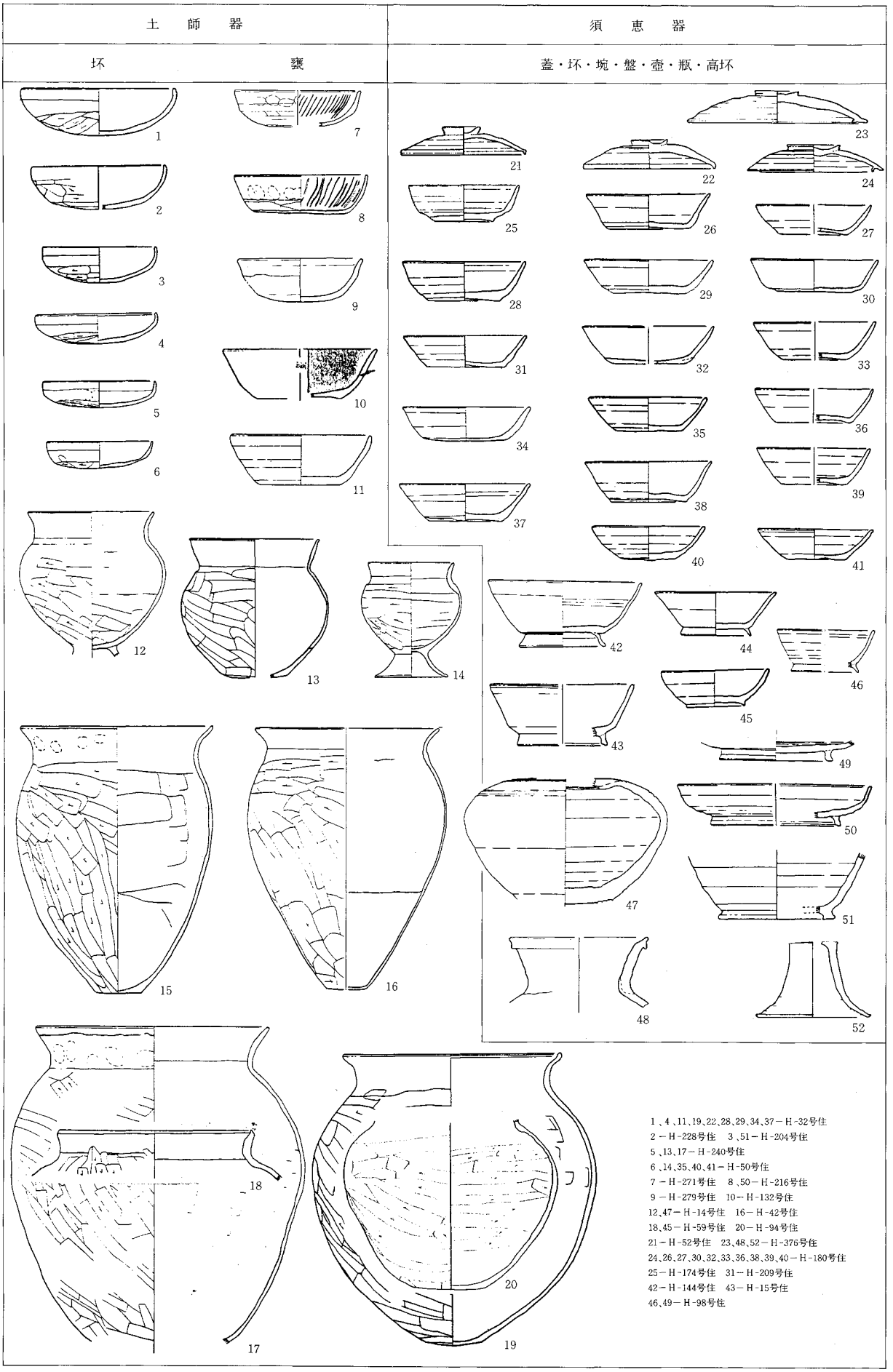
須恵器坏は、前類に続き、底部外面に様々な調整技法がみられる。a)削り出し高台。糸切り後、部分的にナデ(26)。b)底部全面に回転ヘラ削り調整(27・28)。体部下端にも回転ヘラ削り調整を施すもの(27)は、本類を最後とする。c)底部周縁部にヘラ削り調整を加えるもので、回転糸切り後、回転ヘラ削りを施すもの(29～31)、回転ヘラ切り後、回転削りを施すもの(32)、回転糸切り後、手持ヘラ削りを施すもの(33)の三者がある。d)底部に粗いナデ調整（ヘラナデとみられる）を加えるもので、切り離し技法に回転糸切り(34)と、回転ヘラ切り(35～37)がある。e)切り離し後無調整のもので、切り離し技法に回転糸切り(38～40)と回転ヘラ切り(41・42)がある。前者を中心に、部分的な酸化炎焼成や軟質なものが混っている。また、後者の中には、底径が口径の50%程度になるものが混る。須恵器埦は何れも付高台で、体部が直線的に開き高台の高いもの(43～45)と、体部が丸味を持って開く小型のもの(46・47)の二種類がある。須恵器盤(50・51)は付高台で、体部は底部から丸味を持って立ち上がる。底部外面の調整は、周縁部に回転ヘラ削り調整、中央部にヘラナデを施す。須恵器蓋は、かえりがなく、前類に比べつまみの一層小型化したもの(22・23)と、つまみが大きくてかえりのあるもの(24・25)の二種類がある。本類からつまみ中央部の凸起するものが多くなる。また、外面のヘラ削りは天井部のみに限定される。須恵器壺は付高台の短頸壺とみられるもの(48)がある。須恵器瓶は、広口瓶(49)と長頸瓶(52)とみられるものの胴下半部が出土した。

本類土器群の特色は、土師器甕の肩部の発達＝最大径と頸部の締まりの弱さ、土師器坏では深い丸底の坏が見られず、平底傾向の強いものが一般化すること、また、ロクロ成形の内黒土器も見られる。須恵器坏では、本類を持って体部下端のヘラ削りが消滅する。また、底部切り離し後無調整のものは前類同様に主流をなすが、回転糸切りのものが増えて回転ヘラ切りのものと並ぶようになるものとみられる。須恵器埦は本類から大型のものが認められる。蓋はつまみが小型化し、同中央部の凸起がみられる。

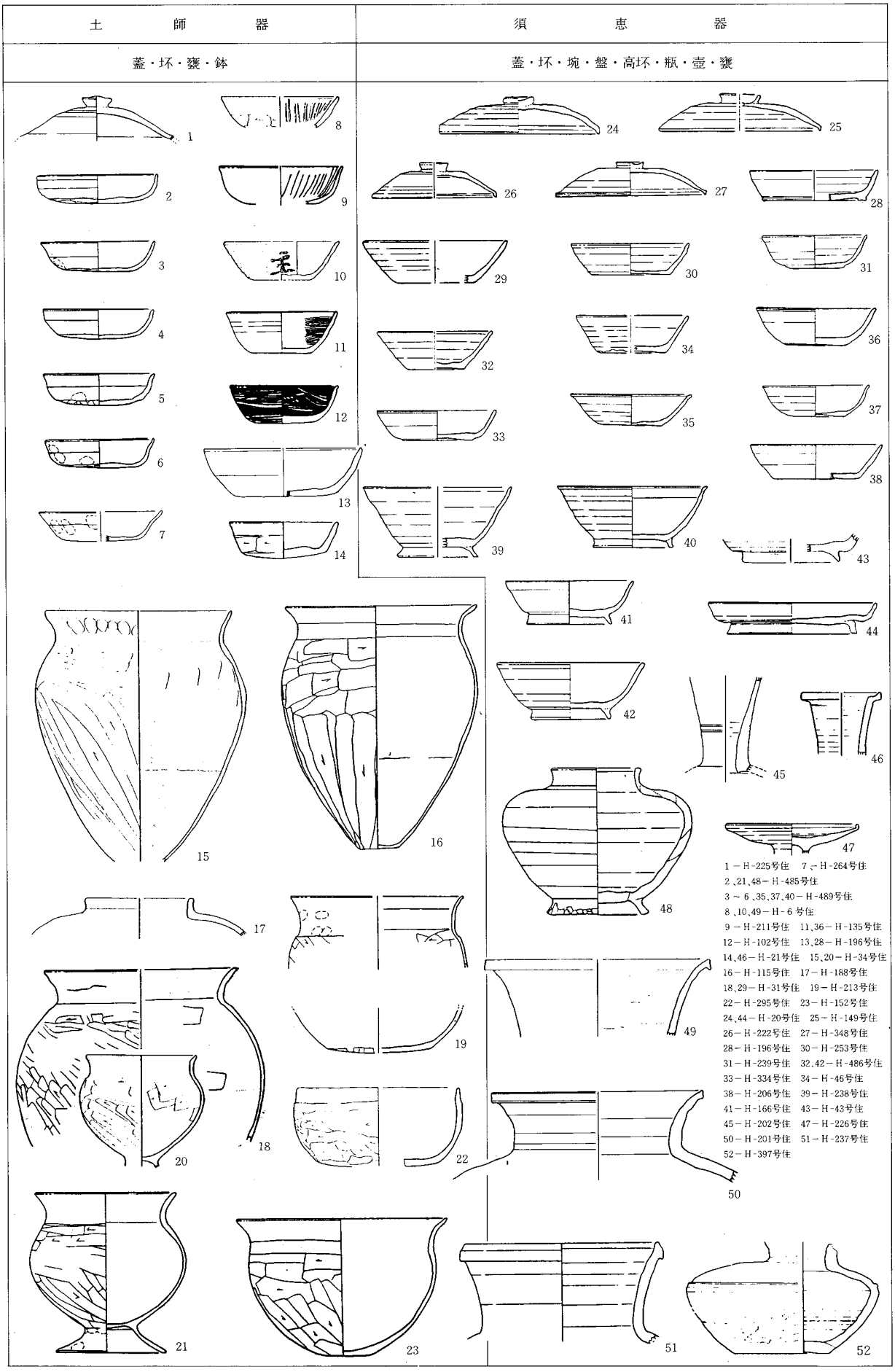
Ⅸ　類（図—800）

器種構成は、土師器は甕・鉢・坏・蓋の四種類、須恵器は坏・埦・盤・蓋・壺・甕・瓶・高坏の八種類、計十二種類からなる。しかし、土師器鉢・蓋と須恵器盤・瓶・高坏・壺の内の短頸壺の伴出例は極めて少ない。

土師器甕は前類に引き続き、最も一般的に見られる甕以外に、大型甕・小型甕・共伴例の少ない中型甕の三種類がある。最も一般的に見られる甕(15・16)は、口縁部下半が立ち上がって頸部が明確化すると共に、肩の張りが前類より一層顕著になる。大型甕は、前類同様に短頸壺状のもの(17)と口縁部が長く緩やかに外反するもの(18)がある。前者は口縁端部を丸くおさめ、前類まで


土　師　器
須　恵　器
坏
甕
蓋・坏・埦・盤・壺・瓶・高坏
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
1、4、11、19、22、28、29、34、37－H-32号住
2－H-228号住　3、51－H-204号住
5、13、17－H-240号住
6、14、35、40、41－H-50号住
7－H-271号住　8、50－H-216号住
9－H-279号住　10－H-132号住
12、47－H-14号住　16－H-42号住
18、45－H-59号住　20－H-94号住
21－H-52号住　23、48、52－H-376号住
24、26、27、30、32、33、36、38、39、40－H-180号住
25－H-174号住　31－H-209号住
42－H-144号住　43－H-15号住
46、49－H-98号住

図－799　Ⅷ　類


土　師　器
蓋・坏・甕・鉢
須　恵　器
蓋・坏・埦・盤・高坏・瓶・壺・甕
1－H-225号住　7，17－H-264号住
2，21，48－H-485号住
3～6，35，37，40－H-489号住
8，10，49－H-6号住
9－H-211号住　11，36－H-135号住
12－H-102号住　13，28－H-196号住
14，46－H-21号住　15，20－H-34号住
16－H-115号住　17－H-188号住
18，29－H-31号住　19－H-213号住
22－H-295号住　23－H-152号住
24，44－H-20号住　25－H-149号住
26－H-222号住　27－H-348号住
28－H-196号住　30－H-253号住
31－H-239号住　32，42－H-486号住
33－H-334号住　34－H-46号住
38－H-206号住　39－H-238号住
41－H-166号住　43－H-43号住
45－H-202号住　47－H-226号住
50－H-201号住　51－H-237号住
52－H-397号住

図－800　Ⅸ　類

のつまみ出しが消える。後者は口縁部における頸部と外反部が明確化しつつある。何れも前類に比べ肩部の張りが大きくなっている。小型甕は大小二種類があるが、いずれも脚付である(20・21)。やはり頸部が明確化しつつある。中型甕(19)は、本類では一点だけ確認された。前類に比べやや小型でも、肩の張りが少ない。口縁部は直に立ち上がってから外反する。土師器鉢は大型椀状のもの(22)と逆ヘルメット形のもの(23)がある。いずれも伴出例は少ない。土師器坏は底部に若干丸味を残しながらも平底化した坏(2～5)が大勢を占めるが、器肉が薄くて体部が緩やかに「S」字を描く坏(6・7)も見られる。また、体部内面に放射状暗文を施した坏とロクロ成形でヘラ磨き、黒色処理を施した坏も散見する。前者(8・9)は前類同様に丸底と平底がある。後者の坏は内面のみのもの(10—底部回転糸切り無調整、11—底部回転糸切り後周縁部手持ヘラ削り調整)と内外面に施したもの(12)とがある。この他、須恵器の形を模倣するが、土師器通有のヘラ削り整形による坏(13・14)も若干認められる。土師器蓋(1)は一点確認された。宝珠形のつまみを有し、内面にヘラ磨き、黒色処理を施す。

須恵器坏は底部の技法から四種類にわけられる。a)付高台を有し、底部が全面回転ヘラ削り調整のもの(28)。b)回転糸切り後、底部周縁部にヘラ削り調整を加えるもので、調整にロクロ回転を利用するもの(29・30)と手持ヘラ削り(31)の二者がある。c)底部の切り離し後、粗いヘラナデ調整を加えるもので、切り離し技法に回転糸切り(32)と回転ヘラ切り(33)がある。d)底部切り離し後無調整のもので、切り離し技法に回転糸切り(34～37)と回転ヘラ切り(38)がある。全体的には、dの回転糸切り無調整のものが大部分を占める。本類の須恵器坏は、全体に小型化し、底径が口径の50%前後のものも多い。また、dを中心に、口縁端部に外反・肥厚傾向がみられ、部分的酸化炎焼成や軟質な焼成、黒斑や体部外面に顕著なロクロ目を残す製品も目につく。須恵器椀はいずれも付高台で、体部の浅いものと深いものがある。後者(39・40)は全て底部に糸切り無調整痕を残すが、前者は全面回転ヘラ削り(41)、ヘラ切り後周縁部回転ヘラ削り、糸切り無調整(42)等がある。大部分のものは長い高台を持つが、後者で体部に丸味を持つものは短い高台を付す。全体に、口縁端部が外反・肥厚する傾向にある。須恵器盤(43・44)はいずれも付高台で、底部と体部の境が強く屈曲する。須恵器蓋はつまみが前類より一層小型化し、全てかえりがない。つまみの形態は、リング状(24・25)・ボタン状(26)・偏平な宝珠形(27)の三種類がある。須恵器壺は、付高台の短頸壺(48)と広口壺(49)がある。短頸壺は肩の張りが顕著である。広口壺は薄い器肉で、肩部の張った細長い胴が想定される。須恵器甕(50・51)は胴部内外面に叩き痕を残す。丸い胴部が想定される。他に、長頸瓶(45・46)・高坏(47)・平瓶(52)がある。

本類土器群では、土師器甕全般に口縁部下半に立ち上がり傾向がみられ(=頸部の明確化)、土師器坏では底部が丸味を残しながらも平底化し、また、体部がS字に屈曲する坏もみられる。須恵器坏は糸切り無調整のものが大部分で、底部が口径の50%前後のものも多く認められる。また、口縁端部は外反・肥厚傾向にある。須恵器椀は台付坏と呼ぶべき浅いものの他に、椀に相応し深い形態のものがみられる。須恵器蓋は全てかえりがなく、一層小型化する。須恵器大型広口壺は本類が初見である。

X　類(図—801)

器種としては、土師器に甕・坏・盤、須恵器に坏・椀・皿・蓋・壺・瓶・甕、灰釉陶器に瓶がある。この内、土師器盤の伴出例はわずか一点であり、灰釉陶器の出土例も極めて希である。

土師器甕は、一般的な甕(14)以外に、大型甕(15)と小型甕(16・17)がある。本類の土師器甕は、全般に口縁部が強い屈曲を持つ「コ」の字状をなし、頸部が明確である。また、強く張る肩から底部に向けて急激に細くすぼむ形をとる。小型甕は脚の付くものと付かないものの二者が考えられ、口縁部の屈曲の弱いものも見られる。土師器坏は、底部にわずかな丸味を残す平底から直線的に開く体部を持つ坏(1・2)と、器肉が薄く緩やかな「S」字状の体部を持つ平底坏(3・4)の二者が中心をなす。しかし、客体的ながら、内面に粗い放射状暗文を施した坏(5・6)や、ロクロ成形による坏(7～10)もある。前者の暗文坏は丸底と平底がある。この平底暗文坏とは形態・技法・胎土等がよく似ながら、暗文のない坏も若干認められる(11)。後者のロクロ成形の坏には、内黒処理の有るものと無いものの二者がある。前者はさらに内面ヘラ磨きのあるもの(7・8)と、ないもの(9)にわかれる。後者(10)にはヘラ磨きはない。これらはいずれも黄橙色ないし淡褐色で、土師器や須恵器の色調とはやや異なる。底部には回転糸切り痕を残す。また、本類では体部外面全体に指押えを施す坏(12)も若干見られる。

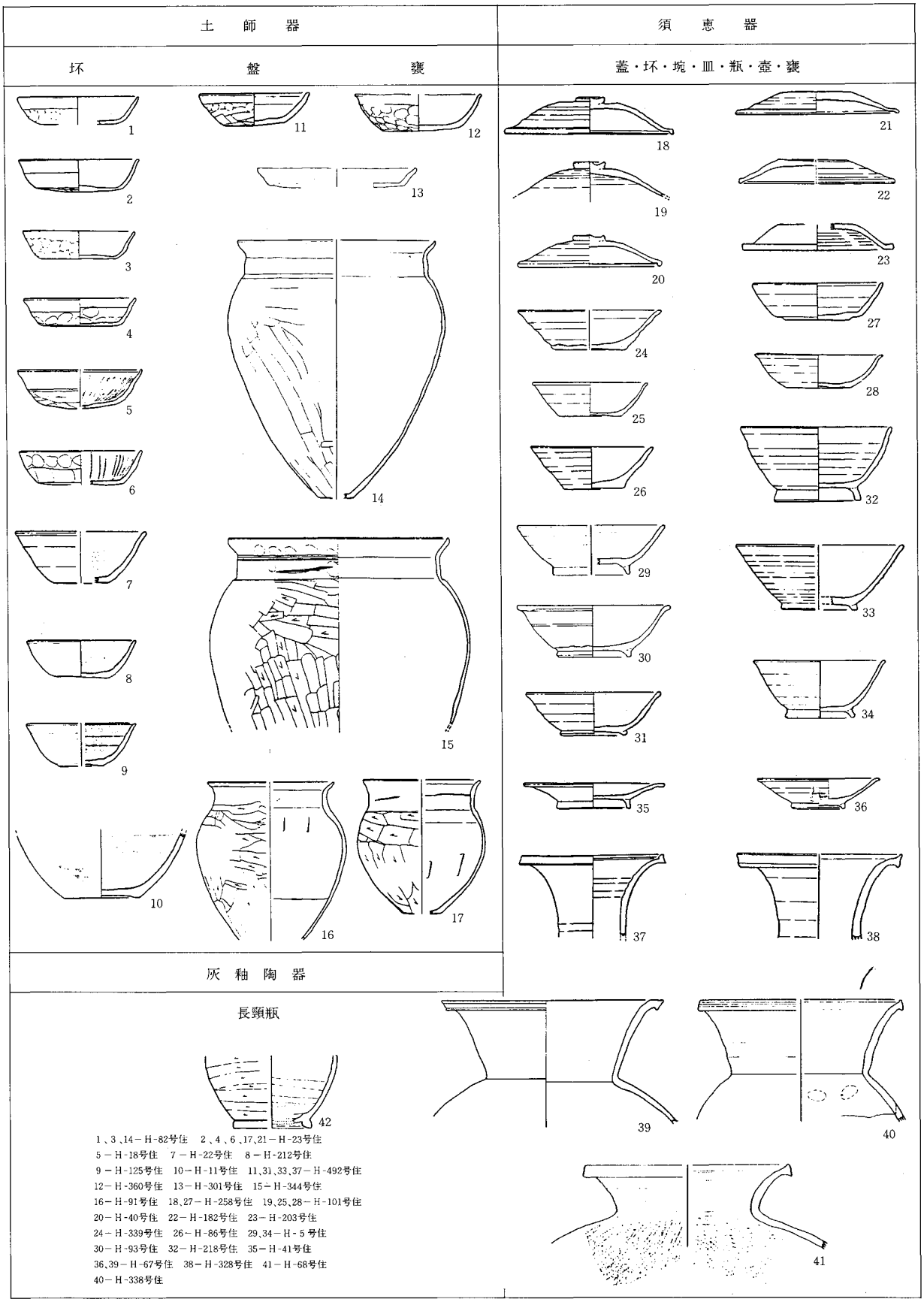
須恵器坏は全て回転糸切り無調整とみられる。体部外面に顕著なロクロ痕を残すものが目立ち、部分的酸化炎焼成や黒斑のあるものも見受けられる。体部が直線的なもの(24～26)と丸味を持つもの(27・28)があるが、前者には深い形態のものも認められる。いずれも底径は口径の50%前後のものが普通である。須恵器椀は全て台付で、浅いもの(29～31)と深いもの(32～34)がある。後者の深いタイプで小型のもの(34)は、本類が初見である。全て糸切り無調整とみられ、顕著なロクロ目を残すものや、口縁端部を外反・肥厚するものが目立つ。部分的酸化炎焼成のものもある。高台は短かいものも多い。高台皿は本類で初めて確認できる。全て糸切り無調整とみられ、長い高台を付すもの(35)と短かい高台(36)のものがある。口縁端部の肥厚・外反するものが中心である。須恵器蓋は、a)偏平な宝珠形のつまみを持つもの。天井部に回転糸切り痕を残し、その周囲に回転ヘラ削りを施すもの(18)と天井部全面回転ヘラ削りのもの(19・20)がある。b)つまみがなく、天井部に回転糸切り痕を残すもの(21・22)。c)つまみの有無は不明だが、bに似た形態で天井部全体に回転ヘラ削り調整を施すもの(23)の三種類がある。須恵器広口壺は、焼成の堅緻なもの(40)と軟質気味なもの(41)の2種類がある。口縁部を長くラッパ状に開く須恵器広口瓶(37・38)も若干出土した。須恵器甕(39)は器肉が厚く、体部内外面に叩き痕を有する。灰釉陶器瓶(42)はハケ塗り。

本類土器群の特色として、土師器甕における「コ」の字状口縁の成立、土師器坏では体部が「S」字状の平底坏の一般化と体部外面全体に指押え痕を残す坏の存在、須恵器では、深い形態の坏の存在、つまみのない蓋や高台皿の出現等が挙げられる。

XI　類(図—802)

器種構成は、土師器に甕・坏・椀、須恵器に羽釜・坏・椀・皿・蓋・瓶・壺・甕、灰釉陶器に椀・皿がある。

土師器甕は、「コ」の字状口縁甕が主流をなすが、頸部が内傾し(13～15)、中には「コ」の字の痕跡を留めないものもある(16)。肩



1、3、14－H-82号住　2、4、6、17、21－H-23号住
5－H-18号住　7－H-22号住　8－H-212号住
9－H-125号住　10－H-11号住　11、31、33、37－H-492号住
12－H-360号住　13－H-301号住　15－H-344号住
16－H-91号住　18、27－H-258号住　19、25、28－H-101号住
20－H-40号住　22－H-182号住　23－H-203号住
24－H-339号住　26－H-86号住　29、34－H-5号住
30－H-93号住　32－H-218号住　35－H-41号住
36、39－H-67号住　38－H-328号住　41－H-68号住
40－H-338号住

図－801　X　類

部の張りは弱くなり、全体に丸くなる。器肉も口縁部や底部を中心に厚くなる。小型甕(11・12)もほぼ同じ形態をとる。大型甕は認められない。土師器坏は本類では激減する。これには、a)わずかに丸味を帯びる底部から緩やかに屈曲して開く体部を持つ坏(1)、b)器肉が薄く、体部が緩やかに「S」字を描く坏(2)、c)ロクロ成形で、内面に黒色処理・ヘラ磨きを施す坏(3・4)、d)体部外面にヘラ削りを施す坏(5・6)、e)体部外面の調整が指押え・指ナデの坏(7)の五種類が認められる。底部は、cに回転糸切り痕を残すが、他はヘラ削りである。cとdは環元炎焼成気味の灰色がかった淡褐色である。また、c～eの形態は須恵器坏に近い。土師器埦(8～10)はいずれも付高台で、体部外面にヘラ削り調整を施す。環元炎焼成気味の色調。

須恵器羽釜(31・32)は、全体に丸味を持ち、口縁部が大きく内傾する。色調は淡褐色又は黄橙色。出土例は少ない。須恵器坏は全て糸切り無調整で、焼成良好で硬質なものは希である。大部分が軟質・黒班・燻し・酸化炎焼成気味のどれか一つ以上に該当する(後述の須恵器埦・皿・蓋も同傾向)。須恵器坏には、深い埦型(20・21)のものと浅いもの(22～25)の二種類がある。前者は底径が口径の50%以下で、後者でも50%以下のものが多い。いずれも口縁端部の外反・肥厚は一般的である。須恵器埦はいずれも付高台で、体部の深いもの(26・27)と浅いもの(28～30)がある。後者の中で、体部が丸味を持ち、口縁部の外反・肥厚が大きく、高台の短かいもの(29・30)が主体とみられる。須恵器皿も全て付高台で、やや深めで台形の高台を持つもの(33・34)と浅めで三角高台を持つもの(35・36)がある。前者は口縁端部が外反、又は肥厚する傾向にある。須恵器蓋は、a)リング状のつまみを持ち、天井部に回転ヘラ削り調整を施すもの(17)b)宝珠形のつまみを持ち、天井部に回転糸切り痕を残すが、その周囲に回転ヘラ削りを加えるもの(18)c)つまみがなく、天井部全体に回転糸切り痕を残すもの(19)の三種類がある。須恵器長頸瓶(37・39)と須恵器広口壺(38)は、本類における出土例は極めて少ない。須恵器広口壺はやや軟質で、部分的に燻しがかかる。須恵器甕(図一802参照)は体部内外面に叩き痕を残し、軟質化する。

灰釉陶器は、埦(40)と皿(41)が出土した。いずれも三日月高台で、口縁端部を小さく外反させる。埦は底部から胴部にかけてロクロ利用のヘラ削り、口縁部内外面にハケ塗り。皿は体部内面にのみ施釉。底部はいずれも回転ヘラ削り調整である。

本類土器群の特色は、「コ」の字状口縁甕の衰退(頸部の内傾と不明確化、胴部の球形等)と大型甕の消滅、土師器坏の激減と暗文坏の消滅、土師器高台埦の出現、須恵器では、坏の底部の小型化(口径比50%未満の一般化)、羽釜の出現等が挙げられる。灰釉陶器の出土も目につくようになる。同埦・皿は三日月高台を持ち、ハケ塗りとみられる。

Ⅻ　類(図一803)

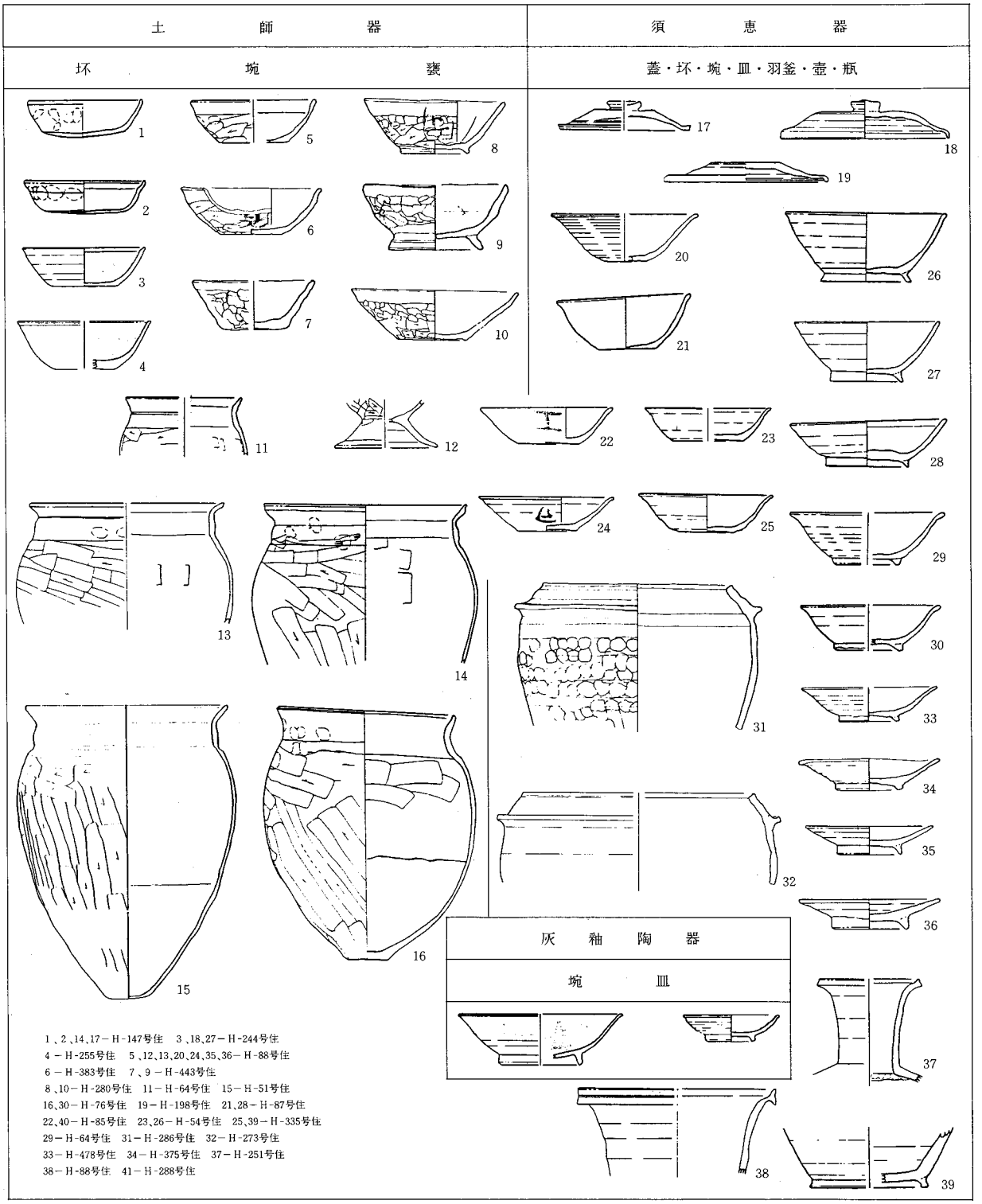
器種構成は、土師器に甕・坏、須恵器に羽釜・甑・坏・埦・瓶・壺・甕、灰釉陶器に埦・皿・瓶がある。この内、土師器の甕・坏、須恵器の甑・瓶、および灰釉陶器瓶の出土は極めて少ない。

土師器甕(3)は器肉が厚く、口縁部が短かく外反する。肩部の張りも弱く、胴部は全体に丸味を帯びる。土師器小型甕は、口縁部と肩部に最大径をとる鉢型のもの(4)と、肩部に最大径のくるもの(5)がある。いずれも上記甕に似た特徴を持つ。土師器坏は、底部に丸味を持ち、体部が緩やかに「S」字状に彎曲する薄い器肉のもの(1)と、ロクロ成形の内黒土器(2)の二種類が認められる。後者の内黒土器は磨きがなく、底部に回転糸切り痕を残す。色調は赤褐色。

須恵器羽釜は、a)口縁部が短かく内傾し、同端部に肥厚・立ち上がり傾向のあるもの(25・26)b)口縁部の内傾が弱く、同端部に肥厚のないもの(27)c)口縁部の立ち上がり傾向が強く、同端部平坦面が水平で肥厚するもの(28)の三種類がある。前二者が主体とみられる。これらの須恵器羽釜の色調は淡褐色ないし黄橙色で、軟質の土師質須恵器が大部分であり、以下の須恵器の多くと同じ焼成傾向にある。須恵器甑(29)は羽釜型の甑で、裾部が大きく広がる。土師質須恵器である。須恵器坏は四種類認められる。a)体部が直線的で、底部のやや大きめなもの(6～8)。b)aとほぼ同じ法量だが、体部に丸味を持ち、底部の小さいもの(10・11)。c)形態的にはbに似るが、法量のやや小さいもの(9・12)。d)体部が直線的で浅いもの(13)。須恵器坏は前類に比べ小型化する。また、体部に丸味を持つものが主体となり、これらは概して丁寧なつくりである。一部に須恵器を残すが(10)、大部分は土師質須恵器である。須恵器埦は全て付高台を有し、四種類認められる。a)大型で高台の高い埦(足高高台、14～16)、全て土師質須恵器。b)灰色焼成の土師質でない須恵器(17)。やや大型・軟質。c)体部が直線的で、口縁部が外反・肥厚するもの(18～21)。土師質須恵器と普通の須恵器を混ぜる。d)器肉が厚く体部に丸味を持つもの(22・23)。cの小さい部類の法量に近い、土師質須恵器。以上の内、bは客体的で極めて少ない。須恵器長頸瓶とみられるもの(24)は、土師質須恵器で付高台。須恵器広口壺(30・31)は、褐色味を帯びるが、極めて堅緻な焼成である。外面は燻がかかり黒色味を帯びる。外面回転ヘラナデ、内面指押え調整とするが、(30)は内面に半円形の叩き痕を残す。須恵器甕(32)も堅緻な焼成で、肩部に自然釉がかかる。外面に叩き痕、内面は指手え痕を残し、燻されて黒色となる。

灰釉陶器の出土は一般的ではないが、前類に比べかなり多くなる。灰釉陶器埦(33)・皿(34～36)は、三日月高台を付す。(33・36)は高台外面の稜が弱くなっている。口縁端部は、いずれも、弱いながらも外反傾向をみせる。底部は回転ヘラナデ調整である。施釉法はいずれも漬け掛けである。灰釉陶器瓶には、長頸瓶(38)と花瓶(37)があるが、どちらも一点ずつしか確認されなかった。

本類土器群の特色は、第一に土師器の激減一衰退にある。土師器甕にかわり須恵器羽釜が普遍的になる。土師器坏も須恵器坏・埦にとってかわられる。また、本類の須恵器は、一部を除き、ほとんどが土師質須恵器となる。本類土器群の特色をさらに細かく見れば、土師器甕の厚い器肉と口縁部の退化、土師器坏における種類の減少、須恵器坏の小型化と丸味を帯びた体部や浅い坏の出現、須恵器埦では足高高台埦の出現、須恵器羽釜における口縁部の立ち上がり傾向、及び同端部の肥厚化、須恵器広口壺や同甕における褐色味を帯びた硬質化、そして、灰釉陶器埦・皿では漬け掛け施釉とやや退化した三日月高台の存在などが挙げられる。なお、土師器坏は本類を最後に姿を消し、以後は深い埦型のものとなる。



図－802　XI　類

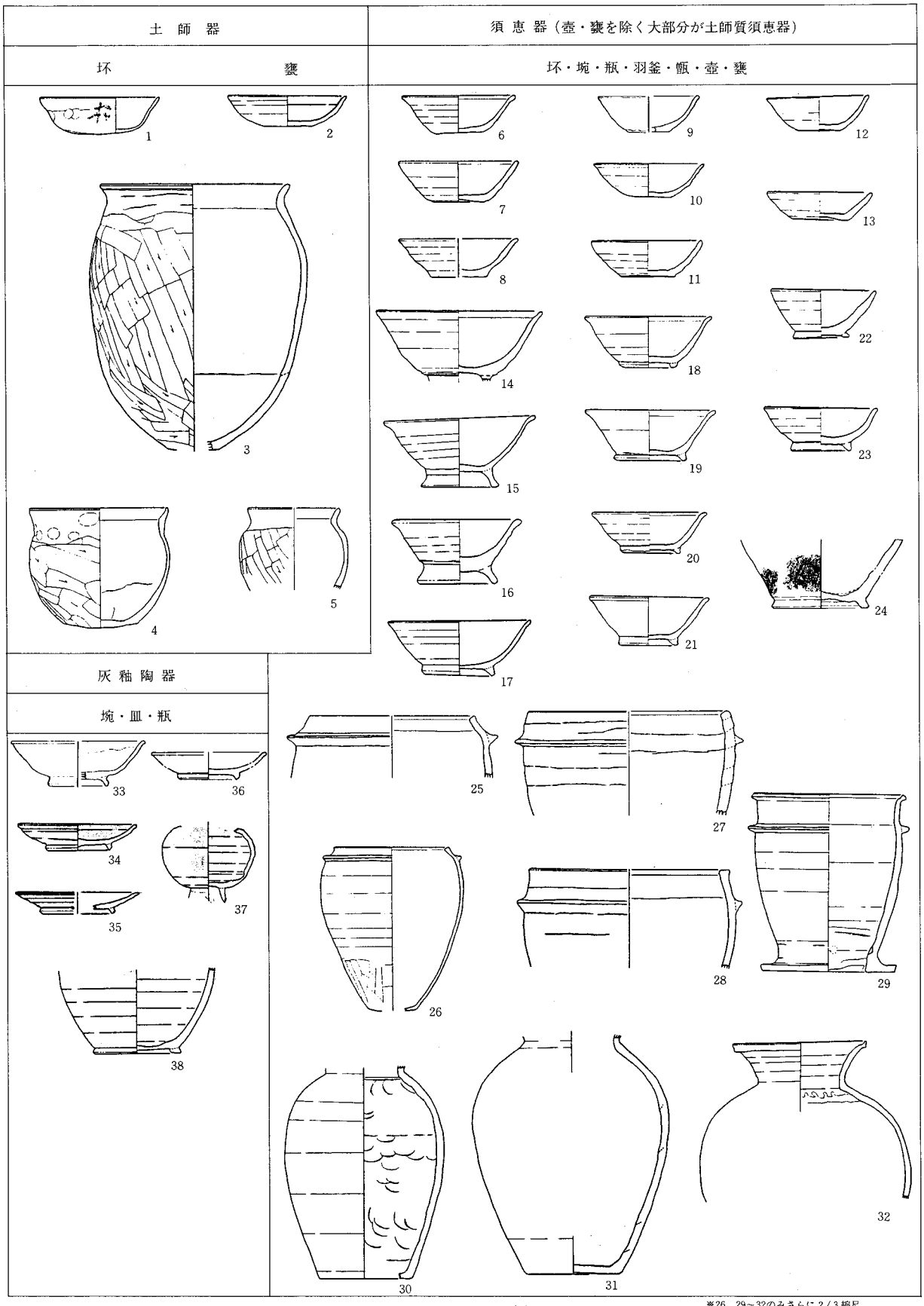
XIII　類（図―804）

器種構成は、土師器に甕・埦、須恵器に羽釜・坏・埦・甕、灰釉陶器に埦がある。須恵器が大勢を占める傾向は前類同様である。本類以降の土師器と須恵器の焼成にはほとんど差がなく、いずれも軟質で黄橙色中心の褐色系の色調を有し、土師質須恵器と称すべきものである。形態や技法などから便宜的に土師器と須恵器に分類したが、それらにも相通ずる点が多い。

土師器甕は小型甕(5)のみ確認された。厚い器肉と短く外反する口縁部は土師器甕通有の特徴であるが、胴部外面上半のロクロ使用のヘラナデと同下半部のヘラ削り、及び全体の形は、須恵器羽釜と共通する。土師器埦は、高台の有無によって二種類に分けられる。高台のない埦（1～3）は平底で、体部外面にナデに近いヘラ削りを施す。付高台の埦(4)は、ロクロ成形で丸い体部を持つ。内面、及び口縁部外側にヘラ磨き・黒色処理を施す。

須恵器羽釜は四種類が認められた。a）口縁部が同端部に向けて徐々に肥厚するもの(17)。b）口縁端部で内側に肥厚するもの(18)。c）口縁端部で外側に肥厚するもの(19・20)。d）器肉が薄く、胴部の張りの大きいもの(21)。dを除き、口縁部の立ち上がり傾向

が強く、口縁端部が肥厚し、同平坦面の水平なものが多い。また、前類に比べ胴部外面下半部のヘラ削りの位置が高くなる。須恵器坏は全て糸切り無調整で、体部が直線的に開くもの(6・7)と、丸味を持って開くもの(8～10)がある。後者の坏は、全体的にみて小型、あるいは浅い傾向にある。須恵器埦は全て付高台を有し、三種類認められる。a)大型で高い高台(足高高台)を持つもの(11・12)。b)体部が直線的に開くもので、これには浅めな体部に細長い高台を付すもの(15)と、深めな体部に太く短かい

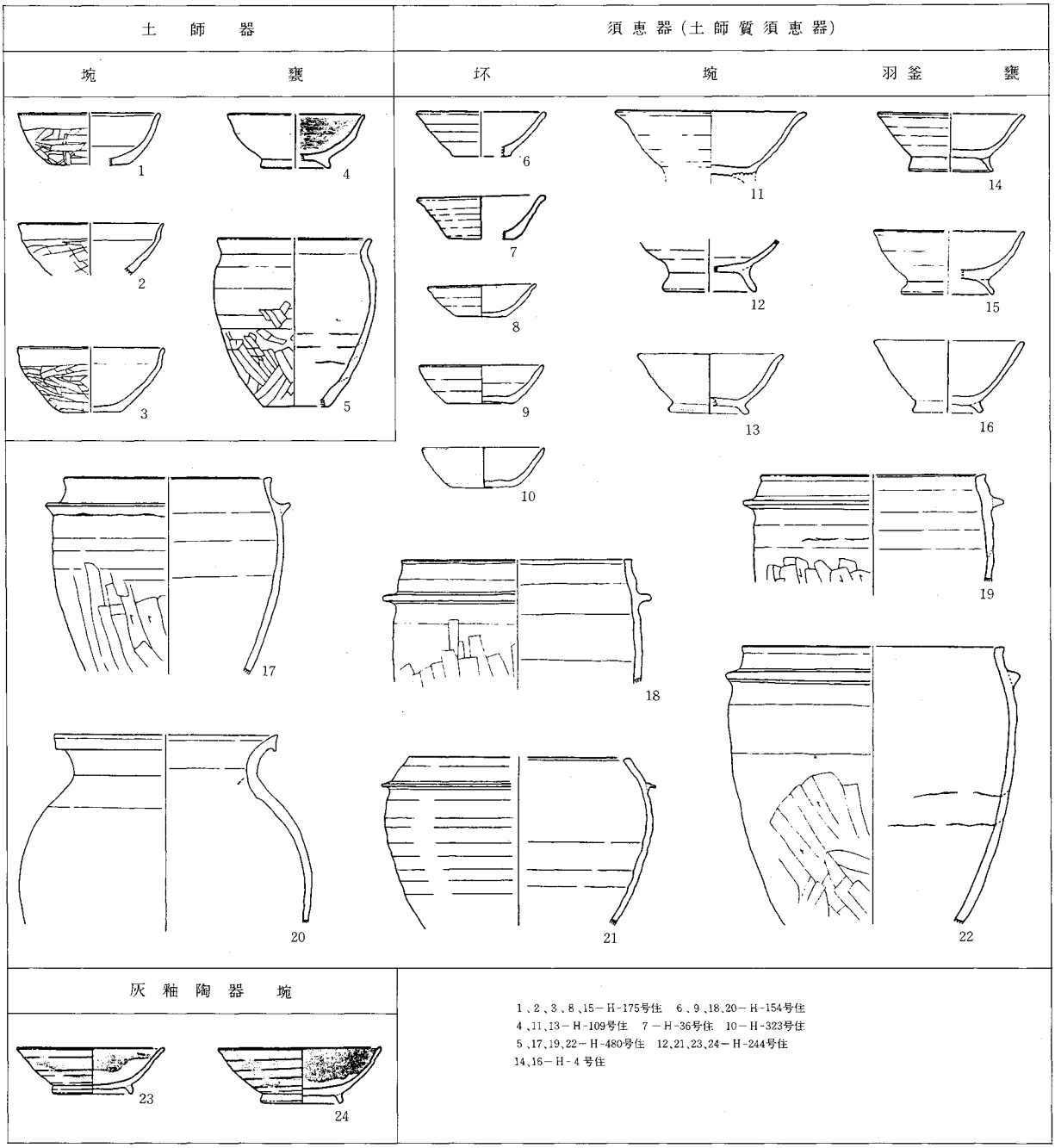


図－803　XII　類

※26、29～32のみさらに2/3縮尺

高台を有するもの(14・16)の二者がある。c)浅めで丸味を持つ体部に細長い高台を付すもの(13)。須恵器甕(22)は、内外面もロクロ使用のヘラナデ調整を施し、外面はさらに不定方向のヘラナデを加える。

灰釉陶器埦(23・24)は、三日月高台を有するが、外面の稜は弱く、中には稜の不明瞭なものもある。前類と異なり、口縁端部



図－804　XIII 類

に外反がみられない。底部には回転ヘラナデ調整を施す。施釉は漬け掛け手法である。

本類土器群の特色は、第一に土師器・須恵器両者とも共通の焼成法とみられ、軟質で黄橙色を中心とする土師質須恵器になっていることである。また、両者の間に形態や技法で相通ずる点もある。須恵器羽釜は、器肉が薄く胴部の張りの大きいもの（上記羽釜d）が出現する。その他の羽釜は、口縁部の立ち上がりが大きく、胴部外面のヘラ削りも上位までくるようになる。灰釉陶器は前類とほぼ同じであるが、三日月高台の外面の稜が一層弱くなったり、口縁端部の外反が認められないなどの点で異なる。なお、本類では、前類まで見られた土師器坏がなく、かわって埦が出土した。

XIV　**類**（図－805）

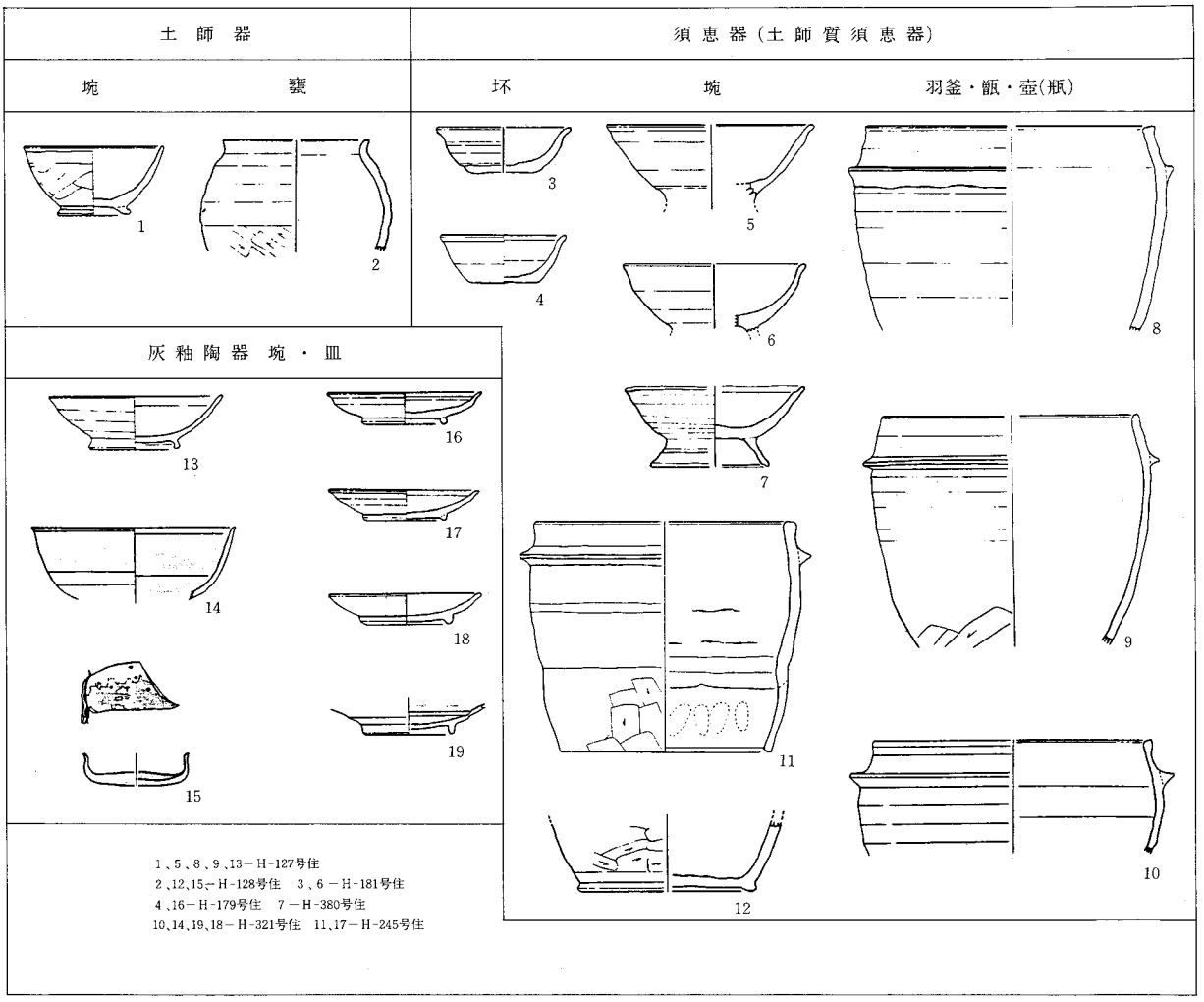
器種構成としては、土師器に甕・埦、須恵器に羽釜・甑・坏・埦・壺(瓶)、そして、灰釉陶器に埦・皿がある。本類でも土師器の出土は少なく、また、形態・技法・焼成等で須恵器と共通する点が多い。なお、本類では須恵器羽釜と灰釉陶器以外は、サンプル数がやや不十分である。

土師器甕は小型甕(2)のみで、口縁部が短かく立ち、胴部は丸く膨む。胴部外面の調整は、上半部がロクロ使用のヘラナデ、下

半部に斜位ヘラ削りを施し、須恵器羽釜の調整技法と共通する。土師器埦(1)は付高台で、体部外面にヘラ削りを施す。以上の土師器甕・埦は、色調（黄橙色を帯びた灰色）・焼成等、須恵器とほぼ同じものである。

須恵器羽釜は三種類認められた。a）口縁端部が肥厚し、同平坦面を水平に仕上げるもの(8)。b）器肉が薄く、口縁端部を丸く仕上げるもの(9)。c）器肉が薄く、胴部の張りの大きいもの(10)。口縁端部はaに同じ。これら三者は、いずれも口縁部が長く、その立ち上がり傾向も顕著である。須恵器甑(11)は羽釜型で、須恵器坏（3・4）は小型で、口縁部を折るように外反させる。底部は糸切り無調整。丁寧（ていねい）なつくりである。須恵器埦はいずれも付高台で、三種類認められる。a）やや深めで直線的に開く体部を持つもの(5)。口縁部の器肉を薄くする。b）やや深めで丸味を持つ体部のもの(6)。c）高い高台を持ち、浅い体部のもの(7)。口縁部の器肉を薄くする。c以外は高台の形態、及び底部の状況が不明である。cの底部は、回転糸切り後回転ヘラナデ調整。技法等も羽釜と共通する。須恵器壺、あるいは瓶と見られるもの(12)は胴下半部が出土した。付高台。本類の須恵器の色調は、黄橙色を中心とした褐色系で、いずれも酸化炎を受けた焼き上がりとなっている。上記土師器と共通している。

灰釉陶器埦は、大型で深いもの(14)とやや小型で浅いもの(13)の二種類がある。前者は腰部外面に回転ヘラ削りを施す。後者は三日月高台の外面下半が接地面になったような形状を呈する。底部外面は回転ヘラナデ調整を施す。両者とも漬け掛けである。灰



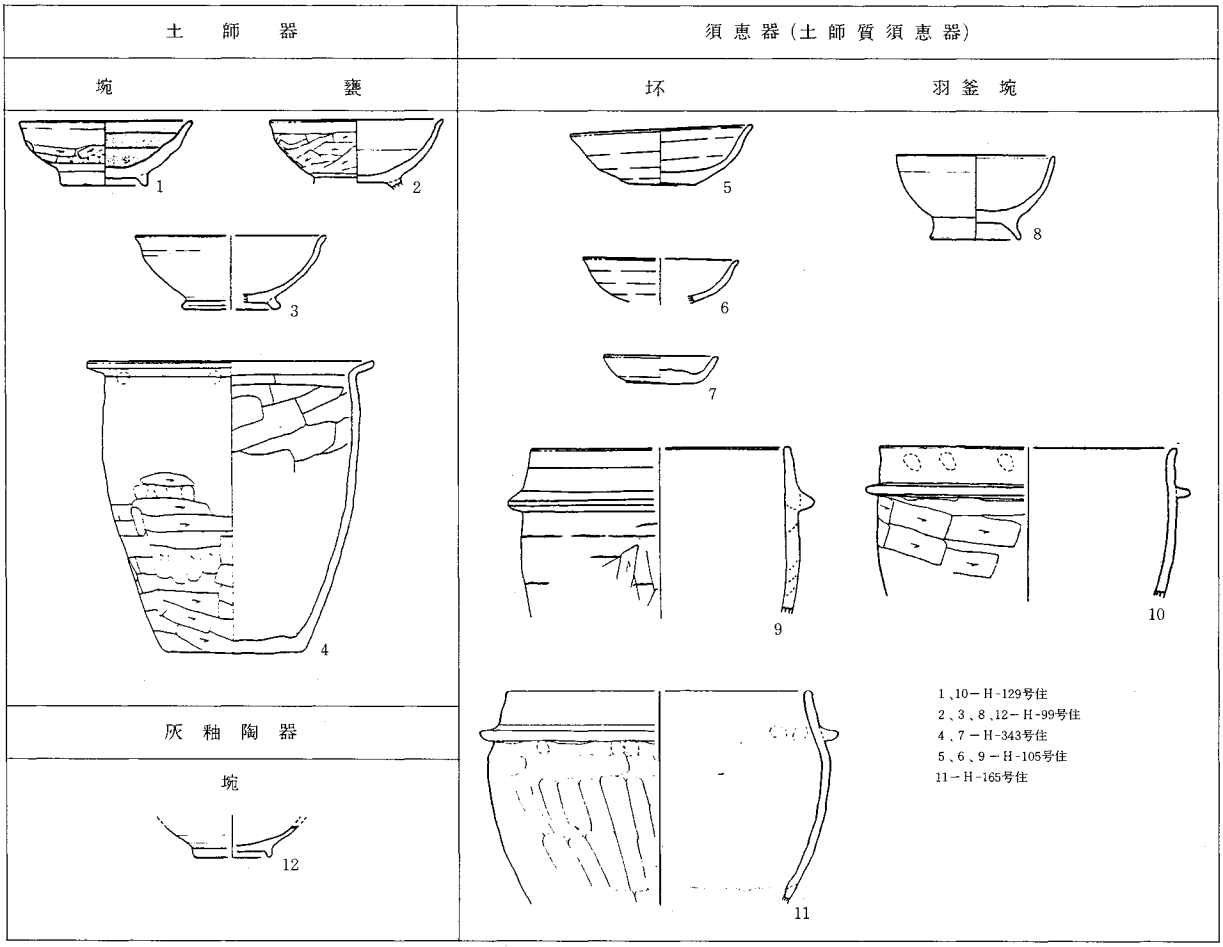
図－805　XIV　類

釉陶器皿は、一般的なもの(16・17)以外に、折縁皿(15)・段皿(18)、耳皿(19)がある。一般的なものの内、16の底部は回転糸切り後中心部を残し回転ヘラナデ、(17)は全面回転ヘラ削り調整。高台などに若干の違いがあるが、いずれも丸味を持って開く体部を持ち、漬け掛けである。折縁皿は、底部の回転糸切り後外周部に回転ヘラナデ調整を施す。方形の付高台で、漬け掛け。段皿は、底部に回転ヘラナデ調整を施し、端部が丸くて垂直に立つ高台を付す。耳皿の立ち上がり部分はほぼ垂直で、その先端を短かく外反させる。

本類土器群の特色は、前類と同様に須恵器羽釜と共通するつくりの土師器小型甕の存在、口縁端部を丸く仕上げる須恵器羽釜の出現、灰釉陶器における大型で深い埦の出現や三日月高台の消滅等が挙げられる。

XV　類（図－806）

器種構成は、土師器に甕・埦、須恵器に羽釜・坏・埦、そして、灰釉陶器に埦がある。土師器と須恵器は、前類と同様に形態・技法・焼成等の点で相通ずる面を持つ。本類に属す遺構が少ないため、羽釜を除く各器種の伴出例は少ない。



図－806　XV　類

土師器甕は大きな平底を有し、強く折る口縁部に最大径を置く。胴部外面は、上半部は指ナデ、下半部にはヘラ削りを施す。土師器椀はいずれも付高台で、三種類が認められる。a）体部外面にヘラ削り、口縁部と体部内面に横位ヘラナデを施し、内面に磨きのない黒色処理を施すもの(1)。b）体部外面に斜位ヘラ削り、口縁部と体部内面に回転ヘラナデを施すもの(2)。c）体部外面に回転ヘラナデ、同内面に光沢のあるヘラ磨きを施すもの(3)。この内、bとcはロクロ成形である。

須恵器羽釜は二種類が認められる。a）口縁部が垂直に立ち、胴部の張りのほとんどないもの（9・10）。b）胴部の張りが大きく、口縁部の内傾するもの(11)。両者とも口縁端部を丸く仕上げ、全体に器肉を薄くする傾向にある。また、胴部外面のヘラ削りは、鍔付近まで施す。須恵器坏は、大型で口径に比べ底径の小さいもの（5・6）と、小型の浅い坏で、いわゆる「カワラケ」様(7)の二種類がある。いずれも黄橙色の軟質なつくりで、「カワラケ」の胎土・焼成に似る。須恵器椀(8)は付高台で、深く丸味の強い体部を持つ。須恵器坏と椀の底部切り離し技法は、いずれも回転糸切り無調整である。

灰釉陶器椀(12)は、体部上半を欠損するため施釉法は不明であるが、おそらく漬け掛けと考えられる。底部には、回転糸切り痕をそのまま残す。付高台は垂直に近いもので、端部を丸く仕上げる。

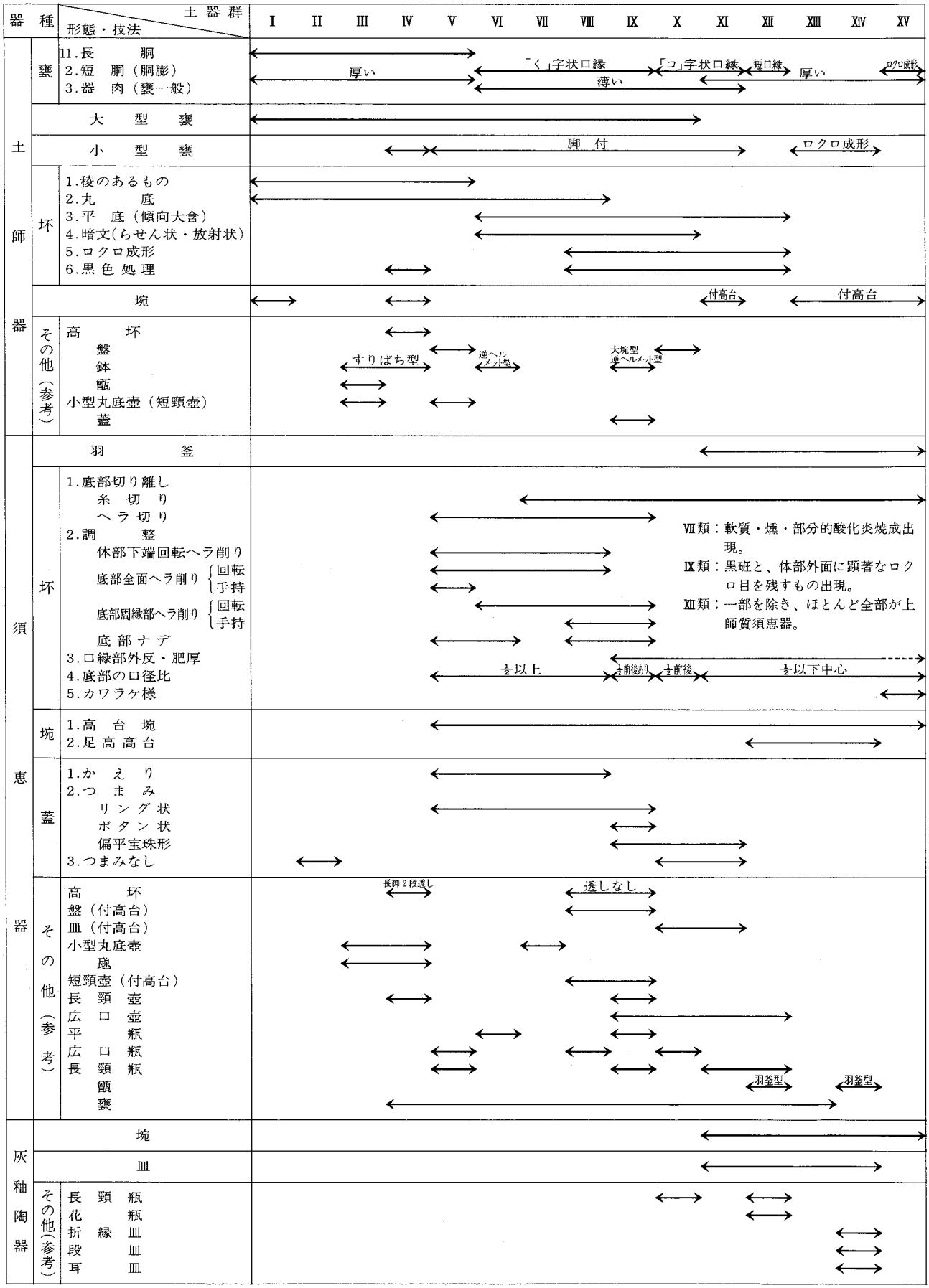
本類土器群の特色は、「カワラケ」様の須恵器坏の出現と、須恵器羽釜における口縁端部の丸味を持ったつくり、ヘラ削り位置の上昇がある。灰釉陶器椀では、底部に回転糸切り痕をそのまま残す。わずか一点ではあるが、口縁部を強く折る平底甕も他類では認められない。本類を持って、芳賀東部団地遺跡における古代の土器は終る。

3　土器群の編年的序列について

竪穴式住居跡どうしの切り合いは、39か所で確認されたが、比較的良好な土器群を持ち、上記で分類した土器群に対比できるものは、次の通りである。

○H38号住→H39号住……X類→XII類
○H68号住 ↗H69号住 ↘H67号住 ……X類 ↗X類 ↘X類
○H77号住→H78号住……IX類→XI類
○H111号住 ↗H116号住 ↘H112号住 ……IV類 ↗V類 ↘IV類
○H140号住→H141号住……V類→V類
○H173号住→H170号住……IX類→IX類
○H81号住→H61号住……X類→XI類
○H75号住→H74号住 ↘H79号住↗ H76号住……X類→X類 ↘IX類↗ XI類
○H102号住→H101号住……IX類→X類
○H123号住→H128号住……IX類→XIV類
○H125号住→H129号住……IX類→XV類
○H166号住→H167号住……IX類→IX類
○H183号住→H182号住……X類→X類

表－３　土器の形態・技法等一覧表



※　莫大な遺物量なので、詳細に検討すれば、若干かわる可能性がある。ここでは、本書に掲載したものの中で、器形の明確なものを中心に作成した。

○H225号住→H224号住……IX類→XI類
○H259号住→H258号住→H257号住 ……X類→X類→X類
○H286号住→H287号住→H288号住 ……XI類→XI類→XI類
○H289号住→H297号住……VIII類→IX類
○H309号住 ↗H308号住 ↘H315号住 ……IX類 ↗X類 ↘IX類
○H366号住→H354号住……VI類→VII類
○H252号住→H251号住……IX類→XI類
○H263号住→H264号住……VIII類→IX類
○H306号住→H307号住……VII類→VIII類
○H336号住→H337号住……X類→XI類
○H347号住→H348号住……IX類→IX類
○H490号住→H491号住……VI類→VII類

上記の土器群を整理すると、次のようにまとめられる。

IV類→V類、VI類→VII類→VIII類→IX類→X類→XI類、X類→XII類、IX類→XIV類、IX類→XV類

このことからVI・VII・VIII・IX・X・XIの各類は、この順に新しくなる土器群であることがわかる。またIV類よりV類が、IX類よりXIV類・XV類が、X類よりXII類が、より新しい土器群と考えられる。

ここで、土器自体の変化からさらに新旧関係を考えてみることにする。まず土師器坏の形態に着目すれば、1)深めの丸底と直立する長めの口縁部から成り、底部と口縁部を画す稜がしっかりしているもの、2)浅く平底気味の底部と直立気味に外反する口縁部から成るもの、3)平底化した底部と短く直立した口縁部から成り、底部と口縁部を画す稜の弱いものを含み、形態・大きさに種々あるもの、4)一般的に口縁部が短く、小型であり、底部と口縁部を画す稜が弱いもの、5)深い丸底で短く内傾する口縁を持つもの、6)やや浅い丸底で直立気味の口縁を持つ土器群、7)平底傾向の底部から外傾する口縁に続くものに分けられる。なお、1)～4)は、いわゆる模倣坏であり、底部と口縁部を画す明瞭な稜を持つ。

上記の土師器坏は、1)→2)→3)→4)→5)→6)→7)の順に継続して除々に形態的変遷が見られる。これは土師器坏の時間的連続を示すものと考えられる。次に、須恵器坏の底部の切り離し方法と調整方法、及び形態・焼成に着目すれば、1)ヘラ切り後、ナデ・ヘラナデ・手持ちヘラ削り・回転ヘラ削りが混在するもの、2)回転ヘラ切り後、ナデ・ヘラナデ（手持ち・回転）・回転ヘラ削り（全面・周縁部）・無調整が混在するもの、3)回転ヘラ切りと回転糸切りの両者に、周縁部回転ヘラ削り・無調整があり、回転糸切り無調整が主流のもの、4)3に回転糸切り後周縁部手持ちヘラ削り・回転ヘラ切りと回転糸切り後粗いヘラナデ（と見られる）が加わる。なお、回転糸切り無調整のものを中心に、部分的に酸化炎焼成や軟質のもの、回転ヘラ切り無調整のものに、底径が口径の50%程度になるものが混じるもの、5)回転糸切り後に全面回転ヘラ削り・周縁部回転ヘラ削り・周縁部手持ちヘラ削り、回転糸切り・回転ヘラ切り後に粗いヘラナデ・無調整が混じり全体に小型化、底径が口径の50%前後が多い。なお、回転糸切り無調整が大部分であり、これを中心に、口縁端部に外反・肥厚、部分的に酸化炎焼成・軟質なものが見られる。6)全て回転糸切り無調整（これ以降同じ）、体部外面にロクロ目を残し、口縁端部肥厚・外反が目立つもの、7)深い椀形・浅い椀形があり、底径は口径の50%以下で、口縁端部は肥厚・外反が一般的なもの、8)大部分が土師質須恵器で小型で体部に丸味を持つもの、9)すべて土師質須恵器で小型のもの、10) 9に共通し、口縁部を折るように外反するもの、11)「カワラケ」の胎土・焼成に似るものに分けられる。一つの土器群が、新旧両者の形態・技法を持つものを含み、大量生産の事情や模倣していく過程において、複雑・丁寧なものから、簡単・粗雑なつくりのものに変化するという観点で見るならば、1)→2)→3)→4)→5)→6)→7)→8)→9)→10)→11)と変遷したと考えられる。以上の土師器坏と須恵器坏の変遷を本節で分類した土器群にあてはめるならば、I→II→III→IV→V→VI→VII→VIII→IX→X→XI→XII→XIII→XIV→XV類の順に新しくなる。同様に土師器甕、須恵器蓋、須恵器羽釜、灰釉陶器椀・皿においても土師器坏、須恵器坏と同じ観点での変遷がたどれ、それらは分類した土器群に対応でき住居の切り合い関係とも矛盾しない。

4　土器群の年代

前記の土器群を歴史史料として有効に活用するために、前節で検討した土器群の編年的序列に、更に具体的な実年代を与えてみることにする。先ず、本遺跡における資料からは、第1巻の時と同じで、1)最も古いI類土器群から最も新しいXV類土器群を伴出する大部分の竪穴式住居跡覆土中には、榛名山の一峰二ツ岳噴出にかかる軽石が含まれており、また、石田川式土器を伴出する竪穴式住居跡のように、覆土中にF・A純層の堆積がないこと、従って、最も古いI類土器群は、F・A降下後のものであること、2)竪穴式住居跡覆土中上位に、浅間山噴出にかかるB軽石純層を堆積する土層はあっても、B軽石純層、あるいはそれを含む土層が、竪穴式住居跡の床面や遺物を直接に覆っているものは全くないこと、従って、最も新しいXV類土器群も、B軽石降下前のものであること、3)VII類土器群に位置付けられるH364号住居跡の壁際床面から青銅製銙帯が出土したこと（鉄製の銙帯とみられるものもVII類以降出土している）、従って、VII類以降の土器群は707年以降のものであること、の3点が言えるのみである。これを要するに、I類～XV類の土器群は、上限が6世紀初頭前後、下限が12世紀初頭であり、VII類以降の土器群は707年以降のものであると、漠然と年代が判明するにすぎない。

そこで、ここでは、他遺跡出土の土器であっても、形態や技法等の類似する同器種の土器は、距離の遠近にかかわらず、ほぼ同じ頃のものと仮定して、群馬県内外のものと照合して、本遺跡における土器群の実年代を検討してみたい。その際、土師器に比べ、比較的地域差の少ない須恵器に中心を置き、奈良時代以前は和泉陶邑古窯址群[1]（以下、「陶邑」と略称）と飛鳥・藤原宮[2]（以下、「飛・藤」と略称）における編年と実年代の成果に、奈良時代以降は北武蔵の窯址出土須恵器[3]（以下、「北武蔵」と略称）と美濃窯出土の灰釉陶器[4]（以下、「美濃」と略称）の編年と実年代の成果に照合・検討の主軸を置き、随時、県内の実年代を検討できる資料との整合性も確認して行くことにする。

I類土器群は、土師器坏に半球形の体部に外斜口辺の口縁部を持つ坏が全く伴わず、また、土師器甕は長胴化し、締まりのな

い頸部に短かめの口縁が付くのが特色であるが、この条件を満たして須恵器坏蓋を出土するものに、伊勢崎・東流通団地遺跡1—8—9号がある[5]。この須恵器坏蓋はTK—10型式段階（陶邑）に相当し、実年代は6世紀中葉とみられる。

II類土器群は、須恵器坏蓋がTK—10型式とTK—43型式（陶邑）の両者の特徴を併せもっていることから、6世紀後半代とみられる。土師器坏もI類土器群の段階と異なることに注目される。

III類土器群は、須恵器小型壺（短頸壺）や同腿が、中村浩氏による和泉陶邑窯出土須恵器編年[6]のII型式6段階、ないしIII型式1段階に近似し、これはTK—209型式、ないしTK—217型式段階（陶邑）に相当するものと考えられる。実年代は7世紀前半とみられる。

IV類土器群では、須恵器小型壺（短頸壺）がTK—46型式段階（陶邑）や飛鳥III・IV（飛・藤）に近似するものがある。実年代は7世紀後半とみられる。

V類土器群は、須恵器坏の体部上半にみられる緩やかな外反は、飛鳥V（飛・藤）によく見られるものである。また、須恵器坏の体部中央部を極めて薄く仕上げる手法は山下6号窯（北武蔵）に近似し、須恵器蓋でかえりがあって端部を折らずに仕上げるものは、山下6号窯より更に古い手法とみられる。また、大型の須恵器坏で底部に丸味を持っているものは、伊場遺跡では8世紀初頭以降にみられるものである[7]。以上から、本類土器群の実年代は、8世紀初頭前後から8世紀前葉頃までと考えられる。

VI類土器群の須恵器坏は、全体として前内出1・2号窯（北武蔵）に近い。最近の検討では、前内出1・2号窯は武蔵国分寺創建期の窯址と考えられている[8]。実年代は8世紀中葉とみられる。なお、本類土器群の須恵器は、上大屋、樋越地区遺跡群[9]内の須恵器窯出土のものに近似するが、坏蓋や短頸壺を比較すると、本類土器群のものに後出的要素が認められる。

VII類土器群の須恵器坏は、前類土器群に近い形態・技法を示すが、全体に小型化し、体部に深みを増すものや底部に糸切り無調整のものが出現している。これらの特色は、将軍沢2B—2号窯（北武蔵）出土の須恵器坏と共通するものであるが、これに近い土器群の中には、長岡京期並行とみられる須恵器壺の伴出する遺構もある[10]。全体として、8世紀後葉と考えられる。なお、松井田町愛宕山遺跡4号住居[11]の須恵器坏・蓋は、本類、ないし次類土器群に近いが、ここでは760年初鋳の万年通宝を伴っている。

VIII類土器群の須恵器坏は、全体に八坂前4号址（北武蔵）のものに近似する。八坂前窯は、「続日本紀」承和12年（845）条にみえる、武蔵国分寺の再建塔の瓦を焼いた窯址と考えられ、4号窯出土の須恵器坏は、それとの関係から9世紀前葉に位置付けられている[12]。

IX類土器群の須恵器坏は、糸切り無調整のものを中心に、口縁部に外反・肥厚の顕著なものがみられる。また、体部が直線的な外傾が大きく、深い坏が出現する。このような傾向は、新久A地点1・2号窯（北武蔵）のものにみられる。この窯址では上記の塔再建瓦を窯体の構築材に利用していることから、塔再建瓦焼成以降のものと考えられる。また、町田市川島谷遺跡では、貞観6・7年（864・865）の富士山噴出にかかる降下火山灰に直接埋もれた住居跡から、本窯式とみられる須恵器坏が出土した[13]。この他、本類土器群須恵器坏には、上記の八坂前4号窯（北武蔵）の他、上記塔再建瓦との関係から9世紀中葉に位置付けられている八坂前5・6号窯（北武蔵）出土のものに近似する坏もみられる。新久A地点1・2号窯は、これに続く時期のものとみられる。本類土器群の実年代は、9世紀中葉と考えられる。

X類土器群の須恵器には、南多摩窯址群G59窯式[14]に近似するものが含まれる。横浜市受地だい山遺跡[15]では、G59窯式の須恵器坏を出土する住居跡が、上記の貞観時代の降下灰より後の火山灰で埋められており、この灰の下限が10世紀に入らない例があるという。このような点から、本類土器群の実年代は、9世紀後葉であろう。

XI類土器群では、光ヶ丘1号窯式（美濃）の灰釉陶器埦・皿がみられる。また、須恵器坏は、底径の口径化が50%以下になり、深みの大きい埦形の坏が認められる。これらの特色は、末野（花園支群）2号窯（北武蔵）、ないし新久D地点1・3号窯（北武蔵）出土のものに認められ、器形的にも近似する。実年代は、10世紀前半とみられる。なお、高崎市観音山古墳の周堀内土坑出土の高台埦[16]とよく似た高台埦が、本類土器群でも認められる。観音山古墳周堀内土坑では、890年初鋳の寛平大宝を伴っている。

XII類土器群では、大原2号窯式（美濃）の灰釉陶器埦・皿が認められる。細部をみると、三日月高台外側の稜が明瞭なことや、口縁端部に短かい外反が残存するなど、光ヶ丘1号窯式（美濃）に近い面を持っている。実年代は、10世紀後半でも、その前の方になるものとみられる。

XIII類土器群でも、大原2号窯式（美濃）の灰釉陶器埦・皿が認められるが、三日月高台の外側の稜が不明確になっており、

表—4　土器群の実年代一覧表

土器群	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV
実年代	6C中	6C後	7C前	7C後	8C初頭前後～8C前	8C中	8C後	9C前	9C中	9C後	10C前	10C後(前)	10C後(後)	11C前	11C後
検討資料	TK—10	TK—10～TK—43	TK—209～TK—217	飛鳥III—46・IV	伊場遺跡6号窯 飛鳥V山下	上大屋1・樋越地区遺跡群前内出1・2号窯	愛宕山遺跡4号住居 長岡京将軍沢2B—2号窯	八坂前4号窯	町田市川島谷遺跡1・2号窯 新久A地点5・6号窯 八坂前	横浜市受地だい山遺跡G59窯式	高崎市観音山古墳周堀内土坑 新久D地点1・3号窯 末野（花園支群）2号窯 光ケ丘1号窯式	大原2号窯式	大原2号窯式	虎渓山1号窯式	丸石2号窯式

口縁端部の外反もほとんどないところから、大原２号窯式でも後半に属するものと考えられる。実年代は、10世紀後半でも、その後の方に当るものとみられる。

XIV土器群では、虎溪山１号窯式（美濃）の埦と皿が認められる。実年代は、11世紀前半代とみられる。

ＸＶ類土器群では、丸石２号窯式（美濃）とみられる埦が伴う。実年代は、11世紀後半代であろう。

以上、他地域・他遺跡における編年と実年代の成果を、本遺跡の土器群に適用してみたが、各土器群の編年的序列に沿って継続的に実年代を賦与することができ、また、本遺跡資料における頭初の年代観や県内の実年代検討資料との間にも齟齬はない。おおむね妥当なものであろう。しかし、地域差に伴う土器相の違いや、覆土中の土器を含む分類に伴う厳密性の問題、あるいは、Ⅰ～IV類土器群でやったように、必ずしも共伴例の多さを十分に確認していないものを実年代検討資料として利用せざるを得なかった点等々、不安の種はつきない。本節における検討結果は一つの見通しであり、更なる資料の蓄積と研究の深まりを期待したい。

5　ま　と　め

前節までに述べてきたように、石田川式土器を除くと、それ以降の土器は、Ⅰ～ＸＶ類に分類できた。また、実年代は、６世紀中頃から11世紀後半まで、約550年の間、ほぼ間断なく続くことがわかった。ここでは、分類や実年代を検討している過程で気付いた点を若干記してまとめとしたい。

先ず第一に、土器群の様相の非常に大きく変化した所が２箇所認められる。いわば、土器相の画期と言うべきところである。Ｖ類とⅫ類の土器群である。Ｖ類土器群においては、土師器坏で稜のあるものをほぼ一掃し、新しい形態の丸底坏や暗文坏、盤などが、多彩に出現した。また、器肉の薄い大型甕や中型の甕、脚付甕も、この段階で出現した可能性がある。同時に、須恵器の出土も目立って多くなり、蓋・坏・高台埦・瓶など、新しい形の土器が一挙に出現した感がある。このような傾向は、VI類土器群にも及び、そこでは、器肉の厚い長甕がすっかり姿を消し、短胴で胴部が膨み、器肉の薄い甕にとってかわった。もう一方のⅫ類土器群では、土師器がさびれ、土師器甕は須恵器羽釜に、土師器坏は須恵器坏や同高台埦にその座を譲っている。また、須恵器でも、前類まであった蓋や皿は消滅し、かわって足高高台埦が出現するなどの変化があったが、何よりも大きな変化は、大部分の須恵器が酸化炎焼成気味の土師質須恵器にかわったことである。このような変化は、すでに前類土器群で土師器甕の退化や須恵器羽釜の出現、灰釉陶器の広がりなどにその兆候を見せていたが、Ⅻ類土器群に至り、ほぼ一変したというべきである。

ところで、上記の２つの画期の実年代をみると、前者が８世紀初頭前後、後者が10世紀中頃（その兆候は10世紀初め頃から）に始まっている。いずれの時期も、古代社会の大きな変革期であることが注意される。また、後述するように、竪穴式住居跡からみて、本遺跡の古代集落の拡大期が前者のＶ類土器群の段階に、衰退期が後者のⅫ類土器群の頃に当ることも興味深い。本遺跡における土器、及び集落のあり方は、古代社会の変動と密接に結びついていることを物語るものであろう。

次に、須恵器坏の底部切り離し技法を考えてみたい。Ｖ類土器群以降に認められる須恵器坏をみると、Ｖ・VI類土器群の古い段階は、ほとんど全てが回転ヘラ切りとみられ、糸切りは、Ⅶ類土器群の段階に至って無調整（回転糸切り）のものを伴って、初めて確認することができる。本遺跡の東方約５kmに所在する上大屋・樋越地区遺跡群で検出された須恵器窯(17)は、本遺跡のVI類土器群に相当する須恵器を出土するが、ここの須恵器坏は全て回転ヘラ切りであった。赤城南麓一帯の須恵器生産地、あるいはそこへの供給地では、底部の切り離しに糸切りを使う手法は、ヘラ切りに遅れて８世紀後葉頃に伝わったものと考えられる。

土師質須恵器は、Ⅻ類土器群の段階で一般化するが、ほぼ同じ焼成傾向を持つものが、すでにⅧ類土器群の段階（９世紀前葉）から、土師器のロクロ成形坏・内黒処理坏・須恵器模倣坏等の形で、客体的でありながら継続的にみられることに注意したい。

（唐澤・前原）

註

(1) 田辺昭三『須恵器大成』1981。以下、陶邑古窯址群について、特にことわりのない限りは、同書による。

(2) 西弘海「七世紀の土器の時期区分と型式変化」（『土器様式の成立とその背景』1986）以下、飛鳥・藤原宮期の土器については、同書による。

(3) 高橋一夫・宮昌之「北武蔵の窯址」（神奈川考古同人会『神奈川考古』第14号　1983）以下、北武蔵の窯址について、特にことわりのない限り、同書による。

(4) 田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」（『考古ジャーナル』№211　1982）
田口昭二『美濃焼』　1983
以下の灰釉陶器については、特にことわりのない限り上記二書、及び、岐阜県陶磁器陳列館　田口昭二氏のご教示による。

(5) 群馬県企業局『伊勢崎・東流通団地遺跡』　1982　本土器群の土師器坏は、伊勢崎・東流通団地遺跡のものと比べると、古手の様相を示す。

(6) 中村浩「出土須恵器の編年的考察」（『和泉陶邑窯の研究』1981）

(7) 「シンポジウム・神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器編年試案」（神奈川考古同人会『神奈川考古』第５号　1978）

(8) 酒井清治「埼玉県の須恵器の変遷について」（埼玉県立歴史資料館『埼玉の古代窯業調査報告書』　1987）

(9) 山下歳信「八ヶ峰生産址遺構」（勢多郡大胡町教育委員会『上大屋・樋越地区遺跡群』　1986）

(10) (8)に同じ。

(11) 松島栄治「愛宕山遺跡」（群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編２　1986）

(12) 小林昭彦「生産須恵器の考察」（坂詰秀一編『武蔵八坂前窯跡』　1984）

(13)(14)(15) 服部敬史「南武蔵の窯址」（神奈川考古同人会『神奈川考古』第14号　1983）

(16) 群馬県教育委員会『史跡観音山古墳』　1981

(17) (9)に同じ。

表一5　住居時期別一覧表　　（T：鍛冶址）

土器群	実年代	西側台地の住居番号	東側台地住居番号
I	6C中	171	
II	6C後	260	
III	7C前	89・107・108・110・117・122・157・159・160・162	
IV	7C後	84・104・111・112・113・120・126・158・161・163・176	
V	8C初頭前後～8C前	3・30・48・83・106・114・119・140・141・156・229・233・325・340・349	283・296・299・313・314・316・359・369 371・374・378・387・447
VI	8C中	2・25・27・49・56・58・136・143・199・205・232・246・327・351・481・482 491	294・300・302・322・357・358・363・365 366・368・372・377・440
VII	8C後	1・138・145・150・194・200・207・249・329・331・341・342・350・483 T－2（VII～VIII）、T－3、（T－1）	275・298・303・304・306・354・364・438 439
VIII	9C前	14・29・32・35・42・50・52・53・57・59・94・96・98・132・144・174・180 186・189・191・204・208・209・214・216・217・223・228・236・240・243・263 352・487・488	276・278・279・289・307・317・318・319 370・376・442
IX	9C中	6・7・8・12・13・15・16・17・20・21・24・28・31・33・34・43・45・46・47 55・73・77・79・80・97・100・102・103・115・118・123・124・131・133・135 149・166・167・169・170・173・177・187・188・195・196・201・202・206・210 211・213・215・219・220・222・225・226・234・237・238・239・242・247・250 252・253・256・262・264・266・326・334・345・347・348・353・484・485・486 489・152（中央台地）	282・295・297・309・356・362・315・397 400・401・403・414・448 T－4、T－5
X	9C後	5・9・10・11・18・19・22・23・38・40・41・44・62・63・65・67・68・69 71・72・74・75・81・82・86・87・90・91・93・95・101・121・125・139・148 168・182・183・184・190・192・197・203・212・218・227・235・241・254・257 258・265・328・330・333・336・338・339・344・490・492・494	267・270・271・274・277・284・293 301・308・312・360・404・444・445・446
XI	10C前	51・54・60・61・64・76・78・85・88・147・172・185・193・198・221・224・251 255・332・335・337	273・280・285・236・287・288・292・291 305・373・375・381・383・399・443・453 474・478
XII	10C後(前)	37・39・92・130・137・142・153・164・231	272・290
XIII	10C後(後)	4・36・109・154・155・175・244・248・323・324・480	
XIV	11C前	127・128・179・181・245・321・493	380
XV	11C後	99・105・129・165・343	

※　本文中に遺物図面はないが、遺物小片で時期を推定したものを含む。

古代集落の検討

1 はじめに

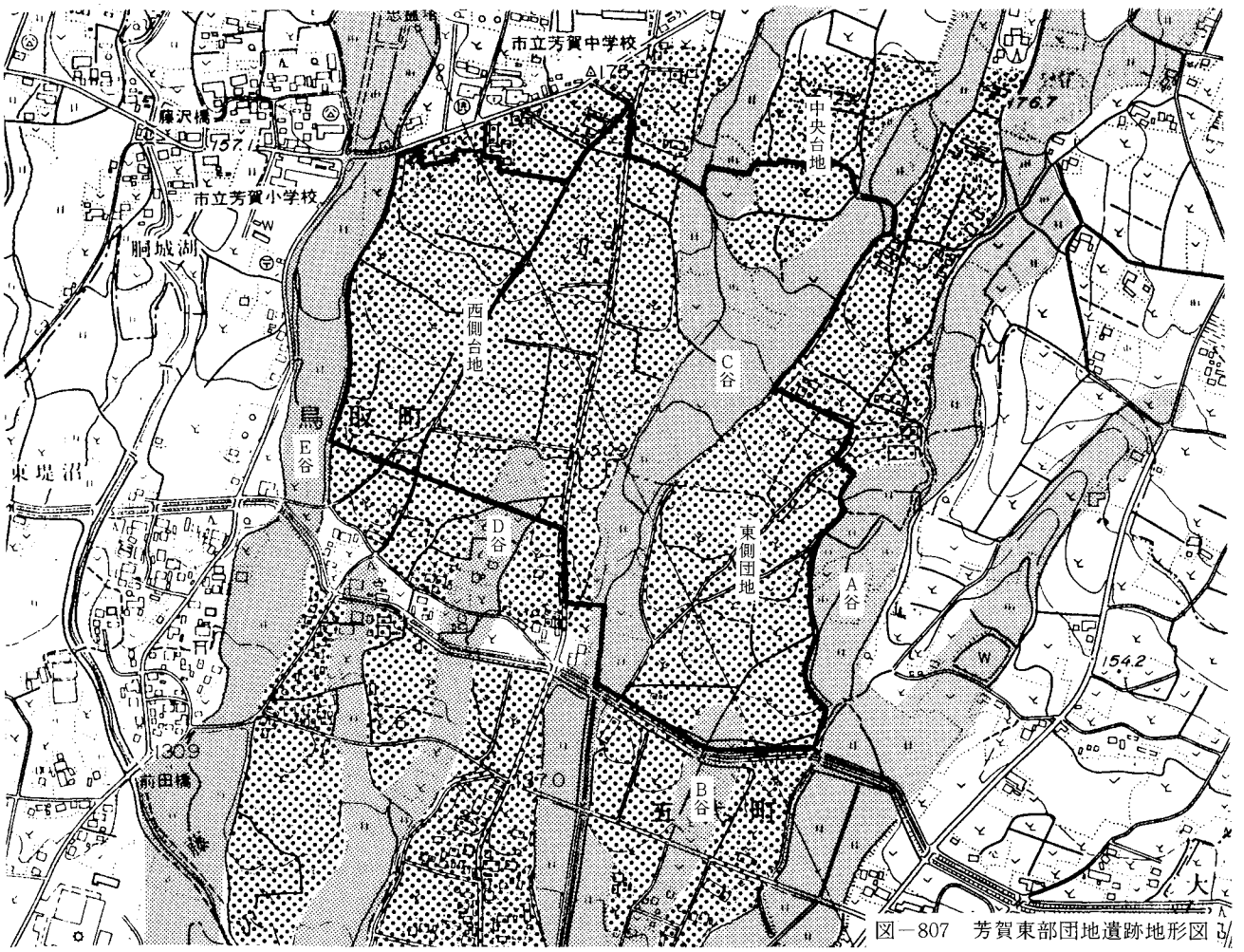
本章では、前章の土器分類(土器型式の設定)、及びその編年に基き、芳賀東部団地遺跡における古代集落のあり方を検討することになる。前章では石田川式土器の分類と編年は行っていないので、検討の中心は南関東編年の鬼高Ⅰ式期から国分式期最末期に相当する時期におくことになる。実年代では、6世紀中葉から11世紀後半までの間である。しかし、本遺跡の土師器を伴う時代全体の概要を知るために、石田川期の住居や古墳にも若干触れている。

検討をするに当って、前章の土器分類と編年的序列を基に、竪穴式住居の分布図を作成した。そこでは、前章の、「――類土器群」をそのまま「――期」に置換えて使用している。例えば、「Ⅰ類土器群」は「Ⅰ期」とする。また、検討の対象は、土器型式のわかる竪穴式住居を中心とし、それとの関わりで掘立柱建物や溝などもみて行くことにする。出土遺物のうち、特に竪穴式住居跡から出土した鉄製品(砥石も含む)や銅製品、紡錘車、墨書土器については分布図に入れ、検討の対象とした。これらの大部分が、出土した竪穴式住居に所属するかどうかは明確にできないが、元々は出土住居付近で使われていた可能性が大きいので集団の構造や性格、所有形態等を考える上で寄与する所が大きいものと考えられる。記述の順序は、鬼高期以降の竪穴式住居が最初に現れた西側台地を先とし、以下現れた順に、東側台地、中央台地(Ⅸ期のみ)と進めて行くこととする。

溝は、覆土からみてB軽石降下前のものに限定して検討の対象とした。溝の機能については、東側台地南北溝W―45・48のあり方から区画することを第一義の目的としたものと考えられる。また、溝が機能していた時期の設定に当っては、掘り返し(浚渫)作業がなかったものと仮定して(実際にその痕跡を残す溝は確認できない)、竪穴式住居の分布状況と整合性のある時期を溝の機能した時期と考えた。なお、東側台地南北溝W―52は、直線的でない走り方や覆土の色調等からみて、時期的にも性格的にも異なるものと考え、一応検討の対象から外してある。[1]

各期の分布図は、上記したように土器分類(＝土器型式)をもとに図化したものであるが、この土器型式を使う限り、ある一時点の集落を復元することは困難である。従って、本章で使用する分布図には一定幅の時期のもの全てが含まれていることに注意を払っておきたいと思う。

なお、本章の分布図には、諸般の都合で掲載されていない竪穴式住居2軒(H―131・193)があり、また、本書に遺物実測図が掲載されてないが、実物に当って(大部分は小破片)時期を決定した竪穴式住居がある。[2]



図―807 芳賀東部団地遺跡地形図

※図中に記されたW－1等はその時期に機能していたと考えられるもの。

図－808　Ⅰ期以前

2　遺跡の立地

赤城山南麓に位置する本遺跡は、東西を開析谷に挟まれた3つの台地からなる。本書ではこの3つの台地を本遺跡内の位置関係から、東側台地・中央台地・西側台地と称している。また、調査区域内の開折谷や隣接する開析谷を以下、東からA～E谷と称する。(図－807)。この内、C谷は東側・西側台地を画し、調査区域北側で中央台地を挟む。東側台地東縁部は緩斜面をなすが、同西縁と西側台地の東西縁は崖をなす。これらの比高は現状で3～6m前後である。また調査区域内のB・D谷は、谷頭に当るため、台地とは極めて緩やかな傾斜でつながる。A・C・E谷には水流があるが、B・D谷はなく（現状)、調査時にも湧水がなかった。

台地上に占める調査区域の位置をみると、中央台地はその南端のみであるが、東側・西側台地は両者とも台地南半の最も広い所に当る。調査区域は、以下にみる遺構の分布、及び台地上の位置からみて、遺跡の広がりの中心部分をなすものとみられる。[3] なお西側台地は、調査区域の北側でも広い所が続くが、調査区域の直ぐ北側にある市立芳賀中学校付近から北側は遺物の散布がほとんどなく、[4] 学校北側の試掘調査でも遺跡は確認できなかった。[5] 西側台地では南北に広い所が続くが、遺跡はその南半に限られる。

3　時期別遺構分布

※時期別分布については付図－2を参照されたい。

Ⅰ期以前の遺構について（図－808)

芳賀東部団地遺跡では、縄文時代以後、古墳時代の石田川期の竪穴式住居が構築されるまでの間、人間の痕跡を留める遺構は認められていない。

石田川期の竪穴式住居跡は、東側台地の西側中央部から東南部にかけて、73軒が分布する。それ以後、6世紀前葉まで、本遺跡では、人々の居住は、再び途絶えている。6世紀中葉から三たび居住が始まり、11世紀後半まで、ほとんど間断なく人々の生活が営まれるが、この間、この石田川期の竪穴式住居跡の分布域には、北側の縁辺部でわずか混在する他、6世紀中葉以降の竪穴式住居の存在は認められない。ただ、7世紀の後半、本分類でⅣ期に該当すると見られる古墳が4基検出されているのみである。[6] なお、Ⅳ期に該当する竪穴式住居は、この石田川期の生活が営まれた東側台地では検出されていない。

図－809　I　期

I　期（図—809）—6世紀中葉—

〔西側台地〕　D谷の西方、台地高所に1軒存在する。縄文時代の竪穴式住居跡の検出地であり、それ以後、6世紀前葉まで人々の居住はなかったと考えられる場所である。他に調査区内にこの期と考えられる竪穴式住居は認められない。同じ様に1軒で存在するII期の竪穴式住居との間は、それぞれが1住居のみで、位置的にも離れているので、竪穴式住居の耐久性を考えた場合、時間的にブランクがあった可能性も考えられる。

溝が区画するものと考えるなら、XIII 期以前には、機能しているものはないと考えられる。

II　期（図—810）—6世紀後葉—

〔西側台地〕　C谷の崖に近接し、D谷を西側に臨む高燥の位置に1軒存在する。I期同様、それ以前の遺構の全く見られなかった場所である。1軒のみの存在なので、位置的にも離れているI期の住居及び次期の集落との間には、時間的なブランクがあった可能性も考えられる。

III　期（図—811）—7世紀前半—

〔西側台地〕　竪穴式住居の数は、I・II期に比べ急増する。大きく見れば分布は1箇所である。E谷に近い西側の台地高所に9軒及びそのおよそ200m北方のE谷の東斜面に1軒ある。南側の9軒のうち1軒は大型住居であり、他の8軒は、ほぼ同規模である。なお、大型住居は、他の8軒とやゝ離れた北東のやゝ高い位置に存在する。この分布地は、I期の住居の所在地からは、やゝ離れた西側であり、前期からはD谷を間に挟み、300m近い距離を置いた北西側である。すなわち縄文時代の竪穴式住居跡の検出地であり、それ以後の人々の居住のなかった場所である。前期の竪穴式住居との関係は、距離にかなり隔りがあるので、直接はないと考えられるが不明である。次期とは、ほぼ同じ場所に占地していることから、継続的な関係がうかがわれる。

図－810　II　期

IV　期（図－812）－7世紀後半－

〔西側台地〕　竪穴式住居の数は、前期より1軒多く検出されたが、ほぼ同数と言える。分布も前期同様1箇所で、ほとんど前期と変わらない場所である。E谷に近い西側の台地高所に6軒が集中し、その北側にやゝ間隔を置き4軒、さらにおよそ60m北側に1軒が存在する。細かく見れば、前期の分布が北に拡張された状態の分布と言えよう。南端の6軒とその北の4軒を1つのまとまりと考えれば、その中のいちばん北側の高所の1軒が大型住居であり、これも前期と同じ傾向と言える。さらに、1軒だけグループから離れて存在することも前期と共通する。以上、場所、分布状態等から、前期とは継続的で密接な関係がうかがわれる。また、社会的な情勢においても似かよったものと考えられる。

なお、2軒の重複住居の存在から、この期に少くとも一度の建て替えがあり、この期として検出された住居すべて同時に存在することはあり得ないことがうかがわれる。

東側台地には、この期に属すると考えられる古墳が4基検出されている[(7)]。すなわち、東側台地は墓域としてのみ機能していたと考えられる。

V　期（図－813）－8世紀初頭前半～8世紀前葉－

〔西側台地〕　竪穴式住居の数は、前期に比べ1.5倍弱となる。占地箇所は、新たに西側台地の中央から東端まで大きく広がる。分布は大きく見て3箇所である。(1)III・IV期の分布と同じE谷に近い台地高所近くに4軒。(2)台地中央部北寄りに、南北に距離を置いて2軒。(3)C谷を臨む台地東縁の中央部南に5軒、北に3軒で、合わせて8軒の分布。北側3軒のうち、1軒は大型住居であり他の2軒重複住居とはかなり離れている。以後ここでは最終期のXV期まで継続する。なお、この大型住居の西・北側には、掘立柱建物跡が集中して検出されている。

重複住居から見て、この期に少くとも一度の建て替えがあり、この期として検出された住居がすべて同時に存在することはあり得ないことがうかがえる。前期とは、(1)で分布が重なるので、ここでは継続的な関係が考えられるが、(2)・(3)については、西側の集落からの進出かどうかは、現時点では言及できない。

図－811　III　期

〔東側台地〕　A谷に面する東斜面を中心に東側台地の北東部に13軒の竪穴式住居が分布する。石田川の住居跡が検出された地域の北東部に接している。13軒中とびぬけて大型の住居1軒は孤立するように存在し、その北・西側に接して掘立柱建物跡が検出されている。その大型住居の西方、及び北方に間を置いてそれぞれ、4軒及び5軒と見られるグループがあるが、それらは2軒と3軒の小グループとも見られる。さらにそれらのグループから南・西・北に離れて一軒ずつ分布している。

石田川期以来、居住の無かったこの東側台地に進出した人々が、どこから移って来たかは、現時点では言及できないが、東側に谷地を臨み南北に住居が占地する点、西・北側で掘立柱建物跡の検出されている場所に大型住居が存在する点、そこから離れて4～5軒のグループの存在する点の3点の共通点から見て、西側台地の人々と同じ社会情勢の中で、同じ様な機能を持つ集落を形成していたと考えられる。なお、大型住居の北側の5軒グループの1軒から墨書土器が出土している。

本期八世紀初頭前後から八世紀前葉は、それ以前に比べ土器相の大きく変化した時期である。この期に西側台地では、居住区域が広がり、東側台地では新たな居住が見られる。これは、社会情勢、生産形態や方法に大きな変化があった裏付けと言えよう。

VI　期（図814）－8世紀中葉－

〔西側台地〕　竪穴式住居の数は、前期より2軒増え17軒を数える。分布状態での大きな変化は、III期以来続いて居住のあったE谷に近い台地高所を中心とする場所に分布が無くなったことである。分布は大きく分けて次の2箇所である。(1)西側台地中央北寄りに3軒で細かく見れば北側の2軒が近接し、南側の1軒は孤立している。(2)C谷沿いの台地東縁中央部に、長円を描くように11軒分布する。細かく見れば、南に3軒、東西に4軒ずつ分布する。その中の中央部西側の1軒が大型住居である。同東縁北部には南北に離れて2軒分布する。その南の1軒から墨書土器の出土が見られる。(1)(2)共に前期の居住の始まった地区ではあるが、住居数が増えている。また、(2)は、前期同様大型住居を持つが、掘立柱建物跡群とは重ならない。

〔東側台地〕　竪穴式住居の数は前期と全く変わらず13軒である。その分布の状態も大きく見れば前期と似て、A谷を臨む台地東縁に南北に長円を描くように12軒が分布し、台地中央の北部に1軒が所在する。12軒を細かく見れば、中央部は南側に4軒、東西に分かれて2軒ずつ4軒、北部で同じ様に東西に分かれて2軒ずつ4軒の分布である。重複住居が1箇所で見られるので、

図－812　Ⅳ　期

全体の竪穴式住居が同時に存在したことはあり得ない。2軒ずつ近接が目につくが、建て替えを意味するなら、全体として1軒ずつ散在していたと考えられる。ここでは、やや大型の住居が、台地中央部に孤立して1軒見られる。この住居の周辺も掘立柱建物跡集中地区である。前期とは住居数、占地状態にかなり共通点があるので継続的な関係がうかがわれる。

以上の西側、東側の分布状態を見た時、台地上で東側に谷地を臨み、南北に広がって竪穴式住居が存在することから、前期同様、同じ社会情勢の中で、同じ様な機能を持つ集落を形成していたと考えられる。

Ⅶ　期（図815）－8世紀後葉－

〔西側台地〕　竪穴式住居の数は、前期より3軒減少して14軒を数える。分布状態に大きな変化は見られないが、Ⅴ・Ⅵ期に細々と見られた台地中央北寄りの居住が無くなり、一方、Ⅰ期の住居跡の所在地に近いD谷の北側斜面への進出が見られる。その分布は、次の2箇所である。(1)C谷を臨む台地東縁に12軒、南北に連なるように分布する。細かく見れば、北部に4軒、中央部に東に開く広場状の空間を囲むようにして、北に4軒、西に大型1軒、南に3軒が分布する。北部と中央部北のものは4軒のうち北側の1軒が他とやや離れ孤立するように分布している。以上の竪穴式住居群は、いずれも掘立柱建物跡の集中する場所に所在する。(2)D谷の谷頭に向かい北側の斜面に2軒分布する。細かく見れば、高所と低所に1軒ずつ孤立した分布であり、両者とも掘立柱建物跡の集中する場所である。なお、低所にある住居はやや大型であり、墨書土器が出土している。前期との関係は分布の重なる(1)では、継続的な関係をうかがうことができるが、台地中央北寄りの居住がどこに移り(2)がどこからの進出であるかは、現時点では言及できない。なお、(1)に所在するT－3はこの期に、西側台地の南西部に所在するT－1・2は、この期から次期にかけて操業されていたと見られる。

〔東側台地〕　竪穴式住居の数は、前期より4軒減少して9軒を数える。分布状態は前期に比べ、台地中央寄りに広がっている。分布は次の2箇所に見られる。(1)A谷を臨む台地東縁の中央と北に分かれて2軒ずつ4軒の分布。中央部の2軒は、西側と北側を掘立柱建物跡が集中する位置にあり、そのうちの1軒はやや大型住居である。なおこの大型住居からは、銙帯が出土している。また、北側の2軒のうち西側の住居からは墨書土器が出土している。(2)台地中央北寄りに5軒分布。これらも南側・北側に2軒

図－813　V　期

ずつ分かれ、他の１軒はさらに北で東側に離れている。前期に比べ住居数がやや減少したり、台地の中央北寄りに移動したと見られることなどの違いはあるが、２軒ずつ近接していて、基本的には同じ様な立地であることを考慮すれば、前期と継続した居住と言えよう。

以上の西側・東側台地の分布状態を見た時、前期に比べ、両台地とも住居数が減少していることでは共通している。

Ⅷ　期（図816）－９世紀前葉－

〔西側台地〕　竪穴式住居数は、前期に比べ倍増する。また、新しい場所への進出も認められる。分布場所をみると、大きく分けて、次の３箇所がある。(1)Ｃ谷に面する台地東縁で、南北に長く10軒が分布する。それぞれの分布箇所は、いずれも掘立柱建物跡の集中する所に包含される。(2)Ｄ谷の北側斜面に10軒の竪穴式住居が分布する。これは、高所の７軒と低所の３軒に分かれるが、更に前者は、掘立柱建物跡のまとまり具合からみて、東側４軒と西側３軒の小グループに分けることができよう。これら３グループ中には、いずれも１軒ずつ大型住居が認められる。また、掘立柱建物跡と共に、３グループ全体で東側に開く広場状の空間を「コ」の字状に取り囲んでいるようにみえる。なお、高所東側グループの大型住居からは鍬先が出土した。(3)本期から再び、台地内部にも分布が認められる。これは、大きくみると、調査区北西部付近の３軒と、南北溝Ｗ－１・４の西側に南北に長く分布する12軒に分けられる。これらの所は、掘立柱建物跡が全くないか、あっても数軒程度である。

溝が区画の役割を持つとすれば、本期では初めて竪穴式住居群と整合的に結び付く溝の存在が指摘できる。すなわち、南北溝、Ｗ－１・４は台地を東西に大きく区画し、南端は谷頭を囲むかのようにＤ谷に落とす。この溝の東側の上記(1)の箇所は更に、Ｗ－６とＷ－73の東西溝によって、北から南にかけて３地区に区画される。この内、両溝に挟まれる中央の区画は、掘立柱建物跡が集中し、しかも、上記(2)の箇所と同様に、それが東側に開く広場状の空間を「コ」の字状に取り囲んでいることが注目される。しかも両地区の竪穴式住居からは、共に銙帯ないしバックルとみられる鉄製品が出土している。(なお、本期では、Ｗ－73の南側に竪穴式住居がないことから、まだ、この溝の存在していなかった可能性もある)Ｗ－１・４の西側でも、南北溝Ｗ－28は、北西部のグループとそこからやや離れた東側のグループ（上記(3)の内、Ｗ－１・４の西側に沿うグループ。特にその北側）を区画し

図－814　Ⅵ　期

ているように見える。また、北西グループの北にある東西溝W－31は、その北方に別のグループがあることを物語るものかも知れない。以上の上述した溝の両側には、掘立柱建物跡や竪穴式住居跡が近接せず、これらの溝が区画の機能を果していたことをよく示している。

なお、D谷北側のT－1・2は、前期に続き本期でも操業されていた可能性がある。また、上記(2)の箇所の内、最北端のH132号住居では、墨書土器と共に硯(すずり)が出土した。

〔東側台地〕　前期より2軒増えたが、ほぼ同数の11軒の竪穴式住居が認められる。分布地区も前期に近く、(1)A谷に向かう傾斜面、ないしその頂端部に6軒、(2)台地内部の調査区北側に5軒分布する。(1)のA谷に向かう傾斜面の中で、掘立柱建物跡が「L」字状に並ぶ掘立柱建物跡集中地区では、前期まであった竪穴式住居が全く認められない。

以上の東側・西側台地の分布状況をやや細かくみると、竪穴式住居は1軒だけで、あるいは2軒が近接して、全体として散在する例の多いことに気付く。もし、近接する2軒が建て替えを意味するならば、大部分の竪穴式住居は本来的には1軒ずつ単独で存在していたとも考えられる。

Ⅸ　期（図817）－9世紀中葉－

〔西側台地〕　竪穴式住居数は、前期より更に倍増し、約80軒を数える。分布は、前期と同じ3箇所に分かれるものの、各箇所の分布範囲は一層広がり、その上分布密度も大きくなる。(1)C谷に面する台地東縁には、南北に長く36軒が分布する。西側の境は、前期同様にW－1・4で画されている可能性がある。ここは、東西溝W－6とその南方にあるW－73によって、更に3つに区画される。a)W－6の北側で、8軒の竪穴式住居からなる。これはさらに南と北の2小グループから成るようである。南の小グループ内の竪穴式住居（H206）からは、銙帯とみられる鉄製品が出土した。b)北のW－6と南のW－73に狭まれた所で中央部の空間を取り囲むように、23軒が円環状に分布する。ここは、前期はわずか5軒の所である。掘立柱建物跡のまとまり具合からみて、3～4の小グループが集まってこの地区を形成しているものとも考えられる。西側には大きめの竪穴式住居や掘立柱建物跡が、北側にもやや大きめの掘立柱建物跡や廂(ひさし)付きの掘立柱建物跡が存在するが、掘立柱建物については、本期のものかどうか

図－815　Ⅶ　期

不明である。c)W—73の南では5軒認められるが、北の4軒と南端の1軒の2小グループに分かれる。ここには、前期まで分布のなかった所である。W—1の南端が鍵形に折れているのは、そのすぐ南にある竪穴式住居を意識しているようにもみえる。もしそうだとすれば、W—1・4は本期に掘削されたものとも考えうる。あるいは、前期からと考えた他の溝も本期から機能するのだろうか。(2)D谷の北側斜面には、高所に13軒、低所に7軒が分布する。掘立柱建物跡のまとまり具合からみると、西の12軒と東の1軒の2小グループからなり、全体として3小グループが認められる。これらは、東側に開く空間を「コ」の字状に囲んでいる。高所西側の小グループは、前期に比べ2～4倍の竪穴式住居数を示すのに対して、高所東側小グループは逆にへってわずか1軒である。また、前期では、3小グループ各々にあった大型の竪穴式住居も認められない。これらのことは、掘立柱建物に居住替えしたことを意味しているものとも考えられる。大型の竪穴式住居については、同じことが上記(1)a)の南側小グループでも言える。ところで、W—2は、D谷頭を囲い込みながら、この箇所の分布の東を区画しているようにみえる。この溝は、切り合い関係からW—1より新しいことが判明している。あるいは、本期でW—1が廃され、W—2が掘削されたものだろうか。ただし、W—1が廃されたとしても、竪穴式住居や掘立柱建特跡の分布状況からみて、その溝の所で台地が東西に画されていたことはまず間違いないものと考えられる。(3)前期に続き台地内部にも分布が認められる。調査区北西部に2軒、南北溝W—1・4の西側に細長く23軒が分布。後者では、前期に比べ南半を臨むに分布が広がり、D谷を臨む(2)付近までのびている。W—31は前者の北側を、W—28は前者と後者を区画するものとみられる。

図－816　Ⅷ　期

以上の(1)～(3)の箇所のうち、(1)(2)の竪穴式住居は、全て掘立柱建物跡の分布地と重なる所にある。

〔東側台地〕　前期より２軒多い13軒の竪穴式住居が認められる。台地西側の新しい箇所への進出もみられる。竪穴式住居は、３箇所に分布する。(1)A谷に向かう傾斜地に４軒。前期で全く分布のなかった「L」字形配置の掘立柱建物跡群の所にも再び認められる（Ⅴ～Ⅶ期にもあった）。(2)台地内部でW—45・48の東側に７軒分布。ここには、T－４・５も所在する。(3)台地内部でもW—45・48の西側に２軒、本期に新しく進出した箇所である。ところで、南北溝W—45・48・39は走向の同一性からみて一連の溝と考えられるが、このW—45南端とW—48北端が明確に立ち上がって両者が接続しないことから、水を流すことより区画に機能の重点を置いたものと考えられる。また、台地の中央部を南北に縦断して、台地を東西に区画し、谷地（B谷）の谷頭に近い部分に落し込むなど、西側台地のW—１・４に近似するあり方を示す点に注目される。(3)の箇所への竪穴式住居の進出に伴い、この溝が設定されたものと考えられる。また、この溝の区画性を重視するならば、この東側にある(1)と(2)の箇所の親密度はかなり高いものと考えられる。あるいは、この溝の西側グループは、(1)・(2)の箇所とは別の所から進出してきたものかも知れない。

〔中央台地〕　台地の南端に１軒だけ認められる。土師器に伴う住居跡は、後にも先にも本期だけである。

本期から次期にかけて、東側・西側台地ともかなり多量の墨書土器が出土する。この墨書土器の出土傾向には、極めて顕著な特色がある。まず、墨書土器の極めて少ない、あるいは全く出さない地区をみると、西側台地では上記した(1)のｂ）の高所、東側台地では(1)の箇所中央部の計２箇所である。これらの所は、いずれも谷地を望む場所に占地し、他に比べて際立って数多い掘立柱建物跡が集中していたり、更に鋳帯が出土するなど、特色のある所となっている。逆に墨書土器の出土する所は、西側台地では(1)のａ）・ｃ）、(2)の低所、(3)の箇所、東側台地では(1)の箇所の北部、(2)の箇所である。これらは、西側台地(2)の低所を除くと、墨書土器の極めて少ない、あるいは全くない箇所の周囲、あるいは台地内部に立地し、掘立柱建物跡も全く認められないか、あっても比較的少ない箇所といえる。これから考えて、唯一例外の西側台地の(2)の低所は、同高所と緊密な関係を持ちながらも、他の墨書土器出土地とも相通じる立場にあったものと考えられる。

図－817　Ⅸ　期

X　期（図—818）—9世紀後葉—

〔西側台地〕　前期より25軒程度少ない60軒弱の竪穴式住居が分布する。分布箇所はほぼ前期と同じだが、一部の箇所では新たな展開をみせ、新しい溝の出現や前期以前からの溝の消滅も考えられる。(1)C谷を臨む台地東縁には、南北に長く23軒が分布する。前期までここを3小地区に区画していた東西溝のうち、北側のW—6はすでに埋没し、用をなさなくなっていた可能性が高い。その理由として、この溝に近接して2軒の竪穴式住居があり、更にそのうちの1軒は溝の東側延長線上に位置することがあげられる。それにもかかわらず、この付近（実際はW—6よりやや北側）に区画が意識されていたであろうことは、北側の竪穴式住居がここからかなり距離をおいて分布することによっても明らかである。従って、前期同様にこの箇所を3地区に分けて考えることができる。a)北側の3軒。位置関係や掘立柱建物跡群との関係から、前期と同じ2小グループから成るものとみられる。b)中央部の16軒。掘立柱建物跡群との関連でみれば、北側と西側の掘立柱建物跡群内に包括される竪穴式住居が多く、南側のそれに包括されるものは、わずか1軒である。本地区の南側は東西溝W—73によって画されるが、上述のW—6が本期に埋没していたとすれば、それに対応するW—73もすでに埋没していた可能性がある。なお、本小地区西側のH23からは、青銅製銙帯が出土した。c)W—73の南側に、4軒が分布。南側の1軒はかなりの距離を置く。本地区西側の南北溝W—36とW—44は一連のものとみられ、西側D谷との間を明確に区画する。これは、D谷が本地区とは別の集落に属していることを物語るものであろう。この意識は本期以前からのものであり、この段階で溝という形で明示されたものと考えられる。なお、本地区北側のH257からは、鋤先が出土した。(2)D谷を臨む北側に13軒が分布する。前期同様3小グループに分かれる。高所東側、同西側小グループは各々5軒、低所小グループは3軒である。このうち、高所東西両グループは、東側に開く広場状空間内に1軒ずつ進出させ、広場としての機能を失わしめているようにみえる。(3)台地内部には28軒が分布する。これは更に、a)調査区北西部の2軒、その東方の竪穴式住居群はb)北部の4軒とc)南部の22軒の2小グループに、計3小グループに分けられる。このうち、b)・c)は前期までは南北に長く連続して分布していたが、本期では明確に分かれる。特にc)小グループの発展が顕著である。また、東西溝W—5は、本期で竪穴式住居の分布と整合性をみせる。すなわち、a)北西部小グループとc)南部小グループの両分布地区を区画

図－818　X　期

し、更に溝の東側延長線がｂ)北部小グループとｃ)南部小グループの境付近にくることが注目される。しかし、この溝がｂ)・ｃ)両小グループ間に検出されなかったことは、両者が溝で画す必要がない程近しい関係にあることを意味しているのかも知れない。

本期では、新たに東西溝W－５、南北溝W－36・44が出現すると考えられるが、一方ではW－６がすでに埋没して用をなさなくなり、W－75もその可能性が考えられた。また、台地を東西に分ける南北溝W－１・４も前期頃には埋没していた可能性がある。このようにみてくると、Ⅷ期ないしⅨ期頃の溝は、本期ではすでにその機能を果たしていない状態になっていることが想像される。とすれば、同じ頃に出現したと考えられる東西溝W－31や南北溝W－28も、機能していなかったものと考えられる。また、W－１・４より新しい時期と考えられるW－２は、本期には存在していたのであろうか。しかし、これら溝とは別個に、何等かの区画、あるいはその意識があったであろうことは、竪穴式住居の分布状態からして当然想定される所である。

〔東側台地〕　前期より２軒多い15軒の竪穴式住居が分布する。基本的に前期の分布箇所を踏襲するが、新たな分布箇所も認められる。台地を東西に分ける南北溝W－45・48・39（一連のものと考えられる）を基準にすると、その東側では、(1)Ａ谷に面する４軒と(2)台地内部８軒の２箇所がある。前者は、北部の３軒とその南方（「Ｌ」字形配列の掘立柱建物跡群内）の１軒からなる。同溝西側では(3)Ｂ谷の西側に３軒、(4)台地内部北側に１軒が分布する。

ところで、上記(1)・(2)は、同(3)・(4)に対応し、その意味する所は、南北溝W－45・48・39の両側がそれぞれ谷地を望む所〈谷地十台地内部〉の２地区から成ることを示す。このような関係は西側台地でも認められ、南北溝W－１・４の西側でもＤ谷に面する所（谷地を臨む所）とその北の台地内部から成る。谷地の入り込んだ台地を占地する場合の、一つの基本的形態と考えられる。

本期の竪穴式住居からは、東側・西側台地とも、全期間を通じて最も多量の墨書土器が出土した。その出土地点は、西側台地では(3)の箇所の台地内部のみ、東側台地でもやはり台地内部の(2)の箇所に多いが、Ｂ谷に面する(3)の箇所からも１点出土した。前期の墨書土器出土傾向は、本期ではより一層顕著になっているようである。

図—819　XI　期

XI　期（図—819）—10世紀前半—

〔西側台地〕　竪穴式住居数は、前期の½程度に激減し、21軒になる。基本的に前期の分布箇所を踏襲する。(1)C谷を臨む台地東縁には、a)北部に2軒、b)中央部に4軒、c)南部に2軒の計8軒が分布する。いずれも一定のまとまりを持った掘立柱建物跡群と重なる位置に分布する。c)の南部では、前期まで調査区南端にも分布したが、本期では北側のみ認められる。なお、b)中央部のH147からは硯が出土した。(2)D谷を臨む北側には3軒が分布する。高所の東西小グループと低所小グループに各1軒ずつ認められる。(3)台地内部には10軒分布する。a)北西部に1軒、b)a)の東方では北部に2軒、c)南部に7軒。

〔東側台地〕　全期間を通じて最も多い18軒が分布する。前期より3軒増加した。南北溝W—45・48・39の西側では、竪穴式住居がみられなくなる。分布の中心は、W—45・48・39東側の台地内部で、南北に長く3小グループに分かれて分布する。なお、B谷西側の掘立柱建物柱穴からはXI類土器が出土するので、前期の竪穴式住居が本期には掘立柱建物に転換した可能性がある。

本期で特徴的なことはまず第一に竪穴式住居数の減少に伴い、グループとしての竪穴式住居群の分布範囲が狭まり、その分布箇所が視覚的にとらえやすくなっている。各竪穴式住居群の間には、何らかの形で境があったであろうが、本期では、東側台地の上記溝さえその役割を果たしていたかどうかは疑わしい。本期掘削と考えられる溝はなく、また、前期以前のものは、浚渫（しゅんせつ）作業が行われない限り（実際、その痕跡は確認できない）、すでに埋没しているものと思われる。次に、本期では、全体に竪穴式住居が小型化する。特に西側台地の(2)の箇所（D谷を臨む北側斜面）の3軒や東側台地東半の台地内部で中央部に分布する2軒に顕著である。これらはいずれも掘立柱建物跡の群集する点が共通点する。上記2箇所のこの様な特色は次期以後にも認められる。なお、西側台地(1)b）（C谷を臨む台地東縁の中央部）でも、部分的に同じ特色がみられる。三番目に、本期以降(1)b)地区などの典型的な掘立柱建物跡群集中地区の竪穴式住居にも、墨書土器が出土するようになることがあげられる。これは、今まで掘立柱建物跡集中地区の周辺部にあって墨書土器を出土していた竪穴式住居が著しく減少したために、それが担っていた役割を掘立柱建物跡集中地区でも引き受けざるを得なくなったことを意味するのではなかろうか。なお、東側台地の墨書土器は本期を最後とする。4番目に、西側台地内部（特にその南部）の竪穴式住居の減少傾向からみれば、この時期には確実に集落規模の縮小

図－820　XII　期

が始まったものと考えられる。なぜならば、そこでは掘立柱建物が全く認められないので、他の所のように竪穴式住居から掘立柱建物への転換が想定できないからである。他の箇所でも程度に差はあっても、全体に縮小傾向にあるのではなかろうか。

XII　期（図—820）—10世紀後半（更にその前半）—

前期に続き、西側・東側台地とも竪穴式住居数は激減し、分布のない地区が出現する。また、本期で機能していると考えられる溝はない。

〔西側台地〕　全部で9軒が分布する。(1)C谷を臨む台地東縁では、中央部3軒に限定される。距離を置いて北の2軒と南の1軒に分れる。(2)D谷を臨む所に2軒。このうち東側1軒は、前期以前から続いている高所西側小グループ内に位置するが、西側のものは東西を谷地に狭まれて巾の狭い舌状台地の中央部付近に位置する。(3)台地内部は、a)北西部に1軒、b)南北溝W－1の北端付近に3軒が分布する。後存では、その東側住居がW—1に近接し、この溝が埋没して用をなさないことを示している。前期までみられたb)の南側小グループは、本期以降認められなくなる。

〔東側台地〕　台地内部の北部と中央部に各1軒が分布するだけである。前期に比べ、9分の1の住居数となる。

本期の特色をみてみよう。先ず第1に竪穴式住居数をみると、西側台地はIX期を最高に以後徐々に減って本期に至るのに対して、東側台地は前期（XI期）が最高で、本期になると突然9分の1に減ってしまう。すなわち、両台地における竪穴式住居の分布の発展と衰退のあり方が全く異なるのである。次に、竪穴式住居の分布箇所の縮小がある3番目に西側台地における竪穴式住居群の分布状況が、(3)a)の北西部の1軒を除くと、V期のあり方と非常によく似ていることがあげられる。竪穴式住居数の減少に伴い、昔の場所に位置するようになったということであるが、同時にその箇所が居住するのに好都合な位置にあることを物語るものであろう。4番目に、前期同様、掘立柱建物跡の集中する西側台地(2)の箇所や東側台地の中央部の竪穴式住居が、他に比べ小規模なことが目を引く。

図－821　XIII　期

XIII　期（図—821）—10世紀後半（更にその後半）—

竪穴式住居は西側台地のみに分布し、東側台地では認められない。

〔西側台地〕　竪穴式住居数は、前期に近い11軒である。分布箇所も前期とほぼ同じだが、本期になって新たに認められなくなった所もある。竪穴式住居の分布は、増々縮小する傾向にあるといえる。(1) C谷を臨む台地東縁では、その中央部に4軒が分布するだけである。東側の3軒と西側の1軒が離れる。(2) D谷を臨む所では4軒が散在する。東側の2軒は、XI期以前に明確な高所の東・西小グループに属すものとみられる。西側2軒は、かつてIII・IV期にみられ、そして再びXII期以降に分布するようになった所である。東西を狭い谷地に挟まれた舌状台地の高い所に当る。(3)台地内部は、中央やや東寄りに、W—1をまたいで3軒が分布する。東側の2軒と西側の1軒が離れる。前期まであった、北西部では分布が認められない。

墨書土器の出土は、本期を以って最後とする。本期では、(1)の箇所の中央部や(2)の箇所の高所グループの竪穴式住居から墨書土器を出土する。両箇所はいずれも掘立柱建物跡の集中地区で、X期以前では両箇所の竪穴式住居から墨書土器の出土することは極めて希であった。XI期以降の傾向とみられる。D谷を臨む(2)の箇所の竪穴式住居の規模は、本期でも他の箇所に比べ小さい傾向にある。

図－822　XIV　期

XIV　期（図—822）—11世紀前半—

〔西側台地〕　竪穴式住居群の分布箇所は更に減少して、わずか2箇所となる。軒数は7軒である。(1)C谷を臨む台地東縁の中央部に3軒が分布する。北側1軒と南側2軒との間に距離をおく。この場所にある3つの掘立柱建物群との関係でみると、いずれも北側のそれに包括されるものとみられる。(2)D谷を臨む所に4軒分布する。東側3軒は、高所（北側）掘立柱建物跡群のうち西側小グループに包括されるもののようにもみえるが、分布のまとまりからみると、東西各2軒ずつになっているようにもみえる。(1)・(2)の箇所の竪穴式住居の規模を比較すると、相変らず(2)の箇所の方が小さい傾向にある。なお、本期以降は、前期まであった台地内部の分布は認められない。

〔東側台地〕　調査区中央部付近のA谷に続く傾斜面の最高所に1軒認められる。東側台地の竪穴式住居は、本期を以って終る。

西側台地の墨書土器は、本期以降出土しなくなる。

図－823　XV　期

XV　期（図－823）―11世紀後半―

竪穴式住居は西側台地にのみみられ、東側台地は前期を最後に認められなくなる。

〔西側台地〕　2箇所に5軒分布する。(1)C谷を臨む台地東縁の中央部南端に1軒分布。(2)D谷を臨む所に4軒分布する。東側の3軒は、高所（北側）掘立柱建物跡群の西側小グループに包括されるとみられるが、分布のまとまりからみると、西1軒、中央部1軒、東2軒が散在する。(2)の箇所の竪穴式住居の規模は、XI期以来他の箇所に比べ一貫して小さい傾向にある。

本期を以って、芳賀東部団地遺跡における古代の竪穴式住居、及び掘立柱建物は終るものとみられる。

4 ま と め

(1) 遺跡の範囲

本遺跡は、東西を開析谷に狭まれた3つの台地からなる。このうち中央台地は、その南端がわずかに調査区域に入るが、大部分はその外にあるため、一応今回の考察の対象外とする。

ところで、本章の対象となる古代集落が東側台地と西側台地の両者とも台地南半部の最も幅広い所に立地することは、本章の「遺跡の立地」でもすでに略述したところである。これは、開発当初に集落の立地条件、及びその長期的展開を十分考慮した上で占地された可能性をうかがわせる。両台地は調査区域南端からも新たな開析谷が始まっており、東側台地は2分、西側では3分されて、南側未調査区は非常に幅の狭い台地となる。両台地とも、そこには集落が十分展開するだけの空間がないのである。特に東側台地では、2分されたうちの東側には調査区域内の古墳がさらに続くものとみられ、奈良時代以降の住居がこれを避ける傾向からして[8]、本章で扱う古代集落の存在する可能性は低いものとみられる。北側に目を向けると、東側台地では調査区域同様に幅広い所がやや続くものの、すぐ狭くなる。従って、北の未調査区域にも竪穴式住居跡の分布が続くものと推測されるが、それも間もなく終わるものと考えられる。西側台地では、北側の未調査区域[9]にも幅広い台地がさらに続く。しかし、調査区域のすぐ北側にある市立芳賀中学校付近から北側には遺物の散布がほとんどなく、同中学校北側の試掘調査でも本章で対象とする遺構は認されなかった[10]。調査区域内の遺構の分布状況もこれと符号して、北端付近の分布密度は極めてうすい。西側台地では、調査区域北側付近が遺跡の北限に当るものとみられる。従って、西側台地では、幅広い台地の南半部のみに古代集落が展開したことになる。以上を要するに、東側・西側両台地とも、南北に長い台地のうち、最も幅広い所に集落が立地し、しかも、その南側に位置する傾向にあると言えよう。調査では集落の中心部を含め、そのほぼ全域を発掘したことになる。

ところで、以上のような集落の立地は、当然のことながら、水田場所に想定される開析谷の占有とも関わっていたであろう。例えば、後述するC谷（東側・西側台地の間にある開析谷。以下、開析谷を谷地と呼ぶ）を占有する西側台地東縁部の集落は、水田としてのC谷占有の南限と北限をどこに置いたのであろうか。同台地の北部に他の集団がいないとすれば、台地の南北両端付近まで占有できたのではなかろうか。C谷に面する中央台地南端に、竪穴式住居跡が1軒（IX期）しか認められないのは、この谷地が上記集団の占有下にあったからではないだろう。いずれにせよ、この問題の解決に当たっては、周辺の遺跡の調査と分析に待つところが大きい。

(2) 竪穴式住居と掘立柱建物の立地場所について

竪穴式住居と掘立柱建物の立地場所を検討して、その立地傾向を考えてみたい。検討資料として、前記したVIII～XI期を中心とする竪穴式住居の遺構分布に基いて台地をいくつかの小地区に細分して作成した下表をもとに考えてみる。

これによると、I～IV期までは西側台地のみ竪穴式住居が分布し、D谷とC谷を臨む所に立地する。V期からは東側台地でも分布が始まり、同時に台地内部にも進出するようになる。しかし、分布の中心が谷地を臨む場所にあることは、I～IV期と変らない。西側台地ではXI期以降、東側台地ではXII期以降に竪穴式住居が激減して最終期に至るが、この最終期に立地する場所が、やはり谷地を臨む場所であることが注意を引く。このように見てくると、特に西側台地に顕著だが、まず谷地を臨む所に立地し、竪穴式住居の増加と共に台地内部にも進出した。そして、住居数の減少と共に再び谷地を臨む所に分布が限定されることがわかる。いわば、谷地に臨む地＝水田のつくれる所こそ立地の基本であることを物語る。

ところで、掘立柱建物跡の群集する場所をみると、東側・西側台地とも谷地を臨む所には必ず存在することが注意される。台地内部にもないわけではないが、掘立柱建物跡の数が少なかったり、分布の粗いものが多い。このような傾向は、特に西側台地に典型的にみられ、C谷やD谷を臨む所と台地内部とでは極めて対称的なあり方を示す。後述するように[11]、芳賀東部団地遺跡では掘立柱建物が集落の中の有力集団と結び付く可能性が大きいだけに、その立地場所には注意を払う必要がある。すなわち、掘立柱建物を大量につくれるような有力集団は、まず水田可能な谷地を臨む場所に立地したことが考えられるのである。同時にこのことは、本遺跡地における居住目的が、谷地の水田開発にあったことを示唆しているのであろう。そして、その時期は6世紀中葉であり、竪穴式住居や掘立柱建物の継続時期からみると、11世紀後半にはこの古代集落はその痕跡を消すのである。しかし、その痕跡を消した時点以降に、

表－6 まとめ(1) 時期別竪穴住居数一覧表

（○「A谷」はA谷に臨む箇所の意。他も同じ。
○「一部」設定の概要は、VIII～XI期の分布図、及びその説明参照。）

立地場所			時期	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV
西側台地	東半（東縁）	C谷	北部						3	4	5（大型1）	8	3	2				
			中央部					8（大型1）	11（大型1）	8（大型1）	5	23（大型2）	16	4	3	4	3	1
			南部		1							5	4	2				
	西半	D谷	台地高所	1		9（+1）	11	5							1	2	1	1
			谷地近接							2	10（大型3）	20	13	3	1	2	3	3
		台地内部	北西部								3	2	2	1	1			
			北部					2	3		12	23	4	2	3	3		
			南部										22	7				
東側台地	東半	A谷	北部					6	4	2	3	2	3					
			中央部					5（大型1）	8	2	3	2	1				1	
			南部					1										
		台地内部	北部							3	4	2	4	8	1			
			中央部					1	1	2	1	1	3	3	1			
			南部									4		7				
	西半	B谷											3					
		台地内部										2	1					

実際に集落が存続していなかったかどうかは更に検討を要するが、次の機会に譲りたい。[12]

(3) 住居群の移動と定着について

竪穴式住居に着目して、住居群の移動と一定箇所における継続の様子について、西側台地を中心に、その背景をも含めて若干検討してみたい。

検討資料として、先の表一まとめ(1)を使用すると、次の4点が摘出される。

a) IV期以前の分布は西側台地に限定され、分布する場所も各期1箇所だけである。しかし、V期以降は台地内部にも進出し、東側台地でも竪穴式住居が認められるようになる。

b) V期以降になって、初めてC谷を臨む箇所の中央部に竪穴式住居群の継続が認められる。台地のどの場所でも継続的にみられるようになるのはIX期以降である。

c) 西側台地では、XI期に竪穴式住居数が激減し、更にXII期以降には分布箇所の消滅も認められるようになる。

d) 東側・西側両台地の最終期(XV期)には、台地内部の分布が全く認められず、谷地を臨む所にのみ立地する。

次に、各項目ごとに考えてみたい。まずa)は、竪穴式住居の分布の画期がV期にあることを物語る。また前章でみた通り、V期は土器相の上でも画期であった。V期の始まりは、前章の土器群の検討から8世紀初頭前後とみられ、律令国家の完成期、ないしその直前とみられる時期である。この時期に集落が一挙に拡大することが注目される。すなわち、この拡大の背景には、土器相の変革をも含む古代社会のあり方が密接に反映されているものと考えられる。

b)について。V期から初めて竪穴式住居群が一定箇所に定着し、最終期まで継続する所が出現する。C谷を臨む箇所の中央部である。このようなことはIV期以前には全く認められなかったことである。この定着と継続が谷地=水田の耕作に関わりがあるとすれば、農業技術上に大きな画期があったのではなかろうか。なぜならば、IV期以前に(他の箇所ではV期以降も)、1～2期ごとに居住する場所に移動があるのは、土がやせて地力が落ちてしまうため、一つの谷地を長期間使用できないことを示しているとも考えられるからである。とすれば、一つの谷地をV期以降ずっと水田として使用するためには、そこに何らかの技術上の大きな画期が想定されるのである。そして、やはりこれが律令国家の完成期前後であることが注意を引くのである。また、律令国家の特徴の一つに、戸籍にみられるような、人々の居住地の固定がある。人の移動の激しい社会や時代には、戸籍をつくっても意味はない。戸籍をつくるからには、一箇所に定着することが前提条件となろう。上記のV期の住居群の定着と継続は、まさにこのことと対応している。いわば、農業技術上の画期と居住地の固定は、表裏の関係にあるのである。V期に農業技術上の画期があったとすれば、これも律令国家の施策と何らかの関係を持つのではなかろうか。また、以上のような考えからすれば、この定着がC谷を臨む地の中央部に初めて認められるのは、ここに居住する集団の性格や立場とも関係するところがあろう。

V期以降に台地内部に竪穴式住居の分布がみられることも注目してよい。これは、竪穴式住居群の分布場所がまず谷地を臨む地に出現し(I～IV期)、次に台地内部(V期以降)という順序になっているからである。すなわち、西側台地における台地内部の竪穴式住居群は、谷地を臨む場所の竪穴式住居群があって初めて成り立つかのようである。特にV期は、上記したように谷地に臨む地に定着の始まった時期でもあった。恐らく、台地内部の集団は周囲から独立して存在したものではなく、谷地を臨む地の集団と何らかの関係を有していたものとみられる(これについては、更に「5. 住居群の構造」で触れることになる)。

西側台地を中心にみれば、古代集落の最盛期はIX(9世紀中葉)・X(9世紀後葉)期である。分布地区や竪穴式住居数が最も多く、畑作に生活基盤を置くとみられる台地内部も[13]、この時期に最も大きな発展が認められる。従って、本遺跡における古代集落の発展の契機が律令国家の施策に求められるとすれば、まさにIX・X期こそこれが実を結んだ時期とも言えよう。

C)について。 古代集落における最盛期もわずか2期で終り、XI期(10世紀前半)には衰退が始まる。XII期(10世紀後半)には、竪穴式住居の分布しない箇所も出現する。そして、この時期が土器相の上でやはり画期になることは、前章で述べた通りである。これは、生活の基盤である水田や畑の地力の減退とも関わろうが、b)で検討したようにこのこと自体が国家の施策の変化を示唆し、後者の土器相の画期からは、古代社会の変貌[14]をも感じさせる。あたかもこれに対応するかのように、XI期は律令国家から王朝国家への転換期に当る時期と考えられている。すなわち、a)・b)で検討したように、本遺跡の古代集落が律令国家の施策と関わりを持って発展してきたとすれば、国家のあり方の変化に敏感に反応するであろう。しかし、より実際的には、在地社会の変貌こそが上記のような変化を引起こした原因と考えるべきであろう。しかし、本遺跡のみでは、その具体的内容は明らかにしえない。

d)について。最終期に台地内部の竪穴式住居群が消え、谷地を臨む地にのみ残ることは、谷地を臨む地こそ最も居住に有利な地であることを示している。これは、当然のことながら谷地内の水田に関係するものであろう。また、これが、谷地を臨む地ならどこでもよいわけではなく、最初の頃の分布箇所、ないしそこに近接した箇所に限定されていることも興味深い。そして、その箇所が、東側・西側台地とも掘立柱建物跡の特に集中する場所、ないしその付近と重なるのである。従って、偶然その箇所の集団が残ったのではなく、残るべき集団が残るべくして残ったと言うべきであろう。後述するように(「4. 掘立柱建物について)、これらの集団は、最有力集団とみられるのである。

(4) 掘立柱建物について

本遺跡の特色の一つに、掘立柱建物跡の占める割合の大きいことがあげられるが、掘立柱建物はいつ出現し、いつ頃まで続いたものであろうか。また、どのような性格を持つものであろうか。

最初に掘立柱建物の出現時期、及び存続時期を考えてみたい。しかし、竪穴式住居と異なり、掘立柱建物に所属する遺物の検出はまず不可能である。そこで、柱穴内出土土器から掘立柱建物の上限を、また、時期の判明する竪穴式住居や掘立柱建物との切り合い関係から、上限と下限を推定したのが下表である。これは、掘立柱建物全体の約3分の1が掲載されている。これから

大よその傾向をまとめてみよう。

a）遺物からみた掘立柱建物の上限はV期（8世紀初頭前後～前葉）である。ただし、東側台地にIII期のものもあるが、先に述べたように東側台地への進出はV期と考えられるので、これはたまたま柱穴内に古い型式の土器が雑じったものとみられる。

b）下限の判明するもので一番古い掘立柱建物はIX期（9世紀中葉）である。従って、この時期までには掘立柱建物が出現したと考えてよい。

c）立地箇所ごとの上限をみると、V期（A・D谷を臨む地）、VI期（C谷を臨む地）、XI期（B谷を臨む地）と場所による差がある。これは、掘立柱建物採用時期の違いを示す可能性がある。

d）東側台地のB谷を臨む地では、竪穴式住居は全てX期（9世紀後葉）で（確認できたもの）、掘立柱建物の上限は全てXI期（10世紀前半）である（確認できたもの）。この地区では、X～XI期にかけて全ての竪穴式住居が掘立柱建物に転換した可能性が高い。そして、他の掘立柱建物跡群集地区でも、XI期以降大幅に掘立柱建物に転換した可能性もある。

ところで、d）については、それと符合するような次の事実がある。D谷を臨む地の掘立柱建物跡群集地区では、XI期から竪穴式住居が激減し、その規模も極めて小くなる。これはこの時期に多くの竪穴式住居が掘立柱建物に転換し、それをなし得ない層が極小の竪穴式住居に住んだとも考えられるのである。いわば、集団内の社会的・経済的格差が、上記のような形で現われたものと考えられる。

更に、d）については、次のような考え方までに布衍（ふえん）できるかも知れない。つまり、竪穴式住居群が一定箇所に定着・継続している場合、集落の発展・最盛期と考えられるV～X期にもかかわらず、竪穴式住居が顕著に減少する箇所では、その時期に掘立柱建物への転換が行われているのかも知れないということである。この考え方で行けば、A谷を臨む地の北部や中央部はVII期頃に、C谷を臨む地の中央部はVIII期頃に、同北部とD谷を臨む地はX期頃には掘立柱建物への転換があったとも考えられる。

次に、掘立柱建物はどのような人々が所有したものであるかを考えてみたい。これについては、D谷を臨む地のXI期以降の竪穴式住居のありかたから一部上記したが、あらためてこの問題について考えてみたい。その基礎作業として、掘立柱建物跡群のあり方を類型化してみると、次の4つに分けられる（以下、これを「掘立群類型」と称す）。

類型1　3つ以上の掘立柱建物跡群からなり、それが中央の広場状の空間を「コ」字状に取り囲むもの。……C谷を臨む地の中央部、D谷を臨む地。

類型2　2つの掘立柱建物跡群が南北に並ぶもの。……A谷を臨む地の中央部、C谷を臨む地の北部、（東側台地内部の中央部＋南部）

○数字は掘立番号
○太字は遺構の切り合い関係から、他は柱穴内遺物から
○（　）は下限、他は上限
○「A谷」はA谷を臨む箇所の意。他も同じ

表－6まとめ(2)　掘立柱建物時期の上限・下限一覧表

立地場所＼時期	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	備考
西側台地 東半（東縁） C谷 北部						47 51 56 58 60 73	74 75	79	(50) 55	62						竪穴式住居はVI～XI期
西側台地 東半（東縁） C谷 中央部						1	6 9 11 10 17	--→(185)	7 12 13 107 108	134						竪穴式住居はV～XV期。
西側台地 東半（東縁） C谷 南部						110	→(110)		113	111						竪穴住居はII・IX～XI期。
西側台地 西半 D谷					27 36 40 49	44 71 94 95 102	19	20 46 64 65 70 26 72 45→(45)	21 (32) 35 48 88 42 →(72)	63 (90) 103			5B 23 ---→(24) ---→(92)			竪穴式住居はI・III～V・VII～XV期。
西側台地 西半 台地内部																時期の手がかりなし。竪穴式住居はV～XIII期。
東側台地 東半 A谷 北部			123													竪穴式住居はV～X期。
東側台地 東半 A谷 中央部					138	142 149	140 141									竪穴式住居はV～X期。
東側台地 東半 台地内部 中央部																時期の手がかりなし。竪穴式住居はV～XII期。
東側台地 東半 台地内部 南部																時期の手がかりなし。竪穴式住居は、IX・XI期。
東側台地 西半 B谷											116 118					竪穴式住居は、X期のみ。
東側台地 西半 台地内部																時期の手がかりなし。竪穴式住居はIX・X期。

※「立地場所」は、掘立柱建物跡がある箇所のみ抽出。他の箇所では掘柱建物跡は認められない。

類型３　一つの掘立柱建物跡群からなるもの……Ａ谷を臨む地の北部、Ｂ谷を臨む地、Ｃ谷を臨む地の南部、西側台地（東半）内部の北部、東側台地（西半）内部のもの。

類型４　掘立柱建物跡のないもの……東側台地（東半）内部の北部、西側台地（西半）内部の北西部・南部、（Ｃ谷を臨む箇所南部のうち南端）。

これに、一定以上の地位の者に装着が許されたと考えられる銙帯（留金具である鉸具を含む）をあてはめてみよう。青銅製では、掘立群類型１（Ｃ谷を臨む地中央部・Ｘ期）と掘立群類型２（Ａ谷を臨む地の中央部・Ⅶ期）から出土している。鉄製も、掘立群類型１（Ｄ谷を臨む地・Ⅷ期、Ｃ谷を臨む地中央部・Ⅷ期）と掘立群類形２（Ｃ谷を臨む地北部・Ⅸ期）から出土する。次に他に比べ一際大型の竪穴式住居の所在する地区を入れてみよう（表一まとめ(1)参照）。鬼高期以降の大型住居は、居住人数の多さを示すだけでなく、有力者層の住居が考えられるものである[15]。これが所在するのは、やはり掘立群類型１（Ｃ谷を臨む地・Ⅴ～Ⅶ期・Ⅺ期、Ｄ谷を臨む地・Ⅷ期）と掘立群類型２（Ｃ谷を臨む地北部・Ⅷ期、Ａ谷を臨む地・Ⅴ期）だけである。また、掘立柱建物跡の個々をみても、掘立群類型１・２の中の方に規模の大きいものが混じる。３番目に、稲の貯蔵施設と考えられる総柱建物や、床の存在を物語る束柱を持つ掘立柱建物跡の所在場所をみると、東側・西側台地とも掘立群類型１か掘立群類型２の中にのみ認められる。

以上の３点のみでも、掘立群類型１・２の特殊性が明らかであろう。そして、その特殊性とは有力者層の存在を意味するものである。すなわち、掘立柱建物は社会的・経済的地位の表示としての機能をも合わせ持っており、その群集の規模が大きい程、より有力であることを示すものであろう。掘立類型１・２・３・４の順に、その集団の地位は下がるものと考えられる。

なお、前記したⅪ期以降の極小竪穴式住居が、やはり掘立群類型１（Ｄ谷を臨む地）と掘立群類型２（東側台地東半の台地内部の中央部）のみに認められることは、これら集団の上位層が下位層を隷属させていたことを物語るものかも知れない。それだけ、掘立群類型１・２の集団が有力であると言えるわけである。

(5)　集落の構造

集落の構造の一端については、今までにも若干触れているが、ここではⅧ～Ⅺ期の分布を基にあらためて検討してみることにする。Ⅷ～Ⅺ期の分布を基にするのは、この時期が東側・西側の両台地ともその全面に竪穴式住居や掘立柱建物が展開し、また、それらの群集する場所の区画に溝の使用が考えられるため、集落の構造が視覚的にとらえやすいことによる。しかし、他の時期でも、上記溝付近がやはり境界になっていた形跡が認められる（例えば、その付近には竪穴式住居が分布しない傾向にある）ので、他期には溝以外の区画施設があったことも考えられよう[16]。従って、今後他期の集落構造を考える際の一つの典型として、この時期の集落構造を検討してみたい。

まず、溝によって台地がどのように区画されるか考えてみよう。溝の長さをみると、台地を南北に縦断する長い溝と、東西、あるいは南北に走る短かい溝の２種類がある。東側・西側の両台地は、前者の溝（東側台地Ｗ—45・48・39、西側Ｗ—１・４）によって、東西に大きく区画される。西側台地では、溝の北端付近が同時に竪穴式住居跡や掘立柱建物跡の分布の北限付近とみられ、南端をＤ谷に落とす。東側台地は、溝の北側が竪穴式住居跡の分布と共に未調査区域まで延びており、南端はやはり谷地（Ｂ谷）に落としている。両者は極めて類似するあり方を示すものと言えよう。この両溝により、東側・西側両台地はそれぞれ東半と西半に区画され、計４つの地区に分けられる[17]。そして、各地区では東側の谷地に面して竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が群集する傾向にある。特に掘立柱建物跡は、谷地に臨む地が分布の中心である。西側台地ではその傾向が顕著である。このような点からみて、４つの地区はそれぞれ東側の谷地を水田として占有していたものと考えられる。すなわち、東側台地東半—Ａ谷、同台地西半—Ｂ谷、西側台地東半—Ｃ谷、同台地西半—Ｄ谷の関係が想定される。そして、このような関係を示す１組こそ、水田の占有と経営に関わる一つのまとまりを持った大単位と考えられる。以下、この大単位を集落[18]と呼ぶことにする。本遺跡は４集落から成立していることになる。（なお、西側台地東半の南部小地区は一連の溝とみられる南北溝Ｗ—36・44によって西のＤ谷と区画される。これは、この南部を含む西側台地東半の集落が東のＣ谷を生産の場としている可能性を強く示す。また、Ｄ谷を臨む地の東限とみられる所では、Ｗ—２が「コ」字状にＢ谷頭を囲む。これも、Ｄ谷を臨む地と東にあるＢ谷の関係を示唆する。２つの溝からも上記の谷地＝水田の占有関係が傍証される。）

後者の短かい溝は、西側台地のみ認められる。特に西側台地東半の集落で顕著である。この地区は、２条の東西溝（Ｗ—６とＷ—73）によって、北部・中央部・南部の３小地区に細分される。調査区域内で、北部の北側と南部の南側を区切る溝は検出されなかったが、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡の分布状況から両者の北限・南限を想定すると、３小地区の南北長は何れも170m前後のほぼ同じ規模となる。しかし、東西の広がりをみると、中央部が最も広く、北部はその２分の１、南部は３分の１程度である。これは地形に左右されたものと考えられるが、中央部の集団は最もよい場所を占地していると言える。先の掘立群類型では、中央部—掘立群類型１[19]、北部—掘立群類型２、南部—掘立群類型３（十類型４）となり、立地場所の幅と集団の地位とが対応関係にあることがわかる。短かい溝は、１集落を構成する３集団の立地場所を区画する役割を持つ。いわば、短かい溝は集落を構成する集団の単位（以下、単位集団と呼ぶ）をあぶり出す役割を果しているのである。そして、この単位集団間には、掘立群類型の相異が示すように、その立場や地位に隔差があったものと推測される。

西側台地西半では、西北部に離れて分布する竪穴式住居の一群のみ、北（Ｗ—31）・東（Ｗ—28）・南側（Ｗ—５）の三方に溝を配する。従って、西側台地西半集落では、この一群がやや異質な存在であった可能性がある。これを除く同台地内部の竪穴式住居群は、Ｘ・Ⅺ期に北部と南部に分かれると言えども、Ⅷ・Ⅸ期にはその境を付け難く、本来一体のものと考えられる。そして、それが竪穴式住居跡や掘立柱建物の密集するＤ谷を臨む地との間に溝がないということは、両者が密接な関係にあったことを物語るものであろう。いわば、両者が一体となって１集落を構成していたものと考えられる。このような〈谷地を臨む地＋台

地内部〉という集落構成は、東側台地東半や同台地西半の集落でも共通に認められるものである。そして、このようなタイプの集落では、谷地に臨む地に有力な単位集団の居住する傾向があることは、前述の掘立群類型や銙帯等の出土からみて明らかである。

ところで、西側台地東半の集落では、台地内部を持たない。これは、生活基盤の中心を水田に置くことを物語るものであり、他の3集落との著しい相違点である。他の3集落では、台地内部にも広大な敷地[20]を有しているが、3方を溝で囲まれた西側台地西北部のあり方からみて、そこにはかなりの畑を所有していたものと考えられる[21]。つまり、後者は水田だけでなく畑にもかなりのウェイトを置く集落と考えられる。

集落内部における単位集団間の関係も、両者では異なるものと考えられる。すなわち、前者の集落（西側台地東半）は、生産基盤の優位性から、集落内の各単位集団に独立意識が強く、その現れとして各単位集団の間に溝を設定したものと考えられる。ただし、独立意識が強いとは言え、北部・中央部・南部の3単位集団間の地位や立場に差のあったことは、上述したとおりである。一方、後者のタイプは、集落内の各単位集団の居住地を溝で区切るような独立意識はみせず、全体が一つになっているようにみえる。これには、掘立類型からみて、a)台地内部の単位集団が谷地に臨む有力な単位集団に隷属するとみられる西側台地西半型と、b)台地内部と谷に臨む各単位集団[22]がほぼ同程度の地位にあるが、谷に臨む単位集団の方が谷地（水田）を占有している分だけより有力とみられる東側台地型の2種類がある。

以上をまとめると、本遺跡は西側・東側の両台地を東西に区画する溝によって計4つの集落に分けられ、各集落はそれぞれ東側の谷地を占有する。これは、a)谷地に臨む地のみから成り立つ集落（西側台地東半）と、b)谷地に臨む地と谷地内部の両者から成るもの（西側台地西半、東側台地東半・西半）の2種類がある。a)とb)は、生産基盤の相違から、集落を構成する単位集団間の関係に相違があり、前者の各単位集団間に独立意識がみられる。a)b)とも集落を構成する各単位集団間の社会的、経済的地位には隔差があり、前者では中央部の単位集団が、後者では谷地に臨む単位集団が有力となっている。なお、西側台地西半の北西部竪穴式住居の1群は、他の集落に所属する可能性もある。

(6) 住居群の構造

上述したように、4つの各集落はそれを構成するいくつかの単位集団からなる。例えば、西側台地東半の集落では、北部・中央部・南部の単位集団のように。しかし、更にこの単位集団は竪穴式住居や掘立柱建物からなる住居群がいくつか集まってできたものである。以下、これを「単位住居群[23]」とよび、Ⅷ～Ⅺ期を中心にその構造を考えてみたい。

西側台地東半（C谷を臨む地）の中央部の単位集団を例にとって考えてみよう。ここでは掘立柱建物跡が北・西・南の3方向に群集しており、各時期の竪穴式住居もこれと重なって分布する。従って、西側台地東半集落の中央部は3つの単位住居群からなる(但し、北側の単位住居群は、その広がりからみて2つの単位住居群の可能性もある)。このような傾向は、中央部に続く北部や南部を始めとして、4つの集落全体に認められるところである。そこで、集落全体の様子を示したのが下表である。これによれば、集落を構成する単位集団は、1～3単位住居群からなり、その数が掘立群類型にみられる掘立柱建物跡群の数とほぼ同数になることがわかる。また、各単位住居群の間には、掘立柱建物や大型住居の有無、前者の数や種類の相違等から、隔差があったものと考えられる。

ところで、この単位住居群はどのような構造を持っているのだろうか。竪穴式住居に着目するならば、全期を通して1～4軒程度（1～2軒のものが比較的多い）の近接する竪穴式住居群が、1～5集まって単位住居群を構成しているようにみえる。この1～5というのは単位住居群の広がりや所属時期にもよるが、大部分は1～2からなる（以下、この近接する数軒の竪穴式住居群を「小単位住居群[24]」と呼ぶことにする)。

表—6まとめ(3) 単位集団・単位住居群一覧表

（「A谷」は、A谷を臨む箇所の意。他も同じ）

台地	集落	集落を構成する単位集団		単位住居群の数	掘立群の類型	備考
西側台地	東半（東縁）	C谷	北部	2	類型 2	北側の単位住居群は、掘立が少ない。
			中央部	3	類型 1	北側の単位住居群は、その広がりからみて、2単位の可能性もある。
			南部	2	類型3＋類型4	2単位の間に、上武国道予定地あり。
	西半	D谷		3	類型 1	
		台地内部	北西部	1	類型 4	西側台地西半ではやや異質で、3方を溝で囲む。他集落に属すか。
			北部	1	類型 3	Ⅷ・Ⅺ期は、両者で1単位住居群とみられる。広範な広がり。
			南部	1	類型 4	
東側台地	東半	A谷	北部	(1)	類型 3	Ⅴ期の分布、及び未調査区域を考慮すると、2以上の単位住居群のあったことも考えられる。
			中央部	2	類型 2	
		台地内部	北部	3	類型 4	Ⅸ期H—282を考慮すると、4単位住居群ともみられる。
			中央部	1	類型 3	両者を合わせて、掘立群類型2の単位住居群とも考えられる[26]。
			南部	1	類型 3	
	西半	B谷		1	類型 3	
		台地内部		1	類型 3	掘立は1軒。

小単位住居群は1～4軒程度というが、ある一時点では実際には何軒あったものだろうか。ここで注目したいのは、1軒の小単位住居群がⅠ～ⅩⅤ期の全時期を通してみられ、2軒近接の例もかなり多く認められる点である。後者の例が仮りに建て替えを意味するとすれば、小単位住居群は、ある一時点[25]では1軒の可能性が大きいのではなかろうか。より緻密な土器分類に基く竪穴式住居の分布図が求められるところである。

ここで問題となるのは、掘立柱建物との関係である。これに関連するものとして、先の「(4)掘立柱建物について」で述べたように、D谷を臨む地の集団では、Ⅺ期以降上位層の掘立柱建物と下位層の極小竪穴式住居の共存がある。しかし、個々の掘立柱建物の所属時期を絞りきれない現状では、これが小単位住居群中の共存であるのか、あるいは、単位住居群中の共存なのか明確にし難い。つまり、一つの小単位住居群中に掘立柱建物と竪穴式

住居の両者を含むのか、それとも両者は別個の小単位住居群なのかを明確にし難いのである。しかし、上記したように小単位住居群が1軒の竪穴式住居から成り立つ可能性が大きく、掘立柱建物が竪穴式住居の転換したものとすれば、両者は別の小単位住居群に属することも考えられる。

以上をまとめると、本遺跡の古代集落は、小単位住居群（1軒の竪穴式住居、あるいは掘立柱建物からなるか）→単位住居群（1～5の小単位住居群からなる。他の単位住居群との間にやや距離を置く）→集落を構成する単位集団（1～3の単位住居群からなる。西側台地東半の集落のように、他の単位集団との間に溝を設定するものもある）→集落という順に組織されていたものと考えられる。そして集落は一つの谷地を占有した最も大きな経営単位と考えられるのである。

(7) 鉄製品と紡錘車の所有について

本遺跡では、竪穴式住居を中心に多量の鉄製品や砥石が出土した。また、Ⅶ～Ⅸ期には5基の製鉄遺構も認められた。一方、紡錘車も30点以上の出土があった。以下、鉄製品のうちの刀子・鎌・鋤（すき）・鍬（くわ）と紡錘車の所有型態について、若干の検討を加える。

まず、鉄製品の刀子と鎌を考えてみよう。両者はほぼ同数の約30点ずつが出土した。両者がほぼ同数であることは、両者が同程度に普及した可能性を示唆する。そして、いずれも竪穴式住居の大型・小型や掘立群類型に関わりなく出土する。また、鉄器の所有を物語る砥石の出土は約60点に及び、その出土傾向は刀子や鎌と全く同じと言ってよい。これらの物が本来その竪穴式住居に所属したかどうかは確定できないが、上述の出土傾向とその多さから考えて、全ての竪穴式住居は最低限上記3点は所有していたものと推測される。

鋤と鍬は1点ずつ出土した。鋤は西側台地東半の南部単位集団の北側単位住居群から、鍬は同台地西半のD谷を臨む地の単位集団から出土した。掘立群類型で言えば、前者は類型3、後者は類型1に属す。いわば有力な単位集団と、そ周辺部にあってあまり有力でない単位集団の両者から出土しているものである。このようにみるならば、掘立群類型3以上の単位集団では、鋤や鍬を所有していた可能性が高い。鋤や鍬は鋳直して他の製品として再利用することも可能であったであろうから、刀子や鎌のように多量には出土しないが、少なくとも掘立群類型3以上の単位集団では、その所有は一般的であったものとみられる。それが個々の竪穴式住居にまで及んでいたかどうかは、出土点数が少ないため確かめる術がない。

ところで、以上のような傾向――刀子・鎌は全ての竪穴式住居、鋤・鍬は最底限掘立群類型3以上の単位集団で所有――は、いったいいつ頃から始まったのであろうか。ここで参考にしたいのは、本遺跡における5基の製錬址・鍛冶址の存在である[27]。西側台地東半の集落に1基（T－3）、同西半の集落に2基（T－1・2）、東側台地東半の集落に2基[28]（T－4・5）検出された。これらの所属時期は、Ⅶ期1（T－3）、Ⅶ～Ⅷ期（T－1）、Ⅸ期2（T－4・5）、不明1（T－2）となっている。すなわち、本遺跡の古代集落ではⅦ期（8世紀後葉）には自前の鉄製品が製造されていることになる。一方、竪穴式住居の時期別出土傾向をみると、西側台地はⅦ期から鉄関係遺物が倍増、東側台地もⅦ期から極めて多量に出土するようになる。これらのことから、本遺跡ではⅦ期が鉄製品の製造・使用上の画期とみられる。しかし、東側台地の集落では、この時期の製錬址・鍛冶址は確認できないので、他の集落から入手した可能性が高い。それが西側台地の集落なのか、それとも本遺跡以外の集落なのかは確認できない。同じことは、東側台地のみでなく、西側台地の集落でも、製錬址・鍛冶址の確認できない時期について考える必要があろう。いずれにせよ、本遺跡の古代集落では、Ⅶ期（8世紀後葉）以降には、上述の所有型態がとられていたものと考えられる。

次に、竪穴式住居から出土した紡錘車をみてみよう。竪穴式住居からは全部で32点出土した。出土箇所をみると、掘立類型1～4の全ての箇所から出土し、竪穴式住居の大型・小型に関係がないので、原則的に全ての単位集団、全ての竪穴式住居が紡錘車を所有していたものとみられる。

○紡錘車（鉄製品含む）以外は、特にことわりのない限り鉄製品
○「A谷」はA谷を臨む箇所の意。他も同じ。

表－6 まとめ(4) 鉄器・紡錘車出土点数一覧表

台地	集落	単位集団		刀子	鎌	鋤・鍬	砥石	紡錘車	その他
西側台地	東半（東縁）	C谷	北部	4	1		6	4	銙帯（Ⅸ期）
			中央部	9	10		9	8	鏃（Ⅴ期）、銙帯（Ⅷ期）、青銅製銙帯（Ⅹ期）
			南部	1	1	1(鋤)	1	1	
	西半	D谷		6	3	1(鍬)	15	4	火箸（Ⅲ期）、のみ（Ⅸ期）、鉸具（Ⅷ期）
		台地内部	北西部	1	1		2		
			北部	2	5		12		鉄鉗（Ⅹ期）
			南部	1	4		3	5	
東側台地	東半	A谷	北部				1	3	
			中央部	2				1	青銅製銙帯（Ⅶ期）
			南部						
		台地内部	北部	1	1		8	3	
			中央部	1			1		鏃？（Ⅶ期）
			南部	2	1			2	
	西半	B谷						1	
		台地内部							
合計				30	27	2	58	32	

なお、以上の鉄製品と紡錘車については、竪穴式住居を中心に記述を進めたが、竪穴式住居が掘立柱建物に転換した場合、上述の内容はそのまま居住施設としての掘立柱建物にもあてはまるものである。

(8) 墨書土器について

先にⅨ期の分布図の説明の所で、その特色の若干を述べたところであるが、ここでは時期別・単位集団別に整理して、もう一度墨書土器の有り方を概観してみたい。なお、墨書土器の年代は、小破片のため時期が確定できなかったり、器形全体がわかっても所属時期の判断に迷うものも多いので[29]、原則として墨書土器の出土した竪穴式住居の所属時期によった。

検討資料として、以下の2表（表一まとめ(5)・まとめ(6)）を用いる。

先にみたように、墨書土器はⅤ期に東側台地から始まった。しかし、広く普及するのはⅨ期以降である。Ⅺ期になると出土点数が激減し、西側台地はⅩⅢ期、東側台地はⅫを最後とする。このような推移状況は、「(3)住居群の移動と定着について」で述べた集落の推移とほぼ対応するものであるが、特にⅤ期に墨書土器が出現することは、この時期が律令国家の完成期前後であり、

○「外」「内」は「外面」「内面」を意味する。
○須恵器で坏か埦か不明のものは、坏として処理した。
○竪穴式住居以外の土器も含めた（表一295による）

表一6まとめ(5)　墨書位置時期別分類表

器種		墨書位置＼時期	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	合計
土師器	坏	体部外								2	3	2		1				8
		体部内							1	1	1							3
		底部外						1	1		1	3						6
		底部内					1					1	1		2			5
		内外									2	1			1			4
	埦	体部外								1			1					2
		体部内																0
		底部外																0
		底部内																0
	皿	体部外										1						1
	合計						1	1	2	4	7	8	2	1	3			29
須恵器	坏	体部外							1	1	1	5	3					11
		体部内											1					1
		底部外									2							2
		底部内										1(刻書)		1				2（1は刻書）
	埦	体部外										3	1	同一個体 1				4
		体部内										2						3
		底部外									1		1	同一個体				1
		底部内																1
	皿	体部外										1						1
	合計								1	1	4	12	5	2				25

それとの関係をうかがわせるものである。すなわち、本古代集落もV期には文字を必要とする社会に入ったことを示唆する。

先の分布図に基いて墨書土器の出土場所の時期的変遷をみると(図一813～823)、V期以降Ⅷ期までは谷地（A・C・D谷）に臨む地のみの出土である。IX期から東側・西側台地とも台地内部にも出現し、以後中心はそこに移る。Ⅷ期以降に台地内部に継続して竪穴式住居の分布が認められることからすれば、ここから墨書土器が出現するようになることは納得できるが、なぜそこが出土の中心地になるのであろうか。例えば、最も墨書土器点数の多いX期では、両台地とも台地内部にのみ出土し、谷地を臨む地からは全く出土しないのである。そして、この台地内部は、先にみたように掘立柱建物が少なかったり、全くない下位層の集団なのである。(再びX期の様子をみるならば、西側台地で最も出土点数の多い所は、全く掘立柱建物の認められない台地内部の南部である）IX期以降は下位集団ほど墨書土器の出土点数が多い傾向にあると言えるのである。

墨書土器の器種は、土師器は坏、須恵器は坏・埦が大部分で、土師器埦や同皿、須恵器皿はむしろ例外的である。しかし、何れにせよ、墨書土器が供膳形態をとる土器と不可分な関係にあることは間違いない。時期別にみると(表一まとめ(5))、V期の土師器坏に始まり、X期からは須恵器坏・埦がこれにとってかわる。これは、供膳形態全般が土師器から須恵器に推移する流れに沿ったものである。以後の墨書土器は、須恵器が中心となる。

表一まとめ(5)によって墨書位置をみると、土師器は体部より底部がやや多い。底部は外面と内面が同点数だが、体部は外面が中心である。また、底部の内外両面に墨書するものが、土師器坏にのみ認められる。須恵器の墨書位置は、坏・埦とも体部が圧倒的に多い。しかも、外面が中心とみられる。なお、須恵器埦には、体部外面と底部内面の両所に墨書したものが1点認められ

○須恵器で坏か埦か不明なものは、坏として処理した。
○「外」・「内」は「外面」・「内面」を意味する。
○〈硯〉は、同じ単位集団の墨書土器と同じ時期に出土したことを示す。
○竪穴式住居以外の土器も含めた(表一295による)

表一6まとめ(6)　墨書位置単位集団別分類表

器種及び墨書位置＼単位集団			西側台地								東側台地							
			西半（C谷）				西半				東半						西半	
							台地内部				A谷			台地内部				
			北部	中央部	南部	D谷	北西部	北部	南部	B谷	北部	中央部	南部	北部	中央部	南部	B谷	台地内部
土師器	坏	体部外	1(Ⅷ)		1(IX)	2(Ⅷ・IX) 4(Ⅶ～IX)	1(Ⅻ)	1(X)	2(IX・X)									
		体部内																
		底部外	2(Ⅵ・IX)			3(X) （1は不明）					1(Ⅶ) 1(Ⅴ) 1(IX)				1(X)			
		底部内		2(XIII)					2(X・XI)					1(X)				
		内外			1(IX)	1(XIII)												
	埦	体部外	1(Ⅷ) 〈硯〉											1(XI)				
		体部内																
		底部外																
		底部内																
	皿	体部外							1(X)									
須恵器	坏	体部外		1(XI) 〈硯〉		1(IX)		3(X・XIII)	5(X・XI) 1(XI)					1(Ⅻ)				
		体部内																
		底部外							2(IX) 1(X・刻書)					1(Ⅻ)				
		底部内																
	埦	体部外					1(X)		2(X)					1(Ⅻ)	1(X)	1 同一個体 1 (IX)	1(X)	
		体部内																
		底部外						1(IX)										
		底部内																
	皿	体部外							1(X)									
合計			4	3	2	11	2	5	17(刻書1)		3	0	0	5	2	1	1	0

表－6 まとめ(7)　墨書土器文字一覧表

（○「A谷」はA谷に面する箇所を意味する。他も同じ。
○「・」は別個体の文字のであることを示す。）

台地	集落	単位集団		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV
西側台地	東半	C谷	北部						个(?)		酒	真						
			中央部															
			南部									天・八（同一個体）						
		D谷								导	一・上	十(?)・丹						
		台地内部	北西部										兄(?)		村			
			北部									井	常・山			久雨(?)		
			南部									主・道	神・十(?)・人・白・二(?)・千・井・門・イ	㊦・一・土				
東側台地	東半	A谷	北部					七月		木		七(?)						
			中央部															
			南部															
		台地内部	北部										神木・蒔・宅(?)	上	II			
			中央部															
			南部											真				
	西半	B谷											十					
		台地内部																

※他に「林殿」（時期不明）あり

る。

更に、墨書位置について、表一まとめ(6)をもとに、集落やそれを構成する単位集団の違いによる特色をみてみたい。まず第1に、東側台地の集落には、土師器坏で体部に墨書するものが全くないことに気付く。次に、土師器坏で体部内面に墨書するのは、D谷を臨む地出土のもののみで、他では全く認められない。須恵器を含めても、体部内面に墨書する例は極めてまれな例と言える。3番目に、東側台地出土の須恵器椀の墨書位置は、上記した例外的な体部内面が多い。墨書土器の点数は必ずしも十分とは言えないが、以上のような傾向をみてとることができる。従って、墨書位置については、単に恣意的に選ばれたものではなく、住居群の所在する集落やそれを構成する単位集団の規制があったことも想定されるのである。

なお、参考までに、字形のわかるものを所属する単位集団別、及び時期別に表化してみた(表一まとめ(7))。この中で、複数の集落、および単位集団にまたがるものに、「真」・「上」(㊦、上を含む)・「十」(？も含む)・「井」が、同じ文字が使われるものに「神」と「神木」、「七月」と「七」(？)があるが、必ずしも明確な傾向は摘出できない。

(9)　今後の課題

今まで、6世紀中葉～11世紀後半の古代集落の一端を、本遺跡のあり方のみから瞥見してきた。しかし、基にしたⅠ～XV期の分布図には、井戸跡に想定できる土坑（H大P）を図化してなく、また掘立柱建物の時期を確定できないため、各時期の古代集落の景観を十分復元するに足る資料とはなっていない。そのため、竪穴式住居を中心とする集落論に傾いてしまい、実際とかなりかけ離れたものになってしまったのではないかと恐れている。また、記述の中心が律令的支配体制が完成したとされるV期以降にあるため、それ以前の時代の集落分析が極めて不十分なものとなっている。

本遺跡の古代集落が内包する課題とその広がりは、集落遺跡としてはかつてない程豊かなものであり、それはあたかも汲めどもつきぬ泉に似ている。従って、本古代集落を取り扱うに当っては、いろいろな視点からみられる眼と深い洞察力、また、それに基く各種資料操作の必要性を認識しているが、本稿ではいずれも不十分のままであることを痛感している。また、本古代集落の性格を明らかにし、歴史史料として活用するためには、周辺の同時代遺跡との比較検討や文献の成果との照合も不可欠だが、今回はそれらを一切配慮しなかった。まず、本古代集落からのみ読み取れるものを明らかにすべきものと考えてのことである。従って、集落の性格等については今後の課題とする所が大きい。

以下、本稿のまとめとして、今後の若干の課題を箇条書き風にまとめておく。

a）古代集落のあり方から

① 長い谷地（A・C谷）の側面を臨む集落と、谷頭（B・D谷）を臨む集落とでは、谷地の占有形態にどのような違いがあるのだろうか。

② V期以降の定着後の集落と、それ以前（定着以前）の集落では、谷地の占有や利用方法にどのような違いがあるのだろうか。

③ 本古代集落は不連続的ながらも6世紀中葉に始まるが、この開始期は一般的な集落動向を示すものだろうか。それとも本遺跡独自のものだろうか。

④ IV期以前の集落とV期以降では、集落の形態や構造にどのような違いがあるだろうか。

⑤ 様々な形態と規模を持つ掘立柱建物さ、それぞれどのような使われ方をされていたのだろうか。また、特定の形態を持つ掘立柱建物（例えば、総柱建物や床束を持つものなど）は、一部の単位集団や単位住居群にのみ認められるが、これはどのような意味を持つのだろうか。

⑥ 下位の単位集団を中心に出土し、墨書位置に集落ないし単位集団の規制が考えられる墨書土器は、集落内でどのような役割を荷っていたのだろう。また、それが特定の時期に集中する事実は、何を物語るものであろうか。

⑦ 本古代集落におけるV期以降の定着と拡散・XI期からの衰退・谷地の占有・集落構造・墨書土器・製鉄址鍛冶址・等のあり方は、同時代の他遺跡の古代集落とどのような点で共通し、どのような点で異なるのだろうか。これを明らかにすることによって、本古代集落の性格や古代集落全体の実相がより明確となろう。

⑧ ⑦に含まれることではあるが、周辺に所在する芳賀北部団地遺跡[30]や桧峯遺跡[31]と比較すると、際立って掘立柱建物が多く、同時代としては有力集団の居住する集落に位置づけられる可能性が大きい。とすれば、本古代集落は上記古代集落とどのような関係にあったのだろうか。

⑨ V期以降の集落構造をみると、「小単位住居群→単位住居群→集落を構成する単位集団→集落」の順に組織化されているが、各段階で農業経営の内容にどんな違いがあったのだろうか。また、各段階はどのような人間関係で組織されていたのだろうか（例えば、どの段階まで親族集団なのだろうか）。

b）律令的支配体制との関わりから

① 律令国家の完成期前後とみられるV期から、土器相や集落のあり方が変化し、また、その頃から大型の竪穴式住居や掘立柱建物、墨書土器の出現などが認められるが、これは律令国家と本古代集落のどのような関わりを示すものであろうか。

② V期以降では、掘立柱建物が群集し、銙帯や大型竪穴式住居が検出される地区の有力者集団が中心となって集落が運営されたものと考えられるが、この有力者は文献等ではどのような名称・かたちで現われるものだろうか。

③ 本古代集落の構造と、文献にみえる郷戸・房戸との接点をどこに求めるべきであろうか。

④ V期以降の本古代集落は、その地理的位置からみて藤沢郷[32]に所属する可能性が大きいが、本古代集落と郷との接点をどこに求むべきであろうか。

⑤ 律令国家には班田制を実施したとされるが、水田として利用されたとみられる谷地と班田制の関係如何。

c）王朝国家期の社会との関わりから

① XI期を画期として、土器相や集落のあり方が変化するが、これは在地社会や律令的支配体制のどのような変化を示しているものであろうか。

② 掘立柱建物の出現以来、それを所有できる層とできない層との隔差はずっと存在したが、XI期以降のD谷を臨む地の単位集団等にみられるような、掘立柱建物を所有できない階層が極小の竪穴式住居というほど大きな隔差は以前は認められなかった。つまり、XI期以降両者の隔差は大きく広がったと考えられるのであるが、このような傾向は他の遺跡でも認められるものであろうか。また、それは集団の内容がどのように変化したことを物語るものであろうか。

以上のこと以外にも、IV期以前の集落と東側台地に所在する群集墳との関わりや、XV期以降の集落の存在の有無等、究明すべき課題は多い。いずれにせよ、本遺跡の古代集落が、古墳時代後期（I～IV期）、律令国家期（V～X期）、王朝国家期（XI～XV期）の政治・経済・社会・あるいは文化等が一つに集約されたものとみて、今後更に分析を進めていきたい。

（唐澤・前原）

註

(1) 前橋市教育委員会『芳賀東部団地遺跡群』第1巻 1984

(2) 本章の分布図に掲載した竪穴式住居の時期は、全て前章の表－6まとめ(1)（竪穴式住居時期別一覧表）による。

(3) 本章の「4、まとめ」を参照

(4) 前橋市教育委員会『まえばし文化財地図』 1982

(5) 芳賀中学校の用地拡張に伴う事前調査として、昭和53年12月に前橋市教育委員会が試掘調査を実施したものである。

(6) 松本浩一「芳賀東部団地の古墳」（『芳賀東部団地遺跡群』第1巻 1984）

(7)(8) (6)に同じ。

(9) (4)に同じ。

(10) (5)に同じ。

(11) 本章の「(4)掘立柱建物について」

(12) 以下、この点について概略を記す。B軽石降下後の溝をみると、西側台地ではVIII～X期の溝の延長上やそれと重なる位置に存在したり、竪穴式住居群や掘立柱建物群と整合する形で走るものが認められる（台地内部のW－3や、D谷を臨む地の溝等）。また、東側台地でも、本章で対象とする古代集落に関わる唯一の溝であるW－45・48・39と平行関係にあったり、西側台地同様、竪穴式住居群や掘立柱建物群に整合するとみられる溝がある。これらの点からみれば、古代集落の土地割がB軽石降下後も生きており、発掘調査では検出できなかったが、何らかの居住施設や集落が存続していた可能性もある。

(13) 台地内部では畑作が中心ではないかと考えられる理由は、谷地を臨む集団が別にあり、また、そこから離れた所に立地しているからだけではない。西側台地西半の北西部に所在し、三方を溝で区画された竪穴成住居群の敷地をみると、竪穴式住居の分布範囲に比べ遙かに広大な規模を持つ。このようなあり方は、竪穴式住居群の周囲で大規模な畑作が行われていたことをうかがわせる。台地内部の他の住居群の周囲でも、同じような形で畑作が行われていたのではなかろうか。

(14) 坂本賞三『摂関時代』（『日本の歴史』6 1974）
中野栄夫『中世荘園史研究の歩み』 1982）

(15) 服部敬史「古代集落の形と特徴」（『日本考古学を学ぶ』(3) 1979）

(16) 先に述べたように、V期以降の集落が律令国家の施策と関わりがあるとすれば、本項で述べるVIII～XI期のあり方をIV期以前まで及ぼすのは無理があるかも知れない。律令国家完成期以降とそれ以前の集落のあり方、及びその関係等については、別の機会に考えてみたい。

(17) 西側台地の「東半」は、より正確には「東縁」、又は「台地東辺」と呼ぶ方が相応しいが、一応以下では「東半」としておく。

(18) 以下の「集落」は、谷地水田の占有・経営に関わる大単位の意味で使用する。

(19) なお、谷地に臨む地の中央部を最有力集団が占める例は、東側台地東半のA谷に面する地でも認められる。

(20)(21) (13)参照

(22) 東側台地東半の集落をみると、A谷に臨む地の掘立群類型は〈類型2（中央部）＋類型3（北部）〉に対して、台地内部は〈類型2（中央部＋南部）＋類型4〉とも考えられ、何れも類型2を中心とする点で共通する。同台地西半では、B谷を臨む地と台地内部の両者ともが掘立群類型3であり、前者の方が掘立柱建物跡の多い点が異なる。一方、西側台地西半の集落では、D谷を臨む地が掘立群類型1であるのに対して、台地内部は〈類型3（北部）＋類型4（北西部・南部）〉であり、両者の隔差は、東側台地に比べかなり大きいものと考えられる。

(23) 前節時期別分布図の説明で、「小グループ」と呼んだものに該当する。

(24) 後述するように、ある一時点では1軒の可能性が大きいと考えるが、土器1型式に対応する時期別分布図では2軒以上の近接グループとして認められることが多い

ので、一応「小単位住居群」と呼んでおきたい。

(25) 竪穴式住居は1軒からなる可能性が大きいと考えるが、従来の調査方法では検出できない平地式住居なども竪穴式住居とともに小単位住居群を構成していた可能性もある。

(26) 東側台地東半集落の台地内部の中央部と南部を合わせて一つの単位集団と考えれば、同集落のA谷に向かう傾斜面に所在する中央部の単位集団や、西側台地東半集落の北部単位集団と同じ構造のものとみることができる。(22)参照。

(27) 5基の製鉄遺構のうち、1基は製鉄炉跡（T－4）であるが、他は鍛冶址である。

(28) T－2は遺物がないため所属時期を定めにくいが、そのあり方からしてT－1と一体のものと考えられるので、T－1と同時期（VII～VIII期）のものと考えておきたい（表－6まとめ(1)参照）

(29) ただし、土坑（HP）や掘立柱建物付近出土のものは、土器の特徴から一応の時期を考えた。

(30) 前橋方教育委員会『文化財調査報告書』第5集　1975

(31) 前橋方教育委員会『桧峯遺跡』　1981

(32) 「郡郷の成立」（『前橋市史』第1巻　1971）尾崎喜左雄『群馬の地名』下巻　1976

なお、前橋市七之宮洗橋遺跡跡からは、「芳郷」と書かれた墨書土器が検出され、二之宮町周辺が芳賀郷であった可能性が出てきた（『上毛新聞』昭和62年8月25日）。

表－7　掘立柱建物跡ピット計測値一覧表

遺構番号	ピットNo	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
K1	1	130× 110	66		152.80
	2	122× 108	64	28	152.82
	3	106× 82	不明		不明
	4	194× 114	地断より66		152.98
	5	88× 80	不明		不明
	6	86× 72	58		152.54
	7	79× 68	42		152.76
	8	112× 78	50		152.80
	9	148× 108	44		152.80
	10	205× 102	50		152.82
	11	200× 106	62		152.84
	12	68× 66	不明		不明
	13	50× 48	〃		〃
	14	86× 50	〃		〃
	15	152× 135	〃		〃
	16	70× 64	〃		〃
	17	60× 54	〃		〃
	18	65× 38	〃		〃
K2	1	82× 68	不明		不明
	2	56× 52	〃		〃
	3	74× 40	〃		〃
	4	48× 43	27		161.14
	5	108× 56	25		161.16
	6	62× 54	不明		不明
	7	52× 43	64		160.72
	8	83× 48	不明		不明
	9	134× 80	75		160.52
	10	60× 56	不明		不明
	11	54× 50	〃		〃
	12	88× 58	〃		〃
	13	63× 51	〃		〃
	14	68× 54	〃		〃
	15	65× 44	〃		〃
	16	52× 50	〃		〃
	17	108× 82	〃		〃
	18	90× 66	〃		〃
	19	47× 36	〃		〃
	20	54× 50	46		161.10
K3	1	100× 67	不明		不明
	2	83× 62	〃		〃
	3	92× 68	〃		〃
	4	95× 76	〃		〃
	5	94× 79	〃		〃
	6	96× 75	〃		〃
	7	133× 104	〃		〃
	8	92× 82	〃		〃
	9	144× 110	〃		〃
	10	85× 71	〃		〃
	11	78× 62	〃		〃

遺構番号	ピットNo	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
K5A	1	29× 18	12		148.72
	2	68× 59	36		148.59
	3	68× 57	66		148.29
	4	65× 64	61		148.25
	5	63× 58	50		148.29
	6	58× 53	56		148.13
K5B	1	65× 61	45	32	148.43
	2	58× 44	推定42		148.46
	3	80× 62	43		148.33
	4	84× 54	不明		不明
	5	80× 62	26		148.41
	6	73× 55	49		148.25
	7	82× 56	36		148.42
K5C	1	61× 44	42		148.13
	2	68× 48	38		148.15
	3	74× 54	47		148.06
	4	47× 42	55		147.95
	5	74× 72	28		147.86
	6	60× 46	71		147.51
	7	57× 47	51		147.70
	8	53× 40	55		147.63
	9	41× 34	23		147.97
K5D	1	50× 46	46		147.87
	2	60× 60	50		148.06
	3	62× 60	61		147.98
	4	72× 54	40		147.88
	5	62× 48	70		147.74
	6	52× 41	55		147.95
K6	1	90× 59	80		154.52
	2	92× 60	73		154.34
	3	92× 72	71		154.20
	4	100× 54	61		153.97
K7	1	70× 54	復元50		153.49
	2	51× 44	復元22		153.77
	3	52× 51	52		153.51
	4	47× 41	54		153.56
	5	64× 55	49		153.64
	6	94× 62	69		153.42
	7	94× 84	39		153.62
	8	106× 104	62		153.37
	9	74× 70	54		153.48
	10	100× 62	68		153.31
	11	81× 74	63		153.39
	12	100× 78	51		153.49
K8	1	46× 40	36		153.72
	2	36× 32	25		153.88
	3	42× 40	35		153.85
	4	56× 50	53		153.68
	5	48× 46	57		153.56

遺構番号	ピットNo	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	6	51× 36	60		153.50
	7	58× 48	42		153.63
	8	46× 40	43		153.57
	9	46× 40	27		153.84
	10	43× 40	48		153.63
	11	52× 46	24		153.88
	12	52× 40	30		153.99
K9	1	72× 66	44		154.17
	2	132× 82	71		153.80
	3	100× 70	64		153.86
	4	106× 62	52		153.89
	5	72× 58	62		153.70
	6	124× 80	76		153.56
	7	80× 68	47		153.85
	8	120× 68	60		153.77
	9	106× 78	55		153.84
K10	1	106× 82	63		154.29
	2	160× 140	45		154.47
	3	122× 88	64		154.34
	4	80× 50	73		154.16
	5	70× 52	54		154.27
	6	134× 94	76		153.93
	7	128× 104	69	24	154.02
	8	124× 100	51		154.19
	9	148× 98	81		154.04
	10	156× 76	90		154.00
K11	1	70× 52	56		154.35
	2	156× 66	51		154.42
	3	62× 46	51		154.43
	4	70× 50	65		154.27
	5	74× 43	53		154.48
	6	82× 52	53		154.28
	7	84× 52	46		154.31
	8	98× 62	61		154.20
	9	122× 68	71		154.10
	10	100× 76	57		154.29
K12	1	74× 51	73		153.35
	2	72× 58	40		153.73
	3	70× 66	67		153.46
	4	86× 66	62		153.53
	5	70× 56	60		153.55
	6	90× 60	60		153.45
	7	84× 80	58		153.39
	8	86× 54	48		153.29
	9	76× 60	67		153.22
	10	92× 58	42		153.48
	11	80× 61	49		153.39
	12	66× 64	89		153.09
	13	82× 60	67		153.38

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	14	92× 90	72		153.33
	15	98× 52	94		153.18
	16	60× 50	77		153.27
	17	110× 106	105		152.92
	18	122× 110	96		152.99
K13	1	120× 80	73		153.31
	2	100× 70	64		153.36
	3	110× 78	71		153.27
	4	100× 90	88		153.09
	5	100× 80	75		153.06
	6	140× 82	78		153.03
	7	90× 86	94		152.87
	8	110× 97	82		152.98
	9	78× 76	91		152.93
	10	110× 82	86		153.00
K14A	1	104× 84	33		154.61
	2	119× 80	35		154.67
	3	123× 88	35		154.67
	4	141× 90	50		154.52
	5	110× 106	38		154.47
	6	96× 93	34		154.49
	7	144× 94	37		154.46
	8	120× 78	31		154.55
	9	100× 90	27		154.60
K14B	1	92× 80	80		153.85
	2	68× 60	64		153.98
	3	70× 64	47		154.09
	4	74× 70	96		153.62
	5	70× 58	79		153.77
	6	68× 60	57		154.01
K15	1	75× 67	45		153.59
	2	82× 61	44		153.58
	3	75× 64	46		153.62
	4	83× 58	57		153.43
	5	97× 78	48		153.41
	6	80× 72	推定58		153.27
	7	124× 101	推定51		153.08
	8	90× 88	推定32		153.30
	9	82× 80	37		153.43
	10	76× 67	42		153.39
	11	70× 58	推定46		153.62
	12	95× 70	推定82		153.36
	13	56× 48	推定40		153.45
	14	40× 40	推定70		153.30
K16	1	54× 46	53		153.53
	2	50× 50	43		153.63
	3	88× 62	55		153.55
	4	60× 53	48		153.67
	5	67× 60	46		153.62
	6	60× 50	38		153.63
	7	76× 64	62		153.43
	8	54× 44	67		153.41
	9	推46× 35	不明		不明
K17	1	58× 52	43		153.96
	2	68× 40	41		154.02
	3	66× 62	60		153.83
	4	64× 50	43		153.90
	5	84× 56	45		153.75
	6	90× 54	46		153.86
K18	1	100× 90	60		153.78
	2	64× 58	61		153.98
	3	64× 54	79	40	153.81
	4	85× 78	86	36	153.72
	5	92× 80	67		153.78
	6	75× 52	63		153.79
	7	68× 56	70		153.74
	8	70× 40	50		154.06
	9	108× 74	85		153.65
K19	1	64× 44	32	60	148.91
	2	72× 65	58		148.65
	3	58× 40	35		148.86
	4	70× 52	38		148.82
	5	72× 52	39		148.74
	6	132× 80	48		148.54
	7	80× 64	49	60	148.57
	8	68× 66	50		148.57
	9	143× 86	43	40	148.75
	10	80× 60	42		148.83
	11	58× 46	38		148.84
	12	47× 43	24		148.87
K20	1	56× 50	29		148.64
	2	62× 56	47		148.46
	3	60× 54	38		148.55
	4	66× 62	47		148.37
	5	40× 38	38		148.36
	6	66× 58	37		148.37
	7	74× 54	46		148.27
	8	88× 68	61		148.15
	9	62× 62	48		148.36
	10	66× 64	35	28	148.52
	11	64× 48	40		148.42
	12	48× 30	21		148.55
K21	1	108× 90	60		147.34
	2	90× 84	62		147.35
	3	96× 82	51		147.17
	4	76× 76	67		147.07
	5	90× 88	59	40	147.09
	6	106× 76	78		146.90
	7	100× 70	68	17	146.98
	8	114× 88	58		147.08
	9	100× 80	64	26	147.10
	10	110× 94	82		147.06
	11	54× 52	32		147.43
	12	46× 38	31		147.44
K22	1	80× 76	58		148.88
	2	84× 74	36		149.04
	3	84× 64	38		148.82
	4	84× 66	33		148.85
	5	90× 52	59		148.53
	6	106× 52	53		148.56
	7	118× 82	50		148.56
	8	84× 70	58		148.58
	9	80× 78	59		148.56
	10	84× 56	70		148.70
	11	102× 80	27		149.11
	12	90× 48	35		148.93
	13	84× 66	34		148.87
K23	1	126× 52	35		147.37
	2	80× 62	29	27	147.38
	3	88× 74	43		147.24
	4	72× 64	49		147.11
	5	64× 50	53		147.09
	6	68× 64	39		147.15
	7	42× 40	63	19	146.98
	8	78× 70	43		147.17
	9	62× 54	47		147.20
	10	118× 52	40		147.27
K24	1	70× 54	46		147.19
	2	84× 61	34		147.26
	3	126× 74	65		146.90
	4	116× 86	71	28	146.84
	5	88× 73	70		146.77
	6	83× 58	64		146.85
	7	80× 60	62		146.92
	8	95× 72	推定73		146.84
	9	70× 61	67		146,91
	10	77× 58	78		146.87
K25	1	128× 84	69		147.98
	2	84× 70	51		148.16
	3	68× 44	43		148.06
	4	110× 56	推定87		147.52
	5	100× 64	推定70		147.69
	6	86× 70	62		147.77
	7	104× 100	推定73		147.66
	8	110× 102	65		147.84
	9	100× 86	60		148.03
K26	1	94× 94	54		148.20
	2	75× 75	51		148.11
	3	108× 90	56		148.08
	4	95× 80	54		147.98
	5	108× 76	34		148.09
	6	92× 84	57		147.73
	7	75× 60	60		147.64
	8	90× 56	64		147.92
	9	86× 48	65		147.98
K27	1	48× 48	59		148.28
	2	70× 46	50		148.32
	3	60× 44	46		148.32
	4	78× 68	17		148.60
	5	104× 64	54		148.23
	6	64× 52	51		148.27
	7	68× 48	50		148.12
	8	38× 32	30		148.46
K28	1	60× 46	48		148.58
	2	48× 44	24		148.76
	3	49× 48	43		148.59
	4	44× 38	28		148.56
	5	52× 48	35		148.42
	6	52× 41	24		148.53
	7	64× 52	29		148.47
	8	83× 46	56		148.50
K31	1	70× 66	75	30	148.25
	2	64× 52	63	24	148.33
	3	82× 60	52		148.44
	4	42× 36	68		148.16
	5	48× 42	84		147.91
	6	66× 48	76		158.03
	7	76× 40	75	23	148.07
	8	66× 40	68		148.24
	9	42× 36	39		148.52
K32	1	92× 90	81	30	147.60
	2	92× 73	65	28	147.73
	3	92× 81	40	23	147.88
	4	106× 93	62	24	147.64
	5	104× 97	42	40	147.68
	6	96× 86	82	40	147.42
	7	95× 86	65	20	147.66
	8	92× 76	61		147.80
K33	1	83× 72	50		150.26
	2	110× 72	40		150.31
	3	100× 58	40		150.31
	4	70× 60	64		150.04
	5	100× 70	58		150.00
	6	54× 42	52		150.04
	7	60× 50	55		150.01
	8	76× 50	43		150.24
K34	1	42× 38	推定39		149.47
	2	82× 72	32		149.45

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	3	80× 70	33		149.45
	4	70× 46	42		149.21
	5	64× 60	28		149.37
	6	68× 52	32		149.22
	7	46× 44	42		149.12
	8	48× 45	41		149.24
	9	80× 60	47		149.18
	10	70× 58	35		149.39
K35	1	67× 58	79		149.31
	2	80× 70	60	17	149.50
	3	84× 66	70	23	149.36
	4	68× 60	67	19	149.36
	5	60× 50	80	22	149.20
	6	80× 68	70	27	149.16
	7	85× 70	72	27	148.97
	8	82× 60	72		149.00
	9	75× 63	71	22	148.93
	10	64× 62	56		149.18
	11	100× 79	83	23	149.01
	12	96× 80	96	25	149.01
	13	100× 60	70	23	149.28
	14	63× 46	69	20	149.26
	15	80× 60	76	26	149.15
	16	113× 66	85		148.97
K36	1	42× 38	52		149.19
	2	60× 50	54		149.19
	3	58× 58	53		149.15
	4	60× 58	53		149.01
	5	50× 48	63		148.96
	6	57× 54	46		149.09
	7	52× 38	23		149.19
	8	75× 60	35		149.04
	9	44× 40	64	19	148.86
	10	80× 62	54		149.07
K37	1	70× 70	63	23	148.59
	2	95× 68	75	26	148.43
	3	114× 65	77	28	148.52
	4	82× 70	60	18	148.45
	5	72× 68	48	15	148.38
	6	104× 70	75	15	148.17
	7	110× 100	75		148.15
	8	104× 92	50		148.40
	9	100× 75	53		148.45
	10	120× 79	74		148.41
K38	1	69× 65	51	23	149.48
	2	58× 56	38	21	149.57
	3	106× 62	60	25	149.35
	4	80× 68	37		149.32
	5	100× 64	60		149.13
	6	96× 74	59	20	149.25
	7	72× 54	57	22	149.28
	8	84× 61	56		149.31
	9	128× 63	38		149.51
	10	85× 65	52		149.48
	11	55× 45	21	23	149.76
K39	1	64× 48	38	26	148.72
	2	74× 62	23	20	148.87
	3	67× 48	44		148.72
	4	78× 60	49		148.45
	5	57× 52	推定43		148.45
	6	70× 58	42		148.38
	7	86× 54	32		148.54
	8	94× 60	26		148.57
	9	60× 50	36		148.54
	10	68× 55	42		148.56
K40	1	90× 78	82	24	149.53

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	2	90× 75	54	26	149.80
	3	76× 68	81		149.64
	4	76× 66	69	21	149.48
	5	80× 68	67	22	149.41
	6	80× 80	67	26	149.23
	7	72× 68	52	22	149.34
	8	74× 70	63	28	149.23
	9	75× 57	53	14	149.46
	10	70× 58	100	20	149.16
	11	75× 66	62	30	149.17
	12	61× 55	55		149.23
	13	45× 43	36		149.42
K41	1	114× 70	40		149.76
	2	74× 69	38		149.78
	3	75× 65	35		149.82
	4	110× 76	37	20	149.71
	5	80× 68	29	20	149.61
	6	94× 65	30	22	149.49
	7	87× 76	58	18	149.28
	8	—× 47	45	23	149.41
	9	76× 74	30	22	149.62
	10	47× 65	50	22	149.50
	11	104× 60	20		149.60
	12	52× 50	66		149.12
	13	59× 39	60		149.11
K42	1	63× 44	推定64		149.42
	2	56× 56	57		149.41
	3	50× 50	67		149.31
	4	224× 130	46		149.47
	5	68× 68	78		149.94
	6	62× 60	53	25	149.00
	7	100× 72	46		149.07
	8	120× 83	48	21	149.12
	9	110× 76	53		149.21
	10	73× 53	53		149.23
K43	1	51× 46	41		149.95
	2	86× 51	45		149.95
	3	67× 60	18	14	150.02
	4	48× 41	31		149.78
	5	71× 49	46	22	149.54
	6	50× 37	38		149.52
	7	66× 38	18		149.68
	8	58× 50	18		149.85
	9	60× 43	33		149.84
K44	1	108× 80	82		145.92
	2	142× 90	82		145.91
	3	120× 86	77		145.95
	4	115× 73	70		145.75
	5	105× 92	75		145.70
	6	100× 90	82		145.52
	7	116× 98	57		145.73
	8	105× 93	54		145.76
	9	110× 106	84		145.56
	10	115× 102	64		145.81
	11	94× 80	64		145.93
K45	1	55× 54	57		145.98
	2	68× 57	50		146.01
	3	66× 48	67		145.78
	4	78× 65	67		145.78
	5	64× 53	51		145.83
	6	66× 66	52		145.62
	7	52× 45	25		145.86
	8	52× 50	51		145.62
	9	74× 55	53		145.72
	10	68× 55	63		145.83
K46	1	92× 88	65		145.72

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	2	87× 66	104		145.37
	3	68× 68	86		145.65
	4	56× 47	80		145.43
	5	58× 53	60		145.42
	6	90× 75	72		145.40
	7	49× 40	71		145.54
	8	61× 54	76		154.45
K47	1	103× 62	34		163.65
	2	68× 56	33		163.66
	3	66× 57	32	21	163.69
	4	72× 70	37		163.67
	5	70× 56	47		163.50
	6	75× 65	56		163.44
	7	73× 71	46		163.58
	8	93× 56	48		163.49
K48	1	90× 68	61		145.27
	2	110× 36	64		145.24
	3	80× 70	58		145.29
	4	82× 55	57		145.34
	5	46× 45	38		145.59
	6	62× 42	45		145.50
	7	165× 56	65		145.02
	8	100× 58	39		145.24
	9	73× 73	70		145.02
	10	74× 65	70		145.08
	11	75× 72	55		145.28
	12	90× 63	53		145.34
	13	78× 68	77		145.15
	14	75× 55	77		145.03
	15	55× 50	62		145.14
	16	80× 64	57		145.17
K49	1	50× 40	31		148.69
	2	42× 42	29		148.73
	3	48× 40	33		148.45
	4	110× 70	48		148.36
	5	92× 60	40		148.35
	6	110× 56	43		148.30
	7	56× 50	44		148.29
	8	112× 72	41		148.33
	9	84× 54	58		148.28
	10	113× 92	52		148.47
	11	96× 50	45		148.50
K50	1	67× 62	47	30	160.40
	2	90× 70	58		160.26
	3	90× 80	62		160.23
	4	98× 76	50	18	160.31
	5	56× 50	70		159.97
	6	70× 68	61		160.06
	7	92× 78	50	20	160.23
	8	90× 83	49		160.30
K51	1	52× 46	54		160.71
	2	75× 57	57		160.77
	3	80× 50	51		160.81
	4	50× 46	53		161.12
	5	50× 43	68		160.45
	6	56× 43	33		160.67
	7	53× 46	55		160.50
	8	50× 47	48		160.57
	9	45× 44	45		160.74
	10	48× 43	56		160.73
K52	1	55× 43	40		160.85
	2	50× 36	19		160.91
	3	32× 20	22		160.79
	4	36× 30	49		160.52
	5	48× 44	34		160.60
	6	42× 30	23		160.77

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	7	44× 41	19		160.86
	8	36× 36	28		160.87
	9	42× 32	24		160.86
	10	30× 26	35		160.69
	11	48× 36	21		160.73
	12	46× 34	27		160.64
K53	1	50× 50	36	28	161.08
	2	45× 42	40	20	161.23
	3	57× 45	56		161.03
	4	45× 42	47		161.00
	5	52× 48	67		160.79
	6	56× 46	36		161.10
	7	64× 54	48	20	160.97
	8	50× 44	43	23	161.11
	9	50× 44	44	16	161.18
K54	1	46× 45	46		161.32
	2	55× 48	59	14	161.14
	3	40× 40	34	20	161.31
	4	48× 45	57	15	160.99
	5	55× 48	56	32	160.96
	6	50× 40	59	22	160.91
K55	1	62× 43	59		161.03
	2	50× 44	46		161.13
	3	60× 50	67	17	160.88
	4	52× 50	55	17	160.95
	5	56× 46	64		160.70
	6	46× 44	46		161.07
	7	60× 53	42	17	161.09
	8	42× 40	推定45		161.04
K56	1	58× 44	53	23	161.31
	2	53× 52	42		161.42
	3	66× 63	47	29	161.40
	4	60× 44	43	20	161.45
	5	52× 46	55	20	161.31
	6	63× 56	36	22	161.41
	7	60× 50	50	22	161.24
	8	54× 45	47	20	161.24
	9	70× 56	38	22	161.32
	10	55× 48	55		161.26
K57	1	44× 40	36	20	160.90
	2	40× 38	53	19	160.78
	3	47× 42	43	20	160.91
	4	38× 38	49	22	160.84
	5	48× 38	51	23	160.76
	6	44× 38	46	23	160.71
	7	40× 36	38		160.72
	8	38× 38	23	20	161.01
K58	1	51× 47	73	24	161.08
	2	58× 55	52	24	161.32
	3	50× 46	52	24	161.33
	4	54× 51	59	25	161.19
	5	52× 50	62	23	160.98
	6	53× 52	37	24	161.23
	7	62× 45	39	22	161.17
	8	62× 45	38	24	161.10
	9	54× 50	58	18	160.97
	10	52× 44	32	24	161.34
	11	60× 36	60	26	161.11
K59	1	55× 38	22	16	161.55
	2	33× 22	28		161.50
	3	35× 29	42		161.28
	4	38× 33	28		161.26
	5	36× 28	19		161.35
	6	34× 26	37		161.16
	7	32× 25	21		161.37
K60	1	62× 50	58		161.10
	2	96× 54		14	161.59
	3	48× 36		37	161.41
	4	72× 72			161.39
	5	75× 62	51	36	161.24
	6	56× 48	40	32	161.13
	7	62× 59	47	22	161.09
	8	56× 40	49	19	161.01
	9	52× 42	50		161.06
	10	45× 33	58	29	161.10
	11	33× 27	13	24	161.36
	12	38× 31	29	23	161.20
	13	37× 30	35		161.11
K61	1	77× 60	53		161.22
	2	50× 40	49	25	161.25
	3	47× 45	40		161.35
	4	40× 36	51		161.21
	5	34× 32	45		161.20
	6	46× 46	40	20	161.21
	7	52× 47	35		161.26
	8	—× 30	25		161.21
	9	74× 48	46	20	161.15
	10	46× 43	65	20	161.19
K62	1	66× 59	35	18	161.23
	2	65× 61	30	21	161.46
	3	70× 58	61	23	161.24
	4	86× 70	65		161.16
	5	38× 30	推定57		161.23
	6	65× 47	推定65		161.10
	7	47× 34	24	16	161.28
	8	42× 42	24	17	161.28
	9	67× 58	48	20	161.01
	10	58× 54	58	15	161.07
	11	62× 50	40		161.18
K63	1	68× 60	63		150.45
	2	65× 65	66		150.46
	3	70× 60	76		150.33
	4	62× 58	58		150.42
	5	76× 73	48		150.37
	6	62× 55	71	18	150.08
	7	84× 43	59	21	150.23
	8	67× 53	71		150.24
	9	78× 56	79		150.28
	10	60× 45	38		150.61
K64	1	68× 50	62		145.78
	2	67× 59	75		145.78
	3	80× 60	65		145.69
	4	117× 88	58		145.70
	5	136× 125	83		145.33
	6	75× 75	77		145.39
	7	74× 70	38		145.78
	8	155× 78	70		145.46
	9	70× 55	63		145.53
	10	90× 64	78		145.62
K65	1	76× 65	95		145.56
	2	130× 107	83	12	145.68
	3	70× 70	53		146.01
	4	90× 85	43		145.97
	5	100× 85	44		145.95
	6	125× 105	55		145.66
	7	100× 77	58		145.67
	8	88× 75	64		145.58
	9	130× 98	62		145.74
	10	90× 72	63		145.78
	11	82× 76	24		146.16
	12	82× 66	17		146.22
	13	78× 76	24		145.89
K66	1	54× 48	47		149.68
	2	44× 35	推定48		149.70
	3	66× 46	24		149.80
	4	75× 46	32		149.61
	5	72× 43	50		149.36
	6	106× 42	48		149.25
	7	54× 54	55		149.23
	8	54× 54	42		149.40
	9	40× 38	56		149.35
	10	60× 58	51		149.57
	11	44× 40	45		149.68
	12	54× 35	50		149.70
	13	55× 50	23		149.86
K67	1	66× 56	59		149.55
	2	64× 58	81		149.36
	3	60× 60	68		149.45
	4	75× 65	63	24	149.34
	5	58× 58	68		149.28
	6	86× 62	47		149.34
	7	70× 70	61		149.23
	8	86× 66	51		149.33
	9	70× 68	59		149.30
	10	68× 54	65	24	149.39
K68	1	74× 74	51		149.77
	2	80× 70	41		149.83
	3	60× 55	45		149.85
	4	66× 50	88		149.36
	5	70× 60	37		149.68
	6	84× 58	41		149.51
	7	70× 65	61		149.30
	8	66× 63	24		149.59
	9	60× 56	32		149.77
	10	62× 60	37	24	149.75
K69	1	42× 36	32	12	159.06
	2	56× 33	37	21	158.99
	3	48× 35	40	18	159.05
	4	52× 28	32	16	159.06
	5	68× 42	33	23	159.06
	6	60× 35	24	10	159.12
	7	31× 14	30		159.10
	8	55× 50	43	21	158.92
	9	36× 36	31	18	159.06
K70	1	66× 61	38		145.87
	2	67× 67	49		145.74
変形	3	79× 75	15		146.06
	4	80× 64	46		145.70
	5	67× 66	28		145.87
	6	70× 56	30		145.88
	7	56× 47	42		145.76
	8	45× 40	推定50		145.50
	9	59× 49	47		145.74
K71A	1	54× 48	54		149.46
(I)	2	42× 40	72		149.23
	3	71× 56	54		149.48
	4	63× 53	25		149.58
A′と共通	5	66× 55	64		149.00
〃	6	72× 51	79		148.84
〃	7	58× 50	42		149.20
	8	44× 34	33		149.58
	9	43× 39	12		149.82
	10	71× 63	5		149.71
	11	61× 45	6		149.74
	12	52× 46	12		149.59
K71A′	1′	56× 50	43		149.53
(II)	2′	68× 48	58		149.37
	3′	50× 43	47		149.55

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	4′	52× 38	55		149.24
Aと共通	5′	66× 55	64		149.00
〃	6′	72× 51	79		148.84
〃	7′	58× 50	42		149.20
	8′	53× 50	74		149.02
K71B	1	96× 68	51		149.32
	2	73× 66	34		149.52
	3	68× 64	52		149.42
	4	68× 62	38		149.33
	5	80× 52	56		149.08
	6	85× 54	44		149.26
	7	47× 44	34		149.22
	8	58× 51	45		149.31
K72	1	67× 62	45		145.95
	2	65× 62	34	19	146.06
	3	60× 48	48		146.00
	4	76× 66	54		145.80
	5	60× 60	52		145.70
	6	63× 50	62		145.54
	7	57× 48	68		145.58
	8	86× 70	58		145.68
	9	64× 53	58		145.78
K73	1	70× 46	60	22	161.49
	2	85× 56	88	20	161.21
	3	58× 44	51	23	161.50
	4	57× 37	47		161.42
	5	75× 50	44	23	161.34
	6	124× 55	74	33	161.04
	7	51× 39	35		161.38
	8	49× 41	推定36	22	161.58
K74	1	34× 35	31		162.02
	2	36× 35	23		162.10
	3	38× 33	39		161.95
	4	33× 28	46		161.88
	5	40× 34	50		161.84
	6	36× 32	33		161.92
	7	36× 30	33		161.92
	8	35× 31	31		162.02
K75	1	39× 30	40		161.96
	2	40× 34	39		161.97
	3	43× 38	66		161.66
	4	48× 32	44		161.76
K76	1	47× 47	54	31	162.09
	2	50× 50	52		162.08
	3	70× 62	55	31	162.05
	4	58× 50	53	35	162.14
	5	58× 58	54	38	162.02
	6	50× 50	57		161.90
	7	52× 52	50	23	161.90
	8	54× 43	60	32	161.88
	9	72× 61	54		161.87
	10	80× 58	50	33	162.10
K77	1	62× 60	51	20	163.04
	2	60× 48	23	20	163.22
	3	60× 50	34	20	163.10
	4	92× 50	42	20	163.00
	5	53× 50	60	20	162.78
	6	60× 52	30	20	163.12
	7	70× 65	52	20	162.94
	8	55× 55	54	20	162.88
K78	1	60× 51	21	23	161.91
	2	52× 42	25	32	162.02
	3	54× 50	37	35	161.93
	4	54× 52	40	35	161.87
	5	72× 42	45	19	161.70
	6	35× 34	22	20	161.92
	7	38× 35	19		161.92
	8	75× 52	34	22	161.74
	9	52× 34	16	16	161.96
K79	1	45× 45	12		161.70
	2	44× 30	31		161.68
	3	48× 31	35		161.72
	4	32× 30	41		161.43
	5	40× 34	34		161.36
	6	48× 36	27		161.50
K80	1	114× 92	54		146.34
	2	95× 67	65		146.35
	3	107× 90	41		146.52
	4	110× 68	56		146.25
	5	122× 74	52		146.06
	6	83× 66	66		145.93
	7	100× 50	56		146.00
	8	100× 66	46		146.14
	9	118× 76	80		145.96
K81	1	50× 42	57	35	161.55
	2	40× 32	26	27	162.06
	3	36× 35	13	25	162.02
	4	42× 30	27	35	161.78
K82	1	32× 32	41	22	161.56
	2	40× 35	59	21	161.38
	3	30× 30	48	26	161.49
	4	30× 30	33	22	161.52
	5	29× 23	50	24	161.35
	6	30× 30	50		161.30
	7	42× 32	63	18	161.18
	8	32× 30	33	20	161.52
K83	1	42× 35	46		160.22
	2	55× 46	40		160.34
	3	36× 32	19		160.74
	4	46× 32	18		160.78
	5	46× 40	45		160.37
	6	50× 30	54		160.19
	7	46× 40	65		159.92
	8	50× 45	42	27	160.10
K84	1	44× 38	25		146.81
	2	60× 48	28		146.86
	3	65× 58	50		146.54
	4	48× 44	38		146.64
	5	62× 55	55		156.47
	6	80× 52	43		146.62
K85	1	50× 38	36		146.17
	2	40× 40	30		146.24
	3	50× 50	25		146.33
	4	34× 30	39		146.15
	5	55× 45	28		146.12
	6	35× 32	22		146.15
	7	46× 42	39		145.97
	8	58× 46	42		146.03
K86	1	65× 64	56		145.80
	2	62× 60	63		145.73
	3	73× 54	70	23	145.62
	4	92× 70	51		145.68
	5	58× 58	43		145.66
	6	76× 55	39		145.71
	7	54× 50	58		145.65
K87	1	68× 64	23		151.04
	2	56× 50	34		150.93
	3	56× 46	15		151.00
	4	78× 50	28		150.80
	5	60× 50	23	18	150.57
	6	80× 72	23		150.58
	7	64× 56	23		150.64
	8	58× 56	28		150.88
K88	1	59× 50	50		146.30
	2	50× 32	推定49		146.37
	3	30× 28	推定57		146.45
	4	68× 57	47		146.30
	5	43× 40	57		146.12
	6	68× 65	40		146.22
	7	50× 38	推定24		146.40
	8	72× 57	21		146.58
K89	1	70× 66	32		145.91
	2	58× 53	40		145.81
	3	70× 71	27		145.94
	4	40× 30	24		145.68
	5	71× 38	22		145.78
	6	38× 72	18		145.88
K90	1	65× 53	56		145.13
	2	78× 52	49		145.20
	3	76× 53	58		145.10
	4	56× 54	55		145.05
	5	85× 53	55		145.06
	6	66× 54	52		145.06
	7	58× 55	55		145.05
	8	68× 50	43		145.26
K91	1	76× 48	20		145.24
	2	46× 32	21		145.42
	3	78× 46	36		145.27
	4	36× 30	20		145.41
	5	49× 42	29		145.24
	6	46× 43	37		145.25
	7	64× 50	64		144.79
	8	52× 52	30		145.17
K92	1	48× 32	33		145.28
	2	70× 52	49		145.21
	3	52× 46	推定42		145.28
	4	110× 55	推定49		145.22
	5	56× 50	50		145.10
	6	77× 53	64		144.95
	7	62× 48	53		144.91
	8	77× 53	54		145.03
K93	1	76× 37	42		145.73
	2	55× 36	39	22	145.78
	3	86× 36	17		146.00
	4	68× 42	42		145.74
	5	推65× 37	不明		不明
	6	76× 44	39		145.57
	7	77× 40	39		145.57
	8	50× 35	40		145.62
K94	1	44× 41	22		148.58
	2	52× 50	34		148.52
	3	53× 46	27		148.54
	4	68× 42	24		148.45
	5	48× 32	38		148.21
	6	82× 54	43		148.15
	7	103× 45	23		148.30
K95	1	60× 44	37		148.50
	2	48× 47	33		148.55
	3	53× 42	42		148.53
	4	50× 44	20		148.71
	5	57× 52	32		148.59
	6	42× 33	10		148.65
	7	95× 42	31		148.42
	8	55× 50	31		148.51
K96	1	43× 33	54		148.84
	2	34× 32	推定28		149.30
	3	36× 38	35		149.36
	4	53× 41	40		149.71

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	5	49× 42	34		149.27
	6	40× 31	24		149.28
	7	62× 51	37		149.15
	8	37× 37	27		148.98
	9	34× 33	42		148.77
	10	28× 23	7		149.22
K97	1	49× 48	32		150.78
	2	52× 45	31		150.78
	3	60× 46	39		150.53
	4	57× 36	19		150.61
	5	58× 28	17		150.66
	6	58× 40	32		150.51
	7	55× 46	25		150.72
K98	1	63× 46	44		150.53
	2	53× 46	52		150.52
	3	56× 50	34		150.72
	4	66× 48	48		150.31
	5	82× 56	45		150.36
	6	58× 53	49		150.20
	7	53× 42	48		150.21
	8	60× 44	33		150.34
	9	98× 57	43		150.26
	10	82× 64	40		150.35
	11	48× 47	40		150.47
K99	1	59× 40	22		149.09
	2	71× 54	36		148.99
	3	60× 50	44		148.92
	4	50× 40	30		148.90
	5	32× 32	36		148.63
	6	38× 35	17		148.72
	7	28× 26	24		148.84
	8	36× 34	17		149.01
K100	1	59× 34	38		149.70
	2	45× 40	17		149.91
	3	44× 38	40		149.77
	4	16× 13	39		149.69
	5	62× 37	32		149.93
	6	40× 36	28		149.65
K101	1	50× 40	53		144.33
	2	48× 48	33		144.51
	3	48× 48	56		144.31
	4	56× 48	50		144.47
	5	52× 48	60		144.29
	6	42× 42	45		144.44
	7	62× 42	35		144.71
	8	38× 34	19		144.79
K102	1	56× 47	24		150.94
	2	46× 34	24		150.99
	3	55× 50	34		150.87
	4	54× 38	17		150.92
	5	44× 38	16		150.86
	6	32× 32	15		150.88
	7	48× 38	23		150.81
	8	48× 40	18		150.92
	9	48× 36	23		150.90
K103	1	68× 56	26		150.59
	2	54× 52	31		150.54
	3	74× 60	29		150.51
	4	60× 60	24		150.44
	5	62× 48	48		150.20
	6	50× 32	推定41		150.30
K104	1	50× 42	35		150.65
	2	52× 46	39		150.61
	3	45× 41	42		150.60
	4	—× 43	38		150.42
K98と共通	5	82× 56	45		150.36
	6	44× 35	24		150.45
	7	50× 38	25		150.44
K98と共通	8	60× 44	33		150.34
K98と共通	9	98× 57	22		150.47
K98と共通	10	82× 64	40		150.35
	11	40× 38	20		150.61
K105 A	1	60× 50	35		148.45
	2	70× 40	42		148.36
	3	44× 42	42		148.33
	4	44× 43	28		148.41
	5	68× 60	40		148.26
	6	65× 53	53		148.09
	7	50× 50	57		148.10
	8	45× 44	64		148.13
	9	65× 45	36		148.39
K105 B	1	50× 43	19		148.63
	2	50× 50	52		148.36
	3	50× 45	33		148.45
	4	84× 50	43		148.21
	5	70× 42	41		148.19
	6	58× 52	59		148.03
	7	48× 43	65		148.05
	8	50× 50	50		148.27
K106	1	42× 38	21		151.23
	2	72× 35	31		150.92
	3	37× 34	16		150.94
	4	50× 45	20		150.80
	5	55× 45	23		150.80
	6	55× 36	22		150.83
	7	40× 35	43		150.75
K107	1	34× 34	44		154.38
	2	50× 40	12		154.68
	3	64× 60	31		154.62
	4	54× 50	29		154.56
	5	60× 48	44		154.36
	6	70× 57	36		154.40
	7	80× 64	38		154.50
	8	45× 42	20		154.37
	9	56× 48	18		154.60
	10	70× 52	25		154.64
K108	1	116× 86	44		154.66
	2	122× 101	33		154.77
	3	50× 45	37		154.70
	4	63× 56	28		154.67
	5	105× 90	44		154.48
	6	146× 60	45		154.54
	7	54× 52	54		154.56
K109	1	60× 50	24		155.02
	2	54× 44	21		155.04
	3	50× 26	32		154.90
	4	54× 44	不明		不明
	5	124× 68	不明		不明
	6	36× 30	14		154.84
	7	40× 40	25		154.93
	8	58× 40	36		154.82
K110	1	52× 48	60		148.09
	2	76× 48	40		148.29
	3	84× 74	62		148.08
	4	114× 60	36		148.28
	5	86× 72	34		148.15
	6	48× 44	推定47		148.02
	7	47× 40	推定51		147.98
K111	1	82× 74	47	43	148.08
	2	40× 40	27	15	148.28
	3	50× 38	13	22	148.38
	4	48× 39	32	24	148.25
	5	60× 56	59		147.93
	6	48× 38	47	16	148.09
	7	74× 50	59		147.92
	8	50× 40	40		148.25
K112	1	45× 38	24		149.14
	2	34× 30	19	20	149.16
	3	40× 36	19	24	149.10
	4	95× 55	37		148.88
	5	40× 40	43		148.81
	6	68× 62	37		148.84
	7	46× 42	30		148.90
	8	68× 36	28		149.01
K113	1	60× 60	36		149.12
	2	70× 70	30		149.14
	3	70× 54	33		149.09
	4	64× 48	36		148.97
	5	70× 67	46		148.82
	6	52× 52	38		148.97
	7	62× 56	48		148.86
	8	48× 48	43		148.96
K114	1	70× 56	29		148.98
	2	55× 46	51		148.72
	3	34× 34	21		149.02
	4	43× 36	36		148.84
	5	58× 43	42		148.68
	6	38× 38	31		148.74
	7	48× 38	24		148.73
	8	55× 45	19		148.79
	9	56× 46	24		149.05
	10	50× 46	41		148.82
	11	46× 46	24		148.84
K115	1	54× 46	44		148.92
	2	40× 38	42		148.91
	3	84× 58	35		149.00
	4	46× 38	23		149.09
	5	72× 50	22		148.85
	6	33× 28	43		148.68
	7	42× 36	45		148.57
	8	36× 36	24		148.77
	9	32× 32	29		149.00
K126 (5K−7)	1	72× 62	72		154.02
	2	58× 68	55		154.22
	3	78× 66	76		153.90
	4	62× 52	89		156.73
	5	60× 56	72		153.86
	6	56× 50	72		153.76
	7	92× 86	39		154.22
	8	66× 54	92		153.83
	9	86× 58	94		153.80
	10	66× 52	74		153.99
K127 (5K−8)	1	57× 50	38		155.76
	2	82× 42	39		155.75
	3	56× 36	44		155.70
	4	46× 44	36		155.73
	5	54× 40	34		155.65
	6	36× 32	10		155.95
	7	80× 25	33		155.72
	8	75× 56	50		155.58
	9	40× 38	43		155.72
K128 (5K−9)	1	36× 30	44		155.36
	2	38× 31	46		155.31
	3	40× 38	33		155.40
	4	30× 28	35		155.31
	5	38× 30	40		155.20
	6	48× 42	42		155.23
	7	54× 32	46		155.26

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	8	60× 50	33		155.42
K129	1	50× 46	17		156.03
(SK	2	45× 32	32		155.98
−10)	3	36× 36	24		156.09
	4	42× 40	33		155.95
	5	36× 32	30		155.82
	6	50× 48	42		155.74
	7	52× 47	51		155.59
	8	48× 42	38		155.79
K130	1	32× 28	28		151.90
(5K	2	24× 22	37		151.97
−11)	3	40× 40	28	19	151.96
	4	60× 10	39		151.77
	5	24× 22	34		151.77
	6	42× 36	39		151.67
	7	40× 36	29		151.71
	8	42× 34	25		151.68
	9	36× 36	23		151.78
	10	64× 47	31		151.77
	11	40× 30	45		151.65
K131	1	112× 44	61		155.49
(5K	2	36× 24	23		155.80
−12)	3	36× 36	23		155.77
	4	26× 26	21		155.76
	5	36× 34	25		155.71
	6	48× 42	38		155.59
	7	40× 33	35		155.59
	8	28× 25	17		155.82
	9	31× 27	21		155.75
K132	1	43× 40	40	25	152.50
(5K	2	42× 36	29	27	152.60
−13)	3	38× 36	29		152.60
	4	49× 42	21	25	152.61
	5	62× 35	19	25	152.53
	6	42× 40	36	25	152.35
	7	36× 32	30	20	152.42
	8	37× 32	27		152.56
K133	1	35× 35	25		153.17
(5K	2	26× 24	28		153.18
−14)	3	42× 42	38		153.09
	4	38× 36	21		153.20
	5	48× 46	45		152.91
	6	46× 32	33		153.02
	7	42× 42	46		152.89
	8	60× 40	35		153.05
K134	1	66× 44	26		155.83
(5K	2	50× 38	38		155.80
−15)	3	80× 50	40		155.81
	4	45× 40	41		155.78
	5	78× 43	26		155.88
	6	40× 36	16		155.94
	7	38× 35	12		155.94
	8	64× 44	33		155.91
K157	1	54× 52	84		156.63
(5K	2	43× 38	93		156.45
−38)	3	50× 47	70		156.57
	4	45× 40	66		156.55
	5	45× 36	67		156.46
	6	40× 35	59		156.42
	7	42× 38	66		157.26

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	8	60× 44	68		156.55
	9	44× 36	71		156.57
	10	60× 54	86		156.51
	11	32× 32	50		156.43
	12	50× 40	26		156.70
	13	40× 32	40		156.69
	14	52× 35	47		156.71
	15	48× 34	48		156.75
K173	1	38× 34	31		156.41
(5K	2	23× 20	11		156.55
−54)	3	38× 38	38		156.31
	4	30× 25	28		156.35
	5	54× 41	30		156.29
	6	33× 33	17		156.47
K179	1	40× 30	19		156.02
(5K	2	43× 41	17		156.04
−60)	3	50× 36	23		156.04
	4	34× 30	25		155.89
	5	40× 30	20		155.87
	6	31× 28	49		155.53
	7	42× 36	49		155.53
	8	57× 41	41		155.68
K180	1	48× 38	32		155.64
(5K	2	40× 37	23		155.77
−61)	3	40× 35	27		155.76
	4	70× 37	42		155.67
	5	32× 30	31		155.71
	6	104× 48	39		155.59
	7	38× 34	18		155.75
	8	40× 37	23		155.70
	9	42× 40	41		155.49
	10	65× 58	22		155.73
K181	1	38× 33	25		152.73
(5K	2	36× 34	29		152.72
−62)	3	30× 27	21		152.75
	4	30× 34	31		152.55
	5	34× 30	40		152.45
	6	43× 38	47		152.35
	7	50× 42	25		152.88
	8	55× 42	45		152.51
K185	1	50× 46	74		156.87
(5K	2	50× 40	73		156.93
−66)	3	43× 36	85		156.83
	4	36× 32	90		156.72
	5	45× 30	79		156.72
	6	43× 36	62		156.82
	7	36× 32	73		156.67
K186	1	42× 37	27		152.20
(5K	2	48× 40	29		152.24
−67)	3	58× 46	38		152.16
	4	48× 46	27		152.21
	5	40× 36	30		152.06
	6	40× 38	25		152.09
	7	55× 44	28		152.06
	8	38× 32	17		152.21
	9	30× 20			不明
	10	50× 47			〃
	11	56× 41			〃
	12	55× 35			〃
	13	48× 41			〃

遺構番号	ピットNo.	長径×短径	深さ	柱痕径	底面標高
	14	106× 63	33		152.12
K187	1	84× 58	50		157.34
(5K	2	40× 38	33		157.56
−68)	3	45× 40	29		157.46
	4	58× 54	29		157.41
	5	66× 52	47		157.27
K188	1	32× 34	7		157.93
(5K	2	35× 28	16		157.86
−69)	3	46× 42	13		157.83
	4	40× 36	23		157.70
	5	38× 36	32		157.56
	6	66× 36	31		157.60
	7	96× 46	21		157.67
	8	44× 38	27		157.68
K189	1	60× 50	65		157.43
(5K	2	62× 54	61		157.46
−70)	3	82× 62	92		157.12
	4	55× 43	80		157.17
	5	108× 46	93		156.96
	6	65× 62	63		157.25
	7	83× 46	94		156.98
	8	52× 42	79		157.17
	9	64× 46	62		157.32
K190	1	40× 38	20		157.55
(5K	2	37× 32	8		157.53
−71)	3	36× 36	30		157.27
	4	33× 30	25		157.25
	5	48× 27	45		157.15
	6	50× 42	20		157.49
K191	1	34× 27	24		158.09
(5K	2	38× 26	21		158.07
−72)	3	42× 35	39		157.84
	4	45× 38	18		157.95
	5	51× 50	30		157.89
	6	40× 38	42		157.81
	7	40× 26	15		158.11
K192	1	80× 48	23		156.51
(5K	2	70× 55	25		156.53
−73)	3	54× 50	31		156.50
	4	50× 36	14		156.59
	5	60× 54	31		156.39
	6	45× 45	19		156.47
	7	69× 48	30		156.36
	8	70× 64	22		156.45
K193	1	40× 32	71		156.98
(5K	2	76× 42	71		157.07
−74)	3	53× 50	74		156.98
	4	48× 42	84		156.80
	5	48× 42	82		156.78
K194	1	66× 54	49		157.37
(5K	2	65× 45	42		157.49
−75)	3	88× 68	52		157.43
	4	48× 40	31		157.57
	5	48× 48	46		157.38
	6	38× 34	30		157.43
	7	48× 44	35		157.34
	8	74× 54	41		157.25
	9	72× 50	41		157.32

表－8　H１号住居跡出土遺物観察表（図－３　図版－59）

（　）推定、復元計測値　　単位　cm・g

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	＋4	① 11.7　③ 2.9	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色５ＹＲ⅞④⅔	平底気味。体部直線的に立ち上り、口縁部に至る。底部から体部への変換点は若干�丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。 外面下半に指押え。底部篦削り。	内面放射状及び螺施状篦磨き。
2	坏 土師器	ピット	① 13.0　③ 3.2	①輝石、石英、軽石粒含。②良好 ③橙色５ＹＲ⅞④⅔	平底気味。体部緩く内彎して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。 底部不定方向篦削り。	
3	坏 土師器	床面下	① 11.7　③ 3.3	①輝石、軽石粒を含、密。②良好 ③橙色５ＹＲ⅞④ほぼ完形	丸底。体部緩やかに彎曲し、口縁部はわずかに外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。 体～底部不定方向篦削り。	実測図より若干小型の可能性あり。
4	坏 土師器	カマド	①(13.6)	①輝石、石英含、密。②良好 ③橙色５ＹＲ⅞④¼	体部緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。 体～底部不定方向篦削り。	
5	坏 須恵器	覆土	①(12.2)　②(7.4) ③ 4.1	①軽石粒含、密。②良好　③明オリーブ灰色2.5ＧＹ⅟₁　④½	上げ底。体部下半で弱く張りを有した後直線的に立ち上る。	轆轤整形。底部右回転篦切り。無調整。	器肉均一
6	砥石 石製品	床面	長 12.3　幅 5.2 厚 3.1	手持ち砥。揆形、断面凹状をなす。表面２個所、裏面１個所肩寄りに径0.5～0.7cmの孔穿つが末貫通。５面使用。 片側小口面に研磨痕。手前から奥側にかけ研ぎ減り、器面は滑らか。概して長軸方向に弱い擦痕。流紋岩。			
7	甕 土師器	覆土	①(15.0)	①輝石、軽石、長石含、密。②良好 ③橙色2.5ＹＲ⅝　④体部上半½	胴部上半張らみ、肩部に弱い稜をもつ。口縁部外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	胴上半に最大径か
8	台付甕 土師器	＋10	①(13.6)	①輝石、石英、軽石、長石含密。②良好③橙色５ＹＲ⅝④上半¼	胴部内彎して立ち上り、肩部に稜をもつ。口縁部外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	胴中位に最大径
9	甕 土師器	覆土	①(21.7)	①輝石、長石、軽石含、密。②良好 ③橙色５ＹＲ⅝④上半¼	胴部緩く立ち上り、上半で脹らむ。口縁部外反する。	内面撫で。一部篦撫で。外面横、斜位篦削り。口縁部横位の撫で。	器肉薄い。
10	甕 土師器	カマド	①(26.0)	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密。 ②良好③黄橙色7.5ＹＲ⅝④小破片	胴部大きく脹らみ、肩部で弱く稜をもつ。口縁部緩く外反する。	内面撫で。肩～胴部上半横斜位篦削り。口縁部指押え、横位の撫で。	
11	甕 土師器	床面	胴部最大幅27.2	①輝石、長石、石英、酸化鉄含、密。 ②良好③黄橙色7.5ＹＲ⅝④胴部⅓	胴部内彎して立ち上り、上半で大きく脹らむ。	内面撫で。外面及び底部篦削り。	内面接合痕
12	短頸壺 須恵器	床面	現高12.4 胴部最大幅14.0	①白色軽石粒、長石含、やや雑。 ②良好③灰白色Ｎ⅞④口縁欠	やや丸底気味の小さい底部から体部内彎し、上半部で大きく張る。頸部直立。	内外面横位の撫で。底部手持ち篦削り。	底部自然釉付着。

表－9　H２号住居跡出土遺物観察表（図－５　図版－59）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面下	① 11.8　③ 2.9	①輝石、石英含、やや雑。②良好 ③明赤褐色５ＹＲ⅝④完形	平底気味。体部緩やかに内彎、口縁部外傾して立ち上がる。	内面～口縁部外面横位の撫で。 底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(12.8)　③ 2.9	①輝石、軽石含、密。②やや不良 ③橙色7.5ＹＲ⅝④½	安定した丸底。体部緩やかに内彎、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。 体～底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	床面	① 13.4　③ 3.6	①輝石、石英、軽石粒含、密。②良好 ③橙色7.5ＹＲ⅝④口縁⅓欠	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。 体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	床面	①(16.3)	①輝石、石英含、密。②良好 ③橙色５ＹＲ⅝④¼	体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。 体～底部篦削り。	
5	坏 土師器	カマド内	①(17.0)	①輝石、石英、軽石含、やや粗。 ②良好③橙色5ＹＲ⅝④底部欠	体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。 体～底部篦削り。	外面煤付着
6	坏 須恵器	床面	① 13.9　② 9.3 ③ 3.8	①輝石、長石含、密。②良好 ③灰白色Ｎ⅞④完形	平底中央部凸状。体部外傾して開き、中位で弱くくびれる。体部への変換点丸い。	轆轤整形。底部右回転篦切り、外周部再調整か。	
7	坏 須恵器	覆土	①(14.3)　②(9.8) ③ 3.3	①軽石含、密。　②良好 ③灰色7.5Ｙ¼　④⅓	上げ底。体部直線的立ち上り。体部変換点弱くくびれる。	轆轤整形。底部回転篦切り。外周部二段回転篦削り。	
8	坏 須恵器	覆土	①(12.2)　②(8.5) ③ 3.8	①軽石、長石、石英含、密。②良好 ③灰色10Ｙ⅝④口縁⅕　底部⅔	上げ底。体部直線的立ち上り、体部変換点丸い。	轆轤整形。底部～外周部回転篦削り。	
9	蓋 須恵器	床面	① 14.1　③ 2.5	①黒色鉱物粒含、密。②良好 ③灰色５Ｙ⅝④完形	天井部平坦、体部及び口縁部共に緩く外傾。環状摘。	轆轤整形。天井部回転篦削り。摘貼付	外面釉付着
10	甕 土師器	床面	①(25.7)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色５ＹＲ⅝④¼弱	胴部上半で大きく脹らみ、口縁部緩く外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位篦削り。	
11	甕 土師器	床面	①(23.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色7.5ＹＲ⅝④口縁部¼	口縁部緩く外反し、口唇部丸い。	口縁部内外面横位の撫で。内面篦撫で。 外面肩部横位の篦削り。	
12	壺 須恵器	床面	② 11.8	①軽石含、密。②良好 ③灰色Ｎ⅝④下半½	胴部直線的に外傾する。高台部は上半で弱くくびれ、外傾して開く。	内外面横位の撫で。外面下半篦削り。付高台。	

表－10　H３号住居跡出土遺物観察表（図－７　図版－59）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(11.4)	①輝石、石英、白色軽石粒含、密。 ②良好③橙色５ＹＲ⅝④⅓	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部外反して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(12.6)　③ 3.4	①輝石、石英、白色軽石含、密。 ②良好③橙色7.5ＹＲ⅞④⅓	丸底。体部緩やかに内彎、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	貯蔵穴	① 13.9　③ 4.7	①輝石、石英含、密。②良好 ③橙色５ＹＲ⅝④⅔	丸底。体部深く、内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	覆土	①(14.4)　③ 4.4	①輝石、石英、チャート粒含、密。②良好③にぶい橙色7.5ＹＲ⅞④⅓	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
5	坏 須恵器	覆土	①(12.9)　②(8.4) ③ 2.9	①白色軽石含、密。②良好 ③灰色7.5Ｙ⅝④⅙	平底。体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部一定方向の手持ち篦削り。	
6	蓋 須恵器	覆土	摘径(7.0)	①精良②やや不良③灰白色10ＹＲ⅞④天井部⅓	大型の環状摘	轆轤整形。外周部回転篦削り。摘貼付。	

7	蓋 須恵器	覆　土	①(16.8)	①黒色鉱物粒含、密。②不良 ③灰白色2.5YR⅝④小破片	天井部は外周部で弱くくびれる。内側に形骸化したかえし認む。	轆轤整形。外周部回転篦削り。	
8	甕 土師器	覆　土	①(19.9)　②(4.4)	①輝石、長石、石英含、粗。②やや不良③橙7.5YR⅝④口縁・底部½	不安定な平底。体部は内彎し、口縁部は外反する。	内面撫で。下半に指頭調整痕認む。口縁部内面横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	同一個体と考えられる。器肉厚い。
9	甕 土師器	覆　土		①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色7.5YR⅞④胴下半⅓	不安定な平底。胴部長胴をなして内彎する。	内面指頭による撫で、篦撫で。胴部縦位の篦削り。	外面下半煤付着。

表—11　H 4 号住居跡出土遺物観察表（図— 9　図版—60）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 土師質須恵器	床　面	①13.5　②(7.5) ③　5.6	①輝石、石英含、やや粗。②やや不良③浅黄橙色10YR⅝④高台½欠	「ハ」字状の肥厚した高台貼付。体部緩く内彎、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	器肉厚い。内外面吸炭
2	埦 土師質須恵	カマド	①(13.8)　②　6.6 ③　6.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR⅝④体部½口縁部⅛	「ハ」の字状に開く短い高台。体部直線的に立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	酸化焔焼成
3	羽　釜	カマド	①(21.9)	①輝石、長石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅞④口縁部¼	口縁部内傾し、上半で直立。鍔は肥厚、張り出し弱い。	内外面横位の撫で。鍔貼付。	一部煤付着。
4	羽　釜	カマド	①(19.6)	①石英、長石、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④½	胴部緩く内彎。口縁部は短く内傾する。鍔は肥厚し、概して張り出し弱い。	内外面横位の撫で。鍔貼付。	

表—12　H 5 号住居跡出土遺物観察表（図—11　図版—60）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床　面	①(14.0)　②(6.4) ③　3.6	②石英、チャート粒含、粗。②不良 ③浅黄色2.5Y⅞④⅛	わずかに上げ底。体部緩やかに内彎、口縁部わずかに外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	胎土もろい。
2	坏 須恵器	床　面	①13.5　②　6.0 ③　3.8	①酸化鉄、長石含、密。①やや不良 ③浅黄色2.5Y⅞④¼	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	埦 須恵器	覆　土	①(14.0)　②　7.3 ③　6.2	①酸化鉄、長石含、やや粗。①不良 ③灰白色2.5Y⅞④¼	「ハ」の字状に開く短い高台。体部緩く内彎し、口縁部わずかに外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
4	埦 須恵器	覆　土	①(15.6)　②　8.1 ③　5.3	①精良②良好③灰白色7.5Y⅝ ④⅛	高台部はわずかに外傾。体部緩やかに内彎し口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
5	甕 土師器	周　溝	①(19.2)	①酸化鉄、輝石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④口縁部⅓	口縁部「コ」の字状。肩部の張りは弱い。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	口縁部接合痕認む
6	甕 土師器	床　面	①(18.9)	①輝石、石英、チャート含、密。②良好③橙色5YR⅞④口縁部⅓	口縁部ほぼ「コ」の字状。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面横位の篦削り。	
7	甕 土師器	床　面	①(20.0)	①輝石、石英、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅞④口縁部½	口縁部「コ」の字状を呈し、区画かなり明瞭。肩部に稜をもつ。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面横位の篦削り。	口縁部内外面接合痕認む

表—13　H 6 号住居跡出土遺物観察表（図—13　図版—60）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴	①(11.7)　②(7.8) ③　3.2	①石英、軽石含、密。②良好 ③橙色7.5YR⅝④⅓	平底。体部内彎して立ち上り、中位で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。中位指押え。底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆　土	①12.8	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色7.5YR⅝④¼	体部緩やかに内彎する。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面放射状篦磨き。外面横位の篦削り。	
3	埦(内黒) 土師器	覆　土	①12.6　②　6.0 ③　4.3	①輝石、酸化鉄、軽石含、密。②良好 ③浅黄色2.5Y⅞④口縁一部欠	平底。体部直線的に立ち上るが、下半若干丸い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。内面横位の篦磨き。黒色処理。	外面墨書「主」
4	埦 須恵器	覆　土	①(17.0)	①石英、軽石粒含、粗。②不良 ③灰色5Y⅝④½	大型の埦。体部緩く内彎し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	内外面吸炭
5	甕 土師器	カマド	①(18.3)	①輝石、酸化鉄、石英、長石含、密。 ②良好③橙色2.5YR⅝④上半½	胴部は緩く内彎。上半部で最大径を有す。口縁部「コ」の字状区画さほど明瞭でない。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	
6	甕 須恵器	住居外ピット	①(24.2)	①精良②良好③暗オリーブ灰色5GY⅟₁④口縁部⅛	口縁部は上半で屈曲した後、短く内傾して立ち上がる。	内～外面横位の撫で。	内面に一部接合痕を認む。

表—14　H 7 号住居跡出土遺物観察表（図—15　図版—60）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 須恵器	覆　土	②(7.7)	①石英、軽石含、密。②良好 ③にぶい黄橙色10YR⅝④底部⅕	直立気味の短い高台	轆轤整形。付高台。	
2	埦 須恵器	覆　土	②(8.0)	①軽石、長石粒含、密。②良好③ 灰色N⅝④底部⅕	「ハ」の字状に外傾する短い高台	轆轤整形。付高台、撫で。	
3	台付甕 土師器	覆　土	①(10.8)　②(9.4)	①輝石、石英、軽石含、粗。②良好 ③橙色5YR⅝④口縁⅓台部¼	口縁部「コ」の字状。肩部に稜をもつ。台部は外反して開き、端部丸い。	口縁部内外面横位の撫で。外面篦削り。	外面煤付着
4	甕 須恵器	カマド		①石英、長石含、密。②良好③明青灰色5B⅕④上半部½	胴部内彎し、上半で器最大径を有する。頸部現存で外傾して立ち上がる。	内面当て目、接合痕顕著。外面横位の撫で。	

表—15　H 8 号住居跡出土遺物観察表（図—17　図版—60）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆　土	①(11.6)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色7.5YR⅝④⅙	体部内彎して立ち上り、口唇部外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	

2	坏 須恵器	覆　土	①(12.4)	①軽石、黒色鉱物粒含。②良好 灰白色N⅞/④⅛	体部ほぼ直線的に立ち上がる。	轆轤整形。	
3	坏 須恵器	周溝内	① 12.6　② 7.7 ③ 3.7	①精良、黒色鉱物粒含。②良好 ③灰色N⅝/④口縁わずか欠	若干上げ底。体部直線的に立ち上がる。	轆轤整形。底部回転篦切り	
4	甕 土師器	覆　土	①(18.4)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④口縁部⅕	肩部張りがなく、口縁部緩く外反する。	口縁部横位の撫で。肩部篦削り。	

表－16　H９号住居跡出土遺物観察表（図－19　図版－61）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	覆　土	①(13.0)	①軽石、長石含、密。②良好 ③青灰色10BG⅝④¼	体部内彎して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。	
2	坏 須恵器	覆　土	①(12.8)	①輝石、石英含、やや粗。②良好 ③にぶい黄橙色10YR⅞④⅓	体部緩やかに内彎し、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。	
3	坏 須恵器	覆　土	①(13.3)	①長石、石英、小石含、密。②やや不良③灰白色5Y⅞④⅓	体部緩やかに内彎する。	轆轤整形。	外面墨書「ニ」
4	坏 須恵器	覆　土	②(7.8)	①精良②良好③灰オリーブ色5Y⅝④底部⅓	平底。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
5	甕 土師器	不　明	①(20.7)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁⅔	口縁部明瞭な「コ」の字状をなす。	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
6	甕 土師器	不　明	① 19.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④口縁部	肩部に弱い稜をもつ。口縁部は上半部で外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
7	甕 土師器	不　明	①(20.6)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④口縁部⅓	口縁部「コ」の字状。肩部の張り弱い。	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	内外面接合痕。

表－17　H10号住居跡出土遺物観察表（図－21　図版－61）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏(内黒) 土師器	床　面	①(13.8)　②(6.3) ③ 4.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④¼強	平底。体部は緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。内面わずかに篦磨きの痕跡を認む。黒色処理。	
2	埦 須恵器	床　面	①(15.5)　②(7.6) ③ 5.6	①軽石、長石含、やや粗。②やや不良③にぶい黄橙色10YR⅞④½	若干外傾する短い高台。体部内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
3	甕 土師器	カマド	①(19.3)	①輝石、長石、石英含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝④⅓	胴部内彎して立ち上り、上半で器最大径を有す。口縁部「コ」の字状を呈す。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	外面煤付着。
4	甕 土師器	カマド	①(20.7)	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色 5YR⅝④¼	胴部内彎して立ち上り、上半で器最大径を有す。口縁部は上半で外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	外面煤付着 内面接合痕認む。

表－18　H11号住居跡出土遺物観察表（図－23　図版－61）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆　土	①(12.6)	①輝石、石英、軽石含、やや粗。②良好③橙色5YR⅝④¼	体部内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。底部篦削り。	
2	坏 土師器	床　面	①(12.8) ③ 3.3	①輝石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④½強	平底。体部緩やかに外傾	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向篦削り。	底部外面煤付着
3	坏(内黒) 土師器	カマド内	②(8.0)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③にぶい橙色7.5YR⅞④¼	上げ底気味。体部内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。内面篦磨き。黒色処理。	体部外面墨書「千」
4	坏 須恵器	貯蔵穴	①(13.5)　②(7.4) ③ 3.2	①長石、軽石含、密。②良好③灰色7.5Y⅝④¼	体部直線的に外傾する。	轆轤整形。	
5	坏 須恵器	覆　土	①(12.0)　②(6.0) ③ 3.5	①石英、軽石含、やや粗。②良好 ③灰色5Y⅝④¼	上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部短く外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り末調整。	
6	坏 須恵器	覆　土	①(13.9)　②(5.4) ③ 4.1	①長石、チャート含、密。②やや不良③浅黄色2.5Y⅞④½弱	上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
7	皿 須恵器	床　面	①(13.9)　②(8.2) ③ 2.3	①精良②良好③灰色N⅟ ④⅓	「ハ」の字に外傾するしっかりした高台。体部外傾して開き、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	二次焼成
8	埦 須恵器	覆　土	①(13.6)　②(7.2) ③ 6.4	①石英、長石含、密。②良好 ③灰色10Y⅝④体部⅕高台部⅔	「ハ」字状の高台。体部内彎して立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部切り離し不明瞭。付高台。	
9	甕 土師器	カマド	①(20.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④口縁部½	口縁部「コ」の字状。口唇部丸い。	口縁部強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
10	砥石 石製品	貼床下	長5.5　幅4.6　厚1.6	手持ち砥。長軸斜位に弱い擦痕。側面沈線状をなす。中心部研磨減りする。 流紋岩。			
11	砥石 石製品	覆　土	長5.4　幅3.6　厚1.2	手持ち砥。４面使用。小口面自然面のこす。長軸斜位に弱い擦痕、一部沈線状をなす。研磨減りする。一部火をうけた痕跡。 流紋岩。			

表－19　H13号住居跡出土遺物観察表（図－26　図版－61）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆　土	① 12.4 ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞④ほぼ完形	平底気味。体部内彎して立ち上り、口縁部わずかに外傾する。	内面～口縁部外面に横位の撫で。体～底部篦削り。	体部外面墨書「＋」
2	坏 須恵器	+15	① 11.1　② 6.3 ③ 3.6	①長石、石英、軽石含、やや粗。②良好③灰色5Y⅝④完形	若干上げ底。体部内彎して立ち上り、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	

3	坏 須恵器	+13	① 12.2 ② 6.8 ③ 3.9	①長石、石英、軽石含、やや粗。 ②良好③灰白色5YR⅞④口縁わずか欠	上げ底。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	坏 須恵器	覆土		①片岩、軽石含、密。②やや不良 ③浅黄色2.5Y⅞④底部小破片	上げ底。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	底部外面墨書「道」
5	砥石 石製品	+13	長15.9 幅13.1 厚 5.1	荒砥。楕円形の形状、自然礫 2面使用（表・裏）両面長軸方向に擦痕。表面研主体を整えたと考えられる沈線状の痕跡。 粗粒安山岩。			
6	小刀 鉄製品	+15	長5.2 幅1.8 厚0.2	背側平ら、一部木質部を残す。断面シャープ。刃部のみ残存。全体的に錆化すすむ。			

表—20 H14号住居跡出土遺物観察表（図—28 図版—62）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.9 ③ 3.2	①輝石、石英、軽石含、やや粗。 ②良好③橙色5YR⅝④¾	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	外面煤付着
2	坏 須恵器	+10	① 12.6 ② 6.5 ③ 3.7	①黒色鉱物粒、長石、石英含、やや粗。②良好③灰白色7.5Y⅞④口縁欠	上げ底。下端で一旦くびれ、内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部回転篦削り。	外面自然釉付着
3	坏 須恵器	覆土	①(12.4) ② 6.3 ③ 4.0	①白色針状粒子含。密。②良好 ③灰色N⅝④½	平底。体部下半で弱くくびれ、彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り、外周部回転篦削り。	
4	坏 須恵器	覆土	①(12.8) ②(7.4) ③ 3.7	①長石、軽石粒含、密。②良好 ③青灰色5BG⅝④½	上げ底気味。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り、外周部回転篦削り。	
5	坏 須恵器	床面	①12.3 ② 7.0 ③ 3.8	①長石、白色軽石、チャート粒含、密。②良好③青灰色5Y⅝④完形	平底。体部緩やかに内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り、手持ち篦削り。	
6	坏 須恵器	床面	① 12.4 ② 7.5 ③ 4.0	①石英、黒色鉱物粒含、やや粗。 ②良好③灰7.5Y⅝④完形	平底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転篦切りか	外面自然釉付着
7	台付甕 土師器	床面	① 24.7	①輝石、石英含、やや粗。②良好 ③橙色5YR⅝④⅔	胴部内彎して立ち上り、上半で器最大径を有する。口縁部は上半で外反する。	内面篦撫で。口縁部内外面横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	外面煤付着
8	長頸壺 須恵器	+7	最大径22.0	①石英、白色軽石含、粗。②良好 ③灰色N⅝④胴部⅔	胴部内彎して立ち上り、上半部で大きく張る。高台部、頸部欠損	内～外面中位横位の撫で。下端～底部外周叩き目。肩部沈線状をなす。	肩部上端紐接合痕
9	刀子 鉄製品	+8	現存長12.5 茎長3.5 刃厚0.3 重量30	刃先端及び茎先端を欠損する。関部は棟、刃側共に段はみられない。背側平ら			
10	鎌 鉄製品	+7	現存長18.4 身幅3.4 厚0.3 重量70	身部全体が彎曲し、一端折れ曲がる。身部手前側幅広となる。			
11	砥石 石製品	カマド付近	長 9.8 幅 5.3 厚 4.0	手持ち砥。撥形。奥側肩部寄り径0.8cmの孔2個所穿たれるが、手前側未貫通。肩部寄りのそれは小口側に貫通する。 4面使用。長軸方向に擦痕あり。裏面沈線状をなし、側面研磨減りする。流紋岩。			

表—21 H15号住居跡出土遺物観察表（図—30、31 図版—62）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(13.2)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④¼	体部内彎して立ち上り、口縁変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(13.5)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④¼	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え後撫でか。底部篦削り。	内面タール状付着物
3	坏 土師器	覆土	① 12.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④¾	不安定な平底。体部は緩やかに内彎する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。底部不定方向篦削り。	
4	蓋 須恵器	覆土	① 14.7 ③ 2.8	①砂粒含、密。②良好③灰色N⅝④½	天井部から緩やかに外傾、端部は短く内傾する。天井部小型環状摘。	轆轤整形。天井部回転篦削り。摘貼付。	外面重ね焼痕 二次焼成。歪む。
5	坏 須恵器	+13	① 12.9 ② 8.0 ③ 3.6	①精良②良好③灰色N⅝ ③¾	若干上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
6	坏 須恵器	覆土	①(12.5) ② 6.5 ③ 3.6	①長石、軽石含、密。②良好③灰色N⅝④½弱	平底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
7	坏 須恵器	覆土	①(15.0) ②(8.4) ③ 3.7	①長石含、密。②良好③灰色10Y⅝④⅝	上げ底。体部外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
8	坏 須恵器	覆土	①(13.0) ② 7.8 ③ 3.0	①黒色鉱物粒含、密。②良好 ③灰白色7.5Y⅞④⅝	上げ底。体部外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
9	埦 須恵器	覆土	② 7.5	①石英、長石含、密。②良好③灰白色2.5Y⅝④底部	直立する短い高台	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
10	埦 須恵器	覆土	② 8.4	①小石、長石、黒色鉱物粒含、やや粗。②良好③灰黄色2.5Y⅝④⅓	若干外傾するしっかりした高台。体部緩やかに内彎する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
11	埦 須恵器	覆土	①(15.7) ②(9.8) ③ 6.8	①長石、石英、軽石含、密。②良好 ③灰色N⅝④⅓	大型の椀。体部腰部で屈曲し、直線的に外傾する。高台はやや高く若干外傾する。	轆轤整形。付高台	
12	甕 土師器	カマド	①(15.1)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好 ③明赤褐色2.5YR⅝④口縁⅔	肩部稜をなす。口縁部外傾して開き、口唇部でわずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。特に外面は強い。肩部横位の篦削り。	
13	甕 土師器	覆土	①(20.4)	①輝石、石英含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝④口縁部⅓	口縁部内外面共に「コ」の字状	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
14	甕 土師器	覆土	①(23.4)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③明赤褐色2.5YR⅝④口縁部⅓	口縁部「く」の字状に外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
15	小刀鉄製品	カマド	現存長14.2 幅2.5 厚0.3 重量40		刃部のみ残存。棟部直線的。全体的に錆化している。		
16	釘 鉄製品	+14	現存長14.6 幅0.5～1.1 皿部、軸部方形状。頭部折れ曲がる。下端で先細りする。				
17	紡錘車石製	覆土	上径6.5 下径7.5 厚2.3 孔径0.9	長径部シャープな平坦面、短径部凹状招なす。穿孔部は中央で窪む。長径面で若干の擦痕。角内石安山岩。			

表—22　H16号住居跡出土遺物観察表（図—33　図版—62）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	堝 須恵器	＋4	①(16.2)　②　8.5 ③　7.3	①長石、軽石含、密。②良好③灰白色5Y⅞/①④⅔	外傾する短い高台。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く外反する。体部深い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
2	甕 土師器	覆土	①(18.5)	①輝石、石英、軽石含、粗。②良好③橙色5YR⅞/⑥④½	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有する。口縁部直立し、上半で外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	胴部煤付着 口縁外面調整強い
3	砥石 石製品	覆土	長5.7　幅2.4 厚1.8	手持ち砥。片側小口面自然面をのこす。2面使用。長軸方向に擦痕を認む。側面沈線状をなす。先端研磨減りする。 流紋岩。			
4	砥石 石製品	ピット内	長9.6　幅4.8 厚3.9	手持ち砥。断面凹状。片側小口面自然面をのこす。他の一方及び裏面肩側に面取りされたごとくの使用痕あり。5面使用。表・裏面共に中心に向かって研磨減りする。長・短軸方向に弱い擦痕。流紋岩。			

表—23　H17号住居跡出土遺物観察表（図—35　図版—63）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	堝 須恵器	床面	①(15.1)　②　8.1 ③　6.8	①長石、酸化鉄含、やや粗。②良好③灰色5Y⅝/①④⅓	若干外傾する短い高台。体部は内彎して立ち上る。体部深い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
2	鎌 鉄製品	覆土	現存長7.8　幅2.5 厚0.2　重量20	身部大きく彎曲。刃部先端欠損。身部は概して薄い。片側端部折れ曲がる。			

表—24　H18号住居跡出土遺物観察表（図—37　図版—63）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(13.3)　②　(4.2) ③	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR⅞/④½	平底気味。体部緩やかに内彎し、上半で弱くくびれる。口唇部で直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面放射状篦磨き。外面～体部篦削り。	内面煤付着
2	坏 土師器	覆土	①　11.4　③　3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝/④⅝	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体部下端～底部篦削り。	
3	坏 須恵器	カマド	①(13.9)　②　6.8 ③　3.7	①輝石、酸化鉄含、粗。①不良③にぶい黄橙色10YR⅝/④⅓	わずかに上げ底。体部外傾して開く。外面下端沈線状をなす。	轆轤整形。底部切り離し不明。	器面磨耗する。
4	坏 須恵器	貯蔵穴	①(12.8)　②　6.8 ③　3.4	①石英、針状鉱物粒含、密。②良好③灰白色10YR⅞/④⅔	わずかに上げ底。体部外傾して開く。器肉均一	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
5	坏 須恵器	覆土	①(12.8)　②　(7.0) ③　3.9	①軽石、小石含、やや粗。②やや不良③灰白色5Y⅞/④¼	平底。体部緩く彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	
6	蓋 須恵器	覆土	①(18.2)	①石英含、密。②良好③灰色7.5Y⅝/④⅕	天井部から緩やかに外傾し、くびれた後頸部直立する。	轆轤整形。天井部回転篦削り。	摘欠損
7	甕 土師器	覆土	①(20.2)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝/④⅙	口縁部「コ」の字状。肩部稜をなし、大きく張る。	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
8	甕 土師器	カマド	①(19.6)	①輝石、石英、軽石含、やや粗。②良好③明赤褐色2.5YR⅝/④口縁⅕	肩部稜をなし、大きく張る。口縁部上半で外反する。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面強い撫で。胴部横・斜位の篦削り。	
9	砥石 石製品	覆土	長5.5　幅2.9 厚2.4	手持ち砥。平面長方形、断面凹状をなす。片側小口面は自然面のこす。奥側肩部寄り径0.5cmの孔穿たれる。5面使用。概して長軸方向に擦痕を認む。また各面ともに肩部寄りに加工時の痕跡であろうか、沈線をなす。手前側より奥部側に向かって研磨減りする。流紋岩。			

表—25　H19号住居跡出土遺物観察表（図—39　図版—63）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(12.4)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞/④½	体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 須恵器	覆土	①(12.2)　②　6.3 ③　3.5	①長石、石英、片岩含、密。②良好③灰色7.5YR⅝/①	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部弱く外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	
3	坏 須恵器	床面	①　12.9　②　6.4 ③　3.5	①長石、軽石、片岩含、やや粗。②不良③灰オリーブ色5Y⅝/④⅝	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	台付甕 土師器	カマド	①(15.1)	①輝石、石英、軽石含、粗。②良好③橙色5YR⅝/④口縁部¼	口縁部外傾して立ち上り、口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	内外面煤付着 7と同個体か
5	甕 土師器	カマド	①(18.6)	①輝石、石英、軽石含、粗。②良好③明赤褐色2.5YR⅝/④口縁部⅓	口縁部内外面共に「コ」の字状。胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有する。	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	
6	甕 土師器	カマド	①(20.0)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝/④胴限⅓欠損	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有する。口縁部内外面共に「コ」の字状	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面炭化物、外面煤付着
7	台付甕 土師器	カマド	①(11.1)	①輝石、石英含、やや粗。②良好③明赤褐色2.5YR⅝/④台部½	台部大きく「ハ」の字状に外反する。	内面横位の撫で。外面篦削り。台部内外面横位の撫で。	4と同一個体か

表—26　H20号住居跡出土遺物観察表（図—41　図版—63）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(11.7)	①輝石、石英含、やや粗。②良好③にぶい橙色5YR⅞/④ほぼ完形	丸底。体部緩やかに内彎して立ち立る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(12.0) ③　2.8	①輝石、石英、軽石含、やや粗。②良好③橙色5YR⅝/④⅔	平底。体部は内彎して立ち上り、口縁部変換点で弱くくびれる。口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
3	坏 須恵器	覆土	①　12.4　②　7.3 ③　4.0	①小石含、精良。②良好③青灰色N⅝/④⅔	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転篦切り。	焼きひずみあり。
4	坏 須恵器	＋31	①　13.4　②　7.8 ③　3.4	①砂粒含、精良。②良好③灰白色N⅞/④⅕	上げ底。中央部凸状。体部外傾して開き、下半で若干の丸みをもつ。	轆轤整形。底部回転篦切り、未調整	外面自然釉付着

5	蓋 須恵器	+27	① 17.5 ④ 4.0	①砂粒含、密。②やや不良 ③灰白色5Y⅞/④ほぼ完形	やや平坦な天井部から緩やかに内彎し、口縁部は直立する。小型の環状摘。	轆轤整形。天井外周～肩部回転篦削り。内面一部不定方向の撫で。摘貼付。	
6	盤 須恵器	+10	① 18.5 ② 14.3 ③ 3.4	①精良②良好③灰色N⅞/ ④口縁部わずか欠損	「ハ」の字状に外傾するしっかりした高台。体部は腰部で大きく内彎し、上半で外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り、外周部回転篦削り。付高台、撫で。	
7	鎌 鉄製品	東南壁際	現存長9.8 身幅4.0 厚0.2 重並40	身部の一部残存。片側端部折れ曲がり、身部全体が彎曲する。器面剝落著しく、錆化すすむ。			
8	小刀 鉄製品	東南壁際	現存長12.8 幅2.3 厚0.3 重並40	刃部のみ残存。中間部欠損。棟部ほぼ直線的。背側平ら。			

表－27　H21号住居跡出土遺物観察表（図－43　図版－64）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 12.0	①輝石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④⅓	平底か。体部緩やかに内彎し、口縁部変換点で弱くくびれる。口縁部わずかに外傾。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁～体部指押え。底部篦削り。	外面煤付着
2	坏 土師器	不明	① 11.8 ③ 3.9	①石英、軽石、チャート含やや粗②良好③にぶい橙色5YR⅞④完形	不安定な平底。体部変換点で屈曲し、外傾して開く。口縁部弱くくびれる。器肉厚い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 須恵器	覆土	①(12.8) ②(6.7) ③ 3.1	①軽石、チャート含、密。②良好③灰色N⅝/④⅙	上げ底か。体部下端で弱くくびれ、緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	坏 須恵器	覆土	①(13.1) ②(7.8) ③ 4.0	①石英、軽石含、やや粗。②やや不良③灰白色2.5Y⅝④⅕	上げ底。体部下半で丸みを有し、外傾して開く。	轆轤整形。底部右彼転糸切り	
5	長頸壺 須恵器	床面	①(8.5)	①黒色鉱物粒含、密。②良好 ③灰色N⅝口縁部½	頸部は直線的に立ち上り、口縁部で屈曲する。	内外面横位の撫で。	
6	甕 土師器	貯蔵穴	③ 4.5	①輝石、石英含、粗。②良好 ③にぶい橙色5YR⅝④胴部½	平底。胴部内彎して立ち上る。	内面横位の篦撫で。外面縦位の篦削り。	外面煤付着。 内面接合痕

表－28　H22号住居跡出土遺物観察表（図－45　図版－64）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏(内黒) 土師器	覆土	①(13.8) ②(5.6) ③ 5.4	①輝石、石英、軽石含、密。②不良 ③外淡黄2.5YR⅝内暗灰N⅜/④⅕	平底。体部直線的に外傾し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。内面横位の篦磨き。黒色処理。	
2	坏 須恵器	覆土	①(11.6) ②(4.0) ③ 3.9	①石英、軽石含、粗。②不良③灰色7.5Y⅟₁/④½	わずかに上げ底。体部外傾して開き、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
3	埦 須恵器	覆土	①(15.2) ② 7.9 ③ 6.7	①輝石、チャート、軽石含、密。②不良③にぶい橙色10YR⅞/④⅓	外傾する短い高台。体部内彎して立ち上り、口縁部外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
4	埦 須恵器	+9	①(14.8) ② 7.1 ③ 6.1	①酸化鉄、石灰含、やや粗。②不良 ③淡黄橙色10YR⅝/④⅔	直立気味の短い高台。体部内彎して立ち上り、口縁部短く外反する。	轆轤整形。底部切り離し不明。 付高台	
5	皿 須恵器	覆土	①(13.4) ② 7.9 ③ 2.6	①小石含、密。②やや不良③灰白色7.5Y⅝/④⅓	「ハ」の字状に外傾する高台。体部は下半で稜をなし、直線的に外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	磨耗著しい。
6	長頸壺 須恵器	+14	③ 9.0	①長石、片岩、酸化鉄含、やや粗。②不良③外面青灰色5B⅝④底部	「ハ」の字状に外傾する高台。体部現状で直線的に立ち上り。器肉厚い。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
7	甕 土師器	覆土	① 20.1	①輝石、石英、軽石、雲母含、粗。②良好③にぶい橙色5YR¾ ④口縁部⅔	胴部内彎して立ち上り、口縁部「コ」の字状をなす。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面接合痕。
8	甕 土師器	カマド	①(23.0)	①輝石、石英、酸化鉄、軽石含、密。 ②良好③にぶい橙色5YR⅝④⅔	胴部内彎して立ち上り、肩部弱く稜をなす。口縁部「コ」の字状。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面強い調整。胴部横、斜位の篦削り。	口縁内外面、接合痕

表－29　H23号住居跡出土遺物観察表（図－47　図版－64）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴	① 11.4 ② 8.5 ③ 3.3	①輝石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅝④完形	不安定な平底。体部緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(11.5)	①輝石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅓	不安定な平底。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	覆土	①(12.8) ② 9.2 ③ 3.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞④½	不安定な平底。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。底部不定方向篦削り。	
4	坏 土師器	床面下	① 12.0 ② 8.5弱 ③ 3.0	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④¾	平底。体部内彎して立ち上る。口縁部弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部内外面指押え。底部篦削り。	
5	坏 土師器	覆土	①(13.1) ② 9.0 ③ 3.6	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④½	平底。体部緩く彎曲して立ち、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面放射状篦磨き。口縁部外面指押え。体～底部篦削り。	
6	坏 須恵器	貯蔵穴	①(12.9) ② 7.4 ③ 3.1	①輝石、石英含、密。②やや不良 ③灰白色5YR⅞/④½	若干上げ底。体部外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	器面磨耗する。
7	蓋 須恵器	床面	①(16.0)	①黒色鉱物粒、長石、軽石含やや粗 ②良好③青灰色N⅝/④⅔	天井部中央わずかに窪む。体部緩やかに彎曲。端部は丸く、内側に内傾する。	轆轤整形。天井部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	
8	蓋 須恵器	覆土	①17.2 天井部径7.1 ③ 2.4	①長石、石英、軽石含、やや粗。 ②良好③灰色N⅝/④⅓	天井部平坦。体部「ハ」の字状に外傾、端部丸い。	轆轤整形。天井部右回転糸切り。	
9	蓋 須恵器	床面	①16.5 天井部径7.2 ③ 2.3	①石英、輝石、チャート粒含、やや粗。②不良③橙色10YR⅝④ほぼ完形	天井部平坦。体部「ハ」の字状に外傾し、端部丸い。	轆轤整形。天井部右回転糸切り。	
10	埦 須恵器	貯蔵穴	①(15.5) ② 8.5 ③ 6.1	①酸化鉄、石英、輝石含、密。②不良 ③にぶい赤褐色5YR⅝④⅔	「ハ」の字状に外傾する短い高台。体部は腰部で屈曲、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
11	甕 土師器	床面	①(20.2)	①長石、石英、酸化鉄含、粗。②良好 ③にぶい黄橙色7.5YR⅝④口縁½	口縁部外傾し、上半で外反する。肩部張りなし	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

12	甕 土師器	床面	①(13.1)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅞④口縁部⅓	平底。胴部内彎して立ち上り、肩部で稜をなす。口縁部は上半で外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。底部篦削り。	外面煤付着 内面接合痕顕著
13	巡方 銅製品	不明	長径3.3　短径3.2	③黒味がかった青緑色	ほぼ方形状の形態。下端部長径2.2、短径0.4の長方形状に垂孔。内側の隅に鋲をもつ。		

表－30　H24号住居跡出土遺物観察表（図－49　図版－64）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(11.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④¼	体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部わずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 須恵器	＋6	① 12.1　② 7.0 ③ 3.8	①黒色粒子、軽石、片岩含、やや粗。②良好③橙色2.5YR⅞④口縁部⅓	わずかに上げ底。体部下半で張りを有し、外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	甕 土師器	覆土	①(13.1)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅞④口縁部⅓	肩部稜をもつ。口縁部は上半で外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面横位の篦削り。	

表－31　H25号住居跡出土遺物観察表（図－51　図版－64）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞④½	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は直立、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(12.7)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞④⅓	体部内彎して立ち上り、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。下半～底部篦削り。	
3	坏 土師器	覆土	①(13.5)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④¼	体部大きく内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	底部煤付着

表－32　H27号住居跡出土遺物観察表（図－53　図版－65）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴	①(12.9)	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④⅓	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部で外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	貯蔵穴	①(13.4)	①輝石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④½	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部で外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	貯蔵穴	① 13.0 ③ 3.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④ほぼ完形	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部は直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。体～底部篦削り。	内面篦記号「キ」
4	坏 土師器	貯蔵穴	①(12.9) ③ 3.3	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④⅔	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部は直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
5	坏 土師器	＋24	①(12.9) ③ 3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅞④⅔	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部不定方向篦削り。	
6	坏 土師器	貯蔵穴	①(14.5) ③ 3.7	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④½	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁上端で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。体～底部篦削り。	
7	坏 須恵器	床面下	①(14.6)　② 9.0 ③ 4.0	①石英、軽石粒含、密。②良好③灰白色7.5Y⅝④⅔	不安定な平底。底部～体部への変換点不明瞭。体部外傾して開き、口縁部で弱くくびれる。	轆轤整形。底部右回転篦切り。外周部回転篦削り。	底部篦記号「メ」
8	坏 須恵器	＋17	①(13.3)　②(8.8) ③ 3.6	①精良。②極めて良好。③内面灰色10Y⅗。外面暗青灰色5PB⅘④¼	わずかに上げ底。体部は下半部で稜を有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部～外周部回転篦削り。	
9	坏 須恵器	＋33	①(12.9)　②(8.3) ③ 3.4	①精良②極めて良好③灰色N⅝④⅔	平底。体部下半で丸みを有し、外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部～外周部回転篦削り。	外面自然釉付着
10	坏 須恵器	＋6	① 13.9　② 9.7 ③ 3.9	①砂粒含、密。②やや不良③青灰色5B⅝④⅔	平底。体部は下端で稜を有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	器面剝落する。
11	甕 土師器	床面	① 22.4	①輝石、長石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口～胴部	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。口縁部外反し、端部丸い。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	外面煤付着 器肉薄い。
12	甕 土師器	床面	① 22.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁～胴部	胴部は内彎して立ち上り、口縁部外反する。口縁部で最大径を有す。	内面篦撫で、口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	

表－33　H28号住居跡出土遺物観察表（図－55　図版－65）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	① 20.6	①輝石、酸化鉄、軽石含、密。②良好③橙色2.5Y⅝④口縁部	胴部内彎して立ち上り、口縁部上半で緩く外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	

表－34　H29号住居跡出土遺物観察表（図－57　図版－65）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	住居外	① 13.7　② 10.0 ③ 3.7	①長石、輝石含、密。②良好③灰色7.5Y⅝④⅔	平底。底～体部変換点丸い。体部直線的に外傾する。器肉厚い。	轆轤整形。底部～外周部回転篦削り。	
2	不明 鉄製品	覆土	長径3.4　短径2.6 断面径0.4×0.4	リング状をなし、断面楕円形。錆化している。			
3	刀子 鉄製品	覆土	現存長3.8幅1.6前後 厚0.4	両端部欠損。剝落著しい。			

表—35　H30号住居跡出土遺物観察表（図—59　図版—65）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(14.8)	①輝石、長石、軽石含、密。②良好 ③にぶい橙色5YR⅞④¼	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁上端で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。体～底部篦削り。	外面煤付着
2	坏 土師器	+11	① 18.0 ③ 3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③にぶい橙色5YR⅞④½	丸底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点で稜をもつ。口縁部強く外反し水平面をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。篦痕あり。体～底部篦削り。	外面タール状付着物
3	壺 須恵器	覆土	② 9.1	①長石、黒色鉱物粒含、粗。②極めて良好③灰白色10Y⅞④底部½	平底。体部内彎して立ち上る。器肉厚い。	内外面横位の撫で。底部一定方向の撫で	外面自然釉付着
4	甕 土師器	+16	② 8.0	①輝石、軽石、石英含、粗。②良好 ③にぶい橙色5YR⅞④胴部½	不安定な平底。胴部大きく内彎して立ち上る。	内面縦位の撫で。外面上半縦位、下半横位の篦削り。	外面煤付着
5	甕 土師器	+38	② 5.4	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、粗。 ②良好③にぶい橙色7.5YR④下半	平底。胴部は長胴形をなす。	内面横位の撫で。外面縦位の篦削り。底部一定方向の篦削り。	内面炭化物、外面煤付着

表—36　H31号住居跡出土遺物観察表（図—61　図版—65）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	覆土	①(12.4) ②(7.2)	①長石、石英、軽石含、密。②不良③浅黄色2.5Y⅞④¼	わずかに上げ底。体部は直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
2	坏 須恵器	カマド	①(15.7) ②(8.5)	①石英、軽石含、密。②不良③にぶい黄色2.5Y⅝④¼	平底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部切離し不明。	
3	塊 須恵器	+6	②(8.2)	①石英、長石、軽石、黒色鉱物粒含、粗。②良好④灰オリーブ色7.5Y⅝④¼	わずかに外傾する短い高台。体部は内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で	
4	甕 土師器	覆土	①(20.1)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④口縁部¼	口縁部下半内傾、上半で外反する。肩部に弱い稜をもつ。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
5	甕 土師器	覆土	① 20.9	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR⅞④口縁～胴部⅓	胴部球形を呈し内彎する。肩部稜をもつ。口縁部外反し、上半で若干くびれる。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	

表—37　H32号住居跡出土遺物観察表（図—63・64　図版—65・66）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+18	① 12.6 ③ 2.7	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞④½	安定した丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部わずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。体～底部篦削り。	底部外面篦記号「メ」
2	坏 土師器	カマド	① 13.4 ③ 3.2	①輝石、石英、軽石含、やや粗。②良好③にぶい橙色5YR⅝④½	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部は直立し、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で、体部～底部篦削り。	
3	坏 土師器	+12	① 16.6 ③ 5.2	①輝石、軽石、石英含、やや粗。②良好③橙色2.5YR⅞④⅗	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。体部～底部篦削り。	
4	坏(内黒) 土師器	カマド	①(15.4) ② 8.6 ③ 5.5	①輝石、石英、酸化鉄、輝石含、やや粗②良好③橙色7.5YR⅞④⅗	平底。体部は下半分丸み有し、外傾して開く。口縁部わずかに直立する。	轆轤整形。内面横、斜位の篦磨き。黒色処理。底部回転篦削り。	
5	坏 土師器	貼床下	① 13.8 ② 9.0 ③ 3.7	①石英、軽石、輝石含、密。②極めて良好③淡橙色5YR⅝④完形。	平底。体部緩やかに彎曲する。	内面～口縁部外面横位の撫で。底部篦削り。	
6	蓋 須恵器	カマド	① 14.2 ③ 3.1	①砂粒、黒色鉱物粒含、密。②良好 ③灰色7.5Y⅝④口縁一部欠損	天井部平坦。体部緩やかに外傾し、口縁部直線的に外傾する。	轆轤整形。天井部回転篦削り。摘貼付。	
7	坏 須恵器	貼床下	① 14.0 ② 8.0 ③ 3.7	①軽石、長石、酸化鉄含、密。②良好 ③灰色7.5Y⅛④ほぼ完形	平底。体部は下端で張りを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り、外周部回転篦削り。	
8	坏 須恵器	床面	① 14.4 ② 7.8 ③ 4.0	①黒色鉱物粒含、密。②極めて良好③灰白色5Y⅝④¾	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	
9	坏 須恵器	+9	① 14.1 ② 7.8 ③ 4.1	①精良②極めて良好③灰色7.5Y⅝④口縁部一部欠損	わずかに上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、外周部手持ち篦削り。	
10	坏 須恵器	カマド	①(13.3) ② 7.5 ③ 4.3	①石英、軽石含、密。②不良③にぶい黄橙色10YR⅞④¾	上げ底。体部は下端でくびれ、緩やかに内彎して立ち上がる。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	外面吸炭
11	刀子 鉄製品	カマド	現存長8.6 幅0.5～0.8 厚0.2　茎長2.8	刃先端及茎端部を欠損。関部に木質残る。刃部と関部との境は棟、茎側共に段差あり。棟背は平らである。			
12	甕 土師器	カマド	① 21.3 ② 5.2 ③ 29.1	①輝石、軽石含、密。②良好③明黄褐色10YR⅞④ほぼ完形	平底。胴部緩やかに内彎して立ち上る。口縁部は上半で外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	外面煤付着
13	甕 土師器	覆土	①(19.1)	①輝石、石英、酸化鉄含、密。②やや粗。③赤橙色10R⅝④口縁部⅓	口縁部は内外面共に「コ」の字状。肩部若干張る。	内面篦撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	内面煤付着
14	甕 土師器	カマド	① 20.1 ② 4.8 ③ 28.8	①輝石、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④胴部一部欠損	平底。胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。肩部稜を有し、口縁部外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	外面着接合痕あり
15	甕 土師器	+16	① 24.1 ② 6.1 ③ 31.9	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝④胴部一部欠損	不安定な平底。胴部球形をなして内彎。口縁部は下半で直立、上半で外反する。口縁沈線状	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	口縁部接合痕下半煤付着

表—38　H33号住居跡出土遺物観察表（図—66　図版—66）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(11.6)	①輝石、石英、長石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝④口縁部⅔	体部緩やかに内彎し、口縁部でわずかにくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。	
2	坏 須恵器	覆土	①(12.5) ②(7.8) ③ 3.8	①砂粒含、やや粗。①不良③灰黄色2.5Y⅞④⅛	平底か。体部直線的に外傾する。器肉一定	轆轤整形。底部回転糸切り。	
3	坏 須恵器	カマド	① 13.0 ② 8.2 ③ 3.3	①砂粒含、やや粗。②やや不良 ③灰白色5Y⅞④口縁部一部欠	平底。体部は直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	

4	甕 土師器	覆土	① 19.8	①輝石、長石、酸化鉄、軽石含、密。 ②良好③橙色2.5YR⅝④口縁¼	「コ」の字状口縁	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	外面煤付着

表一39　H34号住居跡出土遺物観察表（図一68　図版一66）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床面	① 13.1　② 8.0 ③ 3.4	①精良②良好③外面灰白色5Y⅝ 内面灰白色2.5Y⅝④⅓	平底。体部わずかに丸みをもって立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	底部外面煤付着
2	坏 須恵器	覆土	①(13.4)　②(6.5) ③ 3.8	①石英、酸化鉄、片岩含、やや粗。②不良③橙色2.5YR⅝④½	上げ底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	台付甕 土師器	カマド	① 12.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④台部欠損	胴部球形をなして内彎、上半で最大径を有す。口縁部「コ」の字状	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。台部内面撫で。	
4	甕 土師器	カマド	② 20.5	①輝石、軽石、石英含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝④胴部下半欠損	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	外面煤付着

表一40　H35号住居跡出土遺物観察表（図一70　図版一66）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(13.0)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③淡赤橙色2.5YR¼④⅛	体部緩やかに内彎し、口縁部外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。体部下半～底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	① 13.2	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝④⅓弱	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部～底部篦削り。	
3	坏 須恵器	＋9	① 12.9　② 8.0 ③ 3.7	①黒色鉱物粒含、密。②極めて良好③灰色7.5Y⅝④⅔	平底。中央部凸状。体部直線的に外傾する。下端部に若干の丸みあり。	轆轤整形。底部～外周部回転篦削り。	口唇部タール状付着物あり。
4	坏 須恵器	覆土	② 7.5	①軽石粒含、密。②良好③灰白色 10Y¼④底部⅓	上げ底。体部下端で稜を有し、現形で内彎する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	

表一41　H36号住居跡出土遺物観察表（図一72　図版一66）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	覆土	① 11.9　② 6.0 ③ 3.8	①輝石、石英、軽石含、やや粗。②不良③浅黄橙色10YR⅝④⅞	体部下端で丸み、ほぼ直線的に外傾し、口縁部外反する。器肉厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	埦 灰釉陶器	＋8	① 15.6　② 7.5 ③ 4.8	①小石含、密。②良好③釉薬灰緑色④¼	高台部は弱い稜をなし三日月型。体部は緩やかに彎曲、口唇部わずかに外反する。	轆轤。底部回転篦削り。腰部篦削り。釉薬つけがけ。付高台。	

表一42　H37号住居跡出土遺物観察表（図一74　図版一66）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 土師質須恵器	覆土	①(10.6)　②(4.0) ③ 4.0	①輝石、軽石含、密。②やや不良 ③灰白色7.5Y⅝④⅛	平底。体部内彎して立ち上り、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、末調整。	
2	埦 灰釉陶器	＋8	①(14.2)　②(6.4) ③ 4.7	①やや粗。②良好③素地灰白色5Y¼④⅓	高台部下半丸く、稜不明瞭。体部は腰部張り、緩やかに彎曲する。口唇部わずかに外反する。	轆轤。底部回転篦削り。釉薬つけがけ。付高台。	

表一43　H38号住居跡出土遺物観察表（図一76　図版一66）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 須恵器	覆土	② 6.7	①長石、軽石、石英含、粗。②良好 ③灰色7.5Y¼④底部	短くだれた高台。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
2	鎌 鉄製品	床面	現存長14.2　幅2.1～3.0 厚0.2　重量50	身部大きく彎曲する。刃部先端欠損する。身部片側約90°の角度で折れ曲る。			

表一44　H39号住居跡出土遺物観察表（図一78　図版一67）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	カマド	① 11.8　② 5.7 ③ 3.8	①輝石、チャート、軽石含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR¼④完形	わずかに上げ底。体部緩やかに内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	坏 土師質須恵器	住居外	① 10.9　② 5.0 ③ 3.2	①輝石、軽石含、密。②やや不良 ③にぶい橙色7.5YR⅝④口縁わずかに欠損	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	坏 須恵器土師器	カマド	① 10.9　② 4.3 ③ 3.6	①輝石、雲母、軽石含、密。②良好③ 外面淡黄色2.5YR⅝④完形	わずかに上げ底。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	内面煤付着
4	坏 土師質須恵器	カマド	① 11.6　② 4.5 ③ 3.8	①輝石、石英含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR¼④ほぼ完形	わずかに上げ底。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
5	坏 土師質須恵器	床面	① 11.0　② 5.7 ③ 2.9	①輝石、軽石粒含、やや粗。②やや不良③灰白色2.5Y¼④完形	上げ底。体部直線的に外傾する。器肉厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	還元焔焼成
6	埦 土師質須恵器	カマド	①(12.4)　② 6.1 ③ 4.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③にぶい黄橙色10YR¼④⅓弱	台形状の短い高台。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
7	埦 土師質須恵器	カマド	① 12.6　② 6.2 ③ 4.5	①輝石、石英、軽石含、密。② 良好③橙色7.5YR⅝④⅔	直立する短い高台。体部は腰部張り、直線的に外傾、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	内面油煙状付着物
8	埦 土師質須恵器	カマド	① 12.2　② 6.0 ③ 4.7	①石英、輝石、小石含、密。②良好 ③にぶい橙色10YR¼④⅝	台形状の短い高台。体部直線的に外傾し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	内面煤付着

9	埦 土師質須恵器	ピット	① 12.0 ② 6.3 ③ 4.3	①石英、軽石、小石含、やや粗。②良好③灰白色7.5Y⅝④⅝	わずかに外傾する厚い高台。体部緩やかに彎曲、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	還元焔焼成 外面煤付着
10	埦 土師質須恵器	カマド	① 12.3 ② 6.5 ③ 4.1	①石英、軽石、小石含、密。②良好③灰白色5Y⅞④完形	わずかに外傾する肉厚の高台。体部緩やかに内彎、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	還元焔焼成
11	埦 土師質須恵器	カマド	① 11.1 ② 5.9 ③ 5.1	①輝石、軽石、石英含、やや粗。②不良③灰白色5Y⅝④⅝	「ハ」の字状に外傾する短い高台。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部切り離し不明。再調整。	内外面吸炭
12	埦 土師質須恵器	カマド	①(13.9) ② 8.6 ③ 6.9	①輝石、石英、軽石含、やや粗。②良好③淡黄色2.5Y⅗④⅝	「ハ」の字状に外傾する高い高台。体部直線的に外傾、口縁部外反する。	轆轤整形。底部切り離し不明。付高台、撫で。	外面煤付着
13	埦 土師質須恵器	床面	①(17.5)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③淡黄橙色7.5YR⅝④⅛弱高台欠	大型の椀。体撃緩やかに内彎し、上半で外傾する。高台部欠損する。	轆轤整形。底部回転篦削り。付高台、撫で。	
14	埦 灰釉陶器	カマド	② 8.7	①精良。②良好③素地灰白色7.5YR⅝④底部	高台部側面稜をなす。体部緩やかに彎曲する。	轆轤。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
15	砥石 石製品	覆土	長3.0 幅2.3 厚1.8	手持ち砥。平面方形、断面凹状。両端部欠損する。4面使用。長軸方向に弱い擦痕。断面沈線状をなす。手前から中心部に研磨減りする。流紋岩。			

表—45 H40号住居跡出土遺物観察表（図—80 図版—67）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+15	①(12.6)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい褐色7.5YR⅝④¼	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部一定方向篦削り。	内外面煤付着
2	蓋 須恵器	床面	① 15.2 ③ 3.3	①軽石、石英、片岩含、やや粗。②良好③灰色7.5Y⅝④¼	天井部擬宝珠の摘。体部緩やかに外傾し、口縁部短く内傾する。	轆轤整形。天井部外周回転篦削り。摘貼付。	外面煤付着
3	坏 須恵器	覆土	①(13.4) ② 7.0 ③ 4.4	①軽石、小石、石英含、密。②良好③灰色7.5Y⅝④⅝弱	平底。体部は下端で弱くくびれ、緩やかに内彎して立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	甕 土師器	床面	①(19.1)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁部⅛弱。	口縁部「コ」の字状。肩部稜をなすが張りなし。	内面篦撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	外面煤付着 接合痕認む。
5	甕 土師器	床面	① 19.2	①輝石、石英、輝石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④胴下半欠	胴部内彎して立ち上る。口縁部外反し、上半でわずかにくびれる。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	器面磨耗。 接合痕認む。

表—46 H41号住居跡出土遺物観察表（図—82 図版—67）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 12.0 ③ 3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④¾	不安定な平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部上端で短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 12.2 ③ 3.7	①輝石、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅝④¾	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部片側端部でわずかにくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	器面磨耗する。
3	皿 須恵器	+12	① 14.6 ② 7.6 ③ 2.7	①酸化鉄、長石、石英、片岩含、やや粗。②不良③明黄褐色2.5Y⅞④ほぼ完形。	「ハ」の字状に外傾する高い高台。体部は大きく外傾して開き、口縁部外反して水平をなす。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	酸化焔焼成
4	坏 須恵器	+25	①(14.1) ② 6.5 ③ 3.6	①精良②良好③外灰白7.5Y⅞、内灰10Y⅞④体部⅓欠	平底。体部は下端でくびれ、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部外面墨書「常」
5	埦 須恵器	覆土	①(13.5)	①砂粒含、密。②やや不良③灰黄色2.5Y⅞④口縁部	残存部で、体部内彎し、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。	体部外面墨書「常」
6	甕 土師器	+22	① 19.8	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④胴部下半欠損	胴部丸く内彎する。口縁部「コ」の字状を呈するが全体的に外傾気味。	内面撫で。口縁部横位の撫で。一部指頭痕あり。胴部横、斜位の篦削り。	
7	棒状 鉄製品	床面	現存長7.4 幅0.4～0.7 厚0.3～0.4 重量10	器形を窺い形ることは困難。残存部、断面方形状を呈す。両端部欠損、片側端部幅広。全体的に錆化する。			

表—47 H42号住居跡出土遺物観察表（図—84 図版—68）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	覆土	①(20.3)	①輝石、砂粒含、密。②良好③橙色5YR⅞④口縁部⅕	口縁部一旦外傾し、上半でさらに外傾する。肩部で弱い稜をなす。	口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
2	甕 土師器	覆土	①(20.0)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③外橙2.5YR⅝内橙5YR⅞④¼	胴部内彎し、口縁部は強く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横位の篦削り。	外面煤付着
3	甕 土師器	床面	①(22.3)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅝④¼	胴部内彎して立ち上る。口縁部は外傾し、上半で弱く外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	内面煤付着
4	甕 土師器	床面	①(20.0)	①輝石、石英、酸化鉄含、密。②良好③明黄褐色10YR⅞④½	不安定な平底。胴部は上半で大きく内彎し、口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	胴下半煤付着 内面紐接合痕

表—48 H43号住居跡出土遺物観察表（図—86 図版—68）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+21	① 11.8 ③ 3.0	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR⅞④⅝	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部直立気味。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 11.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅝弱	体部内彎して立ち上り、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
3	盤 須恵器	覆土	③(10.5)	①軽石粒含、密。②良好③灰白色7.5Y⅞④底部¼	断面三角形状の直立する高台。体部は腰部で大きく屈曲する。	轆轤整形。付高台	
4	甕 土師器	床面	①(19.6)	①輝石、酸化鉄、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅗	胴部緩やかに内彎し、上半で最大径。口縁部外傾し、上半で外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁部指押え。胴部横、縦位の篦削り。	

表—49　H44号住居跡出土遺物観察表（図—88　図版—68）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 12.7 ③ 3.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④ほぼ完形。	不安定な平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部への変換点で弱い稜をもつ。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。底部不定方向の篦削り。	外面墨書「山」
2	坏 須恵器	南カマド	① 12.7　② 5.8 ③ 3.2	①黒色鉱物粒含、密。②良好 ③明オリーブ灰色5GY⅞④完形	上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	埦 須恵器	+64	② 9.5	①黒色粒、酸化鉄含、密。②やや不良③灰白色10YR⅝④底部	断面三角形で、短く外傾する高台。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
4	甕 土師器	床面	① 20.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝④口縁部	口縁部「コ」の字状。胴部上半で最大径を有する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	接合痕認む。
5	甕 土師器	北カマド	①(19.6)	①輝石、石英、軽石、長石含、密。②良好③橙色2.5YR⅞④口縁部⅓	口縁部内外面共に強い「コ」の字状。胴部上半で最大径を有する。	口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	接合痕認む。
6	砥石 石製品	貯蔵穴	長9.3　幅6.3 厚4.5	置き砥。断面凹状。片側側面は欠損。3面使用。小口面は自然面をのこす。長軸、斜方向に弱い擦痕。側、裏面一部沈線状をなす。側面手前½程度強い研磨痕あり。流紋岩。			タール状付着物

表—50　H45号住居跡出土遺物観察表（図—90　図版—68）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	止金具か 鉄製品	覆土	現存長15.9　幅1.6 厚0.3前後　重量50	端部は、片側丸みを有し、他は扁平で、共に両端部寄りに幅0.4cm前後の孔、穿たれる。	

表—51　H46号住居跡出土遺物観察表（図—92　図版—68）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(11.4) ③(3.0)	①輝石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④½	不安定な平底。体部緩やかに内彎し、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面指押え。底部不定方向篦削り。	
2	坏 須恵器	覆土	① 13.6	①輝石含、粗。②不良③灰白色10YR⅝④¼	体部緩やかに彎曲し、口縁部で開く。	轆轤整形。	
3	坏 須恵器	カマド	①(12.1)　② 7.2 ③ 4.1	①精良②良好③灰白色7.5Y⅞ ④体部¼欠損	上げ底。体部直線的に外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	
4	坏 須恵器	カマド	② 7.0	①輝石、石英含、密。②良好③青灰色5B⅝④底部	上げ底。体部下端でくびれる。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	
5	坏 須恵器	覆土	② 6.8	①長石、軽石含、やや粗。②やや不良③灰色7.5Y⅝④底部	上げ底。体部下端で弱くくびれる。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
6	埦 須恵器	カマド	② 7.8	①長石、軽石含、やや粗。②良好③灰色N⅝④体部上半欠損	高台部断面台形状を呈し、短く外傾。体部は腰部に張りをもち、直線的に立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	底部外面墨書「井」

表—52　H47号住居跡出土遺物観察表（図—94　図版—68）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	+10	① 13.5　② 7.5 ③ 3.9	①精良②良好③青灰色5BG⅝④⅘	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	甕 土師器	カマド	① 20.1	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②やや不良③橙色5YR⅝④胴下半欠	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有する。口縁部外傾、上半で外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面接合痕
3	甕 土師器	床面	① 21.9	①輝石、酸化鉄、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④¼	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有する。口縁部は外反し、上半でさらに屈曲する。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁部指押え。胴部横、斜位の篦削り。	

表—53　H48号住居跡出土遺物観察表（図—96・97　図版—69）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	①(12.3) ③ 3.6	①輝石、軽石、石英含、密。②良好 ③にぶい橙色7.5YR⅝	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部変換点でわずか稜をなす。口縁部外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
2	坏 土師器	床面	①(12.5) ③ 3.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好 ③橙色7.5YR⅝④¼	丸底。体部緩やかに彎曲し、口縁部は短く外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部不定方向篦削り。	
3	坏 土師器	+10	① 12.8 ③ 3.7	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞④完形	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器形ゆがむ。
4	坏 土師器	+7	① 13.9 ③ 3.9	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色7.5YR⅝④½弱	丸底。体部緩やかに内彎。口縁部は短く直立し、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。体～底部二方向に篦削り。	
5	坏 土師器	貯蔵穴	① 12.6 ③ 3.7	①密。②やや不良③にぶい橙色7.5YR⅞④完形	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。体～底部二方向に篦削り。	
6	坏 土師器	床面	① 13.4 ③ 4.0	①輝石、軽石含、やや粗。②良好 ③明赤褐色2.5YR⅝④½弱	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。体～底部二方向に篦削り。	
7	坏 土師器	+10	① 14.0 ③ 3.9	①輝石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝④⅘	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
8	坏 土師器	貯蔵穴	① 15.9 ③ 3.5	①輝石、長石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞④完形	丸底。体部緩やかに彎曲して開き、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。(右→左方向)	
9	蓋 須恵器	床面	① 15.4 ③ 3.4	①砂粒含、精良。②極めて良好③灰白色N⅝④完形	天井部環状摘。体部は緩やかに彎曲し、口縁部内側にかえしをもつ。	轆轤整形。左回転か。天井部回転篦削り。摘貼付。	内面接合痕あり。
10	坏 須恵器	貯蔵穴	① 13.4 ②8.0～8.5 ③ 3.8	①石英、軽石、チャート含、密。②極めて良好③灰白色N⅞④⅘	上げ底。体部内彎して立ち上り、中位で張る。口縁部外傾して開く。	轆轤整形。底部回転篦切り、回転篦削り。	

11	坏 須恵器	覆　土	①13.8　②10.0 ③3.7	①酸化鉄含、密。②良好③灰白色5Y⅞④⅞	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点で弱くくびれ、外傾して開く。	轆轤整形。底部篦切り、回転篦削り。	
12	坏 須恵器	覆　土	①(13.8)　②9.2 ③3.6	①チャート含、密。②良好③灰白色2.5Y⅞④½	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外傾する。	轆轤整形。底部篦切り、手持ち篦削り。	器面剝落する。
13	坏 須恵器	床　面	①(14.0)　②(9.0) ③3.4	①黒色鉱物粒含、密。②良好③内灰白N⅞、外灰N⅞④½弱	上げ底。体部は腰部に張りを有し、外傾して開く。	轆轤整形。底部篦切り、外周～腰部回転篦削り。	器面剝落する。
14	坏 須恵器	+11	①(15.2)　②9.8 ③3.9	①砂粒含、ほぼ密。②やや不良③灰白色2.5Y⅞④⅔	上げ底。体部は腰部に張りを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部篦切り。手持ち篦削りか。	自然釉付着
15	坏 須恵器	覆　土	①(13.4)　②8.7 ③3.6	①黒色鉱物粒含、密。②良好③灰白色10YR⅞④½	上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り、撫でか。	体～底部吸炭
16	坏 須恵器	覆　土	①(14.4)　②8.1 ③3.7	①精良②極めて良好③灰白色N⅞④体部⅔欠損	わずかに上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転篦切り。	
17	甕 土師器	貯蔵穴	①21.5	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、粗。②不良③にぶい橙色5YR⅞④口、底欠。	胴部長胴形を呈し、緩く内彎。口縁部は外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	
18	甕 土師器	床　面	①(23.8)	①輝石、石英、長石、軽石含、密②良好③にぶい橙色5YR⅝④口縁½	肩部大きく張り、口縁部外傾して開く。	内面～口縁部外面指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
19	甕 土師器	覆　土	①13.9	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい赤褐色5YR⅝④口縁部	肩部に弱い稜をもち、口縁部は外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	接合痕
20	鎌 鉄製品	+17	現存長16.2　幅1.5～2.7 厚0.2～0.3　重量40	身部が大きく彎曲し、一端折れ曲がる。背側やや丸い。刃部研ぎ減りする。断片ながら木質痕跡あり。			
21	砥石 石製品	+8	長8.0　幅4.0 厚3.9	手持ち砥。方形状。断面凹状。小口面に自然面をのこす。4面使用。右側面は若干研ぎ減りする。おしなべて長軸方向に弱い擦痕。表面一部浅い沈線状をなす。流紋岩。			

表－54　H49号住居跡出土遺物観察表（図－99　図版－69）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床　面	①13.0 ③3.7	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR⅝④完形	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	底部煤付着
2	坏 土師器	+12	①12.7 ③3.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅝	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	底～体部煤付着
3	坏 土師器	+12	①13.0 ③3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④ほぼ完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部不定方向篦削り。	底部吸炭
4	坏 土師器	床　面	①(13.4) ③4.0	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④½弱	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は上端で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。体～底部一定方向篦削り。	
5	坏 土師器	床　面	①14.4 ③4.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅘	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
6	甕 土師器	+10	①24.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④上半⅔	胴部緩やかに内彎し、上半で弱く膨らむ。口縁部外反する。	内面～口縁部外面撫で、横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	胴下半煤付着
7	甕 土師器	カマド	②5.3	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④胴部	不安定な平底。胴部は緩やかに内彎して立ち上る。器肉薄い。	内面撫で。外面縦位の篦削り。底部篦削り。	胴下半～底部煤付着。接合痕

表－55　H50号住居跡出土遺物観察表（図－101・102　図版－69・70）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+11	①11.7 ③2.9	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅔弱	平底気味。体部緩やかに内彎し、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆　土	①(13.0) ③2.9	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④½弱	平底気味。体部緩やかに内彎し、口縁部は上端で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。底部篦削り。	
3	坏 須恵器	+20	①12.4　②6.0 ③3.7	①精良②良好③灰色N⅞④体部わずか欠損	平底。中央部で凸状。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転篦切り、未調整。	
4	坏 須恵器	覆　土	①13.0　②7.5 ③3.8	①精良②良好③内灰白7.5Y⅞、外灰白2.5Y⅞、N⅞④⅔	平底、底部凸状。体部直線的に外傾する。器肉一定	轆轤整形。底部回転篦切り、撫で。	焼きむらあり。
5	坏 須恵器	床　面	①12.4　②6.4 ③3.3	①精良②良好③灰白色2.5Y⅞、N⅞④⅔	上げ底、中央部で凸状。体部直線的に外傾し、口縁部わずかにくびれ、端部丸い。	轆轤整形。底部右回転篦切り。	
6	坏 須恵器	ピット	①13.3　②7.3 ③3.9	①チャート含、密。②良好③灰色N⅞④体部一部欠損	式げ底。中央部凸状。体部直線的に外傾し、上半で弱く稜をなす。	轆轤整形。底部右回転篦切り。	
7	坏 須恵器	覆　土	①12.9　②7.3 ③4.2	①軽石、チャート含、やや粗。②不良③灰白色7.5YR⅞④½弱	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り、外周部回転篦削り。	
8	坏 須恵器	覆　土	①15.4　②8.8 ③3.5	①チャート、軽石含、やや粗。②不良③灰白色10Y⅞④½	わずかに上げ底。体部外傾して開く。	轆轤整形。底部回転糸切り、外周部回転篦削り。	
9	台付甕 土師器	+8	①9.2　②7.8 ③12.6	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④台部一部欠損	胴部内彎し、上半で張り、肩部稜をもつ。口縁部、台部共に外傾する。	内面～口縁部外面、台部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	胴部煤付着
10	台付甕 土師器	床　面	①10.0　②7.5 ③13.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④胴、台一部欠	胴部球形をなして内彎、肩部稜をもつ。口縁部、台部共に外傾する。	内面～口縁部外面、台部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	胴部煤付着
11	甕 土師器	覆　土	①(20.2)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁部¼	口縁部「く」の字状に外傾する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横、斜位の篦削り。	内面煤付着
12	甕 土師器	床　面	①21.2	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④口縁部	胴部内彎して立ち上り、口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	煤付着
13	甕 土師器	覆　土	①21.6	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅞④口縁部½	胴部内彎して立ち上り、肩部で弱い稜をもつ。口縁部大きく外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	内外面一部煤付着

14	砥石 石製品	床面	長11.3　幅4.7 厚3.8	手持ち砥。揆形。断面凹状。先端部欠損。片側小口面は自然面をのこす。4面使用。手前側から奥側にかけて研磨減りする。長軸・斜方向に弱い擦痕。流紋岩	
15	鎌 鉄製品	＋8	現存長16.3　幅2.3～3.0 厚0.3～0.4　重量60	身部大きく彎曲し、一端折れ曲がる。背側平ら。左きき用か。やや小型。	
16	紡錘車？ 鉄製品	覆土	径8.0×8.0 厚0.6～0.7　重量30	平面形は楕円形を呈し、端部先細りする。紡輪部か。銹化著しい。	
17	棒状 鉄製品	覆土	現存長14.5　幅0.5 厚0.5　重量50	断面方形状を呈し、下端部先細りする。銹化著しい。	

表—56　H51号住居跡出土遺物観察表（図—104　図版—70）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.6)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR6/4④1/5	平底か。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	内面タール状付着物
2	甕 土師器	覆土	① 20.9	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密。②やや不良③橙5YR6/6④口縁部1/9	肩部に稜をもち、口縁部は内外面共に「コ」の字状をなす。	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
3	甕 土師器	カマド	① 20.3　② 4.2 ③ 29.3	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR6/4④胴部1/2欠	不安定な平底。胴部内彎して立ち上り、上半で最大径、肩部で稜をもつ。口縁部「コ」の字状。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面紐接合痕。

表—57　H52号住居跡出土遺物観察表（図—106　図版—70）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	蓋 須恵器	＋15	① 13.4 ③ 3.1	①酸化鉄、黒色鉱物粒含、密。②良好③青灰色5PB6/1④2/3弱	天井環状の摘。体部緩やかに外傾し、口縁部短く直立する。	轆轤整形。天井外周部回転篦削り。摘貼付。	自然釉付着
2	坏 須恵器	覆土	①(12.7)　② 8.3 ③ 3.5	①黒色鉱物粒含、密。②良好③灰白色N7/④1/2弱	上げ底。中央部凸状。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転篦切り。	
3	坏 須恵器	カマド内	② 6.7	①精良②良好③灰白色5Y7/1④底部2/3	わずかに上げ底。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	外面自然釉付着
4	鉄鉗 鉄製品	床面	現存長24.5　幅0.6 厚0.6　重量70	片側柄部及び要の一部残存し、止金具の為の孔わずかに認む。柄部断面銹化し、楕円形状を呈す。全体的に銹化剝落著しい。			

表—58　H53号住居跡出土遺物観察表（図—108　図版—70）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	＋8	① 12.2　② 6.6 ③ 3.7	①軽石、片岩含、密。②良好③灰黄色2.5Y7/2④3/4	平底。体部は下端でくびれ、直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	甕 土師器	床面	①(18.7)	①軽石、長石、輝石、チャート含、密②良好③橙色7.5YR6/6④上半1/4	胴部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部外反する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	
3	砥石 石製品	床面	長6.6　幅4.0 厚2.5	手持ち砥。断面凹状。片側小口面は自然面をのこす。4面使用。両側面はさらに面取され、片減りする。長軸、斜方向に擦痕。一部研主体を整えたと考えられ、沈線状をなす。流紋岩。			全面タール状付着物あり。

表—59　H54号住居跡出土遺物観察表（図—110　図版—71）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床面	① 13.1　② 7.0 ③ 3.6	①チャート、軽石含、ほぼ密②良好③灰色N5/④口縁部一部欠	平底。体部緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	底部穿孔か
2	坏 須恵器	覆土	①(12.6)　② 7.0 ③ 3.3	①チャート、軽石、小石含、密。②良好③青灰色5BG6/1④1/3弱	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部は外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	埦 須恵器	床面	① 16.1　② 9.0 ③ 6.9	①片岩、石英、チャート、酸化鉄含、粗。②不良③浅黄色2.5Y7/4④2/3	大型の椀。「ハ」の字に外傾するしっかりした高台。体部は内彎して立ち上り、口縁短く外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	酸化焔焼成
4	甕 土師器	カマド	① 20.1	①輝石、酸化鉄、石英含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/8④口縁部	口縁部一旦内傾、上半で外傾する。肩部～口縁部への変換不明瞭。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横、斜位の篦削り。	接合痕
5	甕 土師器	覆土	①(20.1)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR6/6④口縁部1/3	胴部緩やかに内彎し、口縁部「コ」の字状をなす。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
6	甕 土師器	覆土	①(21.3)	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR7/6④口縁部2/3	口縁部「コ」の字状を呈し、上半は強く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
7	甕 土師器	覆土	①(23.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR7/4④口縁部1/2	口縁部「コ」の字状を呈し、口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

表—60　H55号住居跡出土遺物観察表（図—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	覆土	② 6.2	①チャート、軽石、長石含、密。②良好③灰白色7.5Y7/1④底部	上げ底。体部下端に弱いくびれ。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	甕 須恵器	覆土		①軽石含、精良②不良③赤灰色2.5YR5/1④胴部片		内面当て目、外面叩き目	

表—61　H56号住居跡出土遺物観察表（図—114　図版—71）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(14.5)	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④½弱	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部はわずかに外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 須恵器	不明	①(13.0)　②　8.3 ③　3.5	①軽石含、精良。②良好③灰白色10Y⅞④½	上げ底、中央部突出する。体部は直線的に外傾する。	轆轤整形（右回転）底部回転篦切り。	
3	鉢 土師器	覆土	①(27.4)	①輝石、軽石、チャート、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④¼弱	体部は内彎して立ち上り、口縁部変換点で稜を有する。口縁部は大きく外反。	内面撫で。口縁部外面横位の撫で。体部斜位の篦削り。	体部接合痕著しい。器面剝落する。
4	甕 土師器	カマド	①　24.9	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③赤色10R⅝④胴部下半～底部欠損	口縁部「く」の字状に外反、胴部は上半部で弱く膨らみ、下半部で緩やかにすぼまる。	口縁部内外面横位の撫で。胴部内面上半横位、下半部縦位の撫で。外面横、斜位篦削り。	

表—62　H59号住居跡出土遺物観察表（図—117・118　図版—71）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	周溝	①　13.3　②　3.6	①輝石、軽石。石英、長石含、密②良好③にぶい橙色7.5YR⅞④完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は端部でわずかに内傾する。器面凹凸する	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	体部内外面煤付着
2	坏 土師器	貯蔵穴	①　13.1 ③　3.2	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅝④完形	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は上端部でわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	体部内面中央部篦記号
3	坏 須恵器	床面	①　13.7　②　8.0 ③　4.4	①軽石、黒色鉱物粒含、精良。②良好③明青灰色5BG⅞④ほぼ完形	底部平底で中央部突出する。体部直線的に立ち上る。器肉は一定	轆轤整形。底部右回転篦切り。	
4	坏 須恵器	周溝	①(12.6)　②　(8.9) ③　3.4	①石英、軽石、黒色鉱物粒含、密。②良好③灰白5Y⅞④底部½体部¼	底部は中央部で上げ底。体部は下端でくびれ、緩く彎曲する。	轆轤整形。底部回転糸切り、外周部手持ち篦削り。	
5	坏 須恵器	+28	②　8.0	①砂粒含、密。②やや不良③灰白色2.5Y⅝④体部下半	若干上げ底。体部は残存形で内彎気味を呈する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	
6	埦 須恵器	周溝	①　11.7　②　6.3 ③　4.0	①精良。②良好③明青灰色5BG⅝④口縁一部欠損	底部は直立する短い高台を貼付、体部内彎して立ち上る。小型の器形	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	高台部左右でいびつ
7	甕 土師器	覆土	①　21.4	①軽石、石英、長石含、密。②良好③橙色7.5YR⅝④口縁部⅓	肩部張り、口縁部は短く直立し、上端で内屈する。	口縁部横位の撫で。肩部縦位の篦削り。	
8	甕 土師器	貯蔵穴	①(19.8)	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④¼	体部は丸みをもって内彎し、口縁部は「く」の字状に外傾して立ち上り、上半部で外傾する。器肉は薄い。	内面撫で(一部篦撫でか)。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	
9	釘 鉄製品	覆土	現存長3.6幅0.4～0.5 厚0.4　重量——	方形状を呈し、下端部は先細りする。銹化著しい。			

表—63　H60号住居跡出土遺物観察表（図—120　図版—71）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床面	①　13.2　②　6.3 ③　3.6	①砂粒、小石、片岩含、やや粗。②やや不良③灰白5Y⅞④体部一部欠	若干上げ底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	体部内外面吸炭
2	埦 須恵器	床面	①　14.7　②　.6.8 ③　4.6	①砂粒、小石含、粗。②不良③灰白色2.5Y⅞④完形	底部は直立する短い高台。体部内彎気味に立ち上り、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	体部内外面一部吸炭
3	甕 土師器	床面	①　20.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅞④口縁部⅔	口縁部内外共に「コ」の字状を呈し、口唇部沈線状をなす。	内面撫で(胴一部篦撫でか)。口縁部指押え、強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	内外面共に接合痕あり。
4	甕 土師器	床面	①　18.7	①輝石、軽石、酸化鉄。長石含、密②良好③明赤褐色2.5YR⅝④¼	口縁部内外面共に「コ」の字状、胴部は丸みをもって内彎し、上半部で器最大径を有する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横位、斜位の篦削り。	
5	甕 土師器	床面	①　20.7	①輝石、軽石、酸化鉄、長石含、密②良好③橙色2.5YR⅝④¼弱	口縁部は強い「コ」の字状を呈し、胴部は上半部で大きく張る。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面（胴部接合痕あり）

表—64　H61号住居跡出土遺物観察表（図—122　図版—72）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	①(20.7)	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密②良好③にぶい橙色5YR⅞④¼	口縁部「コ」の字状を呈し、胴部は上半部で緩やかに内彎する。器最大径は胴部上半にもつ	内面撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	
2	甕 土師器	覆土	①(18.8)	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④½	口縁部「コ」の字状、肩部に弱い稜をもつ。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横、斜位の篦削り。	

表—65　H81号住居跡出土遺物観察表（図—124　図版—72）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①　12.3　②　8.0 ③　3.8	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④¾	やや凸状をなすものの平底気味。体部は直線的に立ち上り、口縁部変換点わずかに外傾	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	+6	①　12.4　②　8.4 ③　3.5	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁一部欠損	凸状ながら平底気味。体部は下半で弱くくびれた後緩やかに立ち上る。	内面撫で。外面指押え、撫で。底部篦削り。	内面墨書「丙」
3	甕 土師器	覆土	①　20.7	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁部～胴部¼	口縁部内外面共に強い「コ」の字状。肩部に稜をもち、胴部は内彎、上半で器最大径を有す。	口縁部内外面横位の撫で。胴部内面撫で。外面横、斜位の篦削り。	胴部の張り強い。口縁部接合痕。
4	鎌 鉄製品	+6	現存長10.5　幅2.5～3.3 厚0.25　重量30	身部が大きく彎曲する。一端が折れ曲がる。長軸方向に木質部付着する。背丸。刃部先端を大きく欠損する。			
5	釘 鉄製品	+5	現存長8.2　幅0.7 厚0.6　重量10	断面方形状。頭部折れ曲がる。下端部欠損。銹化著しい。			
6	鉄鉗 鉄製品	+6	現存長30.0　柄部幅0.8 厚0.7　重量240	柄部先端をわずかに欠損する。柄部断面円断状。夾部は比較的短く、要部より極弱い角度で彎曲する。			

7	砥石 石製品	カマド	長6.7　幅4.9 厚2.3	手持ち砥か、表面凹状、裏面凸状。左側面研磨減りし、やや撥形にちかい形状。4面使用。表・両側面は長軸・斜方向に弱い擦痕。裏面は強い沈線状の痕跡及び長軸、斜方向に弱い擦痕。流紋岩。	
8	紡錘車 石製品	カマド	上径3.8　下径4.4 厚1.4　孔径0.8	断面台形状を呈し、下径面はシャープな平坦面をなす。上径はわずかに凸状をなし、器面極めて滑らか、両面共に周縁部に斜方向の擦痕、製作時の調整痕。側面は面取りした後、横位ないし、縦位方向に研磨の際の擦痕あり。流紋岩。	砥石からの転用。
9	紡錘車 石製品	＋6	上径2.7　下径3.7 厚 1.5　孔径0.9	断面台形状、下径面はシャープな平坦面をなすが、上径面は使用減りし、やや丸い。側面はよく研磨され刻書「勢多郡揚□五百同都□」裏面は擦痕顕著。かんらん岩（蛇紋岩）。	
10	紡錘車 石製品	カマド	上径6.1　下径6.1 厚 2.5　孔径0.9	断面長方形状を呈し、上、下径面共に平坦面をなす。両面共に弱い擦痕あり、製作時によるものか。側面はよく研磨されている。角閃石安山岩。	

表－66　H62号住居跡出土遺物観察表（図－126　図版－72）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	カマド	①(13.0)　②　7.0 ③　3.3	①軽石、長石含、密。②良好③青灰色10BG5/1④1/3	若干上げ底。体部直線的に立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。口縁部再調整。	
2	坏 須恵器	カマド	①(12.9)　②　7.3 ③　3.2	①軽石含、精良。②良好③灰色N5/④1/2弱	平底。体部は直線的に立ち上る。底径大きく、器高低い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	埦 須恵器	カマド	①15.0　②　7.0 ③　5.1	①砂粒含、精良。②やや粗③灰黄色2.5YR7/2④体部1/2、高台部欠損	体部は、下半部わずかに丸みを有するもののほぼ直線的に立ち上り、口縁部は若干外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	酸化焔焼成気味
4	甕 須恵器	カマド	頸部径26.6 胴部最大径58.0	①砂粒含、密。②やや不良③灰黄色2.5Y8/2④頸部1/5、胴部完存。	大型の甕で、肩部から胴部にかけてなだらかに内彎する。	内面青海波紋状当て目、外面条線状叩き目	焼成あまい。
5	甕 土師器	カマド	①20.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/8④胴部下半部を欠損	口縁部「コ」の字状を呈し、区画明瞭。胴部は上半部に丸みをもって内彎する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	

表－67　H63・80号住居跡出土遺物観察表（図－128　図版－72）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 H63	坏 土師器	覆土	①12.2 ③　2.9	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/8④底部1/3体部1/3	平底。体部は緩やかに彎曲し、上半部で弱くくびれる。口縁部は端部でわずかに内傾。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2 H63	坏 土師器	覆土	①(11.8) ③　3.2	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/8④1/4	平底。体部はほぼ直線的に立ち上る。底部～体部への変換点は不明瞭。	内面撫で。口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
3 H80	坏 土師器	床面	①(12.8)	①輝石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR7/4④1/4	平底。体部は中位で弱くくびれるが、緩やかな角度で外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
4 H63	蓋 須恵器	＋5	①15.3　②　6.9 ③　2.3	①軽石、チャート含、やや粗。②良好③灰色N5/④1/2	中央部凹むがほぼ平坦な天井部。体部外傾して開き、口縁部短く内傾する。	轆轤整形。天井部右回転糸切り。	皿としての機能も想定される。
5 H63	甕 土師器	床面下	①19.9	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR6/8④口縁～胴部1/2	口縁部「コ」の字状を呈し、口唇部は直立する。肩部に極弱い稜をなすものの張りはみられない。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	
6 H63	土錘	床面下	長3.3　幅1.3 孔径0.4	①輝石含、密。②良好③淡黄色2.5Y8/3④ほぼ完形	棗形の器形を呈し、両端部は片側径小さく、もう一方はやや大きい。	器面篦磨き。端部は篦切りか。	
7 H63	砥石 石製品	＋5	長4.8　幅3.8 厚2.2	手持ち砥。楕円形。断面凹状。奥側肩部寄りに径0.9～1.0cmの孔が穿たれている。3面使用。長軸方向に弱い擦痕。流紋岩。			
8 H63	刀子 鉄製品	ピット	現存長13.5 茎幅0.7 茎厚0.4　重量25	刃部先端を欠損する。棟関部は茎よりわずかの段差を認む。刃部は、茎部より緩い角度で段を有し研磨減りする。茎部は端部に向かって先細りし一部木質残存。			

表－68　H64号住居跡出土遺物観察表（図－130・131　図版－73）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	覆土	①(13.2)　②　7.9 ③　3.3	①砂粒含、精良。②不良③灰白色7.5Y8/3④1/4	若干上げ底。体部は下半部で丸みを有し、上半部～口縁部にかけて外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	体部淡橙色を呈する部分あり。
2	埦 須恵器	床面	①(15.4)　②　6.6 ③　5.2	①長石、輝石、チャート質粒子含、やや粗。①不良③淡黄色2.5Y8/3④1/4強	底部は肥厚した断面台形状の短い高台。部はわずかに丸みをもって立ち上り口縁部で外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	胎土あらく焼成あまい。
3	皿 須恵器	床面	①14.0　②　6.4 ③　2.4	①軽石、黒色鉱物粒含、密②良好③内灰色7.5Y7/1外灰白5Y7/1④3/1	底部は外傾する肉厚の高台貼付。体部は大きく「ハ」の字状に開き口縁部ではほぼ水平となる。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	調整雑、器にゆがみ
4	甕(台付) 土師器	床面	①11.7	①輝石、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁部1/2	口縁部は下半で内傾し、上半部は外反する。肩部稜をもつ。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	外面煤付着
5	甕 土師器	＋34	①20.3	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/8④口縁部1/2	口縁部は「コ」の字状を呈し、肩部の張りはみられない。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
6	甕 土師器	覆土	①(20.6)	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR7/6④口縁部1/3	口縁部は「コ」の字状を呈する。肩部変換点に稜をもつ。口唇部は沈線状をなす。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	肩部煤付着 接合痕
7	甕 土師器	カマド	①(21.0)	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR5/8④口縁部1/6	口縁部内外面共に「コ」の字状を呈し、口唇端部は沈線状をなす。胴部は上半部で張りを有する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
8	甕 須恵器	カマド	現存高34.5 胴部最大径37.3	①砂粒含、密。②不良③灰白色5Y8/1④口縁部・底部欠、胴上半1/4欠	胴部は下半部で直線的に立ち上り、上半部で大きく張りを有して肩部に至る。	内面同心円状、当て目（波紋状をなす）。外面条線状叩き目認む。	

表－69　H65号住居跡出土遺物観察表（図－133　図版－73）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/8④1/6	平底。体部はやや屈曲気味に内彎し、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面放射状篦磨き。外面上半指押え。下半～底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(13.3)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/8④1/6	平底。体部は緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面放射状篦磨き。外面上半指押え。下半～底部篦削り。	煤付着

3	坏 須恵器	覆　土	① 12.6　② 6.3 ③ 3.3	①軽石含、密。②良好③灰色10Y 5/1④体部1/3欠損	上げ底。体部は下端部で若干の丸みを有するが、ほぼ直線的に外傾する。器肉ほぼ一定	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	紡錘車 石製品	+11	上径4.2　下径4.1 厚1.3　孔径0.8	断面方形状を呈す。側面は研磨され滑らか、須恵器甕形態の転用			

表—70　H67号住居跡出土遺物観察表（図—135　図版—73）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	皿 須恵器	+9	① 13.0　② 5.7 ③ 3.2	①軽石、チャート粒子含、密②普通③淡黄色2.5Y8/3④体部の一部欠損	底部は直立する高台貼付。体部は「ハ」の字状に外傾し、口縁部は外反して水平面をなす。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	体部外面墨書「井」
2	皿 須恵器	床　面	①(13.3)　② 6.7 ③ 2.7	①砂粒、石英、長石含、粗。②やや不良③浅黄色2.5Y7/4④1/4	底部は厚くぼってりした高台貼付。体部は大きく「ハ」の字状に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	器面磨耗。胎土ざらざらする
3	塊 須恵器	貯蔵穴	①(15.0)　② 6.7 ③ 5.0	①輝石、軽石含、密。②良好③黄灰色2.5Y5/4/3	底部は直立する短い高台貼付、体部は腰部で張りを有し直線的立ち上り、口縁部わずかに外反	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	いぶし焼成
4	甕 土師器	貼床下	① 18.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/4口縁部1/4弱	口縁部は内外面共に「コ」の字状を呈し、口唇部は沈線状をなす。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
5	甕 須恵器	覆　土	①(23.2)頸部径13.8 口縁高(8.3)	①長石、石英含、粗②良好③青灰10BG5/1④頸部～口縁部1/4体部1/4弱	頸部外傾して立ち上り、上端で屈曲、口縁部短く外傾する。	内外面横位の撫で。	紐接合痕
6	砥石 石製品	貼床下	長19.9　幅7.5 厚5.2	置き砥。荒砥。長方形状、断面凹状。自然礫を簡単に加工したものと考えられる。3面使用、顕著な擦痕は認められないが、右側面は2条の幅広の沈線痕顕著。安山岩、表面は円滑化している。			

表—71　H68号住居跡出土遺物観察表（図—137　図版—73）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴	① 12.4 ③ 3.2	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6④ほぼ完形	平底気味。体部は直線的に立ち上り、口縁部は外傾して開く。	内面撫で。口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	口唇部煤付着
2	坏 須恵器	床　面	① 13.2　② 7.1 ③ 3.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③灰色N5/④5/3	上げ底。体部は下半で丸みを有し、上半部で外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	底部強い切り離しによりいびつ
3	坏 須恵器	カマド	①(13.0)　② 6.3 ③ 4.1	①長石、石英、軽石含、やや粗。②良好③灰白色7.5Y7/4④1/2弱	平底。体部外傾して開き、口縁部は外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	底部切り直し
4	皿 須恵器	覆　土	①(13.8)　② 6.6 ③ 2.7	①石英、黒色鉱物粒、砂粒含、粗。②不良③灰白色5Y8/4④3/3	高台部は短く、わずかに外傾する。体部は「ハ」の字状に開き、口縁部で水平となる	轆轤整形。付高台	器面磨耗著しい 焼成あまい
5	甕 須恵器	カマド		①砂粒含、精良。②良好③灰白色2.5Y7/4④口縁部小破片	頸部直線的に外傾し、屈曲した後、口縁部は短く内傾する	内外面撫で	
6	甕 須恵器	覆　土	①(21.3)	①軽石、長石含、精良②極めて良好③灰色N5/④口縁部～肩部1/4	肩部が大きく張り頸部は外反。口縁部はわずかに内傾して立ち上る。	頸部、口縁部横位の撫で。肩部内面同心円状当て目、外面叩き目。	
7	鉋か 鉄製品	覆　土	現存長16.8 軸幅0.7 厚0.7　重量25	軸部楕円形状の断面を呈し、先端部は平たいつくりで、やや三角形状の形態をなす。先端部は軸部より片側に大きく彎曲する。			

表—72　H69号住居跡出土遺物観察表（図—139　図版—74）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	塊 須恵器	貯蔵穴	① 14.0　② 6.0 ③ 4.5	①長石、片岩質粒、軽石含密②不良③にぶい黄橙色10YR7/4④高台欠	体部は緩やかに内彎して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部外面墨書「内」
2	塊 須恵器	覆　土	①(15.3)　② 6.9 ③ 4.4	①輝石、軽石、長石含密②やや不良③黒褐色7.5YR3/4④体3/高台端欠	底部は断面台形状で短く外傾する。体部は緩やかに彎曲し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。	

表—73　H70号住居跡出土遺物観察表（図—141　図版—74）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床　面	① 12.8　② 6.5 ③ 3.3	①黒色鉱物粒、長石、軽石含、密。②良好③灰色7.5Y5/1④体部一部欠	わずかに上げ底。体部は下端部に丸みを有し、緩やかに彎曲する。口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	釘か 鉄製品	貯蔵穴	現存長6.8　幅0.5 厚0.4　重量——	断面方形状を呈し、両端部を欠損する			

表—74　H71号住居跡出土遺物観察表（図—143　図版—74）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	覆　土	①(13.6)　② 7.1 ③ 4.0	①長石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/6④1/3	若干上げ底と考えられる。体部は下端部でくびれた後上半部で膨らむ。口縁部は外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	酸化焔焼成
2	塊 須恵器	+11	② 7.8	①精良②不良③にぶい橙色7.5YR7/4体部上半部・高台部欠損。	若干上げ底。体部は現存で直線的に立ち上りを示す。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台	底部高台痕
3	甕 土師器	カマド	①(18.9)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/4④口縁部1/4	口縁部「コ」の字状で、口縁上端部は沈線状をなす。	内面撫で、口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

表—75　H72号住居跡出土遺物観察表（図—145）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	砥石 石製品	不　明	長6.8　幅3.2 厚2.2	手持ち砥。断面方形状、均一的。4面使用、また片側小口面に使用痕（研磨の形跡は認められない）。各使用面長・短軸に弱い擦痕。左側面・小口片側面は沈線の痕跡あり、研主体を整えるための様な シャープさに欠ける。流紋岩。	
2	鍛冶椀形滓	覆　土	径7.4×8.7 厚3.0　重量250	表面は中央に向って窪み、裏面は曲面を示す。周縁部は海綿状をなし、気泡あく。地肌は茶褐色を呈し、表面中央及び裏面の一部に鏽付着する。比重重く、マグネットの反応は強い。	

表—76　H73号住居跡出土遺物観察表（図—147　図版—74）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	＋5	① 12.9　② 6.3 ③ 4.3	①軽石、輝石含、粗。②やや不良③灰白色7.5Y⅞/④体部¼欠損	わずかに上げ底。体部は下端部で弱くくびれた後緩やかに彎曲。口縁部はわずかに外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	胎土あらく焼成あまい。
2	甕 土師器	カマド	①(12.0)	①輝石、軽石、石英含、やや粗。②良好③橙色５ＹＲ⅞④口縁部¼・体部½弱	口縁部「コ」の字状、体部は丸みをもって内彎する。肩部に稜をもつ。器肉やや厚い	内面撫で。口縁部外面横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	
3	砥石 石製品	＋10	長15.2　幅11.6 厚 6.4	置き砥。荒砥。楕円形、断面凹状。自然礫を簡単に加工、４面使用。長軸方向に沈線顕著。左側面は手前側より奥部側にかけて研磨減りする。裏面タール状付着物。安山岩。			

表—77　H74・75・76・79号住居跡出土遺物観察表（図—149　図版—74）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 H75	坏 須恵器	覆土	①(12.3)　② (6.4)	①小石、軽石含、密。②良好③灰色7.5Y⅝/④¼	平底か。体部わずかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2 H79	坏 須恵器	覆土	①(13.8)　② (7.1) ③ 3.4	①軽石、長石、石英含、やや粗。②不良③灰白色５Ｙ⅞/一部褐色味④¼	若干上げ底気味。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	器面磨耗する。
3 H76	埦 土師質須恵器	カマド	①(13.9)　② (6.9) ③ 4.6	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③明赤褐色2.5ＹＲ⅝④体部½欠損	短くだれた高台。体部は緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
4 H75	埦 須恵器	覆土	①(15.0)　② 6.2 ③ 5.1	①軽石、黒色鉱物粒含、密。②良好③灰白色10Ｙ⅞/④¼	短く直立する高台。体部は彎曲して立ち上り、口縁部で外傾する。体部中位に張りを有す	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
5 H75	甕 土師器	覆土	①(14.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい黄橙色10ＹＲ⅝④口縁部¼	口縁部「コ」の字状を呈する。器肉は薄い。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
6 H74	甕 土師器	床面	①(20.0)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色５ＹＲ⅝⑤口縁部¼	「コ」の字状の口縁を有する。	口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
7 H76	甕 土師器	覆土	① 21.0	①輝石、軽石、石英含密②良好③橙色５ＹＲ⅞④口縁～胴部上半½弱	口縁部強い「コ」の字状を呈し、上端部は沈線状をなす。胴部は上半部張りがなく緩く内彎	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	一部指押え痕顕著。
8 H76	甕 土師器	カマド	① 18.6	①輝石、石英、小石、軽石含、密。②良好③橙色５ＹＲ⅝④胴下半～底部欠	胴部丸みをなして内彎し、口縁部上半で外反する。	内面撫で。一部接合痕残す。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	
9 H76	甕 土師器	カマド	① 17.7　② 3.8 ③ 25.0	①輝石、軽石、小石、長石、酸化鉄含、密②良好③橙色7.5ＹＲ⅝④⅔	口縁部「コ」の字状を呈し、胴部上半で丸み強く、下端部で急激にすぼまる。上半で器最大径を有す。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面接合痕
10 H79	紡錘車 石製品	覆土	上径4.7　下径5.6 厚 1.6　孔径1.0	断面台形状を呈し、長・短径部共に平坦面をなす。表・裏面は共に周縁部に放射状に擦痕あり。製作時の調整痕。側面はよく研磨され滑らかである。流紋岩。			
11 H74	砥石 石製品	床面	長6.1　幅3.1 厚2.9	手持ち砥。方形状、断面凹状。表・裏面及び、右側面、片側小口面に条痕状の加工痕が認められる。４面使用。長軸方向に弱い擦痕。流紋岩。			

表—78　H77号住居跡出土遺物観察表（図—151　図版—74）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.2)	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色５ＹＲ⅝④¼弱	平底気味。体部は緩やかに彎曲、口縁部変換点でくびれ、外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	紡錘車 石製品	カマド	上径4.5　下径5.6 厚1.2～1.4 孔径0.9	やや大型の器形で断面台形状。上・下径面は中央部に向って緩く窪む。両面及び側面はよく研磨され、孔付近及び周縁・側面に使用時及び製作時の擦痕顕著。上・下径面に「弓」・「春日」・印の刻書あり。特に上径面は13等分の放射区画認む。側面は刻章らしき痕跡あり。変質蛇紋岩。			

表—79　H78号住居跡出土遺物観察表（図—153　図版—74）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	カマド２	①(12.2)　② (5.4)	①精良②良好③灰白色2.5Ｇ Ｙ⅝/④½弱	若干上げ底。体部は緩やかに彎曲、口縁部外反する。器肉ほぼ一定。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	器形ややいびつ
2	坏 須恵器	床面	① 13.4	①石英、小石含、密②わずかに不良③にぶい黄色10Ｙ Ｒ⅞/④½弱	ほぼ平底。体部は直線的に立ち上り、口縁部で大きく外反する。	轆轤整形。底部切り離し不明	酸化焔焼成
3	甕 土師器	カマド２	①(20.7)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色５ＹＲ⅞④口縁部⅓	口縁部は、下半部で内傾して立ち上り、上半部で外反。口唇部沈線状をなす。肩部張りなし。	内面撫で、口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

表—80　H82号住居跡出土遺物観察表（図—155　図版—75）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.9　② 8.0 ③ 3.0	①輝石、長石、軽石、石英含、密。②良好③橙色５ＹＲ⅞④⅔	平底。体部緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部変換点でわずかにくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	器面煤付着
2	坏 土師器	＋18	① 12.8　② 8.2	①輝石、石英含、密。②良好③橙色2.5ＹＲ⅝④½強	平底。体部緩やかに彎曲する。口縁部変換点の区画は不明瞭	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	内外面煤付着
3	坏(内黒) 土師器	周溝	①(11.6)　② 6.2 ③ 4.3	①長石含、精良②良好③淡黄色2.5Ｙ⅜④底部完存。体部½	わずかに上げ底。体部は下半で弱くくびれ、内彎して立ち上り、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。内面篦磨き、黒色処理。底部回転糸切り。	
4	埦 須恵器	床面	① 14.7　② 6.4 ③ 5.3	①輝石、小石含、やや粗②普通③灰黄2.5Ｙ⅞④底部完存、体部½弱	高台部は断面三角形で短く外傾する。体部は緩く彎曲して立ち上り、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	調整雑
5	埦 須恵器	床面	①(15.0)　② 7.9 ③ 5.6	①軽石、長石、片岩含、密。②良好③灰白10Ｙ⅞④底部完存、体部⅝弱	高台部は断面台形状でわずかに外傾する。体は丸みを持って立ち上り、口縁部外反する	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
6	甕 土師器	＋19	① 13.5	①輝石、軽石、密。②良好③橙色５ＹＲ⅝④口縁部～肩部	口縁部「コ」の字状を呈する。	内面撫で。一部接合痕を認む。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	外面吸炭
7	甕 土師器	床面	① 16.4	①輝石、砂粒、小石含、密。②良好③橙色7.5ＹＲ⅞④口縁部～胴部上半	胴部は丸みをもって内彎し、口縁部は「く」の字状に外反。胴部中位に最大径を有すると考えられる。	内面撫で（指撫で・篦撫で併用）。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	外面一部吸炭

8	甕 土師器	＋7	① 18.8	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④口縁部完存。胴部½	口縁部は「コ」の字状。肩部に稜をもつ。胴部緩やかに内彎して立ち上る。胴部上半に最大径有す。	内面撫で。口縁部横位の撫で。一部成形痕あり。胴部横、縦位の篦削り。	胴部煤付着
9	甕 土師器	＋7	① 20.2	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁部	口縁部内外面共に強い「コ」の字状を呈するが、やや外傾の度合い強い。	内面撫で(篦痕あり)。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
10	甕 土師器	＋8	① 21.0 ② 3.8 ③ 27.2	①輝石、長石、酸化鉄、小石含、密②良好③橙色2.5YR⅝④胴部⅔欠損	口縁部内外面共に「コ」の字状。胴部は上半部に張りを有し、下半部ですぼまり底部に至る	内面撫で。口縁部強い横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	底部～胴部煤付着

表－81　H83号住居跡出土遺物観察表（図－157　図版－75）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	① 15.1	①輝石、軽石、小石含、やや粗。②良好③橙色7.5YR⅞④口縁部	胴部は丸みをもって内彎し、口縁部緩やかに外反。胴部中位に最大径を有するものと考えられる。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	

表－82　H84号住居跡出土遺物観察表（図－159　図版－75）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴	① 11.0 ③ 3.8	①輝石、軽石、石英含、密。②ややあまい③橙色5YR⅝④完形	丸底。体部は内彎して立ち上る。口縁部変換点で稜を有し、短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	体～底部磨耗。
2	坏 土師器	＋13	①(12.9) ③ 4.1	①輝石、石英、軽石粒含、密。②良好③橙色5YR⅞④½	丸底。体部は緩やかに内彎、変換点で稜をなす。口縁部はわずかに外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	床面	① 11.8 ③ 3.7	①輝石、軽石、石英含、やや粗。②良好③橙色5YR⅝④完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
4	甕 土師器	カマド	① 21.8 ② 4.0 ③ 36.3	①輝石、軽石、酸化鉄含密②良好③にぶい橙5YR⅞④口縁部½欠損	平底。胴部長胴形をなし、上半で張りを有す。口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部上端横位、以下縦位の篦削り。底部篦削り。	底部周辺煤付着 接合痕

表－83　H85号住居跡出土遺物観察表（図－161　図版－75）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床面	① 13.3 ② 6.2 ③ 3.6	①輝石含、精良。②普通③灰白色5Y⅝④口縁部½弱欠損	わずかに上げ底。体部は直線的に立ち上り、口縁部は外反する。器肉はほぼ一定。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部外面墨書「土」
2	皿 須恵器	＋18	①(14.0) ②5.8 高台接合面径6.8 ③2.6	①長石、軽石、小石含、密。②良好③赤灰色2.5YR⅝④½強。	若干上げ底。体部大きく「ハ」の字状に開く。器肉厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。高台貼付痕あり。	酸化焔焼成。 高台部欠損。
3	埦 須恵器	床面	①(13.8) ② 6.7 ③ 4.8	①長石、軽石、砂粒含、密。②やや不良③灰白色5YR⅞④体部⅔欠損	高台部は短く外傾する。体部は下半で丸みを有し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	体部一部吸炭
4	埦 灰釉陶器	覆土	①(16.6) ② 8.5 ③ 5.1	①黒色鉱物粒含、密。②良好③釉薬にぶい緑色④½	高台部は三日月型。上半外傾、下半内傾、高台内傾外傾、体部は腰部に張りを有す。口縁部外反する。	轆轤。腰部～体部篦削り。底部回転篦削り。付高台	釉薬つけがけ
5	甕 土師器	カマド	① 20.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④胴部下半～欠損	胴部内彎して立ち上る。口縁部は外傾し、上端でくびれる。口唇部沈線状。	内面撫で(篦痕認む)。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面接合痕
6	甕 土師器	カマド	① 20.0	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁部	「コ」の字状の口縁。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	接合痕
7	甕 土師器	カマド	①(20.1)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁～胴部½弱	口縁部「コ」の字状、口縁端部沈線状をなす。胴部は内彎して立ち上り、上半部で大きく張る	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	接合痕
8	甕 土師器	カマド	① 20.0	①輝石、軽石、長石、石英含、密②良好③橙色2.5YR⅝④口縁～胴部½	口縁部「コ」の字状を呈し、口縁上端で内傾する。口唇部沈線状。胴部内彎し、上半で最大径	内面指頭による撫で、篦撫で。口縁部強い横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	接合痕

表－84　H86号住居跡出土遺物観察表（図－163　図版－76）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 12.6 ② 8.1 ③ 3.2	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞④ほぼ完形	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 12.2 ② 6.4 ③ 3.7	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④¾	平底。体部直線的に外傾し、口縁部変換点で稜をなす。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	外面煤付着
3	坏 須恵器	カマド	① 12.8 ② 6.5 ③ 4.5	①軽石、石英、長石含、密。②やや不良③淡黄色7.5Y⅝④体部⅔欠	ほぼ平底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	埦 須恵器	貯蔵穴	② 6.8	①精良②やや不良③淡黄色5Y⅝②体部上半部欠損	高台部断面台形状を呈し、短く外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
5	埦 須恵器	覆土	② 7.5	①精良②不良③灰色5Y⅝④体部上半及び高台部欠損	体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部回転糸切りか。	
6	長頸壺 須恵器	覆土	① 14.8	①石英、長石、小石含、やや粗。②やや不良③灰白色7.5Y⅝④頸部	頸部は上半で大きく外反し、口縁部は内傾して立ち上る。	内外面横位の撫で。	内面接合痕
7	刀子 鉄製品	＋12	現存長13.6　茎長5.6 刃厚0.3　茎厚0.3　重量20g		刃部先端を欠損する。茎は端部に向い先細りする。区部は、棟・刃側共に段をなす。背側は平ら。全体的に錆化著しい。		

表－85　H88号住居跡出土遺物観察表（図－165　図版－76）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.6) ② 16.7 ③ 4.3	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③にぶい黄橙色10YR⅞④¾	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、横位の篦削り。底部篦削り。	
2	坏 須恵器	床面	(13.4) ② 5.9 ③ 3.4	①軽石、石英含、密。②良好③にぶい黄色2.5Y⅝④体部⅔欠損	わずかに上げ底。体部はほぼ直線的に外傾し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部外面墨書「弓」

3	埦 須恵器	覆土	①(14.7) ② 5.5 ③ 4.8	①輝石、石英含、密。②やや不良③灰白色10Y8/1④底部1/2・体部1/2弱	小さい底部から、体部は丸みをもって立ち上り上半部～口縁部にかけて大きく外反。器肉一定	轆轤整形。底部右回転糸切り。高台部再調整	体部見込部周辺吸炭。高台部欠損
4	皿 須恵器	＋7	① 12.7 ② 6.4 ③ 2.9	①長石、軽石、黒色鉱物粒含、密。②良好③灰白色5Y7/1④体部1/4欠	直立気味の短い高台。体部「ハ」の字状に外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
5	皿 須恵器	床面下	① 14.1 ② 7.7 ③ 3.0	①軽石、酸化鉄、石英含、密。②不良③淡赤橙色2.5YR7/4④体部1/2欠損	底部は直立する厚くぼってりした高台。体部は直線的に開く。器肉は厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。	酸化焔焼成。
6	皿 須恵器	覆土	①(14.0) ② 7.4 ③ 2.7	①砂粒含、密。②若干不良③灰白色2.5Y8/1④体部1/4欠損	底部は外面直立、内面外傾する高台。体部直線的に開き、口縁部は外反して水平面をなす。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	体部内外面吸炭
7	甕 土師器	カマド	① 19.4	①輝石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR6/8④胴部上半～口縁部	胴部丸みをもって内彎し、口縁部内外面共に強い「コ」の字状をなす。	内面篦撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	器面磨耗している。
8	台付甕 土師器	周溝	台部径10.2	①輝石、軽石含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/6④体部下端1/3～台部	台部大きく「ハ」の字状に外傾する。	台部内外面横位の撫で。胴部下端横、斜位の篦削り。	
9	甕 須恵器	覆土	①(19.7)	①石英、長石、軽石含、やや粗。②良好③灰色7.5Y5/1④口縁部小破片	頸部は直線的に立ち上り、上端部で屈曲、口縁部直立する。	内外面共に横位の撫で。	
10	鍛冶椀形滓	覆土	径6.0×8.2 厚4.0 重量210	不整長楕円形を呈す。表面側で羽口付着し、裏面は曲線を描いて丸みを有する。地肌は粗鬆で部分的に海綿状をなす。色調は青茶褐色。磁着度はさして強くない。			

表—86 H89号住居跡出土遺物観察表（図—167）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(10.9) ② 4.1	①密。②良好③橙色5YR6/6④底部3/4、体部1/4	丸底。体部は緩やかに彎曲し、変換点で稜をもつ。口縁部は外傾して立ち上る。	内面撫で。口縁部外面横位の撫で。体部～底部篦削り。	器面磨耗著しい。
2	鴟 須恵器	カマド	器最大径10.0	①長石、軽石、黒色鉱物粒含、密。②やや不良③灰白N7/④体部小破片	不安定な底部から、体部は内彎して立ち上り、上半部で器最大径を有する。	外面撫で。肩部外面だれた刺突文、体部篦削り。	

表—87 H90号住居跡出土遺物観察表（図—169 図版—76）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(11.9) ② 7.8 ③ 2.9	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6底部1/2強。体部1/4	底部は突出するもののほぼ平底気味で、体部は下半部で弱くくびれ、直線的に外傾する	内面撫で、体部外面下半に指押え。底部はほぼ一定方向の篦削り。	底部外面外周部に接合による凹凸
2	坏 須恵器	覆土	①(12.6) ② 5.7 ③ 3.2	①石英、軽石、長石含、密。②普通③灰白色2.5Y8/2底部完存、体部1/6	わずかに上げ底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部は外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部内面吸炭
3	埦 須恵器	周溝	②(6.9)	①石英、軽石、黒色鉱物粒含、精良。②極めて良好③灰色10Y4/1④1/4	わずかに外傾する短い高台。体部直線的に立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
4	皿 須恵器	覆土	①(14.0) ② 7.7 ③ 3.2	①軽石、長石、輝石含、やや粗。②やや不良③青灰色5B5/1④体1/4、底1/2	底部は「ハ」の字状に外傾する高めのしっかりした高台。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	器肉ほぼ一定
5	鎌 鉄製品	カマド	現存長20.5 幅4.3～3.8 厚0.3 重量100	身部全体が大きく彎曲し、刃先端を欠損する。右手前端部ほぼ90°の角度で折れ曲がる。背側は平ら。			

表—88 H91号住居跡出土遺物観察表（図—171 図版—76）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	①(12.4)	①石英含、密。②良好③橙色5YR5/6④5/3	底部はわずかに突出するが、平底気味。体部は緩やかに彎曲し、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 土師器	＋7	①(12.2)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR5/6④1/3	体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
3	皿(内黒) 土師器	貯蔵穴	① 13.3	①軽石、輝石含、密。②良好③浅黄橙色10YR8/4④体部1/3残。	体部「ハ」の字状に外傾、口縁部わずかに外反。器肉やや厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。体部内面篦磨き、黒色処理。	体部外面墨書「个」（介か）
4	埦 須恵器	ピット	② 7.7	①軽石、石英、輝石、黒色礫含、密②良好③青灰色5B5/1④体部上半欠	底部は断面台形状の高台。わずかに外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
5	甕 土師器	床面	① 13.6	①軽石、輝石含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁～胴部上半1/3	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径、肩部稜をもつ。口縁部「コ」の字状。	内面撫で、篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内外面共に煤付着
6	甕 土師器	床面	① 19.9	①軽石、輝石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁部	口縁部「コ」の字状を呈するが、上半部外反の度合いはやや弱い。口唇部沈線状。	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	一部煤付着
7	甕 土師器	カマド	① 20.5	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR6/6④胴部上半～欠損	口縁部内外面共に「コ」の字状。口唇端部沈線状。区画明瞭。胴部は内彎して立ち上り、上半部で最大径を有する。器肉薄い	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面接合痕
8	甕 土師器	カマド	① 20.0	①軽石、輝石、長石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④胴部下半～欠損	口縁部明瞭な「コ」の字状を呈し、胴部球形をなして内彎する。口唇部沈線状。	内面撫で。口縁部横位の撫で。一部指押え痕。胴部横、縦位の篦削り。	内面接合痕
9	甕 土師器	カマド	① 20.4	①軽石、輝石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR6/6④胴部下半欠損	口縁部明瞭な「コ」の字状を呈し、特に上半で強くくびれ、稜をなす。胴部上半で丸み強い。	内面撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	上半一部煤付着 内面接合痕。
10	甕 土師器	カマド	① 19.5	①輝石、軽石含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/4口縁、胴部1/2弱	胴部球形をなして内彎し、上半で最大径を有す。肩部稜をなし、口縁部「コ」の字状。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	

表—89 H92号住居跡出土遺物観察表（図—173 図版—77・78）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 12.8 ③ 3.9	①軽石、輝石含、密。②良好③橙色2.5YR5/4④3/4	平底気味。体部は緩く内彎し、口縁部変換点でくびれ、外傾して開く。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	体部外面墨書「松」
2	坏(内黒) 土師器	床面	① 12.5 ② 5.3 ③ 3.2	①軽石、輝石含、密。②良好③橙色5YR5/4④完形	小さい底部から、体部は丸みをもって立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。体部内面黒色処理。	

3	坏 須恵器	＋6	① 12.2　② 5.2 ③ 3.8	①石英、軽石、輝石、小石含、やや粗。②やや不良③灰黄色2.5Y⅞④完形	小さい底部から、体部は深く直線的に立ち上り、口縁部は外反する。器肉はやや厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	胎土雑。焼しまりなし。やや小型。
4	埦（坏に転用か）須恵器	床　面	① 15.4　② 6.5 ③ 4.8	①石英、輝石、軽石含、精良。②やや不良③淡黄色5Y⅝④ほぼ完形	小さい底部から深い体部は、下端部でわずかに丸みを有した後、直線的に立ち上る。口縁部外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部内面吸炭。高台部は欠損
5	埦 須恵器	覆　土	① 15.1　② 7.8 ③ 5.7	①長石、石英含、精良②やや不良③淡黄色5Y⅝④口縁一部欠損	底部は若干外傾するしっかりした高台。体部はわずかに丸みをもつ。口縁部外傾して開く。	轆轤整形。底部切り離し不明。付高台。	
6	埦 須恵器	＋10	① 14.0　② 6.7 ③ 5.0	①酸化鉄、軽石含、密。②やや不良③灰黄色2.5Y⅞④¾	高台はだれて短く、断面台形状を呈す。体部は緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	体部外面油煙付着内面重ね焼痕
7	埦 土師質須恵器	床　面	①(12.2)　② 6.8 ③ 5.3	①長石φ0.4cm、軽石、小石含、やや粗。②やや不良③浅黄橙色10YR⅝④体⅔欠。	底部は若干外傾するぼってりした高台。体部直線的に立ち上り、口縁部は外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	器肉やや厚い。
8	埦 土師質須恵器	＋15	① 13.4　② 6.2 ③ 5.4	①小石φ0.5cm、長石、輝石含、粗。②浅黄色2.5YR⅝④体部¾・高台部½	底部は短くだれた高台。体部は深く丸みを持って立ち上り。口縁部は外反する。器肉厚い	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	つくり、調整雑
9	埦 土師質須恵器	覆　土	①(13.4)　② 6.9 ③ 4.6	①小石φ0.4cm、石英、軽石含、粗。②淡黄色2.5Y⅝④体部¼・底部½	高台は断面台形状で短くだれる。体部中位に張りを有するが直線的に立ち上り、口縁部外反。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	体部内面吸炭。つくり、調整雑
10	埦 土師質須恵器	＋15	① 13.9　② (6.2) ③ 5.05	①軽石、輝石、長石含、やや粗。②やや不良③淡黄色2.5Y⅝④⅘	底部は小さく短くだれた高台。体部中位に張りをもち直線的に外傾。口縁部わずかに外反	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台。撫で。	つくり、調整雑
11	埦 土師質須恵器	覆　土	① 13.9　② 6.3 ③ 5.1	①長石φ0.7cm、輝石、小石含、粗。②やや不良③浅黄橙色7.5YR⅝④¾	底部断面台形状。肉厚の高台。体部わずかき丸みをもって立ち上り、口縁部は外反する	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
12	埦 土師質須恵器	貯蔵穴	① 16.1　② 8.3 ③ 7.3	①長石、石英、輝石含、やや粗。②やや不良③浅黄橙色10YR⅝④¾	底部は「ハ」の字状に開く断面台形状の高い高台。体部は丸みをもって立ち上り、口縁部外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	体部内外面一部吸炭。
13	皿 灰釉陶器	＋19	①12.7 ②高台径6.5 最大径7.0　③2.8	①精良②良好③内面～体部上半施釉④口縁部一部欠損	高台部三日月型。体部は緩やかに張る。口縁部変換点でくびれ、外反する。口唇部丸い。	轆轤。腰部篦削り。底部回転篦削り。付高台。	小型。にぶい淡緑色の釉薬つけがけ
14	小　瓶 灰釉陶器	貯蔵穴	脚部最大径9.8	①精良②良好③見込及胴部外面淡緑色の釉薬④口縁・台部欠	若干外傾する台部から、体部は丸みを持って内彎する。器肉は肩部厚く、腰部薄い。	轆轤。台部貼付。	刷毛塗りか。外面釉流れ
15	瓶 灰釉陶器	＋25	② 9.2	①精良②良好③上半部刷毛塗りか。細粟淡緑色④下半¾	底部は断面台形状の短い高台。胴部は内彎して立ち上る。	轆轤。下端部篦削り。底部回転篦削り。	釉流れ現象あり。
16	甕 土師器	北カマド	①(9.8)	①軽石、輝石、石英含、やや粗。②良好③にぶい橙色5YR⅝④½弱	口縁部は「く」の字状に外傾する。体部内彎。器肉厚い。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	
17	甕 土師器	＋13	① 14.8　② 7.8 ③ 12.8	①軽石、石英、輝石含、やや粗。②良好③橙色5YR⅝④½	不安定な平底。胴部内彎して立ち上り、口縁部わずかに外傾して開く。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	
18	羽　釜	＋11	① 18.5 ③ 26.5	①長石、石英、小石含、密。②良好③浅黄橙色10YR⅝～橙色5YR⅞	不安定な平底。胴部内彎して立ち上り、上半で最大径。鍔上向きに張り出し、口縁部内傾する	内面撫で。口縁部～胴中位横位の撫で。下半縦位の篦削り。鍔貼付。	外面煤付着④底～胴一部欠く。
19	甑 (有脚羽釜型)	北カマド	① 23.9　② 21.3 ③ 29	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③浅黄橙色7.5YR¾④½強	脚部外反し、胴張り型。鍔部肥厚し大きく張り出す。口縁部直立し、上端で外反する。	内外面、脚部横位の撫で。内面下端2個所に強い押圧痕認む。	内面炭化物付着。外面煤付着。
20	甕 須恵器	覆　土	①(21.1)	①軽石、黒色鉱物粒含、密②良好③灰色7.5Y⅘④胴部上半欠損	胴部は大きく内彎し、口縁部は外反して立ち上り、端部で屈曲する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。外面当て目	口縁部に焼きひずみあり。
21	壺 須恵器	＋12	② 6.3	①軽石、長石、黒色鉱物粒、石英含、やや粗②良好③青灰色5B⅘④¾	平底の大きい底部から、胴部は下半部で直線的、上半部で内彎し、最大径を有する。	内外面横位の撫で。外面下端部横位の粗い篦削り。	胴部外面一部丹付着？
22	壺 須恵器	＋22	②14.8 胴部高32.8	①長石、軽石、チャート質粒子含、やや粗②良好③青灰色10BG⅘	平底。胴部は深く下半部で直線的に立ち上り、上半部で内彎する。	内面半月状の当て目。外面横位の撫で。	④口縁部欠損。
23	壺 須恵器	＋27	② 15.4 胴部高37	①長石、チャート質粒子、小石、軽石、石英含密②良好③黄灰色2.5Y⅝④口縁部欠損。	平底。胴部は深く下半部で直線的に立ち上り、上半部で内彎する。	肩部内面当て目。胴部撫で（凹凸あり）外面撫で。下端部篦削り。	胴部外面自然釉付着。紐接合痕
24	壺 須恵器	床　面	② 9.5	①小石、軽石、輝石含、密。②良好③灰白色5Y⅞④½	平底。外周部若干突出し、付高台か。胴部緩やかに内彎する。	内外面撫で。外面下端部篦削り。	外面煤付着。紐接合痕

表—90　H93号住居跡出土遺物観察表（図—175　図版—78）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 須恵器	＋30	① 16.2　② 7.9 ③ 5.5	①長石、酸化鉄、小石含やや粗②不良③橙色7.5YR⅞④体部¾欠損	高台部は、断面台形状で短く外傾する。体部はやや丸みをもって立ち上り、口縁部は外反する	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。撫で。	体部外面墨書「元」酸化焔焼成
2	刀子 鉄製品	覆　土	現存長6.2　刃部長2.3前後　茎長3.9 身幅0.15前後　茎幅0.2　重量10		刃部・茎両先端部欠損。背平。錆化している。		

表—91　H94号住居跡出土遺物観察表（図—177・178　図版—78）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	羽　釜	覆　土	①(21.3)	①石英、軽石、輝石、小石含、粗②やや不良③にぶい橙色10YR¾	鍔部は肉厚で強く張り出す。口縁部はわずかに内傾し、端部は平らである。	内面撫で。口縁～胴部上半横位の撫で、指押え。下半縦位の篦削り。鍔貼付	接合痕顕著④口縁部¼弱。
2	甕 土師器	床　面	① 21.0　② 4.2 ③ 27.1	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③橙色5YR⅞④胴部一部欠損	不安定な平底。胴部内彎して立ち上り、上半で最大径。口縁部外反する。	内面撫で（篦痕あり）口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	胴下半部煤状をなす。器肉薄い。
3	甕 土師器	床　面	② 11.7 胴部高27.0	①石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁部欠損	平底気味。胴部は大きく球形をなして内彎し、上半部で最大径を有す。	内面篦撫で、外面横、斜位の篦削り。	外面煤付着。
4	砥石 石製品	覆　土	長 3.5　幅 2.9 厚 2.6	手持ち砥、方形。断面凹状、小口面は剝離している。4面使用。斜方向に弱い擦痕。右側面は一部沈線状をなす。流紋岩。			

表—92　H95号住居跡出土遺物観察表（図—180　図版—78）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床　面	①(13.6)　② 5.6 ③ 3.9	①石英、軽石、輝石含、密。②やや不良③黄橙色10YR⅝④¼強	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	酸化焔焼成 内面吸炭

2	埦 須恵器	床面	① 14.2 ② (6.2) ③ 5.6	①輝石、軽石、砂粒含、やや粗。②普通③明オリーヴ灰色2.5G Y⅟₁④⅝	高台は短くだれる。体部はわずかに彎曲して立ち上り。口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	体部一部吸炭 調整雑
3	皿 須恵器	床面	① 14.2 ② 6.9 ③ 3.3	①輝石、長石、石英、軽石含、粗②良好。③灰色7.5Y⅟₁④¾	断面台形状の短い高台。体部は「ハ」の字状に開き、口縁部は大きく外反する。器肉やや厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	胎土、雑。 燻焼成か
4	甕 土師器	覆土	①(20.8)	①輝石、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞④口縁部⅓	口縁部「コ」の字状を呈し、口唇部沈線状をなす。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で肩部横位の篦削り。	

表一93　H96号住居跡出土遺物観察表（図一182　図版一79）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	覆土	① 12.9 ② 8.0 ③ 3.6	①軽石。砂粒含、密。②良好③灰白色2.5Y⅞④½	上げ底。体部は直線的に外傾し、口唇部でわずかに外反する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
2	甕 土師器	貯蔵穴	①(22.3)	①輝石、長石、石英、酸化鉄含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④口縁部⅛	口縁部「く」の字状に外反。端部で器最大径を有する。肩部変換点に極弱い稜をもつ。胴部張り弱い。	内面篦撫で。外面横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	口縁部焼きひずみあり。器肉薄い
3	甕 土師器	床面	①(22.2) 胴最大径22.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁部⅛	口縁部「く」の字状に外反。胴部緩やかに内彎。上半で口縁部より若干張り出し強く、器最大径有す。	口縁部横位の撫で。肩部外面変換点指押え。肩部以下横、縦位の篦削り。	
4	甕 土師器	床面	①(20.5) 胴最大径21.7	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁部½、胴部¼	口縁部緩く「く」の字状に外反。胴部は上半部で最大径を有し、下半部に移行して細くなる	口縁部外面指押え。内外面横位の撫で。胴部内面撫で。外面横・縦位の篦削り。	
5	甕 土師器	＋9	①(20.5) 胴最大径21.0	①輝石、酸化鉄、軽石、長石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④½	口縁部「く」の字状に外反。胴部上半部で最大径を有し、肩部で極弱い稜をもつ。	口縁部内外面横位の撫で。胴部内外面指頭痕、篦撫で痕。外面横・縦位の篦削り	外面接合痕残す。
6	甕 土師器	床面	①(20.6) 胴最大径21.2	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密②良好③橙色2.5YR⅝④口縁部¼	口縁部「く」の字状に外反。胴部上半部で最大径を有し、肩部で極弱い稜をもつ。	口縁部内外面横位の撫で。胴部内面篦あて痕。胴部横・縦位の篦削り。	

表一94　H97号住居跡出土遺物観察表（図一184　図版一79）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	張り出し部	① 13.2 ③ 3.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④ほぼ完形	丸底気味の不安定な底部。体部緩やかに内彎して立ち上り。口縁部は端部でわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。体～底部篦削り。	器高低い。
2	甕 土師器	床面	① 21.4 ② 5.4 ③ 26.8	①輝石、長石、軽石、酸化鉄含、やや粗。②やや不良③橙色5YR⅝④口縁部⅓欠損	口縁部は一旦緩く外傾した後外反。底部は不安定な平底。胴部は緩やかに内彎し、上半で大きく張りを有する。	内面撫で、一部篦あて痕。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面接合痕

表一95　H98号住居跡出土遺物観察表（図一186　図版一79）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.4 ③ 2.8	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁¼欠	安定した底部を有し、体部は緩やかに内彎して口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 須恵器	＋29	② 7.7	①精良。②良好③灰色N⅝④底部½	わずかに上げ底。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
3	埦 須恵器	床面	①(10.6) ② 7.3 ③ 4.6	①砂粒、小石含、やや粗。②若干不良③明青灰色5B⅞④底½体¼	高台部は内外面共に外傾する。体部はやや張りをもって立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。付高台。	小型。体部内面自然釉付着。
4	壺 須恵器	＋15	② 11.4	①軽石、チャート質粒子含、密。②良好③灰白色N⅞④底部	直立ないし、下端部で外傾する高台。	轆轤整形。底部回転篦切りか。付高台、撫で。	
5	盤 須恵器	＋32	② 12.2	①軽石粒含、やや粗。②良好③灰色5Y⅝④底部¼	高台部上半直立。下半部外傾する。	轆轤整形。付高台。底部回転篦切りか。	内面自然釉付着
6	甕 須恵器	＋39		①精良、軽石粒含、密。②良好③暗灰色5B⅘④口縁部⅛	頸部外反して立ち上る。	内外面横位の撫で。外面、7条1組の波状文2列廻る。肩部内面当て目痕。	
7	鎌 鉄製品	＋4	現存長7.3 幅2.5 厚0.3	身部全体が大きく彎曲する類。刃両端部を欠損。錆化著しい。			

表一96　H99号住居跡出土遺物観察表（図一188　図版一79）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 土師器	床面下	① 13.8 体部高5.0	①石英、軽石、輝石、酸化鉄含、粗。②やや不良③明赤褐色10YR⅚④高台欠	体部は深く内彎して立ち上り、口縁部変換点で内外面共に弱くくびれる。器肉厚い。	轆轤整形か。口縁部横位の撫で。体部外面手持ち篦削り（横位方向）底部撫で。	
2	埦 土師器	カマド	①(15.1) ②(7.8) ③ 5.9	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR⅝④¼弱	「ハ」の字状に外傾する肉厚の高台。体部は内彎して立ち上り、上半部で弱くくびれる。	轆轤整形。口縁部撫で。付高台。内面横、縦位の篦磨き。	
3	埦 土師質須恵器	床面	①(12.5) ② 7.2 ③ 6.9	①軽石、石英、輝石含、密。②やや不良③明赤褐色2.5Y⅝④½	底部には外傾して開く、高くしっかりした高台。体部は丸みを持って内彎し、口縁部付近で直立気味となる。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
4	埦 灰釉陶器	＋21	② 6.0	①精良、②良好③素地灰白色5Y⅝④底部½	高台部は、三日月型の類か。稜は不明瞭となり厚くぼってりしている。	轆轤。底部回転糸切り。付高台、撫で。	体部内外面釉薬痕 重ね焼き痕あり。
5	棒状 鉄製品	＋16	現存長3.9 幅0.3～0.4 厚0.2～0.3		両端部欠損、下端部に向って先細りする。断面方形状。錆化著しい。		
6	羽釜	床面	①(21.3) 最大径24.0	①石英、軽石、輝石含、やや粗。②良好③赤色10R⅙④口縁部⅛	口縁部は直立して立ち上り、端部でわずかに外傾する。鍔部は肉厚で台形状を呈し、強く張出し、最大径を有する。全体的に肥厚。	内面及び口縁部撫で。鍔貼付後の調整雑。胴部・鍔直下より横・縦位の篦削り。	

表一97　H100号住居跡出土遺物観察表（図一190　図版一80）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+14	① 11.6　② 8.3 ③ 3.2	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色5YR5/6④3/3	不安定ながら平底を呈し、体部やや直線的に立ち上り、口縁部変換点でくびれる。	内外面指押え、撫で。底部篦削り。	
2	坏 須恵器	+22	①(12.6)　② 6.1 ③ 3.7	①長石、軽石、酸化鉄含、やや粗。②良好③灰色7.5Y5/1④体部1/4欠損	上げ底気味。体部は緩やかに彎曲し、口縁部は外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	胎土やや雑。
3	坏 須恵器	覆土	①(13.2)　② 7.2 ③ 3.3	①長石、軽石含、密。②良好③青灰色5B1/6④体部1/4・底部1/4	若干上げ底の底部から、体部は極緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部再調整	
4	坏 須恵器	覆土	①(12.8)　② 6.2 ③ 3.3	①酸化鉄、軽石、黒色鉱物粒含、やや粗。②やや不良③灰白色N5/④1/2弱	わずかに上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
5	甕 土師器	カマド	①(20.0) 胴部最大径20.6	①酸化鉄、軽石、輝石、長石含、密②良好③橙色2.5YR5/6④口縁部1/3	口縁部ほぼ「コ」の字状。胴部内彎し、上半で最大径を有す。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	
6	砥石 石製品	覆土	長10.0　幅5.1 厚3.8	置き砥。荒砥か。側面及表裏面中位に凹みあり。何らかの転用砥の一種と考えられる。3面（両側面は研磨痕顕著）表面沈線状をなす。両側面は弱い擦痕が長軸に認められる。安山岩。黒灰色で灰色粒子を含む。多孔質。裏面は砥石として使用された形跡ない。			整状工具による敲打か凹凸あり。

表一98　H101号住居跡出土遺物観察表（図一192　図版一80）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	+10	① 12.1　② 6.6 ③ 3.7	①長石、黒色鉱物粒含、密。②良好③灰色N5/④体部1/3欠損	上げ底。体部直線的に立ち上り、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	坏 須恵器	ピット	①(13.5)　② 6.8 ③ 3.6	①長石、片岩含、密。②良好③明青灰色5B7/1④体部1/3欠損	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部外反する。器肉薄い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	蓋 須恵器	+12	摘径3.4 現存高 3.7	①長石φ0.4cm、石英含、密。②普通③灰白色5Y7/1④天井部3/4	体部緩やかに彎曲し、天井部だれた擬宝珠形の摘	轆轤整形。摘貼付。天井部外周篦削り。	
4	甕 土師器	カマド	①(20.7)	①輝石、石英、長石、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁部完存。	口縁部は上端部で弱く外反。肩部に張りがない	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横、斜位の篦削り。	
5	甕 土師器	カマド	①(21.0)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁部3/4	口縁部上半部で外反。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
6	甕 土師器	+17	①(18.8)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④1/3	胴部緩やかに内彎し、肩部で稜をもつ。口縁部「コ」の字状をなす。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	内面接合痕
7	甕 土師器	カマド	①(22.2)	①輝石、軽石、石英含、密。②若干不良③橙色7.5YR7/6④口縁部1/2	口縁部内外面共に「コ」の字状を呈し、肩部に稜をもつ。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横・斜位の篦削り。	
8	甕 土師器	+13	①(19.4)	①長石φ0.4cm、輝石、軽石、石英含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/6④1/2	口縁部「コ」の字状。胴部緩く内彎して立ち上り、上半で最大径を有する。張りはさほど強くない。	内面撫で、篦あて痕。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	
9	甕 土師器	+5	①(18.1)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁部1/4	口縁部内外面共に「コ」の字状。胴部上半球形状をなし肩部に稜をもつ。胴部上半で最大径	内面撫で。口縁部外面強い横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	

表一99　H102号住居跡出土遺物観察表（図一194　図版一80）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 黒色土器	+6	①(12.0) ③ 4.2	①軽石、石英、輝石含、精良。②良好③黒色5Y3/1④体部1/2弱欠損	底部平底だが、体部との変換点は不明瞭。体部丸みを持って立ち上り、口縁部沈線状をなす	内外面篦磨き、黒色処理。	椀
2	坏 須恵器	貯蔵穴	① 11.5 ③ 4.4	①精良。②極めて良好③灰白色7.5Y5/1④3/4	やや突出無味の底部で体部との変換点は不明瞭。体部は下端で丸みを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦削り。	体部吸炭。
3	坏 須恵器	覆土	①(12.8)　②(6.4) ③ 3.7	①長石、軽石含、やや粗。②不良③灰白色10Y8/1④1/3	上げ底。体部は下端部で丸みを有するもののほぼ直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	
4	坏 須恵器	+7	②　7.1	①黒色鉱物粒含、密。②良好③灰白色N7/6④体部上半欠損	上げ底。体部直線的に立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
5	埦 須恵器	覆土	②　7.9	①長石φ0.5cm、軽石含、密。②良好③灰赤色10R5/2④底部1/2	高台部「ハ」の字状に外傾する。調整丁寧。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
6	蓋 須恵器	貯蔵穴	① 12.4 ③ 3.3	①黒色鉱物粒、長石、小石含、密。②良好③灰白色2.5Y7/1④完形。	天井部中央、宝珠形摘。天井部平坦をなし、緩やかに外傾、口縁部直立する。	轆轤整形。天井部回転篦削り。摘貼付。	内面天井端部に接合痕あり。小型
7	甕 土師器	床面	①(12.1)	①輝石、石英、軽石粒含、密。②良好③にぶい赤褐色2.5YR5/4④口縁部1/3	口縁部わずかに外傾して立ち上り、端部は丸みをもつ。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部篦削り。	内外面煤付着。
8	甕 土師器	カマド	①(21.3)	①輝石、軽石粒、片岩粒子含、密。②良好③橙色5YR6/6④口縁1/4	口縁部外反。胴部丸みを有する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	接合痕
9	甕 土師器	+7	①(22.0)	①長石、輝石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR6/6④口縁部1/4	胴部緩く内彎。口縁部外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

表一100　H103号住居跡出土遺物観察表（図一196　図版一81）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.3)	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③にぶい褐色7.5YR5/4④1/2	丸底気味。件部緩やかに内彎し、口縁部外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	甕 土師器	カマド	①(20.8)	①輝石、長石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色7.5YR6/6④1/3	口縁部わずかに外反。胴部緩やかに内彎。	内面撫で。口縁部横位の撫で。指押え痕。胴部横、縦位の篦削り。	接合痕
3	砥石 石製品	覆土	長 9.8　幅 2.9 厚 2.7	手持ち砥。断面凹む。4面使用。（小口面自然面）。左側面一部沈線状をなす。その他は主に長軸方向に擦痕あり。表面研ぎ減り、わずかに弓張り状。手前肩から奥側左側にかけて研磨減り（右利き）。安山岩。流紋岩。			タール状付着物。

表一101　H104号住居跡出土遺物観察表（図一198・199　図版一81）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	①(11.4) ③ 3.0	①精良　②良好　③橙色5YR7/6 ④1/2弱	丸底。体部は緩く内彎して立ち上り、上半部で稜をなす。口縁部はわずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	床面下	①11.6 ③ 3.6	①精良　②良好　③橙色5YR6/6 ④完形。	丸底。体部は緩く内彎し、上半部で極弱い稜をなす。口縁部直線的に外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器形ややいびつ。
3	坏 土師器	床面下	①11.4 ③ 3.2	①砂粒含、密。②良好③橙色5YR7/6　④完形	安定した丸底。体部は緩く彎曲し、上半で稜をなす。口縁部はやや肉厚で、外傾して立ち上る	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	+19	①(11.6) ③ 3.5	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③ 橙色5YR6/8④1/2弱	丸底。体部は緩く彎曲し、上半部で稜をなす。口縁部はわずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
5	坏 土師器	床面	①11.6 ③ 3.8	①輝石、軽石含、密。②良好③橙色 5YR7/6④体部一部欠損。	丸底。体部は内彎し、口縁部変換点で屈曲、口縁部は内傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
6	甕 土師器	カマド	①18.0 ③ 28.0	①輝石、軽石、石英含、やや粗。②良 好③橙色7.5YR7/6④胴部一部欠損	丸底。体部は丸く内彎し、胴部中位で最大径を有する。口縁部外反。器肉やや厚い。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	胴部煤付着
7	甕 土師器	カマド	①23.3　②4.6 ③37.0	①輝石、石英、雲母含、粗。②良好③ にぶい橙色5YR7/4口縁部1/3欠損	平底。胴部下端に膨らみを有し、長胴形で口縁部は大きく外反、器最大径を有する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。底部篦削り。	接合痕。
8	甕 土師器	床面	①(21.0)	①輝石、軽石、石英含、やや粗。②良 好③橙色7.5YR7/6④口縁部小片	胴部は上半で直立し、口縁部は外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。上半部横位の篦削り。	№9と同個体か
9	甕 土師器	カマド	②4.3	①輝石、軽石、石英、小石含、やや 粗。②良好③橙色2.5YR6/6④1/3弱	平底。胴部直立する。下端部若干の丸み。	内面撫で。胴部外面縦位の篦削り。底部一定方向篦削り。	
10	甕 土師器	カマド	①21.4 現存長41.5	①石英、酸化鉄、軽石、輝石含、やや 粗。②良好③橙色5YR7/6④3/4	胴部下端で若干の膨らみを有した後直立する。口縁部大きく外反する。端部丸い。	口縁部内外面横位の撫で。胴部内面撫で。篦あて痕。胴部縦位の篦削り。	器面磨耗。 接合痕

表一102　H105号住居跡出土遺物観察表（図一201　図版一81）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	床面下	①14.6　②5.5 ③4.5	①酸化鉄、輝石、軽石、石英含、 密。②やや不良③淡黄橙色10YR 8/4 1/4欠損	若干上げ底の小さい底部から、体部は内彎して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。体部上半再調整。	胎土ざらつく。 器肉厚い。
2	坏 土師質須恵器	覆土	①(12.1)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密② やや不良③浅黄橙色10YR8/4 1/4	体部緩く内彎し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形（右回転）。	胎土ざらつく。
3	羽釜	覆土	①(20.7)	①石英、酸化鉄、輝石含粗②良好③ にぶい黄橙色10YR7/4口縁部1/6	鍔部は断面三角形状。肉厚で張り出しは弱い。口縁部はほぼ直立して立ち上る。口唇上端部はやや丸い。	内面撫で。口縁部外面横位の撫で。貼付後の調整やや雑。胴部鍔直下から篦削り。	酸化焔焼成。器肉厚くぼってりしている。

表一103　H106号住居跡出土遺物観察表（図一203　図版一81）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(11.9)	①石英、軽石含、密。②良好③橙色 5YR6/8④体部1/4	体部は丸みを持って外傾し、口縁部変換点で弱く屈曲。口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部篦削り。	
2	坏 土師器	+8	①11.6	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③ 橙色2.5YR6/8④1/4欠損。	丸底。体部は丸みを持って緩やかに外傾し、上半部で稜をなす。口縁部は短く外反する	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	外面底部吸炭。
3	坏 土師器	+7	①11.8 ③3.3	①小石含、やや粗。②良好③橙色 2.5YR5/4④1/2強	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部変換点で弱く屈曲する。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
4	甕 土師器	+14	①9.6 ③7.1	①小石φ0.4cm、軽石含、粗。②良 好③橙色5YR7/4④1/2	丸底。体部は内彎して立ち上り、中位で最大径。肩部で稜をなした後、口縁部は緩く外反。	内面撫で。篦あて痕あり。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
5	甕 土師器	+6	①(21.3)　②4.0 ③38.0	①小石、酸化鉄、軽石、石英含、 粗。②やや不良③橙色7.5YR7/6④ 口縁部1/2欠	平底。胴部は中位で若干の張りを有するがほぼ直立し、口縁部は外反する。	内面撫で。一部篦あて痕認む。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。底部篦削り。 胴部外面吸炭。	
6	甕 土師器	カマド	②3.6	①輝石、石英、軽石含やや粗②良好 ③にぶい赤褐色5YR5/4底部1/2	平底。体部は直線的に立ち上る。	内面撫で。外面斜位の篦削り。底部木葉痕	
7	甕 須恵器	床面	最大径23.0	①軽石粒含、精良。②良好③内面灰 白色7.5Y5/1外面明褐灰色5YR 7/2	丸底か。体部丸い。器肉一定。	内面青海波文状当て後一部撫で。上端部横位撫で。外面条線状叩き目、一部格子目状	

表一104　H107号住居跡出土遺物観察表（図一205　図版一82）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(11.0) ③4.5	①輝石、石英含、精良。②良好③橙 色5YR7/4④1/2弱	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部変換点で稜をなす。口縁は外傾か。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器形こ歪み著しい。
2	坏 土師器	貯蔵穴	①12.6　②4.7	①精良　②良好　③浅黄橙色7.5 YR8/4　④口縁部一部欠損。	丸底。体部は緩く内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部わずかに外反。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	貯蔵穴	①(12.4) ③4.0	①精良　②良好　③橙色7.5YR 7/6④口縁1/6・体部3/4	丸底。体部は緩く彎曲し、口縁部変換点で稜をなす。やや長い口縁は外傾して立ち上り、端部は丸くなる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面剝落している。
4	坏 土師器	覆土	①(11.4) ③3.5	①精良　②良好　③橙色7.5YR 7/4④1/4強	丸底。体部は緩やかに内彎し、体部変換点で極弱い稜をもつ。口縁部は外傾して立ち上る	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
5	坏 土師器	貯蔵穴	①12.8 ③3.8	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③ 橙色2.5YR6/4④完形	不安定な平底を呈し、体部は外傾して立ち上り、中位で稜をなす。	内面撫で。外面2段の横位の撫で。底部篦削り。	
6	坏 土師器	覆土	①15.6	①石英、小石φ0.4cm、輝石含、密。 ②良好③橙色7.5YR6/4口縁1/2	丸底気味。口縁部変換点でわずかに稜をなす。長い口縁部は直線的に外傾する。	内面横位の篦磨き、口縁部外面2段横位の撫で、底部篦削り。	内面一部剝落している。
7	甕 土師器	+52	①13.2	①精良　②良好　③橙色5YR6/6 ④口縁部及び胴部1/3残存	胴部は丸く、中位で最大径を有する。肩部で稜を有した後口縁部は短く外反。	内面撫で、口縁部外面横位の撫で。胴部篦削り。	器面磨耗している
8	甕 土師器	貯蔵穴	①19.7　②7.4 ③33.4	①輝石、軽石、小石含均一②やや不 良③橙色5YR7/4胴部一部欠損	不安定な平底。胴部は丸く、特に下半部でその度合い強い。口縁部は外反。器肉は厚い	内面撫で、篦あて痕を認む。口縁部外面2段横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	

表－105　H108号住居跡出土遺物観察表（図－207　図版－82）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴 覆土	①(17.6)	①輝石含、精良。②良好③内面橙色5YR⅞・外面橙色5YR⅞④¼	丸底。体部は緩く内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部外反。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体部篦削り。	器面磨耗している。
2	甕 土師器	貯蔵穴	①(18.4)	①輝石、軽石、酸化鉄含密②良好③橙色5YR⅝④口縁部～胴部上半½	胴部は内彎し、中位で器最大径を有する。口縁部は外傾して立ち上り、口唇部で内傾する	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部上半縦位・下半横位の篦削り。	器肉は厚い。
3	甕 土師器	貯蔵穴	②　7.0	①輝石、石英含、密②良好③明黄褐色10YR⅞④底部・胴下半部⅓	上げ底。胴部は下端部で弱くくびれた後内彎して立ち上る。器肉は厚い。	内面撫で。底部付近は篦あて痕顕著。外面斜位篦削り。底部不定方向篦削り。	外面一部吸炭。

表－106　H109号住居跡出土遺物観察表（図－209　図版－82）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 土師質須恵器	覆土	①(17.6)　②　8.2	①輝石、小石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④体部½・高台部欠損	大型の器形を呈し、体部は極緩やかに彎曲し中位で張りをもつ。口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。	
2	埦 土師質須恵器	覆土	①(13.8)　②(8.4) ③　5.9	①石英、軽石、小石含、やや粗。②良好③明黄褐色10YR⅝④⅓弱	底部は「ハ」の字状に外傾する高い高台。体部は丸みをもって立ち上る。器肉はやや厚い。	轆轤整形（右回転）。底部再調整。	胎土混入物多く荒い。
3	埦(内黒) 土師器	不明	①(12.6)　②(6.4) ③　5.0	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④½弱	高台は小型で断面台形状。わずかに外傾。体部は、下半部で丸みを持って立ち上る。	轆轤整形。内面～口縁部外面篦磨き、黒色処理。付高台	
4	埦 灰釉陶器	床面	②　8.0	①精良　②良好　③素地灰色　④底部½	高台部はやや弧状を呈し、稜をわずかに認む。高台内面内彎。	轆轤。底部回転篦削り。付高台	体部内面釉薬痕あり

表－107　H111・116号住居跡出土遺物観察表（図－211　図版－82）　（H111号・116号・112号は通し番号）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 H111	坏 土師器	覆土	①(11.8) ③　4.1	①輝石、酸化鉄含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅝④¼	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器形ややいびつ
2 H111	坏 土師器	+20	①(11.9) ③　4.6	①輝石、石英、酸化鉄、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④½強	丸底。体部は緩く内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁は上半部で外反する。	内面撫で。口縁部外面２段横位の撫で。体部～底部篦削り。	
3 H111	坏 土師器	床面	①　10.8 ③　3.4	①輝石、長石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅞④½	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部～底部篦削り。	
4 H111	坏 土師器	+15	①(11.0) ③　3.6	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁部⅕欠損	丸底。体部は緩く内彎し、口縁部は変換点から短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部～底部篦削り。	煤付着。
5 H116	坏 土師器	覆土	①　10.8 ③　3.8	①長石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④完形	丸底。体部は緩く内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部はわずかに外傾して立ち上る。	内面撫で。口縁部外面横位の撫で。体部～底部篦削り。	器面磨耗する。口縁外面一部煤付着
6 H111	坏 土師器	床面	①(12.2)　③　3.7	①軽石、長石含、密。②良好③橙色5YR⅞④¼	丸底。体部緩く内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部外傾して開く。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
7 H111	坏 土師器	覆土	①　11.1 ③　3.6	①輝石、軽石、長石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅔	方底の浅い底部から、体部は緩く内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
8 H116	坏 土師器	+18	①　11.8	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅞④⅔弱	丸底。体部は緩く内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
9 H111	坏 土師器	+15	①(11.2) ③　3.5	①軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅞④完形	丸底。体部内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は短く外傾する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
10 H111	坏 土師器	+9	①　11.2 ③　3.1	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③橙色5YR⅞④⅔	丸底の浅い底部から、体部は緩く内彎し、口縁部変換点で稜をもつ。口縁部は短く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
11 H111	坏 土師器	+19	①　11.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④½弱	丸底の浅い底部から、体部は緩やかに内彎し、口縁部変換点で稜をもつ。口縁部は短く外反。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	口縁部内面煤付着
12 H116	坏 土師器	床面	①(11.2) ③　3.1	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅞④⅓弱	丸底。体部は緩く内彎、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
13 H111	坏 土師器	+12	①　10.8 ③　3.0	①輝石、軽石、石英含、やや粗。②良好③橙色5YR⅞④ほぼ完形	丸底。体部は緩く内彎し、口縁部変換点で極弱い稜をなす。口縁部は短く外傾する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗している
14 H111	坏 土師器	覆土	①(10.8) ③　2.9	①輝石、軽石、石英含密②良好③内橙色2.5YR⅝・外橙色5YR⅝④⅓	丸底の浅い底部。体部は緩く内彎。変換点で稜をなす。口縁部は短く外反。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
15 H111	高坏 土師器	+9	①　12.7 ③現存高4.4	①輝石、軽石、酸化鉄含、精良。②極めて良好。③橙色5YR⅝④坏部½及び脚部を欠損	体部は「ハ」の字状に大きく外傾し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は内外面共に外反し、端部は水平面をなす。	坏部内面撫で。口縁部横位の撫で。体部篦削り。脚部内面横位の撫で。外面面取り状に縦位の篦削り。	焼きしまる。脚部は現存形で外反傾向にある。
16 H111	短頸壺 須恵器	+15	①(　8.8)　②　5.5 ③　11.2	①石英、長石、軽石含、密。②良好③灰白色10Y⅞④⅔	不安定な平底。胴部内彎し、上半で大きく張る。口縁部直立する。	内面～肩部外面横位の撫で。中位～底部篦削り。	整った器形
17 H111	甕 土師器	+10	①(20.6)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③浅黄橙色10YR⅝④上半部⅕	胴部は直立気味に立ち上り、口縁部は大きく外反する。	内面撫で。篦あて痕認む。口縁部指押え、横位の撫で。胴部斜、縦位の篦削り。	

表－108　H111・112・116号住居跡出土遺物観察表（図－212　図版－83）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
18 H112	坏 土師器	床面	①(12.9)	①精良　②良好　③橙色2.5YR⅝④⅓	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	外面底部二次焼成痕
19 H112	坏 土師器	+27	①　13.6 ②　3.9	①輝石、軽石、小石含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅔	丸底。体部は内彎。口縁部短く直立する	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
20 H112	坏 土師器	+9	①(13.7)	①軽石、輝石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④⅕	丸底。体部は丸みをもって内彎し、口縁部は上端部で内傾する。	口縁部内外面横位の撫で。体部内面撫で。外面篦削り。	
21 H111	坏 土師器	+19	①　12.2 ③　3.7	①精良　②良好　③橙色5YR⅝④⅔	方底。体部は内彎し、口縁部変換点で弱く稜をなす。口縁部は短く外傾する。	内面撫で。口縁部外面２段横位の撫で。体～底部篦削り。	

22 H112	坏 土師器	床面下	①11.4 ③ 4.0	①石英、輝石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④½強	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く外傾する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
23 H112	坏 土師器	床面	①(11.4)	①精良 ②良好 ③橙色2.5YR⅝④体部⅓	体部内彎し、口縁部は短く、わずかに上半部で外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体部篦削り。	器面剥落している。
24 H112	坏 土師器	床面	①10.9 ③ 3.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④完形	丸底。体部は内彎し、口縁部変換点で弱く稜をなす。口縁部はわずかに外傾して立ち上る。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	体部外面一部煤付着。
25 H116	坏 土師器	床面	①(10.5)	①軽石、石英、輝石含、やや粗。②良好③橙色2.5YR⅝④¼	体部内彎。口縁部は短く内傾する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
26 H116	坏 土師器	＋6	①11.2 ③ 3.4	①石英含、精良②良好③橙色5YR⅝④口縁部一部欠損	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く外傾する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
27 H111	坏 土師器	－18	①(11.3) ③ 3.2	①輝石、石英、長石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④⅓	丸底。体部は内彎して立ち上り。口縁部は短く直立する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
28 H112	坏 土師器	床面	①12.1 ③ 4.0	①輝石、長石含、密。②良好③橙色5YR⅞④⅔	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は短くほぼ直立する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	外面底部吸炭
29 H112	坏 土師器	床面下	①(12.2) ③ 3.5	①輝石、石英、軽石、長石含、密。②良好③橙色5YR⅝④⅔	丸底の浅い底部から、体部は緩く内彎し、変換点で稜をなした後、口縁部は外反する	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
30 H112	坏 土師器	＋12	①10.8 ③ 3.3	①輝石、石英含、密。②良好 ③明赤褐色2.5YR⅘ ④⅔	丸底。体部緩やかに内彎し変換点で稜をなす。口縁部は短くわずかに外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体部篦削り。	器面磨耗する。
31 H112	坏 土師器	＋9	①10.6 ③ 3.4	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④体部一部欠損。	丸底。体部内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
32 H112	坏 土師器	床面	①11.3 ③ 3.2	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅞④½弱	丸底の浅い底部から、体部は緩く内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は短く外傾する	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
33 H112	坏 土師器	＋9	①11.1 ③ 3.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④½	丸底。体部緩く内彎、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
34 H116	坏 土師器	＋9	①11.1 ③ 3.0	①石英、輝石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅘④体部一部欠損	丸底。体部は緩く内彎、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	底部外面黒斑。
35 H112	坏 土師器	＋10	①(10.8) ③ 3.0	①輝石、酸化鉄、小石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅗④¼	丸底。体部は緩く内彎、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
36 H112	坏 土師器	床面	①10.8 ③ 2.9	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④½	丸底。体部は緩く内彎、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
37 H112	坏 土師器	＋14	①(12.7)	①長石、石英、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR⅝④½弱	体部は緩く内彎、長い口縁部は稜をなして外傾する。	内面撫で。口縁部外面3段横位の撫で。体～底部篦削り。	
38 H116	坏(有高台) 土師器	床面下	①12.9 ③現存高4.5	①石英、輝石含、密。②良好③橙色5YR⅝④底部以下を欠損する。	体部は深く、内彎して立ち上り、口縁部に至る。器肉は厚い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。下半篦削り。	
39 H116	甕 須恵器	＋6	現高6.1 底径5.5 胴部最大径10.2	①軽石、長石含、精良。②良好③灰色10Y⅘⑷½弱	平底。体部下半直線的に外傾、上半部で直立し、肩部変換点で強く内屈する。	内面～肩部外面横位の撫で。体部上半横位の撫で後刺突文付設。下半～底部篦削り	体部外面下半部自然釉付着。
40 H116	甕 土師器	＋8	①(19.2)	①輝石、長石、石英、軽石含、やや粗②やや不良③にぶい橙色5YR⅖④口縁部½弱。	口縁部は上半部で外反。器肉は厚い。	口縁部内外面横位の撫で。胴部内面撫で。篦あて痕認む。外面口縁部直下より縦位の篦削り。	

表—109　H113号住居跡出土遺物観察表（図—214　図版—83）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏(内黒) 土師器	床面	①(13.2)	①石英、白色軽石粒、長石含、密。②良好③橙色7.5YR⅞④½	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部変換点で稜をなす。長い口縁部は外傾して開く	内面～口縁部外面横位の撫で。体部篦削り。内面篦磨き、黒色処理。	
2	甕 土師器	床面	①21.2	①石英、軽石、輝石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅞④口縁～胴部⅔	胴部緩く内彎し、長胴形を呈す。上半部で張りを有す。口縁部は外反する。	内面篦撫で。外面口縁部横位の強い篦撫で。一部指押え。胴部縦・斜位に篦削り	内面に接合痕あり
3	甕 土師器	床面	①22.3 ②4.4 ③36.0	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、やや粗②不良③浅黄橙色10YR⅔④胴部一部欠損	不安定な平底。胴部は長胴形で直線的に立ち上り、口縁部は外反する。	内面指押え及び横・斜位の篦撫で。口縁部外面横位の撫で。胴部縦位に篦削り。底部一定方向篦削り。	
4	甕 土師器	床面	②22.5 ③(38.0)	①輝石、軽石、長石、石英含、密②良好③橙色5YR⅞④底・胴部一部欠損	胴部内彎して立ち上り、長胴形をなす。口縁部は外反する。胴部の張り大きい。	内面指、篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦・斜位の篦削り。	底部付近で煤付着
5	甕 土師器	床面	①21.8 ②4.2 ③41.5	①輝石、石英、軽石、酸化鉄、褐色粒含、密。②良好③橙色5YR⅝④ほぼ完形	底部不安定な平底。胴部は内彎して立ち上り、長胴形をなす。口縁部は外反する。	内面撫で。一部篦撫で痕認む。口縁部横位の撫で。胴部縦・斜位の篦削り。	底部付近で煤付着

表—110　H114号住居跡出土遺物観察表（図—216　図版—83）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面下	①11.0 ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい赤褐色5YR¾④½	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部変換点で稜をなす。口縁部は短く外傾する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部不定方向の篦削り。	
2	坏 土師器	床面	①11.8	①輝石、白色軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅞④¼	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部の上端でわずかに内傾する。	調整痕不明瞭。	器面磨耗著しい。
3	坏 土師器	覆土	①(14.8)	①輝石、石英、白色軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④¼	体部は緩く内彎し、口縁部は短く直立気味をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
4	礫	床面	長10.2 幅7.0 厚3.2 重量370	安山岩。	楕円形の形状をなし、断面扁平である。擦痕等の痕跡は認められない。		
5	礫	床面	長12.8 幅 6.8 厚 4.5 重量600	凝灰岩。	長楕円形状をなし、片側側面は一部剝離している。		
6	礫	床面	長14.0 幅 5.6 厚4.1 重量550	安山岩。	長楕円形状をなし、断面は三角形をなす。		
7	礫	＋6	長13.4 幅 6.7 厚 5.0 重量480	安山岩。	長楕円形状をなし、側面は左右共に剝離し磨耗している。断面はやや三角形にちかい。		

8	礫	床　面	長12.8　幅　7.3 厚 4.0　重量610	凝灰岩。	長楕円形状をなし、断面は方形状をなす。両側面に擦痕らしき痕跡を認む。		
9	礫	床　面	長11.6　幅9.8 厚 3.6　重量700	石英閃緑岩	楕円形の形状をなし、断面は長楕円形をなす。		
10	礫	床　面	長14.2　幅 11.8 厚 3.0　重量690	安山岩。	楕円形の形状。断面は長楕円形。		

表—111　H115号住居跡出土遺物観察表（図—218　図版—84）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器　形　の　特　徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	床　面	① 12.4 ③ 3.0	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④体部½欠損	平底気味を呈す。体部緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部に至る。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体部指押え痕。底部不定方向の篦削り。	
2	坏 土師器	床　面	① 11.8 ③ 3.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④½	平底。体部はほぼ直線的に立ち上り、上半部で弱くくびれる。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向の篦削り。	
3	台付甕 土師器	住居外	① 13.3 ③現存高16.8	①輝石、石英、軽石含、粗。②良好③にぶい赤褐色2.5YR⅝④胴部欠損	胴部は内彎して立ち上り、上半で大きく張る。口縁部は上半で外反する。	内面横・斜位の撫で。一部篦撫で痕。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り	上半部煤状。台部内外面横位の撫で
4	甕 土師器	住居外	① 20.8　② 4.3 ③ 26.5	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅞④¾	不安定な平底から、胴部は内彎して立ち上り。口縁部は内傾し、上半部で外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、縦位の篦削り。	胴部上半煤付着。内面接合痕あり。

表—112　H117号住居跡出土遺物観察表（図—220　図版—84）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器　形　の　特　徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	+10	①(13.4) ③ 4.0	①石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③にぶい橙色¾　④¼	丸底。体部は緩く彎曲し、変換点で強い稜をなす。口縁部は直線的に外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部一定方向の篦削り。	
2	坏 土師器	周　溝	① 10.8 ③ 3.8	①精良。②良好　③橙色5YR⅞ ④完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点でわずかに稜を認む。口縁部は直線的に立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	床面下	① 10.7 ③ 3.3	①精良。②良好　③橙色5YR⅞ ④ほぼ完形	丸底。体部は緩く彎曲し、変換点で内外面共に弱い稜をなす。口縁部短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	周　溝	① 10.6 ③ 2.8	①軽石含、精良。②良好　③橙色5YR⅝　④完形	丸底。体部は緩く彎曲し、変換点で弱い稜をなす。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部不定方向の篦削り。	底部内面吸炭。
5	甕 土師器	床　面	①(19.6)	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密②良好③淡黄色2.5Y⅞④口縁部小片	胴部は緩やかに膨らみを有するものと考えられる。口縁部は外反する。器肉厚い。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	
6	甕 土師器	+7	頸部径(16.0)	①長石、石英、輝石含やや粗②良好③橙色7.5YR⅞④口縁～胴部小片	胴部は緩く内彎し、口縁部は大きく外反する。器肉厚い。	内面撫で。口縁部横位の撫で。外面縦位の篦削り。	

表—113　H118号住居跡出土遺物観察表（図—222　図版—84）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器　形　の　特　徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 須恵器	+11	① 13.3　② 8.0 ③ 3.3	①長石、輝石、軽石、小石含、密②良好③灰色2.5GY⅞④口縁一部欠損	平底。体部は下端部で弱くくびれた後、直線的に立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	内面丹付着。

表—114　H119号住居跡出土遺物観察表（図—224　図版—84）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器　形　の　特　徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	床　面	① 17.3 ③ 6.2	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅙　④½	大型の坏。丸底。体部は大きく球形を描いて立ち上り、口縁部は短く内傾する	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部に横・斜位の篦削り。	
2	短頸壺 土師器	床　面	①(9.6) ③ 7.3	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色2.5YR⅝　④¼	丸底。体部半球形を描いて内彎し、変換点で稜をなす。口縁部短く直立し、上端部で外反。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部ほぼ横位の篦削り。	器面磨耗する。

表—115　H120号住居跡出土遺物観察表（図—226　図版—84）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器　形　の　特　徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	床　面	① 12.2 ③ 3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR⅙　④½	丸底。体部は緩く曲線をなし、変換点で稜をもつ。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
2	坏 土師器	+15	①(12.0) ③ 3.7	①石英、軽石、輝石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④¾	丸底。体部は緩く内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部不定方向篦削り。	
3	坏 土師器	床　面	① 11.7 ③ 4.0	①精良。②良好③明赤褐色5YR⅝　④完形	丸底。体部は緩く内彎し、変換点でわずかに稜を認む。口縁部緩く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部2方向の篦削り。	外面吸炭。
4	坏 土師器	覆　土	① 11.6 ③ 3.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞　④ほぼ完形	丸底。体部は緩く内彎し、変換点でわずかに稜を認む。口縁部はわずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
5	坏 土師器	覆　土	①(12.0) ③ 3.1	①精良。②良好　③橙色5YR⅞ ④½弱	丸底。体部は緩やかに曲線をなし、変換点でわずかに稜をもつ。口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
6	鎌 鉄製品	+5	現存長14.3　幅2.0～3.3 厚0.3　重量50	身部が彎曲する類。一端折れ曲る。身部右手前が幅広。刃先端部は研ぎ減りする。背平。やや小型か。若干錆付着する。			

表一116　H121号住居跡出土遺物観察表（図—228　図版—84）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	覆土	① 11.8　② 6.7 ③ 3.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR⅚　④¾	若干上げ底気味。体部直線的に立ち上り、口縁部に至る。器肉やや厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	酸化焔。外面吸炭
2	甕 土師器	床面	①(20.2)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁部⅕	口縁部「コ」の字状をなし、区画明瞭である。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

表一117　H122号住居跡出土遺物観察表（図—230　図版—85）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.4 ③ 3.9	①精良。②良好　③橙色5YR⅚　④⅔	丸底。体部は緩く彎曲し、変換点で稜をなす。やや長めの口縁部は外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
2	坏 土師器	カマド	① 12.2 ③ 3.8	①精良　②良好　③橙色5YR⅚　④⅔	丸底気味。体部は極緩い曲線をなし、変換点で稜をもつ。やや長めの口縁部は外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	+13	①(11.8) ③3.4前後か	①精良　②良好　③橙色5YR⅚　④¼	丸底。体部は緩く曲線をなし、変換点で稜を有する。やや長めの口縁部は外傾して開く	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
4	坏 土師器	カマド	①(11.4)	①軽石含、密。②良好　③橙色7.5YR⅚　④⅓	体部は口縁と変換点でわずかに稜を認む。やや長めの口縁部は外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
5	甕 土師器	覆土	①(14.0)	①軽石、石英含、やや粗。②良好③橙色5YR⅝　口縁部¼	胴部は内彎して立ち上り、肩部で稜をもつ。口縁部は大きく外反する。器肉厚い。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	
6	甕 土師器	カマド	① 22.1　② 5.6 ③ 38.7	①輝石、石英、酸化鉄、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝④口縁部½欠損	平底。胴部は下端で若干の膨らみを有し、緩く内彎して長胴形をなす。口縁部は外反。	内面撫で((篦痕)口縁部横位の撫で。胴部縦位・下端で横・斜位の篦削り。	底部木葉痕。
7	甕 土師器	+8	① 22.2	①輝石、軽石、小石含、やや粗。②良好③橙色2.5YR⅝④胴部下半欠損	胴部は緩く内彎し長胴形をなす。口縁部は外反する。	内面撫で。(篦痕)口縁部横位の撫で。胴部斜・縦位の篦削り。	胴部外面吸炭。
8	紡錘車 石製品	床面	上径2.8　下径4.3 厚 2.1　孔径0.6	断面台形状。上・下径面はシャープな平坦面を形成する。上・下径面共に製作時の調整痕あるいは、使用痕と考えられる擦痕を認む。側面は横位方向に調整痕顕著。かんらん岩。			

表一118　H123号住居跡出土遺物観察表（図—232　図版—85）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	床面	①(13.1)	①軽石、輝石、長石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④口縁～胴部⅕	胴部は丸味をもって内彎し、中位で器最大径を有する。口縁部緩く外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で（2段)。胴部横・斜位の篦削り。	胴部下半吸炭。台付か。。

表一119　H124号住居跡出土遺物観察表（図—234　図版—85）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	+13	①(10.8)　② 4.3 ③ 4.0	①輝石、軽石含、密。②やや不良③にぶい橙色7.5YR⅞④½	平底。体部直線的に立ち上り、口縁部に至る。器肉概して厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	甕 土師器	床面下	①(20.0)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③明赤褐色2.5Y⅝④上半部⅕	胴部内彎して立ち上る。口縁部は上半で外反する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	

表一120　H125・129号住居跡出土遺物観察表（図—236　図版—85）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (H125)	坏(内黒) 土師器	床面	①(11.8)　②(4.7) ③ 4.5	①輝石、軽石含、密。②良好　③にぶい黄橙色10YR⅞④¼	上げ底。体部内彎して立ち上り、口縁部でわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。内面黒色処理。	外面吸炭。
2 (H129)	埦(内黒) 土師器	+13	① 13.8　② 6.9 ③ 5.1	①石英、軽石、小石含、粗。②良好③赤褐色2.5YR⅝④体部⅔欠損。	底部は、だれた肉厚の高台を有する。体部は緩やかに内彎し口縁部でわずかに外傾して開く	轆轤整形か。体部外面横・斜位の篦削り内面黒色処理。付高台。底部回転篦削り	
3 (H125)	甕 土師器	床面	①(20.4)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅝④図示の¼	胴部内彎して立ち上り、口縁部は「コ」の字状を呈する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	口縁部外面接合痕
4 (H129)	甕 土師器	床面下	①(20.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④図示の¼	胴部内彎して立ち上り、口縁部は「コ」の字状を呈す。胴部上半に器最大径を有する。	内面撫で。(篦あて痕)口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面接合に因る凹凸あり。
5 (H129)	羽釜	+13	①(20.7)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好　③橙色5YR⅝　④⅕	胴部は緩やかに内彎する。口縁部直立し、上端部は丸い。鍔部は三角形状で、上向きに張り出す	内面～口縁部外面横位の撫で。鍔貼付。胴部横・斜位の篦削り。	酸化焔焼成。口縁部内外面吸炭。
6 (H129)	羽釜	床面	①(23.4)	①輝石、石英、軽石、小石含、密。②良好③橙色5YR⅚　④¼	胴部は極緩やかに彎曲し、口縁部は直立した後端部でわずかに外反する。鍔張り出し強い	内面～口縁部外面横位の撫で。一部指押え。鍔貼付。胴部横位の篦削り。	
7 (H129)	羽釜	床面	①(22.3)	①輝石、石英、長石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁部⅓	胴部は緩やかに内彎し、口縁部は直立する。鍔は肉厚で張り出し強い。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	鍔貼付後の調整雑
8 (H125)	砥石 石製品	床面	長15.7　幅7.8 厚 5.3	置き砥。荒砥。楕円形。断面凹状。研磨面としては、2面使用。短軸・斜方向に弱い擦痕。裏面手前側は、長軸・斜方向に沈線をなす。安山岩。表面及び左側面は研磨減りする。			
9 (H129)	刀子 鉄製品	+8	現存長10.4　茎長4.4 刃厚 0.4　茎厚0.3　重量10g前後か		刃先部及び茎端部を欠損する。区部は、刃側でわずか段をなす。背側平ら。全体的に錆化著しい。		

表一121　H126号住居跡出土遺物観察表（図—238　図版—86）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+29	① 12.0 ③ 5.0	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅚　④½	丸底。体部は彎曲を描いて内彎し、変換点でわずかに稜をもつ。口縁部は2段の段を有す	口縁部外面横位の撫で。体～底部一定方向の篦削り。	底部外面吸炭。
2	高坏 須恵器	床面	坏部最大径11.7	①白色軽石粒含、密。②良好③灰白N⅞④坏部½・脚大半欠損	脚部は現存状態から2段の透かしを有するものと考えられる。体部緩やかに内彎、口縁直立気味。	轆轤整形(右回転)。脚部貼付後対面方向に透かし2段。	

3	長頸壺 須恵器	床面		①軽石、黒色粒子含、密。②良好③明オリーブ灰色2.5GY7/1④頸部	肩部大きく張り、長い口縁部は直線的に立ち上る。肩部内面凸状をなす。	頸部内外面横位の撫で。肩部内面接合後、粘土紐貼付補強している。指頭押圧痕あり。	
4	坏 土師器	+17	①(20.7)	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③橙色7.5YR7/6 ④口縁部1/3	胴部は緩やかに内彎し、長胴形を呈する。口縁部は大きく外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部外面縦位の篦削り。	
5	甕 土師器	+29	① 21.7	①輝石、石英、軽石、長石含、密。②良好③橙色7.5YR7/6 ④2/3	胴部は緩やかに内彎し、長胴形を呈する。口縁部は大きく外反する。	内面撫で（篦あて痕）口縁部横位の撫で。胴部縦・斜位の篦削り。	

表一122　H127号住居跡出土遺物観察表（図一240　図版一86）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 土師器	+23	① 11.5 ② (6.0) ③ 5.6	①輝石、石英、軽石含、粗。②不良③灰オリーブ色5YR5/2 ④1/2弱	底部は「ハ」の字状に外反する短い高台。体部は丸みを持って内彎し、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部外面横・斜位の篦削り。付高台	還元焔焼成。
2	埦 土師質須恵器	床面	①(16.8)	①輝石、石英含、密。②良好 ③明黄褐色10YR7/6 ④1/4	体部は緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部短く外反する。	轆轤整形（右回転）。高台貼付後再調整。	
3	埦 灰釉陶器	カマド	① 14.0 ② 7.3 ③ 4.3	①精良 ②良好 灰白色10Y7/1 ③釉はオリーブ灰色10Y5/2 ④1/2	高台部は三日月型を呈し、稜を残す。体部は緩やかに張り、口縁部は端部で丸く、わずかに外反。見込部は中央部にわずか突起残る	轆轤底部回転篦削り後撫で。外面腰部回転篦削り。	内面より口縁外面にかけて刷毛塗り。
4	羽釜	カマド	①(21.4)	①軽石、酸化鉄、長石含、やや粗。②良好③橙色7.5YR6/4④口縁部1/2	胴部は緩やかに内彎し、やや長めの口縁部は内傾し、口唇部で丸みをもつ。	内面撫で。口縁部外面及び胴部にかけて横位の撫で。	酸化焔。鍔小さく張り出し弱い。
5	羽釜	カマド	①(23.1)	①軽石、石英、長石含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR7/4④1/3	胴部緩やかに内彎し、口縁部は一旦内傾した後上端部で直立。口唇端部平ら。鍔小型で上向きに張り出す。	内面～胴部上半横位の撫で。胴部下半縦位の篦削り。	酸化焔、鍔上・下接合痕あり
6	羽釜	カマド	①(20.5)	①輝石、酸化鉄、小石含、粗。②良好③にぶい橙色10YR7/4 ④1/3	胴部は内彎して立ち上り、口縁部はわずかに内傾する。鍔は小型で張り出し弱い。	内面～胴部外面上半横位の撫で。胴部下半縦・斜位の篦削り。	酸化焔。

表一123　H128号住居跡出土遺物観察表（図一242　図版一86）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	折縁皿 灰釉陶器	床面	① 12.6 ② 7.0 ③ 2.6	①精良②良好③灰白色10Y8/1・釉はオリーブ灰色10Y5/2④1/2	小型、高台は丸み強く、外稜は不明瞭である。体部は張りを有し、口縁部はくびれる。	底部回転糸切り痕残る。高台貼付後の調整丁寧。	口縁部内外面つけがけ。
2	甕 土師器	床面	①(12.2)	①軽石、石英、小石含、粗。②やや不良③灰黄色2.5Y7/2④1/3弱	体部は丸みをもって内彎し、口縁部は短く外反する。器肉は厚い。	内面～体部外面上半横位の撫で。下半部斜位の篦削り。	内面肌色。
3	壺 須恵器	床面下	②(14.6)	①軽石、長石含、密。②ややあまい③灰色7.5Y6/1④底部1/2	底部は厚いだれた高台。体部は現状で直線的な立ち上りを示す。	内面撫で及び横位の撫で。外面残存部横位の篦削り。底部切り離しは不明。	

表一124　H130号住居跡出土遺物観察表（図一244　図版一86）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	羽釜	床面	① 19.6	①長石、輝石、石英、軽石含、密。②良好③浅黄橙色10YR8/3④1/2	胴部緩やかに内彎し、口縁部は内傾した後直立する。上端部は平ら。鍔はやや小型。上向きに張り出す。	内外面共に横位の撫で。一部接合痕及び指頭痕を残す。	酸化焔
2	羽釜	床面	① 19.6	①軽石、酸化鉄含、密。②良好③明オリーブ灰色2.5GY7/1④1/2	胴部緩やかに内彎し、口縁部は内傾して立ち上る。鍔はやや上向きに強く張り出す。	内面～胴部外面上半横位の撫で。下半縦位の篦削り痕認む。	

表一125　H132号住居跡出土遺物観察表（図一246　図版一86）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏(内黒) 土師器	覆土	①(17.1) ② (9.2) ③ 5.5	①精良 ②良好 ③淡黄色2.5Y8/3 ④1/4	若干上げ底。体部は緩やかに内彎して口縁部に至る。	轆轤整形(右回転)。底部及び体部下端回転篦削り。内面黒色処理。	体部外面墨書「酒」
2	蓋 須恵器	覆土	①(13.9)	①長石、小石含、密。②良好 ③明オリーブ灰色2.5GY7/1 ④1/3	体部は緩やかに外傾し、口縁部は短く直立する。	轆轤整形（左回転）。口縁側部撫で。	
3	甕 土師器	カマド	① 19.6 胴部最大径23.2	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6④胴部下半欠損	胴部は内彎して立ち上り、上半部で器最大径を有する。口縁部は肩部でわずかに稜を有し、「く」の字状に外反する。	内面撫で（篦あて痕）口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	口縁部指押え痕認む。
4	円面硯 須恵器	+7	内縁径9.4 外縁径12.6 現存高2.1弱	①精良 ②良好 ③青灰色5B6/1④脚・外堤部欠損。	円形の陸部使用痕顕著。外方に断面三角形の内堤さらに外方にやや低い外堤の海部廻る。脚部は推定で5本の透かし。	轆轤整形。脚部貼付。	
5	刀子 鉄製品	床面	現存長10.5 幅1.1～1.7 厚0.6 重量250	切先及び茎両端部を欠損する。錆化著しい。			
6	紡錘車 石製品	+5	上径4.5 下径5.7 厚2.2 孔径1.2	断面台形状を呈し、長径部はシャープな平坦面をなす。側面は面取りされた痕跡を残す。裏面孔周辺部に使用時の痕跡わずかに認む。角閃石安山岩。			

表一126　H133号住居跡出土遺物観察表（図一248　図版一86）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	覆土	①(12.7) ②(7.5) ③ 3.1	①精良 ②良好 ③灰白色10Y7/1 ④1/2弱	上げ底。体部直線的立ち上り、口縁・端部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	
2	坏 須恵器	床面	① 13.0 ② 7.1 ③ 3.8	①小石含、密。②ややあまい。③灰色N5/ ④完形	わずかに上げ底。体部は下半で弱くくびれた後直線的外傾、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	内面及び底部外面灰白色。
3	埦 須恵器	床面下	① 17.4 ② 9.6 ③ 8.1	①長石、軽石含、密。②良好 ③灰白色10Y7/1 ④体部1/4欠損	底部は断面台形状の高い高台。体部は直線的に外傾し、口縁部でわずかに外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台	
4	紡錘車 石製品	覆土	上径3.0 下径4.3 厚 1.2 孔径0.6	断面台形状。上・下径面はシャープな平坦面を形成する。側面及び下径面は製作時の調整痕極めて顕著。上径面は使用時に因るものか、若干の擦痕を認む。かんらん岩。			

表－127　H135号住居跡出土遺物観察表（図－250　図版－87）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏(内黒) 土師器	+19	① 12.2　② 6.7 ③ 4.5	①輝石、軽石含、密。②良好　③明赤褐色2.5YR5/6　④体部1/3欠損	平底。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	体部下半に横・斜位の篦削り。底部回転糸切り。内面横位の篦磨き、黒色処理	
2	坏 須恵器	+13	①(12.0)　②(6.0) ③ 3.8	①精良　②良好　③灰白色N7/④5/6	上げ底。体部は下端で弱くくびれた後、ほぼ直線的に立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	坏 須恵器	+21	①(13.0)　② 6.7 ③ 4.1	①長石、片岩質粒子、小石含、密。②良好③灰白色5Y7/1④体部1/4欠損	若干上げ底。体部は緩やかに内彎して立ち上り、口縁端部でわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	底部外面篦記号「×」
4	坏 須恵器	+19	① 13.2　② 6.6 ③ 3.8	①石英、長石含、密②やや不良③灰白色2.5GY8/1④体部わずかに欠損	わずかに上げ底。体部は下端で一旦くびれた後緩やかに彎曲し、口縁部でわずかに外傾	轆轤整形。底部右回転糸切り。	一部口縁部内外面吸炭。

表－128　H136号住居跡出土遺物観察表（図－252　図版－87）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	+6	① 23.0	①輝石、長石、小石含、密。②良好③橙色2.5YR6/8　④口縁部1/2	肩部に極弱い稜を有し、口縁部は大きく外反する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横・斜位の篦削り。	
2	蓋(短頸壺) 須恵器	覆土	内縁径11.1　外縁径13.0　現存高1.6	①軽石含、密。②良好③青灰色10BG5/1④1/6	天井部ほぼ平坦をなし、肩部に突帯を廻らす。口縁部はやや内傾気味に垂下する。	轆轤整形。頂部回転篦削り、撫でか。	

表－129　H137号住居跡出土遺物観察表（図－254　図版－87）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	塊 土師質須恵器	+5	①(12.0)　② 6.2 ③ 4.3	①軽石、石英、輝石、小石含、粗。②不良③にぶい橙色7.5YR7/4④体部3/4欠	小型で、底部は肉厚のだれた高台。体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部切り離し不明。きわめて雑なつくり。	外面一部吸炭。

表－130　H138号住居跡出土遺物観察表（図－256　図版－87）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 13.4 ③ 3.5	①密　②良好　③橙色5YR6/6　④体部1/4欠損	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。下半～底部篦削り。	
2	坏 土師器	+7	①(12.9) ③ 3.7	①密。②良好　③橙色5YR6/6　④1/4強	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。器面やや凹凸あり。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	口唇部の一部吸炭
3	坏 土師器	+6	①(13.7) ③ 3.6	①密。②良好　③明赤褐色5YR5/6　④1/2	丸底。体部は緩やかに内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。下半～底部篦削り。	底部外面吸炭。
4	坏 土師器	床面	① 13.3 ③ 3.8	①密。②良好　③橙色5YR6/6　④ほぼ完形。	丸底。体部は緩やかに内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面わずかに磨耗する。
5	蓋 須恵器	床面	① 12.3　摘径5.3 ③ 1.9	①密。②良好　③灰色N5/④1/3欠損	小型。天井部は環状の摘。体部は扁平、天井部で平坦面を形成し、緩やかに外傾する。口縁部は内側にかえしをもつ。	轆轤整形(右回転)。天井部外周回転篦削り。	
6	甕 土師器	+5	①(25.7)	①密。②良好　③にぶい橙色7.5YR7/4　④1/4弱	胴部は球形を示して大きく内彎し、口縁部は外傾して立ち上る。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	胴部外面吸炭。
7	甕 土師器	床面	①(23.0)	①密。②良好　③橙色5YR6/6　④口縁部1/4	胴部は緩く内彎し、口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	
8	甕 土師器	床面	① 21.9	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6　④上半部1/4	胴部は緩やかに内彎し、口縁部は外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	口縁部接合痕。タール状付着物あり
9	甕 土師器	床面	① 22.7	①輝石、石英、長石含、密。②良好③橙色2.5YR6/8　④上半部	体部は緩やかに内彎して立ち上り、口縁部は外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	胴部外面煤状をなす。
10	甕 土師器	床面	① 22.6	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密。②良好③橙色7.5YR6/6　④上半部1/2	胴部は緩やかに内彎し、上半部で丸みをもつ。口縁部は外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面接合痕あり。
11	甕 土師器	カマド	① 22.1　② 5.3 ③ 29.7	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR7/6　④胴部一部欠損	不安定な平底。胴部は下端から張りをもって内彎し、口縁部は外反する。	内面撫で。(篦痕)口縁部横位の撫で。胴部横・斜位、底部一定方向篦削り	胴下半煤付着。
12	砥石 石製品	覆土	長6.3　幅3.6 厚3.5	三角形状。3面共に平滑化している。概して短軸方向に磨痕を認む。角閃石安山岩（二ツ岳）。			
13	止金具か 鉄製品	覆土	径2.2×2.2　幅0.4 厚0.3　重量——	リング状をなし、片側上端部に楕円形板状の銹付着をみる。リング部分は内外面共に平らである。			

表－131　H139号住居跡出土遺物観察表（図－258）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	覆土	①(12.2)　②(6.7) ③ 3.6	①石英、長石、軽石含、密。②良好③灰白色5Y7/1　④1/4	わずかに上げ底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部に至る。口縁～体部への変換点不明瞭。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部篦削り。	

表－132　H140・141号住居跡出土遺物観察表（図－260　図版－88）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (H140)	坏 土師器	+13	①(13.2)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6　④1/4強	丸底。体部は緩く内彎して立ち上り、口縁部は上端で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。下半～底部篦削り。	内面一部煤付着。
2 (H141)	塊 須恵器	+8	①(10.4)　② 6.4 ③ 4.5	①精良。②良好　③明オリーブ灰色2.5Y7/1　④体部1/2	体部は小型で、直線的に立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部切り離し不明。高台貼付痕顕著。	高台部欠損。
3 (H140)	蓋(短頸壺) 須恵器	覆土	① 14.4 ③現存高3.6	①精良。②良好　③明オリーブ灰色2.5GY7/1　④1/6	天井部平坦。肩部に1条の突帯廻る。口縁部は外傾して垂下する。	轆轤整形。	天井部及び外周部に自然釉付着。

4 (H141)	甕 土師器	＋8	①(21.6)	①密。②良好 ③明赤褐色2.5YR 5/6 ④口縁1/3	口縁部「く」の字状に外反する。器肉一定	内面横位の篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
5 (H141)	石製品	覆土	長4.8 幅1.2 厚1.2	石製模造品。長方形状を呈し、上・下両端部は丸みをもち、研磨される。各面に長・斜方向に細い擦痕を認む。滑石製。			
6 (H141)	紡錘車 石製品	床面	上径3.0 下径4.3 厚2.4 孔径0.8	断面台形状。下径面は若干凸状をなす。側面はわずかに面取りされた痕跡認む。上・下径面はともに製作時の調整痕あり。側面は面取りした後横位方向に研磨している。流紋岩。			
7 (H141)	紡錘車 石製品	床面	上径3.1 下径4.7 厚1.6 孔径0.7	断面台形状。下径部はシャープな平坦面をなす。上・下径面ともに製作時の調整痕及び、使用痕を認む。側面は調整痕顕著。 側面象形文字の刻章あり、判読不明			

表－133　H142号住居跡出土遺物観察表（図－262　図版－88）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	ほぼ床面	①(12.6) ② 6.0 ③ 4.1	①輝石、軽石含、やや粗。②良好③橙色5YR6/6 ④体部1/4欠損	わずかに上げ底。体部は下半でくびれた後緩く彎曲、口唇部で外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	内外面煤付着。
2	埦 土師質須恵器	覆土	① 12.0 ② 5.7 ③ 4.7	①軽石、輝石、小石含、粗。②良好③灰褐色7.5YR5/2④体部2/3欠損	底部三角形状のだれた高台。体部丸く内彎し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。	
3	羽釜	焼土内		①長石、石英、酸化鉄含、密。②良好③明褐灰色7.5YR7/2④1/3	胴部は緩やかに内彎し、口縁部は内傾する。鍔は小型で、水平に張り出す。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部上半横位の篦撫で、下半横・縦位の篦削り。	
4	砥石 石製品	覆土	長13.6 幅2.3 厚2.7～2.0	手持ち砥。長方形、断面凹状。小口面はいずれも自然面残す。1面使用。(中央付近で面取りされたような高まりがみられ、1面を2方向から使用したものと考えられる)。斜方向に極弱い擦痕。その他の面は製作時の加工痕顕著。中央部を境として、手前1/2は左手前より中央部右側、奥側のそれは中央部右側より奥部左側にかけて研磨減りする。流紋岩。			

表－134　H143号住居跡出土遺物観察表（図－264　図版－88）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.0)	①輝石、軽石含、密。②良好 ③にぶい橙色5YR6/4 ④1/4	丸底。体部緩やかに彎曲する。口縁部は変換点で、強く屈曲した後短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	口縁部外面煤付着
2	甕 土師器	覆土	①(22.2)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④口縁部1/3	胴部は直立気味を呈し、肩部で極弱い稜をもつ。口縁部は強く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横位の篦削り。	口縁部接合痕あり

表－135　H144号住居跡出土遺物観察表（図－266・267　図版－88）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	＋10	① 12.6 ③ 3.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/8 ④1/2	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。下半～底部篦削り。	口縁部の一部吸炭。
2	坏 土師器	＋16	① 12.5 ③ 3.2	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/8 ④2/3	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。下半～底部篦削り。	器面凹凸あり。
3	坏 土師器	床面	① 13.7 ③ 3.6	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/8 ④3/4	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫でか。下半～底部篦削り。	
4	埦 須恵器	床面	① 16.6 ② 9.4 ③ 7.2	①長石、小石含、密。②良好③青灰色5B5/1 ④4/4	大型で高台部は高く「ハ」の字状に外反する。体部は腰部で屈曲し直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
5	甕 土師器	床面	①(23.4)	①輝石、軽石、酸化鉄、長石含、密。②良好 ③橙色5YR6/6 ④1/3	胴部は球形をなして内彎し、上半部で器最大径を有する。口縁部は上半でわずかに外反する	内面横・斜位の篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	胴下半煤付着。
6	甕 土師器	床面	①(21.6)	①密。②良好 ③橙色5YR6/6 ④1/3	胴部は球形をなして内彎し、上半部で器最大径を有する。口縁部は外反する。	内面横位の撫で。口縁部横位の撫で、胴部横・縦位の篦削り。	胴下半煤付着。
7	砥石 石製品	覆土	長6.1 幅2.8 厚1.8	手持ち砥。長方形状。断面凹状、片側小口面、両側面に条線状の加工痕を認む。表・裏面は平滑化している。3面使用。斜方向に弱い擦痕を認む。流紋岩。			表面は片減りしている。
8	棒状 鉄製品	覆土	現存長5.3 幅0.3～0.5 厚0.3～0.5		棒状を呈し、上・下両端部を欠損する。断面方形状で下端部は先細りする。錆化著しい。		
9	鎌 鉄製品	覆土	現存長8.4 身幅現存で2.4 身厚0.4 重量40		現存から推定して身部大きく彎曲する器形か。刃部は大きく欠損する。柄着装部はU字状に折れ曲る。背側平ら。		

表－136　H145号住居跡出土遺物観察表（図－269　図版－89）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	＋8	①(23.1)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/6 ④1/2	胴部は緩やかに内彎し、口縁部は外反する。器肉はほぼ一定。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	
2	砥石 石製品	＋26	長5.8 幅4.5 厚2.6	手持ち砥。断面凹状。表・裏面胴部寄りに径0.7cmの孔が穿たれ、表面側は、ほぞ状のくぼみ有り。両側面は研磨減りする。4面使用。片側小口面、自然面のこる。他方は極浅い沈線状の痕跡多数あり。長・短軸、斜方向に弱い擦痕。流紋岩。			

表－137　H147号住居跡出土遺物観察表（図－271　図版－89）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	＋8	① 11.5 ② 8.2 ③ 3.7	①密。②良好 ③橙色5YR6/6 ④4/5	平底で、やや突出気味。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	器面磨耗する。
2	坏 土師器	貯蔵穴	①(12.0) ② 8.4 ③ 3.5	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR5/6 ④1/3強	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部変換点で、弱くくびれる。体部内面わずかに膨らむ	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
3	坏 土師器	床面	①(12.1) ② 8.3 ③ 3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/2	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部は変換点で、くびれた後内彎気味に立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向篦削り。	
4	蓋 須恵器	カマド	①(12.9) ③ 2.9	①軽石粒含、密。②良好 ③灰白色10Y7/1 ④1/4	天井部はほぼ平坦。体部は直線的に外傾、口縁部変換点で外反。端部内傾。環状の小さい摘	轆轤整形（右回転）。天井部回転篦削り。	

5	埦 須恵器	+20	①(14.1) ② 7.5	①精良。②やや不良 ③灰白色2.5YR8/1 ④1/3弱	高台部欠損する。底部ほぼ平底。体部は直線的に立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。腰部再調整。		
6	円面硯 須恵器	床面	外縁径11.5 現存高2.5	①精良。②良好 ③灰白色5Y7/2 ④3/4	円形の陸部使用痕顕著。硯面は平坦。外方に2列の堤部廻り海部形成。脚上端部で1条の突帯脚部は縦位に4本の透し及び沈線が付くと推定	轆轤整形。		脚部の大半を欠損
7	甕 土師器	ピット	① 14.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/2	胴部は球形をなして内彎して立ち上り、口縁部は「コ」の字状を呈す。	内面篦撫で、口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。		胴部外面煤付着。
8	甕 土師器	貯蔵穴	① 20.6	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色2.5YR6/6 ④3/4	胴部は球形をなして内彎し、上半部で器最大径を有す。口縁部は明瞭な「コ」の字状。口唇部丸い。	内面撫で。(篦あて痕)口縁部指押え、横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。		

表一138　H148号住居跡出土遺物観察表（図一273　図版一89）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.6) ②(10.1) ③ 3.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/3	平底だがやや突出気味。体部は緩やかに彎曲し、口縁変換点で、弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(12.6) ②(9.2)	①輝石、軽石含、密。②良好 ③明赤褐色2.5YR5/8 ④1/3	不安定な平底。体部緩やかに内彎する。口縁部は変換点でわずかにくびれた後外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
3	坏 須恵器	床面	①(13.0) ② 6.5 ③ 3.1	①軽石、石英含、密。②良好 ③灰色5Y5/1 ④1/3	わずかに上げ底。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	坏 須恵器	覆土	①(12.7) ② 7.5弱 ③ 3.3	①精良。②良好 ③にぶい橙色5YR7/4 ④1/2弱 体部1/4のみ	わずかに上げ底。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	酸化焔焼成
5	甕 土師器	床面	①(20.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/8 ④1/2	肩部張りをもつ。口縁部は「コ」の字状をなす。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
6	砥石 石製品	床面	長24.8 幅14.0 厚 6.0	置き砥。断面凹状、いわゆる糸巻き状、5面使用。片側は小口面に小さな使用痕認む。特に両側面は研磨減り著しく弓張り状。概して長軸方向に擦痕あり。表面は、若干弱い沈線をなす部分あり。流紋岩。			
7	棒状 鉄製品	周溝	現存長5.6 幅0.7 厚0.7 重量10	上・下両端部共に欠損する。身部彎曲する。全体的に銹化著しい。			
8	棒状 鉄製品	周溝	現存長10 幅0.5 厚0.5～0.8 重量15	上・下両端部共に欠損する。身部彎曲する。全体的に銹化している。			
9	鎌 鉄製品	周溝	現存長(22.5) 身幅2.6～3.3 身厚0.4 重量170	身部は刃先部に向かって大きく彎曲し、一端が、ほぼ90°の角度で折れ曲る。刃先部に近づくに従い幅狭となる。遺存状態良好である。			

表一139　H149号住居跡出土遺物観察表（図一275　図版一89）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	ピット	①(11.6) ③ 2.7	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/2	平底気味。体部は内彎して立ち上り、口縁部直立気味を呈す。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。下半～底部篦削り。	
2	坏 土師器	+7	① 13.0 ③ 3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④ほぼ完形。	平底気味。体部は緩やかに彎曲し、体部上半より口縁部にかけて外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。一部指押え。底部篦削り。	器面磨耗する。
3	蓋 須恵器	覆土	①(17.6) ③ 4.0	①軽石多量含、やや粗。②良好③青灰色10BG5/1 ④1/4	天井部平坦。体部は緩やかに外傾し、口縁端部は内傾する。天井部は環状の摘。	轆轤整形(左回転)。天井部外周回転篦削り。	
4	坏 須恵器	ピット	① 12.9 ② 6.9 ③ 3.5	①長石、酸化鉄、小石含、密。②良好③橙色5YR7/6 ④3/3	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部は外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	酸化焔焼成
5	埦 灰釉陶器	覆土	①(12.6) ②(6.3) ③ 4.0	①精良②良好③灰白色10YR8/1④1/4	三日月高台。稜はだれる。体部緩やかに張り、口縁部わずかに外反。	腰部及び底部回転篦削り。釉はつけがけ、釉薬とんでいる。	
6	甕 土師器	+27	①(22.7)	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密。②良好 ③橙色5YR7/6 ④1/3	肩部緩やかに張り、口縁部は上半で外反する。口唇部は丸い。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横・斜位の篦削り。	
7	砥石 石製品	覆土	長6.0 幅4.7 厚1.7	手持砥。撲形。断面凹状。片側小口面は欠損している。5面使用（手前小口面に使用痕）。長軸・斜方向に弱い擦痕わずかに認む。砂岩。			

表一140　H150号住居跡出土遺物観察表（図一277　図版一90）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+25	①(12.5) ③ 3.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/4	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。下半～底部篦削り。	口縁部に吸炭あり

表一141　H152号住居跡出土遺物観察表（図一280　図版一90）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	+5	① 11.2 ② 6.0 ③ 3.1	①軽石含、密。②良好 ③灰色7.5Y5/1 ④ほぼ完形。	わずかに上げ底。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	坏 須恵器	+9	① 13.0 ② 7.4 ③ 3.4	①長石多量含、粗。②良好 ③灰色7.5Y5/1 ④ほぼ完形。	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部は小さく外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	坏 須恵器	+7	①(11.7) ②(6.7)	①長石、軽石含、密。②良好 ③灰色N5/0 ④1/4強。	平底。体部は下端で弱くくびれた後、外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	
4	埦 灰釉陶器	覆土	①(13.2) ②(6.4) ③ 4.8	①精良。②良好 ③灰白色7.5Y7/1 ④1/4	やや高めの高台。三日月型。稜はほとんど形骸化。体部緩やかに張り、口縁部に至る。	底部回転篦削り。	釉つけがけ。 釉薬とぶ。
5	鉢 土師器	床面	① 23.3 ② 7.0 ③ 15.2	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③橙色7.5YR7/6 ④1/2欠損。	不安定な平底。体部は球形をなして内彎し口縁部は外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体部横・斜位の篦削り。	内外面煤付着。
6	甕 土師器	床面	① 21.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/8 ④4/5	胴部内彎して立ち上り、口縁部は外反する。	内面撫で。(篦あて痕)口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	

表—142　H153号住居跡出土遺物観察表（図—282　図版—90）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	羽釜	貯蔵穴	①(18.7)	①輝石、軽石、石英含、密。②あまい ③浅黄色5Y⅔　④¼	胴部は極緩やかに内彎し、短い口縁は内傾して立ち上る。鍔は上向きに強く張り出す。	内面～口縁部外面横位の撫で。鍔直下撫で。胴部縦位の篦削り。	内面接合痕あり。酸化焔。器肉一定
2	甕 土師器	カマド	① 19.3	①石英、軽石、酸化鉄含、粗。②良好 ③橙色5YR⅚　④⅔	胴部は内彎して立ち上り、口縁部は外反する。	内面撫で。上半で篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	内面接合痕顕著。外面煤付着。

表—143　H154号住居跡出土遺物観察表（図—284　図版—90）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	貯蔵穴	① 11.4　② 6.2 ③ 3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色10YR⅚　④完形。	わずかに上げ底。体部は外傾して立ち上る。器肉厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	外面煤付着。
2	坏 須恵器	ピット	①(11.9)　②(5.4) ③ 4.1	①酸化鉄含、密。②良好　③にぶい黄橙色10YR½　④⅘	上げ底か。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。器肉やや厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	外面墨書「久雨」?
3	羽釜	床面	①(21.0)	①長石、石英、軽石含、密。②良好③ ③にぶい橙色7.5YR¼　④⅕	胴部は緩やかに内彎し、口縁部は内傾、上半で直立する。鍔は水平に張り出す。	内面～胴部上半横位の撫で、下半縦位の篦削り。	酸化焔。
4	羽釜	床面	①(24.2)	①長石、軽石、石英含、密。②あまい ③灰白色2.5Y⅞　④⅙	胴部は緩やかに内彎し、口縁部は短く内傾、上半でわずかに外傾。鍔は肥厚、上向きに張り出す	内面～胴部外面上半横位の撫で。下半斜・縦位の篦削り。	胴下半吸炭し、一部炭化物付着。
5	鎌? 鉄製品	住居外	現存長2.9身幅2.0前後 身厚0.2　重並10	左右両端部欠損する。身部は片側に彎曲。銹化著しい。			
6	鉄治椀形滓	ほぼ床面	径8.5×8.5 厚5.0　重並350	表面は凸状をなし、裏面は炉壁材が付着、炉底部の曲面をなす。地肌は茶褐色を呈し、周縁部海綿状に気泡認む。一部木炭の噛み込みあり。			

表—144　H155号住居跡出土遺物観察表（図—286　図版—90）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	カマド	① 11.8　② 6.0 ③ 3.6	①輝石、軽石含、粗。②不良　③淡黄色2.5Y⅞　④完形。	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部左回転糸切り。内面指頭痕認む。	
2	埦 灰釉陶器	覆土	①(14.3)	①極めて精良。②良好　③灰白色7.5Y⅞　④⅓	体部緩やかに張る。	体部上半刷毛塗りか、腰部再調整痕みられる。	

表—145　H156号住居跡出土遺物観察表（図—288　図版—90）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	①(19.6)	①輝石、軽石、密。②良好　③橙色7.5YR⅙　④⅕	肩部は大きく張り、口縁部は大きく外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部斜位の篦削り。	

表—146　H157号住居跡出土遺物観察表（図—290　図版—91）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面下	① 12.6 ③ 4.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④½強	丸底。体部は浅く、緩く内彎。変換点で屈曲し、長い口縁部は外反して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	カマド	①(12.2) ③ 4.2	①精良。②良好　③橙色5YR⅚　④¼	丸底。体部は浅く、緩く内彎する。変換点で屈曲し、長い口縁部は外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	床面下	① 12.4 ③ 3.8	①精良。②良好　③橙色5YR⅙　④ほぼ完形。	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をもつ。長い口縁部は外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
4	坏 土師器	床面	① 12.1 ③ 3.9	①精良。②良好　③橙色5YR⅚　④ほぼ完形	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をもつ。口縁部はおしなべて外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
5	坏 土師器	床面	①(10.6) ③ 3.8	①精良。②良好　③橙色5YR⅙　④¼	丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点で稜をもつ。外傾する二段口縁を有す。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
6	坏 土師器	＋8	① 10.9 ③ 3.6	①精良。②良好　③橙色5YR⅙　④口縁部½欠損	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
7	坏 土師器	＋6	① 10.9 ③ 3.5	①小石含、密。②良好　③橙色7.5YR⅙　④ほぼ完形。	丸底。体部緩やかに内彎し、変換点に稜をもつ。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
8	坏 土師器	覆土	① 11.0 ③ 3.5	①輝石含、密。②良好　③黄橙色7.5YR⅝　④⅔	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で弱い稜をもつ。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
9	坏 土師器	＋10	① 11.0 ③ 3.4	①輝石含、密。②良好　③橙色2.5YR⅝　④ほぼ完形。	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をもつ。口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
10	坏 土師器	カマド	① 11.6 ③ 2.9	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色2.5YR⅝　④完形。	丸底。体部は浅く、緩やかに内彎。変換点で稜をもつ。口縁部は外反して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
11	坏 土師器	床面	① 11.1 ③ 3.3	①精良。②良好　③橙色7.5YR⅞　④ほぼ完形。	丸底。体部は緩やかに内彎。変換点で、内外面共に弱い稜をもつ。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	底部外面吸炭。
12	坏 土師器	＋13	① 11.8 ③ 3.3	①精良。②良好　③橙色5YR⅞　④⅘	丸底。体部は緩やかに内彎。変換点で弱い稜をもつ。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
13	坏 土師器	床面	①(10.6) ③ 3.3	①酸化鉄含、密。②良好　③橙色7.5YR⅙　④⅔	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部は外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
14	坏 土師器	覆土	①(18.3) ③ 7.6	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色5YR⅚　④¼	大型の坏。丸底。体部は内彎し、口縁部は外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
15	坏 須恵器	＋22	① 11.6　② 8.1 ③ 3.2	①精良。②良好　③灰白色7.5Y⅞　④ほぼ完形	上げ底。底部より体部への変換点は不明瞭。体部は直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部回転篦削り。	

16	甕 土師器	床面	① 8.3	①酸化鉄含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④口縁部	肩部で稜を有し、長い口縁部は直立気味を有する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	器面磨耗する。
17	甕 土師器	床面	① 20.7 ② 3.0 ③ 39.4	①輝石、輝石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④ほぼ完形	不安定な平底。胴部は内彎して立ち上り、長胴形をなす。口縁部は大きく外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。底部篦削り。	胴部煤付着。 接合痕あり
18	甕 土師器	カマド	① 23.2 ② 4.3 ③ 36.2	①輝石、酸化鉄、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞ ④⅔	不安定な平底。胴部は下半部で膨らみ、緩く内彎して長胴形をなす。口縁部は強く外反。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	底部木葉痕。 内面煤付着。
19	甕 土師器	床面	① 19.6 ② 3.0 ③ 39.6	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝ ④⅘	小さな平底。胴部は内彎して立ち上り、長胴形をなす。口縁部は強く外反する。	内面撫で(篦あて痕)。口縁部横位の撫で。胴部斜・縦位の篦削り。	外面煤付着。
20	甕 土師器	周溝	① 22.0	①石英、輝石含、粗。②良好 ③にぶい橙色5YR⅝ ④¾	胴部長胴形をなし、口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	内面炭化物、外面煤付着。
21	甕 土師器	+8	①(23.0)	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色7.5YR⅞ ④½	胴部長胴形と考えられる。口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部撫で後縦位の篦削り。	外面一部吸炭。
22	甕 土師器	+13		①輝石、軽石、長石含、粗。②良好③にぶい黄橙色10YR⅝④底部	不安定な平底。胴部内彎する。	内面撫で、外面縦位に篦削り。	外面吸炭する。 接合痕。
23	小型短頸壺 須恵器	+6	最大径12.9	①精良。②良好 ③灰白色5Y⅞ ④口縁部欠損。	不安定な平底。体部は強く内彎する。	轆轤整形。底部静止糸切りか、底部外周回転篦削り。	
24	紡錘車 石製品	覆土	上径2.1 下径4.1 厚 2.2 孔径0.6	断面台形状。上・下径部ともに器面わずかに凸状をなす。また両面ともに端部を削り面取りしている。また、製作時による調整痕及び使用痕と考えられる擦痕認む。側面は上下方向に削りを施したのち横位方向に研磨している。かんらん岩。			

表—147 H158号住居跡出土遺物観察表（図—292 図版—92）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.8 ③ 5.3	①輝石、石英、小石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝ ④完形	丸底。浅い体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をもつ。口縁部は外傾して立ち上り、2段口縁をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部不定方向の篦削り。	底部外面付近吸炭
2	坏 土師器	床面	① 12.4 ③ 5.0	①輝石、酸化鉄、軽石含、密。②良好③にぶい黄色10YR¼ ④½	丸底。浅い体部は緩やかに内彎して、変換点で弱い稜をもつ。口縁部は外傾して立ち上り、かろうじて2段口縁をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	体部外面吸炭する
3	坏 土師器	床面	① 12.7 ③ 4.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞ ④ほぼ完形。	丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点で稜をなす。口縁部は緩く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部一定方向篦削り。	器面歪み著しい。
4	坏 土師器	床面	① 11.7 ③ 4.2	①精良。②良好 ③橙色5YR⅞ ④¾	丸底。体部は浅く緩やかに内彎し、変換点で稜をもつ。口縁部はわずかに外反。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
5	坏 土師器	覆土	① 12.4 ③ 4.1	①精良。②良好 ③橙色5YR⅞ ④ほぼ完形。	丸底。体部浅く緩やかに内彎し、変換点で稜をもつ。口縁部外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
6	坏 土師器	覆土	① 11.2 ③ 3.7	①輝石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④ほぼ完形	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
7	坏 土師器	+14	① 11.0 ③ 3.5	①軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③橙色7.5YR⅞ ④ほぼ完形	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
8	坏 土師器	+6	① 10.8 ③ 3.6	①精良。②良好 ③浅黄橙色7.5YR⅝ ④ほぼ完形。	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
9	坏 土師器	+34	①(10.8) ③ 3.6	①精良。②良好 ③橙色5YR⅞ ④½	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
10	坏 土師器	覆土	①(11.0)	①輝石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④½	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
11	坏 土師器	床面下	① 11.4 ③ 3.6	①輝石、石英含、密。②良好 ③にぶい橙色7.5YR¾ ④ほぼ完形	丸底。体部は浅く緩やかに内彎し、変換点で稜をもつ。口縁部は外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。底部不定方向篦削り。	
12	坏 土師器	床面	① 11.4 ③ 3.3	①輝石、酸化鉄含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④ほぼ完形	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
13	坏 土師器	床面	① 10.4	①輝石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④⅔	体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
14	坏 土師器	覆土	① 11.1 ③ 3.7	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④½強	丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点で稜をなす。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
15	坏 土師器	覆土	① 11.4 ③ 3.5	①輝石、軽石、小石含、密。②良好③橙色7.5YR⅞ ④½強	丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点で稜をなす。口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
16	坏 土師器	+13	① 11.3 ③ 3.2	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR⅝ ④½	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
17	坏(内黒) 土師器	覆土	①(12.7)	①石英、軽石含、密。②良好 ③明赤褐色2.5YR⅝ ④⅕	体部は内彎して立ち上り、変換点で稜をなす。長い口縁部、外傾して開く。	口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。内面篦磨き、黒色処理。	堅緻
18	鉢 土師器	覆土	①(10.8)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅞ ④⅓	器肉肥厚し、体部は内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部縦位篦削り。	
19	鉢 土師器	床面	① 15.0 ② 5.4 ③ 11.6	①輝石、酸化鉄、小石含粗②良好③にぶい黄橙10YR⅞④口縁一部欠	不安定な平底。体部は内彎して立ち上り口縁部に至る。器肉厚い。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。体部縦位の篦削り。内面黒色を呈す。	内面接合痕顕著。 底部付近は吸炭。
20	甕 土師器	床面	①(20.9)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④口縁½	胴部は長胴形をなし、口縁部は強く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	
21	甕 土師器	カマド	① 16.0 ③現存高29.8	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅞ ④底部欠損	胴部は体部で膨らみを有した後、直立気味を呈し、長胴形となる。口縁部は外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	外面炭化物、煤付着。
22	砥石 石製品	覆土	長5.2 幅2.9 厚1.2	手持ち砥。台形状、断面凹状。片側小口面は自然面をのこすが一方は欠失する。肩部寄りに0.7～1.0cmの径で穿孔される。3面使用。おしなべて長軸方向に弱い擦痕。流紋岩。かなり使いこまれている。			タール状付着物あり。
23	刀子 鉄製品	カマド	現存長10.4 刃部長3.8 刀幅1.5 茎木質部幅1.6 刃厚0.5 重量20	刃先部及び茎端部を欠く。刃部背側は平ら。茎は木質部残存。			

表一148　H159号住居跡出土遺物観察表（図一294　図版一92・93）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.7 ③ 5.3	①輝石、軽石、小石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6　④完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点で稜をなす。口縁部は外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。底部不定方向の篦削り。	堅緻
2	坏 土師器	床面	① 11.4 ③ 4.7	①輝石。石英。軽石。酸化物含、密。②良好　③橙色5YR7/6　④完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点で稜をなす。口縁部はわずかに内傾。	内面～口縁部外面横位の撫で。底部不定方向篦削り。	
3	坏 土師器	床面	① 11.0 ③ 3.7	①精良。②良好　③橙色5YR6/6　④口縁一部欠損。	丸底。体部は緩やかに内彎し、変換点で弱い稜をもつ。口縁部はわずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	底部外面吸炭。
4	鉢 土師器	床面	① 11.3 ③ 10.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR7/6　④完形。	丸底。体部は球形をなして内彎する。口縁部は短く内傾。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。外面上半指押え。中位～底部篦削り。	口縁部内面接合痕顕著　一部吸炭
5	甕 土師器	覆土	①(20.6)	①石英、軽石、酸化鉄含、粗。②良好③橙色7.5YR7/6　④口縁部1/3	胴部は直立気味を呈し、口縁部は強く外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部縦位の篦削り。	
6	甕 土師器	床面	① 22.4 ③現存高29.5	①石英、軽石、酸化鉄含、やや粗。②良好　③橙色7.5YR5/6　④3/4	胴部は緩やかに内彎し、長胴形をなす。口縁部は強く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	胴部一部煤付着。
7	甕 土師器	覆土	① 14.5 ③ 12.1	①石英、軽石、小石含、粗。②良好③橙色5YR5/6　④ほぼ完形。	丸底。体部は下半で丸みを有し、上半で直立。口縁部に至る。底部12ヶ所に径0.3cm前後の小孔穿たれている。	内面指押え後篦撫で。口縁部横位の撫で、体部篦削り。	口縁部内外面吸炭する。
8	砥石 石製品	覆土	長4.4　幅2.7 厚1.7	手持ち砥。方形。断面凹状。小口面は剝離している。4面使用。長軸・斜方向に弱い擦痕。一部沈線状をなす。凝灰岩。			

表一149　H160号住居跡出土遺物観察表（図一296　図版一93）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.7 ③ 4.0	①輝石、酸化鉄含、密。②良好③浅黄橙色7.5YR8/6④ほぼ完形。	丸底。体部は浅く、緩やかに内彎。変換点で稜をなす。口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
2	坏 土師器	床面	① 12.4 ③ 3.9	①精良。②良好　③橙色5YR5/6　④完形	丸底。体部は浅く緩やかに内彎、変換点で稜をなす。口縁部はわずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	外面一部吸炭。
3	坏 土師器	床面	① 12.8 ③ 4.1	①酸化鉄、小石含、密。②良好　③橙色5YR7/6　④3/4	丸底。体部は浅く緩やかに内彎。変換点で稜をなす。口縁部はわずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	覆土	①(12.3)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR7/8　④1/3	体部は口縁部変換点で稜を有し、2段口縁をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部篦削り。	
5	甕 土師器	床面	①(9.3)　② 6.9 ③ 32.5	①輝石、軽石、小石含、密。②良好③橙色5YR5/6　④上半1/4欠損	不安定な平底。胴部は大きく内彎して立ち上り、口縁部は外反。胴部中位に最大径を有する	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。底部篦削り。	下半部吸炭。
6	甕 土師器	床面	① 20.4	①石英、軽石、輝石、酸化鉄含、やや粗。②良好③にぶい橙色5YR7/4④3/4	胴部は内彎して立ち上り、頸部で稜をなす。口縁部は外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	胴部煤付着。
7	火箸 鉄製品	住居外	現存長21.0　幅0.8～1.0 厚0.8～1.0　重量150	断面ほぼ円形で、頭部肉厚化し、下端に移行するに従い先細りする。中位に長楕円形の扁平鉄板付着する。			新しい時期か

表一150　H161号住居跡出土遺物観察表（図一298）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏(内黒) 土師器	覆土		①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6　④1/2	体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。やや長めの口縁部は外傾して開く。	口縁部横位の撫で。体部外面篦削り。内面篦磨き、黒色処理。	堅緻
2	坏 土師器	覆土	①(11.2)	①輝石、軽石含、密。②良好　③浅黄橙色7.5YR8/4　④1/4	体部は緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部篦削り。	器面磨耗する。

表一151　H162号住居跡出土遺物観察表（図一300　図版一93・94）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 12.3	①輝石、石英含、密。②不良　③にぶい橙色5YR1/4　④1/2弱	体部緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。口縁部は外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 11.9 ③ 3.8	①精良。②良好　③橙色5YR7/6　④完形。	丸底。体部は緩やかに内彎、変換点で弱い稜をなす。口縁部は外傾する。	体部撫で(篦あて痕)。口縁部横位の撫で。体～底部ほぼ単一方向篦削り。	外面一部吸炭。
3	坏 土師器	床面下	①(13.2) ③ 4.3	①軽石、石英含、密。②良好　③橙色2.5YR1/4　④3/4	丸底。体部は緩やかに内彎。変換点で稜をなす。口縁部外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部不定方向の篦削り。	
4	坏 土師器	＋7	① 10.9 ③ 3.5	①軽石、片岩含、密。②良好　③橙色5YR7/6　④完形。	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部わずかに外反して立ち上る。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部ほぼ一定方向篦削り。	器面磨耗する。
5	坏 土師器	床面	面11.8 ③ 3.5	①精良。②良好　③橙色7.5YR7/6　④完形。	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
6	坏 土師器	覆土	① 11.1 ③ 3.5	①軽石、チャート含、密。②良好　③橙色5YR5/6　④ほぼ完形。	底部より体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
7	坏 土師器	床面	① 20.9 ③ 8.4	①精良。②良好　③橙色5YR7/6　④底部わずかに欠損	大型の坏、丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点で稜。口縁部はわずかに外傾する。	内面撫で(篦痕)。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。内外面一部煤付着
8	坩 須恵器	＋10	①　8.6 ③　8.7	①軽石、長石含、密。②良好③青灰色10BG5/1④口唇部わずかに欠損	底部より体部にかけて強く内彎し、体部中位で器最大径を有する。口縁部はほぼ直立する	内外面横位の撫で。外面下半～底部手持ち篦削り。	
9	甕 土師器	カマド	① 21.5　② 4.8 ③ 39.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③赤色10R5/6　④ほぼ完形。	平底。胴部は緩やかに内彎して立ち上り、長胴形をなす。口縁部は外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部斜・縦位の篦削り。	
10	甕 土師器	覆土	① 21.2　② 5.0 ③ 35.5	①石英、軽石、小石含、粗。②やや不良　③赤色10R5/6　④ほぼ完形	平底。胴部は緩やかに内彎して立ち上り、長胴形をなす。口縁部は外反する。	内面篦撫でか、口縁部横位の撫で。胴部下端横位、その他縦位の篦削り。	胴下半煤付着。器面剝落著しい。
11	甕 土師器	貯蔵穴	① 19.1	①石英、軽石、小石含、やや粗。②良好③橙色5YR6/6④胴下半欠損	胴部は長胴形をなして立ち上り、口縁部は短く外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	外面煤付着。

表－152　H163号住居跡出土遺物観察表（図－302　図版－94）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(11.2)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR⅞　④½強	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(11.3)	①石英、輝石含、密。②良好　③橙色5YR⅚　③⅓	体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部単一方向篦削り。	
3	甕 土師器	覆土	①(11.0)	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色5YR⅞　④口縁部½	胴部は球形をなして内彎するものか、口縁部は外反し、端部は丸い。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
4	甕 土師器	覆土	現存高6.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③浅黄橙色7.5YR⅘　④底部	不安定な平底。胴部は丸みをなし大きく内彎する。	内面篦撫で。外面横・斜位の篦削り。	底部～体部吸炭。

表－153　H164号住居跡出土遺物観察表（図－304　図版－94）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	床面	①(12.2)　②(5.8) ③　3.5	①輝石、軽石含、密。②良好　③にぶい橙色5YR⅝　④¼強	わずかに上げ底。体部は下端でくびれた後緩やかに内彎、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
2	羽釜	カマド	①(20.8)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい黄橙色10YR⅞④口縁½	胴部より口縁部にかけて緩やかに内彎。鍔は小型で張り出し弱い。器肉肥厚。	現存形で内外面横位の撫で。両面とも粘土紐つくり痕顕著。鍔貼付。	内外面煤状をなす
3	羽釜	カマド	①(21.1)	①石英、チャート含、密。②良好③にぶい黄橙色10YR⅞④上半⅓	胴部より口縁部にかけて緩やかに内彎、口縁上半で直立気味となる。鍔は張り出し弱い。	内外面共に横位の撫で。鍔貼付。	紐つくり痕あり
4	羽釜	床面	①(17.4)	①軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④下半⅓	口縁部は短く内傾する。鍔は上向きに強く張り出す。	内外面共に横位の撫で。鍔貼付。	鍔下端接合痕あり
5	羽釜	床面	②(6.4) 現存高20.7	①チャート、片岩、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞④胴部⅓	平底の底部から胴部は内彎して立ち上る。	内面～外面中位横位の撫で。下半縦位の篦削り。	

表－154　H165号住居跡出土遺物観察表（図－306　図版－94）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	羽釜	カマド	①(24.0)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝　④⅛弱	胴部内彎して立ち上り、口縁部はわずかに直立気味となる。鍔の張り出しは強い。口唇部丸い	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。鍔直下横位の篦削り、胴部縦位の篦削り。	つくり雑。内面煤付着。
2	羽釜	カマド	① 23.2	①輝石、石英、酸化鉄、小石含、密。②良好③橙色7.5YR⅝④上半部	胴部緩やかに内彎、口縁部は直立する。鍔は張り出し強い。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横、斜位の篦削り。	つくり雑。内面煤付着。

表－155　H166号住居跡出土遺物観察表（図－308　図版－94）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.8 ③　3.5	①輝石、石英含、密。②良好　③橙色2.5YR　④½強	安定した丸底を呈し、体部は緩やかに内彎して、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え、撫で。下半～底部篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 12.3　②　8.5 ③　2.8	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色5YR⅙　④½強	不安定な平底。体部は極緩やかに内彎し、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	底部外面接合痕。
3	坏 須恵器	覆土	①(11.9)　②　7.0 ③　3.6	①精良。②良好　③灰白色N⁄ ④体部の大半を欠損。	上げ底。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	椀 須恵器	床面	① 13.9　②　9.3 ③　4.7	①長石、小石含密②やや粗③灰黄褐色10YR⅝④体部一部欠損	底部は外傾するしっかりした高台。体部は腰部で張りを有した後内彎し、口縁部変換点で弱くくびれる。	轆轤整形。底部回転篦削り。付高台。	鉢形

表－156　H167号住居跡出土遺物観察表（図－310　図版－95）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	＋7	①(13.9)　②　6.8 ③　3.8	①長石、軽石含、密。②良好　③灰色N⅘　④½	平底。体部はほぼ直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	坏 須恵器	覆土	① 13.1　②　8.0 ③　3.3	①チャート、小石、軽石含、密。②良好　③灰色7.5YR⅝　④½強	底部は中央部に向って窪む。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
3	甕 土師器	カマド	①(21.6)	①精良。②良好　③橙色2.5YR⅝④口縁部¼	肩部は内彎して立ち上り、口縁部は「コ」の字状を呈するが、区画はさほど明瞭ではない。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

表－157　H168号住居跡出土遺物観察表（図－312　図版－95）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	① 11.6　②　7.6 ③　2.9	①輝石、軽石、石英含、やや粗。②良好　③橙色5YR⅝　④¼強	平底。体部は緩やかに内彎し、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 土師器	カマド	①(12.8)　②(9.4)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝　④⅓	平底。体部は緩やかに内彎、変換点で弱くくびれる。口縁部は外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
3	坏 須恵器	カマド	①(13.8)　②(8.8) ③　3.1	①軽石、チャート含、密。②良好③灰白色5Y⅞　④¼	わずかに上げ底。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
4	甕 土師器	カマド	①(20.5)	①酸化鉄、小石含、密。②良好　③明赤褐色2.5YR⅝　④⅓	胴部は丸みをもって内彎し、上位で器最大径を有す。口縁部はほぼ「く」の字状に外反する	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。口縁下半に指押え。胴部横・斜位の篦削り。	
5	甕 土師器	カマド	①(22.0)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好　③橙色5YR⅝　④½	胴部は丸みをもって内彎し、上位で器最大径を有する。口縁部は「コ」の字状をなす。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。一部指押え。胴部横・斜位の篦削り。	

6	甕 土師器	覆土	①(21.3)	①酸化鉄、石英、長石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④¼弱	胴部は肩部で内彎し、口縁部「コ」の字状を呈する。	内面箆撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の箆削り。	
7	甕 土師器	床面	① 20.6	①酸化鉄、軽石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④¾	口縁部「コ」の字状。	内面撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横位の箆削り。	口縁部接合痕あり
8	鎌 鉄製品	床面	現存長6.6 身幅4.0 身厚 0.3 重量40	切先側身部を大きく欠損する。片側端部はほぼ90°の角度で折れ曲がる。背側は平ら。錆化している。			
9	刀子 鉄製品	+13	現存長18.7 身部10.9 茎7.8 身幅1.0～1.5 身厚 0.3 重量35	切先部及び身部の一部を欠損する。区部は、棟側で明瞭な段差を認む。棟部平ら。			
10	砥石 石製品	覆土	長7.9 幅5.3 厚1.6	手持ち砥。長方形断面凹状。片側小口面は自然面をのこす。4面使用。裏面は手前側が小さく面取りされ、研磨面をなしている。長軸・斜方向に弱い擦痕。手前側より中心部に向けて研磨減りし、よく使いこまれている。流紋岩。			タール状付着物。

表—158 H169号住居跡出土遺物観察表（図—314 図版—95）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	+21	① 13.0 ② 6.0 ③ 3.5	①軽石、長石含、密。②良好 ③灰色10Y⅘ ④完形	わずかに上げ底。体部は直線的に外傾し、口縁部は外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	坏 須恵器	+21	① 12.7 ② 6.4 ③ 3.3	①長石、軽石含、密。②良好 ③灰色7.5Y⅘ ④完形	上げ底。体部は緩やかに内彎し、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	坏 須恵器	床面	① 12.9 ② 6.4 ③ 3.6	①長石、軽石含、密。②良好 ③灰色10Y⅘ ④⅔	わずかに上げ底。体部は緩やかに内彎し、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	砥石 石製品	覆土	長6.9 幅5.6～2.5 厚4.2～	置き砥。断面凹状。表・裏面共に研ぎ減りが著しく、撓形を呈す。4面使用。特に表・裏面は研磨痕が著しい。片側小口面は自然面を残す。長・短軸方向に弱い擦痕を認む。流紋岩。			ほぼ全面にタール状付着物あり。
5	甕 土師器	カマド	①(21.9)	①精良。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④½	胴部は内彎して立ち上り、上半で器最大径を有する。口縁部は「く」の字状に外反する。	内面撫で(箆あて痕)。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の箆削り。	
6	甕 土師器	カマド	① 21.9	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④⅔	胴部は内彎し、口縁部外反する。	内面箆撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の箆削り。	
7	甕 土師器	+16	①(21.2)	①精良。②良好 ③橙色5YR⅝ ④½	胴部は上半で内彎し、口縁部「コ」の字状をなす。	内面撫で(箆あて痕)。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の箆削り。	
8	甕 土師器	カマド	①(21.3)	①精良。②良好 ③橙色7.5YR⅞ ④⅓強	胴部は内彎して立ち上り、口縁部は外反する。	内面撫で(箆あて痕)。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の箆削り。	
9	甕 土師器	カマド	① 20.3	①酸化鉄、小石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④⅔	胴部は内彎して立ち上り、上半で器最大径を有する。口縁部は「コ」の字状をなす。	内面撫で(箆あて痕)。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の箆削り。	

表—159 H170号住居跡出土遺物観察表（図—316 図版—96）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.2)	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅞ ④¼弱	体部は内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体部～底部箆削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(11.3)	①長石、軽石含、密。②やや粗 ③にぶい橙色7.5YR⅞ ④¼弱	平底。体部は緩やかに外傾し、口縁部変換点で弱くくびれる。	不明瞭。	器面磨耗著しい。

表—160 H171号住居跡出土遺物観察表（図—318 図版—96）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.5 ③ 5.4	①精良。②極めて良好 ③橙色2.5YR⅝ ④完形	丸底。体部丸みをもって内彎し、変換点で稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部不定方向の箆削り。	底部吸炭。
2	坏 土師器	床面	① 13.2 ③ 5.5	①酸化鉄含、密。②極めて良好③明赤褐色2.5YR⅝④口縁¼欠損	丸底。体部は丸く内彎して立ち上り、変換点で稜をもつ。口縁部直立し、上端で外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部箆削り。	
3	坏 土師器	床面	①(12.2) ③ 4.7	①酸化鉄、石英含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④⅔	丸底。体部は内彎して立ち上り、変換点で稜をもつ。口縁部はわずかに外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部箆削り。	底部内外面煤付着
4	坏 土師器	床面	①(11.6) ③ 6.0	①輝石、軽石含、粗。②良好 ③橙色5YR⅙ ④¾	丸底。体部丸みをもって内彎し、変換点で不明瞭ながら稜をもつ。口縁部外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部箆削りか。	内外面煤付着。器肉肥厚。
5	坏 土師器	貯蔵穴	① 11.2 ③ 4.9	①石英、軽石、輝石含、粗。②良好③橙色2.5YR⅝ ④⅔	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。	口縁部横位の撫で。体～底部指押え、箆削り。	内面剝落。内外面煤付着。
6	甕 土師器	床面	① 16.5	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④上半½	胴部は残存部で内傾し、口縁部は外反する。	口縁部横位の撫で。内面箆撫で。外面不定方向の箆削り。	接合痕顕著。煤付着。
7	甕 土師器	貯蔵穴	① 18.4	①輝石、軽石、酸化鉄含、粗。②不良 ③橙色10YR⅝ ④口縁部	肩部に張りを有し、口縁部は強く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部縦位の箆削り。	
8	甕 土師器	貯蔵穴	① 20.0	①輝石、軽石、石英含、粗。②不良③橙色10YR⅞ ④口縁部	肩部に張りを有し、口縁部は強く外反する。頸部沈線状をなす。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部縦位の箆削り。	頸部内面紐成形痕顕著
9	頸飾り 石製品	覆土	径3×2.4 厚0.8	基部平坦、下端で先細りする。器面は研磨され、基部側2個所に孔穿つ。上端片側側部窪みをもつ。			

表—161 H172号住居跡出土遺物観察表（図—320）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	皿 灰釉陶器	覆土	①(15.6)	①精良。②良好 ③灰白色5Y⅞ 釉薬にぶい緑色 ④口縁¼	体部緩やかに張る。	轆轤。体部内外面施釉。	施釉つけがけか。

表—162　H173号住居跡出土遺物観察表（図—322　図版—96）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	①(11.6)　②　8.3 ③　3.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅚　④⅔	平底。体部は浅く内彎して立ち上り、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向篦削り。	
2	刀子 鉄製品	覆土	現存長7.5　身部幅0.9　茎幅0.7 厚0.3　重量10前後		刃先・茎両端部を欠損。全体的に錆化著しく、遺存状態悪い。		
3	甕 土師器	カマド	①22.2	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③橙色7.5YR⅚④口縁部	胴部は内彎して立ち上り、上半で器最大径を有する。口縁部ほぼ「コ」の字状。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	口縁内面工具痕顕著。
4	甕 土師器	カマド	①(20.6)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR⅚　④½弱	胴部は緩やかに内彎し、上半で器最大径を有する。口縁部は外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	外面吸炭する。

表—163　H174号住居跡出土遺物観察表（図—324　図版—96）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 須恵器	+10	①12.2	①軽石、黒色鉱物含、密。②良好③灰白色7.5Y⅞④½。	体部は下半部で大きく張りを有した後屈曲し、上半部は緩やかに内彎する。	轆轤整形。底部回転糸切り。削り出し高台。	鉢形。

表—164　H175号住居跡出土遺物観察表（図—326　図版—96）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴	①(13.6)　②(5.9) ③　6.0	①石英、輝石、小石含、密。②良好③暗オリーブ灰色5GY⅓　④⅓	平底。体部は深く直線的に外傾し、口縁部はほぼ直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部内面篦磨き、外面篦削り。	体部の大半吸炭
2	坏 土師器	カマド	①13.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい黄橙色10YR⅞　④½弱	体部は深く直線的に外傾し、口縁部は弱く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部横・斜位の篦削り。	
3	坏 土師器	カマド	①(13.2)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝　④⅓	平底。体部は丸みをもって内彎し、口縁部はわずかに外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部横・斜位の篦削り。体部内面篦磨き。	
4	坏 土師質須恵器	床面下	①10.0　②4.6 ③　2.9	①輝石、酸化鉄、小石含、やや粗。②不良③淡黄色2.5Y⅝④口縁¼欠	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部切り離し不明。	底部吸炭。
5	埦 土師質須恵器	カマド	①(13.4)　②　7.8 ③　5.4	①軽石、輝石、石英、酸化鉄含、密。②良好③灰黄褐色10YR⅝④体部¾欠	「ハ」の字状に外傾する高い高台。体部緩やかに彎曲、口縁部上端でわずかにくびれる。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、横位の撫で。	外面煤付着。
6	羽釜	床面	①(21.0)	①輝石、石英、軽石含、密②良好③橙色7.5YR⅚④口縁部¼	断面三角形の肥厚した鍔。口縁部わずかに内傾する。	内面～外面横位の撫で。鍔貼付。	口唇部煤付着。

表—165　H176号住居跡出土遺物観察表（図—328　図版—96）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甑 土師器	床面		①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色5YR⅝　④胴部片	胴部緩やかに内彎する。下端寄りで0.6cmの孔穿たれる。	内面～下端部横、縦位の篦磨き。外面横・縦位の篦削り、一部縦位の篦磨き。	焼き締まる。

表—166　H177号住居跡出土遺物観察表（図—330　図版—97）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①12.8	①輝石、長石、小石含、やや粗。②良好　③橙色2.5YR⅝　④½弱	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①11.7 ③　3.1	①輝石、軽石、小石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④⅔	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
3	坏 土師器	床面	①(11.9)	①輝石、石英、長石、小石含、やや粗。②良好③橙色2.5YR⅝④½	平底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
4	甕 土師器	床面	①11.3	①輝石、長石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④上半½	胴部球形をなして内彎し、肩部で稜をもつ。口縁部は外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横位の篦削り。	器面磨耗する。
5	甕 土師器	床面	①(20.5)	①長石、石英、小石、輝石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④上半部	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。肩部稜をもつ。口縁部外反し、口唇部沈線状	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	

表—167　H178号住居跡出土遺物観察表（図—332　図版—97）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	覆土	①(20.0)	①石英、軽石、輝石、酸化鉄含、やや粗。②不良③橙色7.5YR⅚④口縁部½	直立気味の胴部から口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部縦位の篦削り。	
2	甕 土師器	カマド	①(20.2)	①軽石、石英、長石、輝石、酸化鉄含、やや粗。②不良　③にぶい黄橙色10YR⅞　④口縁部¼	直立する胴部から口縁部大きく外反し、端部水平面をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部縦位の篦削り。紐接合痕あり。	
3	甕 須恵器	覆土	①14.6 ③18.5	①長石、石英含、密。②極めて良好③灰色10Y⅘　④⅔	丸底。胴部は球形をなして内彎し、中位で最大径を有す。口縁部は外反し上端で屈曲、直立する	内面指押え、撫で痕。当て目、外面叩き目	

表—168　H179号住居跡出土遺物観察表（図—334　図版—97）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	カマド	①10.3　②(6.0) ③　3.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③黄橙色7.5YR⅞　④½強	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部外反する。器肉厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	
2	皿 灰釉陶器	床面	①(12.2)　②(6.7) ③　2.4	①精良。②良好　③素地灰白色10Y⅘　④⅔	内傾する短い高台。体部外傾して開き、口縁部くびれる。	轆轤。底部回転糸切り、横位の撫で、付高台。釉薬体部上半つけがけ。	釉薬とんでいる。

3	羽　釜	カマド	①(22.3)	①輝石、軽石、石英、長石、酸化鉄含、やや粗。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁½	胴部直立し、鍔は三角形状で上向き。口縁部は内傾して立ち上る。	内面～胴部上半横位の撫で。下半～縦位の篦削り。	
4	羽　釜	カマド	②　7.0	①輝石、石英、酸化鉄、軽石含、粗。②良好③橙色5YR⅞④胴～底部½弱	平底。胴部は肉厚、緩く内彎する。	内面横位の撫で。外面縦、横位の篦削り。底部一定方向篦削り。	器面凹凸あり。

表－169　H180号住居跡出土遺物観察表（図－335・337・338　図版－97・98）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(12.7)	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅞　④½弱	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半撫で。体～底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	＋11	①　13.2 ③　3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞　④口縁一部欠	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
3	坏 土師器	床　面	①(14.0) ③　3.2	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞　④½強	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
4	坏 土師器	覆　土	①(12.6) ③　3.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④½強	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
5	坏 土師器	床　面	①　12.4 ③　3.4	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好　③橙色5YR⅞　④½弱	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く内彎する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え。下半～底部篦削り。	
6	坏 土師器	床　面	①(13.8) ③　3.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝　④½	丸底で中央部平底気味。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立し、上端で外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
7	坏 土師器	床　面	①　13.7 ③　3.4	①輝石、石英、長石、酸化鉄含、密②良好　③橙色5YR⅞　④½欠	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	内面タール状付着物
8	坏 土師器	＋23	①　13.0 ③　3.1	①輝石、長石、石英、軽石含、密。②良好　③橙色5YR⅞　④½欠	丸底。体部緩やかに内彎し、体部上半～口縁部外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
9	坏 土師器	貯蔵穴	①(13.0)　②　8.0 ③　3.4	①軽石、長石、石英含、密。②不良③浅黄橙色7.5YR⅝　④½	平底か。体部緩やかに彎曲し、口縁部～体部への変換点不明瞭	磨耗著しく、成形調整不明瞭。底部篦削り。	
10	蓋 須恵器	＋7	①　14.7 ③　2.9	①軽石、長石含、密。②良好　③灰白色7.5Y⅞　④⅔欠損	天井部幅広の環状摘。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。内側に明瞭なかえしあり。	轆轤整形。天井外周部回転篦削り。	口縁部自然釉付着
11	坏 須恵器	床面下	①(12.8)　②(7.2) ③　3.7	①黒色鉱物粒、軽石粒含、密。②良好　③灰白色N⅞　④½弱	上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部で弱くくびれる。	轆轤整形。底部回転篦切り。	器形歪みあり。
12	坏 須恵器	床　面	①　13.4　②　9.0 ③　3.8	①精良。②良好　③灰白色N⅞　④½	わずかに上げ底。体部は下端丸みを有し、弱くくびれて外傾する。	轆轤整形。底部～外周部回転篦削り。	焼成むらあり。
13	坏 須恵器	カマド	①12.6　②7.5～7.8 ③　3.4	①軽石、長石、石英含、密。②良好③明青灰色5B⅞　④½	わずかに上げ底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部篦切り。回転篦削り。	器形歪みあり。
14	坏 須恵器	床　面	①(13.8)　②　8.2 ③　3.5	①チャート、小石含、密。②やや不良　③灰白色7.5Y⅞　④½強	平底。体部は下端でくびれ、丸みを有した後、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部回転篦削り。	
15	坏 須恵器	＋7	①(14.3)　②　7.8 ③　4.2	①精良。②良好　③青灰色5B⅝　④½強	平底。体部緩やかに内彎して立ち上る。下端部沈線状をなす。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部篦削り。	器面磨耗する。
16	坏 須恵器	＋16	①　12.5　②　7.4 ③　3.3	①軽石、チャート、長石含、密。②良好③内面灰白色7.5Y⅞、外面灰白色7.5Y⅞④½	体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り。回転篦削り。	
17	坏 須恵器	＋9	①13.8～14.0　②8.3 ③　4.5	①軽石、石英、長石、小石含、密。②良好　③明緑灰色5GY⅞　④¾	上げ底。体部は下端で弱くくびれ、緩やかに彎曲。口縁部わずかに外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部剝落著しい。	付高台の意図があったものか。
18	坏 須恵器	＋19	①(12.3)　②　7.3 ③　3.9	①長石、砂粒、軽石含、密。②良好③青灰色5B⅞　④体部¾	わずかに上げ底。体部張りを有して外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り、未調整。	
19	坏 須恵器	＋7	①　13.3　②　7.2 ③　4.1	①黒色鉱物粒、軽石含、密。②不良③灰白色10Y⅝　④体部¼欠	わずかに上げ底。体部は緩やかに内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り、撫で。	
20	埦 須恵器	床　面	①　13.2　②　7.2 ③　4.8	①精良。②良好　③灰色5Y⅝　④体部½欠	若干外傾する高台、体部は、腰部で張りを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦削り、横位の撫で。付高台。	
21	甕 土師器	＋11	①(21.8)	①軽石、酸化鉄、輝石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④口縁部¼	口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え痕。肩部横・斜位の篦削り。	接合痕認む。
22	甕 土師器	床　面	①(19.2)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝④口縁¼	胴部は張りがなく、内彎して立ち上る。口縁部は緩く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横・縦位の篦削り。	外面煤付着。
23	甕 土師器	床　面	①　19.9	①軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③外にぶい黄橙色10YR⅞、内橙色5YR⅞　④上半½	胴部内彎して立ち上り、肩部で稜をもつ。口縁部緩く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	外面炭化物状付着物顕著。上半煤状
24	砥石 石製品	＋7	長13.9　幅6.6 厚 4.4	置き砥か。長方形状、断面凹状、小口面は剝離している。3面使用。おしなべて長軸方向に擦痕。裏面は一部沈線状をなす。流紋岩。			
25	鍛冶椀形滓	床　面	径11.4×10.5 厚3.5～4.0　重量490	不整形状を呈し、表面凹状。裏面は曲面をなす。地肌は粗鬆で色調は青茶褐色を呈す。裏面焼結部は海綿状をなし多孔質であるのに対し、表面は密である。一部鉄錆付着する。マグネット反応は、表面側に強く反応する。			
26	鍛冶椀形滓	床　面	径 7.2×　6.2 厚 3.6～ 4.0　重量200	台形状を呈し、裏面で曲面を示す。表面側は木炭の噛み込み著しい。地肌は裏面側で密。局部的に海綿状をなす。色調は裏面青灰、表面茶褐色を呈す。裏面で強くマグネットに反応する。			

表－170　H181号住居跡出土遺物観察表（図－340　図版－98）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	貯蔵穴	①(10.8)　②　5.7	①輝石、軽石、石英、長石、小石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝④⅔	平底。体部変換点で強くくびれ、沈線状をなす。体部は内彎し口縁部で外反する。器肉厚い	轆轤整形。口縁部横位の撫で。底部右回転糸切り、未調整。	体部内面吸炭。
2	埦 土師質須恵器	カマド	①(14.7)	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③赤褐色2.5YR⅝④体部½	体部は内彎して立ち上り、口縁部わずかに外反する。器肉厚い。高台部欠損。	轆轤整形。口縁部外面横位の撫で。底部切り離し不明。	口縁部吸炭。

表—171　H182号住居跡出土遺物観察表（図—342　図版—98）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.1　② 8.6 ③ 3.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6　④体部1/4欠損	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部S字状にくびれ、口縁部短く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 12.0　② 8.2 ③	①長石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6④底～体部1/4欠損	平底。体部外傾して立ち上り、中位で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	内外面煤付着。
3	皿 須恵器	覆土	① 16.4　② 7.2 ③ 2.5	①軽石、石英、長石、酸化鉄含、密。②良好　③灰色5Y6/1　④1/3	平底。体部直線的に外傾し、口縁部短く直立する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	蓋の可能性あり 底部酸化焔。
4	坏 須恵器	床面	①(12.2)　② 5.8 ③ 4.1	①軽石、石英含、密②良好③外灰白色10Y7/1・内灰黄色2.5Y6/2④1/3	わずかに上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	外面一部吸炭。
5	坏 須恵器	覆土	①(13.2)　②(6.2) ③ 4.2	①精良。②良好　③灰黄色2.5Y7/2　④1/4	わずかに上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
6	坏 須恵器	床面	① 12.9　② 6.0 ③ 4.0	①軽石、長石含、密。②良好　③灰白色5Y7/2　④口縁部わずか欠損	わずかに上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
7	坏 須恵器	住居外	① 12.6　② 5.9 ③ 4.0	①軽石、石英含、密。②良好　③灰白色5Y7/2　④完形	わずかに上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
8	坏 須恵器	＋7	①(12.2)　②(6.2)	①軽石、長石含、密。②良好　③青灰色5BG5/1　④1/3	わずかに上げ底か。体部緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
9	甕 土師器	＋22	①(22.1)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6　④上半1/3	口縁部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。口縁部は外反し、端部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。篦痕。胴部横・斜位の篦削り。	

表—172　H183号住居跡出土遺物観察表（図—344　図版—98）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.2　② 8.0 ③ 3.3	①輝石、長石含、密。②良好　③橙色5YR6/6　④3/4	平底。体部緩やかに彎曲し、中位で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部概して一定方向篦削り。	
2	塊 土師器	覆土	② 6.5	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③橙色7.5YR7/6　④底部	わずかに外傾する肥厚した高台。	轆轤整形。底部回転糸切り。横位の撫で。付高台。体部内面螺旋状篦磨き。体部内面吸炭	内黒処理か。
3	甕 土師器	ピット	①(18.0)	①輝石、長石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6　④1/3弱	胴部内彎して立ち上り、下半で接合による凹凸、上半で最名径を有し大きく張る。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	口縁部内外面共に「コ」の字状。
4	甕 土師器	ピット	①(19.6)	①輝石、長石、軽石、酸化鉄含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/6④上半1/3	胴部内彎して立ち上り、口縁部「コ」の字状をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。篦痕。胴部横位の篦削り。	

表—173　H184号住居跡出土遺物観察表（図—346　図版—98）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	貯蔵穴	① 13.5　② 6.7 ③ 3.7	①長石、チャート含、密。②良好③灰白色7.5Y7/1　④ほぼ完形	平底。体部は下端でくびれ、緩やかに内彎。口縁部は外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	

表—174　H185号住居跡出土遺物観察表（図—348　図版—98）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	＋16	①(12.6)　② 8.0 ③ 3.2	①輝石、長石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6　④1/2	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、中位でわずかにくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
2	甕 土師器	＋16	①(19.4)	①輝石、軽石、石英、長石含、密②良好③橙色2.5YR5/6④口縁部1/4	肩部張り、上半で稜をなす。口縁部「コ」の字状。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁部外面指押え痕。肩部横位の篦削り。	

表—175　H186号住居跡出土遺物観察表（図—350　図版—99）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.8　② 8.7 ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR7/6　④ほぼ完形	安定した丸底。体部は緩やかに内彎して口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	貯蔵穴	① 12.3 ③ 3.2	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR7/4　④3/4	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部不定方向篦削り。	
3	棒状 鉄製品	覆土	現存長5.7　幅0.5～0.7 厚0.4～0.6　重量——	断面方形状。下端部で先細りする。上・下両端部ともに欠損。錆化著しい。			
4	小刀か 鉄製品	床面	現存長13.3　幅1.9 厚0.4　重量——	刃部のみ残存か。背側平ら。全体的錆化著しい。			

表—176　H187号住居跡出土遺物観察表（図—352　図版—99）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(11.7)	①石英、軽石、輝石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④小破片	体部緩やかに内彎し、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫でか。底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(10.6)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/6　④1/3	平底。体部は緩やかに内彎して立ち上り、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え。底部篦削り。	体部外面墨書「介」
3	甕 土師器	床面	①(20.7)	①輝石、長石、石英、軽石含、密。②良好　③にぶい赤褐色2.5YR4/4④口縁1/4	口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

表一177　H188号住居跡出土遺物観察表（図一354　図版一99）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	① 12.4 ③ 3.3	①輝石、軽石、石英、小石含、密。②良好　③内橙色5YR⅝・外橙色2.5YR⅝　④ほぼ完形	安定した丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部不定方向の篦削り。	煤付着。
2	甕 土師器	床面	①(20.8)	①軽石、石英、輝石、酸化鉄、長石含、密。②良好　③橙色2.5YR⅝　④口縁部¼	口縁部ほぼ「コ」の字状を呈するが外反の度合い弱い。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	内面接合痕あり。
3	短頸壺 須恵器	覆土	①(11.8)	①軽石、石英含、密。②良好　③灰色5Y⅝　④口縁部½	肩部大きく張り、口縁部短く直立する。	内外面共に横位の撫で。	口縁部自然釉付着

表一178　H189号住居跡出土遺物観察表（図一356　図版一99）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	①(13.2)	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③橙色5YR⅚　④⅓	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 須恵器	床面	① 13.0　② 7.4 ③ 3.9	①軽石、長石、小石含密②良好③明オリーブ灰色2.5GY⅞④体部½欠	ほぼ平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	砥石 石製品	床面	長6.6　幅5.4 厚2.6	手持ち砥。平面長方形。断面凹状。小口面は剝離している。横・斜方向に弱い擦痕。裏面は横位方向。手前から奥側にかけて研磨減りする。4面使用。流紋岩。			タール状付着物

表一179　H190号住居跡出土遺物観察表（図一358　図版一99）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	貯蔵穴	①(11.3)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝　④小破片	平底。体部は緩やかに内彎し、口縁部はわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。底部篦削り。	器面磨耗する。
2	坏 土師器	床面	①(11.3)	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝　④⅕	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部弱くくびれ口唇部強く内側に内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
3	不明 鉄製品	床面	断面径0.4	止金具か。断面円形状。錆化している。			

表一180　H191号住居跡出土遺物観察表（図一360　図版一99）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	周溝	① 11.8 ③ 3.5	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝　④ほぼ完形。	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	+10	①(13.7)	①輝石、酸化鉄、石英含、密。②良好③橙色7.5YR⅚　④⅓	体部彎曲して立ち上り、口縁部わずかに窪みをもつ。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面放射状篦磨き。外面篦削りか。	器面磨耗する。
3	坏 須恵器	床面	① 13.2　② 8.5 ③ 3.7	①酸化鉄、軽石含、密。②良好　③灰白色10Y⅞　④⅕	底部中央窪む。体部直線的に外傾し、口縁部でやや直立する。	轆轤整形。底部回転篦切り、撫でか。	
4	埦 須恵器	+29	② 8.3	①軽石、石英、小石含、密。②良好③青灰色B⅝　④底部	「ハ」の字状に外傾するしっかりした高台。腰部張る。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台。	
5	砥石 石製品	覆土	長7.3　幅2.3 厚3.0	手持ち砥。長方形を呈し、片側小口面は自然面を残す。側面の一部角面取りされる。表面は滑らか。おしなべて長軸方向に若干の擦痕が認められる。裏面に加工痕あり。4面使用。流紋岩。			
6	砥石 石製品	覆土	長6.8　幅6.6 厚3.0	手持ち砥。楕円形を呈す。斜方向に弱い擦痕あり。研主体を整えたと考えられる沈線状の痕跡あり。安山岩。			
7	紡錘車 石製品	覆土	上径2.9　下径4.2 厚 1.5　孔径0.7	断面台形状。上・下径面共に平坦。小型である。両面ともに製作時の調整痕を認む。側面は面取りしたのち横位方向に調整痕著しい。変質蛇紋岩			
8	鋤先 鉄製品	覆土	全長26.9　刃幅10.5　側部幅2.6 厚0.5　刃厚0.4～0.5　重量500		平面U字状。内縁に沿い、木質部挿入の為の溝をなす。(断面Y字状)、側面は共に扁平。基部の一部を欠損。刃部先端尖縁。研磨減りか。全面錆化している。		

表一181　H192号住居跡出土遺物観察表（図一362　図版一99）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	住居外	① 12.5　② 6.0 ③ 3.3	①軽石、長石含、密。②良好　③青灰色10BG⅝　④完形。	わずかに上げ底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	自然釉付着。
2	埦 須恵器	北壁面	② 7.0	①石英、長石含、密。②良好　③灰白色7.5Y⅞　④下半分	わずかに外傾する短い高台。体部内彎する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
3	甕 土師器	カマド	① 19.2	①輝石、軽石、長石、小石含、密。②良好　③橙色5YR⅝　④上半部	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。肩部弱い稜をなし、口縁部「コ」の字状をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	口唇部直立する。
4	甕 土師器	カマド	①(21.6)	①輝石、長石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝　④底部・口縁½欠	細身の下半から内彎し、上半で大きく張る。口縁部直立し、上半で外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	下半、煤付着。
5	鎌 鉄製品	床面	現存長10.0　幅3.5 厚0.4　重量——	両端部欠損。背側は平ら。錆化、剝落著しい。			
6	刀子か 鉄製品	覆土	現存長 7.1　幅1.1 厚0.3	刃、茎部の先端を欠く。区部明瞭な段差は見い出し得ない。錆化している。			

表一182　H194号住居跡出土遺物観察表（図一364　図版一100）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	不明	① 12.3　② 7.5 ③ 3.7	①長石、軽石、石英含、密。②良好③灰白色5Y⅞　④体部⅓欠	ほぼ平底。体部への変換点不明瞭。体部直線的に外傾し、口縁部わずかに外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	

2	蓋 須恵器	床面	① 13.6 ③ 3.3	①長石含、密。②良好 ③明青灰色5BG7/1 ④体部わずか欠損	体部は天井部から緩やかに彎曲し、口縁部は短く直立する。	轆轤整形。天井外周部回転篦削り。摘貼付。	
3	小型短頸壺 須恵器	周溝	① 4.7 ② 5.4 ③ 5.8	①黒色鉱物粒含、密。②良好 ③灰色10Y5/1 ④完形。	平底。胴部は内彎して立ち上り、中位で大きく張る。口縁部は短く直立する。	轆轤整形。底部回転篦切り。撫でか。	
4	甕 土師器	床面	①(19.2)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR7/6 ④口縁部1/5	胴部内彎し、口縁部外反する。胴部の張り弱い。	口縁部内外面横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	
5	紡錘車 石製品	床面	上径3.1 下径4.6 厚 1.5 孔径0.9	断面台形状。上・下径面共に中心部に向ってわずかに窪む。両面共に製作時の調整痕及び、使用痕認む。側面研磨痕著しい。下径面端部は剝離している。かんらん岩。			

表一183 H196号住居跡出土遺物観察表（図一367 図版一100）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+14	① 11.8 ③ 3.1	①軽石、長石、輝石、石英含、密②良好③橙色7.5YR6/6④体部1/4欠損	安定した丸底。体部は緩やかに彎曲し、上半は外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	底部内面中央篦記号「×」
2	坏 土師器	覆土	①(17.2) ②(11.0) ③ 5.3	①軽石、長石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR7/6 ④1/5	平底。体部緩やかに内彎する。	体～底部篦削りか。器面磨耗著しく、不明瞭	
3	坏 須恵器	床面	① 13.0 ② 7.4 ③ 3.4	①軽石含、密。②良好 ③灰白色N7/0 ④完形	平底。体部直線的に外傾し、上半わずかにくびれる。	轆轤整形。底部回転篦切り、撫で。	焼きむらあり。
4	盤 須恵器	覆土	①(14.0) ② 11.4 ③ 3.3	①精良。②良好 ③青灰色10BG5/1 ④1/4	断面台形状の短い高台。体部外傾して開く。底部中央突出する。	轆轤整形。底部回転篦削り。撫で。付高台。	
5	甕 土師器	床面	①(20.3)	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④1/4	口縁部外反し、口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
6	甕 土師器	床面	① 21.2	①輝石、軽石、長石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR7/6④上半1/2	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。口縁部緩く外反する。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。篦痕。胴部横～縦位の篦削り。	外面煤付着。
7	棒状 鉄製品	+7	現存長5.7 幅0.6 厚0.3	上・下両端部共に欠損する。断面方形状。錆化している。			

表一184 H197号住居跡出土遺物観察表（図一369 図版一100）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	① 12.2 ② 9.0 ③ 2.7	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6 ④完形。	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれる。口唇部内側に内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	口縁部タール状付着物。
2	坏 土師器	周溝	① 11.8 ② 9.4 ③ 3.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6 ④3/4	張り出し気味の平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。概して一定方向の篦削り。	
3	坏 土師器	+8	① 12.2 ② 9.2 ③ 3.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6 ④完形。	張り出し気味の平底。体部緩やかに彎曲し、口唇部で内側に内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
4	埦 須恵器	床面下	① 16.3 ② 8.0 ③ 6.4	①長石、軽石含、密。②良好 ③淡黄色7.5Y8/3 ④体部2/3欠	「ハ」の字状に外傾するしっかりした高台。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	大型の埦。
5	瓦	覆土	厚1.5弱	①輝石、軽石、石英含、密。②不良③浅黄橙色7.5YR8/4 ④小破片	身部緩く彎曲する。内面布目痕。		外面磨耗する。
6	紡錘車 鉄製品	床面	全長25.5 紡輪径5.1 厚0.6 軸径0.5	軸部両端を欠損。軸部下端は先細りする。紡輪部は扁平、錆化している。			
7	刀子 鉄製品	床面	現存長7.9 幅1.1 厚0.4	両端部を欠損する。背側平ら。区部やや細身となる。錆化している。			

表一185 H199号住居跡出土遺物観察表（図一371 図版一100）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+7	① 12.8 ③ 3.5	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6 ④完形	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部直立、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。撫で。体～底部一定方向篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 13.8 ③ 3.8	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④3/4	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部で内傾する。端部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	床面	① 13.7	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR6/6 ④2/5	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部直立する	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
4	坏 須恵器	床面	① 14.4 ② 9.0 ③ 3.5	①精良。②不良 ③淡橙色5YR8/4 ④3/4	わずかに上げ底。体部下端部で丸みを有し、外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部回転篦切り。底部～外周部回転篦削り。	

表一186 H200号住居跡出土遺物観察表（図一373 図版一100）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	周溝	① 12.4 ③ 3.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④完形。	丸底。体部丸みをもって内彎し、口縁部は上端で内側に強く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 11.7 ② 9.6 ③ 3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/4	張り出し気味の平底。体部緩やかに内彎し、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部概して一定方向の篦削り。	内面中央篦記号「メ」
3	坏 土師器	覆土		①石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR6/6 ④小破片	平底。体部緩やかに内彎して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。撫で。底部篦削り。	体部内面墨書「寺」
4	坏 須恵器	床面	① 12.5 ② 7.8 ③ 3.4	①精良。②良好 ③灰白色5Y8/1 ④3/5	上げ底。中央部凸状。体部緩やかに内彎する。	轆轤整形。底部右回転篦切り。	口唇部外面吸炭。
5	坏 須恵器	周溝	① 12.8 ② 7.1 ③ 4.0	①精良②良好③外灰白色7.5Y7/1 内明オリーブ灰色2.5GY7/1④5/6	わずかに上げ底。体部下端に丸みを有し、直線的に外傾、口縁部でさらに外傾する。	轆轤整形。底部右回転篦切り。	
6	刀子 鉄製品	床面	現存長7.4 幅0.9 前後 厚0.15	両端部ともに欠損。片側端部は先細りする。身部に一部木質付着。			

表一187　H201号住居跡出土遺物観察表（図一375　図版一100）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.8 ③ 3.2	①輝石、軽石、石英、小石含、密。②良好③橙色2.5YR⅞④ほぼ完形	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
2	坏 須恵器	＋25	①(12.0)　②　6.0 ③　3.2	①長石、軽石、小石含、密。②良好③灰色7.5Y⅝　④⅓	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	
3	坏 須恵器	＋25	①(13.0)　②　6.3	①石英、長石、軽石含、密。②良好③灰白色7.5Y⅞④⅓	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
4	坏 須恵器	＋46	①(12.8)　②　6.0 ③　3.4	①片岩、軽石、小石含、密。②良好③灰白色N⅞　④½	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
5	甕 須恵器	＋41	① 23.0	①精良。②良好　③灰色7.5Y⅝④口縁½	肩部大きく張り出し、頸部外反して立ち上り、上半で屈曲し口縁部直立する。	頸～口縁部横位の撫で。肩部内面当て目、外面叩き目。	
6	鎌あるいは鋤 鉄製品	＋7	現存長11.1　身部幅1.3 軸幅0.8　厚0.7		軸部下端は断面方形状を呈し、身部に移行するにしたがい扁平となる。身部先端は楕円形状を呈し、断面は扁平な両丸。錆化している。		

表一188　H202号住居跡出土遺物観察表（図一377　図版一101）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.6　②　7.8 ③　3.0	①石英、軽石、長石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝　④½強	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部でくびれる。口唇部丸くわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 11.3　②　7.7 ③　2.8	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝　④⅔	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	底部外面墨書「真」
3	埦 須恵器	床面	① 15.5　②　8.9 ③　5.9	①石英含、精良。②良好　③灰白色N⅞　④完形	大型の椀。高台部外傾し、体部は緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
4	長頸壺 須恵器	＋6		①極めて精良。②良好　③暗青灰色10BG⅘　④頸部	直線的に外傾し、中位で沈線状をなす。下端部接合剝離痕顕著。	内外面横位の撫で。	
5	甕 須恵器	西壁下	最大径52.7 現高　45.8	①輝石、軽石含、密。②良好　③灰色7.5Y⅝　④胴部	大型の甕。丸底。胴部内彎して立ち上り、断面接合痕認む。	内面当て目、外面叩き目	
6	鍛冶椀形滓	床面	径9.5×9.0 厚5.8　重量260	不整形状を呈し、裏面は曲面を示し、表面凸状に焼結する。木炭の噛み込み認む。周縁部海綿状をなす。地肌は粗鬆、色調は青茶褐色。裏面側で強くマグネットに反応する。			

表一189　H203号住居跡出土遺物観察表（図一379　図版一101）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	① 11.9　②　8.6 ③　3.1	①軽石、石英、長石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④ほぼ完形。	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれる。口唇部丸く、内側に内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向篦削り。	一部煤付着
2	坏 土師器	＋49	①(12.1)　②(8.0)	①軽石、長石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝　④¼	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれ、口唇部は内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁部外面～体部指押え。底部篦削り。	器形ややいびつ。
3	坏 土師器	＋23	①(12.1)　②(8.2) ③　3.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅞　④½	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部で弱くくびれ、外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
4	坏 土師器	カマド	① 12.3　②　7.8 ③　3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝　④⅔	平底。体部との変換点不明瞭。体部緩やかに外傾し、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部おしなべて一定方向篦削り。	外面煤付着。 器形ややいびつ。
5	坏 須恵器	床面	① 13.3　②　6.7 ③　4.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい黄橙色10YR⅞④体部¾欠	ほぼ平底。体部緩やかに彎曲して立ち上る。口縁部器肉厚い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
6	坏 須恵器	＋32	① 12.8　②　7.5 ③　3.5	①精良。②良好　③灰白色5Y⅞ ④ほぼ完形	平底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
7	坏 須恵器	床面	① 12.9　②　7.0 ③　3.3	①軽石、長石含、密。②極めて良好③青灰色5B⅘④体部¼欠損。	ほぼ平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
8	蓋 須恵器	カマド	① 16.0	①軽石、長石含、密。②やや不良③淡黄色5Y⅞　④½	天井部平坦。体部外傾して開き、端部で屈曲、口縁部直立気味となる。	轆轤整形。天井部回転篦削り。	
9	甕 土師器	カマド	① 18.6	①輝石、酸化鉄、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝④胴部¼	胴部は内彎して立ち上る。上半で大きく張り、最大径を有す。口縁部「コ」の字状。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁部外面指押え。胴部横、縦位の篦削り。	胴部煤付着 内面接合痕

表一190　H204号住居跡出土遺物観察表（図一381　図版一101）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	＋20	①(12.6) ③　3.9	①輝石、軽石、長石、石英含、密。②良好　③橙色5YR⅞　④⅘	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。体～底部不定方向篦削り。	
2	坏 土師器	＋20	①(12.9) ③　3.7	①軽石、石英含、密。②良好　③橙色2.5YR⅞　④½	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	＋16	① 12.7 ③　3.2	①輝石、石英、軽石、長石含、密。②良好　③橙色2.5YR⅝　④¾	安定した丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
4	坏 土師器	床面	①(14.0) ③　3.0	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅞　④½	安定した丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
5	蓋 須恵器	覆土	①(14.2) ③　3.5	①軽石含、密。②良好　③灰白色10Y⅟　④⅓	体部は緩やかに彎曲し、口縁部は短く外傾する。小型。	轆轤整形。天井～外周部回転篦削り。摘貼付。	
6	坏 須恵器	＋8	① 13.0　②　8.8 ③　3.3	①黒色鉱物粒含、密。②良好　③灰色N⅝　④½	上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転篦切り。底部～外周部回転篦削り。	
7	坏 須恵器	床面	①(13.0)　②　8.5 ③　3.4	①軽石、酸化鉄含、密。②良好　③明オリーブ灰色5GY⅟　④⅓	平底。体部は下端でわずかに屈曲し、外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部～外周部回転篦削り。	
8	坏 須恵器	床面	①(14.3)　②　9.3 ③　3.9	①精良。②やや不良　③灰色N⅝　④⅔	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	器面剝落する。

9	坏 須恵器	+12	①(12.7) ②(8.1) ③ 3.7	①軽石含、密。②良好 ③灰白色10Y7/1 ④1/4	わずかに上げ底。底～体部への変換点は丸い。体部は直線的に外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部再調整か	
10	甕 土師器	床面	①(13.5)	①輝石、軽石、石英、酸化鉄含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁部1/4	肩部わずかに稜をなし、口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	口縁部接合痕。器面剝落する。
11	甕 土師器	+20	①(18.2)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6 ④1/4	胴部球形をなして内彎し、口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁部内面指押え痕。肩部横・斜位の篦削り。	口縁部内外面接合痕。
12	瓶 須恵器	+17	②(12.5)	①軽石含、密。②良好 ③暗青灰色5B5/1 ④下半1/3	断面台形状の短い高台、胴部緩く内彎。	内外面横位の撫で。外面下端部篦削り。付高台。	
13	棒状 鉄製品	+7	現存長5.0 幅0.3～0.5 厚0.2～0.3	上下両端部共に欠損する。下端部先細りし、上半部断片やや扁平。			
14	鏃 鉄製品	+7	現存長12.2 茎幅0.5 身部幅 1.9 厚0.2～0.4	羽子板の形状を呈し、身部は扁平な両丸造り、茎部断面方形状。錆化している。			刀子とも考えられる。

表－191 H205号住居跡出土遺物観察表（図－383 図版－102）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+9	① 13.5 ③ 3.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR7/6 ④ほぼ完形	安定した丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部わずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫でか。体～底部篦削り。	器面剝落著しい。
2	坏 土師器	貯蔵穴	① 14.4 ② 9.3 ③ 4.5	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6 ④3/4	丸底。体部は底部からの変換点でやや屈曲し、緩く外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部内面縦位篦磨き。体～底部篦削り。	底部外面篦記号「メ」
3	坏 須恵器	覆土	①(13.8) ②(9.4) ③ 3.2	①軽石、小石含、密。②良好 ③灰色7.5Y5/1 ④1/4	わずかに上げ底。体部は下端を丸みを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。外周部回転篦削り。	
4	砥石 石製品	床面	長5.2 幅2.7 厚2.6	手持ち砥。断面凹状。5面使用。片側小口面は研主体を整えた為か強い沈線状をなす。長・短・斜方向に弱い擦痕。各面とも均一。よく使いこまれている。流紋岩。			

表－192 H206号住居跡出土遺物観察表（図－385 図版－102）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	住居外	①(14.4) ② 9.2 ③ 3.8	①精良。②良好 ③明オリーブ灰色2.5GY7/1 ④3/4	わずかに上げ底。体部は外傾して開き、中位で弱い稜をなす。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
2	坏 須恵器	+8	①(13.5) ② 7.0 ③ 3.4	①小石、軽石含、密。②良好 ③灰白色7.5Y7/2 ④体部3/4欠	わずかに上げ底。体部外傾して立ち上る。下端部やや丸味。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	坏 須恵器	覆土	①(12.6) ② 5.9 ③ 3.4	①長石、酸化鉄、小石含、やや粗。②不良③オリーブ灰色2.5GY5/1	上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	④体部3/4欠損。
4	甕 土師器	覆土	①(19.3)	①輝石、石英、長石含、密。②良好③橙色2.5YR5/8 ④口縁部1/4	胴部緩やかに内彎し、口縁部外反する。	内面撫で。口縁部内外面横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	
5	巡方 鉄製品	+29	長径3.2 短径2.6	長方形状の形態。裏面3個所に径0.15cmの銅製鋲穿たれている。			
6	刀子 鉄製品	床面	現存長5.2 刃幅1.2 厚0.5	両端部共に欠損する。錆化している。			
7	砥石 石製品	覆土	長5.4 幅2.8 厚2.2	手持ち砥。平面長方形。断面楕円形。小口面は剝落している。4面使用。長・斜方向擦痕。一部沈線状をなす。器面滑らか。奥部側に向って研磨減りする。よく使いこまれている。流紋岩。			
8	鞴羽口	カマド	全長18.7径7.5～8.0 孔径1.9～2.0前後	2個体を接合し、1個体としている。端部は両者共に飴状を呈し、小気泡点在する。側面は指頭による調整痕認む。胎土、砂質で藁状の植物繊維含む。灰色～灰白色～褐色の順で焼成変化している。			支脚として使用か。

表－193 H207号住居跡出土遺物観察表（図－387 図版－102）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(14.4) ③ 3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/2	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	
2	坏 土師器	+8	①(15.8)	①輝石、石英含、密。②良好 ③明赤褐色5YR5/6 ④1/5	体部内彎し、口縁部直立する。体部より口縁部変換点でわずかに稜をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面縦位の篦磨き。体～底部篦削り。	内面タール状付着物。
3	甕 土師器	貯蔵穴	① 21.8	①石英、軽石、小石含、密。②良好③明黄褐色10YR7/6 ④1/2	胴部緩く内彎して立ち上り、口縁部外反する。口縁部に最大径を有する。	内面～口縁部外面横位の撫で。篦あて痕。外面横・縦位の篦削り。	接合痕あり。外面タール状付着物。

表－194 H208号住居跡出土遺物観察表（図－389）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床面	② 6.9	①軽石、長石含、密。②良好 ③青灰色5B5/1 ④底部1/2	上げ底。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	

表－195 H209号住居跡出土遺物観察表（図－391 図版－102）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+15	①(14.6)	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR6/6 ④1/5	体部内彎し、口唇部内傾し、端部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 須恵器	床面	① 13.4 ② 8.4 ③ 3.4	①黒色鉱物粒含、精良。②極めて良好 ③青灰色5B5/1 ④3/5	上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転篦切り。	

表一196　H210号住居跡出土遺物観察表（図一393　図版一102）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(12.3)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④½弱	体部内彎して立ち上り、口縁部やや外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫でか。体～底部篦削り。	器面剝落する。
2	坏 土師器	覆土	①(12.3)	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色5YR⅝　④½弱	平底。体部緩やかに彎曲する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	床面	①(11.7)	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③橙色5YR⅝　④⅓弱	体部緩やかに内彎する。	内面～口縁部外面横位の撫で。底部篦削り。	器面磨耗著しい。
4	蓋 須恵器	覆土	①(17.3)	①軽石、長石含、密。②良好　③灰白色N⅞　④¼	天井部若干窪み、体部は緩やかに外傾し、口縁部短く直立する。摘欠損する。	轆轤整形。天井外周部回転篦切り。	
5	坏 須恵器	覆土	①(12.0)　②(7.1) ③　2.8	①軽石、長石含、密。②良好　③灰白色10Y⅞　④¼	わずかに上げ底。体部外傾して開く。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部手持ち篦削り。	
6	坏 須恵器	床面	①　12.1　②　7.0 ③　3.8	①長石、軽石、酸化鉄、石英含、粗②やや不良③浅黄色2.5Y⅞④完形	上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部外面墨書「丹」
7	甕 土師器	床面	①(20.0)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅝　④½弱	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有する。口縁部は上半で外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁部外面指押え。内面篦痕。胴部横・縦位の篦削り	接合痕認む。

表一197　H211・215号住居跡出土遺物観察表（図一395　図版一102）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (H211)	坏 土師器	覆土	①(12.5) ③　3.0	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝　④½	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部でやや外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え痕認む。体部撫で。底部不定方向篦削り。	
2 (H215)	坏 土師器	覆土	①(12.8)	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③橙色5YR⅚　④½	体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向篦削り。	
3 (H215)	坏 土師器	覆土	①(13.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞　④½弱	体部内彎して立ち上り、口縁部変換点でわずかにくびれる。口唇部丸い。	内面横位の撫で、縦位の篦磨き。	外面剝落著しく、調整痕等不明瞭
4 (H211)	坏 須恵器	床面	①(12.7)　②(7.0) ③　3.7	①長石、軽石、石英、雲母含、やや粗②良好　③灰色5Y⅘　④¼	上げ底。体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部回転糸切り。	器面磨耗する。
5 (H215)	坏 須恵器	+12	①(12.4)　②(7.0) ③　3.6	①長石、軽石、石英含、密。②良好③灰白色N⅞　④⅕	わずかに上げ底。体部は下端で弱くくびれ、緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
6 (H215)	甕 土師器	覆土	①(18.9)	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色2.5YR⅝　④口縁部¼	口縁部「コ」の字状。肩部わずかに稜をなす。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え。肩部横位の篦削り。	
7 (H211)	甕 土師器	床面	②　5.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③赤褐色2.5YR⅘　④底部	不安定な平底。	内面篦撫で。外面縦位、底部一定方向の篦削り。	
8 (H215)	砥石 石製品	+26	長6.3　幅1.4 厚1.8	手持ち砥。平面長方形。断面凹状。器面の大半を欠損する。片側小口面はかろうじて自然面をのこす。3面使用。長・短軸方向に弱い擦痕。流紋岩。			

表一198　H212号住居跡出土遺物観察表（図一397　図版一103）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.4)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅞　④⅓	体部緩やかに彎曲し、中位で弱くくびれる。口縁部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏(内黒) 土師器	+11	①(11.7)　②　6.0 ③　3.9	①輝石、石英含、密。②良好　③橙色7.5YR⅞　④体部½欠	わずかに上げ底。体部緩やかに内彎する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。内面横・斜位の篦磨き、黒色処理。	
3	坏 須恵器	カマド	①(13.4)　②　7.7 ③　3.6	①長石含、精良。②やや不良　③暗灰黄色2.5Y⅘　④½強	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部で外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整	酸化焔気味 体部外面吸炭
4	埦 須恵器	カマド	②　7.4	①長石、軽石含、密②やや不良③外暗灰黄色2.5Y⅝内黄橙色10YR⅞	「ハ」の字に外傾する、しっかりした高台。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	酸化焔気味。外面吸炭。④下半部
5	甕 土師器	覆土	①(20.6)	①輝石、長石、酸化鉄含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④口縁部⅕	口縁「コ」の字状。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	接合痕あり。
6	紡錘車 石製品	+27	上径1.5　下径3.2 厚　1.5　孔径0.7	断面台形状。上・下径面ともわずか凸状をなす。小型。両面ともに製作時による調整痕ないしは、使用痕と考えられる擦痕認む。かんらん岩（蛇紋岩）。			
7	砥石 石製品	覆土	長9.3　幅3.5 厚3.6	手持ち砥。糸巻状をなし断面凹状。小口面は剝離している。4面使用。長・斜方向に弱い擦痕。表・裏中心部及び右側面は手前から中心部に向って研磨減りする。砂岩。			
8	砥石 石製品	床面	長7.4　幅4.5 厚1.7	手持ち砥。長方形を呈し、断面凹状。肩部中心及び右寄りの2個所に径0.5cmの孔穿たれている。4面使用。おしなべて長軸方向に弱い擦痕。手前側より奥部にかけて研磨減りする。流紋岩。			

表一199　H213号住居跡出土遺物観察表（図一399　図版一103）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(12.1)	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝　④⅓	体部緩やかに彎曲し、口縁変換点でわずかにくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	内面吸炭。
2	台付甕 土師器	貯蔵穴	①　11.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅚　④台部下半欠損。	胴部球形をなして内彎し、肩部で稜をもつ。口縁部緩く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。台部横位の撫で。	内面篦痕。外面煤付着。
3	甕 土師器	カマド	①(18.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅚　④口縁部¼	肩部稜をなし、口縁部ほぼ直立し、上半で外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え。肩部横位の篦削り。内面篦痕。	
4	甕 土師器	床面		①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR⅚　④底部	不安定な平底。	内面撫で。外面～底部篦削り。	器面磨耗する。
5	平鑿か 鉄製品	+9	現存長11.8 軸幅0.8～0.9　厚0.6～0.8	茎断面方形状。刃部は薄く扁平で先細りする。しかし茎部と区部との境界は認められない。			

表—200　H214号住居跡出土遺物観察表（図—401　図版—103）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.2)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/2	体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部一定方向の篦削り。	
2	砥石 石製品	覆土	長6.7　幅3.1 厚2.1	手持ち砥。平断面共に長方形を呈す。片側小口面及び裏面は自然面をのこす。表面は斜方向に弱い擦痕。手前より奥部にかけてわずか研磨減りする。裏面未使用。両側面は製作時による調整痕認む。流紋岩。			

表—201　H217号住居跡出土遺物観察表（図—403　図版—103）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.2) ③　2.9	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色5YR6/6　④1/4	安定した丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口唇部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向の篦削り。	口唇部タール状付着物。
2	坏 土師器	覆土	①(13.8)	①輝石、軽石含、密。②良好　③橙色2.5YR6/6　④1/6	丸底。体部緩やかに内彎する。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面放射状及び螺旋状篦磨き。外面指押え。体～底部篦削り。	
3	甕 土師器	+12	①(21.8)	①輝石、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色7.5YR7/6　④口縁部1/2	胴部内彎し、口縁部大きく外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	
4	紡錘車 石製品	+15	上径2.4　下径3.9 厚　1.0　孔径0.8	断面台形状。下径面はシャープな平坦面、上径面はわずかに凸状をなす。両面共に製作時の調整痕及び使用痕と考えられる擦痕認む。側面は滑らかで、よく研磨されている。下径面、孔寄りで径0.3cmの幅で沈線状窪びをもつ。片岩質。よく使いこまれている。変質蛇紋岩。			
5	砥石 石製品	床面	長　7.9　幅5.5 厚　3.2	手持ち砥。平面長方形。断面凹状を呈す。小口面は剝離している。6面使用（4面を面取りしている）長軸方向に弱い擦痕。砂岩。			
6	砥石 石製品	周溝	長　9.5　幅6.0 厚　3.8	置き砥。仕上げ砥。4面使用。表面強い擦痕。その他長・短・斜方向に弱い擦痕。側面は研ぎ減りし、弓張り状を呈す。流紋岩。			
7	刀子 鉄製品	床面	現存長6.7　幅0.9 厚0.2	刃部のみ残存。切先部はシャープ。背側は平ら。全体的に研ぎ減りする。錆化している。			

表—202　H218号住居跡出土遺物観察表（図—405　図版—103）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.0)	①輝石、石英含、密。②良好　③橙色5YR6/6　④1/6	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 須恵器	床面下	①　12.4　②　7.1 ③　3.3	①長石含、精良。②良好　③内灰色N6/・外灰白色5Y7/2　④3/6	わずかに上げ底。体部は下端で丸みを有するがほぼ直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	埦 須恵器	貯蔵穴	①　16.0　②　9.1 ③　7.9	①長石、小石含、やや粗。②良好③浅黄色2.5Y7/4　④体上半1/2欠	大型の椀。「ハ」の字状に外傾するしっかりした高台。体部は緩やかに内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	器面剝落している。
4	甕 土師器	床面	①(21.6)	①輝石、石英、軽石、小石含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁部1/4	「コ」の字状口縁。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
5	甕 須恵器	覆土		①軽石、長石含、密。②良好　③青灰色10BG5/1　④胴部片		外面撫で。内面当て目痕	

表—203　H219号住居跡出土遺物観察表（図—407　図版—104）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+17	①(12.0) ③　3.1	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/2弱	安定した丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え。底部篦削り。	
2	蓋 須恵器	床面	①　13.7 ③　3.1	①長石、軽石、小石含、密。②良好③灰色N5/　④ほぼ完形。	天井部擬宝珠の摘貼付。体部緩やかに彎曲し、口縁部わずかに外傾して開く。	轆轤整形。外周部回転篦削り。	

表—204　H220号住居跡出土遺物観察表（図—409）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	+23	①(12.1)　②　6.3 ③　4.1	①小石、軽石含、密②良好③にぶい褐色7.5YR5/3④1/2体部下半欠。	小型の坏。上げ底。体部緩やかに内彎する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	

表—205　H221号住居跡出土遺物観察表（図—411　図版—104）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(11.6)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/8　④1/5	体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点でわずかにくびれる。口唇部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部内外面指押え。底部篦削り。	
2	甕 土師器	床面下	①(19.4)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/6④上半部	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径、肩に稜をもつ。口縁部「コ」の字状を呈す。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	接合痕顕著 肩部煤付着
3	台付甕 土師器	床面	②　10.1	①石英、長石、輝石含、密。②良好③赤色10R5/8　④台部	台部大きく「ハ」の字状に外傾し、端部丸い。	台部内外面横位の撫で。体部内面篦撫で。外面篦削り。	紐接合痕認む。

表—206　H222号住居跡出土遺物観察表（図—413　図版—104）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	蓋 須恵器	覆土	①　13.6 ③　3.8	①チャート、長石、軽石含、やや粗。②良好③灰白色5Y8/1④3/6	天井部平坦面をなし、体部外傾して開く。口縁部外面外傾、内面内傾する。摘貼付。	轆轤整形。天井外周部回転篦削り。	
2	埦 須恵器	覆土	①(15.1)　②(　9.4) ③　7.7	①精良。②良好　③明青灰色5B7/1　④1/5	大型の椀。体部緩やかに内彎して立ち上る。口唇部わずかに外反。	轆轤整形。付高台、撫で。	

表一207　H223号住居跡出土遺物観察表（図一415）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 須恵器	床面		①石英、軽石、砂粒含、密②良好③外灰N5/内灰白色N7/④胴下半1/4	丸底。胴部下半は球形をなして内彎する。器肉厚い。	内面指押え、横位の撫で。外面叩き目。	
2	甕 須恵器	床面	②(17.0)	①長石、石英含、密。②良好　③青灰色10BG5/1　④底部1/3	平底。体部直線的に外傾する。	内面指押え、撫で。外面縦位・下端横位篦削り。底部撫で。	

表一208　H224号住居跡出土遺物観察表（図一417　図版一104）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏(内黒) 土師器	床面	① 12.2　② 6.0 ③ 3.9	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密②良好③にぶい黄橙色10YR5/3④3/6	わずかに上げ底。体部緩やかに内彎し、口唇部でわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。内面横位の篦磨き、黒色処理。	
2	蓋 須恵器	覆土	① 16.6 ③ 3.8	①長石、チャート含、やや粗。②良好　③灰白色5Y7/1　④1/3	天井部ほぼ平坦。肩部より緩く彎曲、端部外傾して開く。摘は擬宝珠形をなす。	轆轤整形。天井部外周部回転篦削り（乱雑）摘貼付。	
3	埦 須恵器	床面	① 14.3　② 7.2 ③ 6.0	①軽石含、密。②やや不良　③明青灰色5PB7/1　④2/3	高台部わずかに外傾。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	器面磨耗する。
4	甕 土師器	ピット	① 19.5	①輝石、長石含、密。②良好　③内橙色5YR6/6・外明赤褐色2.5YR5/6　④上半部1/2	胴部緩く内彎し、口縁部上半で外反し、口唇部沈線状をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。内面紐接合痕あり。	
5	甕 土師器	カマド 床面	①(20.1)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR7/4　④口縁部1/4	口縁部「コ」の字状を呈するが、やや外傾気味。口唇部一部沈線状をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え。胴部横位の篦削り。	
6	甕 土師器	床面	①(19.0)	①軽石、輝石、長石、酸化鉄含、密②良好③橙色7.5YR6/6④上半1/3	胴部内彎して立ち上り、上半で大きく張り、最大径を有す。肩部稜をなし口縁内外面共に「コ」の字状	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え、胴部横・縦位の篦削り。	内面篦痕

表一209　H225号住居跡出土遺物観察表（図一419　図版一104）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	蓋(内黒) 土師器	+19		①精良。②良好　③橙色7.5YR7/6　④口縁部欠損。	天井部宝珠形の摘。体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。天井外周部回転篦削り。内面篦磨き、黒色処理。	
2	甕 土師器	カマド	① 20.4	①酸化鉄、石英、輝石、軽石含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/6④上半部	胴部緩やかに内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。口縁部わずかに内傾し、上半で外反	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁部指押え。胴部横・斜位の篦削り。	内面接合痕認む。
3	甕 土師器	カマド	① 21.0	①輝石、長石、軽石含、密。②良好③赤色10R5/6　④下半部欠損	胴部緩やかに内彎して立ち上り、上半で丸みを有す。口縁部「く」の字に外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面接合痕。

表一210　H226号住居跡出土遺物観察表（図一421・422　図版一104）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.9 ③ 3.2	①輝石、酸化鉄、長石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6　④口縁1/2欠	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	脚付盤 須恵器	+7	① 14.3	①精良。②良好　③灰白色10Y8/1　④脚下半、口縁一部欠損	脚残存部はほぼ直立、体部緩やかに彎曲。口縁部は体部変換点で屈曲し、内傾して立ち上る	轆轤整形。内面中央沈線状をなす。	
3	坏 須恵器	床面	①(12.0)　② 6.3 ③ 4.0	①長石、石英、輝石含、密。②やや不良③浅黄色2.5Y7/4④体部3/4欠損	ほぼ平底。体部内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。1/4、切り離し未完成。凸状をなす。撫で調整か。	
4	坏 須恵器	+8	① 13.0　② 7.6 ③ 3.8	①精良。②良好　③灰色N6/　④ほぼ完形	わずかに上げ底。体部は下端部でくびれ、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	器形やや歪みあり
5	坏 須恵器	+8	①12.3　② 7.4 ③ 3.7	①長石、石英含、密。　②良好　③灰色10Y5/1　④1/2	上げ底。体部は下端でくびれ、緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
6	坏 須恵器	床面	① 12.5　② 7.5 ③ 3.1	①長石、酸化鉄含、密。②良好　③浅黄橙色10YR8/3　④ほぼ完形	ほぼ平底。体部緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	
7	甕 土師器	床面	① 20.9	①輝石、長石、石英、酸化鉄含、密。②良好　③橙色5YR6/6　④上半1/2	胴部内彎し、上半で大きく張る。口縁部外反、口唇部沈線状をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え、胴部横・縦位の篦削り。	
8	甕 土師器	カマド 焚口	① 21.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/8　④上半1/2	胴部球形をなして内彎し、口縁部外反する。	口縁部内外面横位の撫で。外面指押え。胴部横・縦位の篦削り。	器面磨耗する。
9	甕 土師器	覆土	① 21.1	①輝石、石英、酸化鉄、軽石含、密②良好③橙色5YR7/6④上半1/2	胴部内彎し、上半で最大径を有す。口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え。胴部横・縦位の篦削り。	内面接合による凹凸あり。
10	甕 土師器	床面	① 20.7	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好　③橙色2.5YR7/6　④上半1/2	胴部緩く内彎し、肩部で稜をもつ。口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面篦痕。

表一211　H228号住居跡出土遺物観察表（図一425　図版一105）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 12.4 ③ 3.5	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④ほぼ完形。	安定した丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部おしなべて一定方向篦削り。	
2	坏 土師器	貯蔵穴	①(14.3) ③ 4.8	①密。②良好　③橙色5YR6/6　④1/4	丸底。体部は大きく内彎して立ち上り、口縁部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 須恵器	+10	① 12.7　② 7.2 ③ 3.8	①長石、軽石含、密。②良好　③灰色N6/　④体上半1/3欠損	平底。緩やかに内彎し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り。中心部を残し回転篦削り。	
4	坏 須恵器	+12	① 13.2　② 7.3 ③ 3.7	①精良。②やや不良　③外灰色5N5/・内灰白色10Y5/1　④3/4弱	上げ底。体部緩やかに外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	

表—212　H229号住居跡出土遺物観察表（図—427　図版—105）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面下	① 11.5 ③ 3.7	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞　④ほぼ完形。	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	床面下	① 16.8 ③ 4.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞　④完形	丸底。体部緩やかに彎曲して開き、口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え、体～底部篦削り。	口縁部吸炭。
3	甕 土師器	床面下	① 19.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR⅝　④上半部	肩部稜をなし、口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え。肩部横位の篦削り。	内面篦痕。 口縁部煤付着。
4	甕 土師器	床面	①(25.9) ③ 3.3	①軽石、石英、輝石含、粗②やや不良③橙色7.5YR⅕④口縁部½、胴部欠	平底。胴部長胴形をなし、口縁部大きく外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部縦・斜位の篦削り。紐造痕顕著。	胴部煤付着。 器面荒れる。
5	鏃 鉄製品	床面	現存長10.2　茎幅0.5～0.8　厚0.4～0.6 刃幅2.4　厚0.4		刃先端及び片側の腸抉、茎下端部欠損。篦被の痕跡認めがたい。茎に一部木質残る。		
6	紡錘車 石製品	壁上面	上径3.3　下径3.8 厚1.5　孔径0.7	断面楕円形状。上下径面ともにわずかに凸状をなす。両面共に調整痕及び使用痕あり。側面は横・縦位の調整痕。 かんらん岩（蛇紋岩）。			
7	礫	＋9	長15.8　幅5.1 厚5.0　重量680	長円礫。溶結凝灰岩。			側面剝離、片側端部打撃痕
8	礫	床面	長15.9　幅6.5 厚3.4　重量650	長円礫。石英閃緑岩。			
9	礫	＋8	長13.3　幅7.4 厚3.4　重量530	扁平長円礫。粗粒安山岩。			
10	礫	＋7	長13.4　幅6.7 厚4.9　重量510	棒状円礫。ひん岩。			
11	礫	＋5	長16.4　幅7.0 厚4.7　重量750	棒状円礫。粗粒安山岩。			
12	礫	床面	長14.6　幅6.1 厚4.0　重量650	棒状円礫。溶結凝灰岩。			
13	礫	＋8	長12.7　幅6.9 厚4.6　重量490	棒状円礫。粗粒安山岩。			片側端部打撃痕
14	礫	床面	長12.1　幅5.6 厚5.4　重量420	長円礫。粗粒安山岩。			

表—213　H231号住居跡出土遺物観察表（図—429　図版—105）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	＋7	① 12.9 ③ 3.8	①軽石、石英含、密。②良好　③橙色5YR⅞　④½	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
2	坏 土師器	＋7	①(19.2)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝　④¼	大型の坏。体部内彎して立ち上り、口縁部変換点で極弱い稜をなす。内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	口縁部タール状付着物	
3	坏 土師質須恵器	床面	① 11.5　② 4.7 ③ 3.5	①長石、輝石、軽石、小石含、密。②良好　③灰白色2.5Y⅘　④¾	平底。小さい底部から、体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	還元焔焼成。
4	坏 土師質須恵器	カマド外	①(12.6)　②(5.6) ③ 4.3	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色7.5YR⅝　④体部¾欠損	上げ底。体部緩やかに外傾して開く。器肉厚い	轆轤整形。底部右回転糸切り。	内面タール状付着物
5	埦 土師質須恵器	カマド	① 16.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③淡黄色2.5Y⅘　④高台部欠損	体部直線的に外傾する。下端部調整時の痕跡著しい。器肉肥厚。	轆轤整形。底部再調整。高台貼付痕顕著 体部の一部吸炭。	
6	埦 灰釉陶器	カマド外	① 14.6	①精良②良好③素地灰白10Y⅞　釉薬オリーブ灰10Y⅝④体部¼	体部緩やかに彎曲し、口縁部丸く造られる。	轆轤。体部内外面上半部施釉。	釉薬つけがけ。
7	皿 灰釉陶器	＋8	①(13.1)　②(7.4) ③ 2.3	①緻密。②良好　③素地灰白色2.5Y⅞　④⅛	高台部三日月型。外稜明瞭。体部外傾して開く	体部上半、高台部施釉痕。	釉薬刷毛塗りか。
8	甕 土師器	床面	① 20.1　② 5.5 ③ 28.3	①軽石、輝石、酸化鉄、石英含、粗②良好③にぶい褐色7.5YR⅝④一部欠	不安定な平底。胴部内彎して立ち上り、下半及び上半で張りを有す。口縁部は短く外反する。	口縁部内外面横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面紐接合痕。 口縁～胴部煤付着。器肉厚い
9	甕 須恵器	床面	頸部径16.8	①石英、軽石、長石含、密。②良好③灰色N⅝　④上半⅓	胴部は上半で球形をなして内彎し、頸部外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部内外面叩打痕	紐接合痕。
10	羽釜	床面	①(19.2)	①砂粒含、密。②良好　③灰茶褐色　④上半部	胴部緩やかに内彎し、やや小型の鍔貼付。口縁部は内傾する。	内面～外面胴部上半横位の撫で。下半部縦位の篦削り。	

表—214　H232号住居跡出土遺物観察表（図—431　図版—105）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面下	① 12.1 ③ 3.8	①軽石、長石、輝石含、密。②良好③橙色5YR⅞　④⅔	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部不定方向篦削り。	底部吸炭。
2	坏 土師器	周溝	① 15.0 ③ 5.0	①長石、輝石、石英、軽石含、密。②良好　③橙色5YR⅞　④¾	丸底。体部球形をなして内彎し、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	周溝	① 15.0 ③ 4.6	①長石、石英、軽石、輝石含、密。②良好　③橙色5YR⅞　④⅘	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。外面指押え。体～底部篦削り。	
4	蓋 須恵器	周溝	① 19.3 ③ 3.1	①長石含、やや粗。②良好　③灰白色7.5Y⅞　④¾	体部はやや扁平で、天井部から緩やかに彎曲、口縁部は短く直立する。	轆轤整形。肩部3段、回転篦削り。内面撫で。摘貼付。	
5	埦 須恵器	床面下	① 17.4　② 10.5 ③ 4.4	①長石、小石含、精良。②良好　③灰白色10Y⅝　④体部½欠	やや突出気味の上げ底。体部緩やかに内彎する。	轆轤整形。底部回転篦切り。底～腰部回転篦削り。小さく削出し高台。	

表—215　H233号住居跡出土遺物観察表（図—433　図版—105）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+37	① 12.8 ③ 3.4	①輝石、石英含、密。②良好　③橙色5YR7/6　④3/4	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部わずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え。体～底部不定方向篦削り。	外面大半吸炭する
2	坏 土師器	+32	① 12.0 ③ 3.9	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/8　④3/4	丸底。体部球形をなして内彎し、口縁部内傾する。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え。体～底部篦削り。	器面やや磨耗する
3	蓋 須恵器	床面	摘径5.2	①極めて精良。②良好　③灰黄褐色10YR5/2　④天井部	扁平な環状の摘、側面稜をなす。天井部窪みを有す。	轆轤整形。肩部再調整か、摘貼付。	
4	甕 土師器	+61	① 15.2	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④口縁部3/4	小型の甕。肩部稜を有し、口縁部外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え。肩部横・斜位の篦削り。	内外面一部煤付着
5	台付甕 土師器	+38	② 9.5	①軽石、石英、小石含、粗。②良好③橙色7.5YR7/6　④台部	台部は大きく「ハ」の字状に外反し、先端部付近で稜をなす。	内面～外面端部横位の撫で。上半～胴部縦位の篦削り。	

表—216　H234号住居跡出土遺物観察表（図—435　図版—105）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 須恵器	覆土	①(15.6)　②(9.2)	①軽石、石英含、密②良好③内灰白7.5Y8/1・外灰10Y5/1④1/4高台部欠	体部は下端部に若干の張りを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。高台貼付の際の撫で痕認む。	底部内面剝落する
2	埦 須恵器	床面	① 14.5　② 9.6 ③ 4.9	①軽石、石英、長石含、やや粗。②良好　③灰白色10Y8/1　④3/4	高台部断面台形状、わずかに外反。体部は腰部に張りをもち緩く内彎。口縁部若干外反する	轆轤整形。底部外周回転篦削り。切り離し不明、付高台。	
3	甕 土師器	床面	① 20.1	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③赤色10R5/6　④口縁部3/4	口縁部「コ」の字状。口唇部外面沈線をなす。	内面撫で。口縁部内外面横位の撫で。肩部横位の篦削り。	

表—217　H235号住居跡出土遺物観察表（図—437　図版—106）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+14	① 12.1　② 8.4 ③ 2.7	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6　④3/4	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部おしなべて一定方向篦削り。	
2	坏 須恵器	ピット	① 12.2　③ 6.9 ③ 3.6	①輝石、酸化鉄含、密。②良好　③灰白色7.5Y8/1　④ほぼ完形。	上げ底。体部下端でくびれ、直線的に外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	器面剝落する。口唇部タール状付着物
3	坏 須恵器	覆土	①(11.9)　② 7.0 ③ 3.2	①軽石含、密。②良好　③灰色N5/　④体部3/4欠損。	わずかに上げ底。体部直線的に外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	坏 須恵器	覆土	① 13.0　② 6.8 ③ 3.9	①軽石、長石含、密。②良好　③灰白色N8/　④体部1/2欠。	平底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
5	坏 須恵器	+15	① 13.0　② 6.8 ③ 3.9	①長石、軽石、小石含、やや粗。②良好　③灰色N5/　④1/2	上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	紐接合痕顕著
6	甕 土師器	床面	①(19.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色5YR5/6　④口縁部1/8	肩部に稜。口縁部「コ」の字状。	内面～口縁部外面横位の撫で。指押え。肩部横位の篦削り。	

表—218　H236号住居跡出土遺物観察表（図—439　図版—106）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	+10	① 13.3　② 7.0 ③ 3.4	①精良。②良好　③灰白色10Y8/1　④ほぼ完形	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲して立ち上り、口縁部でわずかに内傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	

表—219　H237号住居跡出土遺物観察表（図—441　図版—106）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.4)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/4	体部緩やかに内彎し、口縁部で弱くくびれる	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	甕 土師器	カマド 左袖	① 13.7	①輝石、軽石、小石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④上半2/3	胴部球形をなして内彎し、肩部で稜をもつ。口縁部上半で外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	台付か。
3	甕 須恵器	+47	①(21.0)	①軽石、小石含、密。②良好　③灰色7.5Y5/1　④口縁部1/6	頸部外傾し、上半で屈曲。口縁部内傾する。	頸部外面叩き目。内面横位の撫で。	
4	釘 鉄製品	床着	現存長8.0 幅1.0　厚0.8	角釘。頭部折れ曲がる。下端部欠損。上半で内側に彎曲する。			
5	釘 鉄製品	床着	現存長16.0 幅0.8　厚0.8	角釘。頭部わずかに折れ曲がる。下端部先細り、上半で「く」の字に彎曲。			
6	鎌 鉄製品	床面	現存長10.6 身幅4.0　厚0.4	身部先端欠損する。一端折れ曲がる。背側平らである。			

表—220　H238号住居跡出土遺物観察表（図—443　図版—106）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 11.9　② 9.0 ③ 3.1	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6　④口縁部1/4欠損	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	+7	①(12.0) ③ 3.2	①軽石、石英含、密。②良好　③橙色5YR6/6　④1/2強	安定した丸底。体部緩やかに内彎する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部おしなべて一定方向の篦削り。	体部外面タール状付着物。器形歪む。
3	坏 須恵器	床面	①(12.0)　② 7.2 ③ 3.5	①精良。②良好　③灰白色7.5Y8/1　④1/3	上げ底。体部下端で丸み。直線的に立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
4	埦 須恵器	床面	①(16.2)　② 8.8 ③ 7.6	①軽石、長石含、密②良好③内灰白5Y8/2、外灰白2.5Y7/1④体部1/4欠	「ハ」の字状に外傾するしっかりした高台。体部はほぼ直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	

5	甕 土師器	住居外	① 21.8	①軽石、輝石、石英、酸化鉄含、密。 ②良好 ③橙色5YR6/8 ④上半3/4	胴部丸みをなして内彎、上半部で最大径を有す。口縁部上半で外反する。	内面撫で。口縁部外面指押え、強い横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	胴部煤付着。

表—221　H239号住居跡出土遺物観察表（図—445　図版—106）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	＋9	① 11.5　② 5.7 ③ 3.6	①精良。②良好　③灰白色N8/ ④体部1/4欠損	平底。体部下端でくびれ、内彎し、口縁部で外傾する。体部下半で張りを有す。	轆轤整形。底部回転糸切り。底部外周手持ち篦削り。	

表—222　H240号住居跡出土遺物観察表（図—447　図版—106）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.6 ③ 3.4	①輝石、石英含、密。②良好　③橙色2.5YR6/6　④1/2強	丸底。体部緩やかに内彎、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	口縁一部吸炭。
2	坏 土師器	床面	① 13.6 ③ 3.5	①輝石、石英、軽石含、密②良好③にぶい橙色5YR7/4④体部1/2欠	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	床面	① 13.1 ③ 3.2	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/6　④体部1/3欠	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立、上端でわずかにくびれる。	口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
4	坏 土師器	覆土	① 12.9 ③ 3.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR7/6　④3/4	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
5	坏 土師器	床面	① 12.5 ③ 2.9	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR7/4　④3/4	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
6	甕 土師器	覆土	① 14.0　② 7.0 ③ 15.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6　④1/2	不安定な平底。胴部球形をなして内弯、口縁部外傾する。口唇部丸い。	口縁部横位の撫で。胴部横・斜位、底部ほぼ一定方向の篦削り。	外面煤付着
7	甕 土師器	＋8	① 25.6	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密②良好③赤色10R5/8④上半1/4欠	胴部緩やかに内彎し、上半で最大径を有す。口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	下半部煤付着。内面、口縁部紐造痕

表—223　H241号住居跡出土遺物観察表（図—449　図版—106）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 土師質須恵器	貯蔵穴	① 20.2	①輝石、石英、軽石含、粗②不良③浅黄橙色7.5YR8/4④1/2高台部欠損	大型の埦。体部緩やかに彎曲し、口縁部外反する。器肉肥厚。	轆轤整形。底部切り離し不明。付高台痕。	
2	甕 土師器	カマド	①(24.0)	①輝石、軽石含、②良好　③橙色7.5YR7/6　④口縁部1/4	口縁部外反。	口縁部横位の撫で。外面かすかに指押え痕。肩部横位の篦削り。内面篦撫で。	

表—224　H242号住居跡出土遺物観察表（図—451　図版—107）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	＋7	① 12.4　② 9.1 ③ 3.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/4弱	不安定な平底。体部緩やかに内彎して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面指押え、底部おしなべて一定方向篦削り。	
2	坏 土師器	壁面	① 12.1　② 9.5 ③34	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④体部1/4欠損	不安定な平底。体部緩やかに内彎して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部不定方向の篦削り。	口縁一部タール状付着物。
3	甕 土師器	床面	①(10.6)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR7/6　④1/6	胴部球形をなして内彎。口縁部外傾する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内外面煤付着。

表—225　H244号住居跡出土遺物観察表（図—454　図版—107）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 土師質須恵器	ピット	② 8.6	①軽石含、密。②良好　③にぶい黄橙色10YR7/4　④高台部	高い高台。器肉厚い。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
2	埦 灰釉陶器	周溝	① 13.8　② 7.6 ③ 4.3	①精良。②良好　③素地灰白色N8/　④体部1/4	高台部三日月型をなし、わずかに外稜をなす。体部緩やかに彎曲する。体部上半内外に施釉。	轆轤。底部回転篦切り。付高台、撫で。	釉薬つけがけ。
3	埦 灰釉陶器	カマド	①(15.2)	①精良。②良好　③素地灰白色2.5Y7/1　④口縁1/4	体部上半彎曲して立ち上り、内外に施釉。	轆轤。釉薬つけがけ。	
4	埦 灰釉陶器	壁面	① 15.4　② 7.8 ③ 5.2	①密。②良好　③素地灰白色10Y8/1　④1/4欠損。	高台部三日月型、わずかに外稜をなす。体部緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤。底部回転篦削り。付高台、撫で。	釉薬つけがけ。底部「大」篦記号か
5	埦 灰釉陶器	覆土	② 7.7	①密。②良好　③素地にぶい黄色2.5Y6/3　④底部	短い高台。わずかに稜をなす。	轆轤整形。底部回転糸切り、回転篦削り。付高台、撫で。	体部内面重ね焼き痕。
6	甕 土師器	覆土	①(21.1)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR7/4④口縁部1/6	胴部球形をなして内彎し、口縁部短く外反する。器肉肥厚する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	
7	羽釜	床面	①(22.0)	①石英、軽石、酸化鉄、長石含、密。②良好　③浅黄橙色10YR8/4　④口縁部1/2	鍔上向きに張り出し、口縁部は直立する。	内外面横位の撫で。鍔貼付。	紐造痕
8	羽釜	床面	①(20.0)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③明赤褐色5YR5/6　④1/6	胴部内彎して立ち上り、口縁部内傾する。鍔は小型、断面三角形を呈す。	内外面横位の撫で。外面胴下半縦位の篦削り。	内面上半煤付着
9	敲石	床面	長15.0　幅7.2 厚 5.0　重量930	長楕円形。端部敲打痕。片側端部剝離している。 ひん岩。			
10	敲石	床面	長16.0　幅6.7 厚 2.4　重量440	長楕円形。1/2欠損。端部敲打痕、剝離している。 粗粒安山岩。			
11	刀子 鉄製品	床面	現存長14.5　刃幅0.7～1.1 厚0.4　茎幅0.8		切先部及び茎端部を欠損する。区部は棟、刃幅共に段差あり。刃部は研ぎ減りする。全体的に背側に緩く反る。		

表—226　H245号住居跡出土遺物観察表（図—456・457　図版—107）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+18	① 13.1 ③ 3.9	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6　④2/3	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部おしなべて一定方向篦削り。	
2	蓋 須恵器	周溝	① 18.1	①精良。②良好　③明青灰色10BG7/1　④摘上端欠損	体部は天井部から緩やかに彎曲し、口縁部は短く直立する。	轆轤整形。天井部外周回転篦削り。摘貼付。	重ね焼き痕あり。
3	坏 須恵器	+14	① 12.6　② 6.8 ③ 3.6	①長石、輝石、石英含、密。②良好③灰白色5Y8/1　④1/2	上げ底。体部は緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	器面磨耗する。
4	坏 須恵器	+34	①(12.5)　② 6.1 ③ 3.2	①長石、軽石含、密。②良好　③暗青灰色5B3/1　④1/3	わずかに上げ底。体部下端でわずかにくびれ緩やかに内彎して立ち上る。口縁部わずか外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
5	坏 須恵器	覆土	① 12.6　② 6.5 ③ 3.6	①長石含、密。②良好　③灰白色7.5Y8/2　④3/4	わずかに上げ底。体部は緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部手持ち篦削り。	器面磨耗する。
6	皿 灰釉陶器	+27	① 12.3　② 7.0 ③ 2.4	①精良。②良好　③素地灰黄色2.5Y7/2　④完形	短くぼってりした高台。体部緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤。底部回転篦削り。付高台、撫で。体部上半施釉。	施釉つけがけ。
7	甑	+8	① 21.3 ③ 18.6	①輝石、石英、軽石含、やや粗。②良好　③橙色2.5YR6/8　④1/2	羽釜型を呈す。胴部直立して立ち上る。口縁部短く、三角形状の鍔貼付する。器肉肥厚。	紐造り。内面～外面上半横位の撫で。内面下半指押え、外面下半縦位の篦削り。	
8	羽釜	カマド	①(19.5)	①軽石、長石含、密。②良好　③橙色2.5YR6/8　④口縁部1/5	口縁部短く直立する。鍔下向き。	内面～外面横位の撫で。鍔貼付。	
9	羽釜	+41	①(25.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④口縁部1/4	胴部緩やかに内彎。口縁部短く内傾する。鍔上向き。	内面～外面横位の撫で。鍔貼付。	内面吸炭。
10	羽釜	カマド	①(18.0)	①石英、長石含、密。②良好　③橙色5YR6/8　④口縁部1/5	口縁部短く内傾、上端で直立。鍔上向き、つくり、調整共に丁寧。	内面～外面横位の撫で。鍔貼付。	
11	羽釜	カマド	①(21.5)	①輝石、石英、軽石、小石含、密。②良好　③橙色5YR6/6　④1/5	口縁部上端で直立。鍔は水平に張り出す。	内面～外面横位の撫で。鍔貼付。	
12	紡錘車 鉄製品	壁上面	長5.2　紡輪径4.1 厚0.4　軸径0.5	軸部両端及び紡輪端部を欠損。錆化している。			
13	刀子 鉄製品	壁面	長10.6　幅0.5～1.2 厚0.2～0.5	切先部及び茎端部を欠く。背側平ら。茎端部木質付着。刃部研磨減りする。全体的に錆化する。			
14	小刀 鉄製品	床面	長27.2　刃長13.0 刃幅2.0　厚0.5　重量60	刃部は棟側に反る。切先部は鋭利、茎部は茎尻より10.8cmの範囲で木質挿入、柄部形成。棟区部は茎よりわずかに曲線を描き段差を認む。棟部平ら。			

表—227　H246号住居跡出土遺物観察表（図—459　図版—108）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 13.2	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/2強	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部はやや外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 12.6 ③ 3.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/8　④ほぼ完形。	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部ほぼ一定方向の篦削り。	内面中央篦記号「×」
3	坏 土師器	+8	① 13.0 ③ 2.9	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④ほぼ完形。	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部ほぼ一定方向の篦削り。	内面タール状付着物。
4	坏 土師器	覆土	① 14.0	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④3/4弱	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
5	坏 須恵器	周溝	①(14.1)　② 8.3 ③ 3.6	①小石含、密。②良好　③灰色N5/　④3/4	上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転篦切り。撫でか。	口縁～体部自然釉口縁焼ゆがみあり。
6	坏 須恵器	+8	① 13.1　② 9.3 ③ 3.4	①精良。②良好　③灰色N5/　④ほぼ完形。	底部中央突出する。体部は直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
7	刀子 鉄製品	+25	長8.8 刃幅1.0～1.2 厚0.3　茎幅0.6	刃部及び茎両端部を欠損する。関部は棟、刃側共に段をなす。背側は平。			

表—228　H247号住居跡出土遺物観察表（図—461　図版—108）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床面	② 4.8	①精良。②良好　③灰色10Y5/1　④底部	上げ底。小さい底部。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	内面漆付着。容器として機能。

表—229　H249号住居跡出土遺物観察表（図—464　図版—108）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	壁面	①(13.1)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR7/4　④1/3	体部は内彎して立ち上り、口縁部は内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	刀子 鉄製品	床面	長12.0刃幅1.0～1.2 厚0.2 茎幅0.4～0.8	切先部及び茎端部欠損する。区部段差あり。一部木質付着。			

表—230　H250号住居跡出土遺物観察表（図—466　図版—108）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.6) ③ 2.7	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/4	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	①(16.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR7/6　④1/4	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部外傾する。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 須恵器	+23	① 12.6　③ 8.7 ③ 3.6	①小石含、精良。②良好　③明青灰色5PB7/1　④体部1/3	上げ底。体部、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	

4	坏 須恵器	覆土	①13.4 ②8.7 ③4.0	①精良。②良好 ③内灰白色7.5Y 8/1・外灰白色N7/ ④1/2	わずかに上げ底。体部下半で丸みを有し、上半で外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
5	坏 須恵器	覆土	①(12.4) ②(8.0)	①精良。②良好 ③明オリーブ灰色2.5GY7/1 ④3/4	わずかに上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
6	甕 土師器	覆土	①(21.6)	①軽石、輝石、石英含、密。②やや不良③橙色2.5YR6/6④口縁部1/3	口縁部上半で外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部篦削り。	器面磨耗する。
7	鎌 鉄製品	+15	現存長16.3 幅1.8～2.4 厚0.45 重量80	切先部及び身端部を欠損する。身部全体が彎曲し、一端折れ曲がる。やや研磨減りする。背側は平ら。断面はシャープである。			
8	刀子 鉄製品	床面	現存長10.2 茎残存長4.0 重量20	刃部先端及び茎端部を欠損する。棟区部にわずか段差を認む。			
9	釘 鉄製品	床面	長4.4 幅0.4 厚0.4	両端部欠損する。断面方形。下端部で先細りする。			
10	釘 鉄製品	床面	表5.5 幅0.4～0.6 厚0.4～0.5	両端部を欠損。断面方形。下端部先細りする。			
11	不明 鉄製品	覆土	径2.6×3.2 幅0.6 厚0.5	リング状。断面方形。錆化著しい。			

表一231 H251号住居跡出土遺物観察表（図一468 図版一108）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	①(19.8)	①輝石、石英、長石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6 ④口縁部1/2	口縁部「コ」の字状。肩部の張りは弱い。	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部篦削り。	
2	長頸壺 須恵器	+40	①(19.8)	①精良。②良好 ③灰色7.5Y5/1④頸部	頸部直線的に立ち上り、上半で外反、屈曲して口唇部に至る。	頸部内外面横位の撫で。肩部叩き目。内面指押え。紐接合痕顕著。	
3	甕 須恵器	+15		①軽石、長石、石英、輝石含、密。②良好 ③青灰色10BG5/1 ④胴部片		内面当て目。外面叩き目。	

表一232 H252号住居跡出土遺物観察表（図一470）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	礫	+9	長13.7 幅5.7 厚3.2 重量410	長円礫。変質安山岩。	
2	礫	+9	長12.3 幅6.1 厚3.9 重量490	長円礫。石英閃緑岩。	
3	礫	+9	長12.8 幅5.1 厚3.0 重量390	扁平長円礫。粗粒安山岩。	
4	礫	+9	長14.2 幅5.9 厚3.2 重量490	扁平長円礫。一端に打撃痕。粗粒安山岩。	
5	礫	+9	長11.1 幅6.0 厚2.7 重量300	扁平長円礫。一端剝離している。珪質変質岩。	
6	礫	+9	長10.6 幅5.7 厚3.2 重量260	扁平長円礫。一端剝離している。珪質変質岩。	
7	礫	+9	長12.1 幅4.9 厚3.1 重量300	四角長円礫。溶結凝灰岩。	
8	礫	+9	長10.5 幅3.7 厚3.7 重量260	長円礫。一端を欠損する。ひん岩。	
9	礫	+9	長14.0 幅5.9 厚4.3 重量590	長円礫。端部及び側面に打撃痕。石英閃緑岩。	
10	礫	+9	長14.0 幅4.5 厚3.8 重量490	長円礫。変質安山岩。	
11	礫	+9	長15.9 幅5.6 厚4.3 重量620	長円礫。一端に打撃痕。砂岩。	
12	礫	+9	長15.0 幅6.2 厚4.5 重量650	長円礫。粗粒安山岩。	
13	礫	+9	長13.3 幅4.2 厚4.1 重量370	長円礫。石英閃緑岩。	
14	礫	+9	長13.3 幅3.3 厚4.2 重量270	四角長円礫。一端を欠損する。溶結凝灰岩。	
15	礫	+9	長13.9 幅4.9 厚4.6 重量460	三角長円礫。一端を1/3欠損する。石英閃緑岩。	
16	礫	+9	長14.5 幅5.2 厚3.9 重量450	三角長円礫。粗粒安山岩。	

表一233 H253号住居跡出土遺物観察表（図一472 図版一108）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	+17	①12.5 ③3.2	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④体部1/2欠損	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口唇部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	+9	①12.4 ③3.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6 ④体部1/4欠損	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。体～底部篦削り。	底部内外面墨書「ハ」
3	坏 須恵器	+15	①(13.0) ②7.2 ③3.5	①精良。②良好 ③明青灰色5B7/1 ④体部3/4欠損	わずかに上げ底。体部は直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部ゆがむ。

4	坏 須恵器	+32	① 12.4 ② 7.3 ③ 3.5	①軽石、小石含、密。②良好 ③灰白色2.5GY8/1 ④1/2	上げ底。体部は下端で丸みを有し、上半で外傾する。	轆轤整形。口縁部内面撫で。底部右回転糸切り。	
5	坏 須恵器	住居外	①(13.0) ② 6.7 ③ 2.8	①精良。②良好 ③灰色N6/ ④体部3/4欠損。	上げ底。体部は直線的に外傾する。ゆがみ著しい。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	現状の立ち上りより直立気味か。
6	坏 須恵器	覆土	①(12.7) ② 8.4 ③ 3.4	①軽石、小石含、密。②良好 ③灰黄色2.5Y7/2 ④1/4強	わずかに上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部手持ち篦削り。	
7	甕 土師器	+15	①(18.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6 ④口縁1/3	口縁上半で外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。肩部横・斜位の篦削り。	紐接合痕。
8	甕 土師器	カマド	①(20.0)	①輝石、石英、チャート含、密②良好③にぶい橙色5YR6/4④上半部1/4	胴部丸み強い。口縁部外反する。	内面指押え。撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面紐接合痕。
9	甕 土師器	カマド	(21.0)	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6 ④口縁部1/3	肩部稜をなし、口縁部は上半で外反する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横・斜位の篦削り。	
10	甕 土師器	カマド	①(20.5)	①軽石、酸化鉄、輝石、長石、石英含、密。②良好 ③橙色2.5YR6/6 ④口縁1/2	口縁部「コ」の字状。肩部に張りを有す。	内面横位の撫で、外面指押え、強い横位の撫で。肩部横・縦位の篦削り。	
11	鎌 鉄製品	床面	現存長9.0 幅3.0 厚0.4	身部先端を欠損。片側端部は折れ曲がる。全体彎曲する。柄着装部木質残る。かなり使いこまれたものか。			
12	紡錘車 石製品	床面	上径4.0 下径5.6 厚 1.5 孔径0.9	断面台形状。側面やや丸い。下径面シャープな平坦面をなす。上・下両面及び側面は製作時による調整痕顕著。流紋岩。			

表—234　H254号住居跡出土遺物観察表（図—474）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 須恵器	覆土	① 6.7	①軽石、長石含、密。②良好 ③灰白色10Y7/1 ④底部	「ハ」の字状に外傾する短い高台。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	
2	甕 須恵器	床面		①長石、軽石、石英、輝石含、密。②良好 ③灰色10Y5/1 ④胴部片		内面当て目。外面叩き目。	

表—235　H255号住居跡出土遺物観察表（図—476　図版—109）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	①(13.0) ② 8.6	①輝石、軽石、長石含、密。②良好③橙色7.5YR7/6 ④1/4強。	不安定な平底。体部外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	
2	坏(内黒) 土師器	床面	①(13.4) ② 5.8	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密②良好③にぶい黄橙色10YR7/4④1/2	わずかに上げ底か。体部緩やかに内彎して立ち上る。	轆轤整形。内面篦磨き後、黒色処理、底部回転糸切り。	
3	皿 須恵器	床面	② 7.3	①長石、石英、軽石含、密。②良好③灰白色7.5Y7/1 ④底部	高くはっきりした高台。体部は大きく外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	
4	甕 土師器	床面	①(21.0)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR5/8 ④口縁部1/3	胴部球形をなして内彎、肩部で弱い稜を有す。口縁部「コ」の字状をなす。	内面撫で。口縁部横位の撫で。外面指押え痕。胴部横・縦位の篦削り。	

表—236　H256号住居跡出土遺物観察表（図—478　図版—109）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 須恵器	+12	① 16.0 ② 10.0 ③ 7.2	①黒色鉱物粒含。密。②良好 ③灰白色N7/ ④1/2強	高台部「ハ」の字状に外傾。体部は下半に張りを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	体部外面自然釉付着。
2	刀子 鉄製品	床面	現存長11.7 刃幅1.5 茎幅0.6 厚0.3～0.5	切先部及び茎端部欠損する。区部は棟側、刃側共に段差を認む。背側は平ら。			

表—237　H257・258号住居跡出土遺物観察表（図—480・481　図版—109）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (H258)	坏 須恵器	床面	① 13.2 ② 7.2 ③ 3.9	①石英、長石、小石含密②やや不良③灰黄色2.5Y7/2④体部わずか欠	極端な上げ底。体部は下端でくびれ丸みを有し上半で外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2 (H258)	坏 須恵器	貯蔵穴	① 12.5 ② 6.8 ③ 3.4	①軽石、長石含、密。②良好 ③青灰色5BG5/1 ④完形	平底。体部は直線的に外傾し、口縁部で弱く直立する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3 (H258)	坏 須恵器	+27	①12.6前後② 6.2 ③ 3.6	①チャート含。密。②良好 ③青灰色5B5/1 ④体部1/3欠損	ほぼ平底。体部は直線的に外傾し、口縁部上半で沈線状をなす。口唇部丸い。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	器形ゆがむ。
4 (H257)	坏 須恵器	覆土	①(13.1) ② 6.0 ③ 4.1	①精良。②良好 ③灰色N5/ ④1/3	平底。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り、未調整。	
5 (H258)	坏 須恵器	床面	① 12.1 ② 5.8 ③ 3.4	①長石含、やや粗。②良好 ③暗青灰色5B5/1 ④体部2/3欠	わずかに上げ底。体部は緩やかに彎曲し、口唇部でわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	糸切り離し、底部中央寄り。
6 (H258)	坏 須恵器	カマド	① 12.0 ② 5.9 ③ 4.1	①精良。②良好 ③灰白色5Y7/1 ④ほぼ完形。	わずかに上げ底。底部全体突出する。体部は下端で強くくびれ、緩やかに内彎する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
7 (H258)	坏 須恵器	貯蔵穴	① 13.9 ② 6.8 ③ 4.0	①長石、輝石含、密。②良好③オリーブ灰色2.5GY5/1④体部1/4欠損	わずかに上げ底。体部は下端で強くくびれ、緩やかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
8 (H258)	蓋 須恵器	+7	① 17.9 ③ 4.0	①長石、石英含、やや粗。②やや不良 ③灰白色5Y7/1 ④完形。	天井部ほぼ平坦をなし、小型の摘貼付する。体部は緩やかに彎曲、端部で外反。口縁部丸い	轆轤整形。天井部回転糸切り。外周部回転篦削り。	
9 (H257)	甕 土師器	+7	① 11.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④口縁部1/2	胴部上半丸みを有す。口縁部緩く外傾し、上端部で外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	内面煤付着。
10 (H258)	甕 土師器	+15	①(12.0)	①輝石、石英含、密。②良好 ③明赤褐色2.5YR5/6 ④口縁部1/3	肩部張りを有し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部外反、上半で沈線状をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面篦痕。肩部横位の篦削り。	内面煤付着。
11 (H257)	甕 土師器	+7	①(12.5)	①輝石、石英、軽石、長石含、密②良好③明赤褐色2.5YR5/6④上半部	胴部球形をなし、肩部に稜をもつ。口縁部直立し、上半で外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。外面指押え。胴部横・縦位の篦削り。	胴部煤付着。

12 (H258)	甕 土師器	+5	① 21.9	①輝石、石英、軽石、長石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④上半部⅔	口縁部緩く外反する。	内面～口縁部外面横位の撫で。内面篦撫で痕。肩部横・縦位の篦削り。	口縁部紐接合痕。
13 (H258)	甕 土師器	カマド	① 20.4	①輝石、石英、酸化鉄含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④上半⅔	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径、変換点で稜をなす。口縁部は「コ」の字状。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面・口縁部外面紐接合痕。
14 (H258)	甕 土師器	カマド	① 20.1	①輝石、石英、長石、小石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④上半½	胴部内彎して立ち上り、上半で大きく張る。口縁部は内外面共に「コ」の字状を呈し、上端で内屈。	内面撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	紐接合痕 内面一部煤付着
15	甕 土師器	カマド 覆土	① 21.5	①輝石、石英、片岩含、密。②良好③橙色10R⅝ ④上半½	胴部上半丸みをもって内彎し、口縁部「コ」の字状を呈す。口唇部内屈する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	
16 (H257)	鋤先 鉄製品	+12	現存長23.5 側部幅2.1 厚0.5～0.8 刃幅6.8 厚0.5～0.8 重並230		側部片側を欠損。平面U字状、内縁に沿い0.8～2.5cm大で溝をなす。刃部先端は若干尖る。		
17 (H258)	鎌 鉄製品	覆土	現存長1.2 幅3.2 厚0.2	柄着装部のみ残存。ほぼ直角に折れ曲る。			

表—238　H260号住居跡出土遺物観察表（図—484　図版—110）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	①(13.8) ③ 4.3	①軽石、長石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅞ ④⅓	丸底。体部緩やかに内彎し、変換点で稜をなす。口縁部はほぼ直立する。	口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
2	蓋 須恵器	覆土	①(11.8)	①軽石、石英、長石含、やや粗。②良好 ③灰白色10Y⅞ ④⅓	2段口縁をなし、体部は緩く内彎する。	天井部回転篦削り。	

表—239　H261号住居跡出土遺物観察表（図—486　図版—110）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	皿 須恵器	+10	① 14.0 ② 8.2 ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③灰色7.5Y⅝ ④⅔	「ハ」の字に外傾するしっかりした高台。体部は大きく外傾して開き、口縁部外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	内面重ね焼痕。
2	甕 土師器	カマド	①(12.2)	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR⅝ ④⅓	胴部丸みをもって内彎し、口縁部は上半で緩く外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	外面一部吸炭。
3	甕 土師器	カマド	② 3.8	①酸化鉄、軽石、石英、輝石、長石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④胴部下半	不安定な小さい平底。胴部は緩やかに内彎して立ち上る。	内面篦撫で。外面縦位の篦削り。底部篦削り。	内面接合痕。

表—240　H262号住居跡出土遺物観察表（図—488）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	覆土	② 4.3	①酸化鉄、長石、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④胴部下半	不安定な平底。胴部は緩やかに内彎する。	内面篦撫で。外面縦位の篦削り。底部篦削り。	一部吸炭。
2	不明 鉄製品	覆土	現存長3.4 幅2.8 厚0.3	片側端部周縁U字状に器肉厚い。			

表—241　H264号住居跡出土遺物観察表（図—491　図版—110）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(13.4) ②(8.5) ③ 3.2	①輝石、長石、酸化鉄、小石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④¼	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部でくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部一定方向の篦削り。	
2	坏 須恵器	覆土	①(12.3) ② 7.1 ③ 3.6	①軽石、長石含、密。②良好 ③灰色7.5Y⅘ ④体部¼欠損	上げ底。体部直線的に外傾し、口縁部変換点で稜をなす。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	底部糸切り、切り直しの痕跡。
3	坏 須恵器	床面	① 12.4 ② 5.8 ③ 3.8	①輝石、軽石含、やや粗。②良好 ③灰色10Y⅘ ④底・体部一部欠	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲し、口縁部弱く外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部内外吸炭。
4	甕 土師器	覆土	①(11.2)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④口縁部¼	口縁部外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	頸部内面接合痕。
5	甕 土師器	カマド	①(21.6)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好 ③にぶい橙色5YR⅝ ④上半¼	胴部上半で最大径。口縁部は外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部上半横位の篦削り。	口唇部煤付着。 接合痕。

表—242　H265号住居跡出土遺物観察表（図—493　図版—110）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	+16	①(16.7) ② 6.6 ③ 6.3	①長石、軽石含、密。②良好 ③灰白色5Y⅝ ④¼	高台部短く外傾する。体部緩やかに内彎、口縁部で弱く外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	器面磨耗する。

表—243　H266号住居跡出土遺物観察表（図—495　図版—110）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(12.7)	①長石、酸化鉄含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④⅓	平底。体部は直線的に外傾し、口縁部変換点でわずかに稜をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	甕 土師器	床面	①(19.8)	①輝石、酸化鉄、長石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④上半部	胴部は上半で丸く内彎し、口縁部外反する。	内面篦撫で、口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	一部吸炭。
3	甕 土師器	床面	①(21.3)	①輝石、酸化鉄、長石含、密。②良好 ③明赤褐色2.5YR⅝ ④上半部½	胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。口縁部緩く外反、口唇部沈線状をなす。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	接合痕。 一部吸炭

表—244　H321号住居跡出土遺物観察表（図—497　図版—110）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	埦 灰釉陶器	覆土	①(16.6)	①精良。②良好　③素地灰白色N 8/　④体部1/4	体部内彎して立ち上り、口唇部で外反、丸く造られる。	轆轤。体部外面下半に回転篦削り。上半内外面に施釉。	釉薬つけがけ。
2	段皿 灰釉陶器	床面	②　7.2	①精良。②良好　③素地灰白色N 8/　④底部	ほぼ直立する高台。	轆轤。撫で。底部回転篦削り。付高台。内面端部・腰部～高台の一部施釉	刷毛塗りか。
3	耳皿 灰釉陶器	覆土	①(8.4) ③(2.6)	①精良。②良好　③素地灰白色N 8/　④1/3	折れ曲がり部分は内彎して立ち上り、口唇部は波状に押圧され、外反状をなす。	轆轤。外面撫でか、内外面施釉。	内面釉とびしている。
4	羽釜	カマド	①(22.5)	①石英、軽石、長石含、密。②良好　③黄橙色10YR 8/6　④1/8	鍔は三角形状を呈し、水平に張り出す。口縁部は上端で直立する。	内外面横位の撫で。鍔貼付。外面下端で篦削り痕。	

表—245　H323・324号住居跡出土遺物観察表（図—499　図版—110）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (H323)	坏 土師質須恵器	+13	① 11.3　② 5.7 ③ 3.7	①輝石、石英、小石、軽石含、密。②良好　③灰白色2.5Y 8/2　④完形	ほぼ平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。器肉厚い。	轆轤整形。底部左回転糸切り。	還元焔焼成
2 (H324)	坏 須恵器	貯蔵穴	① 12.3　② 5.0 ③ 4.0	①軽石、石英、長石含、密。②良好③灰白色 5Y 8/1　④完形	わずかに上げ底。体部は直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	内面タール状付着物
3 (H323)	埦 灰釉陶器	壁面	① 14.0　② 7.3 ③ 4.5	①精良。②良好　③素地灰白色N 8/　④1/2	直立する高台。体部緩やかに彎曲。口縁部丸く造られる。	轆轤。底部回転篦削り。付高台。体部上半施釉。	釉薬つけがけ。
4 (H324)	甕 土師器	床面	①(17.6)	①石英、軽石、輝石含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR 7/4④口縁部1/5	口縁部内外面共に強い「コ」の字状。口唇部沈線状	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横・斜位の篦削り。	斑点状にタール状の付着物
5 (H324)	鎌 鉄製品	床面	長20.4　幅2.9～3.5 厚0.2　重量60	身部緩やかに彎曲し、一端折れ曲がる。断面はやや凹凸あり。			

表—246　H325号住居跡出土遺物観察表（図—501・502　図版—111）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	①11.9 ③ 4.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR 6/6　④完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部強く内傾する。	内面～口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	床面	① 11.5 ③ 3.7	①輝石、石英、長石、軽石含、密②良好③橙色 5YR 7/6④体部一部欠	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部強く内傾する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	床面	①(11.7) ③ 3.7	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密②良好③橙色 5YR 7/8④1/2欠損	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	床面	① 11.2 ③ 3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色 5YR 7/4　④3/4	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
5	坏 土師器	床面	①(12.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色 5YR 7/4　④1/4	体部は内彎して立ち上り、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
6	坏 土師器	床面下	① 13.9 ③ 3.6	①輝石、石英、長石、軽石含、密。②良好　③橙色2.5YR 6/6　④3/4	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
7	坏 土師器	床面下	① 14.0 ③ 3.7	①輝石、石英、軽石、小石含、密②良好③橙色2.5YR 6/4④体部1/2欠損	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く内傾する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
8	坏 土師器	床面下	① 13.9 ③ 3.9	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色 5YR 7/6　④ほぼ完形。	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部直立する。	口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	底部全面吸炭する器面剝落する。
9	坏 土師器	+8	① 14.1 ③ 4.1	①輝石、石英、長石、軽石、小石含、密。②良好　③橙色 5YR 6/6　④体部1/2欠損	安定した丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部わずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
10	坏 土師器	覆土	① 13.3 ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色 5YR 7/4　④3/4	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部ほぼ一定方向篦削り。	底部吸炭。
11	坏 土師器	床面	① 14.0 ③ 3.4	①輝石、石英、軽石、小石含、密。②良好　③橙色 5YR 7/6　④完形。	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
12	坏 土師器	周溝	① 13.0 ③ 3.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色 5YR 7/4　④体部1/2	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
13	坏 土師器	床面	①(12.0) ③ 3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色 5YR 7/6　④体部3/4欠損	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	底部外面吸炭。
14	坏 土師器	床面	①(11.6) ③ 3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色 5YR 5/6　④1/2	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
15	蓋 須恵器	+6	① 17.0 ③ 3.9	①精良。②良好　③灰白色2.5Y 7/1　④体部1/2弱欠損	天井部は大型の環状摘。体部は緩やかに彎曲し口縁内側に小さなかえしをもつ。	轆轤整形。天井部外周回転篦削り。摘貼付。	
16	蓋 須恵器	+6		①長石含、精良。②良好　③灰白色2.5Y 8/1　④体部1/2、周縁部欠	環状摘。体部は彎曲、内側に小さくかえしをもつ。	轆轤整形。天井部～外周部回転篦削り。周縁部撫で。	
17	坏 須恵器	床面	① 16.4　② 10.3 ③ 4.1	①長石、軽石含、密。②良好　③灰白色 5 Y 7/1　④体部1/3	上げ底。体部緩やかに内彎し、上端で弱く屈曲する。	轆轤整形。底部回転篦切り。一部撫でか。	
18	長頸壺 須恵器	+7	① 9.3	①軽石、長石含、精良。②良好　③灰白色N 7/　④口縁部上半	頸部外傾して立ち上り、上端で屈曲、口縁部わずかに内傾して立つ。	横位の撫で。	両面共に自然釉。
19	甕 土師器	カマド	①(22.4)	①石英、軽石、長石、輝石含、粗。②やや不良③橙色 5YR 6/4④1/4弱	胴部長胴形をなし、口縁部外反する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部縦・斜位の篦削り。	

表—247　H327号住居跡出土遺物観察表（図—504　図版—111）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	①(14.2)	①輝石、石英、小石含、密。②良好③橙色7.5YR 7/6　④1/4	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	

2	坏 土師器	床面	① 12.4 ③ 3.5	①輝石、石英、長石、酸化鉄、小石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④ほぼ完形。	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。	口縁部横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	器面磨耗する。 内面凹凸あり。
3	坏 土師器	床面	① 11.4 ③ 3.6	①石英、輝石、長石含、密。②良好③橙色7.5YR⅞④体部わずか欠損	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部はわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
4	蓋 須恵器	床面	① 14.6 ③ 3.1	①精良。②良好 ③灰白色7.5Y⅞ ④体部一部欠損	天井部は小型の環状摘貼付。体部は緩やかに彎曲し、口縁部に至る。内側にかえしあり。	轆轤整形。天井部外周回転篦削り。	体部に接合痕あり
5	平瓶 須恵器	＋8	現高14.5 ② 5.9	①軽石含、精良②良好③灰白色2.5Y⅞④体部一部・頸部上半欠	不安定な平底。体部は緩く内彎、肩部で大きく張る。頸部は体部中央で粘土板接合。端部で頸部への穴穿つ。	内外面撫で。底～体部下端回転篦削り。	体部上半～頸部自然釉付着
6	甕 土師器	床面		①酸化鉄、輝石、軽石、石英含、粗。②やや不良 ③橙色5YR⅞ ④胴下半½	不安定な平底。胴部は球形をなして内彎する。	外面縦位の篦削り。底部篦削り。	内面・器面剝落著しい。接合痕。
7	甕 土師器	床面	①(21.8)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄、長石含、密。②良好 ③にぶい橙色7.5YR⅝ ④¼	胴部は緩やかに内彎し、口縁部外反、上端で器最大径を有す。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	外面炭化状付着物 内面・口縁部接合痕

表—248　H328号住居跡出土遺物観察表（図—507　図版—111）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	短頸壺 須恵器	床面	① 17.6	①石英、長石、小石含、密。②良好③灰白色7.5Y⅞ ④頸～口縁部	頸部緩く外反。口縁部は直立する。	内外面横位の撫で。	器面剝落する。 頸部下端接合面

表—249　H329号住居跡出土遺物観察表（図—509　図版—111）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	①(19.6)	①酸化鉄、輝石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④上半部	胴部は上半で丸みを有し、口縁部外傾する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	

表—250　H330号住居跡出土遺物観察表（図—511　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	＋6	①(21.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④口縁部⅕	口縁部「コ」の字状	口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	接合痕

表—251　H331号住居跡出土遺物観察表（図—512　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床面	① 14.0 ② 8.6 ③ 3.8	①酸化鉄、軽石、石英、小石含、密②良好③青灰色5B⅝④体部⅔欠損	上げ底。体部は下半で弱くくびれるが、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部・体下端回転篦削り。	器面ややゆがむ。
2	甕 土師器	床面	①(14.0) ③ 16.5	①石英、軽石、酸化鉄、長石、小石含、密。②やや不良 ③にぶい橙色7.5YR¼④⅓欠	不安定な平底。胴部は球形をなして内彎し、口縁部短く外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部縦・斜位の篦削り。底部篦削り。	
3	砥石 石製品	覆土	長12.2 幅6.9 厚 3.8	置き砥一荒砥。断面凹状。長・短軸に弱い擦痕、片側側面調整痕。小口面を含め5面使用。研ぎ減りし、弓張り状を呈す。 流紋岩。			

表—252　H332号住居跡出土遺物観察表（図—515　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	①(20.0)	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④口縁部¼	肩部で稜をなし、口縁部外傾し、上半で外反。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
2	甕 土師器	カマド	① 19.4	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④胴下半～欠損	胴部内彎して立ち上り、上半で丸みを有す。口縁部は内外面共に明瞭な「コ」の字状を呈す。	内面横位の撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	外面炭化状付着物 内面接合痕。

表—253　H333号住居跡出土遺物観察表（図—517　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	＋11	① 13.2 ② 7.6 ③ 4.1	①石英、長石、酸化鉄、小石含、密。②良好 ③内にぶい橙色5YR⅝・外灰白色2.5Y⅞ ④体部½欠	ほぼ平底。体部わずかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	内面整形痕顕著
2	坏 須恵器	床面	① 13.2 ② 6.4 ③ 3.3	①輝石、長石、小石、酸化鉄含、密②良好③灰色7.5Y⅝④体部¼欠	平底。体部下半で丸みを有し、緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	埦 須恵器	＋6	①(15.4) ② 7.8 ③ 7.3	①石英、長石、酸化鉄、軽石含、やや粗②良好③灰色7.5Y⅝④½	体部は深く内彎して立ち上り、口縁部はわずかに外反する。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台、撫で。	

表—254　H334号住居跡出土遺物観察表（図—519　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床面	① 12.6 ② 7.0 ③ 4.1	①軽石、長石含、密。②良好 ③灰色N⅝ ④½	上げ底。体部は直線的に外傾し、口縁部わずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
2	坏 須恵器	周溝	① 13.2 ② 7.6 ③ 3.2	①石英含、精良。②良好 ③青灰色5PB⅝ ④完形	上げ底。体部は下端に張りを有し、緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	底部窯体物付着。
3	甕 土師器	床面	①(22.2)	①酸化鉄、軽石、石英、輝石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④⅖	胴部内彎して立ち上り、上半で弱く張る。口縁は下半で外傾し、上半で外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面、口縁部接合痕。

表—255　H335号住居跡出土遺物観察表（図—521　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	住居外	① 13.3 ② 5.6 ③ 3.8	①石英、軽石、輝石、長石含、密。②良好 ③灰白色7.5Y⅞ ④¼	ほぼ平底。体部は緩やかに彎曲、上半で外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	

2	壺 須恵器	カマド外	② 11.7	①長石、石英含、密②やや不良③内灰黄色2.5Y⅞、外浅黄色2.5Y⅞	脚部は短く外傾、体部は直線的。	内外面横位の撫で。体部下端篦削り。底部撫でか。	④底部¼
3	甕 土師器	+16	① 20.3	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好③橙色5YR⅚④上半部	胴部球形をなして内彎、肩部で稜をなす。上半で最大径、口縁部「コ」の字状を呈す。	内面篦撫で、口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面接合痕。
4	甕 土師器	不明	①(19.8)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③内橙色2.5YR⅝・外橙色5YR⅝ ④¼	胴部球形をなして内彎、口縁部「コ」の字状を呈し、口唇部沈線状をなす。	内面篦撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	口縁部接合痕。

表—256　H336・346号住居跡出土遺物観察表（図—523　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (H336)	甕 土師器	カマド	① 20.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④口縁部½	口縁部「コ」の字状を呈すが肩部に張りがみられない。口縁部沈線状をなす。	内面一部篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
2 (H346)	不明 鉄製品	覆土	現存長6.5　幅0.6～0.8 厚0.5～0.6	両端部共に欠損する。断面、方形状で、一端先細りする。			
3 (H346)	不明 鉄製品	覆土	現存長3.8　幅0.25～0.4 厚0.2～0.3	片側端を欠損する。断面、方形状で一端先細りする。			

表—257　H337号住居跡出土遺物観察表（図—525　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	①(11.0)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④¼	胴部上半は丸みをもち、口縁部は緩く外反する。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部上半横位の篦削り。	口唇部接合痕。
2	不明 鉄製品	覆土	現存長7.3　幅0.7～1.0 厚0.4～0.5	身部扁平で、一端反る。両端部共に欠損。			

表—258　H338号住居跡出土遺物観察表（図—527　図版—112）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	周溝	① 13.0　② 5.8 ③ 3.6	①石英、軽石、長石、輝石含、密。②やや不良　③灰白色2.5Y⅞　④体部½欠	ほぼ平底。体部は緩やかに彎曲し、上半でやや外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	口唇部タール状付着物。
2	甕 土師器	+8	①(19.4)	①輝石、石英、酸化鉄、輝石含、密。②良好③にぶい赤褐色5YR⅝	「コ」の字状口縁。	内面篦撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	④口縁部⅛
3	短頸壺 須恵器	覆土	①(21.3)	①軽石、長石、石英含、密。②良好③灰白色5Y⅞　④口縁・頸部½	頸部外反し、屈曲して口縁部は短く内傾して立ち上る。	内面指押え、撫で。頸部～口縁部内面横位の撫で。肩部撫で。	
4	短頸壺 須恵器	床面	胴最大径20.3	①精良　②良好　③灰色N⅚　④胴部	胴部球形をなして内彎する。	内外面横位の撫で。	
5	刀子 鉄製品	周溝	現存長14.1　刃部幅1.4　厚0.4 茎幅0.7～0.8　厚0.3		切先部を欠損。刃部中程で折れ曲る。錆化している。		

表—259　H339号住居跡出土遺物観察表（図—529　図版—113）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	+19	①(15.0)　② 7.1 ③ 4.2	①軽石、石英、小石含、密。②良好③灰色N⅚　④体部⅓欠損	わずかに上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り、未調整。	
2	埦 須恵器	床面	② 6.0	①軽石、長石、小石含、②良好③淡黄色2.5Y⅞④体部上半欠損	短くだれた高台。体部は内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台、撫で。	軟質。
3	埦 須恵器	床面		①転石含、精良。②良好　③灰色N⅘　④高台、体上半欠		轆轤整形。底部回転糸切り。撫で。	高台痕 いぶしか
4	砥石 石製品	床面	長10.3　幅4.3 厚2.3	手持ち砥。平形擦形、断面凹状をなす。小口面は自然面をのこす。長軸・斜方向に弱い擦痕。4面使用。手前側より奥部方向に研磨減りする。使用面極めて滑らか。流紋岩。			

表—260　H340号住居跡出土遺物観察表（図—531　図版—113）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	① 13.2	①輝石、長石、小石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝　④⅔	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部で短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	① 13.8	①輝石、長石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅞　④½弱	体部内彎し、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	覆土	① 14.7 ③4.1	①輝石、酸化鉄、軽石、長石含、密。②良好　③橙色2.5YR⅝　④⅔	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く直立する。	口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
4	坏 土師器	周溝	① 11.7 ③ 3.1	①輝石、軽石、石英、小石含、密。②良好　③赤橙色10R⅝　④ほぼ完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く直立する。小型。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面剝落している。
5	坏 土師器	覆土	① 12.3	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅞　④⅔	体部内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	口縁部煤付着
6	坏 土師器	床面	① 11.6 ③ 3.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅞　④ほぼ完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く内傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り	器面凹凸あり。内面底部中央接合痕
7	甕 土師器	床面	① 17.3	①石英、軽石、輝石、長石、小石含、やや粗。②良好　③橙色5YR⅞　④口縁½	器肉厚く、口縁部短く外反する。口唇部丸い。	内面撫で、口縁部横位の撫で。肩部より縦位の篦削り。	一部煤付着。
8	甕 土師器	床面	① 23.0	①輝石、軽石、石英、長石含、やや粗。②不良　③橙色7.5YR⅝　④½	胴部長胴形をなし、口縁部外反する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。口縁直下～胴部縦位の篦削り。	器面荒れている。

表一261　H341号住居跡出土遺物観察表（図一533　図版一113）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(16.4) ③ 3.1	①石英、軽石、輝石含、密。②良好③橙色5YR7/6 ④1/4	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は短く外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面剝落する。
2	坏 土師器	覆土	① 13.4 ③ 3.1	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/8 ④7/8	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫でか。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	覆土	①(11.3) ③ 3.5	①輝石、軽石、長石、石英含、密。②良好 ③橙色7.5YR6/6 ④1/4強	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	

表一262　H342号住居跡出土遺物観察表（図一535　図版一113）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.0)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR6/4 ④1/4	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面磨耗著しい。

表一263　H343号住居跡出土遺物観察表（図一537　図版一113）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師質須恵器	床面	① 9.1 ② 5.4 ③ 2.2	①輝石、軽石、チャート含、密②良好③にぶい橙色7.5YR7/4完形	わずかに上げ底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤。底部右回転糸切り。	
2	甕 土師器	床面	① 22.7 ② 10.9 ③ 23.4	①輝石、石英、軽石含、粗。②良好③明赤褐色2.5YR5/6 ④3/4	平底。胴部は直線的に立ち上り、上半でわずかに張りを有す。口縁部強く外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。胴部上半指押え、下半横・縦位の篦削り。	外面二次焼成痕顕著

表一264　H344号住居跡出土遺物観察表（図一539　図版一113）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	① 12.5 ② 8.3 ③ 3.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR5/6 ④ほぼ完形	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部変換点でくびれる。口縁部は外反気味を呈す。	内面撫で。口縁部強い横位の撫で。体部指押え、体～底部篦削り。	器形ゆがむ。
2	坏 土師器	カマド	①(12.4)	①石英、軽石、輝石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/4	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面、口縁部外面横位の撫で。体部指押え、体下半～底部篦削り。	
3	坏 須恵器	+18	① 13.0 ② 6.8 ③ 3.4	①軽石、長石、酸化鉄、石英含、密②良好③暗灰黄色2.5Y5/2④完形。	上げ底。体部は直線的に外傾し、上半で若干張りを有す。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	底部周辺煤付着。
4	坏 須恵器	カマド	① 13.5 ② 6.4 ③ 3.1	①軽石、長石含、密。②良好 ③暗青灰色5B5/1 ④3/4弱	上げ底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	整形痕顕著。
5	甕 土師器	覆土	①(22.3)	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、やや粗。②良好 ③明赤褐色5YR5/6	「コ」の字状口縁、口唇部沈線状をなす。	内面篦撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	④口縁部1/6
6	甕 土師器	カマド	①(20.5)	①輝石、軽石、石英、小石含、密②良好③橙色2.5YR5/6④上半部1/4強	胴部は上半で大きく張り、口縁部「コ」の字状を呈し、口唇部沈線状をなす。	内面篦撫で。口縁部強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	口縁部接合痕。
7	甕 土師器	カマド	①(20.1)	①輝石、軽石、石英含、密②良好③橙色5YR6/6④上半1/2・口縁1/4	胴部丸み強く上半で最大径を有す。口縁部「コ」の字状。	内面篦撫で、口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	口縁部接合痕。
8	甕 土師器	カマド	①(23.4)	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密②良好③橙色5YR6/6④上半部1/4強	胴部球形をなして内彎、上半で最大径を有す。肩部稜をなし、口縁部「コ」の字状を呈す。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	
9	甕 土師器	カマド	①(23.4)	①輝石、軽石、石英、酸化鉄、長石含、密②良好③橙色5YR6/6④1/4	胴部内彎して立ち上り、上半で大きく張る。肩部稜をなし、口縁部「コ」の字状を呈す。	内面篦撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面接合痕。
10	紡錘車 石製品	+18	上径3.6 下径4.4 厚 1.1 孔径0.8	断面台形状を呈し、下径面はシャープな平坦面、上径面やや凸状。両面、側面共に製作時及び使用時による擦痕顕著。周縁部剝落する。かんらん岩。			

表一265　H345号住居跡出土遺物観察表（図一541　図版一113）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.2) ②(9.1) ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい赤褐色5YR5/4④1/4強	平底。体部への変換点明瞭。体部は緩く彎曲する。	口縁部横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	体部煤付着。
2	坏 須恵器	覆土	① 13.4 ② 7.5 ③ 3.6	①精良。②良好 ③灰白色5Y8/1 ④1/4強	上げ底。体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
3	坏 須恵器	床面	① 13.1 ② 7.5 ③ 3.5	①長石、輝石、石英、小石含、やや粗②不良③淡黄色2.5Y8/4④口縁1/4欠	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り。中央部を残し、外周部回転篦削り。	
4	砥石 石製品	周溝	長6.8 幅4.7 厚2.0	手持ち砥。平面長方形、断面凹状。小口面は自然面をのこす。長軸・斜方向に弱い擦痕。側面は細かく沈線状をなす。手前側より中央方向に研ぎ減りする。4面使用。流紋岩。			タール状付着物
5	紡錘車 石製品	周溝	上径4.0 下径4.1 厚0.9 孔径0.9	断面やや長方形状、上下両面共に凹凸あり。製作時及び使用時による弱い擦痕を認む。下径面孔部付近窪む。滑石。。			
6	釘 鉄製品	床面	現存長12.1 幅0.6 厚0.5	頭部は遺存状態からみて折れ曲ると考えられる。断面方形状。下端部は先細り、錆化著しい。			

表一266　H347・348号住居跡出土遺物観察表（図一543　図版一114）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (H347)	坏 土師器	覆土	① 13.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6 ④1/4強	体部緩やかに内彎し、口縁は端部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫でか。体部下半～底部篦削り。	
2 (H347)	蓋 須恵器	カマド	①(16.8) 現 16.0 ③ 3.7	①軽石、長石含、やや粗。②良好③青灰色5B5/1 ④3/4	天井部、平坦面をなし、体部は緩く内彎、端部で屈曲し、口縁部は短く内傾する。小型の摘	轆轤整形。摘貼付。天井部回転糸切り。外周部回転篦削り。	ゆがみ著しい。
3 (H347)	坏 須恵器	床面	① 13.0 ② 7.0 ③ 4.2	①精良。②良好 ③灰白色2.5Y8/2 ④体部1/4欠損。	上げ底。体部への変換点不明瞭。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。撫でか。	底部周縁煤付着

4 (H347)	甕 土師器	カマド	① 20.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅙ ④口縁部½	肩部わずかに張る。口縁部外反し、端部丸い	内面篦撫で、口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
5 (H348)	砥石 石製品	床面	長4.2 幅2.8 厚2.9	手持ち砥。方形状を呈していたと考えられるが、左側面は、加工時に困るか剝離している。斜方向に若干の弱い擦痕、左剝離面は中央に強い沈線状をなす。3面使用（うち1面は小口面）流紋岩。			表面及び小口面滑らか。
6 (H347)	鎌 鉄製品	床面	現存長9.5 身幅3.4～3.5 厚0.3 重量50	身部の一部のみ残存、一端は折れ曲がる。両側より木質の柄着装。間を目地釘で固定している。			
7 (H348)	鎌 鉄製品	床面	現存長21.0 身幅2.6～2.9 厚0.2 重量90	身部全体が大きく彎曲し一端折れ曲がる。背丸気味。			左きき用か

表一267　H349号住居跡出土遺物観察表（図一545　図版一114）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 14.0 ③ 3.7	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅚ ④⅔	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。口唇部丸い。体部上半凹凸あり	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
2	坏 土師器	覆土	① 14.2 ③ 3.7	①輝石、石英、チャート含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④¼	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部わずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
3	坏 土師器	床面	① 14.3 ③ 3.7	①輝石、軽石、長石、石英含、密②良好③にぶい橙色2.5YR⅝④⅞	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は短く内傾する。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	煤付着。
4	坏 土師器	覆土	① 13.2 ③ 3.5	①石英、軽石、輝石含、密。②良好③にぶい橙色5YR¼ ④½	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部は短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	内面タール状付着物。
5	坏 土師器	覆土	① 12.7 ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞ ④½	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部外傾して開く。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
6	坏 土師器	覆土	①(15.0)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④⅓	平底。体部は緩やかに彎曲し、口縁部でわずかにくびれる。器肉やや厚い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部内面放射状篦磨き。体～底部篦削り。	器面剝落する。
7	坏 土師器	覆土	①(13.5)	①輝石、軽石、長石、石英、小石含密②良好③にぶい橙色5YR⅞④¼	平底。体部は緩く彎曲し、口縁部外傾して開く	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上位指押え、内面放射状篦磨き、外面～底部篦削り。	上端部器面剝落する。
8	甕 土師器	覆土	①(29.9)	①輝石、石英、軽石、長石含、粗②不良③明褐色7.5YR⅝④口縁部⅓	直立する胴部から、口縁部強く外反する。	口縁部横位の撫で。口縁直下～縦位篦削り。	

表一268　H350号住居跡出土遺物観察表（図一547　図版一114）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 12.9 ③ 3.7	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④⅞	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部は内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	内面煤付着。
2	坏 土師器	床面	① 13.3 ③ 3.8	①輝石、長石、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④⅞	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部上端でわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	貯蔵穴	① 13.6 ③ 3.5	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④完形。	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部上端で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	口縁部吸炭。斑点状に器面剝落
4	坏 土師器	周溝	① 13.6 ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④¾	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部上端でわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	斑点状に器面剝落
5	蓋 須恵器	貯蔵穴	① 15.9 ③ 4.1	①長石、軽石、石英含、密。②良好③灰白色5Y⅞ ④完形	天井部環状摘。体部緩やかに彎曲し、口縁部短く直立する。	轆轤整形。摘貼付。天井部外周回転篦削り。	
6	甕 土師器	覆土	①(22.8)	①輝石、軽石、石英含、密②良好③にぶい橙色5YR¼④口縁部¼	肩部張りを有し、口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
7	紡錘車 石製品	床面	上径3.0 下径4.1 厚1.4 孔径0.8	断面台形状。上・下径面共に凹凸あり。概して中央部付近窪む。側面製作時による調整痕著しい。側面は調整痕著しい。滑石か。			

表一269　H351号住居跡出土遺物観察表（図一549　図版一114）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	床面	① 13.6 ③ 3.7	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④⅞	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫でか。体～底部篦削り。	
2	甕 土師器	覆土	① 14.8	①輝石、軽石、長石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④口縁部	口縁部上半で外反。口唇部丸い。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。肩部横・斜位の篦削り。	小型。
3	甕(鑽転用か) 土師器	床面	① 23.2 ③ 28.2	①酸化鉄、輝石、石英、軽石含、密②良好③橙色5YR⅝④口縁½欠	胴部わずかに内彎して立ち上り、口縁部外反し器最大径を有す。胴下半ほぼ同位置で欠損。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。胴部斜・縦位の篦削り。	内面接合痕。

表一270　H352号住居跡出土遺物観察表（図一551　図版一114）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	カマド	① 13.8 ② 8.4 ③ 4.0	①精良。②良好 ③灰白色7.5Y⅝ ④½	平底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。藁状の繊維痕あり。	
2	坏 須恵器	覆土	①(13.0) ②(9.0)	①軽石、長石含、密。②良好 ③灰白色5Y⅞ ④⅓弱	体部下端で弱くくびれ、外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。無調整。	

表一271　H480号住居跡出土遺物観察表（図一554　図版一115）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	甕 土師器	カマド	①(14.2) ②(16.2) ③ 15.7	①輝石、石英、軽石、酸化鉄、小石含、密。②良好 ③にぶい赤褐色5YR⅗ ④上半⅔・底部欠	平底。胴部は内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。口縁部短く外傾する。器肉厚い。	内面撫で。口縁～胴外面上半横位の撫で。胴下半斜・縦位の篦削り。	内面紐接合痕。
2	甕 須恵器	+15	①(20.4)	①石英、軽石、酸化鉄、輝石含、密②不良③浅黄橙色10YR⅝④上半⅕	胴半上半で丸みを有し、頸部外反し、口縁部短く直立する。	内外面横位の撫で。	酸化焔気味。内面器面剝落著しい。

3	羽　釜	床　面	①(20.7)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③明赤褐色2.5YR5/6④口縁部1/3	胴部上半直立し、口縁部短く内傾、上端で直立する。鍔水平に張り出す。	内面～外面胴部上半面横位の撫で。中位～縦位の篦削り。鍔貼付。	紐接合痕。つくり丁寧。
4	羽　釜	カマド	①(19.2)	①チャート、小石、石英、長石含、密。②良好　③にぶい黄橙10YR7/4　④上半1/5	胴部緩く内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。鍔上向きに張り出す。	内面～外面胴部上半横位の撫で。中位～縦位の篦削り。鍔貼付。	断面接合痕

表—272　H481号住居跡出土遺物観察表（図—556　図版—115）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	床　面	①12.8 ③3.5	①輝石、軽石、石英、長石含、密②良好③橙色5YR6/6④口縁部1/5欠	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部上端で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	口縁一部吸炭。

表—273　H482号住居跡出土遺物観察表（図—558・559　図版—115）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	＋9	①15.5 ③4.7	①輝石、石英、軽石、長石含、密②良好③にぶい橙色5YR6/4④完形	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面一部剝落する
2	坏 土師器	＋7	①15.2 ③3.7	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/2	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	器形ややいびつ
3	坏 土師器	床　面	①13.2 ③3.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR6/6　④体部1/4欠	丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部上端でわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫でか。体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	床　面	①12.8 ③3.6	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR6/4　④3/4	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	内面煤付着
5	坏 土師器	床　面	①12.6 ③2.7	①輝石、軽石、石英、長石含、密。②良好　③橙色5YR6/6　④3/4	扁平な器形。安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
6	坏 土師器	＋27	①13.0 ③3.0	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR7/4　④完形	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
7	坏 土師器	＋28	①12.7 ③3.5	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR6/6　④ほぼ完形。	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
8	坏 土師器	＋15	①13.5 ③3.6	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色2.5YR6/4　口縁わずか欠	丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部おしなべて一定方向篦削り。	
9	坏 土師器	覆　土	①(13.5) ③3.0	①輝石、石英、長石、軽石含、密②良好③橙色7.5YR6/6④体部1/4欠損	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部で直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
10	蓋 須恵器	床　面	①13.6 ③2.6	①精良。②良好　③灰白色N7/ ④完形。	体部は天井部から緩やかに彎曲し、口縁部は短く内屈する。	轆轤整形。天井部外周回転篦削り。摘貼付。	一部自然釉付着
11	蓋 須恵器	床　面	①14.5 ③2.4	①精良。②良好　③灰白色7.5Y7/1 ④完形。	体部扁平で、天井部から緩やかに彎曲し、口縁部短く直立する。	轆轤整形。天井部外周回転篦削り。	
12	甕 須恵器	床　面	①25.4	①軽石、石英、小石含、密。②良好③灰白色10Y8/1　④上半部	胴部上半で大きく張る。頸部外反し、口縁部直立する。	頸部～口縁部横位の撫で。胴部内面当て目。外面横位に掻き目、叩き目痕。	
13	砥　石 石製品	覆　土	長6.1　幅3.8 厚3.4	手持ち砥。平面長方形、断面凹状、片側小口面は自然面をのこす。長・短軸方向に弱い擦痕。手前側より、奥側に向けて研磨減りする。4面使用。流紋岩。			
14	紡錘車 石製品	＋12	上径3.0　下径4.7 厚1.3　孔径0.75	断面台形状。下径面はシャープな平坦面。下径面は凸状をなす。両面共に製作時の調整痕認む。側面はよく研磨され、横位方向に擦痕あり。変質蛇紋岩。			

表—274　H483号住居跡出土遺物観察表（図—561　図版—115）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	＋8	①12.5 ③3.6	①輝石、石英、軽石含、密②良好③にぶい橙色5YR6/4④口縁部1/2	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部直立する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	体部凹凸あり
2	坏 土師器	覆　土	①12.9 ③3.7	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密②良好③橙色5YR6/6④口縁部1/4欠	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部ほぼ直立気味。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押えか、体～底部篦削り。	
3	坏 土師器	周　溝	①13.4 ③3.7	①輝石、石英、長石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/2	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	カマド	①13.0 ③3.2	①石英、長石、軽石、輝石含、密②良好③にぶい橙色5YR7/4④ほぼ完形	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部ほぼ直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
5	坏 土師器	覆　土	①(11.0)　②7.4 ③3.9	①石英、長石、輝石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/3	平底。体部緩く内彎し、口縁部で内傾する。	内面放射状及び螺旋状篦磨き。口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
6	坏 須恵器	床　面	①12.5　②7.5 ③4.2	①長石、軽石含、密。②良好　③赤灰色7.5R5/1　④口縁体部一部欠	平底。体部は下端で弱くくびれ、緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部回転篦切り。外周部回転篦削り。	底部外面篦記号「×」
7	坏 須恵器	＋11	①(13.4)　②(9.4) ③3.9	①軽石含、密。②良好　③灰色7.5Y5/1　④1/4	体部直線的に外傾し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転篦切り。撫でか。	
8	坏 須恵器	＋20	①(13.2)　②(7.4)	①精良。②良好　③灰白色2.5Y8/1 ④1/4	体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
9	刀　子 鉄製品	カマド	現存長8.7　刃幅1.1　厚0.3 茎幅0.6　厚0.3		刃、茎両端部共に欠損。区部の段差は確認できない。背側平ら。錆化している。		

表—275　H485号住居跡出土遺物観察表（図—564　図版—115）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	＋10	①13.2 ③3.2	①輝石、石英、長石、軽石含、密。②良好　③橙色2.5YR6/6　④完形	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。底部篦削り。	器面磨耗する。
2	坏 土師器	＋23	①13.0 ③2.8	①輝石、石英、長石、軽石含、密。②良好　③橙色2.5YR6/6　④完形	極めて安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	

3	坏 土師器	＋6	①(12.8) ③ 2.9	①輝石、石英、長石、軽石含、密②良好③にぶい橙色5YR7/4⑤/4強	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
4	坏 土師器	覆　土	① 13.1 ③ 3.7	①輝石、石英、軽石、長石含、密。②良好　③橙色5YR6/6　④1/2	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部に至る	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	口縁部煤付着。
5	台付甕 土師器	＋5	① 15.4 ②台部12.0 ③ 17.7	①輝石、軽石、酸化鉄、石英含、密②良好③橙色2.5YR6/6④胴3/4・台1/3	「ハ」の字に外傾する台部から、胴部球形をなして内彎し、口縁部外反する。	内面篦撫で。口縁部横位の撫で。台部指押え、横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	胴下半煤付着。④口縁部一部欠
6	短頸壺 須恵器	床　面	① 9.7　② 11.0 ③ 16.1	①精良。②良好　③灰白色5Y7/1　④1/2	高台部「ハ」の字状に短く外傾。胴部は内彎して立ち上り、肩部で大きく張りを有す。頸部短く直立。	内面～外面胴上半横位の撫で。下半部篦削り。底部回転篦削りか。付高台。	高台端部剝落する断面紐接合痕。

表－276　H486号住居跡出土遺物観察表（図－566　図版－116）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	＋13	①(12.7)　②　6.4 ③　4.1	①軽石含、精良。②良好　③白灰色5Y7/2　④底2/3、体1/4	上げ底。体部は直線的に外傾し、口縁部に至る	轆轤整形。底部右回転糸切り、無調整。	
2	埦 須恵器	覆　土	① 16.0　②　8.7 ③　6.1	①軽石、長石含、密。②良好　③灰白色2.5Y8/1　④体部1/4欠	「ハ」の字に外傾するしっかりした高台。体部は緩やかに内彎して立ち上り、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。	
3	埦 須恵器	＋6	① 15.4	①軽石含、密。②良好　③灰白色7.5Y8/2　④3/4	体部は腰部に張りを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。	体部一部吸炭。
4	甕 土師器	覆　土	①(20.8)	①酸化鉄、長石、輝石、軽石含、密。②良好　③橙色5YR6/8　④1/5	胴部上半丸みをなして内彎し、口縁部外反する。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	口縁部接合痕。
5	砥石 石製品	＋5	長16.3　幅8.6 厚6.4	置き砥。荒砥。長楕円形。小口面及び片側側面自然面のこす。他側面研磨痕著しく、弓張り状を呈す。表面は研主体を整えたと考えられる沈線認む。3面使用。安山岩。			表面中央径2.7cm大で円形に窪む。

表－277　H487号住居跡出土遺物観察表（図－568　図版－116）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆　土	①(12.7)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR6/6　④1/4	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
2	坏 土師器	＋20	① 12.4 ③ 3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR7/6　④3/4	丸底。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
3	坏 須恵器	覆　土	①(12.0)　②(8.0) ④1/3	①精良。②良好　③灰白色7.5Y7/1	体部は直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
4	紡錘車 石製品	床　面	上径3.1　下径4.3 厚　0.2　孔径0.8	断面台形状を呈し、下径面シャープな平坦面。両面とも周縁寄りに弱い擦痕。下径面穿孔部付近に使用痕認む。側面は面取りされ、横位の調整痕著しい。滑石。			
5	刀子 鉄製品	＋10	現存長10.6　茎幅0.7　厚0.3 刃幅1.0　厚0.4		切先部、茎両端部共に欠損する。背平。		

表－278　H488号住居跡出土遺物観察表（図－570　図版－116）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	床　面	① 13.0　②　7.6 ③　3.5	①軽石含、精良。②良好　③灰白色5Y8/1　④ほぼ完形。	上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。上端部再調整。底部右回転糸切り。外周部再調整か。	
2	甕 土師器	床　面	①(19.8)	①石英、軽石、輝石含粗②やや不良③にぶい橙色7.5YR7/4④上半部1/4	胴部直立し、口縁部外反する。	内面撫で。口縁部横位の撫で。口縁直下～縦位の篦削り。	

表－279　H489号住居跡出土遺物観察表（図－572　図版－116）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆　土	① 12.2 ③ 3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6　④3/4	安定した丸底。体部は底部で屈曲し緩く内彎、口縁部でくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	
2	坏 土師器	＋14	① 12.0　②　8.8 ③　3.1	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR6/6　④1/2	平底。体部緩やかに内彎し、口縁部変換点で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。口縁、体部指押え、底部篦削り。	器面磨耗する。
3	坏 土師器	＋15	① 12.2 ③ 3.2	①輝石、石英、軽石、長石含、密。②良好　③橙色5YR7/6　④ほぼ完形	安定した丸底。体部は緩やかに内彎し、口縁部変換点で弱くくびれ、稜をなす。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
4	坏 土師器	＋10	① 12.0　②　9.4 ③　2.9	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR7/4　④1/5	平底。体部緩く彎曲し、口縁部変換点でくびれる。口唇部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	
5	坏 土師器	覆　土	① 12.1 ③ 3.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色7.5YR7/4　④1/2	平底気味。体部緩やかに内彎する。口縁部わずかにくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	内外面煤付着。
6	坏 土師器	＋28	① 12.5 ③ 3.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③にぶい橙色5YR5/4　④1/2強	平底。体部内彎して立ち上る。口縁部片側で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	
7	坏 須恵器	床　面	①(12.2)　②　7.8 ③　3.3	①小石、長石含、密。②良好　③内灰白色7.5Y8/1・外灰色N6/　④1/4	上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
8	坏 須恵器	＋25	① 13.1　②　6.8 ③　3.3	①長石、石英、小石含、やや粗②良好③灰白色7.5Y7/1④口縁1/4欠損	平底。体部直線的に外傾し、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
9	坏 須恵器	覆　土	① 11.6　②　6.0 ③　3.4	①軽石含、精良。②良好　③灰白色2.5Y8/1　④口縁部一部欠損	上げ底。体部緩やかに内彎し、口縁部弱く外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
10	埦 須恵器	＋12	① 16.2　②　8.6 ③　6.7	①長石、軽石含、やや粗。②良好③灰白色5Y8/2　④口縁3/4欠	高台部短く外反。体部は内彎して立ち上り、口縁部短く外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。	口縁部紐接合痕。
11	甕 土師器	覆　土	① 20.6	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密②良好③橙色5YR6/6④口縁部1/4	胴部上半で丸み、口縁部ほぼ「コ」の字状をなす。	内面撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	胴部煤付着。

表—280　H490号住居跡出土遺物観察表（図—574　図版—116）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	覆土	①(12.0)	①輝石、石英、酸化鉄、軽石含、密②良好③にぶい橙色7.5YR④¼	器肉厚く、体部緩く内彎し、口縁部わずかに外傾する。	口縁部横位の撫で。体～底部篦削り。体部内面放射状篦磨き。	器面著しく磨耗する。

表—281　H491号住居跡出土遺物観察表（図—576　図版—116）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	＋7	① 13.3　② 8.3 ③ 3.8	①長石、軽石含、密。②良好　③灰色N⅘　④口縁部⅕欠	上げ底。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転篦切り。	

表—282　H492号住居跡出土遺物観察表（図—578　図版—116）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 土師器	カマド	① 12.6　② 7.4 ③ 3.4	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、やや粗　②良好　③橙色5YR⅚	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部で弱くくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え、横位の篦削り。底部篦削り。	④底～口縁一部欠。
2	坏 土師器	＋5	① 11.8　② 6.7 ③ 3.4	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密②良好③橙色2.5YR⅝④体部⅕欠	平底。体部緩やかに彎曲し、口縁部でわずかにくびれる。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部上半指押え、横位の篦削り。	底部～体部吸炭
3	椀 須恵器	カマド	①(14.1)　②(7.0) ③ 4.6	①軽石、酸化鉄、長石含密②やや不良③浅黄色2.5Y⅔④体部⅝欠損	短くだれた高台。体部は緩やかに内彎し、口縁部で弱く外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。	
4	椀 須恵器	覆土	①(17.6)　②(8.0) ③ 6.9	①軽石、酸化鉄含、密。②良好　③灰黄色2.5Y½　④½、底¼	わずかに外傾する短い高台。体部緩く彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台。	
5	短頸壺 須恵器	＋6	① 14.9	①石英、軽石、長石含、密。②良好③にぶい黄橙色10YR⅔　④頸部	頸部外反して立ち上り、口縁部短く内屈する。	内外面共に横位の撫で。	断面接合面。

表—283　H493号住居跡出土遺物観察表（図—580　図版—116）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	釘 鉄製品	ピット	現存長5.1 幅0.6　厚0.6	断面方形状を呈し、頭部折れ曲がる。	
2	釘 鉄製品	床面	現存長5.2　幅0.4～0.7　厚0.4～0.5	頭頂部方形状か、下端部先細りする。	断面方形。頭部折れ曲がる。
3	砥石 石製品	覆土	長6.7　幅2.5 厚2.7	手持ち砥。平面長方形。断面凹状をなし、小口面は欠損する。研磨面として1面使用。長・短軸方向に弱い擦痕、研磨面を除き、他面は製作時の加工痕顕著。左手前より右奥方向に研磨りする。流紋岩。	

表—284　H494号住居跡出土遺物観察表（図—582）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	鎌 鉄製品	＋7	現存長4.8 幅3.4　厚0.3	背側平ら。両端部共に欠損か。	

表—285　H 8 号竪穴遺構出土遺物観察表（図—588）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	鍛冶椀形滓	＋7	径7.6×7.5 厚3.0　重量200	¼程度の残存。不製楕円形を呈し、裏面曲面示す。裏面及び周縁部海面状を呈し、気泡多い。表面は若干滴下状を呈し、木炭の噛み込みを認む。色調は青茶褐色。表面側で強くマグネットに反応。	

表—286　H58号住居跡出土遺物観察表（図—591・592　図版—117）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1	坏 須恵器	＋18	①(11.0)　② 6.5 ③ 3.4	①軽石含、精良　②良好　③青灰色5B⅘　④½	わずかに上げ底。体部は下端で弱くくびれ、緩く彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部回転篦削り。切り離し不明。	
2	坏 須恵器	＋25	①(13.0)　②(7.5) ③ 4.0	①精良　②良好　③灰白色5Y⅘ ④¼	上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部外周回転篦削りか。切り離し不明。	
3	坏 須恵器	床面下	① 15.0　② 7.8 ③ 4.0	①輝石、石英、長石、軽石含、密②良好③内灰白色5Y⅞外灰色5Y⅘	平底。体部は下端で弱くくびれ、緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部回転篦削り。	いぶし ④½弱
4	甕 土師器	床面下	①(25.0)	①輝石、軽石、酸化鉄含密②良好③にぶい橙色5YR⅝④½、口縁½	胴部大きく球形をなして内彎し、口縁部外傾する。	内面篦撫で、口縁部横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	煤付着。内面接合痕。
5	羽口	覆土	現存長7.1　径5.0 孔径2.0	破損度著しく、先端部⅓程度残存。先端部多孔質で黒色コークス状を呈す。光沢はない。側面は面取りされる。色調は外面灰色、内面淡橙色。先端部橙色を呈す。			
6	鉄塊	床面	径5.8×5.0 厚2.8　重量100	表裏面共に平坦面をなし、裏面は気泡あり、木炭の噛み込みを認む。表面は密で比重重く強くマグネットに反応する。色調は茶褐色。			
7	鍛冶椀形滓	床面	径6.5×6.3　厚3.5 重量100	½程度の残存。楕円形状で、表面は海綿状を呈し、気泡多い。中央U字状に窪む。裏面は、凹凸あり、木炭噛み込む。裏面でわずかにマグネットに反応する。比重やや軽い。色調は表面黒灰色、裏面茶褐色。			
8	鍛冶椀形滓	床面	径6.5×6.3　厚3.3 重量100	不整形状を呈し、表面で窪む。裏面は滴下状を呈し、木炭の噛み込みあり。マグネットにわずかに反応する。色調は表面黒青色、裏面鉄錆生じ、茶褐色。			
9	鍛冶椀形滓	床面	径8.1×5.3　厚2.0～3.6　重量90	長楕円形。表・裏面ともにコークス状を呈し、若干の光沢あり。表皮は海綿状、裏面滴下状。鉄錆の付着あり。			
10	鍛冶椀形滓	床面	径8.6×8.2　厚3.8 重量350	½程度の残存。楕円形を呈し、表面、中央部凹凸し、木炭の噛み込みあり。裏面は鉄錆付着。比重重く、裏面でマグネットに反応する。色調は茶褐色。			
11	鍛冶椀形滓	床面	径9.0×6.9　厚3.6 重量200	楕円形を呈し、地肌粗鬆。表・裏面ともに凹凸あり。表面で木炭の噛み込みあり、裏面滴下状を呈し、鉄錆付着。マグネットにわずかに反応する。色調は裏面青灰褐色、表面青褐色。			

12	鍛冶椀形滓	床　面	径9.5×8.8　厚5.0 重量350	不整形状を呈し、二段重ねで表面凸状をなす。地肌密で、わずかに気泡を認む。裏面は炉内粘土付着する。マグネットに極めて強く反応。色調は表面黒灰色、裏面青灰褐色。	

表一287　H87号住居跡出土遺物観察表（図一594　図版一117）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器　形　の　特　徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 須恵器	+10	① 13.1　② 5.7 ③ 5.2	①石英、軽石、輝石、片岩含、密。②不良　③浅黄色2.5Y⅞　④½	平底。体部は内彎して立ち上り、中位で張る。口縁部弱く外反。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部外面刻書か「宮」?
2	埦 須恵器	貯蔵穴	① 15.4　② 8.1 ③ 4.5	①軽石、輝石含、密。②良好　③青灰色10BG5/1　④体部⅓欠	直立する短い高台。体部は緩やかに彎曲し、口縁部に至る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。付高台。	器形ややいびつ。
3	甕 土師器	カマド	① 19.0	①輝石、石英、軽石、酸化鉄含、密。②良好　③にぶい橙色5YR6/4　④口縁部½	口縁部「コ」の字状を呈し、口唇部沈線状をなす。	内面撫で、口縁部指押え、強い横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
4	甕 土師器	床　面	① 20.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好　③橙色5YR7/6　④口縁部½	口縁部「コ」の字状をなすが、やや外傾の度合い強い。	内面篦撫で、口縁部横位の撫で。肩部横・斜位の篦削り。	外面煤付着。
5	甕 土師器	床　面	① 20.1	①酸化鉄、軽石、輝石、石英含、密②良好③にぶい橙色7.5YR7/4④½	細身の下半から、胴部内彎して立ち上り、上半で最大径を有す。口縁部内傾し、上半で外反	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	口唇部沈線状。
6	鞴羽口	壁　面	長10.1　幅8.0 孔径1.7～4.5	先端部は飴状に溶解し、部周縁は海綿状に気泡散在する。側面は面取りされ、指頭調整痕認む。長軸に対して62.5°を示す。胎土に砂含む。色調は灰一灰白一褐色の順で波状描き、焼成変化する。。			
7	鞴羽口	棚状施設	長10.1　幅7.5 孔径1.7	全形の½断面残存。先端部黒色コークス状を呈し、周縁部で海綿状となる。側面は波状を描き、焼成変化する。胎土に砂含む。色調は、先端灰白色。根部側で肌色。			
8	鞴羽口	覆　土	長9.0　幅6.3 孔径2.0	½断面残存。一端欠損。側面は指頭調整痕認む。胎土、砂含みやや軟質。色調は先端より灰一褐色一淡黄色の順で波状を描く。			
9	鞴羽口	+21	長10.2　幅7.7 孔径(1.8)	一端欠損するが一部コークス状をなす。側面調整痕。波状に焼成変化する。胎土、軽石、黒色鉱物粒、砂含む。色調は先端及び根側で淡灰色。その他は肌色を呈す。			
10	鞴羽口	+21	長9.0　幅7.0	½残存。先端部飴状を呈し、小気泡散在する。側面は根部寄りで指頭調整痕。胎土は輝石、軽石、砂含む。色調は先端部より灰一灰褐一褐色の順で焼成変化する。			
11	鞴羽口	カマド	長8.7　幅7.3	端部欠損。½断面残存。側面指頭調整痕。胎土は輝石、石英含み軟質。色調は灰褐一褐色に焼成変化する。			
12	鞴羽口	覆　土	長5.4　幅6.7 孔径1.5	先端部小破片。½断面残存。端部黒色コークス状を呈し、周縁部で海綿状をなす。胎土は輝石、軽石、砂含む。色調は白灰色。内側は酸化焔。			
13	鞴羽口	覆　土	長5.0　幅5.7	先端部小破片。¼断面残存。端部黒色コークス状。周縁部で小気泡散在する。一部鉄滓付着。胎土は軽石、砂含む。色調は淡褐色。			
14	鞴羽口	壁　面	長2.6　幅2.6	先端部小破片。先端部黒色コークス状で小気泡散在する。胎土は軽石粒、砂含む。色調は灰白色。			
15	坩　堝	覆　土	復口10.5底径10.5高3.9深さ2.8前後か	全形の¼程度残存。断面長方形。中位で張る。口唇部より内側にかけて黒色コークス状を呈し、銅滓片付着。器面上端より灰一灰白一淡橙色の順で焼成変化。胎土は軽石、黒色鉱物粒、砂含む。			
16	炉内滓 分析試料1	床　面	径5.4×8.8　厚1.3 ～2.5　重量80	不整三角形。表・裏面ともに滴下状で凹凸著しい。地肌は粗鬆で周縁部気泡散在。木炭の噛み込みあり。マグネットに強く反応する。色調は茶褐色。			
17	鉄塊か	床　面	径5.8×6.3　厚3.6 重量140	不整楕円形。表面中央部に錆付着するが地肌密。周縁部でわずかに海綿状をなす。比重重く、マグネットの反応強い。色調は茶褐色。			
18	鍛冶椀形滓	+5	径8.6×8.0　厚4.0 重量400	楕円形。表面U字状に窪み、裏面は曲面を示す。周縁部、海綿状をなすが、地肌は概して密、鍛造剝片付着する。マグネットの反応弱い。色調は青茶褐色。			
19	鍛冶椀形滓	+5	径6.5×8.6　厚2.8 重量210	長楕円形。表面は緩く窪み、裏面曲面を示す。炉壁材付着、断面小気泡散在する。比重は概して重いが、マグネットの反応弱い。色調は茶褐色。			
20	鍛冶椀形滓	+6	径7.6×8.4　厚3.5 ～4.5　重量250	不整楕円形。表面は緩く窪み、裏面は凹凸あるものの曲面を示す。地肌は粗鬆で局部的に気泡散在。木炭の噛み込み認む。比重重く、マグネットに強く反応する。色調は暗茶褐色。			
21	鍛冶椀形滓	+5	径7.3×9.1　厚2.3 ～2.8　重量180	不整楕円形。表面窪み、裏面曲面を示す。周縁部海綿状。地肌は粗鬆、木炭の噛み込み認む。局部的に錆付着。マグネットの反応は弱い。色調は暗茶褐色。			

表一288　H198号住居跡出土遺物観察表（図一596　図版一117）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器　形　の　特　徴	成形・調整技法	備　考
1	蓋 須恵器	床　面	① 16.5 ③ 1.9	①長石、軽石、石英、片岩含、やや粗②良好③灰色7.5Y⅘/④¾弱	平坦な天井部から体部外傾して開き、口縁部丸くなる。	轆轤整形。天井部右回転糸切り。	皿としての機能も考えられる。
2	坏 須恵器	貯蔵穴	① 13.3　② 7.3 ③ 3.7	①黒色鉱物粒含、精良。②良好　③灰白色7.5Y⅘/2　④体部½欠	上げ底。体部は下半で張りを有し、外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	底部外面「×」篦記号
3	坏 須恵器	+20	② 6.6	①長石、軽石、小石含、密。②良好③青灰色5B5/1　④底部	わずかに上げ底。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
4	甕 土師器	床　面	① 19.8	①輝石、石英、軽石、長石含、密。②良好　③橙色5YR7/6　④上半部	口縁部ほぼ「コ」の字状。	内面篦撫で。口縁部指押え。横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
5	台付甕 土師器	床　面	②台部8.2	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/8　④脚部½		体部内面撫で。外面下端指押え、台部内・外面横位の撫で。	
6	滴下滓	床　面	径5.6×8.8　厚2.0 ～2.5　重量90	表・裏面ともに凹凸著しく、地肌は粗鬆、木炭の噛み込み認む。表面局部的に気泡散在する。マグネットの反応は弱い。色調は青茶褐色。			
7	鍛冶椀形滓	床　面	径12.7×8.3 厚3.0　重量300	長楕円形。周縁部鉄錆付着。裏面は滴下状をなし、若干の凹凸あり、気泡散在、木炭の噛み込み認む。裏面一部炉材粘土付着する。マグネットの反応は概して弱い。色調は茶褐色。			
8	不明 鉄製品	+15	長17.7　幅2.3 厚0.5　重量50	一端片側に彎曲する。器肉厚く、断面長方形状。錆化している。			

表一289　H216号住居跡出土遺物観察表（図一598・599　図版一118）

番号	器　種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器　形　の　特　徴	成形・調整技法	備　考
1	坏 土師器	周　溝	① 12.4	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR6/4　④½弱	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。口唇部丸い。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	

2	坏 土師器	床面	① 12.5 ③ 3.4	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④⅓	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部短く内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面剥落、磨耗する。
3	坏 土師器	+27	① 12.2 ③ 3.4	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅞ ④½	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部でわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押えか。体部篦削り。	器面磨耗する。
4	坏 土師器	覆土	① 12.3	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③浅黄橙色7.5YR⅝ ④底部¼欠	丸底。体部内彎して立ち上り、口縁部変換点でくびれ、口唇部丸く、内側へ内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
5	坏 土師器	周溝	①(11.6)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR⅞ ④½弱	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。体～底部篦削り。	
6	坏 土師器	床面	①(12.0)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④¼	体部緩やかに内彎し、口縁部直立する。	口縁部横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	
7	坏 土師器	覆土	①(11.7)	①輝石、長石、石英、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④⅓	体部内彎して立ち上り、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫でか。体下半～底部篦削り。	口縁部外面墨書「上」
8	坏 土師器	床面	①(11.6) ③ 2.9	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④¾	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口唇部でわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部篦削り。	器面磨耗する。
9	坏 土師器	+16	① 12.3 ③ 3.3	①輝石、軽石、石英、長石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④体部¾欠	安定した丸底。体部緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。底部概して一定方向篦削り。	内面篦記号「×」
10	坏 土師器	覆土	①(12.3)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④¼	体部緩やかに内彎し、口縁部直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	器面やや磨耗する。
11	坏 土師器	覆土	① 12.0 ③ 3.6	①輝石、石英、軽石、小石含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④ほぼ完形	平底気味。体部緩やかに内彎し、口縁部外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。底部篦削り。	
12	坏 土師器	住居外	①(12.8) ②(9.7) ③ 2.8	①輝石、軽石、長石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR⅝ ④½	平底。体部緩やかに内彎して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押えか。底部篦削り。	
13	坏 土師器	床面	① 14.8 ② 10.5 ③ 4.2	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⅝ ④体部⅔欠	平底。体部緩やかに内彎して立ち上る。	体部内面放射状、螺旋状篦磨き。口縁部横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	最終的に体部⅓残存。
14	坏 土師器	覆土	①(13.6)	①石英、軽石、輝石含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④体部⅔	平底の痕跡あり。体部緩やかに内彎する。	体部内面放射状篦磨き、口縁部横位の撫で。体部篦削りか。	器面磨耗する。
15	蓋 須恵器	床面	① 14.7 ③ 3.3	①軽石、小石含、密。②良好 ③青灰色10BG⅝ ④体部¼欠	摘は小型で、内外面共に外傾する。体部は緩やかに彎曲し、口縁部短く外傾する。	轆轤整形。天井部外周回転篦削り。摘貼付。	
16	坏 須恵器	+25	①(13.2) ②(8.8) ③ 3.2	①長石、軽石、チャート含、密②良好③灰黄色2.5Y⅝④体部¾欠損。	ほぼ平底。体部外傾して立ち上る。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
17	坏 須恵器	+22	①(12.3) ②(7.7) ③ 4.2	①小石含、精良②やや不良③内灰白色7.5Y⅞、外灰白色10Y⅞	平底。体部は下半わずかに張りを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。再調整か。	④体部½欠。
18	坏 須恵器	覆土	①(12.2) ② 7.2 ③ 4.1	①精良。②良好 ③灰白色N⅞ ④体部わずかに欠。	上げ底。体部わずかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部回転篦切り。	器形ゆがむ。 外面自然釉。
19	坏 須恵器	覆土	① 11.9 ② 7.2 ③ 3.8	①精良。②良好 ③青灰色5B⅚ ④体部¼、底部½	わずかに上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	
20	坏 須恵器	覆土	①(12.5) ② 7.2 ③ 3.7	①長石含、密。②良好 ③灰色7.5Y⅚ ④体部¾欠損。	わずかに上げ底。体部緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部うず巻き状の沈線痕。	
21	坏 須恵器	床面	① 13.0 ② 7.0 ③ 3.4	①チャート、輝石、軽石含、密。②良好 ③灰白色5Y⅞ ④体部½欠	上げ底。体部緩やかに内彎し、口唇部でわずかに外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部回転篦削り。	
22	坏 須恵器	覆土	①(12.8) ②(8.2) ③ 3.8	①軽石含、密。②良好 ③灰白色7.5Y⅞ ④体部⅕、底部½	上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部回転篦削り。	
23	坏 須恵器	住居外	① 12.0 ② 7.2 ③ 3.9	①精良。②良好 ③灰白色7.5Y⅞ ④½	上げ底。体部は下端で若干張りを有し、直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
24	坏 須恵器	周溝	① 13.0 ② 6.5 ③ 4.0	①長石含、精良。②良好 ③灰色N⅚ ④体部½欠	わずかに上げ底。体部下端で張りを有し、緩やかに彎曲する。	轆轤整形。底部左回転糸切り。	口縁部自然釉。
25	盤 須恵器	床面	② 14.0 ③現高3.5	①精良。②良好 ③灰白色10Y⅝ ④高台½体部⅓	わずかに外傾する、しっかりした高台。体部は大きく張りを有して立ち上る。	轆轤整形。底部回転篦切りか。付高台。撫で。	口縁部推定図。
26	甕 土師器	覆土	①(21.6)	①輝石、石英、軽石含、密②良好③赤褐色2.5YR⅝ ④口縁部½	強く外反する口縁。	口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	口縁部接合痕。
27	甕 土師器	周溝	① 20.8	①輝石、石英、軽石、酸化鉄、長石含、密。②やや不良 ③橙色5YR⅚ ④上半部	胴部内彎し上半で大きく張る。口縁部「コ」の字状をなす。口唇部丸い。	内面撫で。口縁部指押え、強い横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	内面接合痕。
28	砥石	覆土	長5.0 幅2.5 厚 2.0	手持ち砥。平面長方形。断面凹状、小口面は剝離している。長軸・斜方向に弱い擦痕、一部沈線状をなす。手前側より中心部に向って、研磨減りする。3面使用。流紋岩。			
29	炉内滓	ピット	径4.5×6.7 厚2.0 重量80	全面に錆付着。表・裏面共に凹凸あり。わずかにマグネットに反応する。色調は黄褐色。			
30	紡錘車 鉄製品	+25	長13.6 軸幅0.5 紡輪径3.4 厚0.4	軸部両端欠損する。紡輪部½程度。厚く錆化している。			
31	棒状 鉄製品	覆土	長14.6 幅0.8 厚 0.7	両端部欠損。断面方形状。端部寄りでやや先細りする。			
32	刀子 鉄製品	ピット	長7.9 刃幅1.1 厚0.5 茎幅0.6 厚0.4	切先部及び茎端部を欠損する。背平、全体的に錆化する。			
33	鎌 鉄製品	床面	長17.5 幅3.2 厚0.3	刃先端を欠損。身部全体がわずかに彎曲し一端折れ曲がる。遺存状態良好。			
34	鉸具 鉄製品	床面	長6.2 頭径3.7 厚0.5	基部直線をなし、2本の軸棒をとりつけ、一方に刺金装着している。鉸具頭は楕円形状をなす。断面ほぼ方形状をなす。			
35	鉸具 鉄製品	床面	長7.0 頭径3.6 厚0.5—0.6	基部直線をなし、2本の軸棒をとりつけ、一方に刺金装着している。鉸具頭は楕円形をなす。			

表一290　T 1号鍛冶址出土遺物観察表（図一601　図版一118）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	鍛冶椀形滓	遺構内	径6.8×9.4 厚3.2　重量225	表面ほぼ平坦。裏面は丸みを有し、滴下状で局部的に海綿状をなす。地肌粗鬆。色調は茶褐色、一部青茶褐色をなす。	

表一291　T 2号鍛冶址出土遺物観察表（図一604・605・606・607　図版一118・119・120）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	鞴羽口	P_7	長7.7　幅6.4 孔径2.0	根部側欠損。先端部片側に鉄滓付着。孔内側に突き抜ける形で突出する。先端は飴状をなし、海綿状に小気泡散在する。胎土は軽石、砂含む。色は肌色で一部灰色に焼成変化。	
2	鞴羽口	P_6	長9.9　幅7.2 孔径2.0	先端部飴状をなし、海綿状に小気泡散在する。側面は面取り調整される。色調は波状を描き灰一灰白色に焼成変化する。	
3	鞴羽口	P_6西	長8.5　幅7.3 孔径1.7	両端部共に欠損。側面は指頭調整される。胎土は軟質で軽石、砂含む。色調は灰一淡橙色の順で焼成変化する。	
4	鞴羽口	床面	長7.8　幅6.5前後 孔径2.3	先端部⅔断面残存。先端は飴状をなし、片側端部で斜めに突出する。側面は指頭による撫で、胎土は軽石、砂含む。色調は灰一褐色の順で焼成変化する。	
5	鞴羽口	P_7	長6.4　幅6.4前後 孔径(2.3)	全形½断面残存。体部亀裂著しい。根部側でタール状付着物。胎土は酸化鉄、軽石、砂含む。色調は灰白一灰褐一褐色の順で焼成変化する。	
6	鞴羽口	前堤部	長13.0　幅8.0 孔径2.2	全形の½断面残存。先端部は飴状をなし、鉄滓付着。溶解部は長軸に対し60°を示し、鞴挿入角度は30°前後か。側面指頭調整痕認む。色調は灰褐色一肌色の順で焼成変化する。	
7	鞴羽口	P_6	現8.4　幅6.7～8.2 孔径2.2	根部側でやや幅広、胎土は砂粒、軽石、砂含み軟質。色調は灰白一褐色の順で焼成変化する。	
8	鞴羽口	P_6	長8.7　幅6.0前後 孔径2.2	全形の½断面残存。先端部黒色コークス状を呈し、小気泡散在する。胎土は輝石、軽石、石英含む。色調は灰一淡橙色の順で焼成変化する。	
9	鞴羽口	P_5南	長6.8　幅6.5 孔径2.2	先端部½断面残存。先端は飴状をなし、長軸より斜めに突出する形で溶解する。体部亀裂著しい。胎土は軽石、砂含む。色調は外面黒色、内面淡橙色。	
10	鞴羽口	前堤部	長3.0　幅2.5	先端部で小破片。外面海綿状をなし、小気泡散在する。胎土は軽石含み軟質。色調は外面灰色、内面肌色。	
11	鞴羽口	前堤部	長3.6　幅5.6	先端部½程度残存。先端部は黒色コークス状を呈し、海綿状に小気泡散在する。胎土は軽石含み軟質。	
12	鞴羽口	前堤部	長4.4　幅5.2 孔径(2.0)	先端部¼残存。端部黒色コークス状を呈し、小気泡散在する。内外面共に亀裂する。胎土は軽石、小石含み軟質。色調は暗褐色。	
13	鞴羽口	P_2	長5.1　幅5.5	先端部残存。外面黒色コークス状を呈し、局部的に飴状をなし、小気泡散在する。胎土は軽石含み軟質。	
14	鞴羽口	P_2	長6.6　幅4.8 孔径2.2	先端部⅓断面残存。側面指頭調整、亀裂あり。胎土は軽石、砂含む。色調は黒灰一白灰一淡橙色の順で焼成変化する。	
15	鞴羽口	P_8	長2.9　幅6.3 孔径2.0	先端部残存。飴状をなし、海綿状に小気泡散在する。胎土は軽石含む。色調は黒色。	
16	鞴羽口	P_8	長5.8　幅4.3 孔径2.2前後	先端部⅓残存。外面黒色コークス状を呈し、海綿状に小気泡散在する。胎土は軽石、砂含む。色調は外面黒色、内面肌色。	
17	鞴羽口	P_5	長5.5　幅4.4	先端⅓断面残存。ほぼ全面に滓付着。胎土は軽石含む。色調は灰褐色。	
18	鞴羽口 分析試料3	P_2	長4.8　幅4.9 孔径1.8	根部側残存。胎土は軽石、砂含む。色調は灰白一肌色の順で焼成変化する。	
19	鞴羽口	床面	長4.3　幅5.1	両端部共に欠損。胎土は軽石、輝石含み軟質。色調灰褐色で一部焼成変化する。	
20	鞴羽口	P_2	長4.7　幅3.7	先端部残存。端部飴状を呈し、海綿状に小気泡散在する。胎土は軽石、砂含み軟質。色調は外面黒色、内面淡橙色。	
21	鞴羽口	P_7	長3.2　幅3.7	小破片。側面鉄滓付着。胎土は砂含み軟質。色調は肌色を呈す。	
22	鞴羽口	前堤部 土堤(南)	長4.6　幅4.2	先端部⅓残存。側面に鉄滓付着。胎土は軟質。色調は灰白一肌色の順で焼成変化する。	
23	鞴羽口	前堤部	長4.7　幅3.6	先端部小破片。外面飴状を呈し、海綿状に小気泡散在する。溶解部は一部凸状をなす。胎土は軽石含み軟質。色調は外面黒色、内面肌色。	
24	鍛冶椀形滓	P_5	径6.3×5.8　厚3.0 重量100	長楕円形。表面緩く窪み、裏面は滴下状に焼結する。端部錆付着。一部鍛造剝片認む。断面多孔質である。	
25	鍛冶椀形滓	P_7	径10.6×11.7　厚4.3 重量450	不整楕円形。両面共に凹凸する。地肌は粗鬆で小気泡散在。局部的に鉄錆付着。色調は茶褐色。マグネットに強く反応する。	
26	鍛冶椀形滓	P_7	径10.0×13.0 厚4.3～4.7　重量480	大型滓。不整長楕円形。表面は飴状を呈し緩く窪む。裏面は滴下状で木炭噛み込み顕著。断面海綿状をなし一部煤付着。色調は暗茶褐色。裏面で強くマグネットに反応する。	
27	鍛冶椀形滓 分析試料4	前堤部南	径6.0×8.4 厚3.8　重量200	半円形状で½欠損。表面で窪み、裏面炉底部の曲面示す。窪み部海綿状、錆付着、断面多孔質。若干木炭噛み込む。色調は青茶褐色。マグネットに強く反応する。	
28	鍛冶椀形滓	P_5	径6.4×5.0　厚3.2 重量90	不整楕円形。表面凸状。裏面曲面を示す。地肌は飴状で、小気泡散在する。色調は黒色。マグネットの反応はやや弱い。	
29	鍛冶椀形滓	P_6	径6.9×7.7　厚3.8 ～4.2　重量160	不整楕円形。表・裏面共にやや凹凸する。地肌は粗鬆、鍛造剝片、錆付着し、木炭の噛み込み認む。色調は茶褐色。マグネットにやや反応する。	
30	鍛錬鍛冶滓か 分析試料5	P_{11}	径13.0×9.0 厚4.0～4.5　重量400	長楕円形、表面緩く窪み、裏面は滴下状に焼結する。両面共に錆、木炭噛み込み認む。色調は青茶褐色、マグネットにやや反応する。	
31	滓下滓	P_7	径4.0×7.6　厚2.6 重量50	飴状を呈すが、光沢なく、木炭の噛み込み認む。裏面で羽口付着する。色調は黒色、マグネットに反応する。	
32	鍛冶椀形滓	P_5	径2.9×4.0　厚1.9 重量40	小破片、表面平坦、裏面は丸く曲面を示す。断面海綿状をなし、鍛造剝片、木炭噛み込み認む。色調は青茶褐色。マグネットに極めて強く反応する。	
33	滓下滓	P_5	径1.7×5.5　厚5.7	飴状を呈し、光沢はない。地肌は小気泡散在する。色調は黒色。マグネットに強く反応する。	
34	鍛冶椀形滓 分析試料6	覆土	径9.0×9.6 厚3.3前後　重量300	不整楕円形。表面側は緩く窪み、裏面若干凹凸、地肌は粗鬆で、局部的に錆付着する。断面海綿状で気泡散在する。色調は暗茶褐色。マグネットの反応は強い。	
35	滴下滓	P_5	径6.4×7.8　厚3.0 ～4.0　重量100	両面共に凹凸著しく、鍛造剝片付着、木炭の噛み込み認む。色調は暗茶褐色。マグネットに強く反応する。	

36	鍛練鍛冶滓か	P_7	径8.8×14.1 厚6.1 重量420	長楕円形。表・裏面共に凹凸著しく、表面及び周縁部海綿状で木炭の噛み込み認む。地肌は粗鬆、色調は暗茶褐色。マグネットの反応は概して弱い。			
37	鍛冶椀形滓	P_{10}	径5.5×6.6 厚2.3 重量90	楕円形。表面緩く窪み、裏面曲面を示す。表面飴状で光沢なく、一部錆付着、断面海綿状をなし、小気泡散在する。色調は青茶褐色。マグネットの反応はやや弱い。			
38	鍛冶椀形滓	P_6	径3.8×5.9 厚2.3～2.7 重量50	表面飴状。海綿状に小気泡散在し、木炭、噛み込み認む。色調は暗茶褐色。マグネットに強く反応する。			
39	鉄塊	覆土	径5.2×5.3 厚4.1 重量140	不整楕円形。地肌は粗鬆で、錆付着、木炭の噛み込み認む。色調は黄茶褐色。比重重く、マグネットに強く反応する。			
40	鍛冶椀形滓	P_5	径9.3×7.0 厚3.0 重量200	楕円形。表面は緩く窪み、裏面わずかに凹凸あり。地肌は粗鬆で光沢なく、周縁部多孔質で、錆付着。表面で鍛造剝片認む。色調は青茶褐色。マグネットに反応する。			
41	鍛練鍛冶滓か	P_5	径10.0×7.3 厚2.6～3.3 重量130	不整形状で表面は緩く窪み、裏面は滴下状の焼結部をなす。表面多孔質で錆付着、裏面で木炭の噛み込み認む。色調は黄茶褐色、マグネットの反応は弱い。			
42	鍛冶椀形滓	P_5	径5.6×8.2 厚3.4～0.4 重量180	半円形状。表面は緩く窪み、裏面丸く炉壁材付着。両面共に錆、木炭の噛み込み認む。断面多孔質。色調は青茶褐色。裏面で強くマグネットに反応する。			
43	鍛冶椀形滓	前堤部	径4.5×6.0 厚3.0～3.5 重量80	地肌粗鬆で凹凸著しい。局部的に小気泡散在し、錆、木炭の噛み込み認む。色調は茶褐色。マグネットに極めて強く反応する。			
44	鍛冶椀形滓	P_6	径6.9×5.6 厚3.0～3.5 重量110	長楕円形。裏面は緩く曲面示す。地肌は粗鬆で光沢なく、局部的に錆、木炭の噛み込みを認む。色調は茶褐色。マグネットの反応は強い。			
45	鍛冶椀形滓	P_2北	径9.5×7.5 厚2.5～3.4 重量170	不整楕円形。表面平坦、裏面は曲面を示す。地肌は粗鬆で、表面½程度海綿状をなす。一部木炭の噛み込み認む。色調は茶褐色。マグネットに反応する。			
46	鍛冶椀形滓	P_9	径9.2×11.0 厚4.3 重量480	楕円形。表面は緩く窪み、裏面は曲面を示す。地肌は粗鬆で、錆付着する。色調は黄茶褐色。マグネットの反応は弱い。			
47	鍛練鍛冶滓 分析試料7	P_7	径19.0～14.5 厚3.0～3.5 重量650	長楕円形。大型の滓。表面は緩く窪む。地肌亀裂するが概して密。鍛造剝片付着し、局部的に錆、炉壁材認む。強くマグネットに反応する。			
48	鍛冶椀形滓	P_7	径10.0×13.5厚4.7 重量460	不整長楕円形。表面緩く窪み、裏面滴下状をなす。地肌は粗鬆で、錆、木炭の噛み込み認む。周縁部は海綿状。色調は青茶褐色。マグネットに強く反応する。			
49	鍛冶椀形滓	P_{10}	径10.7×10.8 厚4.0 重量550	大型の滓。断面三日月状をなし、表面窪み、裏面は曲面を示す。地肌は粗鬆で小気泡散在する。局部的に錆、木炭の噛み込み認む。色調は表面黄褐色、裏面青茶褐色。マグネットの反応は裏面で強い。			
50	鍛練鍛冶滓 分析試料8	P_7	径17.0×10.6 厚4.2～5.5 重量900	大型の滓。長楕円形、裏面は滴下状に焼結し凹凸する。地肌は粗鬆で光沢なく、裏面は部分的に小気泡、錆、木炭の噛み込み認む。色調は表面茶褐色、裏面は青茶褐色。比重重いがマグネットの反応は概して弱い。			
51	鍛冶椀形滓	P_7	径7.0×6.0 厚2.7 重量160	不整楕円形。断面三日月型。表・裏面ともに地肌は粗鬆で一部錆、木炭の噛み込み認む。断面はやや多孔質。色調は茶褐色。マグネットに反応する。			
52	鍛冶椀形滓	P_7	径5.0×7.4 厚2.7 重量120	不整楕円形。表面は若干凹凸あり。裏面は曲面を示す。地肌は鈍く光沢ない。一部錆付着する。色調は青茶褐色。マグネットに強く反応する。			
53	鍛冶椀形滓	P_2	径6.0×6.5 厚2.5 重量110	不整楕円形。断面三日月状をなす。地肌は光沢なく粗鬆。局部的に海綿状をなす。色調は茶褐色。マグネットに強く反応する。			
54	鍛冶椀形滓	P_7	径9.2×7.0 厚3.0～4.6 重量190	不整楕円形。断面三日月型。表面は地肌密、裏面は錆、木炭の噛み込み、炉壁材の付着をみる。色調は茶褐色。マグネットの反応弱い。			
55	鍛冶椀形滓	P_{28}	径9.1×11.2 厚3.0～4.3 重量310	楕円形。表面緩く窪み、裏面は曲面をなし中央滴下状。一部炉壁材付着。局部的に錆付着。断面は海綿状。色調は青茶褐色。裏面で強くマグネットに反応する。			
56	鍛練鍛冶滓か	P_3	径8.0×11.8 厚5.6 重量390	不整楕円形。地肌は粗鬆。局部的に錆、木炭の噛み込み認む。色調は茶褐色。裏面で強くマグネットに反応する。			
57	鍛練鍛冶滓か	P_2	径5.8×3.6 厚2.1 重量50	小型の滓で滴下状をなす。地肌は粗鬆で光沢なく一部錆付着、木炭の噛み込み認む。色調は青茶褐色。マグネットの反応は概して弱い。			
58	鍛冶椀形滓	P_3	径5.5×5.5 厚2.2 重量80	全形の¼程度残存。表面緩く窪み、小石付着、裏面で錆認む。断面は海綿状をなし多孔質。地肌はかなり密。色調は茶褐色。マグネットに強く反応する。			
59	鍛冶椀形滓	P_6	径3.4×5.4 厚3.1 重量80	小型の滓。地肌は多孔質。一部木炭の噛み込み、錆付着する。色調は暗茶褐色。比重は重いがマグネットの反応は弱い。			
60	鍛練鍛冶滓	P_6	径4.4×8.0 厚2.5～2.9 重量60	裏面ほぼ平坦。表面で凸状をなす。地肌は粗鬆、錆、木炭の噛み込み、鍛造剝片付着する。			
61	鉄製品か	P_6	径2.0×2.6 厚0.2	小破片。断面三角形で器肉は薄く、一端鋭る。			
62	鉄製品	P_6	径1.7×2.2 厚0.2	61に似る。			
63	鍛冶椀形滓 分析試料10	P_7	径10.5×7.8 厚4.0～4.2 重量400	不整円形状。表面はわずかに窪み、裏面は丸み強く炉底部の曲面を示す。表・裏面は共に錆付着し、海綿状に気泡多い。色調は茶褐色。比重重いが、マグネットの反応弱い。			
64	坏 土師器	P_7	① 13.3	①輝石、軽石含、密。②良好 ③橙色2.5YR⅝ ④¼	体部緩やかに内彎して立ち上り、口唇部で内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
65	坏 須恵器	覆土	①(13.7)	①チャート、長石、軽石、石英含、密 ②不良③灰白色5Y⅞④口縁¼		轆轤整形。	
66	坏 須恵器	覆土	② 7.2	①輝石、チャート、長石含、やや粗。②不良 ③内灰白色5Y⅞、外橙色2.5YR⅞④底部	上げ底。	轆轤整形。底部回転篦切りか。	
67	甕 土師器	P_7	① 16.5	①輝石、軽石、石英含、密②良好③にぶい赤褐色5YR⅝④口縁部⅓	口縁部外反、口唇部丸く、内傾する。	口縁部指押え、横位の撫で。肩部篦削り。	接合痕。
68	鉄鉗 鉄製品	前堤部	長40.0 柄長29.3 幅0.9 重量520	柄部先端欠損。大型。腰部より夾部間が短い。柄部断面方形状。			

表—292　T 3号鍛冶址出土遺物観察表（図—609　図版—120・121）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	器形の特徴	備考
1	砥石 石製品	覆土	長7.8 幅2.8 厚1.9	手持ち砥。平面長方形、断面台形状。表面のみ研磨痕著しく、斜方位に擦痕認む。他面は製作時による加工痕あり。流紋岩。	
2	鞴羽口	焼土	長11.1 幅6.6 孔径2.0	全形の½程度残存。先端部黒色コークス状をなし、小気泡散在する。側面撫で調整。胎土は軽石、砂含み軟質。色調は暗灰色。	

3	鞴羽口	覆土	長8.9 幅7.8 孔径2.2	½断面残存。先端部欠損。側面は指頭による撫で、面取りされる。胎土は、輝石、軽石、芻含む。色調は暗灰一灰一橙色の順で、波状に焼成変化する。	
4	鞴羽口	P_3	長6.5 幅6.6	先端部½残存。先端部は黒色コークス状を呈し、海綿状に気泡散在する。側面は指頭調整。胎土は長石、軽石、石英含む。色調は灰白一肌色の順で焼成変化する。	
5	鞴羽口 分析試料11	P_3	長6.1 幅5.2	先端部¼程度残存。先端部は黒色コークス状をなす。胎土に芻多量に含む。色調は黒灰一肌色の順で焼成変化する。	
6	鞴羽口	焼土西	長4.2 幅2.8	先端部小破片。先端部黒色コークス状をなし、小気泡散在する。胎土は軽石、石英、芻含む。色調は橙色。	
7	鞴羽口	床面	長7.0 幅6.0	先端部のみ残存。黒色コークス状を呈し、海綿状に小気泡散在する。胎土は軽石含む。色調は一部明灰色。	
8	鞴羽口	P_2西	長4.0 幅6.2	先端部¼程度残存。先端部コークス状を呈し、一部に錆付着。胎土は軽石粒、芻含み軟質。色調は外面灰白色、内面淡橙色。	
9	鞴羽口	焼土	長5.3 幅4.0	根部側⅛程度。胎土は軽石、石英、芻含み、軟質。色調は灰一肌色の順で焼成変化する。	
10	鍛練鍛冶滓 分析試料12	P_{10}	径12.0×9.5 厚6.3 重量550	三角形状を呈し、2段重ねで凹凸顕著。表面は地肌粗鬆、局部的に木炭の噛み込み、錆の付着あり。裏面は滴下状をなす。色調は茶褐色で裏面焼成部濃灰色を呈す。表面で強くマグネットに反応する。	
11	鍛練鍛冶滓 分析試料13	遺構付近	径11.2×9.9 厚3.3 ～3.8 重量350	不整楕円形状。表面で緩く窪み、裏面は曲面を示す。両面共に局部海綿状をなし、錆、木炭の噛み込み認む。色調は茶褐色。マグネットに強く反応する。	
12	鍛冶椀形滓 分析試料14	覆土	径6.7×10.4 厚5.3 重量300	半円形状。片側端部に羽口付着。表面は窪み、裏面曲面示す。曲面焼成部は一部海綿状をなす。全体的に地肌は密。色調は青茶褐色。マグネットに強く反応する。	
13	鍛冶椀形滓	P_1	径9.5×8.2 厚3.4 重量200	表面は凸状、裏面炉壁材付着し、曲面を示す。地肌は粗鬆、海綿状で小気泡散在、錆付着する。色調は茶褐色。マグネットの反応は弱い。	
14	鍛冶椀形滓	P_1	径5.8×7.9 厚2.3 重量110	不整楕円形。青面ほぼ平坦。裏面は曲面を示す。地肌は局部的に海綿状をなし、小気泡散在する。色調は茶褐色。マグネットの反応は比較的強い。	
15	鍛冶椀形滓	遺構付近	径5.5×5.6 厚3.0 ～3.5 重量100	不整楕円形。表面中央部で窪み、裏面曲面を示す。地肌は粗鬆。色調は茶褐色。マグネットに強く反応する。	
16	鍛冶椀形滓	遺構付近	径3.6×4.1 厚2.7 重量50	表面凸状をなし、裏面曲面を示す。表面の地肌は海綿状をなし、気泡散在、錆付着する。色調は茶褐色。	
17	鍛冶椀形滓か	焼土	径4.4×4.0 幅2.2 重量20	表裏面ともに滴下状、一部錆付着する。色調は茶褐色。マグネットの反応は弱い。	
18	鍛冶椀形滓	P_4	径3.4×7.3 厚1.8 重量40	表面はU字状に窪み、裏面曲面を示す。地肌は粗鬆。色調は茶褐色。マグネットの反応は弱い。	
19	鉄滓	P_4	径2.7×2.4 厚0.8 重量10	小破片。地肌は密だが、わずかに気泡認む。色調は黒灰色。マグネットの反応は弱い。	
20	鉄塊	床面	径4.0×2.8 厚2.5 重量40	地肌は錆付着するが、比重重く密。色調は茶褐色。強くマグネットに反応する。	
21	鉄滓	床面	径2.6×1.3	小型。筒状を呈し、部分的に錆付着。わずかに光沢あり。色調は黒灰色。マグネットの反応は認めがたい。	
22	鉄滓	床面	径3.9×2.6	小型。表・裏面ともに若干の気泡散在する。色調は黒灰色。マグネットに反応。	
23	鉄滓	床面	径2.9×1.4	小破片で、断面板状。錆付着著しい。	
24	鍛状 半製品か	P_4	長3.7 幅2.8 厚0.4	扁平な板状を呈し、若干錆付着。半製品の可能性もあり。器面剝落する。	
25	鉄半製品か	床面	長5.2 幅1.9～2.6 厚0.8 重量50	長方形を呈し、端部折れ曲がる。器面剝落著しい。	
26	鉄半製品か	P_4	長6.4 幅1.4 厚0.5～0.6 重量30	ほぼ長方形を呈し、端部に移行するに従い先細りする。錆付着する。器面剝落著しい。	

表一293　掘立柱建物跡出土遺物観察表（図一780・781　図版一121）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (K44)	坏 土師器	P_{11}	①(14.0) ③ 3.7	①輝石、石英、長石、軽石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④⅓	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部で内傾する。	口縁部横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	器面磨耗する。
2 (K95)	坏 土師器	P_7	①(13.6)	①輝石、石英、軽石、小石含、密。②良好 ③橙色5YR⅞ ④¼	体部緩やかに内彎して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部撫で。体～底部篦削り。	
3 (K44)	坏 土師器	P_{11}	①(13.3)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色7.5YR⅝ ④¼	安定した丸底か。体部は緩やかに内彎し、口縁部短く直立する。	口縁部横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
4 (K46)	坏 土師器	P_7	①(12.9)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④¼	体部緩やかに内彎し、口縁部に至る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。体～底部篦削り。	
5 (K35)	坏 土師器	P_7	①(12.7)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④⅕	体部緩やかに内彎、口縁部で直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
6 (K95)	坏 土師器	P_7	①(12.8)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR⅝ ④¼	体部緩やかに内彎、口縁部で直立する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え、撫で。体～底部篦削り。	
7 (K95)	坏 土師器	P_7	①(11.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④¼	体部内彎して立ち上り、口縁部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
8 (K46)	坏 土師器	P_7	①(11.2)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR⅞ ④¼	体部緩やかに内彎し、口唇部でわずかに内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
9 (K48)	坏 土師器	P_8	①(11.9)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色5YR⅝ ④¼	体部緩やかに内彎し、口縁部わずかに外傾して立ち上る。	内面～口縁部外面横位の撫で。体～底部篦削り。	
10 (K7)	蓋 須恵器		①摘径4.8	①軽石、黒色鉱物粒含、密。②良好③灰白色N⅞ ④摘部		轆轤整形。肩部篦削り。摘貼付。	
11 (K35)	蓋 須恵器	P_4	①(14.4)	①軽石、小石含、密。②良好 ③灰色10Y⅝ ④¼	体部緩やかに外傾し、口縁部短く直立する。	轆轤整形。肩部回転篦削り。	
12 (K44)	蓋 須恵器		①(14.2)	①軽石、小石、長石含、密。②良好③灰白色N⅞ ④¼	体部緩やかに外傾し、口縁部短く直立する。	轆轤整形。肩部回転篦削り。	
13 (K44)	坏 須恵器		①(13.4) ② 8.5 ③ 4.0	①軽石含、精良。②良好 ③灰白色7.5Y⅞ ④¼	平底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	外面自然釉

14 (K65)	坏 須恵器		①(14.4) ②　9.5 ③　4.2	①精良　②良好　③外灰色N⁴⁄、内灰白色10Y⁷⁄　④⅕	体部下半わずかに張り、外傾して開く。	轆轤整形。底部回転糸切り。	いぶし
15 (K９)	坏 須恵器	P₆	②(18.4)	①軽石含、密。②良好　③内灰白色7.5Y⁵⁄₂、外灰色N⁵⁄　④⅙		轆轤整形。底部回転糸切り。	
16 (K22)	坏 須恵器	P₂	①(13.2) ②(8.5) ③　3.7	①精良　②良好　③灰色５Y⁵⁄₁　④¼	上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転糸切り。	外面自然釉
17 (K44)	坏 須恵器		①　12.5　②　7.4 ③　3.3	①軽石、黒色鉱物粒含、密。②良好　③灰白色7.5Y⁷⁄　④½	上げ底。底部～体部変換点丸く、体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
18 (K85)	坏 須恵器		①(12.0) ②(7.3) ③　3.6	①軽石含、密。②良好　③灰色N⁶⁄　④⅙	上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。回転篦切り。	
19 (K107)	坏 須恵器	P₁₀	①　12.6　②　7.4 ③　3.5	①精良　②良好　③灰白色10Y⁵⁄₁　④ほぼ完形。	上げ底。体部は下半で張りを有し、緩やかに彎曲。口縁部でわずかに外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。外周部手持ち篦削り。	
20 (K102)	坏 須恵器	P	①(12.9) ②(7.0) ③　4.7	①黒色鉱物粒含、密。②良好　③灰白色N⁸⁄　④¼弱	上げ底。体部緩やかに内彎して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部篦削り。	器形歪む。
21 (K31)	塊 須恵器		②　7.7	①精良　②良好　③オリーブ灰色2.5GY⁵⁄₁　④底部½	外傾する短い高台。つくり丁寧。	轆轤整形。付高台、撫で。底部切り離し不明。	
22 (K102)	甕 土師器		①(21.0)	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色５YR⁷⁄₆　④口縁⅕	肩部張り、口縁部外反する。口唇部丸い。	口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	口縁部接合痕。
23 (K103)	甕 土師器		①(20.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色５YR⁶⁄₆　④上半½	胴部やや丸みを有し、口縁部外反する。口唇部丸い。	内面篦撫で。口縁部指押え、横位の撫で。胴部横・斜位の篦削り。	
24 (K55)	甕 土師器	P	①(15.0)	①チャート、軽石多量含、粗②やや粗③にぶい橙2.5YR⁶⁄₄④小破片	器肉厚い。胴部やや内彎し、口縁部直立気味となる。	口縁部横位の撫で。胴部横・縦位の篦削り。	器面剝落する。紐接合痕。
25 (K63)	甕 須恵器		頸部片	①チャート、小石、軽石含、密。②良好　③灰色N④小破片⁵⁄		内外面撫で。外面頸部上半３列波状文。	肩部で接合痕。
26 (K101)	長頸壺 須恵器			①精良　②良好　③灰白色N⁸⁄　④肩部片	肩部大きく張り、端部で屈曲する。	肩部２列の沈線配し、間に列点櫛描文。	
27 (K107)	羽釜			①チャート、軽石、長石含、密。②良好③黒色５Y⁵⁄₁　④口縁部	鍔上向きに張り出し、口縁上端で直立か。	内外面横位の撫で。鍔貼付。	
28 (K113)	紡錘車 石製品		上径2.6　下径3.8 厚　1.4　孔径0.6	断面台形状。上・下径面ともに平坦面をなし、概して横位の擦痕を認む。側面は面取りし、上下方向に調整痕顕著。			上端部刻書「山」?

表－294　H土坑出土遺物観察表（図－788・789　図版－121）

番号	器種	出土位置	①口径②底径③器高	①胎土②焼成③色調④遺存度	器形の特徴	成形・調整技法	備考
1 (大H２)	坏 土師器		①(11.6)	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③橙色５YR⁷⁄₈　④¼	体部内彎し、口縁部変換点で稜をなす。口縁部わずかに外傾して立ち上る。	口縁部横位の撫で。体部篦削り。	
2 (大H８)	坏 土師器		①(12.5)	①軽石、石英含、密。②良好　③にぶい橙色7.5YR⁶⁄₄　④¼	体部緩やかに内彎し、口唇部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	内外面一部吸炭
3 (大H８)	坏 土師器		①(12.7) ③　3.0	①軽石、輝石、石英含、密。②良好③橙色５YR⁷⁄₆　④⅙	丸底。体部緩やかに内彎する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
4 (大H８)	坏 土師器		①(12.8)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色５YR⁵⁄₆　④⅕	丸底。体部内彎して立ち上り、口唇部内傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
5 (H１)	坏 土師器		①　12.3 ③　3.1	①軽石、石英、輝石、長石含、密。②良好　③橙色５YR⁵⁄₈　④½	丸底。体部緩やかに内彎して立ち上り、口縁部に至る。	口縁部横位の撫で。体部撫でか。体～底部篦削り。	
6 (大H６)	坏 土師器		①(10.9)	①輝石、石英、軽石含、密。②良好③橙色2.5YR⁵⁄₆　④⅕	体部緩やかに内彎し、口縁部で外傾する。	内面～口縁部外面横位の撫で。体部指押え。体～底部篦削り。	
7 (大H２)	蓋 須恵器		①　16.5 ③　4.7	①長石、軽石、石英、小石含、密②良好③黄灰色2.5Y⁵⁄₁④体部½弱欠	天井部わずかに窪み、体部緩やかに彎曲する。口縁部短く直立。摘小型。	轆轤整形。天井部外周回転篦削り。天井部回転糸切り、撫で。摘貼付。	
8 (大H２)	坏 須恵器		①　12.9　②　7.9 ③　3.8	①精良。②良好　③青灰色５B⁵⁄₁　④ほぼ完形。	平底。中央部わずかに窪む。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部回転篦切り。	内面墨汁状付着物
9 (大H５)	坏 須恵器		①　13.2　②　6.6 ③　3.5	①長石、片岩、軽石含、やや粗。②良好　③灰白色５Y⁷⁄₁　④½強	平底。体部「ハ」の字状に外傾して開く。	轆轤整形。底部回転糸切り。手持ち篦削り。	
10 (大H８)	坏 須恵器		②　7.9	①精良。②良好　③黄灰色2.5Y⁵⁄₁　④底部⅓	体部下端で屈曲気味をなし、直線的に立ち上る	轆轤整形。底部～外周部回転篦削り。	
11 (大H５)	坏 須恵器		②(8.7)	①石英、輝石、軽石含、密。②良好③灰白色５Y⁷⁄₂　④底部片	体部下端で屈曲気味	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部回転篦削り。	
12 (H１)	坏 須恵器		②　7.9	①精良②良好③内灰白色2.5YR⁷⁄₁、外灰白色2.5Y⁸⁄₁④底部½	わずかに上げ底。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部回転篦削り。	
13 (H１)	坏 須恵器		①　13.6　②　8.2 ③　4.1	①長石、軽石、小石含、密。②良好③灰色５Y⁵⁄₁　④体部½欠	平底。体部わずかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部回転糸切り。外周部回転篦削り。	底部外面篦記号「×」
14 (大H６)	坏 須恵器		①(13.0)　②　7.8 ③　3.6	①精良。②良好　③灰白色５Y⁸⁄₁　④体部¼、底部½	わずかに上げ底。体部外傾して開く。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
15 (大H８)	坏 須恵器		①(12.4)　②　6.9 ③　4.4	①軽石含、密。②良好　③灰色N⁶⁄　④体部⅛、底部½	わずかに上げ底。体部直線的に外傾する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
16 (大H６)	坏 須恵器		①　10.2　②　6.0 ③　3.9	①軽石、石英含、密。②良好　③灰白色N⁷⁄　④体部¼、底部⅓	小型。わずかに上げ底。体部わずかに彎曲して立ち上る。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
17 (大H８)	坏 須恵器		①　12.3　②　6.7 ③　3.9	①軽石、石英含、密。②良好　③灰色7.5Y⁵⁄₁　④体部½欠	わずかに上げ底。体部緩く彎曲して立ち上り、口縁部で外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	自然釉付着
18 (大H５)	坏 須恵器		①(12.7)　②　5.7 ③　3.8	①チャート、軽石含、密②良好③浅黄色7.5Y⁷⁄₃④体部⅛、底部½	平底。体部彎曲して立ち上り、口縁部外反する。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	体部外面煤付着。
19 (H１)	坏 須恵器		②　6.4	①精良。②良好　③灰白色7.5Y⁷⁄₁　④底部	わずかに上げ底。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	

20 (大H1)	坏 須恵器		② 6.4	①酸化鉄、石英、チャート含、密。②良好 ③浅黄色2.5Y7/4 ④底部	平底。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	底部切り直し
21 (大H5)	坏 須恵器		② 5.3	①軽石含、密。②良好 ③灰色5Y5/1 ④底部	わずかに上げ底。	轆轤整形。底部右回転糸切り。	
22 (H1)	坏 須恵器		② 6.4	①軽石、長石含、密。②良好 ③灰色10Y5/1 ④底部1/2	わずかに上げ底。	轆轤整形。底部回転糸切り。	
23 (H1)	埦 須恵器		②(7.2)	①軽石、石英、輝石含、密。②良好③灰白色7.5Y8/2 ④底部1/2	直立する短い高台。	轆轤整形。底部回転糸切り。付高台	軟質
24 (大H5)	埦 須恵器		② 7.1	①軽石、石英含、密。②良好 ③灰白色7.5Y7/1 底部	「ハ」の字状に外傾する短い高台。	轆轤整形。底部回転篦削り。付高台	
25 (H11)	甕 土師器		①(18.3)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③にぶい橙色5YR7/4④口縁部1/3	口縁部一旦内傾し、上端で外反する。	口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	口縁部接合痕。
26 (大H6)	甕 土師器		①(18.8)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好③橙色2.5YR6/6 ④口縁部1/3	「コ」の字状口縁。	口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
27 (大H6)	甕 土師器		①(19.3)	①輝石、軽石、石英含密②良好③にぶい褐色7.5YR6/3④口縁部小破片	「コ」の字状口縁	口縁部横位の撫で。肩部横位の篦削り。	
28 (大H8)	甕 土師器		①(20.4)	①輝石、軽石、石英含、密。②良好 ③橙色5YR6/6 ④口縁1/4	「コ」の字状口縁	口縁部指押え、横位の撫で。肩部横位の篦削り。	煤付着
29 (大H2)	甕 土師器			①輝石、石英、酸化鉄、軽石含、荒い。②良好 ③橙色2.5YR7/6 ④口縁部小片	口縁部緩く外反、器肉肥厚する。	口縁部横位の撫で。肩部篦削り。	
30 (大H6)	甕 須恵器			①精良。②良好 ③灰色7.5Y5/1 ④胴部片		外面叩き目、内面当て目。	
31 (大H6)	甕 須恵器			①精良。②良好 ③灰色N5/ ④胴部片	内面凹凸あり	外面叩き目、内面当て目。	
32 (大H5)	甕 須恵器			①精良 ②良好 ③灰色10Y5/1 ④胴部片		外面叩き目、内面当て目。	
33 (大H6)	甕 須恵器			①軽石、長石含、密。②良好 ③灰白色2.5Y7/ ④胴部片		外面叩き目、内面同心円状当て目。	
34 (大H5)	鏃 鉄製品		長8.1 身部長2.4 厚0.3 篦被0.5×0.6茎0.3×0.3	広根式、腸抉のかえり、両端部及び茎端部欠損。茎端部で先細りする。篦被及び茎断面方形。鏃身部長楕円形。			

表一295　芳賀団地遺跡群出土墨書土器観察表

挿図番号	遺構名	器種	釈文	出土位置	備考	墨書箇所
1	H446	椀 須恵器	「畤」	貯蔵穴内	第1分冊	見込部
4	H267	椀 須恵器	「十」	覆土	第1分冊	体部内面
2	H280	椀 土師器	「[王]」	カマド内	第1分冊	体部外面
8	H383	椀 土師質須恵器	「真」	東壁ぎわカマドと北隅の中間	第1分冊	体部内面 体部外面
2	H306	椀 土師器	「大」	北西隅西壁ぎわ	第1分冊	体部外面
5	H272	坏 須恵器	「　」	覆土	第1分冊	底部内面
6	H272	坏 須恵器	「　」	覆土	第1分冊	体部外面
7	H272	坏 須恵器	「　」	覆土	第1分冊	体部内面
4	H293	坏 土師器	「神木」	覆土	第1分冊	底部内外面
13	H299	坏 土師器	「茸」 「七月」	カマドの北東壁ぎわ (赤外線写真による)	第1分冊	底部内面
1	H445	坏 土師器	「宅」?	覆土	第1分冊	底部外面
2	H315	坏 土師器	「此」	覆土	第1分冊	底部内面 底部外面
	H4	坏 土師器	「　」	覆土		底部内外面
3	H6	坏 土師器	「主」	覆土		体部外面
3	H9	坏 須恵器	「二」?	覆土		体部外面
3	H11	坏 土師器	「千」	カマド内		体部外面
4	H13	坏 須恵器	「道」	覆土		底部外面
	H16	坏 須恵器	「　」	覆土		底部外面
4	H41	坏 須恵器	「常」	東壁ぎわカマドの北覆土		体部外面
5	H41	椀 須恵器	「常」	覆土		体部外面
1	H44	坏 土師器	「　」	覆土		体部外面
6	H46	椀 須恵器	「井」	カマド		底部外面
	H61	坏 土師器	「　」	覆土		底部内面
2	H81	坏 土師器	「丙」?	ほぼ床面		底部内面
1	H67	皿 須恵器	「井」	ほぼ床面		体部外面
1	H69	椀 須恵器	「門」?	貯蔵穴内		体部外面
	H74	坏あるいは椀 須恵器	「　」	覆土		体部外面
	H75	坏 須恵器	「亻」	覆土		体部外面

挿図番号	遺構名	器種	釈文	出土位置	備考	墨書箇所
	H76	坏あるいは椀 須恵器	「　」	カマド内		体部内面
	H81	坏あるいは椀 須恵器	「神」	覆土		体部外面
1	H85	坏 須恵器	「土」	床面		体部外面
2	H88	坏 須恵器	「[井]」?	床面		体部外面
3	H91	皿 土師器	「六」	貯蔵穴内		体部外面
1	H92	坏 土師器	「松」	覆土		体部外面
1	H93	椀 須恵器	「元」	覆土		体部外面
1	H132	坏 土師器	「酒」	覆土	階書体で細筆使用か	体部外面
2	H154	坏 須恵器	「久雨」?	ピット内		体部外面
2	H187	坏 土師器	「介」	覆土		体部外面
	H182	坏 土師器	「友」	覆土		底部外面
	H195	坏 土師器	「ナ」?	覆土		体部外面
3	H200	坏 土師器	「弓」	覆土		体部内面
2	H202	坏 土師器	「真」	床面		底部外面
	H205	坏 土師器	「　」	覆土		底部外面
6	H210	坏 須恵器	「丹」	床面		体部外面
	H214	坏 土師器	「　」	覆土		体部内面
7	H216	坏 土師器	「上」	覆土		口縁部外面
	H244	坏 土師器	「　」	覆土		底部内面
2	H253	坏 土師器	「ニ」外面 「ニ」内面	ほぼ床面		体部内面・外面
	H195	坏 土師器	「十」	覆土		体部外面
	H244	坏 土師器	「　」			底部内面
	H335	坏あるいは椀 須恵器	「　」	覆土	二文字以上か	体部外面
	K65	坏 土師器	「十」			底部内面
	大H9	坏 土師器	「六」?			底部内面
	K47	坏 土師器	「栃」			体部外面
	K64	坏 土師器	「井」			底部外面

◎　遺構のうち、H267～320、332、354～479、495に該当するものは第一巻に収録。
芳賀北部図地遺跡の墨書土器については第5巻に収録の予定（挿図番号空欄は挿図なし）。

Ⅷ 結　　語

芳賀団地遺跡群発掘調査報告書第２巻を刊行することができた。第１巻以後、遺構の図面整理、写真の撮影、整理遺物の復元、遺物、鉄製品の分析と多くの人々の中力、研究者の協力を得たことを感謝申し上げます。

本遺構は、芳賀東部工業団地造成に伴う事前発掘調査を実施し発見されたものである。すでに、工業団地造成予定地の東側部分については、第１巻で刊行済である。本報告書は、西側の部分の20haに及ぶ地の調査成果である。

調査は、昭和51年～昭和54年までの５ケ年にわたったものである。遺構としては、土師器使用住居跡305、掘立柱建物跡138、溝55、土師器使用竪穴遺構６、鍛治址３、土坑52が発見されている。この外に縄文時代の住居跡等があるが、縄文については第３巻として刊行する計画である。

芳賀東部団地遺跡は、前橋工業団場造成組合により造成され、近代的な工場群、近代的な住宅群、整然と区画された街路となっており、「兵者どもの夢のあと」のごとくである。

赤城山南麓の開析谷上の丘陵の全面発掘と、他に類例をみない調査であった。そのため、住居の占居状況、生産地、墓域等を知る上で大変貴重な資料を得ることができた。

特に、土器・住居跡の変遷から次のような分類ができた。

○芳賀東部団地遺跡の土器を中心として土器編年を鬼高期（６世紀）～国分期（１１世紀）の土師器を15期に分類し得た。

○土器分類をすることにより台地上の集落の占地・集落の変遷をたどることができた。

○土師器の編年、集落の変遷でみると本遺跡地は、Ⅰ期（６世紀事頃）～XV期（11世紀後半）までの550年間ほぼ間断なく生活空間、文化が続いていたことがわかった。

○土器の形式が大きく変化した時期は、Ⅴ期（８世紀初頭頃）・XII期（10世紀中頃）であり、古代社会の変革期に係わっていずことがわかった。

○鉄製品の発見事例が多かったのは、８世紀後半からである。

○墨書土器については、土師器はⅤ期より、須恵器はX期より出現している。

等の成果がわかった。

本遺跡が群馬県内の示標遺跡、示標遺物となり得るものと考える。また、本報告書が資料として使用されるものと期待するものである。　　（福田）

Ｈ１号住居跡（北より）

Ｈ５号住居跡（西より）

Ｈ２号住居跡（西より）

Ｈ６号住居跡（北より）

Ｈ３号住居跡（北より）

Ｈ７号住居跡（北より）

Ｈ４号住居跡（北より）

Ｈ８号住居跡（北より）

図版 2

H 9 号住居跡（南より）

H14号住居跡（西より）

H10号住居跡（北より）

H15号住居跡（北より）

H11号住居跡（西より）

H16号住居跡（西より）

H13号住居跡（西より）

H17号住居跡（西より）

H18号住居跡（南より）

H22号住居跡（西より）

H19号住居跡（北より）

H23号住居跡（北西より）

H20号住居跡（北西より）

H24号住居跡（北東より）

H21号住居跡（西より）

H25号住居跡　奥側（西より）

図版 4

H27号住居跡（西より）

H31号住居跡（西より）

H28号住居跡（北より）

H32号住居跡（西より）

H29号住居跡（南より）

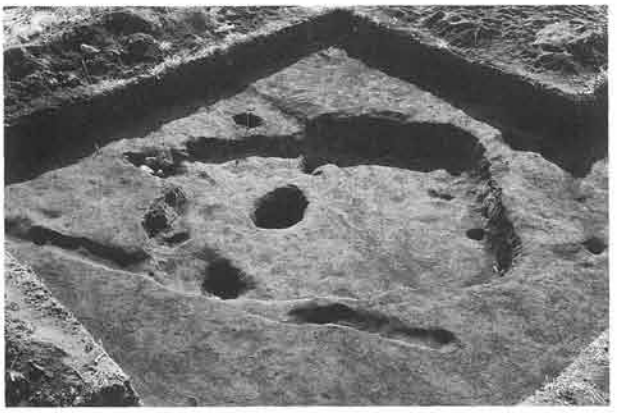
H33号住居跡（北より）

H30号住居跡（南西より）

H34号住居跡（北より）

H35号住居跡（北より）

H40号住居跡（南西より）



H36号住居跡（北より）

H41号住居跡（西より）

H37号住居跡（東より）

H42号住居跡（西より）

右39
左38　H38・39号住居跡（西より）

H43号住居跡（北より）

図版 6

H44号住居跡（西より）

H48号住居跡（北西より）

H45号住居跡（西より）

H49号住居跡（北より）

H46号住居跡（西より）

H50号住居跡（西より）

H47号住居跡（西より）

H51号住居跡（西より）

H52号住居跡（南西より）

H55号住居跡（西より）

H53号住居跡（西より）

H56号住居跡（北西より）

H57号住居跡（西より）

H54号住居跡（西より）

H59号住居跡（西より）

図版 8

H60号住居跡（西より）

H63・66・80号住居跡（南西より）

右奥61
左手前81H61・81号住居跡（北西より）

H64号住居跡　中央（西より）

H62号住居跡（西より）

H65号住居跡（北西より）

H63号住居跡（西より）

H67号住居跡（南より）

H68号住居跡（北西より）

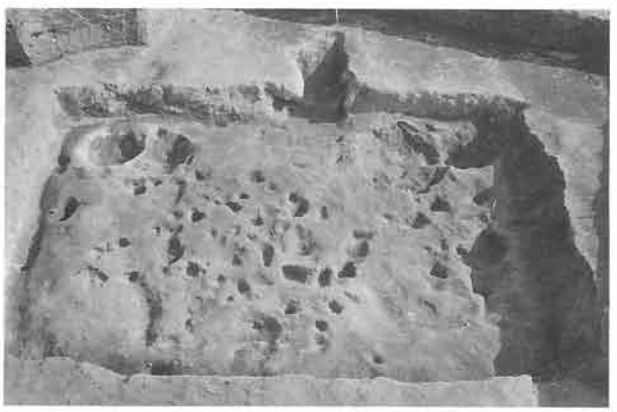
H72号住居跡　右手前（西より）

H69号住居跡（南より）

H73号住居跡（西より）

H70号住居跡（南西より）

H74・75・76・79号住居跡（北西より）



H71号住居跡（西より）

H77号住居跡（南西より）

図版10

H78号住居跡（西より）

H85号住居跡（西より）

H82号住居跡（北西より）

H86号住居跡（西より）

H83号住居跡（南西より）

H88号住居跡（西より）

H84号住居跡（南西より）

H89号住居跡（西より）

H90号住居跡（西より）

H94号住居跡（南東より）

H91号住居跡（西より）

H95号住居跡（西より）

H92号住居跡（西より）

H96号住居跡（南より）

H93号住居跡（西より）

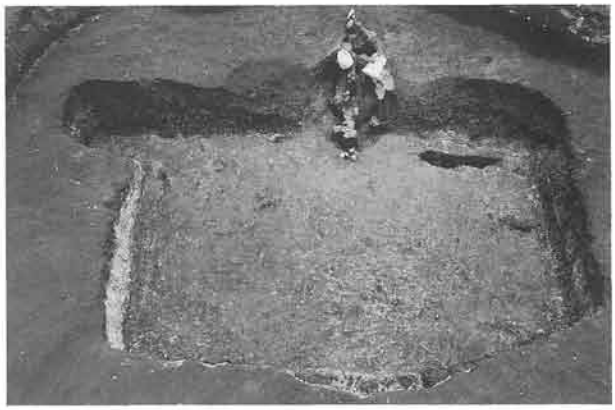
H97号住居跡（西より）

図版12

H98号住居跡（西より）

H102号住居跡（南より）

H99号住居跡（西より）

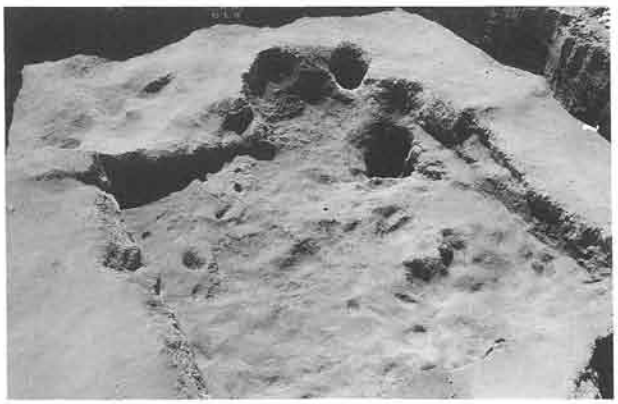


H103号住居跡（西より）

H100号住居跡（西より）

H104号住居跡（西より）

H101号住居跡（北より）



H105号住居跡（北西より）

H106号住居跡（西より）

H113号住居跡（南より）

H107号住居跡（南西より）

H114号住居跡（西より）

H108号住居跡（北西より）

H115号住居跡（西より）

H110号住居跡（西より）

H117号住居跡（西より）

図版14

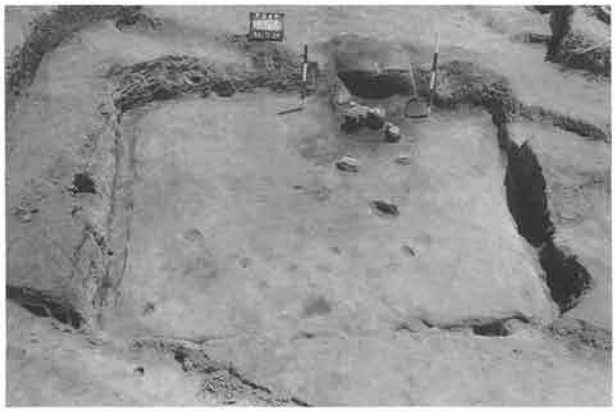
H118号住居跡（西より）

H122号住居跡（南西より）

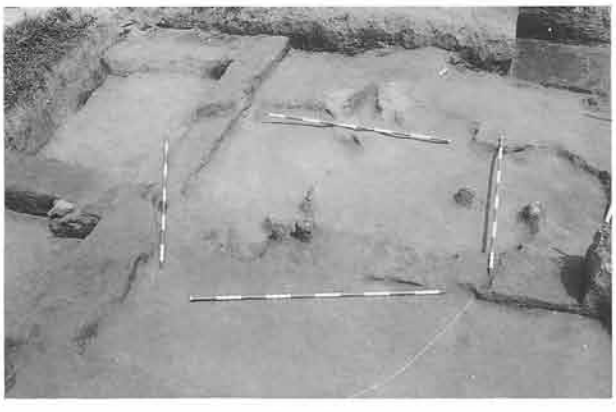
H119号住居跡（西より）

H123号住居跡（西より）

H120号住居跡（北西より）



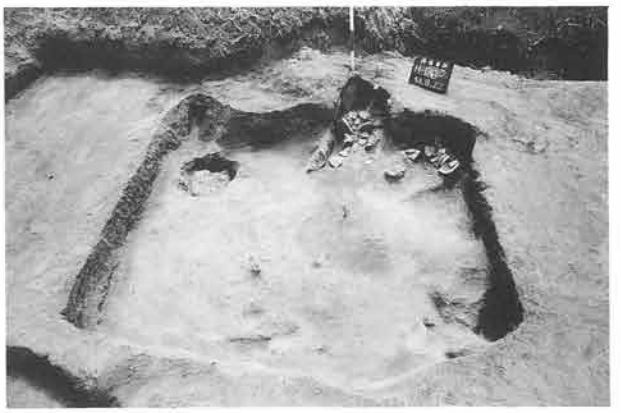
H124号住居跡（西より）



H121号住居跡（西より）

H126号住居跡（西より）

H126号住居跡　竈（北より）



H130号住居跡（西より）

H127号住居跡（西より）

H132号住居跡（西より）

H133号住居跡（西より）

H128号住居跡（南より）

H135号住居跡（西より）

図版16

H136号住居跡（西より）

H142号住居跡（西より）

H137号住居跡（西より）

H143号住居跡（西より）

H138号住居跡（南より）

H144号住居跡（西より）

手前139
右奥140
左奥141　H139・140・141号住居跡（西より）

H145号住居跡（南より）

H147号住居跡（西より）

H151号住居跡（西より）

H148号住居跡（西より）

H152号住居跡（北より）

奥　H149号住居跡（西より）

H153号住居跡（北より）

H150号住居跡（西より）

H154号住居跡（西より）

図版18

H155号住居跡（西より）

H159号住居跡（西より）

H156号住居跡（西より）

H160号住居跡（西より）

H157号住居跡（西より）

H161号住居跡（西より）

H158号住居跡（西より）

H162号住居跡（西より）

H163号住居跡（西より）

H167号住居跡　手前（西より）

H164号住居跡（西より）

H168号住居跡（北より）

H165号住居跡（北西より）

H169号住居跡（南より）

H166号住居跡（北より）

H170号住居跡（北より）

図版20

H171号住居跡（南西より）

H175号住居跡（東より）

H172号住居跡（北西より）

H176号住居跡（西より）

H173号住居跡（南より）

H177号住居跡（西より）

H174号住居跡（西より）

H178号住居跡（西より）

H179号住居跡（西より）

H183号住居跡（北より）

H180号住居跡（西より）

H184号住居跡（西より）

H181号住居跡（南西より）

H185号住居跡（北より）

H182号住居跡（西より）

H186号住居跡（北より）

図版22

H187号住居跡（西より）

H191号住居跡（北西より）

H188号住居跡（西より）

H192号住居跡（南西より）

H189号住居跡（南より）

H194号住居跡（西より）

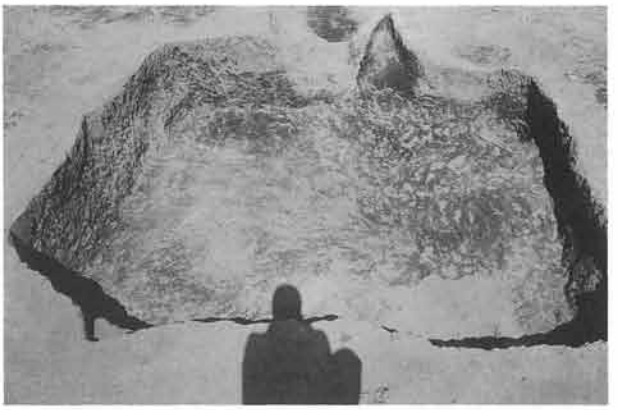
H190号住居跡（西より）

H195号住居跡（西より）

H196号住居跡（西より）

H201号住居跡（北西より）

H197号住居跡（西より）



H203号住居跡（西より）

H199号住居跡（南より）

H204号住居跡（西より）

H200号住居跡（西より）

H205号住居跡（北西より）

図版24

H206号住居跡（西より）

H210号住居跡（南より）

H207号住居跡（西より）

手前215
奥側211　H211・215号住居跡（西より）

H208号住居跡（北西より）

H212号住居跡（北より）

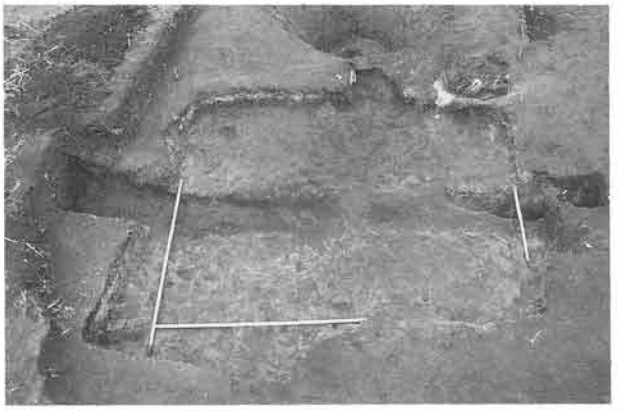
H209号住居跡（西より）

H213号住居跡（西より）

H214号住居跡（西より）

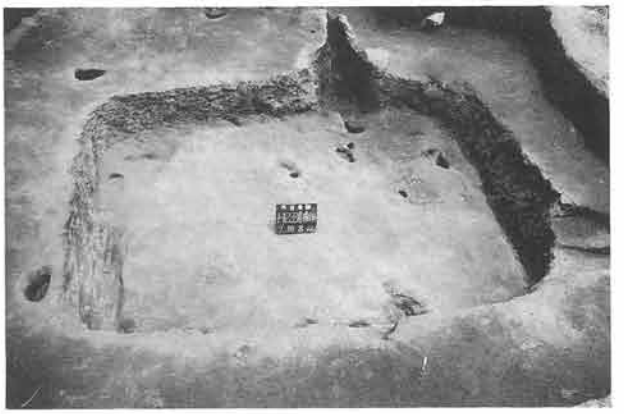
H220号住居跡（西より）

H217号住居跡（西より）



H221号住居跡（西より）

H218号住居跡（西より）



H222号住居跡（西より）

H219号住居跡（北西より）

H223号住居跡（南より）

図版26

H224号住居跡（西より）

H228号住居跡（南より）

H225号住居跡（西より）

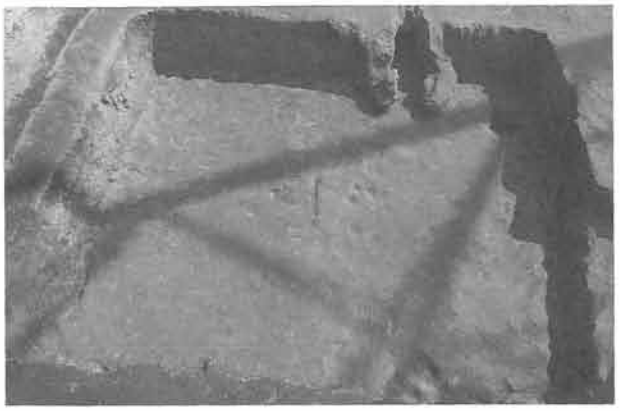
H229・230号住居跡（北西より）

H226号住居跡（西より）

H231号住居跡（北西より）

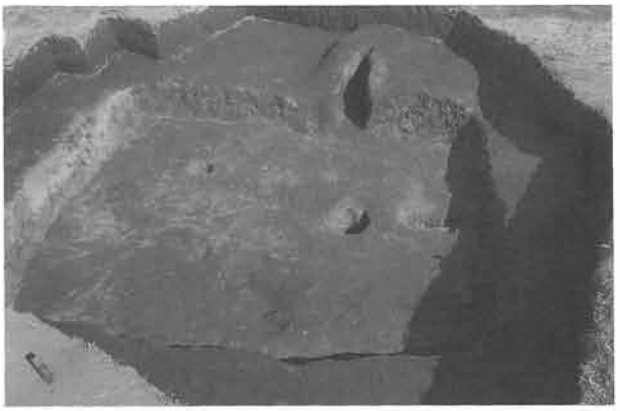
H227号住居跡（西より）

H232号住居跡（西より）



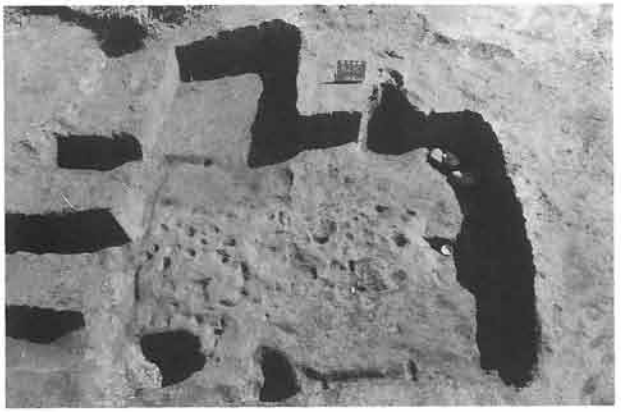
H233号住居跡（西より）

H237号住居跡（北西より）



H234号住居跡（西より）

H238号住居跡（西より）



H235号住居跡（西より）

H239号住居跡（西より）

H236号住居跡（西より）

H240号住居跡（北西より）

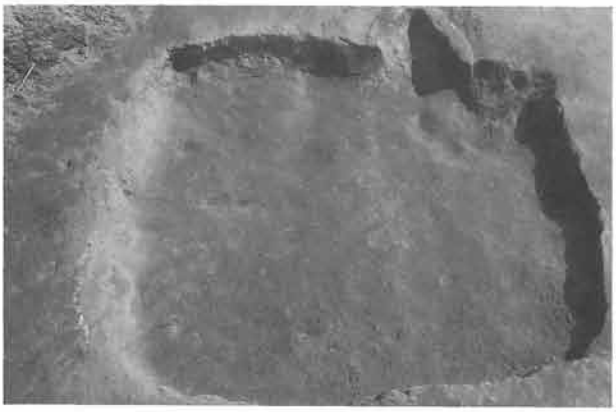
図版28

H241号住居跡（西より）

H245号住居跡（北より）

H242号住居跡（西より）

H246号住居跡（西より）



H243号住居跡（西より）

H247号住居跡（北西より）

H244号住居跡（北より）

H248号住居跡（北西より）

H249号住居跡（南西より）

H253号住居跡（西より）

H250号住居跡（北より）

H254号住居跡（西より）

H255号住居跡（北西より）

左側251
右側252　H251・252号住居跡（西より）

H256号住居跡（西より）

図版30

右側258
中央259
左奥257　H257・258・259号住居跡（北西より）

右奥　264
左手前263　H263・264号住居跡（西より）

H260号住居跡（西より）

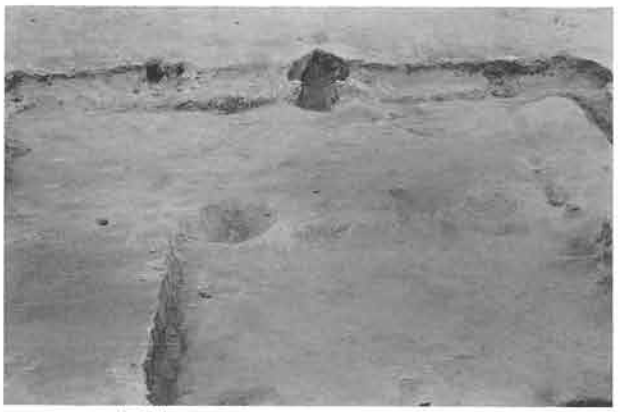
H265号住居跡（西より）

H261号住居跡（西より）

H266号住居跡（西より）

H262号住居跡（西より）

H321号住居跡（西より）



右手前324
奥側　323　H323・324号住居跡（南より）

H328号住居跡（北西より）

H325号住居跡（西より）

H329号住居跡（南より）

H326号住居跡（西より）

H330号住居跡（西より）

H327号住居跡（西より）

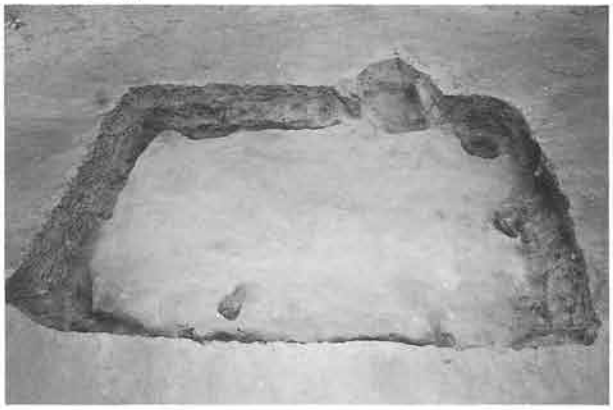
H331号住居跡（西より）

図版32

H332号住居跡（西より）

右側　337
左奥　346
左手前336
H336・337・346号住居跡（南より）

H333号住居跡（西より）

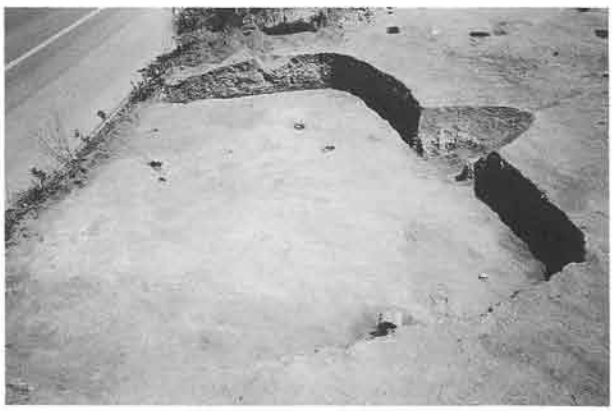


H338号住居跡（北西より）

H334号住居跡（北西より）

H339号住居跡（西より）

H335号住居跡（西より）



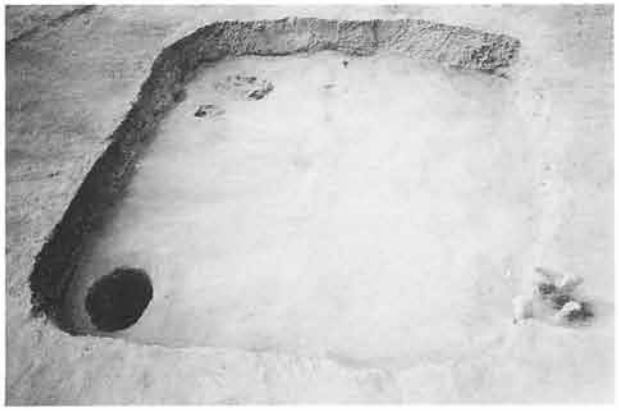
H340号住居跡（南西より）

H341号住居跡（南より）

H345号住居跡（南より）

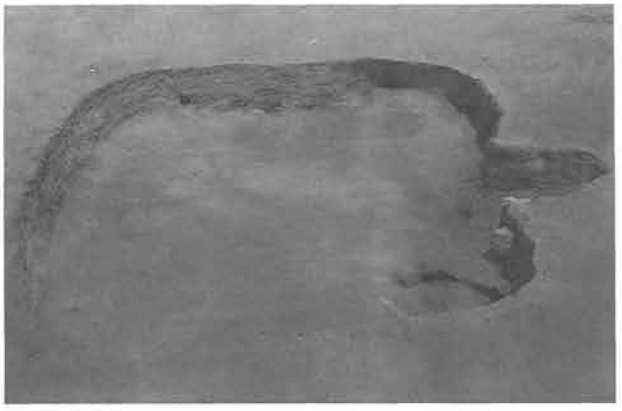
H342号住居跡（北より）

H347号住居跡（西より）



H343号住居跡（南より）

H348号住居跡（西より）



H344号住居跡（南より）

H349号住居跡（西より）

図版34

H350号住居跡（北より）

H481号住居跡（南より）

H352号住居跡（西より）

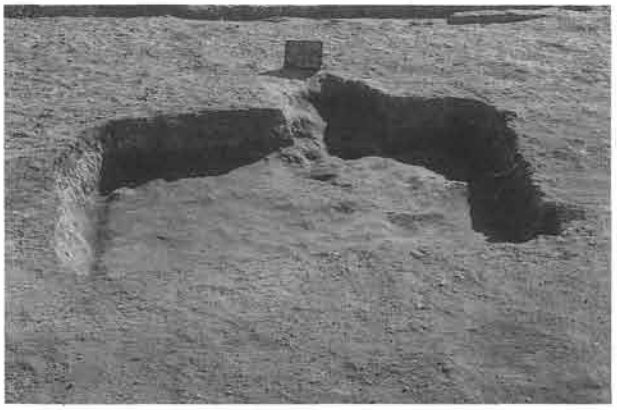
H482号住居跡（北より）

H353号住居跡（南西より）

H483号住居跡（西より）

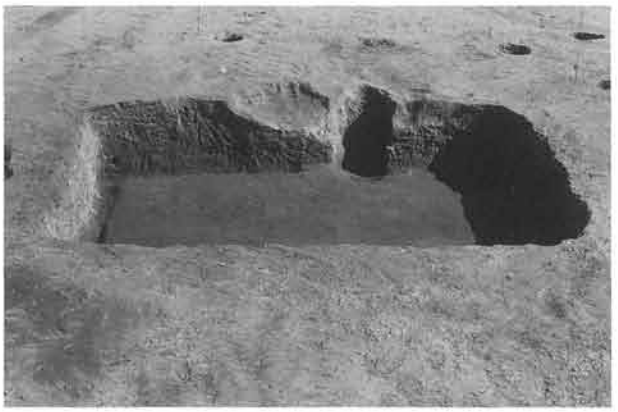
H480号住居跡（南より）

H484号住居跡（西より）



H485号住居跡（西より）

H489号住居跡（北西より）



H486号住居跡（西より）

H490号住居跡（東より）

H487号住居跡（北西より）

H491号住居跡（西より）

H488号住居跡（西より）

H492号住居跡（北西より）

図版36

H493号住居跡（北東より）

H６号竪穴遺構（西より）

H494号住居跡（北西より）

H７号竪穴遺構（南より）

H１号竪穴遺構（北東より）

H８号竪穴遺構（南より）

H２号竪穴遺構（北東より）

H９号竪穴遺構（南西より）

H58号住居跡（西より）

T１号鍛冶址（北西より）

H87号住居跡（西より）

T２号鍛冶址（東より）

H198号住居跡（西より）

T２号鍛冶址前提部（南より）

H216号住居跡（北より）

T２号鍛冶址炉部分（東より）

図版38

Ｔ２号鍛冶址鉄滓棄状能（南より）

Ｔ３号鍛冶址（南より）

Ｔ３号鍛冶址（西より）

Ｔ３号鍛冶跡（東より）

Ｋ１号掘立柱建物跡（南より）

Ｋ５Ｂ掘立柱建物跡（東より）

Ｋ２・３号掘立柱建物跡（東より）

Ｋ７号掘立柱建物跡（北より）

K８号掘立柱建物跡（西より）

K12号掘立柱建物跡（南より）

K９号掘立柱建物跡（西より）

K13号掘立柱建物跡（西より）

K10号掘立柱建物跡（北より）

上A
下B　K14A・B号掘立柱建物跡（南より）

K11号掘立柱建物跡（北より）

K15号掘立柱建物跡（北より）

図版40

K16号掘立柱建物跡（北より）

K20号掘立柱建物跡（西より）

K17号掘立柱建物跡（北より）

K21号掘立柱建物跡（西より）

K18号掘立柱建物跡（南より）

K22号掘立柱建物跡（北より）

K19号掘立柱建物跡（北より）

K23号掘立柱建物跡（北より）

K24号掘立柱建物跡（西より）

K31号掘立柱建物跡（南より）

K25号掘立柱建物跡（東より）

K32号掘立柱建物跡（東より）

K26号掘立柱建物跡（東より）

K33号掘立柱建物跡（南より）

K28号掘立柱建物跡（北より）

K34号掘立柱建物跡（南より）

図版42

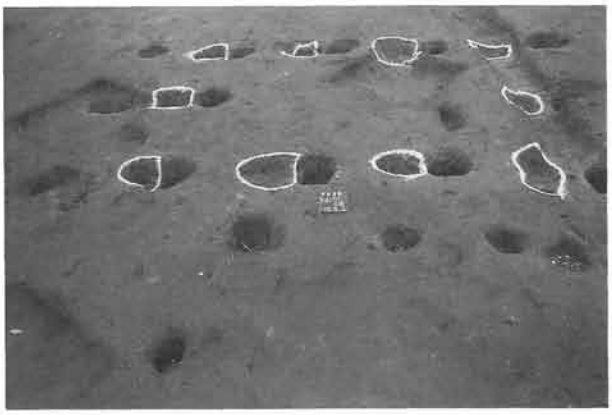
K35号掘立柱建物跡（南より）

K39号掘立柱建物跡（北より）

K36号掘立柱建物跡（南より）

K40号掘立柱建物跡（南より）

K37号掘立柱建物跡（北より）



K41号掘立柱建物跡（東より）

K38号掘立柱建物跡（東より）

K42号掘立柱建物跡（南より）

K43号掘立柱建物跡（南より）

K47号掘立柱建物跡（南より）

K44号掘立柱建物跡（東より）

K48号掘立柱建物跡（北より）

K45号掘立柱建物跡（東より）

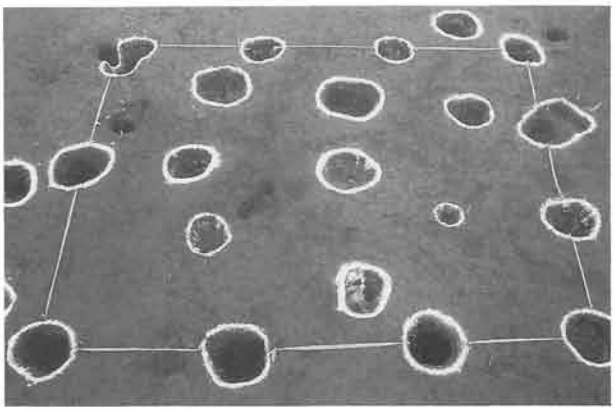
K49号掘立柱建物跡（南より）

K46号掘立柱建物跡（南より）

K50号掘立柱建物跡（北より）

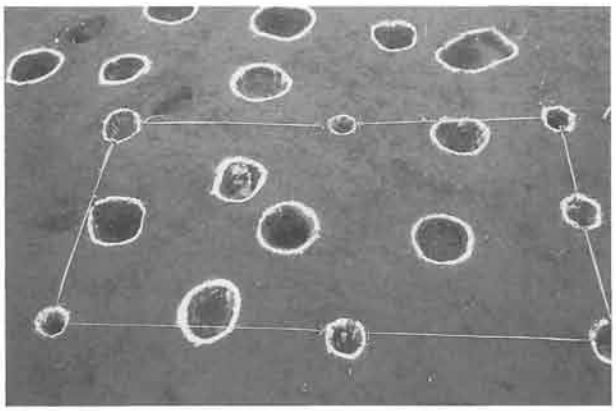
図版44

K53号掘立柱建物跡（西より）



K58号掘立柱建物跡（西より）

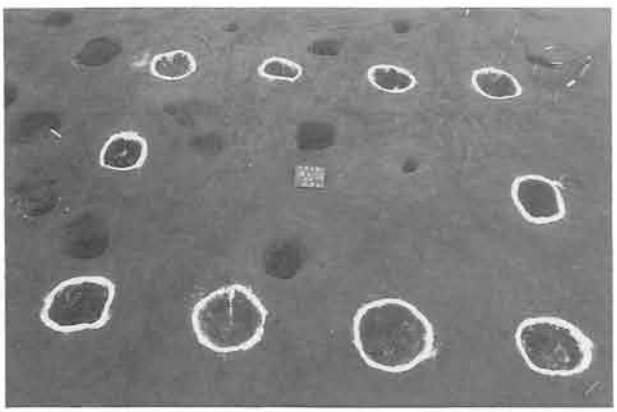
K54号掘立柱建物跡（西より）



K59号掘立柱建物跡（西より）

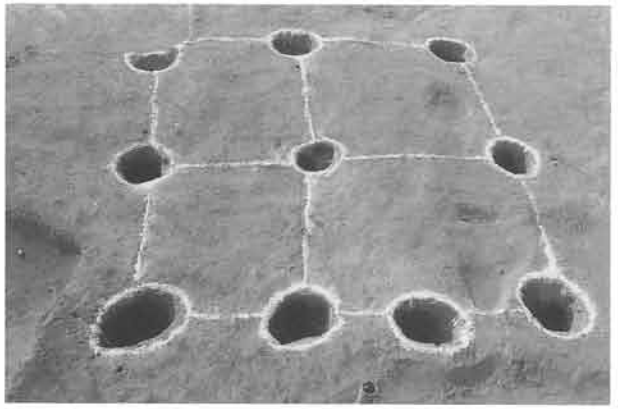
K55号掘立柱建物跡（北西より）

K61号掘立柱建物跡（西より）

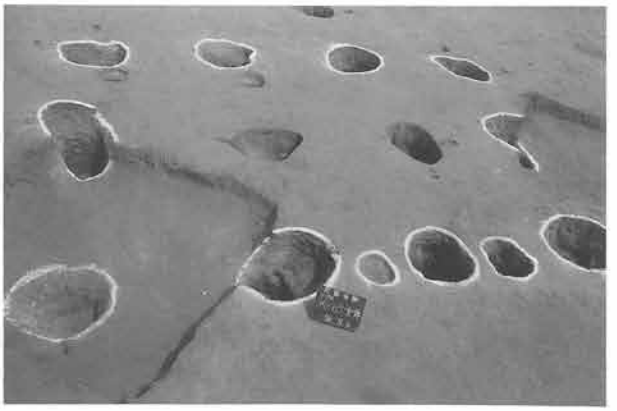


K56号掘立柱建物跡（北より）

K62号掘立柱建物跡（南より）



K63号掘立柱建物跡（東より）



K67号掘立柱建物跡（西より）

K64号掘立柱建物跡（北より）

K68号掘立柱建物跡（西より）

K65号掘立柱建物跡（西より）

K69号掘立柱建物跡（西より）

K66号掘立柱建物跡（北より）

K71A号掘立柱建物跡（北より）

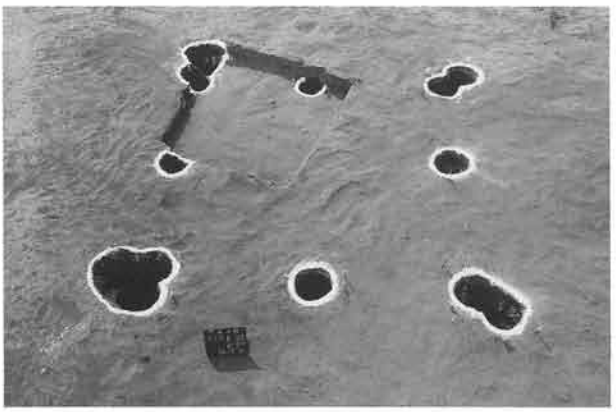
図版46

K71B号掘立柱建物跡（北より）

K77号掘立柱建物跡（南より）

K73号掘立柱建物跡（東より）

K78号掘立柱建物跡（南より）

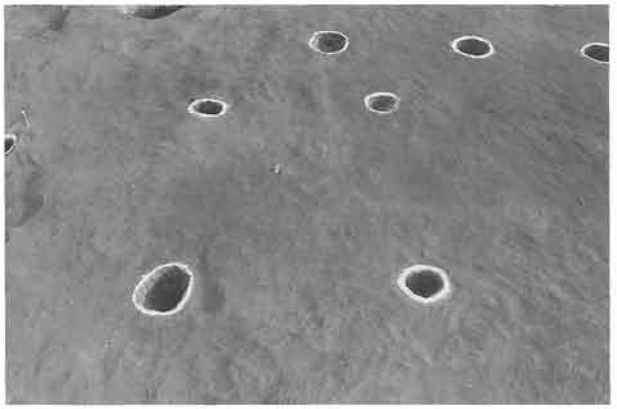


K74・75号掘立柱建物跡（東より）

K79号掘立柱建物跡（北より）

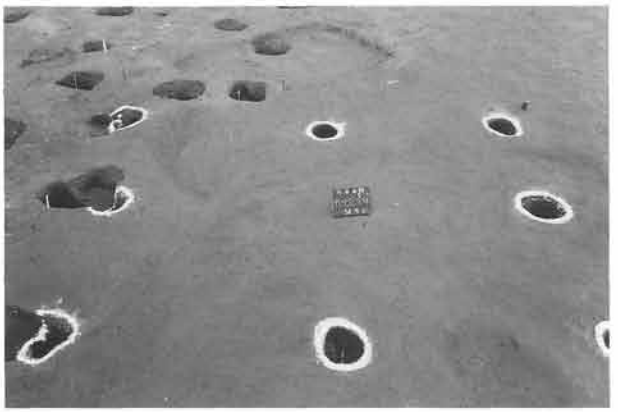
K76号掘立柱建物跡（南より）

K80号掘立柱建物跡（西より）



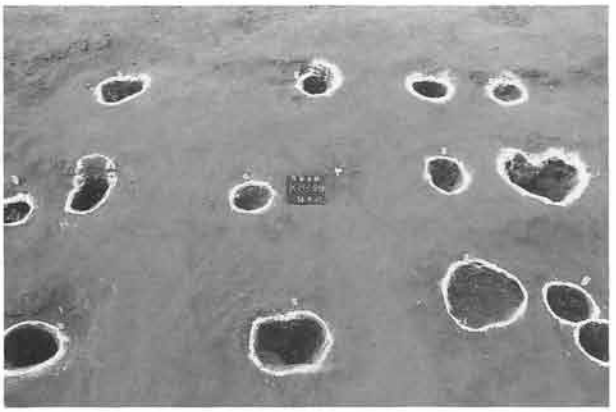
K81号掘立柱建物跡（北より）

K85号掘立柱建物跡（北より）



K82号掘立柱建物跡（東より）

K86・89号掘立柱建物跡（北より）



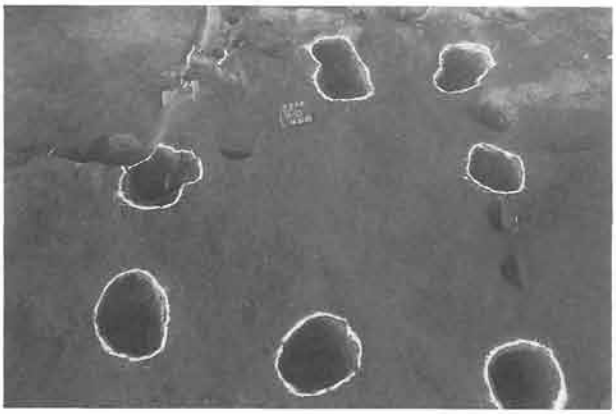
K83号掘立柱建物跡（東より）

K87号掘立柱建物跡（西より）

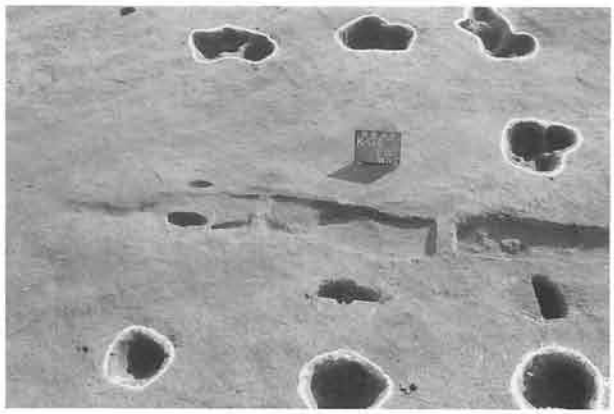
K84号掘立柱建物跡（西より）

K88号掘立柱建物跡（北より）

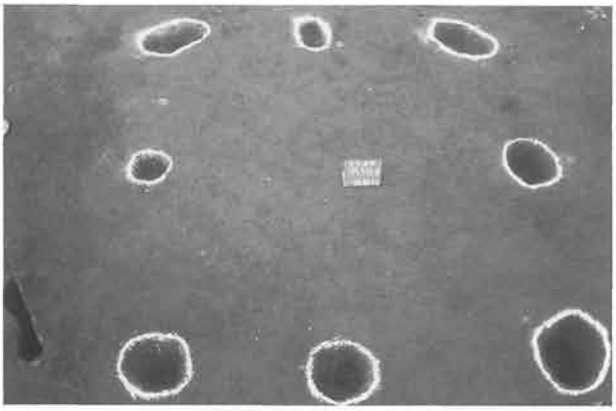
図版48



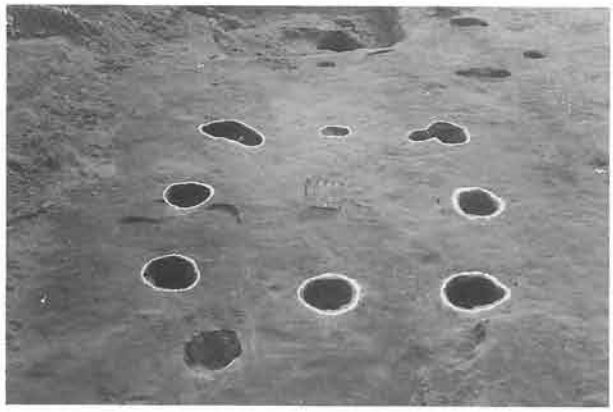
K90号掘立柱建物跡（南より）



K94号掘立柱建物跡（北より）

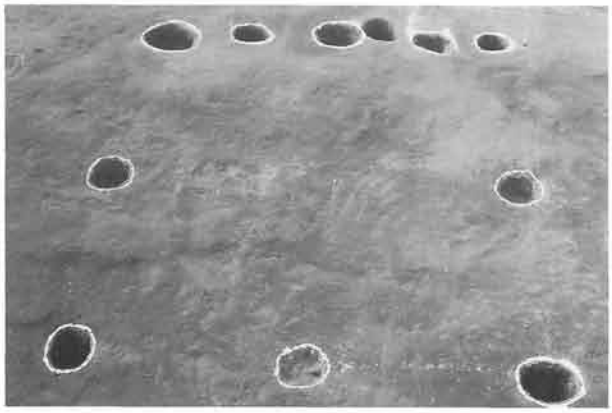


K91号掘立柱建物跡（南より）



K95号掘立柱建物跡（北より）

K92号掘立柱建物跡（南より）



K96号掘立柱建物跡（東より）

K93号掘立柱建物跡（南より）

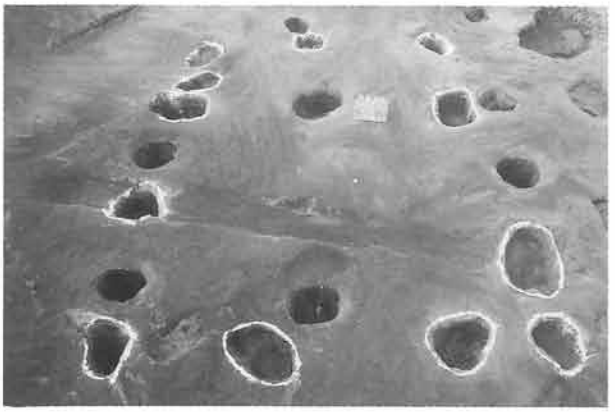
K98・104号掘立柱建物跡（西より）

K101号掘立柱建物跡（西より）

K107号掘立柱建物跡（西より）

K102号掘立柱建物跡（南より）

K108号掘立柱建物跡（東より）



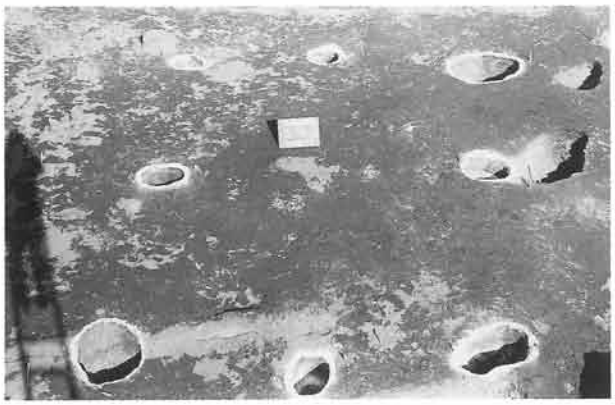
K105A号掘立柱建物跡（北より）

K109号掘立柱建物跡（東より）

K106号掘立柱建物跡（南より）

K110号掘立柱建物跡（南より）

図版50



K111号掘立柱建物跡（南より）

K115号掘立柱建物跡（南より）

K112号掘立柱建物跡（東より）

K126号掘立柱建物跡（西より）

K113号掘立柱建物跡（東より）

K127号掘立柱建物跡（西より）

K114号掘立柱建物跡（南より）

K128号掘立柱建物跡（北より）

右上129
右下179
左　180　K129・179・180号掘立柱建物跡（東より）

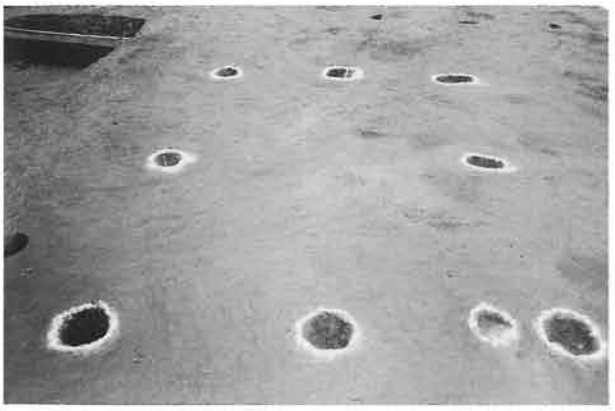
K133号掘立柱建物跡（北より）

最左列のピットを除く　130号掘立柱建物跡（西より）

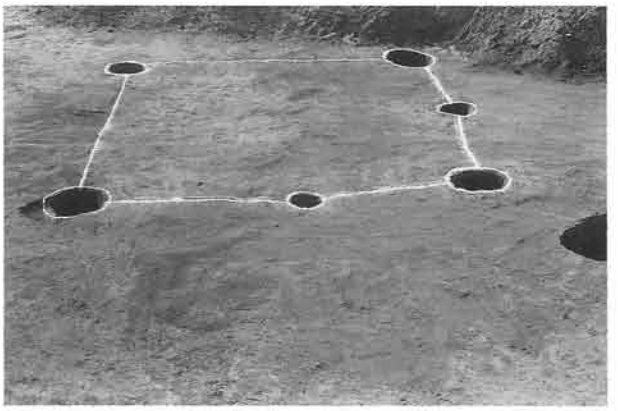
K134号掘立柱建物跡（北より）

K131号掘立柱建物跡（西より）

K157号掘立柱建物跡（西より）



K132号掘立柱建物跡（北より）



K173号掘立柱建物跡（北より）

図版52

K181号掘立柱建物跡（東より）

K188号掘立柱建物跡（西より）

K185号掘立柱建物跡（北より）

K189号掘立柱建物跡（西より）

K186号掘立柱建物跡（東より）

K190号掘立柱建物跡（西より）

K187号掘立柱建物跡（西より）

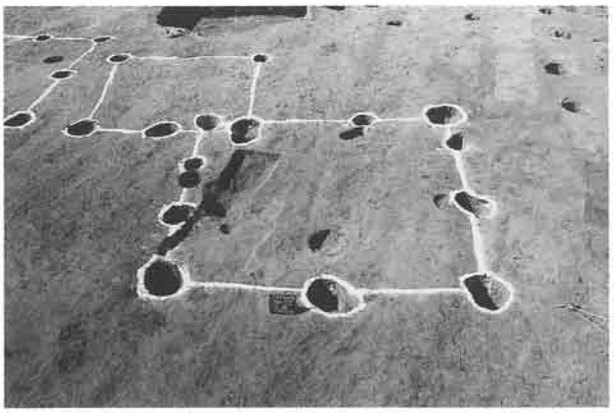
K191号掘立柱建物跡（西より）

K192号掘立柱建物跡（北より）

大H２号土坑（東より）

K193号掘立柱建物跡（西より）

大H３号土坑（北より）



K194号掘立柱建物跡（東より）

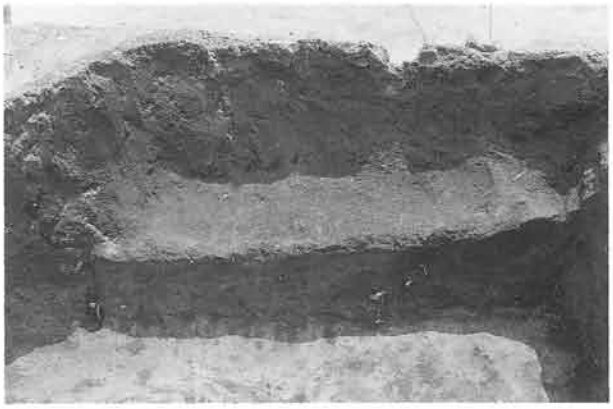
大H４号土坑（西より）

大H１号土坑（東より）

大H５号土坑（南より）

図版54

大H６号土坑（北より）



Ｈ３号土坑（西より）

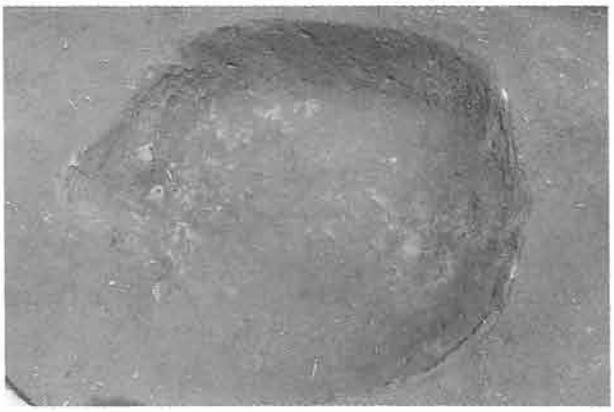
大H８号土坑（東より）

Ｈ４号土坑（北より）

大H９号土坑（西より）

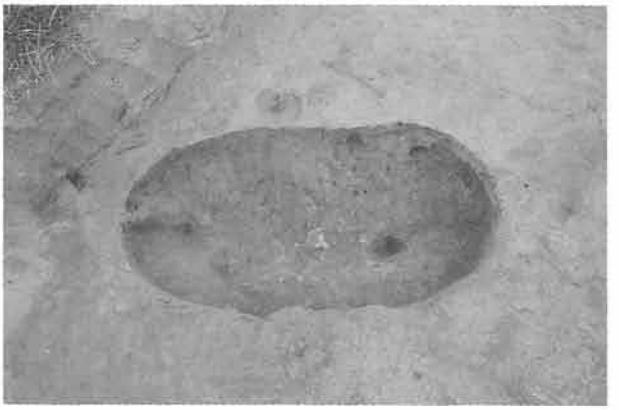
Ｈ５号土坑（南より）

Ｈ１号土坑（西より）



Ｈ６号土坑（西より）

H７号土坑（東より）



H15号土坑（西より）

H９号土坑（北より）

H16号土坑（北より）

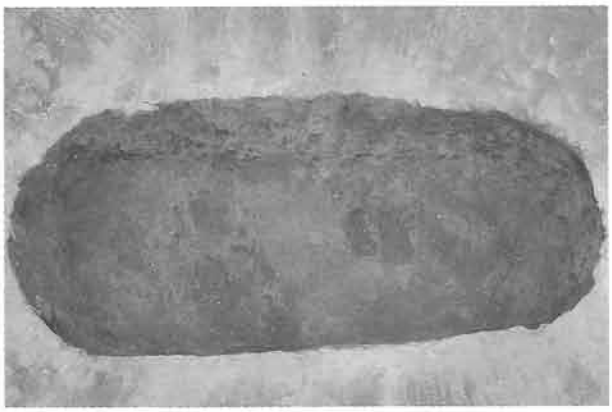
H10号土坑（東より）

H18号土坑（南より）

H11号土坑（北より）

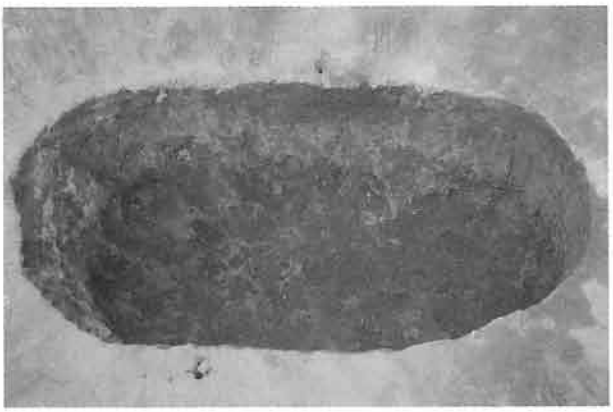
H21号土坑（西より）

図版56

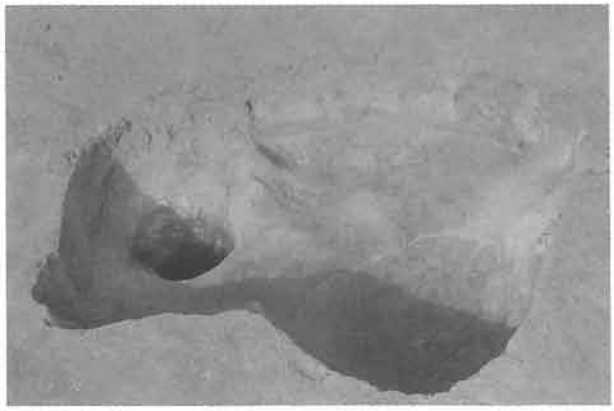


H22号土坑（西より）

H26号土坑（東より）



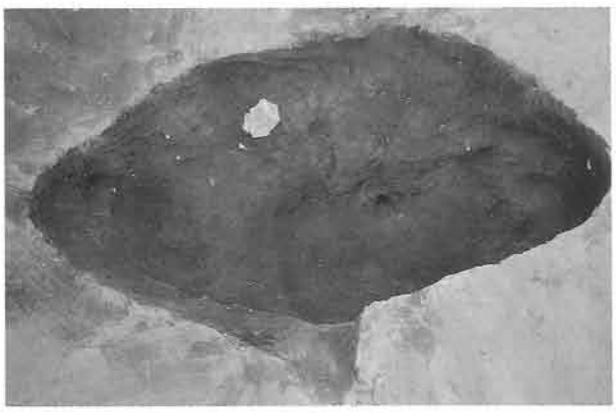
H23号土坑（南より）



H27号土坑（南より）

H24号土坑（南より）

H28号土坑（北より）



H25号土坑（西より）

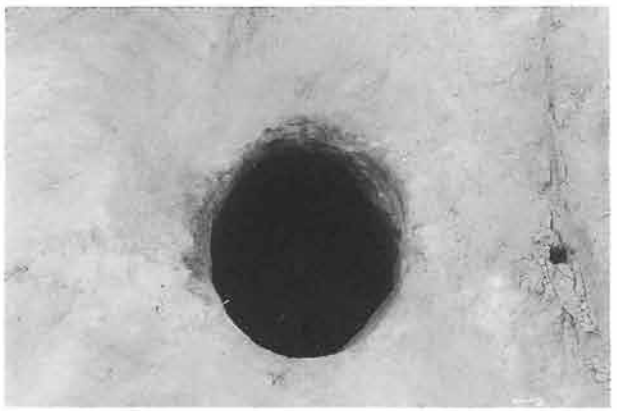
H29号土坑（北より）

H30号土坑（北より）

W３号溝跡

Ｉ１号井戸跡（西より）

W４・５号溝跡



Ｉ２号井戸跡（西より）

W５号溝跡

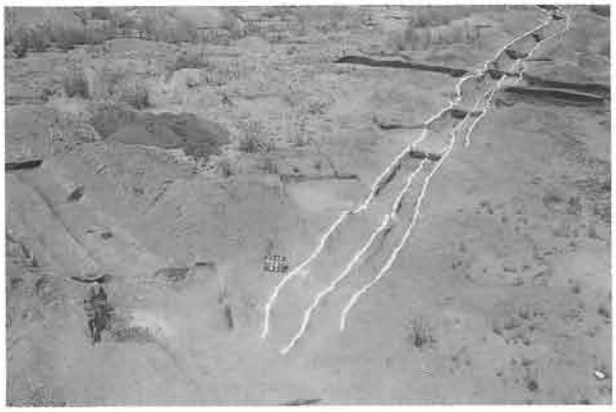
Ｉ３号井戸跡（南より）

W６号溝跡

図版58

W 6 号溝跡

W19号溝跡



W16号溝跡

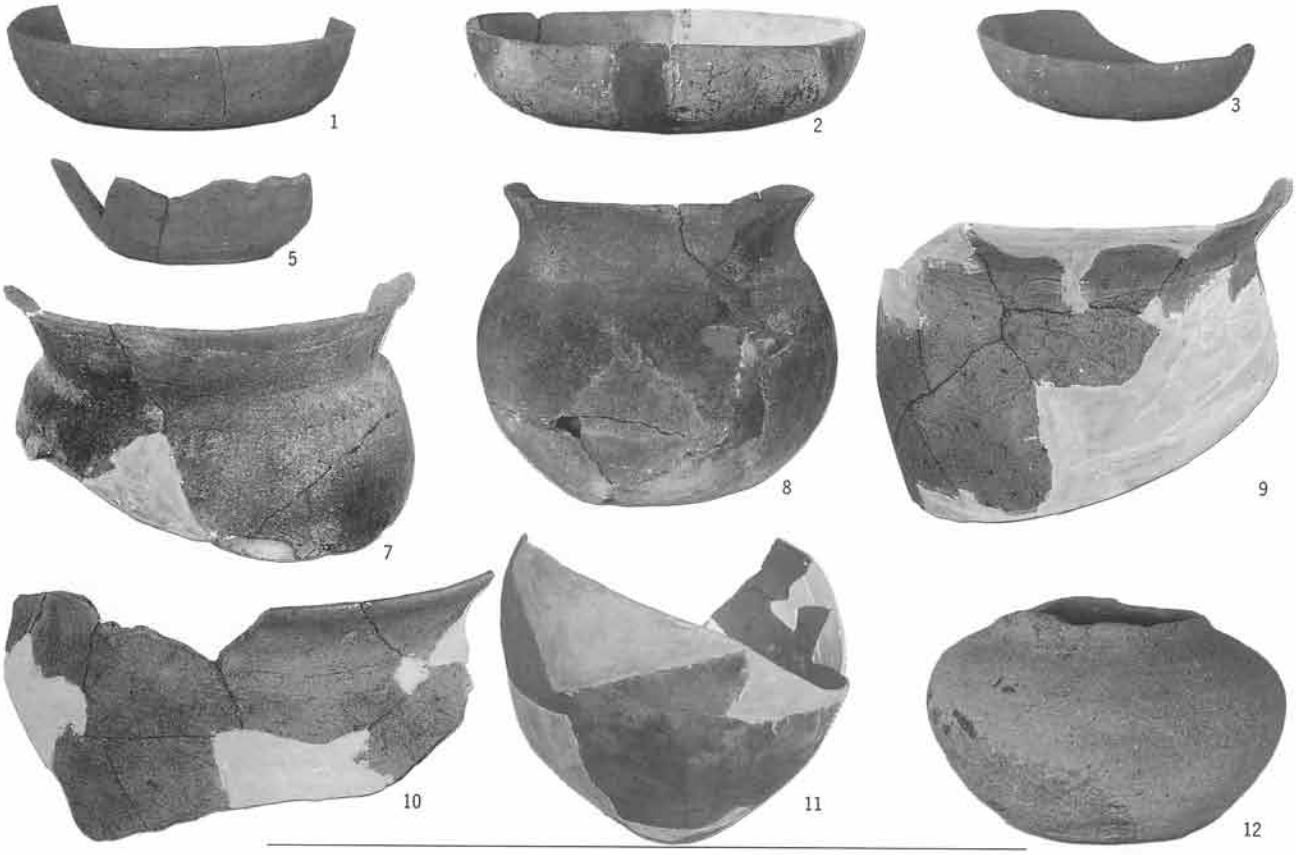
W20号溝跡

W17・18号溝跡

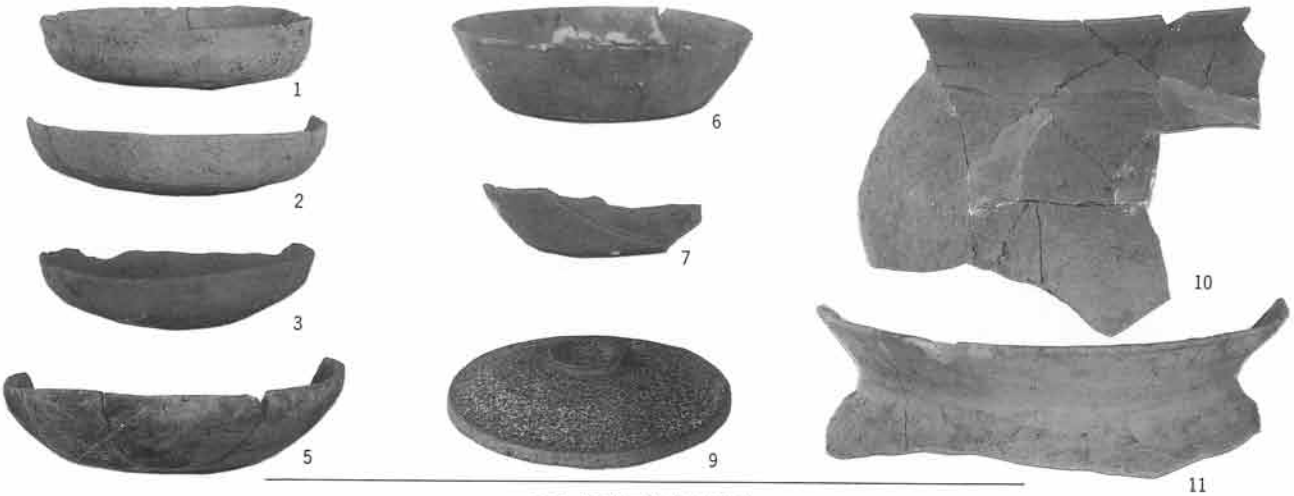
W29号溝跡

W17・18号溝跡

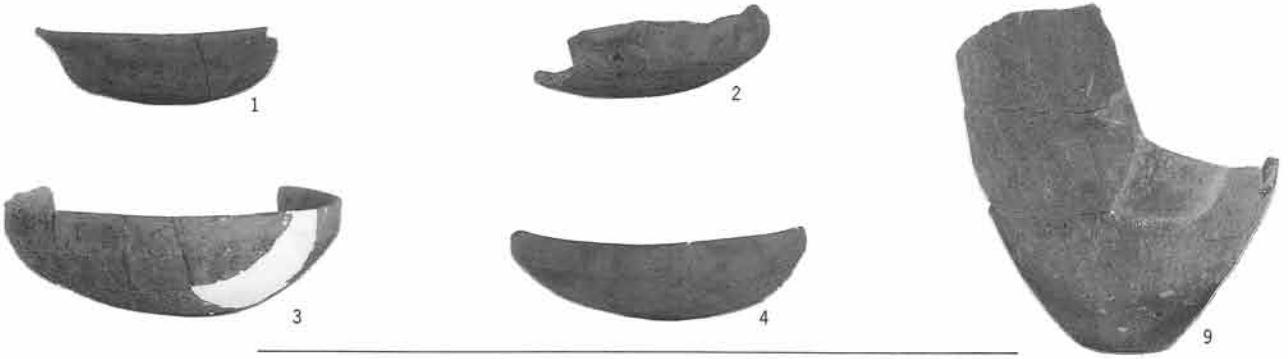
W39号溝跡



H１号住居跡出土遺物



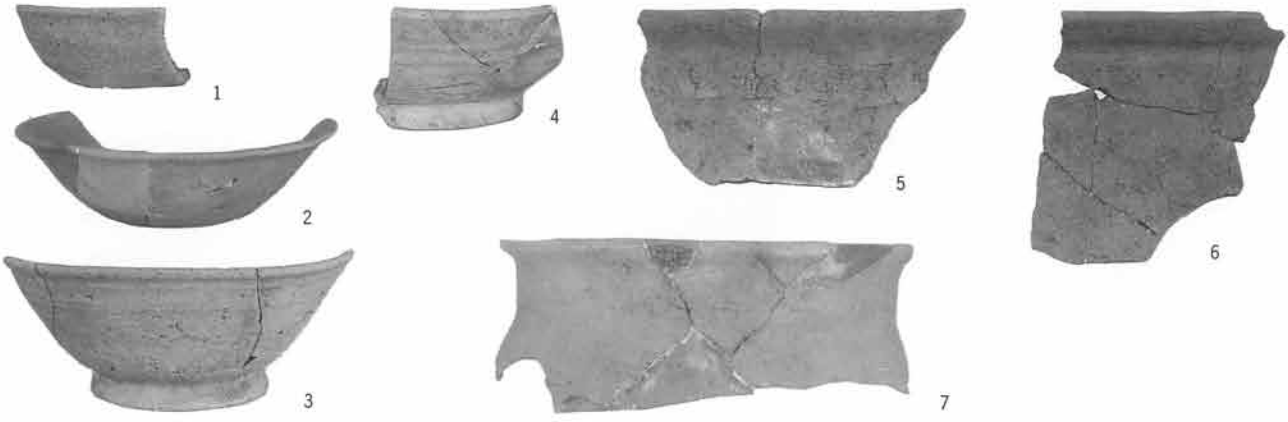
H２号住居跡出土遺物



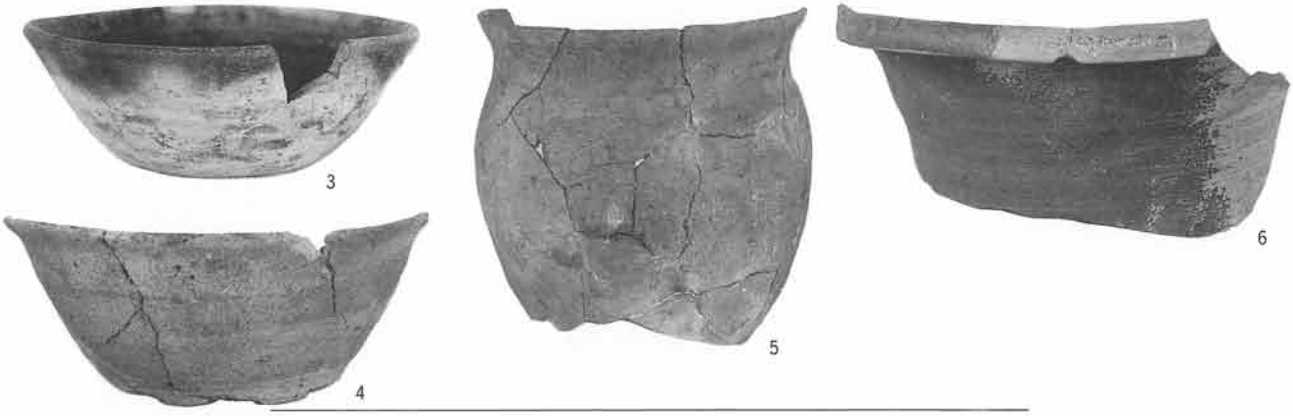
H３号住居跡出土遺物

図版60

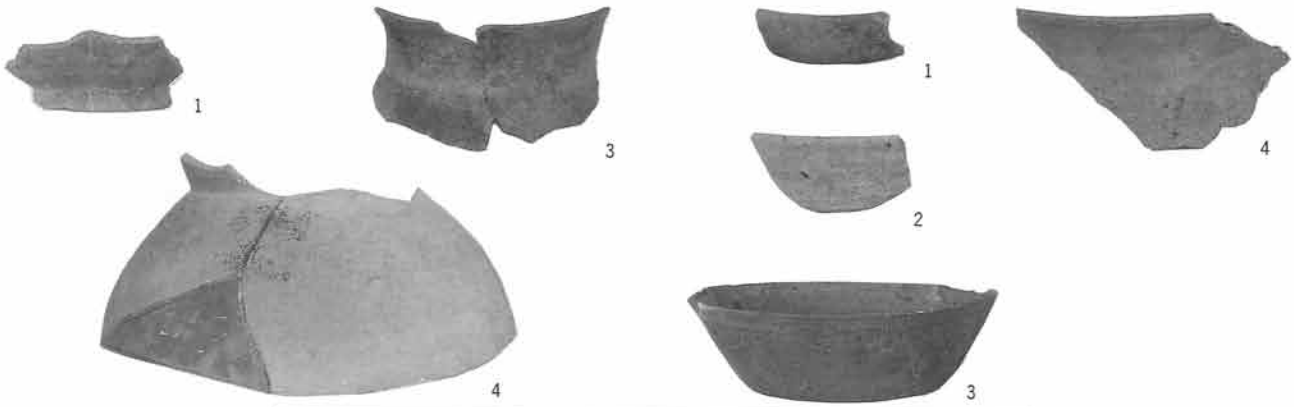
H 4 号住居跡出土遺物



H 5 号住居跡出土遺物



H 6 号住居跡出土遺物

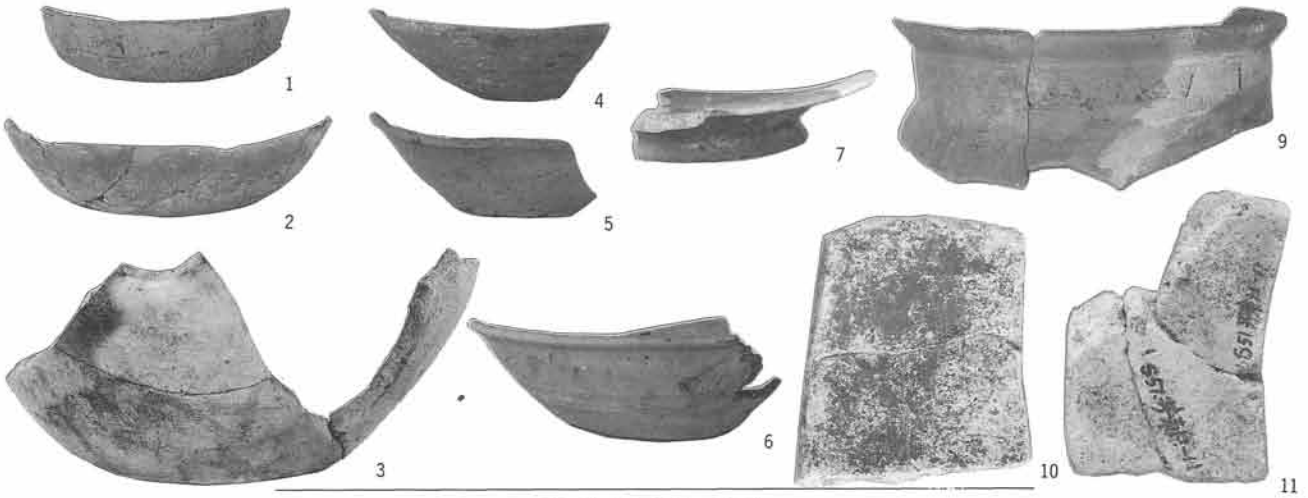


H 7 号住居跡出土遺物

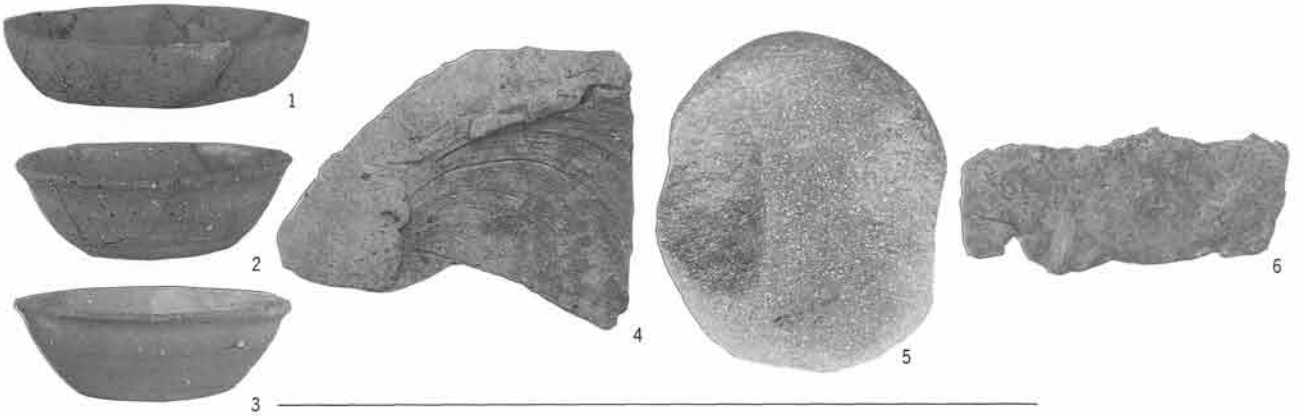
H 8 号住居跡出土遺物

H 9 号住居跡出土遺物

H10号住居跡出土遺物

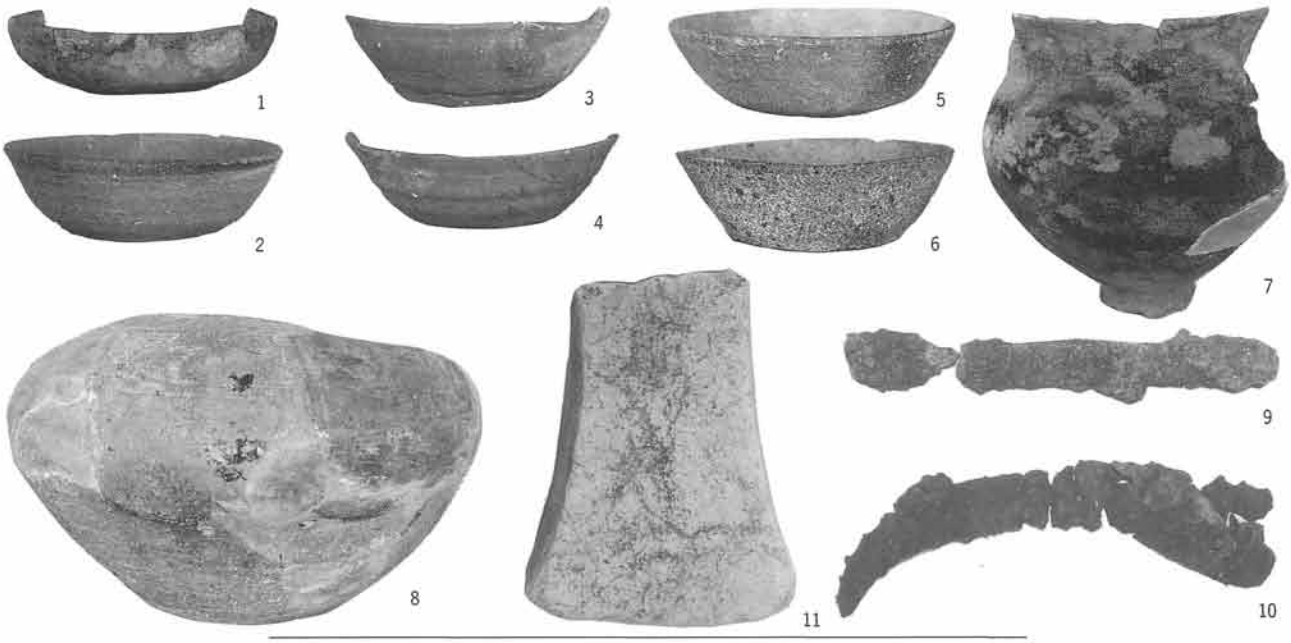


H11号住居跡出土遺物

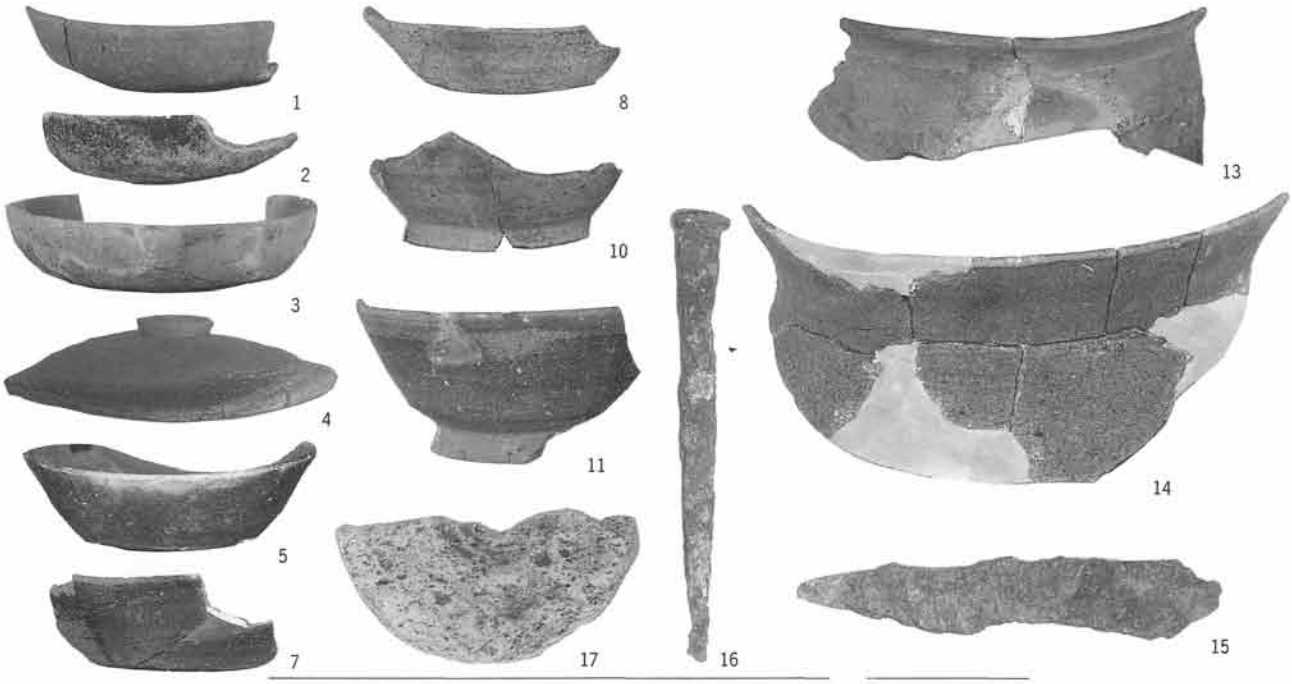


H13号住居跡出土遺物

図版62



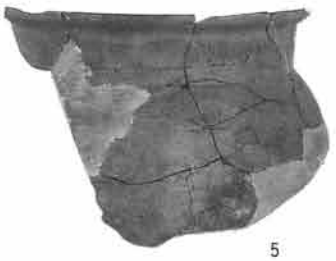
H14号住居跡出土遺物



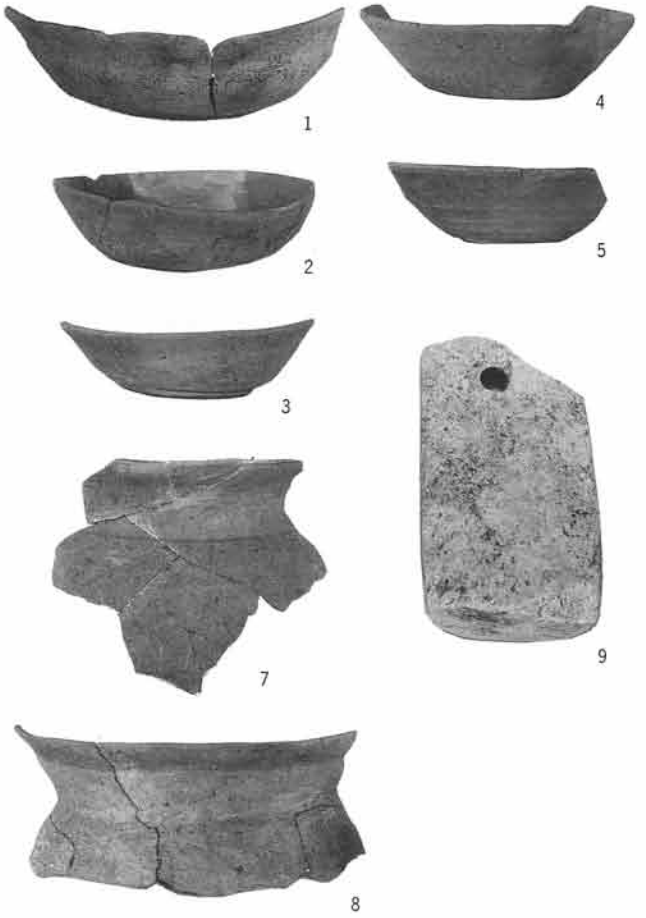
H15号住居跡出土遺物

H16号住居跡出土遺物

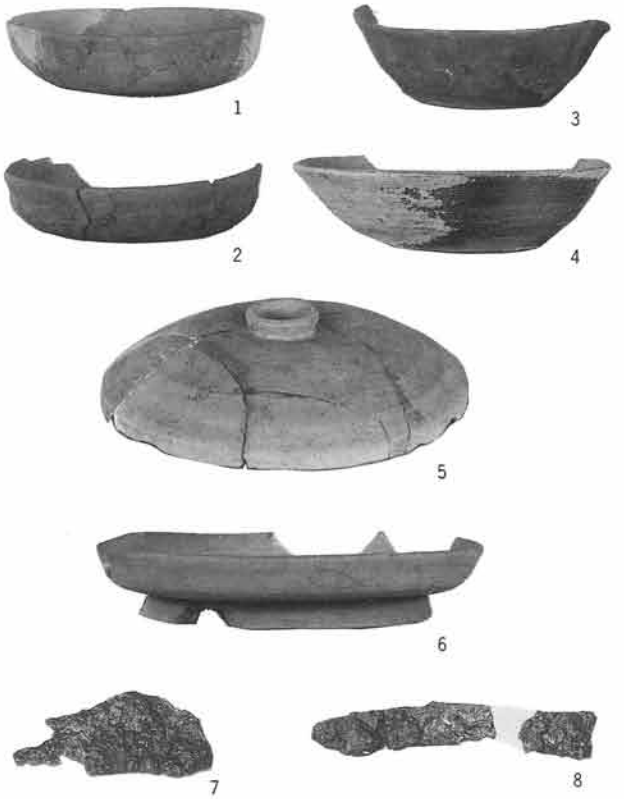
H17号住居跡出土遺物



H19号住居跡出土遺物

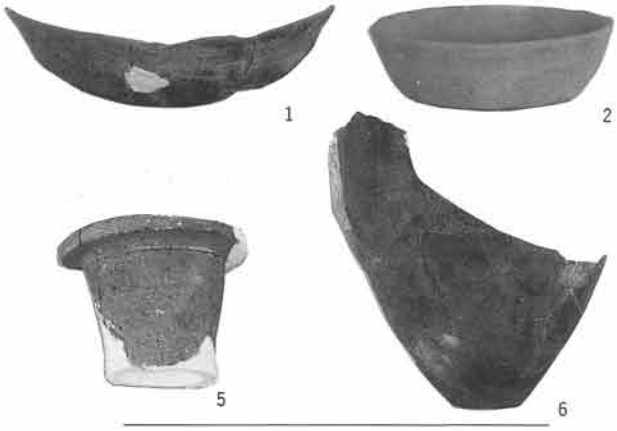


H18号住居跡出土遺物

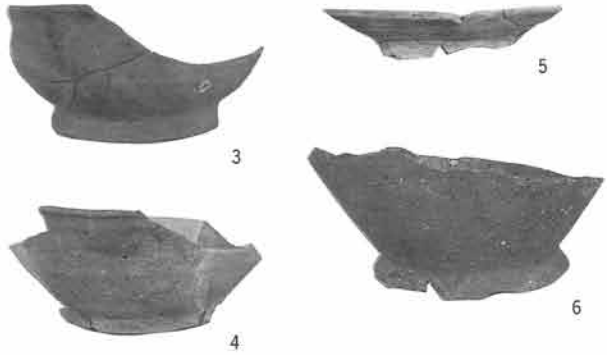


H20号住居跡出土遺物

図版64

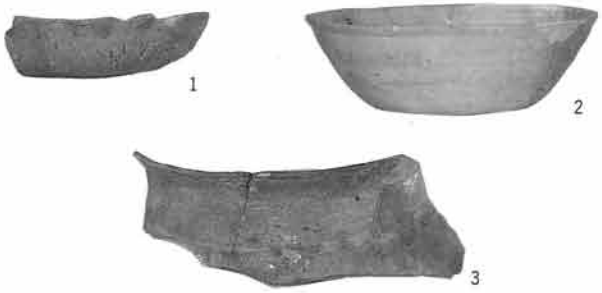


H21号住居跡出土遺物

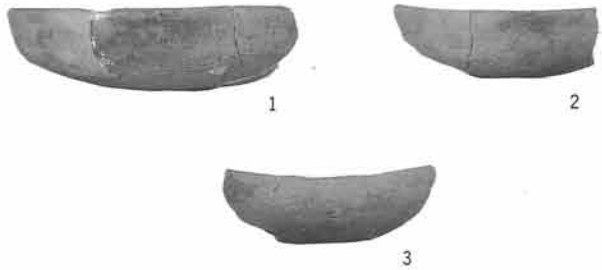


H22号住居跡出土遺物

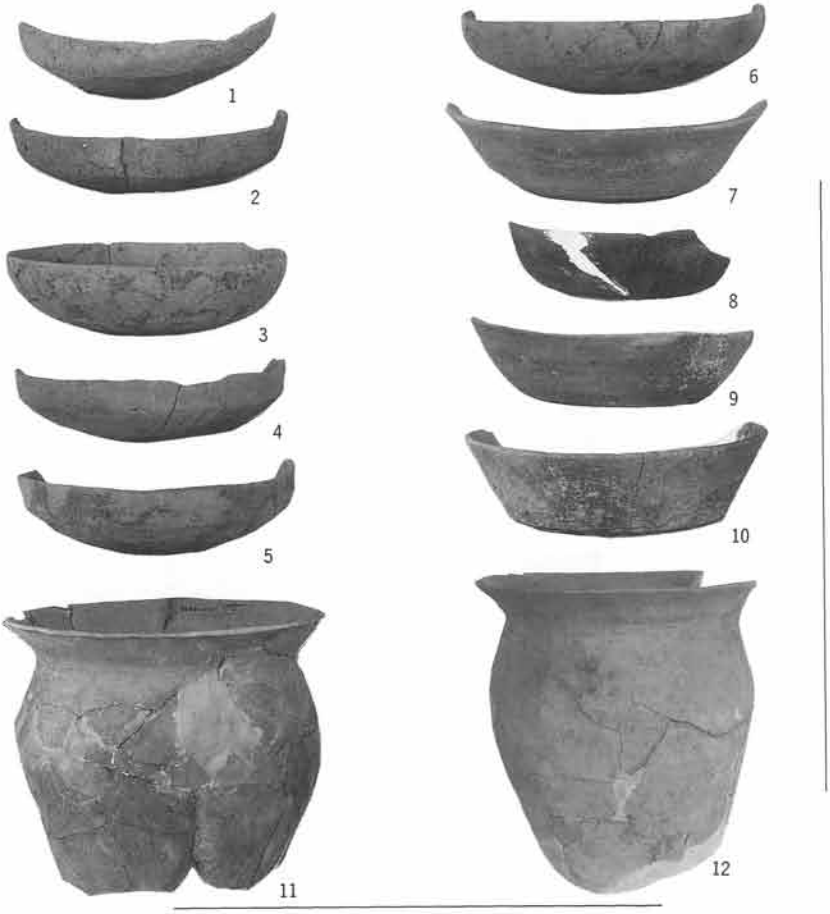
H23号住居跡出土遺物



H24号住居跡出土遺物



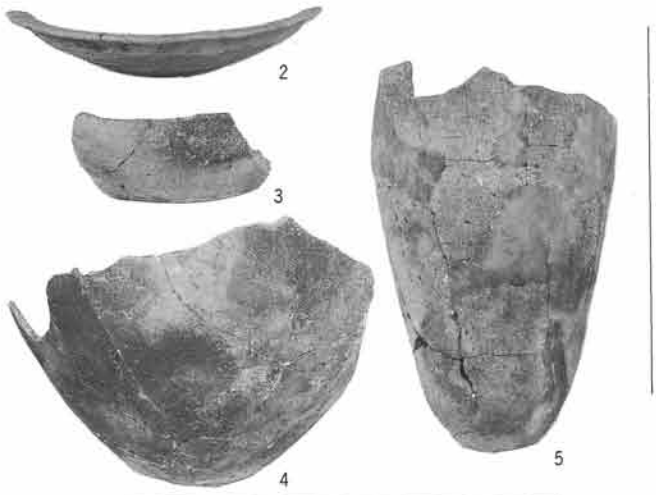
H25号住居跡出土遺物



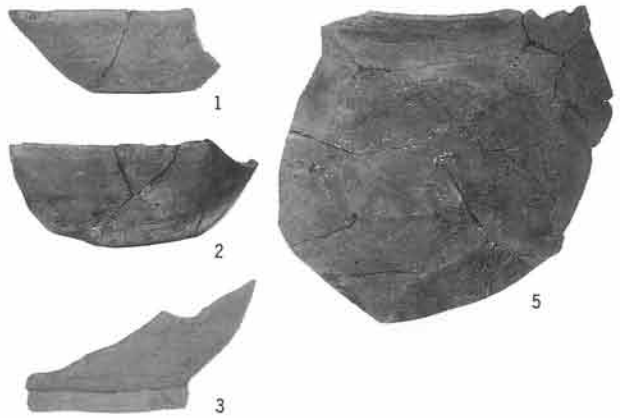
H27号住居跡出土遺物

H28号住居跡出土遺物

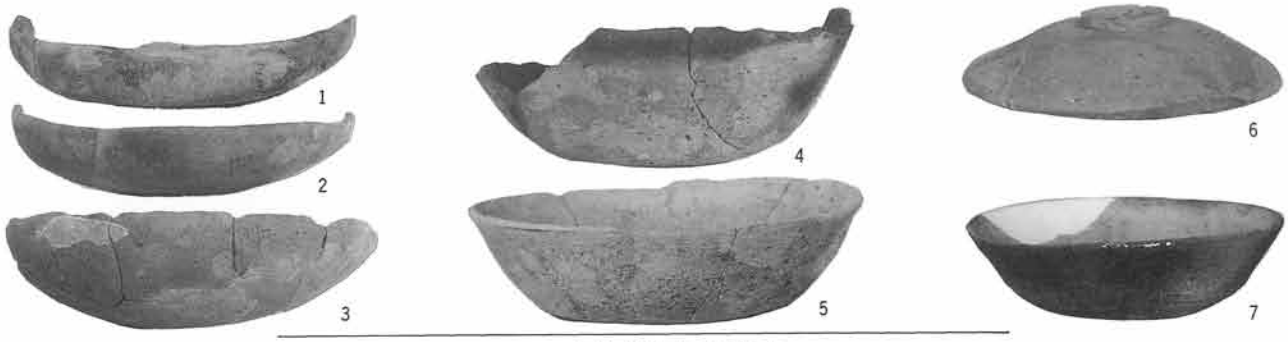
H29号住居跡出土遺物



H30号住居跡出土遺物

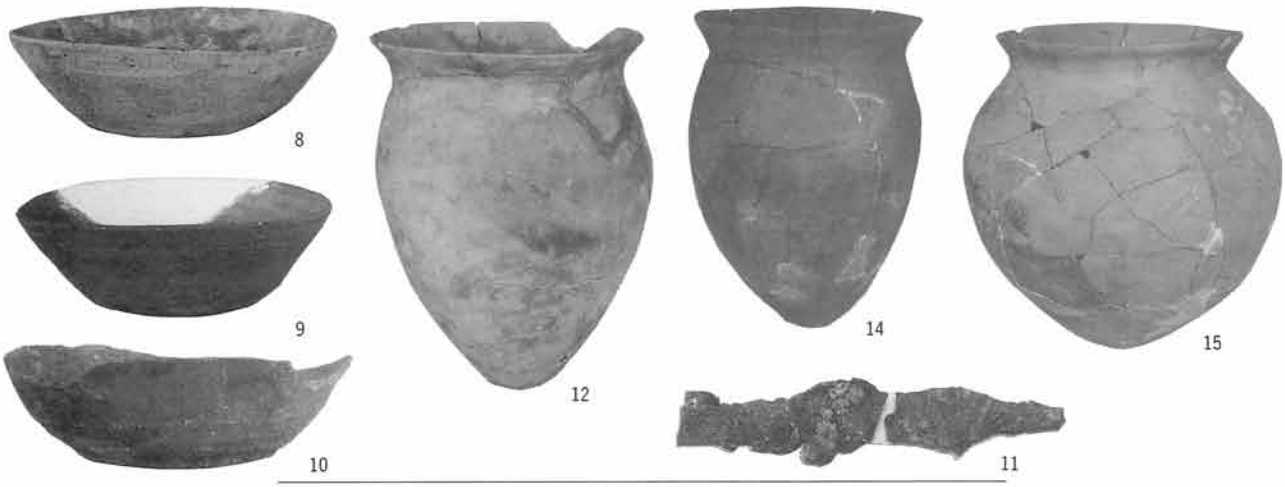


H31号住居跡出土遺物



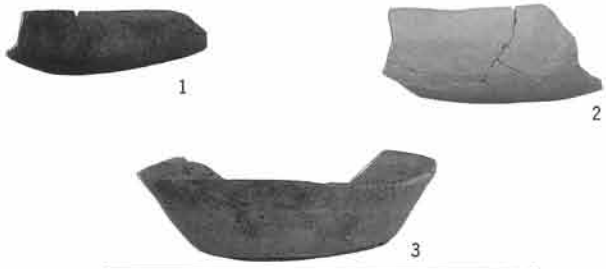
H32号住居跡出土遺物 (1)

図版66



H32号住居跡出土遺物(2)

H33号住居跡出土遺物

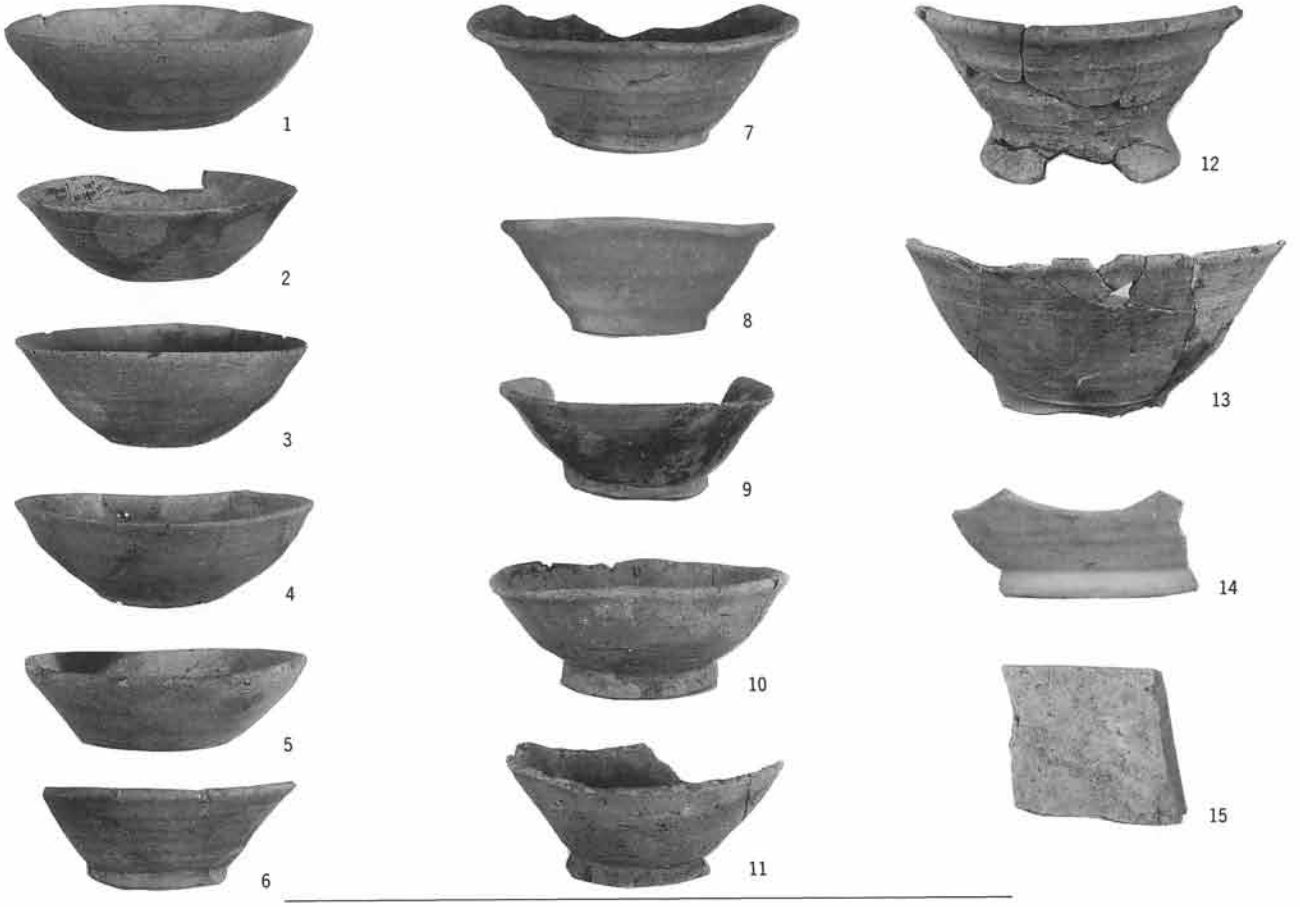


H35号住居跡出土遺物

H36号住居跡出土遺物

H34号住居跡出土遺物

H37・38号住居跡出土遺物



H39号住居跡出土遺物

H40号住居跡出土遺物

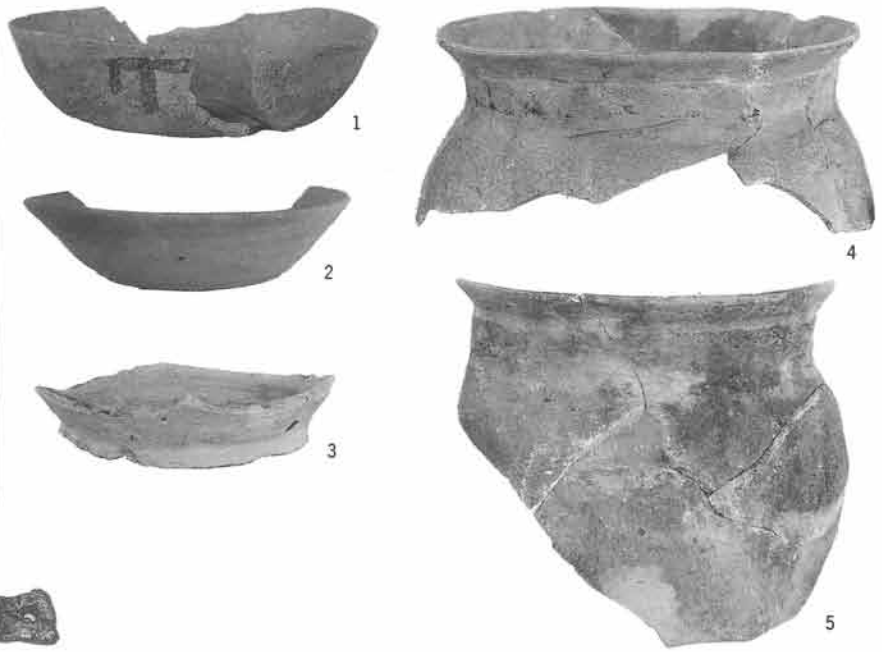
H41号住居跡出土遺物

図版68

H42号住居跡出土遺物

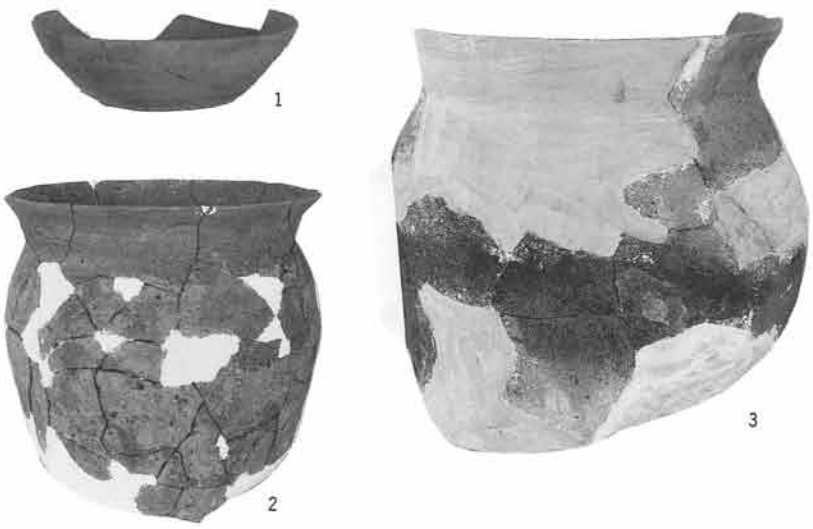
H43号住居跡出土遺物

H45号住居跡出土遺物



H44号住居跡出土遺物

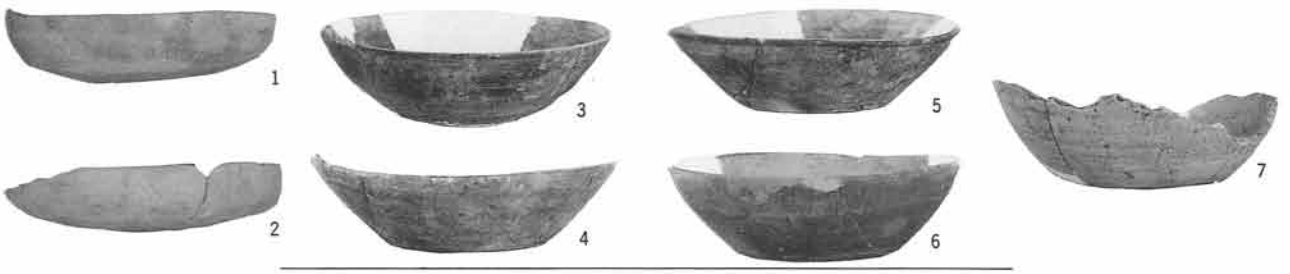
H46号住居跡出土遺物



H47号住居跡出土遺物

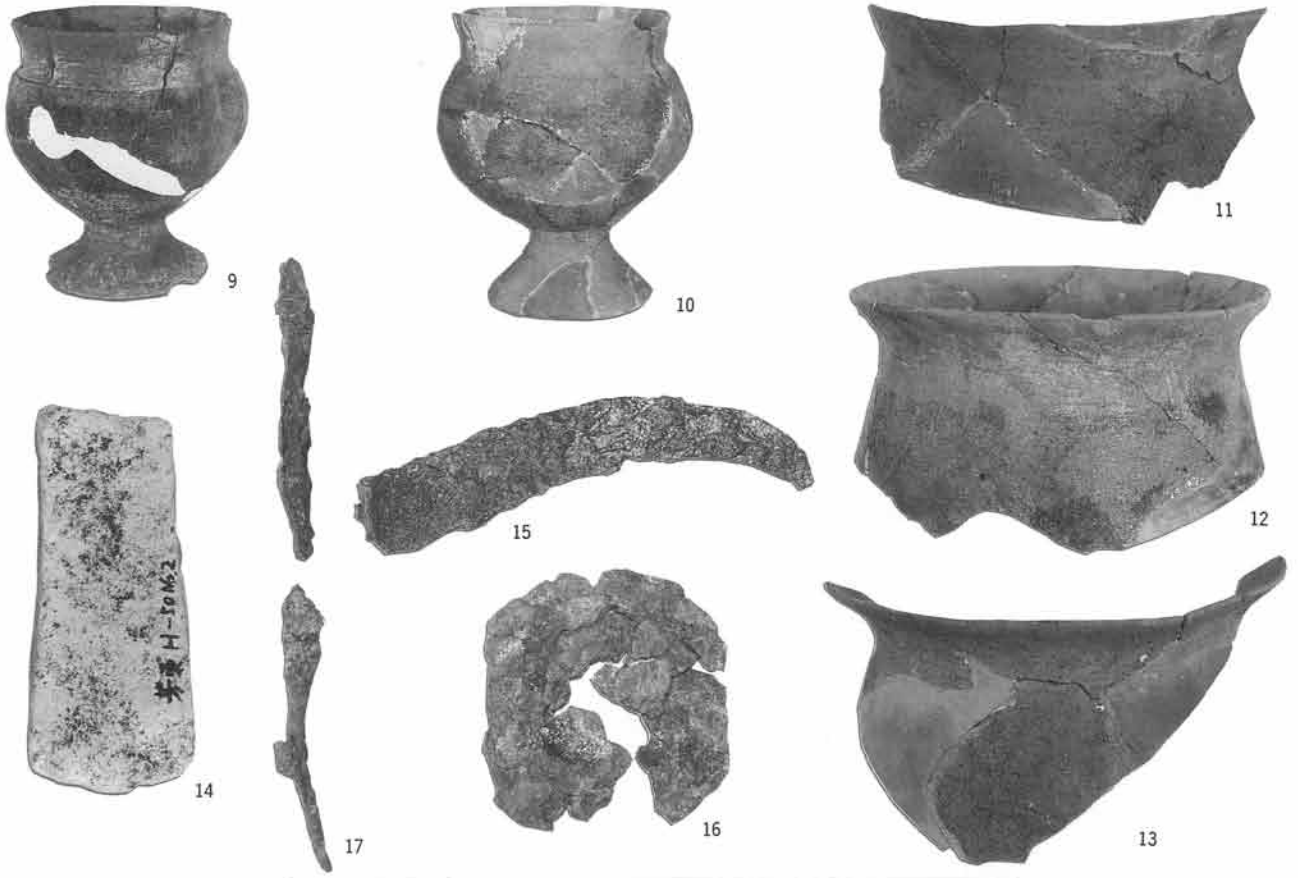
H48号住居跡出土遺物

H49号住居跡出土遺物



H50号住居跡出土遺物(1)

図版70

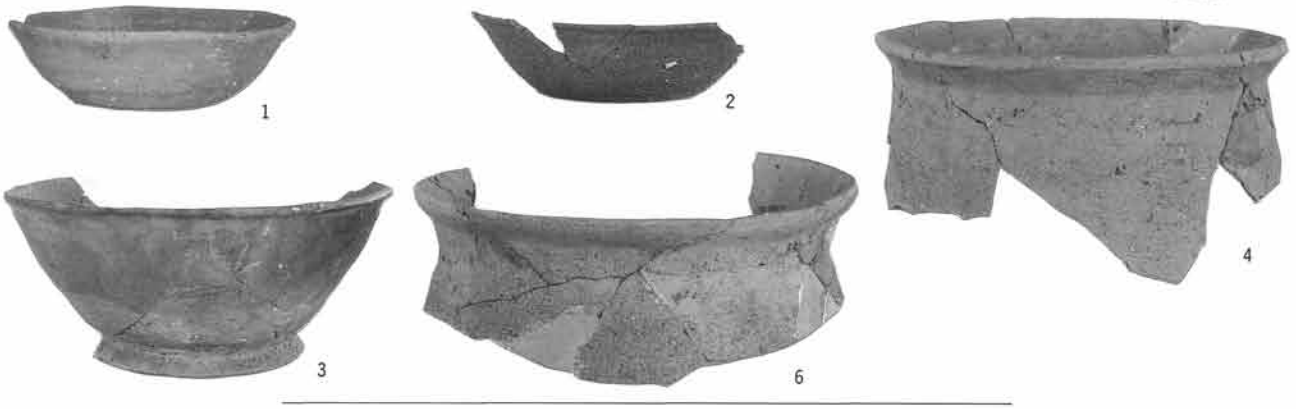


H50号住居跡出土遺物(2)

H51号住居跡出土遺物

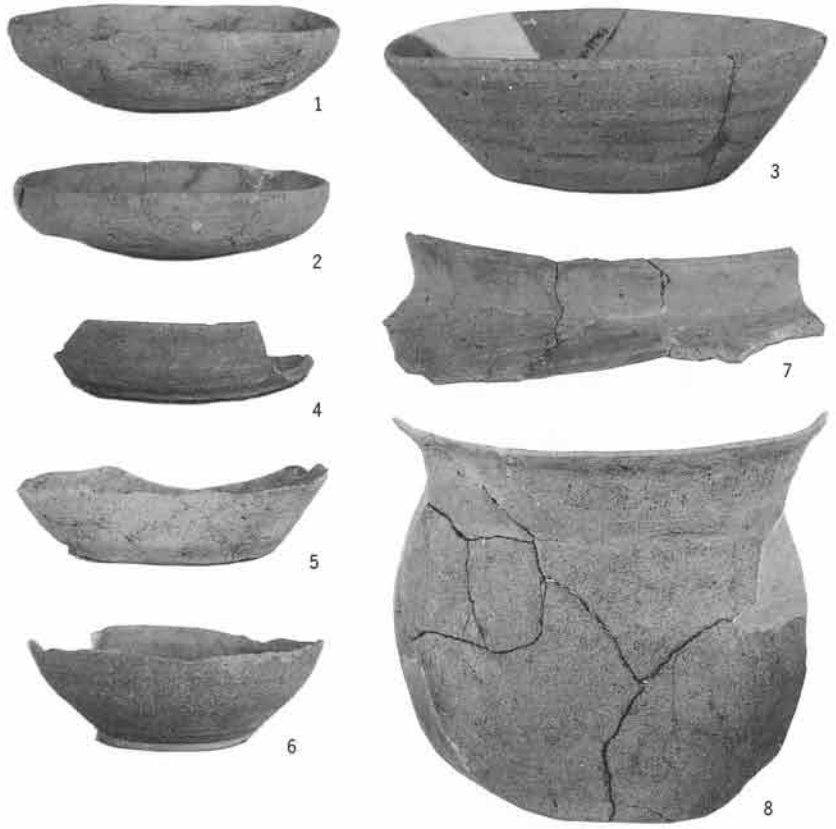
H52号住居跡出土遺物

H53号住居跡出土遺物



H54号住居跡出土遺物

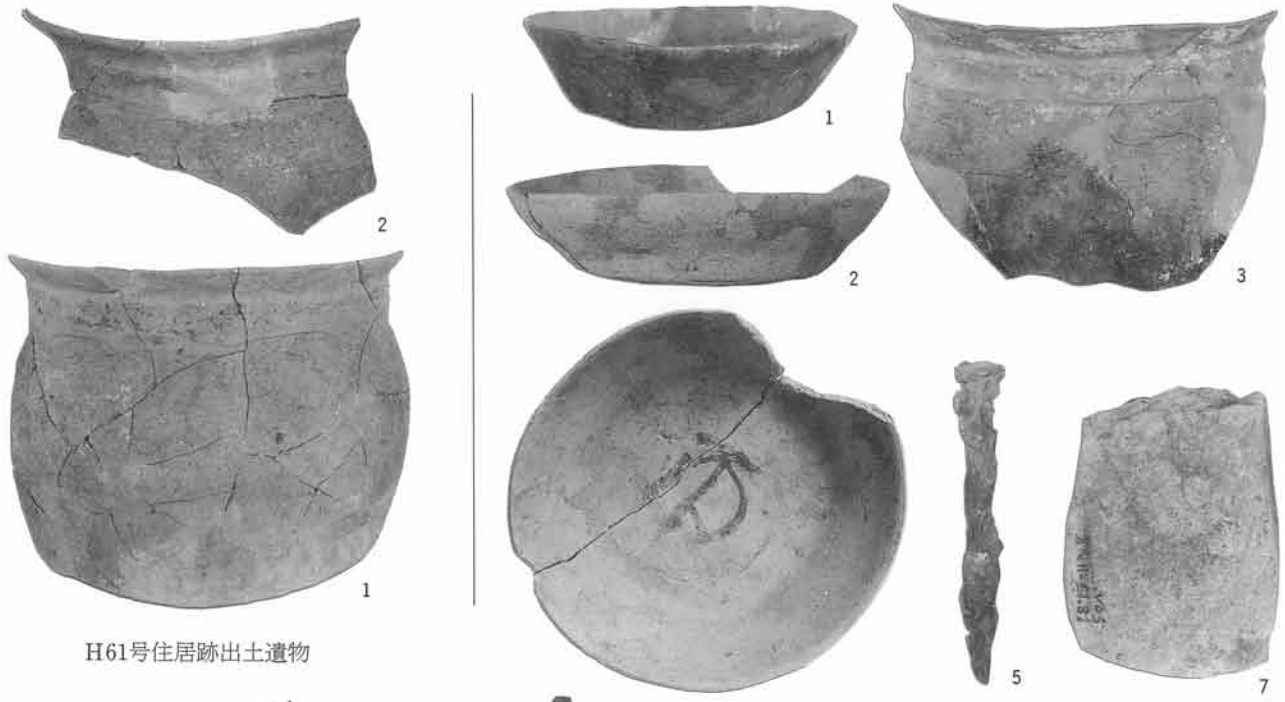
H56号住居跡出土遺物



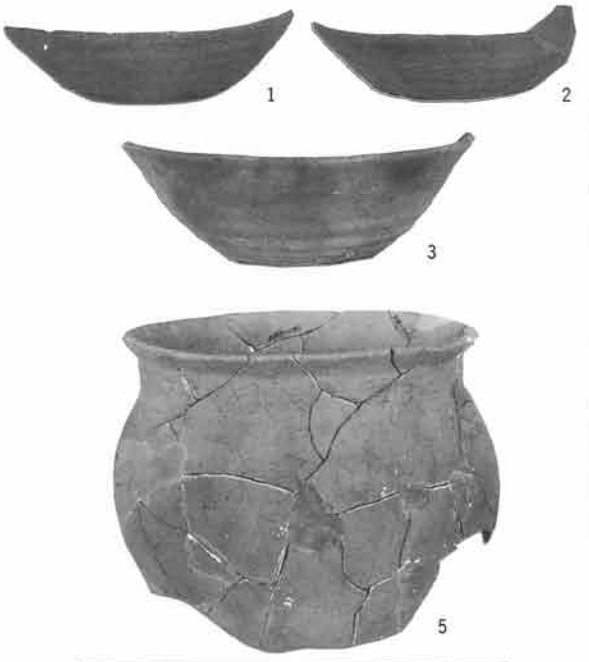
H59号住居跡出土遺物

H60号住居跡出土遺物

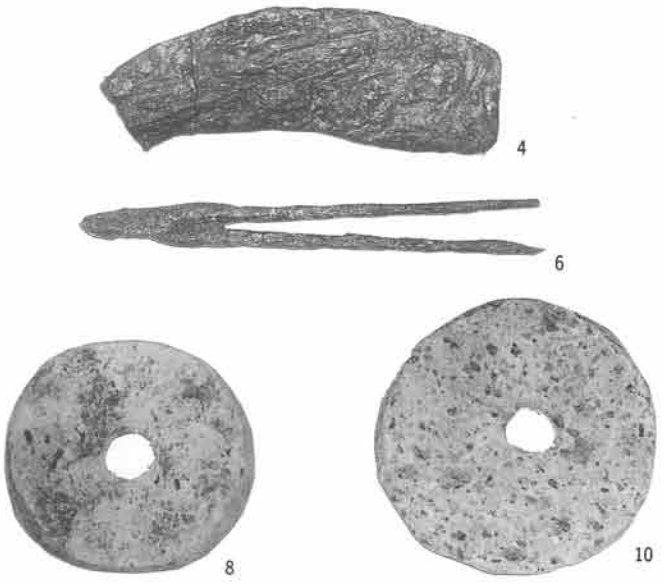
図版72



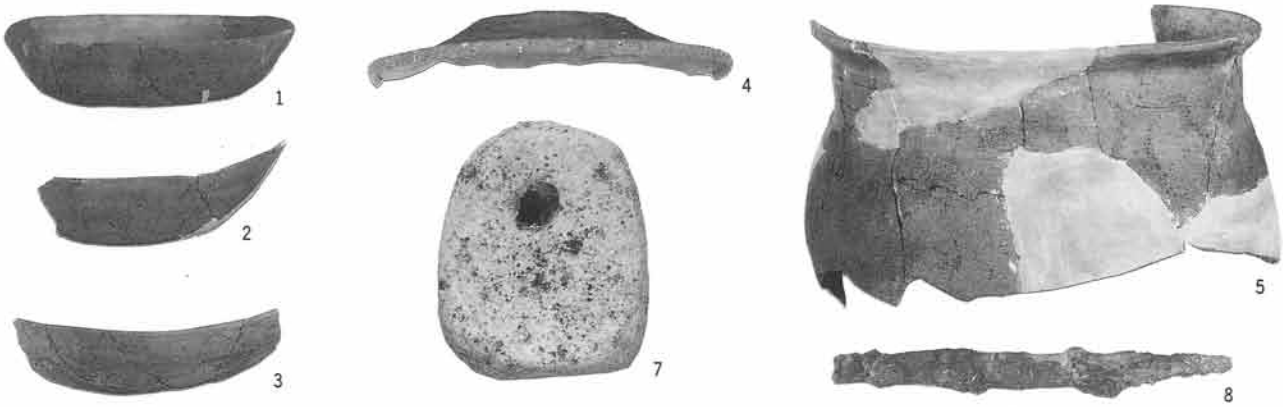
H61号住居跡出土遺物



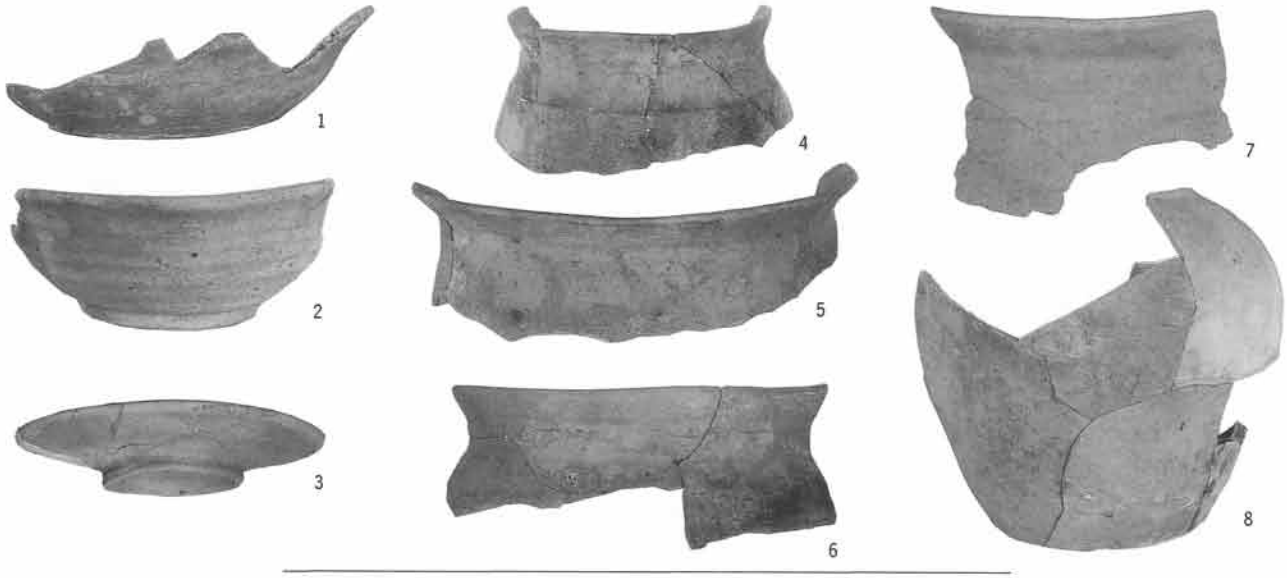
H62号住居跡出土遺物



H81号住居跡出土遺物

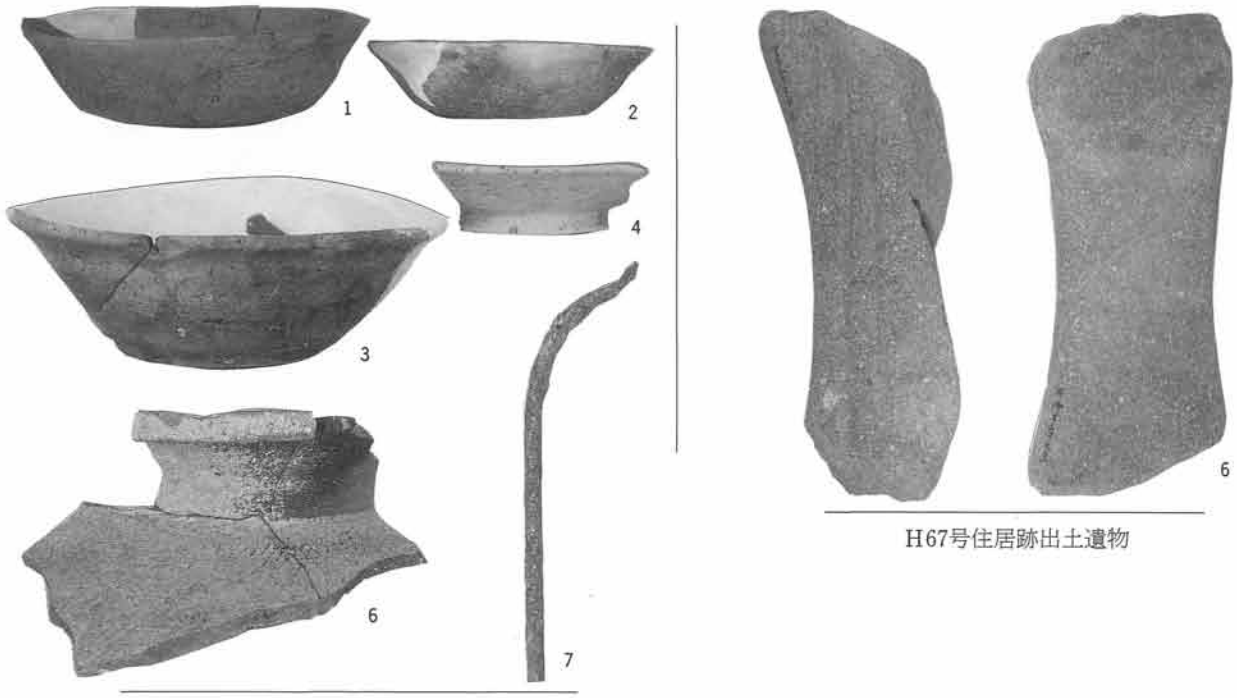


H63・80号住居跡出土遺物



H64号住居跡出土遺物

H65号住居跡出土遺物



H68号住居跡出土遺物

H67号住居跡出土遺物

図版74

H69号住居跡出土遺物

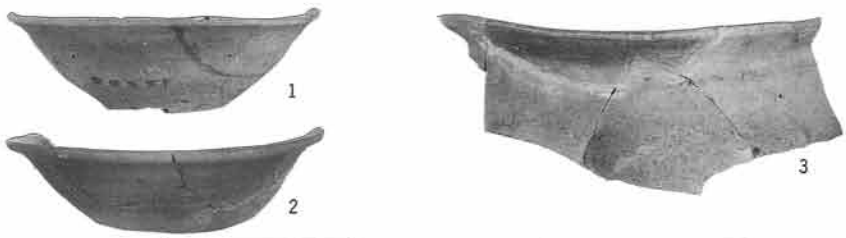
H70号住居跡出土遺物

H71号住居跡出土遺物

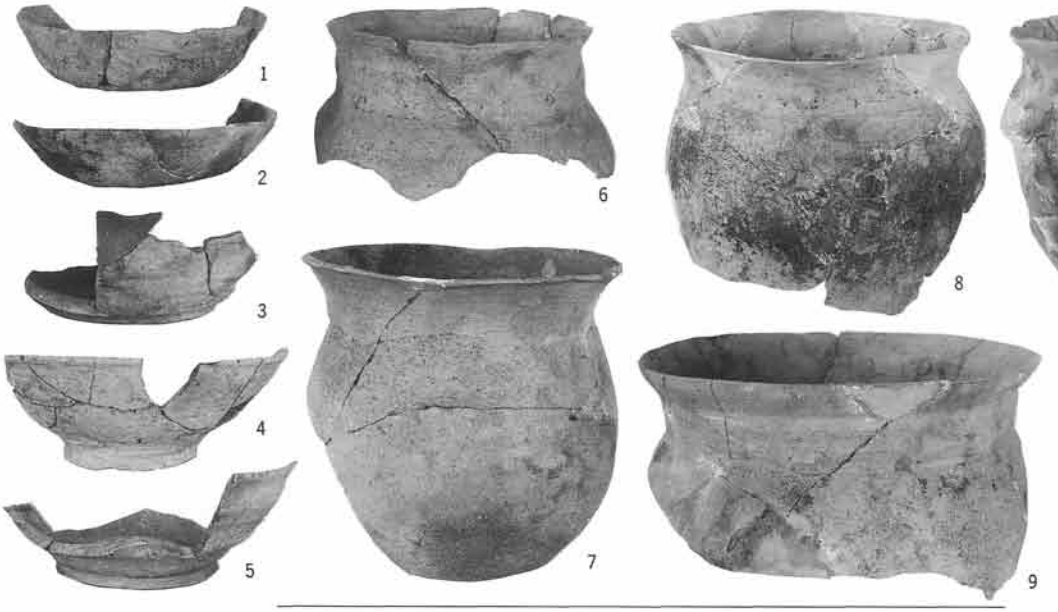
H73号住居跡出土遺物

H74・75・76・79号住居跡出土遺物

H77号住居跡出土遺物

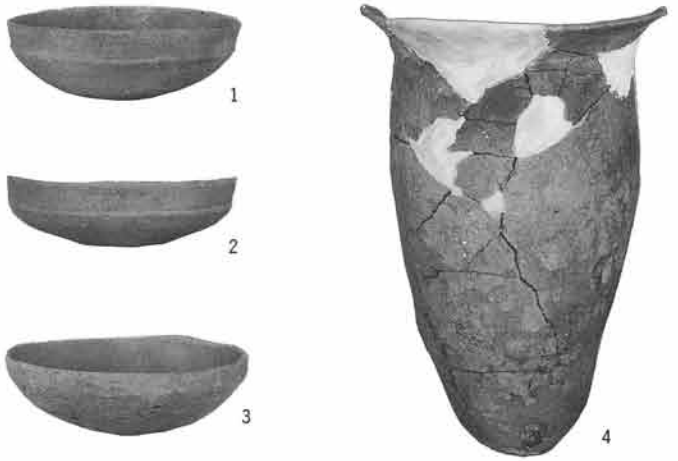


H78号住居跡出土遺物

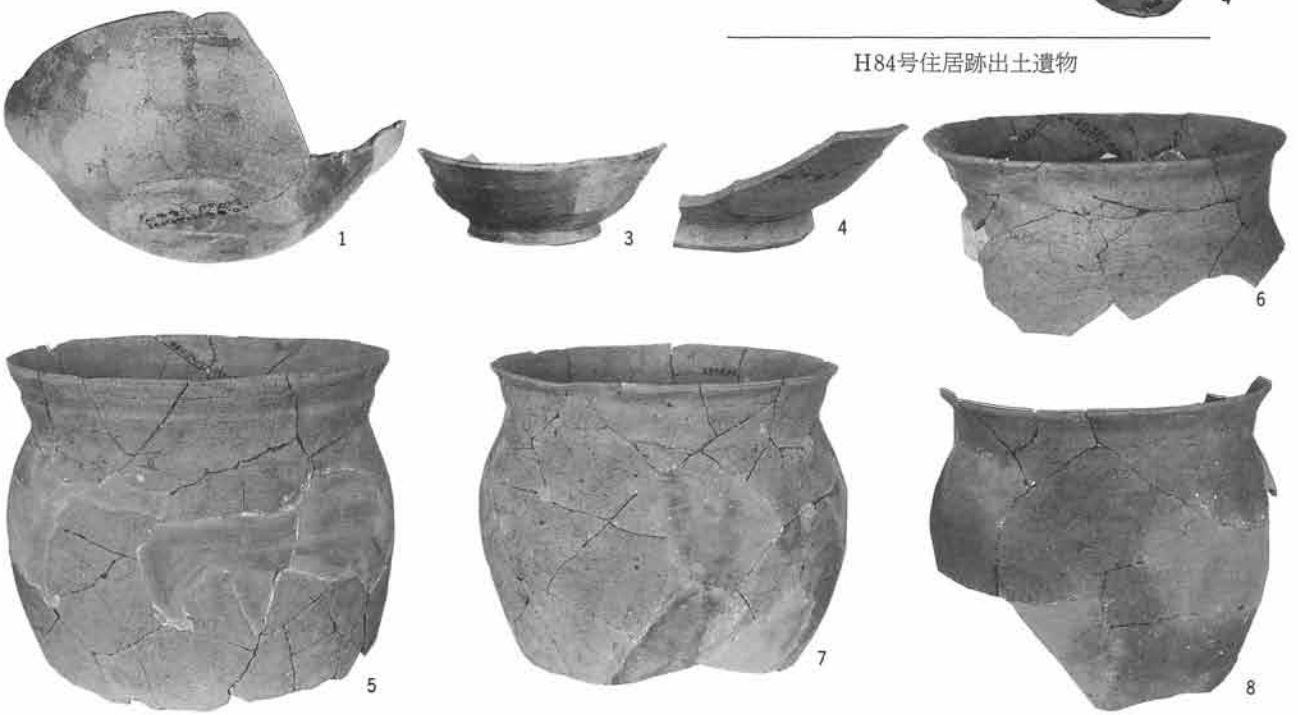


H82号住居跡出土遺物

H83号住居跡出土遺物

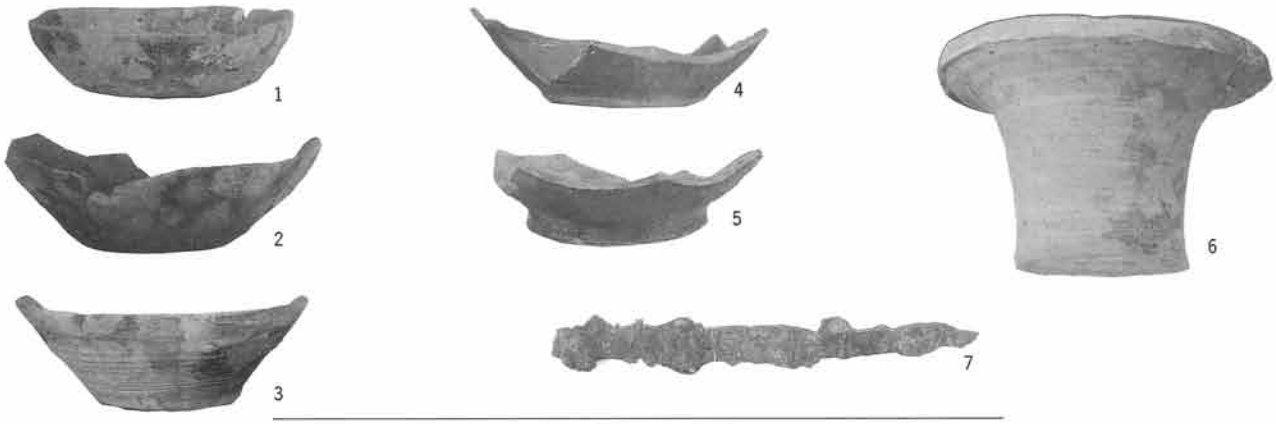


H84号住居跡出土遺物



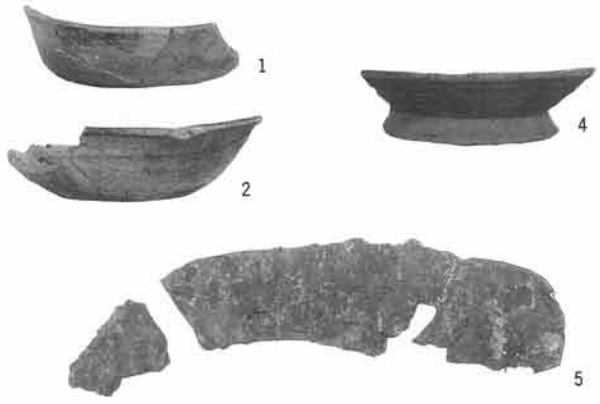
H85号住居跡出土遺物

図版76

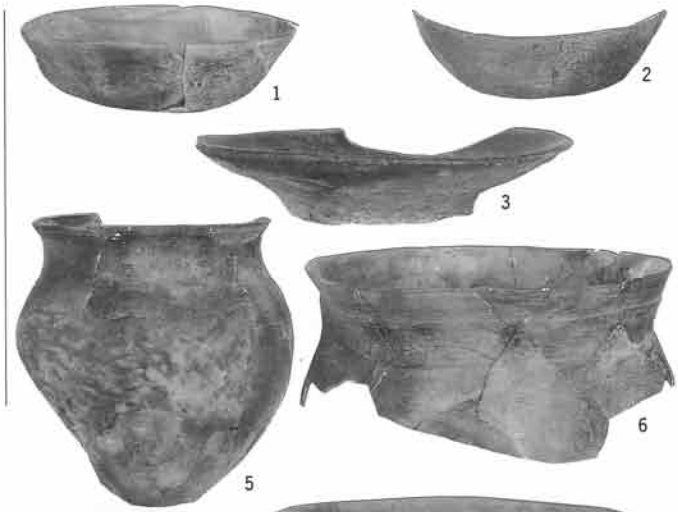


H86号住居跡出土遺物

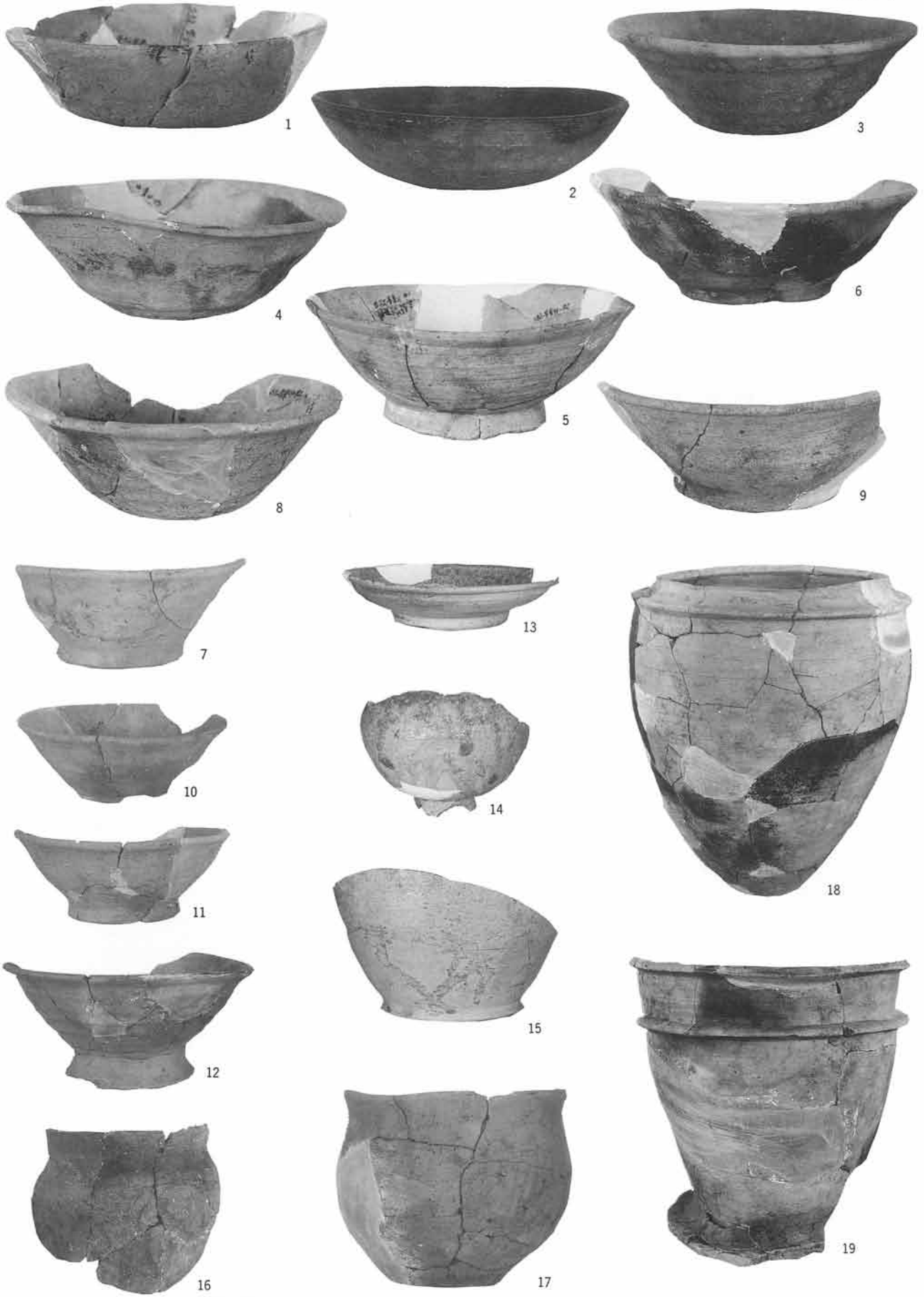
H88号住居跡出土遺物



H90号住居跡出土遺物



H91号住居跡出土遺物



H92号住居跡出土遺物(1)

図版78

20

21

22

23

24

H92号住居跡出土遺物(2)

1

2

H93号住居跡出土遺物

1

2

3

H94号住居跡出土遺物

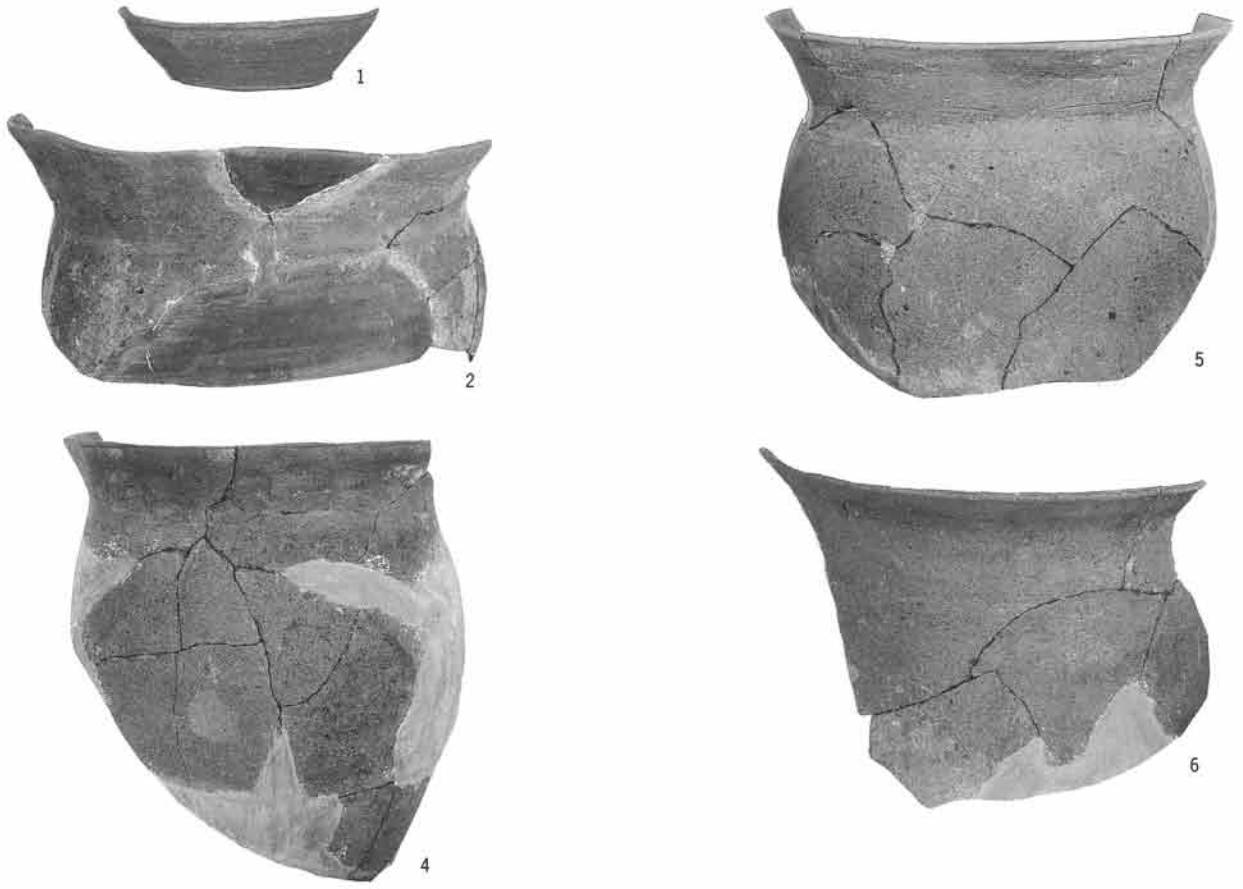
1

2

3

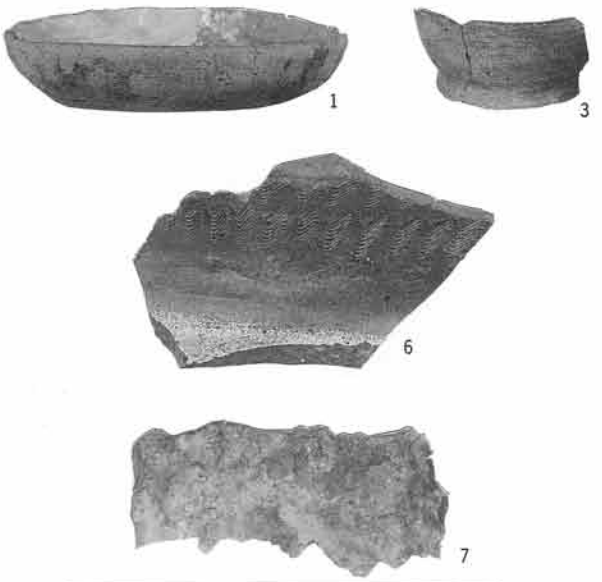
4

H95号住居跡出土遺物

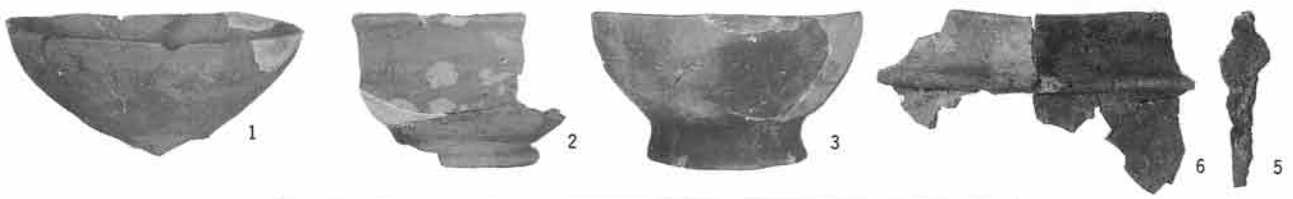


H96号住居跡出土遺物

H97号住居跡出土遺物



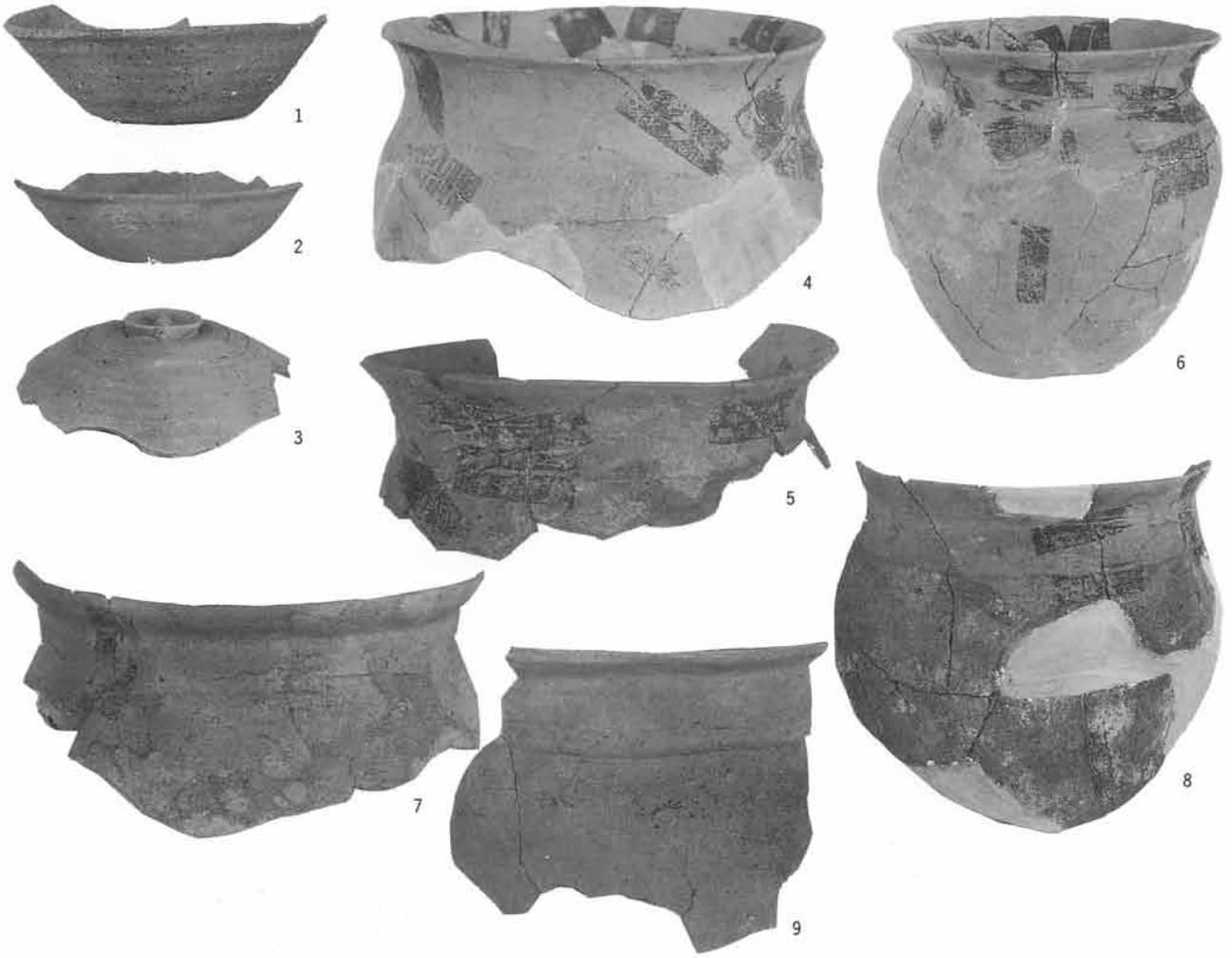
H98号住居跡出土遺物



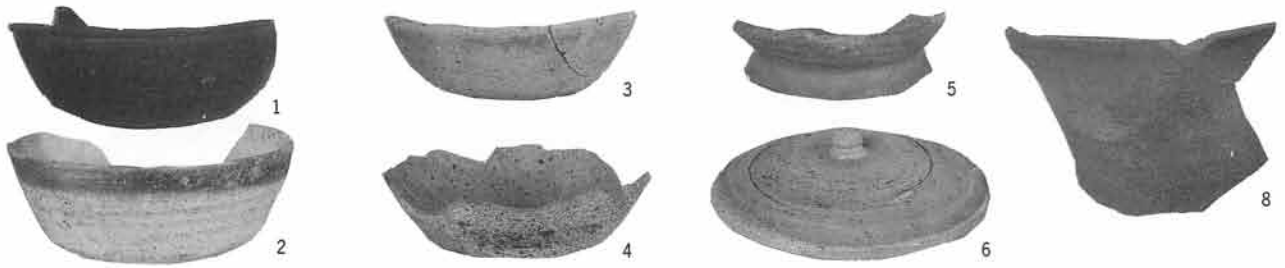
H99号住居跡出土遺物

図版80

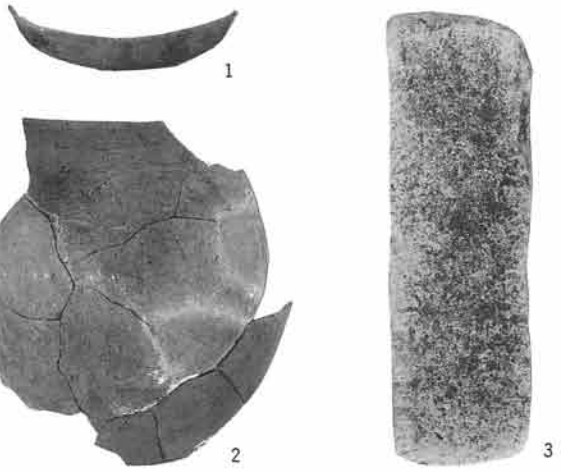
H100号住居跡出土遺物



H101号住居跡出土遺物



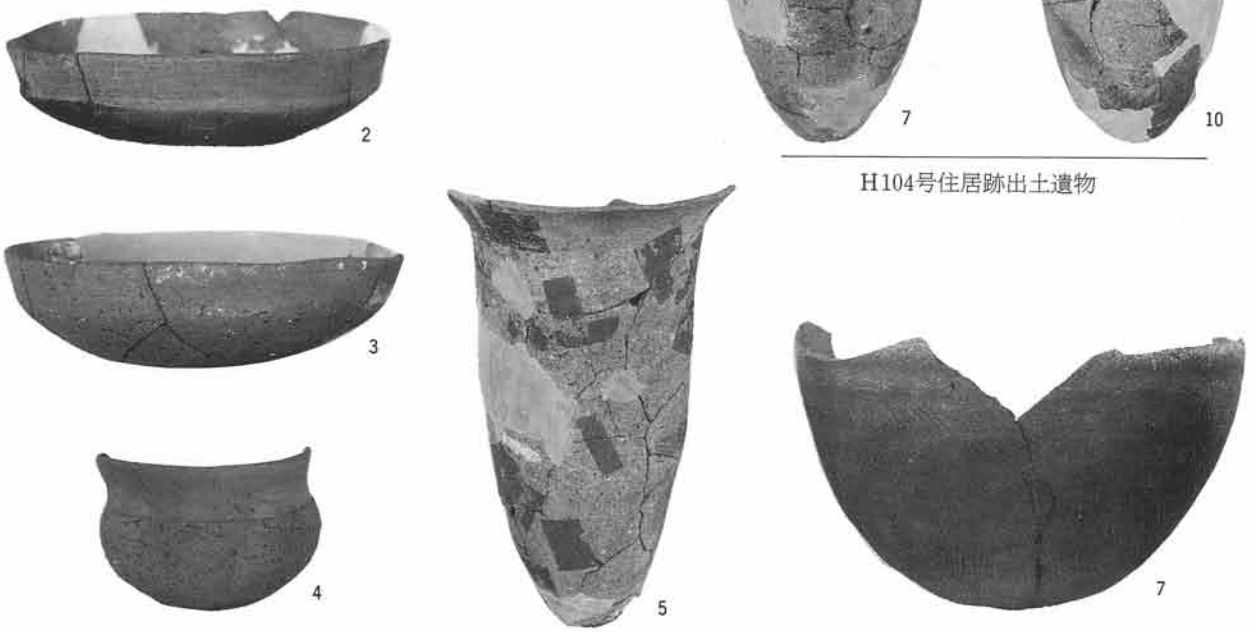
H102号住居跡出土遺物



H103号住居跡出土遺物

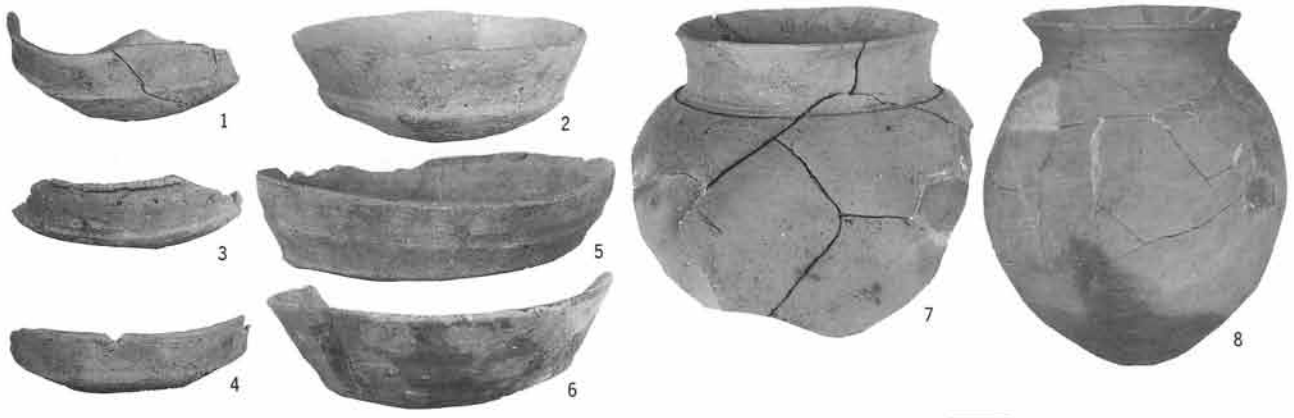
H105号住居跡出土遺物

H104号住居跡出土遺物

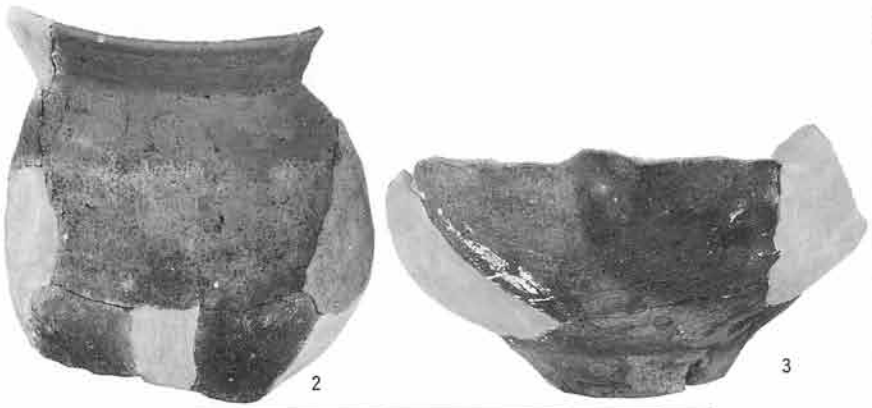


H106号住居跡出土遺物

図版82

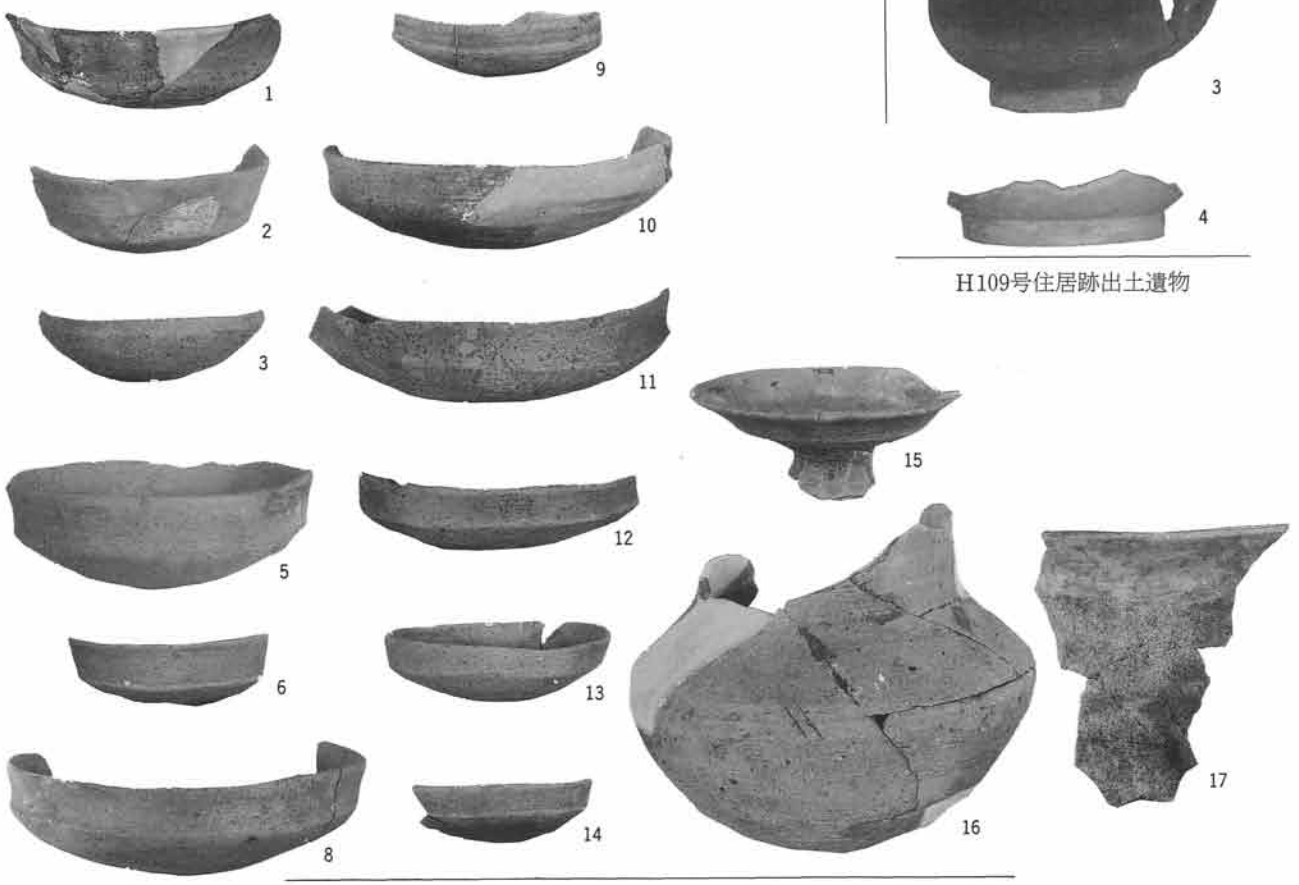


H107号住居跡出土遺物

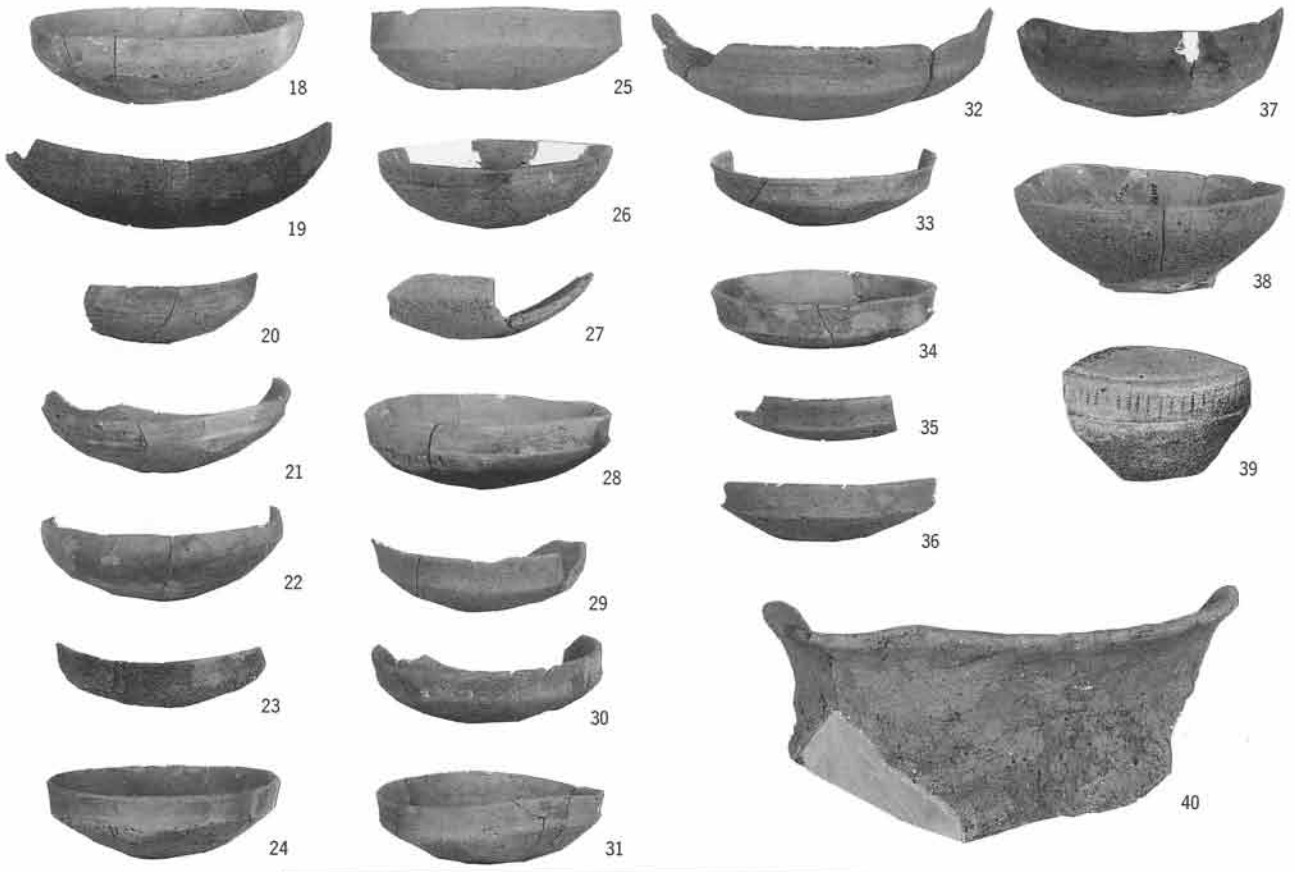


H108号住居跡出土遺物

H109号住居跡出土遺物



H111・116号住居跡出土遺物



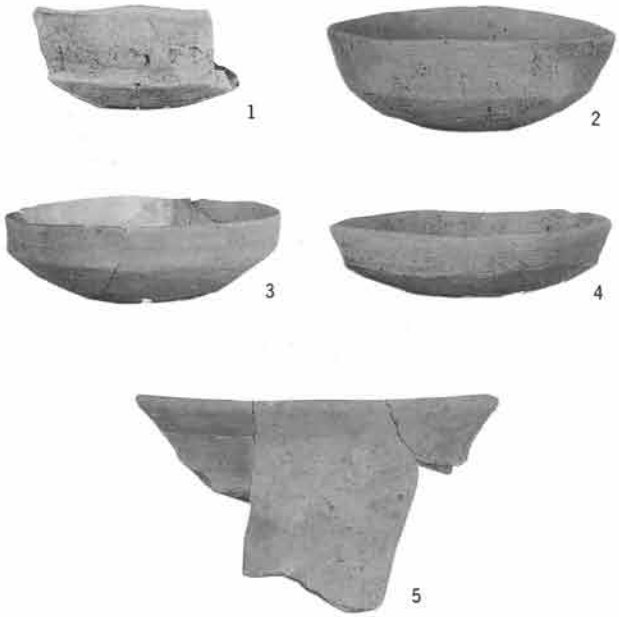
H111・112・116号住居跡出土遺物

H113号住居跡出土遺物

H114号住居跡出土遺物

図版84

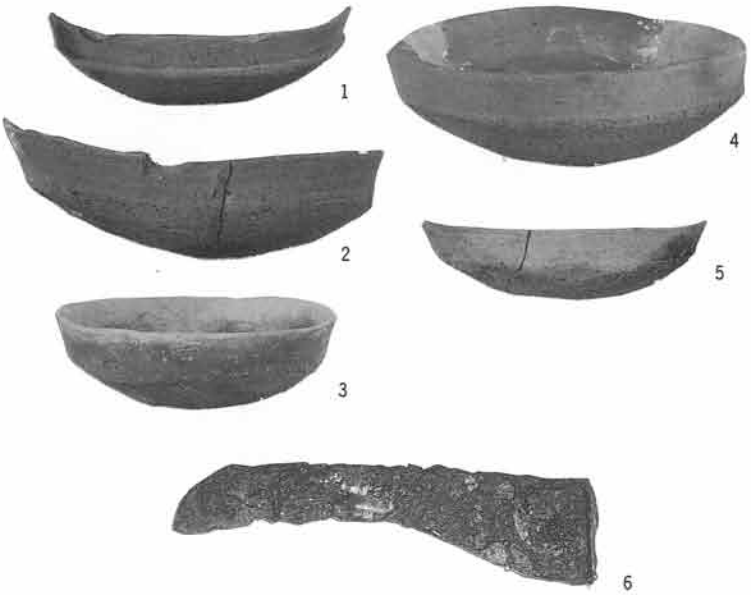
H115号住居跡出土遺物



H117号住居跡出土遺物

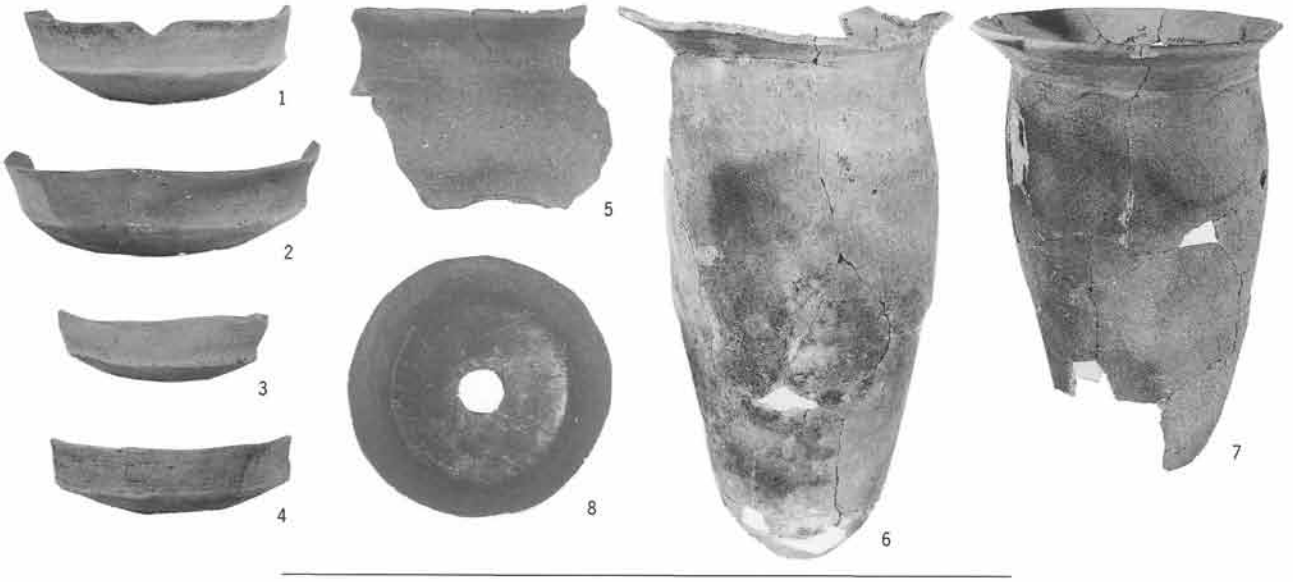
H118号住居跡出土遺物

H119号住居跡出土遺物



H120号住居跡出土遺物

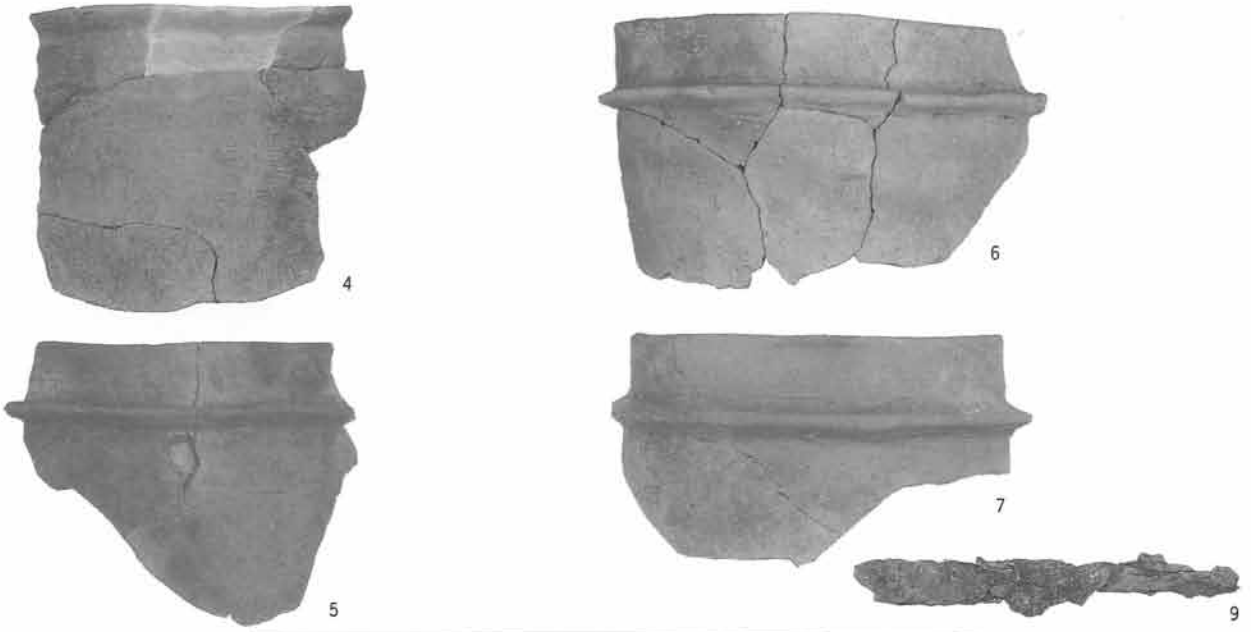
H121号住居跡出土遺物



H122号住居跡出土遺物

H123号住居跡出土遺物

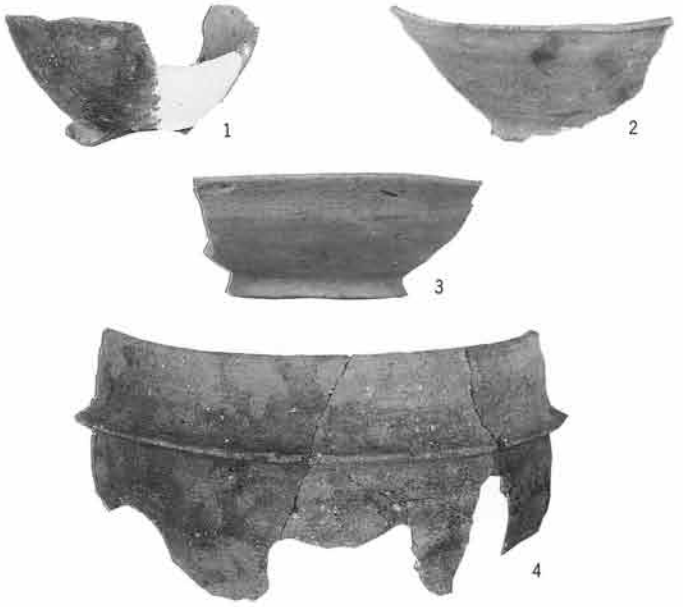
H124号住居跡出土遺物



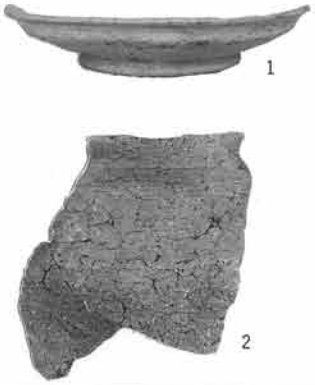
H125・129号住居跡出土遺物

図版86

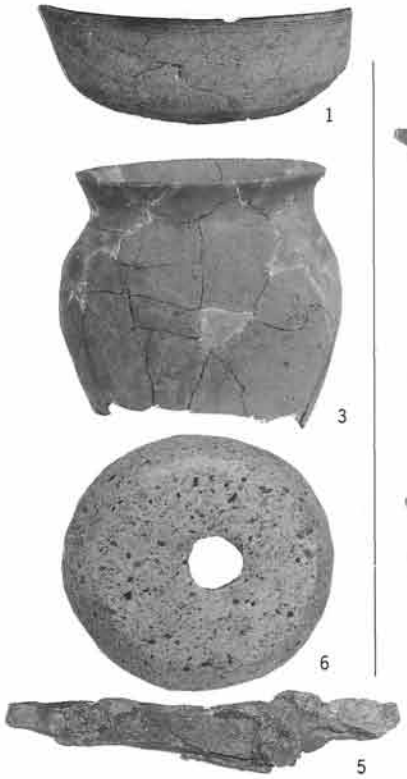
H126号住居跡出土遺物



H127号住居跡出土遺物



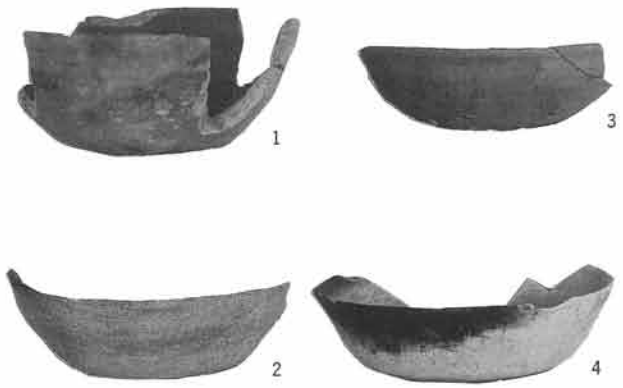
H128号住居跡出土遺物



H132号住居跡出土遺物

H130号住居跡出土遺物

H133号住居跡出土遺物



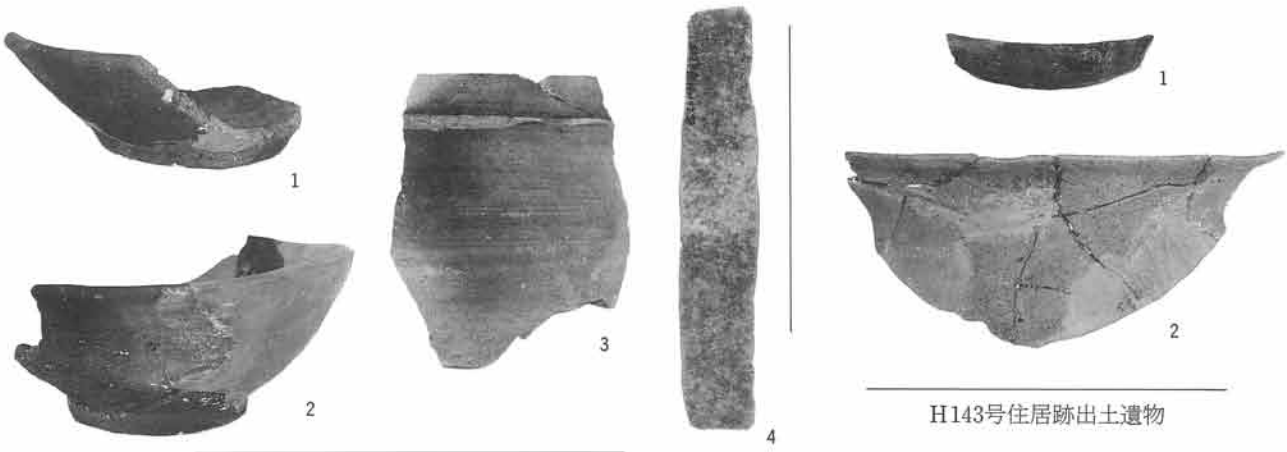
H135号住居跡出土遺物

H136・137号住居跡出土遺物

H138号住居跡出土遺物

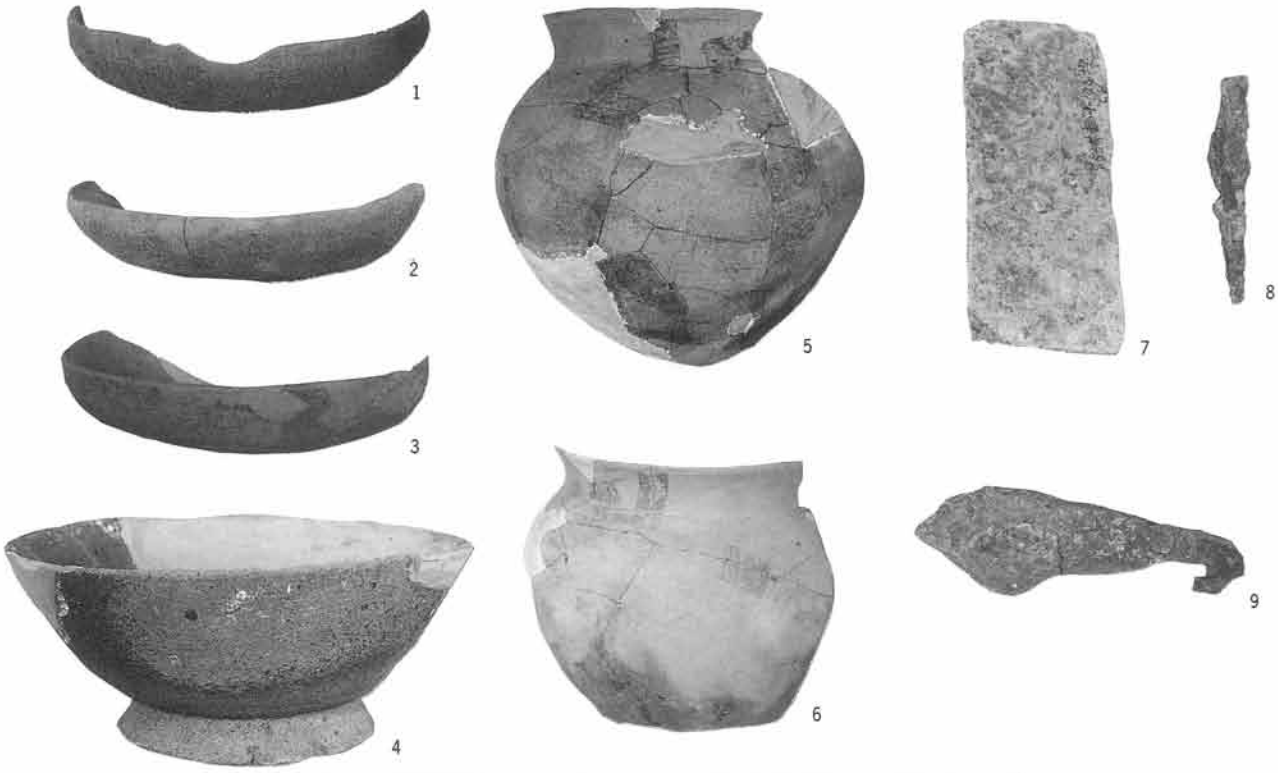
図版88

H140・141号住居跡出土遺物

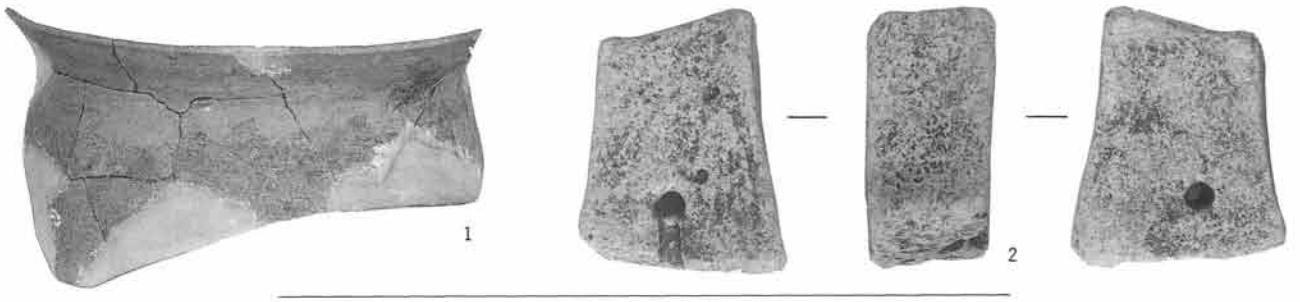


H142号住居跡出土遺物

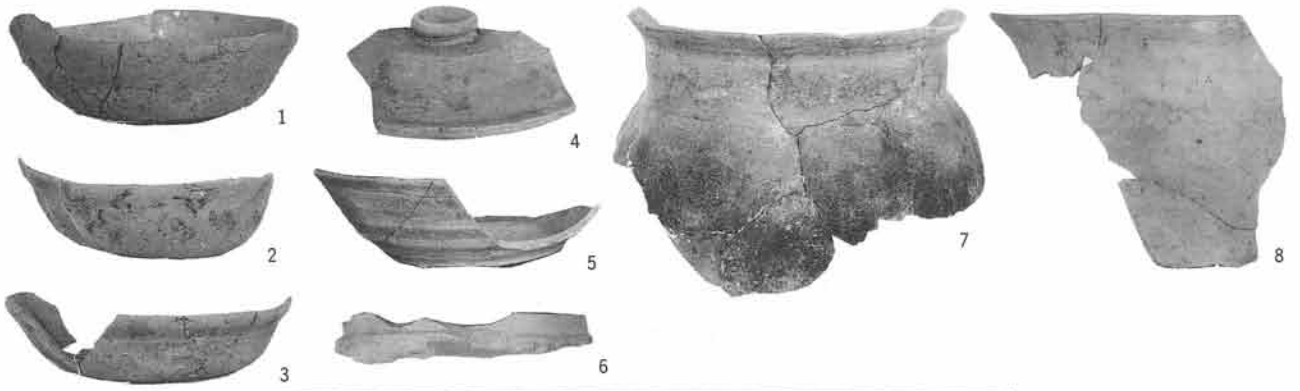
H143号住居跡出土遺物



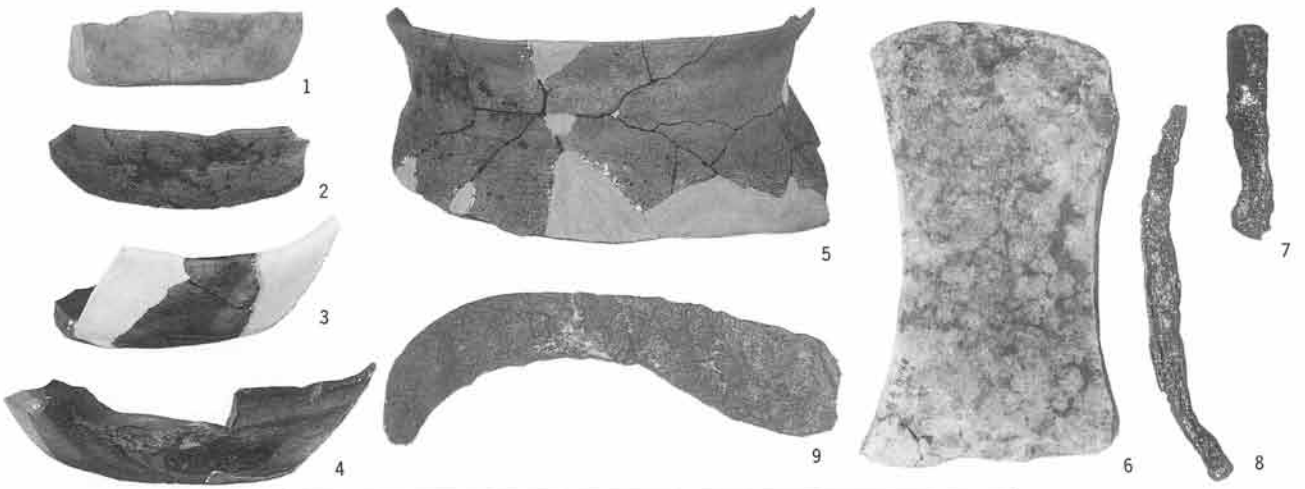
H144号住居跡出土遺物



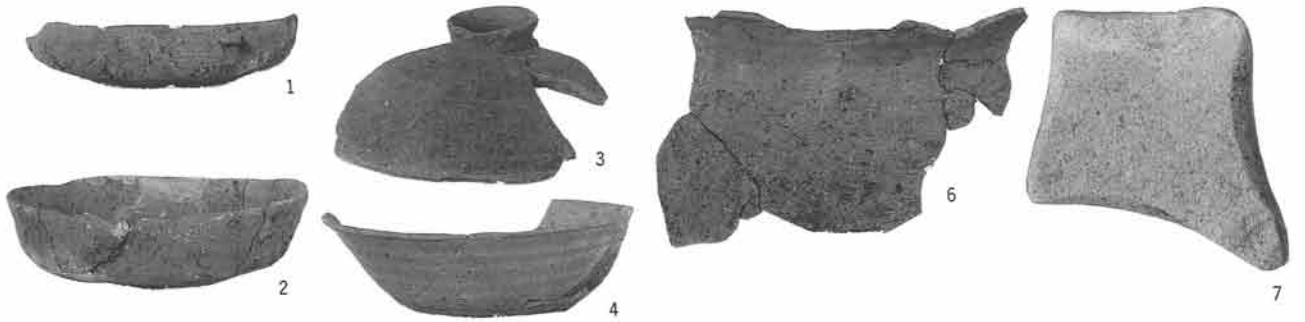
H145号住居跡出土遺物



H147号住居跡出土遺物



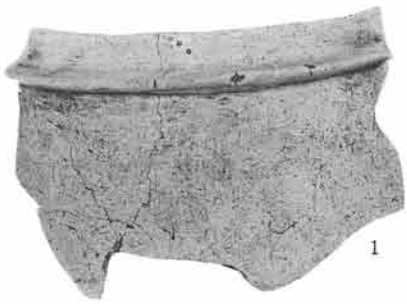
H148号住居跡出土遺物



H149号住居跡出土遺物

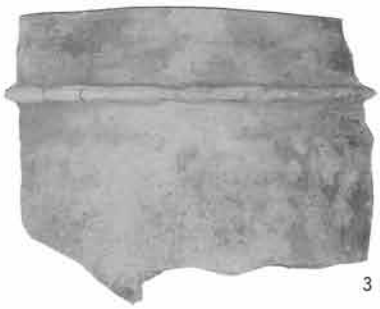
図版90

H150号住居跡出土遺物



H153号住居跡出土遺物

H152号住居跡出土遺物



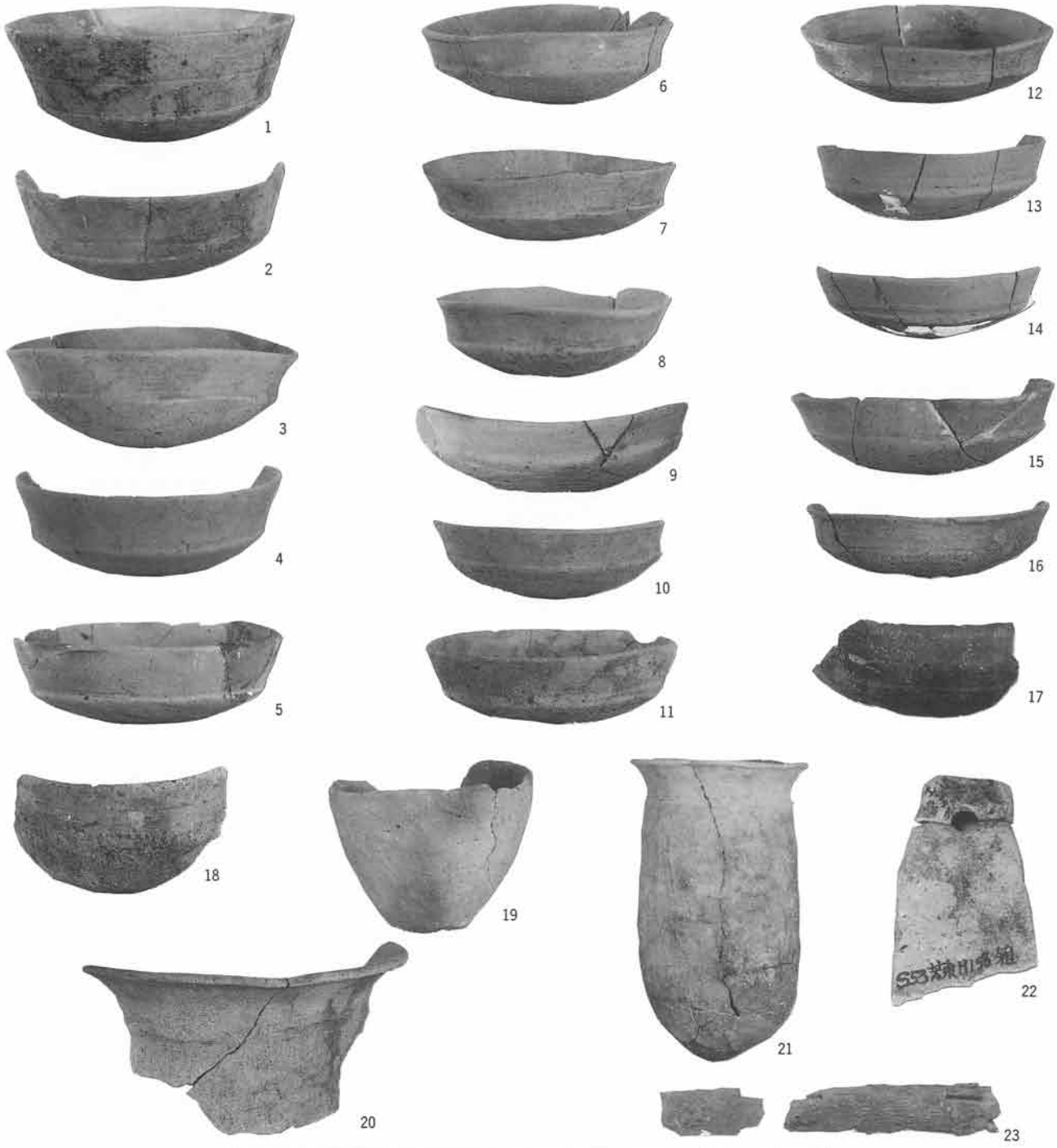
H154号住居跡出土遺物

H155号住居跡出土遺物

H156号住居跡出土遺物

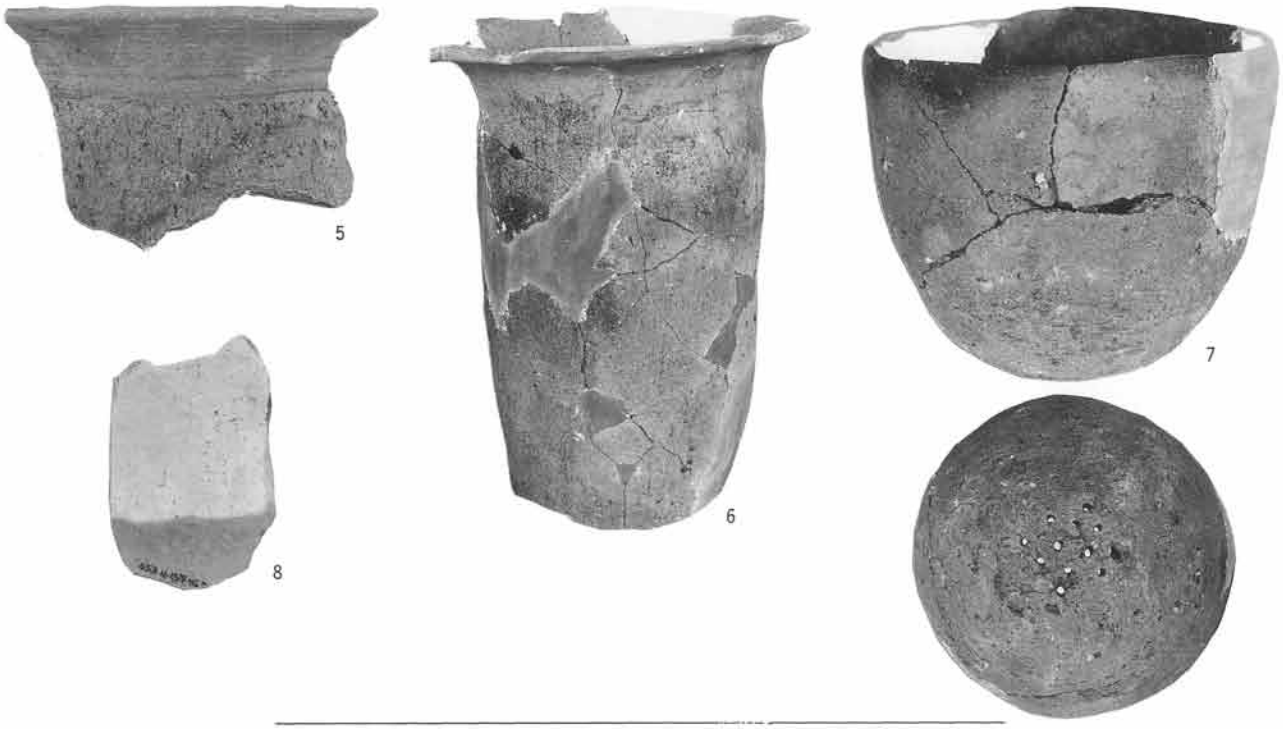
H157号住居跡出土遺物

図版92

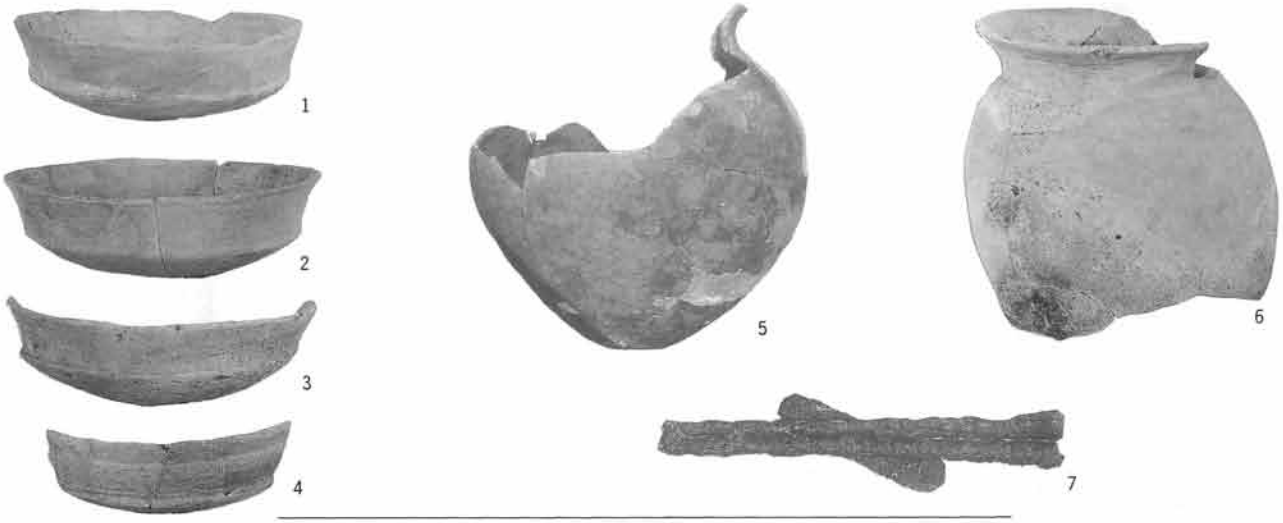


H158号住居跡出土遺物

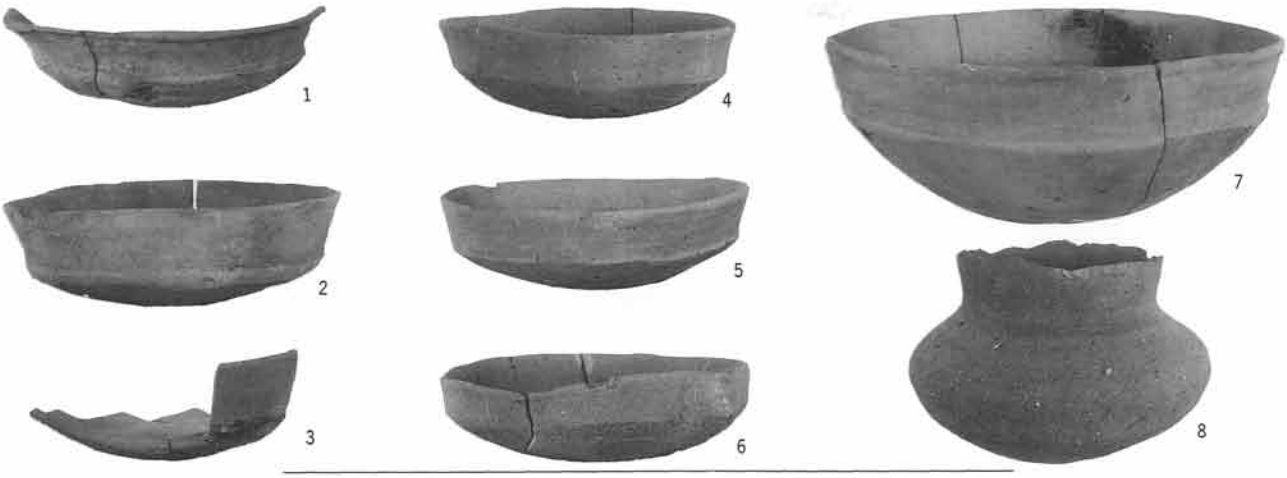
H159号住居跡出土遺物(1)



H159号住居跡出土遺物(2)



H160号住居跡出土遺物



H162号住居跡出土遺物(1)

図版94

9

10

11

H162号住居跡出土遺物(2)

1
2
3

5

H163号住居跡出土遺物

1

2

H165号住居跡出土遺物

1

4

2

5

3

H164号住居跡出土遺物

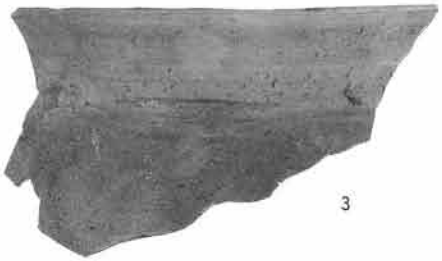
1

2

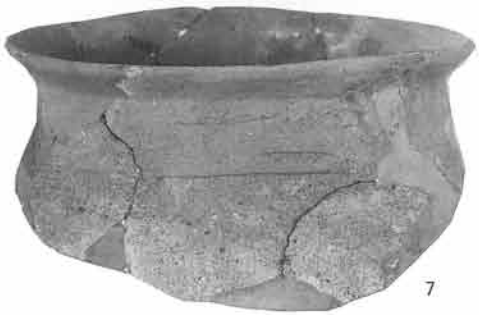
3

4

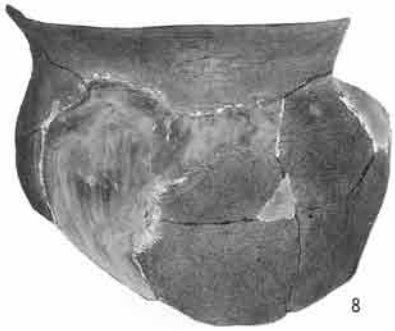
H166号住居跡出土遺物



H167号住居跡出土遺物

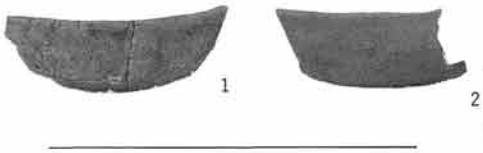


H168号住居跡出土遺物



H169号住居跡出土遺物

図版96



H170号住居跡出土遺物

H173号住居跡出土遺物

H171号住居跡出土遺物

H174号住居跡出土遺物

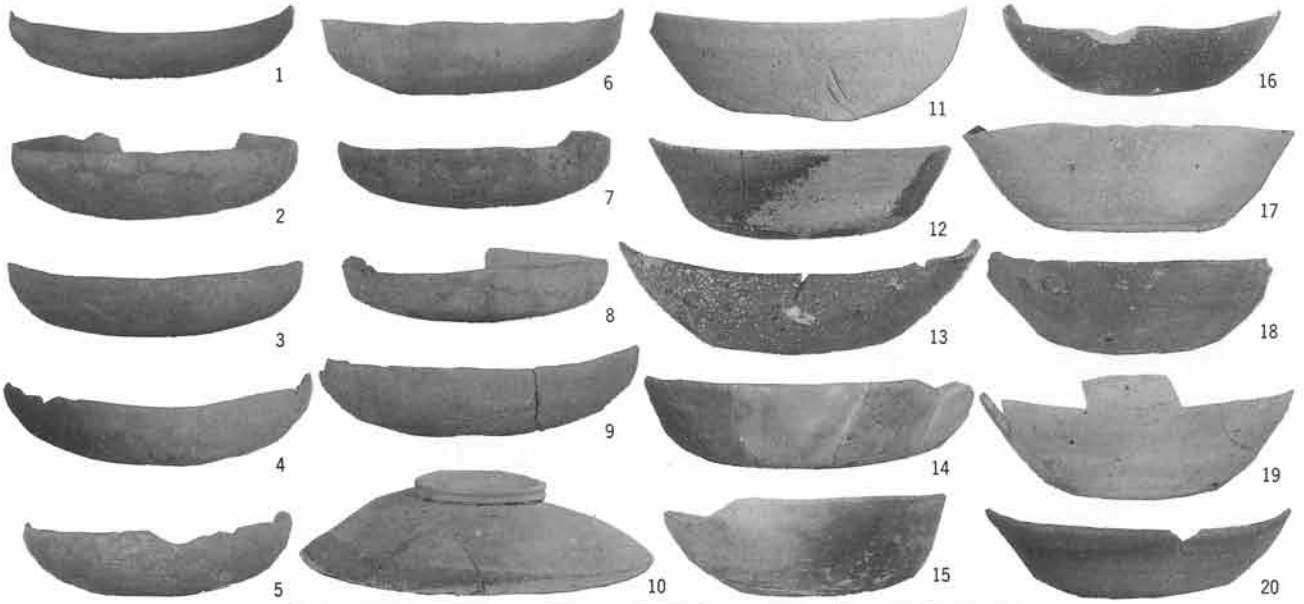
H175号住居跡出土遺物

H176号住居跡出土遺物

H177号住居跡出土遺物

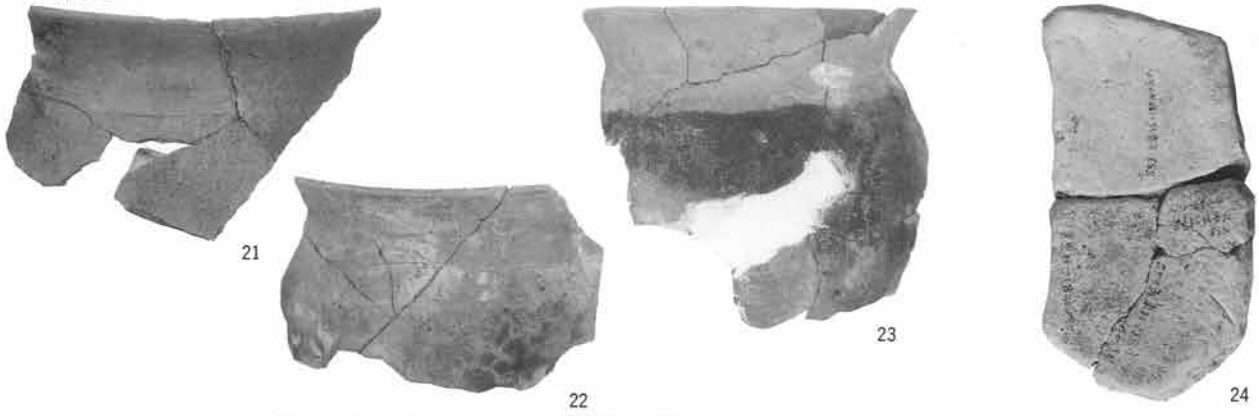
H178号住居跡出土遺物

H179号住居跡出土遺物



H180号住居跡出土遺物(1)

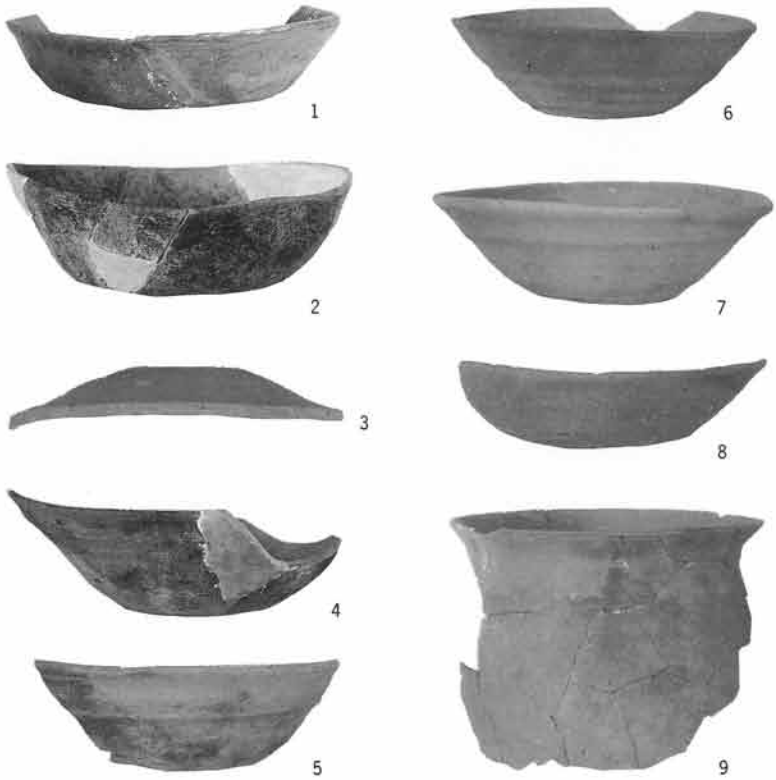
図版98



H180号住居跡出土遺物(2)

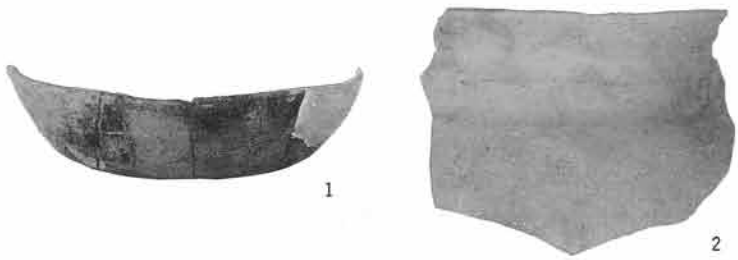
H181号住居跡出土遺物

H183号住居跡出土遺物

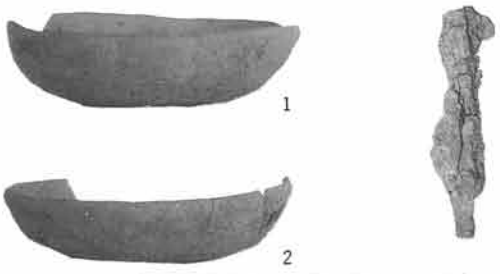


H182号住居跡出土遺物

H184号住居跡出土遺物

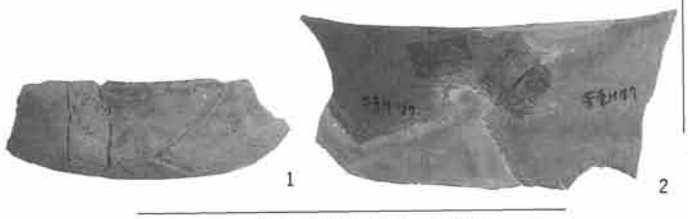


H185号住居跡出土遺物



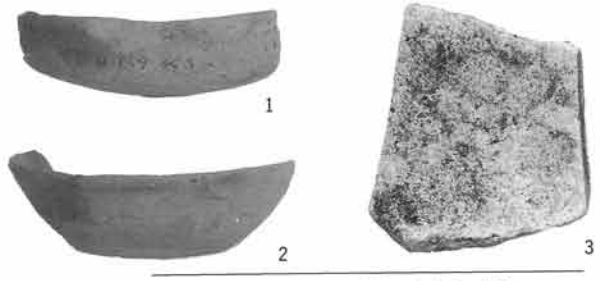
H186号住居跡出土遺物

H188号住居跡出土遺物

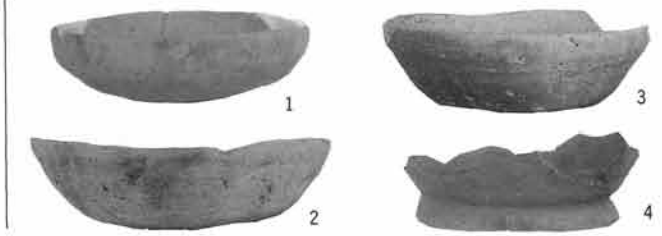


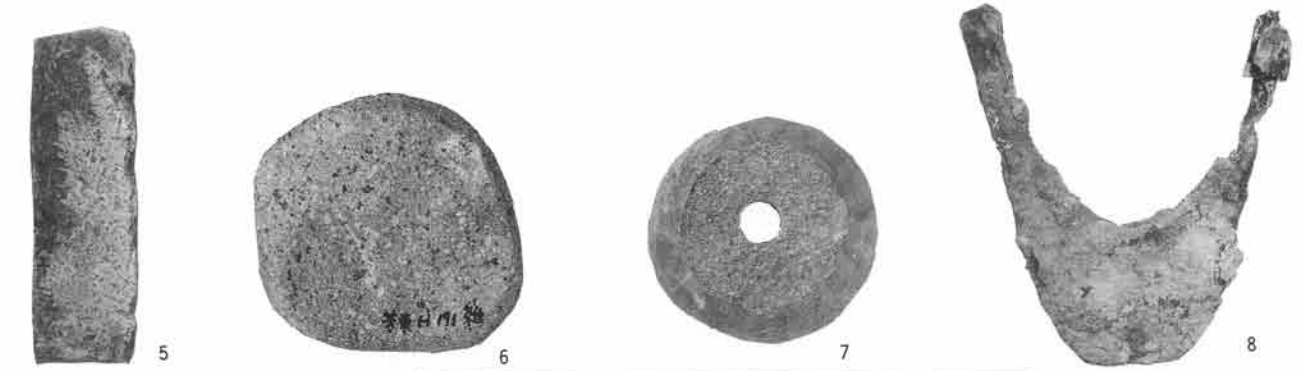
H187号住居跡出土遺物

H190号住居跡出土遺物



H189号住居跡出土遺物

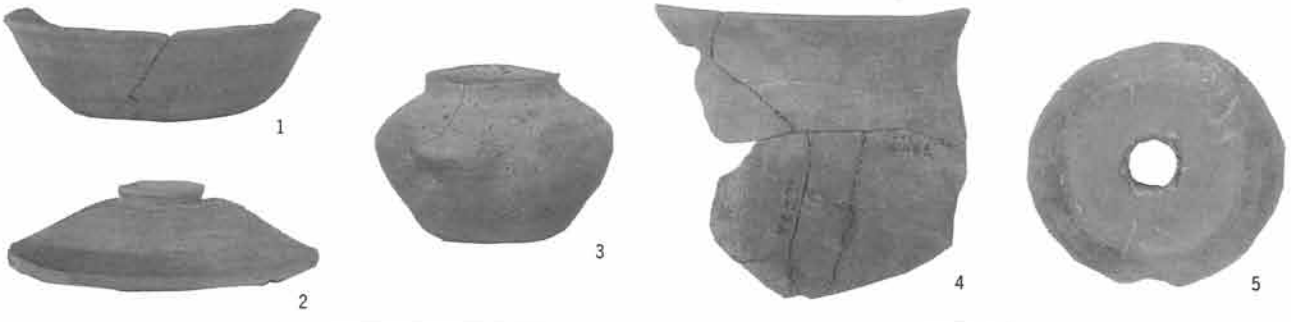




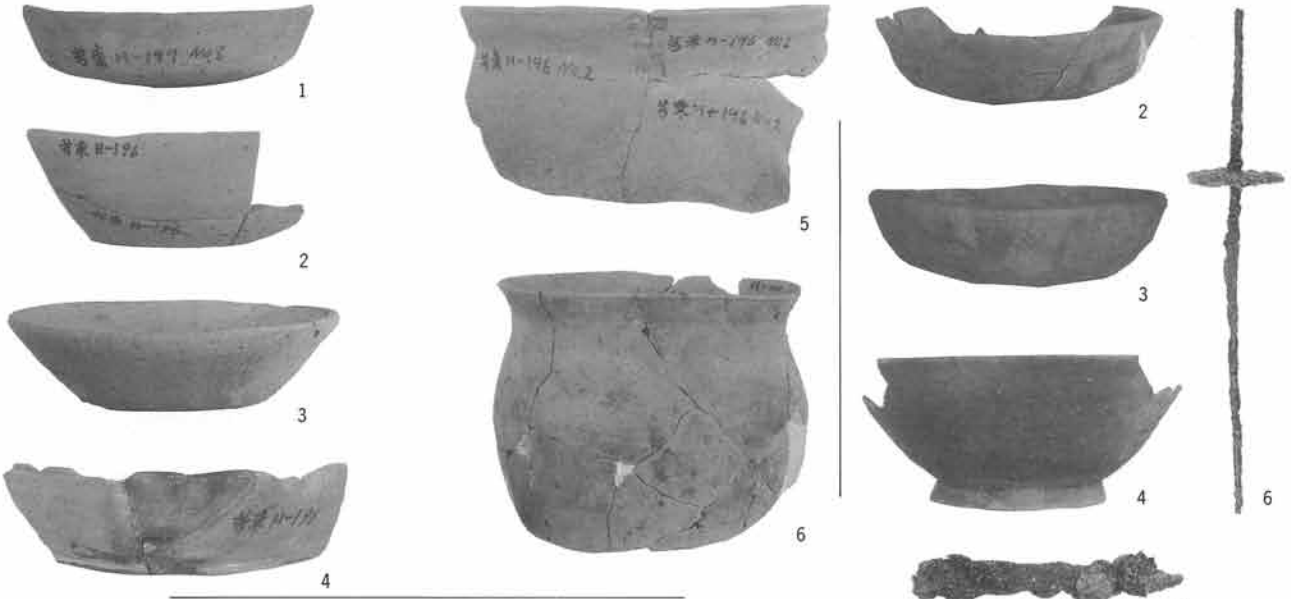
H191号住居跡出土遺物

H192号住居跡出土遺物

図版100

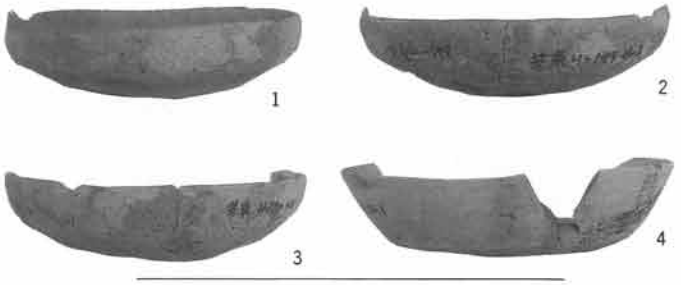


H194号住居跡出土遺物

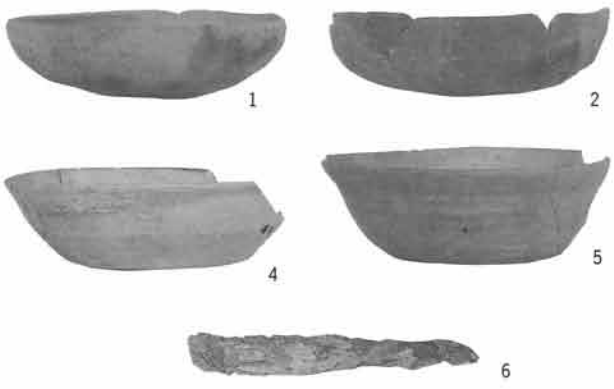


H196号住居跡出土遺物

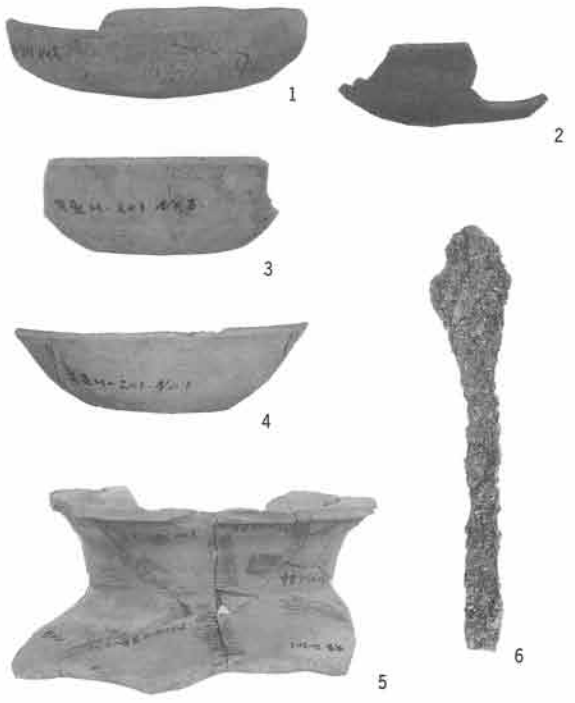
H197号住居跡出土遺物



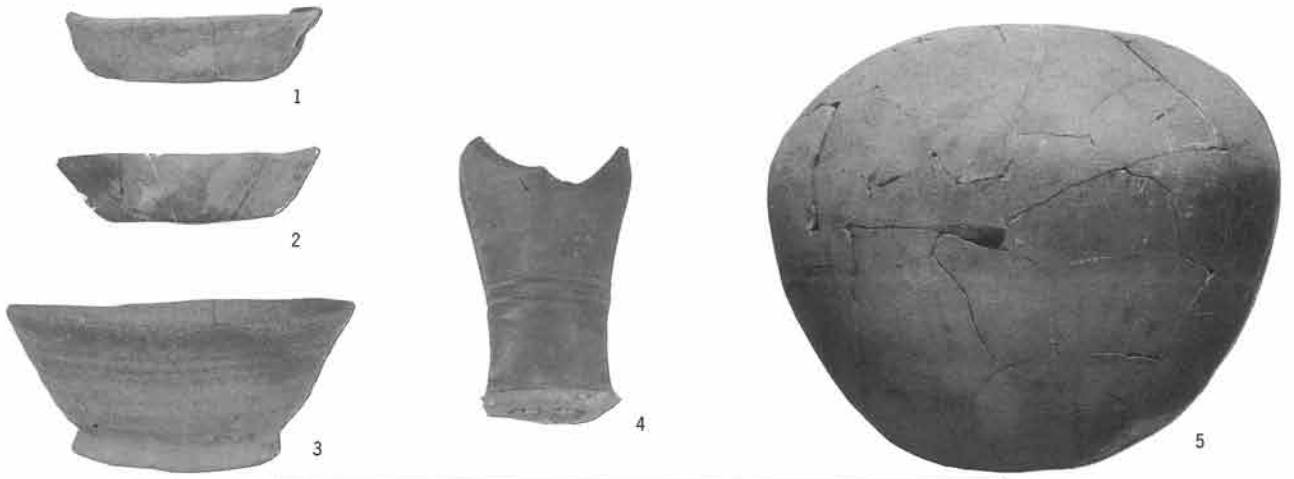
H199号住居跡出土遺物



H200号住居跡出土遺物

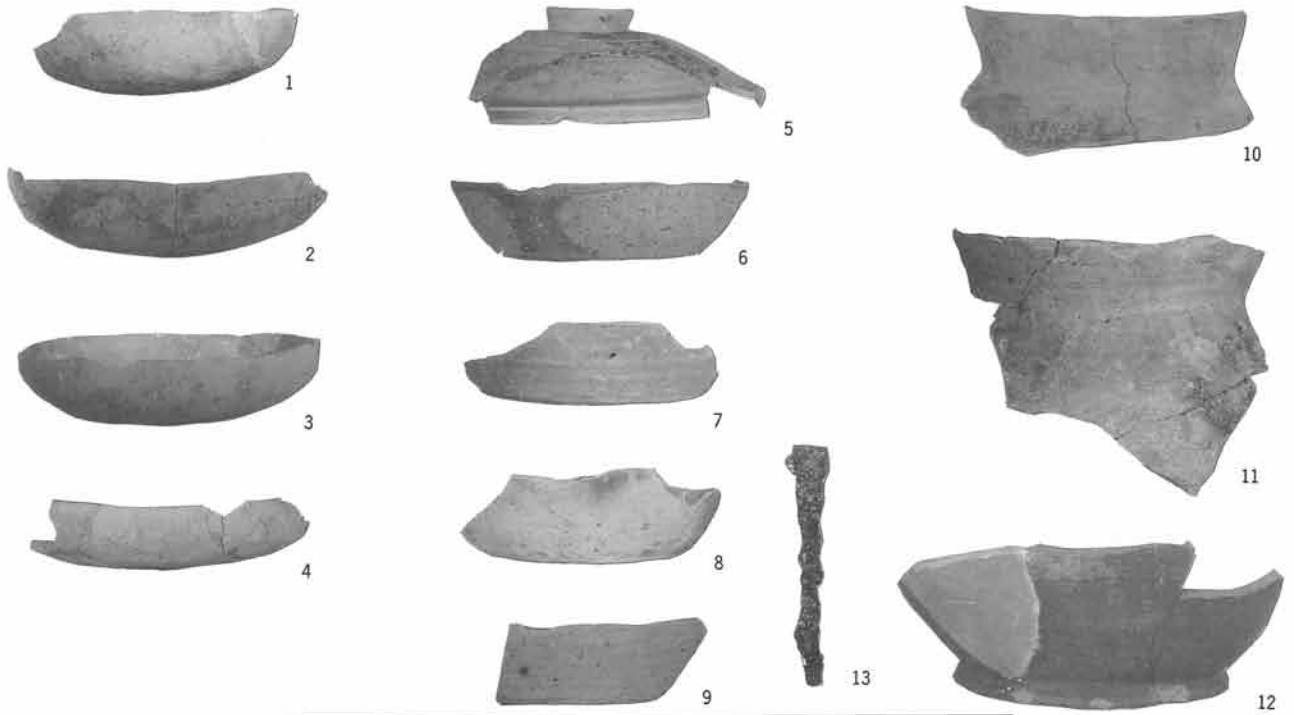


H201号住居跡出土遺物



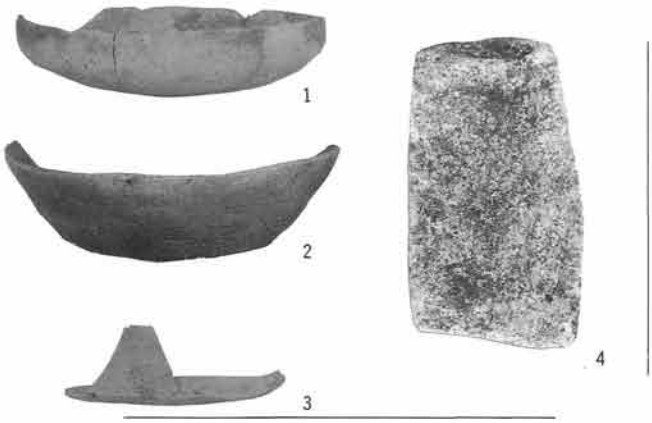
H202号住居跡出土遺物

H203号住居跡出土遺物



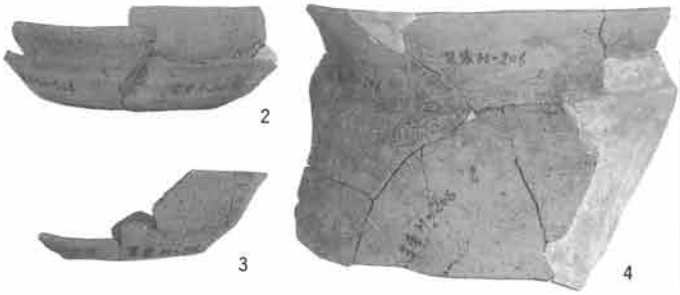
H204号住居跡出土遺物

図版102

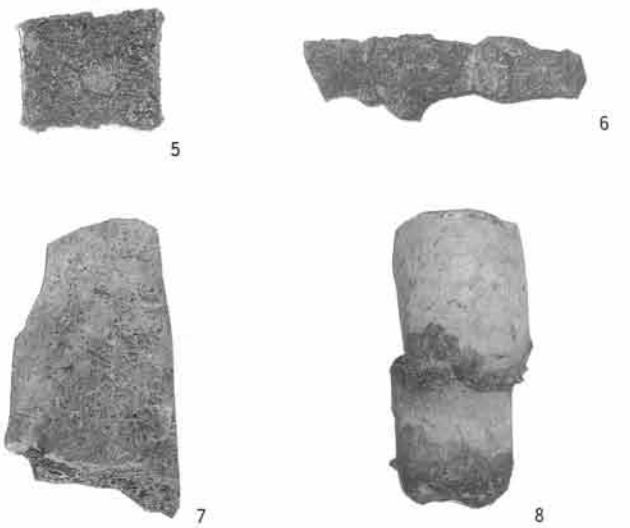


H205号住居跡出土遺物

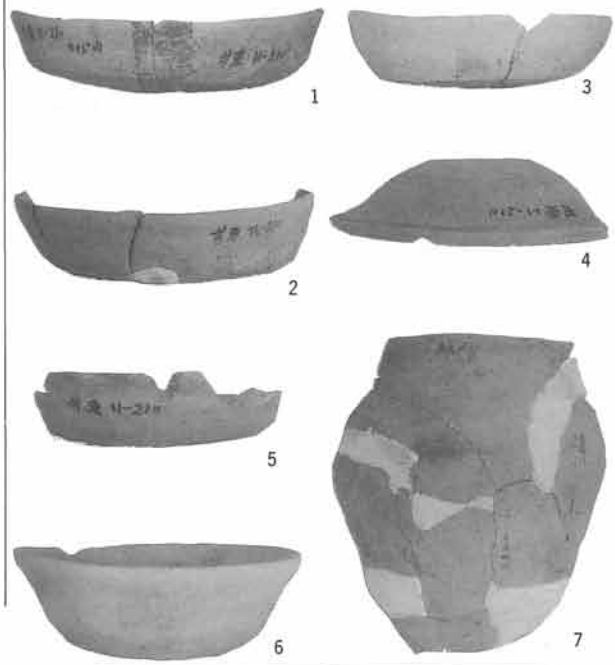
H207号住居跡出土遺物



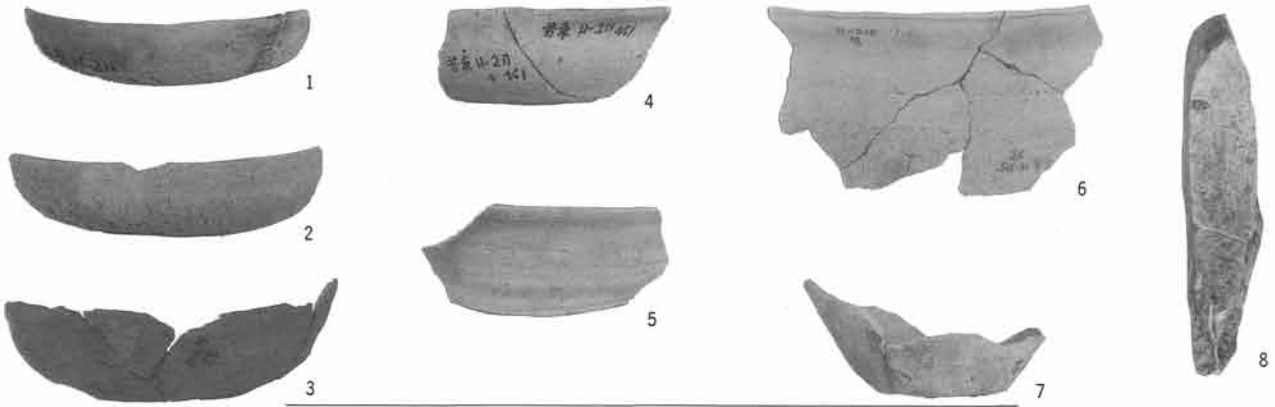
H209号住居跡出土遺物



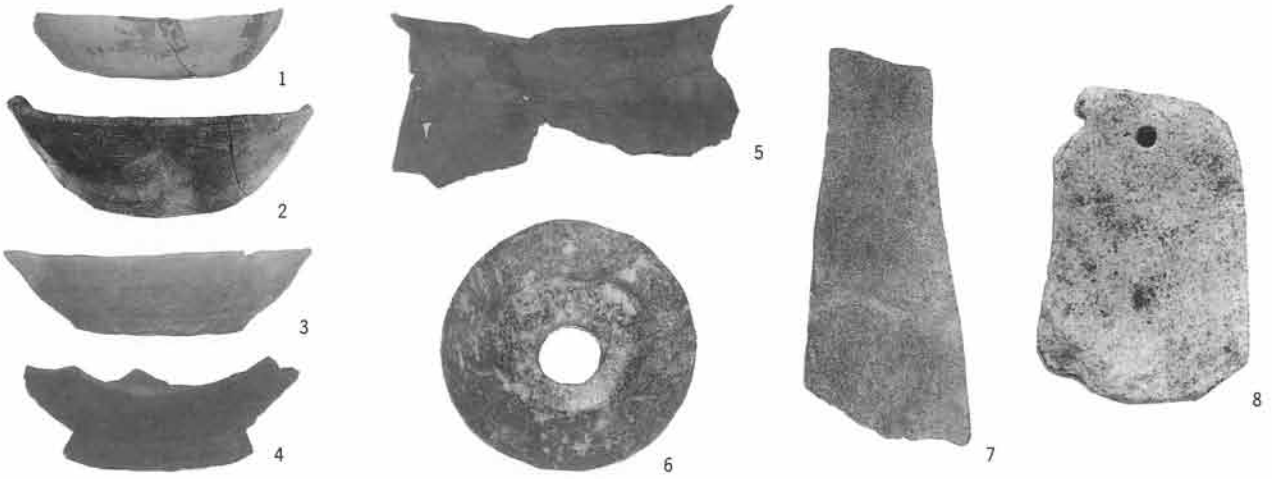
H206号住居跡出土遺物



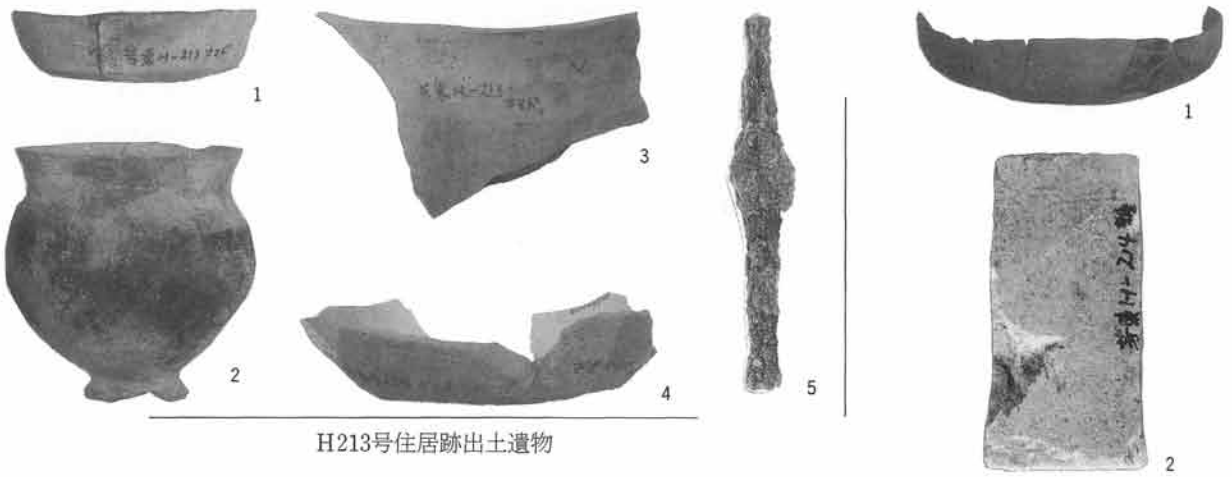
H210号住居跡出土遺物



H211・215号住居跡出土遺物

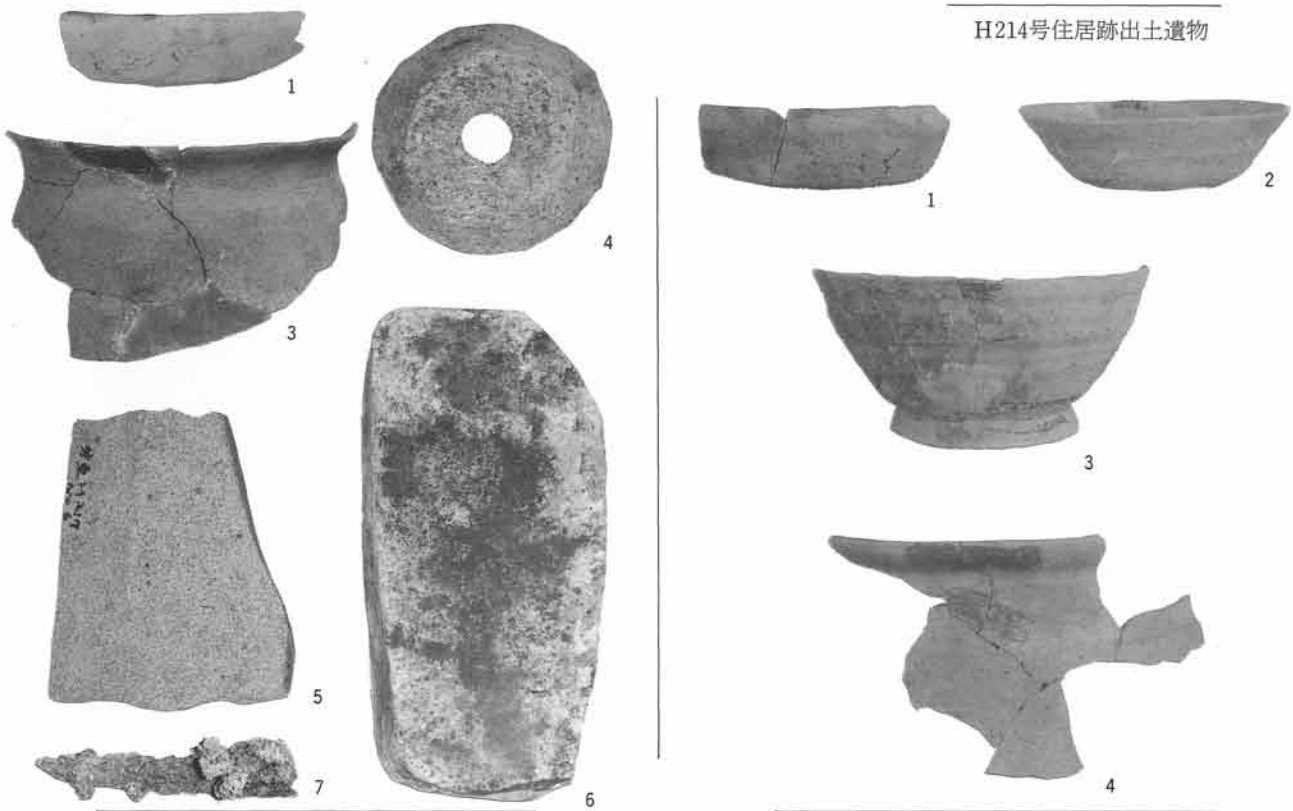


H212号住居跡出土遺物



H213号住居跡出土遺物

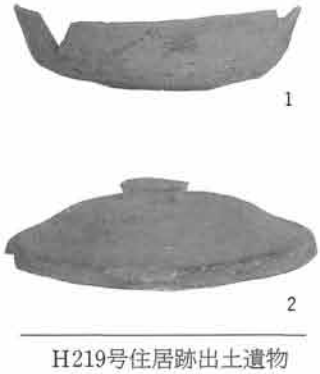
H214号住居跡出土遺物



H217号住居跡出土遺物

H218号住居跡出土遺物

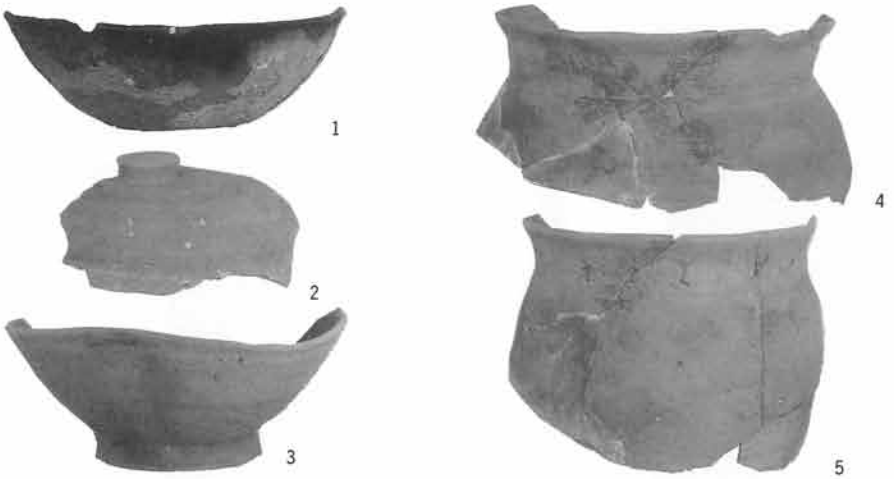
図版104



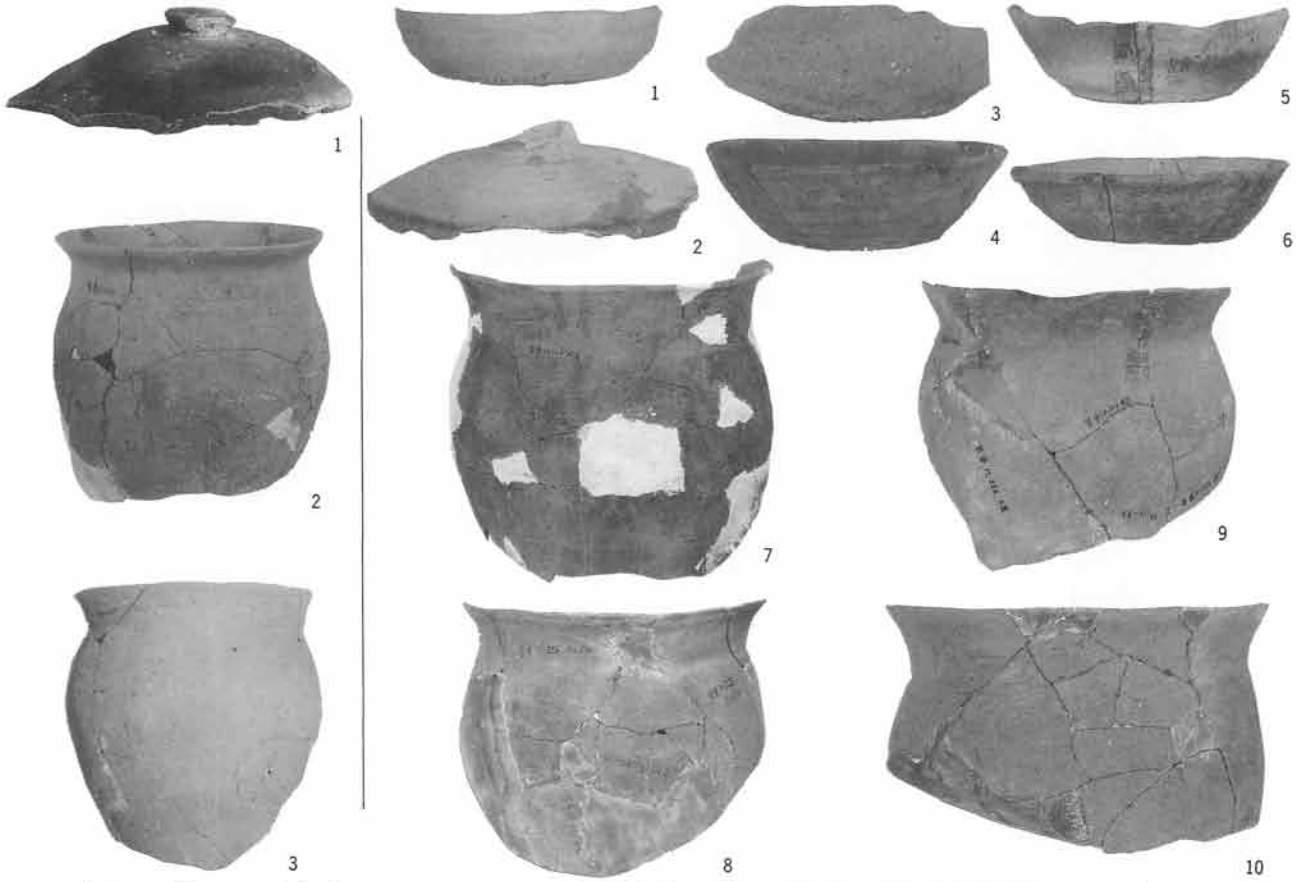
H219号住居跡出土遺物

H221号住居跡出土遺物

H222号住居跡出土遺物

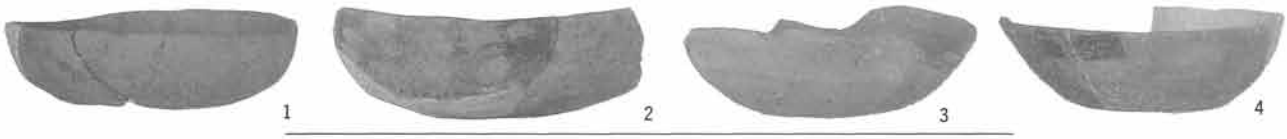


H224号住居跡出土遺物



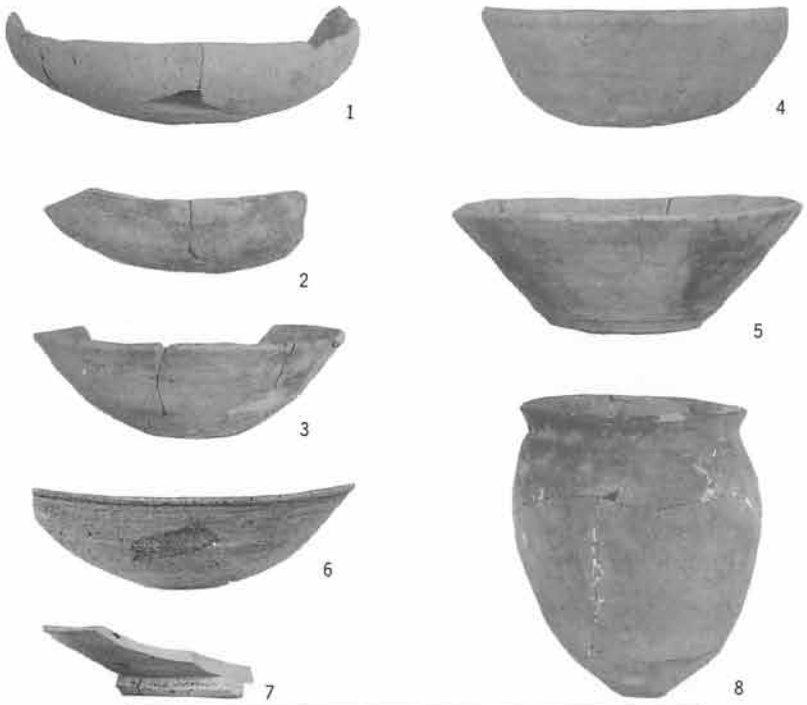
H225号住居跡出土遺物

H226号住居跡出土遺物



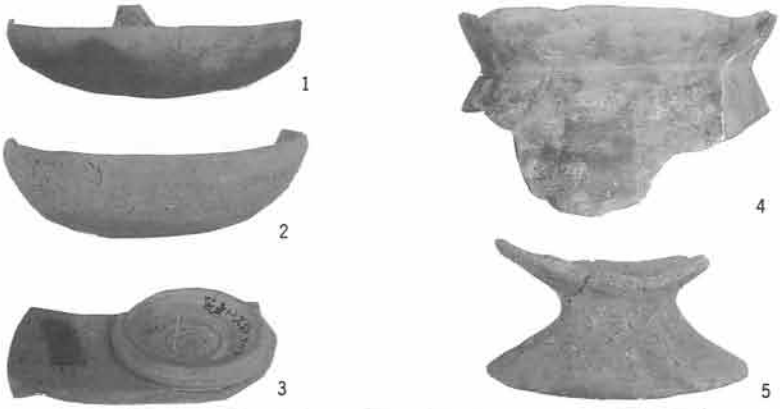
H228号住居跡出土遺物

H229号住居跡出土遺物



H231号住居跡出土遺物

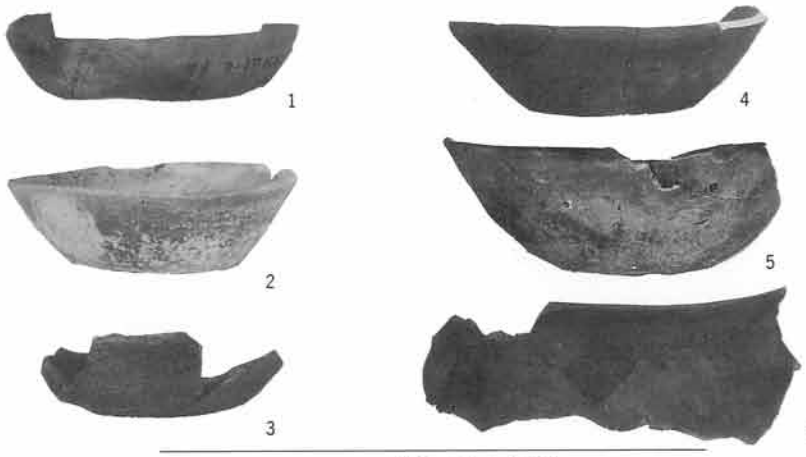
H232号住居跡出土遺物



H233号住居跡出土遺物

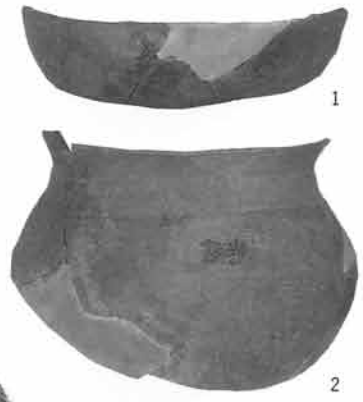
H234号住居跡出土遺物

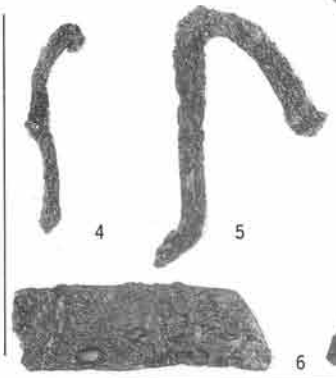
図版106



H235号住居跡出土遺物

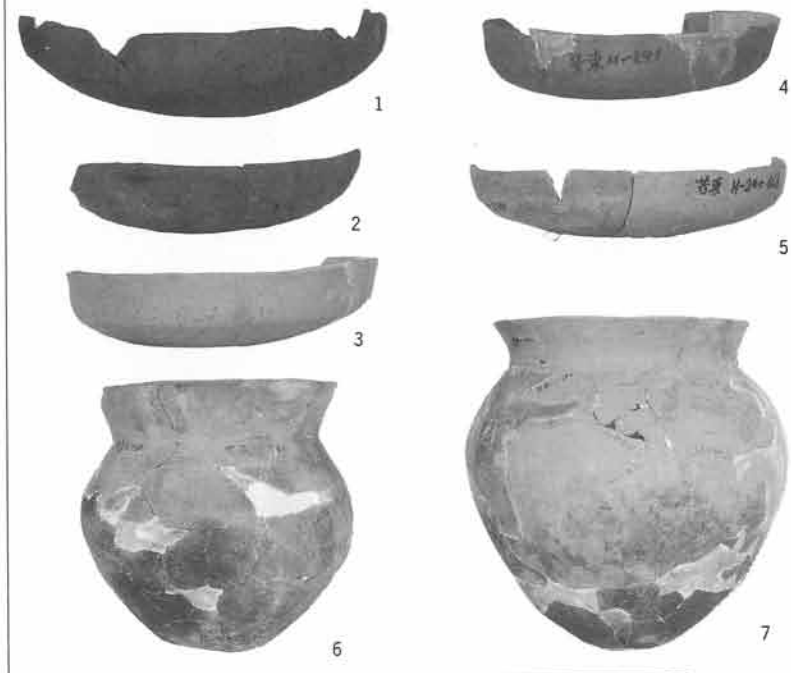
H236号住居跡出土遺物





H237号住居跡出土遺物

H238号住居跡出土遺物

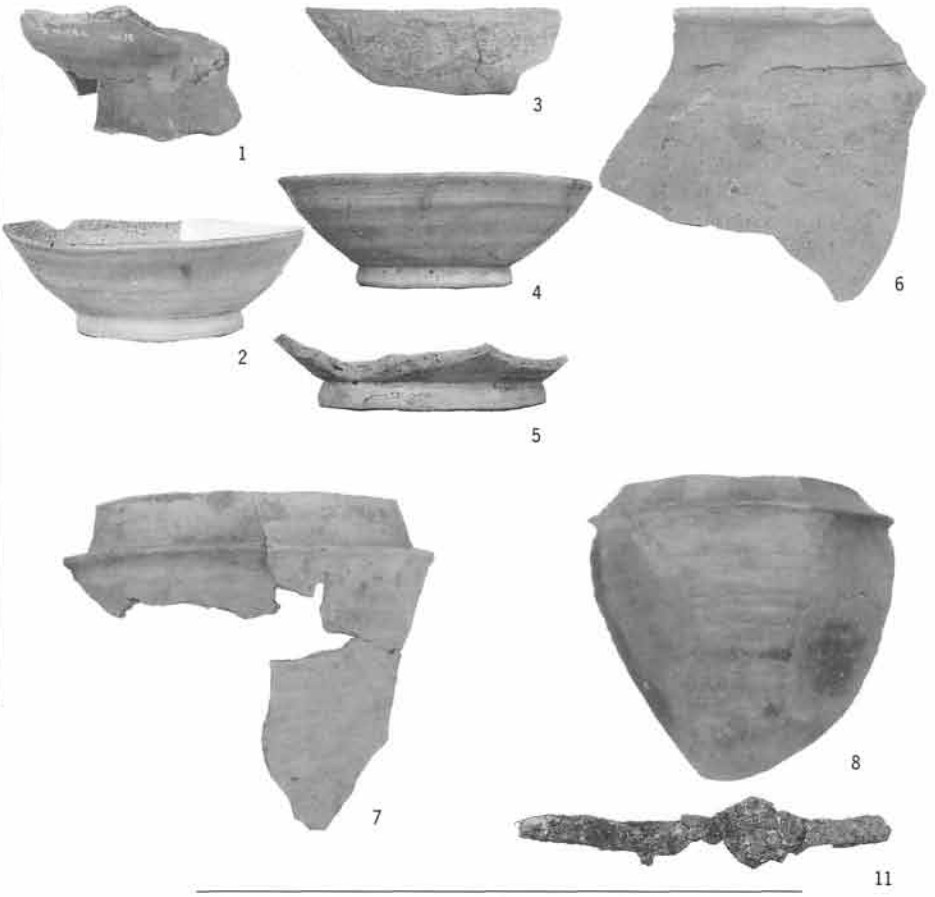


H240号住居跡出土遺物

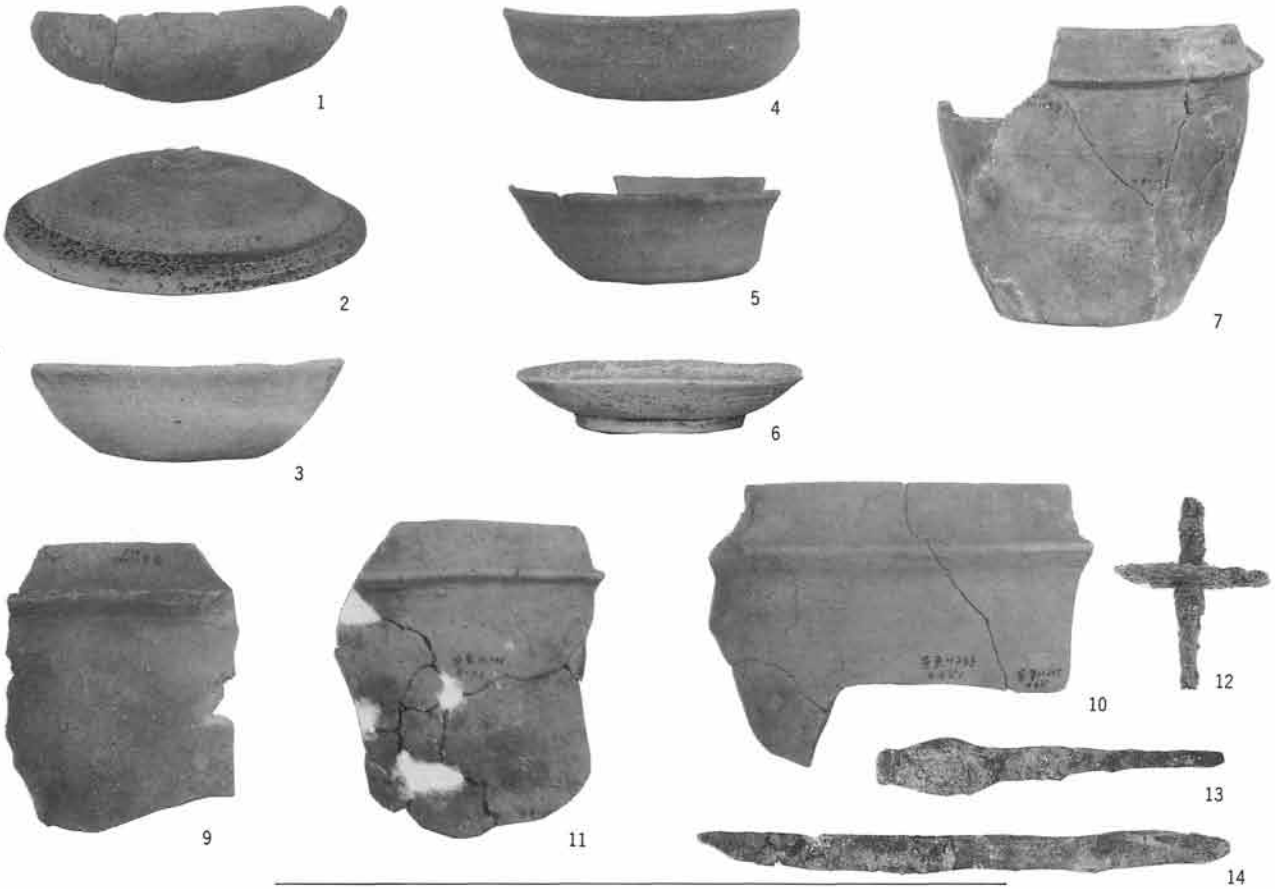
H241号住居跡出土遺物

H239号住居跡出土遺物

H242号住居跡出土遺物



H244号住居跡出土遺物



H245号住居跡出土遺物

図版108

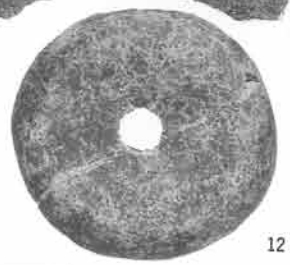
H246号住居跡出土遺物

H247号住居跡出土遺物

H249号住居跡出土遺物

H250号住居跡出土遺物

H251号住居跡出土遺物



H253号住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

H255号住居跡出土遺物

1

2

H256号住居跡出土遺物

1

2

3

9

10

11

4

5

6

12

13

14

7

8

15

16

H257・258号住居跡出土遺物

図版110

1

2

H260号住居跡出土遺物

1

2

3

H261号住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

H264号住居跡出土遺物

1

2

3

H266号住居跡出土遺物

1

2

3

4

5

H323・324号住居跡出土遺物

1

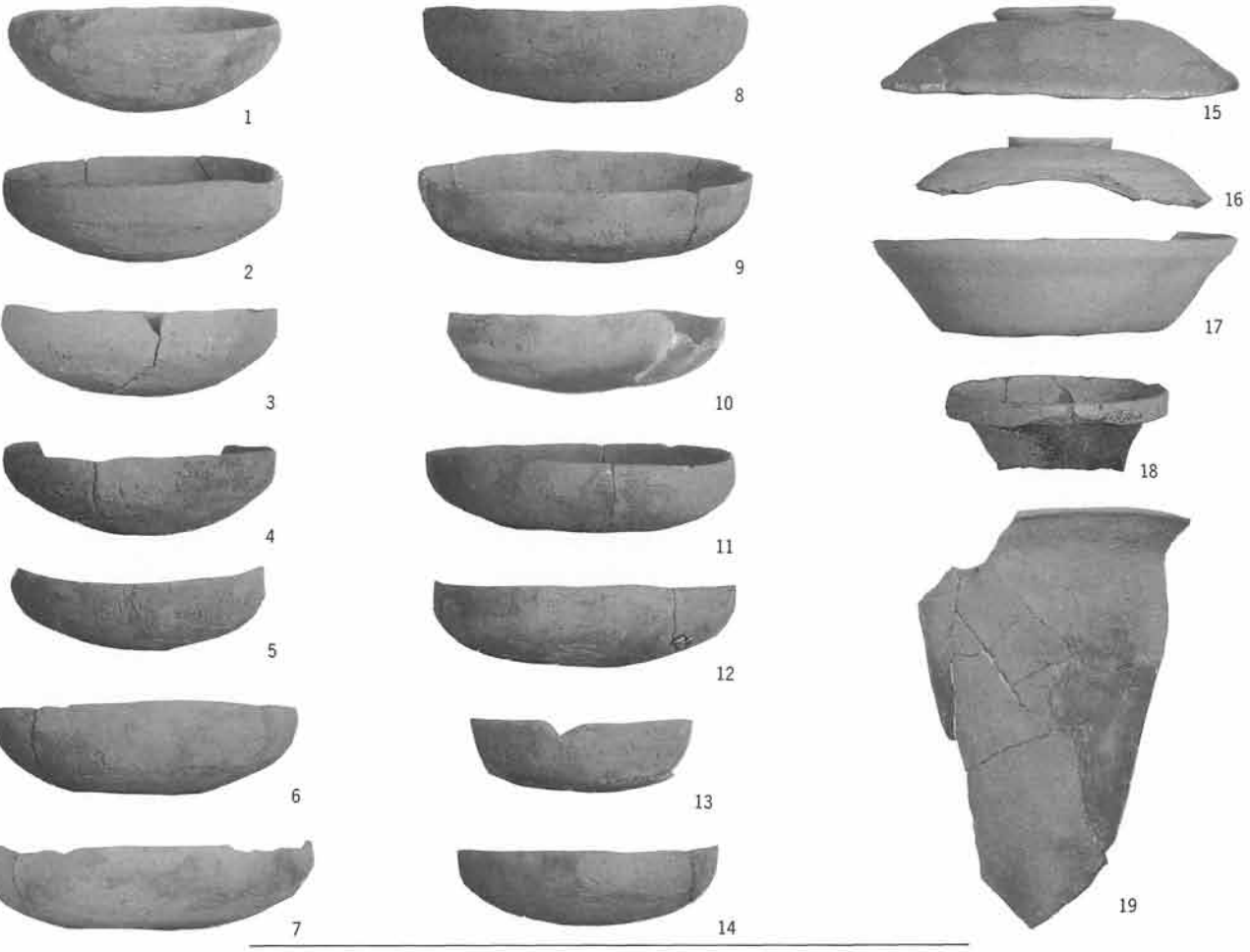
H265号住居跡出土遺物

1

2

4

H321号住居跡出土遺物



H325号住居跡出土遺物

H327号住居跡出土遺物

H328号住居跡出土遺物

H329号住居跡出土遺物

図版112

1

H330号住居跡出土遺物

1

3

H331号住居跡出土遺物

1

H332号住居跡出土遺物

1

2

3

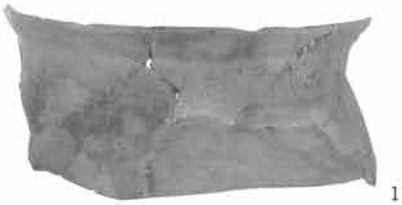
H333号住居跡出土遺物

1

2

3

H334号住居跡出土遺物


1

H336号住居跡出土遺物

1

3

4

H335号住居跡出土遺物

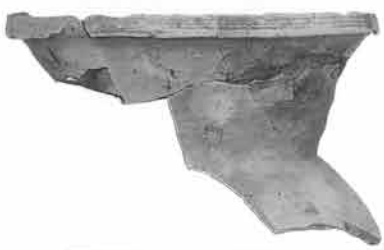
1

2

H337号住居跡出土遺物

1

2


3

4

5

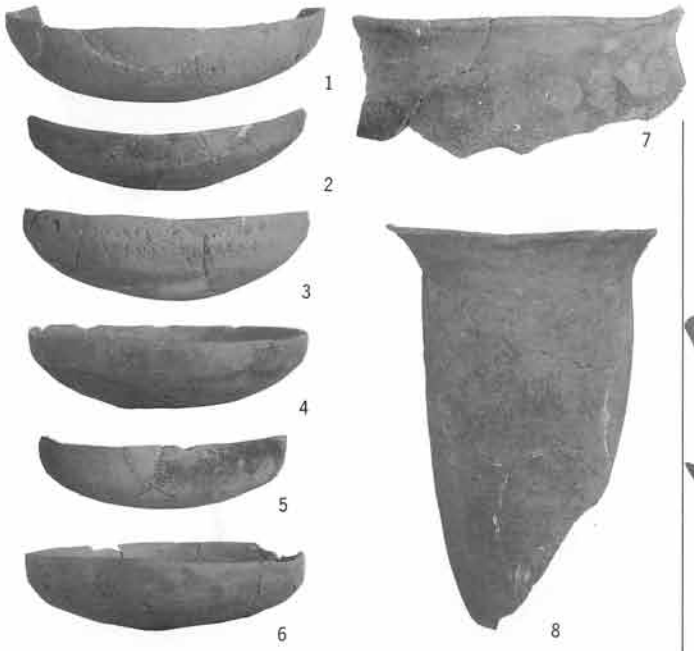
H338号住居跡出土遺物

H339号住居跡出土遺物

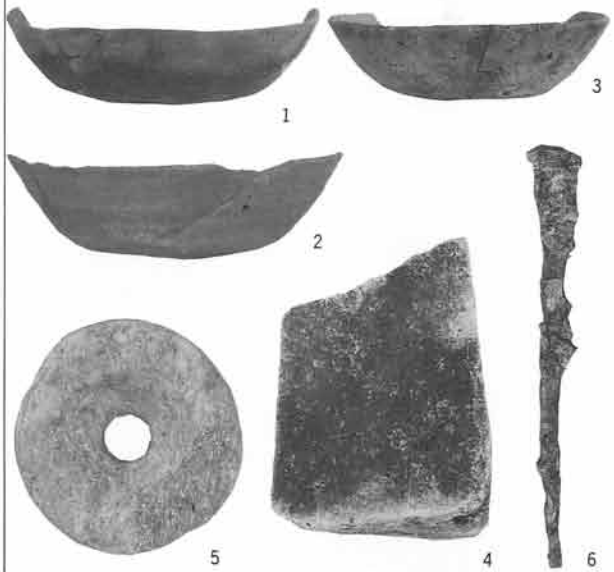
H341号住居跡出土遺物

H342号住居跡出土遺物

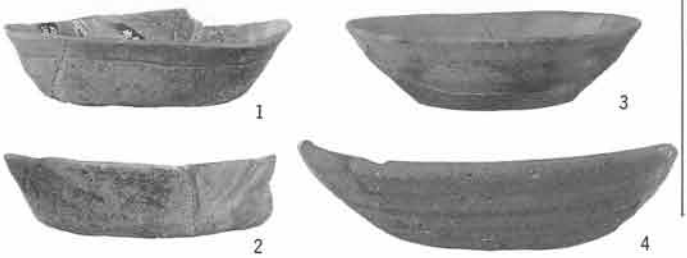
H343号住居跡出土遺物

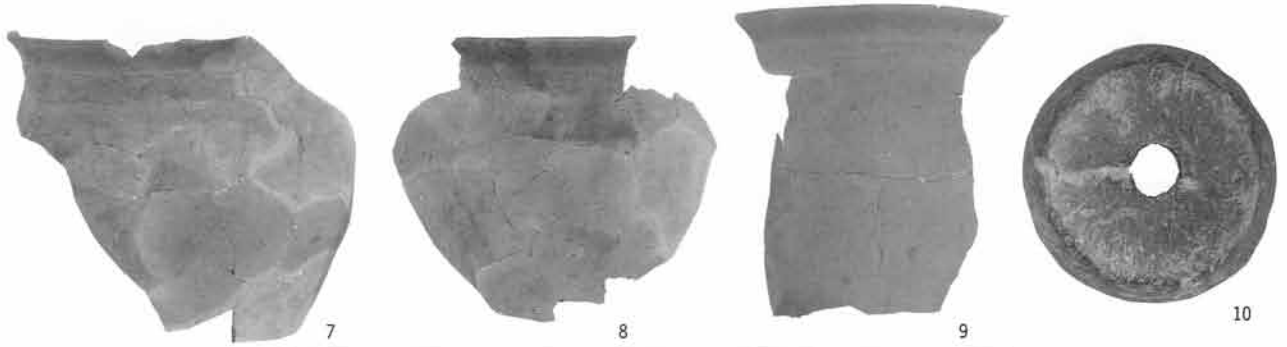


H340号住居跡出土遺物



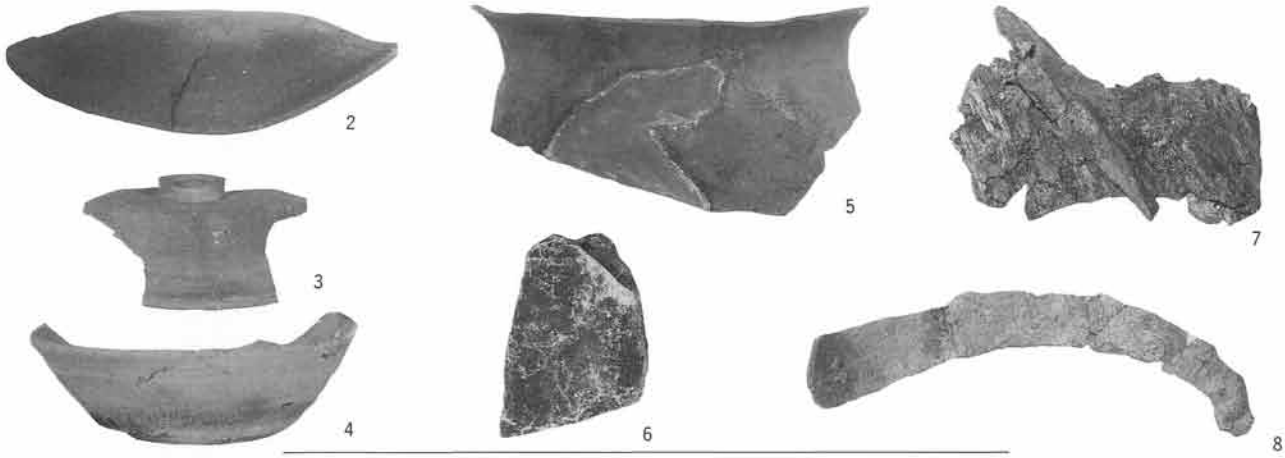
H345号住居跡出土遺物





H344号住居跡出土遺物

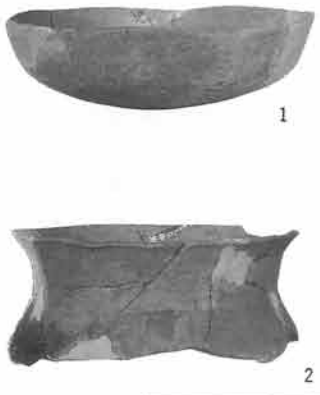
図版114



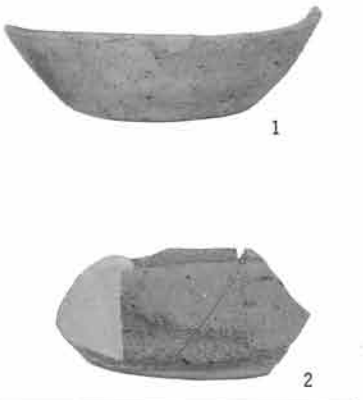
H347・348号住居跡出土遺物

H349号住居跡出土遺物

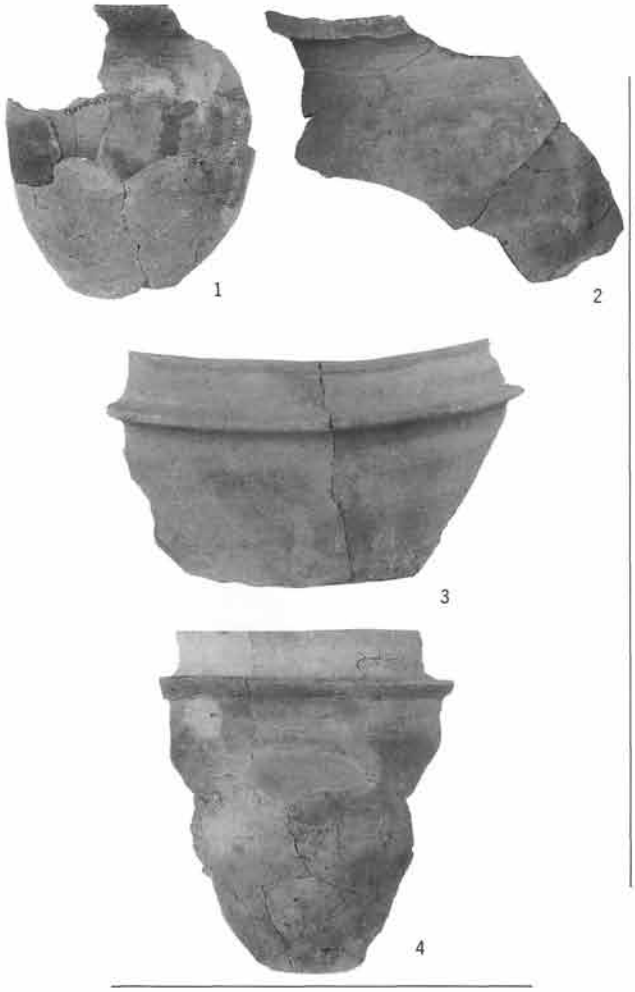
H350号住居跡出土遺物



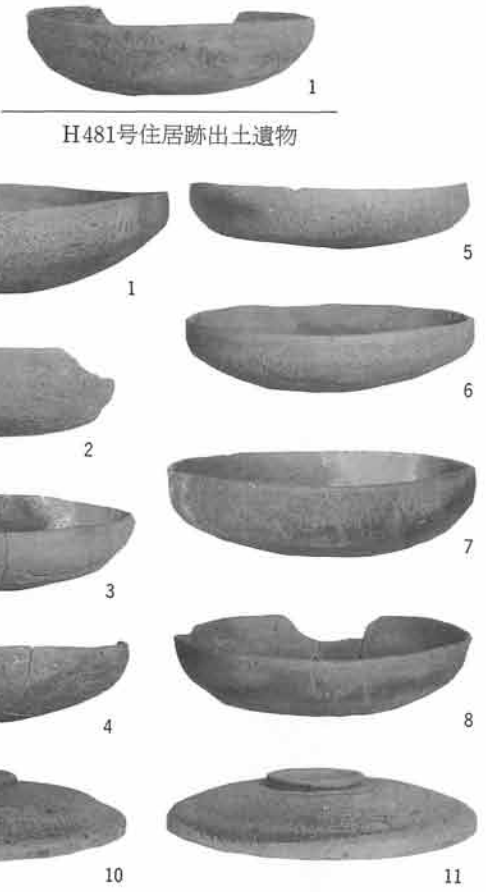
H351号住居跡出土遺物



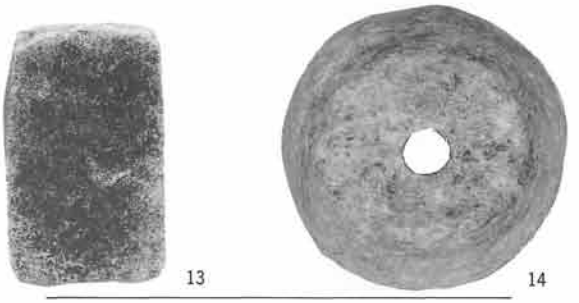
H352号住居跡出土遺物



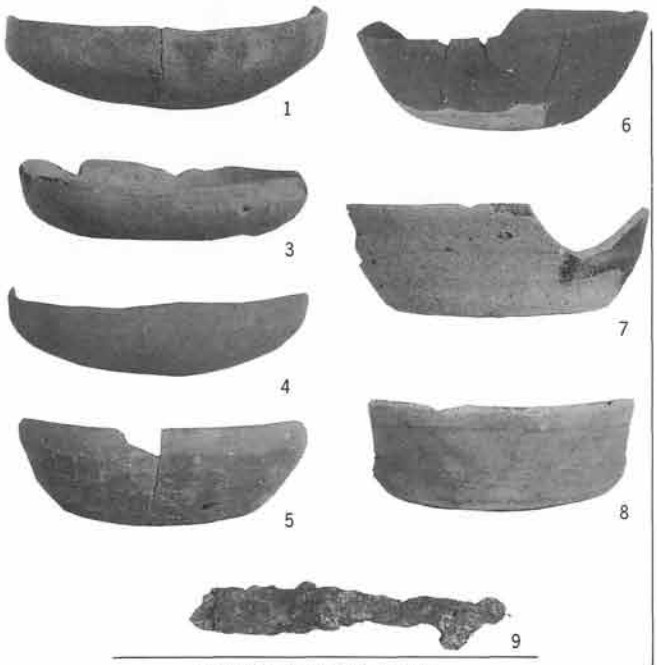
H480号住居跡出土遺物



H481号住居跡出土遺物



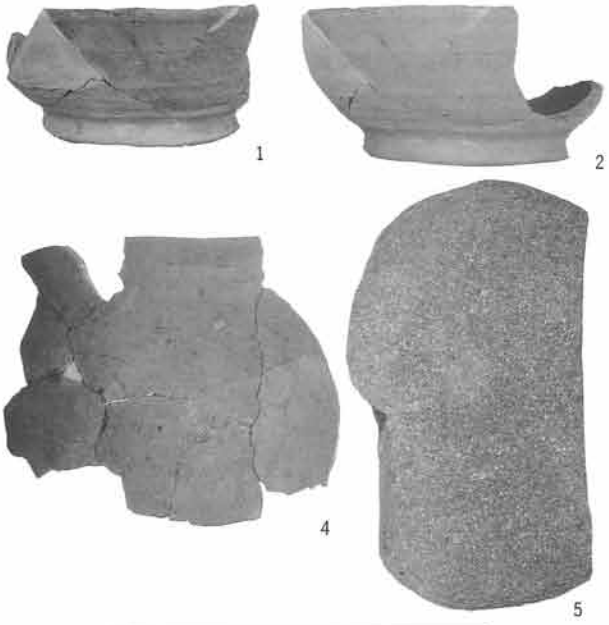
H482号住居跡出土遺物



H483号住居跡出土遺物

H485号住居跡出土遺物

図版116



H486号住居跡出土遺物

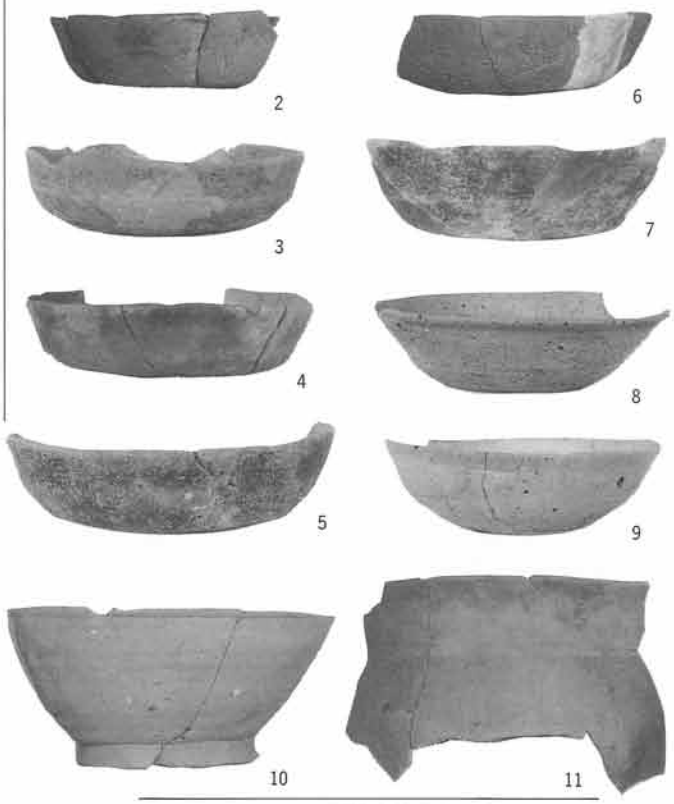
H488号住居跡出土遺物

H490号住居跡出土遺物

H491号住居跡出土遺物

H492号住居跡出土遺物

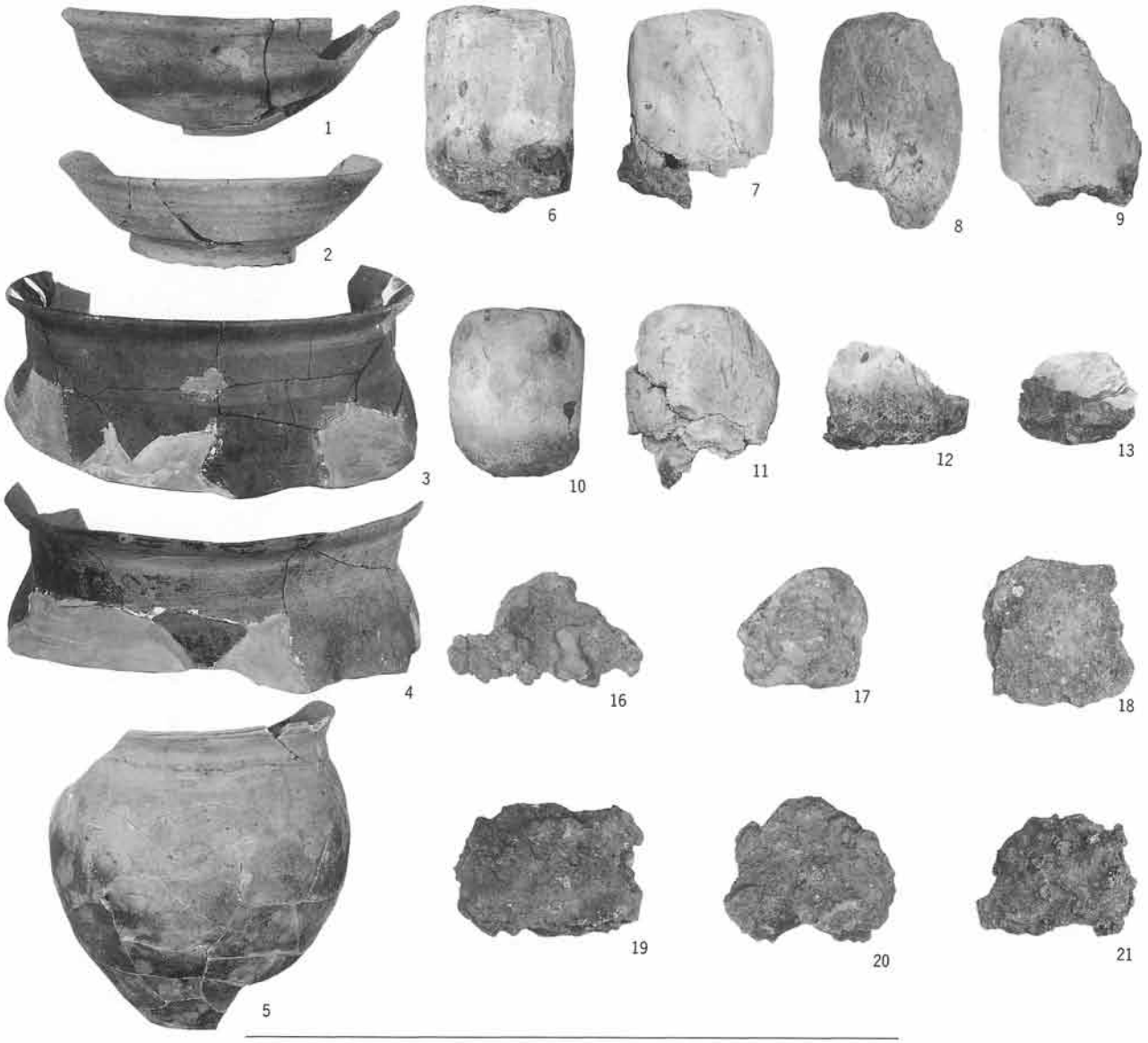
H487号住居跡出土遺物



H489号住居跡出土遺物

H493号住居跡出土遺物

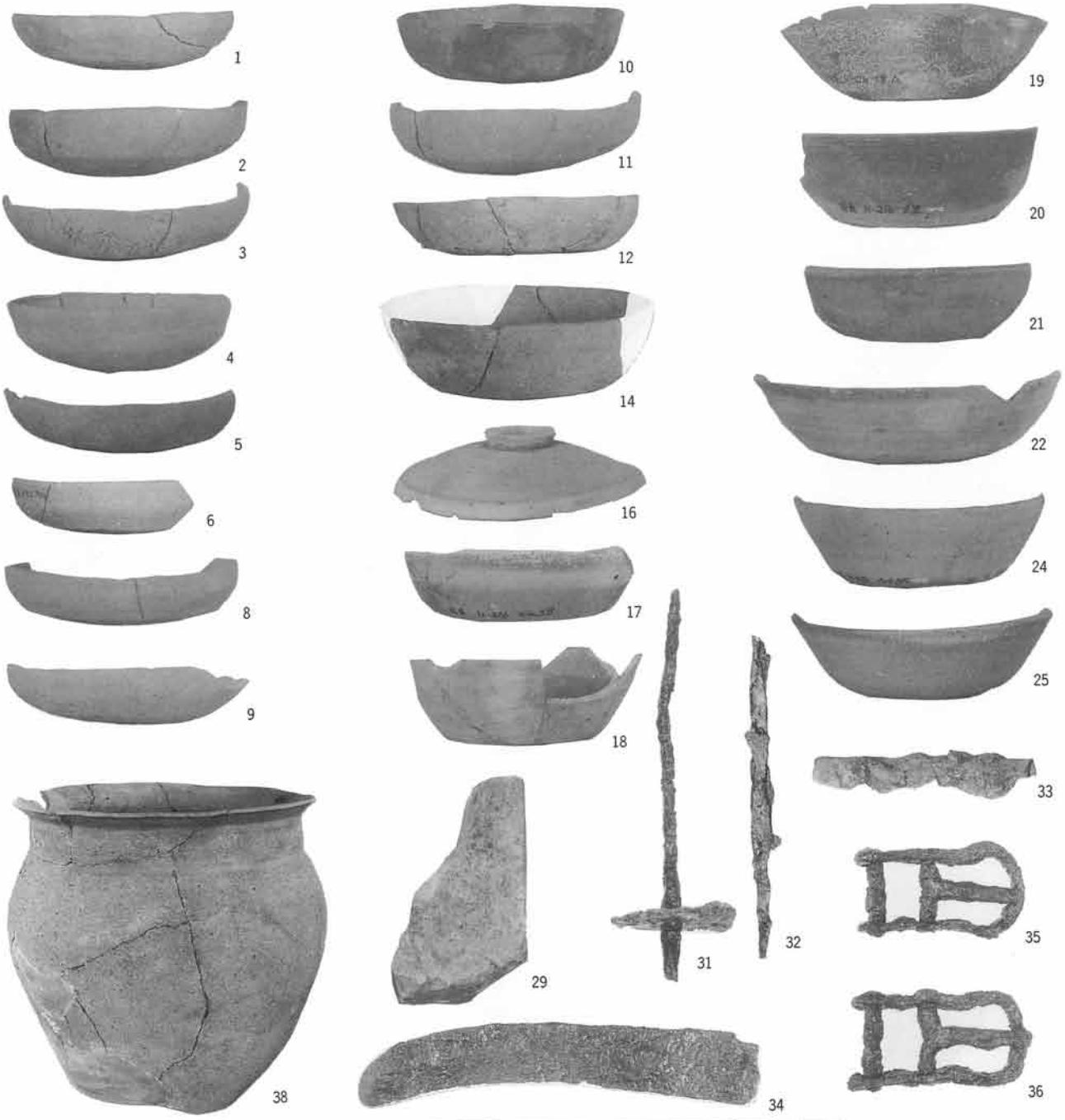
H58号住居跡出土遺物



H87号住居跡出土遺物

H198号住居跡出土遺物

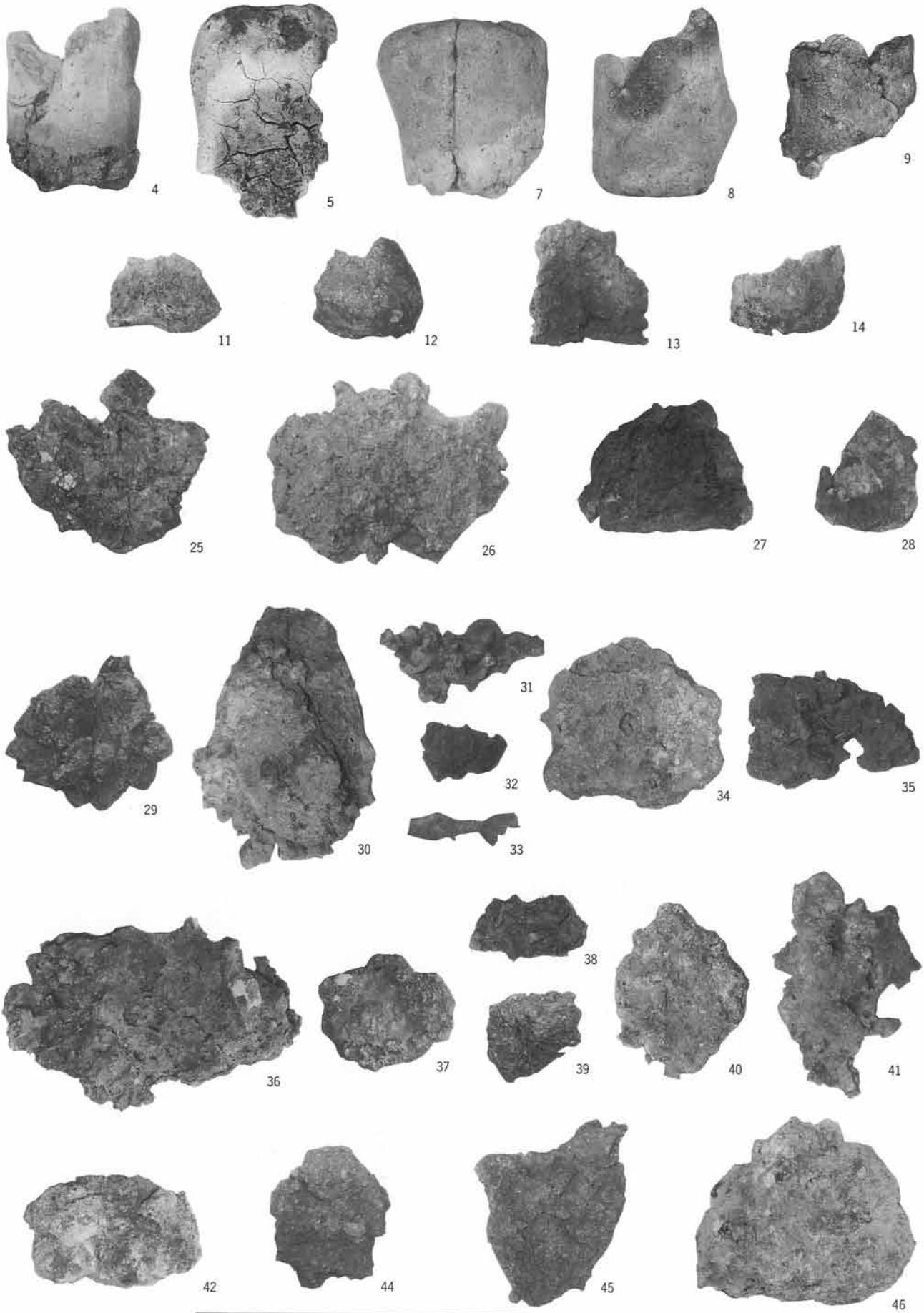
図版118



H216号住居跡出土遺物

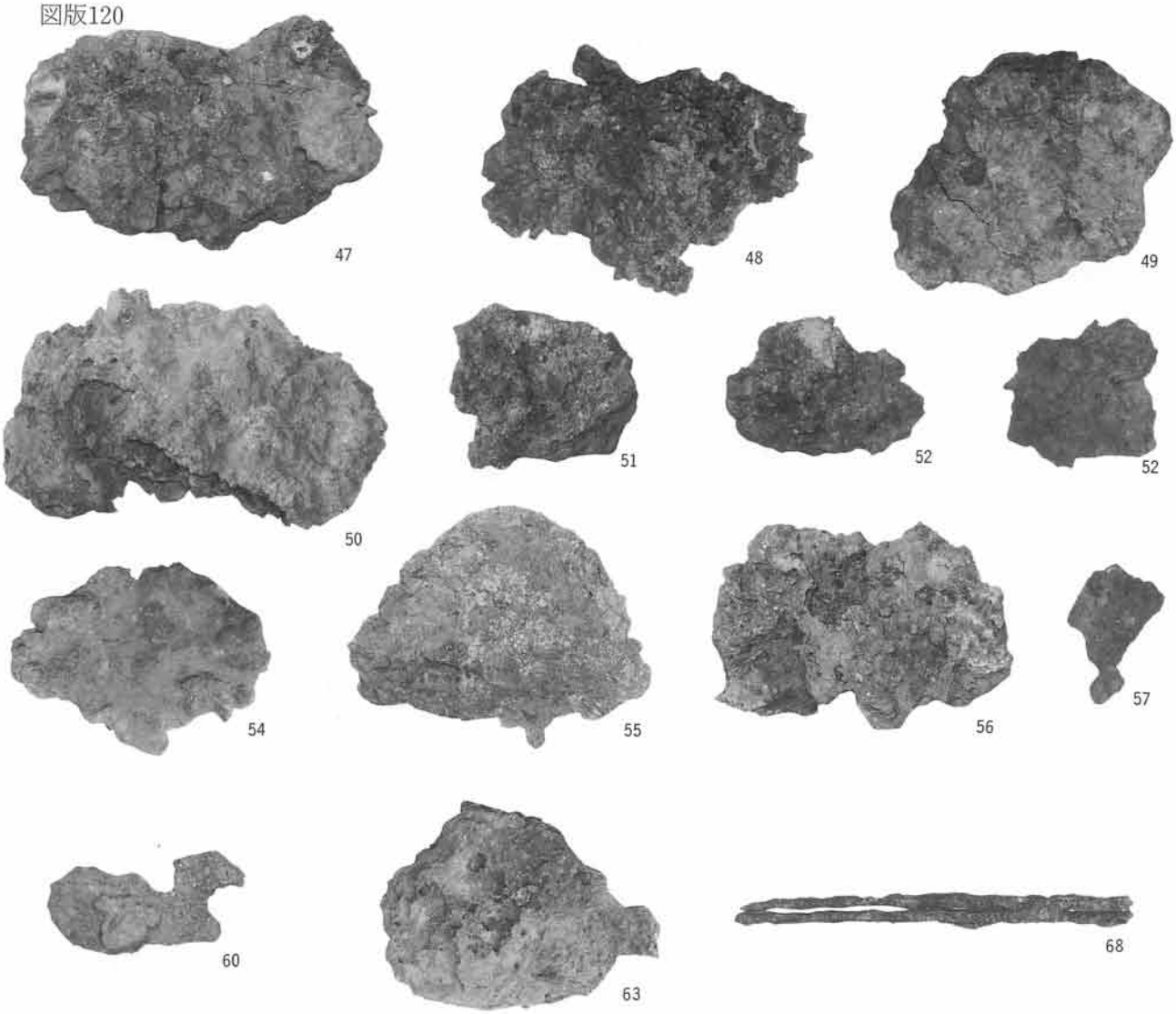
T 1 号鍛冶址出土遺物

T 2 号鍛冶址出土遺物(1)

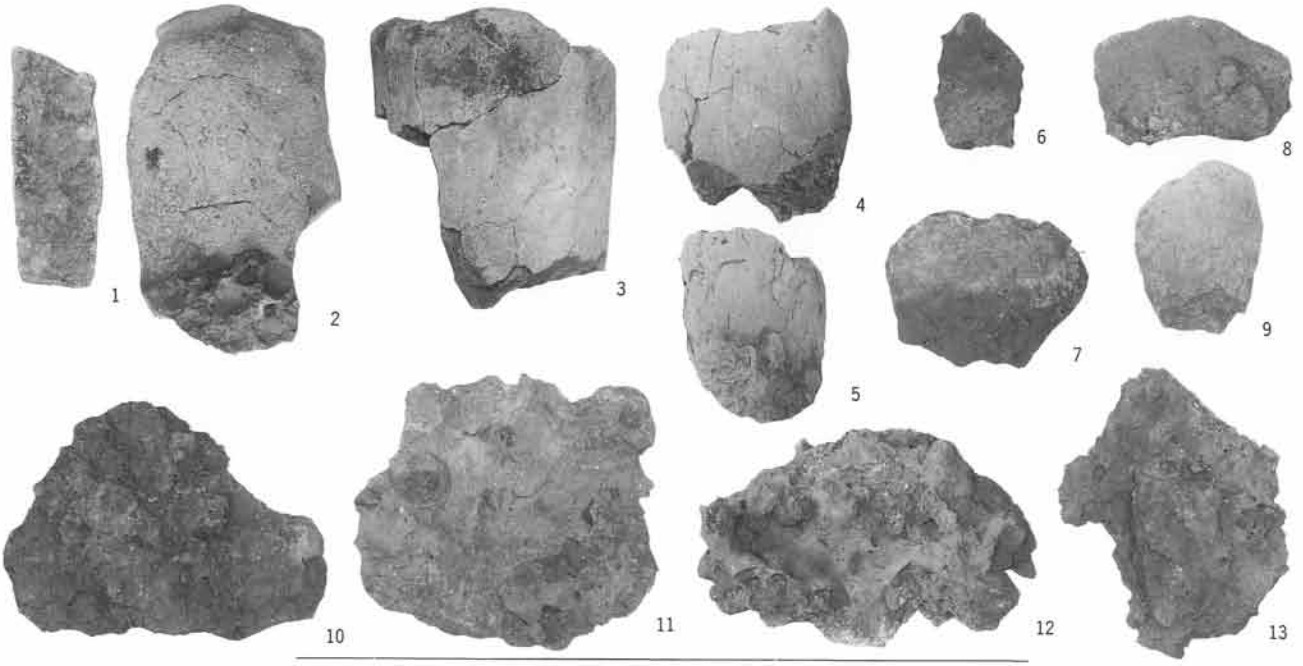


T 2 号鍛冶址出土遺物(2)

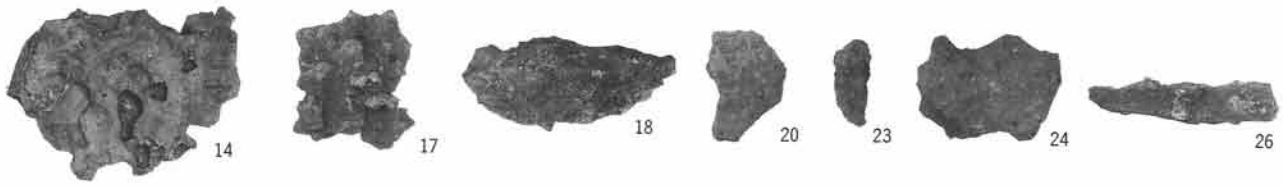
図版120



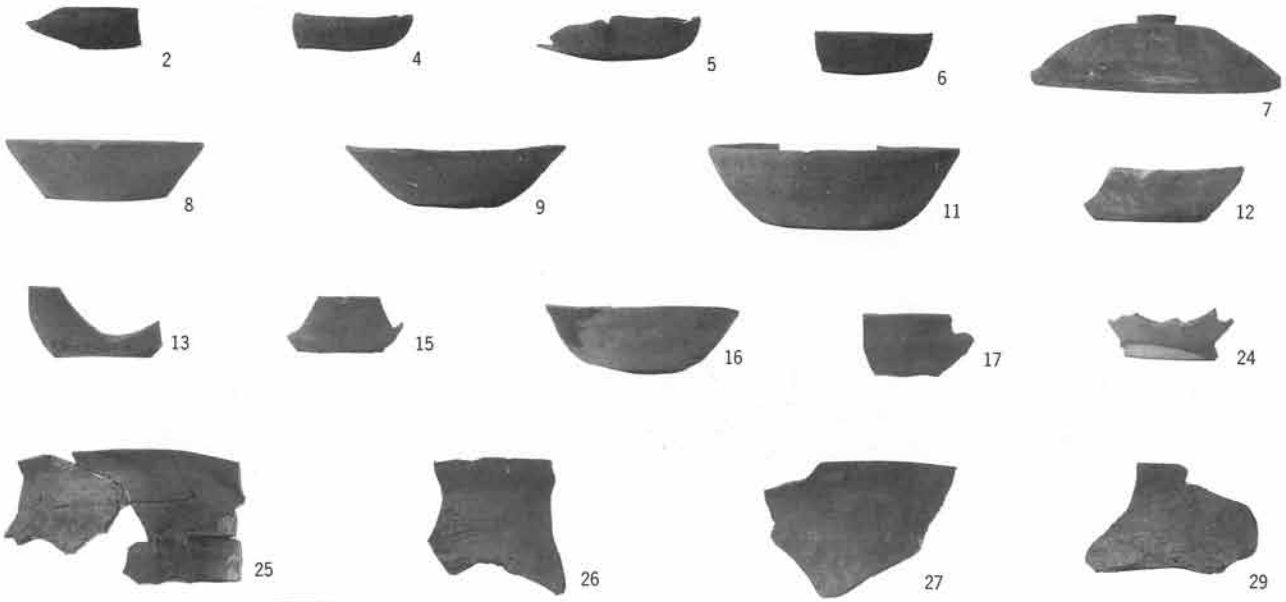
T 2 号鍛冶址出土遺物(3)



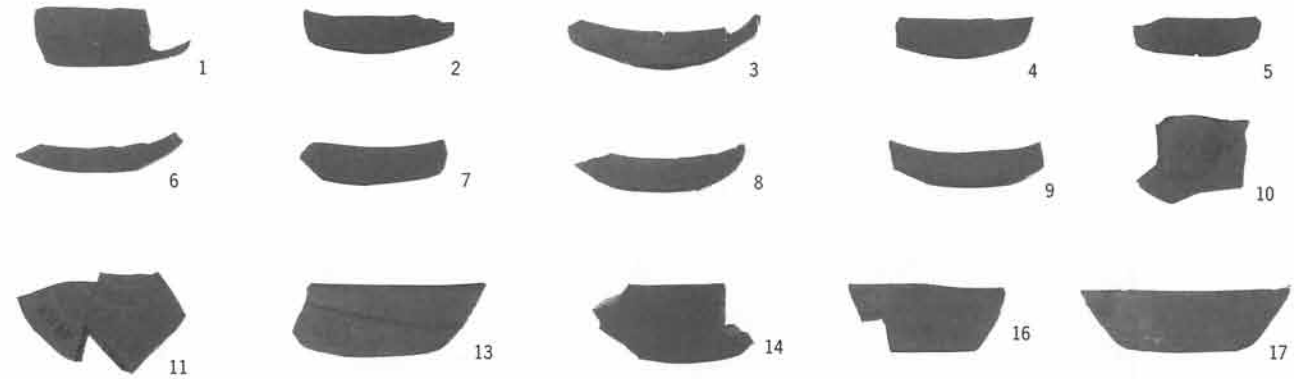
T 3 号鍛冶址出土遺物(1)

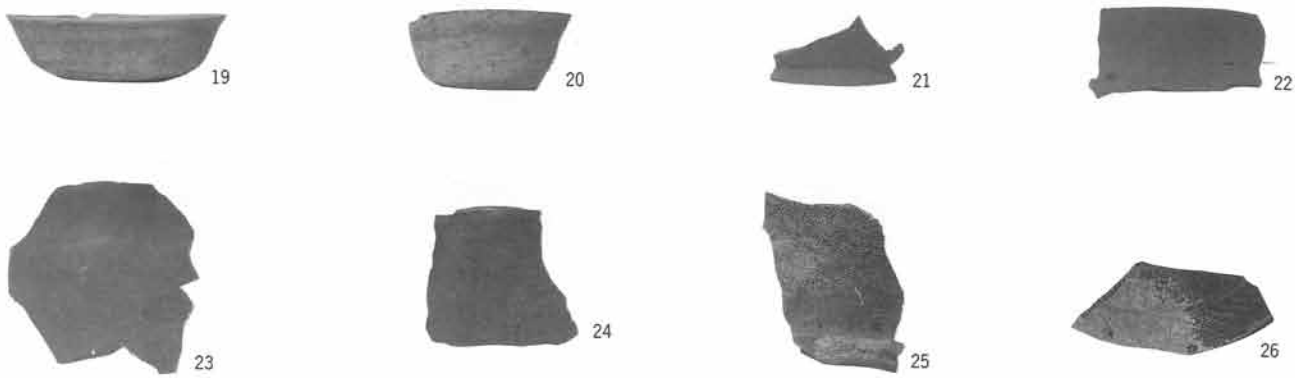


T 3 号鍛冶址出土遺物(2)



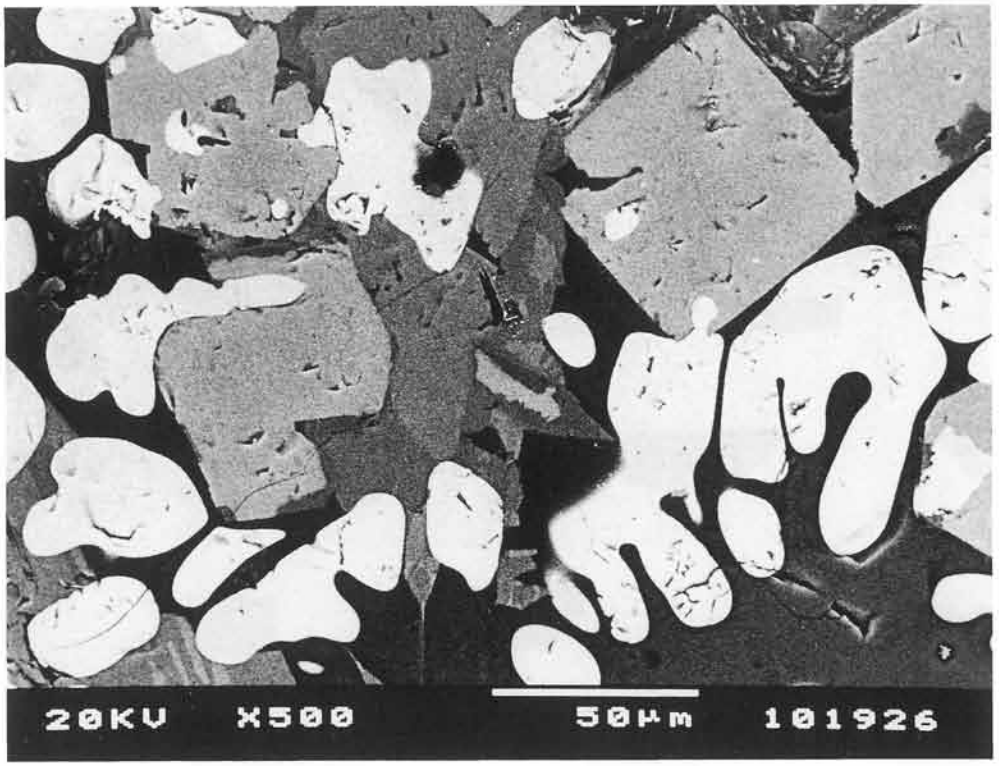
H土坑出土遺物



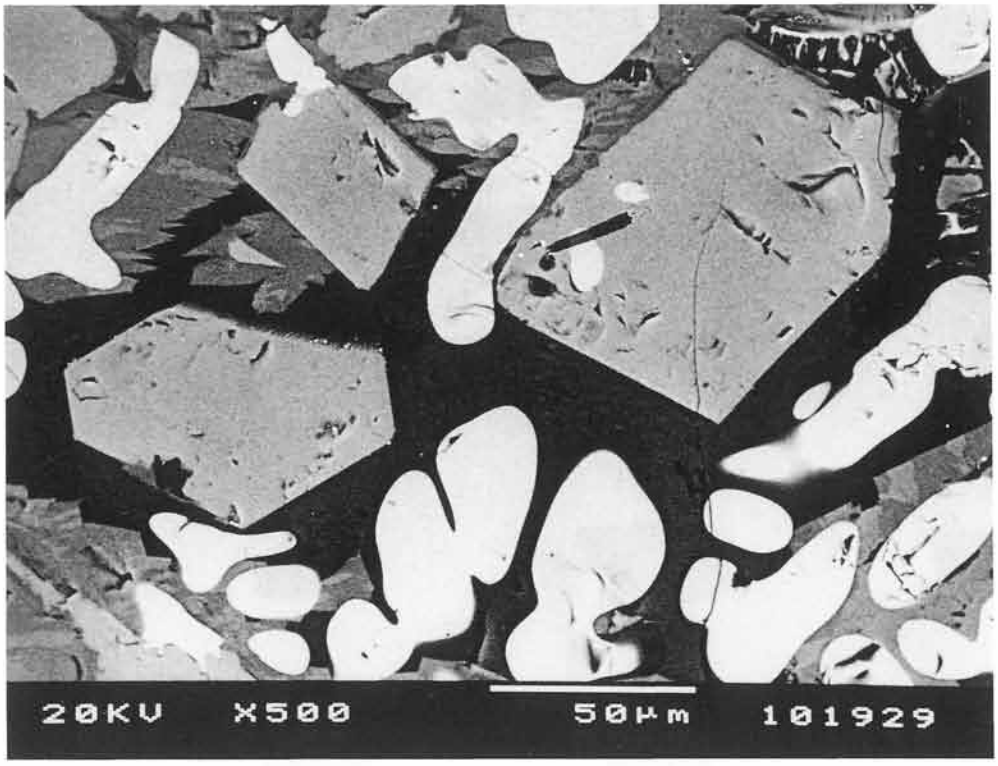


掘立柱建物跡出土遺物

図版122

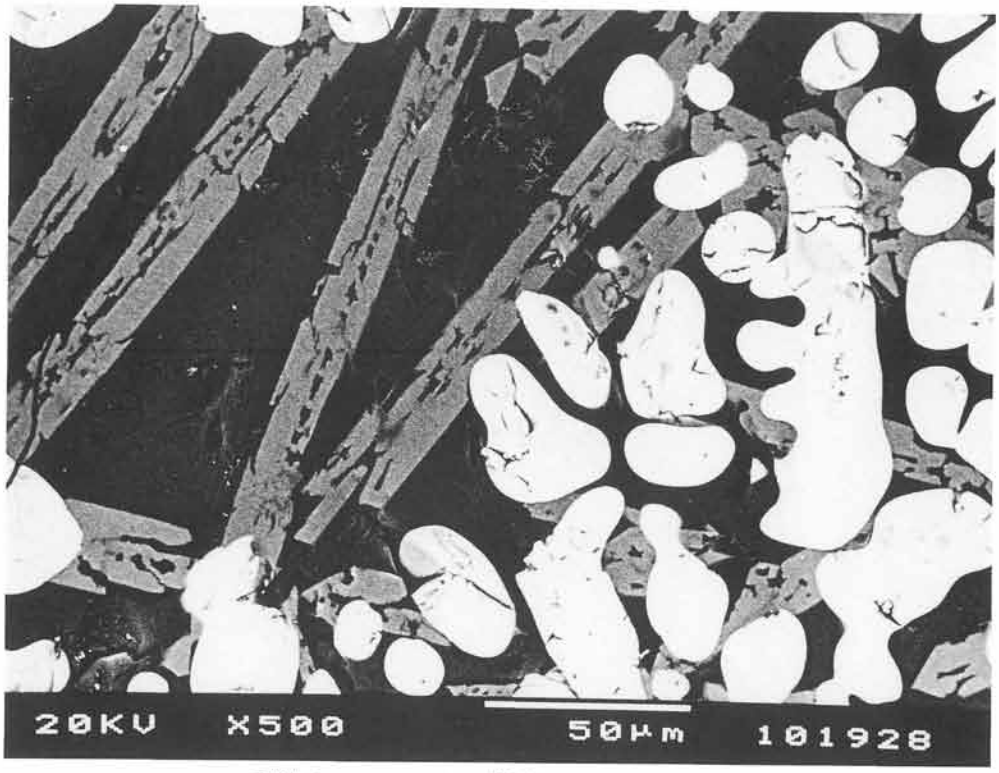


試料2　ウスタイト(白色) マグネタイトFe_3O_4(方形うすい色)

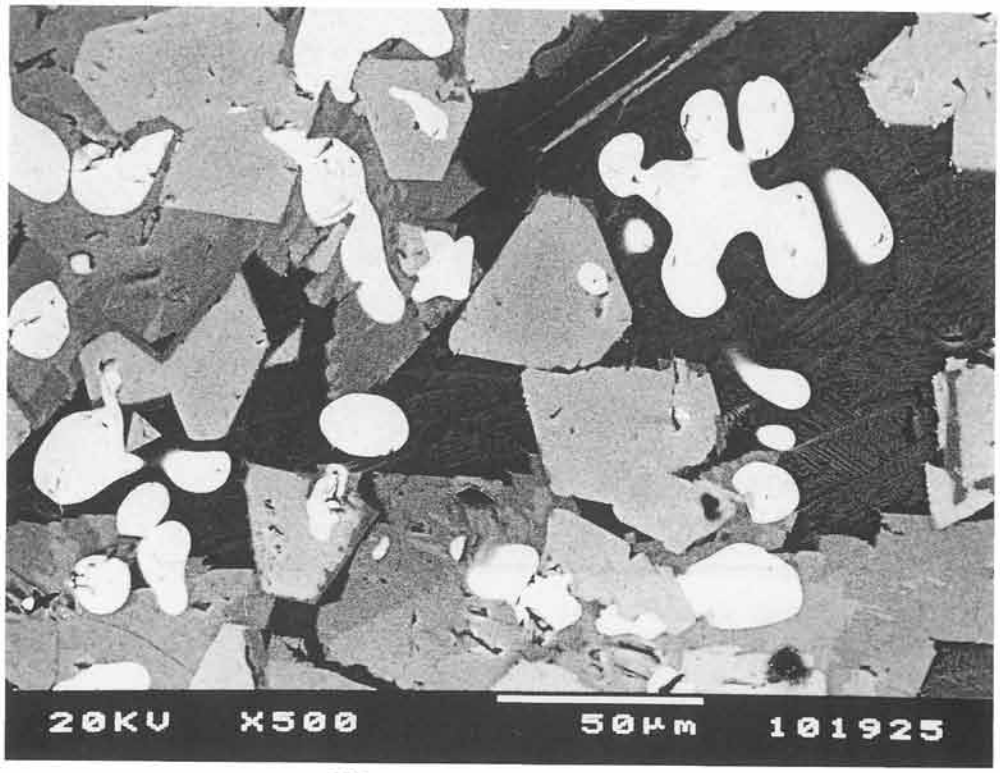


試料6　ウスタイト(白色) マグネタイト(方形)

芳賀東部団地遺跡出土鉄滓顕微鏡組織



試料8　フェアライト(棒状) ウスタイト(白色)



試料9　ウスタイト マグネタイト

芳賀東部団地遺跡出土鉄滓顕微鏡組織

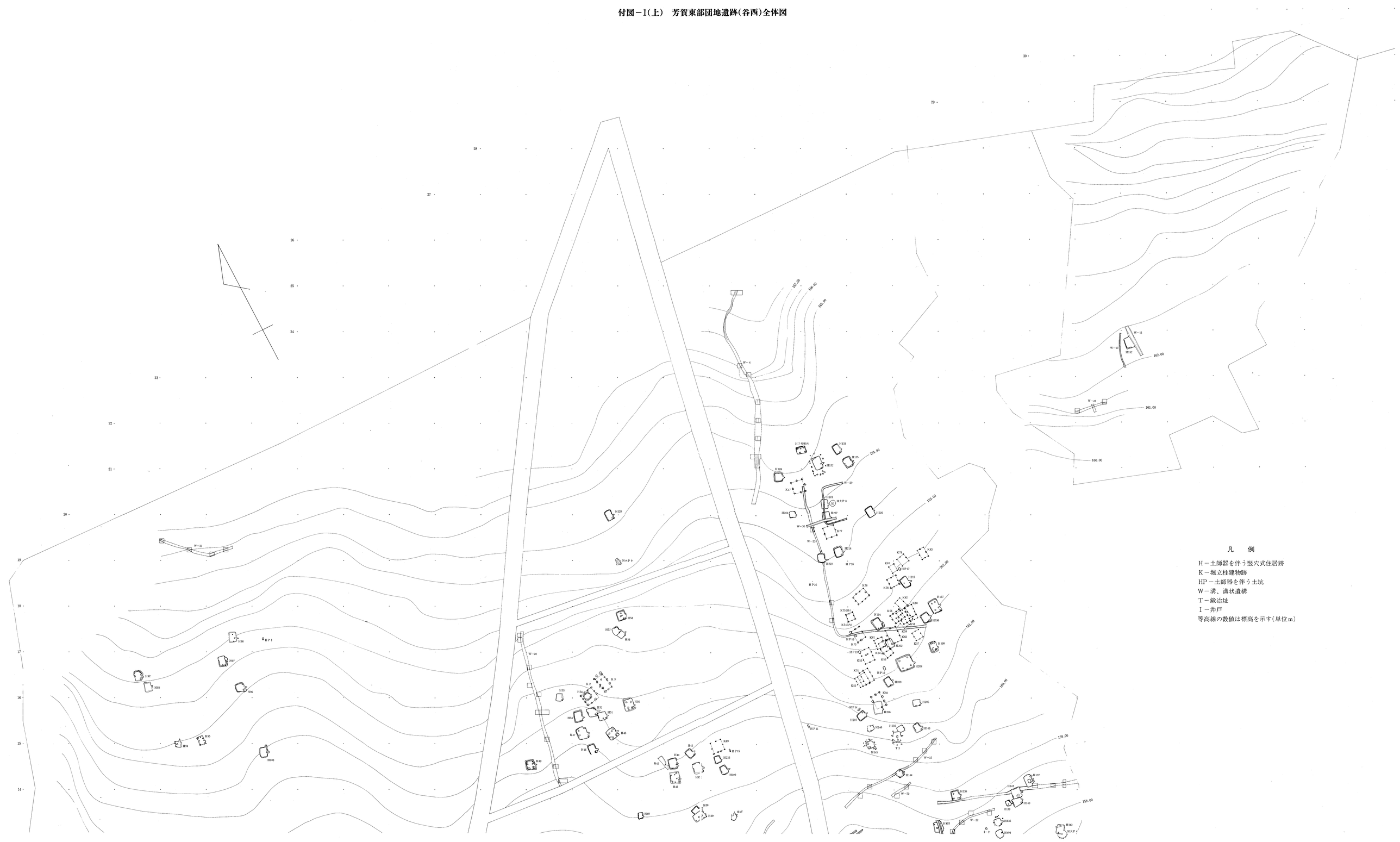
芳賀団地遺跡群第２巻
芳賀東部団地遺跡Ⅱ（古墳～平安時代編その２）

印刷　昭和63年３月26日
発行　昭和63年３月31日

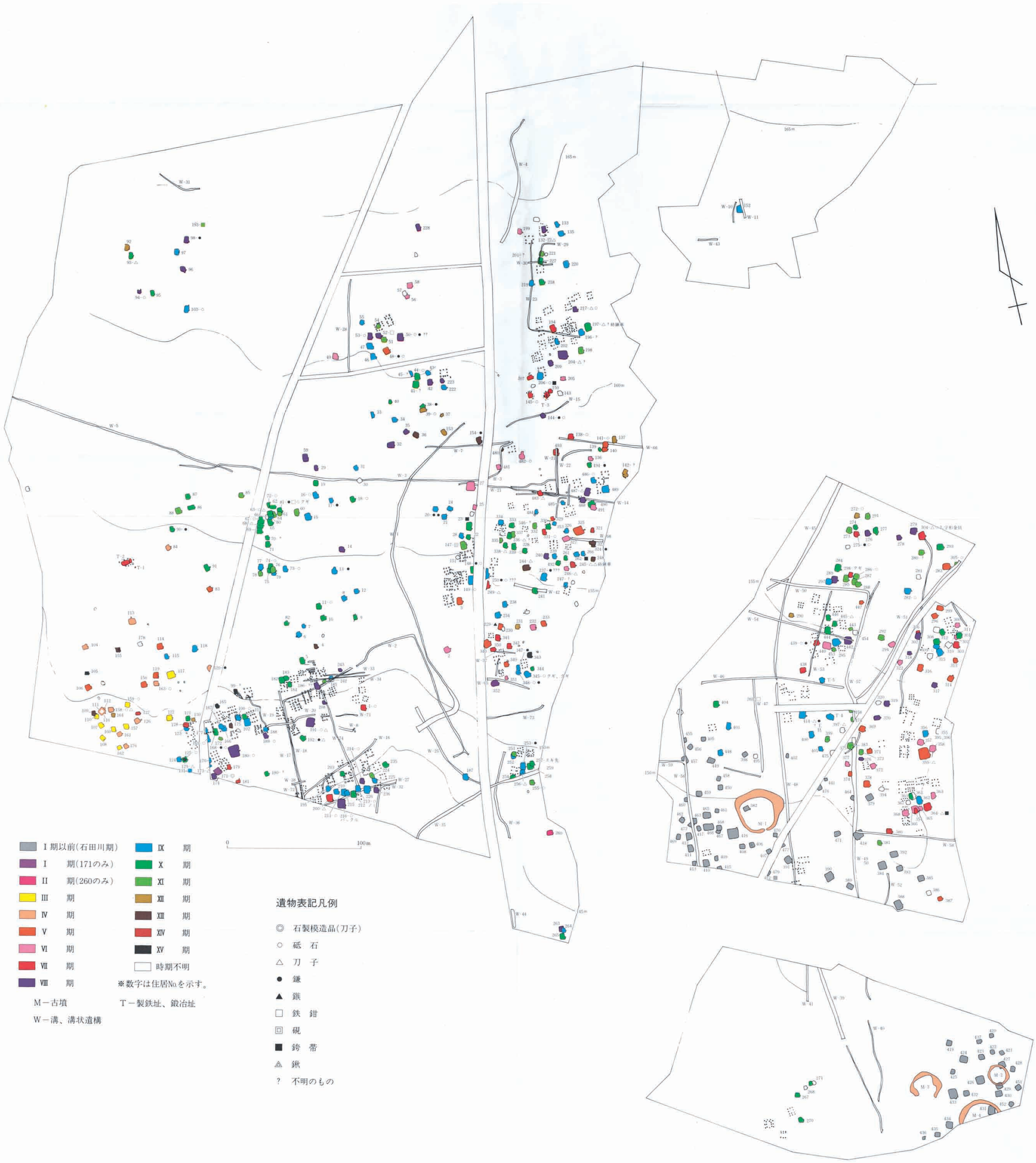
発行　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番１号

印刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67

付図－1(上)　芳賀東部団地遺跡(谷西)全体図



付図－1（下）　芳賀東部団地遺跡（谷西）全体図

付図２　芳賀東部団地遺跡時期別住居跡分布位置図

（古墳～奈良・平安時代）